カイビョウヲトラ

火星明楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カイビョウヲトラ

【Ｎコード】
Ｎ６５７８Ｂ

【作者名】
火星明楽

【あらすじ】
「上杉謙信女性説」をベースに異説戦国物として展開中「義戦」の元戦い続けた彼女は「運命（さだめ）」のトラ。「北越戦記最終章」。勝利の朝は影トラたちに陽を照らすも最後の混迷の闇は未だ晴れず。北進に進む武田と会い噛むのは後３年の後。

その０　雨（前書き）

この小説においての上杉謙信は「やや」女性として描かれています
戦国武将至上主義の方にとっては不愉快な点も多々ある事とおもわれますのでご注意ください
また歴史的史実との一致はかならずしも無く
諸説，仮説などを多分に取り入れて
小説的解釈がなされる事もありますのでご注意ください
本小説は歴史の「謎」と「憶測」と「諸説」を元に私の想像力で
こんな事であっても「良かったかな?」というものを書いています

正史とされるもの以外を受け入れる事ができない方は
すいませんが「要注意」してください
まちがって読んでしまって不愉快な思いをなさっても責任はもてません
それ以外
楽しんでくださる方，興味をもってくださる方は
一つの諸説として読んで頂けると嬉しいです

改行や空白が多数ありますので
それに耐えられない方もご注意してください
また
この「時代」これはない！！
こんな言い方はしない
こんな言葉はない
というものもあるかもしれませんが
出来るだけ簡単な言葉を選んでかいておりますのでご了承ください

その０　雨

私の中には二人の私がいた
今はあまり感じないけど
遠くない過去に分かたれてしまったのかも知れない

それと決別するために
自分と「自分」を分かつために
林泉寺に送られた事だけは確かだ

今ならわかる

もう一人の「私」は
騒がしい事がキライ

男も
女もキライだった

不徳をなすものの一切合切がキライで

生きることに精一杯の者
殺すことに精一杯の者
産むこと
育てること

食べること

すべてが「美しくない」と怒っていた
常世の世界を求めていた

およそ
人間のもっている「生」認めない
人らしくない「私」だった

もう一人の私
今を生きる私はそれでもその「心」や「息使い」感じる

静けさが死ぬほどキライだ

暗い夢の続きを見ると
消えた「私」を思い出すから

なのに
夢はつづく
回る世界を写す
原色の入り乱れた曼荼羅に「真理」を見ろと
仏の金色の「目」が私の「中」にいる

「何故?」

身の回りを騒がす人の言葉を遠ざけ

静かに「対話」する
修練に明け暮れたとしても
それと話す事はできない

なのに会話だけをする

私はいったい「誰」なのだ
ココに来て三年

「夢」は遠ざかった
闇の向こうに「何か」が微かに見える
そんな気がするだけになった

最初についた時は白紙だった
何も解らなかった私

父が死に
兄が家督をつぎ
ココに来た

最近は
雨の続くこの寺院から外を見ながら
ぼんやりと思った
こんな生き方が一番私には会っている

世俗から隔絶された世界で　のんびりと歩くのが
自分との対話の方法なのかもしれない

それが一番「闇」の夢から遠いから
知らなくてイイ事が
私の身の上に起こっていたとしても
ココにいれば
御仏との対話を続ける事で「安らぎ」は得られるかもしれない

静けさがキライ

そんな余分な事をたくさん思わせる闇が
夜が
めぐる朝が

読経ではわかり得ない
この複雑な気持ちと想いを
どこに探せばいいかと迷っていた

迷い

この手も足も変わっていく身体も

これが「迷い」なのか？

まだ十才になったばかりの私は

心の声に
ただ
ただ
その事に戸惑っていた

その０　雨（後書き）

「上杉謙信女性説」
というのは割と前からあった「逸話」だそうですが
必ずしもそうでなかったのでわ?という部分も多々ある謙信像を自分なりに広げて書いてみる事にしました
まだまだ未開の部分も多い日本史の世界を少し楽しく「想像力」の糧として読んで頂ければ幸いです

また。。。
頻繁に修正をくりかえしていますが
これは
私の「未熟」な部分で申し訳ない限りです

がんばって走っていこうとおもっていますので
暖かい目でみてやってください

ヒボシ

その1　元服（1）

寺院の朝は素晴らしい静寂で始まる
今日の静かな雨は思い出を浮かび上がらせる
それは
あの日から変わらない毎日の景色
ずっと続く七年の景色
この寺に私が来た日と変わらない雨

ココに来たとき七歳になっていたか?

雨音を聞きながら
寺に来た日の事を思い出してみるが
実ははっきりおぼえていない
憶えている事をいつも指折りしながら並べてみる

おうちゃくをして
少し部屋の襖をあける

目を細めて遠くを見てみる

雨なのか?霧なのか?靄(もや)のかかった道の向こう
山下から向こうの「お城」を見た
春日山城(かすがやまじょう)
確かに私はそこにいた
その日の朝まで

襖をもう少しあけて靄で見えない山の方向を指さしてみる。。。城
の方角に据えて
あそこにいたハズだった。。。。と

いた
という所で記憶は途切れる
そして次につながるのはココ。。。。林泉寺の惣門の前
止まぬ雨なのに。。。空は赤く焼けていた。。。夕日の中。。私の
身柄はこの寺に運ばれていた

「雨。。。降ってたなぁ。。」

サラサラとふる雨に
深く
曖昧な記憶を辿る

林泉寺についた時

突然惣門が口を開いたように目の前にあった
見回す全ての者が大きく私の視界の中に入ってくるようで。。。怖
かった
赤く照らされた静かな仏閣が怖かった

蕩々と流れる雨粒

迎えにでてくれた住職が。。。。怖かった
いかめしい顔としわがれた手

しらない人たちの手に私はゆだねられた
ココまでが「あの日」の事で憶えている事だ

私がココにきたのは母の強い希望によってだった
後でそれは知った
母は信心深い人だった

とぎれとぎれの思い出の中母の姿は良く憶えていた
毎日を読経で始める
深く「観音信仰」に帰依した姿
母の細い身体。。。そして大きな目。。。
私の中を射るように見ていた目

忘れようのない母

なのに
思い出せない父

「越後に「尽くす」良き教義を身につけなさい」

短い別れの言葉を告げ母は春日山の門内に消えていった
見送ってもらった日以来会ったことがない

そんな事を思い出させるよく似た感じの雨で朝は始まっていた
なじめなかった仏閣の景色は今は心落ち着く大好きな景色だ
修練に明け暮れる
ココでのくらしが最上のもので
豊かに四季を惜しむことなく見せる寺の隅々まで全部が大好きだ
言うならば

朝の静かな音は四季折々の音を届けてくれる

春ならば桜の花びらの舞う柔らかな響き

夏ならば蝉たちの熱き合唱と青葉の目を潤すささやき

秋がくれば鳥たちが落ち穂を拾うためにはせ参じ可愛らしいさえずりを聴かせ

冬には白い使者たちの冷たい花が降りてくる深々とした身体に染みいる音を届ける

惜しみない四季の風景の中での修練が続くことが「宝」だ

なのに
今朝は陽も昇らぬ刻から騒がしい
寺の渡りをよく知る子坊主が「なるべく」足音を忍ばせてはいるが。
。。。走り回っている
「禅」の支度をすませた私は

思い出から我に返って
あけた襖から寝ころぶように頭だけ床にすれすれで出し周りを睨んだでみた

朝の素敵な音を。。。かき消してしまう足音に気分はすくなからず
「怒」方向に走っている
それがわかって溜息
修練の心が足りないと落ち着かせながら

小坊主の向かった先が師「光育」の部屋の方だとわかりまた溜息。。。

「説法は。。。無理かな。。。」

ゴツンと床に落とした頭を転がし廊下を右左と覗いてみるが。。。。
このまま。。。本堂にいって一人「禅」を組み修練に行こうか。。。。

朝一番の心地よさを失ってしまった心は浮遊して
私の頭は床を転がる。。考えもコロコロと

「おトラさま。。。。」
勝手にふてくされてゴロゴロとしていた私の後ろから声
そのまま首を回してて見ると小坊主の困った顔

いきなり後ろにいられると私も困る。。。
行儀の悪さを見られて

とりあえず。。格好悪いながらも姿勢を。。。慌てずに正し返事した

「失礼した。。。」

小坊主は廊下に座ると用件を言った

「光育がお呼びです」

「私。。。を?」

師が私を呼ぶ
それも個人として呼ぶのは。。。あまりにもひさしぶりの事だった
もともと
私は気短な部分をたくさんもっていて。。。「怒り」のたびに我を忘れ。。
いや文字通り「記憶」から自分が飛んで消えてしまうほどの癇癪をおこすらしく。。
恥ずかしい事だ
その事を師が根気よく諭して下さってきた
一人照れて頭を掻いた

「お話があるそうですよ」

あまり良くない反応
困った。。即座に固まった私の表情に小坊主は少し笑って言った

「お説教ではありませんよ」

返された返事に落ち着かない自分の姿を見られ恥ずかしくなって照れた

「守護代さまからの使者が来ておられるのです」
そんな私の態度を見逃しながら小坊主は「用件」に繋がる事を告げた

「そうですか」
そっけなく返事を返しはしたが内心「不可思議」な気分になった
守護代。。。。。
私の兄。。。。もう長く会っていない人だが
守護代様の使者事態が寺に来ることはとりたてて珍しくもない事だ

守護代様は定期的に私の師である光育と政治的会談をもっている
民草を導く者にとって必要である「知識」は市井を常に歩く僧によってもたらされる事も少なくはないし
その「思案」が人の心に届く「御仏」の教えに添ったものであるようにする事も国造りの大切な部分だから

そうだ
そういう大事な会談の。。。
私は少し首を傾げた

「なんで私なのさ?」
つい愚痴のように声がこぼれてしまった
「さあ?」
横に並んでいた小坊主はいつものように方をすぼめて答えた
またも
思った事をその場で漏らしてしまった事に赤面しながら私は立ち上がった

「すぐにですか?」

「はい」
彼は返事をしながらもいちいち顔色の変わる私を見てやっぱり笑った

林泉寺の庫裡(くり)から少し離れた屋敷
住職が住まう本殿のとなりが私の部屋だ
部屋を繋ぐ渡りには少ない雨が少しづつ陣地をふやし踏み板を濡らし続けていた
足を汚さぬように奥の側に添うように歩きながら

考えた

兄上か。。。

五年前
父が亡くなる少し前に。。兄は越後を統治する要職を引き継ぎ「守護代」になった
苛烈な職務
争いの大地であった越後を生涯を使って纏め上げたと言われる父の後を継いだ人

まだ幼かったからか?私は兄の顔をはっきりとは覚えていない
細い切れ長の目
長い睫毛。。。

「戦鬼(いくさおに)」と言われた父とは違って優しい顔の人だと聞いている

私の細切れな思い出の中では
簡素な着物に。。。。不似合いなほど煌びやかな袒扇(あこめおうぎ)を持った姿。。

。。。
それと
闇の雨の中の具足姿。。。。
どちらもいつの時なのかは思い出せないが
逆に
そのぐらいしか兄の姿が浮かばないのも
なんだか
失礼な話しだ

その兄上は私の事を憶えていた。。。。と言う事なのだろう
歩の向こうに近づいてくる居間
少し胸が逸る

何が。。。。私に告げられるのか?と

運命(さだめ)というものは急に動き出す
思いもよらぬほどに
部屋に入った直後に強まった雨の中で私に告げられた言葉は

「城に戻れ」という命令だった

師の部屋であった使者は「直江実綱(なおえさねつな)」と言った
大きな体で部屋を狭く感じさせていた
男り顔にはに刀傷
部屋に入った私をじっくりと。。。ゆっくりとした視線で見ると
男らしい太い声で言った

「城にお戻り下さいませ。。。これは守護代様。。ひいては虎御前様の決定であります」

簡潔な会話
身体の力ががっくりと抜けた
私の考える余地などないほどの動きで物事は決まっていく

これが「命令」であるなら従うほかない

彼の面前に座った私の顔には「不遜」な色が浮かんでいたに違いない
事実。。。。不愉快だった
かつては。。。。知らぬ間に「母」と引き離されて寺に来た
なのに今度は寺から引きはがされる?

城を出された
あの日の事が強くなった雨音のせいでか。。。。こんな事ばかりを
鮮明に思い浮かばせていた

母の手から自分が引き離されていく事が。。。。きっと辛かったに
違いない
幼い私は波に攫われるように流されてココに来た

無口になった私に直江は告げた

「亡き父上様も虎千代様がいずれ城に戻られる事を望んでおられました。。。その日が来たと思って頂きたいのです」

「虎千代」

私はまだ子供なのか?これほどに修行を積んだのに「運命（さだめ）」に流される
大きく頷いた
迫る「運命」の大きな流れの中で
自分を保ち続ける事は不可能なのだろう
ましてや若輩の私がこの状況をどうこうなどと考える事自体が「無意味」だ

悟りの心得のようになった
顔をあげた静かな目線で

師たる住職，光育が私と直江をみなから
深い皺をもつ顔を悲しげにしかめ
「これが示された道なのかも。。。。」

示された道。。。。。

そうなのか?
まさにその通りなのか?
自分で御する事の出来ない「波」であるのならそう思うしかないし。。。そうだ
天に与えられる「宿」という見方は正しい

これがそうだ御仏の示されるまま歩く事だ

お言葉に返事した
「あいわかりました。。。ではコレにて支度に入ります」
ケジメのように深く伏し自分の心に巣くう迷いに区切りをつけて部屋を後にした

雨は少しずつ。。。。静かに姿を消していた
ゆるい生暖かい風が本殿の前でぼんやりと座っている私の身体にふれる

理解して。。。
頭を掻いた
なんとなく「理解」したふりをしてしまった。。。。
差し迫った事に
有無を言わさぬ事態で。。。まるで自分の意志を継げる事なく流されてしまった気持ちは
高い空の向こうを急ぎ足で去っていく「雲」のようだ

「ダメだな。。。」

長く心身の修行を積んだ者として未熟な答えだったのかもしれない
ああいう時こそ己を律して理を得るための修行をしてきたハズだったのに。。。。

後悔やら反省やらあれこれ浮かぶ心が私の目をぼんやりさせている

「トラ！」

静かな寺社の中では元気すぎる声が名を呼んだ

着崩した作務衣の坊主「陣江」だ
「ジン。。。身なりはきちんとしなさい」

杜撰なカッコの彼のおかげで迷った頭はとりあえず心から離れた
毎日挨拶代わりを一言
チクリと言う

ジンはココにきた時からの友達だ
半分を信心半分を畑仕事という生活を送っている彼は
林泉寺の裏の畑を耕しながら
この教義を学ぶ生活をしている

私はココでは「客」の扱いをうけている部分もあるため
部屋外の出来事はあまりしる事はなかったが，彼と知り合った事で
外の世界の話をする機会を得ていた

「城に戻るんだろ！」

とにかく元気がいい
よく焼けた顔は笑みを向けながら言った

「わからないよ。。」
寺の住人は外の出来事に敏感だ
使者の用向きなどあっという間に広まってしまっている
だから
余計に迷ってなんていられないのだけど。。。

「相変わらずの聞き耳だね」
「みんな知ってるよ」

まだ濡れたままの縁側に腰掛けてため息をついた私に

「いやなのか？」

とジンは顔をのぞくように聞いた
わからない事だったそのまま答えた

「それがわからない」
「帰りたかっただろ」

帰る？
改めて聞かれるとさらに「不思議」な気持ちになる
「帰る？」
このまま寺で生涯を過ごすと思っていた私が。。。。何故？帰りたかったのか？
そんなふうに考えた事はなかったハズだ
私はココで御仏の教えと学問の世界に生きて行く。。。ハズだった

なんで今頃
城に戻らなければならないのだろう
またも
考え込んでしまう

「俺たちと離れたら泣いちゃうか？」
「ああっ？」

ジンの言葉にむっとして反応した
すぐに茶化す
まったく。。。。
泣くだなんて。。。
たしかにすぐ
涙がでてしまうけど。。。それは。。。「癖」だ

「涙もろいだけだよ！！私は！」

私より生意気にもちょっと背の高いジンは周りウロウロしながら
「じゃなんで考えちゃってんだよ？」

なんで？
なんでだろ
帰れる事が喜びではないから？。。。なんて。。。どう言って良いのか

「帰ってどうしたらいいんだ？」
「はぁ？」

今度は彼が不思議そうになっいた

「トラは武士の子だから。。。。やっぱり武士になるんじゃないの？」

そりゃそうだマヌケ顔で「当たり前の事」をあっけらかんとそういわれると
そう思うしかない
そんな感じで彼を見た

考えたってまとまらないのだし変わる事もない
あるがままを受け入れる事
まさに
御仏の示されるままだ。。。

「元服するのじゃよ」

二人して小突き合っていた間に声が入った
雨はもう消え始めていた
本殿に続く渡りから説法でも良く鳴り響く声が優しく言った

師・光育
年はずいぶんととってらっしゃるハズなのにがっしりとした身体の
師は
ゆっくりと縁側に腰掛け私をみながら

「元服。。。」

その目は覆うように繁った眉毛に隠されているが
とてもやさしい
口調も静かで
はじめてお会いした時に泣きそうになった自分をふと思い出してしまった
いかめしい修験者とはちがい
必要である教義をやさしく教えてくださった住職

「トラ。。。オマエは元服して「長尾」の家のために働くのです」

「長尾」
久しぶりにきいた我が家の名

「それが御仏の意志でございますか？」

さっきは使者の手前はっきりとはきけなかった
これが「御仏の意志」なのか。。。と
真っ直ぐ師を見る私に
師の目が悲しそうにも見えた
変な事を聞いてしまったのか。。。

「トラ。。。。現世（うつしよ）の事もオマエは学ばねばならないのでしょう」
私が。。。
「それが武士（もののふ）の家に生まれたオマエの運命（さだめ）であり御前様の意志でもあるのだからね」
。。
母の意志。。

風の音が耳元に響いた

私は振り返って
春日のお山のうえにある城を見た
朝靄にかすむ城を見る

七年ぶりに「家」にもどる事になったのだ
さっきまでの迷いとは別の衝動が心を騒がせている
これは。。。逸る気持ち
手を胸に当て自分に言い聞かせる
これが「御仏」の示しであり「母」の望みだと言う事。。。今は信じて

雨の終わり
風は温かかった
私はすぐに立ち上がり風に向かって歩き出した

遙かな山向こう静かに響く雷鳴
夏に向かう真新しい緑達を潤す中
変わることなどなかったハズの私の生きる道筋はココから大きく変わってゆく事になる

私の名前は「長尾虎千代（ながおとらちょ）」。。。。。運命（さだめ）のトラである

その1　元服（1）（後書き）

修正を繰り返しながら
文章を作っていくというのは
これまた小説家の皆様にしてみたら「邪道」なのかもしれないが
私にとって
これも「勉強」という事でゆるしていただきたい

なかなかままならぬものです。。。。

その1　元服（2）

小さく荷物をまとめた
寺での暮らしで必要な物などたいしてない。。。
学べる事
祈ること

そういう全てがあった場所から私は引き離される事になった
最小限の生活の中に最大の喜びがあった場所から
どこまでも広がってゆく「武」の世界に戻る。。。。

眠れなかった

昨日
見あげた春日山
あの高みにいったい何が「待っている?」
仕切られた世界で生きてきた私には。。。頂から全てを見下ろす広い見識がない

実家ある城に戻れる事は。。。
実はかなり嬉しい
母上に会える
幼い日に別れてしまったままの母上

父を思い出せない私にとって母は帰れる場所の一番大事な人だだけど。。。。
それ意外の事がこの城では。。きっと待っている

不安。。。。

私は不安で落ち着かなくて
自室をうろうろしていた
城からの迎えが来るにはかなり早い時間だ

「トラ！！」

禅でも君でこの気持ちを落ち着かせようとした時だった
外から大きな声が呼びかけた

「トラ！！泣いてるのか？！！」

泣く？
私はその部分に強く反応して勢いよく襖を開けた
縁側の前
軽口を叩く着崩した作務衣姿の男
だらしなく前を開いた状態
日夜の修行で服はすぐにボロになる。。。でもこいつのボロさ加減は尋常じゃない
寺の裏で畑仕事をしているのもそれを手伝って泥もヒドイしかも
あちこちすぐに破く
それを私に繕わせにくる。。。
でもって臭い。。。何度も洗ってるのに。。。

「臭うぞ。。。」

朝から何やってるんだか？
泣くなんてあり得ないと私は鼻をつまんで言い返した

「破れ坊主」の陣江（じんえ）。。。事「ジン」

「服はきちんと着なよ」

と

いつもの挨拶をいつもどおりした
そういえば。。。ココに来たときから馴れ馴れしい彼
その頃から。。。汚かったなぁ。。。
ジンは結構に小汚いが本人がそれを気にしてないから始末におえない
私の注意を気にもしない態度で彼は言った

「気にするなよ」

私は性格なのかきちっとしていない事がキライだから
何度も注意はしている
その事をよく知っているのに「癖」なのかちっとも直らない。。。

そんな気持ちを察する事なく石段の上にのぼり機嫌悪そうにしている私に耳打ちした

「昨日の続きをしようぜ！」
と手のひらの碁石を見せた

「昨日の。。。」

私は師の部屋に続く渡りをもう一度見た
まだ春日山から使者はこないし
今日も師匠は昼までお堂に来る事はなさそうだ
最後の説法は昨日の夜に聞いた

今日はここを離れるばかりだ。。。
ならば
ジンがせっかく挑んできたのだから相手になってやらないと

「勝てないのに。。。がんばるね」

顎をあげ嫌味の目線で一言

「勝つまでやる！！」

ジンには今までいろんな事で勝ったり負けたりしているが「囲碁」はまだ一度も負けた事がない
ジンは勝てない事にこだわっている
私がいいよと答えたところか勝負は始まった

ペラペラの板に自分で線引きした簡素な碁盤を縁側に置いた

私の打つ手は早い
碁盤の目は白黒の別れたきっちりした「土地」のようだ
そんな私とは対照的に
指し手に悩みな時間をかけながらのジンが話しかけた

「城に戻って。。。「長尾」の家のためにどんな仕事するの？」
私はジンの手の内を予測しながら

「さあ？」
言われてみれば「何」をするかなんかわからない
ただ「元服」をして。。。。

顔をあげた
ジンが変に心配そうな顔をしている事に気がついた
「元服して。。。。どうするんだろうね」
自分の事なのにさらにまぬけな返事

「嫁に行くの？」
目と目が合っての。。。。

「嫁ぇ～～～」

顔をしかめて
つい大きな声をしかも変な感じに

「声がでけぇ！！」

慌てたジンが口を押さえようと両手を向けた
私の声はかなり大きいし。。よく響くらしい自分でもこの静かな寺院の中に響いた声にかなり驚いて
口を押さえた
両手で口を押さえてしばし周りを伺ってみた

「アホ！」

目をとがらせたジンに
手を下ろした私は首を振った

「考えた事もない事言うからだろ。。」
「そうなの？」
何か安堵した様子

「だってさ。。嫁の修行なんて積んでないぞ」

実はいまいち「嫁」という物のありかたさえわかってない私は真顔でジンに聞き返した

「アホだ」

にやけた顔を隠せないジンが私に顔を近づけて言った
「トラって。。。そういう「女」の部分が全部抜けちゃってるんだな」
「仏僧に必要な事しか無いと言ってくれ！！！」

私は恥ずかしくなって取り繕った
そんな姿をみながらジンは笑った
「良かったよ。。。元気になって」と

昼一番
直江実綱と数名の使者がやってきた
門前には師と門弟の僧たちがずらりと並んで見送りに出てくれていた
長かった雨はやみ久しぶりの晴天でもあった

「気をつけてな！」
ジンは門前でそう言ってくれた
仲間だった坊主たちもみな励ましを送ってくれた

私は笑顔でそれにこたえた

「行って参ります」
師，光育住職の前に立ち深々とお辞儀した

「トラ。。御仏の心忘れるでないぞ。。」
その慈愛に満ちた手が肩を優しく押してくれた
幼き日。。。その手は怖かった
今は。。離れてしまうその手が寂しい。。。

名残惜しくなって涙がこみ上げて。。。挨拶の後
もう一度
師に頭を下げた

「トラ。。慈悲の心を」
そう言うと自分の胸に手を当て
深くお辞儀をなさった

「はい」
素直に返事した

春日山城。。。晴れた空の下。。頂にみえる屋敷に目を細めた

思えば
「城」にいたときの方が「思い出」と称する物は少ない
特に
父の事をまるっきりといっていいほど覚えていない
失礼な話だが
顔さえ浮かばないほどに憶えていないのだ

逆に母の事は良く覚えていた
ただそれは「母性」という物とはほど遠い形だった

母の姿で覚えているのは
あの日
城から寺に行く私の姿を送ってくれた姿

痩せた身体に不似合いなほどギョロリとした「目」
その目はまるで何もかもを見透かすかのような漆黒
着物は京仕立ての小袖を上品に着ていた事。。。その姿に
脇差し。。。それと朱色の刀をつねに持っていた事

寡黙だった母の背中

そんな「乱れ」とは別に
静かに生きる事が母の望みだったのだ。。。と信じていたのに

今また城にもどる私

俗世の事は考えないようにしてきた私は
道すがら色々と
思案していた

まるで
寺の戒律から解き放たれた「煩悩」がそうさせているのか？

何故私は寺に送られたのだろう？
そして

父がどのように亡くなったかさえしらない自分に気がついた
頭をたくさんの言葉が悩まし始めていた

山城につづく細道を
うまく馬を歩かせた
「思うていたよりお上手ですな」
直江がやけに神妙な顔であれこれと頭を使っていた私に話しかけた
「そうか」

「馬は誰に教わりましたか？」
「住職に」
半分はジンにも教えてもらっていたがココは師を立てて

直江は話しついでなのか
私の顔をジロジロと見ながら
「無病息災な方と聞いておりましたので。。」

確かに健康だ
「御仏の加護もあって病になった事はほとんどありません」
「良いことです」
確認しているかのような返事そのまま

「良いお顔をしておられます」

近づく城門の前で彼はそういった
そして大きな声で
「開門！！虎千代さまご入城！！」

山城の門が軋む音をあげて開かれる

響く音
おぼろげな記憶の中
かつてこの門を雨の中，山をくだった時の事を
思い返した

黒い門

あのときとは違い戻ってきた
なのに
あの日
あの雨の日に寺社をみた時のような。。。。
晴天の空の下なのにうすら寒い感覚を憶えた

私の心は何かに怯えている。。。そんな感じだ

城内に入って目を見張った
幼すぎてあの頃の「城」はほとんど覚えていなかった事もあって
新鮮な感じだった
と同時に

門をくぐる前から感じていた奇妙な感じが
三の丸に入って何なのかわかった

というか
何故かはわからないのだけど
城内の視線が私に向いている
私の入城に合わせた支度のためかそこそこの城人がいる

みな一応に頭をさげるのだが
好奇心を持った視線で向き直る

たしかに。。。
七年ぶりの帰路ではあったがそれほどに珍しいのか？
私は？
それともまだ「子供」にみえてしまう？
「元服」するといわれてココにもどってきたのに
そんな風に見えてしまっていたら。。。。

恥ずかしい

「みなが見ていますが？」
せっぱ詰まって
馬前にいる直江に聞いた

「御前様に，よく似ておいでですから」
彼は振り向かずにそう言った

御前様。。。
私は母上に似ているのか。。。
思い出にある母の顔はあの「目」だ
ギョロリとしたそれでいて鋭いあの「目」
どこが似ているのか？

「似ていますか？」
「はい。。お目などそっくりにございますよ」

「目」がにてるのか。。。。

感慨深かった
思い出の中の母の目
それに似ている私

何にしろ
兄にはもとより母にも面と向かって会うのは七年ぶりだ
城門をいくつもくぐっていく間に
粗相のない支度はできているだろうか?そっちの方が気になって仕方なかった

本丸に入った後
表屋敷に入った
大きな建物
山の下から見ているだけだった世界に私は戻ってきた

まだ初夏に入ったばかりでひんやりとした
板間に通されてしばらく待った

ひさしぶりに見る城という建物の上座位置に父がいた時の事を思い出そうとおもったが

やはり
思い出せなかった
父は戦にあけくれた人だった。。。。そうだ
きっと父の方も私の事など思いだしもしなかった事だろう
そのぐらい遠い存在だったんだ
きっと。。。

「良く来た」

またも考え事で頭を満腹にしていた私に濁りのない涼しい声が掛けられた
細身の身体
簡素な着物に覚えているあの豪奢な「扇」
色の白い細い顔立ちに切れ長の目
あご髭を蓄えた姿

「お久しぶりです兄上さま。。いえ守護代様」
呆然とひさしぶりだった兄上を見てしまい慌てて頭をさげた
兄の足音に続く多数の足音の後は静かな歩。。。。「母上」の音

「面をあげよ」

兄の声は初夏の朝のように冷たい感じ
私はゆっくりと落ち着きをとりもどすように顔をあげ最初に母上を見た
久しぶりの母は少しふっくらした感じではあったが
相変わらず上品な京仕立ての青い打掛を羽織っている
もちろん脇差しも刺していた

「似ている」

そう言われたその「目」は健在な様子だった

「母上もお久しぶりです」

面(おもて)をあげた私の前に二人は座り
兄のまわりには小姓たちが控え私を。。。。キツイ目線で見ていた

「オマエに春日山に戻ってきてもらったの「元服の儀」を執り行う
ためだ。。それは聞いているな?」

前触れの話はなかった
急に本題?
もっと寺での生活などの話をした後にその。。「元服」の事はその
後でと悠長に思っていた
だから
私は返事につまり困った顔になってしまったが

むしろこの「元服」を発した兄の顔が困って見えたのがよけいな事
を言えなかった

兄の態度は何かおかしかった
言葉につまりながら「元服」をいつ行うかについての話をかなり早
口で述べて

「今月の八月十五日に執り行う」
と日取りを言うと小姓たちを引き連れ奥に戻っていってしまった

歓迎されてはいない感じに
立ち去る兄を見ながらも不安が表情にでてしまっている
どうしてココに呼ばれた?
それをもっと知りたかったのに。。。

「トラ」
静かな声が私を呼んだ
兄の短い謁見に残された私を見ていた母の久しぶりの声

「良く帰ってきました」

父亡き後，剃髪し頭をおおった
母は笑うことなく言った

目
輝く目は相変わらずの強気な視線で続けた

「今日は母とゆっくり過ごしておくれ」

母親らしい
一言とは別の「何か」が私を見つめている
そんな雰囲気を感じたが
母と久しぶりの食事をとれる事に

やっと私の心は安心した

その１　元服（３）（前書き）

１１月に入ってからの改訂により内容のつながりがぎくしゃくしている部分もありますが
おおよその部分では変更はないのでご安心ください

訂正改訂が多くてごめいわくおかけしております～～ヒボシ

その1　元服（3）

「兄上はお体の様子がよくないのですか？」
会食の座どころか謁見以降兄上は姿を見せてはくれなかった

不安。。。
兄上には歓迎されていないのか？。。。
それよりも何か具合も悪そうな感じだった
昼に謁見した時も覇気のない。。。
というか

私の頭はクルクルと動く外の世界の広さに反応しきれていないからか？
不安な方向に考えが傾く
兄は冷たい？というか。。。
何か隠している感じだった

そんな私の不安を知らぬ顔か。。

「守護代は責任の重いお勤めでしょうから。。。」
母はつまらなそうに答えた

なにもかもに
どう反応していいのか？

母と話しをする事さえぎこちなくなってしまう
言葉のすくないこの人に
私は子供の頃，甘えたことがあったのだろうか？

よからぬ疑問をもってしまう自分に気がつき頭を自分の拳で叩いた

寺を出てから
色々と考え過ぎている
城内の色々な部分を思い出せない事に迷いがある？
そのぐらいの月日がたってしまっている

林泉寺にいた時に「城」での出来事についての話をした事はなかった
そういう事を考える事態が「俗世」に未練をもっている事であって
御仏の教えに真摯でない気がして

兄が「守護代」として難渋の執政を何年も重ねてきた事は
聞き及んではいたが
それに関して「どう思う」という疑問をもった事はなかった

ついご飯を食べる手が早送りされて。。。
チラリと
母を見る
代わることなく平静な姿に。。。反省

舞上がってるな。。。。

ふってわいたような「元服」に
「あわただしい。。。。。」つぶやいた
自分に向かって

食事も終わり
少ないながらの会話を楽しんでいたところに
侍女「萩（はぎ）」が静かに襖を開けて

「湯をもたせました」
と
小桶の湯を見せた

母は湯に指先を入れ
ほどよい熱に満足したような笑みで私に言った

「トラ，身体を流しましょう」

「はい？」

とまどって。。。変な返事
というか。。。突然の事に固まってしまった
母と会えたのは七年ぶりだ
たしかに嬉しい
一緒にご飯をいただける日がまたくるなどともおもっていなかったし
そのうえで「湯」とは「馳走」。。。ですが。。。

そんな私を尻目に母は席を立ち
萩は私に
「こちらへ」と案内をする

奥の間に，たらいがあり別の桶に湯が満たしてあった
「着物を。。。」

「はい」
私はそのまま着物を脱ごうとした
「私がしましょう」
「えっ」
すでに，萩の姿はなく母が私の前に座り支度をしている

「自分でいたします」
「いいえ，母がします」
あくまで淡々と答える母
表情さえ変えない

逆らうものではない。。。。

母にされるまま着物をすべて脱いだ

裸の私を母はじっと見て
「さあ，お座りなさいな」
と，たらいの真ん中に座らせた
背中に湯をかけながら
「大きくなりましたね」
母の手はやさしいのだが。。。。何かさぐられているような感じでもあった
しずかに身体を流してゆく
細やかな指を持つ手が胸に触れたとき
「。。。「大人」になっていませんね」
と目を見て言った

私は
私の事を少しだけ理解し始めていた

この身体は「ジン」のそれとは違い始めていた
黒く焼けた顔に，たくましい四肢をもつ修行僧である彼らとの違いを
自分で感じられるようになってきていた
私の身体は
あれとは違う

城下の総構えで働く「娘」に近い，細い手足

寺で仏間に入る前の「お清め」を
一緒にうける事がなくなったのは十歳をすぎたあたりから

最近になって微かにふくらみ始めた「胸」は。。。女の物

「母上。。。私は「女」ですか？」
何も言わない
返事はない
「元服してもいいのですか？」

元服と言う話しが来たときからもっとも疑問に思っていた事をぶつけた

母は目を見開き厳しい顔で向き直った
「長尾の家のために。。。。あなたの元服は望まれておるのです」
「ですが。。。」
「あなたは。。御仏に選ばれた子供なのです」
その目は二の句を告げようとはしていなかった
灯籠の火に照らされた母の目は鋭く
信念の「炎」を感ぜずにはいられなかった

それでも
「母上。。。教えてください」
沈黙。。。

答えは頂けなかった

その日の夜
母は寝所の前まで私を送った

「夢を見てください。。。必ず」
そう言うと
静かに廊下をもどっていった

静寂がこだまするほどの屋敷の一室で
私はまたも
考えこんでしまっていた

私の身体の事を母は知っていたのだ
何故，私に教えなかったのか？
誰も知らないのか？

亡き父は知っていたのか？
。。。。。
兄は。。。。知っている？
師，光育は知っていた。。。。

天井の木の目を追いながら色々と考えてしまっていた
こんな雑念。。。
「雑念」なのか？
まだ
わかり得ないこのことを

今　いっぱいに考えてはいけないような気がした

「夢を見てください。。。必ず」
母がこう言ったのは初めての事ではなかった
林泉寺に送られたときにも母は「確かに」それを言っていた
しいていうのならば
「夢を見ろ」と言っている

「夢に。。。何を見たらいいのですか?」
私は声にだしてこぼした

母は「夢の中に」何かを「見ろ」と言っているのだろう
。。。。。でも

今すぐは「何か」わからない

考え過ぎている事だけ
頭を振った
もうやめようと

今できる事を
夢に繋がる眠りに入っていく事だけ

静かに目をとじた

山城「春日山城」がとりあえずでも戸板だけの城壁がなくなり

三の丸までのつくりの原型が出来たのは父の後をついだ
「守護代」長尾晴景（はるかげ）の時代になってからだった
そして今その苦心の「守護代」
晴景は不満の中にあり
地味にまとまった着物に不似合いな煌びやかな扇を何度も手に打ち付けていた

晴景は守護代という仕事が好きではなかった
父，為景（ためかげ）の苦難を見れば
望んでそんな官職にはなりたくもなかった
どんなに
気苦労を増やしても「国人衆」の反抗は続き
不平不満は留まる事はなかった

父の絶大な指示の元で跡目を継いだ「晴景」の評判は。。。良き執政を施しても一族の中にさえ浸透してはいかなかった
越後の中でもこれほどの「平穏」を得ているのはココ春日山近辺だけこの周りだけだ

そこにきて。。。

「虎千代」。。。。。思い出したくはなかった者

灯籠も一つだけをともした部屋の中で「トラ」の事を話し合っていた
相手は寺に使者として出し
今日もトラをココまで先導した男

「直江実綱」（なおえさねつな）父の代からの重臣である豪将

「虎千代は「嫁」にやれないものか？」

トラ，事「虎千代」の参内の話が「虎御前」から出された時晴景は
「輿入れ」の話だとばかり思っていた
思い返せばそんな「年頃」になっていたのかと忘れてさえいた
御前が騒ぎ出したのも娘の「年頃」を考えての事だろうぐらいに思
って

これはいい「進言」だっと頭を働かせた
「トラ」の事を利用しようとしたのだ
「長尾」の家の力をより地域に根付かせるために「輿入れ」するの
は良いことだ

かつて虎御前の一の娘「綾」を長尾宗家に輿入れさせたようにと
ところが
いざ事を始めようと使者を立てたら
御前は「元服」の儀だと言い出した

「なにか。。。企んでいるのかな？」
うすらぐらい部屋の片方の壁側に腰掛けた直江に晴景は扇で顔を煽
りながら
わざと「不穏」な物言いをしてみた

「トラさま「元服」の儀については林泉寺住職光育さまの威光もあ
ると。。。。聞いておりますが。。。」
「光育の威光？それは聞いていないな。。。」

トラ。。。虎千代の事はいつも虎御前が決める
それは父の存命していた頃から代わらない

推し進めているのは。。。。虎御前なのだ
光育ではない事は。。。わかっている

扇を強めに閉じる
苛立ちを現してみせる
父の後妻である虎御前。。。。
父，為景亡き後実家の「栖吉（すよし）」に戻す事はせず春日山に置いていた

それにしても
もともと「変な女」だと思っていたが。。。。

ここにきて
「女」のトラに「元服」などと

苛立ちは募れど。。。
はっきりとそれを言いたくはなかった
晴景は御前が苦手だった
あのギョロ目。。。睨んでいるのか?怒っているのか?
笑いもしない「母」の姿は不気味で。。。気味が悪い

「元服」を言い放った彼女は頑としてそれ以降の話しを聞き入れなかった

あげく決め台詞の
「御仏の示すままにと。。。」

その答えが返ってくる事は。。。わかっていたが
もう一度扇を開くと直江に言った

「御仏の示す道が「元服」と。。。。思うか?」

釈然としない心の内を重臣に聞く

「わかりかねますが。。守護代家の血統という意味では。。。あってもおかしくもないと存じますが」

直江の答えに引っかかる。。「血統」か。。。

「血統なぁ。。。」

晴景の整った顔にある眉がピクリと怒りを示す

直江はそれをしっかりと見てなおも言った

「守護代家の親族が多くいる事は。。。悪い事ではありません」

それはわかっていた

父，為景は子種にはあまり恵まれなかったし

晴景も。。。子供は早くになくしていた

このままというわけにもいかない事は確かだが。。。。

「それにしても。。。虎千代。。。」

あまり会話したくない議題だった

晴景はつまらなそうに別の事を考えた

婚儀でも守護代家のために「働く」という事には変わりないものだ。。。。

それを男のように「元服」させる理由が少なからず不快な考えを呼び起こしていた

何を考えるのか。。。「虎御前」と深く勘ぐるが

これが

「お家」のしいては晴景の利益にはつながらない気がしてならなかった

悩みの中で目を閉じた晴景に直江は声をかけた

「それほどにお悩みであるならば。。まだ日にちはあります今一度御前と話をされては如何でしょうか」

直江の進言に両手を上げて諦めた態度を見せた
それはもう手遅れだと。。。声を大にして言いそうになったが
扇をひろげ意見を払った
御前の前で一度自分の口から「元服」の儀を行うと言ってしまったのだから
今更押しとどめでもしたら
あの女は太刀を抜いてかかってきそうだ

「無理だな。。。」

そう
考えるだけでもうんざりだ
虎御前に逆らう気力はなかった
父をも。。多分ないがしろにした女と城でケンカなどする事自体が「無駄骨」だと
疲れるだけだ

疲れる。。。。晴景はもう一度目を閉じた
疲れる以上に心を騒がせる「いらだたしい存在」を思い出してみた

朝
参内してきた「トラ」を見たとき
なんともいえない気持ちになった
この城内で未だ大きくその力をふるっている「御前」にそっくりな
「トラ」の顔
実に腹立たしくなった
と
同時に。。。。。

「嫁に貰ってくれるところがないか。。」
対座の向こうで主の様子をうかがっていた直江にこぼした
自嘲気味に

「それは解決にはなっていません」直江は切り返した

「女丈夫の虎御前の娘。。。。」
そんな「女」にそっくりな「女」
皮肉を込めてのらりくらりと立ち上がった

「たとえ行き遅れになったとしてもそれこそわしの責はなかろう」

それが御仏の示す道だったのだろう?
と
説教でもしてやればイイ
女の考える事にいちいち口出しするのは「守護代」のする事でもない

もちろん心に登る「不安」はあったが
実際「女」に何か出来るわけでもないと思い返し部屋を出た

「まぁなるようにしかならん」
と

朝
私は
いつもの時間に目が覚めてしまった

城での生活にしては早いか
早すぎるか？
そう思って障子を開けた

初夏の熱気はまだそれほどココにはきていない
でも山の木々はそこかしこに新しい「緑」を実らせ良い匂いを朝露
と一緒に届けていた
夏はすぐにやってきそうだ
後しばらくココでの日々を送ったら「元服」する

背伸びしながら「夢」を思い出してみたが昨日は見られなかった
母の願いが今は何かわからなかったし

でも今は
それに悩まされることなく間近に迫った「元服」に備え
住職の言葉を守って進む事にしようと思った

支度はもうすましている

「良し！！座禅をくもう！」

初心を思い直した私は板間の部屋から進み出した

「心」を鍛えようと決意し歩いた

迷いをなくし立派に「元服」してやろうと

決意と共に一人笑った

その2　傷跡（1）

真夏の山の残暑は
寺にいた頃のそれとかわりなかった
とにかく湧き上がる熱さに
城内の書物を読みあさっていた私は弱音を吐いた

「暑い」

額から頬に流れる汗を拭う
寺での奉仕をしていた時の方がきっともっと流していたハズと思い出して
安直に言葉をもらした事を少し恥ずかしく感じた

まだまだ修行がたらないなと

八月十五日
厳粛な雰囲気をぶち壊すような熱波の中
私は「元服」した
式の間周りを少し見回したが。。。。みな汗で。。。
なんだかもうしわけないような気持ちになりながらの元服だった

私の
名前は「長尾景虎」（なかおかげとら）と改められた

元服のおりの名前は
師，光育がつけてくれたそうだが

兄から手渡された「親書」には「影」の字が記されていた
手元にもったそれから顔を上げて兄に問おうと思ったが。。。
冷ややかなお顔からは返答をえられなそうでやめた

とにかく
これで正式に。。。大人として「長尾」の家のために働く一員になれたという気持ちで心は高鳴った

しかし
相変わらず城での母からの呼ばれ名は「トラ」だった
それは「愛着」なんだろう
離れていた期間の長かった母にとってきっと私はどこまで成長しても「トラ」なんだと
母には子供として想って頂ける事が嬉しかった
だから無理に名を改めてくださいとは言わなかった

母がそう呼びたいのだからそれでイイ

そんな灼熱の式から向こう
表だった仕事はなかった

でも
もう子供ではなく「長尾」の家に徒事する身になった事を思うにじっとはしていられなく
いつ何時，大事を手がける事になるかはわからないという緊張した気持ちを持ち続けたくて。。。。「修練」に励んだ

ただひたすら「武」に「禅」にと修練をつづけた

その一方で
遠ざかっていた「治世」とについて学ぶようにした
それまでは「治世」は「俗世」の仕事であったから
考えの縁の物であったけど
これからはそれも修練の一つとして学ばなければならないと思ったからだ
「兵法」については寺にいたときから学んでいたので
さらに「実践的な」ものとして城にあった書物を蔵で汗まみれになって読みあさっていた

そんな書物ずくめの日々

「直江実綱」（なおえさねつな）が
私のところに来た

その日私は気晴らしも兼ねて
一日「武」に没頭しようと。。。張り切っていた
とくに好んでいた
立禅（弓）に心ごと目を向けていて彼がすぐ後ろに立っている事に気がつかなかった

「みごとなものです」

遠矢を的に当てたところで声がかかってすぐに振り向いた
大柄な身体に大小の刀傷
着物を半身ぬぎ
鍛えられた腕は
自分の弓を準備して立っていた

笑顔でお辞儀すると
すっと引いた矢は吸い寄せられるように力強くに的にあたった

「みごとです」
私はあまり人の弓を見たことがなかった事もあり
あまり見事に的を射た矢に目を丸くした

「すごく綺麗な矢ですね」
彼は振り返ると

「いやいや。。。影トラ様の弓もみごとなもの。。つい心誘われわしも弓を引かせていただきましたまで。。寺で習われましたか？」
実直さが言葉になって出る男だ
意志の強そうな眉毛が。。。気に入った

「寺で修練しました！！」
私は元気よく返事すると
弓を置き小姓に茶を用意させた

「影トラさまは馬もうまく。。弓も素晴らしいですな」

顎髭を撫でながら直江の褒め言葉が続いた
照れる
いきなりそんなに言われても
「いえまだまだ修行の身です」
つい控えめに頭をかきながら答えた
「精進なさることに惜しみがない。。良いことです」

家臣「直江」の事はよく聞いていた
最初に使者として来たときから

次に会ったときに失礼がないようという思いからも
歳は兄と同じぐらい私の二十歳上
兄の腹心だ
城内の業務に長けており城のいろんなところで良く「見る」人物だった

茶を飲む
私をしげしげと見ていた彼の目に気がついた

「母上に似ていますか？」
私は少し含み笑いをもった聞き方をした
なにせ
参内から向こう会う家臣は必ずと言ってイイほど私の「顔」をじっくりと見ては
みんな決まって

「虎御前様にそっくりだ」
と
答えていたから
ならば
自分から聞いたほうが早いか？と思ったのだ

「はい。。。よう似ておられます」
「目ですか」
彼は私の言葉をきいてやっぱりと笑った
が
直江の答えは違った

「いいえ。。矢を射る姿が亡き親方様にです」

ハッとした
産まれた城にもどってきたのに
父の事はほとんど思い出す事もできなかった私は
初めて
父に似ていると言われ驚いた

「直江さまはよくしってらっしゃるのですか？」

身体を乗り出し食い入るように聞いてしまった
「共に馬を並べ戦場（いくさば）にでました」
知りたかった
父はどんな人だったのかを
私は「父を知らない」。。。。。

「どんな人でしたか？」
素になってしまった私の態度はよほどおかしかったのか
直江の方が驚いた様子で聞き返した

「憶えていらっしゃらないのですか？」

一瞬の事だったが
私はそれを聞くことが「恥ずかしい」事であった事に自分を取り戻した

「いい。。いえ。。。幼かったので。。。あまり憶えて。。。」

恥ずかしかった
自分の父親をまったく憶えていないなんて。。親不孝もいいところ

だと
変に頭を掻く仕草でごまかしたかった

「そうですか。。」

聞けなくなってしまった。。。。
ちょっとしょぼくれた私に直江は一言だけ

「お父上様は強き男。。。越後をまとめるために働いた「戦鬼(いくさおに)」にございました」

と

私の知らない父上。。。強き男。。。

「そうだ!!直江殿。。私に治世について教えてはくれまいか?」

忙しい男直江が父のことを知っていると思えば知りたくなる
無理強いして聞くより彼から色々学べばそのうち。。何かわかってくる
そう思う衝動を止められず
私は直江に「治世」の師事を仰いだ

早口でまくし立てるように言う私の姿に彼は少し笑ったが

「学ぶことのお手伝い。。。喜んでさせていただきましょう」
と答えてくれた

書で学び

さらに実践している彼に学ぶ
私は少しづつでも役に立ちたいという気持ちと。。。。

うっすらとしか思い出せない父について知ろうと努めたが
治世は学べども
あれ以降「父」の事については聞くことはできなかった

聞いてはいけない事のように感じてしまっていた

そんな日々の後

新年を迎えた頃
私に「長尾家」のための仕事がめぐってきた
それは
突然の嵐の中に私を連れて行く「旅立ち」だった

その2　傷跡（2）

「栃尾城の首尾を任せる」

兄からの通達は簡潔なものだった
手短にそれだけ言う私は質問さえ出来なかった
言い投げで部屋を出て行こうとする兄上を目でおった
それに気がついたのか足をとめた兄は扇で顔を隠しながら言った

「栖吉にもどったのではオマエの意気込みを活かす前にに「嫁」に行かされてしまうかもしれぬからな。。母を助け栃尾を助け守護様のため引いては越後のためになってほしいと思っての配慮と考えともらいたい」
「ご配慮ですか？」

扇を仰がせながら襖に手を掛けて

「栃尾は長尾の要ぞ。。。「旗」を持って行くだけだが良く励んでくれる事を期待している」

そういうと
軽やかな声とともに姿を消した
「嫁」？またも？
最初に謎だったのはそれだったが
それはないだろと思いながらも帰りの廊下でいろいろと考えた

いきなり「城持ち」？
栃尾は中郡平定の最前線の城だ
まだ年端の事を自分の事ながら考えるに。。。釈然としないもので

はあったけど
それでも栃尾は「栖吉（すよし）」に近い
母上の実家近くだ
そういうのを見越して考えれば私がそこに行く理由もわかる
きっと母上の実家と協力して国人衆たちとの連携をとっていく事が
私の最初の仕事になる

連携をとる仕事。。。。

寺にいたのなら
知り得なかった「越後」の実情
私が「元服」したのも
なにも母の無理強いばかりでもなかった事がわかった

国内はかなり乱れていた

「今が長尾の家のがんばりどころです」
立禅を共にした直江の言葉が思い出される
責任の重大さを知った
これほどまでに「混迷」を極めていた国の治世を一心に支えた
兄に畏敬の念を抱いた

だが
直江はそんなふうには言わなかった
「強い守護職にならねばなりません」
言葉をはき違えているのか？
と最初はおもっていたが
いずれそれが私の行く末に大きくかかわってくるとはおもってもいな
かった

城からの隊列は
直江の隊と
私に与えられた数少ない兵たちでの出発だった
夏を過ぎた空は大きな雲をたくさん浮かべていた
長く続く道
その向こうの山々。。。。。あの向こう。。。。。もっと先。。。

「栃尾」が

馬に揺られた事で
私はまた色々と考えてしまっていた
突然の元服
突然の「城持ち」

何もかもが急におこった「激流」
この流れの中に。。。。。自分は起っていられるのだろうか？
不安。。。
私は俯いた寺を出てから向こう全ての流れが速すぎて。。。。
気持ちがついて行けなくなっていた

「トラ！」
そんな思いで道中の馬を進めていたところだった
懐かしい声が私を呼んだ

「ジン？！」

あの着崩した作務衣に大小袋をぶら下げた姿の「陣江」があぜ道の
横に立っている
「何しょぼくれてんだよ!!」
「どうしたのさ?」
相変わらずの軽口を押しきって聞いた
まるっきり必然だったかのように顔をきょとんとさせてジンは答えた

「ついてきた」
「ついてきたぁ?」
私は振り返って道を見回し
もう一度ジンに聞いた
「ついてきたの?」

ジンは顎をひょいとあげ自慢げに返した

「山からトラが下りてくるのが見えたから」
。。。。。。
絶句

ジンの言うことには
師，光育が私の様子見に行けとよこしたと言うことらしい

「きっと泣いて」
「泣かない!!」
さっきまで不安だった気持ちが一瞬で吹き飛んだ
私は師の心遣いと友達の来訪で少し楽な気持ちになった

ほんの三月(みつき)前まで一緒にお堂に通ったジンが
ものすごく懐かしい人に思えた
と

同時になんと「友」はありがたいものかと心を和ませた

私は咳払いをしてジンに言った

「身なりを正せよ。。。紹介する方がいるから」

心をはずませジンとの会話に没頭しそうになった私は横に馬を歩かせる直江に気がついて言った

「ジン，こちらは直江実綱(なおえさねつな)殿だ」

ジンはかるく会釈する

直江も同じように挨拶した

二人の挨拶は何かぎこちない感じだったが。。。。

まあジンのよごれっぷりをみればそんな反応にもなるよね。。。。

「寺で一緒に修練していた「陣江」です」

私は直江にそう言うと鼻をつまんでみせた

「ちょっと臭いけどイイヤツです」

「なんだと!!」

馬の上で私はおどけて見せた

直江は笑った

「ハハハそういう風に言われると忘れない名前になりますな」

「臭いは余分だ!!」

馬でチョロチョロと逃げる私を追いかけるジン

楽しい

緊迫していた気持ちはすっかりほぐれた

「大変な仕事なんだな」

落ち着いて馬を列にもどした私にしばらく普通に話していたジンが
改まって聞いた
馬の手綱を引きながら前をいく彼の言葉に

「うん。。」
と答えた
ジンは振り返って言った

「大丈夫オレがついてるよ」
どこからそんな自信が。。。。
私笑ってしまいそうになったが
なんとも
心強い言葉に心は救われた

街道は暗かった

昼過をすぎたばかりなのに暗い日差しだった
前方で雨でも降っているような鉛の空
それだけの事が
心を騒がせるようになったのではなかった

あきらかに気持ちに落ち込みが戻ってきていた
私のそれを感じたのかジンの押し黙った

進む
道には傷跡がたくさん残っていた
林泉寺付近の街角とは大きく違った世界
焼けた家屋
木々
時より見られる「死」の姿

今の「越後」という国の姿なのだという事が現実になった
と
同時に何も知らずに育ってきた自分を恥ずかしく思った
城に阿がッ時に色々な知識を手には入れた
色々な治世も聞き及んだ
こんな悲惨な状態がまだ各所に残っている事も。。。耳に聞きはした
たが。。。。見るのは辛かった

私に与えられた教義と責務で
民草のためのより良い治世を。。。。。と。。る当たり前の人の上
にたつ姿勢を思ってみたが

心は御仏の教えを追っていた

なんて
辛い事なのだろう「現世（うつしょ）」というのは
涙が出てしまいそうになったがこらえて
その気持ちを示すために
しずかに馬上で手を重ねた

少しでもこうして祈ることで死してしまった者たちを送る
浄土への道を示して起きたかった
何故これほどまでに「死」がはびこっているのか
いたたまれない気持ちで
目を閉じて祈った

「何に祈っている？」

それは突然嘲りを含んだ声として私に問いかけた

暗く垂れ下がった曇り空を背に
薄汚れた着物に抜き身の刀をもった男が目の前に立っていた

いや，一人じゃない
やぶれ坊主のような出で立ちの
男達が道脇の草むらや
廃屋から
みな澱んだ目をしてこちらを見ている

「姫様よぉ，何に祈ってるんだ」

指さすように私に刀の先を向けて男は言った

「ここで亡くなった人たちのためにです」
睨むように言い返した

不遜な輩たちはニヤニヤと笑いなが

みな刀を抜いて近づいてきた

「身ぐるみ全部おいてきな!!」

歯抜けの男が叫んだ

その2　傷跡（3）

暗雲に姿を重ねた
汚らしい男達
そのすり足はジリジリと私たちに近づいてきていた

気持ちの悪い感じ。。。。。

これは。。。。

私を守るように，袋からこん棒を抜き持つジン
そして直江
城持ちで付いてきた侍従の者たちも身構えた

「よせよ侍もどき！死にたくなけりゃ刀と金をおいてきな！！」

数で勝る私たちを見下し
ひるまない男。。。この武家の行列に対して大胆にして不敵で。。。
不遜

不気味な感じだ

背筋に走る気持ちの悪さを正視ながら
「何故こんな事をする？」
私は話しかけた
「はぁ？」

ボロをまとった男は道に転がった「死体」を指刺しながらまったく

質問を介さぬ脅しを続けた
「ああはなりたくないだろ。。祈ったって戻ってこねーぞ!!」

「キサマがやったのか!!!」
ジンが怒鳴った

歯抜けの男の後ろに立つ大男。。。細身だが手慣れた感じの
頭格の男は答える気がなさそうだ
つまらなそうに
横目で見ている

私はつづけて聞いた
「何故こんな事をしようとする?」

「イイベベ（服）着てる姫さんにゃわからんこったよ!!」
横からハゲの小男が言った

ふざけた言動をベラベラと話すこいつらは異常な集団だ
これほどに乱れた身なりなのに規律正しい足取り
確実に
間合いを詰めてきている

気持ちの悪さが何かがわかった

「キサマも武士(もののふ)だろ?何故こんな事をすると聞いているんだ」
私は声を大きくして言った

響く声に驚いたのか

何かに気がついたように男達の動きが止まった

止まった輩たちの顔を眺める私の心には言いしれぬ深い「怒り」が
沸き立ち始めていた

やさぐれ坊主や野武士まがいの者は
林泉寺にいた頃や
総構えの町でそれなりに見てきていた
やつらはどんなにまとまった集団であったとしても
身振りや足並みがそろわない
ただの「悪行」を行う奴らには
身に付いた「規則」がないからだ

そういうただの「悪」とこいつらは違う
気持ち悪さの原因は不遜の輩を装う男たちが元々所作正しき「武士」
だからだ
歩き方間合いの詰め方
これは「武」を身につけた者たちの動き

「抜いているということは「死」は覚悟は出来ているという事だな」
直江は気がついている
黒く光る「敵」の刃を見据え覚悟のほどを鋭く聞いた
彼の手は「戦う」ために剣に手をかけている

野武士まがいの男達にも緊張が現れる
ふざけた

言葉は一切しなくなった。。。自分たちの「中身」を気取られたことに警戒を表す
黒ずんだ顔の下
険しく光る目を持つ武士たち

「金をおいてけよ。。見逃してやるから」

前に立つ「交渉人」せむしの歯抜けは言う
おちつきのない態度の方が消えている
言葉のおふざけとは裏腹にしっかりと緊張を保っている

「ボロに隠した野心が見えているぞ」

私の口調は怒りに充ち満ちた
ゆるせない
という気持ちは怒りの頂点に達し燃え上がったまま私の意識を真っ黒に染め変えた
たとえ横たわる「死」の姿を彼らが作ったのではないとしても
こんな事を昼間から仕掛ける者を許すことなんかできない

全面に立ちふさがる男たちに雷の怒声で言った

「私は長尾影トラだ！武士の所作をもちながらの蛮行を決して許す事はない！！」

一瞬顔を見合わせた暴漢たちはそれでも戻る気にはならなかったようだ
「だまれ！！！」

引きつった声を発し
一斉に飛びかかってきた

直江は素早く刀を抜き
ジンはこん棒をかざした

私もその手に刀を持った

「怒り」は伝播する
私の声にそれは十分に入っていた
周りにいた侍従の者たちにもこもった「怒り」は伝播していたに違いない

今日，春日山城を後にして，たかが半日の道中にどれだけの傷跡を見たことか!!
焼けた町
河原に流れる「死」
迷い出ている親無しの子たち
この越後はどれだけ傷をおっているのか

なのに所作も正しい「武士」ともあろう者が野武士まがいの事をして人を脅している

これは世に示された「悪」だ
「闇」は来て
私に言う
「斬れ」と
刀を掲げ大きな声で叫んだ

「オマエたちを許さない！！」

斬る！！叩き斬る！！！
彼らは「武」を貶め人の道を外れている

こんな者たちと一緒の「武士」であっていいわけがない
ましてや御仏に祈る事に難癖をつけるなど言語道断だ

馬を下り
目の前に飛び出た刀の一線をくぐり抜け
歯抜けの喉を横一線に切り裂いた
クビは不自然な感じにぐらつきそのまま立った状態で止まった

生暖かい「血」が勢いよくが私に降り注ぐ
かまわずもう一線
ハゲの小男の肩を真上から斬りつけた
悲鳴をあげて崩れる

「こい！！！叩き斬る！！！」

吠えた
私の怒りに押された「力」決して許さぬという心がやさぐれ者たちを追いつめた
すでに勝敗は決していた
直江の剛剣は瞬く間に複数の野武士を叩き殴り切り捨てていた
ジンのこん棒で骨をくだかれて倒れた男たちは何人もいた

尻込みして逃げようとする男たち

逃がしはしない

「抜いた限りは最後まで戦え！！」

と

激し追いつめた時

「やめろぉ！！」

大きな声が焼けた家屋の片隅から響いた

私は足を止めて

見えぬ声の主に叫んだ

「姿を見せぬか！！」

「いまいくよ」

少し間抜けた声は廃屋の影から身を起こし私の前に現れた

大男

先ほどの頭格（かしら）の細い男が横に並ぶがそれより一回りは大きい

顔はつるりとしていて髭も少ない

他の輩と同じくかなり薄汚れている

その男は無造作に構える事なくのしのしと前に進んできた

大きい

おそらく直江の身長を抜いている

屋敷の戸口であったら頭をぶつけてしまいそうだ

大男は「素手」だった

私は睨みながらきいた
彼が代表のようだ

「名は？」

素手で前に出てきた事で私は少し自分を抑えて聞いた
男は口をもごもごさせながら
少し困ったように答えた
「やたろー。。」

腰砕けになった野武士まがいの男たちは
この男の後ろにいそいそと隠れた

「もうええじゃろ。。。あんたの勝ちだ」
「勝ち負けではない！！」
刀を鞘に収めたが怒りを収めるつもりはなかった

勝ちとか負けではない
武士たるものがこんな事を遊び半分で行い
弱き民草を害している事を許すことなどできない
そんな事を生業としてきた者たちの事を「勝ち負け」などと遊びのように許していいわけがない

やたろーと称した大男は
私の顔を見て
うつむいてまた口をもごもごさせて
「じゃがわしらは負けた者だからこんな生活をしとる。。やはり勝ち負けなんじゃ。。」

苛立ったが

相手ののんびりした口調で聞き返す余裕が出来た
「負けた者？」
「そうじゃ。。。。わしの父はあんたの父との「戦」に負けたから。
。」

その２　傷跡（３）（後書き）

今回
やたろーが登場しましたが
その身長をあえて「１８０」と現代寸法で書きました

個人的にいつも思っているのは
歴史小説の由緒正しい「決まり」
いわゆる「縛り」は
一般的な若年層には理解しにくいし
読むことを中断させる方に働いて

もちろん「由緒正しい」ほうが
絶対に良いのですが（むしろそっちの方が好きですが）
今回はまさに
簡潔にその人物像を伝えるために
簡単な方法をとったという事です

本格的な歴史物が好きな方にとってみれは「邪道」
なので
気分を害されたかたには
ココから先もかなり「簡潔」な表現をめざして書いていくので
注意をなさってください

その2　傷跡（4）

やたろーは
その大きな体に似合わないほど声が。。。おっとりとして優しい
何より顔に闘争心を出していない
その証拠に私の前で膝をおり目線を同じ高さまでもってきている
正しい行動ができるか？
それはこういう態度ですぐにわかる

「長尾為景（ながおためかげ）は逆賊だ！！」
「たまたま勝てたから「守護代」になっただけじゃないか！！」

私とやたろーの間にあった静寂を破ったのは
父の名前に罵声を飛ばしたのは
ジンに殴り倒された男たちだった
口々に血を吐き散らしながら大声で叫んだ

「汚い手使っても勝ったから偉いんだろ？！！」

私は
愕然とした

私は父を知らないが

父，為景が前の「越後守護職」をその手にかけた事は話しに聞いている
でも　そうしなければならなかった事も学んでいる
「幕府」や将軍の威光は弱々しき「守護者」には守れない

光育の言葉で言えば
むしろ混乱してしまった越後のために父は戦ってきたのだし
それを学ぶことで「力」使い方と必要さも知ったのだから

だけど
本当はどうなのか?と言われれば。。。。少しの間言葉を失い考えてしまった私に

「オレのオヤジたちは「上杉」の家臣だったんだけど。。。」
やたろーは
男たちに手をあげその「雑言」を止めると
話しを続けた

「あんたのオヤジに負けた。。戦に負けて死んで。。。オレたちは戻る所を無くした」

やたろーの顔を見た
まじめに話す言葉を聞いた
一心に私を見ている目に「嘘」はなかった

まわりでわめく男達を無視して
その大きな肩に手を置き言った

「戻る場所が無くなったから。。。百姓を殺していいと思ったのか?」

強く。。。目の前にかしずいた彼の肩を掴む手に力と想いを込めて
私は答えた

良いことと悪いこと
名誉と不名誉
色々なものがある

「戦」の結果は無惨なのかもしれないが

「だから野武士まがいな事をして狼藉をはたらく事がゆるされたわけじゃないだろ」

見つめる瞳をしっかりと見返して言った
彼はまた下を向き押し黙った

遠巻きの男達はまたも口々に悪言を吐いた

「オレたちはこうやって日銭稼でるんだよ!!」
「百姓殺して何が悪い!!殺しはオマエの家だってやった事だろうよ!!」

「だまれ」
急に怒りがたぎった
それは不名誉。。。。

「守護様に使えた武士が百姓を殺して身銭を稼ぐだと?」

彼の向こうに見える輩の方に進んだ
私の後をジンが守るように続く

「戦場(いくさば)は「平ら」に言えば「覚悟」を決めた武士と武士の果たし合いの場だ!!それに負けたからと言って民草を食い物にしていいわ

けがないだろう!!己の決めた君主が負けたらオマエたちの信念まで負けて腐ったという事か?」
拳をにぎって睨んだ
なんて事を言うんだ。。。こいつらは。。。

こんな事を勝ち負けだと騒ぎ
民を苦しめるなど
怒りの私に
静まりかえり
おずおずとひるむ男達

「負けても武士であるならそんな事はしない!それができないのなら今ココで私が斬る!」

激した言葉に
野武士たちは間合いをぐっと下げた
にらみ合いが続く中
ゆっくりとやたろーが頭をあげた
そして野武士たちに向き直ると悲しそうな顔で

「もうヤメだ。。オレは武士だ。。。もうこんな事はしたくない。。。」

後悔をこぼすように告げた
向き直ったやたろーの言葉に
男たちは顔を見合わせるほどびっくりした様子

「オイ。。やたろーの家だってそのせいで。。」

その言葉が終わらないうちに
今度は私の方に向き直って言った

「オレは武士(もののふ)でありたい」
懇願する言葉
顔を厳しく引き締めて己の初心をハッキリと明言した

「オレは。。。百姓に酷い事したくもない。。」
口ごもりながら一つ二つと返事する

「オレは。。。武士である事を誇りに思って生きたい」
真摯な目に涙が走った
優しい男なのだな
本当はずっとこんな事したくなかったに違いない
それでも一族を率いた者として泣く泣く生きる道を探していたのだろう

苦痛に彷徨った心が私に懇願し道を求めているように見えた

「オレは。。。やっぱり武士でありたい」

繰り返される言葉に表された「初心」
私はその言葉をきちんと聞いた

大男と向かい会って
涙の彼は告げた

「オレは影トラの言葉を正しいと信じる。。。こいつらの所業の責(責任)はオレにある。。オレを罰し首を跳ねてくれ。。それでこいつらを許してくれ」

やたろーは巨体を大地に落とし足を組み直して正座をした
「親方(おやかた)!!!」
覚悟を決め首を差し出そうとしたやたろーの姿に男たちが刀を投げ捨てて駆け寄った

「やめてくれ!!親方まで亡くしたらオレらどうやって生きていったらいいだよ!!」
細身の参謀格の男は泣きながらやたろーの肩を必死に揺すった
あれほどふざけた言葉を投げかけていた男たちがみな
涙声でやたろーの周りにあつまり肩を揺する

「頼むよ。。。親方までいなくなっちまったら。。。。。」

やたろーの周り一人残らず集まった男達。。。。泣き声まで聞こえる
なんと信任された男だったのかと私は感心した

その私の前に細い男が群れをかきわって前に出てきた

「親方のかわりにわしを斬ってくれ。。。頭失うわけにはいかねえんだ。。それで許してくれ」
「善治郎(ぜんじろう)!!」
前に進んできた男にやたろーは初めてはっきりした声で怒鳴った

「これはオレのけじめだ!!前にでるんじゃねぇ!!」
善治郎と呼ばれた男は振り返って。。。泣きながら吠えた

「いやだ!!親方まで失ったらもう生きてく力なんかねぇよ!!みんなの世話してくれよ!!責はわしが代わりにとるから。。。頼むよ。。。。。」

そう言うと私の前に土下座した

強い絆
ただの賊ならこれほどまでに「涙」はなかった事だろう
隣で見ていたジンは驚いた顔をしているぐらいに
落ちぶれてしまっても
誇り高き守護の元に集った武士たちは「強い絆」をしっかりと持っていた

心は十分に穏やかに戻った
武士（もののふ）の魂が死んでいなかった事を感じられたから

私はやたろーに言った
「死んだって責任はとれないぞ！！」
やたろーは本当に困った。。。。という顔で私に聞いた

「どうしたらいい。。。」

私は頷いた
「着いてこい」
手を伸ばしやたろーの大きな手を掴んだ

「今日より私。。。長尾影トラの武士（もののふ）として仕えよ！！！」

私の言葉にやたろーは大粒の涙をこぼして見せた
そのまま伏して言った
「心よりお仕えさせて頂きます！！！」

「その働きが「越後」に対する償いになる」

賊達はみなひれ伏した

これが「小嶋弥太郎（こじまやたろー）」との出会いだった

その3　栃尾城（1）（前書き）

栃尾城までのくだりを
書き直したりしました。。。。

未熟者ゆえの事と思ってゆるしてやってください

その3　栃尾城（1）

栃尾城に入ったのはその翌日だった

私たち一行の後ろを大男のやたろーと
これまた大男の仲間達が粗末なかっこながらも「共」として着いてきた

「いいのか。。あれ？」

馬を引いていたジンはさすがに城の総構えをくぐる時になって私に聞いた
ジンは終始あの大男の頭の方を見ていたところから
身の丈にびっくりしていたのだろう
近くで見ると本当に大きな壁のようでもっと驚くに違いない

「着いてこいと私が言ったんだ。。。問題ない」

と呆けているジンに笑って答えた
となりの直江は茶化すように言った

「陣江殿も大きくなりたいのですなぁ」

背を気にしているという心の内を見抜かれジンは口ごもりながら返答した

「あのぐらい。。。すぐに届きますよオレだって。。。」

拗ねた感じのジンの顔にいい気になった私は言った

「その前に私がジンの背を抜いてやる！！」
顎をあげて自慢げな私にジンは答えた
「頭がでっかくなっちゃうんだろ！！考え過ぎで！！」
と頭でっかっちと手で頭の上に円を作って舌を出した
「何だと！！！」

周りにいる近習たちの笑い声が聞こえる
私は鞭をもって引き綱を放し逃げていくジンを追っかけた

もう栃尾の総構えは目の前での大はしゃぎだった

総門の番所を越え
やたろー達も城の構えを一緒にくぐらせた
やはり大きな体に城内にいた者たちが驚いているのが微笑ましかったが
それだけではない「警戒」という視線も十分に感じられた

はりつめた「緊張」

番所から向こうの
城人達の顔には厳しいものが漂っていた

それは城内の様子からもよくわかった
見渡せば
総門から向こう
物々しい備えがあちこちになされていた

乱杭に
空堀

春日山以外の城は初めてみるがそれにも劣らぬ厳重に施された堀切り
ココは中郡（なかごおり）の最前線「栃尾城」
それをあらためて理解するの十分な備えだった

思いを引き締めながら進む私たちの前に
鎧直垂姿（よろいひれたれ）の男が
本城郭前にたっているのが見えた

懐かしい顔

「道中ご無事で何よりでした」

私を栃尾に呼んだ男
栃尾城城主「本庄実乃（ほんじょうじつの）」
が
深々と礼をして迎えた

実乃には林泉寺にいた頃から何度か会っていた
栃尾の土産を持っては年に何回か来てくれていた
囲碁を教えてくれたのも「実乃」だった

ひさしぶりにあった彼の顔は疲れていた
理由はもはや聞く必要もなかった
中郡（なかごおり）のこの地は「略奪」と「死」で溢れている

ココにくる途中に見た物は
やたろーと出会った道中で見た物を凌駕する「傷跡」だった
目を覆いたくなるような姿をたくさん見た
そしてそれがこの栃尾を周辺で行われている「蛮行」という真実だった

実乃は深くお辞儀して言った
「この日を待っておりました。。。。影トラさま」

「うむ。。。」

覚悟は決めてやってきたのだ
少々顔が引きつっていたかもしれない

ココから私は「長尾」の家のために。。。。ひいては越後のために
越後を守る職務の御旗「長尾守護代家の旗」と共に
戦っていく事になると思うと身の締まるおもいでいっぱいになっていた

頭の中
表情。。。きっと色んな思いでいっぱいになっていた私に気がついた実乃は
少し顔をほころばせて言った

「まず今日はゆるりとお休みください」

張りつめ顔の「決意」が

かえって気を遣わせてしまったようだが
実乃はそのまま城内に私たちを導き
夕食の支度をさせた

「直江殿。。。よくココまでおトラ様を導いて下さいました。。。
ご苦労にござった。。」
「直江」に酒をつぎつつ栃尾の主はかみしめるように言った

本庄実乃（ほんじょうじつの）
前守護代為景の頃からの家臣である
直江に比べると，いくぶんふくよかで肉好きの良い中背のこの男の
顔にも
あまたの戦傷があった
鼻っ柱を横切る傷を，指で触りながら
到着を心待ちにしていた事をしずかにもらした

「良かったのか？悪かったのか？今の状況ならそうするしかないと
思ったまで。。」
酒をすすりながら
直江は俯いたまま返事をした

「越後のために。。。。わしはそう信じてお願いした。。。きっと
おトラ様は我らに「報いる」働きをしてくださる」

実乃は手酌をしながら少し口調を強めて言った

「長尾守護代家の旗。。。。か」

直江には聞きたい事が山ほどあった

「影トラ様は。。。残念な事に「女子(おなご)」だ。。。多くの人心を集めるのは。。。無理ではないのか？」

直江の言葉は的を得ていたが

実乃は動じなかった

やんわりし微笑むと返した

「そうだとお思いなのにココに導いてくださったのですかな？」

杯を下ろすとさらに強めた口調で

「私は長年「おトラ」様を見てきた。。。亡きお屋方様（為景）の後を継ぐのは強き者として十分な物をもっていらっしゃると知っております」

「お屋方を継ぐ者？」

直江は少し首を傾げて見せた

「正統なるご嫡子として。。。」

直江の懐疑的なそぶりに実乃は毅然と答えた

「しかし。。。「女子(おなご)」でござるぞ。。。」

正統という嫡子。。。

男でない以上多くは望むことのできない立場の影トラに。。。直江が考えている以上に実乃は「何か」を望んでいた

「晴景様のように。。。。「あやふや」でない事は大きい」

直江は実乃の返事を鼻で笑った

「あやふや」

ずいぶんと「濁した」言葉を使うものだと
だが
その「あやふや」さに引っかかり。。諸将や国人衆。。。果ては親族衆である同じ長尾の者たちからの「力」を現守護代晴景が十分に得られず未だ「越後」混沌とした状態にあるのは隠せない事実だ

「あやふや」
それが
現在の越後の統一を阻んでいる第一のものである事

杯のふちを指でなぞりながら直江は聞いた

「旗持ちで戦に出られますかな?」

ココに
影トラが来たのはただ「守護代家」の旗を持ってきた。。。というだけであっては意味がない

ココは「戦場」への最前線だ

終始
まるで試すような問答をする直江に改めて向き直った実乃は言った

「きっと戦われる事であろう。。。」

顎下にある槍傷をなでながら鋭い目で答える
戦う
文字通り自ら出馬するのか?
杯の酒をのみほした実乃は笑った

「ずいぶんと「お試し」ですな。。。まだ迷いを持っていらっしゃいますか?」

直江は。。。。影トラの存在を幼少の頃から知ってはいたが近くにいたわけではなかった
虎御前の実家「栖吉(すよし)」衆の親族衆「栃尾」の実乃は林泉寺に預けられた影トラの後見を影ながらする事によってその「姿」を見てきている
そこで何かをみつけた?
いや
それ以前から影トラには色々な噂もあった。。。

藪の中か?

灯籠の光の下二人の武将は静かに「何か」を探るように語りあっていた
為景と共に戦った男達だ
「武」については
隠し事など通用はしない事も承知の仲の武士

「直江様は「おトラ」様では。。。。不安かね」

むしろそちらの方が聞きたかったと実乃は言った
直江は杯を置き，灯をみなが言った

「虎御前の娘。。。トラさま。。。」

つぶやくような言葉に実乃はニヤリとしながら言いかえした
「だからこそ。。。「守護代」を継がねばならん」
その言葉に直江は目をあげた
自信？願いなのか？
繰り返すよう実乃は言った

「お屋方と御前の子。。。。おトラ様こそが。。。。」

直江はこの「問答」にはもう何も答えなかった
言葉を選んでまで腹のさぐり合いはしたくなかったからだ
代わりに
今は亡き親方である為景が城内で倒れたときの事を思い出していた
あの日
残念な事に直江はその場にはいなかった

しかし後日談ともいえる「噂」は聞いていた

「この恐ろしい「トラ」を早く殺してしまえ！！」

為景はそう叫んだと言う
そこで何がおこったのかを知っているのは
隣で酒を飲んでいる実乃だ

何があったのか?
それは家中でも
いつしか「禁忌」になっていた

「トラ」
はその日のうちに林泉寺に出された

何があった?
あの出来事が実乃の自信の「元」になっているハズだが。。。
それについては話してはくれなそうだ

立ち上がった
「直江様。。。直江様はおトラ様に仕えたいとは思わぬかね?」
実乃は引き留めるではない言葉を投げた

「それはこれから見極めねばなりませんな」
背を向けた
謎にはまだ仕えられない。。。
まだ
影トラに「何が」出来るのかさえわからないのだから
少し笑って

徳利をもって部屋をでた

疲れをいやす最大の「ご馳走」は風呂だった
栃尾の宝湯

「ありがたい。。。」

私は急にあわただしくなった自分の身の回りや
昨日までの出来事を思い浮かべていた

星が高く空に見える夜だ
ココで私は兄を助け生きていくのだ

その3　栃尾城（1）（後書き）

本庄実乃（ほんじょうじつの）の名前は
「さねより」
というふうに読む方もいらっしゃるようですが
ココでは「じつの」でいこうと思ってます

影トラのおとーさんの時からの直臣で
トラの子供の頃からを見ていて
その器量を「良し」として
栃尾にお迎えしたそうです

ちょっと
でも。。。

タヌキオヤジっぽいとこもありそな人ですよね～

などと思いながら
火星は実乃は丸顔だっにちがいないなどとも断定してます（爆）
きっと
頭蓋骨もまん丸だった人と信じてます

根拠はないですけどね

その3　栃尾城（2）

「ジーン！！！」
響く
天井の高い蒸し風呂だ

「ジーン！！！」
大きな声を出さなくたって良く聞こえてそうだ

「何？」
あわてて走ってきたジンが
蒸し風呂の戸口で答えた

「一緒にはいろう！！背中をながしてくれ！！」
実は前日の野武士との果たし合いでかぶった「血」がまだキレイにぬぐえていなくて
髪もゴワゴワ
顔もベタベタの状態だった

食事の支度をさせてくれた
実乃は
顔を見て察してくれたのか
この大変な時に「風呂」の支度も調えてくれたいた

なんともありがたいことだ

「一緒に？」
素っ頓狂な声がかえってきた
「おうよ！」

「一緒にか？」
戸口に立ったままもう一度同じ事を答えたジンに
「寺にいた頃のように一緒にだ！」
私は久しぶりに，のびのびした気持ちだった

寺にいた頃
十歳を越えたあたりから
ジンや他の修行僧と風呂に入る事はなくなった
というか
別室で「たらい」に入る生活になっていた

湯を浴びられるのは贅沢な事だ

贅沢な事をしているのだから
それに文句を言うものではないのだけど。。。。

修練の後
仲間たちと背中を流しあっていた時の事を思うと寂しかった

もちろん
その頃
私の身体には「変化」が出始めていて。。。

なんとなくそれが「原因」になっている事はわかってはいたが
それでも
共に風呂に入れない事は
何か「欠けて」しまった気持ちにさせていた

十歳の私には「迷い」がたくさんあった。。。
あったなぁ。。。
そんな事を思い出しながら

今も
「迷って」ばっかだ。。と
一人はにかんだ
頑張らねば。。。

それにしても遅いジンを
もう一度大声を響かせて呼んだ

「おい!!早く入れよ!!」

しばらく
戸口でゴソゴソとしていたジンが
褌一枚で入ってきた

「ひろいな。。」
「広いだろ!」

暗い岩室の上の方が
意図的にか，抜かれていて「夜空」が見える
空を見ながら
いそいそとジンは湯につかった

栃尾の宝
温泉は身体にも心にも優しい湯だった

「ジン。。。。。」

何故か顔をこっちに向けないジンの顔を覗き込んだ

「ジン。。。何かいるのか？」
「いや。。まあ。。」
顔の向いている方を見るが。。何もいない
「静かな夜もいいなぁって。。。。。」
何かぎこちない

どうした？
いぶかしく思ったが
情緒を楽しむというものもあるだろうと思い
少し，湯に浮かんだ

上がって
「さあ！！流してくれ！！」
と呼んだ
ジンはゆっくりあがってくると
背中を流してくれた
やはり大きな手だ。。。
だが流し方は優しい

「よし!!次は私がしよう!!」
向き直って桶を用意した

ジンの背中。。。。。
大きな背中だ
「ジン。。。また背が高くなっただろ?」
「そうか?」
湯で流しながら
その身体をしげしげと見た
腕も,足も
何もかもが,がっしりしたジンの身体は修行だけで作られたとは思えないほど
立派なものだった

羨ましい
私ももっと立派な身体になりたい
そんな決意を言った

「私もがんばって大きくになるぞ」
拳に力をこめて

ジンはおちゃらけて返した
「トラは兵法をがんばった方がいいんじゃねーの?」
「ぬかせ!!それは十分に学んでいるさ!!」

心がはずんだ
こうやって仲間たちと修練をつみ
語り合った日の事を思い出した

ジンの前に回って言った
「明日からはもっと学ぶぞ「禅」も「武」も！！」

ジンは顔を真っ赤にしながら言った
「もちろん。。。がんばろう。。」
「覇気がないぞ！！」
そう言うと肩を組んだ

いい夜だ！！

私はこれからくる「苦難」にたいする備えに邁進する事を誓った

だが
これから訪れる苦難は私の想像を遙かに上回ってゆく事になった
今日のような平穏な日は。。。。

もう
訪れないかのように。。。。

その4　陣江（1）

「ジーン！！」
名を呼ぶ声に「陣江」は慌てて走っていた

栃尾城についた日
ジンは食事を一緒にはとらず
一人色々と散策していた
険しい山の上に位置するこの城の事を誰よりも早く知っておくためだった
山頂から見た市井の明かりは寂しい光だった
あの光の下に人々はどんなふうに暮らすのだろう？
孤児であった自分もあの中にいた。。。
そんな思いも募った

もどって板場でにぎりめしをもらって
一息ついたところに「トラ」の声が聞こえたのだ
山城でそれほど広くもない
屋敷の中にもよく響く

岩室の風呂場に続く階段を下り出入り口について
「何？」と聞き返した
「一緒にはいろう！！背中をながしてくれ！！」
トラの元気な声が聞こえた

ジンは考えこんでしまって
うわずった声で答えた
「一緒に？」

「おうよ!!」
即答。。。。

ためらった
トラの「身体」はもう見ればわかる
あれは「女」の身体だ

そして
その事は光育から。。。寺の誰よりもいち早く聞かされていた
もちろん聞かされるまでもなく
「雨」の出来事以来ジンは「女」である事をよく知っていた
だけど。。。

「ジン。。今は唯一オマエだけが「トラ」の中身を知る者だ。。それを容易に外に出してはいけない。。。だからトラを守れ。。。どんな事があっても「怒り」に逸らせてはいけない」

寺にいた時
初めてトラとあった日の夜。。。「雨」

トラが寺から逃げてしまった時の事を思い出した。。。
「ただの男?」
そう聞き返した「虎千代」

今は見えない「影」と

「真実」

忘れては行けない事。。。。

しばし没頭した思考から頭をあげてわざとらしく
もう一度聞き返した
「一緒にか？」
「寺にいた頃のように一緒にだ！！」

ジンの心配など何処吹く風の返事

林泉寺
十歳になった頃から
トラは一緒に風呂にはいる事はなくなった
仲間達は
それは単純に「区別」であると思った
「長尾」の家の者であるから
自分たち「修行僧」と「分けられた」と

が。。。。

実際は違った
トラの身体に変化がおこり一緒する事ができなくなったのだ
その報告をしたのはジンだった

それほど長くトラを見てきていた

しかし
一方でそれほどに自分の周り

自分の身体に注意が払われている事に
トラ本人には変化がなかった
むしろ変わらず共に修練に精を出した

「良い」

成長によって「心」が変わってしまうのでは?
と心配していた光育は「何事もなかった」事を喜んだ

喜んで言った

「このまま御仏の道を。。。ジンオマエ達とともに真っ直ぐに進んで行って欲しい。。。」
と
頭を撫でてくれた事を
手の温かさを思い出した

ジンは孤児だった頃を光育に拾われたらしい。。。
よく覚えていないのだ
だが晴れる事のない
イライラした感情で寺の生活を送っていた

それは
林泉寺が武士の「長尾家」に保護された寺社であった事に起因していた

一緒に寺への奉仕に入った「兄弟」たち
と
言っても。。。。誰が誰と兄弟なのか?親は誰なのかさえわからない浮浪の子たちの中
年長の者から聞かされた言葉

「侍に父母は殺されたのに侍の庇護の元ココで暮らしている」

寺での生活に。。。不満はなかった
でも。。。。自分たちが山野に焼き出された原因の「争い」の元に保護されている事に
長くジンは苛立ちを持ち続けていた

そんな中
初めて「トラ」に会ったとき目が覚めた
サラサラの髪，白い肌に大きな瞳
それまでは
焼け出された大地を彷徨う原因を作った武士の子
「君主」たる長尾の家のトラ

口を聞いた訳じゃなかった
中身を知ったわけでもなかった
なのに
「トラ」の近くに「生涯」いたいと思った
小さな手を引かれ惣門をくぐってきた子供の姿は。。。小さく心細げな動き
そのぐらい「儚げ」だった稚児のトラ

想いは募り
トラと過ごした日々でついにジンは光育に頼んだ

「オレは長尾のトラ様に仕えたい」

「真実」に則し
光育は願いを聞いてくれた
形はどうであれ
トラの近くにいるために「武術」を学び「兵法」も身につけた
ただの「修行僧」ではなかった
半分を寺で過ごし
半分を田畑と「武士」の修練にあて
過ごした日々
そうして作り上げた「ジン」の身体はまさに「武人」の身体だった

それにしても。。。
まいった。。。

着物に手をかけながらも悩んだ
今更になってトラと一緒に風呂に入る事になるなど思ってもいなかった
僧である自分にとって「女」はもっとも遠い存在まはずなのに
相反して近い

でもって風呂だ
自分で自分の顔を二度ほど叩いた

「しっかりしろ。。」
股下の
己自身にも言い聞かせ覚悟を決めたとき

「思った以上に鍛えられているな」

不意の声
風呂の戸口，人影に身構えた
うかつだったと思った

「まて。。何もしない」
声は低く抑揚を抑えている
風呂のトラに聞こえないようにか？

声の主はそう言うとすぐに姿を見せた
「直江殿。。。」
それは
このたびの栃尾城までの道を共にした，家臣「直江実綱（なおえさねつな）」だった

。。。。。

何をしている？
何をしていた？

考えがめぐる
トラが「女」と言うことをこの男は「探りに」？

が
直江はあっけなく答えた

「影トラさまの身の上は十分に知っているし。。問題にもしていない」
だが
ジンは構えをとかなかった
緊張を身体に走らせるジンを見て直江少しうなずきながら言った

「こないだの「棒」さばきみごとだった」
答える
「はい。。。」

「ただの修行僧ではあるまい。。」
まだ。。。
まだ。。。
誰がホントの意味で「トラ」の見方なのかわからない
それがはっきりするまで「トラ」を守るのがジンが心に誓った職務

影トラを「良い」と思っていない者が少なからず「越後」にいる事も
光育がもらしていた事は知っていた

「何もしない」
直江は念を押すように言った
真剣なまなざし

「おい！！早くはいれよ！！」
戸口前の緊張をよそにトラの呼ぶ声が聞こえた

直江は足先を下げた
「また話をしよう」
うなずいた
ココで騒ぎをおこしたくない。。。

「後でお会いしたいが」
「承知した」

そう言うと静かに岩室から出て行った

ジンの目は闇を追い直江の気配が離れるまで警戒を解く事はなかった

その４　陣江（２）

風呂から上がったジンは夜風がまだ厳しい城壁の一角にある木下で
「禅」を組んでいた
が
「禅」を組むとは名ばかりで
頭の中では「トラ」を取り巻く出来事と人々の事を考えていた
必要最小限の事は光育が日頃零していた言葉から推測はしていた
が

。。。。。
先ほどの「直江殿」との問答が気になった
「影トラさまの身の上は十分に知っている」
。。。。
という事は
長尾の家臣は「トラ」が女だと言う事は知っている

そもそも
秘密にされていた事ではなかったみたいだし。。
でも
だとすれば
何故「女」のトラは「元服」した？
そしてこの栃尾に「長尾」の旗を持ってきた？

何故「武士（もののふ）」なのだ？

「考えてはいけない。。。。」
目を開けて
頭をかいた。。。。
そんな事がなくたって自分は「トラ」の行く先に付いてきていたし
これからだってそうしていく。。。

少なくとも自分は「トラ」が林泉寺に来た頃から
生き方をその「中身」を理解し従っていると信じている
その気持ちでココまでやってきたのだ

「よろしいか？」
少しの風の中
目の前に直江が徳利を持って立っていた
緊張が走ったが
がそれを見破られまいと
はだけた作務衣の襟を大げさに引き寄せて言った
「夜はまだ寒いですな」

「武術はどこで身につけた？」

直江は躊躇する事なく確信に近づくための話をつづけた
ジンの目に映る「直江殿」は「剛将」という言葉そのままの人間だった
背は「やたろー」より少し低いぐらい
それでもあの大男よりその存在を大きく見せる「威厳」をもっていた
顎に蓄えた髭と，強固な意志を表す太い眉毛
おでこと，右頬に刀傷
こげ茶の直垂（ひれたれ）を着ていたが
ジンと同じく着崩した感じでゆったりしていた
亡き親方様の代から戦い続けた「戦人」（いくさにん）

すぐにわかった
嘘はダメだ
この武士（もののふ）に「嘘」は通用しない
たかが十七歳の自分に，この男を騙せる通りがない

素直に
質問に答えた
「寺の裏の畑で」
「畑？」
直江は少し首をかしげて
「いや。。。誰に習ったのか？」

ジンはほぼ独学で武術を身につけた事を話した

もともとは見よう見まねだったのだが
そのうち
総構えの町で出入りする武芸者に少しづつ習っていった
同時に町を歩く「無頼」の輩を相手に実践もしていった事

「寺ではあんな武芸教えてくれませんから。。」

そこまで話たところで直江はジンの横に
どっかりと座った

「いやいやなかなかに実践的だった。。すぐにも戦場(いくさば)に出られそうだ」

「トラはどうして元服したんですか」
素直に聞いた
どんなに「真実」を知っていても
いや
知っているからこそジンにはトラの「元服」は理不尽にも思えていた事だった

嘘を言わなかったのだから
少しぐらいは自分の疑問にも答えて欲しくなった

「長尾の家のため」

直江は
簡潔な答えを返してきた
「今はそれしかわからん」

これまた剛将とは思えないほどの素直な答えを返した

ジンは。。。
家のためにココに送られたトラの事を思ってこぼした

「女の子なのに。。。。」

「一緒に風呂に入ったくせに何をいまさら」
向き直ってしまった
直江はニヤリとしていた

ジンは一瞬のゆるみで出てしまった一言に赤面した
しまった
しまった!!

「あああっあれは。。。その。。。あの。。。」
しどろもどろになってしまったジンの肩を直江は押さえて言った

「気にしておらんよ」
「いやあぁぁ。。。そそそっそういう事ではなくってその。。」
「落ち着きなされ」

自分の中に裸の「トラ」を思い浮かべてしまった事をみすかされた。
。
頭をかきむしった
煩悩が。。。煩悩が。。。
グルグル廻る
ついさっき「トラ」と風呂に入ったばかりだった

城内の者の手前
坊主であるから「女」と一緒には入れない。。
などと声をだすわけにもいかず。。。

いやいや
それが言い訳だ

目を閉じなく立って浮かんでしまう

あの背中，肩，首筋。。。細くて繊細な部分
正面を向いた時に見てしまった
ほんのりと，ふっくらし始めた乳房。。。
実際，褌をしていた事で「己」を見せずにすんだのが救いだったし
トラも褌をしていてくれたおかげで。。。

沈痛。。。。
頭を抱えて顔を隠した
耳まで真っ赤なジンに

「僧というよりは武人だな。。。」
と
より落ち着きはらった直江は言った

まだ顔をあげる事ができないジンをよそに続けた

「これからも影トラさまの近くにいるのか？」
そこは妥協できない
顔をあげて言った

「ずっといます！守ります！」

「だが煩悩は捨てねば」
厳しい言葉だった
そういう目で「女」としてトラを見ることは許されない
わかっている。。。
真っ赤な顔のまま
「守るために来たのです！」
半分は自分に言い聞かせた

そうだ「主君」たるトラに「恋」などしていいわけがないのだ
師，光育にも昔。。。初めてであったトラに仕えたいと言った時に
念を押されていた事だ
「辛い事になるやもしれんぞ」

直江の顔が悲しそうだった

ジンは胸に手を当てていった
「それでも近くにいる事ができます」
その顔はしずかで。。。悲しい顔になっていた
もう一度
自分に言い聞かすように言った
「この命を賭けて守ります」

直江は夜空を見ながら言った
「影から支える者としてか。。。」
「はい」

「トラを支える。。。。猿でいいですわ。。」

苦笑いをしながら言った
肩をそっと直江がたたいた

「名前を」
何か気持ちを察してもらった感じだったが改めて
「陣江です」
とはっきりと答えた

「名字は？」
孤児だったジンには名字がなかった
「陣江」という名前だって光育につけてもらったものだ
「ありません」

「では「加当（かとう）」と名乗るはどうだろう」
肩をもうひと叩きして
「長尾に使える者が名字を名乗らんわけにいかんだろ！」

ぽかんとしてしまって
実感がわかなかった
直江は続けた

「影トラさまに使える武人「加当陣江（かとうじんえ）」。。。どうだ？」
長尾家家臣中の家臣である直江実綱に認められた証だった

「ありがたく，その名を頂きます！！」

そういって頭を下げた
「これからもよりいっそう影トラさまの力になってくれ」
そういうと酒をさしだした
「命名の祝いだ飲もう！！」

この日，ジンは初めて酒を心地よく飲んだ
そして
ひっそりとだが

名を得たことでよりいっそう「トラ」の近くにいられる事を喜んだ

その４　陣江（２）（後書き）

恋愛を書くつもりはないのですが。。。。
やっぱり
すでにして「史実」からは逸脱してしまっているわけですから
それなりにイベントも必要でしょう
いや
いらないって方もいらっしゃるでしょうが
それは勘弁してやってください
楽しくないと続けられない性なので（私が）

とりえずココまでの人物で

長尾景虎（トラ）のちの上杉謙信
加藤陣江（ジン）
小嶋弥太郎（やたろー）
直江実綱
本庄実乃

などが出てきましたが
歴史物にありがちな「大所帯」になっていくので
後書きのページなどを使って
人物表などもたまに書いていこうと思ってます

もちろん進行の支障のない程度に。。。。

なかなかままなりませんが
優しい目でよろしくお願いします

その5　朝焼け

栃尾城にやって来てすぐに色々な事が起こった
私がココに来たことを見透かしていたというように
いわゆる「挑発」というのが

門前に
何本もの「矢」をいかけられていたのは
ココにきた当日の夜
翌朝の出来事だった

それはわかりやすく
何本もいたずらに連ねられていた

次の日には城から見える位置で「焼き討ち」があった
城下より遠くに見える
小高い丘の向こうではあったが
その煙は黒く
その匂いは。。
言い難い
「肉」の焼け爛れる吐き気をもよおすものだった

とても気持ちの悪い出来事。。。
陰鬱な気持ちと

怒りと不安。。。
城の近くで起こる「危機」

続いて三日目の朝
騒がしさに城壁から下を見下ろした

栃尾の城は急な坂をともなう山城だから
下をみれば何がおこっているか？
すぐにわかる

外堀の近くで数人の人だかりができていた
ジンと一緒に急いで降りていくと
槍を担いだやたろーの後に数人の老人とススまみれになった子供たちがいた

「どうした？」
やたろーはいつもの癖でゆっくりとした口調で答えた

「家を焼かれたって。。。」

子供達はみんな泣いている
すぐに解った

「焼き討ち」だ
昨日のか？
胸がざわついた

気持ちがはやる。。。
私が来たことを良く思っていない者たちの仕業だ
何故こんな事を?

栃尾までの道中でも
何度となく
この結果ともいうべき「死」の姿を見てきた

「倅と娘を殺されました。。。」
私より
いくつも小さなからだになってしまった老夫婦が
殴り倒された生々しい怪我を老婆に抑えてもらいながら老人は言った
その目は打ちくぼみ
涙は見えなかった
窶れたその顔は疲労と苦しみで澱んでしまっていた

悲しい黒い色の目だ
泣く子供たちを
やたろーがしゃがんであやした

子供達。。。。
「おかあちゃんが。。。おかあちゃんが。。。。」
口々に親を呼ぶ子供達
中には何もはおらず裸，裸足の子供もいた

幼い少女が私の袖を引いた
指をくわえ何を言うわけでもなく
汚れた顔のまま

きっと
ずっと泣いていたんだ
顔じゅうに涙を流したんだ
その後にススが付きドロドロになってしまっている

なんて事を。。。。

髪をなでた
小さな身体

その目で両親の「死」を見た?。。
泣きはらしたであろう目は空虚だった

心が?
身体が?

何かに締め上げられるような「痛み」が。。。
そして
どこか
どす黒い感覚が。。。

どうしてこんな事が許されるの？

「やたろー中に連れて行くんだ！！飯の支度と湯の用意を！」
城から出てきた侍女たちにも声をかけた
「怪我を見て！子供達を。。」

背中をまるめ
よろよろと歩く老人たちと，子供たちを座敷に連れて行くように言った

こみあげるものは
悲しみ。。。。

いや
悲しみを越え「怒り」がわきあがった
「これが武士（もののふ）のする事か？」

「三条衆（さんじょうしゅう）ですな。。」
いつのまにか隣に実乃が立っていた

むきかえって聞いた
「こんな事がいつも?!」

実乃の顔にも深い悲しみがでていた
そして「苦痛」が眉間に深いシワとなって出ていた

耳に聞いていた事が目の前に現れた

師の言葉がうかんだ
「現世(うつしよ)の事も学ばねば。。。」
こんな
非道の世界をどう学べと?

あの子たちの目を見て「何」をしろと?

「これがこの地の現状です。。。」
もう一度実乃を見た

苦しんでいる?

「長い間，父君為景様が「越後」という国を抑えていらっしゃいました。。。今その枷がはずれそうになっているのです」

「兄が。。。」
言葉につまった

寺にいたときはこんな事，気がつきもしなかった
兄が治世を請け負い
「良く動いている」と信じていた
だけど

現実は違った
それはもう十分すぎるほどわかった

この地は「死」であふれている
死を作り出す者たちが横行している

守護代はそれを止めることがまったく出来ていない

「現守護代様の力は，この中郡（なかごおり）を抑えられていません」
実乃はつづけた
「奴らは「長尾」の力を試しているのです」
「試す？」

心に怒りの炎が揺れる

「栃尾に来た「影トラ様」をどれほどの者と。。。。試しているのです」
「何故？」

実乃は言葉を止めて

屋敷に導かれる
先ほどの子供たちを見ながら

「これ以上あのような子たちを増やさぬように戦わねばなりません」

どす黒い「意志」が渦巻く
私は
父を。。。
まったく憶えていない

やたろー達の罵倒した「非道の戦鬼」とも言われた父は
間違ってはいなかった?
父のした事が正しくてそれを継がなければならない

今「大切」な事は。。。
やらねばならぬ事は。。。

わかっていても。。。

私は落ち込んだ気持ちでいっぱいになり，実乃に背を向け
とぼとぼと城に歩いた

ココに来たことで「守護代，長尾」の旗がたった
なのに争いが止むことはない

「争いたくない」

まだ心が定まっていなかった
「争い」

それは
あまりにも御仏の教えとは違う別世界だ

なのに
私の
心にとぐろを巻く黒い意識は
告げる

「戦え」と

気持ちが悪い！！

額が割れんばかりに痛む
何故に領民を苦しませ
平穏なる「統治」を拒む

何故に長尾を拒み
争いをしかけるか

ドロドロとした意識がいよいよ明確になりはじめている

門をくぐったところで
さきほどの女の子がしゃがんでいた

「これ。。早く屋敷にいきなさい。。」
手を引こうと差し出すと
首を振った

「かか様が来てないの。。。」

涙がこぼれた
まだ
「死」がわからない？

彼女の目が城門の外を見ている
戻らない「母」を待っている

しゃがんで手を引き
その手に合わせるように自分の手を重ねた
「御仏の元に。。。」
不思議そうな顔をする少女
「かか様は。。。」
「浄土に導かれる。。。必ず。。」

背中を押してあげた
「さぁ湯につかって。。顔を綺麗にして。。」

見あげた空は見事な朝焼けだった
涙は止めどなくこぼれた

でも
わかった

私がやらなければならない事が
もはや躊躇などしていてはいけない
現世(うつしよ)で行われている蛮行を止める事が
私の仕事だ

兄の手が届かないのならば
代わってやるしかない

あんな凄惨な光景を
切られるような痛みをだれにも。。。あの幼女にも
二度と味合わせたくない！！

「闇」は来た
心に真っ黒に降り立った

「試す」だと。。。。
その蛮行を！
その卑下したる行いで私。。。試すとは！！

絶対に許さない

私は向き直った
栃尾の家臣たちが立ちが揃い

実乃が待っている

みんな私の言葉をまっていた
そうだ
ココでするべき事
私に科せられた仕事

私は少し笑った
そして静かに言葉を発した

「実乃。。もはや許す事はない！！攻勢にそなえよ！！」

戦おう
争おう
この民草のために
心に誓った

メラメラと燃える「黒い意志」に私は従った

その5　朝焼け（後書き）

毎度
後書きで言い訳してます

とにかく
書きたいという気持ち先行で書いてはいるのですが
やはり
とびとびな部分があったりで
そのたびに「修正」をしています

毎日
一から現状の最後の章までを一通り読みます
修正するために。。。

筋書きあっても足りない事は山ほど。。。
がんばっていきますので
優しい気持ちで見てやってください

修正後の方もヒマがあったら読んでやってください
より「わかりやすく」なっていれば幸いです

その6　初陣（1）

待ってはいけない
自分に言い聞かせた
考えてはいけない
迷いを持ってしまわないために
戦うのだ！！

号令をかけて城に歩きながら言った
「軍議する！支度いたせ！！」

まるでその声を待っていたかのように
栃尾の臣下たちは声をあげた
「ははぁ！！」
みんな顔を紅潮させ

「いくさ人」の構えになっている

「その言葉。。。待っておりました」
実乃も同じく
力のたぎった表情になっている

私は深くうなずいた
「私を試すような事。。。断じて許さん!!」

城の広間に行く前に着替えなければ
これはもう「非常」の事態だ

迷いを消し
領民のために
戦いの矢面に立つことが「長尾守護代家」の最重要任務だ

私は急いで自室にもどった

部屋まえに侍女が三人待っていた

「今日はもうよい」
怒鳴るように言い伏せた
こんな日にかしずかれて，食事をとるなどまっぴらごめんだ

「影トラ様。。」
侍女の一人が静かに言う
いや。。。

侍女じゃない
「直江実綱(なおえさねつな)の妻にございます」

目元優しい女性
直江に妻がいるとは知ってはいたが
無礼な物言いだと思い身を正した

「具足をお持ちしました」

部屋に目を向ける
そういえばココにくる時に，母から送られた品にあった
台座の上
慄然と飾られた「具足」を見た
艶やかな色
朱に青。。。

。。。。。
具足。。。
頭に何かがよぎる
コレは。。。「影」？

何度か
宴や儀礼で着たことはあった?

初めてみるわけではないのだが。。。
いや
今はそんな事を思い直している場合じゃない

しかし。。。自然と遠いまなざしになってしまう
。。。。。
よもや
僧になる事を目指した自分が
自らこれを着る時がくるとは思わなかった

これを纏「戦」の世界に入ってゆくとは。。。
「こちらに」
直江の妻に呼ばれるまま

初めての具足を身につけた
少しづつ
重ねられるように着付けされてゆく

「重い」。。。。

身体が重いという事とはちがった
これが
「戦(いくさ)」に行くという心の重さなのか?
私に科せられた「任」なのか?
。。。。

こんな時なのに。。
いや
きっとこんな時だからこそ

手際よく具足を着けていく侍女たちの
艶やかではなく
質素な着物

細やかな手が
続ける作業に見とれた
それが少しづつ冷静に
ただ激するだけでない「冷徹」な意識を抑え
戦いに燃える心を静めていく

矛盾する
心のせめぎ合いを目を閉じて感じる

私の中にあるこの気持ちはなんだろう
たしかに
烈火のごとくの怒りがある
いや
今はそれでいっぱいだ

なのに
戦いたくない気持ちもある
争いは
人の世の常で
そこから解脱した「世界」が御仏への道だ

そしてもう一つ
これは
林泉寺をでてから
よりいっそう感じるようになった事
「女」という自分

何故。。。。
どうして母は願うほどに，私を寺に入れ
僧としての生活をさせたのか？
なのに
今になって「戦」の中に私は深く入ってゆく

何故
「女」という生き方ではいけなかったのか？

もちろん
私自身がまだ「女」という事を理解しきれてもいない
今までだって
そういうふうに扱われた事がなかったし

ココにきた時もそれは変わらなかった
誰一人として
変化なく
私を「長尾守護代家」の武士として迎え入れている

考える事ではない

つまり「そういう」存在としてココにいる
男であるとか

女であるとかは関係ないのだ

迷いに目を閉じている場合ではない。。。

「軍議の支度できてございます！！」
威勢の良い声が部屋の前から聞こえた

「すぐに行く！！」

そう答えた
「女房殿。。支度が出来たのならば部屋をでてくれまいか」
私の言葉に支度の箱を持ち，直江の妻と侍女は頭をさげ退出した

気持ちをよりいっそう落ち着けねば

静かに数珠に手を通し籠手に巻いて
「禅」を組んだ

「御仏に仕える私が戦う事。。。許したまえ。。。」
「御仏に仕える私の戦いを。。。見守りたまえ。。。」
良いことなのか？
悪しきことなのか？

「私は今より領民を守る者として戦いに赴きます。。どうか御仏のお導きのままに」
一心に祈った

何度も
何度も
民を守り戦う事。。。。血涙の野に降りる事。。血の嵐を起こすこ
と許したまえ。。。。

「戦え」

祈りの間
頭に声が低く響く
「戦え」

聞こえた。。。。
祈り

チリチリとした感じ
眉をひそめる
激情を身にまとう

それは「黒い」感情?
顔をあげ
部屋をでた

私は「いくさ人」で「武士(もののふ)」だ

広間にはすでに諸将たちがならんでいた
「こちらに」
実乃の招きでそのまま上座についた

ココは戦場(いくさば)だ
昨日とは違う顔の男達が座っている

「中郡(なかごおり)の治世をみだしている三条衆(さんじょうしゅう)を討伐する」
私の言葉を男たちが食い入る表情で聞いている

「これ以上，長尾守護代家の影トラを試すこと許さん!!」
言葉とともに怒りが蘇る
あの子供達
あの老人達

私の存在を試し
おもしろ半分に領民を苦しめる者たちを断じて許す事はない

「城の首尾を固めよ!!」
正面に座した実乃が言う
「籠城するのですか?」

「違う」
私はいつになく
いや
まるで別の人格が入ったかのようにしゃべっている

「やつらが欲しいのはこの城を含む栃尾の全て，故にココで死地滅(しちめつ)にしてやる」
きっと笑っている
私の顔は
そして目を見開き諸将の前
身を翻し叫んだ

「この戦で長尾に逆らう者を滅する!!長尾影トラどんな者と高みの見物を決め込む輩の肝を冷やしてやる!!」

男たちの目に「闘志」が宿る

「三条に勝つ事だけが目的ではない!!」
立ち上がった
「守護を軽んじ，領民を顧みぬ者たちに罰を与えるのだ!!」
拳を握り「激」をとばした

栃尾の重臣たちはみな平伏した
「ははぁ!!」

頭痛に近い，もやを感じた
それは「黒い」何かだったが
その痛みは心地よかった

今は前を向くのみだ。。

私の初陣が始まる

その6　初陣（2）

ジンの目の前
城内は瞬く間に「戦（いくさ）」のために景色を変えていった
城主の「激」は絶対だ
緊張はさらに城人をふるわせ
力になり始めている

あんなに「激怒」したトラをみたのはひさしぶりだった
いままでだって何度かそうなった事がある
心配な事態だ

「怒り」をまとってまるで別人のようになるトラ
その姿は同じ人でありながら

別の。。。
何か「鬼」のようなものにも見える

光育（こういく）のジンへの「注意」の中にあった事
「怒り」をまとった時のトラを「良く見て」そして「窘め（たしなめ）」
場合によっては
その身で引き留めることを
だから
いつも近くにいてすぐにでもその「怒り」からの介抱をしなくては
ならなかったのに。。。

朝の事件の時
一緒に門前まで行ったが。。。
立ち止まってしまった
昔の自分がそこに立っていたような錯覚におちいり
心が凍り付いた
ススまみれの子供たちをみた時

そういう存在が今までに「皆無」になったわけじゃない
ココまでくる間だって
そういう「子供達」を見た
自分が孤児になった頃から
もちろん

十分にそういうった事には「慣れた」と思っていた

だけど
目の前で
母の名を呼び泣く子をみたとき
急にあの頃の自分と姿が重なってしまったのだ
呆然としていた

「ジン。。。子供たちをたのむよぉ。。。」

我に返った自分のとなりに

やたろーが立っていた

「オレ。。戦の支度があるから。。」

やたろーとは栃尾に着いた
翌日に色々と身の上を話した
名を「小嶋弥太郎」という
前日の夜に直江から初めて「加当（かとう）」という名字をもらったジンは
少し羨ましかった

もともと「武士（もののふ）」だったやたろーは
このあたりの豪族の元「守護上杉氏」に組みする一派の長（おさ）の子ども
だった

一度は身を落として「盗賊」まがいな事もしていたが
心根優しき，この武人は
トラに仕える事を「誓い」栃尾についたその日から城下の夜警，総
構えの警備など部下を従え参加していた
そしてついに
腕をふるう時がきた事を確信していた

だからか
機敏に動き
戦場（いくさば）に出ようとしている

「待ってオレも支度する！！」
ジンは慌てた
手を渡された子供を置いて
やたろーの方へ走った

やたろーは着いてきたジンに言った
「僧は子供たちの世話をしろよぉ。。」

ジンは僧だが
トラの元，戦う為に来ていると「自負」していたが
「ダメだ。。。子供達を守れよ。。」

真顔でやたろーは向き直った
顔は少し怒ったような感じになっている
確かに「戦(くいさ)」の経験では劣るのかもしれないがそれは「トラ」だって一緒，初陣なのだからだったらそのトラをココ一番で守る事が大事だ

やたろーの中では「僧侶」というのは戦わない存在なのかもしれないが
僧兵だっているこの乱世にそれはない

「オレはトラと共に戦いに来たんだ!!」
そんな事関係ないとばかりに怒鳴った

「僧なのにか?」
「僧だって戦うさ」
怪訝な表情のやたろーの足をけっ飛ばして言った
「早くしろよ!!」

遅れをとるわけにはいかない

そう思って気を引き締めた

山間の物見から栃尾城を伺っていた兵が降りてきた
出で立ちは武士なのだが
その顔は下品に，抜けた歯を隠さず笑っている

「城の方が慌ただしくなってきましたぜ」

複数の男たちは群がって
夜の略奪品を分配していた
「明後日には来ますかね？」
頭（かしら）の男は金品を物色しながら言った
「くるさ。。。」

夜に「焼き討ち」をした事を話している
「殿様に言われてるとおり「警告」してやってんのになぁ。。」
警告などと
さも戦略を持ってきている武士のようにしゃべってはいるが
みな口汚く，不潔な身なりだ

「しけた村でしたからねぇ」
物見をしていた男は仕分けられた略奪品を見ながらつづけた

「あの女を斬らなきゃもっと楽しめたのに」

と，こぼした言葉に
まわりの輩も口々に騒いだ
「ホントだ」
「少しは楽しめたのに」
「ガキをはなさねぇからって叩き斬っちまってぇさぁ～～」

金さえもらえればどんな狼藉だって働く無頼の集団は
浅ましい行為になんのためらいもなかった
そしてこの男たちは「栃尾城」を狙う豪族「三条衆」に雇われて
偵察がてらに「警告」と称した蛮行を好き放題楽しんでいた

「あの城のお子様城主をやっちまえばもっと楽しめるさ」

頭の男は口を広げて舌なめずりをしながらクックと笑った
「明後日は三条のやつらが来る，戦はあいつらにまかせて俺たちは
城付きの女たちをいただく」

男達は顔を見合わせて
「そりゃいい上品な女をたらふく楽しめる!!」
さらに声高に，下品に笑い合った

「びびってにげちまうんじゃないんすか?」
物見の男は言った
「あんだけ脅したんだからなぁ～」

無頼の男達は我が物顔だった
うかつにも程があるぐらいに。。。

ココがすでに栃尾の領内で「敵地」である事などおかまいなく騒いでいた

守護代長尾の力はもう衰え
どうにもならないから
名だけの子供「長尾景虎（ながおかげとら）」を呼びつけて
体裁を整えようとしている

そういうふうに聞かされていたからだ

だから
彼らの話を全部聞いたトラに「同情」などはなかった

この夜に「戦」はすでに始まっていたことに彼らは気がつけなかった
そしてこの輩たちが朝まで
生きている事はなかったのだ

その6　初陣（3）

かがり火に照らされながら
私は静かに状況を見ていた
夜
草木も静まった中
闇の帳の色を纏った男達
音は無い
「栃尾衆」は静かに行動を起こしていた

ほんの少し前
やたろーが城外で「迂闊（うかつ）」にも馬鹿騒ぎをする「輩」を数人捕まえてきた

予想通りの「迂闊」な者たち

私は気がついていた
「試そう」なんてする奴らは絶対に近くにいる
この城と
「私」の様子を絶対に見ていると
「長尾」があわてふためく姿を肴に酒でもものんびりと食らっていたのだろう

軍議の後すぐにやたろーが私の前に来た
このとき
やたろーは素直な男だと痛感した

「オレも前にあんな事をしてたからわかる。。。あいつら近くにいる。」
自分が「盗賊」になっていた事で
相手のする事を理解できると語った

邂逅し反芻する
それが過ちであった事をこれからは「力」に変えていける素直さが彼に
経験から即座に対応する「柔軟さ」を与えている

好ましい
私はやたろーの顔をしっかりと見据えた
目をあわせ心を繋ぐ
「戦」の全てを自分に繋ぐためにも

「では捕まえられるな。。」

やたろーが経験を活かしきれば造作もない事と思考は一致した

「何を知っているか?何と繋がっているか?。。。。何が望みかを知りたい」

私の目が鋭利に研ぎ澄まされていくのが自分でもわかる
頭は鮮明に動いている
寺で習った忍従の心はへ兵法の「冷静」と合致する
基本を守り「敵」の中身を知りたい

やたろーは素直だ
私の心に描かれているものを「感じて」くれていた

「まかせてください。。」

イイ顔だ
戦人(いくさにん)小嶋弥太郎は即座に答えると
数人をつれて「槍」を担いで出て行き

今その捕まった下郎たちは
城内に引き連れられていた

中庭に連れてこられた下郎を囲むように兵と
実乃，直江たちが立った

「オレたちは。。。」

捕縛され数名の様子から
大半は斬り殺された事を用意に想像できた
まともな面持ちの者は一人もいなかった
殴り倒され歯をうしなった者も多く見受けられた

浴びるような「血」をかぶり惨憺たる状態になり怯えた表情で引きずられてきた

私は前に座った
篝火は揺れる
私の心の「怒り」を反映するかのように少しの風に揺れ
天を撃つかのように弾ける

この無頼の輩たちは
昨日の
あの子たちの母を殺し略奪をした
しかも
それを楽しんだ連中だ

顔をしかめ嫌悪感を表に
無様な下郎たちを見回した

おおかたの尋問はすませてあった
明日
三条の兵がどこからくるのか？
どう動くのか

金で雇われた
はぐれ者立ちは命惜しさにベラベラとしゃべった

「もういいだろぉ！！全部しゃべったぜ！！」

沈黙の間にたえきれなかった男が叫んだ

灯籠の火が風に揺れる
私の顔はどんな風になっているの？
。。。。。

盗賊はおとなしくしているが
逃げ出したい
という態度はありありだ

「一つ。。。聞きたい事がある」

縄にかかった男たちの前に私は努めて静かに聞いた
下郎たちは
私の姿を見て気の抜けた表情になった

そうか
まだ私は笑っていないのだな。。。と思った

「なんだよ！」
大男や直江たちに詰問されるよりは「容易く」感じたのだろう
粋がった大声で質問に答えた

「焼き討ちはもとより。。。どうして罪なき百姓を斬ったのだ？」
それが私の一番聞きたかった事

男たちは顔を見合わせて
悪びれる様子もなく
さも「当たり前」だったといわんばかりに答えた

「そうしろって言われたから」

身体が
ざわつく

「いわれたままに命乞いも聞なかったという事だな?」

私は自分の口から「命乞い」などとは言ったが内心は吐き気のする
質疑だった
そもそも
何故百姓が命乞いしなくちゃならない
そこに
暮らしていたのに

当たり前に生きてきた土地に「侵略」してきた者たち
命を「乞わねば」ならん。。。

他人の土地なら何をやっても良いのか?
私は睨んだ顔に
へでもないと言う態度で答える

「おれたちだって全部殺したわけじゃね〜よ」
間の抜けた返答
悪態。。。。
「子供や年寄りは助けてやったし」

助けて。。。やっただと。。。。

心が尖る
すでに周りを囲んでいる武士たちにも怒りが蔓延し始めている

「言うことさえ聞けば殺さずにすんだ「女」だっていた」

それが良心か？

悪態を。。。。
薄ら笑いを浮かべながら

よくも平気で

「残された子供たちの事は考えなかったのか！！」
肩が震えた
「侵略してきたオマエたちの言うことを聞いて生きろだと！！！」

「正常に」動く心が怒りを溢れさせて怒鳴った

「何いってんだよ姫さん」
馬鹿にした顔
私の激さえも
おふざけだとおもっているのか？

脳裏に昨日の幼女が写る

。。。。。

「かか様が。。来ないの」
あの目を
あの姿を。。。。

頼りなさげなあの声を。。。

どうしてあげる事もできなかった
あんな小さな子供達が親を祖父母を目の前で失ってしまった事が

奪い取った事が。。。。。

それほどに。。。。

頭の中から痺れが走った

「それで？」
まるで悪びれる事のない者たち

怒りは絶頂からさらなる高みに向かって闇を呼んできた

姿勢を正した
怒鳴り散らして自分を乱れさせる事が無駄とわかったから

こんな事に。。。。理由などなかったのだ

反省も
思いやりも。。。。
あるはずなどなかった

ただこいつらは己の欲を満たしたかっただけだ

少しでも何かしらの理由を求めた私がおろかだった事に。。。。。
笑いがこみ上げた
わざわざ下郎どもと問答する必要などなかったのだ

息をついた
そして聞いた

「最後の質問だ。。。オマエの信心する仏はいるのか?」

私は刀を抜いた
その刃を下郎の鼻先に突きつけて言葉を失っている歯抜けにもう一度聞いた

「オマエを「加護」する仏はいるのかと聞いている」

闇の帳から光を求め
篝火の炎に身を晒した「蛾」はあっけなく燃え落ちた

怯えた瞳が見える
私は笑っていた声はなくただ静かに笑みを浮かべて
この小汚い男たちの命などに価値を見いだせなかったことに「喜び」を感じた

「わ。。。わしの仏は」

汚らしい歯並びから歯がこぼれ落ちるのではないか？
それほどに男は震えている
刀を振りかぶった
「祈れ。。。。早く。。。。」

「ひっひっ！！命は助けるから「目的」を言った！！約束を守って。。。」

汚らわしい。。。。
見苦しく縛り上げられた手足をばたつかせる
心と体に熱くどす黒い感情が渦巻く
闇の意識が私を覆う

なのに
顔は穏やかに笑っている

「だから祈れ。。。オマエの仏が私の剣をへし折ってくれるように！！」

しなやかに刃は滑り降り下郎の首は爆ぜ飛んだ
やっとこの汚らしい男の声が消えたことに安らぎを感じながら手を挙げた

「漆黒」の感情が濁流のように心を満たす

目を見開いた

口元を震わし
呆然と首無しになった仲間を見る
卑下たる者たちの前静かに笑って言った

「私が長尾影トラだ」

静かに冷ややかに見下して
名乗った

その言葉に男たちはたじろいた
すでに
実乃や兵たちの刀は抜かれている
みな落ち着きはつゆほどにもなくなっていた

「影トラ?。。」
顔を見合わせる

「子供でもわかる人の道理を介さないオマエたちに生きる道はいらないだろう」
私は「冷静」に
そして湧き上がる「怒り」で淡々と命を下した

「斬れ」

下郎たちは品のない「命乞い」をしながら
みな斬られた

事の次第をおえた
実乃はすぐに死体を片付けさせた
「明日に備えましょう」

私はただうなずいた

燃える怒り
静かに
このまま明日を戦う

十分に怒りは暖められたと満足した

屋敷に戻る道の途中
門の外でやたろーとジンがしゃがみ込んで何かをしていた
「どうした」

大きな手で何かを仕分けてボロ布で拭いている
「あいつらが持って行ったの。。。取り返した。。」
それは
略奪品だった
「キレイにしてかえしてやる。。」

木で作った小さな「櫛」

返す。。。「何を返す?」
心が唸る

それで
あの子たちの母が帰ってくるわけではない

憎悪は棚にあげ
ただ答えた
「そうしてやってくれ」
こみ上げるもの
見え隠れする「黒い」感情で
共にそれをしてあげられる余裕はなかった

私は戻って自室にこもった

「御仏よ。。。」
「御仏よ。。。」
何度も祈った
目を閉じる
脳裏に「影」が写る。。。
「御仏よ。。。。。」

これが迷い？
いや迷わない！！

敵を討ち滅ぼす強さを
私は戦う
私は戦う

「戦う」

理不尽な侵略をする者を絶対に許さない！！

その6　初陣（3）（後書き）

残酷と聞いてでいくるのは「シグルイ」（爆）
む～～ざん！む～～ざん！
イイ表現だなぁ（藁）

でもやっぱり真理であったりもする
好きこのんで
そんな描写をしたいわけではないけど
小説という産物の中で。。。

背中に哀愁とか
目で落とす
とか。。。

なかなか若輩な私にはできないような。。。

でも
次回から
戦（いくさ）になります
残酷な描写もあります事でしょう

そのあたりはみなさまもご理解ください
明日はがんばって書きます
ライブ執筆（藁）

その6　初陣（4）

白い靄の下
しずかな朝を待つ

でも
これは今までの朝とは違う
寺にあった
あの静寂とは違う
緊張を持った朝がやってくる

夜が白く霞んでゆくまでの間
私の目は冴え
眠らず

この「戦（いくさ）」を組み立てていった

祈るように
願うように

繰り返し繰り返し考えた

たやすい戦だ
勝ちを意識している者たちは
常に「うかつ」だ
あの斬り捨てた下郎たちのように

だが
私は絶対に油断しない
敵のうかつさの見誤りはしない
普段以上
さらに何十倍も上を行く「慎重」さで

下品な笑いを持ったヤツらをココから生きて返さない
だから
徹底的な策を巡らせる

冷めない
頭がパチパチとした痛みを発していても
自分の責務のために
今日を戦うと決めている

ジンを近くに寄せなかった
これは「長尾守護代家」の戦い
この「戦(いくさ)」を皮切りに

私はもう「僧」には戻れない
だから
祈りながらも「戦う」「将」になる
私が達することの出来なかった
御仏の世界はジンに託そう

そう決めた

だから
ジンを戦には絶対にださない

仏間に入る前まで
共に戦うと声をあげたが
イヤダ。。。
ダメだよ

こんなどす黒い感情に染まってしまって欲しくない

殺生道には私が行く
ジンは子供たちを守ってくれと
城内に閉じこめた

私が「戦う」
それが長尾家に産まれた私の勤めだ

夜はまだ過ぎない
夜と
朝の間に。。。。

奴らはやってくる

「来ました」
黒紺の鎧をまとった実乃の声が
熱気を帯びたいくさ人の声を
低く静かにして私に伝えた

仏間から
ゆっくり向き直った

私の中の何かが切り替わった

「よし。。」

城内は静まりかえっているが
寝ている者は一人もいない

明け方
真正面から
三条の族たちはココにくる
それを待ちかまえていた

城下を見ると
すぐ手前まで「賊軍」たちは，きている
馬の声
人の声
足音
甲冑の響き

その呼吸さえ聞き取れるほどの距離に感じる
でも
まだだ

「申し上げます。。三条勢二千，城に向かって進軍しております。。」
物見も低く，小さく告げる
「うむ」
だんだん意識が研ぎ澄まされていく

私はゆっくりと前線に向かう
気持ちを高めるために，じっくりと歩く

何もかもを寝静まったように「静かに」事を見守る
城内の武士（もののふ）たち
息も密やかな戦闘集団
その間を
毅然と真っ直ぐ歩いてゆく

もっと
引きつけろ

もっと

食いついてこい！

昨日の夜
下郎どもから得た情報で
敵が朝方
この城に強襲をかける事はわかっていた

奴らの
雇ったはずの
下郎は帰らなかったハズだ

それでも

馬鹿正直にココに来た「賊軍」
それがすでに「マヌケ」というのだ

意気揚々とこの城を落としに来た奴ら

私のような
若輩者に「負ける」ハズがないと思いこんでいるのだろう
あまりに
甘甘な進軍だ

嘘はすぐに人づてに流れる
たかだか
1日の間に
流した「流言」に奴らは騙されてやってきた
やたろーの配下を使い
「栃尾城の長尾影トラは逃げようと準備している」
と
三条よりの兵たちに匂わせておいた
もともと
今日栃尾を攻めようと思っていた輩たちは小躍りしてやってきたに違いない

堂々と正面から。。。。

「十分に引きつけろ」
横を共に歩く
実乃に伝える
すぐに
諸将に伝達する

緊張の面持ちの城人の間をさらにゆっくりと進む
胸をはり
堂々と
みな私の指揮を待っている

城内で
一番見晴らしの良い
石垣の櫓（やぐら）まで

呼吸は高くなっていたが
恐れてはいない

脳裏に「黒い意識」がうごめく

心が切り替わるように現れる
「漆黒の影」
それを怒りとともにまとった私は
むしろ
「楽しんでいる」
そしてヤツらを見下している

ココまで「虚け（うつけ）」な者を「武士（もののふ）」と思わない

櫓（やぐら）から
先頭をいく武者を見た
あきらかに「勝ち馬」に乗った気分だろう
顎を上に突き出し
頬あてもつけていない

まだ遠い

でも
来る
そう思った時
先頭の男は刀を抜き振りかざした

と，同時に
鬨の声（ときのこえ）が上がる

罵声の混じった大声が静かだった城内響き渡り「戦」の始まりをしらせた！！

怒号の中
先頭の男が言った

「長尾影トラ！！その素っ首もらい受けに来たぞ！！」

聞こえるわ。。。

ああっ
ああっ
きこえておるわ！！！

その卑下たる声が
遠くにいるその顔まで浮かんで見えるわ。。

私は諸将に櫓から向き直り指揮する
「よし！！敵を城門近くまで引きつけろ！！滅殺する！！」

突進してくる
三条勢の声と音にまぎれ
城内は一気に臨戦態勢に入る
「いいか!!城門下まできたら迎え撃つ!!」
実乃の声も飛ぶ
栃尾衆に殺気が伝播する

第一の矢が空を舞って降ってくる
戸板を立てて応戦する

城内の弓隊を指揮する直江に言う
「まだだ!!」
鏃(やじり)に火をかけ
じりじりと迫る敵を待つ

第二波の矢が降るが
いよいよ恐れるに足らずだ
名は体を表すとは良く言ったモノだ

勝ち戦に本気の者がいないように
ゆらりと力無く舞う矢に人は射殺せはしない

ふわふわと漂いバラバラと落ちるやる気のない「殺意」

そんなふうにしか見えない

走る
櫓（やぐら）の外に出る
敵が矢を射かける
私めがけて

あたらない
あたるわけがない

浮かれるにもほどがある！！
私は絶対に笑っている
力をたぎらせ
その時を待つ

「城門下まで来ました！！！」
「よし！！！」

きたれり！！
きたれり！！

殺意が躍る！！

弓隊を見て

手を高くあげて
一気に
振り下ろす

「はなて！！！」
空にみごとな軌跡を描き火矢が舞う

城壁の向こうから飛びだしてきた矢は
突進してくる三条衆の目に
滝を描くように降り注ぐ

城門ギリギリまでに迫った兵たちは一瞬にして崩れた
馬も
人も

あっけなく倒れる
火をつがえた矢の前に悶絶し
打たれた身体を崩していく

馬は暴れ火だるまの背から
さらにのど元に矢を刺された死体が跳ね飛ぶ

うかつな集団は言葉をなくし
混乱の中，谷間に転落していく

私は城内
石垣の真正面にたち
指揮する男を見た

驚きに馬から転げ落ちそうになっている

名前があろうが
なかろうが
名乗ろうが

容赦はしない
もう一度手をあげて言った
「かかれ！！！」

城を揺らすような栃尾衆の声が朝焼けに変わりゆく空に響く
栃尾城開戦

その6　初陣（5）

あきらかに異質の怒号
三条衆が先ほどあげた
ときのこえなど
まるで子供の「駄々」のようだ

統制のとれた
火矢は3回，5回と
途切れることも
乱れる事もなく繰り返しはなたれた

それは美しい程の軌跡を描いて
「死」をお見舞いしていった

寝静まっていると
信じ
油断していた敵は

山城の門下まで「勝ち馬」で突き進んでしまっていた
いきなり戻る事など不可能だ

兵卒たちは次々と倒され

馬は嘶き
あっという間に「混乱」状態になる「賊軍」

「開門！！開門！！」
私の激に出番をまっていた
武士（もののふ）たちがさらに声をあげる
男たちは槍を持ち
拳を挙げる！！

もはや
城の門が開かれたからといって
突進してこられる「敵兵」などいなかった
ただ恐れ我先にと
逃げまどう

烏合の衆

先ほどまでの「揚々」な気持ちなど微塵も残っていない

無惨に転がる屍たち
息も絶え絶えの者たち

火矢に焼かれた者
刺された者
馬に跳ねられた者
落とされた者

その馬に
踏み砕かれた者

どれも
これもで
恐怖で引きつった顔が天を仰いでいる

助けを待っている?

それは「哀願」なのか?
願いなのか?
私は首をかしげて見せた
「黒い意識」の思うままに

何をいまさら!

弱った自分たちを晒したからといって何が変わる?
だから
助けて?と?

「否」

手をゆるめるようなまねはしない
指揮を出す

長槍隊が門内から
前進する
整然と
隊列を成し

瀕死の状態で近く這う彼らにとってどんな恐怖だった事か?
槍襖(やりぶすま)はジリジリと目の前に迫っていく

「恐ろしかろう?」
笑みを浮かべ
一人つぶやいてみた

容赦はしないし
許しもしない

私の
この怒りと

人生最後の恐怖を

心の底まで焼き付けて「死ね」

死んでいくがイイ

「進め！！総構えまで一気に押し戻せ！！」
私の指揮に
実乃を中心とした
一隊が猛然と走り出す

怒濤の攻勢だ

山城の坂に馬はいらない
むしろ
それを追い立ててやればイイ

細道を転がり落ちる馬たち
その馬に上から押しつぶされ無様につぶれた肉塊の「兵」たち
仕寄りに火をかけ転がせ！！
栃尾城の大手道は
大手とはいえ切り立った崖に面している
ちょっと突いてやれば

後は落ちてゆく一方だ

次々と息の根を絶たれていく敵兵
ついに後方にいた
一隊が後退を始めた
身振り手振りで大きく声をあげる将

「引け!!引け!!一度城下の本隊まで引くのだ!!」

引く事に死にものぐるいになっている

笑わすな!!
引けど
逃がす事などない

石垣の端に立つ私に
「影トラ様!敵が後退します」
若い物見が報告にきた

私の顔は笑っているのか?

物見は少しおどおどした感じで
顔を見ながら告げた

「問題ない城下までドンドン押せ！押しつぶせ！！」
そして城内に残った直江隊に
「掃討」を命じる

「城外の山中に残る三条衆を戦(いくさ)の「作法」に従って「トドメ」を与えよ」

この山に
卑下たる思いを持って
上がってきた者を一人として生かしておかない！

坂を滑り落ちるように必死に
後退する三条衆

城下でそれを見ていた三条の将の目は「驚愕」だった事だろう
まだ自分が
敵前にいないにもかかわらず
その姿，あわてふためきようは

滑稽だった

山に登ってきた「輩」たちはほぼ城下に押し戻された
無事に戻れた者などいない
みんな
血を吐き，流しへたり込む

掃討を指揮する
直江から
「三条衆は城下まで押し戻されました」
と
報告が入った

私は
悠然と石垣の端まで歩き
物見に言った

「のろしを上げろ！貝を鳴らせ！！」

そして
そこから城下の三条衆本隊を指さして言った
「さあ！ココで死地(しちめつ)滅にしてくれよう！！」

仕上げだ
お前達ふさわしい死を与えよう

その6　初陣（6）

のろしは上がり
ホラ貝が城の各所から一斉に鳴らされた

城下にへたり込みまだ息も整えることのできない兵たちは
焦りの表情を見合わせる
もはや攻勢はまったく逆転してしまっているのだから

それ以上に
三条の諸将はうろたえている
馬を走らせ怒鳴る
「立て！！陣を組み直せ！！」

どれほど叱咤しても
一度「恐怖」を味わってしまった
兵卒たちはすぐに自分たちを持ち直すことができない状態だ
ましてや
山道を我先にと逃げてきた
彼らは満身創痍のうえ

なによりもの驚きは

まさに
まさに
よもやの強襲を「電光石火」で受けてしまった事だ

苛立ちをいっぱいに込めた声が
隊列のそこかしこに響く

甲高くて
良く聞こえる声の将

甲高くて。。。

まったく気に触る声!!
カッとなった
私は大きく手を空に伸ばした
さあトドメだ!参るぞ!!
「太鼓を鳴らせ!!進軍!!」

城下の四方から
歩測に会わせて低く淡々とした太鼓の音が

あらゆる隘路から
草陰から

今まで伏せていた

本隊が立ち上がった

城から転げ落ち
まだ「隊列」も「陣形」も立て直せない三条衆を囲むように
各方向から湧き上がるように姿を見せた

驚愕と，どよめき
悲痛な悲鳴

火矢と長槍を引き連れて堂々たる姿で
先頭を進む「やたろー」
その大男の風貌にも圧倒され
腰を抜かす敵兵

そしてすぐに気がつく
自分たちが
逃げ道を失ったことに

三条衆の統制はもはやどこにも効いていない状態になった

「囲みました！！」
物見が私の後ろで言った

いつになく

今までないぐらい
だれにも顔を
みせられないくらい

私は冷徹に
そして満面の笑みだ

「正しく義はなされる」
ふと
思い出した言葉が頭に響いた

満たされた心から
溜息と一緒に
うっとりした声で答えた

「殲滅せよ」

私の指示はすぐに馬番に伝わり
それに呼応してやたろーが拳をあげて「叫ぶ」

さあ

「不貞の輩よ！！最後の鬨の声（ときのこえ）を聞き死んでいけ！！」
手を振り下ろした

「はなて！！」

容赦のない火矢がはなたれる
なすすべなく
刀も，槍も，すべてを捨て逃げ出そうとする兵たちに降り注ぐ

瞬く間の「炎獄」
刺さった火矢を顔にうけ絶叫する者
喉を焼かれ息を失い倒れる者

火に怯え目をむかんばかりに狂った馬は兵を蹴倒す
その蹴りで
腕を
足を
頭を千切られ
悶え苦しみ

助けを連呼する

血と火の海に沈んでゆく「哀れな」者たち

矢の雨の合間を縫って逃れようとする者たちを
やたろーが刺し倒した

「ココは通さんぞ！！」

巨大なやたろーの仁王立ち姿に声も失う
同じく槍をもつ男達は包囲ジリジリと縮め
息のある者
死に損なった者を容赦なく追いつめる

もはや勝負はついた
轟々と昇る
煙の向こう
最後の掃討戦が続いていたが

私には
それはもうどうでもイイ事だった

一つ息をつく

たぶん
役目を果たすことは出来た
そう思った

私は石垣の端で「禅」を組んだ
「御仏よ。。。義は成されました」
手を合わせ，目を閉じた

と
同時に大きく声が響いた
栃尾衆勝利の雄叫び

直江隊が
実乃隊が
やたろーたちが
大きくみんな拳を上げ勝利を叫んだ

朝日はとっくに天を高く登り
青空が広がっていた

城内で戦の終わりを知った
民草たちはとびあがって喜んでいる

栃尾城の戦いは終わった

目を開けて
すべてを見回した私は。。。
気持ちが入れ替わっていく感じを憶えた
頭の中を
塗りつぶしていた「黒い意識」が遠のく

歓喜の喧噪が鮮明に響いた

自分を見直した
汗ばんだ手を見た
風を受けた身体は急に冷えていく

静かな心

急に怖くなった

その6　初陣（7）

警戒を怠る事なかったが
やたろー以下少数の部隊を掃討に残し
家臣の隊を城に引き上げさせた

城から残党を見つけることのほうが難しいと思われるほど
圧倒的な戦だった

敵はちりぢりになり
逃げ帰っていった

帰れた者は少なかった事だろう
山道の各所にもおびただしい死体があった
城下にも
折り重なるように

物言わぬ「体」になった人たちはどこに「帰る」のか？

これほどまでの「血」を見たのは初めてだ

私は夕刻まで
櫓（やぐら）から戦場になった城下に向かって「読経」を挙げた

そこかしこに残り火が，護摩（ごま）の火にようにも見えた
緩やかな風に
煙は高く高く流されていた

栃尾城は「喜び」で活気ずいていた
戦功を挙げた男たちが次々と門をくぐり帰ってきて
それを女たちが迎えた

直江も実乃も
晴れ晴れしい顔で帰ってきた

櫓（やぐら）の石垣をおり
彼らを迎えた
「影トラさま！！みごとな戦（いくさ）でございました！！」
実乃はかなり興奮気味になっていて
私の手をとると強く握り
深々と頭をさげた

直江も横にならび
「みごとな戦運び（いくさはこび）でした。。感服いたしました」
と
いくさ人らしい笑顔をみせた

2人とも
返り血を浴び
土にまみれていた

私は出来るだけ「良い」表情を作って
「よくやってくれた」
と答えた

全員そろって
というわけにはいかなかったが
とりあえずでも
戦勝の宴を開いた

侍女たちが
次々と壺をあけ
諸将たちと酒盛りがはじまった

私はとてもその勢いにはついていけない気持ちだ
疲れがひどかったので
本音で
眠りにつきたかったのだが
直江の妻に
「これも城主さまのお勤めにございますよ」
と言われ参加した

参加というか
そうか「義務」なのだな。。
と
味わう事のない酒に口をつけながら思った

実際に自分が戦場の矢面に立ったわけではなかったのに
体中に疲労がたくさん残っている

気がつかなかった
鎧の下は汗でいっぱいになっていた

屋敷に戻ったとき
足がフラフラ身体も宙を迷うような。。感覚になっていた
そのまま
眠ってしまいたい。。。。

目を閉じてしまいたい

眠りたい。。。
宴の間
実乃がしきりに私の「軍略」という物についてしゃべっていた
諸将も興奮さめやらぬといった具合で
大声をあげての酒宴は
かなり長く続いた

「怖い。。。。」

注がれた酒に写った自分顔を見たとき
心でつぶやいた
酷い表情だ。。。
私は酔い覚ましたいと席を立って
部屋に戻った

もどってすぐに足がもつれ
そのまま前のめりに倒れた
体中に痺れが残っている
まだ
握り続けた拳が痛い

動悸がして。。。
めまいを感じる

気持ちが悪い

冷たい板間に顔をすりつけて
今日の戦(いくさ)を思い出した

「あんなことを。。。」

怖かった
ホントは今朝，三条衆がココにこない事を願っていた
何度も
御仏に
ココに彼らが来ないことが「慈悲」だと
何度も
何度も
繰り返し

私が「哀願」していた

私を馬鹿にしてもイイ
臆病と罵ってもイイ

何か
もっと「血」を流さない方法はなかったのか？

確かに
許し難い出来事だった
カッとなった

我を失ってしまったかのようだった

そうした

その結果はなんだ。。。

私の手が振り下ろされたとき
その時
彼らの「命」を絶ってしまった

「恐ろしい。。。」

あんな事を平然と指揮してしまえた自分が怖い

三条衆の到着を聞いたとき
何かが入れ替わってしまった
「黒い意識」が目を覚まして
まるで
自分が自分でなくなって

戦うためだけに「生かされて」
イヤ

何度も
頭に
「戦え」
「戦え」
と
心の中の「影」が
うすらぐらい声で
繰り返す

身体のすべてに響き渡っていた

息が。。。
仰向けになった

酒宴の間
男達の
「二十は殺しました!!」
「イヤイヤわしは馬ごと槍で落としてやった!!」

自画自賛の戦功話を聞かされたが
聞きたくもない言葉だった

生き死にが，酒の肴なんて。。

涙がこぼれた
「恐ろしい。。。なんて恐ろしい事を。。。」

「トラ。。。トラ。。」

軒先の戸口で声がした
「ジン?」

聞き慣れた声が返事した
「大丈夫か？」

私は起きあがって戸をあけた
軒先には
いつもの着崩した作務衣（さむえ）姿のジンが立っていた

「。。。だから。。。着物はちゃんと。。。着なさ。。い。。って。。」

ジンを見て
安心してしまった
言葉に詰まった
涙がいっぱいにでてしまって恥ずかしくなって下を向きながら続けた

「着なさいっていって。。」

「トラ。。いいよ。。」
ジンの手が肩に触れたとき
もう
限界だった

どうしても涙を止められない
うつむいて
肩が震えて
「いいんだ。。楽になっちゃえ。。」

ジンは何もかもわかったように言った
私は
下を向いて「泣いた」

栃尾の戦の時
ジンは一緒に行くと何度も言ったが聞き入れなかった
私が「修羅」の道を行くのは
「長尾」の家に生まれた「さだめ」だ

でも本音を言えば
僧であるジンにはあんな姿を見られたくなかった
「黒い意識」に従い
戦を喜びとしてしまう私の背中など。。。。
見て欲しくなかったし
そんな場所には来て欲しくもなかった

だから
どれほどに頼まれてもジンを城の中に押し込めた
「加当陣江!!城の中を守れ!!」
そう言って背を向け戦に向かった私

なのに
ジンが言ってくれなきゃ
自分ではどうにもならない「苦しみ」で押しつぶされてしまいそう
になっている

「怖いんだ。。まるで違う人になってしまうんだ!!私が。。」

あの声が頭に響くと
自分が変わってしまう
それはわかる
でも
それしかわからない
それが
何かもわからない

ジンは私の前にひざまずいて黙って顔を見つめる

「あんな残酷な事ができてしまう私」
今まで
一心に御仏に仕えてきた心は
戦の時に何処に行ってしまうんだ?

「わからなくなったんだ!闇の声に。。心がそれに従ってしまうんだ」

まるで言い訳をしているようだ
人を殺しておきながら
言い訳ばかりを。。。
悲しいやら恥ずかしいやら。。。

「これが御仏の示す道なの?」

彷徨ってしまう心

「栃尾の人たちを守れたじゃん」
顔をあげた
優しい声でジンは言う
「トラが戦うって決めたからみんなこの地を守るために戦った。それが示された道だったんだよ」
あっけらかんと
「でも」

「初陣をがんばったんだから。。自分を責めるなよ」
ジンはいつものしゃべり口調で
横に座って
「じゃなきゃ栃尾の人が死んでたって!!」

少し悲しそう?
でも少し，はにかんだように
「お疲れ。。。トラ」

そうだ
戦わなければならなかったんだ
「御仏の示すままに。。。」
つぶやいた

「トラ」
ジンが手をにぎる

「オレはいつだってトラの側にいるよ，トラの行く道を信じてる」
私はしずかに
うつむきながら
うなずいた

「今はそれだけでいいや。。。」

月明かりの下
ひさしぶりに二人で話をした

心がだいぶん落ち着いた

助けられた。。。
その言葉に。。。私が助けてもらった

そんな
私たちの姿を直江が見ていた事には気がつかなかった

栃尾城の戦いは終わり
中郡（なかごおり）を本格的に平定する日々はここから始まった

その6　初陣（7）（後書き）

ふ～～～
元服から向こう栃尾城開戦までを２０話で書けてホッとしてます
ここまで読んでくださったみなさまありがとうございます

毎日，毎晩
何度も自分書いた物を見直し
日々「修正」「改訂」してきましたので
一区切りのココでもう一度見直しもしてみたいとおもっています

人間５０年だった時代
１３歳で「戦」に出て行った影トラには迷いはなかったのだろうか？
ヒボシだったら迷いに迷って遭難している事でしょうが
歴史書などでみる景虎様は大変立派に戦ったという事だそうで

でも
きっと色々と悩んだりもしただろうなぁ
でも
やっぱり進んで行ったのだろうなぁ
と
思うと
「僧になるには激情すぎる」と言われたこの人の生き方をもっと知ってみたいものです

ちなみにヒボシの中の影トラさまは割りとキツネ目（藁）のイメージです
ホントはどうかは置いておいて（藁）そんな感じなんです

その7　吉報（1）

その報は矢のごとし
二日後の朝には春日山にも届けられた

「トラ」の初陣が大勝利で幕を上げたことは
朝早くに山を駆け上る使い番は本丸に入ったとたんに大きな声で
この「吉報」を告げた

晴景（はるかげ）は定時には起きていたが
その「報告」事態にはそれほど興味がなかったので
少し考えてから食事の後に話を聞こうと小姓につげた

「やれやれ。。。」

髷のうしろ，自分の痩せた肩を叩いた
武人とはほど遠い体格の晴景にとって
いまや
戦は「他人の仕事」のようにしか思えなかった

いうなれば
守護代の仕事は執政であり
家臣の仕事が「戦」

それに影トラが

初戦を勝つことが出来たのは
実乃や
初陣のために派遣していた直江のおかげだ
影トラの功績にはならない

そう考えていた

守護代の旗をそこに持って行った
というだけで
それなりの「成果」なのだ
中郡（なかごおり）にもいまだ
守護代，長尾健在と示す事ができたのなら上出来か？

「騒ぐような事か？」

と欠伸をして
のんびりと飯を食った

勝てたのは
むしろ「あたりまえ」ぐらいな感覚だった

そんな事よりも朝早くから「執務」をする事自体が苦だった
できれば
報告も昼過ぎに来てくれればよかったのに
と
めんどくさく思ったが

それはそれ
この「吉報」を待っていた，御前にも家臣の手前でもあったので
支度はそれなりに急いでした

城内は「吉報」の到着で騒がしくなっている
慌てて紺色の着物に着替え
いざ表屋敷に向かった
足取りは余裕を表し自分ではゆっくり歩いているつもりなのだが。。
。
やはり少し時間を遅れてしまった事は気になって
早足になっていた

屋敷の間に入ると
家臣一同はすでに整然と座していて
当然のように御前も鎮座していた

せきばらいをしつつ
いかにも堂々と構えた守護代らしく

「良い知らせのようだな?」

と顔色を変えずに聞いた

使者は待ってました

と言わんばかりに大きな声で

「一昨日，栃尾城にて景虎(かげとら)さま初陣で三条衆を打ち破ってございます！！」

すでに事態の大半を事を聞き及んでいたとはいえ
集まった家臣の表情は花咲くように明るくなった

「うむ」

浮かれる事なく
晴景は素っ気ない返事をかえした

守護代の一声の後なのだからと，言わんばかりに家臣は質問した

「どのような戦(いくさ)であったか？」

最初に口を開いたのは
柿崎景家(かきざきかげいえ)だった
もっともな人物の質問だ
口周りに溢れるほどの髭をたくわえた大きな男は前に乗り出さんばかりの
勢いで返事をまった

猛将で知られる柿崎は実乃から影トラの事はイヤと言うほどに聞かされていた

だがまだ会ったことがなかった
だから「影トラ」が

どんな「人物」なのかを自分の耳でしかと聞きたかったし

「長年」確かめたかった事でもあった

もちろん
使者は自分の事のように喜びその戦のさまを話した
みな
食い入るようにその言葉に耳を立て
戦の流れを聞いた
そして
最後には
感嘆の息をもらす者さえあらわれた

「たった一日でか。。。。」
「すざましいものよ。。。」

柿崎もいちいちうなずきながら聞いていた
巨体を右に左に揺らして。。くせなのだ
この武士(もののふ)は参加できなかった栃尾城の戦に自分が参加しているような
な思いを
いっぱいに浮かべ話を聞く
いてもたってもいられない衝動で自然と身体が動いてしまう
事実，心は素直に躍っていた

「なんとすばらしい戦(いくさ)じゃ」
柿崎は嬉しくなった
「早くお会いしたいものじゃ」

と
これまた
自分の分厚い胸板を叩きながら思った

一方
家臣が盛り上がっている姿を上座から見ていた晴景は。。。
だんだんどうでもよくなってしまっていた

こんなに「トラ」の事で騒ぐのが不思議でならなかった
確かに
使者の話を聞く限りでは「トラ」の活躍と統率力はすばらしいのかもしれないが。。
実際は
直江や実乃の助力があっての事だろうしやっとで出来たことだろういや小娘一人で「戦」など絶対に出来はしないとなで高をくくっていたから

まさに不可思議な騒動にしか見えなかった

十三歳の「女」に何ができる?
何をそんなに騒がしくしている?

そう思えば思うほどにバカ騒ぎをする家臣の姿がうっとおしくなってしまって

だから

「なによりな初陣で良かった」

と

つまらないという表情を隠すことなく
水を差すように
言ってしまった

あまりにも感心の少ない守護代の言葉に
静まりかえり
家臣たちが怪訝な表情に変わってしまったのは言うまでもなかったが

「直江も実乃もついていてくれた事だ。。」
とさらに自分から追い打ちをかけてしまい

あわてて言い足した
「無事でなによりじゃ」

そこまで言うと一人不快な気分になってそそくさと退出してしまった
残った家臣は気が抜けた感じになって退出に頭をさげていたが

その後ろ姿を誰よりも冷ややかに虎御前は見ていた

昼過ぎ
侍女数人を後ろに控えさした「虎御前」は手紙を書いていた
奥座敷のこの部屋で静かに毎日をすごしている日に
入ってきた「吉報」だった

もともと
口数の少なく表情の変わらぬ御前だったが
この日は静かながら「険」の見られぬ
ご機嫌な様子だった

「手紙をしたためました「トラ」に持って行っておくれ」

隣に控えていた侍女の「萩」は
書を受け取りながら

「おトラさま初陣での勝利喜ばしいことです」
と賛辞を送った

虎御前は
いつになく陽気だった
その目だけではあったが笑っている感じで
「喜ばしいわ。。。」

と
うっとりと答えた

座敷から空を見ながらもう一度
「本当に喜ばしいわ。。早く「夢」を見て欲しいモノよ。。」

と自分に言い聞かすように
そして
穏やかに微笑んだ

その7　吉報（2）

「似ているのか？」

坂戸城の屋敷で「吉報」を聞いた長尾政景（ながおまさかげ）は妻の綾におもむろに聞いた

「ええっ母上さまに良く似ていました」
白い肌に上品だが派手さのない小袖を着た
綾姫は夫に答えた

「母上。。。虎御前か？」

政景は顎をかきながら
春日山の方角をのぞき見るように背伸びしながら聞き返した
「はい」
清楚な妻は素直に答えた

「吉報」が届いたのは
春日山にそれがとどいた後の日だった
栃尾のあたりが騒がしいという話は今に始まった事ではなく

今の越後はすべての国内がよくにた状況の中にあった
坂戸城周辺も物騒な事は

数は少なくともあるにはあった

しかし

だからと言って
たかだか
十三歳の小娘を城主に頂こうなどという実乃の思案は「馬鹿馬鹿しい」事この上なしと
政景はずっと思っていた

「守護代の旗」をそんな「少女」に託してしまうなど。。。
いよいよ
晴景(はるかげ)もダメになってきたか？

それはそれで都合が良い
早くダメになってくれれば
自分に「守護代」という地位も巡ってくるものよ
などとほくそ笑んでいたところだった

なのに
あまりにも早く届いた
「影トラ」の初陣，大勝利の報には少なからず驚いた

戦況を聞くに

城内には
剛将の直江がおり
その上で実乃もいたという事を計算にいれると
必ずしも影トラの功績とは言い難い事だが
軽んじて考えず
たしかに
「早い」動きだったと感心した

「為景(ためかげ)殿には似ておらんか？」

綾は顔を上げて少し考えたが
「わたくしでさえ父上のお顔をよく憶えておりませんのに。。」
と
少し悲しげに答えた

綾姫は
父，長尾為景(ながおためかげ)と母，虎御前の事を夫に問われて
ひさしぶりに思い出してみたが

やはり父よりも母「虎御前」の事のほうをよく憶えていた
いや
忘れもしない出来事が多かった

その頃
越後は今以上に危険で戦(いくさ)の続く中にあった
父はなかなか城には帰らず
城のすぐ外には常に「危険」があり
春日山にいても
心の落ち着く日などなかった

留守を守る御前にすがりついて
一緒に仏壇に向かって祈る日々が多かった

思い出の中の御前はやはり寡黙な女だったが
ある夜
ひさしぶりに父が帰り
床を一緒にした時に「何か」が起きた

「何か」が起き
「何か」を授かった

当時，綾はまだ六歳だったが
その出来事を
「恐怖」として憶えている

何故恐怖だったのだろう？

御前は懐妊したのだ
喜ぶべき事のハズだったのに

ただの懐妊の報とはいえない
得体の知れない恐ろしい物が
母の「胎」に宿っと感じたのだ

幼いながらにも備わった
「女」の直感というものだったのか？

そうとしか思えなかった

事が起きた日の朝から
御前は同じ言葉繰り返していた
もともと
信仰心が深かった彼女が
よりいっそう「何か」を得て変化してしまった

「御仏に選ばれし子，我が腹に来たれり」

その言葉に父，為景は狂喜した
「我が子は御仏に選ばれし子なり！！」

家臣たちにも告げて廻った

その日から延々と続いた「読経」
御前の大きな漆黒の瞳は
一心に仏壇に向かって，いや天に手を合わせ祈っていた

いったい何が写っていたのだろう。。。

それは
昼も
夜も
絶えることなく続いた

護摩（ごま）の火が揺れる中
きつく手を合わせ
あの言葉を繰り返す母

綾はただ
怖かった
いったいどおして
母は変わってしまったのか？

母は「何を」宿してしまったのか？

不安をよりかき立てたのは
その母は父が戦に出た時だけ
普段の耳にしないお経とはちがう言葉を唱えていた事にもあった

「おん　べいしらやなや　そわか」

仏間の前の御前の姿
祈る物は観音とはほど遠い別の怒れる「仏神」の姿だった

誰も取り付くことの出来ない日々の果てに
産まれたのが「影トラ」だった

その影トラが
ついに戦にでて初戦をかざった
感慨深いものではあったが。。。
綾にはまだたくさんの不安があった

美しく弧を書くように描かれた眉をしかめ
不安な面持ちで考え事にふける妻の横で
一息ついた政景は

「似ているのだろうな」
そう言うと
綾の前に座り
頬に手をあてた

綾はハッとしたように
「どうでしょう？」
言葉を遮るように綾の桃色の唇に指を当てて

「似ているさ。。姉妹なのだから」

政景は思い直した
そうだ
当座何があったとしても
気にする事はない

十分に実乃や直江の助力を借り

良い方向に働いて中郡（なかごおり）の抑えができれば
たとえ「女」城主だとしても上出来
それでいいさ

そののち
「トラ」は嫁に行けばいい
綾の顔から察するに
瞳の大きな色の白い「美しい女」になるだろう

どちらにしても「守護代家」の役にたてば誰も問題にはしない
政景は妻の顔を見ながらそう思った

だが
そんな夫を見る
綾はそれでもかき消せない不安があった

母，虎御前の言葉
「この子は。。。。。。。」
あれはなんだったのだろう？

今もあの夜の読経と，護摩（ごま）の火を思い出す
そして
父，為景が倒れたあの日。。。。

あの時の「トラ」の顔。。。。
まだ口に出して言う事とは阻まれる「過去」に
底知れぬ「闇」を感じていた

この日
坂戸城に「吉報」が届いた時を同じくして
越後の各地に「影トラ初陣にて大勝利」の報は届いた
各地の反応はまちまちではあったが
おおかたは
有能な家臣の力も借りての「大勝利」であろう
と落ち着いた

が
いち早くそれに反応を示した男もいた

黒滝城城主，黒田秀忠（くろたきじょうじょうしゅ，くろだひでただ）は
「吉報」を聞きこう言った

「「凶報」きたり。。親方様（為景）秀忠お約束を果たしましょうぞ」

静かに
鋭く
目を光らせた
この老将は直ちに戦の支度をし始めた

その7　吉報（2）（後書き）

影トラの
姉さま「綾姫」さま登場

諸説では結婚したのはもっと後となっていますが。。。
ココでは
１５３７年トラ7歳の時に嫁に行ったことになってます
綾姫さま当時１３歳
現状で２０歳ぐらい
根拠は
Ｗｉｋｉｐｅｄｉａなんかみるとそうだから（曖昧）

ヒボシ的には
虎御前の険しい部分を取り除いた「女らしい女」という感じ
妹「トラ」を人一倍心配しているけど
実は恐れてもいる

きっとキレイな人だっと信じてます
お顔とかお顔とか（藁）

ちょっとだけ設定の紹介でした

その8　祠　（1）

三条衆との戦が。。。あれで終わったわけではなかった
結局この「争い」の根元が同じ「長尾」の一族によるものだという
事がわかって
私は深い混迷と

「怒り」を憶えた

学ぶこと
私は世の中の事をやっぱり知らなすぎた
狭い「寺」という枠の中で学んだことは無限に広がる「慈愛」では
あったけど
広い世の中にある浅い「深慮」と「深い」闇にまで光りを灯すには
「戦うこと」

闇を切り裂くという「仕事」に徒事する者が必要で有ることを痛感
した

あの日を皮切りに
「戦」は断続的に何回も続いた
相手は。。すでに主君を亡くした「郎党」たち
頭の無くなった蛇はいったいどんな「名残」をもつているのか？
何故
大人しくしていられないか？

そんな事を「深く」考えられたのも
最初のうちだけだった
「戦」という波は高く激しい

そんな中で出来ることをしていく

日々
学ぶ

日々
「怒り」を蓄積して
その力で私は戦った
常に先頭にて戦った

常に

「戦え」
「戦え」
という声に背を押されて

最初にあった「変な罪悪感」は。。。。すでにどうでも良くなりつつあった
そういう後押し否定していたら。。。。私はダメになってしまいそうだったから。。。。

「だから。。こういう仕事を手伝って欲しい。。。と思ってる」

そんな合間をぬった日
昼を少し回った涼しい時間
私は軍役帳簿をもって三の丸に向かっていた

となりにいるジンとは。。。またいつもの言い合いになっていた

相変わらずの破れ坊主姿
とにかく栃尾の城内は忙しいからそんなジンの姿を気に掛けてやるヒマがなかった。。。
私が「身なり」の事を注意しないと。。。すぐ「破る」ちょっとむくれた
でもジンは
城内の細かい仕事は積極的に手伝ってくれている訳だから合った瞬間に注意するのも気が引けるし。。。
でもさ。。。その姿は。。。

汚さ加減には磨きがかかってないか?

「戦に連れて行けよ」

そんなこまかな注意さえ躊躇して帳簿に目を向けるふりでごまかしている私にジンはいつもの「文句」を言い出した

まただ。。。

ジンを栃尾に着いてから一度も「戦」には連れていかなかった
顔は見ずに答えた

「だから。。。「戦働き」より大事な仕事なんだよ。。こっちの方が」

私は帳簿をわざと大きく開いてジンの前に見せながらもかなりの早足で。。。
顔を見ないで言った

もう何度もこの問答は。。続いていたからだ

「弥太郎達だって何度も戦に出てるじゃないか。。。オレの方が。。」
「やたろーは武士(もののふ)だ!!ジンは。。。。坊主だろ。。。」

こんな言い争いが。。。「戦」が決まるたびに。。大なり小なりあるジンは。。。。
「戦」に。。。何で出たいんだろう
私はジンだけには「修羅の道」を歩んでほしくない
ジンにまであんな「黒い意識」を知ってもらいたくもない

でも頑とまで突き放したくもない。。。。

近くにいてくれて。。。私の至らない心を助けてくれているし
禅問答で「林泉寺」にいた頃のような安らぎをくれている
何も「戦」で近くになんていなくたって。。。
でも。。。
そりれ意外では近くにいてほしい。。。

「トラを助けて「戦場(いくさば)」で仕事がしたいんだ」

大きく首を振ってみせた
そんな事。。。少しも望んでない
そんな事は言って欲しくない
あんな凄惨な風景の中にジンが立っているなんて考えたくもない

「修羅の道」は私の「長尾」の家に産まれた運命（さだめ）の道
私が求めても
行くことのできなかった「御仏の道」を。。。。ジンには願わくば
栃尾でもそういう救いをみんなに与えて欲しいと願っているのに

眉間にきっと出来てしまっている皺を指でなぞって見せた

「オレは。。。弥太郎より役に立つ。。。」

私のキツイ返答に腕をあげ頭の後ろで組みながら不満気に口を尖らせた

「とにかく。。。今はそんな事より「戦費」の計算だか。。武具の数だか。。。色々あるんだ。。手伝ってくれよ」

もう一度
帳簿を叩きながら
無理矢理ジンを従わせた

「戦」には。。。絶対に連れては行かない
だけどそう言い続けるとぶつかってしまう
だから城の仕事をできるだけ一緒に。。。連れ回していた

帳簿の仕事は実はこっちにきてから初めて知った「戦」の別の中身だった
何十枚も綴られた帳簿の中身を確認しながら。。。知った事は色々と驚きだった

「戦」があると
「戦」をするというのは「準備」との「戦い」でもあった

私が差配して「戦」をする事を決めれば
ただ気勢をあげて兵を従わせていれば良いわけではない

何度もの「戦」の合間に行われていた「直江」の仕事っぷりには驚かされた
まず
戦場までの道程
その道選び
行軍に必要な兵糧。。荷駄隊の数

人が動く軍勢に必要な仕事。。。。

こういう事は私がもっと知っておかねばならない事だとも思った
後ろを渋々歩いてくるジンに振り返って言った

「直江の仕事をもって手伝ってくれれば。。。私は助かる」

これも「戦」だし
私は独りで納得したような事を告げた
だから軽い気持ちだった
その時のジンの顔は。。。やっぱり怒っていた感じだった

後にこれが「別れ」に繋がってしまうなどとはその時にはまったく
考えられなにかった

栃尾の城
三の丸は二の丸や屋敷堀の近さに比べると幾分遠い所にあった
なかなか足が向かない場所だが
武者だまりや馬寄せなども多くあるため今回はそちらの方も見て回
る事にしていた
のだけど

「三の丸」の仕事は
早くも何度もの「戦」で武功を立てたやたろーに実乃が任せていた
もともと
「小嶋」の一族をしっかりと取り仕切っていたやたろーはこういう
仕事にもその手腕を十分に発揮していた

私も一度はその姿を見ておきたかった

ジンとの問答が朝から昼近くまで
どこに帳簿との見合わせに言っても続いていたためか
すでに昼をだいぶん回ったぐらいの時間になっていた

「今日中に全部見て回れなかったら。。。残った仕事はジンにやっ
てもらう」

私は少しむくれて見せた

だいたい
私は自分の好学でやっているのであって本来だったらみこんな現地に足運んでまで何かしなきゃならないって事はないんだ!!
それに
実乃が夕餉の後に何か話しがあるって言っていたし。。。。

「トラ。。。。相撲やってるぞ。。」

歩く道すがら腕組みをしたまま頭でっかかちになっていた私をジンが肩を叩いて呼んだ

「相撲?」

組み討ちは武士(もののふ)の武術でももっとも「素」である武だそういうものの原点「相撲」
私は顔をあげて雑兵長屋の並びに目をむけた

そこには。。。。

「やたろー?」

思わず困惑
たしかにあの大きな体は間違いなくやたろーなんだけど
「暴れてる?」

相撲。。。なんて生やさしい動きじゃない
あの大男が手や足を大きくふり何か大声を出して騒いでいる
そのうち木組みで作った桶を投げ出したりし始めて

「ジン!!相撲じゃない!!」

私はおかしな事態に駆け足で向かった

「やたろー!!何してる!!」

近寄って見てさらに驚く
すでに何人かの男が張り倒されたのか転げ回っている
尋常じゃない
まるで台風が円を描くように周りの人をなぎ倒していく
一瞬あっけにとられたけどそんな状態をほっておいて良いわけなく

私はやたろーの手を捕まえようとしたが
ジンに止められた
「危ないって!!」
「でも!!」

そういうと間に割って入った
「弥太郎!!何してるんだ。。」

私の前に入りやたろーを止めようとしたジンの言葉を遮ったのは「拳」
そのまま顎を打ちつけられて飛ばされるジン
目の前真横になぎ倒される

「やたろー!!やめろ!!なにしてる!!!」
呆然としてしまった私の前
「うわぁぁぁぁぁぁ」
大暴れ
ただでさえデカイやたろーに誰が縄など掛けられるのか
みんなどうにもならない状態

とりあえず気を取り戻した私は
飛ばされたジンをおこそうと肩をつかんだ

「おい!!ジン!!」
「痛い。。。なんつう馬鹿力。。殺すつもりかよ?」
首を左右にがくがくと揺らし血反吐を吐きながら

「今更知ったのか?やたろーは戦場じゃあ素手で人の首をへし折るんだぞ!!」
私はまだ首が外れかかってしまっているのでは?と思うぐらいにぐらついているジンの顔を両手でつかんで答えた

「トラ。。。そう言う事は早く言えよ!!死んじゃうだろ!!」

「。。。。オマエが間に入ったんだろ?」
なんか良くわからん返答に私が困る
「あの世から力かせって事かぁ?」

そうこうしている間にも場は騒然とし始めていた
というか
騒ぎが拡大している
やたろーの周りにいる大男たちも何か行動がおかしい
みな口々に何かを怒鳴って。。。しかも刀を持ち歩き始めている

まったく周りがみえていない状態だ
「どおすんの?」

私の前で殴られた顎を押さえているジン
「止める!!」

こんな騒ぎをほっておいていいわけない
立ち上がった私にジンは
「オイ!!どおすんの!!危ないって!!」

危ない？
危ないのはこんな状態をほっておく事の方だ
そのまま歩を進めやたろー達の前に立ち深く息を吸った
ジンは耳を塞いでいる

「いいかげんしろぉぉぉ!!!さわぐんじゃなぁぁいいいい!!!」

激高
三の丸はおろか本丸にまで響くほどの大声で怒りを爆発させた
さすがに
驚き私に気がついたのか
善治郎たちは腰を抜かしたように膝を落として顔は空を仰いでしまっていた

私はやたろーの真ん前まで行った
やたろーもなんだかわからない状態で放心している

「やたろー!!何をしている!!」

膝を落としたやたろーの頬を張った
私の声に目だけ舌を向けたやたろーはそのまま項垂れた

目には涙がいっぱいになっている
驚いた

「どうした。。。の？」

驚き少し退いてしまった私の前大男は泣き崩れた

「つやぁぁ。。。つやがいないんだぁ。。。。」と

その8　祠　（2）

「それで。。。こんな遅くに出立したという。。。事ですか?」
僧服を着た私たちの一行に追いついた実乃は呆れたように溜息混じりで答えた
私も少し軽率だったと思いながらも
「ほっておけなかったんだよ。。。」
と答えた

事の始まりは「つや」の失踪だった

「つや」とは

私が三条との最初の「戦」決意したきっかけになった「女の子」の事だ
あの後
一時非難のため栃尾城の総構えに来ていた村人たちは
やはり自分の土地が心配なのか?恋しいのかでバラバラと帰宅して行ったが

「つや」は。。。。
唯一の親族であった母を失ってしまい。。
住む場所さえも無くしてしまっていたらしく
総構えに残っていたのだ

それを
いつの頃からかやたろーが養っていたのだ

私は断続的に続く戦の日々で。。。
たしかに三の丸あたりで「つや」らしい子を見てはいたが
いつまでココにいるのだろう?程度にしか気にもとめていなかった

だけどジンはよく憶えていた
「長屋にトラが来たとき字を教えてって頼んだ子がいただろ?トラ
教えてたじゃないか」

。。。。。

多忙な日々が続いて顔ぐらいしか思い浮かばなかった私はちょっと
恥ずかしかった
そういえば
やけに人なつっこい子が最初はおどおどとだったが私の後ろを遠目
についてあるいていた
気になって
話しかけたら

「字。。。。おせーてくだせ（教えてください）」

可愛らしい
上目遣いでも恥ずかしそうに頼んで来たのを思い出した

「あの子か。。。。」

私は手を打って思い出した
あの子，事つやは一緒に生活させてくれるやたろーの役に立ちたくて「字」を教えて欲しいと頼んできていた
何回か教えてすぐに利発な子である事はわかった

「ものわすれ激しいなぁ」

呆れた顔で私をジンが見る。。。まったくだ。。。「戦」ばかりで。。。
もうしわけない気持ち

とにかく
何故かつやは消えてしまい大男達は大騒ぎの状態になっていた
親族を失い行く当てのないつやがいったい何処に行ったのか？

「攫われた」

だの

「誰かに捕まえられて。。。。売られた」

だの物騒な意見が横行し
結果あんな大騒ぎになってしまっていたのだが私の怒声で騒ぎは止まり
しばし冷静になった話し合いの中で

「墓を捜しにいったのでは？」という結論が出た
やたろーのおぼろげな記憶の中でつやは

「かかさまの墓を。。。。」と告げていたらしい
ジンは殴られてぐらついたままの首をならしながら言った

「きっと弔ってもらえているかが心配になったんじゃないのか？」

私は直感的にそうだと思った
唯一の親族だった母が無縁仏になってしまったり未だその身を野に晒したままだったりならどれほど辛い事だろう

そう思ったら最後私も留まってなどいられなくなってしまい
こんな夕刻近くだったのにかかわらず近くの寺からジンが用意した「僧服」を来て城を飛び出してしまったのだ

「まったく。。。少しは自重して」
「すまない。。わかってはいたのだが。。。」

私たちが城をでて半刻（一時間）ほどの頃
馬を走らせた実乃と秋山史郎にもう一人の近習（きんじゅう）がいた
やたろー達の騒ぎわ黙らせるために激怒した私の声はしっかり本丸の屋敷にも聞こえていたらしく。。。。追いかけてきたのだ着くなり
実乃は夜も更け始めている事で今日は城に戻った方が良いと言ったが。。。

私はもとより
やたろーと善治郎。。弥平達は戻る気など到底なかったようで

私もココまで来た以上は責任をもって最後まで「つや」探したい。。
だから戻らない事を決めたため
そのまま
実乃も一緒に捜索隊に加わる事になった

こうして夜陰に紛れた一行が
歩く道の間実乃は。。。ずっと小言を言い続けていたのだ

「ジン。。。しんどい」

さすがにすでに四半刻（三十分）は説教をうけて私も参ってきていた
「お勤め。。お勤め。。。」
少し笑った顔のジンはそういうと

「先を見てくるよ」とこの小言の間から離れてしまった
こんな時だけ。。当主のお勤めだなんて。。。うんざりしながらも
実乃の諫言にとりあえず頷いていた

「すいませんね。。。実乃様。。。」
私が少ししょぼくれ始めたところだった
やたろーの右腕的存在で初めて合ったときは無頼の輩の頭のように
突っ立っていた長身の男「善治郎（ぜんじろう）」がとなりにまで来ていた

「まったくだ。。。オマエたちも栃尾の。。いや長尾に仕える者と
しての自覚が」
相変わらず苛立ち一杯の返答の実乃のに善治郎はペコペコと何度も
アタマを下げた

「今回ばっか見逃してやってくだっせぇ。。。頭ぁ。。つやの事亡くなった娘っ子と同じぐらい大事に思うとるんですわ」
「娘？」

思わず聞き返した

「ええっ」
「娘。。。。子供いたの？」
私はちょっと戸惑った返事をしてしまった
やたろーが元妻帯者だった事を初めて知って。。。。

「え。。影トラ様に出会う前の年までいました。。。」

善治郎は遠い目をした
私は目線の先のやたろーを見た
荒れた道をもくもくと進むやたろーの後姿。。。。

「いまは。。。。いないんだ」
善治郎に静かに聞いた

「え。。頭の奥方も娘っ子も。。。。わしらが「戦」に負けて落ちた時に。。。わしらの親族を逃がして砦にこもって戦って。。。わしらばっか。。助かってなのに頭の奥方様ぁ。。。敵の手に落ちる事を良しとされず。。みな自決なさって。。。」

混乱していた「越後」
ココにも傷が残っていた。。。
善治郎は涙ぐんでいた
落ちてしまった者たちの悲しみ。。。

「つやが。。。かわえええてかなわんのですや。。逝ってしまった娘っ子が戻って来たみたいで。。。だから今回は許してくだんせぇ」

背の高い細い肩の善治郎は実乃と私に深々と頭を下げた

「そういう事は。。。。早う言わんか!!」

頭を下げた善治郎の肩を実乃は叩いた

「オマエ達は。。もう栃尾の「家族」ぞ!!。。。まったく。。。」

「実乃様。。。」

堪えていた涙を零してしまった善治郎の顔に実乃は気恥ずかしそうに手を振って続けた

「わしは栃尾衆の「父親」ぞ!!。。。ほっておくことなど。。。できなかろ!!」

「実乃様ぁぁ」

怒って着いてきた手前なのか

恥ずかしそうにする実乃に善治郎はまたも頭を下げた

「ありがとうごぜます!!ありがとうごぜます!!」

おもわず私ももらい泣きしそうになったけど

そこは堪えて微笑んでみせた

「父親か。。。。」

一行が暗闇で道を見失ってしまわぬため今日の行程はココまでとなった
街道はずれのお堂にたき火を置き
明日を待つための仮眠に私は入ろうとしていた時だった

ここまでの道程一度として後ろを振り返らず
真っ直ぐ歩き続けたやたろーはそれでも拭えない不安を消すためか
休むことなく見回りに。。。善治郎もお堂の入り口あたりに「番」に着いた
弥平は道の途中の村で「つや」の情報を仕入れるために別行動にうったったためココにはいなくなっていた
史郎はお堂まわりから木を探して歩いている

ジンは。。。見回りを手伝いに行ったのか?
私は燃えるたき火の日に目をウトウトとさせながら
。。。。

「実乃。。。私の父上は。。。どんな人だった?」

曖昧な記憶
私は父親という存在を憶えていなかった
いつの頃からか。。。いやいつも。。。この年になるまで人づてに聞いた「父,為景(ためかげ)」しか知らなかったが
今日やたろーという「父」を見て
実乃という「父」を見た

それでか。。。。自分の父親をもっと知りたくなった

「お屋方様（為景）は越後統一にご尽力された立派な。。。」
「それは知ってる！」

いつも聞いている
誰もがそういう「父親」の事を聞きたかったわけではなかった

私は。。。。知らないんだ父を
初めてその事を告げた。。。なんだかすまない気持ちでいっぱいに
なってうつむきながら聞いた私を
驚いた顔で実乃は見ていた

「なさけない話し。。。父上の事を思い出す事も出来ないんだ。。。
だから」
「為景様を。。。憶えていらっしゃらない？」

夜の風の音
森の闇を揺らす風の合間
月明かりに見えた実乃の目は。。。驚き？
私が予想していた反応とはまるで違った。。呆れたように「何か」
を話してくれると思っていた。。。なのに時がとまってしまったよ
うだただ「唖然」としている感じではなかった
何かにひどく驚き。。。困惑している顔

何に？

私は眠りかかった瞼を起こし
実乃の着物の袖を引いた

「実乃。。。だから教えて欲しいんだ」
勘ぐるように私をのぞく目
「あの「雨」の日の事も。。。。憶えていらっしゃら。。。ない？」

「雨。。。。」

闇が弾ける
実乃の顔が急に遠くなった

何故私は父上を憶えていないのか？
春日山で七年も過ごしていたハズなのに
林泉寺に私が移った後。。。。

父上は。。。いったいいつ亡くなった？どうして。。。亡くなられた？

頭に亀裂が入る痛み闇は深く私を渦に飲み込む
そして
目の前には

「雨」。。。。。
「雨」。。。。。

暗闇の屋敷
白い甲冑に身を包んだ大男と朱色の刀を身構えた女が向かい合っている
黒い渦

大きく首を振って瞬きをする

「実乃。。。。あれは？」

「トラ！！」

起きあがって実乃を問いつめようとした時ジンの声が私の頭の中に
渦巻いていた闇を吹き消した
「手水にイイ場所見つけたぞ」
一瞬ジンを見たが
そのまま実乃に

「静かに」
問いただそうとした私の口の前。。。人差し指で声を閉じる実乃。。。

「静かに。。。です。。。」

揺れる炎

「どうしたの？」
ジンは不思議そうに聞いた
私はそのまま腰を降ろし言われるまま小声で聞いた
「実乃。。。必ず教えてくれ。。。」
ジンには聞かれないように頼んだ。。。。だけど返事はなかった

夜の空が足早く雲を流していく
なんども表れては消える月光。。。。。

もう一度
目を閉じても。。。何も見る事は出来なかった
ただ
夜は静かに闇を落としていた

「あれは。。。。。誰？」

呆然とつぶやいた

その8　祠　（3）

まだ日の差さない暗い朝を感じた
結局私は眠る事ができなかった「僧服」の下に持った小太刀をにぎったまま
きっと眠ってしまったら「悪夢」を見たに違いない

昨日は夕暮れが近かったにもかかわらず
「およそ」つやが暮らしていた村に一里ないところまで歩いてこられた
やたろーを始めみんなの気が色々な意味で急いていた事でかなり早足だったのだろう

ただ

夜も同じように足早にやってきてしまい
闇に道を失った私たちは街道はずれの山裾にあった寂れた「お堂」に宿を取っていた

宿といっても
住んでいらっしゃるのは「名も無き御仏様」だけ
それでも一晩の屋根を借りるのだからきちんと挨拶をしての宿だった

寂れたお堂の継ぎ接ぎの板葺きから
木々が小さくささやく風の音が聞こえる

晴れない気持ちのまま目で早くから忙しく動く実乃を追った
昨日

頭の中に渦巻いた「闇」の事をどうしても知りたかった
だから実乃に問いただそうと思ったが

何故か出来なかった

きっと私と同じように眠ってはいない実乃。。。
聞きたい事はたくさんあったが。。。。
意図的にそれを避けているのか
私から離れたところで火の番をして。。。けっして私の顔を見ようとはしなかった

あれは。。。
あの闇は。。。

胸の中に何かが刺さったまま。。。朝を迎えてしまう

「とりあえずは弥平が戻ってくるのを待ちましょう」
ぼんやりと木々の間に霞みをかけている狭い空を見あげていた私に
実乃が「握り飯」を差し出しながら言った

私の疑問に答えてくれない実乃。。。。
私も顔を見なかった
見ずに

「いい。。。飯はいらない」

話しを避けるように立ち上がった
「どちらに？」

ついてこようと腰を上げた実乃に
「用をたしにだ」
気持ちの荒れたまま答えた
さすがにそこまで言われてはと実乃は元の場所に座り直した
「あまり遠くにはいかれませぬよう」
「行かない」
突き飛ばすように
ぶっきらぼうに答えた
私の曇る心中になんの返答もよこさない実乃にただ苛立っていた
そんな自分未熟さにも腹が立っていた
とにかく近くにいたくなかった
私はいそいそと寝泊まったお堂の後ろに向かった
裏に回って驚いた
昨日は深夜で気がつかなかったがこの木々に埋もれた小山に飛び出ていたお堂が本当は大きな寺院？杜に繋がる入り口でそれもかなりの大きな仏閣であった事に呆然とした
だらしない顔だったに違いない
口をあけ
「はぁ。。。。」
少しだけ白い息を吐きながら見回した

遙か昔に倒壊してしまったこの「寺院」はまともに立ち上がっている屋敷は一つもなかったが
つたの絡まった「柱」の後などみまわすかぎりの大きな「骸」だった

「見たことない。。。模様」

かなり
古い造りのようだ
唐花の彫り物が施された欄がそこかしこに散らばり
この「骸」となった社が生前は絢爛たる大寺社である事がよくわかった
私は四方を見回しながら興味の目で
少しづつ回った

朽ちた骨となった柱を止まり木に鳥たちが小さくさえずる
紅葉が近づく寒さに何度枯れ葉の衣装を纏ったのだろう。。。。

静かすぎるこの寺院が荒れていた心を十分に落ち着かせた

「昨日もきっと御仏に。。。この杜(もり)に守られていたんだ。。」

実乃の事や
わからない「何か」に悩む事がバカバカしく感じるほど
穏やかなる世界だ

大きく呼吸をしてみた
静かで
涼しい朝

静けさを奏でる。。。。。。

「ジン。。。何してる」

背を伸ばし心をほどいた私の耳に入る「音」とジンの姿は。。。。
男特有の。。。。

「仏閣の社の中で放尿とは。。。。不謹慎な」
何か
晴れた心に唾を吐きかけられた気分
睨みながら言った

「注意しているのに行為を止めない者には「処罰」が必要だな。。。」
相変わらず腰を前に突き出した姿のジンは首だけ後ろに向けてわめいた

「ああっアホ!!わかってても止められないんだよ!!こういうのは!!」
「やめろ!!」
「やめられるか!!」

私は首を右に傾げた不謹慎な音はまだ勢いよく続いている
ユラユラと首を揺らしながら小太刀に手を掛けて

「斬るぞ」
ジンは両手を挙げた
「もう終わるから。。。斬るなよ。。」

焦ってじたばたし始めたジンに私は近づいた

「トラ!!近づくなって!!もっもっもう終わる!!終わるから!!」

そういうと私から離れよう変な体勢で横に動いた

「逃げるな」

「逃げるわ!!!手水ぐらいで斬られてたまるか!!」

「不心得者め」

私は苛々していた
せっかく曇ってしまった心をこの悠々の時を教え小事にこだわる事の愚かさを知らしめてくれた「朝」をジンに汚された気持ちでだが
そんな「怒り」さえ「小事」であった事にこの後すぐに気がつかされる

作務衣をひっぱりあげ逃げようとするジンの背中を捕まえた私の身体は。。。。すべり
そのまま草木に隠されていた隙間にずり落ちた

私に掴まったジンもろとも。。。。

「痛い。。。。。」

真っ暗な闇に落とされた私はとりあえず手をあげ周りをさぐっりながらジンを呼んだ
かべのように切り立った石の表面は苔で滑っているうえに。。。
どうやら下には水たまりがあったようでびしょ濡れの状態だ

「ジン!!」
「ココ!!」
私の身体の下から声
どうやらジンの上に乗っかっているらしい
「何処に顔?」
私は手をさげた所であたった柔らかい物体を掴んだ
「鼻!!鼻!!痛いって!!」

身体を起こした私の真下に頭があるらしい
「手は?」
「ココ。。。。重いどけよ!!」

完全に上にまたがった状態の私に苦しそうにジンは吠えた
なんとか上体を起こそうとするジンの手が私の「胸」に当たった
私はその手を引こうとそのまま掴んだ

「ちょ!!ちょ!!ちょっと待て!!何!!何にかにあったってる!!」
急にうわずった声
「騒ぐなよ!!」
「いや!!なんか!!やらかい!!それダメ!!!」

「おい!!手!放すなよ!!」

真っ暗な闇でまた手を放してしまったらお互いがどこにいるかわか

らなくなってしまう
私から離れようと暴れるジンに抱きついた

「トラ!!トラ!!!ダメ!!ダメだって!!!」
「何がダメ?」
大暴れの私たち

「何してるの?」

混乱の暗闇に急に光りが割って入った
同時に幼い声が。。。。

「おトラさま?。。。。陣江さん?」

聞き慣れた声
さっきまで暗かった場所の木戸がはずされまだぼんやりとした陽の光が入り込んだ
その向こうに見慣れた影

「つや!!」

そこには目を大きく開いて。。。驚いているつや
「。。。。何してんでか?(何してるの?)」

かなり怪訝な表情
私の下にいるジンは何故か「般若心経」を唱えている
。。。。

「城からいなくなってしまったから!やたろーもみんな捜しにきた

んだよ！」

いよいよ困った顔のつやはポツリと言った
「文を置いてきたよ。。。」

やっとジンからはなれ駆け寄った私に
つやは
出かける前にやたろーに宛てて手紙を書き置きしてきたと言った

「三日ぐらいで帰るてきちんと書いたのに。。。」

不満顔で口をとがらせた

それもそうだ
手習いの成果を見過ごされた気分なのか
とにかく安心して
私も気が抜けて腰を降ろした

でも
早くに不安が解消されて本当によかった
息をついた
やっと落ち着いて自分たちが落ちてきた「道」を見た。。。
相変わらず水たまりの中でかがんでお経を上げているジン
「何やってんだよ。。早くこいよ」
「すぐには立てないんだよ。。。」
「何で？。。。。怪我か！！！」

私はもどって上を見たかなり高いところから落ちた私たち
ジンは怪我を。。。

「どうした!!何処打った!!見せてみろ!!」
背中を向けているジンを揺さぶった

「だぁ!!ちょっちょっとほっといてくれよ!!」
「ほっとけるか!!傷みせろ!!足か?」

座ったまま下腹の前あたりを抑えうずくまっているジンをおこそうとした

「頼むから。。。そっとしといてくれ。。ホント。。すぐ「治る」から。。」

引きつった表情。。。真っ赤な顔。。。かすかに涙目なのに。。。怖いくらいの気迫

少し驚いて身を退いた私の袖をつやが引っ張った
「大丈夫だよ。。。怪我じゃないから。。多分」
「そっ。。。そうなの?」

気迫に押されたのもあったがつやに引かれるままジンから離れた

導かれた部屋というか小屋は仏像で溢れていた
そんなに大きくない板間にも大小多数の御仏が両の間に鎮座しているおどろきながら狭い間を通り抜けた
広がった仏壇の前で私は来た道の仏像をもう一度見回し呆けてしまったが気を取り直してココまで来た本論をつやに尋ねた
「どうしてこんな所にいるの?」

水浸しになった着物の袖を絞りながら
城を抜け出してまで「何」をしていたかは確認しておきたい

「ココ，オラのうちだもん」
明快な答え
「つやの家?」

仏像を見渡しながらつやは言った
「そう。。。ずっと昔から」

「じゃこれは?」
仏像を指して聞いた

「じぃさまが作ったの。。。昔に」
と
懐かしそうに答えた

「彫仏師(ほりぶっし)だったの?」
私は感心して聞き返した
「ほりぶし。。。?」
つやには難しい言葉なのか?首をひねった

少し笑ったが
「全部そうなのか?」
とつづけて聞いた

「わからん。。。」

到底一人で作ったとは思えない数だ

うっとりしてしまう

「おトラさま」
部屋を見回し目をキョロキョロさせていた私の袖をまたもつやはひいた

「こっちきて。。」
引っ張る方につれられて私はさらに奥の仏間の方に歩いていった

もう一つ部屋をまたいだ
その間にも
いっぱいの仏像があったのだが。。。。
何か先ほど見た物と違う感じだ
何というか。。。。本当に生きているような白い彫像の群れ
かっちりと留まった感じの多い御仏様の姿とは違い今にも動き出すかのような。。。

「これはなんて仏さまなの？」

引っ張っていた袖から手を離したつやが指さした

漏れる光でようやく姿が見える
真っ暗の中にあったのならば決して見る事はできなかっただろう
真っ黒な台座

私は顔を上げた
さきほどの間にあった物の倍の大きさはある像だった
大きさにも目を見張ったが
そんな事よりも。。なによりの驚きは異形なるお姿にだった

雨漏りを治せないほど痛んだ藁葺きによって所々に光りを浴び黒く
輝く姿

風になびく衣
着物ではない
まるでただ布を折り重ねて着たような感じとても石とはおもえない
ほどの動き
深い光沢
もしこれが本物の布として目の前にあったのなら。。。きっとそう
いう輝きをもっていたに違いない
その衣の前が少し開いている感じで今にも歩きださんという勢いを
感じる
真っ直ぐに綺麗に伸びたおみ足は長く
身体にぴったりと寄り添うようにつけられている具足
豊かな胸のふくらみ
右手に天に届かんばかりの槍を持ち
左手に丸い楯
楯には蛇になった髪を持つ鬼の頭が生首のように付いている
右肩には鳥。。。

「梟(ふくろう)？」

死を司る者？

「この御仏様は。。。。女人(にょしょう)？。。女神？」

私はつやに聞いた
「名前は。。。わからんの。。。。」
仰ぎ見た

真っ黒な石像の精悍なお顔
慈愛を含み少しうつ伏せたような目
物言わぬながらも形良く整った唇

「女」の顔
頭には鶏冠のついた兜をかぶり
髪は風になびくさまを写実的に現したのか細かな筋彫りがされていた

異形の仏
黒き石像は凛とした姿で立っている

これは。。。。。。

思わず手を伸ばし鈍く輝くおみ足に触れた

頭の中に光るもの
身体が痺れたように背筋が
ゾクゾクする

「何?」

息苦しさ
そのままの位置で顔だけを御仏に向け問うた

美しき顔を見つめて。。。。。

「あなた様は。。。。」

その8　祠　（4）

所々に穴が空いた屋根の奥にしなやかに立っている「像」は
他の御仏とはあきらかに違っていた

風に揺れるがごとくに軽やかな姿
「女」の顔
いや
お体もきっと。。。
まるで違う

今まで寺院で見た
御仏たちの姿は
どこか「質素」で静かな微笑みをもっている方が多かった
静かに
手をかざしこの世のすべてを薄く開いた目で「達観」している御仏様

それは少しの光を我らに
少ない目で現世を透かし見る姿

また
荒々しき「戦神」たちとも違った
太き雄々しき腕に武具を持つ荒神は良く見たが
この方は違う
細い腕。。。いや身体自体が華奢な「女」なのだ
なのに武具を手に持ち楯には生首を飾っている

「黒い女神。。。。」

「おトラさま？」
呆けた顔で像を見入っている私の袖をつやが引いた
自分の意識を正すかのように私は首を振って聞いた

「これは？」
「わからんの。。。でもおトラ様に似てない？」
私の手を握ったつやは女神の顔を見ながら言った

「わっ。。。私に？」
とまどったこんな美しい方に似ているなんて。。。

「名前はわからんのだけど。。。かかが言うにはこの仏様は国を守るために「戦」をされた方らしいの。。。小高い山のうえの大きな寺に住んどって。。。」
つやは
昔話を思い出すように頭をこくこくと揺らしながら話した

「とにかく「戦」に強い女神様なの。。。らしい」

「戦に強い女神様。。。」
私はもう一度見あげた
髪をなびかせた美しい女人。。。隙間からこぼれる光を受けて影さえも美しい

「おトラ様に似てるしょ？オラはそう思うたんだけど」

照れた
思わず顔を背けて別の質問をした

「これもじぃさまが造ったの？」
つやは否定した
「これは持ってきたの。。。とと（父）さまの故郷から。。。。」

越後以外ではこんなに美しい仏様がいるのか。。。
「どの国から持ってきたの？」

純粋に知りたくなった
これほどに人の姿を生々しく現した御仏様はいったいどんな国の物
の手によって姿を現されたのか
感心の眼差しを向けた私に
つやはキョロキョロとして
仏間の入り口の方に走っていった
それから向き直って「左」の方角を向いて

ピョンピョンと跳ねながら
遠くを一生懸命指さすように言った

「あっち！！あっちの海の「向こう」！！」

「海の向こう。。。。」
その指のさした方角を見ながらつぶやいた私を

つやは満点の顔で笑った

利発でホントは底抜けに明るい
つやの

笑顔が海から渡って来たものだということを初めて知った

昼近く
私たちが姿を消してからだいぶんと時は進んだハズだが
一行に助けの来る気配はなかった
だけど「心配」になってしまう事もない
つやがココにいるという事は
通った道もあるわけだ
だからとりたてて慌てたりはしなかった
私とあの部屋から戻ってきたつやジンに頼み込んだ

「捜し物してるの」

私は快諾した
無理にひっぱって帰る事もない
むしろ
捜し物の手伝いをして憂いなく帰れればそれが一番だ

「ジン。。。もう身体の方はいいのか？」

鎮座で列を作っている仏様を少しずつ動かしながら
つやとともに捜し物をするジンに聞いた

「もう平気だよ！」
元気そうな返答
「そりゃ良かったが。。。後で傷は見せろよ。。。大事になってからで」

「もう大丈夫だっての！！」
「あんなに痛がってたじゃないか？」

ジンは向き直った
両手を腰に置いて少し怒った声で
「もう治ったの。。。。。気にするな！」

私は「何か」隠しているジンが気になったがしつこく追求するのはやめた
「そんな事よりトラは朝なんであんな所にきたんだよ？」
背中を向けつやの手伝いをしようとした私にジンが聞いた
。。。。。
そういえば。。。。

「手水。。。。。」

ずぶ濡れになって冷えた身体が震えた。。。体の下の方に「水」の気配
つい身体を前に倒した
「まさか。。。手水。。。。。」
背中後はどこか「悪意」を感じるジンの声
「どこか。。。。ないの？」
「おい。。。。手水なの？」
ジンの声は微かに笑っている
「うるさい。。。。」

身体をかがめ腹をおさえたまま怒鳴りあいになりそうな私の手をつやが引いた
「こっち。。。あの奥行って角あっちに曲がったらいいよ」

顔を真っ赤にした私は後ろできっと笑っているジンを無視して突っ走っていった

「ふ～」
体中が力んでしまっていた
色んな意味でやっと力が抜けた私は教えられた所から通路を回って戻っていた
戻ったらジンをとっちめてやろうと思いつつも
そんな事よりもつやに聞いた話を思い出していた

本当に大きな世界の話で衝撃だった

つやの家族
父親は海の向こうからいらっしゃった方だったこと
越後で母親になった女と出会い
つやをもうけたこと

祖父が彫仏師(ほりぶつし)で
父が持ってきた
海を渡ったこの「御仏様」に惚れ込みココに飾った事

つやの父の「国」からいらっしゃった「御仏様」

生き生きとしたお姿

通路を途中まで歩いたところで私はあの仏の部屋についていた

「摩利支天様（まりしてんさま）。。。かな？」

女神と言う仏の名前を浮かべながら闇に少し慣れた目で周りを歩いてみた
天照大神（あまてらす）。。。
私の知らない仏はどんなお名前なんだろう

まだまだ
私のしらない世界がいっぱいあるんだ。。。溜息
私は少し離れた台座に座ってみた

まだ見ぬ世界に思いを馳せてしまったせいか？

初めての野営で寝不足だったのか？
うとうとしながら
さきほどの美しき黒い女神の前にきていた

「おトラさま。。。」
「うん」
いつの間にか隣に来て
じっと私を見ているつや

「どうしたの？」
何かもじもじしている
手伝って欲しい事でもできてのかな

「どうしたの？」
もう一度聞いた

照れた表情のつやは上目使いで言った

「お膝にのってもいい。。。。」

膝？
私のか？

私は自分の丸まった身体を起こして膝を両手で指さして

「ココに？」

突然の申し出に戸惑った
予想していた言葉でもなかったし

でも
ペコペコと首を動かし
うなずく
つや

「濡れてしまうよ」

心配なのはそこだけなんだけど

乾かすすべのない仏間の中だ
動き回っても
服が暖まってくれたり乾いてくれるわけじゃないから

座ったら

つやまで濡れてしまう事の方が心配だった
それでも。。
つやの目は「お願いしている」
軽く一息
手を開いて言った
「いいよ。。」
パッと明るくなった表情で飛びつくようにで私の膝に座ってきた
ちょっとびっくりした
子供にそんなふうに飛びつかれたのは初めてだ
私の膝に乗り
抱きついたつやは胸に顔を埋めた
えっ。。。。
目をつむり胸に顔をすりつけると
「かかさま（母）と同じだ。。。やわらかいよ。。」
去年ぐらいから
私の身体には「女」の持ち物と同じ胸があった
立禅（弓）をするにも邪魔になれば
刀を持つにも邪魔な物だったが。。。。

鎧を着けてしまえば問題はないので気にもしていなかった
その胸に
つやは深く顔をうずめ安らいだ表情を見せた

「母さまと同じ?」
顔を埋めたまま，つやはうなずいた
「うん。。。乳だ。。。あったけぇ」
ぴっとりと身体を寄せる

「かかさまに抱っこしてもらったの。。」
そうか
そうか。。。。

私はつやの頭を優しくなでて
身体を支えたあげた

深く頭を埋めるつやの顔が泣いているようにも見えて
たまらなく愛おしくなって
抱きしめて何度も頭をなでた

不思議な感じだった

いつもは武術や修練にあけくれる
私に
なんとも言い難いこの感情。。。これはなんだろう

でも

こうしていてあげたい。。。
腕の中の小さな子どもが可愛くてしかたない
こういう感じなのかな。。。

やたろーも。。。

ふいに
「おトラさまは。。あの仏像みたい。。。」
胸から顔を少しだけ上げてつやは続けた

「戦(いくさ)は怖いところでしょ。。でも綺麗なお顔のまま「戦」に行く」

急に
頭がぴりっとした

つやの言葉だけじゃない。。。。

私のこの姿を
目の前の女神の。。。別の視線

何?

目の前の女神を恐る恐る見あげた
あの時。。。朝のこぼれた光の中ではみえなかったものが。。。。
部屋の隅々までをさらにまだらに照らし。。。私には見えた

女神の背に。。。。数多の手。。。。
黒い凶器を持つ姿。。。。
首の後ろに連なる別のお顔
光に照らされた壁の「曼荼羅」
御足の元に横たわる「獣」

その部屋の壁に至るまで隅々までが「女神」の本当の姿だった

「あなたは。。。。。誰ですか？」
私の中心がすくみ上がりそうなほどの悪寒が声を押し上げて聞いた
その答えは女神からではなく
胸のところで顔を伏せたままのつやが答えた

「この仏様は毘沙門天（びしゃもんてん）さま」

響く声。。。私の胸に。。。心に直接言葉を与える
頭の中にそれが届く
この像の名前を聞いてきたハズのつやが答えた
続けて

つやの身を借りて「何か」がしゃべっている？
声は誰のもの？

「我の名は刀八毘沙門天（とばつびしゃもんてん）。。。戦神（いくさがみ）」

鈴の音。。。。祇園精舎の。。。。
仏神の目が静かに
鋭く輝いて私を見ていた

その8　祠　（5）

一方，朝早く「用を足しに」と言った
影トラまでも行方不明になってしまった事に
実乃は。。。。。
いやな汗をいっぱいに浮かべながらも冷静さをたもとうと。。。
お堂の方端を行ったり来たりしていた

「なんたる不始末。。。」

実乃の不安は今やはち切れんばかりに大きくなっていた
ただ姿をくらましただけならばまだしも。。。（いやそれもちろん
問題なのだが）
動向していた「陣江」が共に姿をくらましてしまった事が重大な問
題となっていた

「女」である影トラが「友達」だと言い張ってはいるが「男」の陣
江と。。。かれこれ一刻（二時間）は見あたらない。。。。

「何かあってからでは。。。直江殿に顔向けできん。。。。」
拳を固め祈るように歩き回る

その
一方のお堂の端には未だ帰らぬ部下を待って
イライラも絶頂に達しつつある
やたろーが
挙動不審な態度で首を上げ下げしている

昼も近づきつつあるこの時間に未だ部下が戻らないのはある意味不安だが。。。

「。。。。ぬ。。。ぬ。。。」

この状態でもっとも困っているのは
この二人以外の

影トラ馬廻りの三人
やたろー配下の二人

どちらもお堂の中程に座って事の成り行きを見ている

落ち着きのない二人ともが割と大きな男だったと言うこともあって。。。
実際，目の前で見ていると
その焦燥さ加減が。。。

滑稽にしか見えないのだ

「熊が。。。二匹って。。感じか?」

やたろー配下の一人
善治郎が小声で耳うちした
馬廻りの史郎は少し考えて自分の頭にあらぬ何かが浮かんでしまっ

たのか。。。
肩を小刻みに震わしこれまた小声で返答した

「いかん。。そんな感じだ。。。」

ココ最近
城の仕事も手伝うようになったやたろーと実乃は共に肩を抱き合いながら酒を飲む仲だ

だからなのか
イライラの感じもよく似ている。。。
もはや
双方の「限界」は近いのも見て取れる

「なぁ。。。どうしたらいい」
史郎は
この奇妙な間に絶えかね始めていた
善治郎
「どうするも。。。。待つしかない」

まさに忍耐
今は待つしかない
偵察にだした男が帰ってくるのをただココで待つ
情報がないのに身動きなどできない
なのに
姿を消してしまった影トラ様の心配だってある
でも
それだって騒ぎだてして探すなんて。。。。出来る分けもないし

それだけの人手も揃っていない

緊張の間合い

この間が途切れてしまったら。。。。
そんな恐ろしい事は考えたくもない

が

実乃はもう限界だった
そもそも
影トラをココまで連れてきてしまったのが間違いだった

当主たる影トラにこんな事は絶対させたくなかったし
させて良いわけなどあるハズもなかったのに
さらにそこにこのこと「男」の陣江を動向させてしまった事で心
はあらぬ「妄想」でいっぱいだ

「つや」の事に関してはトラが思い入れを深かくもっていた事もあり
「断」する事ができなかった
と同時に
あらぬ
「温情」が実乃の心にも働いてしまっていた

つい

そうだ
つい魔が差したのだ。。。
城の外の捜索に出張ってきてしまった

なんたる事。。。。

なんたる事ぉ。。。

何度も自分の頭をこづきながら
言葉をぶつぶつとこぼして歩き回っていた
この上
影トラ様に何かあったら。。。。
腹を切っても「詫び」にもならん!!
両の拳を胸の前でぶつけ合わせて。。。

「こんな。。。。くだらぬ事に。。。」
実乃はポツリとこぼしてしまった

善治郎，史郎その他三人の背筋が凍った

お堂の方端にいたやたろーが「鬼」の形相で向き直っている

あっけなく
緊張の糸は切れてしまった

「ヤバイ。。。。」
史郎は慌てて善治郎を押した
「オマエの親方だろ。。。止めろよ!!」
はぁ。。。。驚愕顔
とてもあんな巨漢を止められる気がしない
ましてや
戦じゃ「金棒」を担ぐ「鬼小嶋」。。。。。

善治郎は押した
史郎に向き直って叫んだ
「だったら貴様の親分も止めろよ!!」

恐ろしい
反対側の方端にも「鬼」がいる!!
力一杯拳を握りしめた実乃

無理。。。顔面蒼白の史郎

二人とも鼻息が荒い。。。。煙が出てくるんじゃないか?
というぐらい
熱い息

睨み合ったまま
一歩
一歩。。。。

のしのしと
歩み寄る二人に

「あああっの落ち着きましょう。。。実乃さま。。」

史郎は手元に近寄って進言するも
戦場(いくさば)でみるよりも恐ろしい形相の実乃の耳には届いていない

「親方(やたろー)騒ぎを起こしちゃダメだ!!」

善治郎も同じく進言して
の腕を掴んだが

あっという間に投げ飛ばされた

呆然の史郎と三人の前で
実乃とやたろーは猛突進!石がぶつかるがごとく
ごつん!!
とぶつかり合った

「イイイイイイイイイイイイイ!!」
「ヌヌヌヌヌヌヌヌヌヌヌヌヌ!!」

歯が折れてしまったのでは?
と思うような頭突きと
続く山を揺らすような怒号

やたろーの方が背は高いから覆い被さるように

打ち伏せようとする
しかし
実乃は戦歴，人生の半分以上みごとな組み手で腕をとる

腕組みをする二人
軋む肉体からの音

「なんとかしろ!!!史郎!!」

投げ出された善治郎はまだ立ち上がれない身体で悲鳴まじりの声をあげた

「どうしろと!!」

困惑
目の前にいるのが人には見えないよ!!
こんな中に仲裁なんかで入ったら「骨」も残らない!!

まだ刀を抜いてないからマシなんて言葉
この二人の前でどんな意味があるの？

戦の本領は「撲殺（ぼくさつ）」だとするなら
とても適う相手じゃない
これはもう

「熊対熊」だ

組み手をしながら
実乃が怒鳴る

「そもそも貴様が親代わりをすると言ったくせにきちんと「つや」を見ておらんからこんな事になったんだぞ！！！」

ごつん！！

上から実乃の額に頭で突きを食らわせてやたろーは言う
「やかましい！！貴様だっておトラ様を見失ったくせに！！！」

今度は実乃が頭突きで近くに下がっていたやたろーの顎を頭で跳ね上げた
「こんな事がなければ！！こんな所にくるものか！！」

首ごと跳ね上げられた頭のままぐらりともせず立つやたろー

二人は組み手をはずし
擦り寄らんばかりに睨み合う
「影トラ様に何かあってからでは遅い！！すぐに探すのだ！つやはそれから。。」
バコッ！！
右からやたろーの拳が実乃の言葉を絶つように顎に命中した

「つやが先じゃぁぁぁ！！つやを何だとおもうとるじゃぁあ！」

「あああ。。」

史郎は絶句
すでに口から惜しげなく「血反吐」を流している二人

実乃は
ねじ切れんばかりの力で持って行かれた頭を平然と振り
そのまま
右拳でやたろーの腹をえぐった
突き上げるように深く鳩尾(みぞおち)の奥の奥に突き立て
雷のごとくの声で言った

「慮外者がぁぁぁ!!まず主君ありきじゃ!!」

さしものやたろーもそのまま前のめりに膝をついた
実乃は目の前に膝を屈して降りてきた顔面をつかみ右に左に音高く
殴り続けた

びくともしない
やたろーを何度も打ち据えて
両肩をがっしりと掴んだ
つかまれたその手をやたろーもしっかとつかみ返した

「つやが。。。大事で何が悪い。。。」

血と汗と涙でぐっしゃぐしゃの顔をキッと実乃にむけ
やたろーはいつもの
やたろーの声でこぼした

この大男にとってそれほどに大事な「娘」のつや

その言葉に
実乃の目にも涙が光った

「わかておるわ!!わかって。。。わしとて「娘」の父ぞ!!」

実は
「つやがいない」
と
聞いたとき
人ごととはおもえぬ温情が働いてしまったのは自分の「愛娘」多英
が浮かんでしまったからだった

長い戦の中
やっとで授かった「多英(たえ)」は実乃にとって目に入れても痛くないほ
どの「宝」だった
そういう意味でも
やたろーと気があったのだ

「だが今はまずは影トラ様だ。。。」

血まみれの唇をキッと結んだ

がっくりと首をうなだれた
やたろーの肩を叩いて言った

「つやも絶対に見つける!!」

と励ました

「あの。。。。」
間を割って声が入った

うへっ
という感じの顔で遠巻きに立っていたのは物見に行った
「弥平」
やたろーの部下だった

我に返った実乃たちの周りには
ぶっ飛ばされた善治郎を肩で背負った史郎と残りの男ちが立っていた

平静を持ち直し実乃は聞いた

「何かわかったか？」

「ええっ。。」
弥平は状況を理解しかねている様子だったが
急かすように史郎に押されて答えた

「ココ。。。。この寺社の廃屋が，つやの家だそうです」

死闘を演じた二人の「父親」は顔を見合わせた

躊躇する理由は一瞬で消え去ったのだ!!!

「すくに探すぞ!!!」

実乃もやたろーもボロボロになった身体とは思えぬ早さで
お堂の裏に向かって走っていった

呆れた顔になってしまった
馬廻りと
善治郎たちも後に続いた

まだ
靄の晴れぬ寺社に向かって走っていった

その8　祠　（5）（後書き）

「上杉謙信は女だった。。。。」（驚）
という書物があるそうです

すいません私は知りませんでした（無学人火星）

読んでみた方が良いのか？
今とっても迷っていますが。。。。たぶん「あえて」読まないと思います
読んで
変に影響を受けたくない
というのがまったく本音なので

紹介してくださったみなさまには申し訳ないのですが
この「カイビョウヲトラ」が終わったら

速攻！読みます！！

ところで
名前についても色々ご意見があるのですが。。
。。。。。

代表的な物で「なんで上杉謙信じゃないのですか？」
。。。。。

困ってます

現在
この小説の中では「長尾影トラ（景虎）」ですが
これが後に「上杉謙信」になるわけで
一緒の人物なんですよお～

でもって

ぶっちゃけ
「上杉謙信」って名乗った期間なんてこの人の生涯の中，８年弱で
後の４１年間は
冠名に「景」「政」「輝」と変わっただけで
ずっと「虎」ですから

実質一番長かった名前は間違いなく「影トラ（景虎）」で１９年
次が「虎千代」（藁）１２年
次が「輝虎」９年
次が「謙信」８年
で
上杉の名字を頂いたときに貰った名前「政虎」なんてたった９ヶ月
（爆笑）
まあ
だいたいこんな内訳になってるので（あくまでだいたい）

なかなか「上杉謙信」だあ！！

と

バシッと名前がでてこない～～なんて嘆かないでください

本人がクルクル名前変えたって

世の中じゃ

ニックネームみたいに「トラさん」って呼ばれていたような。。。

そんな気がしてならないのです（藁）

と言うわけで

色々とご意見くださるみなさまに感謝！！！

また

後書きでお会いしましょう～～（笑）

その8　祠　（6）

「。。。。。。「毘沙門天（びしゃもんてん）」。。。。さま？」

知らない仏神ではない。。。
しかし
これほどに異形を連ねた姿を知らない

逸る鼓動を抑えつつ
凝視し
耳をひそめ。。。。部屋の隅々を見渡す。。。。。誰だ。。。
さっきの「声」は。。。。

「つや？」
胸元にうずくまったまま少しも動こうとしない頭を撫でてみたが
返事はない

顔をあげ少しずつ動く光の元
暗闇から明るみに浮き上がった仏の「全て」に目を凝らした

まるで「二つで一つ」になる別の形が背中合わせにくっついている
一緒に彫られたものではないようだが
立ち上がった女神の首筋。。。その後ろには女神とは似ていない三つの顔。。。。
「怒り」「悲しみ」「喜び」が背負われている
溢れる髪の中からのぞき見るように現された顔たち
その下

背中から力強く伸びた十の手
右手に「槍（やり）」左手に「仏塔」
それ以外の手には全て「刀」が握られていた

その後ろ
壁に続く炎の影の向こう
円を巻く曼荼羅のように見えるそれは
大小様々の「地獄」

ハッとする

めぐる姿の中
その姿は「御仏」たち
なのに各々が地獄の使役についている
ある者は「血の池」に同じ姿の仏をけ落とし
ある者は「針の山」に同じく仏を歩かせる

「鬼は。。。どこに。。。。？」

私は救いを求めるように目を凝らし「悪」を探したが
壁の曼荼羅には「鬼」は見つからず全てが「仏」の所業によって書かれていた
目を動かさず。。。静かに注意を高める

暗くはないこの部屋が。。。。恐ろしい

リーン
とした耳鳴り

異様。。。。何もかもが違う姿

リーン

頭に鈴が響く
違いすぎる

見たことのない御仏の
見たことのない曼荼羅（まんだら）

これはなんだ。。。
何故仏たちは「争い」の中にいる？
私の疑問
「怒り」を感じ取ったかのように答えが響く

「現世（うつしよ）だ」

。。。。。

頭にまた響く
そして「毘沙門天」は現世にはいない。。。。。

「知らねばならぬ事。。。目をつむるな」

声は神々しい。。。
「これを？知れと？」
私は誰に話すでなく答えた

「これが世の真理だ」

頭に声が響く

これが真理と？
悪趣味な。。。。。

仏の身を借りて「地獄」を演舞する絵巻を「真理」とはなにごと！！
私は四方を見回す
「どこにいる！！」

「戦え！！！」
即答
胸が逸る汗がこぼれる
「戦え「虎千代」。。。。。。オマエの願いのままに「敵」を屠れ」
「やめろ！！！」

暗い闇の中私は怒鳴った
いつ。。。いつ私はこんな「闇」の中に身を滑らせてしまったのか？
胸の中にいたはずの「つや」はいない
御仏の姿も消えている

正面に見えるのは。。。。「小さな影」

「戦え。。。。それがオマエの願いだ」
「違う！！！」
私は否定する
だが影は別の声でそれを笑った

「嘘だ。。。。。戦うハズだ。。。「僕」は戦うから「トラ」も戦う」

影は私に近づく
私は
「争いなど。。。。のぞんではいない」
「いや。。。望む。。。戦う事を。。。敵を討ち滅ぼすことを」
私の肩に手を絡ませ
息を吹きかけるように近づいた顔は笑って
「僕は戦うよ」

闇の影。。。。それは。。。。「私」？

「うわあぁ！！！」

亀裂
頭の中に大きな音の鐘が響く「闇」に堕ちる

「トラ！！！」
闇が一瞬で割れて消えた
私の肩を激しく揺らしているのはジンだった
息を呑み目を見張る

「トラ？。。。。「虎千代」？。。。。」

肩ににかけられた手を
ジンの手を握る

ジンは私の顔を「疑う」ように。。。ゆっくりと見ている
確かめるように聞く
「どっちだ?」

「何が?!!」
おかしな質問に私は掴んだ手をはね除けて聞いた
「ジンなのか?。。。。ココはどこだ」

じっとりと汗をかいている
刀の柄に手を伸ばしていた。。

「オラんち。。。だよ」

ジンのすぐ隣かなり驚いた顔をしたつやがいた
私は当たりを見回した
気配はもうしない
「黒い」影もいない。。。感じだ

誰の声だったのか?

「トラなんだな?」

落ち着かない私にジンは念を押すように聞いた
返事はせず背中に感じる気配の方に向いた
暗闇に輝く
黄金の目をじっと見返した。。。。
生きているかのごとくの表情に問うた

「あなたの。。。声。。。。?」

そんなハズはないと思いながらも正面に座す「刀八毘沙門天さま」に問うた

静かにもう一度問う

「あなたなのですか？」

黒い女神の目は何処を見つめているか。。。。わからなかった

？

「揺れてる？」

闇に捕らわれ固まってしまっていた私には感じられなかった微妙な響きをジンは感じた

「なんか。。。。揺れてねえか？」

私の奇声で驚いてしまってたつやも何かを感じたようでソワソワしている

刀に手を置いたままだった私は二人の法に向き直り冷静さを取り戻して聞いた

「このあたりは山犬でもでるの？」

つやは答えた

「いないとおもう。。。猿かな？」

不安げな顔

「山犬」ではない何か。。。
さっきの声では?今一度振り返ったが木漏れ日野中に立つ女神にはもはや何も感じる事はできなかった
「群れでいるのかな?」
ジンの臨戦態勢にはいり堕ちていたこん棒を拾い上げた
「群れは。。。ヤバイ」

考えているうちに
今度は揺れを感じた続く音
その不気味な地鳴りのような音はつやの耳にもとどいていたようだ

「明るいうちに帰ろう」

私は刀を抜く仕草をして見せた
僧の姿で持てる刀は小太刀程度だこんなものでは山犬が群れに囲まれたら対処はできない

つやは
いそいで
先ほど見つけたと思われる小さな袋を手にとり
胸の中に入れた

「これだけあればいいから。。。行きましょ。陣江さん!!おトラさま!」

慌ただしく私の手を引いて御仏達が並んでいた最初の間に走った
一番角の仏の半身を引っ張ったところに小さな小窓が出来ていた

「入って！！」
つやに呼ばれるまま体をかがめ小さな入り口をくぐった
暗く湿った通路は私たちには小さすぎて
背をかがめたままでしか前に進む事はできなかった
が前をジン後ろを私が守るかたちで進んだ

道を行く途中

一度今来た
小窓の方を振り返ってみた。。。
もう
何も感じる事はなかった

「僕は戦う」
無慈悲な笑みで闇の中。。。私は言った。。。あれは

忘れよう。。。
頭を振った
疲れていたのだ。。。
もしあれが私ならば。。。それは「戦」に対する「嫌悪感」からでた「心」だ
ココにくるまでの間色々と忙しかった
疲れた心が普段は「禅」によって律されている「不安」を具現化したんだ
強く頭を振った。。。。「邪念」に言いように言われて。。。
これだから「禅」組まぬ朝などあってはいけない
ささいな「不安」に笑われる

とにかく。。「反省」だ

闇を行く中
警戒しながら前を歩く
つやに話しかけた

「あそこにあった仏像はいずれ全部運び出そうか？」

つやは止まって首を振った

「いいの欲しかったのはコレだけだから」
と言って
胸に入れた袋の中身を見せた

小さな駒のよう物が
その手のひらにあった

よく見ると
それでもしっかりと彫り込まれた「仏像」が三つ入っていた

「これは。。。」
しゃがんで顔を近づけて見た

「これはとと（父）さまが私に造ってくれた物なの」

大きさも
親指ぐらいの物二つと
小指ぐらいの物一つ

一つ一つ
つまみ上げて言った

「とと（父）さま。。かか（母）さま。。。。。。オラ。。」

ああっ
そうだったのか

つやは
家族をとりにココに来たんだ
小さな手のひらに乗せられた家族の仏像
大切な思い出と
大切な「宝」

優しいつや

「後の物は死んじゃった人の物だからいらないの」

私に向き直って話した
つやの頭をなでた

「そうか。。。わかった」

考えてみれば
御仏さまだって
あそこで静かに
そして大勢のお仲間と暮らされた方が良いのかもしれない

しばらく進むと
まったく光の無い場所に出てしまったが
被せたふたのような物を押し上げてみると
昨日泊まった
お堂の裏が見える小山のところに出た

日は真上にのぼっている
きっと昼近くだ

「はぁ。。。。」

大きく腕を上げて深く呼吸した
澄み切った杜(もり)の香りをたくさん吸い込んだ

つやは開けたふたを元通りに被せて
小声で

「おやすみ。。。じぃさま。。」
と手を合わせた

私とジンもとなりにすわり一緒に手を合わせた

「おトラさま。。。」

武士(もののふ)が名も無き百姓に手を合わせるなんてありえない事だったのだろう
驚いた表情のつや

でも
私がそうしておきたかった
そうする事で少しでもつやの家族に安心してほしかった

つやは元気にしてますよ。。。。家族のみなさん。。。心配なさら
ないで浄土に向かってください
いや
真実の浄土は仏さまの住居する場所だと言われるのならこの杜はま
さにその「地」だ
多くの御仏と共に。。。。静かな平安なる世界
「ジン！しっかり経をとなえろよ！一応坊主なんだからさ！」
「うるせー！！わかってら！！」

軽く私に頭をこづかれ
手に数珠を通しながらジンは丁寧に経を唱えだした

私とつやは顔を見合わせて笑った
「終わったら行こう」

私は顔をあげ杜を。。。草木と古木に埋まった社をもう一度見回し
たが
浄土にもっとも近いこの地にもはや「闇」を感じる事はできなかった
不安で。。。顔を少し強張らせて
それでもつやに微笑み
手をつなぎ山を下り始めた

その背に経を終えたジンが
「虎千代？」
またも変に小声で聞いた

「それは子供の時の名前だ！私は影トラ。。。なんだってんだよ」
振り返った私の前ジンの顔は何か不安げだった

「いや。。。。何でもないよ」
「まったく」

変な応対
背中にあたる風を感じた私はただ早く城に戻りたかった

「つやぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

「影トラさまぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

杜の静寂を破る大声がお堂の方から響いた
前を懸命に走ってくるやたろー？実乃？
二人共怪我をしている

「どうしたんだ実乃！！」

私の前まで全力で走ってきた実乃の顔は。。。。
赤く腫れ上がったばかりの
「新鮮」な傷だらけに血の跡

実乃は息を切らせながら
「よくご無事で。。。ご無事でよかった。。。」

そう言えば朝から向こう昼まで私はいなかったのだから。。。

「ああっすまない。。と。。いうかどうした?この怪我」

どっかりと目の前に座り込んだ実乃は涙目で
「なんでもござらんです。。。このわしの未熟さが招いた罰ですわ。。」

いやいや
何がなんだか
私はまだ濡れていた着物の袖で腫れ上がった額を拭って

「心配かけた。。。でも。。つやも見つけられたよ」

と労をねぎらった

「つやぁぁぁぁぁぁ!!つやぁぁぁ!!」
となりでは
つやを抱きかかえ号泣のやたろー
実乃と同じく凸凹になった顔

びっくりと。。困った顔の混在するつやが

「アホ!やたろー!!手紙置いてきたでしょ!!」
抱えられたまま
つやはやたろーの頭をポコンと叩いた

「えええっぐぐ。。えぐ。。」

涙と鼻水をたらして
形無しのやたろーの顔を
じっと睨んで

「おトラさまにまで迷惑かけてしまったわ。。。」

でも
すぐ微笑んで

「探しに来てくれてありがとう。。。」
素直なはにかみ

うんうんと
うなずくやたろー

「良かった」

私の言葉に
実乃も号泣

「よかった。。。ホントに。。よかったな。。やたろー」

二人の男は向きあって
お互いの健闘を祝すようにうなずき肩を叩きあった

とにかく
良かった
私はつやの顔をみた
口を尖らせやたろーに説教している。。。。笑ってしまう

こうして
ちょっとした騒動は幕を閉じ帰路についた

帰りすがら
怪我の事を馬廻りの秋山史郎（あきやましろう）に聞いた。。。
なんとも。。。
「親ばか」な。。。

つい声をあげて笑ってしまった

帰る道の間じゅう
つやに小言を言われているやたろー

きっとそのうちに
尻に敷かれてしまうな。。。。その日は遠くなさそうだ
そんな想像をして
クスリと笑った

「そうだ。。。ジン「腹」の方は大丈夫か?」

思い出したように聞いた
道すがらやたろーの話しに笑っていたジンの顔が気まずそうに変わった

「大事ないよ。。。」

焦ったように小声で答える
隣を歩いていた実乃に

「よくわからんのだけどさ。。。ジンは腹を打ったみたいで「抑えてたから」後で見てやってくれ」

と

頼んだ瞬間
実乃はジンの方に向き直った

「陣江。。。」

なんか怒った感じの声
私の方からでは実乃の表情はわからないのだけど
ジンが必死に首を振っているのだけはわかった

「遠慮するな。。ちゃんと傷を癒せよ」
「違うっつうの!!」
「違うのか?」

詰問される?
実乃に詰め寄られるジン
「股打ったんだろ?」
「違うっ。。。。。」

私のとなり歩きながらも顔を真っ赤にしてしぼむジン
それを睨んでる実乃。。。。

「よくわからん。。。」

そこまでいって背を伸ばした
昼の日差しは高く。。。。涼しかった
細道を歩き離れた所に来て
もう一度「社」の方に振り返ってみた。。。。連なる山陰の元の「国」

何も感じなかった

ただ
あの崩れた社で見た「奇妙」な毘沙門天の事と。。。。「闇」の顔が自分自身であった事は。。。
不気味で深く心に残った

その9　別れ　（1）

「何事もなく無事で良かったです」

二の屋敷。直江の部屋にてまだ傷も生々しい実乃は面目なさげにしょげたまま頭を下げていた
「直江様には。。。まったくもって申し訳なくおもっております」

例のつやの事件以前から。。。二人の重臣は「影トラ」に対して規制をしいていた
「加当陣江（かとうじんえ）」を影トラに近寄らせないもちろん
二人の中で決めたことで大々的に実施していたわけではなかったが
「注意」を怠っていたわけでもない状況の中での事件だった

「その。。。影トラ様の様子からして「何か」あった。。。という事はなようですが」

「でしょうな」

事の重さを十分に認識している直江の答えは冷静だったが
実乃の迂闊さに多少に苛立ちがあった
そもそも実乃が影トラを望みその底知れぬ「強さ」を欲していたのにと思えばこそ余計に「迂闊」。。。。
直江は書棚から紙を取り出すとそのまましょげている実乃の前に座

った

「実は春日山から手紙がきまして」
文台におもむろに出された手紙に頭を下げていた実乃のは体をおこした
「こちらに着いて早。。。二年ほどになりますだいぶん下地も固まった事でありましょう。。。春日山に戻らねば。。。なりません」

「春日山から「疑い」が懸かっている?と言う事でありましょうか?」
文台の書を改めるように眺めながら直江は吹くように息をもらして答えた

「。。。「疑い」ですか。。。。どういう意味かわかりかねますが。。。」

微妙な駆け引き
実乃の知る「あの日」の出来事を直江は知らない
直江は。。。。影トラにとって「敵」なのか?それがまだわからないところだった

「わしは。。。影トラ様がこれからも越後にとって大事な仕事をなさる方である事は「確信」できましたが」

実乃は直江の言葉にただ頷き
「そう信じて頂けたのならば。。。わしも安堵したというものです」
とひれ伏した

その姿を横目に直江はもう一つの心配事に触れた

「加当陣江の処遇についてはもはや解決しております。。。心配は無用でございます」
静かだが
少し悲しげな声に実乃も何かに気がついた

「越後をより良い方向に進ませるためにココで躓く訳にはいかぬでありましょう」

実乃は直江の言葉を心強く感じた
そのままま頭を伏せ
「では。。。よろしゅうお願いいたします」
返礼に直江は遠い目をした

「正しく義を成し，越後のために尽くすように」

それは
初陣を飾った時に母から送られた手紙に書かれていた言葉

手紙は
戦勝の祝いと後はまるで「教訓譚」のような内容だった
母上らしいといえば。。。
らしい
母の手紙はそれ以降はなかった
言葉の少ない母を象徴するような手紙だった

私は書かれた「訓辞」にならってその後の日々数多の「戦」を走った

そのかわりと言ってはだが
師，光育からは頻繁に手紙が届いた

戦に望む武士（もののふ）の心得や
人の上に立つ者の心得
事細かに書かれた手紙は
これまた
師をよく表していた

栃尾城に入ってからのこの二年は怒濤の日々だった
最初の三条衆から始まってその大元である同族でありながらも「誇り」を失い己の権力に執着した「叔父」とも言える人「長尾俊景（ながおとしかげ）」との戦いは長かった

何度も戦った
負ける事は一度としてなかったけど
同じ一族であったとしてもこうも「志」に差がでて
「己」を中心に全てを平らげようとする卑しさに呆れ「怒り」に燃えた

「人を屠る日々」

決して慣れない事だ

戦にでる時にその前日から仏間に入って

心を静めた
「怒りにまかせたままではいけない」

そうして
迅速に「戦」（いくさ）を行い
恐怖に自分が負けてしまったり
怒りの「闇」に落ちてしまわないようにした

あの祠での言葉
「僕は戦う」
。。。。。

いや私だって戦うだけどそれがただの「怒り」によって行われてはいけないと
自分を律するために
師の手紙に書かれていた言葉を胸に深く刻んだ
一度乱れてしまった
治世を良い方向に取り戻すのは
大変な作業だ

戦にでている間は
直江や
実乃が

「戦」の道理というのを教えてくれた
それこそ見たこともない。。。いや正確には覚えていない父の「戦」を習えと教えられた

でも慣れない
でも

泣いてばかりもいられない
もっと涙を流している者たちのためにも
私は「戦わなければ」ならない

自分の意志にキリをつけるためにも
頭の中で入れ替わる「黒い意識」については
出来るだけ考えないようにした

とにかく不慣れながら自分の責務を果たす日が続いた

「トラ！背が伸びただろ？」
朝，禅を終えてから
武具の日干しをしているところにジンとやたろーがやってきた

「伸びたか？」

そう言えば前はドンドン背を伸ばしていくジンを見て
自分はいつ？
伸びる
なんて気にしていたのに
忙しさに忘れてたよ

「伸びたよ」
ジンは目の前にきて言った
私を見回すように

戦のない日

そういう静かな日にしかジンには会えなくなっていた
久しぶりだ

戦が決まれば
いつも
いつも
ジンを城に残した

ジンはいつだって一緒に行くというのだけどやはりダメだと思って
だから
こういう日にしか会えない
会わないようになっていた

「ジンもまた伸びただろ？」
だから久しぶりの友の訪れは嬉しい

「オレはいつかやたろーを抜くの！」
ジンはやたろーの大きな胸を叩きながらきっと伸び悩んでいる自分
にちょっと苛立ちながら答えた

ジンは極力「戦」から遠ざけてきたが
逆に大男のやたろーは毎回の戦に参陣している
かつては盗賊だった仲間を引き連れ
私の行く所，何度もの戦に
共にでる家臣になった

やたろーは最初身体に合わせた「鎧」がなくて困っていた
なにせ大きい身体
おそらく栃尾城で一番大きな武士（もののふ）だ

そこで実乃の古い鎧を貰い
自分で手直しして使っていた

そんな事もあったが例の「つやの事件」以来さらに
やたろーは実乃は親睦を深めていた
もちろん年の差があるから「あの日」みたいな
無礼な事は出来ないけど
よく一緒に酒を飲んでいる

しかも
子供が好きみたいで
城内にともに住まう「小嶋」の一族の子供たちをよく世話している
子供達の服もよく繕っていた
あの大きな手でせっせっと裁縫をする姿が微笑ましい

「おトラさま。。。今日，お客様がくるんじゃなかったの？」
相変わらず
身体に合わせたのかゆったりした言葉運びでやたろーは聞いた

「ああっ昼にいらっしゃるそうだよ」
籠手を並べて答えた
やたろーの後ろに付いて歩く子供「つや」が
心配そうな顔で私に言った

「おトラ様帰っちゃうの？」
「帰らないよ。。私の城はココだから」

私はしゃがんで言った
やたろーに付いて歩き今では「娘」としてみんなにも良く知られる

ようになった
「じゃあまた「字」を教えてくれる？」
もじもじしている姿が可愛い
「もちろん。。」

戦のない日に私はジンと一緒に
子供達に「字」を教えたりしていた
つやは利発でよく学ぶ子だ

「私が戦でいない時にはジンに教えてもらってね」
と頭をなでた

その時
ジンがどんな顔をしていたのか。。。
気がつく事はなかった

昼過ぎ
やってきた物達は新たに私の馬廻り衆となった者たちと
「安田城」から城主「安田長秀（やすだながひで）」が共を連れて訪れた

「直江実綱（なおえさねつな）殿には春日山に帰参せよとの事です」
うすうす気がついてはいた事だった

直江はかれこれ二年もココに駐留して
共に戦ってくれたが
そもそも

春日山に欠かすことの出来ない人物だ

労をねぎらいたい気持ちでいっぱいだ
初陣から向こう
どれだけ助けられたか

「直江。。本当に今日までありがとう」

人払いをした部屋に
実乃と私とで
直江に深く礼を言った

直江は笑って
「春日山に戻るだけです，これからも影トラ様の事見ておりますよ」

大きな男だった
父を思い出すことのできない私にとって
本当に大きな存在だった
そう思うと

こんな事で泣いてはいけないのだけど。。。涙が貯まってしまう

「ところで紹介したい者がおります」
私のそんな感情を察したのか
直江は続けてその名をよんだ

「おせん」

呼ばれた名に続き襖から出てきたのは
私より少し年下だろうと思われる「女子（おなご）」だった

「おおっおせん殿，久しいのぉ」
実乃は知っているようだ
「大きくなられた。。」

彼女は私の前に座ると頭を深くさげ
「直江実綱が娘，おせんにございます」
と
挨拶した

「私の娘です。。今日からここで影トラ様の身の回りの仕事をさせたいと思っております」
すこし面食らった
娘と言われた彼女は
父によくにてきりりと結んだ唇を開いて
「よろしくお願いいたします」
と
もう一度頭を下げた

急な事でびっくりしてしまったが
実乃はすでに知っていたようで何も言わなかった

「ああっ。。長尾影トラである。。よろしく」
声がうわずって変な返答になってしまった
が

続く直江の言葉に
ただでさえ急に決まったこの出来事を凌駕する驚きに言葉を失ってしまった

「今回の帰参にあわせ，加当陣江（かとうじんえ）を連れて帰ります」

本当に
言葉を失ってしまった

衝撃を受けるというのはこういう事なのだ。。。。

その9　別れ　（1）（後書き）

「阿虎」なるお酒がある事をメッセージで頂き知りました

是非飲んで見たいものです

そんな

お酒を飲むことで

少しでも

影トラの考えに近づく事ができるような。。。。

迷信的に思ってしまう火星です

その9　別れ　（2）

晴れていた
一年前のあの日
三条衆を死地滅（しちめつ）にした時
その手をふるった櫓（やぐら）の先の石垣に一人で座って
まぶしい日差しの中
目を細めながらもずっと続く総構えの向こう
城下の向こうまでを見ていた

遠くに
直江とジン
そしてその一隊が春日山に向けて
この
栃尾を離れていく姿が小さく見える

澄み渡った空の下
遠くに
遠くに
霞んでゆく人影達。。。。

「どうして？」
私は宴を抜けて
ジンの住む三の丸の雑兵長屋まで来ていた

頭の中は疑問で
いっぱいだった
でも
時間だってない
明日にはジンは直江と一緒にココを後にしてしまう

どおしてそんな事になってるの？

昼に会ったときは何も言ってなかった。。
笑ってた
「背が伸びた」
そんな些細な会話をしてたのに

何一つ私には言わなかった

直江の帰参に合わせた慰労の宴は長く続いていた
本当なら父親の代わりまでしてくれた直江に毅然とした態度で「礼」
を尽くさなければならない
私の心はそこに留まる事ができなかった
落ち着かない

きっと身体は小刻みに揺れている
心も
そんな中身を
家臣に見破られる訳にはいかない

気持ちはドンドンざらつき
焦りが苦痛の表情になって出てしまいそうで
押さえつけるために
何杯も酒を煽った

早く会いにいかなきゃ

進む宴をよそに
たくさんの酒をおしげなく振る舞った
少しでも他の者の目を反らしたかった
宴が下りになりかかった時
ようやく私は
厠(かわや)に行くと言って
部屋を後にした

後にして
とにかく走った
なりふり構わず

そうしてやっと

長屋に
ココにきていた

ジンの部屋には灯籠の火が立っていた
「ジン！！ジン！！」
戸板を叩いた

慌てた物音がして戸は開いたが
私の焦った顔とは違って
落ち着いた表情でジン

「どうしたの？」

「どうしたの？」
普通に切り替えされた私は
そのまま続けて聞き返した

「春日山に帰るって！！」

返事を待った
冗談だ
きっと嘘
じゃなきゃ
あんなとぼけた反応を示すわけがない

ジンは草鞋をはくと私の前にに来てしずかに言った
「ああっ。。帰るよ。。」

静かで
冷たい声

「なんで?どおして?」
私は半分正気でなくなってしまいそうだった
わからない事でいっぱいだよ

だって

だってさ
ジンは
光育(こういく)から
私の側にいるようにと言われてココまで一緒にきたのでしょ?

「直江殿について兵法を学ぶんだ」
ええ。。。

私は頭を振った
正気だ
酔ってなんていない
でも

なんで

「そんな事ココでだって出来るだろ?」
「出来ないよ」
即答?

いつものジンじゃないの
いつも
もっとふざけてあっけらかんとしゃべってくれるのに

「ジン。。。なんで?」

私から顔を背ける
なんでさ!!
肩を引っ張った
「なんでさ?」
強く引いた

振り返って
「トラの役に立ちたい」
真っ直ぐ顔を見て言うジン
役にって。。。
今だってココにいてくれる事でどれほど助けられてるか
「戦(いくさ)」の後
あの
軽口を叩いてくれるジンがいるから。。
私は。。。

「コ。。ココにいてくれればそれだけで。。武士になんかならなく

たっていいよ！」
「ダメだ！！」
真面目な面持ちでジンは私を見ている
言葉がでない。。息があがる
そんなふうに怒った顔？
初めて見るよ

怒ってるの。。。。
わかんない。。。
「どお。。どぉして。。。。」
俯いた
わかんないよ。。。

ジンは私の前にひざまずいて
「トラ。。」
首を振る
「トラ。。」

「泣くなよ。。。」
泣いてる。。。私。。。泣いてる？

「泣くなって城主様がそんなんでどうするんだよ」

前にひざまずくジンの肩を力一杯両手で掴んだ
「近くにいろよ。。。」
手を離したら。。ダメ
首を振るジン

ジンが遠くに行ってしまうなんて。。。
考えた事もなかった
いつも一緒だ

いつだって一緒

たくさん
助けてもらっているよ
春日山から栃尾に来た時
ひょこり着いてきてくれた事

どんなに嬉しかったか

初陣の後
自分のした事に恐怖してしまった私を
安心させてくれただろ？

いてくれるだけでいいんだ。。。
いて欲しいんだ。。。

私のために
ココで僧禅の話をしてくれるだけでも安らげる。。。それだけでいいんだ

「いやだよ。。」

どおしてこんなに「涙」がでてしまうの？
とめられない

「トラ。。。聞いてくれ。。」
困ったように
諭すように
ぐしゃぐしゃの私から目を反らさずジンは続けた
「これからトラはもっと大きな仕事をしていく。。その時オレは今以上にずっと力になってやりたい。。」
頭をかきながら
一言一言を懸命に選ぶように

「ずっとトラの近くにいるために。。今がんばっておきたいんだ」

頭一つ私より大きなジンを見た
下からあおぐように見る目は

もう
決めてしまっている
そういう表情
そんなに真面目に。。。

ただ
僧であってくれればよかったのに
武士（もののふ）になんかならなくたっていいのに
余分な事を考えなくてもいいのに
いろんな言葉が浮かんだ

でも
もうダメ
そんな事いっちゃいけない
「男」がこうすると決めたんだ
武士（もののふ）加当陣江として行くと言っている

もう
何も言えないよ。。。。

「帰ってくるよな。。ココに帰ってくるよな?」
一生懸命の私の言葉

立ち上がり
今度はジンが私の両肩に手を置いて

「ああっトラのところに絶対に帰ってくる。。」

そういうと手を一度離した
ジンは月を見て
もう一度正面，私の顔に向き直って

「トラのところにしか帰らない。オレは」

そう言って微笑んだ

その9　別れ　（2）（後書き）

相変わらず

機械の使い方が今ひとつわかっていない火星です
なので
相変わらず
お返事ができなかったりで
メッセージなどくださる方に返事もままならない感じですいません

どうも画面にでているとおりにはうまくいかないのです（爆死）

気をつかって頂いて
返信は入らないですよ
などと行ってくださる方にも
もうしわけないです

後書きをつかって
ちょこちょこ返事させて頂きますのでご了承くだされ

しかし。。。。
まだ先は長そうです
なかだるみしないようがんばって走って行きます
これからもご意見，感想等々よろしくお願いします

その9　別れ　（3）

ジンが直江に兵法の修学を頼んだのは
直江が春日山に帰参する一ヶ月前の事だった

もちろん
この時点で直江のが春日山にもどってしまう事など知るよしもなかった

「ジンは城の中に!!」

戦に出る時トラは決まってそう言った
絶対について行く事を許さなかった

トラを助けたい
いつだって近くにいて助けとなりたい
と言う思いは
トラの初陣以来ずっと募る思いだった

そもそも
そのために寺を。。。。
実は抜け出して来ていた
師，光育（こういく）にはトラ共々幼かった頃から
「支えとなれ」とは言われていた

だから
どんな事をしたって

「支えたかった」

身体を鍛えた
いつだってその「楯」となるために。。。

だけど
現実は「城の中」

「弱き者」たちの助けになってくれと置いていかれる

林泉寺時代から常にトラの身の回りの事や
その後に来るべき事のために「備え」てきたのに
いざ外の世界にやってきたら

驚いたことに
「僧籍」の者であるがために
戦うことを一切許されていないという状態になってしまっていた

何度もトラに食ってかかった
「オレはどんな馬廻りより役に立つ」
答えはいつも一緒だ
「わかってる」

「わかってる?」

何がわかってるんだよ
なんで
オレを連れて行かないんだよ

今までずっと一緒にやってきた事を
ココで拒否するなんて

思いは怒りにだってなってしまう
でも
それさえできない

戦から戻ってくるトラには
絶対に心の「支え」が必要だった

戦に出て行く時はまるで「鬼神」のごとくなのに
帰ってくるとガタガタになってしまう

いつも涙にくれる
トラを励ます

そんな姿を見たら
自分の不甲斐なさがさらに増すだけで
怒ってなんとかしようなどという気持ちにはなれない

それだけでも「支え」なんだと言い聞かすしかない

そんな歯がゆい気持ちで城門を出て行く軍団を何度も見送った

「私を直江様に「仕官」せて頂けないでしょうか？」
戦から屋敷にもどった直江に
ジンは引くに引けない態度があふれ出てしまうほどの表情で言った

陣江を部屋に通した直江は
城内整備の書き物をする手をとめて
しばし黙ったが
筆をおろすと姿勢を改めて聞いた

「影トラさまに仕えるのではなかったのか？」

確かに
陣江は唇を噛み思い出した
男に「二言」があるのはよくない
栃尾に来たときその事を直江の前で「誓って」いる事

トラに仕えると言ったのに
直江に「仕官（しかん）」しようとしているのは
矛盾

目の前拳をがっちりと握った陣江は答えた
「戦場(いくさば)で働きたいのです」
思い詰めた表情

直江はいぶかしい。。。といった表情になった

実はずっと気にしていた事でもあった
影トラ様はこの二年で多くの戦に参加してきた
それも驚異的だ

一度として「敗北」を喫した事のない影トラの戦いは
多くの武士(もののふ)を惹きつける
その迅速で烈火のごとくの戦いぶりはいまや越後の何処に行っても
聞かれるようになった

「栃尾城に住まう虎」

それは各「国人衆」にとって今までにない脅威となっていた

だけど
その実「心」の弱さをいつも持っていた

戦に一区切りがつき

帰路につくとその疲労は顔にありありとでている
もちろん
まだ十六歳になったばかりの若様
体力的にも辛いものがあるのかもしれないが

直江が問題にしているのはそこではなかった
城に戻ったとき

「陣江に会う」

それが問題だった
実乃もその事をひそかに懸念していた

今「ただの女」
になってもらっては困る

いけないのだ

戦場からもどった影トラが祝勝の宴の後
陣江に会いに行くのはずっと気にしていた事だった

今はまだ

「何」をしているわけでもないが
陣江は十九になる男だ
鍛えられた立派な身体
そして「心」を支える優しい「男」に

「その気」になってしまったら？

影トラは自分が「女」だから陣江の元に走るという意識はないようだが
「女」の身体である事はわかっているようだ

それは陣江もご存じだ

何かあってからでは遅い

この「強き」将が今はまだ越後に絶対に必要で
そして
その後
さらなる力になる可能性は高い

「越後」を円滑に支配するに一番「必要」な方になっているのだ

「女」である影トラ様の意志は
この最考慮の内には入れてはいけない
何もかもが始まったばかりなのだから

「ふう」

結んでいた唇から思い息を吐き出した
どこかでこの「心配事」に決着をつけねば？
そう
思っていた矢先の申し出だった

「願ったり叶ったり。。。か。。。」
思った
帳簿を下に置き向き直って

「影トラ様と離れる事になるぞ。。」

試すようにジンに言った

ジンは口ごもった
困った顔になっている
「正式に仕官するのであればそれなりの時も必要だ」

二の句を間に挟まぬ早さで
言葉を積み重ねる
「戦場(いくさば)で役に立ちたいのならなおさらだ」

直江には大人の余裕があった
たたみかけるように仕官に望む心得を告げる
逃がしてはいけない
本人が望んでいる事で「ココ」を去るのなら

別離は本人の意志であり
それによって
良い結果を導き出したい

。。。。。

矢継ぎ早に「覚悟」を迫る言葉をかけられ
陣江は
深く悩んでいた
でも
ココで仕官が叶えば
この先ずっと「トラ」の行く「戦場」に着いていく事ができるハズ
という思い
その想いに今までの「悔しさ」が相乗される
今のまま
城に残って帰りを待つなんて「女房(にょうぼう)」のようなこと。。。

目をつむり自分心に抑えていた事を
ジンは
もう確信していた
どうやったって「報われる」事はないのだけど
やっぱり

「トラが好きなんだ」

好きな女が戦に出て行く
そんな姿をただ見送る「男」ではいたくなかった

帰ってきたとき
泣いて苦しんでるトラ
その重荷を戦場で少しでも減らせられるのなら
近くにいて
支えてあげたい

ただ
近くにいて守ってあげたい

想いは一つだ
胸の真ん中を強く抑えて

「覚悟しております」
ジンは真っ直ぐに答えた

その表情をしっかりと見据えて
直江は一言
「あいわかった。。」
と
答えた

陣江の去った後，直江は一人
釈然としない気持ちになっていた
自分で仕官したいとは言ったが
。。。。。。

若い者の「純情」を踏みにじった
そういう自責の念は拭えなかった

あれほど真っ直ぐに「惚れている」男の気持ちを。。。
年甲斐もなく胸が痛んだ

仕事の手をおろし

「しかし今はそれしかない。。。」

そうこぼし
春日山に手紙をしたためた
娘の「おせん」を呼び寄せるために

そして過日その事を実乃に。。。。告げた
告げた時にも直江の心にはわずかながらに痛みがあった

昨日の夜
トラに別れを言った
もちろん一方的な「懸想（けそう）」（恋心）を押しつけた訳じゃないし
そんな事今は言う価値もない

もっと強くなって帰ってくることを誓う
トラを守り支える者になる

「トラのところにしか帰らない」

不器用ながら
今言える精一杯の言葉を残した

あのとき目の前にいる
華奢なトラを抱きしめてしまいそうになって
腕が宙を彷徨った

ダメだ

まだ。。。今はまだダメだ

強くなるんだ

誰もが認める武士（もののふ）になって

大きくな男になってその時には

もう一度「この想い」を。。。。

拳を握りしめた

自分に誓う

偽り無い心を

そんな決心を滾らせながらも

顔は少し笑っていた

今はまだダメだろうな

トラはニブイから今はオレを「男」だなんて見てないだろうし

そんな事を考えて自分を笑った

朝

トラは

栃尾衆の中，帰参する直江殿の後に
自分の前にきてその手から「数珠」を渡してくれた

「影トラはいつも共にいる。。。励め加当陣江」

震える唇をキッと結び
送り出してくれた

泣かずに
。。。泣かないよな人前だし。。。

「わわかりました。。。影トラ様」
深くお辞儀した

やたろー達が城壁に昇ってが大きく手を振っている

栃尾の城を下り
一度振り返った

初陣の日
激を飛ばした櫓(やぐら)近くの石垣に
足を投げ出して座っているトラが見えた

「泣くなよ。。。」

注意するように独り言を言った

絶対に帰ってくるよ
絶対に

オレの帰れる場所は「トラ」の所しかないんだから
待っていて。。。

そう自分を叱咤して春日山に向きを変えた

その9　別れ　（3）（後書き）

毎度です

昨日までに
初陣からココまでをまたも。。。。修正しました

ごめんなさい

ポロポロと書きこぼしていたりするんですよ。。。
後
予定を一話オーバーしてしまったりで
なかなか
ままならないものです。。。

次回からは
より「戦国」の世界に入っていきます
が
例によって例のごとく
ココでは簡略化されていたり
解釈の差があったりもします

そのあたりはご了承ください
また
「残酷」な描写も増えるし
「性描写」も出てきますから

十分に注意してください

それでわ！！

これからもがんばります！！

ヒボシ

ココまでの登場人物

長尾影トラ（トラ）
本庄実乃（親ばか，４熊の一人）
小嶋弥太郎（やたろー）（親ばか？４熊の一人）
その娘（藁）　つや

直江実綱（４熊の一人）
その妻
その娘　おせん（しっかりさん）

加当陣江（ジン）（只今兵法修行中）

長尾晴景（影トラ兄，現守護代）

虎御前（影トラ母，怖い人）
長尾為景（影トラ父，故人）

長尾政景（影トラ従兄弟）
その妻　綾姫（影トラ実の姉，キレイ，M？）

柿崎景家（長尾家臣，４熊の一人）

秋山史郎（影トラ馬廻り，白くなりました）

善治郎（やたろー部下，投げられました）
弥平（同上，驚きました）

４熊とは。。。。
適当に熊っぽい人たちって事で
ただ
直江さんからは抗議がきている事も。。。

その１０　禅問答（前書き）

小説評価，感想に
改行や空白がありすぎて
読むに絶えられないと感想をいただきました

感想としてそのまま残しておこうかともおもいましたが
小説事態の「感想」は一切なく
改行と空白の「評価」だったので
削除させていただきました
一言でも小説内容にふれてくだされば真摯に受けたいと思ってます

読むに絶えなくとも小説の評価をください

後。。。

その
改行，空白は
意図的にやってます

私が小説を読めない，最後まで読破出来なかった理由にいっぱいいっぱいに詰め込まれた「字」にめまいを起こすというのがありまして気持ち悪くなってしまうのです

だから
これは私の「文章」の書き方「スタンダード」です

それに絶えられない方は
ごめんなさい

というわけで
この小説は改行，空間が多々有ります
それに絶えられない方は注意してくださいくださいと
但し書きをしておきます

これからもご意見，感想はおまちしてます！！

では

新章です！！！

その１０　禅問答

人と対面する時は
できるだけ自分を正し毅然とした態度で接したい

いや
そうする事も城主としての勤めと日々かんじていたのだけど。。。
直江とジンがいなくなってしまってから私の心のなにかが抜けてしまったようで。。。
日々が緩慢としてしまっていた

狩りに出ると称して私は栃尾の総構えから向こうの田畑を歩き回る
日々だったがそれによってかなりの執務がおろそかになっている事には目をつむっていた
小うるさく私を窘めてくれた「ジン」。。。。。
なんでココでは「禅」の問答が出来なかったのだろう。。。。

畑道。。空を流れる細い雲を見ながらぼんやりしていた

「禅」を組む。。。。それだけでは何も得られない気がして溜息ばかりがでた

昼を回ったぐらいに城の屋敷に戻った私を迎えたのは「直江」の娘
直江が春日山に帰るのと入れ替わりに私の身の回りの世話係として

やって来ていた
「おせん」だった
顔立ちは似てない。。。
背は私と同じぐらいで。。。でも細い父親みたくがっしりはしてない
まぁ女の子だし。。。。

似ているのは目の感じ
厳しい狐の目と
父親によく似ている堅いしゃべり方いつも乱れない返答

そんなおせんが
めずらしく息の上がった声で叫びながら私を見つけると服をごと捕まえて

「朝方から。。。宇佐見定満(うさみさだみつ)様が登城しておらます！」

「宇佐見。。。」
知らない名前ではなかった
栃尾から信濃川を渡りさらに海にむかった側の所領「枇杷島」
上杉管領様から拝領した地に居をかまえる領主

「何しにきてるの？」

知らなくはなかったが興味もそれほどなかった
「。。。。わかりませんが。。。たぶんご挨拶では？」
おせんはきっと実乃に私を捜してくるよう呼びつけられたのだろう
汗を手で拭いながら袖を引いて屋敷の方を見た
今ひとつ気持ちがしゃきっとしないまま私は言われるまま屋敷に歩いた

「宇佐見定満。。。。」
ココに
栃尾に私が着いて以来周辺豪族に領主の話は一通り実乃から聞いていた
どれもがにたりよったりの狭い領地争いを「趣味」とするつまらぬ男達ばかりだったが
事
宇佐見については実乃が顔をしかめていた事を思い出した

父と戦い負け。。。そして勝ち。。。負けた男

私が産まれる前から産まれた後
海に巣くう闇の波のように押しては引いて。。。引いては戻る
巧みな戦で何度となく父と戦った男

「油断ならない男」

屋敷の通路を歩く足が速まった
少しだけ気分が切り替わったのだ
結局父「為景」の守護代という仕事を最後まで認めなかったのか？
なのにココ数年「長尾」が握った権力に逆らう事なく沈黙を守った男に興味を持ったのだ

「待たせて申し訳なかった。。。長尾影トラである」

私の着座に合わせ
宇佐見は深く頭を下げた

同時に
宇佐見の後ろに実乃が座った
静かな姿勢
下げた頭のまま低いが。。。起伏のない声が続いた

「お初にお目にかかります。。。枇杷島の宇佐見定満にございます。。」
「苦しゅうない。。。面をあげよ」

男とはいえずいぶんと痩せた細い体がゆっくりと顔を上げた
切れ長
いやどちらかと言えば「鋭い」刃物のような目に薄い唇
顔色は白く「病んでいる」かのようだが
体の内に持つものが違う。。。。
体の各部分の全てが
刀を合わせて作ったかのように。。。。。角の見える尖った感じの男
眉も動かさぬ
冷たい表情。。。。

歳は実乃や直江と同じぐらいか
挙げた頭
微動だにしない眼差しは私を射抜く

ただ見つめ最初の挨拶以降言葉を発しない
間を持たせる事のできなかった実乃は咳払いをした時

「作麼生（そもさん）」

冷ややかに光った目はピクリとも動かず私わ見つめたまま急に「問答」を始めた

「古木に咲く花は淡く美しいのです。。。。しかしその花は美しいのに木は枯れてゆく。。。」

急に始まった「問答」に実乃は目を白黒させた
私は自分が「いきなり」試されている事に気がつき心が締まった

「この花は来年も。。。。咲くべきか？」

宇佐見は腰に持ってきた扇を滑らすよう膝に向かって開く

「説破（せっぱ）」

久しぶりに「挑まれる」感覚
目が尖り心が鋭敏になる
私は宇佐見に同じく腰の扇を抜き緩やかに開いて見せながら答えた

「古木を討つべし！」
指先までを綺麗にそろえ「首」を討つしぐさのまま
「花に命を吸い上げられた木は美しさと引き替えに脆く危険である
目を奪う美しさに惹かれ木に寄りかかれば己が命に覆い被さらんとするやもしれぬ。。。。花が咲くのは末期（まつご）の光であり。。。危険への誘い（いざない）である」

私の答えが正しかったか？
それはわからない
だが固まっていた冷たい宇佐見の目は緩んだ

「なるほど。。。心を鬼にする術はご存じか。。。」
「そう感じたか」

宇佐見は扇をしまうと
問答の礼なのか深く頭を下げた
だが頭の下がる週間に見えた目は。。。。まだ何かを隠している光に見えた
私は警戒を怠らぬ構えで身を正したが
下げた頭のまま宇佐見は

「今日。。。ここに挨拶に伺ったのは。。。その「危険」を感じたからにございます」

と切り出した

顔がゆっくりと上がる「険」を深くたたえた額
後ろに控えた実乃をちらりと見てから
私に向き

「黒滝に不穏な動きがあります」

とはっきりと告げた

黒滝城城主（くろたきじょうじょうしゅ），黒田秀忠（くろだひでただ）。。。。
即答を避け思い出す
中郡（なかごおり）の討伐を始めた頃から。。。。
実はずっと気になっていた事だった

「黒田秀忠」は父，為景（ためかげ）の頃には侍大将を勤めていたほどの「寵臣（ちょうしん）」だ
なのに

ココ栃尾に私が移ってきてからは
一度として「討伐」の仕事に参加した事はなかった
表向き
城主，秀忠の養生のためと親書にはあったが

「何のために」か
城に蓄えを増やし続け
「浪人」などを大量に公募し
城の構えを強化するなど。。。。。

心を騒がせる事が尽きない

目と鼻の先である黒滝に「不穏」が漂っている。。。のでは

栃尾では「警戒」をたやしてはいなかったが。。。
しかし。。。
考えたくない事だ。。。

「不穏。。。とは?」

聞きたくはない
が

確かめなくてはならない

私の中には「寵臣」であった黒田を信じていたい気持ちがある
しかし

私は自分の勤めに従って
「不穏」の中身について問うた

思案の後の言葉を待つ前に

「長尾守護代家に牙をむく恐れ有り。。。という事でか?」

「敵対視」を表に出した返答
酒を用意させた
実乃が杯を盆に戻しながら聞いた

宇佐見は動かぬ顔で私を見ながら
「そう言う事実です」
無駄のない冷徹な答えを

はっきりと「謀反の恐れ有り」と告げた

夕暮れを越した部屋の中
弱く揺れる炎のように
心に微動ながらも動揺が走り転がり落ちるように
重い沈んだ気持ちになってゆく
黒田はけっして小さな「豪族」でも「国人衆」でもない
そんな部類のものではない

父に仕え共にこの越後の統一のために戦い
一応でもそれが成された
今は
守護代である兄にも恭順している立派な武士の。。。。ハズだ

なのに何故。。。
額に痛みが。。。

「軍略者」である宇佐見の家系はそう言うことを良く見通している
なんの根拠もなく
ただの憶測でそれを告げにに来たわけではないだろう

「確実」に？

これはもう「確実」に「反旗」を掲げる準備をしている
という事なのだろう。。。

宇佐見は袂から
折りたたまれた紙を二つだした
「これなるものが黒滝から中郡（なかごおり）を中心に流布されています」

奥山に，猫又といふものありて，人を食ふなる

「万葉集？」
昔読んだ物を思い出した

「これは隠し言葉と思われます。。。猫又とは影トラ様。。。あなたの事です」
私？
私を「猫又」と？
「今これを書いた紙が中郡（なかごおり）から向こう上郡揚北（かみごおりあがきた）まで点々とですが流されています」
紙を流す？

「怪文です。。。暗にそうしていると思われます」

話では
こうした文だったり板だったりが
村に突然届けられたり
塀に記されたりしていると言う

「どういう意味だ？」

これは「戦」の方法にもある。。。「言合戦（ことばがっせん）」に近いもの
私はかつて読んだ「兵法」物の中の「流言」を思い出しながら
宇佐見に聞いた

たたずむ目の宇佐見は
私の顔を見ながら
察しがよろしい。。。。と言うと続けて
思い声で詠んだ

「栃尾の山に住む猫（虎）は人を食う」

前序の文をのぞき込み
実乃がいつの間にか酒をあおり息をついて

「深読みしすぎではないか?影トラ様を猫などと?」

実乃の言葉に宇佐見はもう一枚の文を開いた
愕然とした

「影トラは守護代を食らう逆賊なり」

文中に「逆賊」と記された私に対する
手紙は

「長尾家を食い殺し越後を我が物にしようとする虎退治をせん」

と結ばれている
驚きを隠せなかったその中身

「なんでだ」

私はココにきて二年
栃尾を中心に各地を転戦した

おおかたの「豪族」とは戦った

なのに懲りることなく「乱」を起こし続ける
「戦」の理由は些細な領土問題が大半
後はもっと取るに足らない「いざこざ」だ

話し合えばわかりそうな「問題」に武力を震う
彼らの「望み」がわからなくなってきていた

苦痛だ
そのたびに流れる血を見るのも
火を見るのも

それでもその「些細」な事を止めるために
自分を叱咤して戦い続けてきた

そうだ
私は守護代家の「力」を代行して
多くの戦をして

国民百姓（くにたみ）にのぞまれる
国造りを
「手伝って」きた

なのに手紙の内容には
「力」である私はいつのまにか
「長尾家」を脅かす者として書かれている

そして

それは「悪」で
私を「討ち取ろう」と手紙は告げている

「いつ。。。いつ！私が兄を脅かすような事をした！！」

カッとなった
未熟と思いながらも
激情を止められない

と
同時に深く心を抉られた気持ちになった

言いがかりにも等しいこの書状を垂れ流しにしている黒田
なんで
そんな事をする？

「前の手紙は「噂」を流すために書かれた物。。。こちらの物はあきらかに影トラ様を討とう呼びかけている物です」

流言の理由はわかった
読み書きのよくわからない者にとって
簡単な言葉遊びのようにつづられた「猫」は
諸将の動きによって「虎」に変わり
こぼれた言葉から「噂」になる

混乱を作り出し
それに乗じて私を討つ

そうなのか？
そういうつもりなのか？

「影トラ様。黒田を討伐せねばなりません。。。すみやかな決断を。。」

となりにいた実乃の顔はすでに変わっていた
怒りだ
当然だ
そんな事を流し続けさせて良いわけはない
すぐにでも根絶してしまわなければ

氷の軍略者は言う
「ココで躊躇してはなりません，「寵臣」であった者のすることなら尚のこと」

「寵臣」。。。

パチパチとした痛みが頭に走る
私はゆらりと立ち上がった

「黒田秀忠を。。。黒滝城を討伐する」

まだ信じがたいと思いながらも

しかし
手紙に書かれた内容に目をつぶるわけにはいかない
それこそ
「長尾」を分断しようとする卑怯な細工を。。。

戦えと
自分に言い聞かせ立ち上がった
「村山与七郎（むらやまよしちろう）を先発させろ！」
と
速攻の先手を打つことを告げた

長尾家侍大将とまで言われた「寵臣」
何故に
私を貶め
策を弄して「乱」を呼ぶ

長尾の内に「嵐」を起こそうとする

「黒田。。。。」

深く心を痛ませた
本当に胸の奥を締め上げられる気分に怒りが乗算される

部屋を蹴るように後にし
歩きながら
慌ただしく
支度を指示をした

「なぜだ。。。」
まだ。。。。解らぬ疑問もあったが

とにかく

自分を鈍らせないために酒を煽り
支度をした
夜明け前には栃尾城を出立する軍は仕上がった

その１０　禅問答（後書き）

「宇佐見定満」。。。。

いきなり後書きで登場！！ヒボシです

上杉謙信を描いた映画といえば。。。

かの有名な

「天と地と」があります

近年なら映画ではないですが

ＮＨＫの

「風林火山」

「天と地と」とは

角川春樹さんが一度諸事情で（爆）この業界をおさらばしてしまう前に造った

大作映画でキャッチフレーズ

「赤と黒のエクスタシー」（藁）

という

とってもわかりやすい合戦「図式」みたいな映画です

キャストも豪華で

謙信（榎木孝明）

信玄（津川雅彦）

勘助（夏八木勲）

乃美（浅野温子）

八重（財前直見）

義信（野村宏伸）

チラミで風間杜夫が出ていたり

その上で
エキストラ６万５千人，馬２万頭

という
当時の日本映画破格の物だったのでしたが。。。。

破格の失敗作になってしまったという
なんとも。。。かんともな作品です

でも
まあ
ああんな感じで合戦したのかな？
なんてのを見て取るには十分のスケールをもってもいます

そんな中
今回出てきた「宇佐見定満」役で渡瀬恒彦さんがでています

映画では「宇佐見定行」となっていますが
ようは同じ人物です（爆）

映画本編ではたいして台詞もなかったのですが
その存在感のデカイ事

特典ＤＶＤでは殺陣の演出を自分で考えたり
構成を手伝ったり

なにより当時大抜擢で「謙信」をやった榎木さんを叱りながら殺陣
を教えている姿などホント
この人が映画の役柄ともども謙信の師であったのね～
って感じです

カイビョウヲトラでも
色々な役にモデルを見つけて考えていますが
「宇佐見定満」に関しては渡瀬さんでしょう
ただビジュアルは若干細めにさせて頂きました（藁）

そんな感じで

また後書きでお会いしましょう～～ヒボシ

その１１　暗雲　（１）（前書き）

この小説は
改行や空白が多数あります

これに絶えられない方はご注意ください

その11　暗雲　（1）

私が迅速に「戦」の支度をするのは訳がある
望まぬ「惨事」が起こってしまうかもしれない
自分の判断を鈍らせてしまったのならば
もし
怖いのだ

それがわかっているから一昨日の「つや」捜索の時もすぐ行動を起こした
はやる気持ちや不安を少しでも早く払ってしまいたい
という思いからか
「決めたら」すぐに行動する

私の脳裏には今でも
あの日の「つや」達，子供達，年寄り達の姿が残っている

あんな事が「多く」おこって欲しくない
手の届く範囲でもいい
少しでも「義」のために尽力したい
だから

決して躊躇しないように
すべからくの出来事を「迅速」に行う

行動を早める事によって「迷い」を絶つ
これが「理想」なのだが
今回の事に
全ての疑問や迷いを絶ちきる事はなかなかできなかった。。。

それでも
実際に行かなければわからないのだ

具足をつける時も
馬に乗るときも
ずっと自分に言い聞かせた

「迷いを打ち消したまえ」

「戦うのだ!!」

「戦え!!」

心に訴えながら
数珠を左手に巻いた

すでに先発として出ていた村山が剣ヶ峰砦前に到着しており
私が陣を敷くのも時間の問題だった

「早い。。。。」

鐘楼から砦方向に走る先発の騎馬を見て
まだ具足も整わない「秀忠」は驚いていた

四日前の朝

宇佐見が栃尾城に入った事を耳にした

およそ
あの軍略家が腰をあげ急ぎ栃尾に向かった理由など
「猫又の事」
しかないと確信はしていた

黒滝から枇杷島までは海の道もあれば海岸線に沿った街道もある
いくら黒滝より来たに「噂」を流したとしても。。。
流通の関係でいち早く流れてしまう恐れは十分にあったからだ

宇佐見が栃尾に向かった
という情報を得たときから
秀忠は「挙兵」準備に入っていた

来たれり。。。。
と読んで
しかし

警戒を怠ったつもりはまったくなかったが。。。

よもや
その二日後には兵を挙げてくるなどとは思いもしなかった

あまりに早すぎる決断だ。。。
まずは
書状でも送って「所改め」などと
めんどくさい手段を踏むだろう。。。。などという考え方は影トラにはなかったようだ

その神速のせいで
中途半端に「挙兵」の準備にかかってしまった結果で
謀反の証拠をいっぱいに城内に持ってしまうという

まったくもって「おいしくない」状況になってしまっていた

「申し上げます長尾影トラ軍本隊到着は後一刻（約二時間）ほど。。。と。。」

櫓を駆け上がってきた兵が
息切れではなく「驚愕」の早さに言葉を濁すほどだ
秀忠は空を見た

「まだ夜も明けておらん。。。。」

山の峰にはまだ靄が残っている
夜を徹してココまできたのか？

「迅速」で「苛烈」

聞き及んではいたがよもやこれほどまでとわ。。。
驚きを隠せなかった

色々と噂の多かった影トラの戦いぶりは
守護代晴景（はるかげ）とは異質の性格を持つ者だと言う事をよく表していた

まがりなりにもまだ「身内」である黒田には
のんきに事を構えている晴景のような対応でくるか？と
ぐらいに思っていたが

日頃から
この地に流れていた噂はたがわずだ。。。
なんと強気な「女」だ

息を吐き声をあげた

「後一刻！！城内を固めよ！！」

一刻で出来ることなど知れている
城を固め「籠城」する事だ

すでに「戦（いくさ）」の方法も限られている

十分な時間とはいえないだろうが
城内に兵は入れてあり備えは整っている
戦えないわけでもない
まずは「閉じこもり」だ

秀忠はさらに激をとばした

「急げ！！わしの具足も持ってこい！！」

そう言うと身体を帰し自室の方に向かった
歩きながら。。。老将は顔をしかめた

「虎御前の娘。。。「凶児」。。。影トラ。。。いかほどの物か見てくれようではないか。。」

室の仏壇に向かって手を強く合わせた

「親方様。。。」

「お約束。。。果たしますぞ」

日の出を見る前に私は到着した
眼前に広がる
黒滝は大きな山城だった

すでに何本かの旗が立てられている

「戦(いくさ)」をするつもりなのか？

そんな事よりとにかく
「事実」を知りたい

これで何事もなく「開城」してくれれば
最悪の事態は免れるし
件(くだん)の「手紙」の事を問い正しすればいい

とにかく。。。

「使者を送れ！！城を開けるように黒田に告げろ！！」

馬廻り衆，秋山史郎(あきやましろう)は
私の言葉を聞くとすぐに馬に乗り城門に向かって走っていった

今回は
実乃を栃尾の後詰めに残し

先発に村山与七郎（むらやまよしちろう）の騎馬隊
馬廻り，安田長秀（やすだながひで）
やたろーとその部下たち
宇佐見そして栃尾衆という編成だ
頼れる男を城に残し憂いなく戦うために

事は深刻だ
すぐにでも城を空けてくれることを期待もしていた
「寵臣」
とまで呼ばれた男がこんな事をしてほしくない

もしそうだとしても
その「真意」を知りたい「何故か？」と

返事を待った
床机に座りじっと城門を見た

秋山は山下の門前に着き
大きな声を上げていった

「それがし！長尾影トラが臣下，秋山史郎と申す！城主，黒田秀忠（くろだひでただ）
殿に目通りしたい！！開門！！開門！！」

明確に朝を終わらす
史郎の声は高く響き山に鎮座する城の中にまで大きく聞こえた事だろう

しかし
門はあかず
不気味な静けさだけが「無言」の返答をする

私の心がざらつく
「黒い意識」が危険を感じさせる
嫌な静けさだ

沈黙を守る意味はなんだ?

史郎は門前で馬を何度か行き来させ
もう一度同じ声明を発したがやはり「無言」という返答が戻った

なんだ。。。。

ジリジリとした焦り
手のひらに汗
おかしい。。
旗まで立てて「戦」を待っていたハズだろう?

その沈黙はどういう了見か?
何か策しているのか?
いやな「間」だ。。。

十分の時を待った

「秋山を退かせろ。。」

私はすぐ横で待機する
安田長秀（やすだながひで）に指示した

その瞬間「嫌な予感」は的中した

赤い軌跡を描いた火矢が一斉に城壁を越え飛び出した

「秋山！！」
床机を蹴倒し私は叫んだ
伸ばした手の先あったのは「無情」

あっという間に矢の雨に飲まれ馬ごと崩れる姿が目に映った

「秋山は！！！」

安田は馬に乗り私に
「助けに」
その言葉を大きく手を振り遮った

「弓隊前！！！前進！！！」

亀裂の入る痛みが頭に走り「真っ黒」に染まった

意識が入れ替わる

なんたる！！！
それが己の返答か！！！
一気に心は暗闇に走る

何を待っていたのだ？
何を悠長な事をしていたのか？
私を「逆賊」と名指しした者に何を求めていたのか？

あれほど冷静さを保とうとしていた自分に腹が立った
なんたる失態！！
よくも
よくも

私の「前進」の声に合わせ栃尾衆の怒号の激が響き渡る
貝と太鼓が大きく鳴り響く

「許さん！！！」

眼前に青い野に広がった火矢の炎でさらに心は燃える

「やたろー！！一隊をつれて搦手門（からめてもん）から山を下る門すべてに火をかけよ！！」

卑怯者め
使者の用向きを無視したあげく
突然，矢を射かけるなど言語道断だ

「迅速に！！山ごと全部燃やしてやる！！」

再び手を振り上げた

「弓隊を先頭にありったけの火を投げ込め！！容赦はしない！！」

指揮の後
睨む目で城の上の方を見た

「そこにいるのか。。。秀忠。。」

身体を大きく震わせた
怒りは頂点に達した

「影トラ方一斉に火矢を放ちました！！」

最初の攻撃後
瞬く間の応酬を城兵は秀忠に告げた

「。。。」

櫓の格子から下の様子を見ていた黒田は顎をなでながら考えていた

なんと強気な。。。

影トラにだって
黒田が「長尾」の寵臣であった事
そして今も「表向き」そうである事は十分にわかっているハズだ
それを
なんの書状通達も無しで兵を率いココで質疑しようとしていたのか？

もちろん
今となっては城内に囲った
大量の「浪人」についてなんの言い訳も立たないし
「猫又」の件については
宇佐見によってその「真意」も暴露されている事だろう

どちらにしても「言い訳」が通用する相手ではないようだ
晴景なら丸め込めたとしても「影トラ」には通じる事はないようだ

格子から目を細め，隊の動きを追ってみた

「苛烈」であるという言葉に行動が伴っている
影トラ軍の兵はぴたりと統率がとれている

「強いな。。。」

いくら「籠城」をしたとて

かき集めたあぶれ者たちと
影トラ軍の兵では「士気」の高さが違う

ましてや「負け無しの将」が率いる軍団だ

時間の問題か？
秀忠は腕組みをしながら
「最悪」を思い浮かべたが。。。それでも余裕の笑みもあった

いや
まだだ
ココまでご足労してもらったのだ
土産に「首」でも置いていってもらわねばな。。。。
噂に違わぬ「狂女（くるいめ）」
あんな者に「長尾」の力を任せていいわけがない
やはり
為景の「予見」したとおりの「牙」になったな。。。。

「親方様，為景（ためかげ）様のご意志をはたそう」

黒田は覚悟の言葉を落ち着いた視線で城下を見ながら言い放った

「来るがイイ化け猫め！！！その首討ち取ってくれるは！！！」

黒滝城の朝は「苛烈」に始まった

その１１　暗雲　（２）（前書き）

この小説は
改行や空白が多々あります
それに絶えられない方はご注意ください

その11　暗雲　（2）

「大手門から向こう影トラ軍が詰めてまいります」

フン。。。
秀忠は鼻で笑った
どうやら影トラというのは「虎」でも「猫」でもなければ「猪」のようだと思った

「しょせん女の考える事。。。」

真っ直ぐ力押しで向かってきて落ちるほどこの城は柔じゃない
早々と無理をして走ってきたのは「無駄」に終わりそうだ
「籠城」は正解だった

黒田秀忠（くろだひでただ）も甘く見られたものよと
ほくそ笑んだ
年を取ったとはいえ
かつては「侍大将」まで勤め上げたわしを「軽んじたな」と

室の奥に飾ってある
「為景（ためかげ）」の刀を見て

その昔を思い出した

昔
上杉定実（うえすぎさだざね）の重臣であった頃
為景とは何度となく槍を交えた

為景は。。。
本当に強い男だった
どれほどに叩きのめされても
どれほどに圧力をかけても「不屈」のいくさ人だった
額に顎
突かれ斬られた傷を数多に持ちそれをものともしない頑強な武士（もののふ）
「親方」と呼ぶにふさわしい男

拳さえ交え戦った秀忠には今でも感じられるほどの存在だった

そして
秀忠も若かった
若かった故に目の前しか見えなかった

為景を「敵」と決め戦い続けた結果は。。。

何も得ることのない戦いになってしまっていた

守り慕い続けた「上杉」は零落し
各「国人衆」や「豪族」は綻びをさらに広げるように暴れ出した
どの村も町も
戦火の下にあり。。。
越後には「平安」など無くなってしまっていた

そうだ
戦う事だけが全てであってはいけなかった

秀忠と為景は手をとる事にした

「どんな「形」であれ「上杉」を守護として置く」

それが2人の盟約になった
「上杉の元，越後を平定する」

あれほど自らが「守護」に取って代わろうとしていた為景に切り出した「約束」
それを為景は快諾した
もちろん
飾りであっても「守護」がいた方が「政」は容易になるから。。
という見方もあったが

あれほど苛烈に戦った男が「あっさりと」受け入れたのには別のわけもあった

息子（晴景）を「守護代」に据えて
為景は秀忠に申し出た

「この先。。。ワシの家からでた「虎」がもし。。もし晴景を脅かす存在になった時は討ち取ってくれ」

約束であり遺言でもあった

その子とは
為景の元，虎御前との間に産まれた末子「トラ」

しかし。。。。「女児」が脅威に？

当時，警戒に値するか？
それを決めかねるものだったが
盟友との約束でもあったから長く，その動向を見守っていた

面妖な。。。

調べれば
その「女児」の誕生には何かと「逸話」がついて回っていた
そもそも
誕生前には為景自身

「御仏に選ばれし子供」

と喜びを露わにしていたのに

産まれた途端に「消沈」してしまった事
「戦乱の世」に「女」なんて？
という失望が大きかった事からきたものだと思っていたが

何か違う事のようだ

いずれにしよ
為景は以降二度と「守護職」の地位を狙う事はなかったし
「上杉」に刃向かう事もしなかった
最後まで秀忠との約束を守り
同じく
晴景にもそれを守らせた

月日のたった今
眼前にその「虎」が来ている

最初，栃尾城に「影トラ」が入った時はなんの「酔狂」かと思った
「女」城主は珍しくもないが
たかが十三，四歳になったばかりの子供に何ができるのか？
そんな事までして「守護代の旗」を中郡（なかごおり）に持ってこなくてはならなくなったのか？
と
そして
きっとすぐ「根を上げて」春日山に帰って行く事だろうと達観して

いた

ところが事態は急変する
入城三日足らずで「三条衆」を死地滅(しちめつ)に至らしめるという暴挙
その「苛烈」な戦いぶりは
あっという間に越後中に広まった

それでも
当初は家臣の力に「支えられて」の事であろうと高みの見物を決め込んだ「豪族」の多かった中

秀忠は即座に「戦(いくさ)」の支度をし始めた

直感
長年「戦場(いくさば)」を駆けめぐった男の感

このことだったのか？
為景が恐れていたことは？
まさに「尋常成らざる」事態だった

女という生き物の持つ「強さ」は凶事の始まりになる
影トラの「力」が増大していけば晴景とて正気ではいられなる
絶対に

そうなればやっとでまとまっている「越後」をまたも「混乱」に導きかねない
とにかく

それを食い止めねば。。。。

と

そう思いつつも自分では手を下したくなかった
相手は「女」だ
「女」に対して本気で「武」を構えるなど「武士（もののふ）」としてはかなり
「不名誉」な事だから

誰かが
「出鼻を挫いてはくれぬものか？」
と願い「猫又」の風評を流したりもしたが

その思いと裏腹に「影トラ」は二年の間に数多の豪族，国人衆を退け
「勝ち続けた」

「負け無しの将，長尾影トラ」

確信に至った

これは間違いなく「脅威」だ
いずれ「長尾」割り「上杉」を脅かす存在に「化ける」

思い出した言葉を心に秘めた
部屋の中
祈りを捧げ

「為景。。。親方様よ。。。約束守りましょうぞ」
飾られた刀を大小ともに腰に着けた
戦わねば
拳をギリリと握った
かつて自分と凌ぎを削った男が死ぬまで守った約束に報いようではないか！
と
櫓にもどった秀忠は多少ながらも驚きを隠せなかった
「動いておらん。。。」
あれほどの「挑発」をしたのに影トラ軍は城門に向かって殺到していないのだ
実際は
多少間を詰めてきてはいるのだが？
それ以外は
規律正しく火矢を射かけ続けて
大手門の各所に火の手を上がらせてはいるのだが
気になるほどのものでもない
「どうなっている？」

物見の一人に聞いた

「ずっとあのままです」

あのまま。。。。

あれほどの怒号の激を発しながら動かないのは何故だ?

おかしい。。

噂に聞くところによれば

影トラは非常に「短気」だと聞いている

女特有の「癇癪(かんしゃく)」持ち

馬廻りを挑発に矢で射かけさせたのだ

怒濤の勢いで門を破りに来ていても不思議ではないハズ。。。

そしてそれが作戦でもあった

怒りにまかせた影トラ軍が

門を破るために攻勢にでるだろう。。

粘りに粘って城門守り

頃合いを見計らって

突破させ二の門との間で堤打ちにして「半壊」させる

ありきたりではあったが

あれほど怒り狂っていたのならば。。。

我を忘れて来そうなものを?

規則正しく。。。矢を射続ける？
。。。。。

首を傾げた

読まれている？

だとしても門のところで動かずでは「戦」にならない
「戦」をする気はなく。。。脅しにきたのか？

そんな悠長な人物だったか？
秀忠は顎をさすった
自分が具足の着ている間に「戦局」が動いていたなら

誰かがそれを告げにきただろう
膠着状態であるからこそ
城内の誰も慌ててはいない。。。

。。。。。

動いていない？

まて。。。

秀忠の脳裏に先発隊がいたのが思い浮かんだ

早朝に見た「馬隊」はどこにいる
煙の向こうとはいえそれを見落とすほど衰えた目ではない

いない。。。
それに
朝方は影トラの陣の周りにいた大男の集団はどこにいった？

本陣と本隊は確かに動いていないが
これは違う
動いていないのではない！

何かが密かに動いている！

何故本隊が目の前にいる？

いかん。。。。

秀忠は振り返り櫓の反対側に走った
「しまった！！なんと！！」

山城の各所に火が上がり始めている

搦手口
茨口

その他城に通じる道に煙があがっている

「申し上げます!!」
慌てた形相で櫓に昇ってきた兵卒を見たが
もうわかっている!!

「搦手門，茨口，剣ヶ峰，南沢尾根，各城道に火が上がってございます!!」

城道にまで。。。。陽動であったとしてもこれほどの規模で何故?

「火なのか?本当に火があがっているのか?」

聞き返したが
思い直した。。。

無意味だ
本当に火があがっていようがなかろうが
すでに大手門以外の全てで煙りが見えるのだから
「炙られている」事にかわりわない

。。。。
まだ出そろわなかった家臣団の兵
あぶれ者ばかりの城内

正気でいられるわけがない
甘かった。。。甘く見てしまった!!

朝一で馬が走っていたのはただの先発ではなかったのだ
まったくもってだ

影トラはただ現地に着くのが早かったのではない
「戦」をする事，それ事態が圧倒的に早いのだ

先発が着いたときにはすでに「戦」の準備は出来ていた。。。
そういう事だ
。。。。。

最初の火矢が飛ぶ前に。。。すべての城道も門もふさぐつもりだったな。。。
黒滝の防備が「不足」している事を見切られていた

そして
「迅速」という噂の中身を見誤った

「山ごと燃やすつもりか？」

そうだな。。。

それで大手門で待っているだな
秀忠はまだ火に炙られてもいないのに汗をかいていた

恐ろしい。。

まさに。。。「脅威」だ

その１１　暗雲　（３）（前書き）

この小説は改行や空白が多々あります
それに耐えられない方はご注意ください

その11　暗雲　（3）

確かめるか。。。火の手を。。それからでも「決断」は遅くない？
しかし
ココを離れる事もできない
信頼できる家臣を城内に多く入れる時間がなかった事を今更になって悔いた

ここから目を離したら最後になってしまうかもしれない
こんなに瞬く間の動きをされては

頭を抑え，腕組みをする。。。櫓の中を行き来して考えた

「籠城」がこんなにも早く裏目出てしまうなどとは考えも及ばなかった

自分を軽んじた。。と鼻で笑った事に腹が立った

今やこの櫓から身動きを取ることさえも
考えあぐねなければならなくなってしまった「老将」は苦々しい表情で溜息をついた

影トラを甘く，軽く見過ぎた
やつの
全部を見通せているつもりだった
それだけの経験を己はもっている。。。対処できると。。。

あなどった。。。

ただの若造ではない
ただの女でもない
という事まで知っておきながらこの失態

今までの「戦」を十分に見てきた
その早さも的確さも
知っているつもりだった

まさに知っている「つもり」になってしまった。。。

すべてを覆えし「影トラ」はやってきた

秀忠の戦(いくさ)の「定規」は一つも通用しなかった
為景(ためかげ)との戦でもこんな早さを味わった事はなかった
ただ「早い」だけでなく
全てが「早い」決断も，行動も，作戦も，実行も
そして
それを成し得ていく「影トラ軍」は眩しいほどの「精鋭」だ

黒滝は。。
振り返って城内をみれば

確かに「人」は足りている
だが。。。

ただそれだけだ
あぶれた「浪人」を今すぐ「精兵」に仕立て上げる術もなし
それに「気合い」を満たす事も「禄」の話も出来ていない

要は「いくさ人」がいない「籠城」になってしまっていた
「いくさ人」がいないからこその「籠城」だったのに
ただ攻撃に耐え
痺れを切らした相手を誘い込むだけの作戦だからと
高をくくっていたのに

この状態においては全てが無意味だ

兵の出来は大きな差になってしまっていた
各所で上がっている「煙」に動揺してしまえばもはやただの「浪人」達の統率はとれないに等しい
その「火」が本物であろうと
なかろうと「混乱」を避けることは不可能だ

我先にと逃げてくれるならまだしも
城内で
「これ最後」と暴れ出されたら
今まで蓄えた全ても「無」に帰してしまう

顔をしかめ，歯ぎしりした

「せめて後一日あれば。。。」

悔やみきれない言葉をこぼした
しかし考えるだけ無駄だ
一日あっても。。。何かを変えられるとは思いがたい「早さ」だった

「搦手，茨口，その他砦口から城道まですべてに火を置く事できました」
早馬は私の前に報告を持ってきた

現状を理解して深く頷いた
宇佐見の情報から
まともに「兵」がいない事はわかっていた「浪人」「落ちぶれ者」
そんなものたちがまともな「戦」などに耐えられる「心」をもっていわけがない

だからこそ
目に映る「恐怖」である「火」を使った

火を「置いて」こればいい
搦手や茨口にはやたろーたちが「油樽」を火矢とともに投げ入れている
城道にはたくさんの「煙」を用意してやった

恐れろ
「火」を
黎明のこの時間に火を掛けられるのは「恐ろしい」事だろう
それでも
城内が沈黙を守り続けるのであれば大手門をかち割り
さらに「火」を与えてやろう！！

私の陣幕には最初の口上で大けがをした
秋山史郎が運ばれていた
傷は多く火傷も負い

意識はままならぬ状態にあったが
運ばれて一言
「申し訳あり。。。ま。。」

即座に
その手を握り，出陣前に巻き付けた「数珠」を持たせた

「よい」

そう言って下がらせた
抱えられ連れて行かれる
史郎を見ながら「死なないでくれ」と祈った後

床机にすわり
城を見た
以前沈黙を守ってはいるが。。。
各所に出始めた悲痛な伝令は見て取れた

中身に動揺が必ず現れる
「精兵」なしでどう出る？
そもそもこんな禄でもない「風評」を信じ餌に飛びついた者たちに
「忠義」は無いし
「忍」の一文字さえ見あたらないだろう

もともとの城兵や家臣団が出そろっていないのなら
「統率」は不可能だ

そのぐらい「人」は脆い

仏神に真をおかず「金」が全ての者たちに明日などいらないだろう
そんな者たちと「潔く」ココで散るか？

城を見た
どうする
どうしたいか？秀忠

一人問答をしてみた

城の中は大丈夫なのか？
手を挙げて言った

「太鼓を鳴らせ！！声をあげろ！！」

もっともっと脅しかけろ！！嗾けろ！！

不思議と相手を侮る気持ちはなくても
その焦りを手に取るように感じた

「黒い意識」が鮮明に働く
敵の鼓動まで聞こえるほどに

このまま
「焼き殺す」か？
限界であろうよ
つまらぬ「忍耐」どこまでつづくか？

もう睨んではいなかった
私はただ穏やかな気持ちで静かに微笑んだ

「どおするのだ？秀忠？」

「開門せよ」

櫓の中でどっかりと腰を下ろしていた秀忠は重い口を開いた
額にはびっしりと汗をかきか
十分に考えられた答えをだした

諸将は顔を向きあわせ
驚きを隠せないという表情で城主に詰め寄った

「まだ始まったばかりですぞ！」

首を振った
いやいや。。。なにをや言わんかだ。。。

始まったばかり？だと
とうに終わっている。。。

このまま悪戯に時を引き延ばしても「黒滝城」にとって良い道は何も残されていない

後詰めが来る時間「火攻め」に耐えたとして
どんな「言い訳」が成り立つのだ？
そして
城内の「浪人」はそんなころまでこの城の中で大人しくしていてくれるものか

おそらく
たった一日でココを攻めると「影トラ」は決め作戦を立てた
陽の暗いうちに兵を集め
全ての手配もすませていた。。。

ならば
この出来事は今頃「春日山」にも届けられている事だろう

抜かりなく，滞る事なく

すべてにおいて「敗北」したのだ
まずは認めなければならない

「開門して討って出るのですか？」
詰め寄っていた将の一人がのぞき込むように下知を待っている

秀忠は首を振り
何かをふっきったように
しかし重苦しく

「わしが出る」
と答えた
最初の機会を逸してしまった。。。
そう考えるほかない

しかし
ココからが始まりだと
ここから先は「一世一代の大芝居」だ

具足とをかなぐり捨てながら
小姓に
「着物を持ってこい」
階段を下りながら言った

櫓口で振り返り
言葉を待つ男たちに

「これから和議に参る。。。ワシの指示なく動くでないぞ。。よいな」

腹心の将達は城主の言葉に驚きを隠せなかった
「何故ですか！！」

秀忠は着物の襟を正しながら言った
「お前達が火攻めに耐えられたとして。。。浪人どもはどうにもならん。。すべてを失ってしまっては約束を果たす事もできなくなる」

。。。
「大手門を開けて誘い込んでは？」
若い武者が問うた

それも一つの方法だ
が
敵が影トラでなければ「通用」しただろう

しかしダメだ
門を開ければ今度はそこから火を投げ込まれるだけだろう

それほどに「整然」と組織されている「影トラ軍」
「今はダメだ。。。勝てないのだ」

わかり始めていた家臣団
一同に介した男たちはみな苦々しい表情だった

「しかしただ負けを認めるわけではない。。どんな事をしても今を生き延びる」
秀忠の言葉には「覚悟」が伴っていた
「これから「忍」戦いと心得よ」
毅然とそう言うと大手門に向かった

「長尾の影トラ。。。しかとこの目，この耳で見極めてやろう。。」
脇差しを一本，腹に抱えて
開門の号をかけた

その11　暗雲　（4）

「開門！！！開門！！！」

太鼓や貝の音をかき消さんばかりの怒声が黒滝側から響いた
「開門！！！開門！！！」
何度も何度も
こちらに気がつかせるようにしているのか，大きな声は大手門各所から聞こえる

本陣で
私は緩い笑みを浮かべながら何がでてくるのか?と待った

最初の一手以降忍耐強く「黙り」を続けていた敵方の出方に
陣幕は忙しくなる

「黒滝側，門を開きます。。。どうされますか?」
右手に控えていた
安田長秀(やすだながひで)が前に来て進言した

「攻撃は止めよ。。。。構えはそのままだ」
小さく答える

一度ならずも二度も「卑怯」討ちにあうほどのんきではない。。。
十分に間合いをとった軍団を見て
私は立ち上がり

諸将に指示する

「構えは解かない。。。そのまま待て」

そういいながらも
長秀に
「油樽と焙烙の準備をしろ」
と敵を射殺す指示も下した

開け放たれた城門を見る
城内に備えはなく
人影も見えない

誘っているのか？
そこに私はいかないぞ
門を開ければ兵を動かす
ココぞとばかりに殺到する「猪」と私を見ているのならば

睨み笑う

そう思っているのならば「勘違い」も甚だしい
今ココから先にあるのは「死」だけだ

重く軋む音と共に「黒滝城」の大手門は完全に開かれた

私は答えを待っている
開門の報を自分たちで出したのだから

「どんな回答を持ってくる？」

今一度
床机（しょうぎ）に深く腰掛け
火と煙に霞む門に立つ男を睨んだ。。。。

秀忠は開かれた門前，眼前にやはりと感心した

「動かないか。。。。」

わかっていた事だ
普通なら無条件に開けられた門に「功」を求めた武士が殺到するはずだ

しかし
それを「影トラ」が求めていない
主君たる者の求めに忠実なこの軍団は城を「ただ」落としにきたわけではない
それを
毅然とした態度で表している

弓隊
長槍隊
構えは解かれていない
黒田の出方を「寡黙」なこの軍団は
のんびりと「伺う」ではなく
全ての将兵が
じっくりと見ている

その後ろに「仕寄り」の準備が成されている

「勝てるわけがない。。。。」

もう一度秀忠は強く歯を食いしばった
しかし
「反省」はそこまでにした

ココから先に専念しなければ
今日を乗り越えるのだ

場合によってはこの身一つで「トラ」を討つ覚悟はできている
決意の表情で影トラの本陣に向かって歩き出した

軍議の陣幕に馬廻りの男，長秀の導きによって到着してすぐに

その場に伏して秀忠は頭を下げた

下ろした頭からその場の気をさぐった
床机にすわった諸将の足はびくりとも動かない
どこまでも静かな間合い
将からして「寡黙」に任を守っている様子だ

「面をあげよ」

己の出方を考え伏していた秀忠に声がかかった

若い声
若いというよりもやはり「女」の声だ
しかし「癇癪」や激によってかすれている事もなく
落ち着いている

秀忠は覚悟を決めた
ココからは「交渉」術の世界だ
伊達に歳を経てきたわけではない
「城主」という地位をもつ武士(もののふ)には年季と「老獪(ろうかい)」さが必要だ
これまでの「経験」も
それをもって
どこまでこの「若き影トラ」を知ることができるか?
どのような「人物」か?

「騙せるのか?」

そして「殺せるか？」

秀忠は厳めしい顔をそのままあげた

陣幕の奥の座にいる。。。。姿に目を走らせた

「女」？

鎧を着け姿をみただけでは判断しかねた

顔がよく見えない。。。。

それにしても「小さく」見えない身体だ

他に並ぶ武将たちとさして変わらぬ体つきにみえる

「黒田秀忠か？」

柔らかい声

もう一度聞こえた声は間違う事なく「女」だ

大女か。。

それにしても

この整然とした陣幕中の様子をみれば，ただそれだけの人物でない事は

用意に理解はできた

あなどってはいけない。。

すでにそれで「敗北」をしている

とにかく。。。。近くに来させなくては
秀忠は再び伏してして挨拶をした
「黒滝城主，黒田秀忠にございます」
「かけられよ」
本庄実乃が手を伸ばし
支度されていた床机を進めたが
気味が悪くなった
いや
気に入らなかった
フン。。。。何もかもが静かとは
先ほどまで荒れ狂っていた「戦場」が嘘のように感じだ
もしや待ちかまえていた
すでに自分の方が「計略」に落ちている?
そんなふうに勘ぐってしまうほどだ
「ハァッ」
と返答
頭をもう一度伏して深く下げた
こらえよ「心」
負けてはならん。。。
深く呼吸をして顔を上げた
そのまますくりと背を正し
並ぶ諸将の姿を目で見回した

宇佐見。。。。
やはりいたか。。軍略者め。。。
しかし
宇佐見の存在などこのさいはどうだっていいほど
この陣幕を仕切っている「影トラ」が見たい

どうでる

いまさらノコノコと現れたのだからお怒りのところは当然だろう
どうやってココまで影トラを近づけるか？
短気という人物表は今ひとつ当てにならないが
行動を起こすしかない
覚悟は決めている

ゆっくりとした口調で秀忠は話し始めた

「このたびの不始末まことに申し訳なく思っております」

静かに
冷静に，さも「不始末」であったと言い続けてやろう
来るか
来ないかは「賭け」だ

「不始末とは？」

遠い上座の床机にすわった「影トラ」が問いただす

「影トラ様の軍とは知らず，矢を射ってしまった事にあります」

「知らず」と言ったのはまさに賭け
「戦」に知らぬはあり得ぬ事だろう
その場で打ち首になる可能性だってある

だが
生半可な覚悟では「影トラ」を自分の側に惹きつける事はできない
どうでる

「知らず。。。だと」

声に怒りの響きがある
周りの男たちにも伝播するほどの「怒り」
いい反応よ，つづけるぞ
もうひと押し

「まだ夜も明けきらぬ時間でした故に」

言葉を遮るように

「言い訳をしにきたのか？」

その言葉に畏れをなしたように頭を伏せてみせた
影トラは
床机を立ち近づく
やはり気短者（きみじかもの）

自分で問いただしたくなってきたな。。。そうだ近くに。。？

地べたに伏す秀忠の前まで足が止まった

「面をあげよ！」

。。。。。

静かに足下から順に顔をあげた

なんと？

見あげた姿は
自分と同じぐらいの身の丈
驚いた
いや
さらに驚く事になった

そのまま秀忠の前に膝を折り影トラは顔を下ろしてきた

「秀忠殿には「守護代」の旗は見えなかった。。。という事か？」

なんだ
この
悠然とした態度は
ココまで近づいてきたうえに顔をのぞくためにそのまま
前に腰を下ろした

「影トラ」。。。。

だが色々な考えを別に
まずその「顔」に見入った
虎御前によく似ている円弧を描く眉
大きな目
白い肌

戦の中にいるのが不思議なほど「美しい」
これが
噂に聞いていた「影トラ」？
あんな「苛烈」な戦をやってのける「女」

見とれた事に気がついた

いかん。。
動揺している事を見られた？
いや違う
何に見とれた事に気がつかれた？

とにかく表情を読まれてはならない
言葉とともに

「大変申し訳なく思っております。。。」

頭を伏せようとしたが止められた

「目をみよ」

さらに近づく影トラ
息がふれるほど近くに顔をもってきた

信じられん。。。
そもそも
不意打ちをしたこの将にこれほど近づいてくるなど「うつけ」なのか?。。
いや
違う。。。

秀忠はじっとりと背筋に汗をかいている自分に気がついいた

この機会を待っていたのに，近くに来たのに。。。隠し持った脇差しを抜く事が出来なくなってしまっていた
わからないものだ

とかく噂ばかりが先行していたこの「影トラ」を目の前で見て
色々な事に
怯んでしまった自分に気がついた

これが「器」というものなのか?気を感じる巨大なのに
あまりに普通に「見せる」影トラ

「見えなかったのかと聞いている」

言葉は静かだが怒りをヒシヒシと感じる

よし。。。

ならばこの「トラ」をもっと知るしかない

老将は今一度自分の意志を持ち直し

ココが「戦場」である事を心に刻んだ

その12　将器　（1）

「将器」

それは城を預かる者である秀忠には痛いほどわかるものだ
肌にピリピリ感じるのだ
かつて
為景（ためかげ）に感じた物と同じ「気」を

顔も姿も違う
なのに目の前にいる
「影トラ」に同じものを感じる
「苛烈」という言葉をしょった若き「トラ」は
獣と呼ぶには「美しすぎる」顔だ

なのに
そこから放たれる「将器」はまさに野獣だった為景のそれと一緒
これが「血」と言うものなのか？

奇妙なものだ

秀忠は思いとどまり脇差しに手をかけるのを止めた

「知らねばならない」

それが「使命」だ

今まで聞き及んできた物
聞かされた物
「噂」だけで
この「器」を量れるわけがない

それを今「知るのだ」

これほどの近さならば
その細首を掻き斬るのは容易だったハズ
しかし
。。。。。

何だこの違和感は

秀忠は首を小さく振った
ダメだ
自問自答しては目の前のこの「女」が何者なのかを知るためにも
話を続けるしかない

「見えませんでした」

気を取り直し
さらに読まれぬように自分を律して答えた
「駆け引き」をしなければ。。。

そう
「一世一代の大芝居」をココに始るのだ

陣幕についた父の「寵臣」を初めて見た

それまで
栃尾に入城して以来
一度として私に顔をみせようとしなかった「老将」黒田秀忠（くろだひでただ）の姿

背はそれほど高くない
白髪を多く持った頭はキレイにまとめられ
同じく髭にも白髪が見受けられた

離れた席で伏してしまったので顔を確かめる事ができなかったが
ならば
近づいて
その「真意」を問いただせばいいと思い
目の前まで歩いた

先にかたった「言い訳」などを聞かせるためにココにやってきたのか？

私はそのまま顔を近づけて
しっかりと表情を見た

痩せてはいるが
顔立ちはきりりとしている
細かな刃物傷が顔にある

私の覚えていない「父」の臣下だった男の目はやはり「鋭い」

「長尾」の旗は見えなかったと答えた言葉にしっかりと
苛立ちはあった
だが
毅然とした態度は今まで退けた「豪族」とはあきらかに違う
敗軍の将らしからぬ態度

ならば

「聞くしかない」

何故こんな事になったのかを
「真意たるものを」

慄然としたその目線の前で

「それで突然，矢を射かけたのか？」
私はどっかりと
秀忠の前に座って問いかけた
老いても輝きの深い
目を見て話を続ける

間をおかず
秀忠は答えた

「最近この地に「守護代」の旗を持った族が出ておりまして。。」
困ったような口ぶり
額に手をあて苦痛を表す「姿」

初耳だ

黒滝城と栃尾城は春日山にくらべれば「遠い」場所ではない
むしろ近い
ただ
「初耳」だと答えるのは控えた
何しろ「猫又」の風評の事だって
私自身には宇佐見から聞くまで耳に入らなかった事だ

私の手の届く範囲とはまだ浅瀬ものだったと痛感するしかない

頭ごなしに否定はしない
なにより
時間をかけて話をしなければと思った

いつものように早計に言葉を進めてはいけない「気」がするのだ
そのぐらい秀忠の姿はしっかりとしている
軽んじてい良い相手でない「気」を纏っている

うなずくだけにした

「その手管はあまりに巧妙にて手前どもの城兵にも判別しかねました」

私から目を離さず
眉間のしわをよせ悲しそうな顔をする

「恐れを抑える事ができなかったのでございましょう」

またも深く頭を下げた
確かに
そのように「悪」が横行してしまえば
たとえ近くに「義」があったとしても迷いが出てしまう事はあるハズだ

考えられない事でもない

しかし

「だから問答無用の火矢か？」

聞きたいのはその「言い訳」ではない
どちらの野党ともつかぬものとは口上も聞かぬというはあり得ない
その態度で
どんなに「悲しみ」を表しても
「不手際，不始末」という言葉ですまされる事でもない

「秋山の口上は聞こえなかったのか？」

私の声はさらに「奥」を斬るように聞いた
答えよ
この目を見て
余分な事は一切いらない
重ねて言う

「言い訳をしにきたわけではないだろう」

門前で二度の口上を大きな声で果たした秋山を火矢で討った事は許し難い事だ

秋山が口上に「義」を欠いていたのならいざ知らず
十分な時間もとっているのだから
それを
「賊軍」と見間違う
その「了見」を聞かせて貰いたい

「まことに不手際にございました」

深く頭を下げる
重ねたその手が微かに震えた
その態度はまるで「顔」を見られないように「逃げた」姿に見えるが
落ちた表情から「嘘」を見るのは難しい

何故だ。。。

「不手際。。。不始末。。。」
何度もあらわれるこの言葉に「謙虚」を感じられない

非を認めながらも何かを探しているのか?
違うような
言葉をならべたって「試している」感じは拭えないぞ

怒りはふつふつと沸く
こんな問答をしにきたのか?

「不手際で済むのか？」

私は向き直った最後の「言葉」として
これ以上「無駄」な問答はしない
怒りを目の中に十分宿らせて

秀忠は一瞬顔を曇らせたが
あえてなのか
私の前にズイと出て頭を伏した

「不手際で済む事ではございません」
いったん前に出した身を立ち上がって陣幕の際まで下がり座した

「城主たる私の不行き届きにございます！この上のご沙汰は春日山におられる「守護代様」に仰ぎどんな処遇も受ける覚悟はありまする」

「春日山に？」
この言葉に宇佐見が顔をしかめたのは後になって知った

私が知りたい答えは出ていなぞ！
立ち上がって問いつめようとした瞬間

秀忠は深くに隠し持っていた脇差しを素早く「抜いた」

陣幕の一同は身構える
それが本性か？
私は刀に手をあてる

秀忠は
光る刀を自らの頭にかざしそのまま「髷」を落とした

なんと？

瞬く間の出来事にあっけにとられた

ばっさりと落とした髪をそのままに秀忠は言った

「信心深き影トラ様にお会い出来たのもまさに御仏の思し召し，私も今より僧となりて仏門に帰依したいと思います」

目を見なければ解ること

秀忠の目は燃えている
活き活きとしている
もはや

私との問答は終わってしまったようだ
これ以上は聞く術がない

。。。。。。

「春日山のお沙汰を待とう」

私の言葉に「髷」を差し出しまたも深く伏して頭を下げた

昼を待たずして包囲は終やめ
今ひとつ釈然としないまま栃尾城への帰路についた

あれが
人生というものの
山谷を歩き続けた男の「老獪」なる芝居であった事をしるのはしばらく後の事であった

その１２　将器　（１）（後書き）

黒田秀忠（くろだひでただ）について

色々しらべてみたけどあまり文献にも残っていない人物でした（単に勉強不足なヒボシ）

ただ
歴史の視点というものは「偉大」だった者の目線だったり「勝者」の目線で書かれたり
そのあたりは「上杉家」になってから書かれているなら
尚のことおざなりな感じに書かれてそうですが。。。
そういう見方で書かれた者を見る限りでは

秀忠は凡将
なんて感じで書かれてます。。。

でも
侍大将までいった男の将器がそんな些細なものであったかなんて
ヒボシには今ひとつわからなかったし
やっぱり
城持ちの人なんだから
それなりに責任ある人物であったとも思いたい（あくまで思いたい）

で色々考えたら
逸脱したりしました（藁）

こんな状態ですが
がんばって走って行きます！！！

ではまた後書きでお会いしましょう～～

ヒボシ

その１２　将器　（２）（前書き）

衆道（男同士の性的関係）の描写がありますので
それに嫌悪感をもつ方はご注意ください

その１２　将器　（２）

陣を払い帰路につく「影トラ軍」を秀忠は大手門で静かに見送っていた

最後の小荷駄が見えなくなって顔にまで表れていた緊張はわずかにゆるみ
口から深い息を吐いた

「影トラ。。。。」
今一度息吐くと強張っていた身体をさすって
城内の方に歩き出した

腕を挙げ
手にひらを見る。。。痺れるような細かな震え
卑屈に笑ってみる

「武者震い。。。。久しいな」

足早に城内に。。屋敷に向かいながらあの「会見」を思い出してみた

影トラのあの顔は
「美しい」の一言に尽きるが
それだけでない物をしっかりと持っていた
あれが「栃尾の山に住まう虎」
「猫又」などと。。。
そんな可愛げのある者ではなかった

伊達や酔狂でもなければただの「噂」でもなかった強さを実感した

年齢を越える
「何か」をもっている「トラ」が
よりいっそう「経験」をつめばもはや越後で太刀打ちできる者はい
なくなる事だろう

あれこそ
亡き親方，為景（ためかげ）の血をついだ「獣」だ
最後の問答
「髷」を落とさなかったら「斬られていた」
まさに
瞬間の
「駆け引き」だった

「手に汗握る」
いやいや全身にじっとりと湧き上がっている汗。。。。
十月には不似合いな熱気
肩を揺らし身体をほぐす

久しぶりの「戦（いくさ）」に老将はの気持ちは高ぶっていた
かつての日々を思い出させる

「戦であったわ。。。」

声にだして一言
そしてやっと整った自分の気持ちを確かめるように軍団が消えていった道を。。
大手門の方を振り返って見た

「将たるトラであったわ。。。」

屋敷にもどった城主の変わり果てた「髷」を見て言葉を無くした家臣たちに秀忠は告げた

「さあ。。乱の支度をするぞ。。」
その目は先ほどの「芝居」以上にずっと燃えていた
いや
さらに輝きを増し生きている
主の発言にまたも虚を突かれてどよめく家臣たちを尻目に秀忠は拳をあげた

「やはり戦わねばならん」

言葉には新たな決意が込められていた

年末も近づくこの時期に。。。
晴景（はるかげ）は久しぶりに届いた栃尾城からの手紙をめんどくさそうに読み終えた
栃尾から届く手紙はだいたい内容が一緒だ

「戦場報告」

誰が何をした
そのために兵を出した
何人討ち取った
討ち取った家老や兵の「禄」について
死んでしまった兵の「禄」
食い扶持

まったくだ

そんなめんどうな事は栃尾の中ですませてくれれば良いのに「影トラ」は真面目「指示」を仰ぐ

「戦」にいけば同じ事の指示を何度もココに仰ぐ
こまごまと書き記された手紙の大半は読み飛ばしていた

小姓に背中をさすらせながら
雪もちらつくようになった春日山から景色を眺めて思った

「くそ面白ない女だ」

とことん男まがいの仕事をこなしていく「影トラ」の存在はココ一年の間で誰もが知るところになっていた

特に
栃尾から「直江」が帰参してからの活躍によって
その手腕が「本人」の業(わざ)である事が明確になってからは春日山に居着く
諸将の間でも評価が高く

よく耳に付くようになっていた

「越後のトラ」と

そこにきてとどいた手紙に
「黒田秀忠(くろだひでただ)」に謀反のおそれあり

ときた
「おそれあり」。。。。。で
何を指示しろというのだ？

早馬が持ってきた情報ではすでに栃尾勢は黒滝城で「一仕事」してしまっている
もっとも
いつだってそうだ「早すぎる」のだ
返事を出す前に事は終わってしまう

そして今日はその張本人である黒田からの手紙が届いていた
忙しいのにどっちも
こっちも。。。。と顔をしかめつつ目の前に鎮座する直江に声をかけた

「どうしたものか。。。」

この手のたぐいの「事務処理」は直江が一手に引き受けている
家臣の代表各である直江に意見を聞くのが一番良い

「事は重大です，慎重に調べる必要があります」

だが大抵は今のように堅苦しい答えだ
晴景は向き直り

「だが秀忠は隠居して身の潔白を示したいと申し込んでいる」

父の時代からの臣下を疑うようなまねはしない
むしろ
こんな時ほど「守護代」らしく堂々とした対応をしたほうがよいと
晴景は思っていた

もちろん
晴景とて十分に「戦働き」をしてきた身だ
そういう意味でも「秀忠」をよく知っているし「慎重」になれる

こういう「些末」に思われがちな事を見落としていけないとは常に思ってはいる

だが。。。

そんな冷静さを重んじたい気持ちに大きな「闇」の帳がかかる時が多くなっていた

何もかもが気に入らなかった

「影トラ様からの手紙の内容との食い違いが多いのが気になりませんか？」

直江の声は重い，そして的確な助言を返す

事態は「謀反」。。。。につながったかもしれないという

無視する事のできないものだが

「調べなくてはならない」。。。のだが。。。

美麗な眉山には苛立ちが宿っている

。。。。。

重臣の助言が曇って聞こえる理由は。。。
すでに
答えとして「影トラの手紙」を重要視している事が気に入らなかった

そこまで
影トラの言葉に信をおいておきながら
わざわざ私に「進言」にくるのは何故だ「守護代」だからか？

仕方なしに「聞きに来ている」ようにしか感じられない
まるで「嫌がらせ」だ

ひしひしと感じる

最近はどの手紙や「戦場報告」をとってもそうだ
「影トラ」の書いた事がまるで「正しい」かのように解釈されていく
少しも
「守護代」である自分の意見が必要とされていない。。。

おざなりにされている
だったら私の手を煩わせずに「解決」してくれればいいじゃないか？

嫌がらせのように伺いを立ててくるように見える
直江が。。。
いや

家臣達が気に入らない

「では，秀忠の手紙は「嘘」なのか？」

思い返して
腹立ち紛れの表情を隠すことなく直江に言い返した
そんな言葉にたじろぐような男ではないことが
わかっていても

「調べる必要があるという事です」

やはり怖じることない返事
静かに冷静な意見を言う姿に
イライラし
その焦燥感をもち続ける自分に嫌気がさした

年下の女
腹違いの妹
何故に「力」で越後を制しようとする。。。
今まで晴景が行ってきた「会話」や「知恵」を真っ向から否定される気分は。。

「力」でわしを貶めている。。。

考えなくてもいいような「勘気」

もっと「守護代様」である自分に平伏させたい。。
会話のとぎれた間も少しも動かず自分を見ていた直江に気がつき扇で顔を隠した

「秀忠の事はもういい」

不機嫌はそのまま身振りで返事をさせた
軽く手をふり
直江に下がれと合図した

こんなところで家臣と問答をしなくても
「影トラ」は謹賀の挨拶にココにくる

本人が春日山に来たときに
はっきりと自分の口から「黒田」の事について意見を交わせばいい
これ以上直江と会話したら
自分が矮小な「男」に見えてしまう気がする

だれが「守護代」「様」なのかはっきりさせられる場所で
謹賀の席で臣下たちの前で話をしたらイイ

「ほっておける事ではありません」

下がれの合図に下がらなかった直江はそのまま諫言をした
しかし

そこにふれる事を晴景は許さなかった
いや
追求を受けた事で許せなくなってしまった

「秀忠は父の代からの忠臣だぞ！！疑いだけで罰せられるか！！」

秀忠の手紙を持ち上げてさらに続けた
抑えていた感情を爆発させた

「疑いだけで責め立てられた事に一言半句の文句もない！！」

激発的な言葉に少なからず驚き反論を買え餌無かった直江の姿に
元来の自分を取り戻した晴景は
小さく咳払いをして
手紙をおき

自分を落ち着かせるためにより静かに応えた

「影トラの言い分だけを聞くことなどできない」

だが心には「怒」を十分に渦巻かせていた
忌々しい。。。
忌々しいのだ。。。

沈黙の直江に扇で顔を隠し直した晴景は静かに聞いた

「影トラだけが正しいのか？」

直江は返答しなかった
それに続けて合図した

「下がれ。。」

直江が部屋をでた後。。。
晴景はせきが止まらなかった
夏からつづく「病」が苛立ちに拍車をかけている事はわかっていた

孤独だ
妻とは。。。一月に三日も会わない日々
なのに虎御前とは七日に一度は顔を合わせ
毎日のように家臣には責め立てられる

障子張りの向こうに霞む山々を見て
父の言葉を思い出した

「守護代の仕事は「孤独」である強くなくてはならん」

なりたいなどと願った事もない役職だったし
その役職に私が就くことを家臣誰が願ってくれたのだ？
むしろ
「懐疑的」な目で自分を見ていた
この仕事は父に押し付けられた仕事だ

溜息をついた
ああっ
そう言う意味ではしっかりと「孤独」だ
ただ
少しの酒を愛し歌を吟ずる事が好きだ。。植樹をし花を待つ事。。。
。縁側で。。。

「戦」が大嫌いだ

「身体を厭うてください」

話の間中奥に座していた小姓が
そっと肩に着物を掛けて言った
まだ年の頃十歳ぐらい
浅黄色の着物が身体にあわないのか華奢にみえる

「水丸(みずまる)。。。オマエのような弟がほしかったよ。。」

本心でそう思ってしまう
あんな凶暴な「噂」の。。。影トラなぞ。。いらんわ

手をとり肩を抱いた
「はい。。私も晴景様のような兄上が欲しかったです」
とまだ幼さの残る顔ははっきりと自分の意志を示した

心の安まるところを見いだせなくなっていた晴景はそのまま水丸に

口づけ
静かに目を閉じた
「静かに生きていたいだけなのだ。。。」

その１２　将器　（２）（後書き）

衆道。。。。が少しでてきました
前書きで注意したほど大胆な描写ではなかったのですが
戦国時代では武将の「嗜み」として「当然のように」あった事なので注意書きをするか？しないか？迷ったほどでした

かの武田信玄は高坂弾正と
織田信長は前田利家と

と言う具合に「小姓」に限らずそういう関係はあった事です（高坂弾正は小姓から出世して武将になった）（織田信長との関係では森蘭丸が定説ですがそれ以前の相手は利家だっと言われています）。。。らしいですよ（爆）

主従としてこう言う関係をもつ事は「誉れ」でもあった時代の事ですから
割と「性」にも奔放な時代だったのでしょうか？
夜ばいとＯＫだったらしいし

ちなみに晴景の相手としてでてきた「水丸」は花の慶次で前田利家に相手として召されそうになった小姓の名前から拝借！！歳はちょっと若め（爆）

そんな風に考えると「トラ」はかなり禁欲的な人だったんだなぁ～～って思いますよ

まず
ヒボシには無理ですね
寂しくって死にます（爆死）

というわけで
衆道はこれからもちょこちょこでてくるとおもいますから苦手な方
はご注意ください！！

ではまた後書きでお会いしましょう～～

その１２　将器　（３）

春日山にもどるのは二年ぶりぐらいだった
前日は。。。
気持ちがフワフワしてしまって落ち着かなかった

母上や兄上，師光育（こういく）
直江に。。。ジンに会えると思うと
身だしなみから何からが気になって自分で何度も身の回りを確かめて歩いた

そのたびに
おせんに小言をいわれても
換えの着物を覗き込んだり
土産物の「干物」を確認たりしてウロウロした

「どうだろう？」
新しく下ろした「素襖（すおう）」をおせんに見せた

というのも
最近私は身体が大きくなった。。。
というか

背が伸びた
前はおせん達「侍女」とそれほど変わらない背丈だったのに
今は彼女たちより頭半分ぐらい高い

実乃や，やたろー達のような「大男」と比べたら「小さい」のだけど
宇佐見とはそれほど変わらないぐらいになっていた
「戦場」の転戦が多かったからか
あまり気にしてもいなかったのだが
秋口から向こう
急に

身につける物の何もかもが「窮屈」に感じるようになった

着物の裾が。。。
あんまりな事になってしまって気がついた

後。。。
胸元がどうしてキレイにしまらない
何をしても邪魔な「乳」はこれまた周りの「侍女」達より大きく育ってしまって
着物への収まりを悪くしていた

。。。。。

きちんとしていないなんて。。。。

日頃，ジンに作務衣（さむえ）の前を着崩すなと言ってきた私としては。。。

しかめ面になっていた私に
おせんと直江の妻が二人してせっせっと作ってくれた「直垂（ひれたれ）」はお
気に入りだった
身体にぴったりだし
布にも気を遣ってくれたのか
サラサラした物も多くてさわり心地もいいし
そんなことが
嬉しい，楽しい

今年は雪がそれほど降らなかったが
寒さにも耐えられるような暖かい物のまで全てを新調してくれた

直江の妻はいろいろと気遣いの細かい人だ

毎日
「お体の調子はどうですか？お腹は痛くありませんか？」
と
伺いをたててくれるほどだ

健康だけが取り柄だ
心遣いにいつも

ありがとうを言った

「そんなにはしゃいで。。子供に見えてしまいますよ」

おせんの言葉にそれは困ると姿勢を正した

おせんは
私より一つ年下なのにずいぶん大人びた感じで侍女たちの間でも評判もいい
屋敷にいるうちは常に私の身の回りの事をしてくれる

たまに
「男衆」を怒鳴りつけている姿もみれば
実乃の愛娘の「多英（たえ）」とも仲がよいらしく
お針子の手伝いなど一緒によくしている
多英は十歳おせんは十五歳ぐらいかそこに最近は「つや」が加わって良くしゃべる

何しゃべってるのか
たまに加わってみるのだけど
さっぱり。。。

女の子の話は今ひとつわからないのが残念

よく話が盛り上がり過ぎてしまって声が高くなったりもするれど

そこは年長者らしく，おせんが
締めるところはとこは，しめて
所作などを教えたりしている姿をみると
やっぱり「直江」の娘だなと思わされる

今回の帰参詣でには一緒に連れて行く事にした
一年は父に会っていないのだからゆっくりしてほしい

しかし今回，実乃は春日山には行かない
問題が残ってしまっているからだ
フワフワしている気持ちの半分はこの問題が解決していないからとも言える

「黒田秀忠（くろだひでただ）」の事

あの「戦」から
十日後「守護代様」からの手紙が戻ってきた

内容は。。。。

不可解な物だった

「黒田秀忠の件については謹賀のおりに話をする」
それだけ
後は
事後処理的な事もなく
「お沙汰」らしい処罰もなかったようだ

不安に思って今一度
手紙をしたため春日山に送ったが返事は一緒だった
それで枇杷島の宇佐見に意見を求めたところ
「努めて監視を怠らない事」
という返事がきた

もちろんあの日以降監視は怠っていない
やたろー配下の何人かを城下に忍ばせている

実乃が残るのもそのせいだ
何かあっては困る
栃尾を守るために留守番をするのだ

それにしても
不安すぎる

何を取って「守護代様」は気にもされないのだろう？
私が戦場報告を送った次の日ぐらいに
秀忠からの手紙が春日山にも届けられたそうだが
その内容については何も教えてはいただけなかった

だけど思い返せば
黒田秀忠と「守護代様」の方が付き合いだって長い
共に戦った時だってある二人だ
腹を割った手紙の内容であったなら
私が心配する事はない

手紙についての言伝がないというのは
そういう
意思表示ともとれる

それなら
それで。。。いいのだけど一言は欲しい

家臣が心配事を持ったまま新年を迎えなくてはならないのに
自分だけ春日山にもどってしまうなんて。。心苦しい

とにかく心配だ

明日は出立なので三の丸まで歩いた
歩きながら
それぞれの仕事をこなす城人に労いを言いった
大変な一年だったが
みな活き活きとした顔を見せてくれるのが嬉しい

雑兵長屋の前でやたろー達がたき火をしていた
雪は多くなくとはいえ
寒い日が続いている中なのに，上半身裸の男たちが元気よくいったりきたりしている
すごいものだ

「ごくろうだね」

声をかけた
いらなくなった武具や使えなくなった槍を燃やす
今年も良く戦った
良く私たちを支えてくれた「武具」を供養した

「つや。。土産を楽しみにしていてな」

やたろーの隣でせっせっと木をくべて
顔をススまみれにしていたつやに言った

顔を拭って
「実乃から餅をもらってね」
と
私の言葉に笑ったつやの歯が抜けていて吹きそうになった
そうか
生え替わりだ

私の顔が緩んでしまったのを見て
つやは恥ずかしそうに口元を隠した

「すまんすまん!!」

つい笑ってしまったか?すぐあやまった
その仕草がたまらなく可愛い

可愛いつや
お土産を楽しみにしててほしい
頭をなでた

「酒持ってきたぞ!!」

突然の大声
裸男にまざって壺を担いで来たのは実乃だった
となりに「あの」愛娘，多英(たえ)をつれ

「影トラ様もどうですか？」
と
お猪口をクイとしてみせた
もちろん！
一緒するよ
嬉しくなった

あっという間に「酒盛り」が始まった
栃尾衆は陽気で騒がしい
でも
一緒に戦ってきた大切な仲間たちだ
実乃が私に酒をそそぎながら言った

「ご心配なく春日山に行ってください，「守護代様」や「直江」によろしくとお伝えください」

と顔を真っ赤にして。。
多英にも土産を持ってこなくては

私はなんていい「家臣」たちに恵まれた事だろうと常々思い
御仏にも感謝している
明日の朝も気分よく出られるさ
今日はみんなで飲もう

酒を煽った
冬の空は高くとても澄んでいた

大丈夫だろう
ココには信頼できる家臣がたくさんいる

私の心配をかき消すように宴は朝まで続いた

その１２　将器　（３）（後書き）

やっと４０話までやってまいりました！！
こういう
話の分配ってのもきちっと考えてやっていかないと
ただ「続く」になっちゃってしまりがなくなってしまう？

とか
ない頭絞って話をまとめてます

最近のメッセージくださる方で

「どこまで書くんですか？」

って
質問があったんですけど。。。
答えた方がいいのか（爆）

どこまででしょう
一応
ココまでは書こうってとこは決めてますけど
答えるのはやめときます（藁）

後

〇〇は出るんですか？

。。。

ごめんなさい
知らない人だっりしてめっちゃあせってます

そそそそそ
そんな人いたったけ？
勉強不足ですね。。。（爆死）

がんばります！！！
がんばります！！

暖かい目でみてやってください

それではまた後書きで会いましょ～～～

その１３　晴と影　（１）（前書き）

衆道（男同士の性的関係）の描写があります
苦いな方はご注意ください

その１３　晴と影　（１）

「朝なんか。。。。こなくてもいいのにな」
まだ薄暗い
夜明け前の空の色を恨めしそうに晴景（はるかげ）は眺めた

腕下には水丸が同じく目を覚まし
厭おうように晴景の胸に手を伸ばしている

「寒くはありませんか？」

首を振り
もう一度布団に身体をもどした
寒い日に一人で寝るなど耐えられない

水丸の若い身体を抱いて寝るのはそういう理由もあるが

ココ何年かは一人でいられない「寂しさ」が常にあった
治りの悪くなった「病」
妻との「確執」

そして「影トラ」だ

昨日，約2年ぶりに影トラは春日山に戻ってきた

たかが
そんな事だ
そんな事で城の中は大騒ぎだった

本丸前の櫓からその姿を見た時
その「成長」ぶりに驚いた

元服を言い渡した時も
栃尾に出て行った時も
あんな「幼女」をとまともに見たことはなかったが

ココを出たときとは
身体の大きさが一回りは違う「トラ」見て

「やはり「獣」か。。。」

と
言葉がこぼれた

苛立ちのこもった言葉が
それを水丸はしっかりと聞いた

本丸の表座敷は去年の謹賀とは比べ物にならないほどの家臣が集まっていた
毎年
年頭のあいさつをするため「よほどの事」がないかぎり越後の「国人衆」「豪族」はココの集まる

しかし
晴景が「守護代」に就任してからは減る一方だった
それはそれでよかった
いちいち
年頭に祝賀の酒盛りなど。。。
よく知りもしない領主たちのご機嫌をとるような酒は飲みたくもなかったし

ただ
めんどうな事だけで
なければないでも「良い」と思っていたぐらいだった

「めんどくさい事だ。。」

なのに今年は各々
城主のみならず，息子を連れてくる者
およそ腹心とも思われる将を連れてくる者でいっぱいになっている

目的は決まっている

今この「越後」にその名を響かせつつある「影トラ」を見に来たのだ

その武功にあやかりたいと思っているのだろう
だが
まあ
「がっかり」な結果になる事だろうと晴景は思っていた

どれほど功を挙げたとしても
しょせん「将」にはなれない

「女」だ

城主になる事があっても
いつかは誰かの「嫁」に行く

しかし
あれほど背丈を伸ばしてしまってはもらい手もなかなか見つけられない事だろう
と
卑屈に笑った

それでも「噂」多きその姿を見てみたかったのだろうな。。。

「あけましておめでとうございます」

参賀の席
真正面に座した晴景色に向かって影トラは深く頭を下げた姿は「堂々」という言葉がホントに似合う「若武者」ぶりだった
並ぶ諸将も興味を十分に示した視線だ

自分と比べる事などない。。。
そんなふうに思っていても
「病」を持ち痩せてしまった姿の「守護代」が
影トラを物見している諸将たちによって同じぐらい見比べられているのを感ぜずにはいられなかった

イライラしてしまうが
影トラの表情が言葉を待っているのに気がつき

「ごくろうであった」

と
静かに返答した
すぐに

「はい！守護代様，母上ともお元気なようすで大変嬉しい事でございます！」
と

元気の良い声が帰ってきた
やけに明るいトラの表情がよりいっそう気に入らなかった

何が嬉しいのだか?
卑屈になっているのか?自分が?

隣に座る虎御前はいつも通り
笑いもしない表情で影トラの話を聞いている

晴景が言葉が少ないせいもあって
痺れをキラしたのか諸将が影トラに話かけだした

いつのまに
こんな明るい「酒宴」になっているのだ?

晴景が守護代になった時
良い顔でそれを祝ってくれた者はいなかった

ただの
どさくさに「守護代」の地位を受け取った息子としてむしろ「疎まれた」
それが辛くて
かつて父が追放したり「隠居」させたりした領主を復帰させた
地位を取り戻すかわりに「平安」に過ごしたかった
だが
結果は無様な事だった

影トラが栃尾に入るまでのたかだか5．6年を抑える事ができなかった
それだって
苦渋の選択だったのに。。。
誰もそれに報いてはくれなかった

もともと
自分が「守護代」など。。。。望まれていなかったのだ

どこかで
狂ってしまった

そうだ

それだって「影トラ」の責任ではないか？

父は。。。。
虎御前が懐妊したとき跳んで喜んだ

「我が子は御仏に選ばれし子」

産まれる前から羨望を得ていた影トラ
まだ「トラ」がこの世にいないうちから

「いずれこの子が「越後」を一つにする」

などと聞かされた時の。。。この気持ちが誰にわかろうぞ。。。。

あのころ
まだ若かった晴景
父を支え一緒になって山河を駆け「戦(いくさ)」をする日々を送った
この身体の各所にその時の怪我が残っている
それが元で
今は「病」を自力で癒す事もままならぬ身体になってしまった

自分は。。。。十分に「越後」に尽くしたではないか。。。
だからこそ父は自分に「守護代」の地位を譲ったのではなかったのか？

何故だ。。。。

急に苛立ちの炎が目の前を赤くした
前に座る影トラは許し難い存在になった

「それにしても黒田秀忠（くろだひでただ）の事は早計であったな」
重く口を開き
酒盛りで浮かれた雰囲気を裂いた

家臣たちは水を打ったように静まりかえった
いつになく
いや
今まで見たことがないほどに「凶相」を纏った晴景に驚いた
怒りもしない「柳」のような存在ぐらいにしか思っていなかったのだから

「噂だけで兵を動かすなどと。。」

影トラはすでに姿勢を正している
しっかりと目を見て返答した

「しかし黒滝城内にある備蓄，浪人の量，数とも通常ではあり得ない物でした」

だからなんだ
秀忠の手紙では去年の凶作で職を失った者を養い
兵糧はその事を鑑みて「備蓄」していたという
それを説明した上で続けた

「あくまで「疑い」だ調べもしないで「戦」をしたかったのか？」

影トラを詰問する晴景を虎御前は静かに見ている
きっと
影トラは「戦(くいさ)」好きなんだ
そう思うとさらに腹が立った

「つまらぬ「流言」に腹を立てて出陣など。。。やはり「女」のする事よな」

今まで何かに口憚って言わなかった言葉をさらりと言ってのけるほど晴景の怒っていた
影トラはすぐに頭を下げた

「申し訳ありませんでした」

家臣の中にはどよめきもあったが怯むことなく続けた

「それでも秀忠は私に忠勤してくれるそうだ。。今日も「干物」をたくさん送ってきてくれた」
祝いの膳にのった干物を指さしながら笑った

笑っているのに心は痛むばかりだった
気など晴れもしない問答だ
「それと旗が良く見えなかったそうだ。。」
と
最後の釘をさした

先に火矢を射たと
影トラがごねでもしたら話が長くなってしまいそうだし。。。
そこまで言ったところで
息苦しくなって逃げた

あんな場所にいたくない
「病」をこじらすだけだ。。。そう思い
そのまま「退出」した

昨日それだけの事をしただけだ
それなのに
身体中が痛む。。。。
寒い季節は辛い

布団の中で身体を丸めた

水丸がそれを覆うようにかぶさり傷跡を少しづつさすった
不意に
心も体もすべてがまとまって震えた

「なんのための「守護代」なのか。。。」

泣くような声でこぼした

ただ辛かった

自分の前では笑いもしない家臣たちの声が耳について
まだ腹だたしかった

「晴景様あっての越後です」
凛とした少年らしい清々しい声で水丸は答えた
手を伸ばし肩を抱き水丸の口を舐めた

「近くにいてくれ。。。」
「はい。」

「水丸は晴景様一の家来です，いつも近くにおります」
そうだ

その言葉が欲しかったのだ。。。
暖かいその身体を強く
強く引き寄せた

今，安らげるのは「水丸」の身体だけだった

その１３　晴と影　（２）

寝所に戻ったのは
夜もかなり更けた時間だった。。。。
ずいぶん長い酒宴だった
心をいっぱいに満たすことができた良い宴だった

今朝
春日山に入城した時少しだけ雪が降った
降るというより「舞う」ように
優しくそぞく雪
和歌を詠みたくなるほど美しい景色

登城途中
林泉寺の前を通った時
住職の光育が迎えてくれて嬉しくなった

「大きくなられましたな」

師は顔をほころばせ
喜んでくれた
それでもまだ師よりは小さな私

城に行くのが先だったので，後日伺う事を約束して屋敷にむかった

何もかもが「鮮明」に懐かしい
元服でココに来たのは「初夏」の頃だった
その年の秋には
慌ただしく「栃尾城」に向かった

二年ぶりの帰参

謹賀の宴の間

上座からそのまま退席してしまう兄の後ろ姿に
一言も声をかけられなかった。。。

「黒田秀忠（くろだひでただ）」の事
それは重要な話だったハズなのに何を意見する事もできず
ただ
兄の機嫌を損ね終わってしまった

「兄上。。。。」

今まで
あんな風にお叱りを受けたことはなかった
どちらかと言えば
「温厚」な兄

それほどに叱咤される「失策」だったのか。。。

私は。。
重要な事だと思っていたからこそ何度もの手紙を送り
指示を仰いだ

もっとたくさんの言葉を交わし理解を得たかった
良い治世の手伝いをする者として

重要な責務と信じてやってきたのに

悲しくなってしまった
もっともっと忌憚なく兄と語り合いたかった。。。
「長尾」の一員として「守護代」を助ける者として

置いていかれた気持ちでいっぱいになって
悲しくて，しょぼくれたて。。。

涙が出そうになった
。。。。。

「すまない。。。」

楽しく酒を飲んでいた家臣たちが静まりかえってしまっていたことに気がついた

なんて事だ。。。。
せっかくの祝いの席を自分のせいで。。。。水を差してしまった

「気にせずやってくれ！」
これも勤め明るく振る舞わねば
涙を見せぬように袖を振って酒を貰おうと手を振って見せた

「お初にお目にかかります！！！」

態度とはうらはらに
うなだれかかった心に「喝」を入れるような大声が耳元に響き
右に身体を反らせた

徳利をひっくり返しそうになりながら

顔をあげると
大男が立っている
男はそのまま板の間に大きな音をたてて座り

「柿崎和泉守景家（かきざきいずみのかみかげいえ）と申します！！」

と
これまた遠慮のないデカイ声を耳元で発した

大男には慣れている
栃尾にはやたろー衆の大男組がいるから身の丈ごときに驚きもしないのだが

ココまで「声」のデカイ男は初めてだった
身体の芯に響く

「影トラである。。」

気を取り直しつつ
顔を見た

「鍾馗」さまか？
って言うぐらいの口から顎にかけと続く髭
しかもかなり「硬そう」な毛
眉も同じぐらいにがっちりとした毛
とにかく

「毛」

直垂の胸元からも溢れるほどの胸毛

手の甲も
座った袴の裾からみえるすね毛も。。。

「熊。。。。」

つい言葉に出てしまった
その言葉を聞いた柿崎ニヤリとすると私の肩を勢いよくボンと叩いて言った

「栃尾の熊は元気にしておりますか！」

と
私の顔はすぐ前にあるのに声の勢いは落ちることがないつばが。。。。とぶ。。。

柿崎の声の大きさに少し下がった
すごい「音」だ
顔を袖で拭う
大きな手に二本もった徳利の一つをむけられたので
杯をだし酒をもらいながら聞き返した

「栃尾の熊。。。？」

「実乃(じつの)ですわ！！」

実乃！！

パッと浮かんだ実乃の顔につい笑ってしまった
そうでなくても
やたろーと二人揃って歩く姿は「熊」だ
うまい事を言う

「もう一人の「熊」も来ておりますわ」
と指さした

「直江!!」
そこには懐かしい顔がいた
直江は柿崎の頭を叩きながら
「熊ではない!!」

と
徳利を差し出した
急に嬉しくなった

が
さきほど
兄を怒らしてしまった事を思い出し自重しなくてはと笑いを抑えようとした
こんな所で笑っていいわけない
叱咤されたばかりなのに。。。
私は言葉を控えようとした

すると直江が小声で
「今日は無礼講ですよ」と
続けて
「守護代様は身体の様子がすぐれなかっただけです，怒っていらっ

しゃったわけではないですよ」
と言った
私が口ごもったのを見抜いていた
直江に隠し事なんて無理だ
苦笑いした

「そんな事より!!「戦(いくさ)」の話を聞きとうございます!!」

間を割って柿崎が入る
そんな事をしなくたって
十分に声は届いているのに

その柿崎の言葉にまってましたと他の諸将が集まってきた
みんな杯をもって前に並ぶ

なになに!!

栃尾にいた時と変わらないぐらいの勢い
男達は名前名乗りだした

「ちょっと待って。。。どうしたの?」

あまりに多くの家臣が集まるのでびっくりして聞いた

「みな影トラ様にお会いしたかったのです」

えっ。。。。

私に。。。

なんで？
すでに出来上がっているのか
顔を真っ赤にした者から
真面目に私を覗き込む者まで。。。

若い武士が言った
「守護代様を助けるみごとな戦する影トラ様にお会いしたかったです！」
「お話お聞かせください！！」

「助ける。。」

そうだ

どんなに多くの兵の血を見る事になったって
どんなに苦しくたって

長尾の家のため，ひいては越後守護者，上杉様のため
そして
「越後」のために戦ってきた
そのために
たくさん自分を叱咤した
何度も一人で泣いた

嬉しい
兄上にそう言ってもらいたかったんだ
兄上からその言葉が欲しかった事に気がつかされた

急に「涙ぐんで」しまった

目に涙を浮かべた私の姿に
驚き顔を見合わせだまってしまった諸将
しんみりしてしまった

ハッとする
いかん。。。いかん！またまた

そこに
柿崎が大声で笑いながら

「酒は強いのに「泣き上戸」ですか！！影トラ様は！！」

わわわわ
恥ずかしい
でも
でも

嬉しい
少しでも自分のしてきたことを知ってくれようとする「良き家臣」
たちがココにいる

徳利を柿崎から奪いとり

「言ったな！！さあ！！飲め！！」

並ぶ男たちに酒をそそいでいった
みんないい顔をしている

みんな良い春日山の将たちだ

浴びるほど飲んだのに
早朝を駆ける
馬の音で目を覚ました
日の出を見られる良い時間だった
気持ちを改め

変わることなく「越後」に「守護代様」に尽くす事を近い「禅」を
組んだ

高い御山の上の城

空に一段近い場所だ

久しぶりの直江は酒を飲んでも「冷静」な人だった
初めて会った柿崎は豪快を絵に描いたような人だった
寝所に帰る前
夜も深まっているのに大きな声で

「次の戦には是非にお呼びくだされ！！良き槍働きをいたしますぞ
！！」
と半ば暴れていた

多くの諸将たちと意見を交わし話を出来たことも
すばらしい「経験」になった
みんな
力強いし

心強い

私も，もっと励まねば！
そう
もっと兄上を悲嘆させるような事のないようにがんばらねば
心を引き締めた

「禅」から立ち上がって
空をみながら

きつく結んだ誓いとはうらはらに

今日はジンに会える。。と。。。楽しみだと一人ではしゃいでしまった

その１３　晴と影　（３）

春日山は多忙を極めていた
「トラ」が入城する七日前にジンたちは城に入った

入城から向こう
謹賀の祝の支度で侍女たちは
慌ただしく走り回り屋敷の中には黄色い声が飛び交っている
例年と異なり登城する諸将が多いそれが原因だ

与板城（よいたじょう）とくらべれば
やはり大きな山城の春日山を，ジンたちも当主「直江」とともに支
度に回っていた

ジンは
林泉寺には挨拶にいってなかった

師に会うのは少し気が引けて
思い留まっていた

「仕方ないこと」
と言葉をこぼした

ジンがココに戻ってきたのも
一年ぶりだった

約一年前
トラのいる栃尾城を離れ
直江に従い一度だけ春日山に帰った
その時に
林泉寺に寄ったが

師・光育は。。。
笑顔では迎えてくれなかった

「何故，影トラ様の元を離れた。。」
責めている口調ではなかったが
深くきざまれたしわにも顔にも苦悩を浮かべていた

「今以上に「トラ」の役に立ちたいからです」

自分のしたい事を
その選択を正しいと信じはっきり意志を伝えた
良い返事を頂けるとおもったが

師は首を振った
その姿は悲しそうで

祝賀の日，朝から心は躍りっぱなしだ
身支度を何度も見直した
初めて直垂　（ひれたれ）を着たときは作務衣との違いにガタガタ
になってしまい
侍女たちに冷笑された
どちらかと言えば肩衣（かたい）の方が自分向きだとわかった

今は「きちん」としている

「大丈夫。。。」

トラが帰ってきたんだ
話すことがたくさんある
今は背丈だって「やたろー」と同じぐらいになっただろう
でも。。
きっと
トラも少しは大きくなったんだろうな。。
からかってみよう
ムキになるその顔が浮かぶ

かつて
トラが読んでいた「軍学書」も読んだ
教養にさらに磨きをかけるため
与板にあった書物はほとんど読み尽くした

身体だって
ただでかくなっただけじゃない

トラが好んでやった「立禅（りつぜん）」（弓）も
槍も
刀も

果ては「忍」の使う技まで身につけた

もう
どんな馬廻りだって
自分にかなう者はいない「断言」できる
胸を張って
トラに仕える事ができる

ジンは自分にむかって
「おまたせ。。。。。」
小声でそう言って

一人で照れた

やっと会える。。。会えるんだ！

本丸の屋敷で行われている「宴」を遠くで見ていた
城庭の中程にある屋敷はもともとそんなに大きな部屋をもっていない

なのに
いつになく多い家臣団の集まった
そののせいかずいぶん長く続いている

少し前，「守護代様」が退出なさり渡りを戻っていかれた時
しずかになったので「お開き」になったのか？
と気を揉んだが
その後引き続き「酒宴」は始まり
夜も深まってきたこの時間もまだ騒がしい

山にあたる風のせいなのか木々が雪が落とす

肌寒い。。。今日は会えないか。。。

考えてみれば
「トラ」は今や
「栃尾の城に住まう虎」とまで名を馳せる「将」になったんだ
各諸将も
その人物を見に来ているし

それに応える「義務」もある

まだ
直江様のお付きである自分にはその「宴」に行く資格もなければ
それに伴った「武功」も無い
待つしかない
ただ
直江様が

来ているという事がわかれば自分もココにいる事はわかってくれる
だろう

手のひらに降りる
雪も
熱い気持ちに姿を溶かす

トラは林泉寺に行くだろう

そこに行こう
師とのわだかまりも消えるさ
あのころのように話をしよう

楽しみだ。。。
一人ほくそ笑んでいる姿を横で見ていた男が話しかけた

「そわそわしてるな」
段蔵(だんぞう)がニヤリとしている

段蔵はジンが与板で初めてつくった仲間だ

城の事や
地域の事を細かく教えてくれた優男
城下の娘に夜ばいをするのが趣味のいけ好かないヤツで
最初共に夜警に行ったときは大げんかをした
拳で語り合った事もあったが

奉公にかけては

めっほう律儀で見習うところも多い男だ
今では良き呑み友達になった

「影トラ様か？」

もちろんトラの事も話してあった
ああっとうなずく

「あえねぇだろうなぁ。。」
門前で屋敷を見ながら段蔵は言った

たしかに
長尾を代表する「将」になった影トラとはよほどの「縁」がなければ
会えないだろうし
口も聞けないだろうけど
ほんのちょっと前まで一緒に修行した仲のジンにしてみれば

愚問にしか聞こえなかった

「会えるさ」
ちょっとした優越感もあった
段蔵はフーっと息を吹き手を温めながら聞いた

「女城主様なんだろ？」

興味深そうに

トラは「女」
それは

与板に行ったときも家臣はみんな知っていた
隠されたことでなかったのに
一安心した事を思い出しながら
そうだと返事した

「婿選びにきたんじゃねーの？」

ハッとして段蔵に向き直った
。。。。。。

「または領主たちが嫁取りにきたか？」

考えた事もなかった
急に心が忙しくなった

「だって今年で十七になるんだろ？おトラさまは」

確かに十七歳といえばとうに「嫁」に行っても不思議じゃない年齢だ
言葉を失っているジンに追い打ちをかけるように段蔵は言う

ジンは
今年二十歳になった
実は段蔵との付き合いで飲み歩いたとき。。。
覚えていないのだが（これは言い訳）何人かの「女」を知った
僧であった時には「禁忌」であった事で
何度か拒んだのだが

段蔵に言わせれば
「女」を知らない武士（もののふ）は「半端者」だというし
それも一つの「習い」だと与板の武士たちも言われ
修行の一つと腹をくくって「抱いた」

思い出すに。。。変な罪悪感だった
抱いた「女」の歳は今の「トラ」より年下だっていた。。。

「十七っていや「女」も男が欲しくなる歳だからなぁ」
「だまれ！！」

つい怒鳴ってしまった
びっくりした顔の段蔵は少し間をおいて

「おこんな。。。冗談だよ。。」
と
肩を叩いた

自分が女にした事をトラもしている？
ぶんぶんと
頭を振った

不埒な事を想像して。。。しまう。。。「トラ」の裸は。。見たこともある
あの肌を
あの肩を。。。

大きく頭を振った
何考えて。。。

「相手にされないさ」
何の？
段蔵はあきれた表情で

「栃尾に住まう虎様なんだ，並の男じゃ勤まらないさ。。」
と口をとがらせた

「加当！！加当陣江（かとうじんえ）はいるか！！」

不意に自分の名を呼ぶ声に背筋を正した
段蔵は飛び上がって
慌ただしく伏した

こんな話を聞かれてしまったら。。。首が飛んでしまう

その場に控えた
左右衛門（さえもん）様だ

「ここにおります」
ジンも慌てて伏した
「支度いたせ」
「支度？」
一瞬「宴」に呼ばれたのかと顔をほころばせそうになった
「与板に書状を出す，急ぎ届けよ」
返事が遅れた
「聞こえておるか？」
「はい。。。」
呆けた
というより愕然とした
何故こんな時間になって「書状」を？
「書は後で与兵衛尉様（直江）が手渡すそうだ」
「聞こえておるか！」
ジンの顔が呆けていたのを見て左右衛門は声を荒げて問いただした
「ははっ。。。」
呆然としたアホ面を隠すために生返事をしながら顔を伏した

書状の内容は
「黒滝城に対し警戒を怠るな」
と言うたぐいのものだった

所作正しく直江はジンに書状を渡した
何か言おうとする口を遮るように

「油断無きようにな。。。日の出前にはココでよ」

と
目を見合わせ
問答無用を告げられた
厩(うまや)にむかいながら

「なんで。。。オレなんだ。。」

と肩を落とした
すぐにココを動く事は出来ないほど
がっくりときてしまった

主君に名指しで命令をうけるのは「誉れ」だ
まだうすぐらい空を
星を見つめた

会いたかった。。。。
一目だけでも
唇を噛んだ

馬に乗り
「トラ」の眠る屋敷の前を走った
振り向きはしなかった
まだ

まだそういう時でなかっただけ

そう思い
与板に向きを変えた

道筋で一人の僧とすれ違ったがそれが師．光育とは気がつかなかった

光育は
馬上の男が陣江である事に気がついたが何も言わずただ見送った

その顔は深く沈み
とても
悲しそうだった

その１３　晴と影　（３）（後書き）

後書きからこんばんわ
火星です

歴史物を書くにあたって色々と資料を探すわけですが
最近は
日本の歴史も
かつて学校の歴史の授業で習った頃より「解明」されてはていて
まちがっていた部分も色々指摘されてきてます

結果
かなり
私的には「混在」してます（おつむ弱い私。。）

ダメなんです

分別できないほどの量になってしまって
混乱ばっかりで
だから（言い訳）よく修交しています事をゆるしてやってください

そんな私は資料集めで（おもにパソコンで調べてます）遭遇する一品を欲しくなってしまうという悪癖をもっています

今
もっとも欲しいのは「鎧」です（爆）

しかも着られるヤツ。。。

しかし大きい買い物なので
相方さんに相談してみたところ
部屋の掃除もままならないので却下されました。。。。

買っても着る所がないですしね

しかし
着られると言うことは質感や何かまでよく理解できそうで。。。

そんな火星の戯言でした

それではまた後書きであいましょ～～～

その１３　晴と影　（４）

春日山城の門を朝早くにくぐった光育（こういく）は一室で虎御前（とらごぜん）と会っていた
御前とまともに顔を合わせるのは５年ぶりぐらいだ
二人して「禅」の世界にいるかのような静かな会見

夫であった為景（ためかげ）を亡くしてからは
剃髪し，頭を覆い
名を「青岩院（せいがんいん）」と改めていたが
この城では
相変わらず「御前」と呼ばれ
城の多く実権を未だに握っていた

彼女の生き方を知っていればそれは何の不思議でもない事だった

早朝にもかかわらず
御前の身なりはきっちりと整っている
まるで
あの時のようだ。。。。
光育は思い返していた

虎御前。。。。光育が彼女に初めてあったのはまだ混乱の続く
荒れ果てた時代のまっただ中

為景の軍は劣勢に立たされていた
「力無き」守護を排除した事は多くの「名門」と名の付く「長尾氏」
たちの反感を買っていた
何もしなかった者の方が口さがない。。。卑怯者ばかりの国
守護側の攻勢に
手助けしてくれる者は少なかった

「強者たれ」

それは為景の口癖でもあった

守護家がもっと強くあってくれれば
これほどまでに「越後」は混乱の火の下にいる事はなかったハズだ
農民は苦しみ
豪族は好き勝手な支配をしている

あえて「汚名」を着てやろう
守護殺しの大罪人

それでも民草のために「越後」を一つにする
「力」と「知恵」を使い
「忍耐」を信条とし自分を信じて戦い続けた

一度は佐渡に逃げねばならぬほどの窮地に陥り

それでも「諦めることなく」
一年後に「越後」に舞い戻り
「上杉」管領軍を打ち破った

百の戦(いくさ)した男「戦鬼為景(いくさおにためかげ)」

荒れ狂うがごとく
「戦(いくさ)」の海に身を投じた男

それが
虎御前の夫

あの日見た御前の顔は「血」まみれだった

右手に血染めの刀を持ち，左手に数珠を巻き
金糸でまとめ上げられた美しい「大鎧」を纏い
「栖吉衆(すよししゅう)」を引き連れ内乱から戻ってきたところだった

夫の背中を守って戦うのは彼女にとって「あたりまえの勤め」だった

「おトラさま」

その名は御前のものだった

名を呼ばれた顔は「不動明王」のようにぱっちりと見開いた目で光
育の前に来た
血と泥をかぶり
ススまみれになった顔なのに手に取るように「感情」を理解させる
「瞳」
静かな「怒り」をたたえている
その細い身体の芯を支える根元

大きな黒い瞳は光育の前で止まり

「オマエも族僧なのか?」

と女らしくない抑揚のない声で聞いた
光育は深く頭をさげ答えた

「私は林泉寺住職，天室光育（てんしつこういく）と申します，一度お会いしておりますが。。。」
「そうか」

そっけない返事
そのまま光育の横を通り抜け引き立てられた「罪人」たちの前に歩いていった

「越後」の混乱はあらゆるものの秩序を破壊していた
戦に負けた「落ち武者」は髷を落として「僧」と称し
村に入っては狼藉を働き火を掛けた
もはや
そこに「武士（もののふ）」たる誇りも人たる証もなかった
ただ野に放たれた「不貞」の獣たち

栖吉衆はそういう者たちを狩り出すために戦っていた

「たすけてくだせぇ。。。」

顔のアチコチに殴られた怪我した男の前に
御前は進むと
懐紙で刀の刃を拭きなおしそのまま何事も無かったかのように
首をはねた

連れ立てられた
男たちは戦慄した

「何事」も，聞く耳持たぬ，「おトラ」さま

平然とした顔で
また一人
また一人と首をはねる

まるであたりまえの「仕事」のように淡々と斬り続ける

「助けて。。」

何も聞かない
聞こえない

死を目の前にした武士に辞世の句を語らせない
野に下り獣となった者にそんなものは必要ない

それを態度で表す
「獣」の首など当主の妻である
虎御前がはねなくても良いのにあえてそうする

「強き者。。。為景の妻はまた同じ強き者」

微動だにしない顔で次々と「罪人」達を切り捨てていった
光育は「辛いこと」だと重いながらもその処罰を見ていたが
その列に子供達がいた事に驚き
御前の前に走った
「お待ちください！」

しかし待たない

言葉は届かなかったように子供の首をはねた

「お待ちください」
光育は叫びながら
今度は躊躇なく身体を刀の前にさらし目の前に座った

「何故子供達まで。。。」

振り上げた刀を下ろさずそのまま

「どかれよ」
と変わらぬ表情の御前は答えた
口を開かない御前の代わりなのか
栖吉の武士が答えた

「その子供たちは蔵破りの手伝いをしたのです」

光育の背中で泣き出した子度たちの顔は

まだあまりに幼かった
上は十歳ぐらいか？年下の子たちにまだ言葉も話せないような幼子（おさなご）だ

「幼子です。。乳飲み子さえおります。。」

御前は読めぬ表情のまま首を傾げて
「どかれよ。。天室光育。。」
冷たい声

「どきません」
子供達を守るように座り込んだまま返事する
おトラの目は大きく開かれ
ふりかぶったままの状態で言った

「罪（とが）に大小はない。。。等しく斬る」

そうだ
それが「秩序」を取り戻すための「英断」なのだ。。。
しかし
泣き叫ぶこの「幼子」たちを斬る事が「秩序」の復帰として正しいのか？
蔵を襲った者たちのおこぼれに食いつかねばならぬほど飢えた子供たちが「罪人」と？

否

「では御前の罪はどこで斬られるのでしょうか？」

栖吉の男たちは凍りついた
未だ「おトラ」に意見して生きていた者はいないのだから
ざわめく
小声ながら光育を止めようと注意を促すが間に入る事はしない

「私に罪があると？」
高く
身構えはそのままの姿を
栖吉の男達はおそれている
光育はそれでも答えた

「はい。。。「越後」のために大きな罪をしょっておられます」

無言の「おトラ」の前に
さらに前に見を乗り出した

「あえてです。。。この地を想い剣をもたれた罪です」

漆黒の瞳は何も言わず言葉を聞く

「大きな慈悲の心で罪をしょわれ国のために涙していらっしゃる。
。あなたならばわかるハズです」

守護殺しの汚名を夫と共に背負い
「越後」を想い，くちくさ者の豪族を平定していく
どれほどに叩かれても「信じた」道
過酷なれど
求め続けたもののためにその手に剣をとった「あなたなら」

そしてその戦いの下
いまだ収まらぬ乱世の中
住むこと，食べることもままならなくなってしまった
焼け出された地に，飢えた子らをまだ「救えていない事を」

「その心でこの地の明日しょう子供達に慈悲を頂きたい！」

光育の態度は毅然していた
振りかざした刀をけっして下ろさなかった御前に対して目を背けなかった

静かな一息を吐き
御前はゆっくりと刀を下ろし懐紙で刃を拭った

「許す」

ただ一言そういうと踵を返し城に帰った

「あの時，預けた幼子たちはどうしておるか？」
茶を勧めながら御前は光育に問うた

「寺にて奉公しております」
器をうけとり静かに飲む
研ぎ澄まされた手前，美しい所作

歳を重ねた虎御前の姿はあのころと変わらぬ姿勢を保っている
屹立とした「己」持ち
いまもなお「戦」に身を置く者の姿だ

「背負ってきた者」

その姿は自然と人を恐れさせる
晴景（はるかげ）が逆らえないのも無理からぬこと
晴景より遙かに過酷にそして「苛烈」に戦を生きた女「虎御前」

静かなる美しき刃物

光育が早朝にココに来たのは「影トラ」の事で話し合いにきたのだが
変わらぬその姿を見た瞬間に
それが無駄骨に終わる事を予感した

しかし

それでも今日は話をしよう。。。。
覚悟を決め器を降ろした

「良い茶でございました」
そしてゆっくりと口を開いた

その１３　晴と影　（５）

「栖吉（すよし）に送った親書の事ですが。。。」

光育（こういく）の心は決して平穏ではいなかった
おかしなものだ
静かに茶を楽しむ熟年の二人の間にあるのはまるで「真剣」のように
研ぎ澄まされた「間合い」だ
向かい合わせに座る御前を「あなどっては」いけない

「あなどる」
そういう言い方は正しくないが
気を許して話し合いができる相手で無いことを忘れてはいけない

これは
「武人」同士の話し合いに近い

そして
まだ言葉を返そうとはとしない御前
に光育は続けた

「栃尾に長尾景信（ながおかげのぶ）名代の将を送る旨と推測しておりますが。。」
「そのとおりじゃ」

簡潔な答え
それがどのような「波風」を立てるか
そんな事は十分に知っているハズ。。。

知っているのだ
でなければ顔色一つ変えずに答えられる訳がない

光育は無駄とわかりながらも僧籍にある者として
ねばり強く人を諭すすべを駆使して話をつづける事にした

「今までそのような事は有りませんでした，従うべきはまず春日山
ではありませんか？」

間違うことなく順番からいえば
春日山の「守護代」晴景（はるかげ）に従うべきだ
それを省き
「栃尾」に向かわせるとは

ただでさえ
「栖吉衆」は晴景にそれほど従順でもない
彼らにとって「当主」たる絶対君主は「虎御前」なのだから
「名代の将」を送る。。。それは

栖吉衆を「影トラ」に譲るという事だ

深い溜息

「乱」を待っている？
静かな瞳が光育の心を覗き込むように言う

「不要な事よ」

迷いのない澄んだ声は
冷徹に答える

無駄だ
御前は決めてしまっている
そして遠回しな言葉などで説き伏せられるような人でもない

「乱を起こしてはなりません。。」

聞き入れられる事をまるで願うように口にする
もし
「栖吉衆」が守護代を無視して「影トラ」に従ってしまったら
「内乱」は避けられなくなる
今すぐでないにしろその可能性はより大きくなる

日に日に力をつけていく「影トラ」を羨望の将として見る者も多ければ
疎んじている者も少なくはない

その中に最たる者に
晴景もいる

対立をあきらかにしてしまう

「晴景殿にお力添えするべきです。。。影トラ様もそうする事に尽力していらっしゃいます。。。それに」

フン

聞き飽きたる「諫言」とでも言わんばかりの御前

「晴景には「綾」をやった」

御前の一の娘
綾姫
まだ花も蕾と美しかった綾が「政略結婚」で春日山を離れなくてはならなかったのは十三歳の時だった

相手は「長尾宗家（ながおそうけ）」の政景（まさかげ）
為景死後
上田長尾の当主「長尾房長（ながおふさなが）」は為景亡き後の「守護代」は。。。。
己でも良いのではないか？という行動に出始めていた
宗家であるという事を振りかざし
当時「守護代」に就任したばかりの晴景を脅かし「嫌がらせ」を続

けていた
それを抑えるための和睦の「品」として綾は坂戸城に嫁いだ

御前はこの時から晴景を「力」なき「守護代」と
それこそ本気で疎んじていたに違いない
人身御供で成り立つ「執政」など当てにならないと

それは「力」を全てと生きてきた御前にはもっとも「嫌悪」すべき
外交だった

「綾姫さまも越後のために赴かれたのです」

「トラはやらんぞ。。。」

怒り？
背筋を律する響きの声
白羽の矢が目の前をかすめるような緊張

光育は目を伏せた
もうココに来た本当の理由はばれている

「元服」の書状が着いたときにも同じ問答を御前とはしていた

その時は光育が「嫁」に出すことを進めていた
今回は謹賀の祝の近づいた年末の月
晴景からの手紙で
内容は「影トラ」を「嫁」に出したい。。。。というもので
その話を詰めるための相談を求められていたのだ

唐突な申し出ではあったが
今のままでは
遠くない将来に「晴景」と「影トラ」はぶつかってしまう
それは今の段階でも「見え始めている」
ならば

羨望を得たまま「嫁」に行く
そしてそれによって守護代家の「絆」を強固にできる相手を夫としてもったほうが
「トラ」にとっても
ひいては「越後」にとっても良いように
思えた
そんな深慮の中で顔を曇らせている光育を横目に

「あの子は御仏に選ばれた子供ぞ」

諸将を沈黙させたその言葉を御前は発した

それはよく聞き及んだ言葉。。。。
「女」
「女」であるハズの「トラ」の道が「武」の道に進む事になった「神託」の事
その言葉故に「影トラ」は元服して「将」となった
産まれにまつわる「逸話」から
あれやこれやと「噂」がつき

結局
為景(ためかげ)亡き後
その道を妨げる者はだれもいなかった

守護代の妻
大御台の威厳も
そういう大きな力が働いてしまった

「女丈夫の虎御前の娘，おトラ」

「女だから戦えない」
そんな言葉は「戦」を走り抜けてきた虎御前に誰が言えるものか。。。。

あくまで威圧的に座し
光育の提案に耳を傾ける気など微塵も見られない虎御前
目を反らさず光育は続けた

「しかし。。。女には女の道もありましょうや。。。」

光育は影トラの素直なで優しいところが好ましく
それを思うに「不憫」でならなかった
もっと寺にいるときに「女」の所作を教えてあげたかったが
それは無理な事だった

あの時は影トラの「命」を守るだけで手一杯だったのだから

トラは顔こそ御前によく似ていたが
殺生を恐れ
戦を嘆き
そのために「仏門」に帰依し信心なる日々を送ってきた
天真爛漫で
純粋で
寺の小僧たちとよく禅問答をする

可愛い子供だ

願わくば
このまま「女」として静かにその生涯を過ごして欲しい
そう願いたくなるほどの「笑顔」を持っている

だからこそ

十分に考えた想いを伝えた。。。。
だが
むしろ

その言葉を待っていたかのように虎御前は
首をゆるりと右に傾げ
口元を少し。。。上にあげ笑みと苛立ちの間のような声で返した

「光育。お前は。。あの子の「中身」を知っているハズだ」

トラ。。。。

「中身。。。。」

さしもの光育も返された言葉と視線から自分顔を隠した

林泉寺に「トラ」が初めて来たとき
目の中。。。。いやその「体の中」にあったのは読めぬ深い「闇」と
「割れた心」だった
それは得体の知れないものだった
相反する「正義」と相反する「悪」を一緒くたに考える「心」
到底「常人」にはできないような「裁定」を簡単に下した「幼女」
の姿は。。。。

「戦鬼」とまで自身を呼ばせながらも「人の生」に執着した「為景」
には理解できなかった
だから

「畏れた」

今までに見たことのない「異形」
トラの姿が為景の目には「人」には見えなかったのだ

それ故に
為景は「トラ」を畏れ手にかけようともした

しかし
光育にはトラの姿は「畏れ」には写らなかった
それはもっと「神々しい」ものに見えた
人であれば悩みもする「裁定」を無表情でくだす姿
「我を恐れよ」という言葉

それは。。。。。

「あれこそこの乱れた「越後」に「整然成る国」を作る物。。。。
ふさわしかろう」

「いいえ。。。。。トラには「仏門の道」こそが示された道だった
と。。。愚僧は信じております」

虎御前は光育の熱心な言葉を無視した
光育は最早取り憑く島もない彼女に
それでも「願っている事」を告げた

「今でも。。。しずかな仏門の世界に戻って暮れることを望んでお
ります。。。きっと「トラ」の心を。。。。御仏は満たしてくれる
はずです」

「戻る必要などない。。。。。今はもう誰も「邪魔」しない」

「虎御前様。。。。。」

ねばり強く
これほどまでに聞かぬ人である虎御前は光育のあまりの根気に飽きたように
また
その根気が「育っていない」事を見抜いたように
揺れて笑った

「クックックッ。。。。。」

着物の袖で口を隠し笑う御前
頭を何度か揺らして首を傾げて光育に言った

「聞きたいな。。。。あの時お前に預けた子供は何故「仏門」を飛び出し「武士」になったのだ?」

切り替えされた質問に
光育は悲しげに目をつむった
「陣江。。。」

およそ十八年前
光育が御前から救った「子供達」

ジンはあのときの乳飲み子だった

あのときすべての子供を寺に入れた
救われた命を御仏に捧げるべく育てた
あの「慈悲」に報いるために

それが彼らの人生に「実り」を持たせてくれる
そうなるはずだった
教えを守り
静寂なる御仏の世界に多くの子供たちが帰依し奉仕の仕事に就いている中。。。。

ジンは飛び出していってしまった
光育の教えを「捨てて」

「僧では「満たされ」なかったのであろう。。。ならば「トラ」が「女である事」で満たされるわけがない。。。。トラの持つ「闇」は仏門など必要としてはいない」

「仏門」を必要としないなどと。。。。

それは冒涜だったが。。。。

トラには。。。。。実際
トラにそれが必要だった理由は一つしかなかった

「闇」と向かい合うための。。。。。
しかし
ならば
何を得るために。。。。
戦いつづけろと?
「絶対の闇」。。。。。それのために?

光育は答えを探し出す事が出来なかった
ただ沈黙した

問答を終えて
城外にでる道の途中
表座敷で

直江の娘「おせん」が
祝賀に持ち寄られた「反物」を見て侍女たちとはしゃいでいた

。。。。。

影トラとてあの子達とかわらぬ「女の子」なのに。。。。

何故その眼前には「戦」への道しか与えてあげられなかったのか?

何故
そうまでして「戦」への道に進ませようとするのか?。。。。虎御前。。。
あなたが胎に宿したのは「阿修羅(あしゅら)」ではないでしょうに。。。

「闇」に従いただ生きろなど。。。
なんと過酷な道でしょうか

トラとジン
二人が選んだ道
用意された道が

せめて

己で「良い」と信じた道になっていって欲しい

かつて。。。
城から初めて林泉寺にトラがやってきた日
トラはその日のうちに寺から逃げてしまった
それを追ってジンはも寺を後にしたが

翌朝手をつないでもどってきた
笑いながら

それは
瞬間の軌跡だった
人と繋がっていけるという。。。。。「軌跡」だったのに。。。。

もう
あの二人の笑顔が見られないのか？

もう
あんな優しい日々はありえないのか？
そう思うと

己の無力さが
悲しくて
無念でならなかった

その１３　晴と影　（５）（後書き）

虎御前という人

後書きからこんにちわ～～～火星です
史学的には栖吉から「政略結婚」で為景に嫁いだ女となっていて
Ｗｉｋｉｐｅｄｉａなどによると
晴景とは同じぐらいの歳かちょっと上ぐらいの人だったのではないかと言われています

つまり

影トラと晴景って母は別の人なんですね
じゃ
晴景様の母上って。。。。。それはまた（爆）

後妻さんだったっぽい虎御前
ちなみに「結婚」した時のお歳は１２。。。。綾ね～も１３で嫁に行ってる
で。。。
驚くのはその翌年に綾ね～を産んでる（爆）！！
１３歳で出産。。。驚きっす
きっと大変だっただろうなぁ。。。
今ほど「身体」だって出来上がった女ってわけでもなかっただろうに。。

ちなみにトラを産んだのは１９ぐらいって事だね

よく他小説というか
かつて「上杉謙信」を描いた書物の中では謙信が６歳の頃に母は他界となっていたりしますが。。。
あれはドラマです

しかし
この小説もドラマ（藁）なので史実からは大きく逸脱してて。。。。
（爆）
それなりに史実にそってはいるのですが（爆）
これは
本当！！虎御前「トラ」が３９歳になるまで生きてたそうです（藁）
６０ぐらいまで生きてたって事だ
あの時代「人間５０年」なんて「あつもり」舞っちゃう人がいた時代に６０っていったら
結構ご長寿じゃないのかな？
さらに綾ね～は８０歳まで生きてる（爆）これはもう長寿確定ですな

虎御前は剃髪してからも春日山城に住んでたらしいから
晴景は。。。イヤだったかもしれないね

いつか
虎御前と為景の出会い編なんかも書いてみたい
と
思わせるぐらい魅力のある女だなぁ。。。とヒボシは思ったりもしてます

それではまた後書きでお会いしましょ～～～

その１３　晴と影　（６）

おせんと女の子たちは片端から全部広げることはしないまでも
次々と反物を開けて品定めをしていた

おせんが春日山の府中に戻ってきたのは一年ぶりだ
やはり
栃尾とは違いそこそこ町をもっている春日山付近には
目に楽しい反物が多いのだろうし

城の侍女や
諸将の息女たちに会うのも久しぶりなのだろう
華やかな一角を作る「女の子」たちの声がよく響き耳に聞こえた

私はいつも通り「禅」を組んだ後で
表座敷の前をちょうど通りかかっていた

「おせん！」

黄色い声の主たちはびっくりしたみたいにひれ伏した
手で挨拶して

「いいよ。。一緒に見てもいい？」

座敷に広げられた反物を見ながら言った

こっちに来て
昨日は諸将の家臣団などと飲み明かしてしまった
謹賀の祝も一段階ついたし
心配事もないわけでもないので
松の内には栃尾にもどろうと思っていたから

いち早く
多英（たえ）や，つやの土産を見ておきたかったところだった

私に驚いたのか
侍女や息女の姫たちが下がってしまおうとしたので声をかけた

「気にせず。。土産を見たいと思っていたところだよ。一緒しておくれ」

恥ずかしい話
私はどうも反物の見立てが今ひとつわからない
着物も全部
おせんに仕立ててもらっているのだから
くわしいに違いない
一緒に見て貰った方が失敗しないだろうと思いそう言った

私の言葉に
おせんは嬉しそうだった

「私もそうしようと思っていたのです！多英や，つやにちょうど良

いかと。。」

嬉しそう
女の子はこういうのが大好きみたいで
見ているこっちも嬉しくなる

まだ遠巻きになっている「女の子」達にも声を掛けた

「気遣い無用。。。見立てを手伝っておくれ」

緊張しているのかな?
私は背が高いから怖いのかな?
困ったな
目の前で引き続き反物や緞子(どんす)を広げるおせんと話をしよう
そうすればおのずとみんな和らいでくれるだろう

それにしても

驚くよ

たくさんあるもんだ。。。

栃尾では私の着物を仕立て直してもらうために「馬」で買い物にいかせた
山奥の山城ではなかなか

手に入らないのだ
そういう事もあるのだけど

緞子（どんす）なんかは高価な物もあるのは
祝賀に諸将たちが持ち寄ってくれた物なのだろう

そういえば母上（虎御前）の着物はキレイだったな
いつもきちんとしてらっしゃるし。。。おしゃれだ
それでだろうな
諸将が祝いに
反物や帯物をたくさん持ってきてくれるのは
昨日はあまりお話もできなかったから夜に着物の事なんかも聞いてみよう

良い物を土産に見つける事ができるといいな
私はチラミでも迷ってしまうよ

溜息
刀の目利きだったら多少は心得てるけど。。。

。。。

「刀」ばっか眺めてちゃダメだね

「おトラ様。。。」

いつの間にか

おせんの隣に一人の姫様が来ていた
私が会釈すると

「お噂で聞いていたのとは違って驚きました」
とまん丸な目で覗き込んでいる
「噂？。。。」

まさか
また「猫又」の話とか？
あれは春日山まで流れてたのか？
顎に手を当て「噂」って。。。なんて考えていると
おせんが含み笑いをしながら答えた

「昨日，おトラ様の話をしていたのです」

えっ。。。。
「どんな。。。」

ひどい話だった
姫や侍女たちが「噂」に聞いていた私の姿はまるで「鬼」だ
数多の「大鬼」おそらくやたろー衆の事だろうを引き連れ
馬上で刀を振り乱し戦い
相手の耳を劈くような声で「激」をくだす
顔も凶相の主で目を見たら食われる。。。。
いったい誰がそんな風に話をしているのさ

ちょっと。。。落胆。。。

でも
まあ
確かに一度「戦」に出てしまったら
声も荒げるし
自分がどんな顔をしているかなんてのはわからないから。。。。

遠目でみたら。。。そんな感じなの？

言葉なくしちゃうよ

「だからそれは違うって話をしてたんです！！」

肩を落としてしまった私に気がついたおせんが努めて明るく言う
「そうです！！お顔も全然おキレイで。。。普通の人でした」
「噂なんて当てにならないって。。」
「肌もとってもお白いです」

こんな事でも
話が盛り上がって姫様たちも口々に色々答えてくれた

「でも大きな方ってのはホントでした」

ひときはこぢんまりと座っていた可愛らしい姫様が私を仰ぎ見るように言った

確かに。。。
ココに集まっているどんな「女」より私は身の丈は高かった

「でも殿方のようにゴツゴツしてらっしゃるわけではないのですね」
と私の手をしげしげと見ながら
「そうだね」

それはよくわかっている事だ
どんなに鍛えても
男のゴツゴツした身体にはなれなそうにない
なれれば
もっと「戦」働きも楽になるのかもしれないけど
それは
寺にいたころには無理な事というのがわかっていた

私にとって
戦働きをする「女」と言ってすぐに頭に浮かぶのは「母上」だ

私自身は
そのお姿を目にした事はないのだけど
家臣。。。直江や実乃に聞くと
よく知っていた金糸の「大鎧」姿の母上
背も私ほどじゃないにしろココにいる姫様たちよりは若干高い
でもかなり細い

でも「戦」に出ていたとしても
母上の姿はやっぱり女らしくて「美しい」かっただろう

今もそうだ
ゴツゴツしている部分なんてない
ちょっと無口だけど
お顔も綺麗だ

「そうだ！！」

おせんが鮮やかな反物を開きながら私に言った

「今度，小袖を作ってみませんか？影トラ様の」

私に小袖？
考えてみれば私は「女」の着物は今まで着た覚えがない
ちょっとドキドキする

「きっと似合いますわ！！」
姫様たちが騒ぎ立てるのもあるのだけど
小袖。。。

着たら母上みたいに見えるかな。。。。
なんて思い浮かべてしまった

「そうだなぁ。。。」

照れる。。。参った。。。
顔がにやけてしまう

いかんいかん！！

「かっ考えておくよ！！」
むず痒い感覚だ
返事とともに席を立ってしまった

「これから林泉寺に挨拶に行くんだ。。。土産の事は任すよ」

手を振っておせんに言った
すると
姫様の一人が
「住職様は先ほど門を出て行かれましたよ」
と
二の丸への通用門を指さした

。。。。。。

城に来ていらっしゃったんだ

なんだ
それなら
呼んで下さればいいのに

走って行っても追いつけそうだ

私はそのまま走って

途中止まっておせんに叫んだ
「多英とつやの分を忘れないでね!!」

おせんと姫様達は手を振って答えてくれた

城を下る道ぐらいで会えそうだ

ひさしぶりに師，光育と禅問答をしよう
心が躍った

楽しみだ
私も大きくなったんだ
他の門弟たちにも会いたい

きっと驚くぞ

きっとジンにも会えるさ
ジンも光育に会いにくるハズだから

ウキウキした気持ちで私は門をくぐっり走った

その時門前に小姓が立っていたのには気がついたが「水丸」と知るのは翌日「上杉」様を迎えた宴の時だった

その１３　晴と影　（６）（後書き）

影トラ様の着物。。。。

後書きからこんにちわ！！

いろんな文献とか資料を探すと
とっても「艶やかな」着物がでてきたりもしているそうです
真っ赤でした派手ですね
どんな時にきてらっしゃったのでしょう

着物もそうなのですが
陣羽織もなかなかに派手な物が多いようですし
西陣のホームページの中で生地紹介なんかでは
ビロードのマントも着用なさったりもしたそう
という記事もありました（藁）

おしゃれじゃん（爆）

今回まだまだ戦の事で手一杯の「トラ」がちょっとおしゃれに目覚めてみたり～～なくだりを書いてみました

それにしても
影トラ様。。。現在この小説で１７歳
めっちゃ酒飲んでます（爆）
もちろん
お酒は成人してから！！なんて決まりのなかった時代だし
むしろ
「祝いだ！！呑め飲め」の世界だった気もします

ヒボシ的には。。。
虎御前も相当お酒つよいのではなかったのか？
とか思ってます
しかも。。。。目は据わったまんまで
ええっ常に目は据わってる人だから
怖いんですけどね（爆）

この小説の中で
長尾家の女で優しい人はいません（爆死）
いろんな意味で

綾ね～もごたぶんにもれず。。。
というのもおいおい出てきます（藁）
でもってきっと酒も強いです

まだ
暖の取り方が甘かった時代の越後ですから
寒さをしのぐためにも「お酒」は必需品だったのかもしれませなんね！！

そんな火星はそれほど酒に強くないので。。。
馬上杯（謙信公のお酒の杯，馬の上で飲んだりもしてたらしいです）で飲んだらすぐに
眠りにつけそうです（藁）

酒豪豪傑女の三代記（爆笑）
そういうのも書いてみようか（イラン！）

それではまた後書きでお会いしましょ～～～

その１３　晴と影　（７）（前書き）

ネット小説ランキング。。。。
というものに登録シテ頂きました

自分でも設置を試みたのですが。。。
失敗していたそうで（爆死）

スイマセン。。。パソコン音痴で（泣）

手伝ってくれた友達に感謝しつつ
これからもがんばっていきますのでよろしくおねがいします！！！

その１３　晴と影　（７）

少なかった雪をのけた城道を光育（こういく）は考えを巡らせながら歩いていた

やはり
無駄骨になってしまった
心は焦燥感と喪失感でいっぱいだ

虎御前（とらごぜん）があれほどまでに晴景（はるかげ）殿を嫌悪していたのは
。。。。。
少しは理解できていたが

「影トラ」の事に関しては「狂信的」ともとれる対応だった事が
より
心を締め上げていた
あの夜と同じ，まさに変わらなかった「虎御前」。。。。。

同じ過ちを犯してしまったのか？
トラ
ジン
子供たちを救った「つもり」でいたという「奢り」が
愛した教えた子供たちの道を謝らせてしまったのか。。。？

およそ十年前
あれは雨の降り続いた寒い日だった

夜が更け
寺のすべての明かりが落ちた時間に城からの使いはやってきた
「住職殿!!すぐに登城くださいませ!!」
静寂を尊ぶ寺の眠りを慌ただしく乱した者に説教が必要ではあったが
事態が尋常な事でないのは，必至の顔の使いを見て理解した

慌てて参内したそこにあったのは
抜き身の「白刃」を向け合う御前と為景(ためかげ)の姿だった
「夜叉」の2人

部屋には幼い「綾姫」が侍女に抱えられ泣きわめいている
為景の後ろにはそれを諫めようと「本庄実乃(ほんじょうじつの)」が立っていた

御前の後ろには小さな影があった

「何をなさっているのですか?」

まるで仏神の像のように白羽を向け合ったまま身動きをとらない夫
婦の姿は異様だ
為景にいたっては「具足」まで纏っている

「為景殿!!何をなさっているのですか!!」
声を荒げた
説法会で出すあの声に力を加えた強さで呼びかけた

小寒い雨の日というのに額にびっしりと汗を噴いている為景は横目
で光育を見ると言った

「この恐ろしいトラを殺して終わねばならん」

「トラ?」
御前を殺そうとしている?

「為景殿?御前様を斬ると?」
すでに
一度は殴打されたのか御前の唇からは血が流れている
髪は乱れ
それでも薄暗い本丸屋敷の板間に対峙している「目」がらんらんと
輝いて見える
朱色の柄をもつ刀を身構え

後ろの「何か」を守っている

「何を恐れている。。。。」

声が響く
幼子の声
ココにいる全ての者の「頭」に届く澄んだ柔らかい声

何だこれは
光育の背筋が凍る
その「柔らかさ」は人の物とは思えない

髪を振り乱した虎御前が笑う
「何を恐れていらっしゃる？」

「どけ！！おトラ！！それは魔物ぞ！！」
刀を振り上げた
おかしい
為景は確かに「何か」に怯えているようだ

同じく上段に構える御前

光育は御前の後ろに子供がいる事に気がついた
「魔物？」

灯の無い城内では近づくしか確かめようがないのだが
その大きさから「子供」である事は間違いではなさそうだ
。。。。。

虎千代さま？
「トラ」を殺すとは我が子，虎千代を手にかけるという事か？

光育は走り2人の間に身を入れた
両人に手をかざし
「刀をお引きください。。。」

たったこれだけり事なのに。。。
いや

「恐れ」だ

上段に大きく身構える
荒々しき鬼神（おにがみ）の夫婦の前に汗をかかぬなど「嘘」だ
僧職にある者は「死」を恐れはしないというが
そこに至る道に「恐怖」がないなど。。。あり得ぬのが「人」だ

「お引き下さい。。。」

「我を恐れよ」

またも声が響く
せきをを切ったかのように為景は光育をはね除け突進した
両脇を実乃が抑えようとするが止まらない
「キエェエエエエエ！！！」

「なりません！！！」
光育は為景の足にしがみついた
勢い膝を落としたがそのまま引きずるように前に進む
さすがに巨漢，為景
光育ごときでは止められない
そのまま刀を振り下ろしたが
御前が見事にそれを受け止める

鉢合わせる顔と顔

「おトラ！！！」

対峙する2人の間を抜け
虎千代の所に光育は走った「守らぬば！！」

かまわずその子を抱きしめ，その場からさらに下がった

「光育！！それは。。。。それは魔物ぞ！！！」

背後に逃げる姿を見つけた為景はわめいた
しかし
振り向かなかったそのまま

「ダメです子供を斬るなど断じて許されません」

魔物と称されている虎千代を見た

。。。。。。。

この喧噪の中にあり得ないほど平然とした顔
となりの部屋で泣いている「綾姫」の事を考えると不思議な感じだ
むしろ
微笑んでいる？

その微笑みはまるで「観音」様
幼女の笑みとは言い難い落ち着いた目

「虎千代様？」

フフ

笑っている
小さな手が光育の顔にふれる

「お前は我を恐れないのか?」
なんと?
これは。。。むしろ神々しい

「その子に宿りしは「神」なり!!」

刀をまだ合わせたまま為景を睨み御前は吠えた

「いいや!!魔物だ!!」

虎千代様
「噂」はかねがね聞いていた
産まれ出でてから向こう
笑わず,泣かず,声を発さず

軒下に産まれた子犬を殺した
置いていった母犬を殺した
綾姫が飼っていた「小鳥」,屋根からおちて飛べなくなってしまっていた
小鳥をやはり殺した
難産を苦しむ母馬を殺し

腹から出られなかった子馬も殺した
奇行の主

灯で蛾や蝶を炙り殺し
夜を眠らず
城の中をひたひたと歩き回る

しかし
何故にそれほどの奇行を重ねながらも曇ることのない「眼」を持っているのか？
鬼の子供
そんな言葉で表する事のできない「神々しさ」を持っている

人を知らないのか？
人の生きる道を知らないのか？

それが「神」を宿した故の事なのか？

刮目せねば成らん

「為景殿。。。虎千代様の事は私にお任せ下さい」
まだ幼子だった「トラ」の身体をつよく抱きしめた
斬るのなら私も一緒にという強い意思表示をした

為景殿は
得たいの知れない「中身」をもつ「トラ」を恐れている
いわくつきだ

もともと
御前懐妊の時に

「御仏に選ばれし子」
とまで言われていた子

この小さな身体の「中身」が今は何であれ助け
それを確かめなければならない

「もしこのお身体の中に「神」を宿しているのなら「人の世」の理をまだ知りません。。知っておられません。。それを私がお教えしましょう。。また身体に宿りし者が「鬼」ならば必ずや退治いたしましょうや！！どうかこの愚僧にお任せ下さい。。私のもてる全てで虎千代さまを知り育ててみせます！！」

そうして身を挺し「トラ」を救ったのだ

「光育さま!!!光育さま!!!」

頭を下げうなだれ考えこんでいたところに聞き慣れた声が名を呼んだ

「おおっ影トラ様」

満面の笑顔で城道を走りおりてくる「トラ」が見えた

あの夜から十年たった

寺での修行を積みじょじょに人らしい顔を見せ

ほんとうによく笑うようになった「トラ」

息を切らせて目の前についたトラは深くお辞儀した

「おひさしぶりです!!光育さま!!」

大きな声

立派になられた

光育の目には涙が浮かんだ

これほどまでに優しい子に育った「トラ」に戦の道しかなかったのか?

そう思うと悲しくて仕方なく

涙を堪える事が出来なかった

「どうされました?」

目頭を押さえた光育を心配して肩を支えるトラ
手を振り答えた

「本当に立派に成られました。。。ただ嬉しくてつい」
そのの手を取った
トラは照れ笑いをしながら
「まだまだですよ。。。今日はいっぱいお話聞かせてください！！」

そう言うと
林泉寺までの道を話しながら歩いていった

その１３　晴と影　（８）

慌ただしい
が
「楽しい」

林泉寺に着いたのは昼時だった
住職は忙しい方だ
道すがらに話ができただけでも良かった

たくさんの知識を「御仏」の事を私にお話してほしかったが
仕方ない
まだしばらくは春日山にいるのだから
余裕をもって学びにこよう

師，は優しい微笑みで挨拶をして部屋にもどっていかれた

門をくぐった向こうでは
かつての仲間だった門弟たちが夕方に向けて右往左往していた
ワクワクする

そんな忙しくしている姿が私には「楽しく」てしかたなかった
抑えきれない気持ちで
台所仕事を手伝いにいった

ひさしぶりにあった仲間たちはいちおうに驚いていた
とくに
私の身の丈について
口々に感想を言ってくれた

その言葉の中に「チビ」と

「そんなにチビだったか？私は？」

「戦（いくさ）」続きの間，知らぬうちに成長してしまったから
いつまで「チビ」だったのか。。。。そっちを思い出す方が難しい
と答えてやった

みんな大笑いだ

みんな良い仲間だ
私は「長尾」の家に戻ってしまい「武士（もののふ）」になったのに
昔と変わらず区別なく接してくれる
修行の合間に軽口をたたく
それでも真摯に祈り
仏神への道を求め続けた日々を忘れてない

それにしても
祝賀の季節は何が無くても忙しい
今年は雪が少なかったからまだいい
１月の雪かきは寺の坊主にとって一番の大仕事だ

私も１０歳まではやっていた

汗だくになって
その後の「お清め」は爽快だった。。。。

そうだ。。。
ジンとよく競ったものだった
あっちの端からこっちの端。。
どっちが早く雪をのけきるか
勝てた事はついに一度もなかったけど。。。。懐かしい

少しづつのけられているお堂に向かう道の雪を見てそんな事も楽しい思い出として蘇る

一緒に家事をして掃除をして「禅」を組む

ただ
それだけの事に「心」は果てしなく満たされていた
跳ぶように過ぎる時間。。。。

私は「僧」になりたかったんだ

林泉寺に訪れた事で改めて心底そう思った

深く深く息を吸い吐く

「戦（いくさ）」など忘れ
心を穏やかにして「禅」の世界に入って行きたかった
すべてが静寂の仏閣の何もかもを愛していた
私の前にはその「道」だけあってくれればよかったと心から思っていた

その道からは「急」に分かたれた

「守護代，長尾」の将として「力」を持って国を守る側の者になった
そうなってしまった事
それを悔いてはいない

ココを出て行く時
師はそれを「御仏の意志」だと言っていた
私は戦う側だ
戦って国民（くにたみ）を守る側

それこそが
御仏が私に示した「道」だ

今の越後に必要な仕事で
大事な「責務」だ

胸を叩き自分に言い聞かせた

闇が早く降りてしまう夕刻を待たず
城に向かって歩く
名残惜しくて何度も寺を振り返った
仲間たちが大きく手を振ってくれる

またこよう

ココが私にとっての「最後」の安住の地
ココが私の帰れる場所なんだから

そう決めて
早足で城道を歩き帰った

もどってすぐに母上のおられる屋敷に向かった

昨日は上座に座るお顔を少しみただけで終わってしまっていた
あんなに飲んで
だらしなく思われてしまっただろうか？
しかも
兄上には怒られてしまって。。。

でも。。

話したい事がたくさんあった
ひさしぶりに訪ねた「林泉寺」の事
おおよそ初めてだけど「着物」の話

それと
私の小袖を作るかなって。。。なんて顔するかな?
怒るかな?
いやいや
逆に快く
見立ててくれたりして
母上を少しは真似てうまく着こなせると思うんだ

そんなふうに考えると。。。小袖もやっぱり着てみたい

弾む気持ちで部屋に入った私は
すぐにそんな気持ちでいてはいけないと気がつかされた

座敷の一角に座す
母の表情は険しかった

それは灯籠に照らされているから
できる影とは違い
あきらかに「厳めしい」影を持っていた

「よく聞きなさい」

前に座った私に
他に誰もいない部屋の中を低く声は続けた

「今まだ「嵐」の中「戦」の世に身を置いている事を忘れてはなりません」

研ぎ澄まされた目，母の顔は微動だにしない
これは
あの時と同じだ

元服したときに
母に私は質問した，私は「女」ですか？「元服」してよいのですか？

答えはなく
ただ

「長尾のために。。。ひいては「越後」のために働きなさい」

そう言われた時と同じ
迫る感情

「これを」

目の前にもって来られたのは大小の中間ぐらいの大きさの「太刀」だった
黒革の鞘をもち使い込まれた色合いの太刀

受け取り
「刃」を見る　両刃造（もろはづくり）
方刃に名入り

「栖吉虎姫（すよしとらひめ）」

煌々と輝く白刃
太刀というよりは大きな包丁
「私の物でした」
母の言い方でわかった
これを私に譲ると言う意味だ

これは母が栖吉から嫁いだ時に持ってきた「太刀」だ
キリキリと心が痛む

手太刀ちを掲げ深く伏した
「戦え」無言の母は私にそう告げている

昼夜を問わず
祝賀に浮かれた自分を恥じた
その上
守る側の人であるべきなのに

己の心を満たしたいと林泉寺への「恋慕」した事を見透かされたようで
恥ずかしい

何をしている自分！！

私よりはるかに昔から戦ってきた母の方が「越後」の行く末に真摯になっている
何を呆けていた事か！！

「ありがたく頂戴いたします」

もう一度深く頭を伏した

「不穏な出来事がまだ収まっていないことを忘れてはなりません」

耳に響く声は「怒り」を十分に持っていた
誰よりも
「不安な出来事」に敏感になっていなくてはならなかった私

「栖吉衆」を率いた母の言葉は重い
父の背を守り
国政に憂い事なく専念する事ができたのに母の細心の心くばりがあった事を

それに呼応して思い出す
「黒田秀忠（くろだひでただ）」の事

「黒滝城（くろたきじょう）の事。。。忘れてはおりません」

あの時の事
あの時の秀忠を思い出す

この祝賀にも秀忠はきていない
不穏を正さねばならない
身の潔白を示すのなら「手紙」ではなく登城すべきだ

守護代様を謀ろうとしているのか？
優しいお沙汰に便乗したか？

どちらにしても
来なかった

何かが「ありうる」
状況にまだ私達がいるという事だ

怠ってはいけない。。。。

私は戦わなくてはならない「越後」のために
母の目
その顔に再び「弛まぬ」気持ちを深く胸に刻んだ

その１３　晴と影　（８）（後書き）

影トラ様の身長（藁）

後書きからこんにちわ～～
なんか中略，ウンチクのコーナーみたいになってますが
気遣いなく（爆）ネタバレは一切ないと信じていますが不要な方は
読まないでください（藁）

この小説の中では
「他の侍女より頭半分大きい」
と書いていますが当時の女性の平均身長はだいたい１５３センチぐ
らい。。。らしいです（曖昧）
ていうか１５３もあったら高い方だという人もいまして
１５０センチ台だったのではと火星は読んでます

で
影トラ様ですが
現存する「上杉謙信公当代具足」からの測定でおよそ１５６センチ
ぐらいの人だったのではないか？
と
言われています

だいたい
当時の男性の平均身長ぐらいに当たるそうです（曖昧ヲイ！）

女性からみたら「大きな人」という事にはなりますね

ちなみに
「お市の方」（信長様の妹様）「当代随一の美女」と誉れ高き女性は１６３センチぐらい
かなり長身の方です
今でいうならファッションモデルみたいな方だったのでしょうねぇ
信長様の家系は長身な方が多いようでご本人は１６７センチぐらいだったそうです

百姓の人に比べると食べているものも違えば日頃の武術を磨く訓練もしていた武士（もののふ）は身体もがっしりしていただろうし
大きくみえたのかもしれませんね

戦国武将で大きいのは「織田信長」配下加賀百万石を作った男「前田利家（まえだとしいえ）」１８０センチ
甥で有名な「前田慶次郎（まえだけいじろう）」は１９６センチ
同じぐらいの高さに「藤堂高虎（とうどうたかとら）」１９６
「斉藤龍興（さいとうたつおき）」１９５とかがいます

現在の人にしたってデカイよね

戦国武将でチビなのは「武田信玄」配下の武将「山県昌景（やまがたまさかげ）」１４０センチ
これはかなり小さいですよね
また大物では「豊臣秀吉（とよとみひでよし）」１５４センチ
「徳川家康（とくがわいえやす）」１５８センチ

つまり「トラ」は秀吉より大きくて家康とはそんなに変わらないぐらいの人だったて事ですね

さて

ライバル「武田信玄（たけだしんげん）」の背は？
最近の調査でわかったのは１６２センチ！！ぐらい（極めて曖昧）
デカイ入道様です

火星は信玄公と同じぐらいですが
みなさまはどの方と同じぐらいでしょうか？
自分の身長が有名武将と一緒ぐらいだと感慨深くなりませんか？

それではまた後書きでお会いしましょ～～～

その１３　晴と影　（９）（前書き）

歴史小説に「史実史上主義」を求められる方は注意してください
必ずしも史実と一致しない部分が多々あります
そういう部分もふくめ楽しんで頂けると幸いです

その１３　晴と影　（９）

夜のうちに栃尾に帰る支度を始めた
とにかく
問題が残っていた事を「母上」から指摘されて目を覚ますようであ
まりに稚拙な思考

自分の甘えを見透かされた
兄上に叱咤された事で
よそ目をくれてしまおうなどと

心はきっとそう思っていたに違いない

頂いたばかりの小太刀を両手で強く握った

屋敷から戻ってすぐに
馬廻りの長秀（ながひで）にも栃尾に帰る事を申しつけた
一瞬驚いた表情をしたが
私の顔を見て「祝賀」のおふざけでないこと理解したのか
すぐに泊まりの屋敷に戻り栃尾衆に支度を指示し帰ってきた

「明日は上杉定実（うえすぎさだざね）様がいらっしゃいますが？」

長秀はすでにきりりと顔を引き締めて
勿論わかっていた
ご挨拶が終わったら帰る事を守護代様に伝えておくよう頼んだ

私の傍らで「残念」を顔に出してしまっている「おせん」
やはり
問題を残したままで出てくるべきではなかった

こんなぬか喜びをさせてしまって。。。。
すまない気持ちになった

心はキリキリと痛む
これは「残念」を思うものとはあきらかに違った。。。。
「予感」だ。。。。

いまさらになって悪い「予感」で頭の中を駆けめぐっていた

「上杉定実様到着」
（うえすぎさだざね）

よく晴れたその日

上座に向かう守護様に
長尾「守護代家」の面々と国人衆は深く頭を伏した

足取りは武士の物とは違い滑るように進む
ゆったりとして落ち着きのある歩
私はこの日初めて「守護様」にお会いする

兄上，母上の後ろに座した私はのぞき見るようにお顔を確かめようとした
明日には帰る事を決めた私は
次，お会いしたとき失礼がないように顔だけはしっかり覚えておこうと思っていた

。。。。。

？

武士ではないんだ
一目見てそう思った
歩き方と同じく身のこなしもゆったりとしていて
とても「刀」を持っていた人とは思えなかったのだ

御簾の向こう側
打掛とは違う着物の姿がゆっくりと歩く

扇で顔を隠し
袴から覗く白い足が少しだけ見えた

お付きの「女房」たちが御簾の内側に几帳(きちょう)を立てさらに姿を隠した
中にお座りになった
私は御簾とは違う衝立？前に下がる
ふわふわした几帳が何のためにあるのかよくわからなかく
珍しくてジロジロと見入ってしまった
幕府の方は色々と儀式も違うのかな？興味津々になっていた

「旧年はよく「越後」に尽くしてくれた。。。礼を言う」

澄んだ声

女の声

着座されると同時にみな
頭をあげた

兄上の挨拶でお言葉を交わす
激務に就かれている兄を癒すように優しく話す
「気遣い」の細やかな態度
口調は
とても柔らかく静かな方だ

不思議な感じで
不思議な感覚「守護」様が女人(にょしょう)だっとは知らなかったし
「越後」では聞き慣れない言葉につい耳を立ててしまう
「都(みやこ)」の方に多い言葉なのかな?
荒々しさのない語りは
兄上との会話が親子のようにも聞こえる

「お前が「影トラ」かえ?」

ふいにその声が私の名前を呼んだ
すぐに
伏して挨拶をした

いつからみられていた?
いかん
背筋を正し伏した

「長尾影トラにございます!」

几帳の薄い幕の向こう
長い髪をもった影が私をじっと見ている

「噂はかねがね聞いておる「越後」のためによく働いてくれているようじゃな。。」

「ハッ」

失礼のないようしっかりとご返事した

揺れる
几帳の間を割って手でのける
輝く目の光が見える
扇で顔事態は隠しているがかいま見られた目は優しい感じ

「近う寄れ。。。」

手招き
突然の事でどうしていいか迷った
「行きなさい」
母が手でわたしの膝を軽く叩き促した
そうだ考えるまでもない
呼んでくださっているのだから。。。。

私は立ち上がり
御簾の前に座し深く頭を下ろした
「面(おもて)を。。。」

良い香りがする
お香を炊いておられるのか
花の匂いがわずかだが漂うこの一角だけが別の世界みたいに
春の香りの間

「。。。まこと，御前殿によく似ておられる。。」

滑らかな言葉，声
間違いなく「女」の方だ
几帳から出された手の白さ
隙間から少しだけ。。。お顔を伺った

歳は
母より上なのか白い毛が見える
それでも驚くほど「豊かに」なびく髪
目元は見えず
扇で隠されたままではあったが口元。。。赤い唇が見える

微笑む口に気恥ずかしさを憶えた

と同時に
初めて見て
初めて知った

「守護上杉様」については
私がお会い出来る事の方が少ない方だ
だからといえ
不作法があってはいけないとそれなりの勉強はしてきていた

父，為景（ためかげ）に推挙されて「越後守護」になった事
その後は父と共に戦い
一度はその座を奪われ佐渡に逃げた事もあったが
「関東管領上杉氏」と戦い
再び「越後様」に戻り

父亡き後は私の兄，晴景（はるかげ）と「良き治世」のために手を取り今にいたる

色々と学んではきたが

「女性」だったのはホントに初めて知った

「これからも「越後」に尽くしておくれ。。」

だいぶんと呆けた顔になっていたハズ

「ありがとうございます。。」

おそらく素っ頓狂な答えを返してしまったのに何も言わず微笑む

細く白い繊細な手が元の場所に戻ってゆくのを見届け

元の自分の位置に戻った

お名前だけではわからない事もあるものだ

考えこんでしまった

私から隠していた目が扇の向こうから

母，虎御前（とらごぜん）をも見ていた事には気がつかなかった

ひときは通る高い声で杯をあげつつ言った

「今年もよろしく頼みますよ。。。この「越後」のためによく励み

ご尽力くだされ。。」

一同ひれ伏した

宴が進む中
兄上は「守護様」の元。。。御簾の中にに入ってしまったので
母上に小声で聞いた

「初めて知りました「女」の方だった事」

母は怪訝な顔で言葉を返した
珍しい
いつになく苛立っているのがわかる

「そんな事は「些細」な事です，男であろうと女であろうと「強く」なければ乱を治める事も出来ねば，人を束ねる事もできぬでしょうに。。」

母の目は几帳の奥のその「人」を睨んでいるようだ
聞いては行けない質問だったようだ
上杉定実さま。。。

「それにあの方は。。。」
母は何かを言いかけた

「失礼致します」

会話の間をわって直江が入り

耳元に口を寄せる

「黒滝城(くろたきじょう)周辺に不穏な動きがありました」

パリンとする
緩んだ気持ちに緊張が走る
顔をよせ聞き返した
「何が起こっている？」

母上に指摘された通りだ
悪夢がよぎる

「浪人，使役の者などを広く募っている様子と。共に。。刀，槍，
弓等も大量に買い付けが」

「買い付け」。。。。。
心の緋色
それほどまでに「凶刃」を新年早々集める理由はなんだ。。。

顔に出る怒りのまま
「いつから！」

直江は私の口元に「冷静」を促しながら答えた

「暮れより前から。。。陸奥の「伊達」などから流れている事。。。
わかっております」
秀忠。。。
一度ならずも二度も。。。
何故にそれほど人を集めなくてはならんのだ，武器を求める理由は
なんだ！！

もはや前に陳情した「言い訳」では通用はしない

「どこからその報を？」

「与板から数名街道沿いに偵察に出しておりました」

さすが直江だ抜かりがない
という事は
遅かれ早かれ，栃尾からも連絡がくる
警戒を怠ってはいなかったハズだから

事は急を要する
「武器」の買い付けがあったという事を見過ごす事はできない

私はすぐに腰をあげ，御簾の前までいった

「失礼致します」
躊躇せずそのまま用件を告げた

「黒滝に不穏な動きがあります，大事ではないと思いますが，影トラ今より戻り確かめて参ります故，ご無礼つかまつります。。」

自分の仕事を全うしなくてはならない

直江の行動からすでに諸将にも緊張が走っていた
みな「守護代様」の返事を待っている

静まりかえった御簾の中から
兄の声がする

「まず使者を立てよ！」
「私が参ります」

ダメだ使者など送ってまた「史郎」の時のような事が起こってしまったら
どうする？
自分のいない所で事を構えてはいけない
直々にそれを確かめる必要がある

「使者を立てよと言っている！！」
押して言う
「私が参ります！！事は重大です！！」

御簾から怒りの形相の兄が出てきた

「祝賀の席ぞ。。。」
「わかっております」
心は平静にて冷静だこれを一大事と思わねば「恥」だ
見過ごしてしまってはいけない

「伏して動くな。。。慌てれば解決するものでもあるまい。。。待機せよ」

「何をおっしゃっているのですか。。」

私には考えられないような指示だった
そんな悠長な。。。

首を振った
驚くべきはココにあらず

私は身体を前に
さらに前に出し
意を決して答えた
「出陣の下知いただきとうございます！！」

その１３　晴と影　（９）（後書き）

上杉定実様。。。。

後書きから今日わぁ！！

まだ確定ではないから
「なんで女なんじゃぁぁぁぁ！！」
とかって。。。。激怒はしないでください

ちゃんと続きもありますから
今回は
おっかなびっくりしながら書きましたかなり
史実派の方からしたら「逸脱」してるぅぅ
て怒られるでしょうが
それを言ったら「上杉謙信女性説」では書けないですから

戦国時代「女」もがんばってたぞ！！みたいに思って書いています

それにしても
ジンが結構人気があってびっくりしてます（爆）
そのうちもっと出番ありますから待ってやってください

それではまた
後書きでお会いしましょ～～～

その１３　晴と影　（１０）

動悸が高まる
なんと言われようと「些細」な事と見逃して良いはずがない
大事になってしまったら
今度は栃尾を攻めてきたら

不安が加速する

城に残した実乃や，やたろー衆でどう対処しろと?
危険は目の前で燻っているのに
それでも「待機」しろと言うのですか?

目の前に兄は座っり
同じ返答をする

「まず使者を立て。。秀忠を春日山に呼ぶ。。」

言葉は聞こえていた
しかし
それでは「間に合わない」と本能が告げる
すでにココに
謹賀の祝に「黒田」は来なかった

旧代からの家臣であればこそ
己の疑いを晴らすために登城参勤してこそあたりまえ。。。

それが

来なかった
いや
来て申し開きする事を必要と「思って」いなかった

それが答えだったに違いない

引き下がってはいけない
「正しく義なす」
今成さねば

「押して。。。申し上げます。。出陣の」

大きく怒鳴る声が言葉を絶ちきる
「わしの言っている事が聞こえなかったのか?」
目の前に下がった
兄の顔にぶつからんばかりに顔を合わす

「聞こえております!!」

「疑わしきだけで罰せはしない。。。。」
確かに
しかし一度目の疑いが未だ「晴れて」いない
その上で「武器」を調達している意味は?

私は兄の足下に顔を伏して
声を大きく述べた
「現に武器を調達しています!戦の支度をする以外何故そんな事を

する必要があるのですか?放っておけば無くなる事ではないのです
!事前にそれに対処しなければ。。。。」

対処しなければ
また
あの日のあのときの「子供」たちを生み出してしまう。。
焼け出された人たちを。。。
「越後」のもっている綻びは早くこわれ
他よりさらに脆い
弱き者たちには新年を平穏に過ごす事もできないなんて。。。

そんな事は出来ない
報告を知っていながら聞き逃すなんて

頭を床に打ち付けて
起こした「意地」という信念をもって譲れない
私の手の届く事
耳で聞こえたこと。。。「出来ること」を

「影トラが直々に使者として赴きましょう」

「だめだ」
立ち上がる兄にもう一度言う
「私にお任せ下さい!!」
「ダメだ!!」

拒絶?
何故
この一大事に私を憎むかのように叫ぶ
兄にどう話しを進めて良いのか混乱した

宴の間は静まりかえっていた
兄と私の問答はおかしいのだ
並ぶ諸将たちの目は「事」の重大さを理解しているのだから

声がふるえる
お願いです。。。祈るように
何故?私にお任せしてくださらないのですか?

今一度
頭を下げた

「どうか。。私をお使わしください。。」
今度は冷静を取り戻した声が冷ややかに
「ダメだ。。。お前は「戦(いくさ)」好きだから。。秀忠がココに来る前に
首が無くなってしまうわ。。」

兄の目は
冷たかった
まるで。。。「戦」を呼び込んだのは私だと言わんばかりの苛立ち
に刺す視線

。。。。。。「戦好き」。。。。。

愕然の言葉だった
心を千切られる
痛い

痛い

私が「戦好き」？
伏した頭を上げられない。。。どんな思いで今までだって戦ってきたことか。。
目頭が熱い
一度だって「好きで」戦った事などなかった
いつだって「苦しみ」だった

目に残る光景

あの夥しい「死」の姿
湧水のようにたまる「血」
焼けただれた「肉」の異臭
持ち主不明の臓物
カラになった腹
首を無くしたままへたり込む「身体」

悪夢に悪夢
夢のふちに
「黒い意識」目が覚めるとき。。。。
眼前に広がる「戦場」に。。。。

辛くて
辛くて
何度も一人で泣いた。。。。
それでも「守護代」様の治世を守る良き担い手としてやってきた。。
つもりだった

なのに

私の事を
そんな風に思っていらっしゃったのですか。。。
だから
そんな目で私を見ているのですか。。。
だから
私には行かせないと言うのですか？

「誰か使者を。。。」

伏したまま
頭をあげられなくなった私の向こうに兄の声がする

涙がこぼれる。。。
辛い。。。

もう
黙ってしまおう。。。。

「いいのか？それで？」
肩を落とした私の背中に母の言葉が聞こえた
。。。。揺れる。。。
それに引かれて意識が揺れる
景色が揺れる
「良いのか？」
自問する

ココで泣いていいのか？

目眩がする。。。意識が遠のく。。。。何故に。。。私が「戦」好きと？
これほどに「祈り」
戦う事を
そのように軽く罵倒される意味は？

「戦え」。。。。

「戦え」。。。。。

鈍痛
頭に「闇」の声が響く
身体に「黒い意識」が走る

ココで口を閉ざしてまっていいのか？

「戦え！！」

私が栃尾を見捨ててしまっていいのか？

「戦え！！」

何もしない者に「正義」はない！！！

「戦え！！」

「戦う」

顔を伏せたまま
私は声をあげた

「ならば。。。守護代様に問いたい。。。」

ゆっくりとしなだれ力をなくしていた身体を起こす
ユラユラと揺れる頭
目からは止めどなく涙がこぼれる
そのまま顔を兄の方に向けた

「もし。。。栃尾が戦火にまみれてしまったなら。。。その時はどうされますか？」

私の表情に驚き兄は
家臣団に向けて歩いていた足を止めた

「もし。。。そこから中郡（なかごおり）に戦火が伝播したら。。その時はどうされますか？」

膝を立てゆっくりと
立ち上がる
そのまま兄の前に
かつて見あげていた兄の背丈は今や私とそれほど変わらないものになっていた
真ん前に立ち
顔を見合わせる

「答えて頂きたい。。。」

頭がチリチリとする燃える「怒り」を感じる
憤る
なのに涙も止まらない
肩を並べた私におののいたのか？涙を流す顔に驚いたのか？一歩後ろに下がる兄にさらに詰め寄る

「何もしないという「最善」の策あらば！！！答えて頂きたい！！！」

「下がれ！！しれ者！！！」

詰め寄る私と兄の間に
小姓の「水丸」が入り私の胸ぐらを掴かもうとしたが

「殺意」は笑って
「小賢しい」と
逆に腕を軽くひねり挙げたまま，投げ飛ばし

「疑い晴れぬ家臣を捨てておくという「策」が正しいのならば，有らぬ謀反が起こった時の準備は整っている？という事でありましょうな？」

躊躇なく身体を寄せ
兄を手を強く掴んだ

「やめろ。。。！」

投げ飛ばされ板間に身体を強打してしまった水丸は起きあがれないまま
苦痛の叫びをあげる

「晴景様から手を離せ！！！」

兄は。。。。恐れている？
私から逃げようとしている？
捕まった手を引こうと声をあげた

「はなさんか！！！」

イヤだ。
言葉を聞き入れろ！！
顔をつきあわせて「話」致しましょうや！！

「出陣を拒まれる理由をお聞かせ頂きたい！！」

さらに強く手を引き
顔をギリギリまで擦りつける
兄の汗が見える
その上がりかかった微弱な息使いも

ガツン！！

いきなり左頬を扇で叩かれた
「はなせ馬鹿者！！」
。。。。。。
怒りか？怯えか？兄は右手の扇を私にぶつけ振り抜いた

が。。。。

利き手でその程度の打撃？
貴方の手はすでに「刀むを持つ事までも拒んでおられるからか？
さらに締め上げるように手を強く掴む
兄の美麗な眉は苦痛に歪み口元は荒く生きをする事でいっぱいになっている
私は
首を左右に揺らす

「効きません。。。全然」
そう言うと
口から流れる血に舌なめずりをした

睨む目で見返し

「ご返答ください」

と静かに言った

異様な出来事だったに違いない

宴の間に集まった諸将は一人として身動きしない中

私の肩に手が置かれた

「影トラ様が一人で行かれる事を守護代様は心配しておられます，私も参りましょう」

直江。。。

肩に置かれた手はたしなめるように私のいきり立った身体を下に降ろそうとする

耳元

小声で

「座ってください。。。。落ち着いて。。。」

力の入った手から

言葉どおりの慎重さが伝わる

「手をお離しになって。。」

兄の手を掴んでいた私の手をとる

「それは心配でしょう!!柿崎和泉(かきざきいずみ)も共に参れば守護代様も安心でしょう」

直江のとなり
その小声を他に聞かれぬよう
かき消すような大声で柿崎も前に出てきた

ゆるく力を逃がす
離された手をさすりながら
兄は私から距離を取った

私は直江に肩を押されてそのまま座った

「影トラ様に直江殿さらにワシら加わって使者として赴けば，黒田も腹を割ってくる事でしょう」

柿崎は水丸を起こしながら続けた

「落ち着いて。。。怒りだけではダメです。。。」
柿崎が大きな声と身振り手振りで兄と話す間に，直江は私を諫めた
研ぎ澄まされた「闇」が消えていくのがわかる

座った位置から兄を見た
我を忘れた?
水丸が兄の前に立って警戒している

「黒い意識」は消えた。。。。

でも
止まらぬ「涙」のまま
私はもう一度，深く頭を下げた

「影トラ。。。伏してお願い申し上げます！！どうぞ私をお遣わしください！！」

「すばらしい事よ。。。」

一同が息を呑みまた賛成の声を上げようとしたその時だった
「守護様」の一言が聞こえた

「「越後」は良い武将を持った。。いたみいる。。。。」

ざわめきが溢れだし始めていた座敷は「守護様」の声で静まった

私の前で立ち上がったまま諸将の反応に驚きを表した顔の兄は畏まって
御簾の側に振り向き頭を下げる
一同に会する「諸将」を一望する

今まで荒れ狂った場とは違う
清涼な声に宴に漂った
「懐疑の気持ち」が薄れていくのを感じた

みな沈黙を守っている

「晴景殿。。。私がいる事によって気を遣わしてしまったようだが。
。遠慮なさるな」

女房が守護の元に手招きで兄を呼ぶと
御簾越しに話をされた

その姿を母，虎御前が苦虫を潰したような表情で見ていた
何をしている？
しばらく
振り返った兄はみんなに向かって告げた

コホンと咳払いをして
「険」のとれた落ち着きを取り戻した様子で始めた

「わかった。。わしも祝いの席であった事もあり「慎重」になりすぎた」

姿勢を正し続けた

「黒滝城（くろたきじょう）の動き早々に突き止めなくてはならん事。。まことなり」
そう言うと私の方に向き
しかし
まだ何を堪えている表情ではあったが

「まずは影トラ至急，栃尾にもどり事の次第を調べ，春日山にしらせよ！」
諸将たちも頷く

「何を行おうとしているか？黒田に会い事の真意を春日山に伝えよ」

兄の声は意図的に押し殺したようだが
「ダメだ」
一点張りだった時に比べると幾分「理性的」な意見だ

落ち着きをとりもどしていく城内
私は涙を拭いた

「事と次第をはっきりとさせよう。。。その後しかるべき処置を決める！！よいな！！」

私は兄を仰ぎ見て
ひれ伏した

「わかりました！！」

「栃尾」に帰る事ができるだけでも「安心」が違う
後ろに座り
私の「暴走」を止めてくれた二人に頭をさげた
「すまなかった。。。我を忘れた。。。恥ずかしい事をしてしまって申し訳なかった」

「なんの!!この借りは必ず戦場(いくさば)に呼んでくださる。。という事で」
柿崎はそう言いながら大笑いをしてくれた

直江は
「私の手の者も動かし出来るだけ早くに「事の次第」をまとめましょう」
と
私の心を落ち着かせてくれた

。。。。。

兄上にあんな無礼を。。。

しかし助け船のかいもあって下知がでたのだ。。。
栃尾に戻れる。。。

深く息をついて自分を落ち着かせた

ところが
この日を境に
正確はこの夜から「越後」は大雪に見舞われる

降るときを惜しみつつづけた雪は祝賀にはせ参じたかのように
大量に押し寄せ
一寸前を見ることさえできないほどの日が続く事になってしまったのだ

晴れるのを待つ
キリキリした思いの中

冷静さを保つことの出来なかった自分を何度も反省した
吹雪が止むまでの間
その間に「心」を鍛えねば。。。。

この「雪」はそれを知らせにきたのだ。。。

冷え切ったお堂で私は「禅」を組み自分との対話を続けた

その１３　晴と影　（１１）

春日山城の客室には下山できず足止めを食った
「上杉定実（うえすぎさだざね）事「実（みのり）」が火桶（ひおけ）の前で顔をしかめて
トロトロとたちのぼる熱気を見ながら溜息を落とした

かれこれ
雪は降り続けて７日目だ
「越後」の空を覆う灰色の雲から注ぐ雪に遠慮というものはないようで
昼も夜も絶え間がなかった

お付きの女房たちを連れているので
何かに不自由する事はなかったが
少しでも早く

春日山から去ってしまいたい気持ちは変わらなかった

できれば

ココには来たくない。。。。
ココには思い出がありすぎるし。。。。
何よりも

虎御前（とらごぜん）に会いたくなかった

会いたくなかったのに「今年」に限って春日山に登っては来たのは
例の「トラ」の顔を見たかったからだ
夫である「定実」は例年になく緩やかな寒さの「冬」にもかかわらず
身体を冷やし具合をずっと悪くしていた

自分の戻らぬ屋敷でセキをしているのでは？
と思うと。。。。
いたたまれない

病弱なあの人に代わり
「上杉定実」という名の「守護職」の仕事を始めてすでに何年もたつ

婚儀を結んだ時から。。。。
ないがしろにされていた「守護職」。。。。。
いても
いなくても

。。。。不必要になった「要職」に
実（みのり）は有無を言わさぬ力によって嫁がされたのは
為景（ためかげ）の父，長尾能景（ながおよしかげ）の政治的手腕という肩書きのためだった

「形だけでも」の敬意が結婚という「品」だった
つまらぬ「女」としての道
愛しあう事など知らぬうちに「他人」の物になってしまった自分

そんな私にどんな生涯が残っていたのだろうか？
知らぬ「男」の子を産み
それによって「長尾」の家に尽くす

ゆっくりとして「余生」のような「死んだような」自分の感情など
いっさいが必要とされない道

望み
しかし

望まぬ事は
やってきてしまった

突然の嵐が来る
吹き荒れる「戦（いくさ）」の鬼「為景（ためかげ）」には他人の事情などお構いなしだった

「守護職」なる地位の妻にはなんの未練もなかったが

ああっ

なかったハズだったのに。。。どこかで狂ってしまって
今に至るわけだ。。。

忙しなく。。。無意味を何度も灰に文字を書き連ね
火桶を混ぜ返す
時折

飛び出す「火の粉」をみながら。。。。

「あの日」の事を思い出す

「ままならぬものよ。。。」

目を細め
かの日の事を思っても。。。今はただ「刹那」だったと思うしかない事だ
自分のしでかしたことは
「因果応報」。。。もどってくる

遠い昔の。。。。「罪」
為景との「約束」で再び「守護」として生きる自分。。。。

「晴景（はるかげ）。。。。。」
目をふせてつぶやく

宴の時，影トラとの問答を見ていた時。。。

なんと「器（うつわ）」の小さなと悲しくなった

あれは
問答とかいう「高尚」なものではない。。。
ただの子供の「駄々」

一方で「英傑」一方で「逆賊」
どちらでも良かった
少しでも「為景」の血を多く受けていれば
あんなくだらない問答に。。。

しかも
「押し負け」するような結果にはならなかった事だろう

結果的に良き「家臣」にどちらも救われたのだが
あまりにも「力」無き「守護代」の姿は。。。
哀れで仕方なかった

それにしても。。
「虎御前（とらごぜん）」の顔を持った「トラ」をこの目で見たときは

ただ
ただ

「悲しい」気持ちと
「やはり」という優越感が少しだけのぼった

「為景（ためかげ）」には。。。似てないな。。。

自分に言い聞かすように「実（みのり）」は火桶をつついた

似ているか？
もう一度思い返す。。。

あの
殴られた顔は。。。似ていたような気もする

それにしても大きな「女」だったな。。。

少しづつだが
物思いに耽る

降る雪の音が少なからず聞こえる

深々と降り続ける雪。。。
あの日，あの時

炎の中。。。

私の命運は「何処」に向かっているのだろう?
年老いてなお迷い続ける心。。。。

女という生き物は。。。あまりに「切ない」な
と
外向きの引き戸を少し開けた

「あぶない!!!」

冷気の吹き込む戸の向こうに少しだけ顔をだそうとした瞬間に大き
な声に止められた
止められた?
というより

むしろその声の大きさに驚き首を引っ込めた
目の前をかすめるように「雪」の束が落ちた
「実（みのり）」の髪をかすめる
雪の華たち
首筋をつたいさらに冷気を身体に流す刺激に震えた

「大丈夫ですか？」

びっくりして閉じた目を恐る恐る開けると
目の前の顔にまたも驚いた

「御前！？」

首を振って髪にかかった雪を払いながら
もう一度確かめた

「御前。。。？ではない。。。」

「ちがいます。。。影トラです！」

元気のいい声は虎御前の抑揚のないものとは違った
編み笠をかぶり
雪簑をしょった影トラの姿に

遅まきながら扇で顔を隠して

「何をしている？」

と

慌てた自分を恥ずかしく重いながらも
身を正して聞き直した

「雪かきです！急な大雪で人手が足りませんので」

見れば
すでに何刻か続けているようで
身体から蒸気が立ち上っている
汗ぐっしょり，顔も上気して真っ赤だ

影トラ。。。。

つい凝視してしまった
縁側での会見

「フフフフフ」
声が漏れてしまった
こんな事。。。昔もあったような。。。。

そうだ
為景が同じ事をしていた。。
「雪に困る事に「上下」の区別はない！！」
そう言って
先頭をきって雪かきをしていたあの大男。。。。

あれも汗だくになって
冬だというのに半裸の状態で走り回っていた

やはり
似ているわ。。。
自分の前できょとんとしている影トラに
「ご苦労である」
そう言うと戸を閉めた
フフ。。。
今度は自嘲気味に笑ってみた
「皮肉なものよ。。。」
影トラ。。
「女」の身に「為景」の蛮勇を持ち合わせてしまうとは。。
何故
晴景には何一つ身に着けられなかったのだろうか？
ホントに「皮肉」だ
虎御前的な言い方をするならば

これぞ
「御仏の導くまま」というやつだろうか。。。
そう思って
また
忙しなく火桶をついた

その１３　晴と影　（１２）

夜になればより風を強く感じる
冷たさ
しみいる寒さ

「お体に障りませんか？」

御簾の向こう
目の前に座っている晴景（はるかげ）の声で我に返った
夕方から向こう
強くなるばかりの「雪」の勢いについ根を上げて「女房」を城下に遣わそうとした
昼間
少なくなった「雪」で城下の屋敷まで戻ってしまおうと支度をしていのだが
その機会は逸してしまった

忙しく動く「女房」を見て
気を遣ったのか
晴景は火桶を多く準備させて部屋まで挨拶に来てくれていた

「ままならぬもの。。。ですね」

屋敷に残した

夫，定実（さだざね）が心配でもあったが。。。

「フウ。。」

溜息。。。
溜息ばかりだ

「晴景殿。。。。宴の時の事。。。覚えておいでか？」

実（みのり）の言葉に晴景は苦々しい表情を隠せなかった
思い出したように
あの日，影トラに掴まれた左手をさすった

「見苦しい事であったの。。。」

まったく
情けのない事になった
気の利く「家臣」があの場にいなかったらきっと晴景は影トラをめった打ちにして
それ故に「人望」をすべて失ってしまっていた事だろう

「強く」
強くあって欲しいと願う「守護代」のあの姿は
ただ
「情けなく」つい実をイライラさせてしまって

責めるように言葉をすべらしてしまっていた

「みっともないところを。。。」

苛立ちを漂わせた晴景の返事さえも。。。。腹立たしくなってしまう

「晴景とともに「越後」を制したらいい」

自ら「隠居」を決め守護家の「復活」をなした後
彼は思い残す事は無くなってしまったのだろう

簡単に言ってくれたものだ
為景(ためかげ)。。。

まったく

お前の子種はたいしたものだ
「不公平」なほどに

晴景。。。

影トラ。。。

「影トラには以後「無礼」のないようにきつく申しつけておきます」

。。。。。

「無礼」とな。。

「その事ですが。。。影トラはいつ「嫁」に出すつもりですか？」

実は前年から引き続き
晴景からの相談は受けていた
「都」。。事，幕府とのつながりを強固にする事で「越後」を柔軟
に「制したい」と思っている晴景は
影トラを都に「嫁」に出してしまいたいと打診してきていたが。。。

まったく
荒唐無稽な意見でただ呆れるばかりだ
宴で見た影トラは
たしかに見目美しい顔を持ってはいるが「女」の所作はこれっぽっ
ちも持ち合わせていない
茶の湯もなければ着物の知識さえ皆無だろう
武家の作法だけしかもたない「女」を都の公家たちの誰が嫁に貰っ
てくれるのか？

変わり種として「笑いぐさ」にはなるかもしれない

それに
「権威」からいち早く零落してしまった「守護家」の取りなしで都

の者が動く事など絶対にない
ましてや
守護家を介さずに「将軍家」との繋ぎをつけてしまった
為景の事を

「好ましい」などと思っている者多くはいない

むしろ
「今更」だ
越後の問題は身の内でかたづけなければ。。
言ってあった

「輿入れ」の話は今の「上杉」ではどうにもならない事は晴景にも

「相手がおりません。。あんな粗暴な「女」」
思い出した事
吐き捨てるように答える晴景

。。。
やれやれだ
頼みつけておいて理由さえも「子供」の「駄々」とは
要は「気に入らない」のだな。。。遠ざけたいのだ

「綾」の時のようにはいかない
虎御前は警戒している

まったく
気に入らない事だ

それは「実」も一緒
虎御前(とらごぜん)が気に入らない。。。当然「トラ」も気に入らない

しかし
だからといって吐き捨てているだけではなんの解決も得られない
夜更けにこんな問答をくり返すだけなど。。。意義も失われる
厳しく接しなくては

「男をお見せなさいな！」

「激」する
話の間にも腰砕けになっていく晴景を叱咤して言った
許せないのだ
実(みのり)の声に余計，小さくなってしまったその姿にイライラを隠さずつづけた

「相手が「女」であるなら方法もあろう！！」

「しかし。。。虎御前が。。。」

そうだろう
御前を彼が非常に恐れている事も，もちろん知っている
だが
居城である「春日山」で未だ「亡き父の妻」にないがしろにされる
「守護代」にいったい誰が？
どんな諸将が従うというのだ？

相手が女なら

言い逆らう事許さず。。。と言い切る事もできるハズだ

「嫁のもらい手がないなら。。。」

「お前様の「側室」にしてしまえばよかろう」

勢いではなかった

常々そう思っていた事を明確に晴景につげた

「相手が「女」なら「抱けば」よかろう」

晴景の顔は驚愕一色になっていた

目を

目を閉じれば今でも思い出すは

火の粉。。。。

踊る火の粉がサラサラと舞い上がり揺れ落ちる

頭の中に「あの日」が去来する

華のない「女」でなどいたくなかった

「女」。。。。「越後」を制せよ!!と

しかし
違う

夢から覚めるように
目を見開き怒りの色を乗せ続ける

「かつて。。。そなたの父上，為景がしたように「強い女」を抱けばよろしい」
そうだ
まだ年端もいかなかった「虎御前」を，１２歳の小娘を「孕ませた」
あの男の血を見せぬか。。。

「あり得ません。。。そんな事。。。」

激した実(みのり)の言葉にただ驚き
おののく
晴景の顔を睨むように見た

何に。。。何にそれほど怯えているのか。。。

ココからでは実の顔は御簾(みす)の向こうでよく見えもしないだろうに。。
それでも「声」に怯えたのか?

「似ておらぬな。。。。」

それは
今
たった今まで怒り狂っていた声とは違った

静かで「悲しい」声だった

気弱だが気遣いの細かい晴景が「愛おし」かった
全てにおいて「優しい」子なのだ。。。
こんな争いばかりの城は耐えられないのだろう

年々
痩せていくその姿を見るのが痛々しかった
治りの悪くなった病を押しても
守護代を勤める姿を

少しでも助けてあげたかっただけなのだ

怒鳴りたかったのではない
責め立てるものでもない。。。

「あいすまぬ。。。少し酒に酔った」

たいして飲まなかった徳利を指し扇越しに見えぬ顔で微笑んでみせた

晴景も触れたくない議題になってしまったのだろう
伏して口を閉ざし
「女房」に火桶の換えを頼んでそのまま実（みのり）の部屋を後にした

雪は
その次の日も
次の日も続いた

全ての景色を覆い隠していく「白」

私とあの子はずっとこの「白」の下でしかない。。
城の礎。。。物言わぬ石なのだ

手のひらに舞い降りる「雪」
すっと消えていく姿に。。。

切なくて
実は涙がこぼれた

「ただ。。。。消えていくだけなのね」
と

私こそ。。。何の力にもなれず消えていくのだ。。。と

その１３　晴と影　（１２）（後書き）

実様（みのり）。。。

後書きからこんにちわ～

上杉定実の妻として登場「実（みのり）」様

越後守護家上杉氏にこれまた「政略結婚」で嫁がれた女性

名前は

実は。。。。不明で長尾能景（ながおよしかげ）の娘

としか残っていない

ちなみに為景（ためかげ）とは「異母兄妹」ではないか？と言われているらしい

（ヲイ）

だから

「トラ」にとっては叔母にあたる人になるわけだね。。たぶん

しかし

この時代

地位アル家の「女」はほとんど「政略結婚」です

特に

室町幕府が衰退していき「戦乱」の世が来襲するとそれはさかんに

増えていって
「女」は品物とかわらない「取引」の道具になる
プラス！！！まさに問題発言だった「子供を産む機械」。。。
というか
子種を絶やさぬために「血」を分ける必要な手だてとしてあらゆる
「名家」が当たり前のようにくばった「土産」でした

「恋愛」？
そんなものなかったんだろうね
初めてあった「男」のために夜を共にして
一族の繁栄のために「子供」をつくる

虎御前も，綾姫もそうやって嫁ぎ，嫁がされた

ところで

実様は名前からして不明だった方ですから
かなり「オリジナル」なキャラです

なのでちょっと「平安調」な感じで突然登場したのですが
几帳（きちょう）の中にいらっしゃったり
扇で顔を隠したりしているのはそれなりに「理由」があります

それはまたおいおいわかってくる事なのでお楽しみに

虎御前とは少なからず因縁もあるようですし

それではまた後書きでお会いしましょ～～～火星

その１４　忠臣　（１）

雪風は横殴りの状態のに入ってすでに１０日目
越後全体を覆っている分厚い灰色の雲のせいで
昼も夜も日の差すことのない空

黒滝（くろたき）もご多分にもれず
新年最初の挨拶にはせ参じた雪に「苦労」していた

「ダメです。。。大手門からの荷揚げが一向に進みません」

年末までに
買い付けた「武器」を城内に配置するための荷造りをしたのまでは
良かったのだが
降らぬと思った「雪」はここぞとばかりの勢いで
それ以降の作業の手を進ませてはくれなかった

「栃尾も。。（春日山だって）。。身動きがとれまい。。。」

黒田秀忠（くろだひでただ）は髷（まげ）を落としてから
頭をキレイに丸めてしまった事もあって地肌に直接のる「雪」の冷
たさを直に感じながら
荷駄の管理をする若い武士にそう言った

謹賀の祝に出かけた「影トラ」がいない間に
城の防備を固めたかった
が

その影トラもこの大雪では
春日山から戻ってくる事もできまい

「天井の雷雨。。。かもな」

恵みであると思いたい
という気持ちを一人こぼした

「年末に武器を買ってはすぐに気取られてしまうのでは?」

家臣の心配に秀忠はこう答えていた

「一度背いた我らの疑いは決して晴れる事はない，こそこそ買い集めをしている間に今度こそ攻め滅ぼされてしまうぞ」

隠密行動などしゃれた事をしている時間はない
それは城内にいる諸将も痛いほどわかっていた
むしろ

十分すぎる苦い思いを経験済みだ

まだ大丈夫
明日にはこない

「雪」が降っている間はこない

新年の祝いの間はこない

それは

「影トラ」には通用しない
そんな気がしてならない
通常ならこの時期に「越後」で戦をする者はそうそういない。。。。
雪が深すぎるから
前例がないというだけ
小競り合い的な「戦」は今までだっていくつかあったが

事

影トラにはそういう「例」に当てはまらない「強さ」を感じていた
つまり

小競り合い的な「戦」は絶対にしかけてこない
来るときは「本気」の軍団だ
大軍を動かす

事実
今まで戦ってきた方法の一切が通用しなかったうえに
あの「神速」を目の当たりにし
味わってしまっている
その事を身を持って知っている
だからこそ荷駄の分配を早くに終わってしまいたかったのに

きたれる「雪」はいったい
どちらにとって。。。。

影トラにとって有利なのか?

それとも秀忠にとって有利に働いてくれるのか。。。。見当が付かなかった

城内にもどった秀忠は「親書」をしたためていた
宛先は
「中条，本庄，色部。。」
いまだ長尾守護代家に対して「恭順」する事に難色を示し
距離をとっている中郡(なかごおり)より北に位置する諸将たち総称
揚北衆(あがきたしゅう)に宛てた物だった

「現八(げんはち)」

後ろに静かに城主をの背中を見守っている男に秀忠は声をかけた

「雪で難渋するのは十分にわかっている事だか，急ぎこれを揚北の
諸将に届けてくれ」
戸板に激しく叩きつける雪の音
隙間風で今にも消えてしまいそうな灯だけの
薄暗い部屋の中
秀忠は背筋を正し
現八に向かい重い口を開いた

「お前はそのまま揚北衆に仕えよ。。その旨も書いてあるからな」

現八と呼ばれた男は深く頭を下げ
秀忠に伏し

「さらばにございます」

と
簡潔なれど武士らしい「別れ」を告げ
足早に部屋を出て行った

2度目の「謀反（むほん）」
勝てば生きながらえるが「敗北」は一族全員の「死」でしかない
しかし

覚悟はすでにできている

あの日
影トラに謁見出来たのはまさに「御仏」の思し召しだった
会わねば
これほどまで自分をいきり立たせ「戦」に燃える事はなかった

あれが「敵」だ

生涯を「戦（いくさ）」の中に過ごし
為景と共に戦い

その最後の「約束」に

「賭けてみよう」

この「命」の全てを持って

仏壇の前
一人つぶやく

「女」は猫。。。。よく例えられる生き物だ

「女」という生き物は身体に「魔物」を宿している
それを色恋以外に使いこなし「戦(いくさ)」や「政(まつりごと)」で具現できる者は化け物だ
かつての「北条政子(ほうじょうまさこ)」や「日野富子(ひのとみこ)」がそうだったように
最初は可愛らしい「子猫」も魔性の化をまといかわる

まさに「影トラ」お前はそれだ

「怪猫お虎(カイビョウトラ)」

決意の時
深く息をつき
目を見開く

「くるがイイ!!化け猫!!存分に「死会おう(しあおう)」ぞ!

！」

影トラの栃尾への急な帰還に合わせ
長秀（ながひで）は休むことなく荷物の支度を進めていた

雪の降り続く間じゅう
最短で栃尾に戻る方法を何度か策定した

時間の許す限り
昼となく夜となく
テキパキと物事を計算し
決めていく

長秀がトラに仕えるようになったのは1年ほど前だったが
その間に参加した「戦（いくさ）」は
それまで宇佐見（うさみ）の元で行ってきた物とはまったく異質だった

早さが違う，断トツに
決断も
作戦も

だから
すべての行動がそれに準ずる事になっていく

最初は目を回した
栃尾衆(とちおしゅう)の動きの早さにびっくりしたが
今は
馬廻りとしてその一端を担うほどになった

たとえれば「雪」が降り続けていたとしても
止んだ時には

「即座」に動く

それが「影トラ様」のやり方だから

宴の翌日
大雪の日に入れ替わりで入った
栃尾からの早馬は
直江山城守(なおえやましろのかみ)の使いと同じ答えを持ってきていた

「黒滝城(くろたきじょう)に不穏な動き有り」

敵は「影トラ様」の戦い方を知っている
一度味わってしまっている

より早く

より正確に

一昨日
小康状態になった小雪の日に早馬を跳ばしたうまくいけば
今日あたりには栃尾に着いているはずだ

「努めて警戒し，出陣の支度に入れ」

もちろん

栃尾衆はすでに準備を整えているハズだ
城主が帰還し次第
すみやかに「出陣」するために

この「雪」をものともせず活発に動いている事だろう

「すでに「戦（いくさ）」は始まっているのだ」

そう自分に言い聞かせると
小荷駄を運び込む者たちを叱咤した

１０日の雪はついに上がり空は晴れ間をみせた
私は朝早くに母に挨拶を

そして兄上
「雪」で足止めされていた「上杉様」にも挨拶をした

屋敷前の溜まりには整然と帰還の声をまつ「栃尾衆」帰参隊が待っていた
おせんや，直江の妻は後から来るよう申しつけてある
雪道を「女」たちに走らせるのは大変難儀だから

「１０日。。。。長かったな。。。」

視線を山の向こうに向けてみる
栃尾の方角は薄暗い分厚い雲が覆っている

しかし
あれに追いつく勢いで帰らねばならない

みんなの顔を見てに言った

「出陣！」

過酷な運命につながる「戦」の日々が今年もまた始まる

その１４　忠臣　（２）

「黒滝城（くろたきじょう）城下に防壁が出来ていました」
二刻前から断続的に
栃尾方面からの早馬が出入りをするようになった

通常こういう「用兵」はしないだろう
だが

たかが
十五日ぐらいの時
ほんとにつかの間だったのに
栃尾を離れてしまった事を考えると
「不安」で仕方なかったが

不安は報告を聞くに「的中」したようだった

報告は逐一，のがさず「耳」に届くようにしている

「城下に柵越しに見るに浪人たちに武器を支給したもよう。。」

知らせは私の元からさらに春日山に遣わされる
もはや
隠す事のできない事実になった「謀反」

最初の「兆し」以降
怠る事なく警戒していたのだから
入ってしまった報告があまりに辛く
当然と言えば当然の結果になってしまったのは「残念」といえる

秀忠を捕縛しなければならない

急がねば

柿崎城で五百
枇杷島城(びわじまじょう)で二百の兵を加え
ひたすら進む道でも

早馬を何度もだし
栃尾との連絡をとりあった

横で安田長秀(やすだながひで)が
無駄なく
出立するために軍団の準備から小荷駄の量まで全てを計算して
栃尾から向かってきた早馬に言付ける

「栃尾城「出陣」の準備整ってございます！！」

栃尾衆八百

相手の「後手」を踏むことはなくなった

ただ
どれほど急げど
天候の「機嫌」だけはいかんともしがたい
その事をのぞけば
順当に作戦は「仕上げ」に入り始めていた

それ故に私は焦っていた

準備が出来ても
自分が栃尾に到達出来なかったら意味がない

しかし雪は止まない

馬の足も人の熱も奪っていく「寒波」に今は耐えながら進むしかない

「雪」よ。。。いったいどちらの「味方」をしてくれるのか？

空を睨み
何度も問う

「是非に私に力を貸して頂きたい。。。。」

願う
祈り願う

凍てつく寒さも
どちらに味方なのかわからない
私は，目深にかぶったおこそ頭巾を上げ
空の隅々まで見回した

ただ遠くまで広がる落ちた雲
上下もわからぬほど
積もった雪を恨めしく思った

「。。。しかたない事だな。。。」

兵の疲れも気になっていたところに報が走った

「前方に軍団発見!!」

予想していなかった事に長秀(ながひで)を見る
「確認!!!馬印は?」

緊張が走る
栃尾まで後少しの距離で「待ち伏せ?」

手をあげる

「陣を整えろ!!」

うかつ

私が黒滝に向かっている
と
すれば
黒滝城が兵を動かさないとは限らない

後，少し。。。という気持ちの焦りを気取られた?

それにしても
早い動き。。。
ココに陣を張っていたか?

「弓隊前!!」

目を凝らす
吹雪の向こう
確かに陣営が見える

すでに武装している集団のようだ

騎馬を前に
後ろに五百の兵はみえる。。。
早馬がつけられたか?

とにかく「確認」だ
私の焦る気持ちとはうらはらに

一人の武者が馬に乗りこちらに向かってくる

「馬印は？」
長秀も目を凝らしているが「旗」は見えない。。。

「わかりません。。」

騎馬武者は私の陣のかなり近くまで来て叫んだ

「長尾影トラ殿はどちらに！！」

私を呼ぶ。。。
顔には頬当てをつけているからココからでは顔もわからない
長秀が前に出ようとしたのを止めた

「私が長尾影トラだ！」

敵とは言え
一騎で前に出た者に「注意」のためとはいえ後ろに下がるような事があってはいけない
馬ごと身体を前に出した

騎馬武者もさらに前に歩を進めた
進めながら

「お顔がわかりませんな。。」

頭巾越しの私の姿を睨め付けるように見る

私の後ろでは長秀たちが身構えている
弓隊も前に出そろっている
恐れるには足らないが。。。。

ひっかかる

「まずは。。。人に名を聞いたのならば貴様も名乗れ。。それからだ」

私の言葉は聞こえたはずだ
聞こえたはずだが
武者は止まることなく私の前にゆっくりと歩を進めながら答えた

「いいや。。。お顔を拝見したい。。」

激するような返答
むしろ強気だ
後ろで矢を構えた長秀が叫ぶ

「そやつ！！首を狙っております！！お下がり下さい！！」

近づく。。。。

「無礼者め。。。」

私は低く唸るように答えた

相手の武者は刀を抜く気配はないが

私に名乗らせておいて自分は名乗らないというのは「無礼」以外何者でもない

後半歩近づいたら「斬る」

心の迷いはない

この「道」を邪魔する者を私は許さない

怒りがふつふつとする

目が吊り上がってゆくのを自分でも感じる「愚弄」は許さん

私を試すこと許す事ない

私の気迫を感じたのか，武者はとまり

今度はへりくだった言葉使いで話かけた

「無礼は承知の上でお頼みしたい。。。。顔をお見せください。。」

覚悟。。。。覚悟を感じる。。。
よかろう

私は突風の雪の下
おこそ頭巾を取った

「良く見ろ!!長尾影トラである!!!」

髪が風に引かれなびく
怒りの顔になっている事は自分でもよくわかる

黒い具足の騎馬武者が頬当ての向こうに見える目で私をじっくりと
見ている

「どうする?」
私は首を傾げて聞いた

私の問いに武者は馬をおり
その場でひれ伏した
「長尾影トラ様。。。」

顔を上げ
頬当てを取った

「栖吉城，長尾景信（ながおかげのぶ）が臣下，金津新兵衛（かなつしんべい）にございます！」

風に負けぬ響く声
「具足」を雪に沈めて伏した男は
白い嵐の世界とは対照的なほど焼けた黒い顔を見せ続けた

「先の無礼をお許し下さい。。。」

今一度
雪に顔を埋めんが勢いで伏し
まるで泣き声のように発した

「栖吉虎姫（すよしとらひめ）」

今度は立ち上がり
後ろに控えていた軍団に向かって手を挙げ，声を上げた

「栖吉虎姫！！！」

軍団はどよめき
一斉に槍が上がり
馬印が上がった
「栖吉衆（すよししゅう）。。」長秀の声が聞こえた

そして「鬨の声（ときのこえ）」のように響く言葉が返ってきた

「栖吉虎姫！！！栖吉虎姫！！！」

これは。。。。
私はすぐに
腰に差した母から預かった「太刀」を目の前に持って見せた

「おおっ。。。お待ちしておりました。。。虎姫の子息。。「影トラ様」」

太刀を目にした金津と名乗った男は顔を緩ませ，涙を流し
交互に私の顔を見て

「本当に。。。お待ちしておりした。。」
そう言うともう一度手を挙げた
「栖吉虎姫」の怒号がさらに大きく聞こえ

手前に控えた軍団の後ろにさらに兵たちが押し寄せた

軍団が槍をかかげる
鈍く光る槍先の数が尋常でない事に気がついた
「これは？」

私は金津に聞いた

「栖吉衆「千」！！長尾影トラ様に従うためにはせ参じました！！！」

栖吉衆。。。。
母上の軍団。。。
この雪の中待っていたのか。。。

「ココで待ってたのか？」

「はい！！先ほどより」

なんと丈夫な
私は
並ぶ軍団の前を馬で歩いた
みなが私の顔を見ている
涙する者もいる

母上を見ている？

かつて母が引き連れ
父上の背中を守り戦った軍団

「誉れ高き栖吉の軍」

「主の帰還をお待ちしておりました。。影トラ様。。我らが主。。。
貴方にございます」
金津の黒い顔には
無数の刀傷がある

忠義の「甲冑」。。。これを私に譲るという事ですか。。母上

驚きを隠せない表情の私に
金津は続けた

「ここより先の道に障害は一切ありません!!栃尾衆と合流し黒滝に向かいましょう!!」

軍団の向こうの道を見た
そうだ
向かわねばならない

私は太刀を高くに掲げた

「いざ!!むかわん黒滝へ!!」

その１４　忠臣　（３）

進め！！
前に進め

未だ敵は見えず
未だ「戦」は始まっておらず

ならば
進め！！
まだ槍を会わせておらぬのなら
「戦」はしていない

血しぶき浴びることなく
休む事ない

刀，刃
欠けるまで
休む事ない

ただひたすら
心を叩き
前へ
前へ

ただひたすら

夜を徹して黒滝城（くろたきじょう）に走る軍団

栃尾衆と合流したのは春日山を出て十日目の事だった
大小荷駄の搬送は雪に阻まれ
難航を極めた

だが

さらなる「北」にある黒滝城とて同じ事
かけた時間は万全のためにあると信じる

「なかなかゆっくり出来ぬものですな！！」

実乃は私の顔を見ると言った

まったくだ
心の安まるヒマもない
それは
春日山だって一緒
新しい年を迎えたばかりなのに「謀反」など。。。

「不忠義」にも程がある

昨日
私は陣幕に入って
今年初めて「具足」を身に着けた

私の「具足」
それは最初に母上が送って下さった物を模して新たに去年作った
身体が大きくなったので合わせたのだ
黒塗りを基調とした物で少々派手な色を重ねた

兜の額に「飯綱権現（いいづなごんげん）」を頂いた
「黒い意識」に飲み込まれるような事がないよう
この地のために働けるように。。。
御仏の加護得るために。。。

数珠を左手に巻き
静かに祈った

明日
早朝，黒滝城に到着する

ココまでくる間に入った情報から「謀反」は疑惑ではなく「本物」
である事は確認されていた

なぜだ

「不義」

春日山に旗を翻す事も
もちろん許す事はできないが。。。。

「信心深き影トラ様に習い御仏に仕える」
と
称した事が嘘だった事

御仏までも謀った事は私にとってはもっとも許せない事だった

明日
私にどんな言い訳をする？
春日山にどんな申し開きをかる？

考える事で怒りに飲まれてしまいそうだ。。。

冷静に。。。

立ち上がり諸将の待つ陣に向かった
軍団のために間借りした寺社の中の一室にみんな集まっていた

栃尾から本庄実乃（ほんじょうじつの），小嶋弥太郎（こじまやたろー）
柿崎から柿崎和泉（かきざきいずみ）
栖吉から金津新兵衛（かなつしんべえ）

驚いたのは馬廻りに秋山史郎（あきやましろう）が来ていた事

総勢二千五百の軍団
黒滝には城兵，城人を含む千五百の人足は確認されているがそれ以外の「浪人」は不明

横を走る史郎に声をかけた
「大丈夫なのか？」

去年，黒滝攻めで口上を述べたにもかかわらず火矢をかけられ大けがをしたばかりだ
「去年の事です！！」
まだ首すじに火傷の後が残っているが意気揚々な返答
私があの時，持たせた数珠を首にかけていた

心意気を組んで「うん」と答える
後は戦うだけだ
後，数刻で「戦」だ！！

不安はまだあったが大半は昨日のバカ騒ぎで無くなっていた

昨日の騒ぎ。。。。

私は夜更けになって寺社に到着した時から
明日の事を頭の中でいっぱい考えていた

一度遣った作戦で城を開けるのは難しい

仕寄りと焙烙
次の
次の一手。。。

「ふう。。。」

寝付けない
身体がだるい
というか
重い感じだ

いろいろな想いが混じってしまう。。。

考え過ぎているから
熱っぽい気もする

そんな時に柿崎はやってきた

柿崎は先の行軍にはすぐにはついてこられなかった
春日山での処理が残っていたからだが
夜三十騎と足軽衆五十をお供に陣に訪れた

雪の中をひた走ってきたのだ
難儀だっただろうと労いをしようと部屋に向かった時には

事は始まっていた
「栃尾の熊にまたも手柄を持っていかれるところだったわ！！」

と
部屋に入るなり大声と。。。。
殴打。。。
目の前で実乃が飛んでいく。。。
「貴様！！！挨拶がわりに「拳」とは！！」
立ち上がり部屋を壊すのではという乱打
間を割って
やたろーが入るも。。。。
「ややっ！！熊がもう一匹おるではないか！！」
と向き直って満面の笑みで
殴打。。。。
やたろー。。。。応酬
何かが通じあったかのような殴り合い。。。
柿崎のための酒と
自分の
寝酒を持って部屋に入った私の前で
暴れる「熊」三匹。。。
何やってるの。。。。
何で挨拶が「殴打」なのさ。。。

呆けてしまった私の前を通り間に入ったのは
金津だった

「やめよ!!もう夜も更けておる!!」

でこにコブを作った柿崎は金津を見て
「おぬし。。。」
と
声をかけたが
取るに足らぬと態度で金津は続けた

「戦以外で怪我などしたらつまらんぞ。。」

とそそくさと自分の寝所に消えていった

さすがに「戦」以外で怪我はしたくなかったのかそこで事は終わったが
部屋は荒らしの後のようになっていた

「落ち着け。。。明日は戦だぞ」

ねぎらいの言葉など
どこかに飛んでしまった
柿崎は根っからの「いくさ人」だと痛感した

面目なさげに頭を下げるも
「戦」に燃える気持ちはなかなか落ち着く事ができないようで
少しばかりの酒宴に付き合った

実乃と柿崎は昔話をしながら杯を開かし続けた

私は
乱打の後少し
不思議なものだが気持ちが落ち着いて部屋に帰るとした

「影トラさま～～」

鼻っ柱を真っ赤に
心地よささげに酒を飲むやたろーが声をかけてきた
ほどほどにしろ。。。と言おうとしたら

「陣江には会えたんですか?」
と

すっかり忘れてたよ
聞かれた私がきょとんとしてしまった
「。。。。忘れてた。。。」

私の返答にやたろーは

「じゃ戦(いくさ)終わったらですね～～」
と
ゆっくりと吹き出しそうな笑みで答えた

まったくだ

笑ってしまう

のんびり出来ない生活だ
春日山に行ったのに
ジンの事はすっぽ抜けてた

足止めくらってる時もこの「黒滝」の事で頭はいっぱい
気をちらすために「雪かき」までやって。。

ジンの事はついに思い出さなかった。。。
いっぱい
いっぱいの詰まった思考じゃ良い作戦もたてられない。。。

自分頭をポンポンと叩いた

しっかりしろ
自分

と

黎明。。。

ひた走る軍団
先発の部隊からの報ではここ何日か黒滝も「夜警」を絶やしていない
しかし
城の方は
私たちを迎え撃つ「支度」はすましている事だろう

後は
どれだけ「虚」をつけるかだ

城攻めの時間はジリジリと迫っている
策はすでに全軍に告げてある

不安はない

不安は

なのに
身体が痛い。。。。おかしい。。。
昨日の夜からの熱気が私の身体を包み「痛み」に代わり始めている

黒滝城が眼前に見えた頃
私の腹部は言いしれぬ痛みの中にあった
鈍痛。。。

どうした。。。。どうなっている

しかし目前には「黒滝城」今は進むしかない

その１４　忠臣　（３）（後書き）

萌えない謙信。。。。

後書きからこんにちわ～～火星です

冒頭から変な題名ですが。。。
メッセージ頂きました
「全然可愛くない萌えない」

。。。。。

「萌え」というジャンルでこの小説を書いているわけではないので。
。
と
思いながらも
たしかに
可愛くはないうちの「影トラ様」ということは。。。反省した方が
いいのでしょうか。。
迷ってます

もっと「恋愛」を。。。
とか

もっと「女らしさ」を。。。
とかってご意見も多々頂くのですが。。
すいません

そういう要素はなかなか出てこないとおもいます
「上杉謙信女性説」ってかいてあったから見に来たのに全然「女」じゃない。。
って

どちらかというと
何故「女」だったのにこれほどまでに「戦ったのか」という感じで書いてますから
女らしさを強調したいわけではないので
そういうご期待にこたえられなくてすいません

あまりに多いメッセージだったので
こちらにて返信させていただきます

それでも健気にがんばる「影トラ様」を応援してやってください（泣）
まだ「女の子」の歳でがんばってます！！！
がんばってます！！（爆）

というわけで（何？）

また後書きでおあいしましょ～～～

その１４　忠臣　（４）

「揚北衆（あがきたしゅう）」はいつ到着しますか？」

不安な面持ちで秀忠に問いただしたのは
一族の一人
まだ若く幼さの残る武士だった
具足に身を固めても気持ちまで固める事はできないようだ

雪は引き続き降り
止むことはないだろう

城内の防備は固める事ができたとして
「いつ」

そうだ
いつココに現れるかわからない「影トラ軍」を待つのはなかなかに
苦痛だった
それだけの持久力を持たせる物がないのだから

「雪で難渋している事だろう。。。影トラもかわらん」

追い払うように若武者に言うと
櫓から外を見回した
視界はこのうえなく悪い
晴れ間は少なく吹雪きになる日の方が多い

不安を顔に出してしまうのもやもおえない事なのだろう
それよりも秀忠は口に出して言わなかったが
放っていた「透波（すっぱ）」（忍）が一人も戻っていない
という不安があった

最後の報が黒滝に届いたのは八日前
春日山を影トラは出てこちらに向かう
その足に約「千」の兵力。。。。
それ以降の報は一切ない
動いているのは「軍」だけではない証拠だ
兵の動員数にしても
もっと多くの兵を引き連れてくるはずだ

現在「黒滝城」の城内にいる兵力は八百
その他残り「浪人」を併せても千はいかない
当初予定していた兵員数を保つ事は出来なかった

人の自由がきかない
これが「越後」の冬だ

雪が降ったら「戦」はしない。。。。
寒さばかりが募って
心が落ち着かない

いざ「戦」といっても良い思いもなかなかできない

と「浪人」達は思った事だろう
ならば
春まで城で難を凌げばいい
という考えもあったハズなのに。。。。

実際は
「籠城」というものに逃げ場のない恐怖を憶えてしまった者たちにとって
城内での越冬戦は。。。
堪えたらしく周辺の町に入り浸ったりで

「間者」を締め切ることができなくなる
秀忠の判断で
ばらけてしまっていた

人の心「あやふや」だ。。。そう言うものだ

だが現実にこの「寒波」の中を
影トラは動いている

感じられるのだ
途切れた情報の向こう
いったい，いつ。。。

いつくる。。。。

目を細め南方を眺めて見るも。。。
雪にその先を消され
音さえも聞こえない地平。。。。

「使者を送って督促したほうがよいのでは」

まだ
後ろに残っていた若武者が「恐れ」を抱いている事がわかる
その言葉の端々に隠せない「恐れ」が出てしまっている

「神速」
彼もそれを経験した

しかし
今はそれを待っている

待つのも「戦」。。。。。
秀忠は息をしずかに吐き答えた

「直に来る。。。心配いたすな。。。」

それが「嘘」でも今は言い続けるしかなかった
黒田秀忠が揚北衆に宛てた書状は助けを求める物ではなかったのだ

揚北衆（あがきたしゅう）
中条藤資（なかじょうふじすけ）は黒滝から届いた書状を手元から膝に降ろした
黒滝よりさらに北に位置する居城には連日の吹雪が押し寄せ
「越後」の冬が
隣近所にいる者との手紙のやりとりさえも困難なものにしてしまう
事を思えば
ココに書状が届いた事の意味は大きかった

が

何度
読み返しても「合点」のいく部分はすくなく
内容は一方的な物だった

「助けはいらんと。。。」

冬を越すために
限られた灯を薄くともした部屋の中で

それでも白い息を吐きながら言葉をこぼした

どちらにしろ「兵」を動かす事など不可能だった
真冬のこの時期に集兵はできない
農閑期だといえ
「雪」の中で兵をあげるなど輜重（食料等々）費用を考えたら
あり得ない事だ

「長尾影トラ」の事はココ一年の間で良く聞くようになったが
まだ若輩と高をくくっていた
親方，為景の末子

なによりも「女」だと

ところが
秀忠の文面からするにどうも「女」というのは怪しい感じだ
どちらかと言えば
「女」のような顔の「鬼」
と言う書き方だ

これは
あながち「嘘」ではないかもな。。

顎髭をさすりながら火桶のはじに手を置いた
しかし
さて
どうしたらいいものかと考えながら目の前に座る男に問うた
「現八。。それでどうしたらいいのだ？」

この雪の嵐の中
黒滝から来た
寡黙な使者に問いただされねば「真意」は計りかねるものだ

「何に関してでしょうか？」
その身体に合わせたような「太い」低い声が眉間にしわを寄せたまま答えた
中条は手紙を帰し
指をさした
「この下りだ」

そのには

黒田秀忠の「討ち死に」後の事からが書かれている

「そののちの事
「越後」を一つにするための器量をしかと見られるがよいと思う
われの生涯を賭けたる戦にて
真に守護者たる「方」を支え「越後」を平定せよ」

変な文だ
「これは命令か？」
中条は卑屈に笑った
勝った側を引き立てて「越後」を平定せよ。。。。だと？

「そういう事です」
現八は表情を変えず答えた

「しかし秀忠自身は「負ける」と言っている。。。おかしくないか？」
「そうです」

「では。。。誰と誰が争っているのだ？」
現八は答えなかった
中条にはもうわかっていた
これが越後守護代家の命運を決める初の「戦」になる事を

覚悟の果ての答えか。。。。

「死してなお。。。忠臣。。。黒田秀忠」

中条は手紙をたたみながら言った
それは武士(もののふ)なら迎えたい「最後」の一つにあってイイ選択でもあるだが
その価値は後の者にしかわからない「賭け」でもあった

「行く末を見届けよう」

おそらく他の揚北衆も手紙から導き出した「答え」は同じ事だったのだろう

援護の軍勢の招集はかけられる事はなかった

「城南!!!軍勢あり!!!旗印は「長尾守護代家」!!!」
重き雲の下
日の出のわからぬ空の早朝

最初の櫓からの報はやってきた
やはり朝に来た

具足のまま，床机に座して目を伏せていた
秀忠は急ぎ飛び起き指示を出した

「全ての城門にかんぬきを!!!弓隊準備!!!引きつけろ」

ギリギリまで引きつける
影トラ!!!

三条衆を滅したお前の方法を使ってみよう

城内を走り
伝令を捕まえ
「どのくらい来た?」
秀忠の問いに戻り馬の伝令は引きつった顔で回答した

「数二千。。。。以上」

二千以上。。。。
驚いたこの真冬にそれだけの兵を動員するとは
予想を遙かに凌駕している
どれほど防備を固めても
「火」を避ける手だては無くなったに等しい

待つ
引きつける
など
すでに意味がない

それほどの数で来ている事が問答無用の「城攻め」の為なのはもはや明白だ

「誰が来ている」

「栖吉衆(すよししゅう)」の旗がありました!。。。数千。。」
「柿崎景家(かきざきかげいえ)隊も。。。。」

秀忠は天を仰いだ
先に動いたのは影トラでも自分でもなかった
亡き為景の妻。。。。鬼嫁おトラ（虎御前）だった

そうか。。。
現，守護代晴景（はるかげ）に逆らい続けた栖吉の兵が一緒にきたか
つまり
栖吉は影トラに平伏した
頂くべき「当主」を選んだ

決まりだ

もはや
どれほど城が保つかはわからないが
全滅を必死は避けられぬ戦いにかわりなくなった

受けて立とう。。。

拳を握り
戸板を少しづつ叩く

影トラ。。。
影トラよ。。。

お前が「越後」を統べる者としてふさわしいかどうか。。。

虎御前よ

貴方がそれを信じてやまぬ行動を取ったこと

本庄実乃（ほんじょうじつの）
柿崎景家という「忠臣」を得たこと

別の目線。。。「力」で
量ってやろう

最後はこの秀忠がお前を見極めてやろう

胸を叩き心に刻みつけて
大手門に向け歩き出した

その１４　忠臣　（５）

「秋山史郎！！口上に参りましょう！！」

去年十月に黒滝の大手門前に名乗りをあげ
そこで卑怯討ちにあいまだ怪我も治りきっていない秋山は
それでも
勤めを自分にという「気迫」で私に進言した

「長尾守護代軍」総勢二千五百
その他，輜重隊，大，小荷駄，人足をたせば三千を越す

真冬にありえないほどの大軍勢はすでに黒滝の城下を囲んでいた

風はゆるみ
雪も小降りになった

来るときがきた事を「天」が告げているかのように

深々と

不似合いで
それでも美しい情緒をみせる雪化粧をした「黒滝城」を
ゆっくりと見回した

不思議な感じだ
これからココで「戦(いくさ)」が始まる。。

「秋山!!行きます!!」
と号を発したそれを止めた

「待て!!」

頭を何か
かすめる
風を切るような「視線」？

胸が高鳴る。。。

不安なのか？違う。。。
。。。もちろんそれもある
またもの「卑怯討ち」がないとは言い切れないからだが

「感じる」のだ

これは「覚悟」

切り裂くような「決意」

「私が行く」
「何を言われますか！！」
床机（しょうぎ）から立ち上がり馬に向かう私を実乃が止めようと前にでる

「大将たる者が口上などと！！」

実乃の口に手をかざした

「使者が来ている」

雪の向こう
黒滝の城門前に霞むような，一人の武士（もののふ）の姿がみえる
直感。。。。

「黒田が来ている。。。」

城門を睨む私の目を追い
陣幕の一同はざわめく
まだ遙か向こうに「点」でしかない人影が「黒田秀忠（くろだひでただ）」と誰も確認できない

「あれが？」
「そうだ」

視界に鮮明に顔が写らなくても
わかる

私にはわかる
去年，目の前で「髷（まげ）」を落とした時のあの鋭き眼光
あれは今日のための「目」だった
この「謀反」のための「執念」

その気を感じる

頭がビリビリと痺れる

止めの手を出していた
実乃を退け馬に乗った

「お待ち下さい！！」

秋山も実乃も私の手をとろうとするが
振り向き言った

「口出しも，手出しも無用。。。よいな。。」

微かだが言葉はうわずった
「戦」を心が望み始めている。。。。踊り始める「闇」
目はうっとりとしていたに違いない

「お待ちしておりました」

城門からも陣営からも離れたほぼ真ん中の位置に「秀忠」は刀の鞘
を雪の大地に突き立っていた
黒い甲冑に身を包み
整然と立つ姿は「威風堂々」まさに「侍大将」の貫禄を見せつける
髷(まげ)を落とした日に猿芝居を演じた「気弱な老人」はココにはいない
長き歴戦の武者
すでに十分過ぎるほど「いくさ人」の仁王立ち

「申し開きはあるか?」

私は馬上からその姿を見ながら言った

「ありません」

毅然とした態度を誇示しつつ
悪びれる事なく秀忠は返答した

言い訳はしない

そうだろう
そういう目だ
では。。。

「何故だ。。。。」

ここに至るまでの「何故」のすべてをオマエに問う

何故「謀反」を？
何故「約束」を？

何故不義を行おうとする

秀忠の表情は変わらない
信念が伝わる

そんな言い訳はしないだろうオマエは
オマエは。。。
すでに決めているから

私は片口で少しだけ笑った
「戦」だ。。。。

「強いて言うならば「影トラ様」。。。。貴方と死合いをしたいだ

けです」

何も言う事はない

すばらしい返事だ。。。

正面に陣取る「長尾軍」を静かに見ながら「怒り」ではなく「悲しみ」でもない

言葉を交わした

「では「戦」が終わったら聞くとしよう」

「御意」

手短な会見

私は背を向け陣に向かって走った

空を仰いだ

惜しむことなく降った雪は「私のために」一息をいれ，静かに見守っている

白い世界が目の前から

頭の中から霞んでゆく

真っ黒に

真っ黒に

戦いのために「入れ替わる」心

そんな私の背中を

秀忠は陣に戻るまでその場所で見ていた

何かに気がつけたか？

大手門が閉まる直前
秀忠は刀を振りかざし大きな声でさけんだ

「寵児「影トラ」！！！我，長尾為景（ながおためかげ）が忠臣としていざ！！まみえん！！」

「ああっ。。。まみえようぞ。。」

門の向こうに秀忠の姿が消える
心に現れるのは「怒り」を超越した「義」
この「闇」は
光への道を切り開くための儀式

私はそう思うようにしている
今はただ

手を挙げた
さあ
戦だ！！！

「はなて！！！」

五百の火矢はいっせいに白銀の空を舞う
同じく
黒滝からもかさなるように火矢が飛ぶ

「仕寄り！！」

金津率いる「栖吉衆」は大楯と小楯の編成の弓隊で前に進む
後ろには「仕寄り」の人足
「城内に向けて遠矢をはなて！！」

あらかじめ栖吉衆が決めていた位置に火をくべろ！！
じりじりと城壁と石垣に距離を詰める
思った通り

二段三段の矢に対応できていない

人は足りていないな

それは空を舞う「火矢」の数に如実に表れ始めている
最初の力は
もう息も絶え絶えか？

守りの構えは出来ていないのだろう
疲れを帯びた「矢」は弱々しいぞ

こんな時期に「戦」を出来るのは「御仏の加護ある軍団」だけだ
眠らず
弛まぬ
心を維持する事ができるのは「御仏」のおかげだ

左手の数珠を顔前にかざす
城はどうだ？
守れるか？

無理だろうな
「戦」はすぐに終わってしまいそうだぞ
それは「残念」だ

「配置に着きました！！！」
長秀の元に着いた伝令が声を上げた

私は前に進んだ
よく見える位置に

「松明！！」

栖吉衆の男たちが楯から飛び出す

その剛力から投げ出された「松明」は戸板の壁にまんべなく突き刺さってゆく
大手門にも容赦なく討ちかかる

かがり火を全身に焚きつけたような城壁
それは

それで美しい

大いなる「護摩（ごま）」を焚け

「やたろー!!実乃!!」

「応!!」

よれよれになった矢の間を縫って
油樽を持った「栃尾衆」が走っていく
すでに
細工は出来上がっている

伊達で「大楯」を持たせたわけじゃない
裏を返せば「梯子」の代わりにだってなる
立てかけられた楯に「仕寄り」を重ねる

「道」はすぐそこに出来上がる

長槍は狭間を狙い攻撃を防ぐ
狭間の射手も足りていないようだ

攻防がつづくなか
城壁各所に火が上がる

火を

もっと火をおこせ！！！

油樽を投げ込む爆発的な火を巻き起こす
炎を生み出せ！！！
それに併せ次々に「焙烙」が門の内外にぶつけられていく

猛烈な勢いの火は大手門を飲み込み
爆破によって歪まされた木々に引火し始めた

大手門が火に包まれた時にはすでに外に向ける敵の矢はどこにも飛ばなくなっていた

「前進。。。」

太く唸るように私は指示を伝える

「さあ。。。「炎獄（えんごく）」の門を開け！！」

押して参る

その14　忠臣　（6）

開始からすぐに
鳴り響く

太鼓
貝
絶叫
怒号
悲鳴

もはや何が入り交じっているのかさえ
わからない城内

慌ただしく城人は走り回り
弓矢の攻防が続く
が
心を揺さぶる興味はそこにはなかった

「早い」

それはわかっていた
作戦も
行動も

去年受けた「仕打ち」をわすれたわけではなかったのに

それでもまだ「足りない」

待ち続ける「戦」に不慣れだった黒滝

わかっていた事

短期間ではあったが出来うる処置をして城を固めたが

「天運」にはみごとに見放されたらしい

攻城戦の基本は

守り側が有利なハズだが「人」が出そろっていなければ

城自体の全部を防備する事はできない

外塀の弓隊を全面の配置につけたら

すでに人は足りない状態だ

敵は五百の弓と同じぐらいの「仕寄り」を用意

防柵はすでになんの役にもたっていない

城壁は火という「お飾り」に彩られている

開戦から一刻

焙烙（ほうろく）で半壊させられた門が打ち破られるのは後わずかだろう

それでも秀忠は声をあげ

次の策を指示していく

「やるしかない」

いやいや
まだ何一つ始まってない
引くことなどあり得ないのだ

「二の門を固めよ！！」

将は慌ててはいけない
それを態度で示す
指示の声とは別に悠然と二の曲輪に向かう
まだまだ。。。

とりあえずは
「影トラ軍」が仕掛けた「火」ですぐに城内に駆け込まれる事はない
時間はある
大手門から向こうは「棄却」
二の曲輪までに防陣を敷く
人手を考えればそちらのほうが「有利」だし時間を稼ぐことはできる

まだだ
まだ
十分に「死合い」していない
二の曲輪の防備に走らせるため
手をあげ
大手門からの撤兵を合図していると

足早な伝令が目の前にひざまずいた

「申し上げます!!!南門が打ち破られてございます!!」

「なんだと?」

耳を疑った

「南側，堀切と曲輪を。。。。斬られたと?」

いつの間に?

首を傾げ言葉を止めた

しまった。。。

大手門を焼き切る時間をつかって「隊」を分けたか?

物見を呼ぶ

「「影トラ軍」は二手に分かれたか?」

登る煙でよく見えないのか

物見は手振りで

「わかりません!!ただ近づいてきています!!」

火を。。。。

いや煙までも利用したか。。。

目を閉じる

「城を分断するつもりだな。。。」

火に炙られたのか具足の端々が煤けている

秀忠の指示を待つ伝令

顔に「怯え」が見える

「旗は？」
「栖吉衆です」

。。。。。。

持久戦にまでもちこめなかったら食い下がった意味を失ってしまう
秀忠の顔は険しくなる
やはりそうだ
城の各所を分断して「殲滅」していくつもりだ

各所を攻め込まれたのでは
ただでさえ足りていない人手では
防戦，防備は。。。望めない
己の胸を叩いた
奮い立たせるために
どうあっても守りきらねば！！

それにしても歯がみした
栖吉衆（すよししゅう）。。。。
手慣れているは。。。感心してしまう

切々と感じる
この日を待っていたのは自分だけでなく

奴らもだ，手際が良いのもうなずける
自らで頂いた「主君」に武功を輝かせたいという意気込みは「あっぱれ」だ
が。。

笑えない

息を荒げ，
しなだれる伝令の襟首を掴み顔を寄せる

「持ちこたえろ!!どんな事があっても!!」

気迫を彼に伝播させる
長年培った「神通力」だ
彼の頬を張った「老将」の眼力に

伝令は気合いを持ち直しお辞儀した
「行け!!」
「ハッ!!」

容赦なく降り注ぐ火矢をかわし急ぐ
「負ける」わけにはいかん!!
そんな半端な決意で「戦」に望んだのではない

「秀忠様!!揚北衆(あがきたしゅう)は?」

秀忠の後ろを着いて回っていた
若武者の目は縋(すが)る気持ちを十分に表して質問した

まだ
具足が「不似合い」な彼は
さして「影トラ」と歳も変わらない
なのに
それほどに怯えるとはと
思いつつも
正面
燃える門を見た
パチパチと火の粉を雪に注ぐ

後何刻この城は耐えられるのか。。。。
いや
このままいけば
あの「影トラ」は城どころか前回達成しなかった「山ごと燃やす」
を実行してしまうだろう

数刻前
雪原で会見した時の顔を思い出した
「戦」を望んでいる
と
いう表情
風雪に晒された
「女」の美しく引かれた円弧の眉に大きな瞳
母「虎御前」の持っていた険しいだけの「風貌」ではなく
大らかな「優しさ」をもつ顔
戦軍の「美女，影トラ」

だが身に纏った「殺意」本物だった

笑っていたな
戦いを待っていると
あの態度

今一度崩れ始めた大手門を見た

覚えているぞ
笑っていながらも，敵を殲滅していったあの男を
それは「為景（ためかげ）」の戦い方だ
炎を纏い，不適な笑みで攻め立てる姿

不動明王が背負う「紅蓮の炎」を体現した男。。。。
その「血」はココにあった。。。
正当なる「主君」の血は受け継がれた

そうか

そうだ

もう理解できた
「為景」オマエが恐れていたのは「自分自身」だ
いつか己の血をつぐ

自分が産まれる事を心待ちにしていたオマエにとって「女」であった事が「禁忌」だったのか？
それとも他に悔やまれる理由があったのか？
今はわからないが
「トラ」を恐れたのは「本能」だろう

実に
実に恐ろしい獰猛な「トラ」だ
「勝つこと」は無理だ

いぶかしく
頭を振って若武者に声を掛けようとした
轟音が響く
門は両脇の城壁と戸板を巻き込みあっけなくつぶれてしまった
あっという間の出来事

「揚北衆はこない」

炎上する門を呆然と見る若者に言った
愕然とした表情で絞り出すように返答する
「では。。。私たちはどうしたら。。。」

彼の顔に絶望が見える

だが

今は秀忠は笑っていた
燃え落ちた大手門の向こう
城下の向こう
雪原の前に
馬と共に立つ「影トラ」が見える

美しい「殺意」だ
「阿修羅」のごとく

若者に向き直り
「逃げよ。。落ち延びよ」

へたり込んだ彼の肩を抱き告げた
「早く!!」
抱き起こす
「早く!!」

その言葉をかき消すように炎をくぐった大男たちが突進してきた

「柿崎和泉参上!!逆賊黒田秀忠はどちらに!!」
柿崎和泉
炎を物ともせぬ勢いで進んでくる
それに引き連れられた「猛者」たち

あの「戦」馬鹿が
己の「本能」で「影トラ」を君主と選んだか
正しいぞ柿崎
オマエの選択は

若武者をたたき起こし追い立てながら
近くにいた部下に言った

「槍もて！！」

秀忠は門の前で大暴れをする
柿崎を見据え怒鳴った

よかろう！！
我とて
この「越後」を
「戦」の大地を駆けた「男」ぞ！！
相手が柿崎なら最後のひと暴れに「不足」はない！！

「黒田秀忠ここにあり！！！」

その１４　忠臣　（７）（前書き）

戦国時代的な残酷な描写があります
ご注意ください

その14　忠臣　（7）

すでに黒滝城は半壊の様相に変わっていた
たった半日前は雪化粧をみせた美しかった姿は無惨なものに変わっていた

それでも
何故だろう
私は「美しい」と思った

各所から立ち上る火を飾り
焼け落ちていく姿は大きな「護摩（ごま）」だ

秀忠。。。。
それがオマエのしでかした不徳の許しを願う火だ。。。。
最後を美しく飾る死に場所に添えたる
祈祷の「火」

刀を抜き眼前に添えた

容赦は出来ない
ただ最後にオマエの口からこの「戦」の意味を聞きたい
それだけだ

二度の「謀反」の結末はわかっていただろうに。。。

私の手元には柿崎が届けた
「上杉定実（うえすぎさだざね）」公の手紙があった

「府内（春日山）を襲わんとす逆賊黒田一族を皆殺しに」

皆殺し。。。
頭が揺れる
今までこんな事はなかった燃えるように身体が熱い

この手でオマエの血脈を絶たねばならん。。。
沈痛な面持ちとは間逆の「微笑み」

手を挙げた
「迎え！！黒田秀忠を捕縛せよ！！！」
それだけを言うと
私は真っ先に走った

馬を駆り真っ直ぐに城に向かう

この手でオマエを処す

轟音が響く城内に闊歩する
すでいたるところで
「殺戮」は終いに向けて走っている

「にげろ！！」

にげろ。。。
にげろ。。。

城の中は死で溢れ出していた
白い雪だったところをみつけるのが難しだろう
「火」と「血」

手足を亡くした身体に当然
首はない
火矢を顔にうけ絶命した者に言葉はない

芳醇な「死」の香り

揺れる
心も体も
真っ黒な「意識」

まだまだ

口を開く
やらねばならない
死を遣わす者として私はココに来た

悲鳴まじりの脱出の声

にげろ。。

にがして！！

降伏する！！

助けて！！

まるで絵空事のようだ

くだらない戯れ言を吠えるな！

今更なさけない事を言うな。。。

逃げるぐらいならなんでこんな事に荷担した？

我先に逃げる事など許さん

「逃がすな！！追尾しろ！！」

燃えて

激する

不義に走ろうとする君主の心を止める事が出来なかったのは何故だ？

しでかしてしまった事は

全ての「黒滝」の責任だ

家臣一同全てが責務を果たさなかったからこうなった

その結果の「死」を認め受け入れよ

私は城内に入ってからも手際よく指示を出していった
黒滝はすでに
外砦と二の堀とを分断され
砦の側に待機していた兵はバラバラと逃げ出していた

二の堀はまだ変わらず抵抗を続けているが
すでに何刻も保つ事はないだろう
戸板にかかる火と焙烙の攻撃の手をゆるめず
ドンドン
追い立ててゆく「栖吉衆」
外塀まわりは生きた者の姿はもう見あたらなかった
ぶら下がるように
息をしなくなった死体
破片に変わってしまった身体
全身を焦がした肉くれ

地獄もきっとココより空に近いのかもしれない
上に上に続く死の道

尾根を見る
山にそった城郭はそのまま火連ねていく
「美しい。。。」

溜息がでる

自分がおかしくなっている事はわかっている
未だこれほどに「黒い意識」に身を任せ続けた事はなかった

が
火照る身体が心地よいのだ

いつもなら
キリキリと頭を割らんばかりの「闇」は今日はおとなしい
それより
腹の底深くを打ち続ける「鈍痛」が全身にくまなく
爪も
髪も
全て一つにつなげて「響く」

血の緋色に
身体がムズムズする

恍惚。。。。。
山より上をさらに見回すように顔をあげて。。。

「覚悟!!!」

突然の怒声とともに小槍を手にした足軽が
私の馬前に槍を振りかざす
まだ若い赤ら顔の男
馬廻りの間を縫って突進してくる

槍で足を突かれ片膝になりながら
飛び上がって私の兜を目指し
血まみれの刃を振り下ろす

私の目はうっとりしている

「ダメだな」

小声で誰にもらすでもなく言った
身体がゆらりと動く
相手の刃先が止まって見える

目の前を刃はかすめ
静かに落ちていく

それが「覚悟」か？

「心」は黒い

腹がうずく。。。ずきずきと脈打つように
苛立ちは顔にでなくても十分に相手に伝わるっている

足軽は怯えているようだ

勢い余ったのか，そこで力を使い果たしたのか振り下ろしてそのま
ま両膝をついた
雪なのか?汗なのか?
ぐしょぐしょに水を滴らせ蒸気した顔は私を見あげる

哀願している?

ダメだ

ダメだ

そんな目は私には通用しない

うなり声とともに
もう一度

槍を挙げようとしたが

背を
首を
胸を

多数の槍にいっせいに突かれ動きがとまる
痙攣し空を仰ぐ
赤く染まった目玉

吹き出す血の散華

「まったくダメだ」

この程度で覚悟とは

血反吐を溢れさせ絶命していく男に笑ってやった
せめて最後は笑ってやらんとな。。。。
雪を真っ赤に染め沈んでいく

ああっ
最後は熱くなっただろう
ゆっくり冷めてくれ。。。

私は身震いした
身体は焼けんばかりに。。。。ただ熱い
ふぅと
息をつきながら

「秀忠はどうした?」

私は長秀に聞いた

「先ほどまで柿崎和泉守(かきざきいずみのかみ)と打ち合っていたようですが後退して二の堀に。。。」

そこか
二の堀に目を向ける

「黒い意識」がとぐろを巻いて跋扈する
熱い
熱い

痛い。。。。。
血をみるとうずく。。。。
最後は処してやらねば！！
私の手で「黒田秀忠」を屠らねば

二の堀の城門まえは最後の抵抗を試みる「黒滝軍」が殺到していた
門以外の外曲輪は「栖吉衆」の攻撃にあい
すでに逃げ場を失っている
最後の足掻きか。。。

柿崎率いる「猛者」たちも押して来て「乱戦」になり始めているが
ひときわ目立つのは

終始押されてはいるものの
正面をきって柿崎と槍合戦をしている「黒田秀忠（くろだひでただ）」だ

「まだまだぁぁ！！」

すでに
兜はなく
何度もの殴打や槍による打撃のせいか具足の部品が飛び散っている

それでも
身体のキレは鈍らず
どの将兵に劣ることのない動きは
目をみはるものがある

秀忠は目線を城下の方にちらりと向けた
騒がしい

そうか
下は落ちたか。。。。。もうもうと立ち上る煙
数多くの城下の家屋が燃えているのが見える
目を遠くに走らせれば
幾人かの「兵」と「町人むが逃げていく姿が見えた

「逃げられたか。。。」

それでいい
落ち延びよ。。。。生きてくれ

自分たちがココで「影トラ」を引きつけている間に少しでも逃げられればいい
もう
あらかたの「己」に課された「仕事」は終わった

後一踏ん張りだ

二の門は閉じられたとしても
逃げる場所はない
搦手はすでに「栖吉衆」によって破られ名だたる将は「金津」に討ち取られた

黒滝の大半は「殲滅」された。。。。
男も女も城人も町人も区別なく
ことごとく殺され，犯され，奪われていった

城を統べる任の者が起こした「謀反」の代償は大きい
女子供までを滅びに導いてしまった
しかし
それでも。。。

と

いきなり身体が浮いた
秀忠は

とっさに槍を体に入れたがそのまま土塀に投げ飛ばされた
しばし
目を離したのが悪かった
目の前の男が柿崎だとわかっていたのに
「終わりか！！」
怒する声に
打ち付けられた衝撃で折れたあばらを抑えながら立ち上がる
口から
血が噴き出す
目が回る。。。。
すぐに立ち上がる事もできなくなった自分の身体に「喝」を入れる
気力はなかったが
血反吐の唇をぺろりと舐めて
笑った
「ああっ。。。。。もう終わりだ。。。。。」
そこまで言って
前のめりに倒れた

その後
一刻もしないうちに「黒滝城」は落城した
秀忠が再び目を開けたとき一族，同門で生き残っている者は一人もいなかった
妻も子も落ちる城と共に「自害」した
雪の大地はなくなり
血がただひたすら流れ城の景色を変えていた

そして
目の前には整然とした姿の影が座っていた
それは
朝

雪原で会見した時と変わらぬ「大らか」にして「獰猛」なトラの姿だった

その１４　忠臣　（７）（後書き）

愛刀「備前兼光」

後書きからこんにちわ～～～ヒボシです

以前
後書きで「具足」それも「当代具足」が欲しいと書きましたが
それは相方さんの「不許可」（部屋かたせ命令）によって
いまのところ実現していません

というか
「当代具足」は現在でも日本の一級品の工芸です
ヒボシもね
好きだから色々調べたのですが。。。。。

絶対に買えません（爆）
でも
それだけの価値があるから欲しいのですが。。。
ヒボシの汚い部屋には。。。買っても鎮座されるスペースがないので大変「具足」に失礼です

で。。。

資料として
影トラ様の愛刀「備前兼光」の模造刀をこのたび購入
できるだげ「本物」に近い「重量」の物を捜し買いました

身長の事もありましたが
当時の女性としたら（注．カイビョウヲトラにおいての影トラ様は「女」です）
かなり長身だった方が手に持った刀

ちなみにヒボシの相方さんは「影トラ様」と身長が同じぐらいです
今度持たせてみようとおもいますが

。。。。。

ぶっちゃけ刀。。。重いです
戦国時代の刀は江戸時代の物にくらべると重いそうです（若干）
でもって実践ではあまり使われなかったそうですが。。。

かなりの刀マニアだった影トラ様
「重い」なんて事は考えた事なかったんでしょうか？（藁）

でわまた後書きでお会いしましょう～～～

その１４　忠臣　（８）（前書き）

戦国時代的残酷な描写が含まれます
苦手な方はご注意ください

その14　忠臣　（8）

日暮れを連れてくるために
忙しなく流れる雲

風は
地獄の業火たる香りを穏やかに運ぶ
誰の目からみても凄惨な落城
未だ城内のいたるところで燻るように火がはじけ
屋敷という屋敷のすべての者が殺され続けている

死と
死臭
この城の全てを覆う「死」

黒田秀忠はあばらに残る痛みと
はっきりと開けきらない目でぼんやりとその風景を見回してみた
目の前にあるひな壇に

あの
年若かった武士の首が置かれている
秀忠は感慨深げにその顔を見た
目は見開かれたまま
口も半分以上開き
命乞いの叫びをあげたのか？

となりの段には
息子の首。。。。
一族の者たちの首が小山のように積み上げられている
見知った者は自分より先に「死」に旅立った

驚くという事はなかった

これが「落城」というものだ
かつて自分もこうして城を落としてきた
その「出番」が回ってきただけだ

だか
「悲しみ」がないわけでもない
縛り上げられた身体では手を合わせる事もできない
痛みの走る身体を
持ち上げた

「すまなかった。。。。」

そう言うと首だけを降ろし「祈った」
このたびの「戦」の意味を問うならば
せざる得なかった事としか「彼ら」に言い訳をしなければならない

辛いこの決断を

目の前に座る「影トラ」にひときはゆっくりと話しかけた
「終わりましたか。。。」
この世が。。。
この日が

生きてきた最後の日になる事にかわりはなかった
名残があったわけではなかったが
あわてる事なくゆうゆうの時をかみしめ
己の最後の勤めをしっかりと果たしたかった

。。。。「終わった」

返答の声は静かで
「戦」の激しさが遠ざかった事をよく示していた
影トラの顔は穏やかだった
その美しい髪を風に揺らし
夕日を浴びる横顔は「悲しそう」にも見えた

「では。。。お斬りください。。。」

首を前に出し「どうぞ」と
「まだ。。私の問いこたえていない。。。」
柔らかい声は
まだ何かに燻り続けている
だが
静かだ
静かな態度でつぶやくように
秀忠の顔に向き直って言った
「何故だ。。。」
揺れる瞳
左頬に「返り血」を浴びた顔は真摯に問うた
開戦前
雪原でした問答だった
。。。。。ありがたい。。。。。
秀忠は顔をあげた
それが最後の勤めだった

何故こんな「戦」をしてしまったか

「何故」だ

激し
城を攻め
自分を捕縛したこの「トラ」がそのまま「ひと思い」に自分を斬らずにいたのは
目の前にある惨劇を見せ「辛苦」に至らしめるためでなく

「何故（なにゆえ）」の回答を待っていた事に「感謝」した
辞世の句に匹敵する

秀忠は周りを目で確かめた
影トラの他にこの陣幕には

本庄実乃（ほんじょうじつの）
柿崎景家（かきざきかげいえ）
金津新兵衛（かなつしんべえ）

馬廻りの男達
「鬼」の小嶋弥太郎（やたろー）

揃っている。。。
誠にありがたい

目を影トラにもどし問いに答えた

「力無き者，弱い者には従えない。。。という事です」

「弱い者。。。」

秀忠は微笑んだ

この

年若い「影トラ」は自分の最後の勤めに耳を貸すだろうと確信できた

「力無き守護代。。長尾晴景（ながおはるかげ）さまに私は従えない」

「老将」の心はすでに決まっていた

為景（ためかげ）との約束を破った

晴景を守り「トラ」を討つ。。。。

それが

今は亡き親方との約束だった

だが

その意味はもう失われていた

この二度の「乱」守護代は自ら兵を率いて「討伐」に来ることはもとより

その「真意」を問いただしに来る事もなかった

それどころか

「手紙」一つで「欺かれ」自分を許すと言った

もともと晴景を攻めるつもりはなかったとはいえ
あまりに「お粗末」なお沙汰だった
あげく「討伐」の旨伝えたのが「零落」した上杉守護ときている。。。

晴景はついに「戦わなかった」
この「混迷」続く越後において。。。。。あまりに「弱腰」な結論

「兄には従わないと。。。。」

この問答は「至福」だ
影トラの苛立ちを感じる，しかしもう黙ることはしない
周りの諸将の出方をうかがいながら話をする事はない

「聞け若き「影トラ」！晴景のように何もせず，話，諭す事だけの「守護代」に越後を「救う」事はできない！！今はまだ「力」が必要な時！！」

とても
縛られ最後の戒めを受けている側とは思えない声
どこで「無礼討ち」されても不思議ではない「弁」

「時には笑って人を殺し，泣いて従わせるほどの「器量」を持ち合わせた強き「守護代」が「越後」には必要なのです」

血が口から溢れる

「上から下々までを従えるべきその「力」を，お示し下さい！！」

流れ出た血が多く
目眩が襲う
自らを立たせておくことができない
身体は震え膝が笑う。。。
それでも

心が力を与え自分を支える

「あなたなら。。。影トラ様。。。あなたならそれが出来る」

答え。。。。
それは至極簡単だった
強い男だった為景を支え仮にでも「越後」を平定した秀忠たちが示した方法と同じ力が
未だ「必要」だったという事

そして
それを具現できる者が晴景ではなく

なんの「皮肉」か

この美しき「女」影トラだと言うこと
力でぶつかりあった事でいやおうなく知った
ひとしきり叫んだところで膝が落ちた
「己」の役目を果たせたと

その秀忠の前で影トラは立ち上がり「刀」を抜いた
ゆっくりと前に進んだ
「どうか。。。国民（くにたみ）を導いて頂きたい。。。」
頭を落とし
首を差し出した「老将」は最後の祈りのようにつぶやいた

「申し開きあるか？」

秀忠は顔をあげた
右手に抜き身をもった
トラは微笑んでいた

微笑んでいながら「涙」を溜めた目
見たことのない
まるで

バラバラの感情

為景は良く笑い
人を屠った

影トラは「怒りながら」「微笑みながら」「泣きながら」
戦う
全ての感情を兼ね備えて「戦う」

この不条理な「戦」の世界において
なんと「美しい」事か
それらを「一緒くた」に出来る者こそまさに「統べる者」だ
心はいつになく穏やかになれた
自分が「激」したこの「影トラ」は正しかったと
それを「確信」して死に赴ける事が
悔いなく逝ける事が「嬉しかった」

約束は果たせなかったが。。。
いやいや
果たせた

「越後」を大いなる「力」で守る者をこの目で
そして
この手で「力」を感じる事ができた
これが約束された「血」
戦乱の「越後」を平定する「正しき」血だった

為景のお叱りは「あの世」で受けよう
己の言い分もぞんぶんに振りかざし
また
拳を交えて

背を正した
堂々と
今一度「影トラ」の顔を見た
あふれ出る「涙」を拭わないその顔を

「怒り」と「悲しみ」そして死に行く者に「微笑み」。。。。。これはまるで。。。。そうか

そう言う事か。。。。。
息をついた
もはや「考えまい」と

最後を惜しむように少しの「雪」がヒラヒラと舞いおりる

「ありません」

影トラの
振りかぶった刀を見てあの時と同じように慄然と答えた

痺れる程の武者鏡
作法良く

深く伏し
首を下げた

目を閉じて
秀忠は誰に聞かせるというでもなくつぶやいた

「黒田秀忠。。。願わくば「御仏に選ばれし」影トラ様にお仕えしたかった。。」

私は床机（しょうぎ）にすわり
首台に置かれた「秀忠」と対面していた

陽は落ち
黒滝城はただ静かに燃え続けていた
いまだ身体は熱く，深く「鈍痛」が続いていた

「力」を示せ。。。。。

あの声

秀忠の最後の言葉にあった
あの声は「闇」に響く声にも。。。似ていた

酒をつぎ
首台の前に杯をおいた
「飲んでくれ」

怒りという感情は消えなかったが
問答の「真意」を理解した
ただ
わかっても「承諾」はしがたかった

少なく舞う雪の下
とめどなく「涙」が止まらなかった

その１４　忠臣　（８）（後書き）

「黒滝城落城」

後書きからこんにちわ～～ヒボシです

ここ何日かストレスが多かったのか髪の毛が。。。バッサバッサ抜けで。。。ハゲてしまうのではと心配な日を送っていました
そんな日々の中でしたが
やっと黒滝城編が終わりホッとしています

後半に進むにしたがって「残酷」が多くなってかな～～りきつかったです

ココから
さらに
「戦」は続いて行くと思うと泣きそうです（涙）

ところで
新たに登場した人も多いのでこのあたりで一言メモみたいに書いておきます！！

長尾影トラ（主人公「トラ」）普段は天然入ってたりします「戦」強いけどよく泣きます
いちおう「女」なのに「萌え」要素は全然ありません（涙）

長尾晴景（影トラ兄，現守護代）病気してます，衆道もします
長尾為景（影トラ父，故人）伝説の種馬
虎御前（影トラ母）めっちゃ怖いです，実は自分の刀持ってます具足も持ってます

本庄実乃（４熊）柿崎に殴られました
小嶋弥太郎（やたろー４熊）柿崎に殴られました，やり返しました，つやが大事です
柿崎景家（４熊）戦バカ　挨拶は「鉄拳」です
直江実綱（４熊）熊の権利を拒否してます

加当陣（ジン）江忘れられてばっかです（号泣）
芝段蔵（ダンゾー）その言動で嫌われりもしてます

おせん（直江娘）実は着物大好き布へのこだわりはすごいです
多英（実乃娘）顔は実乃に似てません
つや（やたろー娘（藁））すでにやたろーを尻に敷いてます

水丸（晴景小姓）あっちのテクニックはなかなかです

天室光育（影トラ師匠）苦労がたえません

金津新兵衛（栖吉衆長）かなりの色黒です虎姫（虎御前）に絶対服従です

上杉定実（実）平安調美人です，ただしすでに高齢です

黒田秀忠（戦死）影トラに討ち取られました，為景の悪友

揚北衆のみなさん
まだ本編にはでてきてないですが「黒滝」の事でそうとうびびりました

これからまだ
色々くせ者もふえるでしょうがよろしくお願いします！！！がんばります！！！

それではまた後書きでお会いしましょう～～～

その１５　穢血　（１）（前書き）

「性的描写」に付属するものがあります
苦手な方ご注意ください

その15　穢血　（1）

「力を示せ。。。。」

陽はあけ
めぐり
黒滝城の周辺は落ち着きを見せ始めていた
夜ごとの野党らしいかげや「物取り」が
焼け落ちた家屋をあさり「乱取り」まがいな事をしていたが
寒さのせいもあって
警戒にあたいするような騒ぎはおこらなかった

「強き守護代。。。。」

帰路につく馬の上で私はぼんやりとその言葉を繰り返していた
身体は熱を持っていて
手足が「弛緩」してしまったようだ

「落城」の日から3日。。。眠れなかった
怖い
とか
寂しいとかそういうものでなくただ「熱い」

おかしい
いままで「戦」の後にこんなふうになった事はなかった
どちらかといえば

終われればすぐに
泥のように眠ってしまったり
馬にへばりつくほど疲れ切ってしまって
それを周りにみせまいと顔をしかめている事が多かったのだが。。。

「殺戮」

あの喧噪は耳にずっと残っているからか?
それが夜に微かに聞こえる気がして眠れなかったのか?
悲鳴
哀願

悲しく恐ろしい「最後の声」たち

首を横に何度か振った
自分の手で下した事だ
城下に住んでいた
町人にさえ手を掛けた。。。
家々の火をかけ炙り出し混乱のうちに焼き殺し，斬り殺し，なぶり殺しにした

「撫で殺し」

それは
二度と「長尾守護代家」に逆らう者がでないための「戦の習い」ともいえる

あんな思いは「城」を持つ武将なら
誰もしたくはないだろう

それを示せと
「上杉定実」公は手紙を送ってきた
それ「強き守護代」の「力を示せ」という事なのだろうか？

結局
兄の言葉通りになってしまった

「ココにくるまでに秀忠の首が無くなるわ。。」
無くなりはしない
首は残り。。。城は「滅びた」
「首桶」
に入れられた秀忠「首級（みしるし）」は春日山に届けるためすでに馬を走らせてある
あの
首を見て
兄はなんと答えるだろう。。。またお叱りを受けるか？

「恐怖」を残す仕事をした私にかかる「怨念」はどんなものなのだろう。。
考えるのも「恐ろしい」事だろう
それでもいつものように「しなだれて」しまう事はなく
「熱い」身体のおかげでか
戦場の高ぶりのおかげでか
ぼんやりしながらも目を開けていられた

曇り空を見回した

黒滝につくまで執拗に足止めつづけ
ふり続けた「雪」は今はどこにも降っていない
どうして降って欲しい時にはだんまりなんだろう。。。
まるで責められているような気持ちになった

あらかたの「骸」は供養した
荼毘に伏す。。。
そんな良い物ではなかったがとにかく
死した身体をひたすら炎にくべさせた

山中に残ってしまった「者達」は仕方ない

だからこそ
せめて「雪」が降って欲しかった

降って欲しい

あの
夥しい血の「城」を覆い隠して欲しい
倒され

屠られた者たちのうち捨てられた「身体」を包み隠して欲しい

帰路に入ってから
一度も振り返る事はなかった
早く栃尾に帰りたい
こんな「恐ろしい」場所にいたくない
変な感じに気持ちが焦っていた
それが
あの「秀忠」の言葉を思い出させ
悪い考えを堂々巡りさせている

「力を示せ。。。。強き守護代。。。「あなたなら。。あなたならできる。。。」」
わかりたくない。。。
わかりたくなんか

早く帰ろう
眠りたい。。。
眠ってしまおう。。。
何もかもを放り出して

良くない思いを巡らす
「闇」を消してしまいたい

ズキン。。。。

ズキン。。。。。

何？

今まで私の思慮を「黒い意識」に導いていた痛みとは違う
出陣の時
黒滝城を攻めた前日から続いた「痛み」が急に拡大した

「おのれ。。。」

頭に声が響く
何？
何？
景色が揺れ
目の前に靄がおりる

私は横の実乃を見た

「どうされましたか？」

実乃も私の顔に異変が出ている事に気がついた
息が。。
荒くなる
喉が渇く

「酒。。。」
実乃から顔を背けながら猪口をクイとやる仕草を見せた
目がシパシパする

「祝勝は帰ってからですよ」

肩をすくめ呆れたように
平常に答える実乃
「戦」の後に私が具合を悪くするのは少なくない事だったから慣れた返事をした
後ろから槍を担いだ柿崎が大声で
「良いではないか!!大仕事が終わったのだから!!」
と

響く
その大声が身体全体に響く

歩く道を歪ませるような激痛
痛い
痛い。。。。酒でも飲まないと腹が千切れてしまいそうだ
私に何かがおこっている?

「あっ。。。。。。」

身体の芯に，背中から腹の下に向けて「ズクン」と落ちるような痛み
馬の首にしがみつくように伏した

実乃が肩を揺する
「どうしました？」
馬の上で眠ってしまう事は今までも何度かあった
ましてや今回は夜間行軍の徹底殲滅戦
疲労は極度の状態にあったが
対照的に身体はずっと「熱く」起きていた

これが「戦」に赴く者の「心持ち」と。。。。。

違う

下腹部が熱い
何かが身体から抜ける

「ハァ。。。」
これは？

私は恐る恐る具足の裾板をあげ馬の鞍を見た

「血」。。。。。。。

戦慄する
何？
何で

私が？血を流してる？
手で確かめる

下腹部から血が出ている

「くちおしやぁぁ。。。」

また声が響く
頭の中で「呪い」の言葉を響かせる

急に景色が回り薄暗い渦の中に放り込まれる
実乃が横で何か話かけている
何も聞こえない
口だけが動いている白黒で緩やかな時を刻む闇の中に私はいる

私は声にならない言葉を連呼した
「血。。。血。。。。」
動いて？
身体が重い

いつ

いったい。。。いつ「怪我」をした
違うのか
身体から出ている

自然出ている

熱い何かが一緒に出てしまっている

ボンと身体を押された。。。
ふらつく
強い風のように何度も何度も身体を突く

「おのれぇ」
「おのれぇ」
「くちおしいぃぃ」

聞くも恐ろしい声は
不思議だ

どこかできいた事のある声にも聞こえる

自分で
腹をなんどか叩いた
あきらかにおかしくなってしまっている
目がまわる
息があがる

これは

「御仏」に背いた罰
眠らぬ心で起き続けた今日は「禅」を組まなかった
「殺生与奪」を自分の欲しいままにしてしまった罰がココにくだった

回る景色をとめるために頭を抑えた

「許さんぞぉ」

闇の声が「悲鳴」あげて上り詰める
そのまま頭の中で弾けて消えた

雪は降らぬともまだ風の冷たい空の下
汗ぐっしょりの私

実乃がびっくりした様子で顔をのぞく
柿崎も不思議そうにしている

「どうしました?」

実乃の声がやっと聞こえた
渦を巻いていた「闇」は消え行軍しているままの風景にもどっている

足をつたう「血」
「現世（うつしよ）」の雪に赤い花が咲く

「あああ。。。あああ。。。」

涙が
顔を押さえ嗚咽する

「どうしたのですか？」
手を引かれた
見返す手は「骨」だった
消えたはずの
闇の渦からとびでた「骸骨」が笑う
笑う
歯をかたかたと揺らし私の手を引いて問うた

「どうした。。。影トラ。。。」
手が見える

「あああああああああああ！！！！」

叫んだ

と
同時に馬を走らせた
ムチを打ち速度をあげた

私は「死ぬ」

私は「死ぬ」
死んでしまう。。。。。

その15　穢血　（2）（前書き）

「性的描写」に付属するものがあります
苦手な方ご注意ください

その15　穢血　（2）

どこを
どうやって走ってきたのかわからない

とにかく
栃尾の城の門を
まだ雪が各所に残り
掃き出しをしている城人の間をぬって全速力で馬を駆り
馬を投げ出すと
そのまま自分の屋敷に草鞋のままあがった

具足を投げ捨てながら
仏間をめざした
下は見ないように

仏間の襖を開けて
荒れていた呼吸を整えた
静かに
静かに

と
自分に何度も言い聞かせた
嘘でも武人

見苦しい最後など。。。。あってはいけない

数珠を見直し
仏壇に向かって手を合わせる

「祈ろう」。。。。。

「うっ。。。。ううぅ。。」
なさけない。。。。
膝を降ろすこともできない
冷静さを保とうと静かに行動をしようとしているのに
身体が言うことをきかない

下腹部の鈍痛はまだ続いている
一心に身体を起こす
手を合わせて。。。。
祈るんだ。。。。

ハアハアハアハアハアハア。。。。
息ばかりが荒く上がってしまう
めちゃめちゃに震えてうまく手を合わせられない

怖い

やはり
仏神からの「罰」は私に下ってしまった

どれほど
祈ってももはや救われる事などない
あれほどの「人」を事もなく「殺して」しまえる「心」をもっている私の正体は「鬼」だ

きっとそうだ
いつも
私にささやくあれは「鬼」で
私はそれを心に住まわせていて。。。。

今なら
母上が私を林泉寺に入れた理由がわかる
私は殺生を楽しむ「鬼神」だ
この身にそれを巣くわせた「鬼」だ

「あああっ。。。。」

震える
膝がガタガタとまともに座って祈る事などできない

座ってしまったら
腹に何が怒ってしまうのか考えただけでも怖い
私の下腹部からは「血」が。。。

まだ
流れてる？

どうなってる？

もう一度伏せて「傷」と思われる部分を見ようと思ったが
やめた

見てどうなる
あの「穴」から「鬼」が顔を出していたらどおする？

「怖い。。。」

涙が溢れる
身体を保っていられない
中腰のまま浮いていた私は
板間に頭ごと落っこちた

得体の知れない恐怖
今まで

今まで
風邪だってひかなかった
丈夫だけが取り柄の私の身体はとうの昔に「中身」を鬼に蝕まれていた

それは
「戦」のたびに私を狂わし
私の腸(はらわた)を切り刻んでいたんだ。。。。。

それが
ついに「溢れ出した」
きっと

腹は裂け
血の海に沈む

「影トラ様!!」

開け放たれた襖の向こう
身を伏せた侍女がいる

ダメだ!!!

「入るな!!!」
わめいた
ダメだ
ダメだ
こんな見苦しい最後を人に見せるなどできない
打ちつけた頭を起こし怒鳴り散らす

私はまがりなりにも
「長尾守護代家」の将
己の弱さを「鬼」蝕まれ憤死など笑い話にもならん

「どうなさいましたか?」

「入るな!!!」

気遣っているのは襖の影にいることで十分にわかっている
「しかし。。。矢傷でも負われましたか?。。。」

侍女はかなり驚いた様子でおどおどしながら私の様子をうかがう
おちつこう
そうだまだ直江の妻も「おせん」も帰ってきていないのだな。。。

こんな事普段だったら
「おせん」が飛び出してきいて今頃
この腹から飛びださんばかりの「鬼」を見られ大変な事になっていたかもしれない

いなかったのは「幸い」だ

「矢傷ではない。。。」
身体を起こした
鈍痛は続いてはいるが手足をうごかせなくなってしまったわけではない
家人当たり散らすような「最後」はもっともいけない事だ

侍女が話しかけてくれたおかげで
私は少し冷静さを取り戻した

「具足を片付けさせます。。」

私は静かに襖に近寄って
顔を見せた
伏して返事をまつ侍女に「努めて」落ち着いた声で話した

「水を桶にくんできておくれ。。。」
面をあげた侍女が私の顔を見ている
文字通り顔色を見ているのを理解しながら「平然」と続けた

「顔を洗い，御仏に祈りたい」

常日頃しているように「祈る」
という言葉に侍女は少なからず安堵した様子で

「すぐに用意させます」
と
答えて部屋を出て行った

襖の向こうで脱ぎ散らかした「具足」を小姓たちが片付けしているのが聞こえる
痛みは続いているが
侍女が来てくれたおかげで冷静になれた
涙がまたも流れてしまった

「罰」を受け入れよう。。。。
腰に着けた刀を仏壇の前に大小並べて置いた

「死」はやはり恐ろしい

斬り殺されるわけでなくても「恐ろしい」
でも
私のしてきたことはそれさえ考えられぬまま「死」を迎えた者だっている世界だった
卑屈に少し笑った

自分にそれが巡ってこないなど
おこがましい事だ

目の前で
目の玉を真っ赤に染めて倒れていったあの「少年」

あの目は私を見ていたな。。。。
同じぐらい多くの目が私に「鬼」を見て死んでいったに違いない。。
。
せざる得なかったとはいえ
まさに「羅刹」の所業だ

私は手を合わせた
ふるえは止まっていた

霞むように思い出されるのは「林泉寺」の事だった

楽しかった。。。
あの頃が私にとって一番の思い出だ
修練の日々が次々と思い出される
師よ。。。。

私は間違ってしまいました
元服の時
あなたは「悲しい」顔をしてらっしゃった。。。
きっと
こんな結末を迎えてしまう事を知っていたんでしょう

深く頭を下げた

「人の道」を踏み外しました。。。

その結果は心に巣くった己の「鬼」に取り殺される
という惨めなものでした

ジン。。。。
今はどうしてる
私はもうダメだ

私はココで死ぬ
神罰などではなく「鬼」に侵されて
武士(もののふ)の道は人を屠る「悪鬼羅刹(あっきらせつ)」の道だ
ジン
オマエにはそんな風になってほしくないよ

だから
ココで「腹を斬る」
鬼の呪いではなく己の「意志」で
私の死を知って「御仏」の道に戻っていっておくれ

手をつよく合わせ
「お家」の安泰
没した者の祈願

残す者達の事を次々に祈った

「水の支度が出来ました」

襖の向こうで侍女の声がした
すでに思い残す事の無くなった私は穏やかな声で返答した
「ありがとう。。。下がってくれ」

部屋を出て行く音を確認して
桶を受け取った

水面に映る顔。。。。。薄汚れて少し痩せてしまっている自分
引きつった顔を手でほぐした

穏やかな「死」でありたい

顔を洗い
乱れた髪を結い上げた

静かだ。。。。。

私は直垂（ひれたれ）の上を開いた
胸のふくらみでよく見えなかったと斬る腹の位置を誤っては恥
一度腹を指でなぞり確認した

もうイイ
思い残す事はない
手前においた
脇差しを抜き静かに腹にあてた

その15　穢血　（2）（後書き）

物書き。。。。。

後書きからコンニチワ～～ヒボシです

最近公私ともに多忙で更新が滞ったりしてますが
といってもだいたい3日に一度ぐらいで更新してたり
中身の改訂をせっせっとしていたりなので

一日2度ぐらいはちゃんとページはみてます！！

最近になって評価の書き込みチョコチョコしていただいたりで嬉しいです！！

もともと
私は物書きというのを一度もやった事がなく
どちらかというと
漫画の原作「原稿」を作ったりしている方がおおかったのでかすが
（もちろん素人ですよ！）
素人のやる事など
やはりすぐに行き詰まってしまうものです

それで
こうやって「万人」の目に見ていたける場所をおかりしては始めたのですが

色々な思案はほっておいても
なかなかに楽しいです

とくに歴史のジャンルを選んだ理由は
歴史がスキという単純なものだったのですが
ホントココの作家さんたちの書く者にも色々と勉強させられます！！
いいところだなぁ～～～って思ってます

そんなこんなで
更新のびちゃったりする事もありますががんばっていきますので
これからもよろしくおねがいします！！！

それではまた後書きでお会いしましょ～～～

その１５　穢血　（３）（前書き）

生理的描写が含まれます
苦手な方はご注意ください

その15　穢血　（3）

「なりません」

腹を召すために振りかぶった私の手を一人の侍女が止めた

いつ
いつこの部屋に入ったのか？
そんな気配さえ感じられないほど「没頭」していた自分にも驚いた

ハッとした私の横から
脇差しを止めた侍女は見たことのない女だった
ふくよかで他の侍女より少し大柄な身体
歳は母上と同じぐらいか？
吊り上がった目，女にしては気の強そうな顔を作っている

その目が真顔で私を見て
続けた

「腹を斬ってはいけません！」

腹を。。。
の言葉で突然の侵入者に呆然としていた自分が我に返った
こんな中途半端なカッコで死ねない

「はなせ！！」

脇差しに力を入れ
一気に腹に立てようとした刃をなんと侍女その手で掴んだ
「なりません！！」

刃筋につたう「血」
死に際に使う脇差しを先に侍女の血で汚されてしまった
という驚きもあったが
諸手で臆することなく刃渡りを掴んだ
力の強さにもおどろいた

横にいた侍女は私の前に座り
そのまま

「手をお離しください」
と
ゆっくりとした口調だが
がんとした態度で言った

しかしなんと強い力
刃を突き立てた私の手を止めてしまうなんて
でもその「力持ち」を具現したかのような体格
私とあまり変わらない身の丈の「女」は初めて見た

「武士情けだ。。。たのむ」

焦った私は

その顔に哀願するように言ったが侍女は首を横に振った

「そんな事をする必要がありません！！」

「たのむ！！このままでは」

「このままでは？」

私のとっさの質疑に問いつめるように身体ごと近づき両手で脇差しを押さえながら

聞き返した

ダメだ！！！

こんなところで「いらぬ同情」で生き延びるなど

あってはならない

罰(ばち)はくだった

罰はくだって

私は「死」ななければならない！！絶対に！！！

押しとどめようとした手を無我夢中で離そうと

刃を自分に引き戻そうと暴れた

最後を侍女に止められ

おめおめと生き延びてしまうなど「恥」だ

そんな最後なら

まだ「黒田秀忠」の最後の方が「美しい」

怒鳴り散らした

「鬼がこの腹を引き裂く前に「己」でケリをつける!!邪魔をするな!!」

距離をとろうと
中腰に立ち上がった私から
なおも脇差しを強い力で抑えながら侍女は言った

「鬼など何処におりますか?!」

そんなもの。。。
そんな者を「股ぐら」から見せられるか!!
やけになって彼女の肩を殴った

「はなせ!!!オマエまで呪われてしまうぞ!!」

片手に脇差しを握りしめたまま
何度も侍女の身体を叩いたがびくともしない
勢い余って
顔を殴打してしまったがその目は毅然とした態度でひるまない

「何を恐れておいでですか?」
かえって
大きな声で諭された

口から一筋の血を流しながらも跪いたまま私の顔を睨みもう一度大きな声で言った

「何を恐れているのですか?おトラさま?」

声に揺れた
軽い目眩がした
私はそのまま板間に転げるように座り込んだ

息が上がって
へたり込んだ私に彼女は先ほどの「激」とはうって変わった
小さな声で言った

「手をお離しください。。。痛うございます。。」

その手はまだ諸手の素の状態で脇差しの刃を
私に当たらぬように両手で覆っていたが
当然刃渡りを握ってしまっているから手の各所が切れ「血」が出ていた
私の手を
見ながら
そして
顔を見ながら辛そうに顔をしかめている

「オマエが離せ。。。。」

私は武士ともあろう身なのに
はんべその状態で駄々をこねた

が

「お願いです。。手をお離しください。。」

ハァ。。。

ハァ。。

彼女の手が私の指を一本ずつ脇差しから剥がしていく
もはや抵抗するだけの気力も
力ものこってなく
後ろに転がってしまいそうになりながら
よろけながら

情けないやら
苦しいやら
とまっていた涙が溢れて
泣いてしまった

「鬼が。。。。。」
頭を下げた
どうにもならない気持ちと「まだ」生きているという「安堵感」と
急速に抜けていく「力」にフラフラになったままこぼした

「腹を食い破られる。。。股から血が出ているんだ。。。」

そこまで言ってまたも
気が狂いそうになってしまって
大声をだした

「殺生の報いだ!!!鬼が私を殺しに来た!!もうダメなんだ!!

！」

頭を何度も振った
「殺してくれ。。。。殺してくれ。。。」

末代に恥を残すぐらいなら
今なら
打ち首でもかまわない

板間に転がって
子供のようにじたばたと手足を動かし頼んだ
が

あくまで冷静に
受け取った脇差しを桶の水で洗い納めた侍女は私に近寄って
肩を抱いて身体を起こした
そして努めてゆっくりと

「それは「鬼」でも「呪い」でもありません。。。。恐れるような
ものではないのです」

手ぬぐいを巻いて止血した手で私の頬をなで
「女の身体はそういう事があるのです」
「女？」
腕を優しくまわし身体を支えながら

涙でいっぱいになった私の顔を拭い
彼女はやさしく
やさしく諭すように続けた

「一人前の「女」は月に一度「血」を流すのです。。。女陰(ほと)から」
わけがわからない
でも
呪いじゃなく
鬼でもない

なのに
血を流す？

「血が。。。。。」
「怖くありません。。」
首を振った
「「大人」の女になったのです。。。。おトラ様」

「大人？。。。。私は元服している。。。。」
支えられなければ自分を立たせておけないほど朦朧とした状態で聞き直した
侍女は笑った

「はい。。。。身体もやっと「元服」されました」

そこまで聞いて意識は途切れ目を閉じた

私はまだ
自分の「女」というものを一つもわかっていなかった

その１５　穢血　（３）（後書き）

Ｇａｃｋｔ君。。。。

後書きからコンニチワ～～～ヒボシです

この作品を書き始めた頃から
メッセージしかり
知人しかり

とにかく色んな方面の方から
「今年のＮＨＫ意識したでしょ」と言われます
意識はしてなかったのですが
「風林火山」のおかげで
Ｇａｃｋｔ君扮する「上杉謙信」の名はいろんな人が多く知ることになって
そういうものに「あやかった」でしょ
とよく言われるのです

実はヒボシの家にはテレビがないので。。。。
その
美しい「謙信」様を見ることができないのですが（残念！！）

あやかってはいません（爆）

Ｇａｃｋｔ君の謙信は美しいだろうね～～
でも

できるだけ
ＨＮＫの物として史実に反ったストイックな部分を真摯に演じて欲しい（余計なお世話ですね。。）

そこから
考えるとうちの「トラ」はあんなに美しくないですね
キット（藁）
だって自分の「女」を理解してないような人ですからねぇ（藁）
ところで
「トラ」のモデルは誰ですか。。。
と言う質問もあったりですが。。。。Ｇａｃｋｔ君じゃない事は確かです（爆笑）

とにかく
ひさしく盛り上がっている「大河ドラマ」も見てみたいヒボシでした！！！

それではまた後書きでお会いしましょ～～

その15　穢血　（4）

何もかもが
「動転」してしまっている

栃尾まで後少しという場所で急に影トラは馬を走らせ
叫び声とともに疾走していった。。。

何が？なんだか？

行軍の指揮は幸いにかその場にいた「柿崎」にまかせ
馬廻りの「長秀」と数騎をつれ
トラに遅れることしばしでやって城にもどってきてた

城門をくぐり「厩」を見たが影トラの馬はおらず
屋敷前まで急ぎ進むと
「多英」と「つや」が手綱をとってなだめている姿が見えた

「多英！！影トラ様は屋敷か！！？」

大声で2人に呼びかけた
愛娘の手前出来るだけ声を荒げないようにしたのだが
顔には出てしまっているし
心はいっぱいの「迷惑」に満ちていた

影トラが「戦」出ては帰りに具合を悪くするのは
今回が初めて。。。。
と
いう訳ではない

どちらかと言えば
「いつも」そうだ
いつも戦が終われば「嘔吐」をしたり
寝込んだりする

それでも
何度か注意をして
「将たるものはいつでも毅然としていないといけない」
と
厳しく教えた事もあり
幾分「改善」された矢先だった

今回の大戦(おおいくさ)はたしかに「過酷」だった。。とはいえ
あんな「奇声」をあげて隊列を離れられたのでは立場がない

馬をおり
歩を早めながらもう一度
多英に問うた

「影トラ様は屋敷か？」

多英は馬の鞍を拭きながら答えた
「屋敷です」

実乃は長秀に
「厩に連れて行ってくれ」
と多英とつやが綱を引いている馬を指さした
長秀と数人はすぐに多英の手から手綱を受け取った

「父様!!父様!!」

イライラが歩幅にでてしまったのか，かなり足早に屋敷に向かっていた
実乃に多英が小走りに寄りながら
何度も呼んで前にでた
実乃は普通だったら怒鳴りつけてしまうところだが
娘にそれは出来ず

「何だ?」

と足を止めた

「今お屋敷に行かれてはダメです!」
と
真顔で止めに入った

「大事だ!!さがっておれ!」

あまり
怒りたくないが主君の失態をなだめるのも「家老」の仕事
手で多英に「のけ」と合図したが

「大事なのです!!」

と
以外な返事が返ってきて今一度足を止めた
「大事だと?」
「はい。。。大事にございます」
鸚鵡返しのように多英は繰り返した
その表情で「ただ事」ではなかった事をいまさら知った
多英の手に握られた布はさっき影トラの馬の鞍を拭いていたものだ

その布は赤い。。。

「お怪我を!!」
そういえば
屋敷前を何人もの侍女が忙しなく駆け回っている
頭をはたいた

「なんたる事をぉぉ!!」

怒りで主君の「怪我」に気がつかなかったなど!!
走ろうとする実乃の身体に多英がしがみついた
「いけません!!」
驚いた
娘にしがみつかれた手をほどこうとしながら
「何をしている!!」

と
わめいてしまった

多英は顔をしかめながら
首を横にブンブンと振りながら
「行ってはいけません!!」
と実乃に引きずられ倒れそうになった身体を起こし言った

「何を言っている!!怪我ならなおさら!!」
「怪我ではありません!!」

いつになく必死な多英
もともと
控えめで大人しい娘が「一生懸命」になっている。。。

という事は
事態はよほど「悪い」と実乃はさらに
手を振って

「とにかく屋敷に行く」
とふりほどこうとする
多英は離れようとしない
「ダメです!!大事なのです!!」
「大事ならばなおさらじゃ!!!」

今までなかった娘の行動に実乃は驚きもしたが
苛立ちが先にたってしまい
ついに怒鳴ってしまった
多英は父の声に驚き
へたり込みながらも足にすがりついて

「大事なのですぅ。。うっぅっ。。」
と涙声を上げた

わけがわからない
「多英！手を離さんか！！」
「ダメですぅう。。うっ。。うっ。。」

他の隊が戻って来てしまうまでに事の次第を把握したい実乃は焦りで
娘を突き放そうとした

「大事！！！！」

大声とともに実乃の顔めがけて水が

頭から水をかぶり愕然とする姿の前には「つや」がカラの桶を持って立っていた
多英と同じく涙目だ

「女の大事なの！！！！」

つやは癇癪（かんしゃく）を起こし叫ぶ

「女の大事の日に男はいらんのです！！」

と多英のところに走り2人揃って「泣き出した」

どちらかと言えば。。。。
泣きたいのは実乃の方だったが
つやの一言で「大事」というのが漠然とわかり少しだが気が緩んだ

「わかった。。。わかった。。。」

とにかく自分も落ち着かねば。。。
足下に泣き崩れた「多英」と「つや」をさとそうと手を伸ばし
頭をなでた
「すまん。。。すまん。。。」

あまりに気まずい雰囲気
そうでなくても屋敷の周りは「女」達が走り回っているのに。。。
とにかく「女の大事」で。。。とにかく。。。と2人をあやしながら混乱していた頭を
整理しようと顔を上げた

「鬼。。。。。」

目の前にやたろーが。。。。

鬼になっていた
「まて。。。やたろー。。これには深い訳が。。」

そのままスッくとやたろーの前に背を正し努めて冷静に顔を合わせた

「つやを泣かせたな。。。。」

ギョロリとした目
怒りの形相のやたろーとその後ろに控える「大男衆」

実乃は片手を揚げて「待て」の姿勢をとったが。。。遅かった

「フンヌゥゥゥゥ！！！」

豪快な一撃に実乃は左に飛んでいった
ちょうど
影トラの馬を厩に戻し帰ってきた長秀の目の前に
転がり落ちる巨体

「実乃様？」

呆然の長秀の前
実乃が怒りに燃えていた

「話を。。。聞けと。。。。」

のしのしとやたろーに向かって行く
「言っておるだろう！！！！」

返す刀の右拳がやたろーを音高く殴りつけた
己で愛娘を泣かしてしまったうえに
やたろーの強打で我を失っていた

鬼と化し我を失っている「熊」のやたろーと乱闘が始まってしまった

長秀は止めに走ったが
すでに混乱の状態
多英とつやを非難させるだけでいっぱいいっぱい

そこに行軍を任されていた「柿崎」が帰ってきた

「柿崎様!!実乃様をおとめください!!!」

しかし
仲裁を頼む相手が悪かった
満面の笑みの柿崎

「貴様!!!わしをのけ者に「祭り」とはけしからん!!!」

乱戦に「喜び勇んで」飛び込んでいった

長秀は愕然。。。
史郎に向き直って
「どうするんだ!」
と肩を揺すったが

史郎は遠い目になっている
「無理。。」
となりのやたろー配下の善治郎も同じ顔になっている

「止めんのか?」
長秀の泡を食った言葉に2人は顔を見合わせて答えた

「無理」

その16　使者　（1）

祝勝の祝いが終わった後
実乃は。。。。困っていた

というか
栃尾史上最大の大戦（おおいくさ）にも匹敵する
武功をあげた城の武将が

これほどまでに「喜べない」朝を迎えたのは。。。。。

巡る考えは良い方向には動かなかった
なんとも「切ない」朝焼けだ
かたわらに
酒の壺を抱きしめて転がる
やたろーや
鼻提灯をふくらませている
柿崎のように「のんき」な気持ちにはなれなかった

事の始まりは
やはり「影トラ様」。。。。。
今年17歳になるトラにまさか。。。いまさら。。。

「月の障り」

が
訪れるなどと思っていなかった

娘の多英でさえ
去年「それ」は来て（来たらしい）
いそいそし始めたのはわかったが

とうにそんな「初」という歳を越してしまった「影トラ」には
勝手ながら「来ない」と思っていた事もしかり

それ事態をすっかりと忘れていた

というか
「戦」に赴けば
「常勝」であるこの強き「将」が「女」であった事を忘れかかっていた

溜息
溜息
ぐらいしか出てこない

昨日
祝いの席から離れられたのはかなり夜も更けてからだった
「影トラ様」が疲労で出席しない
と
なれば
戦働きで「功」をあげた者を労う役は必然的に
実乃になる

それでも本来だったら配下はいい顔をいなかったかもしれないが。。
。。

そんな祝いが始まる前に
やたろー
柿崎との「乱痴気騒ぎ」が始まってしまっていたので
なだれ込んだ形で始まった宴でなんとか「不平」を聞かずにすんだ
のは

妻の「お猪」のおかげでもあった
乱闘でもみ合いになっている
実乃
やたろー
柿崎に

大樽にいっぱいの水を頭から被せて
あごを突き出した
立腹の顔で言い放った

「まだ「戦」は続いておりますかな?」

泣きたくなった

そうでなくても
つやに一発くらってしまっい
多英まで泣かせてしまった後に。。。

この寒風吹きすさぶ面屋敷の真ん中で
水浸しになっている自分に
さらに
その後，他の武将たちのまえで「説教」をくらうという
なんとも
しまらない結果に
少しだが「涙目」になってしまった

それでもその一件で諸将が「影トラ様」の疲労にそれほど騒ぎ立てる事はなかったのは
。。。。。。

不幸中の幸い。。。。か？

と

乱闘で腫れ上がったデコを撫でながら思った

「ハァ〜〜」

しかし
現実は残酷だとやはりうなだれてしまう

宴を離れ
影トラの病状というのは可笑しいが
具合を伺うため
お猪と話をしたところでつい。。。

「どんなに強くてもしょせんは「女」か。。。。」

と本音が口に登ってしまって
またもの「一悶着」になり
妻に怒鳴り散らされること朝方まで。。。。

昨日の酒盛りはまことに「しんどい」事だった

「しっかりしてください」

しょぼくれる実乃の隣には先刻まで怒鳴り散らして説教していたお猪が
酒や膳をかたしながら
少し緩やかに言った

その手に巻かれた布を見て実乃は気遣った

助かった

正直そんなに気持ちだった

実乃が「月の障り」を男が故に知ることがないように
影トラもその事についてはあまりにもだが，いっさいしらなかったようで
動転し
城にもどって「腹を召そう」としたところをお猪が止めてくれた
その時の怪我だった

「猪(いの)。。。よくやっくれた」

やっとででた言葉に
女にしては大柄な妻は横に座って言った

「当たり前の事です。。。」

続けて

「あなたさまがもっと気を遣ってあげてくださいまし」

そう言うと
そそくさと部屋を後にした

それでも実乃は
妻には申し訳なく思いつつも落胆を隠せなかった

それほどに「影トラ」は強く羨望の将だったなのに。。。。と思うと

やはりやり切れない気持ちが募ってしまい
溜息が多くなってしまっていた

「何をしょぼくれておるか?」

いつ目を覚ましたのか
寝っ転がったままで柿崎が実乃に話しかけた
よだれを拭きながら身体を起こした柿崎は懲りることなく酒瓶を持ち上げ
仰ぐようにのみながら

「寝なかったか?」

と目をパチパチさせながら聞いた

片膝でチラリと目を合わせたが言葉は出てこなかった
悩みが尽きないのだ

「春日山に戦況報告にいかねばならんのに。。。」
「いそぐこたぁない」

実乃の悩みをまるで介さぬように柿崎は言った
また一息にグビリと飲み

「そのためにわしはココに来たんだから」
「わかっておる」

柿崎が遅れながらも「黒滝城攻め」に参加したのは何も「戦」馬鹿だから
というだけでない事はわかっていた

「戦目付（いくさめつけ）」
戦の状況
進行
最後を見届ける仕事をしに来た

その仕事を
春日山で守護代から仰せつかってきた事はうすうすう気がついていたみなが
知りたがっているのだ
「影トラ様」の戦いぶりを
そしてそれは今
やっと大きな「力」になり始めていた矢先だった

「やはり「女」には無理なのだな。。。」

言葉にだして言ったら

妻に激怒されてしまった
禁句を
柿崎を見ながらまるで自分を卑下するように実乃は言った
「一月の内，十日休めるのは良いことだ」
「ちゃかすな。。」
「ちゃかしてなどおらん」

柿崎は酒の壺に残りを見つけようとあちこち捜しながら
何事もなかったかのように答えた

「わしは影トラ様について行くぞ」

以外な答えだった

柿崎ほどの武人が
こともなげに「女」に従うと言っている

驚いた顔の実乃のとなりで柿崎は続けた

「金津を見たか！虎姫(とらひめ)恩顧(おんこ)の男たちは「姫」を主(あるじ)に頂いたからと言って腰抜けではなかったぞ」

たしかに。。。
影トラの母，虎御前をかつて主として頂いていた
あの「男」たち（栖吉衆）にとって強き「トラ」は待ちに待った「将」だった
その心を
黒滝で十分すぎるほどの奉公として示し
惜しむことなく戦った

自分たちの主が「女」である事などなんの問題でもなかったのだ
柿崎は杯を実乃に投げ徳利を差し出した
「わしは強い影トラ様に従う。。。それが一番気持ちが良い！！」

ハハ

ハハハ

実乃は笑ってしまった
「気持ちが良い」
わからんでもない
春日山では守護代様の「会話」による統治という穏健な方法が主流だが
さして成果を得る事は出来ていなかった
そんな
穏健な方法が通用するほどこの「越後」の嵐はまだ止んでいないのだ

「その目で何度もの勝利を味わったおぬしが影トラ様を盛り立てないでどおするのだ?!」

柿崎の言葉は
本当に「羨ましい」と言わんばかりだった
今はまだ「義」をを通すためにも「力」がいる
その一番の「力」となっている「影トラ」を盛り立てねば。。。。

たとえ
その身が「女」でもいままでこれほど「強い将」はいなかった
やっと「越後」を統べる力が現れたのだ

酒を飲み干した
つまらぬ事で頭を悩ました事を恥

返す手で柿崎に返杯した

「わしも。。。気持ちの良い戦がしたい」

そして
その「力」が本当に必要とされてきている事を実乃たちは
改めて知ることになる

揚北衆中条藤資（あがきたしゅうなかじょうふじすけ）のが使者としてやってきたのは
春を待つなかに
まだパラパラと雪の降る3月の事だった

その16　使者　（2）

春日山には招かれざる客が「使者」として訪れていた
長尾政景（ながおまさかげ）を目の前にした晴景の顔はいつにもまして優れない様子だった
激しかった
雪の日々は遠のいたが
山の上に座するこの「城」の周りは変わらず白く「冷たい」世界にあった

影トラが「黒滝」の仕置きに出陣した日からまだ一月たらず
結果は
おおかたの諸将が予想したとおり

「謀反」は本物
という
己の自尊心を大いに抉るものになってしまった

「一族皆殺し」
を押したのは上杉定実公事「実（みのり）」だった
晴景は最後まで「対話」を進めたのだが
証拠の出揃った今その「我」を通すのは「不利益」と読んだ「実」の言葉を聞き入れた

曰く。。。。

「上杉守護にとって許し難き「謀反」であると判断した」
とすれば良いと
優しき守護代の意見を踏みにじった「断行」とすれば晴景の威厳も
損なわれまい

という事だったが
「宴」での
影トラとの出来事を目の当たりにしてしまっている諸将にそんな事
が。。。
どこまで「言い訳」としてなりたつのか。。。

「戦」事の判断を未だに「上杉」に押しきられている方が
よほど。。。情けがなかった

。。。。。

くだらない「事」だ
そんな事に頭を悩ます事自体が憂鬱の元になり
身体を弱らせている
そんな風に自分を貶めていた時に

男は登城してきた

雪を理由にココまでくる事を「断り」今まで「祝賀」にも参加した

事のなかったこの男の登城に「影」を感じずにはいられなかった
そもそも
晴景は政景が苦手だった
というかこの上田長男の一族が苦手だった
「長尾宗家（ながおそうけ）」という本家筋をもつ政景は為景の次の「守護代」は自分の父だと信じていた
ところがその願いは「遺言」によってかなわず
息子の晴景が職を継いだ時の怒りようはまだ子供だったにもかかわらず「恐ろしかった」と認識できた
暴れる宗家に
当時十三歳だった「綾姫」を嫁にだし「親族」となるという「融和策」で難を凌いだ

しかし

だからと言って
「臣従（しんじゅう）」した訳ではなかった

「綾」をことのほか気に入った政景がそれ以来「波風」を立てる事こそなかったが
春日山に「挨拶」に来る事はいっさいなかった
つまり
晴景に頭を下げる事はしなかったのだ

今
その男が目の前に座っている

「お久しぶりですな。。。政景殿。。」
何を口に出して良いかさえも慎重に成らざる得ない「緊張」の面持ち
ちの晴景に政景は
不敵な笑みをこぼして言った
晴景より十五才ほど年下のこの男の目は「野心」で輝いている

「目覚ましい活躍ですな。。。影トラ殿」

フフ
政景の言葉に晴景は自嘲気味に笑った
やはり
その事を言いに来たか。。。。
面目を潰された「弱い守護代」に「嫌味」を言いに

「ああっ。。。あれはよく働いている」

波を自分から起こしたくなかったこの男に「弱い」と断じられたくなかった
火桶に目を流しながら
「当たり障りのない」返答をした
「嫌味」は聞き流せばいい。。。。

時折激しく降る吹雪く音の中
政景は白い息を深く吐き出すように返した

「しかし気に入りませんな。。」
「気に入らない？」

意外と言うか。。。
引っかかる物の言い方に晴景はつい即答してしまったが
政景はその返答を待っていたように答えた

「影トラ殿。。。守護代様の苦労を介さぬ働き方。。。感心出来ないのですよ」

意外だ
晴景の面目を潰し大活躍をする「影トラ」を気に入らないと
むしろ
気に入っても良いぐらいのハズなのに？

？

そんな事を「おべっか」を言いに来た？
晴景はけして彼の目を見ようとはしなかった
意外すぎる言葉の内容を知るまで安易に受け入れるわけにいかない
目をみたら
高笑いをされそうで火桶のへりを撫でながら
間を持たせるように白い溜息を一つ

「武功は主君を輝かすもの。。。己を輝かすものではござらんでしょうに」

なんと？
不可解な「戯れ言（ざれごと）」を？
たぬきめ。。。

影トラと自分との間を煽りに来たのか？
火をつきながら政景の言葉にほくそ笑んだ

「剛」の男の謀（はかりごと）は
少しだが見え隠れし始めている

昔ならば
そんな言葉に「乗って」しまう事もあったかもしれないが「会話」
に重きをおき手腕を働かせた晴景には政景の「策」はあまりにも粗
末な芝居だった

が
ただ聞くぐらいは良いか。。。
話の腰を折っては収まりがつかないだろうと

「そうよな。。守護代家を輝かすものとしての自覚がほしいものよ
な。。」

と
次の言葉をだしやすいよおに
逆に「煽った」
若造め。。。。と
およそ「祝賀」の騒ぎの事は耳に挟んでの口上だろう

「晴景殿がいままでしてきた「会話」による治世を己の「力」のみで示そうなど愚の骨頂。。「力」だけを振りかざす支配はいずれ「長尾」を疲弊させる事でしょう」

火桶を見ていた晴景は吹き出しそうになった
かつては
その「力」を振りかざし「守護代」の地位を狙った一族の男が「ねい言」吐く
若さ故にみなぎる「力」は「愚策」を懸案しようとしているのか？
やはり「武」の者は謀にはすぐれないと直感した
おおかたの予想はすでに見えていた

病弱になってしまった「守護代」を諸将に争いを起こすことなく穏便に交代させる方法
まずは
自分が唯一味方だと思わせる事
そして
当面の「脅威」になった「影トラ」を「強く平伏」させることを手伝う。。。などと言うだろう

影トラの力は本物だ
それは認めよう
「戦」ではあれを使いこなせるような体勢を作れれば良い
それ以外にも
「女」なのだから使い道はいくらでもある

問題はその後の事だろう
政景が治世を手伝う見返りは「己」を守護代にするという簡単な答えだ

守護代家の綾を妻に貰った彼が「親族」として「本家」として
「守護代」になるのはたやすい

それを芝居しにきたのか？

まったくだ
無骨者の企みは晴景にはバレバレだった
続く「台詞」で確信に至った

「わしも治世の良き助け手になりたいとおもいココに参内いたしたのです」

笑いを抑えた
よほど自分の姿は「哀れ」に見えているのだろう
たしかに
未だに亡き父の嫁「虎御前」に頭を抑えられ
今度はその子「影トラ」に言葉と態度で負かされそうになった身だだが

謀（はかりごと）ならまだまだ
一枚も二枚も誰よりも上にいく自信はあった
要は
それを実行するための「力」を持ち合わせていなかっただけだ

自信に満ちた笑みから
その無駄に大きな身体から政景の企みは隠すことができないほど漂い出ている事に気がつけずにいる

「力」にはなりそうだ。。。。

晴景は守護代の「地位」になんら未練はなかったが
自分を「ないがしろ」にした者たちを許す気にはなれなかった

だから
よい機会が訪れたと思った
嘘でも謀でも良かった
「長尾宗家」の力を手に入れ「影トラ」を地べたに頭を擦りつけさせるほど「平伏」させたかった
二度と再び「虎御前」にないがしろになどされたくもない
そうする事で満足にこの職を辞したいとまで思っていた

「わしは狐がいいな」
細い自分の身体を鑑みてつぶやいた
この化か仕合いが「狐と狸」の会話と理解したうえで
笑わず
表情を抑えて政景に言った

「まことに嬉しい言葉です」

そういうと軽く会釈した

使ってやろう
お互いが「食いつ食われつ」でも
零落した守護「上杉」にまでかばわれながら生きるのはもう「イヤダ」

野心は「心」にまだ残っている
今は政景と手を組むのも悪くはない
二人は酒を酌み交わした

そしてこれが「長尾」を二つに割る戦いに発展していく事になる
「影トラ」「晴景」それぞれに訪れた「使者」によって
「越後」の運命は大きく動き出した

その16　使者　（3）

あの日はどのぐらい寝ていたのだろう
天井の板の目を見ながら呆けていた

「身体も元服されました」

その言葉は妙に耳に残っていた
元服という物が二度くるとは思ってもいなかったが
私の「切腹」を止めてくれた侍女（実乃の奥方と知ったのは最近だ）
の話では「女」には切っても切れないもの

「月の障り」

という。。。。

月に一度「何故か」やってくる
何というかめんどくさいものなのだそうだ
とにかく。。。「血」がでるのがイヤだ

今日はひさしぶりに
つやが私の所に来てくれていた
二度目の「障り」の日
私は寝床で丸くなったままでいた
身体の調子はいまいちだし
怠い感じも少し
腰も重い

ただ
血は少なくなった

「下血」日から4日
「月の障り」がくると私は眠ってしまう
ほぼ1日を丸々眠りにつく

前日ぐらいになると
イライラしてくる
で
頭がふわっとした感じになって。。。。
眠ってゆく
なんともったいない日になってしまうのだ
「大事」が起こったらどうしたらいい？
そう思いながらも
事を過ぎるのを待つしかない身が。。。恨めしい

それにしても。。

思い出すのも。。。恥ずかしいのは
宴の事も何もかもほっぽりだしてしまった事はもとより
「腹を斬る」などと
大慌ての

。。。

「大立振る舞い」
をした私

目覚めたとき
実乃が部屋に来て
何事も「問題なし」と言ってくれた事がホントに救いだ

最初の「障り」の時は「戦」の疲労も大きかったのか
春日山に戦況報告に行く事もできない状態になってしまったが
報告は「柿崎」が
残党および
郎党の「討伐」は「金津」が引き続き行ってくれて助かった

私は
書状をまとめる仕事だけを行う
出来上がりを「柿崎」に送る日々が続いていた

「つやは。。。。知ってるの?」

私の横で手習いの本を見ているつやに突然だが聞いてみた
「何を?」

まだ寒い日々が続いている
火桶を手で引っ張りながら
よじよじと私に近寄って聞き返した

「月の障りの事?」

「まだだよ。。」

「だってオラ。。。あっ」
つやは最近になって手習いと一緒に言葉遣いを，多英やおせんに習っていた
とっさに出た「オラ」というのを直せとこっぴどく言われてるらしく
口を押さえて
「いまのなし！」
と
私に手を振った

笑ってしまう

「オラでもいいよ」
引き続き手を振って
「ダメダメ！！」

可愛い
つやは素直な子だから屋敷の侍女たちにも可愛がられていた
最近は礼儀，作法なども習い
侍女たちにまざって仕事もしている

その姿を
よくやたろーが見に来ている
あの大男が
襖の向こうのつやを心配そうに
首を伸ばして見ている姿はおもしろい

それにしても

旧年の内は全然出し惜しみをしていたのか
今年に入ってからの「雪」はすごい
何より風が強くよく戸板を飛ばしてしまっては「男衆」が走り回って修繕をしているが
いかんせん止まない吹雪の中での修理で
戸の締まりが悪いのか
冷たい隙間風がそこかしこで入ってしまって
息が白い
火桶があってもなかな暖を取るのは難しい

深々と滲みてくる寒さを感じ身体が震えた

「風呂。。。入らない？」
私は咄嗟に思い浮かべて言った
栃尾には風呂がある
ちょっとした「温泉」なのだ
岩殿を降りたところにこじんまりと作られたあの風呂に「戦」の後はいつも入っていたが
今回はまだ入ってなかった

「風呂？」

私は目を光らせた
風呂は贅沢なものだし「女」は桶にそれを組み身体を拭くだけの方が多かった
私は
入っていたけどね

「そうか。。つやは知らないんだね」

せっかくだから一緒にと
私は侍女に頼んで支度をさせた

「あ～～～～」

「あ～～～～」

声が響くのが楽しいのかつやは何度か壁に向かってしゃべったりしていた

「つや!!入りなよ!身体冷やすよ」

はしゃいで
裸のまま岩に座っているつやを呼んだ

湯に身体を沈める
肩まで入ったところですっかり脱力していた
ホント
これは「戦」から戻ってきたらかかせない「馳走」だ
身体の「芯」まであたたまって良い気持ちだ

湯に溶けてしまいそうな気持ちで
同じように
何もかもを溶かして忘れてしまいたい

湯殿の上
少し開けられた「窓」から雪の姿を見た
ハラハラと舞い降りては消える雪を見ていて
悲しい気持ちになった

あの城の骸（むくろ）たちはどうなった事だろう。。。
きっと
この風吹く雪の下にいる事だろう。。。。

春になったら「供養」しなくては。。。
目をつむり祈った

「こんなところがあったの初めて知りました！！」

私のすぐ横に入ったつやが

黄色い声を響かせて
好奇心いっぱいに周り眺めながら言った
山奥には時として「温かい水」の湧き出るところがある
栃尾は城を造ったときにこの「風呂」を掘り当てた

栃尾の「宝」だ

「たまに入るといいよ」

温かな水は身体を潤わせてくれる
空を見て思い出した
初めて栃尾に来たときジンと一緒にココに入った事を

「栃尾に来た日にジンと一緒に入ったなぁ～」
伸び伸びと身体を広げて言った
懐かしい
「陣江さんと？」

不思議そうな顔でうなづく，つや

「今頃どうしているのかな。。。」

きっと雪かきをしている事だろう
「越後」の冬はどこも大変なハズだ

「おトラ様は。。。その頃からそんなに乳が大きかったの？」
「えっ？」

つやの目がマジマジとて私の乳を見ていることに気がついた

「いや。。ジンと入ったときは。。。。こんなんじゃなかったよ」

と両手で触ってみた
「もっと平らだった」
「ふぅん～～～」

溜息まじりの返事の後
自分のまだ「平ら」な胸のあたりを撫でているつやに
「今ジンと一緒に入ったら笑うだろうね!!何ソレって!!」
と
私は笑った
つやは向き直って
「喜ぶんじゃないの?」
と
怪訝?
「なんでさ?」
真顔の
私の返答につやは真っ赤な顔で湯船に沈んでいった
「何?」
と肩を引っ張ったが
「何でもない。。。よ。。」
と
奇妙な会話をしてしまった
乳が大きくなると「喜ぶ」?今度ジンに聞いてみよう
話題は多い方がいい
そんな事をのんびり~と湯に浸かりながら考えた
平穏で静かな日々が

この風呂につかっていられるような日々が続く事がのぞみだった
私のささやかな日々
しかし
嵐はいまにもやってこようとしていた
穏やかな日などまだ「越後」にはない事を
知らせる者は

春とともにやってくる

その16　使者　（3）（後書き）

使者。。。。

後書きからこんにちわ～ヒボシです

最近めっちり暑くなってきたので半裸でパソコンをうっているという無様なさまですが
今年は
着物を着てみようとおもい
あれこれと探しています

ところが色々と探してはいるのですが
影トラ様時代の（戦国時代）の男物の着物は。。。。
なかなか
見あたりません

あれも「和服」なので
どこかで販売していないものか？
とネットでさがすのですが。。。。見あたりません
たまに
みつかったりするのですが。。。
あきらかに「新撰組」の衣装だったりで
戦国初期とか
安土桃山の頃のものは。。。みあたらないのです

誰か

販売してらっしゃるところを知ってらっしゃったら
情報下さい
今年はどっぷり「歴史」に浸かってしまいたいヒボシです

ところで。。。
今回で
カイビョウヲトラの４分の１ぐらいを書き終わりました
もっと短くてもいいのですが
多分
重複している箇所もある事なので
全部を書き終わったらだいぶん「削除」してしまう感じでしょう（悲）

使者がやってきて
運命は急激に動き出し始めます
もっともっと「トラ」には泣いてもらう事になるとおもいます

ジンも再び登場します（意外とファンの多いジン（爆）ご期待を！！

できるだけ
史実どおりの時間割でうごいて
出来るだけ
人間として描いて行きたいと思っていますが

たま～～に「超」とかになったりしますが
それはご愛嬌という事で許してやってください

これからもがんばって走っていきます！！
がんばります！！！

最後までよろしくお願いします！！！

それではまた後書きでお会いしましょ～～～

その17　花の嵐　（1）

昼なを暗い
曇天の下
灯籠一つをともした部屋で男たちは静かに
静かに

会話
というよりは決まり切った答えを取りまとめるための「問答」を
続けていた

寒さはまだ過ぎることのない「越後」の冬
じきに3月の声も聞こえるだろう
しかし
まだだ

まだ

一つ嵐を「起し」決着をつけねばなるまい
揺れる小さな炎の前で「中条藤資（なかじょうふじすけ）」は
他の揚北衆（あがきたしゅう）の使者を交え
普段でも抑えている声を
さらに
低く深く抑え「心」を気取られぬように口を開いた

「影トラに着こう。。。。とおもうている」

話の内容は
黒田秀忠(くろだひでただ)の揚北に向けた遺言ともいえる書状から
「長尾家」のどちらに着くか？
という
打算ではきかない
一族の「命運」を左右する重大な決議でもあったが

部屋に使者とともに
集まって早々中条は答えた
というか
中条は
決めていた
「晴景(はるかげ)」に着くことは絶対にないと

「中条殿はそれでもよいのかもしれんが。。。」

揚北の使者たち
「本庄」「色部」その他の豪族たちの腹心の者たちは答えをだしあぐねていた
逆に
中条が早くに「その」答えを出すことはわかっていた

「中条」は守護代「晴景」には絶対に従わない

数十年前
上杉定実公が騒ぎ出した事件
「養子」を奥州伊達から取ろうという
事件

上杉定実には子供がいなかった
そもそも
定実公自身も「養子」だ
だが
「上杉」を「越後」に存続させたいという願いは当たり前にもっていた

為景没後
守護代をついだ晴景の「融和」策の一つの見本のような話で
誰からも咎めを受けることなくすんなりと行くだろう
そして「マヌケ」な晴景はそれを見習えと推奨するだろうぐらいに思った

実に中条にとっても「おいしい」話だった

奥州から「養子」として迎えたいといった子供の母が中条の「妹」だった
上杉の中に
自分の血脈をいれる
親族になってしまえばいい

為景のように血なまぐさい「戦」によってその力を手に入れるより
はるかに「たやすく」血の流れない

むしろ
己の一族の「血」を入れる事によって
中条が「守護代家」にとって代われる
またとない機会を得た「話」だった。。。。。。

ところが

晴景は「難色」を示した
自分の身の回り
最大の敵であった「長尾政景（ながおまさかげ）」には惜しげもなく
13歳になったばかりの「綾姫」を嫁がせたのに
上杉の「養子」話にはガンとして首を立てには振らなかった
「警戒心」を持っていたのだ

もちろん
己の「野心」がそんなに簡単に達成できない事はわかってはいたが
晴景が上杉に対して「敵対心」ともとれるほどの「警戒」を怠って
いなかった事には気がつかなかった

だが
退けない

こんないい機会はまたと持てないかもしれないと

上杉に取り入りたい気持ちもあり
「交渉」を重ねたが
その間に伊達家に騒動が起こり「話」はお流れになってしまった
後
定実公は心身共に疲れきってしまったのかほとんど「公務」に出られることはなくなってしまうほどの落ち込み
ご内儀「実(みのり)」が公務を変わって行うというありさまになってしまった

守護上杉の「失落」は決定的になった

疲れた「老人」に取って代わり
晴景は守護代の力を絶対にした。。。。

流れてしまった。。。。

その出来事以来
中条は春日山に「参勤」する事はなくなった

意を同じくした揚北の諸将も春日山に伏すことはなくなった

そうして
時も同じように流れた

「影トラに着く理由は?」

無骨で骨太な男が中条の顔をのぞき見るように言った

「若いからだ。。。」
片口で笑い茶化すように
それでも
静まった口調と同じ声で言った

「若さ。。。。」
「若さか。。。」

それは一同ともに思っていた事でもあった

影トラは「強い」身も心も
それは「黒滝城（くろたきじょう）」のあの凄惨な仕置きをしてしまえる事からも明白だ
今まで
「長尾守護代軍」であれほど「強い将」はいなかった
あの強さは
親方，為景以来の「強さ」だ

おまけに
「栖吉衆（すよししゅう）」を手に入れている
母方の生家の軍団
今まで晴景に従わなかったあの「軍団」をついに動かした

「強き将」

しかし

まだ若干１７歳

そこが「つけいる隙」だった

１７歳の若き将に取り入ってしまった方が「先」がある
いろいろな意味で

中条に限って言えば
それが無くても
晴景にだけは「絶対」に従わないという意志があったが

ほかの
「豪族」も似たり寄ったりなところではあった
晴景には従えない。。。。
たいした
功績も戦績も持っていない「主」など。。。。

「中条殿の意見に従おう」

熊髭の男は堰を切ったように言った
「早く国をまとめねばな。。。」
「強い守護代は望みじゃ」

みな
後に続くように「言い訳」をした

「強い守護代」が欲しい
だから晴景を追い立て「影トラ」を。。。。
それは
表向きの答えだ

みなその「若さ」に付け入る「隙」を探せる「老獪」さと「余裕」
を持っている
晴景と
いまさら事を構えたら「何年」もかかってしまう気がしてならない
そんな無駄な時間を費やすより
「影トラ」を揚北に取り込んでしまえばいい。。。。

隙間風に灯籠の火が揺れる
かすかにみえる
男達の目の光り

「では中条殿が栃尾に使者を立ててくれますか？」

結論は出た

「長尾影トラを守護代に。。。」

一番年取った男が中条にそう言った
そうだ
火を見ながら笑った
「我々の守護代に」

会が終わり
みなが退出した部屋で中条は一人
影に座した侍従の男といた

「我々の。。。。。か。。。。」

部屋に目を戻し
後ろに控える男に話しかけた
「現八。。。影トラの顔を見たことがあるか？」
「ありません」
無駄のない簡潔な答え

「「女」であ事は確かか？」
「たぶん。。。」
無骨に濁る答え
がすぐに思い出した言葉を告げた
。。。。

「しかし主，秀忠曰く「美しい女」だったとの事です」
美しい。。。。17歳の「女」

そう言えば秀忠の奥方も見目美しい女だったな
秀忠の目は疑う事のない審美眼だ。。。。中条は野卑な笑いを浮かべた

「女か。。。。取り込む「手段」もあれこれと楽しめそうだ。。」

かつて
自分の
妹の血で守護代の地位を「血脈」に取り入る事を狙ったが
今度は
晴景。。。。
オマエの妹の血を頂くという方法が使えそうだ

人望もあり
強さあり

うわさでは「美しい」

しかも若い。。。。
若い女を「落城」させるのは楽しい「戦」になるハズだ

戸を開け放った
白い息をいっぱいに出して大きく笑った
今度は勝つ
絶対に

と

その17　花の嵐　（2）

嫉妬

これが一番困難な感情なのだ
嫉妬心はその相手が近くにいればいるほど「許し難い」ものになる
のかもしれない。。。

春日山の「守り役」
「直江実綱（なおえさねつな）」は苦悩の中にいた
凶族であった「黒田秀忠（くろだひでただ）」は
さして
何をする事もなく「討ち取られ」
当面「長尾守護代家」に刃向かう者はいなくなった

というか
黒滝城仕置きの一件は「越後」国内のあらゆる衆，豪族にとって「
衝撃的」な出来事だった
事もなげに
城主以下
黒滝のすべての「人」は殺された

今までになく「苛烈」な裁きによって平穏は保たれるハズだった

だから
本来なら
もっと良い「春」を迎えられそうなものなのに。。。
事態は「悪い」方向にむかい始めているのが現状だった

まだ
底冷えの続く山の上の城は
連日騒がしい

「長尾政景（ながおまさかげ）」の入城以来
あからさまな「不穏」な空気が匂いがするほどに漂っている

晴景は「影トラ」を許す事ができなかったのだ
「祝賀の宴」以来
その態度はありありと出始めていた
それまでは暗く沈みがちだったにしろ，穏やかで酒と唄を愛する日々を送っていた晴景の表情に
深い「険」が現れ
かつて「戦場」を駆けめぐっていた頃のような表情になった

これは嫉妬だ
影トラの名前が大きくなった事
周りがそれを口に登らせる事

それを許さなかった
何もかもに「疑い」をもち
それが山全体を覆うようになっていた

「段蔵。。。いるか？」

直江は
筆を下ろし
襖の向こうに控える者に声を掛けた

「ここに」

今まで気配さえなかった向かいの部屋から
静かな「気」と声が帰ってきた

「一仕事してもらはねばならん。。。」
「なんなりと」

決断せねば成らぬ時が迫っていた
直江は
疑いをかけられていた

影トラを栃尾に送った事
宴でかばった事

不穏な空気がまとう闇で「物事」の輪郭を見失いそうになり始めていた
「情報」を完全に遮断されてしまうのは時間の問題だ
これ以上
おもてだって「忍」を使うことは自分自身を守る事にはならない。。。

なんとか
栃尾との「つなぎ」を着けておかねば

時を同じくして
栃尾周辺も活発に動く「影」が
揚北衆(あがきたしゅう)の動きも気になる

外に
自分の間者(かんじゃ)を送る必要が迫っていた

「芝段蔵(しばだんぞう)，加当陣江(かとうじんえ)参りました」
「うむ」

庭外に少ないながらも忙しく降る雪
板間に参じた二人の若者の顔は上気していた

「雪かきか？」

この時期
使用人だけでは雪をのぞく作業は進まなかったりもする
それほど越後の雪は「遠慮」がない
おそらく陣江は朝からその仕事に従事していたのだろう

急に呼びつけたので
着替えたばかりの着物に汗がしみている

屋敷の部屋には
何人かの男と小姓がいた
「有らぬ疑い」が，かけられている出来るだけ「密談」にならないようにした「配慮」だ

「栃尾に使いとして向かってもらいたい」

直江は議題を隠すことなくすぐに告げた
かくさない
誰が聞き耳をたてているかわからない
あえて
表向きでも用件を明確に告げる

そうした直江の思案の外にいる陣江の顔は急に明るくなった

「栃尾にですか！」

いい反応を示す
直江にとってもこの反応はありがたかった

ココで顔をしかめるのが通常の反応だ
今
栃尾にいる影トラの事が「不穏」の元になっているのだから
そこに行くとは「危険」かもしれない

一角の武士ならば
まずそちらに「反応」を示すはずだが陣江にとってそこは問題ではないようだ
ためらう事なく議題に入っていけそうだ

「陣江。。。わしに使えてもう二年になるな」

二年
目の前に座った
陣江は驚くほど良く「奉公」に徹した
僧侶という「俗世」を断ち切った世界から「武士（もののふ）」の側にきた彼は
働く事に惜しみのない「良き男」だった

今や
直江にとっても「表向き」の仕事では重責を担うほどになっていた

「はい。。」

かみしめるような返事
そうだろう
もともと「影トラ様」に仕えたかったのだから栃尾に行くのは喜びだろう

だが。。。。
。。。。。

「わしはオマエを本当の「息子」のように思っている。。。生憎息子をもうけたことないがな。。」

姿勢を楽にするよう
手で促しながら笑って言った
陣江は照れ笑いをした

「わしには「娘」しかおらんのでな。。栃尾にわしの娘がいる事は知っているか？」
「存じております。。ココでもお会いしました」

宴のおり
陣江は早馬で一度は与板にもどったが
影トラとすれ違いで春日山に戻ってきた

その時
栃尾に戻る「おせん」たちの荷物を運ぶのを手伝っていた

「どうだ。。。」
「はい。。？」

よくわからない質問

という顔をする陣江に直江は続けた

「わしが言うのも何だが。。。「せん」は良くできた子だと思う器量もそれほど悪くもない。。。。オマエの嫁にどうかと思っている」

陣江の目が点になっているのがわかる
となりの段蔵が肩を叩いて言った

「なんと果報者!!」

言葉につまっている陣江は目を見張った
「嫁に」という言葉が自分に向けられている事に驚いている
「あの。。。」

驚愕の言葉を遮るように
周りにいた男達からも声がかかる
「おせんさまにふさわしい男になったものよなぁ」
「陣江。。。まこと果報者!!」

場は和み
みなから祝福を受けている事がまるで
夢心地になっているのか呆けた顔の陣江を見ながら直江はつづけた

「もちろん陣江。。オマエにはまだそれに見合う「武功」がないだからまずは「許嫁」という形から入ってはどうだろう。。その方が家臣も納得する」

直江は
心では。。。。

しかし
まだ影トラ様を失えない。。。
失えないほどに「越後」の闇が深くなり始めてしまっている。。。。

節目になりかかった顔を起こし
まだ事を把握しきれていない陣江を正面から見据えて言った

「オマエを私の息子にしたい」

主君の娘を
嫁に頂けるのは「誉れ」だろう

言葉をなくしている
陣江をよそに「栃尾」での用件を手短に話し
少しの雑談の後「支度」に入れとつげ退出した

ジンは呆然としていた
戻った自分の部屋で実感のない「焦り」を感じていた

「嫁」。。。。。。？
元僧侶の身から
武士になった者であるジンにとって格別の計らいともいえる

段蔵は帰りの道すがら言っていた
「許嫁って言っても「嫁」に貰ったも同然だ!!よいのぉ!!立身出世の道開けたな果報者!!」

「果報者」。。。。？
考えた事もなかった出来事だった
混乱してしまっている

「トラ。。。」

できるだけ人前でこぼさなかった「恋慕」の相手の名前をこぼした
言えない相手
言ってはいけない「恋」

栃尾に行く
その時。。。。どんな顔をしたらいい？

やっと「会える」
嬉しいハズの再会なのに。。。。ジンは膝を抱えた「支度」は進ま

なかった

その17　花の嵐　（2）（後書き）

見ました！！！

後書きからコンニチワ～～～ヒボシです

Ｇａｃｋｔ君の「景虎」さま見ました
ｙｏｕｔｕｂｅで（爆）
最近は部分で見ることもネットで出来るのでホントに助かります
キレイでしたね～～
びっくり
あんな長身美顔だったら
あっという間に晴景様は追い落とされますね（爆）。。。ん？
弟が美しいのなら兄様も美しいのでは？
ＮＨＫでは誰が晴景さまをやっているのかな？

後
彼の新曲のＰＶも見ました
１７年前榎木孝明さん演じる「上杉謙信」が映画「天と地と」で着用した具足
南蛮胴の白銀兜でしたね！！
あれ。。。販売もしてますから欲しい人はヒボシにも買って下さい（爆）

ああっ
これからも色々なシーンでＧａｃｋｔ謙信見られますね
ヒボシもせっせっとネットでみましょう

それではまた後書きでお会いしましょ～～

その17　花の嵐　（3）

ジンは。。。。
ただどうにも整理のつかない気持ちに浮かない表情を隠すことが出来なくなっていた

春日山を出立し
枇杷島で「宇佐見（うさみ）」と段蔵が会見していた時は
そのままもう一度直江の元にもどって
話を。。
いや
なんで「嫁」なのか？
について問いつめに走ってしまおうかと思ったほどだった

直江には
自分の気持ちはわかってもらっていると思っていた

寄り添うだけでもイイ
近くにいて
トラを助けたい
「戦」にいくら強くても。。。きっと今でもトラは泣きながら戦っているに違いない
自分が
少しでも助けになってあげたい

好きな「女」

なのに。。。。

道すがらは枇杷島を出てからは小雪混じりではあったが
荒れる事なく進んだ
寒風は止まなかったが
不遜になってしまっている表情を見られないように雪笠を目深にかぶって
決意していた

栃尾に着いたら。。。
「おせん」様との「婚儀」の話は「無かった事」としてしまおう
黙っていればイイ
段蔵にもその事をわかってもらおう
と

「おい！！栃尾に着いたらその「顔」はやめろよ」

下を向き
一心に「婚儀」の事を避けるために考えを巡らしていたジンの頭を
裏からのぞき見したかのように段蔵が声をかけた
馬を並べ続けていった

「眉間にしわをよせていたんじゃ「おせん」様に失礼だぞ！」

馬上の鞍に片足をあげ
睨むように見ている

「段蔵その事なんだけど。。。」
「なんだけど？」

笠に積もった雪をはらいながら感心のない返事を返されたが
ココでは
段蔵に胸の内を打ち明け
協力してもらうほかない

「婚儀の事はまだ決まったわけじゃない。。。栃尾ではだまっておいてくれないか。。」

そもそも
栃尾に今回向かうのは「こんな事」のためじゃないハズだ
後になって理解したのだが
緊迫し始めている状況を
その雲行きを春日山と栃尾の間を「直江」につなぐための隠れ蓑としての「婚儀」の話だ

きっと。。。。じゃなきゃ
宇佐見様にまでつなぎをつけたりしないハズたし

あくまで個人的想像の域だったが
ジンには婚儀の事しか知らされていなかった

「直江様だって本気じゃないハズだろ。。」
段蔵は馬を近づけてジンの口を遮った
「そのへんにしとけ。。」

声は低く「怒」がこもった音
目をしっかりと見ながら
周りを一瞬見回しもう一度ジンに顔をもどして

「嘘で自分の愛娘をくれるか?直江様にとって唯一の室（正室）との間にあるおせん様を?。。。馬鹿も休み休み言え」

「でも。。」
下がらず意見をしようとしたジンの胸ぐらを片手で掴んだ

「何がそんなに不満なんだ?直江様の家に「婿」に入るのは不満か?」

不満。。。。
不満だ。。。。

武士（もののふ）ならば出世とという道が大きく開けたと喜びもひとしおだろう
それに
春日山で会った「おせん」はまだ美人という年まではいってないが
若く可愛らしい表情の「女の子」だったし
中身もしっかりした感じを覚えている

血筋も長尾家譜代「直江家」という血統証付きだ
直江様に従う多くの若武者からすれば「羨望」の「花嫁」だ
どこにも
不満をあげる所がない。。。
だけど。。。
ジンにとって出世なんかどうだって良いことだった
ただ
ただ
トラに仕えたい
そのために「戦場」でトラを守るために武士になった
「僧籍」ではできなかった事を実現するために
トラの。。。近くに。。。
曇った表情のジンをさらにひっぱりあげるように寄せて段蔵は言った
「直江様はオマエを高く買ってらっしゃる。。だから「おせん」様
を「嫁」にオマエを「婿」貰いたいと言った。。。わかるな。。。
オマエの主君は直江様だ」

念を押すような言葉に逆らおうと手を振り切ろうとしたが
段蔵は続けた

「影トラ様に懸想（恋）してるからイヤだっていうんじゃねーだろうな」

ジンは喉まででかかった言葉を詰まらせた
言いたかった事は「それ」ではなかったが
心にあった「言葉」を
見透かされてる。。。
段蔵の態度は毅然としていた
知っている。。。気づいている。。。。。??

ジンの顔を「軽蔑」のまなざしで流すように見ながら
段蔵は呆れた態度を示しながら言う

「だいたいオマエ。。。元僧侶だったのに「還俗（げんぞく）」（坊主が世俗に戻る事）した途端に「女」を選り好みか?」
「ちがう!!」

そういう事じゃない!!
怒りが立ち上った
自分の心にやましい部分があるのでは?と指摘された

違う
トラの
近くにいたい
それだけだ！！

嘘じゃない。。。。

怒りの表情を隠すことの出来なくなったジンに段蔵はもう一度顔を
擦りつけんばかりに近寄って言った

「直江様からだ。。良く聞け。。「影トラ様の「心」を支えよ」と」

わかっていることを。。。
それだ
それが大事な事なんだ

だが
続く言葉でジンは心の臓を斬られた

「身体を支えろとはいってねーからな」

二の句を失った
段蔵にそんなふうに言われる筋合いはなかった
身体を。。。

でも。。。
そんな事を考えた事がなかったか？
この執着心の元はなんだ？

いやいや
ないとはいえない

与板で「女」を抱いてしまった。。。トラは。。。「女」だ。。。。

でも

矛盾に言葉をなくす
こんな事。。。

トラ。。。。。。。
こんな事なら武士を辞めて。。。

辞めて。。。どうしたらいい
段蔵の顔を見られない
顔を合わせられない苦痛で首を振りながら手をはね除けた
喉がすり切れんばかりに痛む

武士を辞めて

辞めたらどこにも行けない

そうじゃなくても天室光育の所を勝手に抜け出して今に至る自分
もし辞めてしまったら
二度とトラに会えないかもしれない

苦悶を浮かべるジンを尻目に
段蔵は吐き捨てるように
それでいてしっかりと「心」に釘を刺した

「ジン。。。そこんとこ間違うなよ。。」

返事はできなかった。。。。
ただうなだれた

栃尾の城下に着いたのは
それから二日後の事だった
早朝の張りつめた空気の中を静かに進む中

北の路地から出てきた同じような集団が
ジンたちの少し前を歩いているのが見えた

栃尾城の大手門を目指しているところから
地方の豪族なのかもしれない

腰に大小を持ち身なりもそれほど悪くない

「先客かな？」

段蔵はつぶやいた

黒滝の一件以来
中郡（なかごおり）での覇権は「長尾」が勝ったと言い切れた
そうなれば
このように「栃尾参り」ともいえる臣従を表明する豪族も増える

「一緒に入れてもらおう」

段蔵の指示で
大手門に並ぶ二つの「使者」は入城の許可を待つことになった

ジンは
雪笠を払いながら
憂鬱な気持ちがいっぱいになっていた

会える。。。
会えるのに。。。

混乱していた
自分は邪なのか？
そんな思いを巡らしていた。。。。が，目は急に覚めた
いつの間にか「緊張」が走っている

ジンは自分が出遅れたことを段蔵の視線で気がついた
向かいの一群と睨み合っている

段蔵は雪笠を降ろし
向かい側の前に立つ「使者」に一礼をすると
一人，歩きだした

相手も何かに気がついた様子で一人前にでた

「揚北衆（あがきたしゅう）。。。。中条藤資殿（なかじょうふじすけ）。。とお見受けしますか？」

二つの集団は身構えた
段蔵の口からでた名前に緊張が冷たい空気をさらに冷やし張りつめる

あり得ない最悪の鉢合わせ

門前は静かな殺気に包まれた

その17　花の嵐　（4）

栃尾城の番所を抜けたすぐの屋敷に
この
気まずい「使者」二つの集団は一緒に座していた

用件は各々届け済み
まだ暖のとれていない部屋に「沈黙」が続いていた
門番は使者に非礼がないようにと座敷に火桶を何個か多めに運びこんでいた

緊迫

段蔵の口からでた相手の名前はジンでも覚えのある「名」だった

「中条藤資（なかじょうふじすけ）」

阿賀野川（あがのがわ）から向こうに住む「豪族集団」揚北衆（あがきたしゅう）の中でも名の通った
男だ
最初の遭遇の時
ジンはその緊張に気がつく事ができなかった事を恥ていた
そのせいか
中条の姿をこの座敷に入ってから目で追うようにじっくりと見ていた

年は守護代晴景より少し上か？四十ぐらい

為景（ためかげ）の頃よりの「いくさ人」
男盛りの顔は細面で目尻が少し下がった感じ
なのに身体のつくりは
肩幅はジンと変わらないぐらい良い「肉」の付き方をしている
「衰えて」はいない

「そう睨むなって。。」

ジンの視線を遮るように
段蔵は目の前に座って言った
それは中条からはよく見える位置だった

「いや。。。」

ジンは。。うつむき顔をしかめた
栃尾に着いて色々と懐かしむという気持ちさえ持てない状態にあった

「誰だあれは？」

同じ部屋に通されたのは理由があった
事情は違っても「争い」にきたわけではないのだから
「暖」を取りやすくするために集められた事に文句をいう筋合いもない
中条は

自分の後ろに控える「現八」に振り返ることなくまるで「睦言」のように聞いた

「わかりません」

現八はいつも通り「簡潔」な返答だが低い声で静かに答えた

。。。

誰だ。。。

門前で自分の名前を「言い当てた?」男を中条は見たことがなかった

春日山に参勤しなくなってすでに十年以上たつ

なのに

つい今し方

春日山からきた「若い男」が何故自分の顔を知っていた?

越後の深い雪のように情報を閉ざしている「揚北」

それを「実は」春日山は「ご存じ」なのか?

嫌な予感がする

顔と名前を一致させる事のできる男が「栃尾」にやってきた。。。

危険な感じだ

その理由を知りたい

頭を掻いた

知ればいいか。。。。

中条は座した位置から向き直り火桶をもって段蔵に近づいていった

わからぬ事を一人で思いめぐらすのは「愚の骨頂」だ
知りたくば
目の前の相手と堂々と話せばいい
「幸い」にして向こう（段蔵）は自分の事を知っているようなのだから

「寒いですな」
段蔵と横に並ぶジンの前にどっりと座った

「春日山も雪で難渋していますか？」

言葉はあっさりと
まるで世間話のように柔らかく
自分が鳥坂（とっさか）の主であるから
府内の事は話さないか？さぐりの一言をぶつけた

「難渋しとります。。。毎日雪かきですわ」

段蔵はジンに話させないよう膝を手で押さえ答えた
強く中条に気づかせないように

「よろしければ名前をお聞かせ願いたい。。。」

自分の名を知っていた男の名前を知りたい

知った者なのか？
どこの出なのか？
ぶつけの質問を軽く流すように返答したこの男はただ「若い」だけ
ではなさそうだ
見るからに
余裕のある態度

「失礼しました。。自分は「芝段蔵（しばだんぞう）」と申します」

火桶を避け
身体を伏せて挨拶をした

。。。。聞いたことがない名だ。。。

中条が一瞬言葉を止めた合間で段蔵は
おおよそ
聞きたかった言葉。。知りたい事。。と言わんばかりに続けた

「直江実綱（なおえさねつな）様にお仕えしております」

顔を斜めに伏せた表情に出てしまう
片口を卑屈に笑わせた。。。もちろん段蔵には見せないように
「直江」だと。。。。
長尾家重臣直江実綱。。。。ずいぶんと大物が来たな

そして
隠さずそれを言い切ったな。。。
「若造」なかなかの手練れだ
ココで言葉を濁らせたら「たたみ込まれる」

段蔵が次の言葉を出す前に中条はそれでもまだ長年培った強み「大人」の余裕を持って
動揺を身体に見せぬように言った
相手の言動に切り込め!!
押され負けてはダメだ

聞きたい事はこちらにだってある

「重臣一同の使者の方はこの雪の中何用でいらっしゃいましたか?」

遠慮なく「栃尾」に大物が送ってきた「使者」の用向きを聞いた
先に言わねば
今度はこの男
中条は何をしに来た?と聞く。。。絶対にそういう目だ

「めでた事です!!こちらにいる若武者が直江様のご息女との婚礼とあいなりまして!!」

段蔵はジンの肩を叩いて紹介した
急にほころぶ
春日山からの使者の面々
となりに座っていた若武者は焦った様子だった
こんなところで大きく自分の「婚儀」を暴露されてしまった感じで
段蔵に向き直り

「おおっおい！」
と
叩いた手を掴み
「大きな声で言うなよ！」
と
怒鳴り声まであげて
段蔵はにんまりしていた
ジンの焦り方は「演技」で
出来るものじゃなかったからだ

逆に
中条は「やられた」と思った
なかなかにかしこい「若造」だ
実際は「何か」しにきたのだろう。。。。そういう勘ぐりは消せないが
これ以上「段蔵」という男から情報を引き出す事は無理のようだ

冷静に。。。。己の
頭を叩いた

「大変にめでたき事です。。果報者ですな」

それだけは言った

「中条さまはどのようなご用ですか？」

ククククク
笑う
間髪をいれない鋭さ
抜け目もない。。。。駆け引き上手だな
段蔵はしれっと核心に迫った

だが
もうわかっているという顔だった
揚北に名を響かす男が自ら栃尾に来る理由など多くはない
「臣従」を示しにきたか。。。。。
「野心」を見せにきたか。。。。。

腹の立つ問答だったに違いないが
この男は。。。。なかなか。。。。楽しいぞ

若造。。。。ならば答えよう

「長尾の若姫様を「口説きに」来ました」

優男
中条は自分したかったことを素直に返事にして返した
四十の声を聞く男の「本心」
段蔵は笑った

「私もです。。。」

表屋敷に通され進む途中
中条の顔には笑みが止まらなかった
長尾にあれほど「達者」な者がいたとは。。。。あなどったな。。。
いやはや。。。。

「参ったな。。。。」

後はどちらが「口説き落とせるか」かだが

「長尾影トラ。。。。本気で口説きたくなった。。」

年甲斐もなく「男」が燃えてしまった
ああいう「男」を
惜しげもなく栃尾に使わした「直江」を脅威に思ったと同時に
直江が心血を注ぐこの「女城主」に強く惹かれた

会わねば。。。
やはり
自分でココに来たのは正解だった

「晴景には従えない。。。が「影トラ」をもっと知りたくなった」
状況を楽しみ心を躍らせる「主」の後ろで
現八は沈黙を守った

「主。。秀忠を討ち取った女城主。。。」

その後ろを浮かぬ表情で歩くジンは段蔵に聞いた
「口説くって。。。何だよ」
段蔵は笑って方眉をあげて答えた

「そのまんまだ。。。「越後」のみなさまは今「影トラ様」を口説くために躍起になってるのさ」

無粋な言葉。。。
ジンは理解できないという顔だった

ただ
段蔵は楽しんでいた

その17　花の嵐　（4）（後書き）

歴史への招待～～～

後書きからこんばんわ～～ヒボシです。。。。。。（暗）

毎度ありがたい事に色々とメッセージに「歴史的」助言やらを頂いております
ヒボシは。。。
歴史は好きなのですが
それはきっと「歴史好き」を称する人たちからみたら。。。「幼い」物なのかもしれません
最近お叱りが多くって凹んでます（涙）

「歴史物っぽくもっと硬い文章で書いて欲しい」

。。。。すいません。。。無理っぽいです
頭に文字が浮かばなくなってしまいます。。。

「謙信が女ならばそれなりの時代考証はあるのでしょうね」

という質問には。。。。びびりました
わかりませんとしか。。。陳謝ですね。。。。

ヒボシは個人的には歴史は好き
でも

本当のところまで知ってしまうのは「残酷」だと思っています
怖いのです
歴史はどちらかと言えば「戦争」の日々という世界の出来事
そんな殺伐とした世界を史書で見続けると
泣きそうになります

なんて。。。辛い事だったのだろうと。。。

一見華やかな王侯貴族がつるし上げで殺されていく「革命」とか
その日々を一生懸命に生きる人たちに暴力を浴びせる「権力」とか。
。。
大嫌いなんです

でも
歴史には
奥深い「教訓」もたくさん
文化の流れ
人の交流などもあって
やっぱり
好きなのです

そういう中で
何故か選んだ「上杉謙信女性説」
女として生きるのは悲惨である事が多かった。。と思われる時代に
「もしかして」
という「仮想史」
本当の事であって欲しいとか思って書いているわけではないのですが
そんな
峻烈な生き方が「男女問わず」あったという事で。。。。

このへんで
ゆるしてやってください（爆）
情報不足をおぎなってくださるメッセージ大歓迎！！！！

ココではこういう「謙信様」ですが
これからもよろしくおねがいします！！！
後。。。。。

「ラブラブ」は。。。。。まだ。。。出てきませんが（藁）
まぁ
そのうち
その気になったら。。。。。かな（藁）

読んでくださるみなさまに感謝！！！！

それではまた後書きでお会いしましょ～～～～

その１７　花の嵐　（５）（前書き）

お詫び。。。。。

昨日ｕｐしたこの章を修正しました

この章に限らず
頻繁に書き直しをしているのはｌａｓｔｕｐの項目を見ていただけばわかるとおもいます
まだまだ自分が未熟でダメな部分がいっぱいなので
読み返しては「修正」「修正」の日々です
しかし快く読んで頂くみなさま
メッセージを下さり励ましてくださるみなさまに報いるためにもがんばります！！！
がんばります！！

よろしくお願いします！！！

ちょっと暑苦しい挨拶になりました。。。火星でした！！

その17　花の嵐　（5）

謀（はかりごと）というのはその名のごとく相対する物を様々な方面から「計る」というところからきている

それは大抵相手の内面を見て取るために「計る」ため
結果
ドロドロしめった巣窟に入り込む事になる

「さっぱりしている」

なんて事は望めない事だ

遠巻きな言葉の中に幾重にも張り巡らせた「棘」と「花」で惑わし
時には刺し
相手の中身を探っていくのだから
あまり気持ちの良いものでないのは「当然」ともいえる

が
今回にかぎって言えば中条の心中はかなり「穏やか」でむしろ「爽快」な楽しさえ感じていた

「春日山」から来た使者の一人「芝段蔵（しばだんぞう）」との問答はそういう「男らしい」清々しさがあった

中条の「口説きに来た」という言葉に
彼は言った

「私もです」と

春日山も影トラを「口説きに」来ているやつがいる
というのが
可笑しかった

そして
それは「深く」読むのならば
直江実綱が「影トラ」を「次期守護代」に擁立させようと動いている
とも考えられた

なるほど
顎をさすり得心する
晴景の様子はいまいちわからないが
直江ほどの男が気をもんでいるのが行状暗闇で頼りなさげな春日山
の主ではなく

真新しい17歳の女城主にある事は
女好きを自負する「中条藤資（なかじょうふじすけ）」には
好ましく

そして「興味」に繋がっていった

そしてさきほどまで
表屋敷の間にて「噂」の「主」影トラとの謁見をしていた

それは思い出すのも
楽しい会見だった

最初に部屋に入ってきたとき
頭を伏せていた中条は前をとおる踝(くるぶし)，足の白さに惹かれた
つい
好き者の悪い癖が
手をのばしてしまいそうになった心を抑えた
。。。女の足だな。。とほくそ笑んだ

「鳥坂(とっさか)城城主。。中条藤資にあります」

顔をあげ
初めて対面した「噂」の影トラの身体を「舐めるように」下から
じっくりと見回した
市井に溢れる「女」たちに比べて群を抜く「身の丈」だ
大きな女というのは聞いていたが
全体は作りは細く
驚くほど色の白い肌
それに
女らしい豊かな胸元につい見とれた
「17歳か。。よく育っておる。。。」と独り言を不謹慎に浮かべた

「長尾影トラである」

その声で中条はその果てのない興味の世界に引き込まれた
まさしく「女」の声だ
なのに
口調は間違わないほどに。。。。「男」なのだ

聞くだけなら
滑稽な「白拍子」のようだ
不思議な気持ちが逸ってゆくのがわかる
この「不思議」を知りたい

「美しい女城主様。。お名前をどうお呼びすればよろしいでしょうか？虎姫様？影トラ様？」

中条は「優男」らしく
口説き文句をほどよく塩ふった質問でぶつけた

が
上座にすわった影トラは変わらぬ表情のまま
となりに座す本庄実乃（ほんじょうじつの）に
どちらがいいか？と聞いた

。。。。。。

可笑しい

普通
こんな役職に就いてしまった女は「癇癪」持ちだ
男でさえ内乱充ち満ちたこの地を治めるのは大変な辛苦が伴う
それを癒すために中条は女を抱く
だが女は何で癒されたいか？
といえば
一番簡単なのは「褒める」事だ
職務に疲れイライラを募らせたしかみ面でも
「美しい」という言葉には弱い

「美しい」という言葉に顔をほころばせる
たちまち機嫌を良くするものだ。。。

だが
影トラの表情に変化はなくその言葉に興味さえ示さなかった

「影トラでよい」

平然とした顔で
中条の口説き文句を返した
。。。

いままで
数多の「女」を口説き落としてきた中条の目の前にいる女は
「美しい」には感心がないようだ

それにしても
思い出すに似ている
「虎御前」に
そして
堂々たる振る舞いは「為景」に

鬼嫁「おトラ」と
戦鬼「為景」との子か

やはり。。。
そうだな。。そんな両親では
「変わり者」にもなる

しかし
面妖だ
一方では
これほどまでに静かな物腰なのに

「黒滝を殲滅した将」

殲滅の矢面にたって指揮をし
一族を皆殺しにした将

鬼神のごとき戦に城はおろか城下の町まで全てを焼き尽くした

荒々しき将

それに恐れをなして「臣従（しんじゅう）」しにきた豪族は数多くいた
中郡（なかごおり）に守りの要として守護代家の旗を持ってきたこの「小娘」を
侮ってかかった者たちはそのほとんどが今や「この世」にいない
神速の戦
冷徹な戦果
どれをとっても追随を許さない「強さ」だった

なのに
本人が感ずる感じないを別としても「美しく」「穏やか」なのだ

中条の考えは表向き臣下の礼を深く謙るようにとりながらも
いずれはその力を
「揚北（あがきた）」に取り込んでしまおうと考えていた

いくら
強くてもまだ「話術」による戦術に長けているとは思い難かったし
若い女にありがちな「癇癪」を律する「大人の男」が抱いてやれば。
。。。

いやうまくすれば。。。

そのために
本気で口説きに来た
そして

運良ければオマケとして
「美しい」と黒田秀忠お墨付きの女将を
「手篭め」にして
自分の「側室」にしてしまえないものか？
とまで考えていたが

そういう尺で計れる「人」ではないようだ
というか

「女」なのか？
と「不可思議」な感覚を覚えていた

鎮座した姿形は「女」なのだが
感じる「気」や纏う「気」は女のもつ独特の「色」が無いのだ
だからといって
中身が「男」というわけでもない

だが
男も恐れる「殺戮」を行い「鬼」ではないかと噂された影トラの所業と
今目の前にいる姿は。。。。
一致しがたい

抱いた女は千以上の中条
なのに
一概に「女」という括りに入れられない影トラは
「不思議」な存在でしかなかった

これほどに「不可思議」な存在をどう取り込むのか
どう口説くなどという言葉は簡単に出てこなかった
というか
不可思議すぎて中条の考えていた枠を越えていた

不思議だ
まったく
不思議な方だ

だがありがたい確信もあった

頭を下げることに「抵抗」感じなかった
「嘘」であっても晴景（はるかげ）には頭は下げられない

思い返すにも許し難い晴景の「謀」
あのドロドロした感覚を陰鬱な顔に表した姿を今でも覚えている
今もそうであるなら
どれほど疎ましい「男」なのだろう

自分はああは成りたくない

むしろ
不思議でも

いやその底知れぬものに惹かれてやまない影トラを知りたくなった
個人的にはそれが「臣従」の理由であってもかまわないと思うほど
に引きつけられた

夜の宴を約束し
退出した部屋で現八に中条は言った

「今はまだわからない。。。だが「たいくつ」はしなそうだ」

と
そして続けて聞いた

「あれは本当に「女」なのか?」
中条の質問に現八は困惑の表情で返答した
「男のような面(つら)でしたか?」
「いや。。。秀忠の言ったとおり「美しかった」。。。ただ」
「ただ?」

解らなかった
あの「気」はいったい何だ?
何故
あれほどに「美しい」のに「色気」が無いのだ?

。。。
まだ時間はある
下がった部屋で着物の前をゆるめ足を崩して

少し冗談めいた返事を現八にした

「生娘（処女）なのかな？」
呆れたという感じに現八は首を振った
中条も自分に呆れた
たとえそうだとしても「色気」のない年ではないハズの影トラ。。。

「まったく不思議な方だった。。。。」
と感心なさげになっていた現八をよそにつぶやいた
不思議だから知りたい。。。
いつになく心は浮かれている
底知れない「女」に惹かれるのは「男」の性だ。。。

楽しい夜の宴を待とう
と
遠路の旅に疲れたのか目をとじた

中条たちの謁見の間
段蔵とジンは別室で待たされていた

城内の台所では
おせんと
直江の妻が珍しく声をあげて話をしていた
「名前を加当陣江様とおっしゃって。。。これ！！」

「イヤです」

配膳の支度で忙しく歩き回るおせんは唇をかみながら即答した
来客で夜の宴の準備を手伝いに来ていた「つや」は懐かしい名前に
耳をそばだてながらも手を動かした

「イヤではありません。。。父上が選んだ婿様にご挨拶を。。」
「イヤです!!」

立ち止まって
向き直ったおせんは目尻をつり上げて母の言葉に反抗した
つやはよじよじと近寄って耳を立てている

「座りなさい。。。」
直江の妻は努めて冷静にと
娘の肩を抱くとその場に座らせた

「お会いする前からそのように駄々を。。。」
「会ったこともない方だからイヤなのです!!」

直江の妻は溜息をついた
「だいたい。。父上はいつも身勝手です!府内から栃尾に行けと言
われた時もなんの相談もなく。。私は身支度もままならない状態で
ココにきて。。それを今度は。。」
おせんは言葉に詰まった
栃尾は嫌いじゃない
でも。。
たくさんの女友達たちと別れて田舎の支城に来いと呼ばれた時には
本当は泣きそうになった事を思い出した

家長である父の命は絶対だけど
年若いおせんには辛い決断も多かったのだ

「とにかく!!私は絶対「嫁」になど行きませんから!!」
「いいえ!とにかく!!お会いするのです!!」
「イヤです!!!小嶋(やたろー)殿みたいな大男だったらどうするのですか!!」

そこまで言い切るとおせんは母の手から逃げるように支度に走っていってしまい
その後を直江の妻も慌ててその後を追っていった

。。。。。。

話に耳を立てていた
つやは一人
口をとがらせながらつぶやいた

「やたろーは可愛いぞ。。。」

その17　花の嵐　（6）

栃尾の夕暮れ時は少ないながらの雪が舞い
まだ肌を刺す
冷たい風にが闇の幕を一緒に連れてきて星の見えない空に包まれる

まだまだ
寒い

それでももう何月かを越えれば
花が芽吹く季節がやってくる

私はそういう季節がとても好きだった
何者の力を借りる出なく蕩々と流れる川のように
ただその時が来るのに合わせ
美しく姿を変えていく山河が今は一番待ち遠しい

早く春風が吹き
曇った心の靄を吹き飛ばして欲しいとただ願うのみ。。。

日課の
禅を組みしずかな修練を終えた頃
部屋の前の縁側に侍女が座り待っている

この雪の季節

己の修練のために部屋にこもって「禅」を組んでいる間，外で待っていた彼女たちを
私なりに気遣い

「朝はよい」
と下がらせようとしたが
主君が起きているのに自分たちが寝ているわけにはいかないと言って引かず
今は修行に付き合うよかのようにに控えている

「主君」。。。。。

私はそういう「者」になった
なんだかわからないうちに

ただの禅僧であった私の生き方は変わってしまった
日々を戦う
長尾のために「越後」のために
終わらない諍いを終わらせるために武士になった
ただ
これだけは変わらない
静かに祈り禅を組む毎日

そんな今日は珍しく

侍女達の代わりに「秋山史郎」が来ていた
縁側の下に「申し上げます」とのごとくの姿に

「どうした？」

と
問いながらも
少しばかり嫌な予感
馬廻りが目の前にいるという事は。。。。不穏が動いているのか？
「戦」なのか？と
心がざらつく

しばらくこの地では戦はなかったのに。。
だが史郎の言葉は険しくはなかった

「揚北（あがきた）より使者が参っております」

戦で無かったことは良かった
だが
疲れる事に変わりなかった

「使者」

使者は大抵ココに来る前に「仰々しい」親書を送ってくる
実乃に言わすなら
「命が惜しい」からしい
だから
先に「命の保証」を貰うために親書を送り「機嫌伺い」をするらしい

なんとも
煩わしいうえに「不誠実」を感じるだけで腹立たしい
直に私に会いに来て
その用向きを真摯に語ってくれた方が「清々しい」と思う
こそこそと身辺を改めるのは武士の所業とは考えたくもない
だが

一族を守る者にとっては必死の「手段」らしいので聞き入れていた

そんな使者達の通いが
栃尾に赴任してきて以来
年々多くなっていた

また
黒滝の一件以来「親書」としては山ほど届いてはいた
が
雪の季節であるため
実際にココに来た者はまだいなかったし
私の「返事」待ちというこれまた腹立たしい様子見をしている者も
多かった

そういう手間を省いてココに来たのは「揚北」の者が初めてだった

屋敷の廊下を歩きながら
実乃に聞くところによれば「大物」らしい

前触れもなしに「当主」自らがやって来た

すばらしい事だ
当主が自ら赴くという態度は私には非常に好ましい
何か「義」を感じた心で襖を開いた

「鳥坂城城主，中条藤資にあります）」

駆け引きはキライだ
声を聞けばわかる
が
その男の声には緊張が無かった
男らしい太い声だが音を曲にのせるような軽やかな口調

いつも会いに来る使者たちは
何かしら「陰」を持っている
駆け引きをしにくるから
命と一族「血筋」と場合によってし「人質」。。。色々なしがらみ
を背負った駆け引きは私の心に「闇」を引っ張り出す
はき出され並ぶ
くだらない「言い訳」に私の心は沈み「黒い意識」の中に浸かっる
そんな私の顔を見ると大抵の使者は緊張した様子になる

膝を震わす者
汗を流す者
色々な形で「恐怖」を表す
その態度に

私は相手の曇った野心が見えて
失礼な「輩」と断じ声を荒げ答える

穏便な答えを待っている狡賢い顔を一喝する

だが目の前の
中条はそういう感じが全然なかった
伏せた姿から私はすぐに顔を見たくなった
「くるしゅうない面をあげられよ」

中条。。。。
揚北でも一目置かれる男は私の声に身じろぎせず背を正した
兄上と変わらぬぐらいの歳
顎髭と口ひげは今まで見たどの武将より小綺麗にまとめられている
少し目尻が垂れた感じだが
眼孔は活き活きとしている
そうだ
逃げる事なく私をよく見ている事に気がつく

少しの沈黙
中条が私の名にを見ているのか?。。。。
無言で目を合わせる

中条は照れくさそうに微笑んで口を開いた
それは今までにない心和ます「会談」の始まりになった

「美しい女城主様。。お名前をどうお呼びすればよろしいでしょうか?虎姫様?影トラ様?」

私は
表情こそ変えなかったが
瞬時にこの「駆け引き」意外の質問を方眉をピクリとあげた中条の
前で真剣に考えてしまった

虎姫？
その名は私にとっては「母上」の若かりし日の名だ
でも

私も「トラ」だ。。。
そう言えば
侍女達やおせん。。多英や，つやは私の事を
「おトラ様」と呼ぶ。。。

うん。。
それは女達が私を呼ぶときの名前だ。。。けど。。。やっぱり私も
「トラ」だ。。。

あやうく一人で思案の淵に落ち込みそうだったが間があくのもかっ
こが悪い
実乃に聞いてみた
「どっちがいいかな？」
「影トラ様です」

実乃は呆れた顔で返した
が
私に意見を返して実乃にもこの妙な「掛け合い」のような質問には
驚いていたようだった

そりゃそうだ

そんな質問を平然としてのけた者はいなかったのだ
恐れず
私を見る彼に答えた

「影トラでよい」

印象は
おかしな「男」だ

そんな洒脱な会話がおよそ「臣従」に来た使者からでるとは。。
しかし。
なかなかだ
少しの会見の間に
中条は「揚北衆」を代表して頭を深く伏した

笑いそうな会見ではあったが
それが
表向きか?
はたまた裏かはまだ計りかねた

手管が変わったというだけでは?
「笑いながらの謀」。。。。

計りかねる
怯えた顔よりわかりにくい「真実」を深く知りたくもなった
割り切れた陰の正体を

退出の際に私は中条に言った
「今夜はココに泊まられればよろしい屋敷で酒宴でもいたそうと思うがいかがか？」
自分から宴に呼んでみた
中条の返事は明快で怯むことのない言葉として返ってきた
「よろこんで」

「見えぬ男でしたな」
表屋敷の渡り
台所前の喧噪の間をぬって
実乃はいつもの重い口調で私に言った

「そうだな」
懐疑の言葉とは裏腹に私は初めて「面と向かった」中条の真意を知りたくなっていた

会見で動じなかった男は初めてで
その上で
見え隠れする影が「陰鬱」な感じにぼやけたものでない事を感じさせていた
むしろ
鮮明な「使命」を持っている？

それを知るのも私の勤めだ

「酒でも飲んで気を許せば何か語るだろう。。割り切れる男のようだ」

「そのような。。試されるのですか?」

実乃は慎重な面持ちだが

大物「揚北衆」でも名のある男の来城の「意味」は確かめたかったに違いない

「宴」については反対はしなかった

素直に

「臣従」しにきたわけではない。。。。きっと

何かを「計って」いる。。。

策謀。。知謀

疲れる事だ。。。

私はかぶりをふってやれやれという仕草をしてみせながら

顔をしかめた

飲まなきゃやってられない

卑屈に笑った

「おトラ様!」

歪んだ笑みの私を見つけた，つやの声が耳に入った

屋敷の台所に向かうため篭にたくさんの薪を入れて運んでいた
すでに顔が煤けている
袖で顔を拭いながらまん丸な目を向けて私に言った

「陣江さん戻ってきたの？」
「なんでさ？」

突然出た名前におもわずの即答をしてしまった

春日山ではついに会う事も出来なかったし
帰りは黒滝の事で忘れてた
こっちにもどって来る時は。。。「月の障り」で。。。思い浮かびもしなかった名前だ

つやは
俯いて上目遣いで困ったように答えた
「さっきせんちゃんが母様と話してたの。。。陣江さんが」

私は顔をあげ
実乃の方を向いた
実乃はなんだか気まずそうな表情

「そうなの？」
咳払いをして
「はい。。。加当陣江も直江様の使者として」

急に心は晴れた
なんと！！
禅問答の相手が帰ってきた！！
朝の禅は良い結果も運んできてくれた！

謀の闇で疲れていた私は旧友の帰参に
実乃や
つやの
続く言葉など耳に入らなかった

「どこだ！！会うぞ！！」

そういって屋敷の渡りを走っていった

その17　花の嵐　（7）

鬱積した気持ちを発散したかった

正直
「戦」もうんざりだし
豪族たちとの駆け引きばかりの「臣従」を裁くのも
あきあきしていた

ジン。。。。。

二年前ココを出て行った直江に従って「兵法」を学ぶために仕官して
。。。。。
何を学んできたか？

屋敷の廊下を小走りに色々と考えた
春日山に戻った時も
なんやかんやでうやむやになってしまっていた

フフフ
顔か　。
さっきのような「歪んだ」笑みではなく
本当に口に出してしまえるような笑いで明るくなり自分が浮かれて
いる事がわかる

とっちめてやる！！！

私は屋敷の北側にある部屋を目指した
「揚北」の中条と会見したのは大きな間だったが
春日山の使者は留め置きされていた
そんな「重要」な用向きでないからだろう

帰参の挨拶ぐらいだろう

途中
侍女の何人かが
私に何か言おうとしていたがおかまいなく進み襖をあけた

「久しぶりだ!!ジン!!」

部屋の正面向かいに座った大柄な男がジンだ
すぐにわかった
身なりは良くなり身体は大きくなっていたが顔はそんなに変わってない
しいてあげるなら
生意気に髷を作っている頭

私を見あげた
ジンは
目を丸くして驚いたマヌケ顔になっている
それを私が襖を開けたときに伏していた男が気がつき
ジンの頭を髷ことひっつかまえると

「頭をさげろ！！」

と勢いよく板間に叩きつけた
音高く板間にデコをぶつけるジン

「芝段蔵（しばだんぞう）にございます！」

ジンの頭を抑えた男は
使命感の強そうな声で名前をなのった

「うん。苦しくない面をあげよ」
そう言いながらジンの真ん前にそのまま座った

ジンは頭をくらくらさせながら面をあげた
デコが赤くなっている

「すこしはきちんとした身なりになったね」
顔こそ昔とかわらなかったジンだが
しっかり武士（もののふ）になっていた直垂（ひれたれ）もよく似合っているし
着こなしも美しい

私の褒め言葉に
頭を抑えながら
ジンは口ごもりながら「選ぶ」ように答えた

「ああっと。。影トラ様もお久しぶりにございます。。」

？

なんだそのぎこちないしゃべり方は？

「トラでいいぞ！」

こんなとこで固まられても面白くない
それにしても。。

「立て！！立て！！」

ジンの着物を引っ張って起こした
やっぱり。。。

「う～ん。。背は抜けなんだか！！」

私もたいがい大きくなった
他の侍女たちと比べるなんておかしいほど
家臣たちと同じぐらいの身の丈でやたろー衆を除けば「男衆」とは
かわらないぐらいになってはいたが
立ち上がったジンの身の丈は
私より頭半分以上は大きかった

昔とちっとも変わらない尺の差だ
ジンの胸をバンバン叩いて

「またでかくなって！！けしからん！！」

と肩を押して座らせた
「兵法の修行はどうであった？」

聞きたい事がいっぱいだった
こんなに楽しい気持ちになれたのは本当に久しぶりだ

「はい。。直江様には良き指導をしていただき。。」
「硬いな！！」

ジンに改まってしゃべられるのがむず痒い
そういう「作法」も学んできたのであろうがこんなに間近で固まられると
なんだか
私が恥ずかしい

「酒でも用意させるか？」

もう今日は
昼間から浮かれてしまおう

私はそういうと座ったまま後ろを向いた
そこには
おせんと直江の妻が少し困った顔をして座っていた

「酒を用意しておくれ」

私はおせんに向かって言った

「恐れながら。。影トラ様」
私の指示を遮ったのは先にあいさつのあった男
段蔵だった

「うん。。どうした」
「只今「婚儀」の話についての相談をしておりましたゆえ。。。」

段蔵の言葉を慌てた様子でジンが遮って前に出た
「また後で良いではないか！！」
その言葉を塞ぎジンの顎を平手ではね上げて平然と段蔵は続けた
「今しがた本題に入ったところでございますゆえ酒はしばし。。」
なんだ？

「誰か祝言をあげるのか？」
「いや。。だから後で」
弾かれたジンはもどって段蔵の肩を掴んだが今度は
顔を横に叩かれ
そんなドタバタさえ
段蔵は気にもせず前に乗り出して続けた
「直江実綱（なおえさねつな）様ご息女「おせん」様のです」

おせん？！

私はすぐ後ろに座っていたおせんを見た
仕立ての良い
小袖に着替えたおせんの姿はとっても上品な「女人」に見せている
顔も薄く化粧をしているのか
いつもより大人びてみえた
そういえば１５歳
もうそんな歳になっていたのか。。。

「おせん。。。」

思い出せば
ジンが栃尾から春日山に戻ったとき以来

入れ替わりで私の身の回りの仕事を甲斐甲斐しくしてくれた
時に「癇癪」を起こし物に当たり散らす私を諫めたり
励ましたり
叱られたりもした
新しい直垂(ひれたれ)を去年何着も繕ってもらった

そうか
「嫁」に行くのか
長くココに引き留めてしまっていた

「ところで相手の殿方は誰だ?」

懐かしい気持ちと
おせんが「嫁」に行ってしまうと寂しくなるな。。という思いで
少し潤んでしまった目をふせながら
それでも「祝って」やらねばという気持ちで私は聞いた
でも
寂しさが募ってしまい
声が震えてしまったのを気づかれたのか
おせんも顔を伏せている

願うよおせん
良き殿方のところに行って欲しい
そんな
私の問いに段蔵が答えた

「ココにいます「加当陣江」です」

そうか
ジンとか。。。
そうか。。
良き殿方。。。
？

「へっ？」

聞き慣れた名前が戻ってきて
一度混乱した頭で変な声を出してしまった
言葉を失ったままジンを見た

先に段蔵に平手で叩かれた続けたジンはあちこちを赤くしたまま
気まずそうに顔を横に向けた

「ジンなの？」

今度はおせんの方を見た
なにやら頬が赤い
何だこれは？
どうなってるんだ？
もう一度ジンの方に向かって聞いた

「ジンが婿なの？」
段蔵が答えた
「直江様直々ご指名まことに果報者にございます」
と喜びいっぱいの声で返答し深く頭を下げた

よくわからないぞ?
おせんの方を見た
気恥ずかしそうに頭を下げる
もう一度ジンを見る

「ジン。。。。祝言あげるんだ。。。。」

突然の事に私はただ呆けるだけだった

その17　花の嵐　（8）

宴は続いていた
酒も何杯も飲んだ。。。

諸将の喧噪は聞き流す強い風の日のような過ごし方
何も耳に届かなかった
何度か
実乃が私に耳打ちをして「会釈」する程度の事だった

酒の味がわからない

「加当陣江とおせん様の婚儀について。。。」

まさか
ジンが「嫁」を貰うなど考えた事もなかった
元々
私達は「僧侶」だ

俗世を斬り
御仏の世界に入った人にとって伴侶とは
そうだ
ある意味では

仏の道こそが「伴侶」だった。。。。ハズ。。。

いや
ちがう
そういう信心に即した憶測じゃなくって。。。
靄がかかった不透明な感情

私はどうしたらイイ？

この気持ちはなんなんだ？

まるで
置いてけぼりを食らわされた子供のような。。。

何か。。。

「どうしました？」
考え事に没頭していた私の前に中条が徳利をもって現れた
「影トラ様はお疲れですか？お顔が優れませんが？」

首を少し振った
酒宴を誘った私が具合を悪くしていたのでは「駆け引き」もはじまらない
「いやいや」

。。。。。

「中条殿が奥方と会われたのはいくつの頃ですか？」

私はぼんやりした感じで目の前に来た彼に質問した

中条は手に持った徳利を床に降ろして
少し離れた所に腰掛けて答えた

「十五の頃だったと覚えています。」

十五。。。。

。。

中条は一瞬怪訝な表情になったが
話の腰をおる事なく質問をしてきた

「十五の時に想う方がいらっしゃいましたか？」

「いや。。。いない」

私は「想う」というのがわからなかった
おせんの
ほんのり赤のそまった頬を思い出す
あれが
想っている人の表情なのだろうか？

私の態度がおかしかったのか
実乃が徳利を持ち
中条に向けた

「中条殿これを機に「揚北」とのよい縁（えにし）を深められる事を期待しております」

「縁か。。。。」

実乃から酒を受け取りながら私を見ている
中条を前にこぼした

「奥方とはもう何年の縁になる？」
中条は杯を干して
膝に手を落とすと悲しそうな笑みで答えた

「十年前に身罷り（みまかり）ました」

飄々とした態度の中条からでた言葉に
私は顔を伏せた
が
中条は続けた

「しかし初めてあった時はかなり。。。引きました」
そういうと笑って続けた
中条の妻は
揚北の地元豪族の娘だった
十五の中条はいきなり降ってわいた「嫁」の話にかなり困惑した事
をおもしろ可笑しく語った

「今まで見たどんな女より。。。醜女（しこめ）（注．美女の対義語）でして。。。」

と
その容姿がかなり細く「骨」かと思い
祝言の席から脱兎のごとくに
逃げ出しそうになったと

酒の席での中条の話が可笑しい事で
栃尾の諸将も集まりだした中
私は聞いた

「嫌っていたのか?」
「まぁ。。。あまり好きな女ではなかったですね。。」

大笑いの間
徳利を私に差し出しながら中条は言った

「ただ良くできた女でした」
「良くできた?」

杯につがれた酒に中条は
袂から懐紙に包んだ春を待つ「芽」を浮かべた

「奥（奥方）の名は「茅（かや）」と言いました。。いつも私を待っていました。。待っていてくれました。」

「待っていてくれた?」

大笑いだった間は静かになり
彼の次の言葉を私は待った

「男は我が儘な物なのかもしれません。。茅を嫌った私はすぐに側室を二人貰い。。奥の寝所には寄りつきもしませんでした」

心当たりがあるのか
急に俯く諸将もいたりする中，語った

子のない正室は。。。惨めだ
茅を長くないがしろにした事を淡々と告げた
豪族との約束の手前
手際よく執政はしていったが。。。自分の気晴らしに女遊びを続け
何人もの子供を城に。。。茅に預けては知らぬ顔をした事

「だが離縁はしない。。。まさに政(まつりごと)のためだけの「正室」でした」

「それが「よく出来た」という事なのか？」

私は少し苛々してきていた
もし
ジンがおせんをそんな風に扱ったのなら許さない

「いやいや違います。。。天罰覿面！側室の二人は子を成した後いく年もたたぬうちに早世。。。その子達も疱瘡(ほうそう)にかかって両の目の光を失ったり。熱で寝込んでしまったり。。」

中条は自分で手酌して酒をあおり続けた

「荒れました。。今まで正室と子供を作らなかった罰だと親類縁者に罵られ。女遊びに放蕩三昧で作った子達の母はみなそれに乗じて「我が子が嫡子」と騒ぎだし。。」
自分の居場所を見失ってしまっていた事に気がついた

「何もかもを捨ててしまいたくなった」

遠い目で続けた

そんな失意の思いと惨めさで屋敷をうろついた時の事だった
今まで近寄った事もない屋敷の北の部屋
茅の部屋の前を通った時，気がついた

朝となく昼となく夜となく。。。。
静かに続く読経に
何をしている？
荒れて酒浸りになりながらもその部屋の様子をうかがった
何人かの子供たちが出入りをしている

かつて
遊びで作った子達
母達はどこかに消えてしまったりで茅に預けた子達だ

「さあ。。手を合わせてお祈りしましょう」

それは祝言で聞いたきりだった茅の声

何をしている？
何を祈っている？

不思議な空間に吸い寄せられるように中条は茅の部屋の襖を開けた
部屋には数人の子供たちと
茅が仏壇に向かっていっしんに祈りを捧げていた

「何をしている。。」

何年ぶりに見た茅の顔は相変わらず痩せた細い面だった
「祈っております」

「何を？」

「子供たちの病が治る事を」
痩せた女の声とは思えない毅然とし張りのある声に
逆に中条は震える声で問うた

「オマエの子供じゃないのに。。。」

「みな。。あなた様のお子ですから。。。」

中条は泣いた
女も子供も「政」の道具ぐらいに思ってきた
そのもっとも最たる者として酷い扱いを続けた「茅」が
正室として立派に勤めを
子供たちを育て
祈ること
慈しむ事を教えていたことにひれ伏した

今まで
何をしてきたのだ。。。オレは。。。

こんなところに
自分を想い続けてくれた女を閉じこめ
自分だけで生きているなどと。。。

それ以来茅を表の屋敷に移し
子供たちから側室たちの世話まで一切を「責任職」として任せた

そこまで話して顔を上げた

「私の不出来で茅との間に子を作る事は出来ませんでした。。。しかし。。茅はどちらかという中条の家におけるもう一人の大きな母としてたくさんの子供たちに慕われ。。私の帰れる場所になってくれました。。。。」

「本当によく出来た女でした」

その顔は真実を語っていた
私の顔には涙がいっぱいになっていた
中条はかなりおどろいた様子でそれでも実乃に進められ酒を煽った
私は泣きながら聞いた
もう涙を止める事は出来なかった

「それだけの事を成した奥（奥方）を好いてはいなかったのか？」
杯を降ろした中条は困ったような照れくさそうな。。。それでも落ち着いて答えた

「大きな女（ひと）でした男と変わらぬ仕事をしてくれた茅にただ「好いた」など。。恥ずかしくて」

「そうか。。。良き奥方であったな。。会いたかった」
なんて大きな女。。。。
心から感心した私の言葉に中条はひれ伏した

宴が終わり
自室の前の縁側に足を投げ出して私は酒に浸っていた
時折吹く風で
木々から雪が舞い降りる

中条の奥方はなんと大きな「慈愛」を持った方だったのだろう
良い話を聞いた

杯を高く掲げた
雪が入ってくれないかと待った
ジンにも話してやろう。。。。良き「夫婦（めおと）」になれと

あのもやもやは
少し晴れたか？

私は中条の奥方のように
より大きな仕事をこなし「慈愛」の心を。。。。持ち。。。。

「あれ。。。。」

急に涙が溢れ出てしまった
さっきも泣いた
今も「何か」に引っかかって涙が。。。。溢れる

わからない感情

両手で杯を押さえ
自分が一人きりである事に震えた。。。。
私は
私にも

中条の奥方のような方が。。。。いて欲しい。。。。

私だって疲れる。。。

「お身体に障りますよ」
いつきたのか「お猪」が着物を肩に掛けながら言った
ボロボロに泣いている私は顔を拭う

「猪は実乃の事。。好いてる?」
と聞いた

「もちろんです。。。でも今はおトラ様の方が大切ですよ」

その顔は悲しそうに見えた
手を引かれ部屋に戻る少しの間
私は月を探したが
空はにじむばかりで星さえ見つけられなかった

身体の奥に穴が開いた。。。。
そんな痛みが心に残った

その17　花の嵐　（8）（後書き）

風林火山。。。

後書きからコンニチワ～～～ヒボシです

ｙｏｕｔｕｂｅでなんと２５話まで見ました（爆）
文明の利器万歳！！！
ところで
山本勘助ですが
当然「カイビョウヲトラ」でもそのうち出てきますが
風林火山の勘助は
私のイメージとはだいぶんちがってちょっと戸惑いました

えらく
立派な体格だぁ。。。
足は引きずってるけど。。。
身体なんかめっちゃ良い感じに鍛えられてるし
もっと
線の細い「狡猾」そうな人ってイメージがあるんですよヒボシには
ただ
ドラマですからね
ましてや主人公ですから
そんなメタメタなカッコの人ってわけにもいきませんよね（藁）
武田晴信は。。。ハハハハなかなか良かったです
今までにない感じの法性院様（藁）
後めっちゃ怖いのは諏訪御料人様事ゆう姫。。。
顔怖いよぉぉ
癇癪持ちだよぉぉぉ

この先「入水」自殺しちゃう理由とかも見え隠れしてますね？

ドラマだから自殺はしないのかな？

そんな感じで
小説のイメージモデルになる人はいませんでしたが
なかなか
楽しいですね！！大河！！
これからも見ていきます！！！

それではまた後書きでお会いしましょ～～～

その17　花の嵐　（9）

つやは今朝も
城の台所で薪運びの仕事を手伝っていた
夏の暑い時期は結構にしんどい仕事だが冬のこの時期は快適だった

思い出せば
幼き日（といってもつやはまだ九歳だが）
ボロのあばら屋状態だった寺社に住み着いて
寝る間に雪や風が切り込むように吹き込み
身体を凍えさせ明日まで「生きて」いられる？
なんて心配な日々を送ってきた

城の台所は竈（かまど）が二つもあり
そこに薪を篭で持ってくるという重労働だけど
凍える事はない
つやにとって城での仕事は楽しくてしかたない事だった

数日前から
多英が風邪をこじらして
寝込んでいるので変わって配膳もこなしていたが
ようやく一段落ついて食事をとり始めたところだった

目の前に座る
浮かれている様子の「おせん」には最初から気がついていた
いつもなら
すました顔でテキパキと仕事をしていくおせんは
ココ数日「柔らかな」雰囲気を醸し出していた

ただ
つやはそれが少し「イヤ」だった

おせんは「見合い」をした
この話は数日前
春日山から来た使者と共にもたらされた

それ事態はつやにとっても珍しい事ではなかったのだが。。。

許嫁になって
陣江の「嫁」に行く事になった。。。。

という
中身の話には。。。少々戸惑っていた

「どうしたの早く頂きなさい」
箸を持ったまま考えこんでしまっていた
つやを
おせんがいつもの調子で「所作」の一環として叱った

「箸を上げたまま考え事をしてはいけません」

城の仕事を本格的に手伝うようになってからは
より
おせんがこういった部分を
多英共々つやにもきつく教えていた
そう
キツイ口調でだ
でも今日「も」ちがう

まるで子供を諭すように柔らかくしゃべる
別の人みたい。。。。

多英がいないと二人きりの部屋だった

「せんちゃん嫁に行くの？」

突然の
つやの質問に目を丸くしたおせんはすぐにその頬を染めたが
手本通り
箸を膳に置くと
改まって言った

「そうね。。私も，もう十六ですから。。」

伏し目がちにいうその姿に
つやは不満顔になった
その話の事では
台所で
あれほど「会う」事をイヤだと声を荒げていたのに
最近はうって変わったように「浮ついて」いる。。。。

「初めて会ったんでしょ。。。。ホントに好きなの？」

おせんは少し面食らったが
つやは言葉を選ぶという事はまだ知らない子供だ
と
思いあわてず返事した

「ご縁というものがあるでしょ。。。父上の選んだお方だし。。」
「やたろーみたいに大男じゃないから?」

投げるよな即答
今度のつやの言葉にすぐに返事がでなかった
聞かれていた事に気がついた

「つや。。。立ち聞きは良くないですよ」
と
いかにも大人な返答で釘を刺そうとしたのを遮って
つや続けた

「陣江さんはせんちゃんの事「好き」って言ったの?」

おせんはたじろいでしまった
なんでそんな事を?聞くの?と
それに
何?
つやは怒っている感じ?

「ねぇ!!ホントに好きなの?どうして陣江さんが好きなの?」

間髪を開けず
あきらかに
怒っている声で詰め寄ってきた

「どうしたの?」

おせんのほうは驚いて少し身体をひいた

つやはいつも「元気印」の子だが
怒ったりする事はめったにない子だ

詰め寄られ
返答に困っていたおせんを見ながらつやはもう一度聞いた

「ホントに好きなの？」
おせんは困った
「好き」という言葉を簡単に出すことはためらった
というより
まだ気恥ずかしかった

まさか自分が「一目惚れ」してしまったなどと言えなかった

「まだ。。。これから良く知り合ってゆく人ですからね。。」
と心を隠し冷静に切り返しをした
「わからないんだ」
つやは怒った顔のまま即答した
おせんはそれでも努めて静かに返した

「わからないから「知り合って」いくのよ。。」

。。。。。。

「納得いかない。。」

つやはむくれたまま箸を降ろした
おせんはつやが「婚儀」に反対している事に気がついた
と同時に
ひょっとして
嫁に行ってしまう自分の事を「寂しい」と思ってこんなに駄々をこねているのかと思い
微笑ましくなって

「つや。。私は嫁に行っても。。」

と
気持ちを新たに話始めた言葉をつやは首を振って拒否した

「陣江さんは「おトラ様」が好きなんだよ!!どうしてせんちゃんの婿になるの?せんちゃんは好きでもないのに嫁になるの?!」

「お。。。おトラ様。。。?」

その言葉は深く胸に刺さったかの様子
おせんの目はつやを見ているが
何がおこったのかわからないという面持ちで言葉は詰まったままで

「昔からそうなんだから。。。」

つやも少し声の質を和らげ
茫然自失になっているおせんから身体をひいて小さく言った

おせんは
目の前の膳を見ながら声を震わした

「おトラ様。。。おトラ様は。。。。主君よ。。。家臣を婿になど。。。」

「これ！」

二人の喧噪を叱ったのは直江の妻だった

二人はいつ襖を開かれたのかさえ気がつかないほど詰問に熱を上げていたのだ
叱りを受けたにも関わらず
震える状況から抜け出せないおせんをよそに
つやは飯をかき込むと立ち上がって
ぺこりと会釈して足早に出て行ってしまった

午後
仕事を納めたおせんは

表屋敷から離れた二の曲輪の陣江達が寝泊まりしている屋敷に上がっていた

春が近づいてきたせいか
雪の一日という日はなくなったが溶けない雪は氷の板になり足下を悪くしていた
その小道を陣江は作務衣で掃除をしていたところだった

「すいません。。。こんなカッコで。。」

部屋着が「作務衣」なのは寺の名残だった

「いいえ。。」
「落ち着かなくて。。。」

春日山から陣江たちがココについて数日
その間「トラ」に会えたのはたった一回だった
最初の日のあの「気まずい」雰囲気で顔を背けたジンの前をトラもまた気まずそうに部屋を出て行った

あの日だけだった
落ち着かない気持ちが，やらなくてもイイ野良仕事まがいな掃除に走らせていた

段蔵は表屋敷に上がったきりココには帰ってこないし。。
おせんがココに通う事に反対する者もいない状態。。
色んな意味で陣江は気持ちの焦りを隠せなくなってきていた

「あの。。。」

「はい」

留め置かれた屋敷の居間で「雪見」をしながら寄り添うような近さにいるおせんは
静かでゆったりとした声で
陣江の目を見つめて返事をした

「いつ。。。影トラ様にお目通り適いますか。。。ねぇ。。。」

トラを「トラ」と呼ぶのは禁句だ
主君なのだから
ぎくしゃくした言葉を並べながら聞いた

おせんは
うつむきつつしばらくあけた後に答えた

「「影トラ様」はお忙しい方です家臣になどめったにお会いになりませんわ」

その声は冷たく割り切った響きがあった

が
陣江にはそれに気がつくだけの余裕はなかった
顔をあげ名残惜しそうに表屋敷の方角を見ようとした
その時おせんの手はいつになく強い力で陣江の手をとった

「そんな事より。。。陣江様の事。。もっと知りとうございます」

と身体を近づけた
柔らかく小さな手

少しの風で陣江の身体に触れる黒い髪
細い肩
驚きに目を丸くした陣江の胸にためらうことなく顔を寄せた

「陣江様。。。良き夫婦（めおと）になりましょう。。。」

潤んだ瞳は本気の「炎」を燃やしていた事に陣江は気がつくことはできなかった

その１７　花の嵐　（１０）（前書き）

またも。。。

書きこぼしがあったので多少の修正をしました
すいません。。すいません！！
暑いせいでしょうか？

かなり疲労してます！！
炭酸水をせっせっと飲んで補給してます！！
健康第一でがんばっていきます！！！

その17　花の嵐　（10）

「芝段蔵は越後のため「大儀」を見据え働いております」

春日山から来た使者
段蔵の毅然とした態度に実乃は暗雲を感ぜずにはいられなかった

黒滝仕置きの件を
見聞者として告げる前に
まるで釘でも刺すかのように段蔵は実乃の目をしっかと見て
並ぶ
栃尾の諸将達をも見回し言った

「事は重大であります」

戸を閉め切った小さな間に
小嶋弥太郎（やたろー）
安田長秀
金津新兵衛
その他
幾人かの男たちは深刻な面持ちで押し黙った

静寂の間の中
段蔵は春日山の現状を簡潔に話た
それは暗躍充ち満ちたる謀

「なんと。。。政景（まさかげ）どのが入城なさったとは。。。」

長尾政景は守護代晴景と仇敵とも言われた間柄
その
二人が「意気投合」し
春日山に「陣」を張った理由は。。。。
何故。。。「今更」の事態だ

一同に会した者はみな暗い表情で言葉をだそうとはしなかった
考えたくない
思いたくない「事態」が起ころうとしている。。。

「晴景様は。。。。どうしている?」

実乃は灯籠に目をやりながら
額をおさえ沈痛な面持ちで聞いた

「戦の「形相」になっております」

「本性を現したか」
即答したのは金津だった
その顔は他の諸将が表している苦悩とは遠い表情で
ともすれば笑っているようにも見える

実乃は金津を見て言った
「何故だ。。。影トラ様は十分に「越後」に尽くしているではないか？」

「そうだ。。誰よりもお尽くしになっている。。名ばかりの守護代よりも！！」

金津の顔は不遜に満ちていた
晴景を嫌悪する意志をありありと表している
そして勢い激するように続けた

「今まで自分では出来なかった事を成した影トラ様を「嫉んでいる」のだろう！！」

片膝をあげ立ちあがらんばかりの勢いの金津に
待てと手を挙げ
実乃は段蔵に聞いた

「何を考えてそんな事に？」
「影トラ様の偉業を快く思っていらっしゃいません」

実乃は絶句した
なんと。。。
他に揃った諸将たちも顔をしかめた

「しかし。。。すべては「長尾」のため。。。ひいては「越後」のためではないか？」

影トラは私欲で戦ってきたわけではない
それはココにいる者達なら誰もが知っている事だ
口に出していつもそう言う
「守護代家の旗を掲げ「越後」を良き地にしたい」

目を輝かせ話す影トラ
だが
ひとたび戦に赴けば心を「鬼」し泣きながら戦う
それとて「越後」のためと。。。。泣く姿。。。。

なのに
今更その「戦」ぶりが気に入らないなど難癖ではないか!!

実乃の目は怒りに燃えた
何故
その働きぶりを一度として「褒めては」くださらないのか?
それどころか「嫉む」とは。。。

「何故に。。。。」

今度は金津に変わって板間をたたき割ってしまいそうに拳を固める
実乃に
段蔵は言った

「影トラ様の名が高まった事が気に入らないのでしょう」

実乃は言葉尻をたたきつぶすように床に拳を打ち付けた

「気に入らない？だと名が高まったのは当然の事ではないか！！みごとな働きぶりなのだから！！」
怒した実乃を両手で留まらせるように開いた段蔵は
努めて冷静に続けた

「その働きぶりに「態度」で返礼してしまった方がいた事が。。。
「問題」なのかもしれません」

みな振り返り
金津の顔を見た
当然だといわんばかりの金津は答えた

「真に「越後」に尽くされた方。。尽くされる方に臣従するのは当たり前の事だ」

「そして「揚北衆（あがきたしゅう）」もそう考えた。。。」

段蔵の言葉に実乃は目が覚めた
今まで頭を下げる事を「良し」としなかった者達が長尾の「影トラ」を選んだ
それが
晴景には許し難い事だったのだ
声が震えた

「戦を。。。。望んで。。。。いる？」

「いいえ」
実乃の不安を打ち消すように段蔵は冷静に応えた

「ただ。。」

「戦を望まぬなら何故に政景が入城した?!」
段蔵の声を遮り
今度は
金津が床を叩いた

「金津!」

片手をあげ再度金津をなだめて
実乃は問うた

「ただ。。。。なんだ?」

戦は望んではいない
ならば
何故春日山は物々しい事になっているのだ?
と続けた

「戦は守護代様の望む事ではないからです」

戦を望まないのに
「戦」の顔になっている
何と
戦いたいのか?

「じゃあ誰が敵なんだぁ?」

実乃が頭で廻らしていた疑問をやたろーがそのまま段蔵にぶつけた

諸将もそれが聞きたかった
わかっていても

「自らを追い落とす勢いを持つ者。。。。影トラ様です」

段蔵の口からでた答えはわかりきっていても痛恨であった
実乃は目を閉じた

「決断を迫られている」
実乃は裏屋敷の密談からもどり
猪に命じて
直江の妻を呼び出していた

屋敷に通された内儀の方は
すで苦痛を走らせた眉間の表情

「おせん殿の婚儀の件。。。。」
重い口を開いた実乃に内儀は静かに頷くと

「わかっております」

と答えた

もともと
おせんの婚儀の話は「隠れ蓑」だった
それは
栃尾に到着しだいおせんに知らされる事なく「陣江」に知らされる
予定だったが
段蔵の独断で「公(おおやけ)」のものとされてしまった
理由は一つ
分かりきった理由

「今。。。影トラ様を失えません」

それが段蔵の弁であり
ひいては「直江」の言葉でもあり

実乃および「栃尾衆」「栖吉衆」の選んだ結論だった

ただの「嫉み」で影トラを失っていいわけがなかった
影トラは希望だった
乱れた「越後」をたった二年で半分は平定した強き将だ

「自分では何も成し得なかった者」
晴景を助け
「良き治世の助け手」になろうとする影トラを誅殺しようなどあり

得ない事だ
断じられては困るのだ

そして
ココにきて事態は急転していた
まさかの大物「中条藤資（なかじょうふじすけ）」の臣従

晴景にはついに頭をさげなかった「揚北衆（あがきたしゅう）」は影トラに平伏したのだ
阿賀野川から向こうにすむ
巨大だった豪族集団は
若き「トラ」を選び「臣従」を表した

それもわざと

春日山に出向かず
栃尾に来て

それは
近々晴景の耳にもはいる
大きな嫉みの「楔（くさび）」となって打ち込まれてしまう

事ここに至って
今更
影トラを無くしての「越後」統一などはありえなかった
もし
嫉み程度の事で影トラを無くしてしまったら
誰が再び「長尾」に従うか？
今まで栃尾でまとめてきた全ては「灰燼」にきし

栃尾も
栖吉も
揚北も
「越後」の混乱は必至の状況だ

実乃は
残念していた
かつて
影トラをかばい寺に入れたとき
遠巻きながらの「守」を仰せつかっていた

虎御前は言った

「この子は越後のために大きな仕事をする子なのです」

そのとおり
「影トラ」は偉業をなした
そして
揚北が臣従を示した時はこれで越後は平穏に統一されていくと心を
撫で下ろしたばかりだった
その功績を
守護代は大いに喜び
影トラは「責務」から解かれるハズだった

そして
しかるべき時に影トラにも「婚儀」があり。。。
それがさらに
この国を大きく発展させていく事だろうと。。。。。

実乃は目頭を熱くしていた
娘を持つ父としての想いまでもがかさなってしまってその行く末を
良き「婿」を得てとまで考えていたのに。。。

なのに
なんと
浅はかな事か。。。嫉妬に狂った守護代は「敵」は影トラと決め
その
存在を「消して」しまおうとしている
自分を見失った判断が暴走し始めているのだ

。。。。。

「おトラ様が可哀想です。。。」

もしもの時は
戦になるだろうと告げた実乃に
猪は辛抱しきれなかったのかこぼした

実乃の残念の中にもそれはあった事
十七歳の「女城主」に課された「希望」はあまりにも重いものだった
当座「女」という人生からは遠いものになっていた

おせんの「婚儀」の事だったてそうだ
隠れ蓑だった婚儀は「本物」になって
おトラはさらに「戦」の道に進まねばならなくなった

その相手「加当陣江」

。。。。。なんたる皮肉。。。。。

「加当陣江」と「おトラ」が惹かれあっている事は栃尾衆の女達は
薄々気がついていた
身分違いの「恋」であったため
実乃は警戒し
直江によって「引き離す」事さえしたが
二年の後に戻ってきた
陣江を見たときにの武士姿に「武功」さえ適えばその「婿」も「良し」ではないか？
とさえ思った

だが
ついに陣江を
表屋敷にあげたのは一度だけだった
再会を楽しみにしていた
二人が知るには重すぎる「激流」そんな姿を見るのは辛い事に決まっているのだから。。。

急転する大きな「うねり」の中で影トラに「ただの女」なってもらっては困るのだ

猪は涙ぐんだ

「私は今でも女ですから。。。わかりますのよ。。。好いた男を目の前で他の女(おなご)の「婿」になど。。。」

思い出すにもあまりにもおトラが不憫でならなかった
例の「月の障り」の一件にしたって
女であるおトラは「女」であるための所作を一切知らない
誰も教えない

母である虎御前は何故「女」の生き方を教えなかったのか？
不思議で。。。
そして
ただ不謹慎にも「哀れ」だった

袖で瞳をぬぐいながら亭主を責めるように言った

「貴方さまや他の殿方が「おトラ」様に「何を」見て祭り上げようとしているかはわかりませんが。。。あんまりです。。これ以上進んではまったら。。」

詰まる声の猪の肩を直江の妻が抱いた
猪は顔をあげ内儀にあやまった

「直江様を責めているわけではないのです。。。」
「わかっております」
「男達」が苦渋の決断を示した時
「女達」も苦しんでいた

おせんの婚儀をこんな形で決めてしまわねばならなかった事を
理解していると言った目はそれでも涙を溢れんばかりに浮かべていた

重い空気
広い部屋さえ息苦しくしてしまうような「切迫」した状態
うつろだ
だが

ダメだ。。。

実乃は女達に面と向かって座る事はできなかった
ただとろとろと揺れる炎を見る事だけだ
顔をあげ
遠い目をした

なんと辛い事か。。。。
それでも段蔵の言葉が耳に残ってこの決意を鈍らせる事はなかった

「越後のために大儀を見据える」
大儀なのだ。。。。

部屋の中で肩を抱き合って泣く二人に言った

「もうこの事に関しては何も言わんでくれ。。」

それが精一杯の言葉で

武将実乃の女達への謝罪だった

その１８　神鳴　（１）

「夕方！！二の櫓のところで和歌を教えて！！」

春が近づいた雨上がりの日
手習いに来ていた
つやが思い立ったように私に言った

突然の事だったが
何かを知りたいとかやってみたいとか好奇心旺盛な
つやの申し出に簡単に「良し」と答えてしまった

ココ
何日か栃尾は湿った感じになっていた
中条藤資が帰路について以降は特に憂鬱な日々が続くようになっていた
よほど「大変」な出来事だったのだろう
程なくして
阿賀野川の豪族たちやら
いまだくすぶり続けていた多くの「郎党，残党」達からの親書が山のように届くようになった

そして
「栃尾詣」と言われるほど
どんな「天気」の中でもひっきりなしに人がやってくるようになった

毎日毎日の「参勤」。。。。。
今まで
顔色をうかがって手紙だけを送りつけていた者どもの
慌てた「行動」は。。。。
私にとってただの「諂い（へつらい）」にしか見えず苦々しかった

表情にすぐ「闇」が降りてしまう私を
実乃は

「今は「越後」のために。。。。」

と
何かというとなだめた。。。。

そんな毎日に
いつもつやは明るさを持ってきてくれる
だから
その申し出に素直に従う事にした

飯もほどほどにして部屋の灯籠を落とし
竹筒二つに酒を入れ
墨壺と懐紙を持って静かに外に抜け出した

日中
立禅（弓）のために外に出ることはあったが

この刻に出るのはひさしぶり

見あげた空には昼間に比べると多めの雲
まだ夕日をキレイに拝むのは難しそうだし風も冷たい
山肌に残されていた雪は山陰に少し残してほとんどが大地に消えていた
長い冬は終わった
そこかしこに新しい「緑」の子供たちが顔を出し始めている気配
まだ
感じるしかないのだが
そんな心地よい日暮れ

「芽」

中条藤資の奥方様
あの話は心に残るいい話だった

そんな事も思い出しながら
城人の使う
通用口を通り抜け足早に櫓に向かった

二の櫓は
最近になって修繕を始めたところで
やたろー達「大男衆」が先日から資材を運び込んでいる場所だ
前にあった櫓が風でなぎ倒されてしまい
そのまま堀切まで落っこちてしまった

物見櫓だった二の場所に
城屋敷と同じように角部屋を作って強固に作り直す事にしたのだ

この冬
雪もさることながら春日山にいた時以上の強い風に
城のあちこちが修復が必要になっていた
戸板がよく大風の空を舞っていたのを城人の男衆たちが追っかけ廻
していたのはついこないだの事だ

歩く道すがら
「大変」だった事も思い出した
もう少し温かくなって
私の手が空いたら手伝おう。。。。

やはり
風が強い。。
でもって寒い。。。

二の櫓に着いた私はつやを探していた
普通なら
飛びかかってくるだろうつやの姿がまだ見えない
？

「つや！」

持ち込まれた

木材の間を抜け
なぎ倒された櫓の垣のところまで進んで
もう一度振り返り名前を呼んだが出てこない。。。
反対側に足を進めたが姿はなかったので
資材に腰掛けようとした時微かな声が聞こえた

「。。。トラ。。。様。。」

私を呼んでる。。。
まさか
落ちた?!慌てて堀切りを覗き込んだが底さえ見えない
名前も呼んでみたが返事もない
でも声は聞こえた

どこだ?

腰を降ろしかけた場所にもどって下を見た

人?
つやじゃない

「トラ!!」
聞き慣れた声
懐かしい声

「ジン?」

驚いた
堀切の手前の曲輪で名前を呼んでいたのはジンだった
ジンも驚いた様子で私達は二人揃って声も出さずにただお互いを見たが
咳払いをして
「何して。。るんですか。。。」
何?
またもぎくしゃくした言葉運びのジンに笑いそうになりながら答えた
「何だよそのしゃべり方!!気持ち悪いぞ!!」
私の返答に口を曲げて
「いやだってさぁ。。」
「普通に話せよ!!」
キョロキョロと周りを見回してジンは改まって言った
「何してんの?こんな時間に?」
よほどあの「段蔵」ってのに叩かれたのか?言葉使いで?
私は答えた
「つやに呼ばれたのさ。。ココで和歌の勉強をしょうって」
「つや?つや?!」
ジンは何かに気がついたように
「じゃあの女童(めのわらわ)は。。。。こっちにこいって引っ張られて」
私は今度は笑ってしまった

ジンは自分をココに引っ張った女の子が誰か気がつけなかったようだ

「つやだよ気がつかなかった?怒ってただろ」
面目なさげに頭を叩いたジンは頷いた

つやめ。。。。

私をジンと合わせたかったのか?
私は下を見ながらしゃがみ込んで言った

「上がってこいよ」
「はぁ」
またも変な返事
曲輪から私を見るジンは傾斜の土塀を指さしながら言った

「ココをあがれって?」
私はこくこくと頷くと言った

「鍛えてきたんだろ?それとも私が降りるか?」
「上がるよ!!」

きっと
私の表情がいけなかったのだろう
小馬鹿にした顔になっていたに違いない
ムキになって返答をかえされた

なんでかな。。。。ジンと話をするとついおちゃらけてしまう

昔は禅問答か
お堅い話が多かった仲なのに
今は昔以上に「子供」じみている
そしてそれはジンもなのかもしれない

返答したやいなや
普請中の斜面を登り始めた

「がんばれ！褒美は酒だ！！」

と竹筒を上げて呼んだ
力強く手をのばしのしのしとジンは塀を登ってくる
さすがに鍛えているなと思う

「ジン！！禅は欠かさず組んでるか？」

資材を引っ張り出し腰掛けを作りながら私は聞いた
荒い息をあげながら
「当たり前だろ！！」
吠えるように答えるジン

「塀を登るのも修行だな！早くこい！！」
「うるせー！！」

すっかり昔どおりの会話だ

もどって下を見た
かなり急な塀だったが
後少しで手の届くところまで来ている

と感心した時

「ヤバイ!!ココ崩れかかってる!!」

目の前手寸でのところでジンはあせって叫んだ
と同時に少し足を滑らした
「オイ!!」

私は手を伸ばしてジンを掴もうとした
ジンはそうとう踏ん張っているのか顔が真っ赤だ
「ゆっくり!!」

身を乗り出す
さすがにココから落っこちたら怪我するだろう
「ジン!!手!手!!伸ばせ!!」

すれすれで彷徨う手と手
「しっかりしろ!!」
「んなこと言ったって!!」
足場を自分で踏み固めながらもう一度手を伸ばす

私もさらに身体を出して
手を掴んだ
「掴んだ!!上がれ!!。。。。」

ガクン

と
身体が落ちる
というか。。。重い！！
そういえば。。。ジンは私よりデカイ
お互い顔を見合わせた
その時には私の身体は滑り落ちていた

「馬鹿。。。。」

ジンの力無い罵倒が耳に入った
が
言い返す前に二人して土塀を真っ逆さまに落ちていった
それも運悪く堀切りの側にむかって。。。。
果てしない闇の谷に。。。。

下の曲輪から事の次第をこっそり見てほくそ笑んでいた
つやは一瞬で消えた二人の姿に呆然と立ちつくしていた

その１８　神鳴　（２）（前書き）

史実に則して書きたまえ。。。。
と言うご意見をいただきましたが
その０　雨　の前書きにあるように歴史的史実との一致は必ずしもなく
と注意書きしてあるので。。。。
どう答えて良いのか困りました
もっと大々的に書いておいたほうがよろしいでしょうか？
というか
すでに「上杉謙信」（今はまだ長尾影トラ）が「女」という時点で大きく史実からは逸脱しています
その事も前書きで注意項目として書いてありますから
いまさら則せと諫められても。。。。困ります

本小説は歴史の「謎」と「憶測」と「諸説」を元に私の想像力でこんな事であっても「良かったかな？」というものを書いています

正史とされるもの以外を受け入れる事ができない方はすいませんが「要注意」してください
まちがって読んでしまって不愉快な思いをなさっても責任はもてません

そういう方には「きわもの」小説に写ってしまうのもやむなしですが
それ以外
楽しんでくださる方，興味をもってくださる方は
一つの諸説として読んで頂けると嬉しいです

これからもよろしくお願いします

火星

その１８　神鳴　（２）

小嶋弥太郎（やたろー）は悶絶していた

夕方
愛娘のつやが「おトラ」と和歌の勉強をする。。。。
と
言って雑兵長屋を出て行ってから
うたた寝をしていたところに

つやが矢のよう勢いで
その身体ごとみごとに鳩尾（みぞおち）に飛び込んできて
さしもの大男も息が止まってしまうのでは？
という衝撃に声をあげて苦しんでいた

そんなやたろーの様子などお構いなしに
つやは
悶絶中の巨体を
小さな手でバタバタと叩きながら泣きわめきながら
意味のわからない言葉を連呼している

「どぉしたぁ～～」

涙目になったやたろーは腹を押さえながら身体をおこした
つやは
泣きながらその身体に抱きついてきた

顔を険しくさせながらやたろーはもう一度つやに
どうした？と聞いた

つやは首をブンブン振ってただ泣きじゃくる

つやを泣かすヤツは許せない
身体に走った痛みが引き初めて冷静になったやたろーは
その小さな小さな肩をやさしくなでながら
大男には不似合いな「小声」で諭すように顔をよせて聞いた

「誰がオマエをいじめた？」

今日日

栃尾で「つや」をいじめるようなヤツはいない
大男衆を「親」にもつも同然のつや
本人に自覚があろうが無かろうがいまや年上の「小姓」たちまでもが
つやには一目を置いている

「落ちちゃった。。。。」

顔をぐしゃぐしゃに涙でいっぱいにした
つやは
すがる目でやっとまともな「言葉」を伝えた

「何が？」

やたろーは「落ちた」という言葉に主語がなかったので
具体的に「何?」だと聞き返した

やたろーの返答に瞳にあふれかえった涙をまたもボロボロとこぼし
泣き出した
つやの身体を支えできるだけ「優しく」
もう一度聞いた

「何がおっこちたぁんだぁ?」

しゃくりをあげながら
つやは
小さく答えた

「おトラ様。。。。。」

つやの話の全容がわかった
やたろーは。。。。。
囲炉裏の火の前で鉢を叩きながら
かなり渋い表情になっていた

それでなくても「実乃」との間に影トラと「陣江」を引き合わさない。。。。
という取り決めがあったのに。。。

だからこそ
二の曲輪（くねわ）に住むやたろーはそんな陣江の気を紛らわすために
チョコチョコ酒飲み仲間になって「余分」な事を考えさせないよう
にしていたのに。。。。

なんて事。。。

「やたろー!!早く助けに行って!!!」

思案にくれているやたろーの大きな背中を
泣きやんだつやが力任せに叩いていた
そんなものは痛くも痒くもなかったが。。。この「問題」をどうし
たらイイ？

「問題」は。。。

「問題」の方はとりあえず置いておかねば落ちたのは他でもない「
おトラ様」だ。。
迷っている場合じゃない
「助けに」行かなくては。。。
幸いにして
堀切りの下は防柵しかんないから
「死ぬ」ような事はないだろうが
怪我は。。。。
それにもっと暗くなってこれば山犬も出るだろうし

それにしても。。
こんな時間に人を動かしたら
屋敷の方にまで騒ぎがわかってしまうだろう。。。。

考えあぐねたやたろーは頭を掻きながら
「やっぱり一人で行くかぁ。。」
と
つぶやき

腰をあげ土間に降りると
荒縄と
かぎ爪など必要と思われる物を袋に放り込みながら
後ろを付いて歩くつやに言った

「あれほど「陣江」と「おトラ様」を会わせちゃいけないって。。。
言っただろぅに。。」

背中越しに
めんどうな事になったと思いつつ話した

つやに「おトラ様」と陣江の事を教えてあったのは
つやが。。。
おせんと「悶着」をおこしてしまった事にもあった
取り決めだ
栃尾周辺は「今は」平穏になったが春日山から漂う「不穏」な空気
に備えている
今はまだそんな悠長な時ではない

「敵」は。。。考えたくない身内「かも」しれない
という「問題」

とにかく
難しい事は抜きにしても
陣江は遠ざけろという指示が「ある事」をつやにも告げてあった

道具を放り込んだ袋を背中に背負って「行ってくる」と
振り返った

小さな肩を震わせてつやは
がまんも「限界」という涙いっぱいの表情で口を開いた

「だって。。。。」

やたろーはしゃがんであやそうとした

「だって!!おトラ様が可哀想だよ!!陣江さんせっかく帰ってきたのにみんなして会わせてあげないなんて!!酷いよ!!酷いよ!!」

自分をさとそうと伸ばされたやたろーの手を叩いて涙を零して続けた
「オラだって二年もやたろーと離れてたらすぐにだって会いに行きたいよ!!会いたいよ!!やたろーは会いたくないの?!!」

つやはグズグズになった顔で言いきって泣いた

「会わせてあげたかったんだよぉぉ」

つやが涙の主張を終えた所にちょうどで「善治郎（ぜんじろう）」が酒をもって戻ってきた
やたろーに頼まれて蔵まで走っていたのだ

やたろーとつやの変に「身構えた」状況が飲み込めないまま善治郎は酒壺を降ろして言った

「降ってきましたよ雨。。。蔵に行っただけでこの有様でさぁ」

と茶筅髷から滴る水を絞って
「何故か」
張りつめている場を和ませようとおどけて言った

「雨だと？」
「雨ぇ！！」

善治郎の後ろ音立てて降る雨に初めて気がついた，つやとやたろーは声を合わせて戸口の方を見た
ついさっきまでは
一粒も降る事のなかった「雨」が。。。。

突然「滝」のように降っている

その雨音に気がつけないほど
つやは泣きわめいていたし
やたろーはそれをあやしていた。。。。

「雨。。。。」

呆然とした顔で
袋を土間に落としてたやたろーは戸の前に進んだ
昼間も曇ってはいたが
今は星も山も見えない暗雨の状態だ

「どうしやした?」

自分を通り抜け
雨の景色を呆然と見ているやたろーに善治郎は話しかけた
その横をつやが走りやたろーの足にすがりついて言った

「はやく!!はやく!!助けにいって!!」

「何?なんかあったんです?」

善治郎はすでに「嫌な予感」がしていたが。。。。
肩越しやたろーに聞いた

「人集めろ。。。。」

やたろーの「戦場(いくさば)」に出向く時の低い声が指示をだした

「今からっすか？」
ご冗談を。。。。という感じで善治郎は返したが
この指示が「本気」でこの夜の雨の中に「進軍」していく事は決定だった

目の前の「鬼」のやたろーに
泣いた「つや」を見て。。。。
溜息混じりに聞いた
「マジっすか？」

今一度念を押してみた

やたろーの目が善治郎をギョロリと見返した
問答の余地など微塵もない
善治郎は「ハイ！」
と返事をすると雨の中他の長屋に走っていった

捜索の長い夜が始まった

その１８　神鳴　（３）（前書き）

短編で「龍」というのを書きました
こちらは時代物ではなく
普段の私の生活に近いところから題材をとってきました
よかったら読んでやってください

その１８　神鳴　（３）

「なんで作務衣なのさ？」

土砂降りになり濁流を作り始めた谷の堀切りを避け
小高い
樹木の下に一時避難をした私はジンを見ながら聞いた

ジンは落っこちてきた先をを見ながら答えた

「夜とか。。。屋敷にいる時はこのカッコの方が落ち着くんだよ」

それにしても見渡す限りの競り立った断崖
これが
栃尾城を守る防備の谷だという事を期せずして自分で味わってしまった

そうとう下まで落っこちてしまった私たちは
なんとか上に向かって移動を試みて見たが
当然簡単に登ることもかなわず悪戦苦闘
そんな矢先に「雨」に降られ
足をとられ。。。

まったく。。。
なんて事か。。。。ついてない。。。

私は腹のあたり入れた屋敷から持ってきていた物調べた

懐紙は雨に浸かってダメになっていた
墨坪はそのまま置いて

酒を入れてきた竹筒を出した
ありがたい事に二つとも無事だった
春を待つ雨は冷たい身体を冷やしてしまわないようにと

「酒でも飲もう」
とジンに差し出した
振り返ったジンの顔は。。。。泥にまみれていて思わず吹き出した

「オマエもいっしょだって」

顔をしかめ苦笑いしながら泥を払って言った

言われるまでもない
髪も顔もドロドロだ
酒を口に運びながら周りを見渡したが
止む気配のない大雨になってきていて一寸先さえ見えない
朝まで動かずにいる事が最良の策だ

渡された竹筒を片手にジンは遠くに何かを見つけようとしながら
思い出したように言った

「昔もこんな事あったよな。。。」
「昔？」

雨を手にとって顔を拭いながら
「寺からオマエが逃げちゃた事。。。あっただろ？」

曖昧な記憶をさぐった
私は幼少の事をあまり憶えていない
少しづつ
私の周りにいる者から聞く話によって「きっと」こんな風な「子供」
だったに違いない
という感じに自分の幼少時の事を考えるようにしていた
だけど
ジンには他者から聞いた話で作った自分を話したくはなかった
答えに迷って
考えこんだ

そんな私を知ってか?それとも知らぬふりなのか?
ジンは話しを続けた

「あの日も雨だったよな。。寺から逃げて城に帰るって言うことと
聞かないオマエの後ろを付いて歩いた」

少しだけ
あの日の事を思い出した
夕焼けだったのか?
朝焼けだったのか?
真っ赤に染まった空の下
少ない雨の中を幼い私はとぼとぼと歩いていた
涙にくれて
しゃくりをあげながら一心に城を探していた

「後ろにいた?」

ジンは笑って酒に口を付けながら言った

「ああっずっと何度も寺に帰ろうって止めたんだけどオマエ全然言うこと聞かなくって。。。。そのうち雨は大降りになるわ道に迷うわで。。。しかたなく今日みたいに雨宿りした」

私は独りで泣いていた
それしか憶えていない
どこまで歩いても城に着けなかった
川を挟んだすぐ上にある城に。。。。。たどり着けなかった

ジンは後ろにいた?
わからない

「ごめん。。。あんまり憶えていないんだ。。。」
「ガキだったからな」

濡れた袖を絞る
私のとなりでジンは作務衣の上着を脱いでガシガシ絞り始めた
大きな背中だ

不思議な感じ
触ってしまいそうになる手を戻して
思い出を巻き返しながら

。。。。。
この背中におぶられて。。。。泣きながら。。泣き疲れてうたた寝しながら寺に帰った?

少しづつ
ぼやけた思い出を目を閉じて探す

ただ寂しくて
寂しくて
どうしてだろう
私の心は彷徨って寺から逃げ出していた

道すがら
「誰か」と話している
「行こう」と
急かせる声と
「何処に？」と
躊躇する私。。。。

そんなやりとりが。。。。あったような
「誰と話していたのか」
その人の形も影も浮かばない
歩いた道には一人しかいなかった
たった一人での会話。。。。

自問自答

一本の道を動物のように行ったり来たり
私は確かに「誰かに」対して駄々をこねていた
そのうちに雨は激しくなって
涙もどっと溢れて

そうだ
雨の下よく焼けた肌のくりくり坊主走ってきて

私の前に立って何かを言っていた。。。
あれは。。。

「あの時。。。なんか言ったけ？」
記憶の糸。。。それを懸命にたぐってみる
髷をほどき髪を絞りながら聞いた

ジンは着物を絞る手を止めて背中越しに答えた

「ずっと近くにいる。。。て。。約束した」

そうだ。。。。
「約束」した。。。。

激しい雨音
揺れる木々

少しの間をおいてジンは振り返った

「髪。。。。ながっ。。」
少しの時間で呆けてしまった私
その下ろした髪の姿にジンが「変な」驚きかたをしているので
ジンの頭を叩きながら言い返した

「オマエだって！！ちょっと前までは坊主だったくせに！！」
「いて！！」

しんみりとしてしまった場を活気づけるかのように私は大きく声を
出した

生意気な
たった二年でしっかり髷までつくって帰ってきたジンの頭を何度か
叩いた

恥ずかしい
なんか髪を下ろした自分が
子供っぽく見られてしまったみたいで

「そんなに珍しいものでもないだろ。。ジロジロ見るなよ。。」

気恥ずかしくて酒をグイッと飲んだ
と
同時に大きな音が近くにドスンと落っこちてきた
一瞬で周りを昼間のように照らした光が落っこちた

雷

木々はよりいっそう大きく身震いしている

私は手に巻き付けた数珠を握りしめた
雨は雷も呼んだ

雨風をしのげる場所を探して
堀切りの尾根に近い方にむかって歩いた
途中何度かぬかるみに足をとられながらも

さすがに
ただの木陰では土砂降りはしのげない

尾根にむかう先に防柵用に切り出された丸太がくくりつけてあり
小さなクボミがあった
縄と石くつの道具があるところからしてココにも柵をつくろうとし
ていたのだろう
囲いのある場所に私たちは急いで身を隠した

しばらくジンは外を見ていた
変わらぬ暗雲
それにしても
なんだか言葉の少ない私たち

いざ面と向かったら何から話していいのか？
。。。。
実は頭の中には話したい事が。。あって
すぐにでも口に出してしまいそうなのだけど。。。。

「おせん」との事は。。。。なんとなく。。。聞きたくない
でも。。
「婚儀」。。。。。
ホントはどうなのか。。。

ホントに「おせん」が好きなの？

あやうく口を滑らしてしまいそう

そんな私の
もやもやしている心を叩くようにまたも大きな光
雷が落ちた

息を呑んで
数珠をもう一度確かめ強く握った

「トラ？」

外を見回していたジンが暗くてよく見えない表情だが
何かに気がついたように少し笑って聞いた

「ひょっとして。。。まだ「物の怪」が怖いの？」

その言葉の後を押すように稲妻が走った
ジンの言葉に焦った私の顔は。。。。
落ちた光に照らされて

ばっちり見られていた

「ちがう！！」

悲鳴に近い
声をあげて否定した

その１８　神鳴（かみなり）　（３）（後書き）

後書きからこんにちわヒボシです

。。。。。

ぶっちゃけやってしまった感じですが。。。
サブタイトル修正とか。。。
雨宿りって章だったのですが。。。
構成をし直した結果「神鳴」に変更しました
すいません。。。もっそごめんなさいです

ダラダラと長引かせた内容を書き続けるのは良くない
という意見を頂いたので
真剣に構成をし直した結果と受け取ってもらいたいのです！！！（泣）

がんばって走っていきますから許してやってください。。。。陳謝

ところで
風林火山の「直江実綱」様「本庄実乃」様を見ました
直江様に関しては身近な人をモデルにしているのでちょっとイメージからそれましたが
実乃様は結構いいとこついてました！！（藁）
あんな感じです！！

それにしても
影トラ様の周りはおじさまが多いです
おじさまのハートがっちりわしづかみでがんばって欲しいです（爆笑）
ある意味オヤジキラーか（爆死）

ヒボシも殺されますね。。。
目で殺されますね（懐かしい）

それではまた後書きでお会いしましょ～～～

その１８　神鳴　（４）

私は。。。。
決して「夜」に踊る「物の怪」という者達を恐れているわけではない
ただ
御仏を信じ
そのお心を身近に感じようと努める者が
半面同じように見えぬ存在である「物の怪」を否定すると言うこと
があるのはおかしい
と
ある種の「矛盾」ではないか？とぐらいに思ってもいた

夜の世には
夜を生きる「仏」がいて「鬼」がいて
当然人の「呪い」や「生き霊」などもいると。。。。当たり前なのだ

信心の一部と同じぐらいな「真実」だ
だからそういう者を恐れる事はない
ただ
神仏と同じように「脅威」の存在と見て「畏れ」を抱き身震いする
事はあった

が。。。。

これは違う
この震えは違う

変な感じだ。。。
目眩がして息が上がる

左手の
数珠に添えた右手までもが震えている

「ハハハ！！昔から怖がってたものな！！」

ジンは声を出して笑い
そんな様子を意に介さず大声でふざけて見せた

空は緞帳
黒く広げられた「闇」
遠雷が響く
からかわれた事に大きく反抗の言葉がでてこない
雷の夜は「狐火（きつねび）」。。。
氏神様（うじがみさま）の慟哭に起こされるさまよえる魂たちの葬列。。。

「怖い。。。。」

私は座り込んで身震いしている
でも
望んでそうしているわけじゃない

さっきまで
必死になって思い出そうとしていた「過去」に。。。
身体が引きずられていく感じ

何故だ。。。。
何故。。。。
こんな時に?
あの「声」が聞こえる
いつも
私を「戦」へと切り替える「声」が
雨と風と雷の音に合わせドンドンと近づいてくる

私は耳を塞いだ
身体を丸め首を振り
いまにも
私の全てを覆ってしまおうとしている「闇」を振り払おうと
手を振った

これは。。
兄上との問答のときに

「トラ?どうした?」
「わ。。。わからん!!」

勘ぐられたくない
だけど
今の私の態度はよけいにおかしく見えるにちがいない

ジンは持ち歩いていた作務衣を絞りながら言った
「寒いんだろ?」

ちがうんだ！！
寒いのではない
むしろ熱い
頭をかすめる「あの声」に
心で逆らい目をきつく結んだ

こないでくれ！！なんでこんな時に。。。

「闇」の声が話しかける
「怖いだろ？」
頭の中に鳴り響く

「怖いのだろう？」

「恐れてなどいない！！」
目を閉じて
自分の胸にむかって殴るように言いつける
「戦」でない限り私はいいなりにはならない

「うそつき」

子供の声
初めて「闇」の声は明確な音を聞かせた

幼い。。。男の子の声。。。
声。。。。。
「トラは一人になるのが怖いのでしょ？」
微かに浮かび上がる影は続ける
「でもダメ。。。。」
小さな背丈の姿が。。。
「ジンもいなくなるよ」
見覚えのある影
手を伸ばす
「でもダメ。。。絶対にダメ。。。」
影は背中を見せて去っていこうとする。。
クスクスと小さな笑いと
ともに
最後の言葉を残す

「ずっとずっと「撲」のために一人でいるの」

待って。。。。。

目を開いた「神鳴（かみなり）」が見えた

闇に落ちる。。。。

落ちてゆく。。。。

「何故？」

声にださない言葉

身体を押さえながらジンに近づく

「怖い。。。。」

私はすすり泣くような声で言った

私の様子がおかしい事にジンは顔に緊張を走らせた

「これ羽織れ。。。少しはしのげる」

手を広げ絞ったばかりの作務衣を被せようとした

その間を私はすり抜ける

真っ直ぐ

ジンの

裸の胸に身体を擦りつけた

「トラ!?」

驚いて私の肩をつかみ引きはがす
暗い窪地
私の息の音が微かに聞こえる

「なっ。。。なんで?なんで泣いてるの?」

私は泣いている
顔にいっぱいの涙
私は「失って」しまう。。。

ジンの首に手を回し引っ張る
その手を掴んで距離をとるジン

おどろいている?
手を伸ばす
ジンの頬に這わす

「トラ?オマエ?」

何かに気がついたジンは
冷静に手を返そうとする
離そうとする手を押し返し身体を息が聞こえる胸元まで入れた

「早く抱きしめろ!オマエは私の「物」だろ?ずっとそばにいるのだろ?」

怒りが
心に留まらせていた言葉を溢れ返させた
どうして私が「一人」でいなければならないのだ?
どうして誰も
私の苦しみに気がついてくれないのだ?

影が連れて行ってしまう
かの日
私の知らない姿の男。。。。父上は背中を向けて消えていってしまった

あの日
変わらぬ面の女。。。。母上は何も言わず
何も教えず
ただ「御仏」に尽くせと言い私の手を。。。。放して雨の中に消えていった

師よ。。。
師よ。。。
どおして城に行く事を止めてくださらなかったのですか
「御仏の示すままに」と
あなたも私から離れていってしまった

兄上。。。。姉上。。。。

どうして。。。
どうして

私は独りでいなければならないのですか?

なんのためにココにいるのですか？
何故私の心には影がいるのですか？

御仏よ。。。。。
あの影は。。。貴方なのですか？

とまらない涙

どうして。。。。
ジン

オマエも私の前から消えていってしまうのか？
約束を破るのか？

心に火が走った
あまりにも。。。。理不尽だ！！！

「約束。。。。約束を守れ！！」

ジン。。。オマエは「ずっと一緒にいる」と私に誓ったハズ。。。
なのに
その手をほかの誰かに。。。

首を揺らし顎下からジンの顔を睨んだ
「嘘なのか？」

私の声は怒りを十分に帯びていた
驚きを隠せない様子のジンに今度こそがっしりと両の手を首に回した

「不義なのか？」

近づける唇から
顔をそらして

「待て！！トラ！！ちょっと！！」

私はそのままジンを蹴倒をそうと
足をかけて手を引いた
突然の攻撃に対処の方法さえうかばなかったのか
ジンはそのまま頭から仰向けに倒れた
私の手をもったまま

勢いそのままジンの大きな体の上に私は乗っかかるように落ちた

「トラ！！どうした？！！」

私は泣いている
泣きながら大声で笑って叫ぶ

「約束を守れ！！不義を働くな！！！」
「何言ってるんだ！！」

ジンは私をなんとかどかせようと身体を反らせる
私はその身体にどっかりと
馬乗りになり

両肩を押さえ
顔を近づけた

「おせんと一緒になって何処に行く?」

ジンの顔が強張った
触れようとしなかった「話題」に矢を刺すかのように私は問うた

わだかまり。。。
ジンだけには。。。
私のこの苦しみを理解してほしかった
だから。。。

だから。。。

近くにいて。。。

息がふれるぐらいに顔を下ろす
大粒の涙が彼の頬に落ちてゆく
顔を曇らせながらも私から目を反らさず見つめるジン

。。。。ジンもいなくなるよ。。。。。

ジンが。。。。。

「落ち着けよ。。。。。」
鼓動が密着した身体に伝わる
一寸もないほどの顔と顔の間でジンは私を見ながら
もう一度
まるで子供に言い聞かすように

「落ち着くんだ。。。。。トラ」

肩を押さえつけている私の手をとって
優しい目は
頷きながら答えた

「どこにも行かない。。。。。オマエの近くにいる。。。。。」

私の手をとった
その手が
かつてココを
栃尾を出て行ったジンに渡した数珠にふれた

リーン
鈴の音（すずのね）
終わりの音

私はそのまま力を全ての四肢が緩み
ジンの上に身体を落とした

「闇」は私から遠ざかった

「すまない。。。。」
力無く
すぐそばにあるジンの顔を見ないで言った

「闇」にそそのかされ
自分勝手な主張をしてしまった。。。
なんて
恥ずかしい事を。。。

顔など会わせられるわけがない

そんな私を気遣ったのか
肩を撫でるように
からだを落ち着かせるように
ジンは努めて明るく。。。でも十分に思いを込めて静かに言った

「いいよ。。。。。。オレはわかってるから。。トラの事。。。わかってるから。。」

温かい大きな胸に顔をつけ

泣き続けた
何度も髪を撫でるジンの手の中で
後は
しずかになった雨音だけが続いた

その１８　神鳴　（５）

段蔵はただ闇の雨を睨んでいた

さっきまで
屋敷の陣江の部屋にいたのだが。。。
自分で下した「制裁」にさえ嫌気がさしていた

迂闊過ぎるにもほどがある
あれほど「影トラ」に陣江を近づけない

と

栃尾全体で決めたばかりなのに。。

いや。。。そんな事ばかりが
この
殴り倒すという制裁を実行した「拳」を痛ませているわけでもなかった

陣江の目。。。。
真っ直ぐな

「似ている。。。」

そうこぼすと腫れ上がった自分の拳をさすった

不始末だった「転落」騒ぎは
その日のうちに解決した

二の曲輪の騒ぎが伝わったのは
実乃とやたろーの乱闘によってだった
屋敷にいた段蔵が現地についた時に目の前にあったのは。。。。

ただ
呆れるばかりの乱痴気騒ぎで

段蔵はかなり機嫌を悪くしていたが「何事もなく」解決してくれた
事で
荒げた事をわざわざ
実乃や，やたろーに言うでなく見過ごした

堀切からひっぱりあげられた陣江と「影トラ」
顔を見るに何か問題があった様子ではなかった事で
心を落ち着かせたが
己の監督不行届と
陣江の迂闊さには耐えられぬ怒りが沸き立ってしまっていた

陣江を屋敷に連れ戻すやいなや
言葉を交わすことなく

殴りつけた

目の前で襖を倒し大きく飛ばされた陣江を

雨の中
心配で駆けつけていた
おせんが手ぬぐいを投げ出しかばうように座り込むとわめいた

「何をなさるのです！！」

段蔵の目は
怒りという色はなく暗く沈んだ感じで
むしろ冷静だが
顎をあげ「憤怒」の様相を顔は隠していなかった

「おどきください」

下からはい出るように響く「怒」の声
おせんにはその目は恐ろしい物として写っていた
そんなおせんの身を手で避けようと陣江はよろよろと立ち上がった
段蔵は
迎え撃つかのようにもう一度殴り倒した

今度も受けて立つ事のできなかった陣江は殴られるままの方向に崩れた

泣きそうな声をあげおせんは
懇願するように段蔵に言った

「陣江様が何をしたと言うのですか！！！おやめ下さい！！」

その言葉を無視して

段蔵は
倒れ込み切れた口を押さえている陣江に問うた

「己の立場ってのがわかってないみたいだな?」

陣江は
段蔵が言う意味がわかっていた

「主君に懸想（恋慕）しているではないだろうな?」
という事
トラに近づく事を「良し」とされていない自分を
ココに来る時の会話を思い出しながら
初めて口を開いた

「わかってる。。。」

と吹き出す血を抑えながら
下から仰ぎ見ながら答えた

「わかってるんだな」

段蔵はおせんを手で避け
陣江の襟首を捕まえ顔を近づけて言った

「生臭坊主。。二度と「影トラ様」に近づくんじゃない」

低く命令した

その声はおせんにも聞こえていた
ちらりと
その背中を見ながら陣江の襟を捨てるように離し立ち上がり

「何もなかったから許してやる」

と吐き捨てた
その言葉に陣江は言い返した

「何もしない!!トラを守るだけだ!!」

その言葉が終わる前に段蔵は陣江を蹴飛ばした
それでも
もんどり打ちながらも
真っ直ぐな目でくじけぬ意志で
陣江は言い返す

「オマエの考えるような。。。」

今度は顔面を蹴った

その上で平然と

「やれやれ。。。女のケツはいくつあってもいいってか?」

手ぬぐいを握りしめ物言わぬながらも肩を震わせているおせんに聞こえるように言った

「おせん様も夫が夜いなくなるような事を見過ごすなどとは。。。
しっかりつかんで置いてくださいな」
と
見くびるように言い続けた
首をかしげ
震えるおせんの顔を「あえて」のぞき見するように

「いやまぁ。。考えようによっては懐の大きな方かもしれませんが
感心できませんなぁ。。それとも陣江は「男」としては。。その。。
「もの足りない」ですか?」

陣江は怒り
その言葉を止めようとした
起こした身体をまたも蹴倒され
その上切れた口でうまく言葉が回らない

目の前おせんの肩は「悔しさ」でいっそう震えている

「無礼者!!!」

張りつめたその間を破ったのは
直江の妻だった
そう言うと走り娘の肩抱き段蔵を睨み

他の侍女の聞き耳を配慮したのか
幾分声の度合いを落としたもの言いで続けた

「まだ「許嫁」の身のせんに何を言うか!」

内儀は本気で怒っていた
段蔵は悪びれる事なく肩で溜息をすると
「そうでございました。。。失礼を。。。」
と
侮蔑的な態度で
挨拶をしそのまま部屋を出て行った

残された部屋で直江の妻は娘を抱き髪を撫でた
その手は優しく
愛おしむ手で

でも
おせんの震えは止まらなかった

陣江は。。。。かける言葉を見失ってただ頭を下げるだけだった

そんな態度に苛立ちを憶えたのか
内儀（直江の妻）は娘を抱いたまま立ち上がり
陣江を睨みながら
何も言わず退出した

横を出て行くおせんの目にはいっぱいの「涙」が見えた

春を待つ霧雨の外をみながら
陣江は腫れ上がった片口を抑えた

例の「転落」事件から十日ほどたっていた
ひっぱりあげられた
トラに縋りついて泣く
つや

雨の洞で
自分の胸で泣いていたトラとかさなる

でもって
帰った屋敷で段蔵にぶん殴られ

震えるおせんに何も言ってやれなかった

怒濤の出来事だった

唇をさすりながら
少し戸をあけそそぐ霧の梅雨に手を伸ばし
切れた傷口にあててみる

段蔵の「忠義」は
自分を「トラ」に近寄らせない事。。。。
そのために手段を選ばない態度で接し
結果
おせんを傷つけた。。。。
わかっている
でも。。。
。。。
思い出すのはトラの事ばかりだった
あれほど罵られて
おせんまでもを罵倒に晒されたのに。。。
トラの事しか想っていなかった
あの日あの雨の中
トラの様子はおかしかった
昔から
確かに「癇癪」を起こす事が多々あった
それは寺に来た頃の方がよくあった
慣れない暮らしに苛立ちが募った結果だったのだろう
それが
何年か馴染んだ頃には見られなくなり

落ち着いたトラになった

なのに

この城に来てからたびたび癇癪を起こし
物に当たり散らしたりもするらしい

落ち着きを失い始めている？
それで「例のあれが」。。。

あの日のトラは「変」だった

「オマエは私の「物」」

あの声。。。。
あの言い方は。。。。

嫌な予感ばかりが心を騒がせた

「もっと。。。もっと近くに。。トラの近くにいてやらねば。。。」

暗雲をたちこめる雨に向かい拳をにぎり
ただ
自分に向かって誓った

それが
この後どんな「悲劇」に繋がっていくのかなど。。。。
考えの中になかった

春の嵐とともに暗雨は立ちこめ次なる「嵐」が来たとき。。。何も
かもが引き裂かれていく事など。。

この時は誰も知る術がなかった

その１８　神鳴　（５）（後書き）

総括（藁）

後書きからこんちゃ～～ヒボシです

次回からいよいよ。。。。アレがでてきます（藁）
ホントは「あの方」たちが絡むところまで話を書くか？書かないか？迷っていたのですが

「書いてほしい」

と

ありがたい言葉も多々頂きましたのでがんばって書き書きっていこうと思います！！！

で

今まで出てきた人物を
少しまとめておきます

長尾影トラ（トラ）
現在十七才の「女城主」様（主人公）
最近になってやっと。。。「女の子」の日がきたりで。。。。忙しそうです（藁）
長尾晴景（ながおはるかげ）
現守護代様。。最近になって野心再燃

自分のプライドを賭けて打倒影トラに燃えてます

長尾政景（ながおまさかげ）
長尾宗家の剛の男
最近になって虎視眈々と守護代を狙っている
とりあえず目障りな影トラ打倒で晴景とタッグを組みました

本庄実乃（ほんじょうじつの）
栃尾の苦労人
最近やたろーとのケンカで生傷が絶えません
大抵原因は「トラ」だったりで苦労もひとしおです

やたろー（小嶋弥太郎）
栃尾の大男
最近つやが屋敷に上がるようになって
寂しいです

善治郎
栃尾の苦労人二号（やたろー配下）
鬼のやたろーに泣きのつや。。。
苦労してます

柿崎景家（かきざきかげいえ）
戦馬鹿
最近は活躍してませんがしょっちゅう栃尾に酒をたかりにきてます

金津新兵衛
栖吉の黒人（爆）
雪焼けなのか日焼けなのか
腹黒くはないけど真っ黒な人

発言は辛辣です

お猪

栃尾の肝っ玉おかーさん

実乃の奥様

最近まで実家で生母のお世話をしていたが戻ってきて

今はトラの世話してます

直江実綱（なおえさねつな）

春日山の番人

最近政景（まさかげ）が入城してきて肩身が狭いです

陣江をおせんの婿に。。。。どこまで本気か？

直江の妻

誰か名前着けてください（泣）

最近めっちゃこまってます

おせん

直江実綱の娘

降ってわいた婚約話に最初は「拒否権発動」

しかし。。。田舎ではなかなか出会いのなかったところに陣江登場で

一目惚れ。。。。

嵐の予感です

つや

小嶋弥太郎の娘（藁）

たまに矢のように飛んでくるので要注意

中条藤資（なかじょうふじすけ）

揚北（あがきた）の優男

亡き奥方茅様を今も深く愛しながらも
女を絶つ事ができません

加当陣江
ボコスカウォーズ（突っ込まれ役）
最近ボコボコに蹴られ殴られいいとこなし
おせんが本気になっている事に気がついてません（爆死）

芝段蔵
ボコスカウォーズ（つっこみ役）
最近評判めっちゃ悪いです
実は陣江と自分は似ている？なんて思ってたりもします

多英
本庄実乃の娘
栃尾のぼんやりさん
最近風邪ひきました

そんな感じで
これからも色々な人が出てきますが

よろしんお願いします！！！

それではまた後書きでお会いしましょ～～

その１９　武田菱　（１）（前書き）

ついに新章です！！！

新たな登場人物もゾクゾクなので
前の章の後書きに
今までの人物表を書きました！！

ココからしばらく「トラ」たち越後の話を離れ
ライバルとなる「武田」の話が続きます！！

これからもよろしくお願いします！！！

火星

その19　武田菱　（1）

「私は空の器です。。。」

細身だが長身
揺れる灯に薄く目を開き「禅」を組み
穏やかな表情ではあるが
研ぎ澄まされた「刃」を意識させる
意志強き眉
武士（もののふ）と呼ぶには静かで
どちらかと言えば修行僧のような態度でその男は言った

部屋の中にはもう一人の男が
白刃を片手に持ち
彼の後ろに立っていた

「わしに。。。。仕えられるか？」

部屋の中に揺れる声
何かを堪えているのか

抜き身を持ち
一見すれは「野党」が脅しをかけてたっているようにも見えるが
その男はがっしりとした立派な身体に不似合いなほど
声は優しく
人の心に染みいる

「諭すように」
温かい音
部屋の真ん中に座する男に聞いた

「私は。。。一人では何も出来ない存在なのです」

問いかけられた言葉に
座した彼は
空を掴むような返答を相対する男とは逆
冷たく低い声で返した
確かにまだ若く髭もたくわえない彼だが「元服」もおわり
十分に大人の男。。。
独りを不自由と言うのはおかしな事だ

「話し合う」というには
不思議な間合い
お互い向きあう事はなく
まるで「介錯」の間の中での会話が続く

「だが父上はオマエを選ぼうとしている」

刀を持った男は
泣いていた

「嫉妬ではない。。。わしは国を想って言うておる。。それは信じ

て欲しい」
「わかっております」

「わかってくれるのか？」

張りつめた間合いで
未だ背を向けたままの彼に男は聞いた

「兄上。。。私あなたにしか「仕え」られません」

男はそういうと
くるりと刀を構える男の側に向き直った

「兄上。。。私を「使って」ください。。。」

刀を構えた男の顔は困惑していた
それまでこれほどへりくだった態度を座る男は見せたことがなかったからだ
むしろ
父と共に「尊大」な態度を示し続け
自分を「罵倒」しなかったとはいえ蔑みつづけてきた

と

さえ思っていたからだ

「「弟」よ。。。オマエは父上の事を。。。」

言葉を遮るように

「父上は「神仏の器」でした」

兄は
弟の突然の発言を静かに聞いた
眉間にまだ年若い「弟」は皺を作りながら話を続けた

「人には時として「神仏（かみほとけ）」の力を多分に受け取る事のできる者が産まれます。。父上がそうでした」

彼らの父は
強き「虎」だ
混迷を極め始めた国を支え十四で家督を継ぎ
「戦」の世界に入っていった

まとまりのない豪族たちが数多も住み
たがいちがいな争いがおこっていたこの地をまとめ
自らの居を移し町を作り家臣を住まわせ人の住める町を作った

「そこまでが父上が御仏の加護の元「人」として出来た「限界」でした」

兄と呼ばれた男もうなずき答えた

「その後「人」を顧みなくなってしまわれた」
厳めしく嘆く顔から
涙を流し
心を痛めている姿を隠すことなく悲しそうに目をつむった

「父上を支えた「人知の器」が亡くなってしまったのが原因でした。。。」
「人知の器。。。。」

戦上手な父は
多くの家臣を抱え「隙のない」戦いで国をまとめた
それはただ「戦う」という方法ではなく
あらゆる手法を駆使し
多くの「英知」によって瞬く間に実践されていた

しかし

近年はそれらの家臣を「手打ち」にするなどし
自らの「力押し」のみの断行し
危うい「戦」を続け
国民(くにたみ)を困窮させていた

「そもそも神仏の器は「人知の器」を支えるもの。。「人の上」に立ってはならない者です。。。父上が立っていられたのは「人知の「器」」である家臣が多くいたからです」

「何故(なにゆえ)?人の上に立てないのだ?」

不思議な事に聞こえた
彼には
神仏の力を用いれば国を統べる事は良いことに思えたからだ
なのに
「神仏」の力を過分得られる者が人を導けないとは？

「御仏の心をそのまま実践できる者などこの世におりません。。信心は人の心を支える為のもの「優しく包み込むもの」であって「武力」などではありません」

たしかに
と
兄はつぶやいた

「ましてや人の世を治めようとする者は清濁併せ持たねばなりません。。。清いだけの力ではどうにもならないものです」

弟の話に懸命に注意を傾ける兄の前
彼は首をかしげ
持論ともおもわれる事を話した

「私は神仏の力を過分に受けた父上は「清い」と思います。。しかし。。清すぎれば魚も住めない状態になってしまいます。。。人の世はそれほど簡単な物ではありません。。清い立場に登ってしまった父上には国民は。。。。「汚物」に見えてしまったのやもしれません。。。」

兄は冷静だが「汚物」という発言は受け入れ難かったようで

「人は生きていれば汚れもする，それこそが生きる道ではないか」

と反論した

「そのとおりです」

兄の言葉を認めつつさらに続けた

「父上は自分の器の中身を神仏の力のみで満たしてしまわれました。。。それで人の生きる世を見ることが出来なくなってしまったのです」

思い当たることは少なくなかったのか

神祟り的な父の戦いは

常に足下に踏み砕かれた多くの人の死があった

「戦」は力攻め。。。後に残るのは無惨な「皆殺し」

「降伏」を入れることのない激しさ

兄はしばしの沈黙の後

聞いた

「では器とは？」

迷わず

自分の疑問を聞く兄に弟は答えた

「器とは「各々の力」の受け皿です。。。人の世を助けるための一滴をうける「器」です。。申したように神仏の力を人が過分に受け取れば「器」は保たず「崩壊」します御仏の力は「安く」はないの

です」

器を神仏の力で満ち溢れさせてしまった
父は狂った
それは
神仏の力のみの「治世」というおよそ人の世
人の生き方を顧みない突拍子もない方向に走ってしまったからだ

「神仏の器」

そのものが頂いた力を「自分の力」のように使ってしまってはいけない
御仏達の「お考え」を
およそただの「人」である者が制御できるわけがない

神仏が「人の忠告」などに耳を傾けるか？
人の「願い」ならば聞き入れようものの
自分を諫言（かんげん）する者を許せるハズがない

力に飲まれた父は
自分を神仏と重ねた
多くの家臣の言葉を受け入れる事が出来なくなり
国の礎となる民を顧みなくなった

兄は悲しそうに言った
悲壮な決意を

「故に。。。国を守るためにも「追放」せねばならん」

「兄上にしかそれは出来ない事です」

毅然とした態度で弟は言った
静かな間が漂う中
少し歩を進め兄は真摯に問うた

「オマエはわしに従ってくれるのか？」

弟は
深く頭を下ろし伏して言った

「私は「神仏の器」です。。。。「人知の器」たる兄上に従いましょう」

兄は驚いた顔で持った刀を落とした
弟に近寄り
顔に手を伸ばししっかりと両の手で掴んだ

「わしが「人知の器」？」

弟は目をしっかりと見据え言った

「人の心を通わせそれをまとめ上げる力を持つ者。。兄上こそその

「器」にございます！」

兄は弟の目の前に腰を降ろしその顔を額を弟に摺り合わせた
弟の目にも涙があった

「人を導く者は「人を知り」「人の営み知り」「人の心を愛する者」です。。私はそれに信心を与え導きましょう」

止まらぬ涙の目で弟の肩を抱いた
強く強く
抱きしめ声を震わせて答えた

「わしを支えてくれ。。わしはこの「甲斐（かい）」のために生きる」

「心得ました」

兄弟の強い決意によって
瓦解し始めていた家臣はまとまった

天正十年
甲斐武田家はそれまでの当主「武田信虎（たけだのぶとら）」を追放し

息子で嫡子「武田晴信（たけだはるのぶ）」が家督を継ぐ

その弟「武田信繁（たけだのぶしげ）」事　典厩（てんきゅう）信繁を「神仏の器」と配し

さらに二つの「器」を加え
戦国屈指の軍団になっていくのはココから始まる

その頃越後の「トラ」は林泉寺での修行の日々にまだあり
争乱とは遠い世界にいた

その19　武田菱　（2）

躑躅ヶ崎（つづじがさき）の屋敷に向かう男たちの足取りは小走りに近かった

「何故？こんな夜更けに会合など？」

苛立ちを声に表し出したのは
武田家重臣にして老将の「甘利虎泰（あまりとらやす）」

隣を歩く男は「駒井政武（こまいまさたけ）」

当主晴信（はるのぶ）の秘書的業務をしている彼が夕刻に甘利を訪ねたのは
新たに登用したい「者」を見て欲しい

という内容の伝言だった

前当主信虎を追放してから向こう
武田家の中身は慌ただしかった
「無血」で次代交代を出来たのは喜ばしかったが

結局「武力」を示しての交代劇でなかった事に。。。

晴信の「力量」を見下す者は数多かった
それは
一致団結を成し遂げた家臣団からは遠い
国人衆や村豪族に多く見られ
事実的に参勤を躊躇して武田の出方をうかがっていた

新当主。。。。

そもそも武田家「家中」の内情は複雑だった
前当主信虎は
長男の晴信を毛嫌いしていた
理由は。。。。計りかねたが
大井夫人（信虎正室）によく似た温厚な顔立ちの美男である晴信に
かつての敵を見たのでは？
という噂程度のものはあった
とにかく
なにかにつけ疎んじ
今年の謹賀の祝の「事件」からも晴信の弟「信繁（のぶしげ）」が家督をつぐので
は。。。と口憚る事がまことしやかに流れるほどだった

「信繁」。。。。。

文武に秀で父に寵愛された晴信の弟は
兄の謀反に反抗する事なく従った

「兄上こそ武田の当主」
と
その誉れを兄晴信に帰し

無血の交代劇を早めた立役者になった

それほどに秀でたと噂の高かった「弟」に比べるとやはり
晴信の噂は良い物がなかったもちろん
父信虎が息子晴信に与え続けた辛辣な風当たりが人の耳に届く頃には「暗愚」な嫡子とされてしまっていたのはいなめなかったが。。。

当主交代以降の晴信の動きを見るに
周辺豪族の態度は高慢であった

あまりに歩が重く見えたのだ

甘利に言わすのなら
「悠長に構えすぎている」
と言うものだった

何かと言えば
治水工事だ
人材発掘だ。。。

今まで猛将に仕えてきた古株の家臣にとっては「戦」と「武力」が全てを決める基準にもなっていたのを停止しまるで
正反対の内政に力を注ぎ続けた

沈黙を守り武田の様子を見下し始めている豪族や国人衆（こくじんしゅう）にさしたる
手も打たず「放置」の状態でだ
家臣達は

己で選んだ「お屋方（おやかた）」に対して
心穏やかにはなれなかった

「ごくろうでござるな。。。夜分遅くに」

屋敷に上がり
謁見の間に走り着いた甘利に声を掛けた先客がいた
寄る年波のせいか
近くの自宅屋敷から小走りしてきただけで息を荒げてしまった姿に
皮肉っぽく口をきいたのは

同じく重臣の
「板垣信方（いたがきのぶかた）」だった

「まったくだ！！」
甘利は腹立たしそうに言いかえした

別に仲が悪いわけではないが。。。
同じ年寄り衆の板垣に疲れた姿だ。。。などと見られるのは許し難
かったのだ

板垣は
そんな甘利の乗り出さんばかりの勢いを両手を広げていさめながら
「お館様の手前ぞ。。」
と
落ち着くよう促した

「すまんな甘利遅くに呼びだして」

上座にすわった晴信は人好きする柔らかい笑みで機嫌良さげに声を掛けた
だが
甘利はまたもの「人材」選びのお付き合いに呼び出された事にへきへきしていた
大きく溜息を落とすと
呆れたように晴信に言った

「また人材ですか。。。そんな事ばかりでは「戦」を忘れてしまいそうですわ。。」

「戦か。。。。」

晴信もまた溜息をつくようにその言葉をはき出した
「戦」
戦い中心の治世
それは追放した父のやり方だったから。。。「好き」ではなかったいや

晴信は「戦」が「キライ」だった

人が「血」を流しぶつかり合う姿は。。。「悲しい」だけだった
「戦」に老臣たちがこだわる事が理解できなかった

でも
だから。。。
「戦」をしない。。。というわけには行かないのが
この「乱れた世」

ただいたずらに「戦」をためらい続けたというわけではなかった

父が残してしまった「負の遺産」を破壊し「人心」を取り戻す作業
が晴信は「一番」大切な事だと信じていた
武田家から
離れてしまった国民（くにたみ）の「心」を掴みたい。。取り戻したい

だからこそ
痩せた田畑を潤わすために治水工事を全面にたて
水郷の整備をし
ただキツイだけの締め付けの年貢を軽減させた

なんのために？
それこそが

根っこの部分で「戦」に備るためであった

そんな晴信の心根を宿老である甘利でさえ理解仕切れていなかった

勢い「戦」を口に登らせてしまったが
甘利は大きな溜息とともにキマリ悪そうな顔を伏せた
いつもの問答をしてしまった。。。という自戒の念がそうさせていた
そんないつもの「返答」に
晴信もいつもは「やんわり」と答えていたのだが

今日は違った
顔を背けた甘利に
覚悟を決めた声で言った

「戦。。。近いやもしれんな。。。」

その言葉に
甘利の首は飛び起き目の前に座る板垣の顔を見た
驚きの眼差しに
板垣は静かに頷き

「準備が整ってきたというわけですな」

と
上座に向かい
力を押し殺した表情で尋ねた

晴信に向き直った甘利はその「言葉」を待っていた
いまこそ

新しき政(まつりごと)に進む武田の姿を示す時がきた事に目を輝かせた

「待たせたな。。これからの「戦」について話し合いたい」

甘利
板垣
老臣二人の輝く武将の顔を前についに晴信は武田の「戦」について
語る事にしたのだ

「それでは話に入る前に紹介したき男がおります」

謁見の間から座敷に移った一同に最初の口を開いたのは板垣だった
暗い火の下で
板垣は背後の襖の向こうに控える男を呼んだ
「こちらに。。。」

その風貌は
今この瞬間に戦場から逃げた「敗残者」のようで
片足を引きずる不自由な動作
痩せた身体に曲がった背筋
両の手の指は何本か「欠けていて」そのうえ

顔を見れば
頭からすっぽりと
右側に面布(めんぷ)をかけ方目どころか顔を半分隠している

全体的に汚らしくみすぼらしい初老の男
は
異常な出で立ちで板垣の後ろ近くに伏した
甘利は顔をしかめた

老人は恭しく頭をおろした
伏した姿の彼に晴信は言った

「面をあげよ。。。」

歯抜けの老人はゆっくりと顔を見せた
黒く焼けた肌
嗄れた面

しかし
片方しか見えない目の輝きは鋭い

「お目通り適いまして恐悦至極にございます。。。」

言葉運びもしっかりとしている
「名乗れ。。。」
対面に座った信繁は努めて静かに聞いた

「ヤンソン・カーティケイヤと申します。。。。」

その19　武田菱　（3）

「唐人（とうびと）なのか？」

甘利（あまり）は聞き慣れない響きで
おそらく自身では発する事の出来ない音の名前をもつ老人に
及び腰で聞き返した

「いえ。。日の本の者でございます」

歯切れ良い声
ヤンソンと名乗った男は老人らしくない声

「日の本の者なのに。。。。聞かぬひびきの名前よな。。」
甘利は座ったままで
身体を反らし斜に顔をのぞきこみながら言った

滑稽な様子だったのだろう
老臣で「猛牛」ともあだ名される甘利の
腰の退けた対話は少なからず晴信を穏やかにさせていた
つい顔を綻ばせ

紹介した板垣に聞いた

「この者は「間者（かんじゃ）」なのか？」

板垣も甘利の様子がおかしかったのか
無言の状態ではあったが微笑ましい表情のままヤンソンに答えて良いと顔を見合わせた
ヤンソンは
一息，咳払いをしたの後

「私はただの「いくさ人」にございます」

「馬鹿な」

甘利は呆れたように即答した
理由はわからないでもない
片足を引きずった
指も揃わぬ男が「武」に秀でているとは思いがたい

むしろ
「逃げ切りの武人」か？

呆れた顔のまま当主晴信と板垣を見て言った

「悪ふざけはやめましょう。。。「戦」の話を進めとうございまする」

「戦の達人じゃ」

顔をしかめる甘利の言葉に「紹介者」の板垣がさらりと返し

そのまま続けた

「あらゆる「戦」の熟達者といってもいい。。。そうだなヤンソン」

甘利の冷ややかな目線をよそに
晴信に向かってヤンソンはこくりと礼をした

「どのような「戦」をしてきた?」

晴信の目は輝いていた
もともと「人好き」な心はわくわくしている気持ちを抑えられない
この一見寂れた「老人」がどのように戦ってきたのかを知りたい!
知りたくてしかたない

大きな体を前に乗り出し
ヤンソンの顔を正面からとらえ続けた

「遠慮なく申せ!」

歯抜けた口元をゆるめ当主に感心をもたれたことに喜びを表しながら老人は答えた

「生かすこと。。殺すこと。。作ること。。壊すこと。。計ること。。口説くこと。。あらゆる戦をしてまいりました」
「口説くこと。。。。?」

戦の話を聞こうと乗り出した晴信は「口説く」に反応した
男も女もこよなく欲する晴信の耳にその言葉がひときわ良く聞こえたのか

目を輝かせて聞き返した

「女を口説くのも「戦」か？」

「この世で一番難しい「戦」です」

晴信は膝を叩いて大笑いした

「まっまっことそうよな！！女も男もなかなかに心を開かん！！」

わざわざ
場所を変えてまでの密談だったのでは？
と
さらに顔をしかめた甘利に気がついたヤンソンは片目だけとはいえ
真面目な顔に戻り言った

「そういう「戦」をいろんな「国」でしてきました。。。ちと長く
なりますが手前の戦歴を語らせて頂きましょう」

晴信は気分良くそうしてくれと頷き
一同長い話に聞き入る事にした

ヤンソン・カーティケイヤは出身は
三河国宝飯群牛窪（みかわのくにほいぐんうしくぼ）で
父の代から「今川氏」に仕えたと言う
子供の頃から海を見て過ごし身体を使った「戦」にでる事は「好き」
ではなかったそうだ

十二で
今川氏牧野出羽守配下，大林勘右衛門（まきのでわのかみ　おおばやしかんざえもん）の家に養子に入り
立身出世の近道を模索した

しかし

せっかく
今川配下の取り立ての良い家に入ったのにやはり
身体でぶつかり合う「戦」は苦手で
何かと逃げて回った

その一方で「兵法者」になる事に憧れ
書物にうもれ
見識を広めるために
ついに大林の家を二十歳で出奔してしまう

生い立ち以降のそこからの話は
晴信
信繁
甘利
板垣
が考えている家出物語の枠を大きく越えた

京の都に上り遊興三昧
とはいえ
乱世楽しむ場所は少なかったそうだ

ひときは目を惹いた貿易船に
その若い衝動は働いた

これがヤンソンの生きる道の大きな糧に変わっていく

「港に停泊していた南蛮船にこっそり乗ってしまって。。。。」

どこか近場の港にでもつければ
などと安易な気持ちで忍び込んだ南蛮船はそのまま日の本を離れてしまった
海を行く中
ただ乗りが見つかってしまったヤンソンは
そこで「ヤンソン」というあだ名をつけられ牛馬のように働かされたそうだ

何ヶ月かの航海で着いた先は

「神々の国でした。。。」

と
遠い目をした

「ムガール」という帝国の元
阿蘭陀東印度会社（おらんだひがしいんどがいしゃ）という商いの元締めがあり
その下で働く男たちと仲良くなり
日の本以外の見識を多く仕入れた

もともと
学ぶ事が好きだった
だから付属する労働も「勉強」のようなもので

その地のあちこちに出向き仕事に従った
「とにかく。。。広い！！何もかもが大きい！！そして「戦」の仕方も斬新でした」

大軍の馬を並べ行軍する隊列
平地での大合戦

寝る間など与えられないほど輜重使役に駆り出されながらも
見るもの聞くものドンドン吸収していった
まず見る
聞く
そして異国の文字を読み
忘れぬように書く

学ぶ
そんな事を二十年ほどして過ごし
今度は共に長く働いた仲間として阿蘭陀（おらんだ）船に快く乗せてもらって日の本に帰ってきた

「神々。。。御仏の国か。。。すごいのぉ」

晴信もそうだが
甘利の目も輝きただ聞き入った
四方を山に囲まれた「甲斐」にとって海はまだ見ぬ地でありいつか手に入れたい地でもあったが

その海を越え遙か向こうの他国の地踏んだ男の話に聞き入ってしまうのも無理もない事

「帰って最初にやったのが「戦」でした。。。海の向こうの「戦」の仕方どこまで日の本で通じるかを試しました」

経験を試してみたくなる
それを実践する
いよいよ出てきた「戦」の話に甘利は身体を前にだし
聞きこぼさぬ姿勢だ

「安芸の国にて仕官いたしましたが。。年寄りという事とよそ者という事で適いませんでした。。が兵卒指揮を任されの参戦でございました」

「数多の戦いの果て毛利元就(もうりもとなり)殿と対戦いたしましたが。。。」

南に聞く大物大名の名だ

「どうであった」

晴信

甘利は「戦」の達人と紹介されたヤンソンの海の向この「戦」というものにかなり魅入られた様子で心を躍らせながら聞いていた

「惨敗でした」

ヤンソンはあっさりと。。。。
「勝利」ではなく「惨敗」。。。。。
期待した答えとはまったく違った

先に聞いた
大軍団の戦を知り知識として持ち帰った男は結局日の本での実践では一戦も勝てなかったのだ

「負け戦。。。だと。。。。」

甘利は首をふり青筋を立てながら
ギリギリと身体を前に伸ばし擦りつけんばかり顔をヤンソンの額に向け吠えた
長々話し込んだ結果が
達人どころかその風体通りの「敗残者」で
その敗北歴を聞かされ続けて。。。。
そんな会話に一心に耳を傾けた自分腹が立った

「貴様。。。。いったい何が言いたいんだ!!!勝ち戦の話じゃなかったのか!!!」

「負けました。。。負けてこのざまです」

そんな怒りの声に動ずることなくヤンソンは指を失った手をヒラヒラと振って見せた
その仕草に顔を真っ赤にした甘利は拳を握りしめ怒鳴った

「負け戦の話が何なる！！！」

「負ける事もあります」

激高する甘利をよそに晴信は冷静だった
板垣が無意味にこの「敗北」の男を連れてきたわけでないハズと
理解しながらも
あまりに
ヤンソンと甘利の言い合いが面白く大笑いしてしまった

晴信の大笑いに甘利はさらに激高して言った

「負け戦の達人など何の役にたちますか！！！」

「すまん。。。ハハハすまん。。。そんなに怒鳴るな」

後ろに転げるような勢いで大笑いをする晴信は口を堪えながら言った

「ヤンソンとやら。。負けたにしては気っぷが良いな。。敗北の先に何か見えたのであろう」

笑いながらも冷静に自分を見ていた新当主の言葉にヤンソンは静か

な笑みを浮かべた

「その先。。。。話してみよ」

晴信は続けろと手を伸ばして言った

その１９　武田菱　（４）（前書き）

新章に入って急に登場人物が増えて
「混乱」してます。。。
というメッセージをいただきました
ので！！

後書きに人物評を書いておきますよかったら読んでください！！
お話の内容を楽しむために見て頂けたら幸いです！！

ヒボシ

その１９　武田菱　（４）

灯籠の下ヤンソンの顔は今まで軽口で素性を語っていた時とは違った
目元は深く刻まれた皺と。。。。刀傷で「禍々しい」影を作っている
なのに片目の輝きは増していた

片口の端に少しだけ笑みを浮かべ

「敗北の先に。。。」
という
言葉を口に出した晴信をじっくりと見回した
その身を
その目を

大抵の相手なら
先の戯れ言じみた自己紹介で
怒りを露わにして
そこで
話は終わってしまっている

今まで「仕官」を望んだところではそうだった
だが
晴信は違った
話の「中身」をもっと見たい。。聞きたい。。という態度を口に出
した

「忍耐強い。。。。それとも。。。。わしが試した事に気がついた。。」

ヤンソンは小首をかしげ思った
短気な者には従えない
その気短さが「戦」にとって仇になる
十分にそれは味わってきたし兵法よりも「基本的」なものだ

己の感情を律す事のできない者に「人」は従わない
「戦」は命を賭ける場所
だから堂々と試す。。己の魂を預けるに足りるかを計る。。。

その試しに気がついたのか?
だとしても。。。

晴信は会話を打ち切らなかった
それどころか
笑って

「続けろ」と

「大器か?」

目元を引き締め
心を定め
静かに返答した

それは今までの口調とは違い
穏やかながらも

「本音」を隠さず語る姿に変わっていた

「戦の「価値」とはただ「勝つ」事でもただ「負ける」事でもございいません」

咄嗟に板垣は顔をしかめた
およそ
常識的な回答ではなかった

「戦」に価値と？
勝ち負けを「ただ」だと？
その言い分だと
「戦」に勝ち負けはない

裏をかえせば
長く続く「戦乱」が望みであり
終わってしまう戦いを「無価値」と言っている事になる
それはまさに
「戦」にしか「生きていない」人となる
そこにしか
自分を「見いだせなかった」という事だ

そんな者に
国民（くにたみ）の進退を決する「戦」を任せるられるのか？

ヤンソンは「戦いのみに臣従する者だ」

紹介者として「軍事」に携わりたいという触れはきいていたが
それとは異なる
「ただのいくさ人」で「羅刹」だ
板垣の鋭い目は
すぐにそれを理解した

「敗北の向こう側にあったのは死なぬ事でした」

板垣と甘利が表情を曇らせた事に素早く気がついたのか
口を挟もうとしたのを阻止するように老骨は話を続けた
もう
黙ってはいけないと感じたのであろう
自分の主張に最後まで「耐えうる」人物だった晴信に言葉を続けた

「死んでは「次」の戦が出来なくなって終いますから。。死なず怯
まず戦わせる。。。そういう心を国民(くにたみ)に政として施し「仰がれる」
主君を捜しておりました」

晴信の顔は真剣だ
板垣と同じく
「羅刹」の男は
ヤンソンの中身はわかったうえで聞く

「おぬしにとって「戦」とは?」」

ヤンソンの心は躍っていた
「価値」ある主君に

「わしにとっての「戦」は生涯指し続ける「碁」のようなもの。。
版図を広げながらも終わることのない「夢」にございます」

板垣の危惧は確信に至った
まさに「いくさ人」
「戦」に「夢」を見る男
主君の言葉を遮り問うた

「死なぬ戦を続ける価値とはなんだ?」

板垣の目は甲斐の全てを見ている
同じく甘利も
死なぬ戦いを続ける事は。。。。それはいかな意味か?
両職よりも歳をへたヤンソンの目は反らされることなく告げた

「強さを国民に身につけるための試練でしょう。。それにより国は
必ず栄えます」

その答えをよそに
問いつめるように甘利も問うた

「では。。それを政とし施し仰がれる者には何が大切なのだ?」

「はい。。。「戦」とは遮二無二戦い，やたら多くの兵を死なせて

もぎ取った勝ちに「勝利」はなく。。負ける時もただ逃げまどう「敗北」にもあらず。。。いかに殺さず勝つか。。。いかに死なさず負けるか。。これが大切な所であります」

「殺さずに勝つ。。。死なさずに負ける。。」

甘利は唸った
「禅問答」に近い答えだが。。
確かに「真実」も見えるような気もする

「それこそが「戦」を続ける中でも人の心を放さぬ極意です」

晴信は深く頷いた
顔に笑みはなく真剣な眼差しだ

「確かに。。。敗北の果てに得た光明。。。。なかなか良きものであったな」

老骨ヤンソンは肩の力を抜いた
そのまま深々と頭を床に擦りつけるように伏した

「どうぞわしを使ってくださいませ。。」

敗北という己の「価値」を最後まで聞いたこの「男」にならば

従ってみたい。。。そういう気持ちに至った
今まで相手の肩を空かすような問答で「戦って」きたヤンソンの願いであった

返事を待った
薄暗い討論の下
両職と「器」二人。。。。

甘利は沈黙を守っている
板垣は「価値」を見極めようとしていた
「戦」を真ん中にしか価値を見いだせない。。。そんな者を登用するのは
危険な賭けにも感じた
それに「極論」的な政(まつりごと)に繋がりかねない。。。

それでも
それを受ける「受け皿」
晴信の「器」ならば。。。。。あるいは使いこなせるか?

「使いましょう。。。兄上」

四人の中
激した問答に加わらず沈黙を続け様子を見ていた「信繁(のぶしげ)」が横に座す晴信に言った

甘利は怒鳴らず

ただ口を尖らせ反発した

「負け戦しかしらない男を使う理由はなんですか？」

晴信の顔は晴れしく輝いて言った

「負けたことに愚痴がなかった。。言ったとおりだ「敗北の先」を見ているのだから死なさず戦う統べもあるのだろう。。それはわしの望む「戦」に近い。ならば後は実践だけだその機会をわしがあたえたいのだ」

「ヤンソン。。。武田に仕えよ甲斐のためにその命を貰おう」

額を板間に擦りつけたままヤンソンはやはり歯切れのよい声で答えた

「ありがたき幸せ。。この老骨血肉の全てを甲斐に捧げましょう」

晴信は深く呼吸をした

今まで問答の間息をするのも惜しんでいたかのように深く

「明日オマエを家臣団の前で召し抱える！よいな！」

自分に得心したのか晴信の声は弾んでいた

「ひとつよろしいですか」

開きかかった場に甘利が手をあげた
相変わらず険しい表情で

「ヤンソン。。。何某。。。カテキ?。。。と言う名はなんとかならんのですか」

「わしはかまわんぞ」

晴信は陽気に答えたが甘利は

「奇っ怪な名前では家臣が驚くばかりで。。。話が前にすすみませんぞ」

ヤンソンは顔をあげ

「わしは召し抱えていただく身。。。ご家老衆，家臣衆皆様の呼びやすい名で呼んで頂ければ何でもかまいませんが。。」

と

無精髭をさすった

甘利は片手をあげたまま気がついたように

「おぬしは元々日の本の名があろう」

と指さして聞いた

「では山本勘助(やまもとかんすけ)で。。。」

とヤンソンは答え

ふくれ面の甘利は晴信によろしいか?と訪ねた

「よい。。。では山本勘助。。。。この甲斐のために励め」

そう言うと意気揚々と寝所に引き上げていった
主君の決断にいまいちな反応ではあったが夜も更けた事もあり
板垣と甘利も各々の屋敷に戻っていった

ただ二人
信繁は勘助と目を合わせ「北」の屋形に向かった

その１９　武田菱　（４）（後書き）

武田編。。。。

後書きからコンニチワ～～ヒボシです

新章に入ってから色々と人が。。。
出まくってます
で
少しでもわかりやすい方がよいと思ったので
ココに人物評を書いておきます

これからも楽しんで読んで頂けたら幸いです！！
ネタバレはありませんが必要ない方は読まないでくださいね！！

武田晴信（たけだはるのぶ）
武田家第１９代家督を相続した甲斐国守護
平たくわかりやすい名前は皆様ご存じの「武田信玄（たけだしんげん）」
現在２１才ぐらいで「信玄」って名前になったのは３８才の時で。。。この頃「トラ」は何してたっていうと
まだ林泉寺で修行つんでました（藁）歳は１０です
だから
ちょっと時間まきもどってるって事です悪しからずぅ～～
「人知の器」で人間大好き
男も女も抱く（藁）好き者

武田信繁

晴信の弟後の「武田典厩信繁（たけだてんきゅうのぶしげ）」現在１５才ぐらい。。。（爆）

なんか大人びてますね。。。

「神仏の器」を称する彼は「トラ」と相対する者。。。のハズ（藁）

板垣信方（いたがきのぶかた）

晴信の家臣で重臣

武田家では最高職「職」の一人で

晴信の教育係でもあった

ＮＨＫ「風林火山」では千葉真一が迫力の演技で！！

かっこよかったが。。。ココではどうなる？

甘利虎秦（あまりとらやす）

「猛牛」とあだなされる

武田家の家臣で重臣

板垣と同じく武田家最高職「職」

ヤンソンの事がいまいちキライ（藁）

「風林火山」では竜雷太が演じかなり渋い男っぷりだが。。ココではどうなる？（爆）

ヤンソン・カーティケイヤ事「山本勘助（やまもとかんすけ）」

武田軍きっての「軍師」。。。。と甲陽軍鑑（こうようぐんかん）には書かれている。。らしいけど

近年まで実在した人物かさえ不明だった（藁）

ココでは海外留学までして（爆笑）なかなかの知識をもっているようだが。。。

名前に「カーティケイヤ」。。。とあったりでまだ秘密も多そうです

「羅刹の器」とは？

おまけ

武田信虎（たけだのぶとら）武田家先代当主
晴信，信繁のおとーさん
「神仏の器」だったらしいけど力に飲まれて人で無しになってしまった
そのせいで甲斐から追放された
同上の「風林火山」では仲代達也が演じものすごいかっこよかった，
ちなみに仲代様は黒澤明の「影武者」では影武者だけど「武田信玄」を演じているこれもかっこいい！！

という感じの武田の人たちです
まだ増えていくでしょうが
その時はまたあらたな人物評でご紹介します！！

では今後もよろしくお願いしま～～す

また後書きでお会いしましょう～～～

その19　武田菱　（5）

「月が泣いてみえます。。。」

年老いたとはいえ
かつては音に聞こえた美貌をほこった「御北様（おきたさま）」の声は
年若い娘のように優しい響きと女らしい慈愛に満ちていた

だけど信繁には
その言葉が
夜の闇に澄み渡り
鈴が悲しい音色を響かせるように聞こえた

躑躅ヶ崎の屋形の北に新たに造営された屋敷に「大井夫人（おおいふじん）」が移ったのは
去年
夫であった信虎が甲斐から追放されてしばらくあってからだった
思い出の多い「お屋形」に居続けるのはよほど辛かったのか
体調をくずして寝込んでしまった事を心配した晴信の手配で
急ぎ作らせた屋敷は真新しい木の匂いを残していた

移り住みすぐに
髪を落とし剃髪し
終の棲家と決めた屋敷での読経三昧な日々
いつのころか
彼女の事を武田の者たちは「御北様」と呼ぶようになっていた

「申し訳ございません。。。。こんな夜更けに」

信繁は
屋敷には上がらず庭木の下に立ったまま母とひさしぶりの会話を始めようとしたが
今なお美麗な母の顔に見とれ言葉を止めてしまった
春の終わり
雨上がりの
涼しい風に揺らされる長い睫毛。。
その目には涙が浮かんでいた

「すみません。。。」

信繁は無言の母に責められているという気持ちになり
もう一度頭を下げてしまった

「信繁。。。オマエのせいではないのでしょう。。あやまるのはよしておくれ」

母の声が優しいほどに信繁は心苦しかった

そもそも
武田の家督を継ぐのは信繁だった

「神仏の器」であった父，信虎は己と同じ資質をもった信繁に家督を継がせようとしていた
そして近々その言葉が発せられようとしていた
そのために駿河の今川に嫡子晴信の「追放」「隠居」先を探してきたのだ

ところが
事態は僅差で動いた
兄は早かった
素早い動きと入念に練られた計画で家臣団の心をまとめ
逆に父を追放してし
現在の武田の当主となった

だが

当主に慣れなかったことに信繁は未練はなかった
そんな者に自分がなってはいけないとさえ思っていた
だから
兄が刀を持ち自分の部屋を涙ながらに訪ねたとき
素直に臣従する事を認めた

「上に立ってはいけない」

信繁の直感だった
父はその「器」によって自らを持ち崩した。。。。
だからこそ
自分なら「器」を使い切れる
などと高慢な気持ちになる事を畏れていた

兄の謀反の後押しをした

信虎追放は
御北様にとって。。。。喜ばしい事ではなかった
信虎を好いて甲斐に嫁いだわけではなかったから
追放されて気が晴れたのでは？

というわけでもなかった

昔
「戦利品」として
無理矢理輿入れさせられココにきた

好きでもない男との間に何人かの子をつくり

それでも
子供達に「教育」を与え
御仏の心を伝え
慈愛を説いた

武田家が。。。しいてはこの地に住まう全ての者が円満に過ごせる
事を願ってやまなかった

晴信。。。。。
御北と晴信は。。。。

顔がそっくりだった
血を分けた我が子なのだから自分の顔に似てくれたのは
喜ばしい事以外なにものでもなかったが

それが信虎との確執になってしまった

信虎は
自分が討ち取った
「大井一族」の血が色濃くでた晴信を本心から嫌った
顔をみれば罵倒し自分の屋敷には上げる事もしなかった
かわりに
次男である信繁に異常なほどの愛情を注いだ

「前に出でおいでなされ。。。」

御北は屋敷の庭木の下
影に隠れていた信繁を呼んだ

「いえ。。ココでよろしいです」
「信繁。。。顔を見せておくれ」

影に立つ信繁は困ったように首をふり
「ココで。。。」
手だけで会釈をした

「信繁。。。。顔をお見せなさい。。。話ができません」

母の懇願に
顔を伏したまま月明かりの下に足を進ませた

「信繁。。。顔をあげて。。私はオマエを嫌ってなどおりません」

わかっている事
母は
どの子供も憎まず，惜しみない愛情を注いだ
信繁は言われるまま顔をあげたが

母の目に浮かぶ涙が心を締め上げた
美しい眉をしかめ
それでも慈しむように自分を見る姿にいたたまれなくなった

それほどに信繁の顔は信虎にそっくりだった

「諏訪を攻めるのですね」

母をまともに見ることのできない信繁に
御北はみずから
苦渋の決断を口にした

「はい。。。わたしが進言いたしました」

先ほどまでのうなだれた態度とは違いハッキリとした口調で信繁は答えた
御北の目から涙がこぼれた
諏訪には腹違いの娘「禰禰（ねね）」が信虎の政策の元嫁いでいた

「明日にも家臣団にふれがでる事でありましょう」

御北には政（まつりごと）の表裏など知りようもなかったが
まだ
十六才の信繁が一人でそれを「提案」したとは思えなかった

「禰禰はどうなりますか？」

「悪いようにはいたしません」

十六とは思えないほど政策に忠実さを表す信繁

「何故諏訪を攻めるのですか？」

諏訪とは信虎治世の時に和平を結んでいる
かつては激しい戦を続けた両家ではあったが
決着を見る事はなくただいたずらに国民（くにたみ）を疲弊させただけ
どちらもの打開策として

献上の「品」として禰禰は嫁いでいった
まだ幼かった禰禰が前日実母と泣きはらして甲斐を離れていった姿を憶えていた

その後
よき夫であった諏訪頼重(すわよりしげ)に愛された姫は子をもうけ
武田との関係は。。。。
一見良好に思われた
が
何故今になって諏訪を?

「北に魔物が見えるからです」
信繁の実直な言葉に御北は頷いた
「確かに。。。吉凶の占いによれば「北」に大禍(おおまが)が現れていましたが。。」
言葉をとめた御北は信繁の後ろに控えている者の気配を感じとった
「信繁。。。オマエの「器」で感じた事を。。見ることのできる者がいますね」
母の言葉に一礼して信繁は振り向くことなく影を手招きした
影になっていた男はゆっくりと前に歩き
そのまま信繁の真後ろで深く頭を伏せたまま答えた
「羅刹の器。。。山本勘助にございます。。武田家の「器」を育てし御北様に拝謁できる事幸せに存じます」

「北進する理由は北に燻る（くすぶる）「災厄」を早くにつみ取るためであります」

勘助の紹介が終わるや
すかさず信繁は告げた

「それは。。。感じていました。。。それが見えるのですね?」
「はい」

信繁の返事に
御北は夜空を見あげた

「諏訪に。。。。。災厄がいるのですか?」

ただ悲しい横顔のまま聞いた
信繁の表情は曇ったままで

「武田を守るために必要なのです」

と
悲しむ母に告げた

その19　武田菱　（6）

「北の魔物とはなんですか？」

屋敷に二人を通した御北（おきた）は薄暗い灯籠の下
感情の起伏を殺したような抑えた声で信繁に問うた

「龍にございます」

御北の問いに信繁の後ろに座した勘助が答えた
「今はまだ「伏して」おりますがいずれ武田とまみえる事になる「大いなる力」を持つ者です」

「龍。。。」

いくら
政（まつりごと）に疎いと言え
北の地に居を構える「豪族」を知らないわけではない
御北は幾人か名前を思い浮かべた

「諏訪から向こうに座す者達の事ですか？」
「そういえます」

「協力して行く道はないのですか？」

母の言葉は質問というよりは

打開策を求めたものに近かった
終始目頭を押さえた姿に信繁は言葉を選びながら慎重に話した

「信濃における諏訪殿の存在は「特異」なものであります。。。そこが問題なのです」

「できるだけ」「嘘」を着かないように話を
本当の言葉にうまく嘘をのせる
母を裏切る背徳を薬味に

巧みに話を進めた

諏訪。。。
諏訪大明神を祀る歴史あるこの家は
信濃の真ん中に座すまさに「特異」な存在であった

「現人神（あらひとがみ）」として大祝（おおほうり）をいただき武士というよりは神官の家

「諏訪の「力」。。。大祝の「力」が弱まっているのです」

母の力をよく知っている
その「信心深さ」が吉凶の占いの予見を高めている事も

「諏訪の力。。。。確かに弱っておりますな。。。」

御北は素直にそれを認めた
感じているのだ
その上で聞いた

「北の魔物は諏訪を狙っている。。。。という事ですか？」
「そう。。。とも言えます」

御北は深い溜息をついた
諏訪の力が弱まってしまった責任は武田にもあった
信虎は何度となく諏訪を攻めた
その結果
どちらの国も民を疲弊させた
戦の間に何度も続いた「飢饉」
それは甲斐のみならず「豊かな土地」と思われた諏訪さえも。。。
襲った

今までなかった事だった
甲斐は山に囲まれた「過酷」な大地の元にあり
「飢饉」は大なり小なり毎年あった事だ

だが
諏訪は神仏の加護の元
「諏訪湖」を水源として頂き肥沃な地だった
にもかかわらず
飢えた。。。。

「神仏の力が衰えた」
と言えた

「神官の家である諏訪は「血」を流し過ぎました」

御北は小さく首をふった
「それは武田のせいでもありましょうや。。。」

気持ちが痛いほど伝わる
争いを避けたい母の気持ち。。。

「大祝の力の弱った諏訪では武田に迫る北の魔物を防ぐ事ができません。。」

信繁は言葉を止めなかった
目の前
沈痛な面持ちの母を責めるように続けた

「それどころかその「力」を食われ武田を滅ぼしかねないのです。。
その前に諏訪を武田の「中」に入れて終わねばなりません」

「そのために諏訪を攻めるのですか。。。攻めなくとも「和」を保つことはできよう」
「出来ないでしょう。。」

御北の願うような返事に答えたのは信繁の後ろに座っていた山本勘助(やまもとかんすけ)だった
年寄りの割りには響く良い声で続けた

「先ほど。。。信繁様が言われたとおり諏訪は「特異」な存在であります。。それは自らの家に「神」を持つという非常に「格式の高い」ものです。。。しかし力を弱めてしまった今ではその「名」にしがみつくばかりで「現す」事は出来ていません。。にもかかわら

ず気位だけは高く保とうとする諏訪の格式が「和」を成そうとはしていません」

御北にもわかる事だった
諏訪は古い伝統に則った格式の高い家だ
信虎の存在こそ「恐れ」てはいたが
晴信にはどうだろう？

晴信は「戦」を恐れているとまで思われている

今の状態ならば平気で
下るのならば「武田」が頭を下げよと。。。。言いかねない
しかし
それでは先代を追い払ってしまったばかりの「武田」の地位は地に堕ちてしまう
ひいては
新当主である晴信が諸国から見下されてしまう

家臣達に言われるままの
「危うい」当主。。。。。

「父」を追放して「国主」の座に着いた事で
「悪逆非道」などと非難を浴びている晴信の采配の中
諏訪に平伏するなどありえない
そんな事が他国にこれ以上広まってしまっては甲斐が立ちゆかなくなってしまう

「争いたくはない」

そうはおもえど
格式にへばりつき甲斐を見下す「脆き神の力」の諏訪をそのままにしておくことはできない
物憂げに思案する母をみながら
信繁は言った

「来るべき災厄に武田には備えがあります。。。四つの「器」を持つ事ができました。。その器が大祝を越え。。また満たす事が出来ます」

「孫六の事ですね。。」

御北の目は涙に潤んでいた
まだ十を少し越したばかりの末の息子も「器」を持っていた

「天陽（てんよう）の器。。。にございますな。。。」

自らを「羅刹の器」と称した勘助はうれしそうにおどけて聞いた

「羅刹と名乗るおぬしは。。本当の名は「陰陽（いんよう）の器」であろう。。。」

その軽々しい態度に
御北は勘助を睨みながら答えた

ゆるんだ勘助の口を手で制止した信繁は言った

「武田は四つ目菱の家紋のごとく四つの「器」を持ち。。北の大禍に対処できる唯一の存在です。。。家の名にしがみつきいたずらに「神」の力を放置している諏訪を併合せねばなりません。。危うきを見捨てておくわけにはまいりません。。たとえ拒まれ「戦」になっても「神仏」の力を北の闇に奪われるような事があってはなりません」

「話し合う時間はないのですか?」
「ありません。。。そうしているうちに。。」

間髪入れず
この苦痛の会話を終わらそうとした信繁の前で御北は崩れた
横に崩れ
嗚咽を抑える事はできたが
涙を止める事ができなにかった
辛すぎたのだ

その姿に信繁は言葉を止めた

顔を着物の袖で覆った母の姿に顔を背けた
その涙で「嘘」見抜かれ咎められた気持ちでいっぱいになった

しかし

「諏訪を攻めるのは。。。武田のためです。。兄上を助け武田を守るためです。。ご理解を。。して。。」

信繁の目にも涙があった
耐えられなかった
愛する母に泣かれる事は程度覚悟してきたとはいえ
目の前で見るのはやはり辛かった

声をうまく伝えられないほど震えていた

「それほどに北の魔物に備えねばなりませんか?」

信繁は自らの目からこぼれそうな涙を隠すために頭を下げて言った
「はい。。。」

その言葉に御北も覚悟を決めた
「神仏の器」である息子は弱った神の息吹を聞き取りココにそれを告げにきた
諏訪が弱れば
加護を失えば

必然的に
信濃に住む豪族達はそこを皮切りに「甲斐」を攻めるだろう

甲斐の新当主はついに諏訪との同盟さえ御する事が出来なかったと。。。

ここぞとばかりに

その前に
その「力」を取り込み「蓄えさせる」事ができるとする最後の機会
なのかもしれない

顔を隠したまま御北は涙声で聞いた

「ではせめて禰禰(ねね)の事だけは。。。。良くしてやっておくれ。。」
「肝に銘じて。。。。」

信繁は深く伏した姿勢のまま母に誓った

「母はココで「北の大禍」にそなえ祈りつづけましょう」

御北のその言葉を聞き
屋敷を後にした

「涙まで流せるとはなかなかに芸達者でございますな」

自分の屋敷に足早に進む信繁の背に足を引きずって付き従う勘助は
飄々と言った

足を止めた信繁は振り返っていった
「無礼を言うな！芸で涙など流せるものか！！」

唇を噛んだその姿に
勘助は意外?というような顔で驚いたが一歩引いて頭を下げた

「失礼しました。。。」

信繁は自分の中の「義」と「不義」のせめぎの中にいた

その19　武田菱　（7）

「諏訪討つべし」

雨の日々の中

六月

その号令が武田家家中に発された時の反応はおおかた「合」（合意）
であった
それほどに「戦」が待ち望まれていた

信虎治世の時代
諏訪は武田に半ば「臣従」の立場に近かった
それはひとえに信虎を恐れ「距離」をとっていたにすぎなかった
なぜなら
新当主である
晴信への対応は武田の家臣団に言わすのならば「杜撰」であった
当主への挨拶に書状こそあったが躑躅ヶ崎（つつじがさき）のお屋敷を訪れなかった
事からも伺える

事実
諏訪頼重（すわよりしげ）は晴信を侮っていた
武田の「お家騒動」は「粗末」な当主を選ぶというしまらない結果
になったものだと
父に疎まれ続けた男を「長子」というだけで当主にしたのならば
家臣に操られる頼りなき男なのだろうと思っていた
信虎「追放」も。。。きっと家臣たちの仕業で

晴信は「知らぬ間に」当主に祭り上げられた。。。。
そんなところだろう
と

禰禰(ねね)は深く渦巻く不安の中にいた
まだ幼さの残る顔
瞳を曇らせ
懇願するような声で

「兄様とお会いになってくださいな。。。」

と
愛児「寅王丸」の寝所から名残惜しげに帰ってきた夫の袖を
弱く引き寄せて言った
頼重は「またか」という気持ちにはなったが
それでも態度は柔らかく妻に返事した

「晴信殿は領内の事で今は忙しかろうし。。。諏訪も「金刺(かなさし)」や「高遠(たかとお)」との事で忙しい。。お互い落ち着いた時で良いだろう。。慌てることはない」

雨の上がった音を確かめ
少し襖をあけ

手で風を招き入れた

上原城。。
晴れていれば諏訪湖を望むこともできる
この城で
先月禰禰は「寅王丸」を産んだばかりだった
もともと小柄で侍女たちよりも華奢な禰禰に出産は「大変な仕事」
であったが
無事に事を成し
ようやく身体が落ち着いてきたところだった

年上の夫，頼重はまだ幼い妻の白い小さな手をとって言った

「オマエと私の間に待望の男子も産まれたばかり。。ホントに可愛い子じゃ。。きっと良き絆となってくれようぞ」

赤子愛しさに緩んだ表情を見せる頼重とは反対に
禰禰は目を伏せた
深く結んだ淡い桃色の口元は苦悩を現していた

「吉凶の占いに「南に嵐」ありと出ております。。。」
「それが高遠だな。。その占いに備えねばならんな」

妻の言葉を聞きながら
優しく髪を撫でた
それでも不安の表情で瞳を床に向ける禰禰の額に口づけ陽気な声で
頼重は続けた

「大祝（おおほうり）の占いでは北に「大禍」が現れているが南はたかが知れてい

る。。。禰禰が案ずるような事はない。。いやいやもちろん高遠と
戦になったら。。祈ってもらわねばならんがな」

手を引き寄せ
妻の小さな身体を後ろからを覆うように抱きしめた
心細くなっている妻に
安心を与えたい気持ちが
優しい鼓動になって禰禰の身体に伝わった

「禰禰。。。心配いたすな。。。可愛い禰禰」

自分の名を繰り返し呼び愛でる夫の腕の中で
それでも
ぬぐえぬ不安にその手をつよく握りかえすこと。。。それが今の禰
禰の精一杯だった
しかし
子を産む事で高まった「神力」は
母の「力」になって不吉を告げ続けていた

山本勘助の仕官が適ったのは
密談で約束された通りの翌日だった
主殿(しゅでん)評定場に上がらせるために
身なりは板垣が整えさせた

対面の座に粗相のないよう姿にはなっていたが
伸びたままの髭に歯抜け面
頭には片目を隠すように面布（めんぷ）をかぶった姿での登場に

並ぶ家臣団は顔をしかめた
そんな冷ややかな反応をよそに

晴信は自らの名前の「晴」を勘助に下賜した
「山本勘助晴幸（やまもとかんすけはるゆき）と名乗るがよい」
と

「格別」の扱いだった
評定場は一応にどよめきがあがったが

その扱いに恥じぬ献策を勘助は披露し
家臣たちを初めて「羅刹の器」を披露し味あわせた

「高遠。。。金刺。。どちらとも調略はすんでおります。。」

片目の輝きは「戦」に燃えていた
聞く者の心を掴む光

「何故？高遠や金刺までを巻き込まねばならんのだ？」
調略の言葉に早い反応を示したのは
家臣の中でも年長になる「諸角虎定（もろずみとらさだ）」だった
その歳に似合わぬ甲高い声の主に
勘助はゆっくりと首を傾げ会釈をすると

無骨な体格から
かけ離れた
流れるような舞の手つきで諏訪の方角を指さし

「何故？。。。武田が単独で諏訪を攻めれば「もともと武田は諏訪を裏切るつもりだった」と思われてしまいます。。それを避けるためです」

と
ひときは抑えた口調で答えた
「非難」をさけ
人心を掴むために「裏切り」はしないと明言する

今はまだ。。。。
友好関係を持っているのだから
たが
「見くびられている」事を許す訳にはいかない

という「本心」を美しく「発露」するために

「高遠。金刺両氏には「武田は諏訪を攻める」と言ってあります。。しかしながら。。。「代替わり」でいまいち心許ない出兵である事も「間者（かんじゃ）」によって流してあります」

まるで
ゆるやかな「風」
押す。。。そして引くそれにそのまま「惹かれ」てしまう声

昔話をかたるかのように勘助は陽気に言う

「そんな流言をながせば高遠は諏訪を攻めには来るまい。。。」

甘利(あまり)は
初めて会ったときと同じく渋い表情で問いつめた

「それで良いのです。。。「諏訪を欲している」のは武田なのですから。。。」

「本心」を少し覗かせる
欲しいモノ。。。

俗っぽい言葉を口から滑らせた勘助を信繁が睨んだ
その目に気がついた勘助は
少し襟を正して続けた

武田の出陣を知った
高遠，金刺は「一応」出兵の準備をするだろう
しかし出てはこない
武田の出方を見ている

「侮って」新しい当主が。。。どんな「戦」をするかを「高みの見物」をするために
備えをしたまま近くまで「見に来る」

それを「諏訪方が近隣衆と結託しての武田に対する謀反を起こす」

と解釈する
もちろん諏訪には別の流言が
「高遠が諏訪を狙ったために武田は出兵した」
と
平然と流す

「誰が真の敵かを見極める時間を与えず準備の整った高遠たちが諏訪に詰め寄るまでの間に武田が「諏訪」を上原城を制してしまえばいいのです」

流言に流言を重ね
真実をうやむやにしてしまった上で

いち早く拠点をつくり
現実に引き戻す
それが
「流言」を最後にまとめる場所となる

勘助の言葉は
なによりもその声は巧みだった

疑問を差し挟むべき部分に誰もを呆けさせ
「そうなる」
と
信じ込ませてしまった

「いよいよ戦にございますすなぁ」

躑躅ヶ崎（つつじがさき）

板垣の屋敷の一室で勘助は活き活きとした声で地図の上に指の足りぬ手をかざし言った

「諏訪討伐」の号令が出てから

武田の家中は騒がしかった

手早く小荷駄が用意され

屋敷の人足たちが昼間の道を行ったり来たりしていた

「武田の皆様が「戦」をこれほどに望んでおられて喜ばしいかぎりです」

「戦」を饒舌に語る勘助目はうっとりとしていた

その前には目を閉じた信繁が座っていたが

お構いなしなのか

忙しく地図の上の駒を走らせ

覚え書きをまとめ続けた

勘助の立案した策は受け入れられ準備は恐るべき早さで進んだ

評定から向こう

板垣の屋敷に勘助は泊まり込んでいた
まだ
新居を頂いてはいなかったので「諏訪攻め」出陣までをココで過ごすつもりだった

「お聞きたいよろしいか？」

急に気がついたかのように
忙しくしていた手を止め
目の前に座している信繁に勘助は声をかけた

「なんだ」

そっけのない対応
目を開き地図を見た信繁に
勘助は筆を硯（すずり）に戻すと問うた

「何故。。。大祝（おおほうり）の力が弱った。。。「真実」を教えて頂きたい」

その19　武田菱　（8）

大祝（おおほうり）の力は「何故」弱ったか？

「弱っている。。。という事は御北（おきた）様との話でわかりましたが。。。」

目の前に広げていた地図を無造作に手でよけながら
勘助は
会話の内容の事を考えてか
信繁に身体を近づけ小声で聞いた

「父上が。。。。そうなるように仕向けたのだ」

信繁は額を指でさすりながらこたえた
勘助は父上事信虎（のぶとら）の名に目を輝かせた

「ああっ。。良き殿にございましたなぁ信虎様。。」

思い出した
勘助が武田の家中に出入りするようになったのココ最近の事ではなかった

もともと
三年ほど前から老臣板垣とのつながりを持っていた
目こそ片目の状態であったが

手も足も不自由のなかった頃の勘助は
「負けぬ戦をします」
としいう
自信に満ちた態度で信虎に仕官するつもりだったのだが

信繁に阻まれたのだ

「信虎様。。早くに召し抱えて下されば大きな「戦」の夢も見られたでしょうに」

信虎の気性は勘助には好ましいものだったすでに
「器」の力に飲まれた信虎の頭では
世の中を計りだす尺は「戦」でしかなかった
「戦」が我が世の春という勘助にとっては夢のような「当主」だったそれゆえに早く仕官したかったのだが

「あり得ない事だ。。父上とオマエが会っていたら武田はすでに滅びていたわ」

嬉々とした表情の片目に
信繁は釘を刺すように言った
事実前年「安芸武田」が滅びた戦に勘助は関わっていた

当時十三になったばかりの信繁は
一目で勘助が「危険な存在」である事を見抜いた

「あの時信繁様に「器」を見抜かれなければ手足を失う事なく「戦」

を楽しめたでしょうに」

勘助はじつに残念という物言いと溜息

器同士の。。。。共鳴

己を見失った「神仏の器」の父と闇から光りを計る「陰陽の器」それに鬼神の知謀を兼ね備えた「羅刹の勘助」が一緒になっていたら。。。。

「人知」も「光」もない「仏」と「闇」だけの偏った治世など。。。

幼少の頃より
父の近くでそれを見て
そして
自分「器」をいち早く理解した信繁は

板垣に申し入れ
自分の指南役でもあった諸角虎定（もろずみとらさだ）を介し
勘助を信虎に引き合わせる事を許さなかった

「まぁしかしこの年になっても召し上げて下さった事には感謝せねばなりませんなぁ。。。」
と
見えぬ側の片目を面布（めんぷ）の上からさすりながら続けて聞いた

「信虎様はやはり諏訪を狙って「細工」しておりましか？」

信繁は腕を胸の前で組み
勘助の顔を見た

「「女」は産まれた時から腹に「育み」という「器」を持っている。。。」

顔を背け
遠くを見るようにして言った

「大祝の元に禰禰(ねね)を送ったのはそのためだ」

勘助は首を傾げたが
さすがに「器」の一人自分の中で導き出した答えを述べた

「禰禰様の腹（器）に大祝の力を受けようと?。。。。した?」

どうやって?
興味深い話だった勘助は手をさしのべ
つづけて話をしてくれとうながした

武田の「器」を産みし母

「大井夫人」。。。今の名を「御北様（おきたさま）」

を

信虎が「和睦」の品に奪ったのはなにもその「美貌」に欲を出したからではなかった

早くから

自らの「器」に気がついていた信虎は

御北の中にある「育み」が非常に優れたものである事を見抜いていた

「神仏の器」を持つ自分の種を

「信心高き育みの器に持つ」御北に植えて

武田を強大にする「大器」を産まそうと考えたのだ

そうして産まれた子供達

御北の腹からでた息子たちは「器」を継いだ

それはすばらしい結果だった

考えていたとおりだった

神仏の力の種をそのままま受け継がせる事が出来る腹を持つ女から

産まれるのは

その力をより宿した者になった

普通の婦女子ではありえなかったが

御北にはそれを成すだけの「心霊強く信心深さ」があったからだ

「だが父上の力は兄上が生み月が近づくにつれて酷く弱った。。」

勘助は頷いた

現当主である晴信が出産月，甲斐は今川に攻め込まれていた
子の出産が近づけば近づくほどに「神仏の器」は弱り

身重の御北は躑躅ヶ崎(つつじがさき)の屋敷を脱出し
要害城に向かわねばならぬほどの窮地に陥った
しかし
晴信が生まれた時
それまでの劣勢を嘘のように跳ね返した

子のもつ「無垢なる力」が解放され
母を守るために発現した。。。。

信虎はその出来事から。。。。狂いだした。。とも言えた

「力」の動きをより知ることに没頭した
女の腹「器」というものに執着しそれを持つ女を次々と側室にしていった
まるで実験を重ねるかのように
それは非道な行為にもつながっていき
いつしか父は「孕み女(はらみめ)」の腹を裂いたとまで噂されるようになっていった

狂気
「力」にのめり込む事で自分をの心を「闇」に落としてしまうほど

禰禰もまたそうだった彼女は母こそ御北ではなかったが
やはりそういう器をもった女との間に成した子供だった

「禰禰の腹に大祝の力を受け取り迫る出産月で「諏訪大明神の力」
が弱まったところを攻めるつもりだった」

禰禰の輿入れが決まった時
まだ
晴信に実権はなく
誰にもその事は知られてもいなかった

「信繁様は気がついていらっしゃったのですな」

悲しそうな顔
信繁は狂ってゆく父を止められず
その計略の「器」として嫁いでゆく禰禰も止められなかった

ただ父を見る事によって自分が同じ「器」を持って産まれた事を恥じ
同じ道を辿るまいと心に決めた

そして
今は父の残してしまった「野心」をなんとしてでも摘み取らなければならない

「今，大祝の力を宿しているのは「寅王丸」様ですな」

勘助は人差し指を掲げ推理の紐解きを楽しむように笑い
腹をつかって頼重の持つ「力」を禰禰との間に産まれる子供に「移した」事を即座に理解した

「そうだ。。諏訪に「寅王丸」という「大器」が産まれてしまった以上。。「子」の持つ力は侮れない。。今ならまだ倒せる」

子の力を侮るな
晴信が生まれた瞬間に武田は今川からの劣勢をはね除けたように子のもつ無垢なる「力」によって武田が阻まれる時がくる

「そのためにオマエに出来るだけ「血」を流さない「戦」を献策させたのだ」

小難しい「戦」の策を用意せよと信繁に言われた事を思い出しながら勘助は
それでも
この「頭」を使った「戦」を楽しみながら
事のつじつまが合致したことに
より涼しい顔でいった

「余分な血を武田が流せば「寅王丸」は武田を敵とみなし母を守る力を現す。。。だから諏訪の同族「高遠」を利用するわけですか」

諏訪大明神を頭にもつ同族同士を争わせる形の末に
諏訪を制する

「しかし。。。血はどうしても流れます。。。それを見たくない。。見せたくないなどと思っての「策」ではないでしょうな?」

勘助はもう一つ気になっていた事を口にだした

「どういう意味だ」

「晴信様は「戦」を好まないようですが。。。」
「オマエほど好きではないだけだ。。。余分な事を考えるな」
信繁はそれだけ言うと外の方を向いた

なんとしても。。。
武田のためにも。。。

腕組みをしたまま拳を強く握りしめた
信繁の顔は苦痛の面持ちだった
もっと早く代替わりがあれば。。。
禰禰が子を宿す前に。。。

諏訪頼重と武田の「器」を持った禰禰の子は。。。
きっと強大な「敵」になってしまう。。。
窓を見て
思案にくれる信繁の背中に

「禰禰様はどうなりますか?」
と話しかけた
策を受け持った勘助は
「血」を流すなと注意は受けていたが禰禰についてはなんの注意も

受けてはいなかった

信繁は立ち上がった
小窓から忙しく「戦」に備える人の姿を見ながら無表情に
凍りついたように。。。。弾みのない声でこぼした

「禰禰の役目は終わった。。。終わったのだ。。。」

禰禰を救う手だてなどない事は二人ともわかっていた

「強き武田を作るために。。この「戦」は避けては通れぬのだ。。。」

信繁は自分に言い聞かすように
心を抉るように

言った

その19　武田菱　（8）（後書き）

戦国バサラ。。。

後書きからコンニチワ～～～ヒボシです

暑いです
もうエアコンなしで生きられない歳になりました
そんなヒボシの家にも
里帰りでいろんな子供たちがきているのですが。。。

その持ち帰ってきたゲームの中に発見
「戦国バサラ」。。。
戦国のバサラ人？
と言えば「佐々木　道誉（ささきどうよ）」の事なのか？（それが思いうかぶのも問題ありか？）
と
思ったりしましたが。。。
そのゲームの内容のすざましさに。。。泣きそうになりました

ものすごい飛んでます
ものすごい回転してます

ゲームの絵における
信長像って。。。ホントいつも「大魔王」ですね。。。
家康の家臣。。。本多さん。。。ロボットだったんですか（爆）
そりゃ勝てませんよ
武田信玄のとなりにふつうに真田信繁（幸村）がいるぅぅぅぅ

子供達の話の中で
真田さんと伊達さんは。。。仲良し
武田と伊達は同盟国だと。。。。ああっ武田家って滅亡しなかったんだぁ～って！！

いいのかな。。。
あんな感じになっちゃって
日本史の授業とか受けたとき。。。
違いすぎて泣き出したりしないか心配です

そんな
火星の小説も史実から逸脱しているので大きな事はいえないのですが。。。
あそこまで豪快にはずしていると。。。
やるならあのぐらい清々しく「破壊」しろって事なのでしょうか（涙）

そんな衝撃をあじわった夏でした

ではまた後書きでおあいしましょ～～

その19　武田菱　（9）

諏訪頼重（すわよりしげ）が高遠に不穏な動きありと言う報告を聞いたのは
四月の初めであったが
その報の出所は曖昧だった

しかし
常に警戒の必要な状況に諏訪はいた

もともとは
「高遠」も諏訪大明神を奉ずる「一族」なのだが
大祝（おおほうり）の座をめぐって。。。。
見苦しい事だか揉め事の絶えない状態にあったからだ

そんな中にあっても
諏訪の城下は温かい雰囲気につつまれていた

「新宮」誕生

惣領家（そうりょうけ）待望の「男子」誕生に喜びがそこかしこにあった

「良き空じゃ。。。」

雨の合間に晴れあがった清々しい空を見回しながら
城下を馬で駆ける
頼重はまぶしい空を見回し言った

「寅王丸にもみせてやりたいのぉ」

と

普段は口をへの字にまげ
まだ若いとはいえ気苦労の絶え無さか眉間に皺をよせている頼重が
子煩悩な笑みを家臣たちの前で見せていた

彼が惣領家を継いだのは
三年ほど前だった
やっと武田との「戦」三昧の日々が終わりを告げ城下にもにぎわいのある風景が戻った諏訪
神事徒事するために髭をそり
年齢よりもさらに若く見える顔
「和睦」の証としてやってきた禰禰(ねね)との間に授かった
「寅王丸」。。。。
ようやく
静かな生活をしていける

争い事は。。。。好きじゃない

この諏訪で大明神を祀り
良き妻，愛しき子を得た

苦労の多かった若き日もこの時のためと思えた

そんな安らいだ晴天の日にも夜の闇が訪れるように
簡単に暗転してまう

その時は近づいていた。。。

六月二十五日。。

「甲斐武田軍，昨日諏訪に向けて兵を挙げました！！」

その報告を聞いた時。。
頼重は手に持ち目利きをしていた脇差しを落としてしまった

「なんだと。。。？」

聞き直そうと報告を持ってきた使い番を見たが
なおも続く報告に言葉を失う

「また。。。高遠も少数ながらの兵ではありますが諏訪に向かっておるとも聞いております。。」

頼重の頭は混乱した
高遠が兵を挙げるのは
少なくない事だ

度重なる嫌がらせの一つに入るほどだ。。

だが

武田は何だ?
何の前触れもなく兵を挙げ
何故

諏訪に向かっている？
諏訪に向かっているのか？それとも「信濃征伐」の挙兵なのか？

今はまだ同盟の仲ぞ？
それにしても事前に何の連絡もなかった

「何がおこっている！」

頼重は
呆けた自分の頬を平手ではり倒し
目を怒らせて
使い番に怒鳴った

「わかり。。かねます。。ただ西方（にしがた）では武田の諏訪攻めに「参陣」
せよとのふれがあったとの事」

武田。。。。

「しかしながら金刺（かなさし）あたりでは高遠が諏訪を狙ったために武田が出
兵したとの。。噂もありまして」

金刺。。
高遠。。

混乱はますばかりの報告だ

「誰が諏訪に対して旗を揚げているのだ？」

頼重は家臣団の顔を見回した
誰にも検討のつかない「挙兵」
わからない事にただ苛立つ
共に城下の見回りにきていた者たちにも「混乱」が見える
もう一度問うた
低く自分の油断を押し殺すかのような声で

「誰が諏訪の敵なのだ？」

場が静まりかえる
誰にもわからない。。答えられない
今までこれほどの「暗闇」。。明確さのない戦の報を聞いたことがなかった

「武田が諏訪を。。それはあるまい。。。禰禰に子も生まれたばかりぞ」

自分の口に登った妻の名に城下から
上原城を見た

「禰禰。。。。」

城下から馬を駆り城に戻った頼重は蒸し暑さに滝のように汗をかいていたが。。
本人の感じるものを足せば
「冷や汗」が大半を占めていたと言い切れた

すでに使い番による報告が入って
城内は騒然としていた

家老衆たちは早々と軍議の支度を調え
備えに入ってはいたが。。。
結局のところ「敵」のわからない模索状態にかわりなく
主君の帰りを待っていた
足取りを落ち着かせ
奥屋敷に向かいながら

「混乱」の報告に惑いながらも
詰め寄る重臣たちに指示をだしていく

主君が落ち着いていなくては。。。どうにもならない
しかし
これは暗闇の中での「準備」だ
何もわからない。。。ではなく

何が正しいのかがわからない
向かってくる「武田」はいったい何だ?
それに併せて兵を挙げている「高遠」は。。。何だ

何もわからないから何の準備もしないわけにはいかない
すでに
何かが進行している。。。

それは間違いなく「戦」なのだ

「とにかくどんな子細な事も城に届けさせろ!!城の防備を固め兵

を集めよ！！」

そこまで指示をして奥屋敷に入った
侍女たちが揃う中
乳母（めのと）に抱かれた「寅王丸」の姿がすぐに目に入った事で
騒ぎ続けた心に落ち着きを戻した
やはり赤子の前で慌てた自分を見せられない

心の強い「父」でありたい
頼重はその小さな赤子の手をとった

昼を少し回った刻
泣き疲れたのか。。乳に満足したのか静かな寝息の中にある「寅王丸」の柔らかな頬をなでた

「良い子じゃ。。」

息を整えた頼重の声は優しかった
手に触れる温かな存在に自分の騒ぐ気持ちを落ち着けた

「禰禰はどおした？」

「寅王丸」に見とれ気がつくのが遅かったが
いつもなら誰にも手放さぬ勢いで寅王を抱いている禰禰の姿が見えない事に気がつきあわてて侍女に聞いた

女たちは困った顔をするだけで答えようとしない
頼重は怒鳴りそうになったが寅王丸の寝顔に声は静かにもう一度聞いた

「禰禰はどこにいる？」

侍女頭の三木（みき）が
静かに近寄り言った

「奥の間におられます。。。」
「気臥（きふ）せりか？」

あまり身体の丈夫ではなかった禰禰にすでに驚愕の事態は伝わっているハズだ
心を痛め寝込んでしまったのか？
心配な面持ちになった頼重に三木は淡々と告げた

「いいえ。。。武田が向かってくるのでしたら「寅王丸」様をつれて逃げられても困ります。。ゆえに。。」

頼重は三木の着物の襟を掴んでひっぱった
眠っている赤子から引きはがすように
まるで引きずるように力任せに

「おのれ!!禰禰から寅王丸を奪い取って閉じこめたな!!」

三木は驚きながらも
着物が乱れてしまわないよう手でおさえながら答えた

「申し訳ありません!。。。何か謀があってからでは手遅れになって。。」

武田から嫁いできた禰禰をもともと諏訪の家臣はよく思っていない者が多かった
侍女にいたってまでこんな調子で
妻で「正室」として諏訪にきてからもよく気臥せりになり寝込んだ
禰禰

その
禰禰にとって「寅王丸」が産まれ自分の手にいる事が「救い」になっていたのに

なんてことを。。。
禰禰がいったい何を計れるというのだ!
苛立ちで三木を投げそうになったが大事にせぬようそのまま手を放し
急ぎ奥の間に向かった

奥屋敷のさらに奥まった部屋の前に着いたとき
微かだが涙に濡れたしゃくりが聞こえた

「禰禰。。。。わしじゃ。。。。」

頼重はひときは優しい声で襖を開けた

その２０　禰禰　（前書き）

後書きに
人物評２書きました。。
お邪魔でなければ読んでみて下さい～

その２０　禰禰

静かに襖を開けた頼重（よりしげ）の目に
間近に控える侍女が二人

両人とも険しい表情
禰禰（ねね）に従い甲斐からついてきた彼女たちの厳しい視線に

「すまんが。。。さがってくれ」

と

乞うように挨拶をした
態度はできるだけ和やかにして
付き従う侍女にはけっして当たり散らしたりしない。。。

「禰禰。。。」

狭い奥部屋の隅が「屏風（びょうぶ）」で囲ってある
その奥に禰禰がいる事はわかっている

やむことなく
小さく続くしゃくりに
すぐには近寄らず襖の近くに座って

「わしじゃ。。。」

と
距離を取った所から
頼重はささやくように呼びかけた
返事はなく
ただ
泣くその音だけが続く

わかっていても腹が立ってしまう
報告が来てすぐにココに閉じこめられたのだろう
「逃げ出す」など。。。
こんなにも気の弱い禰禰にできるハズがない
きっと
怯えてしまっている

「禰禰。。。。顔を見せておくれ。。」

すすり泣く音は聞こえても返事は返ってこない

頼重は息を深く吸ってみた
夏の中にあって冷えた空気
奥向きのこの部屋は昼でも暗い
真夏の近づくこの季節には涼しくて丁度よいのだが
寅王丸から引き離され
一人
この部屋に込められてしまった禰禰の事を想うに心が痛む

しばし沈黙の後

ゆっくりとした口調で語りだした

「憶えておるか？そちが輿入れでわしの所に来た日の事。。。あの日も。。そちはそうやって屏風の後ろに隠れておったな。。」

三年前
和睦が決まり「禰禰」が武田からやって来たとき
もちろん
頼重は。。。。乗り気ではなかった
早くに「正室」を病でなくしていたからか
その後釜にどうだと言われても
もとより「和睦」の品で来るの女なのだから
軽い気持ちではいられなかった

これは
諏訪の主たる者の「任務」。。。。。
と
重い気分だった

祝言の時，禰禰を初めてみた。。。
ずいぶんと「小さな女」で
華奢な肩や身の丈に
和睦の元，橋渡しとなる「子」を作る事は出来るのか？
まるで「幼女」。。。
と
心配になってしまったほどだ

何かに
期待していた自分を裏切られた気分になった

「粗品」を渡された
と

当時「禰禰」は十二歳。。。

それでも
当然「初夜」を迎えるわけだが
。。。。。
すでに側室を持ち子供も「娘」ではあるが持っていた頼重は
どうにも乗れない気分でいた
とはいえ
武田から着いてきた侍女たちの手前
初夜の日，寝所に向かわなかった夫などと陰口をたたかれるのもイヤで
とりあえずの「儀礼」として閨(ねや)に向かった

襖を開けて。。。

姿が見えない
それはともかく
部屋を見回すまでもなく目の前に大きく鎮座する物に驚き怪訝な表情を作った

「屏風」？

今まで見たことのない大きな屏風が部屋の真ん中を仕切っている
豪奢な飾り枠のついた
水墨の山水画
嫁入りの道具にしてはちょっと。。。可愛くない

その後ろから
微かだが物音がする

頼重は咳払いをし気を取り直したが。。
内心は困ったものだと思った
十二歳。。。
婚儀に行く歳としては珍しくもないが
やはり見たまま。。。まだ子供と

「出てまいれ」

興をそがれたし
もとより「抱こう」と思って意気込んできたわけでなし
しかし
顔も見ないままと言うわけにもいかないし
このまま部屋を出るわけにもいかない

静かすぎる部屋

気の利いた言葉もでてこない
だが

沈黙も辛い

「話をいたそう」

とりあえずでも言葉を交わそうと屏風に向かって声をかけた

「はい」

弱い返事
子供の声。。。

やっと聞いた新妻の声はやはり若すぎる鼻にかかった声だった

ところが
返事は戻れど一向に姿を見せようとしない
首をひねりつつ

「。。このままか?顔は見せてはくれぬのか?」

顔は祝言の時
少しは見ていたが
話をするのにこの大きな塀越しという事はなかろうと

どうしたものかと問えば

「こちらで。。。伺います。。。屏風の近くで。。。」

と
小さく声は震えていた

頼重は可笑しくなった
どこの家でも嫁入り前には所作を教え無事に初夜を過ごせるようにしているハズだろう
ましてや
和睦とはいえ半ば「謀略（ぼうりゃく）」でよこされた姫だ
子作りにやっきになっていても不思議じゃない。。。。ハズなのに

どうも
この「禰禰」という姫はそういう事を知る間もなく諏訪に来てしまったようだ
思えば
頼重の娘も九歳。。。大差ない
吹き出しそうになったがそこは抑え

「わかった。。わしは屏風の前で。。話をしよう」

頼重自身少し和んだ気分になった

無理はしなくてもいい
この姫も望んで諏訪にやってきたわけではない
見ず知らずの地に
少しのお付きの者と
「和睦」のために送られてきたこと。。。。

それはこの幼い姫様にとってどれほど心細い事だろう

屏風の前に座り言った

「さあ。。。何から話をしよう」

屏風の後ろの声は答えた

「あなたさまの事。。。教えて下さいな。。。」

それは昨日の事のように思い出せる
出会いの時の話だった

「憶えております。。。」

思い出話にやっとはっきりした落ち着いた声が返ってきた
頼重はその場で何度か頷いた

「朝。。起きたらそちはわしの膝の上で寝ておった。。。」

膝をさすりながら妻の声に努めて明るく
そして柔らかく答えた

あの日の朝
屏風を背に寝てしまった頼重が寝ぼけ眼で見たのは膝の上で眠っていた
まだ

あどけない顔の可愛い「禰禰」が
自分を見あげながら

「おはようございます」
と
微笑んだ事

はっきりと恋に落ちた瞬間
わすれもしない。。。

「。。。出てきておくれ。。。禰禰」

収まったハズの嗚咽が聞こえる
涙ながらの声が屏風越しに届く

「怖いのです」

「恐れる事はない」

強い意志をそれでも静かに妻に伝える
手を屏風に伸ばし続けた

「禰禰。オマエと私。寅王丸。。武田にとって良き絆になっている
報告は何かの間違いだ。。」

諭す
少しでも言葉を
気持ちを伝えて楽にしてあげたい
震えているのはわかってる。。伝わってくる

だから

「あなたさまに。。。嫌われたら生きてはいけません。。」

禰禰

「禰禰。。。顔を見せておくれ。。わしがさみしい」

迫る危機
それはまだ混乱
何が始まっているかわからない

頼重にだって見えないものがあり
それでもそれに立ち向かわなくてはならない

ならば
こんな時こそ信じられるぬくもりに近くにいて欲しい
そんな弱気が頼重の言葉を震えさせた

それに禰禰は気がついた

屏風から飛び出し
そのまま頼重の胸の中に飛び込んでいった

「私は何もわからないのです。。。どうしてこんな事になったのか

も」

小さな身体全てで頼重の中に入って来た
その
温かで柔らかい身体を覆い

強く抱きしめた
言い聞かすように自分にも
妻にも

「禰禰。。。大丈夫。。大丈夫だ。。わかっておる」

髪を撫で
優しく口づける
涙でぐっしょり濡れた頬を手で拭う

「兄様（晴信）は決して諏訪を攻めたりなど。。。私は何も。。わからないの。。」

「わかっておる」

城の中で
自分が妻を信じない事はない
小さな肩を大きく震るわしている禰禰が何か「謀」を知っている訳がない

「わかっている。。。」

その言葉をくり返した

禰禰は大粒の涙を溢れさせながら
一生懸命の声で頭を頼重の胸に押し付けながら

「。。どんな事があっても私は頼重様の妻です。。諏訪の女です離れたくない。。。のです」

そこまで言って声はうわずり
涙と混ざった
霞みいりそう。。
でも
願うように

「キライにならないで。。禰禰をずっと。。お側に置いてください。。」

涙の瞳が見つめる
顔を見た
なんて悲しそうな。。
そんな顔しないでくれ。。。。
小さな手をとり
自分の胸に
身体を抱きかかえた

「わしが放さん!どんな事があってもオマエを放さない。。。禰禰」

頼重の目にも一筋の涙

強く
強く

抱きしめた
ただ
強く
愛し続けた

その２０　禰禰　（後書き）

人物評その２～～

後書きからコンニチワ～～ヒボシです

武田編になって人がふえたのでこうやって定期的に
人物評を書いてます
ネタバレはないと思いますが
話を楽しむための一つと楽しんでいただけだら嬉しいです！！

御北様
武田のグランドマザー
この人なしに信玄なし！！といいきれるほど偉大なママ
実子はもとより側室の子供も可愛がり
教育に熱心で他国から高名な僧を呼んだりもした
御仏の心と慈悲の心を自ら進んで教え
子供達を愛し過ごした

ただ
小説内にもあったように旦那様（信虎）とは
政略結婚も無理無理な
ほぼ
略奪婚
幸せな結婚生活だったとは言い難く
信虎追放の時にはその後を追う事はなく
甲斐に残り
その後の生涯を子供達の元で過ごした

肖像画も残っている
その姿は
祈る母
生涯を武田繁栄のために祈った偉大なおかーさまでした

禰禰
武田信虎と側室の間に出来た三女
ちなみに長女は今川義元の駿河に嫁いでいる
諏訪頼重の元に輿入れした時１２歳。。。。
あまりに幼い
ただ我らが（爆）「虎御前」も結婚した歳は１２歳でしたから。。。
ＮＨＫ「風林火山」では桜井幸子が演じているがあれはかなり大人っぽい（藁）
ただ
まだこちらでは出てきていませんが「諏訪御料人」との身長差がすごく印象的だった
こじんまりした「禰禰」が屹立とした諏訪姫に「笑って」と促すシーンは泣けた
よっぽど自分の方が辛いのに。。。
その小さな手が印象的だった

女も戦っている
お家のために
子供のために

戦国の女は「生きることに」戦っていた
自分自身の心と

そんな武田編

後少し続きます～～～

それではまた後書きでお会いしましょ～～～

その２１　覇道　（１）

「戦」が絶対に必要だった

父の残した「謀」がそのまま「実り」をつけてしまった
「寅王丸」という「大器」を放置するのは「禍根」を残す事にしか
ならない
諏訪は今の武田を見下している
寅王丸が元服して武田に臣従する事は見込めない
信繁には。。。見えていた

そして
内外を問わず
未だ「新当主」を見くびる者たちに
先代を上回る「大器」として晴信を現さなければならなかった

この「戦」にはたくさんの「意味」があり

絶対に必要な「戦」であった

たとえ
その代償として「禰禰」を失う事になっても。。。。
後城（あとじろ）である桑原城の門前で
使者として訪れた信繁は改めてその事思い出し
消して気持ちが揺らがぬ「覚悟」をした

深く胸に刻み込むように拳を打ち付けて

七月四日。。。
諏訪頼重(すわよりしげ)はまったく「戦」をする事も出来ないまま

「和睦」を受け入れた

出陣から十日たらずの瞬く間の「降伏」だった
最後の最後まで
諏訪勢は混乱から抜け出る事が出来なかった
「報告」は
どれもこれも乱れ飛ぶばかりで「何が」真実かを見切る事もできず
頼りにしていた諏訪衆に組みする者たちも兵を集める事がではなかったのだ

兵を集められない
と言うことは
「野戦」は出来ない

「報告」では武田は二万の大軍を擁し進軍している
また
この機に乗じた「高遠」が南から諏訪領を侵し始めていた
まだ

武田が何の「目的」で進軍しているかをつかめない
なのに「高遠」は意気揚々と諏訪に「戦」を仕掛けてくる

誰が味方なのか？

どちらに備えればいい？

結局
どちらも「敵」と見なし
防備の薄い上原城を捨て桑原城に「籠城」という策に入ったのだが。
。。

「開門！！」

桑原城の門は重々しく軋む音を響かせながら
城の口を開いた

ゆっくりと開かれる門の前には
使者の信繁と諸角（もろずみ）が騎乗したままの姿で待っていた

城内軍議のために開かれていた表屋敷の間に通された信繁に頼重はかなり
抑えた口調で聞いた

「何故諏訪を攻めた」

少ないながら城に残った重臣たちの目線は主の詰問と同時に信繁に向いた

「諏訪が武田を攻めるために高遠と内通したと聞きました」
「高遠となど!!手は結ばん!!」

甲冑に見を包んだままの頼重は即座に激高した
しかし
信繁はまったく動じない
みればまだ髭もたくわえない色白な青年
頼重より十は若く鎧姿もぎこちない

しかし
その面影は
武田家現当主の弟は
あの恐ろしい。。。先代信虎に噂以上によく似ていた
その肝の据わったさまも。。。切れるような目筋も

「諏訪殿。。。では昨年武田領内であった野武士(のぶし)の事はご存じか?」

怒りの形相の頼重に信繁の隣に座った
武田家重臣の諸角が
歳に見合った落ち着きのある態度で聞き返した

「野武士？」

わからない。。。
と
言う表情の頼重に諸角は続けた

「去年我が武田にて代替わりがあった直後の事ですが甲斐瀬沢（せざわ）にて
野武士が「諏訪殿の加護の元」と称し領内を勝手に開拓しておりまして」

「知らんぞ？」

諸角に困惑の表情を向ける頼重に「待たれ」と手を出し
入れ替わるように信繁が答えた

「その者達。。諏訪殿が年内に武田に向けて侵攻するための「道」
を造営していたとの事です」

「馬鹿な。。。」

一応に家臣を見回した後
頼重は

若い信繁が高みからしゃべっているのが気に入らなかった
睨み返して「脅し」の聞いた声で返した

「そんな根も葉もない話。。。。そんな事で諏訪を攻めたとでも言うのか？」

が
「偽証」ならば
少しぐらいの身じろぎがあつても良いはずの信繁に変化はなく
むしろ
静かな目つきで
「挑む」ように質問に答えた

「では上杉管領(うえすぎかんれい)との「独断」での和睦は何のためですか？」

管領の名が出たことに諏訪の家臣団にざわめきが立った
去年。。。
信濃小県(しなのちいさがた)に侵攻した時
上野(こうずけ)に駐留していた「上杉管領憲正(うえすぎかんれいのりまさ)」の部隊と小競り合いがあった

諏訪は武田と同盟は組んでいたが

代替わりによって武田が「衰えた」と判断し
これ以上信濃での出来事で上杉に「出張られる」事を警戒し武田を
無視して和睦を結んでいたのだ

だが
これには頼重なりの「読み」があった

その事を
武田が勝手に結んだ和睦を気に入らないと言ってきても
代替わりで領内から家臣まで忙しい武田の内情を「考えて」
わざわざ諏訪が「先手」を打ってやった。。。という恩着せをしよ
うと思ったのだ

それを説明するか？
先手を打ったと

そんな説明が通用するか？
目の前に座る信繁に
頼重は自分の読みの先を武田が読んでいる事に気がつき少なからず
驚き
考えた

武田は上杉と手を結んだ諏訪に危機を感じていた。。。

そして
瀬沢での覚えのない「野武士」

飛び交った「流言」
混乱した「報告」

高遠の出陣でその「危機」を確信した武田は諏訪を攻めた。。。。

もっともらしい「図」だ。。。

しかし
これが「謀（はかりごと）」なのかも？
頭をめぐらし
言葉を選ぼうとした
これは「策謀」だ。。。。
絶対に。。。
その「危機」を今。。頼重は感じていた

「諏訪殿には我が主「晴信」様に会って頂かねばなりません」
思案する頼重の思いを絶つように信繁の言葉が入った
まるで
考えさせまいと言う早だ

「そのための和睦にございますから」
二の句をつげさせない諸角。。。

頼重に逃げ道を与えない
どちらにしても
逃げ道などはないそれは頼重自身もわかっていた
上原の城を失い
諏訪大社を奪われ
兵の出揃わないこの城で。。。。何ができるか？

無用に「言い訳」を並べれば。。。その方が諏訪の立場を危うくする
苦悶の表情。。。。

「兄様は頼重様をどうされるおつもりですか！！」

家臣団も
頼重も
すべてが沈痛の思いで顔を伏せ
凍っていた場に勢いのある黄色い声が走った

「禰々（ねね）？！」

扇で顔を隠してはいるが
小さな禰々がこんな大きな声をだして入ってくるとは思わなかったのだろう
小走りに駆けながら
評定の間の入り口まで来た禰々は扇から少しだけ顔を出し
今度はいつものおとなしい声で聞いた

「どうなさるのですか？」

懐かしい姫の顔に諸角はすくに頭を伏せ挨拶をした
武田家老臣に気がついた禰々はもう一度聞いた
「どうするの。。。」

泣きそうな声

頼重は上座から立ち上がると禰禰の元に走り寄り添うように身体を支えた
細い肩は走った事で揺れているのではなかった
禰禰はこれから来る「恐怖」に夫の身を心配して走ってきたのだ

「それはこれから兄上と諏訪殿がお会いして話し合う事です。。」

部屋に集まっていたみなが禰禰の方向に顔を向けた中
唯一振り向かず座っていた信繁が
そのままの姿勢で答えた

「次郎。。。様?」

恐る恐るその名を呼んだ声に信繁は答えた

「諏訪頼重殿とご内儀(ないぎ)禰禰様。。ご息子「寅王丸」様は甲斐来て頂きます。。よろしいですか」

と
告げ
そのまま向き直って礼をしようとした

「こちらを向かないで。。」

信繁の身体が頼重たちの方向に向こうとした時
禰禰は震える声で拒否した

「次郎。。。。顔を見たくない」

禰禰の声は恐怖を現していたその脳裏に浮かんだのは父「信虎」の姿だった
あの自分勝手な獰猛な「虎」

信繁はその事をすぐに察した

「いまは。。。元服して信繁と名乗っております。。。」

背中を向けたままやんわりと禰禰に挨拶をした
だが
口元には卑屈な笑いと悲しみを現していたのを諸角は気がついてた

その２１　覇道　（２）

「鬼！！父上は鬼です！！」

禰禰の絶叫が未だに耳から離れない。。。
躑躅ヶ崎の屋敷に戻り
具足をはずし縁側にて身体を休めていた信繁は
諏訪頼重（すわよりしげ）一行を甲斐に移送するための任についていた時の事を思い出していた

諏訪殿降伏から一日

またたくまの「侵略」は武田の無傷での勝利につながり
武田家新当主の「手腕」大きく世に響かせた
いや
今からさらにその噂は流されてゆく事だろう

「戦」終了後すぐに
晴信（はるのぶ）は高遠の諸将たちと「諏訪領」の分割について談義に入り
武田の家臣たちも事後処理を迅速に行っていた

信繁も
諏訪家一行を移送を受け持った

禰禰と寅王丸を躑躅ヶ崎の屋敷方面に送り
重臣の諸角はそのまま「諏訪頼重（すわよりしげ）」を東光寺（とうこうじ）に幽閉。。。。

という別れ道になって
それはおきた
これほどまでに強く結び合っていたのかその事を改めて思い知らされた
「禰禰（ねね）」が輿（こし）から飛び出すという大騒ぎが起こしたのだ

「いやです！！頼重様をどこにつれていくのですか！！」

輿の小窓を小さく開け
過ぎゆく諏訪の地を名残惜しげに覗いていた禰禰の前から
頼重の馬が自分たちとは別の方角に向かいだしたのを素早く察し飛び出してしまったのだ

信繁は禰禰の乗っていた輿の後ろに馬を歩かせていたので
咄嗟の出来事に驚き
馬から落とされそうになった

女の甲高い声に馬のほうが驚き危うく駆けだして禰禰を跳ねそうになったのを必死で抑え
馬廻りを呼びつけ
事態を収拾させようと焦ってしまった

その間

夫の名を呼びながら躑躅ヶ崎に向かう列の間を縫って着物を引きずり走る禰禰をお付きの侍女たちが慌てて追いかける
その声に驚いた馬が右往左往して隊列は停止状態になり騒然とした

「慌ただしくするでない！！」

馬から下りた信繁は
女たちを叱りつけた
戦勝の武田が「つまらぬ事」で騒ぐのは良くない
ましてや女子供の行動に騒ぎを起こすような事は「恥」だ

隣に馬を並べていた使い番に馬を預けると信繁は禰禰を追いかけた

走る早さにも驚くばかり
いったい。。。
どこにそんな「力」があったのか？
周りの侍女たちもさぞ驚いた事だろう
上原の城でも「屏風（びょうぶ）」に隠れて外などほとんど出たことのないハズの禰禰

それが
こんな屋外で飛び出ていってしまうなど

しかし
所詮は女の足
そのうえ身を覆う豪奢な着物に小さな身体では
馬に乗って連れて行かれた頼重に追いつくことは出来なく

途中の道にペタリとへたり込む姿に
誰よりも早く追いついた
信繁が声をかけた

「輿に戻りましょう。。。頼重殿は」

その落ち着いた言葉が終わる前に
振り返った禰禰から
右頬に「扇(おうぎ)」が叩きつけられた

「「父上」の嘘つき!!!」

女の手で
叩かれた程度の事に痛みがあったわけではないが
真正面を面と向かった禰禰の瞳が自分の向こう側「父」の面影に向かって激高している事に驚き
咄嗟に顔を押さえた隠した

その隠された顔に向かって禰禰は止まらず何度も扇を叩きつけた
叫びながら
泣きながら

「頼重様と私は離れてはならないと「父上」が言われたのに!!!
私から離さないで!!とらないで!!」

あきらかに
混乱している事はわかったが。。。連呼される「名」に信繁はの声

は弱い反抗しか出来なかった
何度も叩かれながら
繰り返し名前を言った

「待って。。。私は「信繁」です。。次郎です。。」

隠した顔をあげ
手をあげ振り下ろされる扇を受け止めた
落ち着く事を促し
静かな声で
「父」とは違う優しい声でもう一度ゆっくりと言った

「信繁です」

いっぱいの涙
瞳を揺らし溢れて流れ落ちる
首を大きく振り
叫ぶ

「「父上」。。。。ひどい。。ひどい。。」

受け止められた扇から手を放し信繁の顔に小さな手をきつく結んで
ぶつけた
何度もぶつけた

「嫁に行けと言われた時。。。さみしくて何度も泣いたけど。。私
が諏訪と武田の架け橋になる。。。大切な役目を果たして欲しいと
「父上」は言われたから。。。なのに。。なんで私から頼重様をと
るの。。。好いてくださって。。。なのに。。。こんな。。」

ただ
小さな手をぶつける
信繁はもはや抵抗はしなかった
その言葉聞き
禰禰のするままに打たれ続けた

やっとで追いついた侍女たちは
信繁の顔を殴打し続ける禰禰の姿に慌てて手を抑えた
抑えられた手をなんとかほどこうと身体を動かし

声高く泣き叫ぶ

信繁には
痛いほどに心は伝わっていた
輿入れの時，幼かった禰禰にとって隣の国とはいえ知らぬ地に赴く
のはどんな恐ろしさだった事か
それをさも「大任」であるかのように言い伏せ

禰禰の身体を利用した「父」

その事をどうして説明などできる
犠牲者である禰禰にさらに「鞭打つ」処遇しか与えられない自分に。

。

せめて

殴られ続ける事ぐらいしかしてやれない

これほどまで好き会った二人を引き離す

父にしろ信繁にしろ

こうする事は決まっていた

とはいえ

その「任」を受けることで

この悲劇を目の当たりにすることは。。。。

ただ泣き，道に伏せる禰禰

やっとみつけた「幸せ」を奪い取られるなど。。。。考えた事もな

かったのだろう

目を背けそうになった信繁に

涙でいっぱいの顔は真っ直ぐな目で叫んだ

「鬼!!!「父上」は鬼です!!!私を頼重様のところに帰して!!!」

悲鳴

その声に信繁は抑えていた涙をこぼし頭を下げた

「許してください。。。。」

「頼重殿には「切腹」して頂く」

躑躅ヶ崎の屋敷から板垣の屋敷の一角に間借りをしている勘助の元に
諸角と訪れた信繁は
はっきりと二人に明言した

諸角はただ頷き
勘助は興味なさそうに聞いた

「生かしておく意味はありませんからな。。」

諸角は禍根を断つという事に慣れていた
信繁はその事を兄，晴信に進言する事を諸角に任せるとした
年若い自分の発言が「器」の力に対する「危機」を煽るのはよくない
と判断したからだ

「しかし。。。禰禰様を思うと心が痛みますなぁ。。」

昼の一見は諸角の耳にも入っていた
それほどに「頼重」と固く結ばれていた禰禰の事を思うに
さすがに
年を経て「戦」の後処理に
慣れてはいるとはいえ痛みを感ぜずにはいられなかったのだろう
白髪のまじった頭を手でさすりながら
溜息とともに言葉はこぼした

勘助は動じない態度できいた

「寅王丸様はどうなりますか？」

頼重事態にすでに「神仏」の力は無い
その「力」を受け継いだ寅王丸がいるのだから
故に
頼重には存在の「価値」がない
もし「価値」があると言うのならば
この「戦」の責任をとり諸国への「見せしめ」として死んでもらう
事だけだ

だが。。。大祝の「力の器」になった「寅王丸」はどうしたらいいのか？
良い考えはうかばなかった
沈黙の信繁に

「できれば寅王丸様は殺さぬほうが良いです」

勘助は次の「戦」のために残す事を示した
顔は嬉々としている
すでに脳裏にある次なる「戦」に心を躍らせている様子だ

「次の「戦」のために役に立ちます。。。」

「戦」にしか興味のない勘助の下品な口に見向きもせず
窓のない部屋の天井を見つめながら信繁は言った

「名前は変えねばならん。。。「寅」は鬼門だ」

諸角は意外そうな顔で答えた
「名前まで奪われてしまうのですか？」
さすがに愛児の名前までも奪ってしまう事は諸角の思案にはなかっただが
信繁の目に映る「大禍」の姿は「父，信虎」にも見えたのだ
そもそもの「原因」を作った父
自分の思うように「人」さえ物として扱った父

あの「父」の名にもあった「トラ」

それをなんの「因果」か冠してしまった「寅王丸」は。。ただでさえ小さいとはいえ危険な「大器」
昼間
禰禰に「父」と間違われ殴打された時。。。。これほどに根深く武田を支配してきた父の威光に憎悪した
父の「策」であった子供は死ぬことなく実り
皮肉なことに「トラ」の字までを頂いていてしまった
厳密には
字こそ別ではあったが。。。まるで実子のような響き。。。。それは。。。絶対に「良くない
兆し」になる。。。

「禍根を残してはいけない。。。この試練を越えて「新しい武田」
を諸国に示さねばならん」

強い意志を発す
口ぶりは自分に言い聞かすように
諸角の顔は暗かった

同じぐらい「戦勝」だというのに沈痛な思いの中に信繁もいた

その２１　覇道　（３）

「迷いが見えますな。。。」

諸角（もろずみ）が席をはずした後
勘助は夜も更け静かになった部屋のすみで「禅」を組む信繁に話しかけた

「迷い。。。だと？」

不意の言葉に信繁は少し意識したのか
ピクリく肩を揺らしたが
そのまま目を開かずに
灯籠を挟み書物の山の向こう側にいる勘助につぶやくような静かな声で返事した

信繁の目が閉じられたままである事は解っているハズ
それでも
勘助は中指と薬指を無くした右手で
己の額
眉間をさすってみせながら言った

「いくら。。。禅を組んでもその「迷い」は消えたりはしませんぞ」

そう言うとあの「巧み」な声を使い
挑戦的な態度で話し始めた

「何故。。。頼重殿の切腹をご自分の口からお屋方様（晴信）に言わないのですか？」

信繁は目を開き
勘助を睨んだ
その事はさきほど諸角に代理として進言させる。。と。。理由とともにココで話したばかりだった

「わたしのような若輩が兄上に言えば「わかりきった」世の習いを押し付けるようにみえて気を悪くなさるだろう。。。その点は諸角のような長老のほうが」

「そのような言い訳を聞きたいのではありません」

主従。。。
武田に仕える立場の勘助は
まるでそんな立ち位置を無視して信繁を見下していた
あぐらをやめ痛めた足を投げ出し
信繁の顔を遮る書籍の山を蹴飛ばし崩した

「昼間の禰禰様との一件。。。殴られてさし上げる事で自分を「戒められる」。。。とでもお思いでしたか？」

突然の口上
図星だった
信繁は殴打される事でこれからも自分が下していくであろう

禰禰への「仕打ち」の罰を受けた。。。そういう気持ちになっていた
両手で襟を正し。。。しかし

的確に心中を言い当てられ
返す言葉が浮かばなかった

灯籠の向こう側にいる勘助の目は「知略」を使って何かを話そうと
していた

「無様な事でしたな。。。「涙」などとは」

明らかな罵倒
しかし止まることなく続ける

「信繁様。。。どんな「遠回り」をしても貴方は絶対に「戦」をせ
ずにはいられない。。「戦え」と。。。聞こえておりませんか？」

目を見張った信繁は不敵な勘助に詰め寄った
勘助は耳に手をあて
聞き耳のまねをしてみせた

「聞こえるのか？。。。あの声が。。。」
「いいえ。。。しかし信虎様も「声」が聞こえると言っておられまし
たし」

信繁は驚いた
あの「声」を父も聞いていた。。
あの頭に響く声。。。
あれは？

「あの声はなんだ。。。「戦え」「戦え」と。。。」

詰め寄った信繁の顔は今までにない不安の表情
手で額を抑え繰り返した

「誰の声なんだ?何故「戦え」と繰り返す?」

勘助は眉間に指をとめ
そのまま
その一点を人差し指でさしながら答えた

「神仏の声です」

驚愕
切れ長の目を信繁は丸く見開き愕然としながら聞き返した

「神仏(かみほとけ)が戦えと。。。。だと?」

信じられない返事だった
御仏が「戦え」と「器」である自分を促しているなどとは
考えがたかった

「器」は神仏よりの加護を受け取り

「戦」を有利に進める先見を持つ者。。。。
とだけ思っていたのだ

逆に
自分の残酷な仕打ち
禰禰の事や
頼重との事でにも響く
あの「戦え」という声に「闇」に自分は「惑わされて」いる

これが自分の中に流れる「父」の血なのだと「恐れて」さえいた

勘助はそんな心中を察したか
いや
苦痛の表情をつねに絶やさない信繁の悩みに気がつき隠していた「わだかまり」を露わにした
戦略家である彼は
巧みにその内訳を信繁に語る

「お父上もその「声」に従って「戦」をされました。。。貴方はご自分でも気がついていたではないですか。。神仏の世は「清く」この乱れた人の世を大変に嫌っております。。それを「浄化」するために「戦え」と促される。。。そのための「力」を与える。。と」

首を振って聞いた

「ならば。。。父上は。。」
「間違っておられたわけではないのです」

父，信虎は「戦」を政(まつりごと)の中心に置いていた
それによって
甲斐の国民(くにたみ)を疲弊させていた
それが間違ってなかった。。。。。。

「お父上は「神仏」の声を聞きそれを実行された。。。「神仏」の
意志に従う。。清浄なる地を求めるという意味では決して間違って
しまわれた訳ではなかったのです」

たしかに。。。そうだ
常世の争いの無い場所から見れば
この荒んだ「乱世」を仏は決して許さないだろう
信繁は額をおさえながら目を閉じ考え

答えた

「だが。。。「戦え」と言う言葉を鵜呑みにして「策」を奉じる事
はできない。。。それが」
「それが。。お父上のようになってしまう?とでも?」

即答した勘助は
呆れたように欠伸をした

「何のためにわしがおるのですか?」

欠けた指の手を信繁に向け

「あなたの望む「戦」を負けず続ける「戦」をわしが奉ずる。。。
違いますか?貴方は「神仏の器」。。。その意志にしたがって「戦」
を望む者。。避けて通る道などない」

信繁の目には涙があった
自分の道
自分に課された「器」の真実に気がついた

「そのためのオマエなのだな。。。」

勘助は歯抜けた口を歪ませ笑った

「やっとご理解頂けたようですな。。。」

信繁が迷いを持ったまま「戦」に赴けば神仏の声は「曇る」
それは「次の戦」を失う危険性があった。。。
ともすればの「死」と

だから
勘助は嘘は付かなかった
あの評定場で家臣団を呆けさせた「羅刹」の「謀」を現し

信繁に真実を見つめろ
認めろと話した

「あなたが「神仏」から受けた声「世の乱れを正せ」という意志を
頂き，先見の目を開く「戦」を円滑に。。国民に「良い物」として
行うのが私の勤め，ただ戦うのではない「良い」「戦」を」

そして
大仰に手をかざし大きく円を作って見せた

「貴方の強い「神仏」の力に私が知謀を走らせましょう「負けぬ戦」を続けさらに強い「人」を作る仕事を「人知の器」お屋方様が受け持ち。。。いずれこの円の中に「孫六」様という「天陽の器」を頂き武田を「北条」にも「今川」にも負けぬ国に。。。廃れた都を捨て。かつての「奥州藤原」を越える大国を作りましょうぞ」

大手をふったその言葉に信繁はやっとで顔をあげ
涙を払った
勘助の言葉に騙されるわけではない
目頭を押さえつつ理解した

「そのために私の戦に迷いがあってはいけないと言う事だな」

勘助は自分の説得がうまく言った事に満足し
崩した足を元に戻し
書籍を集めながら

「そうです。。。冷徹に「戦」を発言して頂きたい。。それが武田繁栄の近道になります。。。行き過ぎたる事などありません。。お父上の時のように「独り」で始める訳ではないのですから。。ご自分を戒める必要などないのです。。。是非楽しき「戦」の日々を送らせて頂きたい」

最後に本音を付け加え

「神仏の声に従えばよいのです」

と
静かに笑った

信繁は顔をあげ
きつく目を閉じた
「器」に従い戦い続ければいい
その美しいまでの「神仏」の願いを勘助が負けぬ「戦」で続けさせる

決して「迷って」しまう事はない

自らがそう言ったように武田は四つの「器」を持ちその「力」で突き進む

独りではない

「迷う」必要はない

翌日
主殿(しゅでん)，評定の間で信繁は並ぶ家臣たちの前ではっきりと断言した

「諏訪頼重(すわよりしげ)殿には速やかに切腹していただきましょう」

その冷徹な発言に
横に並んだ諸角は信繁が別の人になってしまったように思えた

そのぐらい
研ぎ澄まされた横顔だった

世の習いを進んで進言した信繁を晴信は少し辛そうな表情で見た

その顔色で
信繁は自分の冷徹な「器」の意味をさらに確信した
「人知の器」である兄は
やはり「戦」を好んではいないのだ
だが今の世においてそんな当主では国の存亡に関わってしまう

人が「好き」な兄は「戦」においては「まだ」当主としては足らないのだ
だが
国民（くにたみ）にとっては「良き人」だ
人の心を掴む良き当主だ

だからこそ
「戦」を望む神仏の声を実践していく側が必要になる
そして
それを人に「良く」伝える者もいる

極端であったとしても
「強い国」を作るためには
まず
先に出て「非情」である事にも強くならなければならない

自分の役目に

これが「覇道」へとつながる第一歩だと心に確信した

その２１　覇道　（４）

少ない雨
東光寺の一室に黙して座る
諏訪頼重（すわよりしげ）の目には涙があった
前日
武田の新当主「晴信（はるのぶ）」と初めての会見をしたが

その威風堂々とした姿に「言い訳」が通用する相手でなかった事を
改めて思い知った
若輩の新参者と見下してかかっていたが
その「性根」はがっしりとした家の大黒柱そのものだった
お家騒動という苦難を乗り越え
父親「追放」と言う過酷な試練の果てに就任した武田の主は正真正
銘の強さを持っていた

「戦」も「謀（はかりごと）」も

ついに自分の謀が武田の入念に練り上げられた「知略」を上回る事
はなく。。。
その「地位」を失い
家臣領民の多くを戦火に巻き込み

最愛の者たちからも引き離されてしまった

灯籠のない部屋
心は果てしなく暗い失念の海の中に沈ずみ
ここ何日かまともに飯は喉を通って行くことはなかった

思い出せば腹立たしい「謀略」
冷静に考える事が出来ていたのなら。。。。わかっていたハズの「謀略」

何度も床に拳をあてる
小さくコツン。。。コツンと
刻みつける
苛立ちを今は誰にも向ける事はできない。。。。己を貶める

いや。。。

もうとうに落ちてしまっている
このうえ
「見苦しい」足掻きを武田に悟られたくないから
目線を落とし静かに床を打つ

思えば。。。
あれは悪意をもった「謀略」だった
敵対していたハズの高遠といつの間にか手を結び諏訪を混乱に陥れた

だが「見切る」事はできなかった。。。最後まで頼重にあったのは
「迷い」だった
「わからない」
と
言うほかないほど

心に迂闊さはあった
でもそれは。。
いや
それを信じない訳にはいかなかった
武田を疑う事は。。。禰々(ねね)を疑う事に近く
それは頼重には。。。決して出来ない事だった

そのうえで
今の武田は絶対に諏訪を攻める事はない
諏訪には良き同盟者でいてくれなければ「困る」だろう。。
と
高をくくり
相手を侮ってしまった事

ゴツン。。。打つ手を強く叩きつけてとめた

認めよう
武田家新当主の力量を「はっきり」と見誤ったと。。。。

光の無い部屋に
雨音が響く

闇の雨。。。。

近づく夏祭り。。にぎわうはずだった大社(おおやしろ)はどうなってしまったのだろう

諏訪は。。。
どうなってしまうのだろう。。

とめどない思い
自分に出来ることはなくなってしまった
なのに。。。。この「後悔」

ほつれた髷の毛を掻き上げ頭を両手で押さえた
やつれていく心
顔は青白い

何故

禰禰があれほど「兄と会ってくれ」と頼んでいたのに。。
会わなかったのか？
妻の助言を聞き入れなかった。。。うやむやに。。。ないがしろにしてしまった。。。

禰禰の占いは当たった「南の嵐」は武田の事だった
わかっていた
妻は武田ではなく「諏訪」を思って警告を発し続けていたのに。。
ちゃんとわかっていたのに。。。。

幽閉されてから
一度も禰禰に会う事は許されなかった

監視は厳しく。。。抜け出る事などできない

遮二無二
走って行きたい気持ちも。。。
今はなく。。。気力さえなかった

目を閉じ思い出す
諏訪から甲斐に向かう輿が
甲府で離れていくのを見ることはできなかった。。。。振り向いて
しまったら。。きっと禰禰は泣いてしまう。。夫として毅然とした
姿を

見ていてほしい

そこまで思い目を開けた

いや
だめだ首を振った
どんなに強がっても

自分が禰禰を思っていまや涙を止められない

「知略」の「戦」で頼重は「敗北」した。。。
結果はもはや
とりかえしのつかないところにきてしまっている

武将にあるまじき「涙」なのか
頬をつたい着物に降る涙

ダメだと
自分を律しようとすればするほど
あふれるものを止めようと
目を閉じても

愛する家族を思えば思うほど止まらなかった

「禰禰。。。。寅王丸。。。わしは会いたい。。。。」

拳を床にぶつけ
こぼれる
涙とともに言葉を流した

「では。。。。」

七月二十一日「雨」

夏の真ん中を揺らす雷雨の中
「自害せよ」との晴信の言葉を持ってきたのは
信虎に顔の似た弟の「信繁」とその家臣「諸角（もろずみ）」だった

信繁の目は何も「語ろう」とはしていなかった
二人は静かに会釈し部屋に入るなり

三方（さんぽう）に乗せた刃渡りを諸角の手から静かに頼重に渡した

「わしが死んだら諏訪はどうなる？」

頼重にも覚悟は出来ていた
昨日の晴信との会話でこの「戦」の責任をとるのは「頼重殿」であると
はっきりと言われていた

静かな間合いの中

諸角が返事した

「諏訪の地は満隣（みつちか）殿が統治しいずれ寅王丸様に引き継がれます」

老人の声は優しかった
この世の習いの最後を送るのは何度かあったのだろう
「見届け」の任にある諸角は
相手の心中も十分察し

なごりを残さぬように質問に答えた

「心配なさるな」

逝く最後の人に安堵を与える目で

「禰禰はどうなる?」

腹を斬る
もはや愛した妻に会うことはできない
ならば。。。。最後に思うのはその行く末。。。

「禰禰様は武田に留まられます」
「どうなる?!」

諸角の返答の向こう
背中越し冷淡な目線の信繁に頼重は少しだけ声を大きくして聞いた

あまりに冷たすぎる信繁の目が残す妻の事を不安にさせて
詰め寄るようにもう一度聞いた

「禰禰はどうなる!!」

信繁は眉一つ動かさず
諸角と同じ答えを返した

一瞬うなだれた頭を上げ
悲痛な声で続ける

「後生だ。。。頼む。。。禰禰に酷いことはしないでくれ」

頼重は目の前に座る諸角を飛び越え
信繁の肩に掴みかかった

老将はかなり驚いた様子であやうく脇差しに手をかけてしまうところだった

肩を掴んだ手は震えていた
目を見張る諸角に手で「待て」と示し寄りかかられたそのままの体勢で信繁は答えた

「寅王丸様のご生母です。。そのような心配はなさるな」

その言葉が終わらぬうちに頼重は
信繁の足下に崩れ
頭を伏した
打ち付けるように深く下げ。。。力の限りの「哀願をした」

「やさしい女なのだ。。。部屋には花をたやさぬようにしてやってくれ。。去年は夏に病になった。。身体を冷やさないように注意して。。。常に寅王丸の近くに置いてやってくれ。。頼む。。。。頼む。。。。」

信繁はただ見つめ返した
板間に頭をこすりつけるほど伏しているその肩を諸角がとめた

「諏訪殿。。。何も心配なさるな」

奥方にこれほどの情を示す彼の姿を諸角は「恥」とは受け取らなかった
自分亡き後の。。。残す者を思いやる気持ちは「恥」ではない
そんな胸に迫る思いで言った

「万事。無事。。。心配めさるな」

そのさしのべられた手に縋るように頼重は少し微笑みながら「あの時」を思い出すように言った

「禰禰は少し気の弱いところがあるから。。話しをするときは「屏風」越しに。。静かに優しく。。。聞いてやって欲しい」

止まぬ雨の下
戸を閉めた部屋の前
信繁と諸角は控え

部屋の中で独り
頼重は腹を切った
薄れゆく意識の中「辞世の句」とは別の言葉がなんども繰り返し息が絶えるまで続いた

「禰禰。。。近くいてやれなくてすまなかった。。。。禰禰。。禰禰」
と

その２１　覇道　（５）（前書き）

武田菱（１）からココのまでの間を少し修正しました
よろしかったら今一度読み返して頂けると幸いです

次回「武田編」の一部ラストになります！！！

その21　覇道　（5）

諏訪頼重（すわよりしげ）「自害」
最後の手紙を信繁は禰禰に直接手渡した

目の前茫然自失の状態の彼女の身体を「御北（おきた）」がしっかりと支えた
声も無く
涙も無く
力を失った身体は御北の胸に静かに崩れ落ちた

「頼重様。。。。。」

小さな手が行き場なく宙を仰ぐ
自分の身の上に起こった「悲劇」を理解仕切れない
目線は遠くに何かを探すように彷徨う

禰禰の身体はぐったりと力を失い
ただ
首を振りながら
何度も同じ言葉を繰り返した

「頼重様。。。。頼重様。。。。」

手紙を渡した信繁はじっくりとその姿を見届け場を立ち去ろうとした
その背中に御北が声をかけた

「何故じゃ。。。何故なのじゃ。。。信繁」

上げた腰を下ろしもう一度母に念を押すように答えた

「武田のためです」

御北は首を振った

「何故禰禰を救えなかったのか」

悲痛の表情の母の声

目に浮かぶ涙に信繁は顔を反らさずはっきりとした口調で

「仕方のない事でした」

「返して。。。」

御北の胸の中着物の袖をしっかりとつかみ

信繁を見ることはなかったが小さく震える声で主張を続けた

「返して。。。頼重様を。。。。返して。。。。」

自分の行動で壊してしまった「人」の姿を

決して目を反らさずしっかり見る

ゆっくりと

懸命に禰禰を支える御北に

深く頭をを伏して言った

「武田のために。。大きな対局においてはやむおえぬ処遇であった

事をご理解頂きたい」

そこまで言うと
速やかに部屋を退出した
離れていく廊下に。。。。繰り返される禰禰の嘆きを聞きながら
それでも振り返ることなく前に向かった

「高遠に不穏な動きがあります」

「戦」の後処理で諏訪に駐留から戻ってきた
板垣信方(いたがきのぶかた)は着けた具足のまま評定場に集まった諸将と
倒れた禰禰を思い
顔に悲しみを浮かべる当主晴信に報告をした

「諏訪の割領(かつりょう)に「不満」あり。。。。との事でしょう」

報告に勘助は「してやったり」という顔で返答した
板垣も同じく理由はわかっていたようで頷いた

高遠を調略にかけたときの条件に

「大祝(おおほおり)」の地位を高遠頼継(たかとおよりつぐ)に献上する。。。

という
話しがついていたのだが

戦に出遅れた事の責任として

与えなかった
それに伴い諏訪領の分割も高遠が望む分を与える事はしなかった

当然
武田に「戦功」を奪い取られた感のあった高遠頼継は
お手前の「気短」さも手伝って
終わったばかりの「戦」の尻に火をつけようと騒ぎ出したのだ

「思った通りです」

勘助は嬉々としていた
次の「戦」
その細工に高遠はまんまと食らいついた

家臣団の顔にも笑みがもれた
もともと
「高遠」は気に入らない存在だった

「仕上げに入りましょう」

下座で満足げに自分の「策」を奉じる勘助を尻目に
信繁は発言した

「ではこのたびの諏訪の「戦」は「寅王丸様（とらおうまる）」を御旗に「大祝」の
正当な後継者として立って頂く「戦」をいたしましょう」

突然ではあったがいきなりの「強攻策」ともとれる発言に
一同に会した諸将は驚ろいた
ざわめきが走る

その中
一番驚いていたのは
当主晴信であった

呆然としてしまった意識を持ち直し
慌てた口調で
信繁に問いただした

「寅王丸はまだ乳飲み子ぞ?。。。それを「戦」に立てろと言うのか?」

信繁は冷たい
冷たい声でさも「何事でもなし」と言うように姿勢を正して兄から
始め並ぶ諸将たちを見回して言った

「寅王丸さまでなければ諏訪衆を味方につけて戦う事ができませんぞ」

甘利(あまり)も口を揃えた
「お屋方様が「寅王丸」さまをしっかりと後見しているところを諏訪衆に示さねばなりません」

評定の間にいる者達も「寅王丸」を表に立てねばならぬ理由を解り始め
口々に言い出した
「負けられぬ戦です!!」
と

騒ぎ出す諸将を止めた板垣もそれに添う回答を断じた

「乳飲み子であれ諏訪の大祝を継ぐ者は亡き頼重様の遺児「寅王丸」さま以外いない事を知らしめねばなりませんぞ。。。これぞお屋方の仕事にあります！」

息巻く家臣団
勘助ははっきりと晴信に進言した
「これは「必然」とされる「戦」です」

みなが言わんとしている事は十分に晴信には伝わっていたが
すぐにそれを実行する事は出来なかった
頭を抑え苦痛の言葉を漏らした

「今。。禰禰の手から「寅王丸」まで奪ってしまうのか。。。。」

思い出せば
諏訪に嫁いでいく前の禰禰は晴信によく懐いていた
恥ずかしがり屋な禰禰をよく庭にひっぱって行き遊んでやったものだった。。。
それが
愛する夫の死で飯も食べられないほど焦燥している
日に日に痩せていく姿。。。

唯一の救いのようにしっかりと手に抱かれている「寅王丸」を。。。

どうして奪えるか。。。。。

「しばし待って」

当主の苦痛にその場は責め立てる者はおらず
みな静かに退出していった

評定場には上座で目を閉じ座る晴信と
下座に黙す信繁だけが残っていた

「寅王丸を。。。奪う事は出来ん。。。」

物音のしない静かな間
眉間に皺をよせ
思案の中にいた晴信が重い口を開いた

両目にはいっぱいの涙が浮かんでいる

「さすれば私がやりましょう」

涙の晴信に信繁は覚悟の眼差しで告げた
譲らぬ意見に晴信は答えた

「情け容赦のない治世に誰が従う。。。乳飲み子さえも「戦」に連れ出さねばならぬような所業。。。父上と何が違う。。。」

膝に手をおろし強く握りしめた

夕日の差す主殿（しゅでん）の間で晴信は涙を流した
小さな嗚咽を漏らし
悲しみにくれた
父を追放したことでどれだけ母の「心」を痛めさせた事だろう
諏訪を攻め
頼重の命を奪った事で母はまたも涙を流し
禰禰は口もきけないほどの衰弱の日々

「信繁。。。こんなにまで「涙」を流し「血」を流さねばならんのか？」

男泣きの晴信の顔
その姿に信繁は目を閉じた

「やらねばなりません。。。明日。。私が「寅王丸」を連れて参ります」
「信繁！母上や禰禰を苦しめたくはないのだ」

「覚悟しております」

信繁はの顔は少しだけだが微笑んでそれでも
悲しそうに
悲しみを鋭く光る目は寂しそうにも見え伏せながらも
もう一度
まるで自分自身を叱咤するように
己に言い聞かすように告げた

「覚悟は出来ております私は自分の「器」の役目を果たします」

「役目を。。。」

信繁は晴信を見た
その顔をまじまじと見た
自分とは違い「母」御北によく似た顔

「人知の器である兄上。。。人の生きる道は清いばかりではありません。。。濁流をも飲み込みその「涙」で人を従わせねばならぬ事も。。。知らねばならぬでしょうや」

弟は硬い決意の表情で続けた

「今が。。。その時です。。これを越えねば「父上」を越えてはいけません」

呆然と言葉を聞く兄に頭を下げた

「明日は私が禰禰のところに参ります。。。心をお休めください」

と
主殿を後にした

残された晴信は一人止まらぬ涙に頬を濡らし夜に染まった星空を仰いだ

その２１　覇道　（５）（後書き）

Ｇａｃｋｔ君。。。

後書きからコンニチワ～～～ヒボシです

いや～～「お祭り」（謙信公祭）もあったおかげで彼のたくさんの
「謙信ビジュアル」を見ることができました！！
すげぇ！！の一言

男でもあんなに「美しく」なれるんですね。。。
あれが標準だったらヒボシは生きてゆく「星」失いますね。。。
まさに
奇形生物「ヒボシィ～」になります
等身からして別世界の生き物ですわ！！！

さて
長かった?か「武田編」ががんばって後一回なんとか一部終了した
いなぁ。。。
なんて思ってましたが
つづけないけど
やっぱり内容の過密さにちょっと飽きました
と同時にもっと努力しなきゃダメだ。。。と痛感
筋があっても。。。中身が追いつかない「絵」にしたら簡単?
ちがう
やっぱり「知識」がたらない
「知ること」に乏しい
努力が足らない。。。
そういうふうに思い返すと

もっと長いスパンをとって書き込みしてもよかったか?とも。。。
とにかく反省の章でした
次回は巻末に武田編人物評を再修正版でのっけときます

さぁ。。。
次章はＧａｃｋｔ君のように美しくはないけど「トラ」が再び登場です!!

これからもよろしくです

それではまた後書きでお会いしましょ～～～

その２１　覇道　（６）

「晴信。。。」
「竜宝。。。」
「信繁。。。」
「孫六。。。」

「禰禰。。。」

夏の終わりを感じさせる涼しさが入り込む
そよぐ風の薫りも心なしか夏を惜しんで寂しい
薄く靄のかかった庭を見ながら
御北は小さな声で
武田の子供達の名を順番に呼んで言った

どの子もみなこの手で抱いた

数え上げれば十人以上
自らの腹から出でた息子達以外にも多くの男の子。。。女の子がいた。。

どの子も可愛かった

自分が望んだ「婚儀」ではなく
奪われるように実家から切り離され

武田の「室」に入った
愛する事などわからぬまま「夫」を得て。。。。

それでも
産まれた子供はみな愛しかった

みな
この手のなかで可愛らしい寝顔
寝息をたてて眠っていた日々があった

今
その御北の腕の中に禰禰の愛児「寅王丸」がいる
小さな手
小さな足
無事に産まれてきた男の子は無邪気に御北の頬に手をのばし微笑んでいる

「これこそ幸せ。。。。でもこれが。。。」

御北は寅王丸の柔らかな頬に涙を落とした

「男の子は。。。。戦わねばなりませんか。。。。」

涙の頬を寅王丸の手が触れる
その手を慈しみ自分の手と重ねた。。。
ちいさな輝きはまばたきを繰り返し喜ぶ

これほどまでに酷い仕打ちを残していった夫，信虎
愛するわが子たちは未だ「父」の呪縛からとかれず
「戦」に「迷っている」

導き出す答えは。。。。あまりにも辛すぎる試練

信繁はその先にある「大禍」を知り「武田」のために父の禍根共々
「試練」を乗り越えようとしている
同じく
「人」を愛してやまない「晴信」も「覚悟」の分かれ道に来ている。
。。

己一代で「家」は成り立たない
そんな事もわからなかったのか？夫よ。。。
そんな仕打ちの中にあっても
なお
「素直」に育ってくれた子供たちに「感謝」するのみ。。。

家を立て
揺らいでしまった人心を取り戻し
武田のために戦わねばならん

これは今の武田にとって最優先事項

だから

だから

禰禰の生きた道を踏みにじって良い。。。といいうわけではない

「悲しいことよ。。。」

はしゃぐ寅王丸の顔に日差しが注ぐ
幼いこの子の「行く末」

それでも。。。。

信繁は長い祈りを不動明王に捧げ終えた
目をあけ
襟を正し
真っ直ぐな姿勢で御北の住む屋敷に向かった

目を反らさず
自分の仕事をする

禰禰は。。。。もう立つこともままならない状態になっていた
食事を取らず
少しの水でその日を暮らしている
縁側に御北が世話する寅王丸の姿を目で追う事が唯一の助け

その存在を「今」奪おうとしている

だが

退けない
自分の決断に迷いを持たぬように一心に願っては来たが
歩くことでまたも揺らぐ

「ダメだ。。。やらねば成らん」

自分がやらなかったら誰が。。。
勘助との会話でわかった事
それはまだ「人知の器」である兄に「覚悟」が出来ていないこと
「国」という大きな「器」を保つためには

「踏まねばならぬ花もある」という事

それが出来ないならどの国にも劣る事になる

でも
当主として兄を押した自分
そうなる事を望んだのも自分
ならば
まず己が「器」である事を冷徹に実行しなくてはいけない。。。実行し「覚悟」を示さねばならない

「兄上。。。」

御北の屋敷に入る門をくぐったところに晴信が立っていた
「信繁」

顔はやはり悲しみを表している腫れ上がった目に涙の後を見ること
さえ出来る
非道とも思われるこの「策」を
止めに来たのだろう

「兄上。。。これは武田のためです。。どうかお通しください」

冷酷にとられるのでは。。
と
思うほど信繁の声を低く冷たく使い
軽い会釈をすまし晴信を避け前に進もうとした
その
肩を掴まれた

「信繁。。。」

「兄上これは必要な。。」
「わかっておる」

肩を掴んだ手は力強く信繁の顔を晴信の目の前にもっていった
「わかっておるから。。。ココに来た」
見開かれた目には。。。やはり「涙」があった

しかし
評定場で嗚咽した時に見た「顔」とはあきらかに違っていた
凛々しく結んだ口元
燃える心を映し出す目
その声に震えや躊躇はなくなっていた

「すまなかった。。。わしの「覚悟」が足りなかった」

「兄上。。。。」

肩から伝わる兄の「想い」
同じように
今日のために「祈って」きたのだろう

「信繁は。。わしは「人」が好きじゃ。。だれもが笑って暮らせる「甲斐」を作りたいと思うておる。。だが今はそんな「やわな」心ではいかんのだな。。」

信繁は首を振った
もう流すまいと決めたハズの涙が頬をつたう
優しい兄は苦しみながらも決意をしてココにきた

痛む「心」
兄の
その「心」を守らねば

「違います。。兄上の人を思う「心」を確かなものにするためにも。。。この「試練」をこえ「覚悟」をみなに示さねばならんのです」

信繁は晴信の肩を掴み返した

「兄上が。。。人を想う「心」は宝にございます。。そのお心を私がお助けします!!ですか。。ら。。。今は。。」

言葉が途切れる

「信繁！！」

晴信の大きな体が信繁を抱きしめた
お互い止まらぬ涙の中にいる

「今は。。。前に向かおうぞ！！オマエの示した「覚悟」にわしも心を決めた！！」

大きな声だった
静寂の屋敷に住まう御北にも兄弟の決意は聞こえたハズ
「オマエはわしに従うと言うてくれた。。それに報いるほどの当主になる。。かならず。。この試練を越え父上を越え。。。甲斐を導く者になる」

信繁はただ頷いた
自分の気持ちは十分に通じた事を確信した

「今一度。。。わしに従ってくれるか」

兄弟という「絆」を越える儀式
信繁は凛とした顔で答えた

「はい。。。「お屋方様」」

「どうしても。。。連れて行きますか。。。」

兄弟二人
母，御北の前に静かに座した時
「寅王丸」の事を母は先だって口に出した

御北の腕の中には「寅王丸」そして「禰禰」がいた
禰禰を左肩に寄り添わせ
右手の中に寅王丸を抱いたままの姿の母に

晴信は腫れ上がった目のまま頭を下げた後

「はい。。諏訪殿のご遺言にもありますように「寅王丸」が諏訪惣領家の正統後継者大祝である事。。。示さねばなりません」

「重ねてご理解を頂きとうございます」

晴信の言葉に続き信繁も伏して続けた

礼を連ねた二人は顔をあげ少し驚いた
少しづつ高くなっていく日差しの下
部屋の中に届く光に照らされた御北の顔には悲しみはなかった

武田の「器」を産みし母の顔には「覚悟」があった

「器であるお二人が来たのですから避けて通る道はないのでしょう。。。」

声は柔らかく
すでに心を失ってしまった禰禰の顔をよせ慈しみながら続けた

「忘れないでおくれ。。禰禰と言う「花」を踏み。その涙を大きな「器」もつあなた達は救わなかったことを。。その覚悟で進んで下さい」

晴信は涙をこぼした
禰禰の目はもはや誰も見ようとはしていなかった
心をなくし
ただ穏やかな顔は

まるで死に行く最後の人の姿

「忘れません。。。忘れません。。。」

畳にこぼれ滲んでいく涙
ボロボロと溢れる
それを拭わず晴信は誓うように言った

後ろに座した信繁は禰禰の姿を一心に見つめた
言葉で返すでなく「心」に焼き付けるために

「その「器」で甲斐の民を救って下さい。。。」

御北は手を伸ばした
寅王丸を晴信に向かって差し出した
晴信は丁重に子を受け取り立ち上がった

「参ります！」

その決意の後ろ姿を見送った

二人が出て
静寂を戻した部屋のなか
御北は自分に寄りかかったままの禰禰を抱きしめた

「母がずっと抱きしめてあげます。。。ずっと。。ずっと。寅王丸も。。禰禰も。。」

頬をあわせ
ただ優しく抱きしめた

真っ直ぐに評定場に向かう
武田の兄弟

「覚悟」を待っていた家臣たちがひれ伏す道を真っ直ぐに進んでゆく

主殿（しゅでん）には誰の指示でもなく
朝の一番からすでに譜代の家臣団が待っていた

みな決断を待っていた
その間を堂々とした態度で進み
寅王丸を抱いたまま上座に晴信はすわるなり「号令」を発した

「これより諏訪家正統後継者「寅王丸」を御旗に高遠を征伐する！！」

その
揺るぎない声に一同は伏した
それに
誰も意義をとなえようのない決意の顔を見せた

昨日までの迷いを絶ちきった「当主」の顔は輝き
しっかりと前を見据えていた

「策。。。ありましてございます」

一番の下座に座った勘助の声は踊った
そして続けた

「これより十年の戦の「策」出来ております！！迷うことなく「覇道」を進みましょうぞ！！」

一五四二年

甲斐武田は諏訪侵攻を皮切りに「信濃制圧」の戦を「武田大膳大夫晴信（たけだたいぜんだいふはるのぶ）」の命により開始する

一五四三年

諏訪頼重正室「禰禰」はついに心を取り戻すことなくこの世を去る
愛児「寅王丸」は御北の元に留め置かれる事になる

勘助の献策により十年の「戦」を続け信濃全域をほぼ手中に収めた果てに
「北の大禍」と称された「長尾影トラ」と激突する事になるなど，
この時は考え及ばぬ事であった

その２１　覇道　（６）（後書き）

武田編。。。。

長くて短かった「武田編」一部終了しましたぁ～～～

後書きからコンニチワ～～ヒボシです
とにかく「難産」だった「武田編」
何故ココまで難産だったかと。。。言いますと

もともとは
「カイビョウヲトラ」が武田との合戦までを書く予定がなかったからです
だから
武田の設定が漠然としか決まってなかった事が一番の問題でした
しかし
色々とメッセージをくださる方
応援してくださる方
みなさま
「武田との絡み楽しみにしてます」
と
言ってくださるのでがんばってみよう！！！と！がんばってみました

また後日修正とかしてても許してください。。。。（涙）

ところで次回からはまた「トラ」たちがもどってきます！！
今度はトラが「試練」の中に入って行きます
その試練を越えた向こうに「武田」はいます

武田編人物評

武田信繁（武田典厩信繁）（晴信の弟）
「カイビョウヲトラ」におけるもう一人の主人公の。。。予定（爆死）
トラと似たような部分が多々ある彼はトラと出会う事によって「転機」を迎える
ちなみに典厩は役職名だけどいずれ家臣たちからも典厩様とよばれるようになります
父親，信虎にそっくりの怖い顔をしているけど
心根はやさしく責任感もめっちゃ強い
信仰心を高め「御仏」の先見をもって武田を導く「器」として兄を支える

武田晴信（後の武田信玄）
おかーさまの御北に似た美男（藁）
人間大好きでめっちゃくちゃ涙もろい
「涙もろい選手権」とかあったらトラとイイ勝負
ただ，人間が好きというだけでは「国」を治める事は出来ない事に気がつき
人の持つ「清濁」を併せ入れる大いなる「器」となるべく
苦渋の選択の果て「覚悟」を決めて進む事になる

御北様
もはや前の人物評で書き尽くした感はありますが
武田家の「グランドマザー」
弛まぬ信仰心により高き「育み」の「器」を持つ
母性の固まりのような方
子供はみんな大好き
側室の悩みから家中の揉め事などにも相談役として大活躍

心優しきおかーさま
「虎御前」とはあまりに対照的すぎる「母親」

禰禰（ねね）
。。。。。。

ごめんなさい
結局史実どおりの死しかなかった悲しき禰禰
もっと明るい未来があってもよかったのに。。。そう思うと悲しくて仕方ない

諏訪頼重（すわよりしげ）
禰禰の旦那
愛した妻と寅王丸の事を最後まで心配しながら死んだ
彼の側室との間にあった娘は晴信の元，側室として入り「諏訪再興」の夢を託す事になる
愛妻家だった彼は。。。本当に戦嫌いだったのかもしれない
静かな人生でもよかったハズの二人の末路にただただ悲しい。。。

山本勘助（ヤンソン・カーティケイヤ）
まだ
謎がのこったままの山本勘助
仕官した年齢は史実どおりの五十才
とにかく「戦」マニア
「戦」が三度の飯より大好き信繁としょっちゅう一緒にいて悪い事を考えている（藁）

寅王丸（とらおうまる）
諏訪惣領家正統後継者にして大祝。。。。
であるが今は乳飲み子
父母を思い出に残す事なく死別という悲運のプリンス

しかし彼の存在がこの後
信繁にとっての転機に一役買うことになる。。。それは

とりあえずこんな感じで！！（笑）
ヒボシも
これからもがんばっていこうと思います！！

長くなりましたがよろしくお願いします！！

それではまた後書きでお会いしましょ～～～

その２２　ゆらぎ　（１）（前書き）

武田編一部終了

越後にもどって来ました！！
忘れられがちな方からの登場ですが（藁）
よろしくおねがいします！！

その22　ゆらぎ　（1）

「戦がないのに「国」はまとまらない。。。。」

深まりつつある秋の景色を横目に写本をしていた「宇佐見」は筆を
下ろすと
障子を開けて海を望みながら苦々しくもらした
海岸に近い枇杷島（びわじま）にも波と同じように繰り返し吹く風の中に冷たさ
を感じられるようになっていた

小綺麗にまとめられた
文台の上には「長尾政景（ながおまさかげ）」からの親書がまだ開けられないままに置
かれていた

春日山から使者が来たのはこれで三回目
内容はわかっている
あれやこれやと遠巻きに長ったらしい文面を連ねてはいるが
簡単に言えば
「守護代晴景」に組みせず自分に「頭」をさげろ」という

馬鹿馬鹿しいものだった

「いったい「いつ」この越後は一つになったと言うのか？」

春日山に入城した政景はすっかり国主きどりだ

すぐにでも

晴景に取って代わるための「根回し」に余念がないらしい。。。。
同じ内容の親書を何度も送ってくるなど。。。自分を「貶める」行
為だと言う事さえわからなくなるほどに
どす黒い渦巻く調術があの山では行われ
ともすれば
この「恥ずべき」親書が諸将に飛ばされているに違いない

「戦」は無い。。。。表向き
だが
裏では黒い戦が展開し始めている

「どうでるかな。。。。」

宇佐見は二度とも政景の手紙の返答をしなかった
というか
「見極め」の甘さが気に入らなかった

対局の見えていない春日山に従うのは「盲目」の案内人に手を引かれるようなものだ

現守護代晴景はいったいどういうつもりでこの無骨な政景と手を組んだのか。。それを先ず考えた
おそらくは
「謀(はかりごと)」において晴景の方が頭の回転に自信があったのだろう
しかし
長年「戦」から離れ。。「懐柔策」を実施してきた彼には表に立って戦う自信はない
逆に

政景は無駄に血の気が多い「戦」をいつも望んでいるとも言われてきた
「強い」？「弱い」？は別として長尾宗家の名のもと多くの兵の動員が見込める
そこでお互いの「損得勘定」に合点が見られた。。「手を打った」。。。。といったところだろう

「損得」の焦点は「影トラ」

政景は自分の事を「為景（ためかげ）」以来の戦上手。。。。とでも思っているのか？
少なくとも今はそういう「奢り」が絶対にある
でなければあんな手紙を臆面もなく送りつけられるわけがない
「影トラ」を追い落とせば
「越後」の実権を握れると見ているのならばなおさらに

そういう視野の狭い政景に比べれば
晴景の方がたしかに「守護代」にふさわしい全体を見渡す大きな視界を持っている
だが
晴景は器量がない。。。。
その器量のなさが。。。。

「影トラ」の戦功に対する「嫉妬」として現れている

許し難き「女」なのだろう

「困ったものだ」

宇佐見は海の景色から目を離し反対側
山の方に目をやった
あの山の向こう
「栃尾の城に住まう虎」はこのどす黒い「謀」に気がついているのか

それとも。。。。
相手が「兄」という事もある

気がつかないふりをしているのか？

「あまり簡単に降伏されても困るな。。。」

宇佐見は達観しながら情勢を伺っていたが
一つわかっている事は
いまさら「宇佐見」が旗をあげても「勝てない」事だった
それは「軍学」を学んだから「故」に冷静にわかってしまう事で。。。
苛立ちの元にもなっていた

しかしながら現実的に小勢力になってしまった「宇佐見家」の進退
という事になれば

どちらに着くのが自分にとって「有益」かを見定める事は当主とし

て必須だ
個人の思案などは本来「度外視」しなければならないお家存亡の決断

風を避けるため障子を。。つい勢いよくしめた
遠くない昔も。。。同じような決断の時があった

あの時の事をを思い出す
目を落とし
やはりつまらなそうに政景の手紙を見た

お家の存続。。。。それが第一使命であるのはかわりないが
それ以上に［生き甲斐」が欲しかった

身につけた「軍学」を使える場所を。。。。未だ求めていた

「力」を振りかざす男。。。は「謀」には弱い
政景はそういう部類の典型だ
そういう場所であれば多少の窮屈さを差し引いても「重用」されるだろう

では
晴景ならばどうだろう「謀」や「会話」に重きをおいている
彼の元ならば「論客」のような扱いを受けるだろうし
多くの仕事も得ることができるかもしれない。。。。しかしきっと退屈だ

どちらに着いても自分の生き甲斐は「多少」見いだす事のできる場所にはいられそうだが

「影トラ」は。。。
宇佐見は顎をさすり書に簡単ながら「勢力図」のようなものを走り書きしながら思った

強すぎる将には従う「意味」を見いだせない

深呼吸。。。目を閉じ身体を伸ばしてみる
かつて為景に破れた日
「軍学」を学び知謀，知識を駆使して戦ったが
あの「乱暴者」には通じなかった
恐ろしいほどの強さに付随する「閃き」

あれは「天」が与えた才だ

今も鮮明に覚えている
大敗北の果て
朽ち燃え尽きる城と町
全面降伏をし
ひれ伏して為景に仕える事を誓った時の事

「これよりは為景様のためにもてる全ての知識を使い「強き国」を造りおし「負けぬ戦」を策として奉じましょう」

それは己の培った「知識」という力を奉じ
この「強き」の将にとって必要とされる「男」なるための自分の策
を打ち負かした男に「心酔」した
己の「名誉」をかけた「誓い」だったが

あの男は炎を背負ったまま笑った

「そんなんものはいらん」

あっけなく
宇佐見の生き甲斐。。。生き方を「否定」した
そして
伏せる宇佐見の顎をはね上げて言った

「何も考えるな。。。ただ従え。。。ただオレのやり方に従えばいい」

必要とされなかった

こわばった顔のまま
目を開いた
いつの間にか立ち上がり柱を何度も叩いていた

「影トラ」の強さはあれに似ている
唯我独尊の強さ
孤高の強さ

それは宇佐見を必要とするか？
強い者に自分の存在を渇望されたい

なのに為景はその願いをかなえてはくれなかった
多くを学んだ自分を他の諸将と変わらぬ「ただの将」として扱った

屈辱を賜った。。。。

彼の前では一度として「軍議」において発言を重用された事はなかった
むしろいつも「頭の固いヤツ」だ。。。と笑われた

やはり影トラに素直に従う事など出来そうにない
大人げない事だと自嘲気味に笑う

「しかし。。。まだ若い」
考えるまでもなく本来なら
「晴景」か「政景」かという二択しかない場所に「影トラ」がいる理由

「選択」の中に影トラが残っている理由は「若さ」だ

「若さ」というものには「老獪」さが必ず必要とされる

思うように「戦」を運ぶことが出来る機会が訪れる可能性は高い

ましてや
会見であった影トラは「気短者」だ
それを抑え
自分の言葉に「良し」を言わせるのは容易に思えた

なにより魅力的なのはどの勢力よりも一番「力」がみなぎっている
事だ
栃尾を始め
栖吉(すよし)までを手に入れている影トラに今は揚北衆の大物「中条藤資(なかじょうふじすけ)」
さえ従っている

これを「危険」とみなし「警戒」し始めた晴景の気持ちはわからぬ
でもない
それほどの「力」になった影トラの元に下るのは決して悪い道では
ない。。。。が

まだ

従うには足りない
いや
従えない

目元が鋭くなる

どんなに強かろうがしょせん「女」

「女」になど頭を下げられない
それこそ為景のあの言葉以来の「屈辱」だ

ならば別の「策」を
この先
影トラを使い。。春日山の二人を争わせ覇者を自分の手で作り出す
手はないか
間抜けな春日山の二人組をうまく操るには

先手の。。。。「駒」を

それが「影トラ」だ

どちらかが「影トラ」を取るか「殺す」かした方が勝ちだ
いや
この「策」を使えば影トラは「自滅」するやもしれない

「ふ。。。ははははっはははっ」

つい声を出して笑いが漏れた

三つどもえの状態。。。宇佐見の手の中で楽しんで見ようではないか
かつて「いらぬ」と否定された己の「軍学」を試しつつも生き残る
道を模索する方が「楽しい」だろう

自分の手のひらを見て
良からぬ事を考える。。額がひくつく
だが思い描かれる「策」を試してみたい

文台に戻り
着座した

「策」は出来た。。。。
どう出るかな「猫又殿」と達筆に走り書きした

「長尾影トラは守護代の地位を狙って候（そうろう）」
と

その２２　ゆらぎ　（２）（前書き）

長くなってしまいましたが
「カイビョウヲトラ」も今回で１００話！！！
これからもよろしくお願いします！！

その22　ゆらぎ　（2）

よくない「噂」

その「噂」は秋が深まる頃には栃尾城内でも聞かれていた
私の耳は「黒滝」の一件以来各方面に走っている
やたろー衆の人を使い
どんな些末な事も耳に入るようになっているのだから

その「噂」を知らないわけではなかった

むしろ

気がついていながらも知らぬふりをしていた

「よろしくありませんな」

実乃の顔はやはり「怒り」を入り交えた「複雑」な表情で
こみ上げるものを抑えるのも難しいのか
控えた板間に拳を何度かぶつけている

栃尾城に
復旧，新設された二の櫓で私は目を合わせないように外を見ている

「ご存じでした。。。。な？」

夕日越し
実乃は問いつめる姿勢をゆるめなかった

もちろん。。。。知っていた

「ただの「噂」だ」
苦し紛れの言い訳
視線を落とす
私の耳に入る。。。。
という事は当然実乃のように勤勉に事を運ぶ家臣たちは知っている
と言う事だ

櫓から夕日に照らされた城下を見ながら冷静に答えたつもりだっが
声に「不安」が混ざっていた事を実乃は見逃さなかった

「尋常成らざる事態です。。。ただの「噂」ではありません」

。。。。。

「尋常ならざる。。。事態」

実乃の言葉を私は復唱する
つぶやくように
視線を上げ山間の向こう春日山の方角を何かを探すように見つめた

何故。。。こんな事になってしまったのか。。。
どうしてなのか

「噂」
それは
私が守護代の地位を狙っている。。。。という「恐ろしいもの」だった
屋敷にもどった私の前には家臣たちが鎮座していた
また詰問だ
何も話したくない
「このようなものを春日山付近にて活動する者から手に入れました」
私は着座しながら
小姓の手から渡された書をそのまま実乃に返して入った
「読め」
実乃は少しとまどったが言われるまま右手で書を開くと感情を出来る限り押さえた声で
太く
唸るような「怒り」を相乗して読んだ
「長尾影トラは守護代の地位を狙って候（そうろう）」

一部のどよめき
しかし
大半は十分に外の情勢に耳を立てていたのだろう
冷静な顔の中に「怒り」「焦り」
現実にこんな事はありえないのではという「驚き」と溜息

冷めた視線
私は努めて冷静さを見せながら並ぶみなに向かって聞いた

「どう思う?」
自分に問いかけるように

「守護代殿の策略だ!!間違いない!!」

口火をきったのは
金津新兵衛(かなつしんべえ)だった
気の短さもそうだが
誰よりもに春日山を敵視している彼はすでに態度にも怒りがあらわになり
片膝の状態でのりださんばかりの様子だ

それを実乃が手をあげて制する

この夏
たしかに異例な事がたくさん耳に入った
それまで守護代とは犬猿の仲とされていた「長尾政景(ながおまさかげ)」の入城

長年
参勤を拒み「臣従」をしてこなかった「政景」の入城は越後のどの
将にとっても衝撃的な出来事だった
しかもその入城は旗本勢を引き連れてのものだった

「軟弱守護代殿は我らと戦う為に「犬」と手を組んだのだ！！」

金津の怒りは収まらない
すでに侮蔑の言葉を軽々しくと発している
それでも私は何も答えなかった

評定に並ぶ者達も気迫に押されている
それをもう一度実乃が目で「黙れ」と抑える

軍勢を連れての入城。。。。
当然
それは「良くない事」と大半が受け取っていた
本来なら反目しあった「同族」が中郡（なかごおり）の平定を見て「まとまり」を
自ずから示す
と言う
模範的な動きにとられても良かったのだが
以降
「怪聞」は耐えることなく流れ始めたからだ

最初は
「長尾政景」が次期「守護代」になるのでは？
という荒唐無稽な「噂」だった

城に入ったのはその準備なのでは？と
しかし
そういった動きはなく
犬猿の二人は沈黙を守った

が
動かないのに「怪聞」が止まる事はなかった
春日山近くに居を構える「柿崎景家（かきざきかげいえ）」の報告に
「守護代ではなく「自分」に従え」という密書が届いたのはその一月後
その後間を置かず二通も同じ文面が届く
この「文」は春日山に近い諸将には当たり前のように流されていた
垂れ流し。。。。
なんと「不心得」な

「長尾政景殿の動きは。。。あきらかにおかしいのですが。それを許す守護代様は。どういうつもりでしょうか？」
険悪な場に押され気味な中
安田長秀（やすだながひで）が横目で金津を見ながら渦巻く「疑問」を私に進言した

入城以降の食い違い

「順を追ってみよう。。。冷静に判断せねばなりません」
長秀の落ち着いた質問に秋山史郎（あきやましろう）もやっと口を開いた

「最初にあったのは。。。政景殿の入城。。。これは守護代様がお呼びになったのでしょうか？」

部屋に集まる者たちは一応に否定だった
よもや今更「晴景」が「政景」を呼びつけるほどの「力」があったのか？
と
権威を落とした守護代に取り入ろうとしたのでは。。。
そちらの方が結論としてしっくりくる。。。と

「しかし政景殿の。。こう言ってはなんだが「野心」が見えないような守護代様でもなかろうに」

老臣の一人は片目で静かに討論を聞く私に気を遣ったのか守護代擁護的な発言をした

「何故そんな危険な存在である政景殿の入城が許されたのでしょうか？」

「政景殿の動きに「謀反」の気配があるのなら守護代様が入城など許すまい。。。」
老臣の問いに
落ち着いた声とは裏腹にいぜん「怒り」を漂わせる実乃が答えた

「噂」。。。。。

「お二方の「敵」が共通の人物であり。。お二方の損得勘定が成立したからではないのですか？」

部屋の中一番の下座に座った
芝段蔵（しばだんぞう）が遠巻きにこの非常事態の真相をざわめく者どもの間を縫って言った
歯に衣着せぬ諫言は
私にも挑戦的なほど良く聞こえた

「私はそう考えております。。。それ以外にお二人を近づける「原因」がありません」

段蔵の言葉に飛び出して談判をしようとした金津の膝をがっしり止めた
実乃の顔には悔し「涙」があった

私はわかっていたが段蔵の答えに応じた

「「敵」とは私の事か」

静まる
みなが張りつめているのが感じられる

何故。。。私が「敵」なのですか。。。

「先手を打たねばなりませんぞ！！春日山はすでに「戦」の支度をしておるとも聞いております！！」

抑えられた膝の手をはね除け
立ち上がって金津は吠えた
その声に呼応するように諸将が堰を切ったように騒ぎ出した

「我らが安心して知行を守れるようになったのは「影トラ」様のおかげです!!それを「敵」と見なすなど言語道断!!」

憂鬱が私を覆う
黒く染まってしまいそうだ
自分の意志を抑え
何故ですか。と。。何度も自問する私の前に実乃の明確な声が響く

「戦わねばなりません!」

「いやだ」
立ち上がった私の言葉に騒ぎは水を打ったように静まった
うつろな目
そりでもハッキリと否定

「しかし。。。」

疑問を呈する者を睨みもう一度

「兄上とは絶対に「戦」はしない。。。守護代様あっての越後。。

忘れるでない」
強く押した
誰にも
何にも
言われたくはない。。。

何も言うな

そこまで言って部屋を出た
自分の部屋に戻る間
ただ涙が止まらない
次から溢れる涙をどうしていいのかわからなくなってしまい

何度も「何故」を繰り返した
兄上の元
越後のために私は「戦」と言う仕事をずっとしてきた
なのに
どうして私が「敵」なのですか？

混乱と悲しみで眠れない夜の下
私は兄に心ばかりの「親書」したためた

「噂」は「嘘」だと信じたかった

その22　ゆらぎ　（3）

兄に向けての手紙を書いてから十日ほど
私
屋敷の外に出る事は無くなり
部屋の中を行き来する日々を続けていた
そんな私の様子をうかがいに何度か実乃が訪ねて来たが
戸を閉め
顔を出して話す事など絶対にしなかった

今の私の顔は「苦痛」でやつれているに違いない
飯をほとんど口にする事ができなくなってしまっていた

あの詰問から
身を清める事はしなかった
髪も結わず
髭も作らず

着の身着のままで「願」を掛けた

「祈り」が適うまで野で修行するのと同じ心境に自分を保つために

耳をすませば聞こえるのではないか？と思うほど
「噂」はもはや城内のどこでも
だれでもが知るところにあった

手を合わせ「禅」を組む

そのような声に耳を貸さぬように「無」の世界に自分を置く
ただひたすら「禅」を組め。。。。
信心に習い生きよと
決して城内にでる事もなかった

普段なら
つやが「手習い」にきていた日さえ誰も部屋に通さなかった

時を刻む中で
写経を続け
読経を
つぶやくように延々と朝から始め
晩までした

絶対に
誰とも話しがしたくなかった

この耐え難き苦境にいる私に御仏の「声」を「導き」を下さる事を
願った

まず
「間違いであって欲しい」
兄上に心を尽くして書いた手紙で私の真心をわかって頂きたい

夜になるまでずっと祈ります。。。。

でも
どれほど平静に振る舞っても「涙」を止めることはできなかった

早く
早く

「お返事ください。。。こんなにも心を痛めております。。。お返事下さい。。。」
縋る気持ちで。。。。ただ祈ったが「声」は未だ聞こえなかった

「影トラ様。。。」

朝方まだ日も出ぬ刻に風の音にまぎれながら実乃声が部屋の外でした
沈黙の間

「中条藤資殿(なかじょうふじすけ)より親書が届いております。。。おあらためください」

山から吹き下ろす風の音だけ
起きてはいたが返事はしなかった
したくない

「内容をお伝えします」

私の沈黙に慣れた実乃は一人で事を進め始めた

「手紙は守護代様に送り届けよ」

朝もこない闇の中で問答をしたくはない
まだ
祈りの微睡みの中にいるのだから

そんな私の言葉にかまう事なく実乃はハキハキと内容を口上した

「揚北郡「中条殿」を中心に各諸将の連判により「長尾影トラ」様に臣従の意を示すものとして。。」
「実乃！」

私は声を大きくして話しを断ち切った

「臣従を示すのならなおさら。。。守護代様に良い報告として親書をそのまま送れ」

風で庭木が揺れる音が聞こえる
しばしの沈黙

「わかったか？」
「わかりません」

目の覚める返答
今まで隣で私をたしなめ続けた実乃から反抗の言葉が返ってきた事に驚いた
私は「禅」を解き
そのまま庭のある戸を開けた

「わからない。。。だと？何がわからないのか？」

実乃は廊下にはおらず庭の縁側の下に片膝で伏していたが顔をあげ書状を手をあげて前に見せた

「中条殿は「影トラ様」に臣従すると申しておられます。。守護代様への申し送りは「不要」にございます」

と

私の名の部分を指さして言った

「不要などと不遜な事を言うな！そのような事があらぬ疑いにつながっていると気づかぬのか！」

「いいえ！！事実「不要」にございます！！この親書を届けたならばなおさらに守護代様は「我ら」を「敵」と見なす事でありましょう！！」

諫言

暗い朝を割る大声

よどみない力強い声は周りの静寂を気にする事なく続けた

「例の怪聞といい政景（まさかげ）様の不穏な文。。。これらの物が春日山周辺に流布されているのに「咎め」られていないのは何故でありましょか？！わかりますか？」

私は眼前で激高しながらも

広く世を見た家臣の意見を。。。。。わかっていた。。。

「噂」というものの力を決してあなどっていない私には

「噂」を止めようとも「咎めようとも」しない春日山の。。。いや兄の本心を。。。。わかり始めていた

「晴景様は影トラ様の「戦功」を嫌っておられます」

耳に届く報告も。。。
でも

だけど
首を振り否定した

「知らん。。。。」
苦しみ紛れの言い訳

「悔しゅうございます」

実乃の拳は音高く庭土を殴った
私の心の乱れを「戦」で働く焼けた大きな拳で代わって表すように
何度も殴った
口元を震えさせ
怒りの形相の目にはにじむ涙があった

「これまで影トラ様は誰よりも「越後」のために戦って来られたことにお褒めの言葉を預かった事などついに一度もありませんでした。。しかし。。。それでも「越後統一」まで後一踏ん張りのところに来た今!!ご自分でなせなかった「統一」の偉業に「嫉妬」されたのです」

「実乃!!兄上はそのような」
私の弱い言い訳の言葉を今度は実乃が切った

「今まで揚北衆は守護代様に頭を下げませんでした。。。。親族衆

である「栖吉衆（すよし）」も「影トラ様」。。。。貴方にだけ「平伏」「臣従」しました。。。晴景様はそんな状態を「放置」し続けたのに今になって「力」を自分の元に奪い取ろうと。。。計画しておられるからです！！だから春日山近辺に流れる怪聞など取るに足らない事なのです！！！」

実乃の顔は。。。。
「戦」に赴く顔になっている

「守護代様は。。。。「戦」を望んでおられます。。貴方様を打ち負かすために。。だから政景様のご入城を許されました。。武力であれ知力であれどちらの方法を使ってでも「影トラ様」を悪者にして越後を統一しようとなさっています。。。」

「だまれ。。。。」

それは。。。。他人の言葉だ。。。
私は実乃を睨んだ
もはや心を抑えておけなかった

「それで。。。それで兄上と戦えというか！！！」
いつの間にか
涙でぐしゃぐしゃになった実乃は怯むことなく告げた
「戦わねばなりません。。。」

哀願する顔に向かって怒鳴った

「だまれ！！！」

よくもそんな事を簡単言えたものだな！！

確かに「褒めて」下さった事などない

良い顔を見せてくださった事だってないさ！！

でも

だからって

兄上と戦えるわけがない。。。。

血を分けた兄妹。。。。

私は拳を固め柱を殴りつけた

庭に飛び降り木をへし折り声を上げて暴れた

「兄上とは。。。戦わない。。。絶対に。。。」

伏して頼む実乃に言った

「私が折れて「汚名」を着ることで「越後」が統一されるのならそれでよい！！兄と戦するぐらいなら「髪」を落とし「尼」になるわ！！！」

実乃の目は見開かれ驚きで震える声が

「何という事を言われますか。。。。」

と

地べたにへばりつき

私の足にすがろうとした

その手を足ではらった

「それでも戦がしたいのならば。。。。オマエ達だけで好きなだけやればいい！！」

そう言い放ち

汚れた足のまま乱暴に戸を閉めると部屋に戻った

独り

地に残された実乃は「残念」の涙を止められなかった

馬鹿正直に。。。それでも「本心」を告げたが「影トラ」は聞き入れなかった

むろん

心中がわからないわけでもなかったが。。。

それでも事態がのっぴきならない方向に向かい始めている今。。。

誰かが言わねばならぬ事だったとおもえばこそ。。。。

ただ「残念」だった

立ち上がり

トラの部屋を後にしようとした時

木陰に「つや」がいたことに気がついた

悲しそうな実乃の顔を見つめるつやの目にも涙が光った

「心配いたすな。。。」

と
呆然として手習いの道具を落としてしまっていた
つやの手に拾い上げ渡した
つやは声をださずに静かに泣いた

その22　ゆらぎ　（4）

「比翼連理（ひよくれんり）。。。。頼朝（よりとも）に。。義経（よしつね）。。。殊勝な手紙よのぉ。。。」

深まる秋の夕日が届く表屋敷の一室で
届いたばかりの「影トラ」の親書に目を通した晴景（はるかげ）は満足そうな笑
みを浮かべて言った
丁寧に書き連ねた内容が「へりくだり」の態度を見せれば見せるほ
ど思うつぼとにやけた

影トラは自分を「十分」に恐れている事がわかった。。。。
と
言うだけでも笑いがこみ上げてしまう気分だった

例年なら季節の変わり目に
身体の調子を悪くしていたであろう晴景だったが
注意をしているのか
まだ秋口だと言うのに厚着をした状態で文台の上の手紙を投げ捨て
立ち上がると部屋の中を行ったり来たりしてみた

心はいつになく高揚していた
胸に手をあてて高まりを再度確認する
思い出すにこの感覚は

父，為景と山河を走り回っていた時のあの感じに似ているようで
無為にも着物の帯や足下を注意して見たり

確かめたりする
ココは「戦場」という認識からか
自分の身なりが「不用意」な事になっていないかを。。。確かめる
病を得るようになった時より瞼(まぶた)はいつも重く
眠りの時間が多かった事が嘘のように活き活きとしている

「軽い。。。」

腕を挙げまわしてみる
調子は悪くない。。。。
自分の四肢が「健全」な状態に保たれている事に喜びを憶えたのは
久しぶりだったのだろう

手を開いたり閉じたりしてみて
何度か自分に向かって頷いた

今。。。かつての「戦乱」の越後を駆け回った頃に自分が心身共に
戻ってきた事。。。歓喜した

「水丸(みずまる)。。。」

先ほど投げた「影トラ」の親書を持って部屋に入り
後ろに控える小姓の「水丸」に自信に満ちた声をかけた
去年に比べると一回りは身の丈を大きくし子供だった顔は精悍な顔
になり始めている彼はすぐに返事した

「その後「政景（まさかげ）」はどうしている」

今までとは比べ物にならないほどの「生気」を溢れさせている晴景の姿に羨望の目を向けながらそれでもまだ幼さを残す「声変わり」のしていない声で質問に答えた

「最初の「親書」を諸将に飛ばした事を咎められて以降大人しくしておられます」

咎めたわけではなかったあの形ばかりデカイ粗暴な男は春日山に本格的に入城してすぐに「馬鹿」な手紙を書いた

「守護代に組みせず我に従え」

「弱った」晴景の姿を見て「侮った」態度根回しをするにしろあんまりな「手紙」だったが「物」は使いようと考えた晴景は「変な噂」が耳に入った。。。と称し政景に釘を刺しておいたのだ

「その後の「手紙」はどうなった?」

晴景の「知謀」を目の当たりにする喜びに踊る声を抑えながら水丸は答えた

「仰せの通り。。偽造して二回ほど同じ文を同じ「諸将」にを撒いてあります「困惑」は隠せない様子。。。みな沈黙の中におります」

「良いな。。。」

酒をそれほど嗜まない晴景ではあったが大いに飲みたい気分になっている
手に取るようにわかるから
あれはやはり「単純」な男だ。。。気が楽で良い物だとせせら笑った

あんな内容の手紙を貰った諸将はどう思う事だろう
とりあえずは「混乱」する
誰もが「出方」を見るために「静かになる」

守護代はどお出るか。。。と

しかしの沈黙
なのに
同じ内容の文が「督促」のように届く。。。。

不安を煽る
そしてそれは「政景」の信頼をガタガタに壊していく
守護代存命のうちにあんな「不徳」の手紙を乱発する者に誰が信頼を寄せるものか。。。

そういう不安定に便乗する者を炙り出すための巧妙な「罠」として
政景のアホな手紙を利用してやった

「宇佐見は動いたか？」

陽は落ちれども赤く染まり始めた木々の葉を余裕の態度で眺めながら聞いた

水丸はこれぞと晴景の足下まで近寄って小声で答えた

「動きました。。。」

戸に置いた手のまま下に控える水丸の嬉々とした表情

その目を見て答えた

「良い報告だ」

おそらく

どの諸将も「手紙」に関しては「無視」を決め込もうとしていた事だろう

しかし

「宇佐見」は動くと読んでいた

あの怪聞に釣られ絶対に何かをする

怪聞。。流言。。。

「長尾影トラは守護代の地位を狙って候」

が

宇佐見のものである事を晴景は見破っていた

戸を閉めて
注いであった水を飲んだ
考えを廻らし頭を使うと喉が渇く。。。

もはや「影トラ」は敵ではなくなった
手紙の内容からも「服従」一心
わざわざ疑いをかけられるような動きはとらない

「しょせん女。。。謀には弱かったな。。。」

宇佐見が「嗾ける（けしかける）」ような怪聞を発した事
それが
影トラにとって「見えない恐怖」になった
影トラのもつ「忠義」の心をうまく利用した策だった

だから
急ぎの手紙を送ってきた

「謀反の心は決してありません」

と

晴景の思案は高みに登りつつある
秘めやかに
涼やかに

進む

後何手で詰められるか
政景をどうやって「懐柔」してやろうか。。。それさえ「謀」という名の「お楽しみ」になっている

目を鋭くし
あの「不徳」の手紙のを読む
粗暴で乱暴な書きくちの筆
政景の内面。。。。。荒々しい「戦」心をよく表している

晴景は薄い笑みをたやさず考えを続ける

そんな荒々しさを
今更内政不安になっている「諸将」達が望むか?
その心に吹き溜まる「嵐」を受け入れる者がどこにいる?

望むことはない。。。。
望まれない「当主」だ。。。。

もろい「器」だ

あの「アホ」な手紙の事が広く伝わっている
今
わざわざ周りを不安にさせるような「督促状」の事を突けば

言い訳では済むまい
一度でもあんな手紙をだしてしまった事が「運」を見放す結果になった事を大声で笑ってやろう

もはや
この「戦」の勝敗は見えてきていた

政景という「力」を「知略」で押しつぶせる。。。。確信

その時に諸将の目に映るのは「心強き守護代」
力など
振りかざさなくとも「治世」を司る姿をもつ自分に向けられる「目」
は

なんと
心地よいものか

「宇佐見殿の処遇はいかがされますか？」
自信に満ちた笑みの晴景に水丸も感化されている
そつなく任務をこなそうと
その威光に従おうと前にでて聞く

「ほっておけ。。。」

考えるまでもない宇佐見はどちらかの陣営に自分を「売り込もう」
としている
馬鹿な
古めかしい「軍学者」だ
こちらから手をさしのべて「禄」を保証してやる事などない

憤り
宇佐見。。。己の軍学に酔い。。。そして溺れ死ぬがいい

「つまらぬ輩はほっておけ」

そう言うと水丸の肩を掴んだ
つかまれた手に確実な「力」を感じながらも水丸は職務を続ける

「政景殿のご内儀「綾姫」様がご登城される件はどうしますか?」

「ほっておけ」

水丸に顔を近づけ頬を撫でながら返事する
この上
「人質」まで持参してくれるとは。。。。ほとほとマヌケなり。。。
政景。。。。
「綾」は元々長尾為景の子だ
親族のつながりで言えば政景など。。。。逆にこの春日山の籠に入ってきたアホウドリだ

「水丸。。。閨(ねや)に参る。。。共をせよ」

晴景は知謀の高ぶりをまだ人前に表さない
それは「仕上げ」の時に。。。。
存分に「偉大な守護代」としてみなの前で発現させるためにあるからだと信じていた
だから
高ぶる心で水丸を「抱く」

先を歩く晴景の後ろに従う水丸は
閨に呼ばれる事が至上の喜び

この優れた知謀の主に心も体も抱かれ「情」を得られる至福に顔を
赤らめながら従った

自分が「強き男」の胸の中に入れる事。。。。それが「絆」
この方に仕える
心して

晴景は屋敷の渡りを行く中星空を見ながら誰に言うでもなく

「存分に可愛がってやろうぞ！」
と吠えた

その22　ゆらぎ　（5）

長尾政景（ながおまさかげ）は入城以来思い通りに進まない自分の「策」に苛立っていた
質問や軍議においてはとくに「意義」を唱えず
薄ら笑いを浮かべている「軟弱」守護代晴景（はるかげ）の実は隠し持っていた
「強かさ」に翻弄されるままの自分に
憤りさえ憶えていた

「守護代様は「知恵者」です侮ってはなりません」

目の前に座る老臣は若さを持て余し
考えの廻らなくなっている政景を「再度」諫めて言った
「力押し」が通用する相手ではなかった事は
すでに
政景にもわかっていたが。。。。
空回りを続ける現状に頭を掻きむしり拳を床に打ち付けた
こんなハズではなかったと
顔を赤くし「気短」な姿を隠すことができなくなっている

父の代から「晴景」を侮ってきた
父の口癖はこうだ

「為景の息子は「軟弱者」で言葉達者なだけの男。。。いずれ落ち

ぶれた守護様と同じように操ればイイ」

と

だから

表だって「戦」までしようとはしなかった

戦うまでもない相手だと親族共々思っていた

時がすぎれば

「力」を持つ巨大な一門である「上田長尾宗家」の嫡男である自分

がすんなりと「守護代」になれると

「信じていた」

今年の初め

晴景と会ったとき

もちろん昔から「武」には向かない「細い」男であったが

さらに痩せて「軟弱」を絵に描いたようになり

顔色はいつになく悪く青白く

肩に「武威」を見ることもできない干物のよう姿になり

実妹の「影トラ」に腕をねじり上げられる

そんな失態を諸将の前で晒した男

吹けば飛ぶような「弱腰守護代」

心身共に「弱き男」

確信。。。。。

「今こそその時」

このまま「死ぬまで」待つ事などない
時期尚早では?と止める親族を無視して城に入った

事を早く進めるため会見からすぐに
坂戸城に戻り
気は満ちた事を父につげ「旗本」「直臣」を並べての再入城。。。。

それだけでも
諸将に「次期守護代」が誰であるかという威光を示すことが出来た
ハズだったのに。。。

「早まった手紙」

悔いても悔やまれる「失態」だった
だが
たかだかその一つだけでこれほどまでに自分が身動きがとれなくな
ってしまうとまでは思ってもいなかった

「変な噂を聞いた」

晴景の湿った顔から発された「釘」に身がすくんだ
だがその時はたいして気にもとめなかった
が
怪聞が怪聞を呼ぶ
誤算だった
一度でも早まった親書を出してしまった政景には「乱」を望んでい

る者。。。。
という
疑いがかけられてしまった

戦乱にあけくれた「越後」の諸将は事実。。。。疲れていた
「乱を望む者」に希望など見いだせないという
冷たく
無言の回答が。。。。

揺れる灯籠の火にさえも当たり散らしてしまいそうになり
頭を抱える
大男。。。
身の丈ならば晴景をとうにこえ
「武」で後れを取ることは絶対にないと確信した若造政景の思案は
脆かった
落ち着かないのが隠すことのできない行動として表れてしまう
何度も額をかき
髪をさわる

自分の「弱い」部分を串刺しにされてしまった

「どうしたらいい。。。」

「戦」であれば
退却も必要
引き返す勇気もまた「策」である

このまま春日山に留まったのでは。。。。。
それこそ
言葉巧みな晴景の思うつぼにしかならない。。。。。。そんな気がする
いや
もう一度頭に手をあて考える。。。。静かに揺れ消えてしまいそう
な灯籠の火が
それまで燃えさかっていた政景の「野心」炎のように見えてしまう
心は風前の灯火だ。。。。

吹けば飛ぶ
それは己の自尊心

思い浮かぶ最悪の言葉

「敗北」

戦もしなかったのに心を。。。しいては若さを打ちのめされた気分
不安がにじむ

向かいがわに座った
老臣は顔をしかめたまま言った

「今ココで状況が悪いからと言って「ただ」引き返してしまってはもはやどの諸将も政景様の「不安定」な行動に「臣従」を示さなくなる事でしょう」

返す答えは
己の口から発していながらもやはり苦々しい感情を帯びていた

じぃと呼ばれる歳から
自分が手塩に掛けた「政景」の若君が
戦鬼の残した「晴景」の老練さに打ち負けてしまった事が悔しさに
なっていた

「だが体勢を立て直す事はココではできない」

政景は春日山での晴景との「戦」に負けた事を認めた

認めなければ進めない事だと
ゆっくりと手をのばし人差し指で自分の中にある「図」を忘れぬよ
うに
身振りを交えて正確に伝えようとする

「綾をココに呼ぶのは二つの理由がある」

老臣は返した

「一つは若殿（政景）との入れ替わりで春日山に「上田長尾」の力
を示し続ける。。。事ですな？」

薄暗い部屋の中
顔の半面を照らされた政景は大きく頷いた

入れ替わりに「正室」である綾が登城すれば
「敗北」で春日山を去ったと思われることはないそれどころか
自分の妻を守護代の居城に呼び寄せたことで
後にこの山に居座る者が誰であるかを示す事もできる

「もう一つの理由は？」

手振りを交え

「武力」ではなく「知恵」に対抗する策を懸命に絞り出す政景に老臣は問いかけた

政景の顔には少なからず自信が戻り

重要である事を座ったままにじりよると耳打ちした

「虎御前（とらごぜん）を抑える」

老臣の目が開かれた

「虎御前。。。。なるほど。。。」

政景にも良くわかっていた事だった

「虎御前は晴景殿を「かなり」嫌っておられるそうだ」

それは少なからず「噂」になっていた事だし

事実

虎御前の実家「栖吉（すよし）」はついに守護代に頭を下げる事はしなかった

従わせなかった。。。。

それほどに晴景を嫌っている

しかし

だからと言って政景の事も虎御前は「好ましい」と思っているわけでない事もわかっていた

為景の仇敵の息子
為景に仇なし続けた一族の嫡子
良い感情を見つける事のほうが難しい
だが。。。。

「綾」ならどうだろう
実の娘
およそ十年ぶりの対面にもなる
その愛娘から夫に「力添え」をして欲しい。。。。と。。頼まれれば。。どちらかといえば「毛嫌い」も甚だしかった晴景に比べれば
旗色は幾分もよくなるにちがいない

「イヤとはいわないだろう。。。」

誠実な妻の姿を思えば心苦しい選択ではあるが
将来的にみても「武」に長ける自分の方が「守護代」にふさわしいと見てくれる事だろう

それにそれほど「影トラ」に恨みはない
虎御前を取り込めば
母に忠実な「影トラ」は自分に「臣従」を示す事だろう

手をあわせ「策」の中身に自信を見せた
表情で老臣に続けた

春日山の内部で切り崩せる最大の一角があるとするなら

間違いなく「そこ」だ
拳を固めこの「策」のためにココに居残る老臣に意志を伝えた

「綾にはわしからも「越後」のため。。。とよく伝えておく。。頼むぞ」

そう言うと彼の肩を大きく叩き
己の身にも「気合い」をたたき込んだ

「負けんぞ。。。晴景」

折れかかった自分の若さを奮わせ負けない事を誓って手を合わせた
「かならず勝つ。。。」
と

その２２　ゆらぎ　（５）（後書き）

水丸君～～～

後書きからコンニチワ～～～ヒボシです
ひさしぶりです

さて
武田編が終わって暗雲渦巻く越後にもどってきましたが。。。
「水丸」が結構人気があってびっくりしました
でも
あまりいい意味ではなさそうです

えっと
水丸君は晴景様と。。。。「衆道」の関係を持っているわけですが。。
そこのところをもっと詳しく書いて欲しい。。。
という要望があったりなのですが。。

すいません
「衆道」がメインの小説ではないので必要がなければあのぐらいまでしか描写はするつもりはありません。。。

で
それも衆道での「恋愛」を書くつもりもないので悪しからずです

ちなみに
今回も水丸君は晴景様とベッドを共にしていますが
アル意味正しくその関係を書いたとも思っています

自分の尊敬する主に「閨」の共をせよと言われる
という事は
「腹の内」までを知り合う最大の授業とも言える事と思います
隠すことのできない裸の付き合いで
水丸君はきっと「知謀」にたけた若武者になっていく事でしょう
だから
そこんには「恋慕」はあってお慕いしていても
妻という存在でも恋人という存在でもないもっと人と人の関係がある
と捉えています

なのでぇぇぇぇ（涙）

水丸君（受け）でもっとベッドシーンプリーズってのは勘弁してやってください（号泣）

ちょっと腐女子（藁）な会話になってしまいましたが
これからもよろしくお願いします！！

それではまた後書きでお会いしましょ～～～

その22　ゆらぎ　（6）

冬支度に入る春日山に艶やかな「綾姫」がやってきたのは明後日の
事だった
降るように風に舞う赤い葉の間を
何もかもを懐かしむよう静かに進む
輿から外を見ながら懐かしむように言った

「立派な城になりました事で」

綾が春日山にいたころは
粗末な塀や乱杭が多く見られたが
どれもが良く修繕され曲輪の角にたつ櫓の多さには目を見張った

およそ十年ぶりの帰参に心は躍っている様子で
手を伸ばしては侍女にあれこれと城の中について話しをしながらゆ
ったりとして和やかな行進であった
輿の中で中腰で物見をしてしまうほどに
ひさしぶりの帰宅にいつもなら涼やかにしている目を子供のように
輝かせて
声にだして笑いを伝えた

もちろん
嫁ぎ先の坂戸の城も「仇敵」のお家とはいえ
夫の「長尾政景（ながおまさかげ）」には愛され居心地も悪くない
だけど
やっぱりこの山に過ごした日々を忘れた事などなかった

乱れ夜を恐れ
母，虎御前と共に眠れぬ時を祈って過ごした事
雨の日雨漏りを直すために女達が駆け回って城の修繕をしていた
そのぐらい男たちが「戦」に明け暮れた日々だった

雨

あの雨の日の事も。。。。。
ふと。。。暗い闇の記憶が蘇り眉をしかめそうになったが
顔をあげ
「生家」に返ったこと
「親睦を深める」
ためにまたも自分がお役にたてると思い直し気を引き締めた

年甲斐もなくココあそこと見回ってははしゃいでしまっていた事を
ほんの少し自分の胸の内で咎めて

そんな綾を政景は柄にもなく派手に迎えていた
本丸の屋敷までの門を広くあけ
わざと二の丸の家臣達にも目に付くように飾り立ててのお迎え

業務で
二の丸の屋敷に戻っていた「直江実綱（なおえさねつな）」の目には滑稽にうつった

直江はココ何月（なんつき）かの間「栃尾」に手紙を出すことができなかった
晴景の様子は屋敷の奥にいて「病」である。。。。

という
報告しか聞くことはできなかったが
「影」が活発に動いているのはよくわかっていた
そういうことは
第三者の「派手」な動きで良くわかるというものだ
自分の浅はかな行動で身動きの適わなくなった「政景」が大げさに
「綾」を迎え入れるなどが良い例だ

「政景殿は。。。そうとう参っている様子だな」

誰もいない部屋
独り言のように直江はつぶやく

「栃尾はどうなっている？」

奥の襖に潜む男も静かな睦言(むつごと)のような声で返事した

「影トラ様は屋敷にこもったまま。。栃尾衆は本庄（実乃）様の元
沈黙を守っておられます」

筆を止めた
影トラが。。。兄である晴景に正面切って「反抗」する事は考えら
れなかった
だが
これほどまでに「拒絶反応」を示すとも思ってなかった
例の

「長尾影トラは守護代の地位を狙って候」

という怪聞
あれに「拒否」という姿勢を示した
わからんでもない。。。
もともと「欲」という心を持たぬ人
ただ「越後」のためと信じて戦ってきた人だ

しかし

そんな事に負けて貰っては困る
趨勢として春日山の周りは守護代を支持する一派が残っている。。。
と言うだけ
そして
「政景」と「晴景」の争いはまったくもって視野の「狭い」志の「低い」争いだ

逆に
影トラは中郡（なかごおり）の中枢を制圧し
栖吉を手に入れ
「揚北衆」から望まれ主君にと仰がれる「存在」だ

体勢として見るのなら「越後」の大半を制した「影トラ」こそ当主にならるねばならない
それが一番早く「越後」をまとめる最良の手段だからだ
が
そこに「争い」が介在してしまう理由がある

ひとつに
「影トラ」が「女」である事だ

そして
もうひとつは今更な事だが。。。。。
晴景の。。。。「血」の問題か?

直江は綾姫登城に伴って仕入れた祝いの品の目録を調べながら
極めて落ち着いた様子で

「「外」は騒がしそうだ。。。どうなっている?」

と問うた

「武田はこの夏。。志賀城を非道な手段により殲滅着々と信濃をその手に入れております。。またこの際に「上杉管領軍(うえすぎかんれいぐん)」を碓氷峠にて撃破しております」

それはすでに耳に入っていた情報ではあったが
長尾家にとっても守護筋である「上杉」の北条との川越合戦に続く敗北は大きな危機感として迫っていた
世の中は大きく動いている
すでに越後はその流れに乗り遅れている

「武田は。。。来るかな?」

「はかりかねますが。。。雪深いこの地を欲するでしょうか?」

雪深さ
それが世間の動きから越後を疎くしていた

雪は何も守ってはくれない

世の中が「越後」だけで回っているならば
この
くだらない争いにも意味を見いだせる事だろうが。。。
「越後」の外に目を向けるのであれは「内輪もめ」をいち早く集結させる「一手」が最重要事項でなければならない

「影トラ」様。。。。」

つぶやく直江の声に襖の後ろの間者はおよ「影」の者とは思えぬ意見を交わした
間者は主の言うことのみを聞く
意見はしない存在ではあったが直江はあえて「意見交換」もしていたそれが己の「見聞」を狭めないための事として

「このさい「影トラ」様は政景様の「側室」として入られるのが良い策と思えますが?」

目録を手から下ろし直江は首を小さく振った
たしかに
争いというのを「徹底的」に避ける策を取るのならば晴景が「次代」を政景に譲る約束をし。。そのうえで「影トラ」を側室として与えれば良いという考えもある

「それで「越後」はまとまるか?一時凌ぎにしかなるまい」

あやふやな身内だけの政権交代。。。。
何よりも
晴景がそれを望んでいないし。。。。影トラ様を政景の側室になど。。。虎御前が許さないだろう

直江の文台には晴景からの「影トラ」宛ての返書があった
昨日晴景の近習（きんじゅう）の水丸がわざわざ手渡しにやって来た物で
夜中に「禁」を破って中身を確認していた

その内容は。。。。

「栃尾ならび揚北の諸将は「守護代」に「臣従」の親書を提出その書を持ち影トラは登城せよ。。」

結びに
「影トラの役目は終わり「剃髪」して仏の道に戻るが良い」
と書かれていた

「乱」

政景にあれほどの「知謀」を見せ動きを封じ込めた晴景が平常心を保っているのなら
こんな
浅はかな内容の手紙が何故書ける？

晴景は影トラの偉業に「嫉妬」している
父，為景以来の戦功者である彼女に
これは「事実」だ

前年の祝賀の時といい何故そこまで嫉妬心を燃やされるか
冷静に直江は考えたが実際に何が原因なのかは今ひとつわからなかった
どちらにしろ
今
この目の前にある手紙を実行されたら

越後は。。。。「戦乱」の世にさらに深く戻って行く事を止められない
それだけが確かな事だった

そして
それは絶対にあってはならない事だった

直江は。。。。
為景を思い出していた
あの頃まだ若造だった自分の前を
先頭を切って「戦場」に進んでいった「お屋方様」
憧れだった
強くそれはただの強さではなかった思慮深く忍耐強くこの「越後」
を思いその生涯を費やした姿

戦にでれば分け隔て無く一緒に飯を食った
豪快で大酒飲み
ほろ酔い加減に入った為景はいつも大きな声で言った

「大きく世の中を見ろ!!目先の事だけで物事を判断するな!!」

その最後の日。。。。
床に伏しながらも幾多の傷を持った大男は拳を振るわせながら
並ぶ家臣たちに言った

「みな「越後」を。。。。頼むぞ」

瞼に焼き付く思い出
直江は目を開け
「柳（酒）を何壺か分けてもらおう」
襖の奥の間者ではなく軒先に控える近習に声をかけた

「影トラ様は酒がお好きだせっかく京から仕入れた酒を守護代様の
手紙に添えて少し分けて頂いても悪くなかろう」

と穏やかに言った
苦悩を表情に表し続けていた直江の明るい声に控えた近習たちは「
はい」と軽やかな返事を返し
申しつけに従った
が

その声とはうらはらに直江は「覚悟」の親書を「影トラ」にしたため始めた

裏に控える間者に
「これを一緒に忍ばせよ」
と

「戦わねばなりません。。。。影トラ様「戦」に強き男の残した足跡を継ぐのは貴女以外おられません。。。。」

その２３　猿楽　（１）（前書き）

越後にもどってきてからの人の流れが速い！！！
との
お叱りがありました

で
毎度の事ですが後書きな「人物評」ｕｐしました
よろしかったら読んでみてください

その２３　猿楽　（１）

政景（まさかげ）は綾の入城に合わせ「宴」を計画していた
今日この宴が終わったら
帰り支度をし「打倒」晴景（はるかげ）の作戦を練り直すつもりなのだが

その前の一区切りの大芝居をうつための「宴」だった
家臣団を前に「敗北」ではなく
大きな力となって「戻ってくる」事を印象づけるため余裕のある所
を見せておかねばならない
と考えたからだ

数十年ぶりに春日山に帰参した綾のためにと称し
珍しい猿楽（さるがく）を呼んだ

あとは
晴景が「宴」に合意を示すかが問題だったが
以外とすんなりと許可はおりた

そのかわり。。。。
晴景ーは大きな客を呼んだ

まさかの守護「上杉定実（うえすぎさだざね）」公だった

宴の席でどちらが「格上」かを知らしめようとしている？
いやな圧力を感じた
己の考えている事の上をいく予感
知恵者である晴景の「策」には適わないと認めたばかりだが

その口から

「珍しき猿楽ならば是非にお呼びしたい」

という要望に

警戒しながらも応えるしかなかった
思い出すのも苦々しい薄ら笑いを見た時には危うく感情を顔に表してしまいそうになったが
そこは抑えた
震える拳や額に走る青筋を「抑える」事
それが知恵者に対抗する最初の一歩である事学んだからだ
気の短さをぐっと堪えた

「悪い状況を活かす」

それは「戦」と同じ

悪くとらなければイイ
常に健康を害している病気持ちの出し殻ような晴景に比べれば誰の目から見ても
政景の大きな体は「安定」を示すものにもなる

上杉様がいらっしゃるなら「次代守護代」を頂くにふさわしいのは誰であるかを示す良い機会だと思えばいい

これを活かすのが自分の手腕を示すよい機会。。。

という覚悟の大舞台が始まろうとしていた
その席に奥座敷から虎御前(とらごぜん)はやってきた
「お久しゅうございます。。。母上様」
しずしずと歩を進める中にも未だ「恐れ」を感じさせる「威厳」の母は
すました表情で綾を見て言った
「変わりないようだな」
「はい。。。母上様もお変わりないようで。。。」
ひさしぶりに見た母の顔に
綾は心底安心した様子だった
それは思い出の中にある母の姿のままだったからだ
まったく変わってない
仕草といい物の言い方といい
あの鋭い威圧的な目さえ変わっていなかった事に母が健在である事を知り
むしろ
うれしさがこみ上げた
「衰え」などてしいたら悲しくなったかもしれない
そう心配していたがそんな予想を覆すほど元気な母に安堵した
振り返って夫にも微笑みをこぼし
挨拶を促した

妻の笑みにつられた政景も深く頭をさげ挨拶をのべた

「お初にお目にかかります。。。長尾政景（ながおまさかげ）にございます」

大きな体を伏せながら
複雑な思いがまた巡った

実のところ政景はいままで虎御前と「会ったことがなかった」
今回の春日山に来た事にしてもそうなのだが
よほどの事でもなければ
すでに「夫」を亡くし剃髪した「母」という存在には会うことがないというか
そもそもそんな「未亡人」が相変わらず亡き夫の居城に居続ける事
自体聞いたこともない話で

虎御前が未だにココに居座っている事に少なからず驚きがあった
強張った表情を見せる政景に虎御前はつまらなそうに答えた

「よくきたな。。」

耳に入る声は「氷」の印象。。。
どことなく棘のある言葉と冷めた視線
それだけ言うと
まともに顔を合わすことなく晴景の後ろに座った

その後ろ御簾（みす）の中に座す守護代理の「実（みのり）」に一礼して

「いつもああなのか？」

あまりにそっけない挨拶に政景は綾の手をに自分の手を重ねながら
顔を寄せて聞いた
娘に対してまで突き飛ばしたような「言葉使い」に
少し気分を害していたが
綾は何事でもなかったかのように答えた

「お変わりなく。。いつもそうです」

返事する妻の目が嬉しそうなのが不思議に思えてしまう
政景はもう一度，目だけで虎御前を見た

見ため。。。。

それほど「美しい」という感じではない
もちろん「醜女（しこめ）」というわけでもなく
凛とした姿は貴婦人らしく美しいのだが。。。。「美女」というふうには思えなかった
痩せた肩に細い身体
それでこぢんまりとしていれば。。「ああっ婆よなぁ」とでも思えるのだが
背筋はぴしゃりと正され
身の丈は侍女たちより少し高い

総じて「優しさ」を感じられないし。。。。母親という「柔らかさ」が見られない
むしろ
「鋭利」な角のある姿

刃物のような。。。印象

顔の比率から見ても。。大きな。。。。「ぎょろり」という音が聞こえるような目
に
きりりと結んだ唇
何か
大蛇(おろち)を想像してしまいそうな冷たい目

視線を綾に戻し
愛らしい妻の顔をじっくりと見つめて言った

「オマエは御前様に似てないな」

ホッとした物言い
心底そうおもったのだ
綾が御前にそっくりだったらこれほどまで「愛さなかった」だろうと本気で思った

と
同時にいまさらながらだが為景殿(ためかげ)が何が良くてあんな女を「後妻」に娶ったのかと余分な事考えてしまった

「影トラは母上によく似ていましてよ」

始まった猿楽の演舞を眺めながら呆けた顔でくだらない事を考えていた政景の袖を綾が小さく引きながら言った

「御前様に。。。。そっくりなのか？」
「はい。。目元など特に。。。来年は十九歳になりますでしょう。。きっと若かりし頃の母上にそっくりですわ」

政景はなんとなく影トラが哀れになった
綾に似ているのならば。。。。
いや
姉妹なのだから綾の愛らしさを少しでも持ってさえいれば今時分「戦」などという仕事に狩り出されたりせず「嫁」に行けた事だろうと

そして一人納得した
何故「影トラ」が守護代家の旗を持って栃尾に「戦」に出向いていたかを

要は

嫁のもらい手がつかなかったのだろう。。。と
そうでなくても「影トラ」はずいぶん身の丈の高い「女」で晴景よりも大きいとも聞いている
その上
あんな怖い顔の母親に似ていれば。。。。
諸将も「綾」なら欲しかったが「影トラ」には指さえ動かなかったのだろう。。と

「そうか。。。似ているのか。。。」

夫の感慨深げな返答に綾は不思議そうに思ったのか

「あら。。影トラまで「嫁」に欲しくなりましたの？」

と
少しふくれた顔で聞いた

政景は思わず大笑いをしてまった
演舞は盛り上がりを見せていたとはいえ場違いなほどに大きな笑い
声に綾がびっくりしてしまって
必死に袖を引いた

並ぶ諸将も豪快な笑い声に唖然とした顔を並べている事に政景は手
ですまぬと合図して口元を抑えた

「どうなさったんですか。。。私変な事いいました?」

綾は顔を摺り合わせんばかりに近づけ
その上で小さな声で聞いた

「いや。。。いやいや。。。綾。。「嫁」はオマエだけ!!オマエ
だけで十分じゃ!!」

と肩を軽く叩いた
内心はもっと大笑いしたかったがこれも「忍耐」と忍んだ
もし
綾が御前にそっくりだったら
その時に晴景と「戦」をしていたなとまで思ってしまったからだ

そんな含み笑いの顔の政景を晴景がチラリと見た
その怪訝な表情に
政景はもう一つの事を思い浮かべた

「虎御前は晴景を嫌っている」

あれは
ひょっとしてお互い様の事か。。。と
晴景も御前がキライなのだ「確信」した
噂はかねがね聞いていたがどちらもが「犬猿の仲」だった事に明確に気がついた

だからだ

一人得心して膝を叩いた
だから「影トラ」の事もキライなのだ

武功もあるだろう
人心もあるだろう

だが
最大の理由は虎御前にそっくりな「影トラ」は気に入らないと言う事だろう

母親は自分を嫌い
娘は懐こうとするが。。。。
いやになるほど「戦運」が強いときている

確かに「イヤな」人のつながりの図だと得心した

「どうしましたの？」

一人にやける夫の顔を綾が覗き込んだ
政景は笑って答えた

「いや。。綾は美しい。。ホントに良き妻だとな！」

綾は少しばかり面食らったが
手を引く夫に寄り添った

この日の「嵐」が訪れるほんの少し前の出来事
晴景にとっても政景にとっても最後の「宴」は山場にかかろうとしていた

その２３　猿楽　（１）（後書き）

越後「人物評」

後書きからコンニチワ～～ヒボシです

急展開する越後編
急にいろんな人がでてきて話しの流れがつかめない。。。。
という
まっこと申し訳ないと思うお叱りを頂きました

本来なら小説内でそれぞれの人物をわかっていただけるように書く
ことが私の勤めですが
まだ
書ききれていないという事の指摘とも言えます
すいません（陳謝）

で
まあ
付録みたいなものとしてココに越後編の人物評を書いておきます
話しの流れをわかりやすくするための付録と思って読んで頂けたら
幸いです

長尾影トラ。。言わずと知れた主人公
現在栃尾に引きこもり中の「女城主様」

誰からともなく「守護代の地位を狙っている」と噂され落胆。。。
騒ぎが大きくなって「戦」になる事をキライ引きこもってます

長尾晴景（ながおはるかげ）
現守護代様。。。
最近ちょっと元気になって知謀を使った戦を展開中
影トラの失脚とついでに生意気だった宗家の政景をコテンパンにしてやろうと
どす黒く計画中

長尾政景（ながおまさかげ）
現在２１歳の血気盛んな男
トラの姉綾と結婚している
次期守護代の地位をかなり大胆に狙っているが。。。知力で晴景に惨敗中
めっちゃ綾ね～を愛している

虎御前（とらごぜん）
トラと綾のおかーさま
風貌は今章で政景が思い浮かべているとおりの細い人
目つきが怖い
トラは御前にそっくりだけどそこまでとがってない
政景はアル意味失礼過ぎ
晴景の事を心底嫌っているが。。。。その理由は。。。
武田編の御北様とはまったく正反対な母親像

宇佐見定満（うさみさだみつ）
枇杷島の城主
「長尾影トラは守護代の地位を狙って候」という怪聞を流した張本人
かつて為景に「戦」で負け

軍門に下ったときその「軍師」となるのが彼の野望だったが
戦鬼為景には必要とされなかった。。。という辛い過去あり
今度は自らの手で「守護代戦」を演出してやろうと怪聞をながしたが。。。。

栃尾衆
本庄実乃(ほんじょうじつの)や
やたろー達
現在引きこもり中の影トラに困っている

上杉定実(うえすぎさださね)
越後守護
本来ならこの人が越後で一番偉い人ですが今は名前だけの守護様
定実様本人は病弱で執務がとれないため
普段は妻の「実(みのり)」様が代わって執務についている
今回の「宴」に呼ばれたのもこの方
虎御前の事がかなり苦手のようだが。。。。

直江実綱(なおえさねつな)
栃尾と連携をとりながら実は「影トラ」の守護代擁立を計画しているが。。。
現在引きこもり中の影トラに困惑中
しかし
迷っている時間はなくなっている事に焦ってもいる

今回はかなりの人がぶつかり合う事になります
がんばって書いていこうと思っております!!
よろしくおねがいします!!

ではまた後書きでお会いしましょ～～～

その23　猿楽　（2）

先の政景（まさかげ）の突拍子もない馬鹿笑いから後
和やかにそれでも「派手」演目は続いていた

猿楽。。。
滑稽芸（こっけいげい）を中心としたいかにも豪快な性格で「策」のために呼び寄せたとはいえ
政景のうっぷんを晴らすために呼ばれたと考えたほうが良いほど
「幽玄」のない古典的な賑やかな一座だった

その選択はアル意味功を奏していた
諸将も春日山での晴景（はるかげ）と政景の
陰鬱な謀の渦の中いままでずっといた

重圧

静かにぶつかり合う二人のせいで
どれほどの気苦労をため込んできた事だろう
みな
賑やかで大げさなほどの滑稽芸に和らいだ笑い声を上げ
酒と珍味に警戒の心を許している様子だった

晴景の側，近くに座していた直江もしばらくぶりの酒の席，猿楽にほんの少し気を緩めた
このまま
和やかに何事もなく。。。良い一日を終わりたい。。。と

いつもは眉間に深く皺を作っている自分の額を撫でた

遊び心のたくさん入った芸は
波の拍子で途切れる事なく盛り上がりを見せる
猿真似をし
走り回る
ヒラリヒラリと軽業を見せる

夫に寄り添う綾も楽しそうに声を出して笑っている
その妻の肩を抱きご満悦の政景

直江の前
晴景までもがかつて唄を嗜み楽しんでいた時のように顔をほころばせている

ただ一人虎御前だけ
変わらぬ顔でそれを見つめていた事に誰も気がつかなかった

一座演舞は終わり
晴景は政景にいつになく上機嫌に言った

「今日はまことすばらしい「猿楽」に感心いたした。。。上杉様も喜んでおられますぞ」

十分に酒の回った政景は元は隠し事，謀の無い男
晴景のお褒めに素直に喜びを表した

「守護様。。守護代様共々に喜んで頂ければまことに嬉しい事にございます！」

御簾のむこう微かに見える実（みのり）も影の姿ではあったが何度か頷き喜びを表して見せた

春日山の家臣たちも口々に「楽しかった」事を告げ

「宴」は今までこの城ではなかったぐらいの温かな雰囲気に染まっていた

が

虎御前は相変わらず静かにしている姿を政景は気に掛けた

晴景との仲が悪い事はわかった

だからとはいえ楽しい「宴」の席で声も掛けてさしあげないなど寂しい事だと思ったからだ

もともと

家臣団に対しても明るく接する事が好きな彼は

すましたままの虎御前にも気遣いを示し話しかけた

「いかがでありましたか？御前様？」

綾も笑顔で母を見た

虎御前はゆっくりとした口調で政景の方は向かずに答えた

「まこと滑稽芸。。。。可笑しゅうございましたなぁ。。。。」

「可笑しゅうございましたか！！それはそれは」

政景は上機嫌だった
これを皮切りに御前に取り入る事は容易に思えたほどに
「喜んで頂けて良かったです！」
と大きな声で御前の機嫌を伺おうとしたが

虎御前は片手を「うっとおしい」というような仕草で上げプイと振って。。。
珍しく
自分から口を開いた

「まこと可笑しいと申した。。。」

虚を突かれた感じの政景は顔色をうかがわず
そのまま聞き返した

「可笑しい。。。ですか？」

「おもしろいというのは「人」が猿のマネをする事。。可笑しいというのは。。。「猿」のぶんざいで人のふりをする者の事。。。」
いつになく虎御前は饒舌だった
その事が「危険」な事と感じられたのは直江しかいなかった
あの仕草
あの目にかつて「戦」に出ていた頃の御前の姿がかさなって見えたのだ

顎をあげ
座の去った広間を見ながら誰の方にも向かず悦に入った表情を見せ

ふらりと首を振る

すでに晴景の表情には緊張が走っている
見越したように
虎御前は続けた

「猿のぶんざいで無い知恵絞って人の挑む者。。猿が故に力頼みで人に挑む者これを「可笑しい」と言わぬでどう言うのだ?」

ゆらりと揺れる篝火に照らし出される大蛇の目はゆっくりと晴景の顔を見た
口元には笑みを浮かべた
狂気をはらんだ微笑に御簾の中の実は背筋が凍った

晴景の目に怒りが立ち上っている
すでに「宴」の喧噪は消え失せた
猿楽の続きが。。。。冷たく張りつめた人と人の「幽玄」の世界に入ってゆく

その静寂を逆撫でするように続けた

「ですが。。猿がいくら群れ集まり威張り散らしても「人」には適うまい。。世も安泰というものですなぁ」

完全に「宴」は停止し家臣団はみな凍りついた

直江は信じられないという顔を面にし冷たい汗をじっとりとかいている

逆に虎御前は。。。。笑っていた

目を晴景を通り越し御簾の奥に微笑み嘲るように政景を見て

「猿山の大将は山を追われればただの下郎。。故に必死の騙し合いも仕込まねば。。。それはそれは。。。可笑しい事でございますなぁ」

そういうと手元にあった扇で口元を隠した
冷ややかな笑い声。。。。

それを合図にしたかのように虎御前の元に控える侍女の二人が顔を見合わせ笑う
家臣団の近くに控えていた侍女も口元を抑えた

「それほどに滑稽な演舞であったか？虎御前」

凍りつき
誰もが言葉を失い
肩を奮わせる政景と
目を怒らせた晴景の激情を抑えるように御簾の中から実（みのり）の声が間を割って入った

右に極端に首を傾げたまま虎御前は返事した

「滑稽。。滑稽。。。まことに「可笑しく」「哀れなり」を感じられる素晴らしき猿楽にございました」

と

改まった態度で実と晴景に頭を伏して挨拶をしてみせた

怒りの晴景はゆっくりと立ち上がった
そして諸将をじっくりと見渡すと言った

「今日はみながあつまってくれたまこと良き日になった。。。。虎御前の申すとおり「猿」は人に逆らってはなりませんな。。そんな滑稽な事があってはなりませんなぁ。。」

言葉は懸命に平常心を保とうとしているが
顔は真っ赤だ
だがさすがに取り乱すように口調を早めたりはしなかった
むしろ怒りを十分に蓄積した重々しい声で話しを続けた

「哀れなことが起こっている。。非情に嘆かわしい事だ。。。我が妹「影トラ」が「猿」たちの謀反に祭り上げられようとしている事。。。少なからず諸将のみなも聞き及んでおる事が。。このような形で現れてしまった」

と
水丸が持っていた手紙をみなの前に広げた

「長尾影トラは守護代の地位を狙って候」

「実に嘆かわしい。。。この不貞の輩をわしは守護代として討伐せねばならない!!」
直江は慌てて前に進み注進した

「お待ち下さい！！まだそれがどこから出た物なのかもさだかではないの。。。」
その言葉を晴景が手を挙げて遮った
「いまや誰もの耳に入っているこれは。。。。これは「謀反（むほん）」だ」
晴景の目は本気だった
いや
正気を失っていた

足下に伏してなおも直江は諫めようとしたが無駄だった

「幸いにして私の「ために」政景殿が諸将に手紙をおくり「団結」する事を促してくれていた！！。。。討伐の任。。。政景殿。。。やってくだされますな？」

怒りの晴景が正気の沙汰でない事以上に
政景は混乱と「激情」で自分を見失い始めていた
「力頼みの猿」と罵られた。。。。
その上で手紙を逆手にとられ「討伐」の兵を挙げろと叩かれている

その見えるほどに震える肩に向かって晴景は頼んだ

「猿にかしずかれ己を見失った「哀れな」影トラを救うためにも「越後」のためにも。。。お頼みしたい」

政景は拳を板間に両手とも振り上げそして叩きつけた
響く音

揺れる床
綾は怯えて侍女に抱きついた
深く酒気を帯びた息を吐き出し答えた
「おまかせあれ。。。。」
ざわめく諸将と家臣団
荒れた足取りで退出する晴景を直江は追った
同じく顔を真っ赤にそめ額に青筋を入らせた政景も無言で退出した
その後を綾は急ぎ追おうとしたが留まり
未だ頭を下げて伏したままの母に近寄った
「母上様なんて事を。。。。」
虎御前は柳のように揺れる身体を起こし平然と綾に言った
「己を「人」と信じていれば何故に腹を立てる必要がある?」
二人の退場に家臣一同大騒ぎの状態だ
宴がそのまま「陣ぶれ」になってしまうなど誰にも予想できなかった非常事態は起こってしまった

その２４　月華　（１）

「何故あんな事を言ったのですか？」

荒れ狂った足取りで部屋に帰った夫の後を追わず
母の後ろに付いて歩きながらも「真意」を計りかねた綾は何度も同じ質問を繰り返していた

「猿」

虎御前はそう言って
晴景（はるかげ）と政景（まさかげ）を愚弄した
猿楽の「中」の話しだ。。。
と
否定する事はできないほどはっきりと「悪意」が感じ取られるほどの態度だった

とにかく間を取り持たぬば。。
綾はそれだけを考え母の部屋に一緒に入った

「母上お答え下さいな」

部屋に入り
着物を正しながら座った虎御前のとなりに顔をつきあわす形で綾は座った
御前は深刻な顔で自分を覗き込む綾を無視した

付き添いの侍女「萩」が

灯籠を持って入り
薄暗かった部屋をほんの少しだけ明るくした

照らし出される母の顔は少しも悪びれる事のない顔
いや
いつもどおり
無口で座った目

「母上。。。」

「くどい」

眉をしかめた綾に冷たい声が返った
御前の声には「怒り」と「苛立ち」が混ざっている
普通の侍女なら
いや「男」であってもそんな声を聞いたら怯んでしまうだろう
しかし綾は実の娘。。。
そこは退かず

気持ちをさらに引き締めて聞いた

「黙りません。。何故にあのような事されるのですか?このままでは「影トラ」の立場を悪くしてしまうだけではありませんか?」

あんな「愚弄」
あの発言で「人」として扱われているのは「影トラ」だけだった
教養が有ろうが無かろうが
今の「越後」の状態を理解している者がきけば誰の耳にもあきらかな「罵倒」だ

綾には影トラが可哀想にしか思えなかった
何故「女」の身で「戦」仕事に徒事せねばならなかったのか
何故「母」がそれを望んだか
常々思っていた事

その「母」の提案の果てに
今や「守護代」に「敵」とまで思われてしまっている事が可哀想で
ならなかった

「母上。。。」

「お屋方（為景）の後を継ぐ正統なる「守護代」があんな猿どもで
はない事を改めて教えたまで」

綾に向き直った母の顔は苛立ちで満ちていた
目に揺れる「炎」
ただの「戯れ言」で言った訳ではない

「父上の後は晴景様が立派に継いでおられるではありませんか」

綾にも少しはわかっていた
父，為景（ためかげ）が亡くなってすぐに自分は「上田長尾」に「人質」として
嫁がされた
その事を母が「力無き守護代」と晴景を罵っていた事を
その後もフラフラしたあやうい駆け引きの上にこの「越後」が成り
立っている事も

でも

だから「ダメ」な事でしたなどと言えるわけもない
「政（まつりごと）」は男達の仕事なのだから

綾の脳裏の考えを見透かしたかのように虎御前は
首を右に傾げ
「笑った」

牙を剥くような冷めた口元は「嘲り」を止めようとはしなかった

「晴景が立派？バカげた事を。。。。寝ぼけているのか？綾」

そう言うと爪を噛む仕草をした

指を何度か口元に持ってはやめる「興奮」しているのがわかった
こんな母を見るのは本当に久しぶりだった
「興奮」は
そのまま激情に直結している

母の姿は会話のたびに「恐ろしさ」を増していたが
それでも綾は続けた

「晴景様のお力だけでは難しかった事も多かったのでございましょう。。故に我が夫が「お手伝い」に参りました。。力を合わせて「越後」をより良い国とするために」

真顔の説得をする綾の顔を虎御前は静かに。。目を見開いて聞いた
哀願の表情にも近い娘の言葉が終わると
急に

手を伸ばし肩を掴み
己の顔をグイと近づけてしげしげと綾の顔を見まわした

「綾」
「はい」
「綾」
「はい」

掴んだ肩を突き放した
揺れる
虎御前はいつもの独特の仕草でゆらりゆらりと身体を揺らした

「母上。。。」

心配そうにする綾を見もしなかった
御前は笑っている
口を開け
天井を見ながら

揺れながら

「ハハハハ。。。。。ハハハハ。。。。。」

「母上。。。」

虎御前は手を挙げ綾の言葉を遮った。。と同時に立ち上がり
よりいっそう声を出して笑い
庭向きの戸の方に歩きながら言った

「晴景がどんなに知恵を絞り「守護代」に居座ろうとしても。。政景がその隙を狙って力で「守護代」になろうとしても。。。まったく無駄な事だ！！」

力強く
音高く
戸を開けた
山からの冷たい風が灯籠の火を一瞬にして全て消した

窓から向こうには深淵の月が高く姿を現している
御前は手を開き「月」の力を招き入れた
月の光に浮かび上がる目には確かな「狂気」が宿っていた

「為景様の後を継ぐのは「トラ」以外おらぬ」

綾は愕然とした
なんとおそろいしい事を言うのかと耳を疑った
そして
素早く返事をした

「影トラは「女」です「守護代」になどなれません」

反抗の声を上げた娘に
虎御前は振り返った
見覚えのある影

綾は自分が震えている事に気がついた
憶えている影

それは
かつて「戦」をしていた頃の母の姿
血塗られた「刀」を横に
神仏に一心の祈りを捧げてきた母の姿

自分が
世にもおそろいしい存在と対峙している事に気がついた

顎を上げ見下した態度で御前は吠えた

「女?。。。。。。馬鹿が。。。。あれは。。。あれこそが「御仏」に選ばれた者「ただの男」が敵う相手ではないわ!!」

響く罵声に
綾の目は涙ぐんでいた
止まってしまいそうな呼吸を制して
震える声で。。。。聞いた

「影トラは。。。いったい「何者」なのですか?」

産まれる前から言われていた「御仏に選ばれた子」
出生の時から父に恐れられた「魔物の子」
そして思い出す「雨の日」のあの出来事

「我を恐れよ」。。。。。。

幼き日の影トラの不敵な言葉。。。。
「何者?」今はそれだけ聞くのが精一杯

肩を落とし怯える娘の前で
虎御前は静かに数珠を通した手を重ねて答えた

「あの子は御仏を「守る」者なり」

祈る顔は「冷静」だった

二人の権力者が退出し虎御前が満面の笑みと冷ややかな笑い声を残して消えていった

後の場に残ったのは「混乱」だった
直江は晴景の後を追ってその場からすぐに消えた
政景も真っ赤になった顔のまま粗々しい足音を立てて消えていった
後ろを上田から来ていた重臣たちが追い

ざわめきの中
残された実(みのり)は御簾の中で呆然としてた

こんな事を
こんな時に。。。。

「何故。。。。」

口からこぼれるのは「疑問」の言葉
あの時
振り返った御前の目は確かに実を見ていた
少しの笑みを浮かべ
晴景を見てはいなかった。。。。。

「実様。。守護代殿は勝手に退出してしまいました。。。我らも帰りましょう」

考えで頭をいっぱいにしていた実に
お付きの女房が不機嫌そうに話した
当然といえば当然。。。。守護に挨拶もせず自分の機嫌にまかせて出て行ってしまうなど。。

家臣達でさえその事を忘れてしまっているかのように「大騒ぎ」だ
女房の不機嫌さで
己の平静さを取り戻した実は

「いいえ。。。帰りません」

落ち着いた態度で言った
そのまま
女房を近くに寄せ命じた

「虎御前を呼び出しなさい」

このまま帰るわけにはいかない。。。。このまま「乱」を起こして
はいけない
それは治世を思う者の勤め
名ばかりとはいえ「守護」の勤め
屋敷の部屋に足を進めながら天を仰いだ

月は高く煌々と輝いていた

何故か深く心を痛めさせた
見覚えのある月の夜
長い夜は続く。。。。長い苦痛の夜が続く

その２４　月華　（２）

中秋を越えた寒い空の真ん中に輝く月。。。。
あの日も。。。きっと月は「見ていた」。。。。。
あの日も
あの時も

夜という世界を絶え間なく「月」は見ていた。。。。
暗闇の夜
満天の星空を見れば思い出されるのは。。。忘れてしまいたい「過去」ばかり
いつから
こんな「苦痛」が続くようになってしまったのだろう

後悔をしながらも
取り返せない日々を悔いるためにも「勤め」を果たしてきた
奥の客間に室を作らせた「実（みのり）」は山に吹き上げる冷えた風の下
悲しい顔をしていた

「虎御前様。。いらっしゃいました」

女房の声に窓を閉めた
呼びだてしたのだから本来なら「礼」にのっとり暖をとって置かねばならなかったが。。。

実の気持ちはそんなふうには動かなかった

冷えた部屋
それが心模様そのまま
きっと虎御前の心も冷たい情景を写している。。

女房に通された御前はいつもとかわらぬ表情
御簾で仕切られた中で対面に二人は座った

「他の者は下がりなさい」

実のすぐ横に控えていた女房は驚いた
虎御前の「行状」を前から知っていた彼女は首を振った
二人だけにしたら
行動力で勝る虎御前は「何を」しでかすかわからない
目でさがらない事を告げた彼女に実は言った

「大事な話です。。。下がっていなさい」

長く夫「上杉定実（うえすぎさだざね）」の代理をしてきた彼女の声にもすごみがあった
女房はあきらめたようにひれ伏すと静かに下がっていった

侍女も連れず
一人で回廊を渡ってきた虎御前の目は夜をよく見ている
御簾越しに顔をじっと見る実
二人の間には沈黙が続く

「何故あんな事を言うたのですか？」

沈黙は答えにならない
勤めを果たすために実が最初に声をかけた

「あんな事？」

意外にも虎御前はすぐに答えた
押し黙って何も答えないのかと実は思っていたのだ

「守護代様の事です。。。これから晴景殿と政景殿が力を合わせ「越後」のために働こうという親睦の場でしたでしょうに。。」

晴景は実にそういう場所だから来て欲しいと言っていた
それが
「謀」の一部である事は薄々気がついていたが
実には請われるままに動くことしかできない事だった
それでも「場所」を考えればあんな酷い「罵倒」は許された事ではなかった

だからまっとうな意見を通そうとしたのだ

が
御前はまったく感心がないように言った

「そんな事ですか」
「そんな事？」

ずいぶんな回答だった。。
が
気を荒立てても話しはまだ何も進んでいないし
もとより御前が「ぶっきらぼう」にしゃべる女だという事を思い気
持ちを抑えて続けた

「そんな事ではありません。。貴方の発言で各々の殿様方も大変気
分を害したでありましょうや」

諭すように静かに言う
今度は御前は答えなかった

答えなかったが
目は
しっかりと実を見ている
まるで「大儀」を持って「国」のためを思って語りかける姿をあざ
笑うような沈黙の笑み
それでも実は御簾越しとはいえ
目をそむけず言葉をかけ続けた

虎御前の前で「黙って」しまったら負けてしまう気がした

「貴方発言で「影トラ」までもが立場を危うくしています。。貴方
はみなに酷い事をしたのですよ」

目を見開いた御前の表情は実の言葉尻に噛みついたかのように険し
くなった
が
すぐにいつもの独特の仕草をした
ゆらゆらと身体をゆらして袖で口を押さえると「笑った」

「あなたが私にした事に比べればたいした事ではございませんでしょう」

顔は笑っている
声には「怒」が混じっている

ゆれる御前はそれでも視線を実から離さなかった
実は返された言葉に震えた

「私が。。。何を。。。」
その「怯え」を見逃さなかった

「貴方は私から全てを奪ったじゃありませんか」

平然とした
微動だにしない顔は「恐ろしい」事を平気で口にした
実は声が出なかった
出そうにも
忘れたい過去が一瞬にして湧き上がるように蘇り
適切な言葉を返すことが出来なくなってしまった

そんな「狼狽」の影は見えたのかもしれない
ゆっくりと

御前は静かに立ち上がると御簾の真ん前まで進んで来た
実は「逃げ出したかった」。。。
でも
身体はすくみ上がり言うことをきかなかった

いや
最後まで「気力」で負けてはいけないと自分を叱咤しているように
も思えたが
思わぬ「返事」に
心は乱れ
細い肩は痺れるように揺れた
外から響く風の音にさえ怯みそうな気持ちになる

あの日は。。。。

「あの日も貴方はそうやって御簾の中に座っていらっしゃいました。
。。」

正面に来た御前はその場に座って言った
御簾の目からお互いの姿は十分に確認できた
ギョロリとした目が実の姿を「獲物」を狩るように見捉えている

暗い部屋の中で自分を刺し通す視線に
射殺(いころ)された心地の実に御前は
目の周りを痙攣させながら。。。。ピクリピクリと動かしながら
隙間に息を吹き込むように言った

「貴方を守る者はいない」

実は姿勢を保つ事が出来なかった
恐怖と。。。。「罪」

あの夜。。。。あの時。。。。

息をのみ
近づく「過去」に怯えつつも答えた

「御前。。貴方は。。。まだあの時の事を。。。。」

小さな返事だった
しかし聞き逃しはしていない首を真右に向け耳を傾ける仕草
そのまま大げさに顔ごと傾げて見せる。。。
それも大げさすぎるほどのな角度から
じっくりと
実の顔を睨みながら

「忘れたことなどございませんわ」

ドスのきいた声は返す刀のようにはっきりと答えた

ついに実は目を反らした
睨むその目はあの日のあの時の目と一緒
正視する事は出来なかった

あの日の御前の目には。。。。「血の涙」が溢れていた篝火に照ら

された大きな瞳を縁取るように流れた涙に火はテラテラと赤い輝き
を映していた
今
涙のない枯れた刺すような目が自分に牙を向けている

「私は。。。。忘れてしまいたかった。。。。」

床を見つめた実の目には涙があった
悔恨の思いが身体から力を奪い
長い櫛が床に流れた
うちひしがれる思いが口からこぼれた
たった一度の過ち。。。。
消せない「罪」

「自分勝手なおっしゃりようですわ」

怒りは息を近づけ容赦なく責め立てる
顔を御簾に押し付けて光る目は「嫉妬」に燃えて

そこまで言うと御前はのけぞるように立ち上がり実の後ろの窓に向
かって歩き出した

御簾に囲まれた彼女を遠巻きにしながら
まるで「囲われ者」を蔑む（さげすむ）ように鼻で笑った

「まだ。。。。泣くことができるなんて。。。あつかましい」

棘の言葉は「無礼」を通り越している

しかし実はそれを叱責はしなかった。。。いや出来ないと諦めていた
ココにいるのは

「女」と「女」

何かを背負ってしまった頃ではない二人

いや

それは嘘だった
あの頃すでに実は「権力」に捧げられた名も無き花だった
その
失墜の一途をたどる力無き権力者に

荒ぶる魂の「男」は遠慮はしなかった
その生き方に。。。。。。

惹かれた事は嘘ではなかった

「ただの女でなど。。。いたくなかった」
ただ枯れていく生き方など。。。
生きている事を「知りたかった」
生きている「証」を持ちたかった。。。。

落ち沈む実の姿をよそに
虎御前は窓を開け放った

「あの日も月の高い夜にございましたな。。。。。」

その２４　月華　（２）（後書き）

ユニ～～クアクセス（藁）

後書きからコンニチワ～～ヒボシです

最近アクセス数を見る方法が変わったようですが（爆）
ちょこちょこ見てみるのですが
日別のユニークアクセスっていうの全然見られません
機械音痴なヒボシは自分ではどうしていいのかワカラナイので。。。
。。ただ困ってます
前のはみやすかったなぁ～～ショボーン

質問板に一度書き込みをしてみたのですが。。。
とっても丁寧な説明をもらっのですが。。。なんとも
申し訳ない事にさっぱりわかりません
とにかく「日別ユニークアクセス」だけがみられないのです。。。

たまに
ウメさまに上申をさし上げる（藁）のですが
なにせ忙しい方でしょうご返事を頂くのは難しいのやもしれません

しかしそんな事はともかく
ちょっと盛り上がってきました今日この頃（藁）

虎御前は皆様ご存じの「トラ」のおかーさま
そして上杉定実公代理事「実」様との因縁がいよいよあきらかになります
何故虎御前が晴景がキライなのか？

そして実様に怒りを持っているのか？
何故「トラ」を女なのに「守護代」しようとしているのか？
弾みをつけてがんばって書ききろうと思います

これからもよろしくお願いします！！！

それではまた後書きでお会いしましょ～～～

その２４　月華　（３）

しなやかな指先
もう片手には袒扇(あこめおうぎ)を素早く舞わす少女の姿に
都から屋敷に訪れた公卿の者たちは感嘆の声をあげた

「すばらしい。。。。」

ふわりと身体を回転させ艶やかな舞をおえた少女は
輝く艶やかな髪を整え
公卿が連れていた女性に扇を手渡して言った

「もっと。。もっと「舞」を教えてくださいませ」

世は乱れ「帝(みかど)」の住まう京の都を戦によって追われ「越後」に落ち
延びてきた公卿の娘は口元だけを緩ませて微笑んだ
いや
微笑まされた
扇の美しさに心を躍らせ
目を輝かせて自分に教えを請う少女が「愛しく」なって忘れていた
笑顔を取り戻した

「鈴姫(すずひめ)様は筋がよろしい。。。わらわがもっと教えてさしあげますわ」

明るく返事した顔はやっと落ち着く場所を見つけた事の安堵と
もう「女御(にょご)」として京に戻れなくなってしまった事で捨て去ろうと

していた「舞」への情熱がほのかに見えた
細い繊細な指先
手に返された扇をもう一度少女に手渡した

「これは。。「鈴姫」貴方に。。。。いつか共に京に参りましょう」

鈴姫。。。。それが私の名であった。。。。。
実(みのり)は開け放たれた戸から入り込む月の光の下かつて「娘」であった
頃の自分の思い出の中に。。。
ゆっくりと目を閉じて入っていった

あれはまだ
いや
今の方が戦は激しいが。。。。それが始まった頃の話し

戦火は否応なく日の本の全てを飲み込もうとしていた
「越後」も例外ではなかった
どの国も疲弊していたそしてその「混乱」に乗じ「下克上」という
反骨の流儀をかざす者たちが現れ始めていた
それは鈴姫の生家である「長尾家」にも現れ始めていた

「変わることなく「上杉様」に忠義を尽くしたいと思うております。
。。」

まだ年の頃二十五歳
髭を持たぬ青年に向かってたっぷりの「思案」のこもった返礼をし
たのは「長尾能景（ながおよしかげ）」。。。為景（ためかげ）の父である

男にしては色の白い京の公卿のようななよなよとした姿
言われるままの返答しかできなかった青年は
落ち着きない口調でそれでも立場を改めるように問いただして聞いた

「父とは対立しない。。。。約束してくださいますな」

きっと
ココにくる間に再三にわたって聞き返された言葉だったのだろう
能景は少しうんざりした表情を。。。。わざと作ってみせたが
そこは年の功
白髪のまじった頭の回転は若者が思うような「あざとさ」をまった
く見せずに
むしろ「孫」を思う
「曾爺」のように諭した

顔を近づけ逆に念を押すようにすごみの混ざった声が答えた

「あり得ない事です。。。長尾はずっと「上杉様」にお仕えいたし
ます」

そう言うと
詰問をさけるためか「宴」の支度をするよう家臣たちを促した

「今宵は特別な「宴」ゆっくりとお楽しみ頂きたい」

老齢の域に入ったとはいえ
老いて益々の白髪は陽気に続けた
何事の根回しも怠らなかった能景は常に人の目を引く巧みな「宴」
を催す事でも知られていた
それは国人衆を纏め上げる
一つの手腕でもあった

「今日のように月の高い美しい日に酒とくれば後は「舞」しかありませんな！！」

大きな声でぎこちなく酒を飲む青年の肩を叩いた
青年はあやうく猪口を落としそうになりながらも育ちの良さかうまく止めてみせた
ただ
顔には騒ぎがあまり好きない事が出てしまっていた

「今宵の舞姫は当家の娘。。。鈴にございます。。手前味噌ではありますが。。なんの！都の女御様に指南して頂いた「舞」はみなさまの心に「雅（みやび）」を感じて頂ける事でありましょう！！」

能景は大きく手をふり集まる客の目は用意された舞台に向けられた

鈴の音。。。夜に響く
鈴の音。。。波を起こす

雲一つ無い月下の下
静かな足取りで姫は入場した

月の光に輝く「天冠」

シャンと響いた鈴の音
空に伸ばされた細い腕からチラリと覗く白雪の肌
場の男たちは「神秘」の姿に背筋を震るわした

扇から顔を現した「美しさ」に
夢の中にあっという間に引き込まれたに違いない
誰もが呆然とした表情を晒していた

暗い舞台に浮かび上がる
赤い着物
対照的なほど。。。。白い顔
淡い桃色の唇はぷっくりと柔らかなふくらみを持ち
その口でたえまなく笑みを届ける
涼しげな目元
長い睫毛が伏せられた時に見える顔は「誘い（いざない）の巫女」だ

羨望の眼差しを一心に受ける鈴姫の心も躍っていた
誰よりも「舞」を愛している
あの日から。。。女御様は惜しみなく自分に「雅」を教えてくれた
いつかこの「舞」をもって帝のおわす御所で踊りたい。。女御様の
夢であった「五節舞（ごせちまい）」を一緒に舞いたい。。。。

どれほど「舞」を貶されても
長尾の家では「京」の舞など。。。。このあたりで「漂泊する者」
の「芸」と一緒。。馬鹿にされていた
馬鹿にされていたけど

踊るほどに身体に。。心に湧き上がる「美」と「生」を強く感じて
いた

「舞」のためだけに京に行きたかった
花の都に「花」として

そんな活き活きとした身体が男たちの目の前を優雅に回る
トコトコと太鼓の音が流れ
その音に合わせ力強く
いや
力強さを中身に身体をフワリと浮かせるかのように回り
笙の波状する音に。。。女らしい繊細さを長い手で波模様を重ねて
見せた

今まで見たことのない「舞」

流れ者の「白拍子」でさえそんなに早くクルクルと回ったりはしない
鈴姫の舞は激流の中を行く華麗な船
けして見苦しく慌てた足取りは見せず足音さえ聞こえないのに飛ぶ
ように身体をしならせ踊る
髪さえもクルリと揺らす

「天女。。。。」

美しい者の降臨に言葉をなくしている一同の中
さきほどまでは騒ぎを嫌って顔をしかめていた青年は手から猪口を
落としていた

口走った

「天女だ。。。。。」

うっとりとした目で我を忘れた表情
ほのかに頬を染めただ見つめる

誰もが見とれていた
あの為景さえ。。。。呆然とした表情になっていたのに「宴」の場
を後にする時に姫は気がつき笑った

「舞」がおわり部屋に戻ったとき。。。。
鈴姫は少しだけ声を出して笑った
あれほどに人に見られたのは初めてだった。。。でも
ホントに心が舞った

早く「越後」に平安な日が訪れ。。。。京の都に。。。。

「夢」は。。。「夢」。。。

冴えた目。。。まだ眠れそうにない
だから
独り言を

「この続きは夢でみなくちゃ。。。」

まだ十四の娘は小躍りする気持ちを抑え寝所の灯を落とした

しかし

「夢」は「夢」のつづきは。。。。。
来る朝と共に朝露のごとく消えていってしまった

「オマエを上杉定実殿(うえすぎさだざね)の側室として出す」

翌朝父が告げた「褒め言葉」は鈴姫の「夢」をいとも簡単に終わらせてしまった

上杉定実。。。。
「宴」の席で自分を「天女」と言った青年の元に鈴姫は無言で嫁いだ輿の中。。。。。
女御に貰った袒扇(あこめおうぎ)を開き。。。
京に戻って言った時の彼女の言葉を思い出した

「鈴姫。。。いつか京にいらっしゃった時。。。。一緒に舞いましょう」

たった一つの約束
「女」である生き方に示された灯火。。。。
輿の中
一人静かに涙した

その一行を上杉邸まで守って歩いた者が為景であった事をこの時は気がつかなかった

その２４　月華　（４）

愛する人と結ばれる。。。。
そんな事が叶えられる時はけっして訪れない
女はいつも「貢ぎ物」として男の元に嫁していった
そしてそれはいつだって「幸せ」とはほど遠い場所にあるものだった
定実の父。。。。房能。。。。
その人は鈴姫の目から見てもいかがわしい人物だった「婚儀」に反対していた事は輿入れしたその日に知った
四方を御簾で覆った部屋は
武家屋敷とはほど遠い作りで襖の無い大部屋にあつまる者の大半は「上杉」の親族衆だった

「長尾の女を上杉に娶るなどと。。。。」

祝言もまだ半ばのうちに酒に酔った房能（ふさよし）が愚痴りだした
公家かぶれの房能は自分の趣味を前面に出した祝言の場で毒づいた
その「毒」に上杉の親族衆はこれ見よがしな「悪態」をボソボソと話した

「田舎娘などどこで拾ってきたものか。。。」
「大方上杉に媚びを売った浮かれ女であろう。。。。」

御簾の中の鈴には信じられない事だった
これほど望まれていないのに
父の「命令」に従ってココに来た

自分の「夢」をいとも簡単に断ち切られて。。。ココに来た
なのに

こぼれそうな涙を抑えるのが精一杯の
まだ十四歳の娘に
目の前で酒の入った壺を回しながら嗄れた爛れた声を荒げて房能は
言った

「鈴姫は舞の名手と聞いている!!是非にこの場で舞ってくれ!!」

鼻を真っ赤にした「好色」そうな目は鈴の身体をなめ回すように近づき
御簾の中に入ってきた
公家かぶれで「武」からほど遠い房能は「女色」に十分に溺れていた

「ふぅん。。田舎侍の娘にしては色も白い。。おとなしいのぉ。。」

酒臭い息をわざと吹きかけると
鈴のか細い手を握り
怯える身体をひっぱりあげた

「はよう舞え!!」

鈴姫の小さな身体ははね上げられ御簾の外に放り出された
回りは見たことのない男達
誰も彼もがこの小さな「姫君」を嘲った表情で見ていた

近くに座っていた房能の親族衆は騒ぎたてた
「ほほぅこれはこれは小さき姫様じゃのぉ」
「こんな女で「子」が産めるのか？」
口々に「罵倒」に準ずる言葉を平然と投げかけた

震える身体で立っているのがやっとの鈴の前で房能は酒を持ちながらクルリと身体を回した

「はよう踊れ。。。」

その目は鈴姫を蔑んでいた
顎を汚らしい手で掴まれた

「飲まぬば踊れぬのか？」

猪口(ちょこ)を口の前に持ってきた
それを鈴が首をひねってかわすと
手を放したそのままその場で一度クルリと自分の身体を回して見せた
醜く肥え太った房能は足取りもドタバタと何回かまわって見せて
今度は鈴の肩を力一杯ひっつかまえた

激痛が入る
逃げだそうと身体を引いたが脂ぎった手は肩を放さなかった

「上杉の当主であるわしに「舞」を踊らせて。。ぬしは知らん顔かぁ？」

そういうと汚らしい歯をむき出しにして鈴の打掛をはぎ取ろうとした

「脱げ!!こんな贅沢な物を着ているから踊れぬのであろう!!」

着物をひっぱられついに鈴は倒れ込んでしまった
当主の「乱行」を誰も止めようとはしなかった
それどころかはやし立てた

「そうだ!!そうだ!!田舎娘がそんな豪奢な着物をきているから踊れぬのじゃ!!」
「脱げ!!脱げ!!真っ裸で踊れ!!」

襟を強く引っ張られ少しはだけた肩に「欲情」を露わにした房能が舌なめずりをして迫った
「いやぁ。。」
堪えられない涙をこぼした鈴

誰もが事の成り行きを「楽しんで」いたその場に酒壺が投げ飛ばされた
御簾の中の新郎が身を乗りだし始めたその時だった

「戯れも。。。そのあたりに」

祝言の間に集められていた一同は下座にすわる男に気がついた
列席の一番末に座っているというのに身体の大きさからか房能の目には近くに座っているようにも見えた
声は太く「怒り」を十分に纏った「武士(もののふ)」の姿にさっきまで叫声をあげていた上杉の者たちは静まりかえった
杯をあげ酒を一気に飲み干した男は
恐れる事なく続けた

「格調高き公家のしきたりがこんなにおもしろくもない「座興」とは。。。なんとしたものか？」

そう言うと
猪口を床に投げ捨てた

うずくまった鈴は涙声で助けを請うた

「兄様。。。為景兄様。。。。助けて。。。。」

晴れ着を汚されうずくまった鈴の上に着物がかぶさった
夫となる人。。定実の着物だった
右手に抜きかかった太刀を構えたままで鈴の手を引いた

「鈴姫。。。早くこちらに」

房能が為景に驚き呆然としている間に定実は鈴を御簾の中に連れ戻した

それを確認して
為景はゆっくりと立ち上がった
身の丈とその大きさに房能は「恐怖」した
もとより「戦鬼為景（いくさおにためかげ）」の名は聞き及んでいた
父をも凌駕する「戦績」をすでに誇り
素手で相手を縊り殺すと噂までされていた

今年三十六歳になる長尾守護代家の嫡男は畏怖堂々とした姿で
房能の前に進んできた

「まっ。。。待て。。。。冗談じゃ」

乱行で姫を笑い者にしてしまった事実の手前
本来なら守護の面前に向かってくる事など許されないハズの為景を
叱る事のできなくなった房能は
迫る「獣」に恐怖してその場に尻餅をついて倒れた

倒れた房能を見下すように覗いた為景は
その場にしゃがみこみ。。。酒の息を吹きかけながらは顔を睨んで
言った

「それほどに「舞」を所望でしたのならばこの為景が「剣の舞」を
いつでも。。。どこでも。。。踊ってさしあげましょうや」

と顎をあげ
軽く笑みをうかべながら脇差しに手をかけた
本人は軽く笑ったつもりでも
大男に見下ろされた房能には獲物に向かって牙を剥いた山犬ように
も見えたようだった
斬られるのではという恐れで腰は立たなくなってしまっていた

「あいゃ。。。いやいや。。ちょっと酒が入り過ぎた。。」

だぶついた二重顎の皺にまで冷や汗と脂を吹き出した房能の前に為
景は酒壺を差し出して言った

「酒ですか。。。。いやいや酒ですなぁ。。。」

この祝言の酒さえ落ちぶれた上杉では支度する事ができなかったのだ
為景が運んだ酒で酔って「乱行」。。。。。

引きつった顔の房能にもはや言い訳は浮かばなかった
目の前に出された壺に震える手で杯を差し出した
その姿は誰の目にも「哀れ」な姿にしか映らなかった
そして
この関係がまさに「越後」の守護と守護代の関係の縮図である事に
上杉の親族衆は苦虫をかみつぶした気持ちになったが。。。。

さすがに匂うほどの「殺気」を纏った為景に言い逆らう者は誰もいなかった

「良い酒は久しぶりで。。。。まこと。。すまぬ事を。。。。」

静まりかえった場で
歯までを震え上がらせた房能に為景はあらためて頭を伏せ
「怒」を隠さぬ声で高々と宣言した

「長尾能景（ながおよしかげ）の娘。。。我が妹。。鈴姫の事。。。しかとお頼みいたしましたぞ」

定実と部屋に戻った鈴はただ泣いていた声を上げては嘲られ

晴れ着を乱された辱めに耐えられず
涙は止まることなく溢れ続けた

「鈴姫。。すまぬ。。すまぬ。。」

震える肩を定実は何度もさすった

「もう二度とあんな事はさせない。。絶対そなたにあんな思いはさせない。。。」

定実の必死の慰めも耳には届かなかった
自分の置かれた運命がただ呪わしかった

父のくだされた命令があまりにも酷い事に涙した
婚儀という「謀」に自分が捧げられた事を呪った

この日以来鈴姫は今まで手から決して放さなかった袒扇(あこめおうぎ)を嫁入り道具の葛籠。。その奥深くにしまい二度と舞わないと誓った
辱めを受ける自分を救い出す事もできない情けない夫と見も知らぬ土地で過ごす日々に何の希望も「幸せ」も見いだせなかった

。。。。。

せめて夫になる人が兄「為景」のような「強い男」であったのならと。。。。叶わぬ願いの中に沈んでいった

その２４　月華　（５）

息苦しい生活が続いていた
上杉の屋敷に輿入れしてから。。。。鈴姫は定実（さださね）に与えられた屋敷
から出たことがなかった
厳密に言えば
出る事を許されていなかった

守護上杉の広大な邸宅の中その一角だけが「守られた」領域
夫，定実の手の届く範囲という事だからだ

外の世界

房能（ふさよし）や他の親族衆がいるところに出て行けば
どんな酷い扱いをうけるかわからない
婚儀の場で為景（ためかげ）が一喝してくれたおかげで表だった嫌がらせをうけ
る事はなかったが。。。

それだけだ
ココにはもう姫を守ってくれる長尾の者はいない
実家から付き添った二人の侍女以外姫の回りにはだれもいない

艶やかで花盛りだった娘にはあんまりな境遇だった

落ち沈む鈴の表情に定実は気を利かせたのか
中庭に植樹をした「梅」

「春になれば花を咲かせるよ」

定実自身も職務の手を止めて植えた「梅」の木。。。。
大きな贈り物
でもダメ。。。

そんなものに心は躍らなかった

夫婦になって一月（ひとつき）。。。。
少女は「女」になった。。。「女」になってしまった事が悲しくて
夜が近づけばいつも泣いた

好き？
好き？
キライ
キライキライ。。。これが夫婦？
これが「女」の運命。。。
女の生きる道？
閉じこめられた「腹」。。。。。子供を作れと。。。。。周りの声が心
を苛ませる

薄絹を触るほどに優しく自分の肌を撫でる手に吐き気がした
目をまわし
ついに悲鳴をあげて定実を「拒否」した

「さわらないで。。。。。。」

寝所に座った鈴は部屋に入った定実に涙を流して懇願した
「もう。。。やめて。。。やめてください」
夜が来ることを恐れ昼間から泣き続けていたのか
赤く腫れた目

身体は小刻みに震えている隣の部屋に控えていた侍女の香奈(かな)が慌てて支えた

「すみませぬ。。。今宵は疲れておいでで。。。すみませぬ。。。今宵はご容赦を。。。」

鈴の身体を支える香奈の目にさえ涙が見えた
上杉に嫁してから「光」を失ってゆく一方の姫の姿はいたたまれないものだった
嫁いだ以上は「子作り」が勤めとも言えたが
それを今の鈴姫には目付役とも言えた香奈でさえ押しきる事が出来なかった

心は。。押しつぶされて。。死んでしまう。。。
本気でそう思わせるほど鈴姫は生気を失い始めていた

「すみませぬ。。。」
その姿に定実は部屋を後にした

あの日以来
定実は夜になると別の屋敷に戻っていくという日々が出来上がってしまっていた
昼間少しの間
鈴の元を訪れては優しく言う

「そなたが落ち着くまで。。。慌ててなどおらんからゆっくりとされればよい」

夫に向かってけっして笑わない鈴姫の評判はすこぶる悪かった

食事の支度などで屋敷外に出向く香奈達はその事をこれ見よがしに話す上杉の侍女たちの会話を嫌と言うほど聞かされていた

「子も作らぬ女に飯など必要なのか？」

格下の仕事をこなす者たちにまで嘲られる始末

疎遠な夫婦生活を定実が房能や上杉の親族に罵られていた事を知ったのはずっと後になってからの事だった

箱庭に根付かず死んでゆく「梅」。。。。私に似ている。。。。

不遜な態度をとり続けて上杉の家を追い出されてしまえばいい

「出戻り女」と父に罵倒されても。。。。こんな所になどいたくないもはや定実と口を聞くことさえできなくなっていた

光を見失った花は闇の中に死ぬ

そんなある日

鈴は一人中庭に出て四角く区切られた空を見あげていた

ココ数ヶ月

定実は本家の仕事が忙しいのかこちらの屋敷には昼間さえ訪れてはいなかった

その代わり屋敷の門周りの兵を増やし厳重にしていた

「逃げたりなんて。。。」
鈴は顔を下ろし「逃げたい」気持ちを隠すように言い訳をつぶやいた
今日はいつになくおだやかでいられる自分
数ヶ月。。。。縛られていた綱からとかれた気分だった

風の匂い
まだ冷たい吐息のように流れる
もうしばらくしたら春がくる。。。

「梅」は。。。。咲く?

ひさしぶりに一人で色々と考えた
冷静に考えれば
定実という夫なる人が自分に「悪意」を持っていた事などなかった
夜を共にした時から
十分にそれはわかっていた
いつだって「優しく」話しかける人だった

はっきりといえば
上杉の中で唯一の味方だったのかもしれない。。。
髪に手をあてた
「優しい人」。。。
言葉の少ない人だが温かい目の男だった。。。。

でも。。。
「舞」を奪われ。。。生きていく希望を無くしてまった自分にはそれが大切なものとは受け取れなくなっていた
昼間でさえ静かなこの屋形。。。ココにいるのは鈴と侍女二人だけ
板間を歩く足音が静かに響く
裸足で庭におり月を目で追った

ココに来てから食も細くなる一方
もともと華奢だった身体は触れれば壊れてしまいそうなほどに小さく。。薄くなっていた
そのせいでなのか。。。
白い単(ひとえ)を月光が透かしてみせる
ほそい手足
縁側を降りた中庭をフワリと軽やかに歩いてみる

誰もいない。。。静まる夜の国
梅に手招きされる

穏やかな月明かり

あのとき
長尾の屋敷で踊った時のように手を伸ばして見せた

「お月様。。。私をそちらに呼んでください。。。。」

繊細な指を伸ばし
四角い屋根に囲まれた月を手招きした。。。。
「これが私の。。。。」

諦めた言葉を自分のためにあらためて並べようと思った時
大きな太鼓の音が響いた
夜を無理矢理にその闇の幕を引き裂くような「怒声」が聞こえる

馬の音
人の音。。。。

「何。。。。」

いくら女でもこれが何の音かはすぐにわかる

「戦」。。。

鈴は屋敷の四方が明るくなっている事に気がついた
「姫様！！」
空の元を仰ぎ
迫っている音に侍女たちは鈴を部屋に押し込めた

「何が起こっているの？」
鈴は香奈の肩に抱きついた
地面の揺れる感じ
それとも腰が砕けてしまったのか？立っていられない

男達の怒声はこの屋敷を囲んでいる
地響きは確実に門に迫っているのだ

お付きの侍女の一人「品（しな）」が門前を確認しに走った
その間に鈴姫は単から着物を着替えた
何が迫っていようと武家の女。。。不手際な最後であってはいけないという躾はされている

「上杉様の軍勢にございます。。。。。」

息を切らして戻った品の顔は土気色に変わっていた
その返答にもう一人の年増の香奈は吠えた
「何故に。。。何故にじゃ!!上杉定実様内儀である鈴様を。。。。。
」

鈴の目の前
春を待っていた「梅」の周りに火矢が降り注いだ
廊下に戸板に。。。。まんべんなく火が叩きつけられる
闇の空は赤く染め変えられる

「姫様!!裏口から逃げましょう!!」

必死に活路を探す侍女たちの言葉はすでに鈴姫には届いていなかった
顔は涼やかになっていた
これを待っていたのかもしれない。。そんな落ち着いた顔

「もう。。。よい。。。。。」

手を引く香奈に鈴は微笑むように答えた
四方を囲まれているという事は裏も表ももはやない。。。。
逃げる道など残されていない。。。

わかっていても主を逃がそう
としていた香奈の目には涙が光った
「悔しゅうございます。。。」

まだ小娘の品も震えていた

鈴は葛籠から袒扇(あこめおうぎ)を取り出すと二人に言った

「私の打掛けを持って逃げなさい。。。それを渡して乱取りから逃げなさい」

震える品に着物を手渡した

「いやです。。」

まだ鈴と変わらぬ歳の品は震えながらも着物を返した

「姫様を置いてなど。。。いけません。。。」

香奈も共に座って答えた

「我ら母子は鈴姫様に生涯仕えると心を決めてココまで参りました。。今更姫様を置いて逃げるような事はありません!!」

鈴は首を振った

「こんな事に。。。なってしまって。。。」

鈴の中には後悔がいっぱいになっていた

きっと

自分が定実に対して不誠実な態度をとり続けた報いがやってきてしまったのだと思った

自分が「忍耐」を学べば侍女達まで巻き込まずに済んだと。。。

そんな悔恨の思いを浮かべる鈴に

香奈は脇差しを構えて言った

「どこまでも。。。最後までお供させて頂きます」

「ならば。。。今一差し。。。舞を舞おう。。。。」

この世の最後が炎獄の入り口とつながってしまった今
それに付き添ってくれる侍女達のためにも。。。自分の生きた証のためにも。。。。

「はい。。。」
「はい。。。」

二人の侍女は涙の顔で微笑んで見せた

鈴姫はゆっくりと炎の舞台に舞い降りた

その２４　月華　（６）

扇を右手に。。。。
左手に刀を携えた

どんな状態にあっても自分の最後を彩ってくれるものは「舞」だと
信じていた
それがこんなに早くに訪れてしまう事は考えられなかったが

落ち着いた表情で丸く大きく夜に浮かぶ「月」を見てそんな希望は
叶わないと鈴姫は確認した

闇の空
夜の月
枝にに炎を飾った梅の舞台を見渡した
立つ姿に「怯え」はなかった覚悟というものを決めていた
このまま
慌てた姿で逃げたして上杉の下郎達に辱めを受けるなど。。。「美
しくない」
そう思えば自然の顔に笑みは戻った

この「舞台」は最高

あたりはもとより門の外にも火は溢れ出しているに違いない
兵達が押し合う声が聞こえる
熱風が吹きあげ木々に芽吹きだした命を焼き天高く巻き上げてゆく

若い命は春を待たずに花を咲かすことなく飛び立ってゆく
その道に鈴姫は立っていた
浄土に向かう「炎の道」に

渡り廊下にも屋敷の屋根にも全てが崩れ落ちてゆく
これが始まりで「終わり」
誰の手も届かない「美しい死」を迎えられる

支度は整った

「定実さま。。。」

目の前をゆらゆらと彩る炎を目に宿して思い出したのは「夫」なる
人の事だった
信じていた。。いやあの人だけは。。信じられた
いまさら我が儘な物言いにしか聞こえないだろう

さんざんその「愛」を拒んできた
あなたは。。。それでも貴方だけは。。。。。
手をとり優しく自分に向きあってくれていた

でも
その心に自分が触れようとはしなかった
触れる事ができなかった
それほどに自分の支えにまでなっていた「舞」を奪われたという気

持ちに整理をつけられなかった

目を閉じて自分のしてきた「愚行」を思いだして。。。。

「いいえお慕いなどしていませんでしたわ。。。」

うっすらと浮かぶ涙で決別の言葉をもらした
そう
父・能景（よしかげ）の謀に自分は捧げられた
その身を
定実が娶るなどと言わなければこんな責め苦に遭わずにすんだ
そう思おう
割り切れた気持ちで堂々と前に歩を進めた

鈴姫は自分の胸を押さえてみた
早まる鼓動。。。高まる気持ち。。。四方を囲む炎のお囃子たち
崩れゆく家屋の素晴らしき雅楽

定実の事も。。。父の事も
もはやそんな「小事」は過去になった

闇に浮かび上がる美しき花

炎を纏った梅の木の前でクルリと身体を回した
もはや火を「熱い」と感じようとは思わなかったこの熱が己の「血」
とさえ思った

間近に飛ぶ火の粉がキラキラとまるで桜の花びらのように輝いて見えた。。。。目に映る世界は絢爛たる終焉

「降る花。。。。」

鈴の視界は急に開けた
身の回りに注ぐのは「熱き花びら」

夜の果てに訪れた最後の舞台

「ええ!!ただ会いたかったのでございますよ!!」

手を開き赤から紫そして漆黒に続く空に伸ばし
月に吠えた
会いたかった
女御様(にょご)との約束「京」へ!!花の都に行きたかった
ただ知りたかった
美しい舞のある都を

爛漫に咲き誇る桜の下で「五節舞(ごせちまい)」を踊る
美しき舞姫たちと

薄氷の上を軽やかに舞う鶴がごとく
身体をしならせ扇を舞わせ火の粉花びらを扇で仰ぐ
撒かれた煌めきは天女の羽衣のように美しく鈴姫の身の周りを漂った

こみ上げる思いが紡ぎ出され舞へと昇華される
それは
悲しみも
喜びも
憎しみも
楽しみも
全ての感情を尖らせ紡ぎ合わせてゆく

一人でいられない
誰もがそう
私もそう私を支えたのは「舞」
貴方は？
そうあなたにとってそれは「私」だった？

「上杉」の家を窮屈そうにしていた貴方に優しさをわけてあげられたのなら

傷つけ合うような生き方を
あなたに押し付けなくても済んだのかも

もっともっと「分かち合えた」かも

でもこれが貴方の最後の仕打ち。。。。。

鈴姫の身体の奥に押さえつけていたものが暴れ出していた
終わる命を惜しまずに現したい
打ち掛けが肩から滑り落ちる勢いで腕を回し激しい「波」を描く

それは侍女たちに伝わった

香奈(かな)はいつのまにか脇差しを下ろして鼓(つづみ)を打っていた
最愛の姫君最後の舞に
己の始末の脇差しは無粋にしか見えなかった
愛した姫の命は

大胆に「舞」の世界に燃え尽きようとしている

「最後までお供致します。。。その玉の緒が絶える時まで。。。」

母の言葉に長刀(なぎなた)を構えたまま品(しな)も言った

「家宝者にございます。。。今生の舞。。美しゅうございます。。。」

鈴姫は笑っていた
自分の愛したものに殉ずる事にこの上のない喜びを見いだしていた
手を回し
羽根をもつ者達のように白い翼はしなやかに熱の風を踊る
火の弾ける音は鼓の音にかさなりザワザワと近づく「崩壊」が気持ちを高みに上げてゆく

抱きしめて
願うように手を重ね羽ばたく仕草で打ち掛けを動かす

「月よ。。。月よ。。。お慕い申し上げます。。もうすぐそちらに参ります」

輝く月に触れようと手を精一杯伸ばす
そして心を覆っていた「憂鬱」の蓋は吹き飛ばされた

「私に触れて！！！」

狂うように髪を揺らす
刀を滑らかにすべらす
梅を侵す炎を切り落とすと

打ち掛けの袖に火の粉が踊る
鈴姫の身を「星」は美しく飾った

「私は花。。。私は舞。。。ここに生きた」

留まらぬ勢い左手の刀を投げ捨てた

後は燃え尽きてしまうだけ
喜びの世界へ
袒扇（あこめおうぎ）を祈るように手に添え真っ赤に燃え上がる梅の前で踊り続けた

屋敷の渡りがついに崩落した時
ひときわ大きな「怒声」が響いた
その声に香奈は鼓を投げ刀を拾った

品も同じく「幽玄」な舞の世界から意識を引き戻し身構えた

大鎧を纏った男に連れられた集団は「上杉」の旗指し長槍を身構え

て進んできた

「あそだ！！」

中庭の反対側に現れた集団の大半は粗野な下郎だった
踊る鈴とその前を守る侍女を見るとみな顔をほころばせ
口々に下品な言葉を吐きながら進んできた
顔に表れるほどの「下郎」

「殺してもいいなら。。。犯してもいいんだべ。。。。」
「姫様かぁ。。。たまらんのぉ。。」

先頭の男は手で下郎をなだめていった
「姫にあるのは「死」だけだ。。手出しするな」

言い伏せられながらも
屋敷を侵す侵入者たちの目はぎらついていた
「侍女でもええがぁ。。。」
これみよがしの欲望をはき出す
しかし
くだらない下世話な声は鈴姫の耳には届かなかった
夢を見るように舞い続ける
もちろんその姿を香奈も品もわかっている

最後まで
燃え尽きるまで踊るであろう事も

「姫様。。。最後の時は」

先に下郎を抑えるために走っていった品の後

残った香奈は鈴姫の前に控え「脇差し」を投げて言った
鈴もわかっていた微笑みを返して言った
「火の門は開かれました。。。私はそこに行きますから。。。心配しないで」
足下までもを火で囲まれた鈴は。。信じられないぐらいに穏やかな顔だった
「心おきなく舞ってください香奈がお守りいします限り。。。」
そこまで言って香奈は堪えられない涙を落とした
鈴が幼少の頃から仕えている彼女に。。。可憐な姫の最後はあんまりだった
だがそれでも勤めを果たさんと立ち上がった
「それでは!!」
毅然とした香奈はすでに下郎と長刀で打ち合っている品に向かって走っていった
悲鳴と怒声
何合も斬り合わせられぬうちに香奈は腹を槍で突き通され崩れた
品は男達に取り押さえられ長刀を奪われて囲まれた
「姫様!!姫様!!!」
男達の手でめちゃくちゃに身体を押さえつけられた品の悲鳴が響き渡る
それでも鈴姫はゆっくりと動いた

左に脇差しを持ち
長い睫毛は微動だにせず

「私は舞に死ぬ。。。。それでもよいなら供をせよ」

すでに鈴姫の周りは火の海になっていて
男達が近づける場所ではなかった
鈴自身も打ち掛けに火を纏い炎の一部と化している

しかしその姿は。。。。ただ美しい
大鎧の男は見とれていた
その姿に鈴は手招きした

「誘いの巫女」は優しく招く

何事もなかったかのようにひらりと身体を回した

「狂ったか。。。。」
大鎧の男は弓をつがえた
あくまで命を奪う。。。。仕留めに来た役目を果たすために
静かに目を閉じた

「お供しようぞ!!!天女よ!!!」
天地を割る声が響いた

その２４　月華　（６）（後書き）

やたろ～～

後書きからコンニチワ～～ヒボシです

ここのところはずっと鈴姫事。。「実」様の過去で進行しているカイビョウヲトラでございますぅ
これから。。。
まだ色々あるのですが。。
なかなか幸せじゃなかった実様の娘時代。。
やっぱり人には経験を支える過去があって現状を成り立たせるという部分があるので
しっかりと書きつづっていこうとおもいます

ところで
メッセージいただいたのですが
表記の事です

やたろーは
正式名称（藁）
小嶋弥太郎。。または小嶋忠一というのが名前ですが。。。
ココでは「やたろー」というふうに書かれてます
えっと深い意味はないのですが「やたろー」というふうに書いているのは
彼自身が自己紹介の時にまのびた感じに自分の名前を言った。。。
という事と

ほんとは「のんびりさん」である事を現したかったからです（あらわれてませんが（藁））

後の言い訳は（藁）つやとの会話で大人と子供。。。ってのを感じてほしかったってところで
彼の名前はいずれちゃんと「弥太郎」になっていくとおもいます～～

もひとつ！！

本庄実乃（ほんじょうじつの）
正式には？（ほんじょうさねより）と言うらしい。。。。
これは私が「カイビョウヲトラ」を書くときの資料集めをしたとき
彼の書状に「実乃（じつの）」というサインがしてあった事に由来します
初期Ｗｉｋｉｐｅｄｉａにも実は「実乃」と乗っていたのですが。。。最近更新されてしまったのか。。。消えてました（涙）
ただ名前で検索すると本庄実乃（ほんじょうじつの。。ほんじょうさねより）どちらもでてきます
どちらとも「越後の武将」とかかれ同一人物とされています

と

また言い訳をかいてしまいましたが（爆）
本音は語呂でした「さねよりさん」。。。
って言うより「じつのさん」って感じが「栃尾のおとーさん」みたいでいいかな～～って感じでした「苦労してそうで（藁）」

影トラは少し意味があってそうしたのですが
多分に遊び心もいれて楽しんで書いておりますのでこんな感じで。。
。タハハハハ

これからも
色々な質問，疑問ともどもお待ちしております！！！
実に楽しんでお待ちしております！！！（薫）

それではまた後書きでお会いしましょ～～～～

その24　月華　（7）

天地を割る雷鳴がごとく炎の舞台にもう一人の役者が降り立つ
「閻魔（えんま）」がごとく逆巻く炎の壁から表れた大男

兜を着けず顔もあらわになった姿
髪はそのまま荒れ狂う熱風に動かされ鬼の鬣（たてがみ）のように天に向かって揺れる
品に狼藉を始めていた男たちはひるんだ

真っ白な具足に降る火を纏った大男は肩に朱槍（しゅやり）を回し笑った
不敵な口元に「牙」が無いのが不思議なぐらいだ

燃え上がる炎に照らし出され浮かび上がる恐ろしい目を持つ者
それは鬼神か？

下郎たちは怯え及び腰になり
逃げだそうとする者さえいたが
大鎧の男はぎらつく目でつがえた矢をそのまま表れし鬼神に向かって放った
目の前に表れた

「兜首（かぶとくび）」

容赦のいらぬ手柄首

女を殺すことなどなんの手柄にもならぬつまらぬ仕事に下郎をつれて入った館で白糸威(しろいとおどし)の大殊勲を見つけたことに男の魂は燃えて踊った
冴え渡った「武」の心
その意志を伝えるがごとく
凶刃の矢はまっすぐに鬼に向かった。。。

が鬼神は身も軽く槍を踊らす
刃風で火を消してしまうのではないかと思うほどの振りに矢はあえなくたたき落とされた

「ねらいが良すぎたな。。。。」

鬼は顎をあげ満足げな笑みを向けた
大鎧の男は弓を投げ捨てた
怒りではない。。。苛立ちでもない
「喜び」。。。。女の首を持ち帰る仕事などより

ココで相まみえる喜びを見いだせたから
男達は間合いをつめた。。。大鎧の男は槍を構えると声をあげた

「我こそは!!」

しかしその名乗りに続きはなかった
鬼から飛ばされた小太刀は風を切ってみごとに喉を刺し通した
勢いあまったかそのまま下郎達の中に男は目を見開き声を失った「

口」と「喉」から血を吹き
あっけなかったこの世の終わりに力を失って崩れた

「ねらいがイイだろう。。。」

小太刀を投げた手を握りかえして余裕の態度で鬼は言った

「オマエの名前など聞いてはおらん。。。。」

自分に感心をもたれなかった無念をこの男は耳にいれる事なく絶命した
そのはき出す血霧の小太刀は品の手に届いた

無念の中。。死した男は品の横に「武器」を届ける最後の仕事をした

品はすぐに喉を貫いた小太刀を抜き取り。。。
吹き出す返り血を物ともせずに自分の身体を押さえつけていた汚らしい腕を斬りつけた
あっけに取られていた下郎たちは急な反撃に次々と倒れ
腰を抜かし
自分たちの立場が一瞬にして「奈落」に落ちた事を確信したがすでに退路を探すには遅かった

「やれ!!」

手早い指示
鬼の後ろに控えた強者たちが次々と炎の壁から飛び出した
鍛えられた精兵たち
その姿は

最後の時を迎えた下郎たちにとって
地獄の池から溢れ出す「邪鬼」たちにみえたにちがいない

そして分層御な死の中におちてゆく
見苦しい絶叫の果てに

梅の木や炎にゆれる箱庭に
誰も踏み込めなくなった舞台の真ん中。。。鈴姫は

周りで起こっている地獄に感心さえしめさず静かに立っていた
足下まで火で埋め尽くされすでに手の届く位置にはいなかった

「もう舞わぬのか。。。。天女よ。。。」

鈴の目の前
火の輪の真ん前に
お供の声を上げた鬼は向かい合うように立っていた

「為景兄様。。。」

焼けた打掛けを脱ぎ捨て小袖一枚になった痩せた姿は熱の風に揺らめいた
屋敷の全てが灰燼と化してしまうのにもうそれほどの刻はない

鈴姫の姿を見つけた品が血みどろになったまま走ってきた
顔を切られたのか
左頬に深い切り傷。。。。いやいたるところに怪我をしている
着物もはだけボロボロの状態にあったが

「姫様を助けてくださいまし。。。。」

走り寄った為景の足下に土下座をした
周りの男たちが着けている旗が「長尾」の物である事で救いを求めたのだ
それに鈴は首を振って
炎にかき消されぬよう大きな声で言った

「兄様。。。品を連れていってください。。。私はココで果てます故に」

鈴の目には自分を守って死んでしまった香奈の倒れた背中が見えた。。。
品は自分の母にすがって泣くこともせず
その意志を継いで。。。酷い目にあいながらも自分の事を為景に頼む。。。

そこまでの価値など。。。私にあるのか？
思うほどに
悲しくて悲しくて。。。
こんな事になってしまった後にどうして自分だけが「生きて」いけるものかと

為景は品を連れる事を自分の近習に告げた
品は悲鳴を上げたが
すでに抗う力もなくそのまま引きずられるように屋敷の外に連れて行かれた

「ココで死ぬのか？」

火の勢いは増すばかりの庭に立つ為景は鈴姫に
念を押すかのように聞いた

「はい」

どのみち火の輪に囲まれた舞台には誰も近寄れない
それに

いや
いまさら生き残って。。。どうしたらいい

上杉にも長尾にも。。。どこにも身を置く場所が無くなってしまった
たし
また
同じように嫁がされるなど。。。考えたくもない

辛い思いに顔を曇らせた鈴
やっとココまで来た「死」を選ぶことに代わりはなかった
むしろ
最後は晴れ晴れとしていたい
滑らかに。。細やかな指使いで
扇を舞わした

「この火の中で私は夜の世界に舞い上がります。。。。さらばです
兄様！！」

そういうと楽しげに舞った
羽根を開く鳥がごとく
艶やかに羽ばたく蝶がごとく
足取りに濁りはなく女御の教えた「舞」の名家に恥じることのないように

その答えに為景は笑った

「美しき天女よ。。。。死ぬなど惜しい事を言うな!!紅蓮の炎を物ともせぬ「武運」を我に与えよ!!!」

そういうと槍をふり武芸舞をする仕草で鈴の足下の炎に踏み入った
十分に燃え上がった炎は為景の具足を焼いたが微動だにしなかった
驚きの行動だった
しかし為景は何にも怯まぬ笑みで炎の大舞台に上がった

鈴姫には信じられない光景だった
その力強い手が鈴の腰に回された

「死ぬのなら。。。この美しき天女の魂はわしのものだ!!わしにオマエの全てをくれ!!」

そのまま軽々鈴姫の身体はまるで綿のようにと拾い上げられた

為景の顔を間近に。。。。
強い男の胸の中に
なによりも自分を「欲しい」とこれほどまで強く言われた事はなかった

「私は。。。。」

うわずる声の姫の顔をじっくりと見た鬼は言った

「オマエの持つ武運。。。。その美しさと気高さをわしにくれ。。。
オマエの舞はその全てをよく表していた。。。。それを余すことな
くわしに捧げよ！！！」

捧げよ！！！

鈴姫の目にはいっぱいの涙が浮かんだ
自分は捧げられた。。。謀の闇に捨てられた花だった。。。。
その孤独な身に
その最後を彩った「舞」に為景は
「武運」を見いだし自分にそれを捧げてくれと懇願している

必要とされる事

枯れ始めていた花の心に甘美な言葉が注がれ輝きは溢れる涙となっ
て流れ出た

どうして拒む事など。。。そんな事出来るはずがなかった
強い腕
厚い胸板に抱き上げられた細い華奢な花は答えた

「私の全てを。。。。」
「オマエの全てを。。。。」

赤銅の肌は白い花の肌をやさしく舐めた
止まらぬ愉悦
絡み合う手で相手の全てをむさぼり
絹を散らした裸を

その隅々までを月明かりの下に花はさらした

濡れた花心に蜜をたたえ
奥深くに今まではただの痛みでしかなかった宮は「初めて」喜びと
ともに男をを迎え入れた

為景の胸の中
鈴姫は「女」である喜びを謳歌した夜を迎えた

ただ一度の夜に鈴姫は自らを捧げた

その２４　月華　（７）（後書き）

ブロク。。。。。

後書きからコンニチワ～～ヒボシです

ココ何日か友達のＨＰに。。。。間借りして「カイビョウヲトラ」
の秘密基地みたいまものを作ってました
間借り。。。
そもそもヒボシは機械音痴なので自分でＨＰなんて絶対につくれな
いのです
だから
友達一号にたのんでちょっと間借りしたのです
。。。。
秘密基地。。。
といってもとくに何があるわけでなく
人物評がバラバラあるだけなんですけど。。。
もっちょっと形になったらココにもアドレスを載っけようか？
どうしようか？
考えてます

あった方が良いでしょうか？（いまさら）

そんな感じの多忙な日々でした

それではまた後書きでお会いしましょ～～～

その２４　月華　（８）

たった一夜の出来事で自分の生き方が「より良く」変わってゆく。。。。
そのぐらい鈴姫にとってあの「夜」の出来事は「一大事」だった
だが
それが大きなうねりのなかにあった小さな「波」であった事に気が
つかされた時。。。。

朝露に消える「夢一夜」

長尾の屋敷に戻った鈴姫を待っていたのは

温かい家の者たちの手ではなかったが
かわりに
出戻りの娘を叱る父も
失敗した「謀」をあざ笑う親族もいなかった

「長尾能景（ながおよしかげ）の死」

待っていた事実
それは「長尾家当主である父の死」だった

帰り着いたときは何が起こっているのかわからなかった
ただ
家中の者たちでさえ鈴姫にまともに挨拶をする事ができないほどの
騒ぎになっていた
戦支度の男たちと
飯炊きの侍女たち
走り回る小姓に近習たち

事が「急に」おこり何もかもが動転している事は一目でみてとれた
「当主」の「死」によって家中が騒がしくなっている事はわかった
でも。。
「父」が死ぬ？
疲れた頭を振った
そんな事をどうやって信じたら？いや受け止めたらいいのか？
品と
ともに身体を引きずってかつて自分がくらした奥向きに歩きながら
「父」を思い出した

自分を「貢ぎ物」に使った父は恨めしい存在であり
顔もみたくもない人になっていたが。。。。

二度と会えぬ人になってしまうなど「論外」の出来事だった

「嘘」に違いない。。。
溜息まじりの声で
品の顔を見て鈴姫は己に言い聞かすように力無く言ってみたが。。。

母たちの部屋で「死」は現実のものだったと理解した
「剃髪」した姿

髪を落とした母

そこに並ぶ「父」の正室と側室たち
全ての女たちが菩提を弔うための「勤め」の姿で鈴姫を睨んでいた

「死」の現実とともに「夢」は終わった
ボロボロになった身なりとはいえ戦火から落ち延びた娘の姿に母が
与えたのは

殴打だった

「この。。。たわけが!!!」

座敷から鈴の姿を見つけたとたん
荒々しい足音で走り寄ったのは側室だった「実母」
渾身の力で鈴の頬を張り倒した
勢いあまって
着物が乱れたが気にもしない様子でそのまま飛びかかると悲鳴にも
近い大声で罵倒した

「たわけ!!たわけ者が!!!」

やっとで帰った我が家で。。。。
涙がでるほど
会いたかった母の出迎えは。。。優しい腕の中に抱かれるではなく

目もくらむ平手で打ち据えられ
痛みに驚く間もないほどにもその言いぐさに両膝をついて絶句した

「なんのために「上杉」に嫁に行ったのか？何故大殿（能景）に悪しきが迫っていた事をしらせなんだか！！！この馬鹿娘が！！！」

止まらぬ殴打はいつしか握った拳に変わって
傷ついた鈴の身体を容赦なく叩き続けていた

抵抗できなかった
優しかった母が目を真っ赤にして自分を叩くなんて思ってもいなかった
鈴姫の膝は崩れたまま呆然としている身体を母は泣きながら何度も叩いた
その場にいた
品はいたたまれなくなって身体を前に入れ自らを楯にして言った

「堪忍してくださいませ。。。姫様にもわからぬことでございました！！」

品は振り下ろされる手に顔を向けて叩かれながらも
母のあんまりな出迎え。。仕打ちに目を開き呆然とし心を凍りつかせたままの鈴姫を守って答えた

その返事にあくまで平常心を保とうとして
座敷の真ん中で事の成り行きを追っていた「御台様」がため込んでいた苛立ちをあらわに言った

「役立たずが。。。」

殴る手は止まったものの
「刺す」視線は全て鈴の心を貫いていた
母も。。。。正室の御台も。。。その他の側室たちも。。。。

夫を失った苦しみという「憎悪」を鈴にぶつけた

「上杉に嫁したのならその動向をうかがえた事であろうに。。。」
「嫁いだのに。。。「我が儘」を言って閉じこもっていたからであろう」
父の寵姫たちの目は怒りと「涙」に染まっている

愛するがあまりの「憎悪」は女たちの悲しみの形だ

止める事などできない「はけ口」にされた
鈴姫の心は混乱のまま闇夜の中に引き戻された
身体の各所が「上杉」での辛い日々を思い出した。。悲鳴をあげ疲労を呼び起こした

心を締め上げる圧力によって今までたもっていた気力は脆く崩れた

「母上。。。。。」
涙と
とものにこぼれる声
震える唇でこの「罵倒」の嵐からの助けを懇願をしたが

母の目に光る涙は「無情」だった

「馬鹿娘。。。。オマエが大殿を見殺しにしたのじゃ！！死んで詫びよ！！！」

鈴の願いに対する答え「死ね」と母は脇差しを渡そうとした
品は必死に頭をさげた

「お願い致します。。。姫様はまことに何も知らされてなかったのです！！」

だが
母は聞き入れなかった
おそらく。。。。夫，能景が亡くなった時。。。正室から共に横に並んだ側室たちに至るまでにどれほどか責められたのであろう
「武家」の女は「お家」のために生きている
「長尾」を守れなかったのなら何のための「政略的婚儀」

上杉と長尾の関係をもっと理解させておかねばならなかった
教えておかねばならなかった母にはそれは不測な出来事になってしまっていた
母にもわからぬ事が多すぎた
嫁したのならば「上杉」に染まりもしよう
だが
目の前にいる娘は何の責務も果たさなかった「愚か者」でしかない

静かに「平静」に

脇差しを鞘から抜くとそのまま鈴姫に突きつけた

「死ね。。。今すぐ死んでしまえ」

そのまま刃物を目の前に投げた
「はよう。。。死ね」
涙を流した母は鈴を許そうとはしなかったが
覚悟を決めた発言に。。。。。己の死さえも浮かんでいた

暗闇。。。。

鈴姫にはもうどうにもならない自分の立場に申し立てのしようもなかった
上杉と長尾の関係など知りようもなかった
自分に求められている事は「ただの」子作りかとくらいにしか思えていなかったのが本音だった
突然起こったこの「戦」の中身をまだ何も知らない
何故父が死んでしまったのか？
それが自分の不出来の責任なのか？

いきさつは何もしらされていないのに目の前にあるのはまたも「死」だった

冷静に。。。麻痺し始めている感情を整理してみようとするが頭の中は混乱であふれかえっていて無理だった

ただそこまで責められて思い浮かんだのは

「舞」を奪われ
好きかもわからぬ男に身体を捧げた。。。。自分の「価値」は？

その男の実家が自分を殺そうと攻め立て
生きて長尾に戻って来た。。。。今。。。。

母達に「死ね」と迫られている

脇差しを拾ったそして深く後悔した
こんなに「辛い」生き筋しか残ってなかったのなら
何故あの炎の中で死んでしまわなかったのだろうと

思い出もなにもかもを吐き出しからっぽになった心は切っ先を喉に
向けて進ませた

「死んだら。。。浄土の天女たちと舞えるかしら。。。。」
つぶやいた声は品には聞こえた
「私もご一緒します。。。また姫様の舞が見られるなら辛くはありません」
鈴姫の拾った脇差しをともに手を重ねるように携えた

鈴が喉を突いたら
返すその手で自分の喉を貫くために

「品。。。嬉しいわ。。。」
「はい」

二人は覚悟を決めた
そしてふりかぶった

「勝手な事を進めては困ります」

振りかぶった鈴姫の手は降りてこなかった
脇差しの刃を止めたのは「為景」だった

張りつめた奥の部屋鈴の最後を見届けようとしていた御台たちは目を覚ましたように為景を見た

取り付かれたように「死」を迫っていた女たちは我に返りみな為景にひれ伏した
細い鈴姫の手を近習たちが抑えた

「鈴姫は現在長尾に身を寄せてはいますが。。。未だ「上杉守護」の「妻」である事を忘れてもらっては困る」

声は威圧的に伏せた女たちに釘を刺した
「長尾守護代家の新当主」は慄然としていた
誰もそれにさからう事はしなかった

「死ね」という騒ぎが静まりかえっり止められたとき

鈴姫の目の前にいた母は力が抜けて膝をついた

身体は震えていた
求めるように手をのばし鈴の肩を初めて強く抱きしめた

霞んで消えてしまいそうな泣き声を上げながら哀れな娘にしがみつくように抱いた。。。
「鈴。。。鈴。。。。」

鈴姫はすでに声もでなかった
ただ為景の言葉をうわごとのように復唱した

「未だ妻。。。。」

苦しみの涙に「理解」は追随する事はなかった

深い悲しみと混乱が疲労をおしよせさせそのまま母の手から崩れ倒れた
仰向けに倒れた身体を
顔の傷を布で隠した品が名前を呼んで揺さぶる

記憶の果て
遠くに聞こえる声。。。。
意識は遠く。。。。闇の縁に落ちてゆく

「どうなって。。。しまうの?」

絞り出したやっとの声。。。。
精一杯の質問を残したまま眠りの中に目を閉じた

その２４　月華　（９）

長尾の屋敷について一月（ひとつき）
鈴姫は立ち上がる事もままならない状態だった
屋敷の中は相変わらずの喧噪が響いて事態が収拾されていない事を物語っていた
そんな晴れた日に
母は一度だけ忍ぶように顔を見せ

言葉は少なかったが「死ね」と言った時の目はなくただ優しく娘の髪を撫でた

「女は好きには生きられぬのです。。。強くなっておくれ」

そういうと静かに涙を落とした
鈴は母に何も言えなかった
部屋を出てゆく母の姿が小さく見えて。。。。母の背負った「苦しみ」を感じ
余計に言葉はでない。。。

色々な疲労が吹き出して身体を覆う錘（おもり）のようにな日々
数日。。目を覚ますことなく微睡みの中にいたが
「品（しな）」の声が遠のいた事で。。。「恐怖」が蘇り目をさました
宿下がりをしようとしていた彼女を引き留めた

「お願い。。。近くにいて」

顔に怪我を負ってしまったことで表向きに働く事は出来ないと品は
申し訳なさそうに言った
おそらく「見苦しい」と家中の者に言われたのだろう

それでも頼んだ
あの業火の炎の中をともに手を携えココまできた
どこまでも苦難を共にしてくれたのは「品」だけだった
最後の時。。。。

「死ね」と言われたときも。。。躊躇なく手を握ってしてくれたのは品だけ

母はココにはもうこない。。。突き放された今
品がいなくなってしまったら。。。
誰も助けてくれないのでは。。。と悲しくて怖くて

震える声で頼んだ

「ココにいて。。。私のために。。。ココにいて。。。」

生気の戻らない顔に涙を溜めた瞳で懇願する鈴姫の手を握って品は答えた

「このような醜女（しこめ）になってしまった私に。。もったいないお言葉。。。最後まで喜んでお仕えさせて頂きます」

しっかりと握り替えした手で誓った

「品は鈴姫様以外にはお仕えしたくありませんから」

と

互いに溢れる涙で手を取り合った

数日

春の風が吹く春日山の屋敷の中で

やっと自分の身の上に起こった「事実」が少しずつ耳に入るようになった

父の死

この「戦」の原因になった出来事

品が色々な場所で拾ってきた話しや近習（きんじゅ）から聞いた話でわかった事

実は鈴姫が上杉で生活を始めた二月（ふたつき）後にはおこっていたのだ

定実（さだざね）の元に嫁した日からすると

父，能景（よしかげ）が亡くなったのはその直後の出来事だった

そんな事は何も知らされていなかった

父の死は「上杉房能（うえすぎふさよし）」の「謀（はかりごと）」だった。。。。

去年

越前での一向一揆は最大の規模でこの地を揺るがしていた
その「後詰め」。。。。。
勢力としての「提携」の意味が鈴姫の婚儀にはあったのだ

だが
親族の契りを結んだ長尾を「上杉」は早々裏切った

いや「裏切る」機会をうかがっていた
あの澱んだ目を持つ房能は守護の権利の多くを長尾に剥奪されていた事を根に持っていた
武勲のない者。。。。
力のない者。。。。
自分では何もできなかったこの男はそれでも「欲」だけはしっかりと残っていた

いつか復権するという「欲」

それが「神保氏」の「能景抹殺」という甘い言葉に乗ってやってきた時に行動となって表れた

一揆勢の鎮圧のために出兵した能景の救援。。「後詰め」を絶った。。。。
助力の要請を「握りつぶされた」能景は百姓の手にかかって無念の最後を迎えた

しかし

房能の考えは甘かった
守護上杉の当主房能は一時的な「感情」で長尾に牙を剥き「勝ち」に酔ったが

しょせん「戦」の趨勢に「無能」な者の激情。。。
自分の心に起こった「復権」という波にさえ乗り損なっていた
そんな堕落した守護とは違い
長尾には「戦鬼（いくさおに）」が残っていた
長尾家当主の非業の最期にお家の混乱は逃れられない「ハズ」だった
だが
すでに父に信任されていたこの男の存在が混乱を許さなかった

為景は野生の風貌の下に「理性」を持っていた

各地に散らばっていた「長尾」の一族を能景の「葬儀」にかこつけて春日山に集結させた
だから
普段なら顔を合わす事のない「正室」「側室」が一同に会していたのだ

「定実様の助力を待ったそうです」

一族に起こった事件の経緯を未だ呆然と聞いていた鈴の耳になつかしい「夫」の名前が聞こえた
品の顔を見返して聞いた
「定実様を？」

鈴の身体を手桶に分けた湯で拭いていた品は答えた

「守護様の速やかな「隠居」を求めていたそうです。。そのお仕事を定実様が長尾のためにしていてくださったそうです」

そういえば定実は年が明けてからは
鈴姫の住む屋敷にはなかなかこられない状態が続いていた

鈴も小首を傾げ少し考えてみた
あの頃から。。。。屋敷の周りには護衛が増えていた
あれは自分を閉じこめるため。。。逃がさぬようにするためのものだと思っていた

「その「隠居」の事で定実様は房能様とぶつかってしまい上杉の家の中では険悪な関係になってしまったそうで。。。」

鈴姫の右手を丁寧にぬぐいながら品は
今
あの日の事を思い浮かべている姫の顔を見た

「だから護衛が増えていたの。。。？」
「そのようです。。鈴姫様に「あの」房能が何をするかわからない。。だから警護を増やしていたようです」

。。。。。

定実。。。。
鈴姫にとっては自分から「舞」を奪った一人
その夫は長尾のために養父である房能との折半役をしていた

「でも。。。。」

まだ割り切れない感情をこぼしてしまった鈴姫に品も思い出すのも
辛いあの日の事を拾い上げて
それで
聞き及んだ事実と摺り合わせて悲しそうに言った

「間に合わなかったのです。。。」

守護の地位を「隠居」して定実に譲渡する事で今回の「不手際」を
許す

という為景の要求を房能は受け入れなかった
いや
一度牙を剥いてしまった「男」は戻れないところまで「怒り」の感
情に染まってしまっていた
その怒りの矛先は自分より

「弱い者」に向かった

そういうところからして房能は「戦」のあり方を知らなすぎた
それが鈴姫の屋敷への「暴挙」だった

「屋敷に向かってきた房能様の軍勢を前面で抑えたのが定実様で。。。その間を縫って為景様が助けに来てくださったのです」

身体を拭き終わった品が着物を鈴の肩にかけながら
品自身も感慨深いものだったのかゆくっりとした口調でつづけた

「今も長尾と上杉の良き関係のために交渉を続けてくださっているそうです」
「。。。。。」

鈴はうまい返答ができなかった
自分は夫に裏切られたとさえ思っていた
きっと品もそう思っていたに違いない。。。

自分の不遜な態度に腹を立てて。。。。

小さな考えしか浮かばなかった自分が恥ずかしくなって余計に返事ができなかった

定実は自分を守るめに働いていた
それどころか長尾との関係のために奔走していた
鈴は俯いた
絹を合わせながらただその場で頭を垂れた

どう表していいかわからない感情だった
今定実と会ったら。。。どうしたらいいのか。。。。

しかし
この日が鈴姫にとって長尾での最後の「安息」となった
翌日から続く出来事に目を回し
生きていく事の苦悩の中に引き戻されていく

ついに
交渉に応じる事のなかった房能を為景は征伐する事を決定する
その
旗印として「新守護上杉定実」があった

夏をまたず「長尾守護代軍」は「前守護上杉房能軍」と激突
直江津にあった守護府を陥落させ房能を敗走させた

天下に例のない「下克上」を為景は実践してみせた

そして
その報告が春日山に届いた日
「戦勝」に湧く屋敷の一角で
鈴姫の母は自刃した。。。。。能景の後を追う事と。。。娘の罪を
あがなうために

その２４　月華　（９）（後書き）

上杉房能様。。。。

後書きからコンバンワ～～～ヒボシです

ここ何日か寝られない日々が続いていて。。。
クスリのんじゃおうか？とかヤバイ気持ちになっているのを抑えつつ深夜に更新中です（藁）

さて
上杉定実様おとーさま房能様
「カイビョウヲトラ」ではけっちょんけっちょんなキャラに描かれてしまってますが
史実では。。。
やっぱり長尾家に対していい感情はもってらっしゃらなかったようですで
定実様も実の息子ではなく
房能様自身の前越後守護に「養子」として入ったって経緯があったりで「親子」っていう
意思の疎通は。。。。あまりできていなかった感じです

ただ
房能様は「上杉房能公を偲んで」と題し今も祀られており
奥様「綾子」様の「舞」などが奉納されてもいます
いろんな理由で廃位をよぎなくされた方でしたがそんな方も偲び今も会を開き舞を奉納するという
日本人の心の深さが。。。美しいと思います

彼は
武力を奪われた守護でしたが
能や舞を愛した良き方だったそうです
だから
「舞姫」だった鈴姫様に辛く当たってしまったのかもしれません
武門の者が舞まで奪ってしまう。。。て

そんなこんなで「月華編」まだしばらく続くかな?
実様。。。悲しい過去いっぱいですいませんな感じですが
ヒボシも涙しながらがんばって書きつづって行きますのでよろしく
お願いします!!!

それではまた後書きでお会いしましょ～～～

その２４　月華　（１０）

「戦勝を祈る」

その旨を書き記した簡素な書状の前で鈴姫の母は動かぬ骸となっていた
部屋を汚さぬようにか。。。。生前羽織っていた打ち掛けを板間にしきその上での自刃であった

「母上。。。。。」

朝早くに慌ただしく部屋に訪れた品の言葉に目の前が真っ暗になった
着の身着のままで走り駆けつけた部屋で
冷たくなった母を見た

喉を一刺し。。。

信じられない。。。そんな気持ちが躊躇なく
横に倒れた母の肩を揺さぶった
死して何刻かすぎた身体は硬く冷たくなって揺れもしなかった
指先までを整えた形で。。。迷うことなく最後を迎えた姿。。静かな美しい顔。。。それ故に「血痕」がなければ眠っているようにしか見えなかった

「母上。。。母上。。。。」

願うように痩せた母の肩を掴み揺するが
答えはなかった
色を失った顔は微笑んでいるようにも見える。。。見えるだけ。。。
声はもう消えてしまっている

品が鈴姫の手を掴み首を振った
「もう。。。」

「いや！！」

そんな言葉を続けないで。。。動悸は速まり胸を割らんばかりの痛
みが心の奥から渦巻いた
悲鳴をあげた
家中の侍女たちが部屋前に集まっている中
人がいる中
どうにもならない気持ちは声になって表れ

泣き伏せた

「どうして。。。どうしてですか。。。。」

問いかけ
答えてはくれない母に向かい何度も何度も。。。
その問いに答えたのは騒ぎに駆けつけた別の「側室」たちだった

「オマエのせいだ」

自分の後ろから聞こえた声は母の優しい声ではなかった
朝餉(あさげ)の時を邪魔された事もあったであろう。。
三人の側室たちは見下すように鈴に言った

「オマエが自分の勤めを果たさなかったから母が死なねばならなんだのじゃ」

呆然としながら振り返った
ひれ伏す侍女たちの間を荒立たしい足音で彼女たちは踏み込んできた
豪奢な打ち掛けを剃髪した姿のまま羽織った「側室」たちの顔には
「苛立ち」があった
顎を突き出した真ん前の寵姫は言葉を選ばず続けた

「身分を顧みぬ女の末路にふさわしい」

やっかみ
嫉妬

母は美しい女だった
美しく慎ましい女だった

国人衆，地方豪族の娘だった母は「器量」の良さも去ることながら
誰の目にも「美しい女」だった
豊かな黒髪。。伏し目がちな目はいつも瑞々しくまるで潤んでいる
よう男達の心を騒がせた
名に響く「美女」だった
だけど
本来なら「守護代家」に入れるような身分ではなかった

それを父，能景に見初められ恋われて「側室」になった

美しく煌びやかな容姿とは裏腹に
多くを望まず。。派手な打ち掛けも持たず
ただ夫の近くにいられる事を幸せとした野に咲く花だった

他の側室たちがそれぞれに別邸を持っていたのに母は寺の一角を間借りするように住んでいた
喧噪のない静かな庭で小さな花を咲かせ夫の帰りを待つ女だった
だからか
「戦」疲れを癒すためにか能景は母を大切にした
鈴姫が産まれたとき「女子」だったにもかかわらず「産養い」をたくさん与えた

「和子（わこ）（男子）」でもなければ喜ばれもしないのに
能景は大喜びだった
その事を鈴にもよく笑って聞かせた

「そちは母に似て美しい女になる」

それが父の口癖
そして母は
離れる事の多い夫を
いつでも。。。どんな時でも笑顔で待ち続けて言った

「能景様がいるから今日も生きていける」

と。。。。。言っていた。。。。

母は。。。父の後を追った。。。。。

「オマエは長尾の家の厄介者だ!!大殿（能景）を死に至らしめ己の身可愛さに母まで見殺しにした!!」

自分を見失ってしまいそうなほど呆然と罵倒を聞く鈴姫の姿は侍女たちの目から見ても哀れだった
側室たちの責め苦は的はずれで酷いものだ
大仰な身振り手振りで指刺しては罵った

どの側室よりも。。。いや「正室」よりも愛されたかもしれない母の子である鈴にここぞとばかりに当たり散らし聞くにも絶えない罵倒を続けた

品は絶えるでなく
ただ涙で意識をつなぎ止めている鈴姫を守ろうと前に出ようとしたが側室の一人に蹴倒された

「侍女まででしゃばりとは!!醜い顔をみせるでないわ!!」

それでも頭を擦りつけて姫たちの激怒に耐えた

「おやめなさい！！！」

見苦しい騒ぎを止めたのは「御台」だった
朝からの大騒ぎはどこもかしこもに広まって屋敷の部屋前には男衆から近習。。その他の侍女たちまでその成り行きを見守っていた

自分たちの行為を見咎められ恥じた側室たちは大殿正室の登場に慌てて下がってひれ伏した

が。。。鈴姫は力の抜けた身体のまま
涙の目で御台様を見あげるだけだった
御台の罵倒。。。。「役立たず」ココに戻ってきたときに言葉が頭をよぎった

もう何にも逆らえる気力がなかった

「申し訳ありません。。。お役にたてませんで。。。この上は死して」

力を失った身体はつぶれてしまうように御台にひれ伏した
生きたまま死んでいるようなもの。。。
いや
生きたまま地獄に堕ちた。。。
この地獄から解放されるためにも「死」を賜るしかない

それほどに鈴姫の頭の中は麻痺し始めていた

頭を床に擦りつけたままうわごとのように言い続けた

「死を下さい」

着崩れた絹を合わせることもできない哀れな娘を御台は少しだけ見たが
すくに視線を部屋の中に移した

大殿に頂いた打ち掛けの上。。。所作正しく自決した野の花の姿に
御台の目には涙が浮かんだ

「私より先に。。。大殿の後を追うなんて。。。」

救いのない言葉
声には抑揚はなかったつぶやくような物言いだった
でも「恨み言」には変わりなかった
「正室」より寵愛をうけた女は戦勝祈願にかこつけて大殿の後を追った

「生きてはいけない」。。。。母は言葉通りに死んだ

頭をふせたまま嗚咽漏らす鈴姫の肩に御台は手を置いた
鈴は真っ白になった頭で「処罰」を待ったが掛けられた言葉は意外だった

「死ぬことまかりならず！オマエは父母の分まで生きなさい。。。。
お家のための勤め。。。まだ終わっておりませんぞ」

鈴は驚き涙の溢れた顔をあげた

御台は鈴の肩を抱き寄せ手で頬の涙を拭って続けた

「ココで死ねば大殿はもとより母の死も無駄にしましょうぞ。。。
「戦」が終わった暁には。。。上杉との橋渡し。。しかと勤めよ！
！」

御台は毅然とした態度でお家の大事を伝えた
「未だ「戦」でこの一大事と立ち向かっている殿方の後ろを守る私達がこのような事で結束を綻ばせる事は由々しき事です！！」
声をあげ庭に潜む者から騒ぎの元の側室たちまでの心に喝を入れた

すでに己の身の回りほとんどの者を失ってしまている鈴に鞭打つ事など無意味な事と御台はわかっていた
ならば勤めを果たす事を推し進めるほうが長尾の家のためにできる最良の策

けして鈴姫やその母を許すという意味ではなかった
だからこそ
「死」を安直に与えはしなかった

月は天高く浮かんでいるハズ。。。。
騒ぎの朝が終わり夜は雨をもたらした

水無月

静けさをかき消す雨の下に鈴姫は立っていた

肌を濡らす冷温の雨が自分の命を奪ってはくれないのかと。。。浅はかに思ってみたが。。

為景たちはいまだ上杉との「戦」から帰ってはこない
戦況は長尾有利で進んでいる事だけが伝わっている

定実を御旗に頂いた「新生守護上杉軍」と手を結んだ「長尾守護代軍」はおそらくこの大戦に勝つ
その時
「戦」が終わった時。。今度こそ上杉と長尾の架け橋となるべく勤めを果たさねばならない
それが父，能景の菩提を弔う事になる
母の。。。無念を。。。

雨に濡れる事で朝の騒ぎを冷静に振り返る事が出来るようになっていた
思うに。。。御台の言葉は重かった
きっと御台も母の事を責めた。。。。許せなかった事も多々あったに違いない
それでもお家を立て威厳を持った態度で家臣たちの心を引き締めた姿は鈴姫の心に強く残った

死にたい。。。
でも今はそれさえ許されない
死んでしまえば母の菩提を弔う事もできないし。。。勤めをおろそかにした自分のせいで親族に何が起こるかわからない
少し冷静になった頭で考え。。。。無理矢理理解した

覚悟のなかった自分に下った罰を受け入れ御台のように長尾のために尽くす事が
母亡き今
自分がそうしなければならない。。
高まる思いで胸に手を当てた
母の死を嘆くことは許されない

雨に顔を向け
月に誓いを立てようと跪いた

。。。。。。

身体が重い。。。。目眩がする。。。。
「嘘。。。。。。」

身体の芯に動く物。。。。自分ではない「何か」に引きずられる「腹」
泥の庭に座り込んだ

「品。。。。品!!!」

声をあげて助け呼んだ
こんな事。。。
手足はしびれ「身体」が拒絶している

「嘘よ!!!!!」

雷が響く雨に声はかき消された
嵐の中。。。。鈴姫は倒れた

その２４　月華　（１０）（後書き）

改訂。。。。

後書きからコンニチワ～～ヒボシです

えっと
今週末から来週にかけて今までの全章を改訂します
中身の大筋に変化はありません
ただ
１００回をこえたあたりでやっと自分の「書き方」みたいなものが身に付いてきたと思い
未熟だった最初の頃の文章を訂正。。改訂したいとおもったのです
こんな事は読んでくださるみなさまにいちいち発表する事ではないとも思ったのですが
やはり
未熟だった部分を直すという事ははっきりと言ってコッソリなおしたりしないようがんばっていきたいとおもいます

「月華」に入って
実様のエピソードが続くことで実様の人生観とその人となりがわかってきて
キャラクターの「性格」ってものが掴めた気がしますと感想頂きました

その事をヒボシ自身もめっちゃ感じていて
それにくらべると「トラ」の存在感が薄くエピソードのたらなさを痛感しました
読者の方にも多々指摘されていた部分を改訂により深く書き直しも

していこうと思っておりますので
時間に余裕のある方はよろしければ改訂後も読み返していただけたら幸いです

これからも熱心にがんばっていこうとおもいますのでよろしくお願いします！！！

それではまた後書きでお会いしましょ～～～

その２４　月華　（１１）（前書き）

月華終章。。。
ｕｐ後またも修正などもしましたがとりあえずこの章が終われて良かったです
実様の過去。。。届きましたでしょうか。。。

その２４　月華　（１１）

八月ついに守護上杉房能（うえすぎふさよし）は関東への敗走途中越後国東頸城郡松之山で自刃した

守護を追い落とし足利幕府を驚かせた激戦は「長尾守護代家」に軍配が上がったが
その中身はけして「楽」な戦いではなかった
「上杉」も「長尾」も「揚北」も
どれもこれもの国人衆，豪族衆
複雑な思いの混ざり合った戦いは。。。「越後」の最大の傷となり
これ以降「混迷」の「戦」へ突入して行く事になる

「どうして。。。私なのですか。。。」
七月から向こう温かくはならなかった夏が降らせ続ける雨の下
戦場からもどってきた為景の言葉に裏屋敷の片隅にひっそりと暮らしていた鈴姫は泣きそうになりながら答えた
顔に切り傷も生々しく
戦の先頭をきるという大役をこなした長尾家新当主は顎をさすりながら答えた

「上杉定実殿がそう願っている」
と

戦に一段落がついた今
上杉も新しい当主を頂いていた
「新守護上杉定実（しんしゅごうえすぎさだざね）」

長尾は越後の大半を占める「守護代家」という大豪族だが。。。。
これほどの戦の堰を切ったのに「一致」はしていなかった
敵対する「親族衆」
上田長尾宗家の者たち
栖吉長尾家

そういう「外野」を抑えるためにも為景率いる「長尾家」が守護との関係の本流である事実質「守護代」である事を示めし今一度「上杉との「縁（えにし）」」を強固にするための新たな「血縁」を結ぶ必要があった
幸いに定実は為景の申し出を快くいれてくれてはいたが

為景家臣団から「鈴姫」を押す者はいなかった

御台の言葉ではないが
鈴姫には「悪評」が張られていた

「役立たず」と

事前に大殿（能景）の危機を察知する事も出来ないばかりか「縁」の基本である「子作り」を拒んだという不出来さ。。。
そして
「身分不相応」という血の問題などで
新たな血縁を結ぶのに不適切と「断」じられていた
悪評の事もあったが鈴姫の現在の身の上の事も想えば。。。無骨な為景にも温情が働いたのか。。新たに「正室」を定実に送りたいと打診した
返事は
「鈴姫を。。。我が妻を戻して頂きたい」
という意外にも思える返答だった
「定実様が。。。？」
雨降りの日とはいえ蒸し暑い中「打掛」をしっかりと纏った鈴姫は驚いた
同じように片目をつむりながらも返答に驚いた事を為景は表してみせた
「オマエでなければ「妻」は娶らぬ。。。とまで言っている」
驚きに追い打ちをかける言葉だった
鈴姫は困惑した

今日為景がココに来る事を知った時。。。。自分の身体に起こった
事を告げなくてはと悩み抜いていたがそんな事は吹き飛んでしまった
「何故？」
結局何が良かったのかがわからなかった定実との「夫婦」という関係
どうして。。。
今になってまで自分をそれほどまでに求めるのか

「私はどうしたらいいのですか。。。兄様。。」

腹に宿る子。。。
これは間違いなく為景の子供だった
それを話せば上杉に戻れなど言えない話だ
事が意外な方向に進み始めている以上もはや躊躇は出来ない

鈴は打掛け前を開こうとした

「長尾の家にいるのも辛かろう。。。母上の事も。他の者の事もある。。上杉に行くのは良いことかもしれんぞ」

それは
残酷な言葉
為景はあっさりと鈴姫に上杉に帰れと言った

為景にしてみれば鈴姫をいつまでも屋敷に置いておく事に良い事はなかった
父の残した側室たちが鈴を目の敵にしている今
政治的でもない「女」の諍いまでも面倒をみるのは。。。厄介事でしかなかったからだ

逆に鈴姫が恋われているのなら新たな「花」を捧げる必要もなく「好都合」な「取引」だ

鈴はお腹を押さえて部屋を出て行こうとする為景に縋った

「兄様。。。聞いてください！！！」

為景は手で「待て」と合図して言った

「求められるほどの「妻」とは果報であろう。。。話し合ってみれば良い。。今日屋敷にいらっしゃるから」

だけど手をのばし為景の足を捕まえて鈴は言った

「あの日の事を。。。「私を欲しい」と言ったこと。。。お忘れですか？」

すがる鈴の必死な言葉に為景は止まり向き直った

「忘れてははおらん。。。。」

返された言葉に鈴は頷きながら「腹」を見せようとした時

いくさ人の研ぎ澄まされた目の為景は冷たく。。。それでも威厳のある態度で言った

「忘れてはおらんさ。。オマエはわしに「武運」を授けた。。それに従いわしは今以上に戦う。。。オマエも残された「勤め」を果たせ！！」

愕然。。。

あれは一夜の夢。。。
とまどいが口をふさぐ
驚く言葉を放ったまま。。。何事もなかったかのように渡りに向かった

「鈴姫よ。。。これは長尾当主としての命令だ。。理解せよ」

顔は悲しくも見えたが。。。

捨てられた。。。。
花は闇にまたも捨てられてしまった。。。。
雨は為景の足音を速やかに消していき
鈴姫の口に登った言葉も。。。行き場をなくしてしまった

「落ち着きましたか。。。」

為景が退出した後
数刻もたたぬうちに鈴姫の部屋にやってきた「定実」は優しかった
たった少しの刻の間で自分の行く末が闇に「暗転」した事に
悔しくて
悲しくて
涙した顔を見られたくなかった
だから顔を伏せて。。。

定実に返事できない
言葉がでない

胸がキリキリと痛む

為景の言葉から。。。もはや長尾に居場所など「皆無」
どうしたって上杉に行かなければならない。。
なのに
この身には。。。

「覚悟」は浮遊しどこにもと止まれない雲のようだ

声を詰まらせている鈴姫の姿を定実は決して責めようとしない
優しい目で見ている
そういう人ということは。。。少ない「夫婦生活」の間でわかって
はいたが今はそれが怖かった
すがらなければ。。。一人でなど生きられない

不意に。。。考えまでもが闇にとらわれる
隠せる。。。。
不謹慎な思いに良心は反して深く着物の前を閉ざす
でもどうしたらいいの。。。

二人きり向きあった状態で声がでない

「まだ具合が悪そうだね」

黙り込んだままの鈴姫の前に定実は小箱を取り出した
「気臥せりに効くらしい薬師(くすし)に作らせたものだよ。。。」

そのまま小箱を前に出して続けた

「あの日はそなたを助けにいけなくてすまなかった。。。為景殿にお任せはしたがそちの事忘れたわけではない事信じて欲しい。。。その。。。侍女を亡くしてしまった事は。。。本当に申し訳なく思っている」

言葉の少ない男

定実は姫に頭を下げた。。。無理してでも自分に言葉を選びながら話しかけながら。。。
あの日の事を。。。。
「薬。。。。」

やっとで口から出た言葉はてんで的はずれな返事だった

「そう都から取り寄せた物だよ」
温かい手が鈴姫の手をとり薬を渡した

なんで。。。
なんでだろう
どうして

この人は優しいの。。。。

涙がこぼれた

「痛むのか？」

手をとった定実は心配そうに鈴姫に聞いた

「痛みます。。。。」

胸を押さえて答えた

心が。。。心が痛くて。。。千切れてしまう。。。

「ゆっくり休みなさい」

涙を拭う手の主は優しく答えた

流され続けた自分を支えてくれる最後の手なのかもしれない

汚かろうが生きなければならない「勤め」がある。。

この人を。。。

騙す。。。。。出来ない。。。。

「どうして。。。私なのですか。。。。。」

混乱していた

やりきれない気持ちが本音を聞きたくて隠しきれない想いを溢れさせた

どうして自分を選んだのか聞きたかった

「欲しい」と言ってくれた男に捨てられたばかりの心は

自分を求める男にその「真意」を問いつめていた

定実の顔は不思議そうに鈴姫を見ている

「教えてください！！！どうして私でなくてはいけなかったのですか？」

鈴姫でなければ「縁」を結ばない
そこまで言った理由を
今ココではっきりと聞きたい
定実の肩にしがみついた

「私にどんな「価値」があるのですか！！」

華奢な鈴の身体を支えた定実は少しおどろいたように鈴を見つめた
「価値。。。？そんなふうに思った事はないので。。。」
震える声
涙目の鈴姫を落ち着かせるように肩を抱いて定実は話した

「わしは。。。養子として上杉様の家に入りました」

鈴姫は初めて定実の身の上を知った
まるで。。。自分と同じような運命に導かれ「捧げられて」上杉の家に入った定実の人生

名ばかりの息子には何の力もなく
零落していく上杉を誰よりも間近で見続けるという日々
ただ寂れた名門と共に
死んでゆく日々

それは上杉に嫁した時の鈴姫の境遇にあまりにも似ていた

「あの日。。。あの宴でそなたに会えたこと。。今でも昨日の事のように思い出す」
産まれて初めて
いや
上杉に入って初めて「我が儘」を言った
長尾から「嫁」を貰う事がどんな事につながっていくか。。。それに「謀」があるとしても

「そなたを手に入れたかった。。。」

真摯な定実の目は
潤む涙に溺れてしまいそうな鈴姫を一心に見つめた

「どうして。。。上杉様を裏切ってまで。。。」

胸に抱きかかえられながら鈴は聞き返した

「心を奪われた。。。。」

「姫よ。。。そなたに心を奪われた時から。。わしはやっと生きる道を見つけた」

へたくそな言葉

言葉の少ない男。。。。

「そなたを愛している。。。そなたと共に過ごせる日々があるのならそれを「価値」ともいえましょうや」

言葉は。。。嘘かも。。。
それでも
定実の不器用な言葉は「不器用」だからこそ届いた

もう涙を止められなかった
優しさの中にずっと抱きしめられていた。。。その事にやっと気がついた
照れて顔を真っ赤にした年上の夫
頭を振りとまどう仕草

夫の。。。腕は鈴姫を抱きしめた慈しむように髪を撫でながら
恥ずかしそうに上を見ながら

「子を作りましょう。。。上杉と長尾の橋渡しをする子を。。。共に生きるために」

笑顔は続けた

「きっとそなたに似て美しい子になる。。その時その子と共に「舞って」くださいな」。。貴女は永久に天女として」

鈴姫はその場でひれ伏した
自分を上回る大きな生き方。。。「舞」を捨てろとこの人は言わなかった。。
やっと。。
やっと。。。。
「上杉に。。。貴方の元に置いてください。。。。そして貴方の名前を下さいな。。」
定実は笑顔で返した
「わしの近くに居てくだされ。。。」

その日
鈴姫は定実と生きる事を決めた
名を夫から一字下賜され「実(みのり)」と改め長尾との決別を決めた
静養と大殿。。母の供養をする事を隠れ蓑に出産までを長尾で過ごし
その後上杉に嫁していった
子の事は定実には。。。言えなかった

ただ一つの過ちは為景に託した

その２４　月華　（１１）（後書き）

届かぬ想い。。。

後書きからコンニチワ。。。ヒボシです
のっけから元気なくてすいません

というか
月華終章で色々なものを使い切ってしまった感じです
なのに
全然気持ちが届かない事に「自己嫌悪」にも近い。。。モヤモヤの
中にいます

何かがいつもたらない
だから
良くならない

常に自分を叩く事を修練し
喜びには素直でありたいと想っているのですが。。。。。いかんと
もしがたい苦痛

実様を書くにあたって
かなりのバイタリティを使い「同化」しようと努めた結果だと思う
のですが
それでもまだ
足りないと感じるのです

今はかなり不安の中におります
これは届くのだろうか。。。。こういう想いは届くのだろうか？
と
試行錯誤しながらも
なんとか書き続けていきたいと思っております

この数日間励ましのメールを送って下さったみなさまに感謝しつつ
最後まで。。。がんばっていこうと思ってます
ありがとうございます
本当にありがとうございます

火星明楽

その25　二人静　（1）

「高き月に。。。何を思い出されましたか？」

錆びたはずの過去の淵に溢れ出した「罪」に溺れてしまいそうになった実（みのり）の意識をすくいあげたのは虎御前だった
刺すような声は大きく鋭い目と相まって狂気を感じさせずにはいられなかったが

滲み出るを通り越しあからさまに香るほどに漂う「敵意」で実は自分を今生きる場所に戻った
キリキリと痛むほど。。。締め付ける
「敵意」の眼差しには遠慮などない
あのまま過去に立ち止まっていたら間違いなくこの狂気に飲み込まれてしまう

姿勢を正し扇で顔を隠すと
改めて聞いた

「私が。。。。あなたから「何を」奪ったというのですか？」

背筋を走る冷たい感情。。いろいろな想いは未だ脳裏を過ぎようとはしていない状態
指先まで伝わろうとする「過ち」への糸を止めるがごとく
もう片方の手で揺れを制する

部屋の中。。。
座ることなく歩き続ける虎御前は明け放った窓の下。。月を背に答

えた

のけぞった姿勢
歯ぎしり。。。
憤怒を隠さぬ顎をあげた角度から実を睨んだ

「全て。。。。。」

小さな返事
爆発を抑えるための「焼け石に水」の音が返ってくる

「私が。。。。。何も知らないとでも。。。今も思ってらっしゃるのですか？」

確信に触れようと御前の身体はユラリと揺れる
脅し？
実は冷静に考えた。。。
美麗な瞳を細め沈みかかった思い出を冷徹に読み返す

。。。。。
過ちはあった。。。。。

だが
それは虎御前がこの世に出でる前の話し。。。

「あの子」が産まれた二年後に虎御前は産まれている。。。
「あの過ち」を知る者は。。。為景と自分。。。そして品だけのハズ
そのうえで今は為景がいないのだから誰が。。。。。

扇の間から御前の顔を見た

虎御前。。。為景の後妻

まさか？

為景が。。。。それは「おぞましい」

首を振り自分の頭に登った答えを否定する

それはない。。。

為景は「武人」だ

女の過ちをわざわざ後妻に話すような事はしない

御簾の中囲われた中の実を眺めていた御前が話しかけた

「あなたの顔は。。。。よく憶えています。。。。」

実の背筋に雷が落ちた

虎御前。。。事「おトラ」が為景の後妻として栖吉長尾から春日山に入ったのは

実様が春日山を去ってから十年あまりを過ぎた頃の事だった

栖吉長尾は当主を亡くし
家督は側室腹の男子が継いだばかりだった（後の景信）
動乱続きだった越後で「長尾」は結束しなければならない状態にあった

苦渋の選択

栖吉の長尾家ももはや一党だけでは立ちゆかない状態にあった
為景に下らず自らの家。。「栖吉長尾」を守護代家にするという夢は絶たれたに等しかった
弱る力に為景から「強い」絆を
という提案を受け入れ正室腹の女子を「嫁」という絆として差し出したのだ

それが「おトラ」だった

そのころ。。。。
守護上杉定実は。。。。すっかり地に落ちた守護としては「お飾り」に成り下がっていた

定実と実が求めた「橋渡し」という願いは叶わなかった

それどころか定実を「利用」し所領を頂こうとする豪族たちにより翻弄され続け
ついには「幽閉」という憂いにもあい

長尾家の目の届く屋敷に留め置かれていた
酷い扱いを受けることはなく
それなりに整った屋敷での暮らしが続いていた

京の都の女御とのつながりをもつ「上杉正室」の顔を立てた形だった

春日山の麓での生活
為景の「後妻」の話しはすぐに実の耳にも入っていた

ずいぶんと「変わった」女だと

「刀を持って城の周りの野武士狩りを先導していました」
屋敷から出ることのできない定実と実のために
頼まれ物の「唐菓子（からがし）」を取りに
外に出かけて「噂」を拾ってきた品は身振り手振りをしてみせて実に言った

「姫なのに？」
三十を越し妙齢な歳になった実は「都」の女房装束を纏っていた
姿は未だ「美しく」透き通る白い肌と憂いを帯びた目は儚く散った
最後の母の顔にそっくりになっていた
箱庭を御簾の中から眺めて思い浮かべた
「幽閉」。。。
内心は争う事から切り離されたこの生活を悪くもないと
定実は長い「戦」と古傷で身体の具合を悪くする事が多くなっていた
それでもなお「抗う」ように戦おうてする姿は実にとっては「悲しみ」でしかなかった
もう

野心も野望もいらない。。。
ただこの人と静かに生きていきたいと心底思っていた頃だった

「そうです！！まだ歳は十三で。。しかも二月(ふたつき)前に姫をお産みになったばかりだとか」
品は京の女御から送られた菓子の箱を開けて色紙を並べながら言った

十三歳。。。
昔自分もさほど変わらぬ歳で定実の所に嫁した時の事を思い出しながら聞いた

「どんな感じの方？。。。お綺麗なの？」
女が鎧をつけ刀を持ってあるくのは珍しくもないが。。。噂になり人が騒ぐぐらいだから
鎧の上に乗っかった顔は美しいのか。。。はたまた為景に見合うような大女なのか。。。と思ったのだ

包みに菓子を分けながら品は首を振った
「こう言ってはなんですが。。。綺麗という感じの方ではなかったですわ」

言いながら艶やかな西陣の綿布で隠した左頬の傷を撫で

「目の大きな。。。身体の細い。。。」

と
色紙に包み小分けにした菓子を元の箱に戻しながら思い出した事を並べていった
その特徴の最後にあげたのが

「恐ろしい感じ。。」というものだった

「恐ろしいだなんて。。。」

あまり女には形容されない印象につい顔を見合わせて笑った
見てみたい気にもなった
年若い後妻。。。どんな女なのか。。。
しかし囲いの生活をしている自分たちにそれは叶わぬ事。。。。
それが叶うのならば。。。「あの子」を見る事も。。。
脳裏によぎった「儚い希望」
扇を舞わし空に払った

この時は虎御前と会う事など考えにも登らない事だった
それから六年後「運命の皮肉」は起こり。。。。実は虎御前と為景
存命の最後に出会ってしまった

あれは。。。。
虎御前が三番目の子を産んだ時の事だった

何しろ「噂」の絶えない「懐妊」だった

「御仏に選ばれし子」

という大きな名目をもった子が産まれた翌日
城下の屋敷に為景がなんの連絡もなしに表れた

それも実の住む北の屋敷の庭に
篝火に照らし出された為景の顔には刻み込まれた刀傷とも苦悩によって産まれた深い皺ともいえぬ「老い」が十分に表れていた

「こんな刻に何ようですか？」

雪の積もった箱庭
一月の冷たい風の中に大男は佇んでいた
くたびれた顔は酒の壺を片手に縁側に腰掛けながら答えた

「オマエの勝ちだ。。。」

そう言うと酒を煽った

御簾からはけしてでないように為景のすぐ後ろまで近づき座った

「何の話しですか？」

声に軽い苛立ちを混ぜて聞く
迷惑な事だ
ココには定実の少ない配下と品の一族。。そして自分しかいない場所だ
与えられている場所なのだから文句を言うのもおかしなものだが
強いて言うのなら為景にこんな夜更けに来て貰いたくはない
実は溜息を深くつき早めに用件を聞き出そうと質問した

「私は何にも勝ってなどいません。。。静かに生きるのみです」

実に歓迎されない事は承知の上の為景は壺を下ろすと

「わしは家督を譲る。。。「晴景(はるかげ)」に」

と答え続けた

戦いに明け暮れた「戦鬼」はもう望む物がなくなってしまったと告げ

背中を丸めながら御簾の中に向かって言った

驚くべき宣言だった

まさかという表情を読まれたのか

「晴景を助け越後を統べろ。。。」

と鬼は告げた

隠居すると

為景は

為景の姿は疲れていた

「晴景殿に家督を譲るのですか?」

「そうだ。。。わしにはついに「和子(わこ)」は出来なかった。。。今や晴景がいる事が「宝」だ」

感慨深い。。。つまり今度の子も「男」ではなかったのだ。。。御簾越しではあったが二人とも寄り添うように沈黙を守った

山から緩やかに吹き下ろす風に雪が舞う。。。

「それでいいのですか。。。。?」

実は耳にささやくように聞いた

「それだけしか。。。。もうしてやれん。。。。」

戦鬼は寂しそうに答えた

その25　二人静　（2）

一月の風。。。
冷たい風は山の頂から少しの雪を軽く運ぶ
はらはらと

「名前を頂いたのでしたね。。」

実(みのり)はあの日から今までの道程を今やっとゆっくりと邂逅していた
手にしていた扇をおろした
全てが「過ち」であったようにしか思えなかった日々が。。。。色
を失い形を失い風に吹かれ壊されていく

この夜の冷たい風に過去は切り裂かれ消えた
酒の壺を横に置いて為景は答えた

「将軍様にも憶えが良いだろう。。。」

京に住まう幕府の長
将軍足利義晴(あしかがよしはる)から偏諱(へんい)を与えられ弥六郎が「晴景(はるかげ)」となったのは三
年ほど前の事だった
同時についに長尾は「越後」の国主として認められるところまで上
り詰めた

「足場は作ったつもりだ。。。それがわしの全てだ。。後は朝廷と
のつながりを強くしてその威光をもって国をまとめるだけだ」

冷たい空気で透き通った闇の海に浮かぶ新月に杯を捧げて為景は疲れた身体をさすった
戦う事で精一杯だった生き方
父を急になくしともすれば路頭に迷ってしまいそうだった長尾家を引っ張りココまでやってきた

「百の戦をした男。。。戦鬼為景」

大きな背中も精悍な顔も
余すことなく傷をもち右手は指も揃わぬ状態になっていた
その手に実のは。。。御簾の下から腕を伸ばし手を重ねた
柔らかさのない手
でも温かい

こんな状態の生活ではあったが。。。いつ。。。越後を追われても
不思議ではない「上杉」の夫婦をけっして酷く扱ったりはしなかった
長尾の家から自分は投げ出され縋る思いと少しの「希望」を持って
上杉に嫁し定実と。。。山有り谷有りの日々
結局為景に頼らざる得なくなったがどれほどに定実が逆らっても決して「殺す」ような事はしなかった
言葉では何を教えるわけではなかった
でも
為景は「出来ること」を十分にしてくれていた

月日がやっとその事を実にも理解させ

過ちは。。。この国の礎に代われる時がやってきた

「私がお役に立てますか。。。」

為景は振り向かずに実の白い柔らかな手を握り替えして言った

「オマエは運強き女だ。。。必ず晴景の力になれる。。。助けてやってくれ」

お互いを慈しむ沈黙
あの時のような身体を結びつける意固地な信頼ではなく
手を重ねること
心はしっかりと繋がっていた

ほんのつかの間の「安らぎ」
永久(とこしえ)でも良かった二人の間は屋敷の門前を騒がす警護の者たちの声で実たちを現実に引き戻した

それはやってきた

月を肴に酒を酌み交わした実と為景
御簾だけ隔てられた二人の時間を切り裂いた声に

門衛たちが困り果てる騒ぐ
それは近づいてくる

実にも
騒ぎがこちらに向かっている事はすぐにわかったか
怪訝な表情に一瞬にして変わった為景は何がココに向かっているか

を理解した

何人もの門衛が「困惑」の声で走るそれを止めようとするがお構いなしだ
北の屋形の木戸を走り抜けてきた者

煌びやかな打掛を羽織った下は単だけ
その上で素足だ
右手には朱色の刀を持ち
よほど慌てて走って来たのか髪はまとまらずバラバラだが
若さの溢れるしなやかなさが黒髪を踊らせているようにも見える

為景ほど敏感にではなかったが実は目の前にあらわれた「女」が誰かはすぐにわかった
「目」
品が話をしていた印象はそのまま合致したからだ
細く華奢な身体に不自然なほど見開かれた大きな瞳

「おトラ。。。。」

息を切らした妻に為景の顔はよりいっそう疲れを表し溜息まじりの声は愚痴をこぼすようにその「名」を呼んだ

「何しに来た。。。こんなところまで」

まだ年若い彼女は御簾を睨みながら返した
「舞を見られに出かけられたと聞きました」

甲高い声は主人には「大人しく」振る舞った口調で話しを進めている

「ああっ舞を見に来た。。。オマエには関係のない事であろうぞ」

為景の声はあきらかに不機嫌だった
御簾の中の実は「鬼」の声色で話す夫に物怖じ一つ見せずに意見する「おトラ」の姿に驚いた

「舞なら私が踊りましょうに。。。わざわざ城下に出かけられる事などしなくとも」

おトラの目は為景の後ろを睨んだ
実は品の言った言葉の最後
女にとってふさわしくない印象「恐ろしい」という意味が少しわかった
御簾などこの目の前では無意味なのかもしれない。。。。射抜くような目線に身がすくむ

あきらかな「情念」の
あからさまな視線は為景の後ろに隠された「女」である実を刺す

夫婦の間にズレが生じている事を咄嗟に感じ取った
冷たい対面
来るはずのない為景の訪問。。。。。

「オマエが?。。。。オマエは刀を持って練り歩く変わり者。。。舞など無縁であろう」

あざ笑うような為景はそのまま大笑いをしたが
噂に高き栖吉の鬼姫は微動だにせず身体を舞わした

「刀の舞を馳走仕りまする」

そういうと朱色の柄をもつ刀を手早く抜いた
美しい白刃は月の光を蒼く宿し相反する篝火の光で「金色」の刃となった
その剣は大きく円弧を描き光の輪の軌跡を見せる

反射する閃光に
実はあっという間に魅せられた

二尺四寸の剣は軽々と艶やかな蝶の身を飾る
光の演舞
何よりもばたついた「音」をさせないすり足
若さをあらわす豊かな黒髪も活き活きと踊る

いままで見たことのない「剣の舞」に思わず御簾を上げてしまいそうになった

見ずにはいられない
久しく忘れていた「舞」に対する情熱をこの「おトラ」の踊りは呼び起こしていた

「なんと。。。見事。。。。。」

板間の限られた場でしか舞ったことのない実にとってこれほど斬新でありながらも所作正しい舞を見るのはひさしぶりで。。。。

「足。。。」

その所作の元である美しい足捌きを確かめようとした実の目に着物の裾が赤く染まっているが見えた

「兄様。。。おトラ様を止めて!!血が止まっておりません!!」

実はすぐさま思い出した

為景が突然あらわれ

おトラがそれに続くというめったにないうえにあり得ない来客が矢継ぎ早にあったせいで忘れていた

おトラは昨日「子」を産んだばかり。。。舞を踊れる身体ではなかった

御簾の後ろから為景の背中を揺さぶった

「やめよ!!」

暗がりの中とはいえさすがに為景も妻の足下に血がこぼれるのを確認して

手をあげて制止しようとした

舞の速度をゆるめながらもけして止まらず

おトラは答えた

「では。。。屋敷に戻ってくださいますか？」

「ああ。。。そのうちにな」
為景の返事は曇っている
妻の言い分を聞こう。。。。という態度ではなさそうだ

おトラ
顔には寒さをふきとばすほど
驚くほどの汗
「脂汗」だ。。。
身に覚えのある痛み
実は自分の腹を押さえた。。。あれは「苦しみ」だった
産んだ後など一月（ひとつき）は身動きかなわなかった

あの痛みの中で「舞」など。。。なんと気丈なと思いつつもあまりに冷たい為景を不信にも感じた

「子の誕生をお祝いしてくださいませ！！」

刀を鞘に収めたおトラはふらつきながら懇願した
為景は顔を背けて言った
「祝った。。。」

顔を背ける。。。
実の心にも痛みが走った
「産まれた」子を祝えない。。。親であった。。。自分
その事をおもえば
姫であっても長尾嫡流で産まれたのなら祝えばいい
おトラの気持ちが伝わる

「名を付けてくださいませ!!」

涙の混ざった声が己の身体を奮い立たせながら為景に迫って吠えた
吠えた妻に夫は酒壺を投げつけた

縁側から立ち上がった大男は怒鳴った

「オマエは。。。「あれ」が腹に宿った時「御仏に選ばれた」と言ったが!!腹から出たのは。。。。」

酒壺と一緒に持ってきた杯を地面に叩きつけた
破片は除けた雪の小山に刺さった
言葉を濁した後
思い切ったかのように

「あれは「禍々しい」塊(かたまり)ではないか!!それを祝えだと!!名などオマエが好きにつければよかろうが!!!」

怒り
戦に行くときはむしろ冷徹な「炎」である為景が我を忘れるほどに怒りを発していた

刀にすがりながら身体を崩したおトラは答えた

「いいえ!!「あの子」は御仏に選ばれた子なのです!!いずれ「越後」のために良き仕事をする運命(さだめ)られし子なのです!!」

爛々と燃える瞳は「嘘」を語る目ではなかった
「何か」に怒りを燃やし冷静さを失った為景よりも静かな態度に見

える

「何を。。。。何を恐れておいでなのですか。。。望まれし「大器」にございますのよ」

取り付かれたような仕草
両手で子を抱き上げるように見せる

「大器。。。だと。。。恐れだと！！」

言葉尻を噛んだ為景は刀を抜いた

「鬼め！！！」

「なりません！！！」

実は御簾から飛び出し二人の間に走った

為景。。。実。。。。。おトラ。。。。。動き出した夜

その２５　二人静　（２）（後書き）

ｍｉｘｉ

後書きからコンバンワ～～～ヒボシです

色々と頭を悩ませながら
ブヨブヨと横に成長しながらせっせっと活動中です（爆）

ところでミクシィのコミュというのに「カイビョウヲトラ」を作ってみました（藁）
あれこれＨＰみたいなのをつくってみたりしていましたがやっぱり人様のところだし。。。。

つくって何やったらいいのかわからないしなのでとりあえずこういうところでこっそり（藁）

という感じではじめました
ミクシィ。。。。
もしはいってて
興味のある方はコミュ名「カイビョウヲトラ」でいらしてくださいまし～～～ｗｅｌｃｏｍｅ～～

それではまた
後書きでお会いしましょ～～～

その25　二人静　（3）

出会ってしまった。。。。

荒ぶる為景を止めるために
目の前にいるおトラを守るために
御簾の中から実（みのり）は飛び出た

「子を産みし母に刀を向けるなど。。。あってはならぬ事です」

身構えた為景に刀を下ろすように目の前に身を挺し手をあげ頼んだ
刃（やいば）を振り下ろせない状況に
苦虫を噛み潰したような苛立ち
一気に駆け上がった血を無理矢理止めた為景はそのまま刀を鞘に収めた

武人
どんな怒りが心を駆けようと
女を切るような事は恥だ。。。ましてや「妻」

実の目で強く押される懇願を聞き入れた鬼はそのまま肩の力を抜き
どっかりと縁側に腰掛けた
為景が身を引いた事を確認して
後ろに。。。腹を押さえて崩れた「おトラ」に声をかけた

「大事ないか？」
いくら気丈にふるまっても腹を突く痛みは。。。抑えられるものでは
ない
舞を踊る
それも剣舞など。。。実自身では絶対にできない事をやってのけた
若年の。。
それも産後の彼女の肩を支えた
小刻みに震える身体。。。。熱を持っている

ふらついているおトラの肩を抱え「品（しな）」を呼ぼうとしたが
顔近くをかすめた指先に声が留まった

「。。。。。」

視線

荒れた息づかい
実の肩に白く細い手が絡む
ゆっくりと大きな目もつ顔が実の顔に息をかけるほど近くに上がっ
てきた
にじむ汗の額
艶やかで脈動的であのながらも細い糸のような黒髪
白い肌はほんのりと赤く蒸気している
そして

目

その目は実の顔をゆっくりと。。じっくりと睨むように見ていた

「腹に。。。だい。。じないか?。。。」

実の言葉は滞った
間近で見るおトラの目は背中の奥。。。腹の奥の奥までをも透かしてしまうような視線だ
しかも痙攣を起こしているのか額から頬がピクピクと動いている
「恐ろしい」
品の印象。。。。それは間違っていない

「オマエは。。。誰だ。。。」

顔の印象に比べると声は娘らしいだけど
声には十分な棘
荒れた息の間を縫って続ける

「誰だ。。。。」

肩に掛かった手に力が入る。。そのまま身体が跳ねて起きた時
実はおトラが自分より身の丈の大きい女だった事に気がついた
遠目には細く華奢で。。。そのせいで小さく見えた彼女だったが。。
斜め上から実の顔をしげしげと眺める

「誰だ」と聞かれて名乗らないのもおかしなものだが
ココが「上杉」の屋形とわかっているなら
聞くまでもない事と返事はせず

「大事。。。ないか。。。?」

心配はしているのだが。。。

熱をもった身体を支えながら
聞き返して
おトラの顔を見あげた

今でも十分に近い顔はグイと迫り目が刺すように見つめる
実の顔の部分をくまなく「何か」を探すように見ている
話しかけられている事などおかまいなしに
二人の
様子が変な事に気がついた為景は立ち上がった

多立ち上がった為景に気がついた
おトラの首がガクンと。。。折れたかのように極端に右に傾いだ
実の肩を両手で押さえたまま
今度は夫の顔を見ている

驚きと。。。。悲しみ

顔色は白く。。。開かれた目から溢れ出した涙がこぼれた

「似ている。。。。。」

呆然とした顔が為景に聞いた

「おトラ。。。鈴から手を放せ。。。」

機運に敏感な為景はおトラが「何に」気がついたのかを察知した
睨む表情はただ「怒り」ではない「戦」の呼吸を読むような顔
その中
実には何が話されているのかわからなかった
「何が？」どういう？
バラバラの言葉の断片

「おトラ！！身を退け！！上杉様に失礼であろうぞ！！」

急に肩に痛みが走った
実は自分の両肩をおトラの手が締め上げるように抑えてきている事に驚いた
「これ！！何を！！」

爪が肩を抉ろうとする
顔は右に傾いだまま近づいた

「おのれ。。。」

怒りに火
どす黒い色を臭わせた声
実のは混乱した
何が起こっているのかわからない
おトラを助けに間に入った自分が責められている

自分の事を為景の「何か」と勘違いしている？
声をあげた

「私は上杉定実の妻なるぞ！！」
首を掴む手から放れようとするが。。。これが「女」の力？子を産んだばかりの身重の力？
石のようにかたく抑えられる
はずれない
背筋に汗

すぐさま凍りつく汗

「弥。。。。」

実の耳元にこぼれた声
と同時に突き放された。。。いや実の身体は宙に浮いた

その元いた場所におトラの俊敏な剣が空を切った
斬撃は篝火の光をのせて煌めいて躊躇する事なく走ったのだ

「おトラ！！！」

怒声の主
実の身体が宙に浮きかわしたのは
為景の腕にすくい上げられたからだった
驚き。。。。

「私を斬ろうとした。。。」

肩がぶつけられた痛みに震える
朱色の柄をもつ刀を握り直す「怒り」の目に
本気の「殺意」は夜を照らす炎にあいまって「狂気」に変わった

恐ろしさと驚きに為景に抱えられた腕の中で実は言った
「斬ろうと。。。」
わかっているのか？
理解を遠ざけたのか？腕の中の実に為景は小声で言った

「顔を隠せ。。。見られている」

意識をつなぎ直して理解する
何よりも。。。
まさか。。。

気がついた？

おトラの見開かれた目は照準を定めたように実の一点。。。「顔」を睨んでいる
恐ろしくも狂気を孕んだ顔は「使命感」さえ感じる
お互い顔を見つめ合わせた時

牙を剥く
そういう表現が正しい
おトラは口を開いた無表情な顔から涙はとめどなく落ち

「おのれ。。。。」

牙の端から「恨み」が低く漏れ聞こえる
正常な意識が働いているとは思えない
身構え直す

「おトラ！！」

激する夫を瞳は見ていない

「顔」
実は御簾に戻って。。。
まさか。。。。そんな
顔を見て気がついた。。。。。私が「誰」なのか？
慌てて扇で顔を隠した
狼狽。。。息を荒くした肩で外を振り返った

すでに刀を身構え直している為景。。。その向こうの鬼嫁おトラの
光る目
事態は尋常な事ではなくなってしまっている

左手を妻を制するように上げて
「刀をしまえ。。。。斬られたいのか？」

太刀を下段に構え「戦」に赴く感情を纏った為景に

「いいえ斬りたいのです」

上に刀を構えたおトラは憮然と答えた
足下をつたう血
吹き下ろす風

「涙」

実の手に持つ扇は震えた

「過ち」を許さない者がココに表れた
涙を溢れさせた瞳は実の過ちという「過去」を斬り殺そうと立っている
もはや止められないのか。。。。
扇を共に手を合わせた

御簾の向こうに見える影におトラは自分の使命を打ち砕こうとする
「敵」を見た

その25　二人静　（4）

「くちおしや。。。。。」

扇をへし折ったのは剃髪間もない「おトラ」の母「菊」だった
白い頬をつたう涙
美麗な眉をしかめ
苦悩を表す
眉間の皺は悲しみと相乗する苛立を反映して深く刻まれていた

不慮の病死

栖吉長尾家の当主はあっけなくこの世を去ってしまった

「何故。。。。「虎千代」は死んでしまったのじゃ。。。。。」

母の口から出たのは元服を明日にひかえたのに
去年父よりも先に死んでしまった兄の名前だった
聡明で
優しかった兄
剣術も槍術も並々ならぬ強さを持っていた一族の希望であった兄は。
。。父と同じく病で世を去っていた

栖吉城表屋敷は急な喪失感をすべてがあらわにしていた
まるで城までもが息絶えたかのような沈黙の中に多くの者たちがいた
家臣団

国人衆
側室たち。。。。

部屋に集まった一族郎党はみな顔は生気を失っていた
加持祈祷（かじきとう）の願いは叶わなわず
薬師は栃尾から持ち寄った妙薬を何度も飲ませたが。。。父はそのつど弱り
母は手をにぎり声をあげた

「私の命をさしあげます！！戻ってくださいまし！！」

母の目から父の顔に降る大粒の涙
届かない願い
首を振った父の最後の言葉も同じだった

「虎千代。。。何故先に逝った。。。。」

悲しみは深く
苦しみは熱く。。。。迫る恐怖に変わる

葬儀さえままならないほどの「窮乏」
未だ越後は混乱のまっただ中にあり
栖吉は上田の長尾と秘密裏に連携をとり「長尾為景」から「守護代」の地位を奪い取ろうと。。。
そんな矢先の「死」

家臣たちの狼狽
城下に広がる不安
ただ祈る事がおトラに出来る全てだった

喪に服したいという心を抑え
母は城内の全てを手際よく切り盛りしていった
側室腹の男子を迷うことなく
栖吉の次代として継がせた

「オマエには使命がある」

一族が生きる道を探し出した母はおトラを目の前に
集まったみなの前で言った
今や亡き父の座に「当主」として座る母は重い口調でのべた

「長尾為景にオマエを「妻」として差し出す。。。。」

一族たちのどよめ
模索されて「生きる道」は苦渋への階段だった

厳しい表情の御台(みだい)菊は娘の愕然とした表情をしっかりと見ていた

十二歳。。。。
この年やっと「穢れ」が訪れたばかりのおトラの前にあった運命(さだめ)は
過酷なものだった

見る間に初々しい瞳に涙が溜まった
赤い打掛の中に隠れてしまいそうに伏した

「栖吉は。。。為景に屈する。。。」

気の強い母の涙混じりの声

そこかしこと響く
嗚咽
男達はもとより栖吉に侍従する全ての者たちがみな泣いていた
去年まで肩をならべて争えるほどの勢力だった栖吉だったが。。。
当主の死によって多くの国人衆が離れてしまい「戦」はもとより「年貢」さえも抑えられない状況になってしまった

小領主の心は移ろいやすい少しの出来事で簡単に家はつぶれる
それが「乱世」

このままいたずらに時がすぎれば
今度はなんの理もなく簡単に滅ぼされてしまう
力を失い混乱から立ち直れない栖吉を「上田長尾家」は見捨てた
「戦」に出られない手駒は足を引くだけの迷惑な存在だったからだ

ならば。。。それでも。。。同じ長尾に帰属するしか。。。道はなかった

生きるための道。。。。
一族を守るためにはその上に立つ者が犠牲にならねばならぬ時が。。。必ずある

屋敷の広間に集まった者たちすべてが
伏してむせび泣く
おトラを静かに見ていた

正室腹の女子。。。。これ以上の「生け贄」はなかった

おトラ。。。
手が震えていた
兄が死んでしまってから。。。女のもつ「感」というものが鋭くなっていた
祈り続けた
観音菩薩に寝る間など惜しむに足らぬほどの信心で
なのに
恐ろしきは来た。。。。不安を思って過ごしていた日々は現実のものになってしまった

数珠を掴み胸に当てる
鼓動は早鐘。。。。昨日までの敵の元に嫁がねばならぬ少女

「こんな酷い。。。。。」

敵に辱めを受けなければ生きられぬのなら。。。。死んでしまいたい
両手を奮わせながらも祈るように目を閉じる
閉じても。。。止まらない涙

その手を
母が掴んだ

「負けてはならん！！」

広間のみなが「敗北」という生きる道にしなだれていた中で声も大きく母は言った

「膝を屈しても頭をさげてはならん！！」

悔しさに心を折り
全てが落ち沈んだ場で母は身を翻し吠えた

「今は。。。。今は屈辱の元に下らねばならねども！！これよりは長尾為景の腹に入り雌伏を待つ身になっただけ！！その一歩として「おトラ」は行く。。みな心せよ！！」

夫なくしたその場で自ら髪を小太刀で切り落とした妻菊姫はその強き気性にまかせ
自分を奮い立たせるように拳を振った

「負けるのではない！！！生きるのだ！！！」

おトラは顔をあげた
「生きなくては。。。」
自分が死ねば一族は路頭に迷ってしまう。。生きる道を選ぶことが「栖吉」という家を生きながらえさせ「戦」を続ける道となる
負けて死ぬのは安いこと。。。。

母の目は心を奮い立たせるために怒ってはいたが。。。涙は隠せてはいなかった

哀れみではなく
自分をみる全ての者たちが「祈っている」事に気がついた
まだ幼い侍女たちも震える手を一心に重ねている

「おトラの信心がきっと栖吉を救う日がくるよ」

優しかった兄の言葉が思い出の中でこだました
涙の目を見開いた

「これが観音菩薩の示された道でございましょう。。みなが祈ったからこそ生きる道が開かれたのです」

強く握られた母の手に頬を寄せて言った

「栖吉は生きるために忍び戦うのです!!ならばこの身を使わす事は私の「出陣」でありましょうや!!」

十二の娘は母の気性を良く受け継いでいた

「よう言うた。。。。」

耐えられぬ感情で母は娘を抱き寄せた
「虎千代が生きておったのなら。。。オマエにこのような思いさせずにすんだ事であろうに。。」

おトラは首を振った

「いいえ兄様なら私の出陣を喜んでくださった事でありましょう！！」

娘の細い身体を強く抱いて母は泣いた
泣いて
泣いて
言った

「よう覚悟を決めてくれた。。。」

その姿に当主の死によって急遽その座に着いた妾腹の兄。。。。
昨日元服したばかりの「景信（かげのぶ）」が涙ながらも決意の大声を上げた

「栖吉の城はわしが立派に守ります！！姉様を当主とし「力」と成られた暁には全てを上げて戦います！！！」

男衆たちが吠えた
幼い殿君。。姫君の決意に各々が心を立ち上がらせた
その中には「金津新兵衛（かなつしんべえ）」もいた

御台「菊」は覚悟の歓喜に答えた
素早く振り返り飾り棚にあった小太刀を抜いて

「栖吉虎姫（すよしとらひめ）！！」

美しい両刃の小太刀は鋭く輝く
刃元に刻印された「栖吉虎姫」

「オマエのために拵えた。。。。もしもの時は為景の首をとってまいれ！！」

「母上。。。。。」

母の目に浮かぶいっぱい涙をおトラは自分の瞳を見開いて焼き付けた
温かな手
自分の震える手を強く握った母の手に今一度頬を寄せた

「行って参ります。。。。けっして負けません。。。。。」

幼い姫の言葉に栖吉の衆はみな頭を下げた
ひれ伏しながら口々に言った

「栖吉虎姫！！」
「栖吉虎姫！！」

広間をうめる涙の唱和

それはいまでも忘れない「覚悟」と「決意」の日の事。。。。。

荒波の運命（さだめ）に導かれおトラは為景の元に嫁いだ
そして
為景に。。。。強き男に自らの運命と栖吉の「全て」を賭けた

なのに。。。。。

今

為景と刀を向け合っている

運命(さだめ)を狂わした女を。。。御簾の影になっている姿を睨んで言った

「決めました。。。。子の名前は「虎千代」。。。。。」

その２５　二人静　（４）（後書き）

大修正

後書きからコンニチワ～～～ヒボシです

先々週ぐらいに
修正をします～～～発言をしましたが
今日「その１　元服（１）」の修正版をｕｐしました

なんと難しい作業だった事でありましょう。。。
一度書いてしまったものを
今一度。。。現在の部分と同じぐらいのテンションで書くという作業はぶっちゃけ無理

めっちゃ疲れましたし
未熟であった自分にバラ鞭（爆）食らわしながらのｃｈａｍｐｉｏｎｌｏａｄでした（藁）

ところで
大修正ではありましたが
基本的内容自体はあまりかわっていませんからご安心ください
最初の頃の言い回しや
登場した人物を整理し直しただけですから

それでもお時間が許される方がいらっしゃれば読んでいただけたら嬉しいです
ただ

「その1　元服（2）（3）」も修正しないといまいちバラバラな感じにとれてしまうかもしれませんからもうちょっと待って頂ければ「元服」の章を完全修正できるとおもいます！！

随時連載と平行してやっていきます！！
ココ何日か多忙でなかなか更新速度が滞りがちですが努めてがんばっていこうとおもっております！！
これからもよろしくお願いします！！！

それではまた後書きでお会いしましょ～～～

その25　二人静　（5）

あの後
喧噪は向かい合う荒神の二人を家臣達が止めるという事態で終着した
腰を据え低く構えた為景を「直江酒椿」とその息子「実綱（さねつな）」
そしてまだ年若の近習「本庄実乃（ほんじょうじつの）」が止めにはいり
上段に構えたおトラの身体を侍女の「萩（はぎ）」が必死に止めた

実自身は
中庭の騒ぎに気がついた「品（しな）」に引かれ足早にその場を去る事になったが
振り返り
扇越しに感じたものを見た

「目」

御前の目は篝火に照らされ赤い縁取りに飾られ血の涙を流したまま。。。
物言わぬまま
静かに睨んでいた

あの目があの日と変わらぬ眼差しで御簾の奥に座る自分を見ているところで思い出に区切りがついた

「あの時。。。あなたを仕留め損ないました。。。。」

恐ろしきを意に介さぬ言葉
実(みのり)の正面に戻った虎御前は。。
さも
残念な事であったという態度にしては軽々しい動作。。首をカラカラと左右に動かした

忘れる事に専念してきた出会いを鮮明に覚えていた虎御前。。。
実は。。。
忘れてしまいたかった事を相手の言葉の礫によって深く思い出す事になった

打ち下ろす冷たい雪を呼ぶ風
静寂の部屋の中は明け放たれた窓によって灯りを失っている
闇の中を止まる事なく歩き回っていた御前は実の正面に近づいた

「では。。。今日。。私を仕留めると良い」

ユラユラと揺れる御前に実は覚悟を告げたが
返答は笑いだった
笑いながら御前はまたも実の御簾の真ん前身体が触れてしまうほど近くに歩を進め青色に金糸を織り交ぜた打掛を開いて見せた

「まこと残念。。。刀を持っておりませぬ」

「手でもよかろう。。。それほどに深き情念であるならこの首を折れるであろう」

悪ふざけか

自分を見下したまま目の前に立つ御前に実も強気で言い
扇を閉じそのまま自分の首筋にあてた

「そのような事はもはや無意味にございます」

相手の覚悟を機敏に感じたのかつまらなそうに御前は返答すると
その場に座った

「では家中を乱すような発言は控えなさい」

覚悟を決めた実は恐れることを止めて
座った御前を叱責した

御前は揺れる
揺れたまま答えた

「貴方と私で決着をつけるなど。。。そんな安いものではないから。。。。無意味と申したのです」

狂気は揺れたまま不敵に話しを続ける

「貴方の「子」の命も頂かねば気が済みませぬわ」

実は愕然とした
そしてそれを止めたいがために自分を「仕留めよ」と言った事が見
透かされていた事に気がついた

「子の「命」。。。。」
「あの子」の。。。。
口元を隠した言葉は震えてこぼれる
それを聞き取られまいと掬おうと扇を開く

やはり
虎御前は気がついていた

「よく似ておられますな。。。。」

月の光に照らされた御前の顔は冷静な言葉運びとは違い「怒り」に
満ちていた
「何の話しを」
よろめく言動の実のごまかしに怒りは飛び出した

「ゆるさんぞ。。。「私の為景様」を誑かした腐れ女め!!」

実は泣きそうになった
涙をまたも零してしまいそうなほど胸を締め上げられた
今この場から
救い出されたい。。。いや逃げてしまいたい
心は鞭打たれ。。。千切れそうになった

あれは「過ち」

でもその時には死ねなかった自分
時は
時に必要な使命を与える

その使命に答えるために必要だった道程
あの時は
そうしなければきっと死んでしまっていたであろう。。。。
それでも
明日を生きることさえ苦しみ捨てられた花のままではいられなかった自分だ
虎御前がこの世に生を受ける前に。。。。上杉と長尾をつなぐ役目を受けた自分に科せられた試練を

「役立たず」。。。

自分を罵った者たちの言葉が頭の中に戻る
今また言葉は姿を変えて自分を罵っている

身体が前のめりに崩れた
髪がこぼれ落ちる

すでに櫛の幾束かに白いものが混ざり始めている初老の自分が未だ若き日に犯した「過ち」に苛まれる日がこようなどとは。。。思いもよらなかった

御前は立ち上がって帰りの戸口に向かった

「われは決して負けぬ。。。決して貴方を許さぬ」
「待ちなさい。。。。虎御前。。。」

胸元に登る痛みを必死に抑えて御前を呼び止めた

「だからと言って。。。今長尾の家を騒がす事が正しいと言うわけ

ではありますまい。。。今だからこそ守護代に従い国をまとめる時
でありましょうに。。。そのためになら私はいくらでも罵倒もうけ
ましょう。。。だから」

哀願に近い声
もう何も掻き乱してほしくわない。。。
倒れ込みそうな身体を震わしている実に御前は冷たく言い放った

「越後守護代の職。。。腐れ女の「子」に勤まると？」

闇の雲に月は隠され顔を照らす光は消え
わずかな星の輝きが御前の瞳に光りを与えて輝かせている
まるで猫の目のように

「為景様だけでは足りずその職さえも我から奪おうとするとは。。。
あつかましい！！」

全てを奪った？
私が貴方の？
「簒奪者（さんだつしゃ）」と
実は目からの涙を止められなかった

自分こそ。。。全てを奪われてきた側の者「舞」を奪われ
生きる道を閉ざされ。。。
その中で必死にもがいた結果に「あの子」はいた
だけれど許されてはいなかった「親」として相まみえる事は叶わず
顔を見ることもできなかった
幼い乳飲み子だった。。。小さな手にさえ
触れる事もできなかった
耳元を離れなかったあの子の。。。産声。。。

だからこそほんの少しでも「あの子」の力になりたかった
それによって。。。御簾越しであってもあの子の成長を見られる事
が生きていく糧だったし
そうしていく事が上杉と長尾をつなぐ仕事の
実の原動力だった

のけぞり牙を見せる御前を見返した
虎御前。。。。同じぐらいの苦しみの中にいたのか
自分事で精一杯生きてきた報いなのか
今初めて相手の事を考えた

栖吉の。。。一族全て命運を背負って為景に嫁した
幼い姫君
そこでどんな愛情をはぐくんだのかは。。。
わからない

でも

「私の為景様」

その言葉で十分
妻であったこの人を心を苦しめていた事

「虎御前。。。それでも今は晴景(はるかげ)殿しか守護代の任をこなせる者は
おりますまい。。。職を奪うと言われども。。。そなたが守護代に
なるわけにもいかぬであろう。。」

そうだ
今。。守護代の地位を「上田」の長尾に任せたとてまたも「混乱」を引き起こす事は必至
ましてや実家を見放した「上田長尾」に守護代職を与えるなど虎御前自身が許すまい

その上で
虎御前が守護代になるなどあり得ない事だ

思わず御簾をあげてしまいそうになりながらも
破裂してしまいそうな自分の心を両手で押さえながら一生懸命に説いたが
御前の返答は驚愕のものだった

「長尾家の。。。為景様の正統なる嫡子は「トラ」しかおらぬ。。その事をお忘れになってほしくはないですな」

「影トラを守護代に?」

驚き
行き交った声が一瞬にして凍る

「影トラは女です。。。そんなものにはなれません」
「成ります」

まるで当たり前のような返事
そんな事があるわけがない。。。今までにも例がないし実には考

えよらぬ答えだった
驚きで言葉を続ける事が出来なくなってしまっている実をよそに
戸口にたった虎御前は両手を広く空に向かって上げて牙を隠した口は大きな声で笑った

「あの子は御仏に選ばれた子。。ただの「人」にあらず!!!」

自信に満ちた顔
あれは為景に「大器」であると言った時の表情と同じ。。。
しかし
為景はその存在を「禍々しい塊」と称していた。。。
災厄は好事と紙一重。。。
見る者の目によって事態は大きく違ってくる。。。そういう事なのか?

戸口の向こうに消えていく御前に。。実は問うた

「影トラとは。。。何者?」

闇の雲間から蘇った月の光に照らされた顔はうっとりとして言った

「我が身から出でたる「御仏」を守りし者なり!!」

その25　二人静　（6）

一夜を眠れぬまま客間で過ごした実(みのり)は
朝早くに晴景(はるかげ)呼び出した

「昨晩はご挨拶もなく。。。申し訳なく思っております」

幾分落ち着いた顔の晴景
声の様子も酒を残している感じではないし
病で弱っている感じでもない

「そのことはもうよろしい。。。私は争いを望んではいません」

実は本題を率直に告げた
いつもなら遠巻きに話しを始めるのだが
昨日。。。虎御前(とらごぜん)と己の運命(さだめ)を叩きのめされるほどの会話があったばかり
座していれば物事は良い方向に進む訳ではない事は痛いほどにわかった
だから
取り返しのつかない事になってはいけない。。。足早く「釘」を刺さねばと
忙しくなった心のままに
眠らず考えた事を晴景に告げた

「争い？とは？」

首を傾げた晴景は穏やか口ぶりで返事をした

「影トラを討伐するなどという「長尾」に溝を作るような争いをしてはならない。。。と申しているのです。。。もちろん虎御前のあの言葉は無礼でありましたが。。座興での戯れ言でもありましょう。。昨日その事は叱っておきました故に。。。重ねて争いのない事。」

「討伐は決定であります」

急かす気持ちで口早く用件を告げようとした実の声を
眉を少しだけしかめた晴景はあっさりと切り続けた

「今朝はそのための軍議があります故に長く時間をとる事ができませぬ」

すでにこの部屋から出て行こうという勢いだ
実は着物の前を押さえた心の蔵は昨晩と同じぐらいに痛む

「待ちなさい。。。影トラは春日山に恭順を示しているではありませんか?それなのに力でぶつからねばならぬのですか?」

冷静に考えた
夜は十分の時間を与えてくれた
指折り考えても。。。「討伐」は理に合わないものだ
「討伐」の的になっている影トラ自身からは「謀反」の気は一切出ていないし
むしろひれ伏している状態だと聞いている
それなのに「討伐」という言葉を放って引き下がらない晴景はおかしいと言わざる得ない

「争い望んでいるのは貴方ではないのですか?そのように聞こえます」

実はあっては成らないことと釘を刺すつもりで口調を強めて言った
自分の前
御簾を挟んでさらに遠くに座している晴景の表情は急に険しくなって

「ええ。。。。望んでおります。。。。わしが「争い」を。。。。」

静かな怒り
病がちで色の白い額に怒りの皺。。。
愕然とする答え

「何故。。。。何故ですか。。。。」

晴景は姿勢を正した「覚悟」を示す言葉は実の胸を刺し通した

「誰が長尾の「正統」なる跡継ぎかを示すためであります」

「正統」なる
まるで虎御前の言葉を聞き取っていたかのような答え
「何を言っているのですか。。。。貴方は為景様の後を継いだ立派な長尾の当主ではありませんか?」

喉を通る声が震える

晴景の態度は何かを「試して」いるようにも見えた
御簾の中を透かそうとする切れ長の目
その上に同じように伸びやかに整った眉。。。。は美しい

扇越しに今まではチラリと見る程度でしかなかった「子」の顔をじっくりと見た
薄い唇ながらもきりりと閉まった口元
顎だけに蓄えた髭。。。。

「似ている」

まるで自分と向かい合っているように。。。

そんな沈黙を晴景は破って言った

「確かに。。。わしは父から守護代の地位とともに長尾の家督も継ぎましたが。。。それを良く思わぬ輩にとってわしは。。。「誰」の子かと言われていた事があります？」

扇をさらにあげ顔を隠した
身体を守るように強く固めた。。。
倒れてしまいそうになった

誰の子？

「貴方は長尾為景の子ではありませんか。。」
「はい。。。父の子でありますが。。。。」
冷たい声の主は実の顔を見ようとしている。。。。

「母は知りません」

実の心は壊れてしまいそうだった
あんまりな言葉
でも
だけど
混乱してしまう心
告げるべき言葉が出てこない

二の句を絶たれた御簾の影に晴景は続けた

「わしは母を知りません。。我が家臣もわしの母を知るものが。。
ほとんどおりません。。故に常に言われてきました「どさくさに紛
れて」父の子になったと」

心を叩く
何度も
実は今一度身を起こした

「しかし。。貴方は現に守護代。。今更そのような事。。」

怒りに着火する
晴景は声を荒げて言った

「今更。。。まさに今更にございます。。たかだか「父の後妻」の
子に「正統なる」などと言われたくはありません!!!」
「そのような事いったい誰が申しているのですか?」

苦悩に満ちた晴景の目は御簾から離れた
小さくセキをしたあと立ち上がりながら言った

「昔から。。。。長尾の家の者なら。。みな知っております」

縋るように聞き返した
どうしても引き留めて

「私は知りませんよ。。。そのような事」

すでに声に涙が混じっているのは誰にも聞き取れた
晴景の後ろに控える水丸にさえ聞こえただろう

「上杉様にそのような事が知れれば。。。長尾との間にいらぬ亀裂を産むやもしれませぬし。。。それにこれは長尾家の「恥」と扱われてございます故。。知る必要もないと存じますが？」

知らなかった。。。。。知らされてはいなかった
そうだ
何事も為景を通して語られていた。。。。外の出来事など。。。
だが考えてみれば解る事だ。。。
為景はどうやって晴景を自分の息子にしたのだろう。。。。同時期に流産なさった正室様の子？
そのぐらいしか聞いてはいなかった

だからなのか？
為景がそれに代わるものとして将軍からの偏諱（へんい）を頂いたり
晴景に色々と計らってくれたのは。。。

「待って。。。」

手を御簾に伸ばした。。
晴景はすでに部屋を出てしまおうとしている
引き留めて

。。。御簾を開けて。。。。

ダメ

でも開ける事は出来なかった

「母を知らないから。。。。」

ならば今ココで私が「母」であると名乗ってしまえば。。。この争いは絶たれる？
いや
そんな事をしてしまったのならば
晴景はいよいよ立場を失ってしまうその上。。。こんなにも罪のまみれた自分を愛し慕ってくれる「定実（さだざね）」の立場まで無くしてしまう
定実のみならず。。。「上杉」の家名を落とし。。。
「長尾」の名までも。。。。

声を上げた
悲鳴にも近い声

「それでも争いを望んではおりません！！」

振り返った晴景は言った

「わしも出来ればこんな事はしたくないのですが。。。誰がお屋方（為景）の正統な後継者であるかをはっきりさせなくてはなりません。。。それも勤めにございます」

御簾の中。。祈るように伏した実の姿に部屋を出る彼はまるで自分に言い聞かせているかのように言った

「討伐は決定であります」

冬を近づけるかな雨の中
実は奥の中でただ泣いた

何も救われてはいなかった事に今更。。。晴景の言葉ではないが今更気づかされたのだ
自分だけが生き残る道にいた事。。。
残した「あの子」がどんな思いでそれらの日々を過ごして来ていたのか。。初めて知った

もはや
出来ることなど。。。。影トラが晴景の臣従のための条件を素直に聞き入れるようにと「祈る」事だけだったが
それは叶わぬ願いとも思えた

虎御前ははっきりと「あの子」の命を頂くと宣言している
この争いは。。。避けられないのか。。。。

それでも祈らずにはいられなかった
ただ流れる涙のまま手をきつく重ねて祈った

今はもはや死ぬことも「役に立たない」自分を呪いながら

その25　二人静　（6）（後書き）

元服2。。。

後書きからコンニチワ～～～ヒボシです

かなり更新が滞ったりでご迷惑やら心配やらかけてますすいません～～～

今日
元服（2）を修正しました
最初の頃。。。。

なんて簡潔にドンドンと書きたい方向へ突っ走っていた事かと反省ばかりです
今回の修正で
ジンとトラの関係を少し大きく書いてみました
なんの縁もないのに「ただ必死」になっている感じにみえる最近のジン君の方向性をきちんとしたかった事があっての改訂でした

ジン君。。。
ヒボシが思っている以上にファンの方がたくさんいて
ほんとヒボシも嬉しいかぎりです
彼は。。。。
武田信繁が出てこなければ（爆）
まちがいなく準主人公でトラの次につくキャラだったのですが（藁）

いや
もちろん
信繁は武田の人ですからそんなに頻繁にでてはきませんけどね（藁）

でも
未だ重要なキャラである事に変わりなく
トラにとって必要な人でもあります
これからさらに過酷な運命に進む二人ですがどうか見守ってやってくださいませ！！

それではまた後書きでお会いしましょ～～～

その２６　激流　（１）

実が失意の中での帰路についた頃
春日山は突然の陣触れによって混乱の中にいた

よもや柳のように諸将の意見に振り回されて自分から決断を下すことのなかった晴景が。。。

「討伐」を決定してしまうなど考え及ばぬ事であった

「今しばらく。。。栃尾に使者をお使わしになってからでも」
「決定である！！」

直江以下春日山に詰めていた重臣たちの前
声高らかに晴景は質疑をぶつける家臣たちの言葉を絶ちきった
華麗な扇を開くと
決定を覆す事は決してない意志を顔を現して続けた

「春を待ってからでは。。。「芽」が出てしまってからでは遅い。。。」

並ぶ家臣たちはおよそ初めて見る
「怒」の晴景に二の句を告げられなくなってしまった
普段ならぼんやりとした印象しかない姿に「鬼」がかさなって見えるほどに

「しかし。。。これよりしばらくは兵を集める事などできません」

直江は他の者とは違い怯まず答えた
先代の「戦鬼」の時からこの城に参勤している直江が怯んでしまっては他の者の立つ瀬が無くなる
そういう事もふまえた上で身体をさらに前に出すように意見を続けた

「収穫が終わるまで。。。兵を集められません少なくとも一月(ひとつき)。。ですから。。」

「その一月で使者を送られたらよろしゅうございます!!」

直江の必死な談判に気がついた者が口を揃えた
今は丁度収穫の時でどの所領も人手を割けないのは事実だ

扇で片目を隠した晴景の口元は笑っていた

「よかろう支度に一月。。。使者も出そう」

なんとか引きとどめたい気持ちの直江はそれでも警戒を解かず

「事はその後に」
と拳を床に打ち付けて念を押した
いつもなら直江の意見に気押されてしぶしぶながらも頷く晴景だったが
今日は違った
笑う口元は告げた

「そうだ一月後に「出陣」だ」

愕然の切り返し
扇を払った両の目に宿る決意は揺らがなかった
そのまま顎をあげて続けた

「使者には。。。。完全な「降伏」を告げさせる」

誰もが蒼白の状態の居間から立ち上がった
もはや誰の意見も届きようにない中を足取りただしく進みながら言った
「願い通りだな。。。直江。。。頼むぞ」

直江にも告げる言葉がでなかった
晴景の意気込みに偽りがない事が明白にされた

二の屋敷から夫の後に付いて表屋敷に向かった綾は政景（まさかげ）に何度もお願いしていた

「栃尾に。。。影トラを討伐するなどお断りください」

綾は。。。母，虎御前の様子からもこの事態が尋常な事でない事を何度も夫に言った
一晩の間
政景は眠れなかった虎御前の罵倒の果てに「出陣」を下された自分が。。。まぬけに思えたのは綾の説得にもあった

あの場の雰囲気に乗せられた
宴を催した時に決意を思い出し
妻の言葉で反省しきりになっていたが

結局そういう反省は何もかもが遅すぎた結果になった

「一月後。。。栃尾に向かって頂きたい」

晴景は軍議に送れてきた政景を別室に招くと躊躇なく告げた
自信に満ちた表情は
当たり前の裁定をくだしたのだ。。。と言わんばかりだ
政景が意見を交わそうと伏せた面を上げる前に綾が口をはさんだ

「待って下さいな！まだ影トラが「謀反」の気をおこしているわけでもないのに。。。それも出陣だなんて。。。」

頭を上げた政景は綾を止めようとしたがだまらなかった

「血を分けし妹ではありませんか！！」

身体を前に乗り出さん勢いの綾を政景が止めたとき
晴景は溜息を落とした
「だからこそ。。。わしが「鬼」にならねばならん」

不敵。。。
扇を仰がせ

自分手を確かめるように晴景は沈黙を守っている政景に言った

「この一族の争いに決着をつけるのにわしが決断を下さぬという事はあり得ぬ事であろう」

「ならばご自分が大将として出陣なさるのがふさわしいと思いますが？」

晴景の発する言葉の「謀（はかりごと）」に躓かぬように静かに話しを聞いていた
政景は「一族」という言葉を逆手に取った
小間使いのように晴景にいいように使われるのはまつたく「愚行」だ
自分が冷静である事を綾の手を掴み確かめた

「それではわしが「隠居」できない」

身体を後ろに反らせた晴景の目は

「安心して隠居したいと思うておるのだが。。。。」

「隠居」？
政景には驚きの言葉だった

「ではこの争いが終わったら。。。「隠居」なさるおつもりと？」
若さは我慢のきかない心を忙しくさせ
晴景の言葉に乗せられていく

「そうじゃ。。。そのためにはみなが認める「武功」が必要だとは。。。。おもわんかな？」

「越後守護代」

それは長年政景とその父が狙っていた職だ
為景と何度も争い
それでも手の届かなかった職が。。。。いとも簡単に転がり込む所にある

晴景と争う事なく。。。
政景は手のひらを広げて見つめた
自分の浅はかな「策」ではどうにもならなかったものがすぐ近くに。。。。

「何故そうまでして影トラを追い落とすのですか？」

綾は抑えられた手を政景を宥めるように握り替えしながら
それでも負けぬ勢いで晴景に詰め寄った

「一族の問題を解決出来た者が。。。。。ふさわしいと思う」

聞き流す
綾の言葉などもはや二人の駆け引きの中には必要無くなっている

「無理にとは」

駆け引きの綱は晴景の手の中にほぼ納められた

「いや。。やりましょう。。守護代様のおっしゃる事。。まこと真理なり」
政景は綾の手を自分の方に強く引き寄せた
「あなたさま。。。」

困惑の表情の綾
それに政治景は心配無用と首を振った

「では引き受けていただけますな」

全てを操った晴景は満足そうに言った

「万事お任せ下さい。。。。望む結果をお伝えできる事でありましょう」
政景の野心は大きく燃えさかった瞳の炎となっていた

「守護代様が。。。自ら出陣するのか？」

手下として預けていた者は顔を曇らせながら答えた
「いえ。。寄せ手の大将は「長尾政景殿」との事です」

宇佐見は文台から筆を落とした

枇杷島（びわじま）にて「陣触れ」が出たことを宇佐見（うさみ）が知ったのは
春日山での騒ぎがあった二日後の事だった

予想。。。何通りかの予測

「とりあえ。。。。晴景の下についた。。。。か？」

「晴景様はこの戦が終わったら隠居なさるおつもりのようです」
さすがの宇佐見も驚いた
立ち上がり小窓をあけ海をみた

「つまり勝てば政景は守護代になるのか？」
回転の速い宇佐見の頭は幾通りかの状況を考えていた
その中に。。。。晴景の「隠居」はなかった
というか意外な展開すぎた
権力という職にしがみつき春日山は結論を下せないであろう。。。。
とさえ思っていたからこそ
あの怪聞を流した

「しかし。。。政景殿では。。揚北はともかく。。栖吉は絶対に従うまい」

駆け引き。。
政景は妻に「栖吉」の姫を。。。頂いている
横の血は万全。。。なのか？

「どうされますか？陣触れは一月後には出ます」

「陣触れが出てもすぐには兵を整えられないだろ。。。」

冷静に考えても
出陣で兵が集まるのに二月（ふたつき）

秋は終わる

まだ時間はある宇佐見は次なる策を講じようと思っていた
できるだけ自分を高く評価する者に付き「軍学」の統べをつかう戦がしたい
それが願いだった

だが
そんなこざかしさをあざ笑うかのように五日後。。晴景は己の手のひらに描いた「戦」を始める

「栃尾討伐に参陣せよ!!」
政景は息を巻いた陣触れを発した
全ての諸将が呆然とするほどの迅速さで自らの旗本衆をいきり立たせた

もはや流れはとめられないところにきていた

城内でその気勢を目を細くして見る晴景
急転する出来事に心を悩ます綾姫
そして直江たち家臣団

遠く裏屋敷で男達の気勢を虎御前は静かに聞いた

「やっと。。。「戦」。。。。」

その頃
栃尾のトラは未だ混迷の中にいた

その２６　激流　（１）（後書き）

血族。。。。

後書きからコンニチワ～～～ヒボシです

過去の回想からもどって
たった一日の間にあった思い出話。。。もっと簡潔でもよかったのでは？
と
思う半面
こういう人生という積み重ねによって
鈴姫だった小娘が「実様」になり
おトラだった小娘が「虎御前」になり
培われた人生観によって物語の重要な部分として進展していくところだと思い
がっつり書かせて頂きました

さて
この時代
一族が滅びてしまう。。。。という事は「菩提」を弔う事もできない
無縁仏になりかねないという縁起をかつぐ武士にとっては
あってはならない事態でありました

血族というものは大きい
だから
晴景様の「母上不明」というのは長尾の家においても少なからず問題であったとおもわれるのです

不公平な社会です
女は「妻」または「女」としか家系図に記される事がないのに
その血についてはあれこれと文句を言われた時代でした
そういう意味では
存命していた為景と虎御前の間に「いわくつき」で産まれたとしても
トラは直系と言い切れました
そしてそれを長尾の一族も臣従する家臣も求めていました

では晴景様は。。。。直系じゃないのか？
前序のごとく
実様（みのり）のいわゆる「不貞」によって産まれた晴景様はほぼ無理矢理
為景がねじ込んだ「自分の子」でした
たしかに父親は長尾の当主
直系ではあるのですが。。。。。正統とは言い難いのです
上杉の妻であった「長尾」の女。。。。
そういうふうな略奪婚があったとしてもこれはあってはならない事
ましてや略奪で産まれたのならなお家に認められない時代に
どさくさにまぎれての兄妹婚（注．結婚はしていない）の末にできた子供

そして
それはずっと春日山では疑われてきた事でした
それ故に家臣団はなかなか一致する事ができなかった。。。という
背景につながります

為景は家督を譲る時に「晴景を助けろ」と実様に告げています
上杉と親密で穏和な関係を繋ぐ事ができるのは。。。
人には言えぬ関係になってしまったとはいえ
実は「母と子」である実様と晴景様でしかないからです

そういう背景をフォローする意味もあって実様は「定実代行」としての任務にも就き
晴景様の近くにいたのです

ただ
その内訳はしらなかったのですね
前回晴景様に言われるまで

きっと
血族という縛りによって晴景様は「母無し子」という誹りを受けてきた事も多々あったに違い有りません
そして
ココにきて

「正統後継者」という大儀を振りかざした虎御前

一世代前。。。。
生きることに一生懸命だった為景。。。鈴姫（実様）。。。おトラ（虎御前）
その混迷は
今終局に向け走って行く

いよいよ

「米山合戦」に突入していきます

注．上記の設定は小説「カイビョウヲトラ」での設定であり史実とはなんの一致もありませんのでご注意ください

次回は後書きに思い出編（藁）（月華，二人静）の人物評も書きます～～

これからもよろしくおねがいします！！！

それではまた後書きでお会いしましょ～～～

その２６　激流　（２）

栃尾の屋敷の中は朝なく夜なく騒がしくなってしまっていた

私はそういう音で「事態」が相変わらず収束されていない事に気がつく

兄上からの手紙は一行に届く気配はなかったが

そういう物を待っている。。。。という態度が事態を悪化かさせているようにも思えた

良い方に物事は進んではくれていない。。。

私が「覚悟」を示さなくてはいけない

ここ何日かの読経でようやく私は一つの結論に至った

「覚悟」だ

小太刀を取り出した

「栖吉虎姫」

母上が願う安住がこんな事ではなかったと。。。

こんなふうに越後を騒がす事を私にしろと。。。そんな風に思ってこの小太刀を渡されたわけではなかったであろうに。。。

きっと今頃

心を痛めておられる。。。。

私は。。。。ただ越後を。。。「良いこと」と信じていた
涙がこぼれた
何度も思った。。。。「間違った」

何度もの「戦」は
おりかさなった私の「間違い」だった
兄上が望んでいた「平安」は「戦」によってなされるものではなかった
だから私の「戦」は間違っていた。。。

ただ
ただ
越後に住む全ての者達に「平安」が訪れる事を願い走り続けた。。。
「つもり」だった
だけど
「戦」に行くのは私の「修羅」の心のなせる業
敵の死を笑い
その首を取り相手を討ち果たす事が「闇」にとらわれた自分を喜びに導くという。。。
修羅道の「鬼」だ

そうなる道にしか繋がらなかった
これほどに血にまみれた姿をみれば

その姿を人がみれば「謀反」の気を感じるのも。。。否定はできないのかもしれない。。。。

手の甲で涙を拭った
何度も祈り何度も。。。泣いた
袖も涙で濡れて冷たい

それでも「越後」を思って戦ったのです。。。
こんな苦しい気持ちが兄上に届いてくれる事を信じていたが
そういう他力本願な思いでは。。。きっと許されない事だ
手紙のお返事がくる前に
その前に。。。。。「覚悟」を示さなければ。。。。

小太刀を抜いた
心はもう決まっている

刃を高くかかげた

「陣触れがでた?」

朝餉(あさげ)の膳を前にした実乃は
挨拶もせず
飯の時さえも惜しみ自分の元に参上した段蔵に顔を近づけて聞いた

「春日山からの正式な使者が来るのは一月(ひとつき)以内。。。その前に直江様からの使いが来るハズですが。。。」

さしもの段蔵の顔にも焦りが見られた

いつものように斜に構えた
不敵に距離を保った話し方はしなかった
それほど切迫している事は。。。。実乃にもわかった

影働きで段蔵が使っている者たちが栃尾城総構えを出入りしている
最近は二日に一度の頻度で「報」は届けられていた

「それはいつ出た話だ？」

実乃は膳を遠ざけた
もはや悠長に飯など食らっている場合ではないという態度が勢いよく膳を飛ばし箸を転がした
二日前に無かった「報告」が

突然現れたのだから当然飯ごときで話しを中断など出来ない

「少なくとも五日前には内々に発されていたものと。。。。」
「五日。。。。」

まったく急だ

「誰と戦う。。。。？」
実乃は。。。わかっていても自分に問うた
「栃尾」が。。。。守護代様にとって目障りなものになり。。。それで。。
頭に廻る危機。。。

「明確な「相手」や「真意」については直江様の使いを待つほかないか。。」

間を持たそうとする実乃に段蔵は首を振った
「相手は守護代様です。。。。そして「敵」は我らと定められたのです」

影の働きをする者である段蔵は「曖昧」な事は言わない
実乃が栃尾の当主としてあるまじき「目を反らそう」とした事に素早く釘を刺した

「すまぬ。。。」

実乃は大きく首を振った
逃げられぬ現実と向かい合うために
しかし心に走る波を抑える事はさしもの「熊」実乃でも容易ではなかった手は転がした箸を掴み忙しなく床を鳴らした

「戦の支度はせねばなりません」
段蔵は冷徹だ
必要である事を明確に相手にたたき込むために無駄な言葉はしゃべらない

「わかった。。」

「栖吉はどうでますか？」
緊迫する間
動き出した「戦」に立ち向かわなくてはならない
まだ落ち着きを取り戻せない実乃に
段蔵は段蔵なりの支度があるからか矢継ぎ早に聞いた

「栖吉（すよし）は。。。今のままでは動かん。。。。」

飛ばした膳に残った湯を啜って実乃は段蔵に答えた

「影トラ様が先陣に起たねば栖吉は動かない」

顔をつきあわす

段蔵はズイと身体事前に出た

「動かさねばなりません。。。。このまま「逆賊」として死にますか？」

実乃は箸をへし折った

祈るように手を合わす

「このことまだ誰にも言ってはならんぞ。。。」

時間は。。。味方してはくれない

守護代からの「陣触れ」であるのなら

いくら実乃が個人的に口をとざしたとしても。。。三日もしないうちに「金津」や「弥太郎」に知れてしまうだろう

しかし無用に城内に騒ぎを起こしたら「まとまり」はすぐに無くなってしまう

段蔵は無言で了解した

「影トラ様は？」

督促の言葉
もうわかっていた
言われるまでもない。。。。。

この「戦」は「影トラ」無しでおこなってはいけない

栃尾はここ近年の中では「越後」で一番戦をしてきた者たちだ
強さにおいては
守護代軍の「数頼り」などに弱気になったりはしない
だが「御旗（みはた」無しでは戦えない

「逆賊」。。。越後に対する「逆臣」となってしまってでは話しにならない

「御旗。。。影トラ」

「御旗」が必要

現守護代に立ち向かうのは「強き男」の血をもつ同じ長尾の「影トラ」でなくては
今まで栃尾に参勤した豪族。。国人衆を従わせる事ができないどころか
周りから一斉にそっぽむかれ滅ぼされかねない。。。

強き当主を求めていた実乃たちの
これは「望んでいた」戦い
しかしあまりにも
激流の始まり

実乃は腰をあげた
段蔵も立ち上がった

「わしが今からお話しをする」
実乃の顔には「覚悟」があった

「戦」はもう止められないのだ

「影トラ様。。。。。。」

いつもの時間を少し過ぎていた
実乃の声が部屋の前から私を呼んだ

「実乃。。。。ちょうどよいところに来た。。。頼みがあった」

私は腰を上げ部屋の戸を開けた
廊下に平伏したままの実乃の前に包みを置いていった

「これを守護代様の元に届けて欲しい」

「もはや守護代様にそのような。。。。。」

いつもより怒った口調で顔を上げた実乃の声が止まった
私を見て目が大きく開かれている

「覚悟を示した。。。私は仏門に帰る」

私は髷(まげ)を切り落としたざんばら頭をなでて言った
こうする事が必要だっと「信じていた」
実乃は目の前に置かれた包みを開いた
私の櫛が入った手紙

「何故。。。。」

実乃の手が震え包みを胸にあてて吠えた

「このような事をされても「戦」を避ける事など!!もはやできません!!!」

そういうと櫛と手紙を投げ捨てた
「守護代様は昨日陣触れをだされました!!「栃尾討伐」の触れをだされたのです!!」

心に亀裂
息が止まる
投げ出された私の髪を見ながら

「嘘だ。。。。」

やっとで私は声を出した

「嘘ではありません!!戦うしかないのです!!!」

実乃の目を見た
涙を流す真っ赤にそまった顔

「どうして。。。」

胸を締められる痛み
なんのご返事もいただけなかったのに。。。何故討伐。。。。
願いや祈りごっちゃごちゃになった「想い」が壊れて闇に流される
呆然としている私に実乃は詰め寄っていった

「我ら栃尾衆は影トラ様の元。。戦わねばならないのです!!!」

耳を押さえた
何が起こってる?どうしてそんな事になった?

「誰と戦うんだ!!!!」

髪を振り乱すように頭を振った
涙が滝のようにあふれ出る締め上げられた心が破裂した

「誰と!!!誰と!!!誰と戦うんだ!!!」

嗚咽に押し出された喉を通る言葉はすり切れている
髪を掻きむしり地団駄を踏む
混乱。。。と。。。こみ上げるもの。。。

実乃は部屋に逃げようとする私の足下に迫って言った

「守護代様とです！！」

真っ直ぐに私を見る涙の目
これが「真実」なのだと

よろけた身体が戸にあたる

「守護代様？。。。。守護代様と？何で？。。。。。」

兄上。。。。。

縋る実乃の手を払った
部屋に走り戸を閉め

そのままくずれ膝をついた。。。。

「嫌。。。。嫌だ！！！」

私は泣き叫んだ

その２６　激流　（２）（後書き）

いまさら。。。思い出編（月華と二人静）の人物評（藁）

ちゃ～～す後書きからこんにちは～～ヒボシです
師走です。。。
私もいつになく無駄にいそがしくなってなかなか更新できませんでした。。。

改訂，修正もぼちぼちやってますので色々と混乱してたり（藁）

とのあえず
月華と二人静ではかけなかった登場人物たちの紹介をいまさら書いておきますぅぅ～～

鈴姫（実様）
長尾能景（ながおよしかげ）と格下の側室との間に産まれた美女（藁）
女の子だったのにもかかわらず可愛がられ「教養」を与えられたのは超美女のうえ気だての優しかった母のおかげ
その溺愛が都の女御（にょご）との交友に繋がって「舞」の世界に繋がるのだが身の程以上の物を得てしまっていた事に気がつけなかった事が不幸の始まりだった
御簾に隔てられた間がらではあったが
実は「晴景」のおかーさま。。。。それが虎御前との因縁の元でもあった

長尾為景（ながおためかげ）
能景の無念から窮地に立たされた長尾家を路頭に迷わす事なく纏め上げ
「下克上」によりついに守護を追い落とした一代英傑
だが
本心から戦ばかりを願ったわけでない。。。戦わざる得なくなった人でもある
孤高の心の支えとして「女」を抱いた
その一人に「鈴姫」がいたが
これは鈴姫の舞に「武」を見たからでもあった
要は「縁起」でもあったがその軽はずみな行動（注，本人的にはそんなつもりはなかったし実は鈴姫に好意があったわけでもなかった）の結果。。。
虎御前の事を愛していたかは不明。。。。。

おトラ（虎御前）
栖吉長尾の家長の突然死によって存続の危機にあった一族を救うために為景に嫁したおトラ
敵の元に自らの身を差し出すという
最悪の条件下での結婚に何を見いだしたか？
発言からすると為景の事を愛していたようだが
「落胤」である晴景の存在を知ってしまった事で彼女の。。。想いが狂ってしまう
復讐のための「トラ」なのか？
現在も不敵に春日山に君臨する

品（しな）
鈴姫侍女
現在は実様付き女房

能房の襲撃で下郎に狼藉を受け左頬に刀傷を持つ彼女はそれ以降も実に一心に仕える
現在では一族の者たちもともを従え仕えている

上杉定実
名目上「越後守護職」である彼は現在はほぼ幽閉憂いにあっている
実共々直江津と春日山城下の屋敷を行き来する日々
定実もかつての戦で身体を悪くして今は職務事態に出ることもままならなくなってしまっている
そのため現在は実様が「守護」の職務をしている
若き日に鈴姫に「天女」を見た彼は養子の身で有りながらも婚儀を推し進めた
当初はその想いに鈴姫が気がつかず
行き違ってしまったりもしたが今は夫婦仲は円満
しかし。。。。実様の子の事は知らないハズで
その事が今後どうなるのか。。。

小蝶（実様母様）
本編では名前を出すタイミングが見あたらずただ母様となってしまった人（爆）
能景最後の側室で地方豪族の娘だった
大変美女（藁）そのうえ控えめで気だての良かった彼女を能景は大いに愛しその子である鈴姫に惜しみなく「教養」を与えた
そんな姿を微笑ましく見たいられる事だけが幸せだった彼女の人生は本心から能景が全てだった
能景死後。。。。寵愛を受けた彼女の苦難は計り知れず
そしてそれは心の支えを失った彼女を死に走らせてしまう事になる

菊姫（虎御前母様）
現在も栖吉の重鎮として睨んでます（藁）

虎御前の人格形成においてこの母の気性は絶対に遺伝していると思う（藁）
愛にも情熱的だったこの方の話し。。。もっと書きたかった（藁）

長尾晴景
為景と。。。。実様の間に産まれた子
が
本人は「母を知らない」と言っている
長尾による越後統一を推し進めるために為景は晴景に家督を譲る
それは次代として守護代の職が長尾為景の家系の物である事を示すためでもあったが。。。
母無し子というレッテルを貼られてしまっていた晴景様の尽力では
長尾の他家はもとより地方の国人衆の心は動かなかった
そして今
「正統なる嫡子」という大儀を振りかざす虎御前との対立により
影トラと激突する事になる

いよいよ
米山合戦に入っていくための大事なエピソードでした
ヒボシも色々な根性（藁）使い切って書いたからいまさらの紹介でしたが
これから年末にかけてがんばってかきつづていこうとおもいます～～～
頑張ります！！！

それではまた後書きでお会いしましょ～～～

その２６　激流　（３）

「お願いです！！どうかお聞き下さい！！」

私が閉じこもった部屋の前で実乃は話しを続けようとした

「嫌だ！！！何故兄上と戦わなくてはいけない？。。。きっと。。まだ。。返事が。。。」

涙を拭いて首を振った
こんな恐ろしい事があっていいわけがない
手が震える祈るように抑える
どこかで。。なにかが
「間違って」伝わってしまっているんだ。。。
私何度も頭を小突いた

どこかに自分の至らなさがあって。。。兄上が勘違いしていらっしゃるのでは。。。と
あんな下世話な風評を
守護代という重職を担っている兄上が鵜呑みになど。。。絶対にしない。。

どうして私が「守護代」の地位を狙うなどと考えるのか

「次に栃尾に送られてくる書状は「全面降伏」しかありません」

苦痛
胸を割らんがばかりの痛みに身を崩し倒れ込みそうな私の背に
戸越しに実乃の声は告げた

「何故!!」
手を床に叩きつけた
ふるえなのか痺れなのか?凍えたように動きを留める事ができない
その手を
何度何度も
身体を突き刺した痛みで「闇の意識」が溢れ出し「力」を止められない

でも
こんな事で「闇」に従って言い訳がない

障子の向こう影になって見える実乃に怒鳴った
「何でだ!!!」
目の前に整えておいた文台を蹴飛ばした

「それほどに影トラ様あなたは望まれた「大器」である事を越後に示されたからでありましょう」

「大器?」
実乃は影を近づけて言った
「亡きお屋方様（為景）の正しき血を継ぎ「現すこと」の出来る者として。。。長尾の。。越後の全ての者が貴方の強さに惹かれそれに従い「国」がまとまろうとする事を「大器」と言わずどういいま

すか?それを「何故」と問われるのならば。。嫉んでおられるのです。。守護代様は自分では成し得なかった偉業をこなした貴方を恐れておいでなのです」

頭を床に打ち付けた
「どうして。。。。越後のために。。。戦ったのに。。。そんなふうに」

私は名誉が欲しくて戦った訳じゃない
名声もいらない
ただこの国がよくなって欲しかった
栃尾に来る時に見たあの痛ましい「死」の姿。。。国が持つ「傷跡」を癒す仕事をしたかっただけ。。。。

兄上もそれを願ってくれていると信じていた
いや
それが守護代様の願いのハズだ
ならばまさに「何故」だ

「だったら。。何故守護代様にその責務を果たせとオマエ達は求めなかったのか?」

唸るように低く渡しの棘が実乃に聞き返した
主君を盛り立てるのも家臣の仕事の一部だ
それが良い関係になかったから「黒滝」は滅びた
どこにあってもその関係はかわらないハズだ

実乃は口ごもった
何かに耐えるように言葉を抑えた影に私は硯(すずり)を投げた

「何でだ!!!」

破れた障子の向こう沈黙を守る実乃に顔を近づけた
障子の枠に手をかけ荒々しくへし折った

「何故守護代様に求めなかった?何故私にこんな事をさせた?」

「影トラ様。。。貴方に亡きお屋方様をわしは見たからです。。。。」

私の手が障子を破壊していく
眼前で実乃は続けた

「亡きお屋方様のごとくその偉業を継ぎ越後に平安をもたらす事が出来るのは貴方だと信じたからです」

頭が痺れてきていた
「闇」の力は声を与えはしなかったが私をどっぷりと怒りの淵に連れ込んでいた
首を右に左にゆっくりと振った

「お屋方様だと。。。。。私は全然「知らない」ぞ。。。」

目を開き怒りで震えた

実乃の言葉に苛立ちが身体を熱くし
私はゆっくりと「闇の意識」に染まった声で答えた

「父上を私は知らない」

父上を憶えていない。。。。
いつもどんな時も私は「父上」の話題がでれば聞きたかった事だった
私は父を知らない
私の中ある父上は消えてしまいそうな幻(まぼろし)のような「後ろ姿」

顔も
手も
声も

何も知らない。。。。憶えていない

だから
どんな事だって知りたかったのに誰も教えてはくれなかった
みな同じ答え

「戦鬼為景」

そう言うだけだった

そう言うだけなのに
その影を私に見ただと!!!

「私のどこに父上が見えた?。。。。。答えろ。。。。」
片側の障子戸を完全にバラバラに壊して実乃の前に座り顔をよせて
聞いた

「目か?鼻か?口か?。。。それともこの心にある「怒り」か?殺したいと思う「欲」か?逆らう者を許さぬ「鬼」である事か?」

視界が歪む
答えようとしない実乃を。。。。斬ってしまいたい
いつもと一緒
父上の事を誰も教えてはくれないのに?

「何も教えぬのに。。。。父の影をいったい!!どこに!!私のどこに見た!!!答えろ!!!」

涙の目
実乃は耐えた答えを言った

「貴方がこの世に生をえた時から「越後」を制する者と信じておのました。。。その志を見ておりました」

「それと父上となんの関係がある」
もう片方の障子戸を蹴破った
もう一度そのまま蹴り倒そうとした足を実乃が掴んだ

「その志こそが。。。お父上様。。。為景様の影にございます!!!」

つかんだ足を放し実乃は顔を伏せて
ひれ伏して続けた

「だからこそ!!!戦わねばならんのです!!!強き男の意志を継げるのは貴方しかおられないのです!!」

懸命な説得をする実乃の背中
その向こう側
本当の「心」を見ようとした私の視界は真っ黒に変わった

闇の声
耳元に聞いた声がする

「あなたならできる」

炎の中燃え落ちる城の影
憮然とした態度で立っている男
黒田は生々しい傷のまま私の「問い」に答えた

「力無き守護代。。長尾晴景（ながおはるかげ）さまに私は従えない」

黒田の後ろに従う者たちは声を合わせて言う
それはこれまで打ち滅ばした者たちの影
この争いはどうしてつづいた?
この争いがなければ死ぬことなく過ごすことのできた者たちがどれほどいた事か

声が大きく近づく

「時には笑って人を殺し泣いて従わせるほどの「器量」を持ち合わ

せた強き「守護代」が「越後」には必要なのです」

闇の影たちは
私に手をのばし助けを乞うように声をあげた

「強き守護代を!!!」

迫る手
血に濡れた手
その手たちが折り重なる

意識が。。。。。

「あなたなら出来る」
目の前
私の目を反らすことなく見ていた実乃の声で世界は元にの色に戻った

「正しきを示さねばなりません」

「戦う事が正しいと?」

目から涙
戦いたくない
血など見たくもないのに

「正しきの元に血は流れる」

自分に向かって
胸を押さえるようにつぶやく

兄と戦う事が正しいとは。。。。思えない
そんなことを望んで今まで戦ってきたわけでもない
その末に
私が「守護代」になる事を正しいだなどと思わせたのならば。。。
それが私の過ちだ

静かに立ち上がった

「ダメだ。。。。。戦えない」
引き下がらない実乃に背を向けて言った

「兄上に手をあげてまで得た物に。。。。そんな者に何が従うものか。。。。」
「影トラ様!!」

必死の声を静かにかわした
「私には出来ないそんな恐ろしい事が出来てしまうのなら。。。。
私は。。。。」

奥の間に足を進めて言った

「許してくれ。。。戦えない。。。。」

その２６　激流　（３）（後書き）

挿絵解禁。。。。

後書きからコンバンワ～～ヒボシです

何やら
近々小説になろうで挿絵が解禁されるのでは？
などというニュースを小耳にはさみました
お～～
凄いなぁ

誰かトラとか書いてくれないかなぁ～～
と
実は前に「絵師」さんに打診していたのですが。。。。
断られまして（爆）

自分で書いた者が何枚かあったりするのですが。。。
緒戦トーシロー（藁）のやる事ですから。。。ダメダメでした
いや
ダメでしょうねぇ
絵。。。。うまい人はバンバン張るんだろうなぁ。。。いいなぁ～
～～

そんな午後でした（藁）

それではまた後書きでお会いしましょ～～～

その２６　激流　（４）

柄にもなく。。。
迫る日に
落ち着きを取り戻せない実乃はそれを隠すために自室で「禅」を組んでいた
手を合わせては見るが
摺り合わせ。。。。急な出来事に下準備もままならなかったのは己自身でもあり
両の手を
祈るように摺り。。。。冷静にひとつづ事態を考えようと焦っていた

予測を遙かに凌駕してきた春日山の出陣。。。。
あれほど犬猿の仲だった
晴景に従って総大将として号令を発した政景。。。。
それだけで少なくとも五千の兵は動く。。。。。

だが
栃尾が春日山に対して「下手」を打った憶えはない
その当たりはどの将よりも慎重だ

ただの「疑い」だけで。。。なんの宣告もなく「敵」に？
いったいどうやって諸将を納得させられたのだろう？

あの
怪聞を。。。。。守護代が。。。流したのか？

栃尾は。。。疎まれている
それはわかっていたことだが。。。。それに乗じた
中郡をほぼ平定し一大勢力となろうとした影トラを恐れ因縁ともども
も栃尾を葬るつもりか。。。。

額を手で叩く
やはりなにもかもが急すぎて考えはまとまらない

影トラの拒否。。。。

屋敷の戸と襖を何枚も破壊しなければ自分の気持ちを律せられない
ほどの動揺
考える以上に根の深い部分での会話はお互いの心をかなり抉ってし
まう結果になってしまい
壮年ともいえる実乃もかなり疲れた

項垂れ
溜息を吐いた

「段蔵です」

風の音が微かにしたと感じたが。。。
障子には影が一つ浮かぶ

今朝の知らせからまだ夕刻だ

「入ります」

活発に動く影である段蔵は相手の動揺を気にしながらなど活動できない
入れの声がかるまえに素早く実乃の部屋に身体を入れた

実乃は目を開け
段蔵に渋く言った

「ダメであった。。。髪まで落としてしまわれて」
「諦めて良いことではありません」

無駄を蹴飛ばす返答
腹も立つがまさに言われるとおりだ
ココで「はいそうですか」と引き下がれるわけがない「栃尾」の全てがかかっているのだから
段蔵の物言いは正しい

「それで。。。知らせは？」

段蔵は部屋の周囲に目を走らせた
実乃は答えた
「わしの近習しかおらぬ」

そういう者たちまでが今は言葉を統率されている事を確認すると段蔵はそれでも実乃の耳に顔を寄せて話し始めた

「一つは秋明院（しゅうめいいん）様からのお返事です」
（秋明院。虎御前の母上「菊姫」の剃髪後の名前）

実乃はすかさず聞いた
「どうだった」

段蔵は少し余裕が出来たのか手をあげて言った

「ダメですね。。。怒鳴られました」

「なんと。。。」

実乃は程度秋明院の返答はわかっていたがそれでも迫る危機から「助力」の手紙を送ったのだ

それほどに切迫している状況であり

この状況の中影トラを動かすためにも祖母にあたる彼女の力をかりたかったのだが。。。

額をぶちながら困り果てた

「忘れたのではないだろうな」

段蔵は耳元で彼女のマネをしてみせた

実乃は顔をしかめて答えた

「忘れては。。。。おらん」

「因縁」

それはいろんな部分にあった

為景亡き後。。。一見平安に事は進んだように見えていた越後だったがそれまで「要職」にあった実乃を始め「栖吉（すよし）」の者たちは晴景に代替わりがなった途端

春日山から追い立てられた

いや
距離を取られた
春日山に座して周囲を固める準備に入っていた「栖吉衆」の計画を
見越していたかのように
全ての職務からの離散が行われ虎御前の侍従を残し「退去」させら
れたのだ
その中にかつては為景と共に戦った実乃もいた

理由は。。。「例」の血統の問題だっと実乃は睨んでいた
母無し。。。と言われた晴景は噂を大きくされる前に未だ生きてい
る虎御前への牽制としして
いずれ揉める事になるのならばいち早く城から一族を追い立てたか
った
御前一人を残したのは「栖吉」に対する人質だった
安直な策ではあったが
効果は絶大だった

「追われる」という事は「不名誉」な事につながり
その一件によって「栖吉」はまたも他豪族からも見下されるという
辛酸を舐めた

実乃も要職からの解雇という憂いにあい
縁を減らしその上敵対する「揚北」の守りの任を「要責任職」とし
て宛がわれるという苦労を強いられていた

栖吉と栃尾は元々「親族」

晴景は執拗に「虎御前」の血筋を嫌っていた
言葉の上では来たるべく「揚北」との折半役としてだの
中郡に「長尾」の血族をおくためだのと綺麗事はいったが結局のところ「いつか」自分に刃向かうのでは?という疑いのかかった者の反抗を許さなかったのだ
この処遇に
秋明院は怒りにまかせ吠えた

「この仕打ち絶対にわすれぬぞ!!いつか「正統なる血」によって晴景をぶち殺してやる!!」

と

そして案の定
晴景は成長し邪魔な存在になった影トラを「前線」に投げ捨てた
「女」に何ができる?
そのぐらいの気持ちだったに違いない

ところが。。。。

「手紙は読んで頂けたのか?」
思い出に残っている秋明院の態度。。。。ダメもとで段蔵に聞いた

「読まずに火の中に。。。。」
段蔵は灯籠の前でその様子をマネて見せた
そういう事になるのではと思ってもこの尋常ならない「敵」に対処するための手紙をしたためたのに。。。

「オマエが読んでさしあげれば!!」

苛立ちに任せて怒鳴ってしまいそうになった実乃の口を段蔵は塞いで言った

「お言葉を預かっております」

ふざけた所作の中にもしっかりと任務をこなす段蔵は手を下ろすと注意もした

「実乃様の心が泡だっていてはみなも気を揉みます。。。もう少し静かに」

そういうと口伝をした

「栖吉は影トラ殿出陣の号（号令）あればすぐにはせ参じる。。。。と」

実乃は頭を振った

変わらぬ答えだった

辛酸を舐め続けた栖吉の者たちは虎御前の子。。。影トラに全てを賭けていた

「御旗」を掲げての大戦の準備はすでに出来ている

栖吉は名誉の全てを賭けて「正統なる血」の出立を待っている

待つという忍従の戦いの中にいる事に実乃は頭が下がった

「わかった。。。。。」

心を締める口伝に項垂れた

落胆と悩みの迷路に入ってしまいそうな実乃に段蔵は続けた

「もう一つの知らせは。。。。多少良い事と思います」

返事も返せない実乃にそのまま話しを続けた

「春日山の出陣は予想通りずれ込みそうです」

「ずれ込む?!」

下がった頭をはね上げて聞き返した

段蔵は少し張り合いを戻した実乃に落ち着いた声で言った

「収穫の時期ですからいくら気を吐いても「人手」はどうにもならぬものです」

「ではどのくらいずれる?」

物事の流れに「刻」を持っている余裕がなくなった事は栖吉の反応でわかった

どちらにしてもくる「敵」

陣触れが出ている以上はこないという事は絶対にない

ならばもっとテキパキと自分のすべき事に向かうしかない

「。。。それでも二月(ふたつき)。。。。」

陣触れが出たときに一月後と予想されていた

それを早々に破って「政景」は進軍を押し立てたが収穫期の真ん中にあるこの時期に人は動かない。。。準備に一月。。。その上で一月。。。

「長く見たら三月(みつき)内か。。。。」

実乃は予想できる最大の日にちを上げた

段蔵は慎重な日数を答えた

「二月と十日。。。。」

「そして栃尾までの行軍の日数。。。。」

お互い顔を見合わせた

「わしはわしの勤めをまず果たす。。。準備は収穫が終わり次第」

段蔵は指で口をさえぎって

「準備は私がしましょう。。弥太郎に「栖吉」本隊はダメでも金津は動きますから」

それだけ言うと身体を返し部屋を出ようとした

「段蔵。。。」

実乃は少しだけ声をあげて去ろうとする足を止めた

振り向かぬ段蔵に

「直江殿は。。。。我らの味方であるな」

笑う

段蔵は柔らかく返した

「直江様はずっと影トラ様のお味方にございます」

それだけ言うと足早に庭に走り消えていった

実乃との密談を終えた段蔵は栃尾城の総構えまで降りてきていた

収穫のための荷車がいくつも並び百姓たちが門の前で荷駄の行き来をさせている

騒がしい
まだ春日山の不穏な空気はココには漂ってきていない

「それでいつ来るんだ？」

俵を運び
城内に持ち込む兵糧の管理をしていた弥太郎は背中を向けたまま手
を止めずに段蔵に聞いた

「二月（ふたつき）。。」

片手で軽々と荷車に俵を投げ善治郎たちに行けと手を振ると
土間の上がりに腰掛けて言った

「そこまでわかってるんだったらもう「戦う」しかないな」
汗を拭いながら当たり前のように答え
弥平に番所の戸を閉めさせた
「金津は？」
すでにいくさ人の顔になっている弥太郎

「金津が動かせる。。五十は確保できる」

数の話しだけで戦はうごかない
栖吉従属の金津が私兵を持って参戦しても「敗北」ぐらいしかうか
ばないそういう話しには慣れているのか弥太郎は手で話しを中断した

「政景殿の軍勢は二月たったらいかほどの数になるんだ？」
実乃に比べると格段に話しを進める
やはり若い頃から「上杉」に仕え緊迫の戦場をわたってきた男は要
点をはずさない

「五千」

弥太郎は段蔵に顔を近づけて言った

「どうがんばったって栃尾じゃ千しか集められないのにわざわざ五千集めるのを待ってココに来るのか？」

「政景殿はお世辞にも戦上手じゃない。。だから数頼みになるだろうし。。その他に守護代様の旗本衆や従属組で三千は用意でき。。。」

段蔵は何かに気がついたように言葉を止めた

「何でだ。。。。」

誰に話すでもなく問う。。。

何故だ

段蔵の頭の中はめまぐるしく回る

何故。。。栃尾単体ではどんなに頑張っても千人だ

それに

二月まってまで五千を集める意味はあるのか？

この報告は明後日には皆に伝わってしまう。。。。

「嘘」なのか？

嫌な予感がした

段蔵は目の前に立ち返答を待つ弥太郎に

「影トラ様の事。。。実乃様に「早く」と。。。頼むぞ！！」

口早くそれだけ言うと

肩を叩いた

いやな予感
情報を晴景が操っている？
段蔵はそれを確かめるために
こちらに向かっているハズの直江の使者を待つ事は出来ないと判断
したのだ

人混みの中に消えた段蔵の背中に弥太郎はこぼした
「負けは。。。ないな」
負けは「命」がない。。。後がないと隠した言葉で
「影トラ様なしでは。。。ダメだろうな」
と腰をおろして疲れた顔を両手で覆った

そんな弥太郎の姿を手伝いに来ていた「つや」は見ていた

その２６　激流　（５）

つやは涙の目を拭って布団から起きた

今朝「夢」を見た

あれは。。。母だった
大きく手を振って自分に「逃げろ」と叫んでいた
闇の中
野武士たちが松明を次々と家に放り込んでいた
焼け出された者たちを容赦なく斬り
女を捕まえようと走り回る下郎達の顔は赤い鬼に見えた

あの日。。つやとその母は完全に「運」に見放されてしまっていた
よほどの用事がなければ村に来る事などなかったが
親子二人
近づく冬の備えを得るために収穫の手伝いをしにあの廃屋の社から
村に出かけた。。。。

「逃げて！！！つや！！！逃げて！！！」

着物をはだけさせ
狼藉の手を逃れた母は必死につやを逃がそうと叫び続けた
その後ろを狂気の刃が高く卑下たる笑い声をあげて追い
母を蹴飛ばした

目の前で母は男たちに押さえつけられもみくちゃにされ

泥にまみれながらも必死の叫びを続けた
「逃げて！！！」
悲痛な叫びの母の視線の向こうに見えるつやに下郎は舌なめずりをして刀を担いで近づいた
その足に母はすがりつき懇願した
「やめて！！つやに手をださんでよ！！」
闇の力は己の快楽に忠実だ
赤鬼の足に絡んだ
母の腕は斬られ身体から離れた
降る血にまみれ両の腕を失いながら
苦痛と悲痛
言葉にならない叫び声が懸命に「逃げろ」と連呼する
でも。。。。母は
そのまま
男達に
刺し殺された
口から血を溢れさせ
泡をはき出し
涙の目は。。。。。つやにただ「逃げろ」と告げて絶命した
つやは村の爺に抱えられ血のたまりに沈んだ母を声を無くして見ていた
「かか様。。。」

三の丸の雑兵長屋
誰よりも早くに起きたつやは飯の支度をしていた
二日前。。。。やたろーと段蔵の会話を聞いてしまったから。。。。

深く眠りに入る事ができなくなってしまった
だから
朝霧のかかったようにぼんやりと。。。。しこたま考え事をためた頭が
変な「夢」を見せた思った

「戦」が近づいている

やたろーの会話からそれはわかった
そんな事はココ栃尾に住むようになってから何度もあった事だ。。。。
なのに
怖い

いつになく慎重な言葉運びでしゃべっていたやたろーの姿が闇に消
えていってしまいそうに見えた
身体が震えた寒さだけがそうさせているわけではない
怖くなって
あの日の事を心が思い出させて「夢」を見た

落ち着かない気持ちを祈りによって抑えるために
首に下げていた守り袋を出した
釜戸の上に親指と小指の大きさの仏像「とと様」が作った家族の姿
に手を合わせた

耳に触れる
つやの耳たぶには飾り石が両方ともあった

黒く輝く石
父の国では「女の子」が誕生すると最初のお祝いにこれをつけてもらうらしい
それは母から聞いた
母も同じように耳に石をつけていた

「御仏様の耳についてるのと一緒やねぇ。。」

優しい手
おそろいになった耳を触り合った
父との出会いも母が聞かせてくれていた

「とと。。。」

つやは。。。父の事をあまり憶えていなかった
声も
顔も霞のようにしか思い出せない
つやが二つの時に他界したから
だから母が聞かせてくれる話が全て
料理の手を細々と動かしながら思い出してみた

つやの父は海の向こうの国から来た人

「西班牙人（イスパニア人）」

名前を
「エンリケ」と言った
船が難破し海岸にやっとでたどりついた父を介抱したのが母だった
異国の色白。。。天狗の鼻をもつ男をつやの母は驚きもしないで
献身的に怪我を癒し世話をした

母を見初めた父はこう言ったと

「とと様はわしを見てゆうたの。。。オルテンシア。。って」

言葉はたどたどしく通じなかったが気持ちを深く通わせた父との生活を。。自分が大切にされた事をたくさん笑って話してくれた母
父を亡くしてからも笑顔を絶やさず優しく思い出を宝に生きてきた母子二人

「とと様がくれたつやの名前はね「ロサ」っていんだよぉ」

「ロサ」。。。。。
イスパニアに咲く花の名前

「つやはきっと美人になるってゆうてた」

握り飯をまとめたところで涙がこぼれた
あんなに優しかった母。。。優しかった両腕無惨に切り落とされ突き刺され「戦」で死んでしまった
栃尾を襲った三条衆の「作戦」の一つとしてなんのいわれがあってか？
簡単に殺されてしまった

今また「戦」が近づいてきてその事を思い出してしまった

調理の手を止めた
こんなに不安
心が割れてしまう。。。それほどに身体を震わす恐怖

涙がたくさん溢れて。。。。両手で顔を押さえた
「いやだよ。。。いやだ。。。」

夢に出た母のお告げが
栃尾の仲間たちの行く末を不安にさせて。。。つやは震えた
釜戸の前でしゃがみこんで。。。まだ眠っているやたろーとその
仲間たちに気づかれぬように小さく泣いた

だけど
弥太郎はその姿を布団から少しだけ顔をだして見ていた
見て

何も言わなかった

栃尾衆は昼過ぎまでの間で今までの倍の早さの作業で蔵入れを続けていた
昨日夕刻に山上の屋敷から降りてきた実乃から
「戦」が近い事を告げられていたからだ
このたびの「戦」は大きく近隣の領主足並みを揃えての戦になるであろうから遅れを取らぬようにとの通達だった

ただ「相手」については依然と漠然とした言いようではあったが
「戦」慣れしているうえに
影トラの「神速」の動きをよく知っている栃尾衆にとってそれはど

うだって良いことだったかのように作業が進められていた
いつだって迅速に動ける事が身に付いていた事で
今は黙々と作業が続けられていた

「ジン。。。オマエこの辺に縁者はおらんか？」

急を要する事態に備えるため
番所の方に手伝いに降りてきたジンに弥太郎は俵を二抱えも荷車に
乗せながら聞いた

汗まみれの顔をしかめたジンは
久しぶりに顔を合わせた弥太郎の「変な」質問にやはり忙しいから
背中合わせで答えた

「いないよオレは親も知らないんだから」
「そぉか」

大男は肩を落とし溜息をついた
荷車に走れの合図をしてジンは振り返って聞いた

「どおした？まだ人手が欲しいのか？」

汗を手で払い落とし
一息つきながらとなりに腰を降ろしたジンに弥太郎は困った顔で周
りを見回し
つやが隣の曝書の奥の部屋で仕事をしている事を確認してから耳を
寄せて言った

「つやを預けたいんだぁ」

「つやを？何で？」

ジンにしてみれば意外な言葉だった弥太郎はつやの事を実の娘のように可愛がっている
手放すなんてあり得ないほどの溺愛ぶりなのに

見つめていた目が
つやの姿から離れて
秋空の高い青を追う弥太郎の顔は悲しそうだ
その目が静かに伏せられて
最初に会った時のように少しづつしゃべった

しゃべりながら
もう一度。。同じぐらいの歳の女衆（おんなし）たちと仕事をしているつやの姿を。。。。追う目

「今度の戦はデカイ戦だぁ。。。もしもの事があったら。。。つやだけはなんとかしてやりてぇんだ」

戦が近いのは聞き及んでいたがまさか「常勝」の栃尾について今更弥太郎にそんな弱音を吐かれるとも思っていなかったジンはそれこそ困った顔になってしまった
言葉を探すほど

「大丈夫だろ。。。今までだって栃尾は勝ってきたんだ。。。トラが負ける事なんてないんだろ？」

実際の戦には参戦した事のないジンには計りかねるものだったが
弥太郎の項垂れた姿をみるにこんな安い言葉は気休めにもならない
と気がついた

「なぁ。。ジン。。。オマエ武士なんか辞めて。。つや連れて。。」
「弥太郎？何いってんだよ！！」

さすがにジンも弥太郎の雰囲気から何かを感じ取った
その時だった

番所の前を大声で突っ切って馬が飛び込んできた
「前あけろ！！！あけろ！！」

荷車の出た間を馬は容赦なく駆け込もうとしたがさすがに無理と判
断したのか馬の体をあげて止まった
「何やってんだ！！あぶねえだろ！！」
表の人足を仕切っていた善治郎に大声で飛び込んだ男は手綱を渡した

「段蔵？！」

息も乱れ着物もガタガタな姿になって入ってきた段蔵はジンの声の
方に共に座っていた弥太郎に枯れた声で叫んだ
「実乃様を呼んでくれ！！」
弥太郎の顔色が変わる善治郎に実乃を呼びに行かせた

事態が急変したのだ

「すでに進軍が開始されているだと！！」

段蔵の到着に息を切らし屋敷から下ってきた実乃は怒鳴った
未だ荒く息するほど身体を揺らし持ち直せない肩に掴みかかった
「遅れているのではなかったのか？！！」
声を取り戻せない段蔵は首を「否（否定）」と振り
肩を掴んだ実乃の手を掴み返して掠れた声で答えた

「春日山の旗本衆二千を率いて「長尾政景（ながおまさかげ）殿」が坂戸に向かっています」
「向かっている。。。。」

呆然とする実乃を前に段蔵はその場で伏して続けた

「後詰めには守護代様の近習衆率いる約千が明後日出立。。。坂戸城には「報奨金」による集兵が掛けられており。。現在千の兵が。。。集まっております」

言葉をなくす衆目
弥太郎も善治郎も。。。ジンもが愕然としてうごけない中
危機の報告を聞いたつやは。。。。

走った

その26　激流　（6）

総構えの仕事を全て止めてしまう訳にはいかない
弥太郎は善治郎に仕事の継続を命じ茫然自失の実乃をジンは足取りさえおぼつかない段蔵を肩に担ぎ番所に入った

二人に水を渡しながら弥太郎は段蔵に聞いた

「栖吉は知ってるのか？」
段蔵は水を一口飲んで少し潤った喉から答えた
「知っているハズだ。。。」

弥太郎の冷静な問いとやりとりにやっと自分を取り戻した実乃がまだ肩で息する段蔵の襟を捕まえ聞いた
「どこからでた情報だ！！」
実乃は冷静さをとりもどしたように見えてはいたが
中身は疑心暗鬼の真ん中にいた

たった三日で情報は手のひらを返したように変わった
「二月（ふたつき）」という最短の猶予を信じていた実乃にとってこれを驚愕の事態と言わず。。。

つかまれた襟のまま段蔵は実乃からの「殴打」さえ覚悟していただろう
だが
任務には忠実だ問われた答えを返した

「柿崎様からの報（報告）であります」

そういうと乱れた着物の奥から竹筒に入った密書を渡した
実乃は取り上げるように受け取ると目を凝らして見た

「柿崎の字だ。。。」
それがこの報告が「嘘」でない事を物語っていた
内容は段蔵が先に告げたとおりだった

春日山近くに城を持つ柿崎が「影」の危険を顧みず自ら筆をとってこの密書を使わした事が「急転」の事態を告げていた
冷静さを取り戻すため少し歩く
顎をさすりながら低い声で問うた

「どのくらいで来る。。。ココに。。。」

書を丸め釜の火にくべた実乃の顔は厳しかったが正確な事を知らねばならない

「二十日。。。。」
段蔵は押し殺したように答えた
「ならば十日しか余裕はない！！」
すでに「余裕」を見つけようとする発言さえ許さない態度

実乃は栃尾を納めた城主であり領主だ
何度もの戦いで培ったものが今みごとに身体に舞い降りていた

「戦わねばならん」

番所に詰めた
職方長たちの顔にも気迫の一言が刺さった

「影トラ様に会う。。。春日山と戦わねばならん。。覚悟を決めて頂く」

己の頬を張り
覚悟を纏った実乃は地団駄で乱してしまった着物の襟を正した
それを合図に他の職方たちは番所から出た
「支度を間に合わせます!!」
各々もはや時が待ってくれない事を即座に理解し仕事に走った

静けさを取り戻した番所
実乃は段蔵も共に屋敷に上がるようにと肩を担いだ

「実乃様。。。」

急転の出来事にやっと考えが追いついたジンは腰をあげようとした
二人の前に立った
ジンはやりとりを聞いて目前に迫っている「敵」が「誰」なのか。。。
知りたくはなかった敵
向かってきている者

「春日山」

「何故春日山と戦をするのですか?」

「守護代様が我らを滅ぼそうとしているからだ」
実乃は余分な事は言わなかった

「栃尾を。。。。。？」

理解
出来ないとジンは首を振った
「栃尾は。。。。今までだって守護代様の命（命令）に従って戦ってきたじゃないですか？」
「そうだ」
実乃はすでに戦に赴く男。。。。

「春日山となんて。。。戦できるわけないじゃないですか！！第一兵力だって違うし。。。影トラ様だって了解しませんよ！！」
実乃は
目の前に立ち進路を塞ぐジンの胸を叩いた

「だからなんだ？向かってきているものを止める事はできない。。。
「戦」なのだ」
「いや！！でも！！」
必死に「言い訳」を探そうとしていたジンの頬を段蔵が少しばかり回復した拳をぶつけた

「言い訳探すな！！」

言い訳
ジンだって与板に。。。直江に仕えた武士だ
少なからず影トラと晴景の関係は聞いていたが。。。この「戦」の中身が「親族」の仕掛けたものとしれば黙っていられなかった

親族を持たぬジンにとって兄妹が各々手を挙げて「血」を求めるなどあってはならない事だった
そんな事トラが望むわけもない

「なんで。。。なんでですか!!トラにとって唯一の兄がトラの住む栃尾を攻めねばならんのですか!!」

「強くなった者を恐れ嫉むのは「弱い者」の常だ。。。弱いくせに手にした権力を手放せない。。。それは「越後」にとって悪であって善ではないだろ!!」
段蔵は吐き捨てるように言った
普段ならココで拳を打ち付けているところだがまだ力に余裕がなかった

それでもジンは前に回り主張を続けた

「和睦する事はできないのですか?こんな戦をしたらトラが苦しむだけじゃないですか!!栃尾が「戦」の準備をしてしまったら。。。それこそもう引き下がれない事になってしまうのではないですか?」

実乃はジンの胸ぐらを掴んだ
「もうとっくだ。。。とっくの昔に引くことなどできん「戦」になっている」
もう一度首を振った
「話し合えます!!「戦」だけが解決法じゃないはずです!!」
ジンの叫びに実乃は振り返らなかった
背を向け
番所を出た

かわり段蔵が答えた

「きれい事を並べるな」

「何でだよ。。。。」

二人が番所を出て行く

止めようとしたジンの肩を大きな手が強く掴んだ

「ジン」

「弥太郎」

弥太郎は首を振った

「ジン。。。オマエやっぱり武士なんか辞めろ。。。」

振り返った

「そんな事言ってる場合じゃないだろ!!」

肩を掴んだ手を振り払った

いつもなら悪ふざけで事をすまそうとする弥太郎が。。。それでも

説得するように言った

「ジン。。。オマエやっぱり「戦」を知らない。。。だからそんな事が言えるんだろ」

哀れみ?

悲しみ

自分の知らない事で見下されたような気持ちになったジンは怒鳴った

「ふざけるな!!!兄妹が戦うなんて間違ってるだろ!!」

「だから」

ジンは冷静になれなかった
不思議な事に。。。。いやこれが正しい「武士」の姿なのか弥太郎の方はずっと冷静だ

「だからだ。。。「戦」は兄妹という「枠」で始まったわけじゃない。。。それが見えてないだろ」

見えてない。。。。

「だってさ。。。。相手は兄なんだぞ。。。それと戦えってみんなで言うのか？」

弥太郎悲しそうに息をついた

「だから。。わかってねぇって言ってるんだよ」
「何をだよ！！！」

ジンは弥太郎の襟に掴みかかった
その手を弥太郎は捕まえて続けた
「じゃあ戦わなかったら栃尾はどうなるかわかるか？」
「親族なんだ話し合えば「戦」なんて必要ないだろ！！栃尾はそのままだ！！」

自分の襟にかかった腕を弥太郎はむしりとってその身体を投げた

「ジン。。。つやでもわかる答えがオマエにはわかってない。。オマエはやっぱり武士になれない。。向いてないよ」

勢い水樽まで投げられたジンは溢れた水を頭からかぶり
そこでやっと冷静になれた

喉まで登った反抗の言葉も。。。「きれい事」と言った段蔵を思い出して。。。言えなかった

沈黙の番所に弥平が入ってきたのはすぐだった
「間に合いましたか」
ずっと走ってきたのか
汗まみれになった顔をぬぐい倒れたジンの後ろにある水を柄杓で一杯飲み干すと
二人を見ながら弥太郎の前に進んで言った

「陸奥の国境の方になっちまいますが。。。面倒見てくれるそうで」
「そうか。。。良かったぁ」

張りつめていた弥太郎の顔がほころんだ
たちあがってずぶ濡れのジンに手を伸ばした

「つや。。預かってくれる所が見つかった。。ジン。。オマエもよかったら一緒に行ってやってくれんか？」

出された手を見ながら答えた
「つやを預ける？」
「そうだ。。オマエの言ったとおり今度の戦。。。負けるかもしれん。。そしたら辛いぞ。。」
手をはね除けジンは自分で立ち上がった

「だって。。そんな事になったらつやは」
「だから。。オマエに一緒に行ってやって欲しいんだぁ」

優しい声。。。
素になったジンは弥太郎が涙の目で頼んでいる事に気がついた
背を向けた
「そんな事・・・オレだって」
「泣いてんの?。。泣かしてんの?」

背を向けたジンの目の前に隣の番所にいた女が立っていた
おもわず身体を引いたジンに
「やたろーさん。。若いの虐めるのはほどほどにしときぃなぁ」
と甲高い声でそのまま中に入って部屋を見回した

「つや。。いなれんちゃね（いないね）」
弥太郎は驚いて隣の番所を指さした

「さっきそっちにいたがぁ（いたよ）」
「いなれ!!（いない）」
中年の女衆（おんなし）は困った顔で言った
「米剥きせんにゃぁちゃに」

弥太郎とジンは慌てて周りを見て回ったがたしかにいない
「弥平。。。見たか?」
戻ったばかり。。。状況の飲み込めない弥平は首を振った

「どこに。。。行った?」

ジンは振り返った
まさか。。。視線の山の上。。栃尾の屋敷を見ていた

その27　つや　（1）

何に祈ったら。。。。この願いは届けられるのだろう。。。
冷たい板間
身体から熱を。。。「信心」という熱と心を奪っていく

これほどに私の心は脆かったのか。。。

観音菩薩に祈り続けていたが
今その手を下ろした
すでに力無く。。。数珠も手から流れ落ちてしまった

どれほど祈っても。。。聞き入れては貰えなかった。。
何か足りなかったのか?
まだ。。否
何かが必要だった?

夕暮れが近づく
屋敷の中の音が聞こえる
どこもかしこもの音が今までとかわる事がないのに

何故

「戦」なのか

それも血を分けし「兄」と
それは正しいのか？
否
正しいわけがない

父を同じくにする兄がどうして私を討とうとしているのか？

あの噂に。。。

どうしたら。。そんな事があり得ない事だとわかっていただけるのか？
きっと
母上もこのことで私を「愚か」と深い悲しみの中におられる事だろう

今。。私は

何を願って「祈れ」ばいいのか？
涙がこぼれた
祈りは遠くにいってしまったのに
「闇」の声だけは。。。時々聞こえる私を「淵」に落とそうとする

「あなたならできる」

そんな事を私に告げないでくれ。。。
何故私にそんな事を。。。。
それほどまでの「念」を持っていたのならば何故守護代にその事を

告げなかったのか？
死した者の夢に私は追われているか？

悲しみで背中を丸め
両手で顔を覆った声を出して泣いてしまう。。。耐えられない

「おトラ様。。。おトラ様。。。」

あやうく泣き言を大声でわめきそうになったその時
新調されたばかりの障子張りの向こうに聞き慣れた声が私を呼んだ

外は夕暮れの日差し
小さな影が茜色の光をあびて

「おトラ様。。。」
乱れた息が私の名を呼ぶ
幼い声は
「つや。。？」

私は腰をあげ戸を少し開けた
久しぶりの顔は涙で濡れ肩で息をしなくてはいけないほど身体を震わしていた

「身なりはきちんとしなさい」
私は自分を落ち着けるためかのように
つやの着物の乱れを正そうと手招いた
フラフラとてた足取りではあったがつやは真っ直ぐ私に向かって

「おトラ様。。。。」

縁側から石段を登って泣きながら言った

「戦しないの？」

懐かしい。。とおもうほどしばらく会っていなかったつやの口から

出た言葉に私の身体は硬く強張り

伸ばした手が宙を彷徨ってしまった

背筋が震えた

軽く首を振ってみる

つやに言うべき言葉が見あたらない

唇がただ声もなく動くだけ

ダメだ

自分を。。。

目もあわせずに足を戻した。。部屋に戻ろうとした時

そのまま

つやは私の襟首を抱きつくように掴んだ

「戦しないの！！おトラ様！！」

ああっやはり

急に心に火が走った

何故。。。

こんな事をつやにまで言われなくてはならないのか！！

私の心に溜まった怒りはすぐに顔にまで登っていたが
その形相にきっと。。つやは気がついていたハズなのに
より強く私の襟を引いて叫んだ

「戦して！！！」

手を引き離そうとした私に。。。。
放そうと掴んだ手にさらに絡めるよにしがみついて。。。つやは続けた

「戦して！！戦してよ！！じゃないとみんな死んじゃう！！死んじまうよぉ！！！」

必死の手
小さなつやの考えられないような力が私の身体を揺さぶる
流れる涙が弾け
私の頬に当たる

「戦。。。。何で。。。。。」

引きはがそうとした手でつやの肩を掴んで首を振った
出来るわけがない
なんでそんな事を。。。。必死に言う？

「戦はしない。。。。。出来ない。。。。。」

私の答えにつやは顔をくしゃくしゃにして泣いた
泣いて
続けた

「いやぁ!!!戦して!!!戦してよ!!!戦してよ!!!」

目眩
揺れる。。。。あの闇の声たち
「戦え」と私を誘う闇の声

それはいったいなんだ!!!

割れそうな頭。。私は身体に掴みかかり強く襟を引くつやを力任せに引きはがした

「出来るわけないだろ!!!戦なんて!!!絶対にできない!!!」

おどろき言葉を無くしてしまった
小さなつやの顔を両手で捕まえてゆっくりと顔を近づけると唸るように言った

「兄を殺せと?その口が言うのか?」

涙をたたえた小さな泉の瞳は。。。。
負けなかった
睨む私をにらみ返す

「守護代様あっての越後ぞ!!!」

つやは
頭を掴む私の両手から勢いよく逃れようと跳ねた
跳ねて叫んだ

「守護代様は。。。。守護代様はかか様を助けてくれなかったよ！！」

私の手から離れたつやは
にげなかった
そのままさらに身体を前に進め怯まず言った

「守護代様は何もしなかったのに。。。何が偉いの？オラたちのために何してくれたの？。。。何もしてくれなかったよ！！何も！！！」

伸ばされる手を払った

それでも怯まず
それでも涙で続ける

「オラたちを助けてくれたのはおトラ様だけだよ！！おトラ様が戦してくれないとオラたち。。。死んじゃうんだよ！！！」

耐えられない
私の心に亀裂が入る
「助けて」という声が闇とかさなる。。。そうだ。。「あなたなら」
と

私を誘いに来たのか！！
大きく手を回し着物を引っ張っていた手を投げた
危険だ。。。
こんな思いを近づけてはいけない

。。。。。

なのにつやの目は真っ直ぐだ
信心な目で涙の懇願を。。。

その目は
真っ直ぐな目は見られない

「知らん！！！」

ただ夢中に繰り返し手を振った「これ」を自分の中に近づけてはいけないと何度も心を叱咤し
つやから身体を離した

そんな懇願はやめろ。。。
その願いの先にあるのは「兄上」の死。。。
叶えていいわけのない願い

襟を正し低く言った

「下がれ。。。。」

「助けてよ。。。おトラ様ぁ。。。。」

縁側でつやは倒れるように泣き伏せた
小さな身体はずっとずっと震えていた
「守護代様は何も。。。しなかった。。。」
私は胸を押さえて自分に問うたが。。。。それを理解はしたくなかった
「ダメだよ。。。出来ない。。。」
俯いた

「おトラ様ぁ！！」
それでも叫ぶ声に首を振った
「つや！！」

いつの間にか
いや
ココのところほぼ毎朝大騒ぎだったのだから誰もが気がついて当たり前だった
「猪（いの）」を頭とする侍女たちが部屋の周りに集まっている

すわったまま泣くつやの肩を多英（たえ）が抱き寄せた
私はきつくと尖ってまった声を抑えて多英に言った

「つやと共にみな下がれ」

「下がりません。。。。お聞き下さい」
私の命（命令）に答えたのは実乃だった
三日前にも言い争いになったばかりだが
あの日
私の前に座した時以上に厳しい表情のまま重い口は告げた

「守護代様の命（命令）により長尾政景軍。。。二日前より栃尾に向けて進軍しております」

逃げるように奥の襖に手を掛けていた私は振り返った
「なんだと?。。。何で進軍している?」

絵空事
動揺を呼ぶための悪質な。。。。

なのに。。。「真実」がやってきた事に心は素直に反応し
息が詰まらせ
身体を崩し前に膝をついた

「どうして。。。。」

頭を抑えた
どこかで
まだ心のどこかで「兄上」と信じていたものが。。。

「おトラ様!!」

膝をついた私の前に泣いていたつやが目の前に走って両手を広げた
手の中に転がる二つの「黒い飾り石」

「戦して。。。。つやの宝あげるから。。。。みんな助けて。。。」

小さな手。。。。
それは話しに聞いていた「形見」。。。。。
つやのかか様の宝

つやの耳に光る石とおそろいの。。。。。「宝」

「戦して。。。お願い。。。。」

両手を高くあげ伏して泣く
懇願の言葉にみなはしずまりかえり
肩を助ける多英も泣いていた

泣いた

「嫌だ」
と
そんな事を私に。。。。言わないでくれと

その27　つや　（1）（後書き）

米山合戦。。。。

後書きからコンニチワ～～ヒボシです
年末って事もあって忙しく過ごしておりますぅぅぅ

さて
新章に入りましてこれからいよいよ「米山合戦（よねやまがっせん）」に入って行くのですが
あ～～
ネタバレはないですけど
純粋に物語りを楽しんで下さっているのなら読まない方がいいかもしれません～～（藁）

米山合戦は。。。。実は史実的には無かったのではないか？
と
最近の研究では言われています
米山合戦の資料としては件の「北越軍記」が大きいのですが
これは武田の歴史をつづった「甲陽軍鑑」が江戸時代武家の中で流行った頃に「宇佐見」の曾孫と称する「宇佐見定行（うさみさだゆき）」が軍記物として書いた
という経緯があり「史書」としての信憑性に偏りがあるからです
北越軍記は前半は何かにつけ「軍師，宇佐見」と相談して国の行く末をきめる景虎様が書かれています

ところが実際の宇佐見は景虎様からは疎まれ「要注意人物」とされあまり大事な仕事をさせてもらえませんでしたそのことは彼の書いた手紙に「不満」として残っていたりもするそうで。。。先祖の名誉回復のために書かれた軍記物。。。。という部分が見え隠れしています

が

じゃあ戦はなかったのか？

というとかならずしもなかった。。。。というわけでもないようでやっぱり「お家争い」はあったようです

大なり小なり

なので。。。。カイビョウヲトラでは米山合戦をやろう！！（藁）といろいろな逸話を織り交ぜながら物語を作って行こうと

なのであまり「史実に一致しない！！」などと虐めないで下さい（爆）

その胸は0章にも書いてありますのでご了承下さい

そんなこんなで

デッドヒート！！！年末もがんばって書いて行きます！！！頑張ります！！！

それではまた後書きでお会いしましょ～～

その27　つや　（2）

泣きやまないつやを抱えて屋敷に戻った実乃たちを迎えたのは栖吉から駆け込んだ「金津」だった
疲れた顔色の周りを気にする事なこの男は考えた事もないのだろう
一直線に実乃の前に進むと怒鳴った

「戦の支度はとっくに出来ているぞ!!栃尾はどうなっているんだ!!」

実乃は。。。。顔を背けそうになったが金津はさせなかった
前を守っていた陣江の肩を払って
実乃の
襟首を掴むとさらに大きな声で言った

「十日もすれば政景のアホはココに来るんだぞ!!わかってるのか!!」

掴んだ手で実乃の首をおさえて締めかからんばかりだ
その手を段蔵が軽く返して

「わかっている。。騒ぐな」

と金津の身体を押し
距離をとろうとしたが
手は襟を放そうとはしなかった

夕暮れ時
屋敷の中は多くの城人や侍女たちが夕餉と灯りの支度をしていたが
金津の大声にみな動きが止まっていた
そうでなくても。。。影トラの「ご機嫌」が悪い日が続いていた
その上で今この屋敷に集まった者たちの姿をみれば
「ただならぬ事」が栃尾に迫っている気配など。。。誰もが気がつき
隠せないものになってしまっていた

実乃は金津の手から襟を奪い正しながら言った

「明日。。。もう一度話しを」
「ふざけるな!!!」

力無い実乃の声をやはり激情で高ぶったままの金津が断ち切った

「どこにそんな余裕があるんだ!!春日山は先手を打ってきたんだぞ!!逃げる道なんかない!!戦うしかないんだ!!影トラ様を立たせろ!!」

飛びかからんばかりの金津を段蔵と陣江が止めたが
言葉は止まらなかった

「わしがお会いする!!」

そういうと弥太郎や陣江の間を割って無理にでも進もうとした
実乃は慌てて肩を押さえようとしたが金津は掴まれかかった肩を見事にかわした
背中越しに言う
「実乃。。貴様とは覚悟が違う!!わしの覚悟を示して影トラ様に

戦って頂く!!」
その手は小太刀の柄をしっかりと握っていた

「待て!!金津!!今行っても無理だ!!」

慌てた実乃はそのままつんのめって倒れそうになったが陣江が素早く支えた
息巻く金津は弥太郎が後ろから羽交い締めに捕まえた

「はなさんか!!!このたわけ者ぉ!!!」
「落ち着けって。。。」

さしもの金津も大男に抱えられ足が地につかぬ状態では形無しだ
それでも声の威勢はおちる事はなかった

「これが。。。落ち着いてなど!!いられるか!!!」

足がつかぬとも大暴れ
バタ足は運悪く弥太郎の「急所」に当たりそのまま大男は真っ赤になって飛び上がり手は外れたが金津が進む事は出来なかった
弥太郎配下の者たちに取り押さえられてこんどこそ身動きとれぬようになった
はいつくばるように抑えられながらも金津は叫んだ

「わしが!!秋明院(しゅうめいいん)様の!!栖吉の!!覚悟を示して腹を切る!!切らせんかぁ!!!」

飛び上がっていた弥太郎が身体をくの字に曲げながら答えた
「そんな事したって無駄だってぇ。。。」

実乃が弥太郎の部下たちの間をわり抑えていた手を除けた
首を起こした金津の前に実乃は眉間に深く苦悩をきざんだ皺の顔を
見せたまま

「すまん!!」

まだ板間に這った状態の金津に深く頭を下げた

「実乃よ。。。。」
一段落ち着いた声になった金津の目には涙が溢れていた
黒く焼けた肌
傷だらけの顔に無精髭そんな男が泣いている
抑えていた手を除け
目の前に座した実乃と同じく付き合わせるように座って

「わしらの全てがかかっとるんじゃ。。。」
「わかっておる。。。必ず影トラ様を動かしてみせる」

顔を上げた実乃に金津は拳を音高くぶつけた

「こうしてる間も秋明院様は断食と念仏の荒行を続けていらっしゃる!!命を賭けて祈っていらっしゃるんだぞ!!何をのうのうと構えていた!!何故!!こうなる事を教えなかった!!」

もう一度振りかぶった金津の手を段蔵が止めた
今度は暴れなかった制止に従って肩を落とした
実乃は。。。。

ココに。。
栃尾に影トラを招いた時にその事は言えなかった

「敵」が。。。いずれ来る敵が「兄，晴景」である事など
何故かと思うほどに言えなかった
それほどに影トラは純粋に「長尾守護代家」の旗持ちとして職務に
打ち込む姿をみせていたからだ
だけれど
強さ
ひたむきさはいずれ「越後」の統一という大事業において
立ち向かう
対立する存在を己の目で確認し耳で知ってくれるほどの思慮深ささ
え備えるだろうと

その時こそ「越後」のために戦う事をしっかりと話しできると
思っていた

もっと。。。時間もあるとも思っていた
が
それが甘かった事に金津の拳をうける事でしか自分を戒められない
ほどに。。。

「すまん。。。。だが信じてくれ。。。ぜったいに影トラ様を。。。
動かしてみせる」

ただそれだけしかこの切迫した状況で言えない事に板間に拳を打ち
付けた

弥太郎はなんとか持ち直した身体でつやが泣きやむのを待っていた
屋敷の中は実乃と金津の一件で騒然とし
すでに栃尾に迫っている危機を隠すことなど出来なくなっていた

実乃はなんとか事を収束。。そして進めるために金津と話しを続けていたが。。。良策が出る雰囲気ではなかった
「弥平」

弥太郎は弥平を呼んで聞いた
「あれ出来たのか？」
弥平は思い出したように葛籠に入れてあった包みをとりだして手渡した
弥太郎はそれを確認して未だにぐずっているつやの前に持ってきた

「つや。。しばらくココからはなれたとこに「使い」に行ってくれ」

突然だったが陣江にはそれがつやを預ける事の話しだとすぐにわかった
弥太郎はつやに包みを開いてみせた
それは弥太郎の親指ぐらいの像
小さいながらも綺麗に彫り込まれた観音菩薩の像だった

つやの小さな手にそれを渡して
隣にいた弥平や善治郎たちが口々に言った

「みんなの分作ったらつやの袋の中にゃはいれなくなっちまうからよぉ」
「そのぐらいのがええっだろ。。。持っててくれ」

「いや」

弥太郎たちの目の前
つやは急に自分の首に下がっていた守り袋を引きちぎると投げ捨てた

「つや！！」

「いや！！！いや！！！」
投げ捨てられた袋と渡したばかりの観音像を拾って善治郎が言った
「何やってんだよぉ。。持っててくれよ。。オレらが死んだ後。。
祈ってくれるヤツなんてつやしかいないんだからさぁ」

「いや！！！！」
拾い上げられた袋と像をつやはもう一度払った
払って叫んだ

「いやだ！！「そんな物」になっちゃったらいやだよ！！いや！！」

弥太郎はしゃがんで像を持って。。。

「つやぁ。。。でもな」
諭そうと手を伸ばしたながら
そこまで言いかかった弥太郎につやは抱きついた
「やだよ！！やたろーがあんな物になっちゃったら。。。オラもう
生きてけない。。あんな物に祈るなんてまっぴら御免だよ！！！」

「つやぁ。。。」

弥太郎の手が自分に抱きつくつやの肩を優しく撫でた
善治郎たちの目にも涙があった
「つやぁ。。でもなぁ。。」
つやは自分を撫でた手をつかんだ
顔を合わせ弥太郎に言った

「とともかかも。。。あんな小さな仏様になっちまった。。。やたろーがあんな物になっちまうなんていやだ!!生きてよ!!みんなが生きてくれる事を祈るから!!死なないでよ。。。おいていかないでよ。。。」

そこまで言って

泣いた

泣いた

つやも弥太郎も。。。善治郎も弥平も。。。。弥太郎配下の男達全てが。。泣いた

陣江は呆然とその姿を見ていた
「確かにみんな。。。。祈っている。。。。」
実乃も
金津もその向こうにいる秋明院も

同じ空の向こう
きっと虎御前も。。。。祈っているでも。。。。何かみんなが無理

な願いに疲弊しているようにしか見えなかった
だから「争い」を願うなんて事はどだい無理で不利益な事だし
ましてや「兄妹」に血を帯びた戦いを「してくれ」なんて。。。。
間違っているとさえ思っていたが
それが今違ったものになった

陣江は弥太郎の腕に強く抱きしめられたつやを見た
「生きることを祈る」

陣江は自分の胸に手を当てた。。。
この「戦」は避けられない。。。ならば「何のために」戦う?

そうだ。。。生きて行く事

振りかえった

「実乃様。。。。オレにトラと話しをさせてください」

その２８　祈り（前書き）

あけましておめでとうございます！！！
今年が皆様にとって良い年である事を祈ります！！！
ヒボシ

その２８　祈り

ジンは「寅」の刻に禅を組み心を穏やかにまとめていた
心穏やかに。。。。
少し前までの喧噪からまず自分の気持ちをまとめる作業に入っていた

「オマエに何が出来る？」

ジンの申し出に真っ先に答えたのは段蔵だった
焦燥しきった表情に苛立ち
いつもなら誰よりも皮肉屋である段蔵に「余裕」はなかった
そのままジンに殴りかかろうとするほどに
その勢いを止めたのは実乃だった
段蔵の肩を押さえ真っ直ぐジンに聞いた

「動かせるのか。。。。」

重臣として幾度もの折衝を重ねたが影トラの心を動かす事は出来なかった実乃
万策尽きた状態の今
最後の一手として陣江を見ている

「この戦が避けられないのなら。。それでも。。生きなければならないのだから。。」

今やっとまとまった気持ちをうまく実乃に告げる事はできなかったが
真っ直ぐな目で

「とにかくトラと話しをさせてください」

頭を下げた

実乃は何も言わなかった
段蔵にも何も言わせなかった
ただたくさんの目が陣江を見つめ。。。。「祈る」想いが集まっていた
その中をゆっくりとあるいた
陣江は「気がついた」のだ

弥太郎に抱かれ泣き続けていたつやの頭をかがんで撫でた
縋る目線は。。。ただただ。。。。

「祈って。。。。つや」

悲しみに濡れた瞳を優しく指で拭って立ち上がった
もう向かうべき所を目で見据えていた

薄明の近づく刻
私は何にも祈らずただ静かな闇の中に心を置いていた
「戦え」

心はいつもそうささやく
まるで悪鬼の巣くう心をもつ私

そんなものに身をまかせ戦っていいわけがない
相手は「兄」だ
それが許されるのなら。。。。
私の心に「義」はない。。。。

「義」は無い
なのにココの全て
栃尾の全ての者たちは。。。。。「苦しんでいる」？

どうして
どうなっているのか
どうしていいのかがわからない

私は虚ろに静かに燃える灯籠を眺めていた

「トラ。。。。トラ。。。。」

聞き慣れた声
草木に朝が訪れぬ刻に外から私を呼ぶ
すぐにわかった

障子に手をかけながら答えた

「ジン。。。。。」

開けた戸から入り込む冷たい風
山を通る冬の気配が私の身体を震えさせた

「ジン」

目の前にたったジンは作務衣姿のまま近づくと言った

「臭うぞ」
鼻をつまみ手で仰いで見せた
「なんてかっこしてるんだよ」
軽口のまま

私の姿は屋敷の中にいたとしても破れ坊主のような「なり」になっていた

「何しに来た。。。」
私は「臭う」という言葉に反応して自分の着物を改めたが
何の意味もなくジンがココにきたとは。。。すでに思えなくなっていてそのまま
きつく質問した

「別に何も。。。会いに来たんだよ」
私の反応を意に介さない様子で両手を揚げると返す言葉で聞いた

「トラは何やってるの?そんなかっこで」

「私は。。。何もしてない。。。。」

言い返されれば。。。何もしていない

ただ虚空を眺めるようにしか過ごせなかった昨日の夜
私の中の考えは何もまとまらずただ「迷い」の中にいた

「祈らなかったのか。。。」
「何に祈るんだ?」

不信心な答え
息が詰まってしまっている

急に怒りが私の中に湧き上がった

ジンの後ろに気配。。。。

色々な者たちが私の「説得」に来たがついにジンをココに来させた。。。

今まで会う事だってままならなかったジンをココによこしてまで私に「戦」をさせようとしている者たちの心根に腹が立った

「それで。。。。何しに来た?」

唸るように低く言う
ココから早くたちされ!!
ココからいなくなれ!!と薄ら暗い衝動が拳を硬く握らせ私は吠えた

「戦しろって!!!戦しろって言いにきたんだろ!!誰に頼まれてこんなところまで上がってきた!!」

勢いジンの真ん前に立った
生意気に私より背の高いジンの顎先に怒鳴ったがジンは「努めて」

落ち着いたように首を振り

「どうして戦出来ないんだ?」

どうしてだと。。。。。。

思いは言葉より先に手に走ったそのまま目の前にあるジンの顔を殴った

「兄上と戦しろと。。。そんな事あっていいわけのない事に。。。

オマエにはわからないのか!!」

もう一度振りかぶった私の拳を受け止めたジンは答えた

「オマエの気持ちは。。。多少はわかるけど「戦」しろって言いに来たわけじゃない!!」

ジンの大きな手が私の腕を掴んだまま顔を寄せた

息がかかるほどの位置で口元少しの血を流しながらもそれにかまわず

「戦しろなんて。。。。絶対に言わない」

目と目を合わす

嘘のない目

それは。。。わかる

身体を振って掴まれた腕を取り戻した

「じゃあ何しに来たんだ?」

少しだけ離れたお互い

ジンは私に殴られた口元を手で拭い

「助けたい。。。。。とは思わないのか？」

鼻で笑った

卑屈に自分を表す方法しか私に出来なかった

そんな事を今更言われなく立って。。。「なんとかしたい」という気持ちがいつだって渦巻いていた

でも

それが兄を討たなければならない「戦」だなんて。。。。

なんたる「不義」でしかない行為だ

「助けたいさ。。。」

唇を噛みしめながら小さく答えた

いきなりジンは目の前にズイと近づいて大声で言った

「だったら助けろよ！！」

それは私の怒りの火種にさらに油を注ぐ行為

「だまれ！！」

襟首をヒッ捕まえた

力任せに拳を揚げて殴りかかった

その手を今度はジンが捕まえた

捕まえられた事で身体を絡めそのまま足を引っかけ蹴倒した

思い切り仰向けに倒れたジンに乗りかかって今度こそはずさぬ勢いで振りかぶった

「それが簡単にできるんだったら！！！こんな事に！！！」

乱打
当たる当たらないなど関係ないとにかく
叩かなければ「怒り」を納められない！！
口から血しぶきを飛ばしながらもジンは「反抗」した
もみ合うようにお互いの身体を引き離さぬように

「何を助けるんだ！！！言ってみろ！！！」

「祈っている者を助けろ！！！」

「祈り」。。。。。
私の中の怒りに突き進む衝動が止まった
方襟を捕まえられたままのジンの手が私の肩を覆う

「難しい事じゃない。。。ココで「救い」を祈っている者を助ければイイ」

止まった拳
初めて周りを見回した
屋敷の周りに感じた人の姿がやっと視界に入った

多くの者たちが見つめていた事に気がついた
侍女たち
おせん。。。多英。。。。猪。。。直江の妻もみな各々の姿で
胸を押さえたり膝をついたままの状態で。。。。

「祈っている。。。。。？」

首を振った
平伏している実乃。。。。金津。。。段蔵。。。やたろー

「祈っている者を助けるのは御仏の心に添うも同じ事。。。違うか？」

救いを求める祈り
たくさんの手が。。。手を合わせている

でも。。。私には

つや。。。。。
真ん前にいる小さな花
ひたむきで正直な心
震える手を一心に合わせた姿

「宝あげるから。。。みんな助けて。。。」

「助けて。。。と。。。」
ジンの手が私の頬に涙を掬う
「助けるんだ。。。。オマエならできる」

「あなたならできる」

あの言葉がかさなる混乱がうち続いた「越後」の中で死していった
者たちの願い「祈り」は
夢の中。。私に迫っていた手が折り重なった手が。。。
しっかりと会わされていた事に気がついた

祈る者たちが救われないのだったら何のための「御仏の心」か。。。
。。

そんな事に気がつけなかった
御仏に深く仕えた私がそんな大切な事に気がつけなかった
これほどに民草に苦痛をもたらしている「兄」が「守護代」が正し
いのか。。。
などと
愚問だ

「助けて。。。おトラ様」

つやの言葉がこだまし
純然たる祈りは届いた

心に染みいるようにそれは届いた
涙はもう止まらず

私は叫んだ

その29　垂訓

わだかまっていた思いは純粋な涙に押され流れ落ちた

「御仏の心」。。。「忘れる出ないぞ。。」

そうだ！！
師・光育。。。それは貴方が私に教えて下さった事だったのに。。。
なんて事。。。
それを思い出す事ができなかったなんて。。。

頭を揺り動かす
空の高み「天」に顔をあげる
渦巻いた思いが喉をとおり悲鳴をあげた

慟哭

黎明に私の叫びは響いた
なにもかもを腹の底から全部をはき出して終うような雄叫び

声の後
顔を下ろした周りにいる全ての祈りが私には見える

立ち上がった
ジンもゆっくりと身体を起こした
お互いの顔を見た
ジンの顔は少し笑っているようにも見えた

私は涙も泣き声も止められなかった

屋敷に向き直ると走り出した

もう留まってなどいられない
色々な感情は一本に交ざり「やるべき事」はわかったけれどこみ上げた涙も声も止められない
泣きながら屋敷を走り抜けた

走りながら着物を脱ぎ捨てて

「陣江!!影トラ様は腹を召されるのではないだろうな!!!」

走り去った影トラの後を突っ走って追っていく実乃とやたろーの次身体をおこし汚れを払っていた陣江の胸ぐらをつかんだのは金津だった

ジンは口元を拭いながら返した

「お清めに行ったんだよ。。。臭かったでしょ」

金津の真っ黒な顔が頷いて
「では「戦」に出られるのだな?」
と涙ぐんで聞いた

陣江は首を振って答えた

「戦にでるんじゃない。。。。俺たちを。。。。栃尾を。。。。いや「越後」を助けるためにやっと本気で「立つ」んだ」

返された返事
金津は歓喜し叫んだ
陣江も金津もそのまま影トラが走って行った方に向かった

屋敷の中は騒然をとおりこし
すったもんだの大騒ぎになっていた
なぜなら。。。。
影トラが着物を脱ぎ捨て裸で走って行ったからだ
それを実乃たちが追いそれを猪(いの)たちが止めようという状態

「ええい!!!一大事ぞ!!!」

叫ぶ実乃を抱きとめる。。。というより羽交い締めの猪は
片手におトラの着物を持ちながら

「おトラ様は裸ぞ!!」

通路は
侍女たちと武士たちでもみ合いになっている
「父様ダメですぅ!!」
多英にまでしがみつかれた実乃だったが今は止まってなどいられない
遮二無二に身体をふりほどこうと手を回した所に
声がかかった

「何を騒いでおられますか?」

表屋敷をつなぐ通路に出で立ちも小綺麗な武士が実乃たちの騒ぎを

遠巻きに見ながら大きな声で尋ねた

「高梨(たかなし)殿！！」

実乃の頭はめまぐるしく回った
影トラが座して動かぬ状態からなんとしても「戦」に立ってもらうためにも「策」をこうじていた
高梨の妻が影トラにとっての「叔母」にあたる
その言葉でなんとか腰をあげて貰おうと思い呼びだてしていたのだ。
。。。。が。。。

「おおおっ忙しい事ここに。。。」

声が踊ってしまう状態
「妻からの手紙を。。。。」
そんな会話をしている間にも弥太郎たちはつやを先頭に影トラを追おうとしている
それを
おせんが必死に止めている

「つや！！落ち着きなさい！！！」

とても会釈などしていられる事態じゃない

「今は。。。取り込み中で。。。」
何もかもが激変でうまく言葉を返せなくなっていた実乃の目に高梨の後ろに控える「現八」の姿まで見え
おもわず「参った」とうめいた瞬間だった
勢いよく実乃の顎がはね上がった

「何をしとるか!!!はよう!!影トラ様を追わんか!!!」
あがった顎のまま睨む
真っ黒な顔に「生気」を取り戻した金津が喜喜として拳を振り上げ
叫ぶ

「道をあけよ!!!女衆ども!!!「戦」ぞ!!!」

抑えられたままの実乃は顎をおさえながら
「貴様ぁ。。。」
今まで精魂こめて折半をうけおっていた心労を拳で返され苛立ちに
手をあげたところを今度は段蔵に抑えられ

「実乃様!!そんな事に気をあげている場合ではありません!!」
上がりきった血のたぎりを
なだめられた

目前

女たちは屋敷の通路に詰まって動こうとしない

「おおっ!!頼む!!!道を開けてくれ!!」

さすがに女に手をあげる事のできない武士たちを代表して実乃は頼んだ
侍女頭として前にでた猪の顔は険しい

「おトラ様は湯殿に参られました。。。腹を切るなどという事はありません直江様のご内儀様がちゃんとついておられます。。。殿方は」

「みんなでお清め受けましょう」

どうにも譲れない会話に火花を散らした実乃と猪夫婦の間を割り
言い合いに「拳」を突っ込もうと身を乗り出そうとしていた金津の
肩を押さえたのは陣江だった
そのあまりにのんびりした物言いに実乃は怒った

「そんな事！！」
今度は実乃の口を段蔵が押さえた

「身体清めて。。。。心改めて。。。みんなで祈ったんだから」

そういうと陣江は作務衣を急に脱ぎだした
その姿に周りに詰めたみんなが驚いている事に気がつくともう一度
言った

「みんなでいきましょう」

と

ひさしぶりの湯
私は屋敷を突っ切り岩洞を駆け下り飛び込んだ「祈り」と称した自分の凝り固まった思いを削り落とすかのように何度も身体を洗った
何に捕らわれていたのだろう
顔も洗った
涙の後など今更見せられない
髷を落としたざんばらの頭にも湯をかぶり
両頬を平手で叩いた
「わかったさ。。。。」
決意は出来た
「影トラ様。。。」
実乃の声に振り返った
湯殿の周りを女たちが着物で覆い私の前からでは実乃は見えない状態になっていた
「心配かけたな。。。」
私の質問に実乃は声高く岩洞に響く声で返事した
「心よりこの「祈り」が通じる事をお待ちしておりました!!」
その言葉に合わせるように男衆たちの返事が続く
「お待ちしておりました!!」
金津の声はさらに大きく響く
「もう迷わん!!この地のため!!いや「越後」のために国民を「助け」戦う事を誓う!!」

拳をあげ続けた
これは「決別」だ

「私は今より守護代長尾晴景殿と相対する者となりこの「混乱」を
納める者となる!!」

胸を打つ
兄上が正しいのであれば何故に「国」はまとまらなかったのか?
その問いはこの「助け」という仕事の向こうにあると信じる

「よいか!!!!その上で私，長尾影トラに従えるか!!」

ちから強く「誓い」を
陣幕のように着物で私の姿を隠していた猪たちに手で下がれと合図
した
女たちは困った顔をした私はいまや何も着ない裸の状態で立ち上が
っていたからだ
だけど。。。言った

「かまわん!私の赤心を届けたいのだ!」

そうだ
今こそ何も纏わぬ私の心を現したい
ココは
この岩室はなんとふさわしい場所だろう

裸の心を

着物の覆いははずされ私の前には褌一枚で伏した男たちがいた
こんな緊迫した間なのに思わず顔が笑ってしまった

そうだ
みな隠さぬ「心」を現している

実乃
やたろー
段蔵
新兵衛
現八
政頼

数多控える「栃尾衆」

その後ろに控える「栃尾」を支える女たち
猪
直江の内儀
おせん
多英

つや

私はココにいるみんなを助けたい

ジン。。。。。。やっと気がついたよ

「どうする！！！」
もう一度今度はみなの目を見て聞いた

「貴方にしか！！従えませぬ！！」
真っ黒な顔に涙を流した金津が吠えた
その言葉にみんなが続く

「望むことは一つ貴方に従い「越後」のために尽力する事です！！！」
実乃

「わしの主は影トラ様しかおらんですよぉ。。」
つやを横にやたろーは顔をほころばせて言った

「今以上にお供致しとうございます」
段蔵

「揚北の覚悟を持って参りました。。。共にお連れください」
現八

「妻の夢のお告げの通り。。。貴方に従いましょう」
高梨は後で来た事で気恥ずかしそうではあったがしっかりと伏して言った

後ろ
そして私の前に並んだ
女たちもひれ伏した。。。
栃尾を支えるすべての者たちの姿をしっかりと見た
「迷わぬ」。。。。。

大きく手を振り上げた

「良い！！！共に「越後」のために戦おうぞ！！！」

みんな手を挙げた
怒号
響き渡る声
これほどに望まれた救いに堪えていた涙はまたもこぼれた

みんなの中
ジンは照れくさそうに片手を小さく挙げていた
歓声の中
共に少しだけ頷きあった

私は両の手を胸の前で合わせ
感謝の祈りを捧げた
良き「友」のおかげで今一度御仏の心に添う決断を下せたことに感
謝した

その３０　鼓動　（１）

長尾政景（ながおまさかげ）は苛ついていた

つい先ほどまではまったく間逆の陽気な状況だった

大軍団は元より

自分の近習たちを十人も引き連れ大声で「勝ち戦」を語っていた所だった

兵員については坂戸はもとより守護代の元にいた馬廻り以外の旗本衆まで借り

集兵によって千近い人足を集められた

大戦の「総大将」としては十分己の武威を示すことのできる数だ

およそ五千の大軍団。。。。。

これほどの規模での軍団を動かす事ができたのは先代では「戦鬼為景（いくさおにためかげ）」以来誰もおらず

そういう意味あいからも自分が「次期守護代」としてふさわしい軍団の長である事に満足出していたところだった

が

坂戸を出てから二日ぐらい行軍の中を勇み足でいた政景は共に従った老臣に呼ばれていた

苛立ちの元。。。

「兵糧（ひょうろう）？」

意気揚々な気分での行軍が後二日もすれば栃尾に入るという場所まできた陣内に厳めしい顔を揃えた「重臣」たちの前。。。。呼びつけられた政景に打ち明けられた問題

「現状にて後。。二日分は有ります」
家老の「樋口兼村（ひぐちかねむら）」は台帳を見合わせながら答えた
「二日？何故そんなに少ないのだ？」

大軍勢である
それなりの「台所」を持っていてしかりのハズだったが
坂戸城が支度出来る数を上回っていたのだ
「急な戦支度にございました故。。。。兵を集める事はできましたが兵糧は。。。」

樋口は冷静に己の意見を述べた
多くの兵を要した戦にもっとも必要とされるのは「小荷駄（こにだ）」に代表される輜重（しちょう）部隊だがこれほどの大所帯にかかわらず「守護代軍」のもつ部隊は五百を満たない数

「そもそも日取りの問題にもありました。。。この「収穫期」の中では石高の算出もできません。。。そんな状態なのにて軍役の分を差し引く事は無理でありました」

人の動く軍団には頭で考える以上に「物」を食う
兵を集め
近習を呼び揃えいい気になっていた政景にはまだ理解が及ばない話だった

陣幕の中
樋口とは向かい座に座った老将「国分佐渡守（こくぶんさどのかみ）」にも痛い話しだったかつては「為景（ためかげ）」と戦った事のある男は春日山の番人の事を思い出していた

「直江実綱（なおえさねつな）」

春日山ならそれらの仕事を一手に引き受ける「男」
晴景の治世が危ういながらも「戦」を手法とせず成り立って来たのは彼のように「戦」に必要な「数」を一手に任せられる男がいる事に寄るからだ
老将は顎髭を引いて見た。。。
数こそ立派なこの軍勢には。。。
その「数」を仕切る者がいない。。。。。
事
「食」の切り盛りのできにない軍はうまみが薄い。。。腹の虫というものに集められた「兵」は敏感に反応する

「食」の確保は大いに士気にかかわる問題だった

「栃尾の畑からとればよかろう」
慎重な面持ちの二老に政景は腰掛けたまま考えていた調達法を告げた

「。。。。見あたらないのです」

「食」の問題を安直に考えていると思われる政景に対して国分は釘刺すような目線で続けた

「栃尾の領内は目の前ですが。。。田畑は全て刈り取られ兵糧となる物を見つける事が出来なかった。。。。と「影」からの報告を受けております」

政景は驚いたが
顔に出てしまった自分の焦りをすぐに隠した

「凶作だったのか？」

「いいえ。。。凶作であったという報告でははありません。。刈り取られて「そこ」には何もなかった。。。。という事です」

国分は戦が決まってからすぐに
栃尾に幾人かの「影」を働かせてはいた
だが任務の内容は栃尾が「戦」の支度をしているか？どうかに重きをおいていた事もあり
田畑の様子などそれほど気にもとめていなかったのだ
だが。。。考えればすぐに解ること
まったくそれがなくなってしまうなどと言う事は絶対にない
収穫は。。。あったハズだ

「現在栃尾領内での刈り入れ待ちの田畑は無いという事です」

政景は扇を腰から抜いてとりあえず「考え」ているが。。。
およそ良い考えはうかばなそうだった
若殿の困惑顔を見ながら「樋口」が口を開いた

「坂戸に引き返す事はできぬども。。。ココを本陣に構えた方がようございます」

身長である事を進めたのは中井外岡(なかいとおかね)
政景の守り役である白髪は
老臣たちの意見をまとめようと口を挟んだが
政景は扇を台に打ち付けると怒鳴った

「そんな事ができるか！こんなところまで来て。。それこそわしの沽券にかかわるわ！」

声は荒れていたが
外の近習たちに騒ぎがしれるのを抑えた
程度の反論は織り込み済みだった国分はさらに叱咤しようとする中井を抑え冷静に提案した

「ではとりあえずです。。寺社の蔵を開けさせましょう」
「ダメだ！！」

即答
政景はそれには同意できなかった
腰を浮かせる勢い国分に顔を向けてきつく続けた

「絶対にダメだ！！！また。。。。父上の時のように寺を敵に回したくはない！！」

真っ赤な顔の若殿
樋口や中井には政景が「寺社」の蔵を開けることに反対する理由がわかっていたが
国分は「戦」を仕事とする流れ仕官だ
「戦」をうまく運ぶことの方が大切だった

「兵糧がなければ。。。。兵が弱ります！」
「ダメだ！！何か他の方法を考えろ！！」

そこまで言い切って口をきつく結んだ

政景は自問した
今それをする事はできない

「守護代」の地位が懸かった「戦」だ

大いに誰もを納得させる物が必要で
小事で己を貶めたくはない

「後二日。。。」

もはや進言の余地がなくなった間に樋口はもらした
後二日で栃尾の領内に入るという事は一日で敵もココまで討って出てくる。。。そういう危険な場所にまで来てしまっているという事に気がついていながらも
その重大さがまだわかっていない若殿に閉口した

「それより影トラからの返書はまだこないのか？」

沈黙に耐えられなかったのか
あやうく握りつぶしそうになった扇を腹に戻し
やっとで学んだ忍耐を働かせながら控える中井に政景はいくぶん声

色をよくして聞いた

「未だ返事ありません」

溜息を吹き流すように中井は答えた
国分も樋口も顔を曇らせたままだ
政景は
眉間をさすりながら。。。。またも黙ってしまった

「開城せよ」

坂戸から兵を挙げてほどなく政景が影トラに宛てた手紙の中身を要約するならそれだけだった
妻。。「綾」には耳が伸びるほどひっぱられながら

「お願いですから影トラを酷く扱わないでくださいな」

と
頼まれていた
肝心な母親である「虎御前」からはなんの嘆願もなかったが
可愛い妻の願いもこの事業で叶える事ができてこそ「次期守護代」
と認められる一つの手腕ともおもえ
温情的に手紙を送ったのだ

「何故。。。。返事をしない。。。」

うなる。。。。
前途洋々にみえた行軍にはすでに暗雲がのしかかってきいてた

「戦」の中身について政景の知識は付いていけなくなっていた
ただ
心に残るのは「力」だ
泣き言など言えない
今更「晴景（はるかげ）」に兵糧の問題が。。。。など言えようもない
声高らかに春日山を出陣した自分は強い男でなくてはならないのだ
から
その大いなる意志を邪魔する
「兵糧」の事も「影トラ」の事も。。。。。
まったく腹立たしい以外なにものでもなかった

「何故だ。。。」

一方の問題
肝心な影トラからは何の「連絡」もない。。。。

連絡を。。。返事を返さない無礼に腹が立っていた
間を取り持ってやろうという温情を働かした自分に対しひれ伏して
も良いぐらいで
そのために「早馬」がきてもおかしくないとさえ思っていた
会ったことがないとはいえ
綾が懇願するほどの妹の事とおもえば。。。。晴景のようにいきな
り「剃髪」しろなどと言わず
城を明け渡せと
「優しく」書いてやったのに。。。。思えば思うほど腹が立つ

険しい表情の主に中井は今ひとつ気がかりになっていた事を尋ねた

「栃尾城の動きも気になりますが。。。栖吉が少しも動かない事も
気になりませんか」

政景は立ち上がった
大きな体に腕を組み並ぶ白髪たちの前で少しだけ顔をゆるませて言った

「。。栖吉。。。そうだ明日は栖吉に兵糧の供出をさせよう。。。
何逆らいはしない綾からの手紙が効いているハズだ」

影トラに穏便な処置を。。。
という綾の願いの時
政景は次の一手がひらめいていた
やっと自分に廻ってきた天運が良い策を呼び出したとも思えた

「栃尾の仕置きは守護代様の命（命令）によるもので政景様が行いますが事を荒立てないためにも。。。影トラの処置を穏便に済まして頂くためにも栖吉は騒がぬように。。。重ねてお願い致します」

栖吉の大御台（おおみだい）「秋明院（しゅうめいいん）」は綾にとっては「祖母」にあたる
いまや年寄りになりそれでも栖吉を守る彼女にとって
孫の頼みを懇願と
同じく孫娘トラの助命に文句を言いはしないと読んでいた

事実この翌日栖吉は「兵糧」の供出を承諾する
しかしこれが影トラの「策」の一つである事には気がつけなかった

またもう一つの過ち。。「秋明院」。。。彼女がどんな女なのかは。。。政景夫婦共々全然理解していなかった

「静か過ぎます。。。栖吉は危険では？」

国分は未だ「参戦」を表明しない「栖吉」は不安であるとして戒めを口にしたが
政景には「心配事」しか口にしない国分との問答が憂鬱になってきていた
口をまげて皮肉を言うように返した

「オマエは良く知らぬのであろうが栖吉など今は「長尾」という血族の名をもつだけで「力」にはならん。。。為景に恭順を示して以来逆らった事などない」
「しかし。。。黒滝の一件以来影トラ殿に寄り戦っております」

「だからなんだ？そうだとしてもこの五千を「軽く」出せた我らに逆らう気になるか？。。。。それに守護代軍に「援助せよ」との手紙も綾から受け取っているハズだ。。もし逆らう気があるのならすぐに手を出してくるような「癇癪持ちの女」なんだろう？」

政景は「噂」だけの「秋明院」の事を樋口に聞いた
中井は自分の守した若殿の軽口に顔をくもらた
五千の兵は出陣こそしたが。。。軽く動いているわけではないという事実を政景が認識していない事己の力不足さえ感じていた

樋口は口封じの状態になって黙ってしまった国分のかわりに問うた
「栖吉から兵糧の供出はさせましょう。。しかし輜重（しちょう）部隊を我々の隊に加えるのは。。。危険ではと」
「栖吉は逆らわん！！」

可能性として。。。
栖吉が「逆らうのでは？」という思いはあったが綾の「力」と春日

山の威光を信じていた

心配性な老臣に思わず声を荒げた自分を首を振ってなだめた

それでも。。。。大きな体の方は
忙しなく揺れ焦りを隠せてはいなかった。。。だから自分の「気短」な所を隠したいと顔を背けた
今度の戦は。。。
自分の手の中で全てのことがうまく転がしてやらねばと。。拳を何度も握りかえした
出陣を早く決めた事などを
「若さ」と「焦り」であるとなども「今更」「老臣」に言われたくもなかった

「勝つ」事だけを考えて。。。
白髪の彼の方にむいた
「心配しても始まらん栖吉の睨みは「父上」に任せてある」

陣幕から向こう
もう一つの山陰を越したら見えるであろう栃尾城に顔を向けた
後三日もあれば城は真ん前だ。。。
こんなところで作戦を立て直すなどと停滞はできない

「迅速な勝利を」

忙しなく「戦」の感覚を探すために動いていた手をきつく結んだ

「どちらにしてもだ。。。待つ事はできない影トラの返事が無くても栃尾は攻める。。。もちろん五千もの軍団に歯向かうアホとは思

わんがな。。。」

国分は物事を深く読もうとしている
「しかし。。。」
「政景様のおっしゃるとおりです！！」
振り返った
そこには陣幕をめくり政景に共をしてきた年若い近習達が立っていた
色とりどりの具足に身を固めたまだ若すぎる傷のない肌の男たち

「老臣の方々の心配ももっともなれどこの数をもって逆らう者など
越後にはありますまい！！」
「気持ちで負けてはなりませんぞ！！」

口々に「勝ち戦」という返事を投げた
政景はその言葉に背を押されたように
未だ慎重論を崩さない老臣に告げた

「勝つのだ。。。勝ちに行くのだ」
まるで
自分に言い聞かせるように
その後ろを近習立ちが歩く

「政景様。。。。もうじきに守護代様になれますなぁ。。。。」

「守護代」。。。。そうだ
待って。。。待つことは。。。。出来ない
目前にせまった「勝利」と「守護代」の地位。。。。。鮮やかにこの手に入れるためにも留まる事は出来ない

政景は意を決して歩き

陣幕を開け家臣一同と戦目付として参戦している「柿崎」たちを前に大きな声で号（号令）した

「明日栃尾の領内に入る！！！影トラからの返事がない限りは栃尾の「謀反」の気がなくなったわけではない！！各々気を緩めず押して参ろうぞ！！」

そういうと自分の近習立ちを引き連れ己の陣所に向かった
その後ろ姿を見ていた国分は樋口と中井に告げた

「勢いだけではなんともなりませぬ。。。。念覚寺（ねんがくじ）には。。。。私が「良い方向」で話しをつけておきましょう」
兵糧の問題を解決する策
樋口はただ深く頷いた
中井も頷くと
「事後の方はわしが処理しておきましょう」
と
恥ずかしそうに頭を掻いた

「そのまま来るらしいな。。。」

夕暮れ時
政景たちの陣幕からつなぎを持って来た男は社のうしろで水を飲みながら
「あの大将。。。やっぱり「戦」わかってねぇよ」
段蔵に負けぬ皮肉で報告を続けた

近くを流れるわき水の棚で段蔵は手を洗いながら聞いた
「兵糧の問題はどうなった？」
槍を投げ出し具足をゆるめながら男は答えた
「大将（政景）は領内に入ったら「乱取り」で難を凌ごうって思ってたみたいだが」
ゆっくりと
社の木に寄りかかったままの段蔵の顔はにやけていた
明後日栃尾に入ってもそこに「兵糧」はない「乱取り」できる物もまずは無いからだ
「目の前にぶら下がった「餌」で寺社に手は出さないか？」
「餌」。。。晴景が与えると言った「守護代」の座
段蔵は持ってきていたにぎりを男に放り投げて続けた
「今年は豊作だったから。。。このあたりまで刈り入れるのは骨だったぜ」
にぎりを受け取った男は大笑いこそしなかったがそうそうと囓すよに笑って
「迅速が身に付いていて良かったって事だな。。。ふぅ。。。飯もうまい」
にぎりをほおばったって
「予定どおり明日栖吉は兵糧を提出するそのための人足五十も準備はできている」
飯にがっつく男に段蔵は指示を確認するように続けた
「抄造（しょうぞう）。。引き続き内定を頼む。。明日からは「栖吉衆」と合流。。

中身の撹乱も。。。頼むぞ。。。くれぐれも気をつけてな」
抄造は自信満々で頷いた

「こんな所まで出てきてオマエこそ。。。着けられるなよ」

段蔵は口だけ形で笑って
「余計な心配はいらん。。。まずココで勝つ。。。それが大切な事だ」

風に揺れ落ちる木の葉を手の平に拾い背を向けた

「わざわざ死地に来るとは哀れなり」
米を逃さぬように指まで舐めた抄造は「何か」の匂いに気がついたか鼻をつまんで見せて立ち上がった

「柿崎様は目付の仕事がある事で先陣はされない。。。ていうか「疑われて」いるから後衛の中程にいて身動き出来ない。。。が。。。影トラ様に一言。。。「大暴れ」してくだされ。。。だそうだ」

それだけ言うと放り出していた槍を担ぎ夕闇に紛れ陣営に帰っていった
段蔵もまた闇に紛れ栃尾に向かった

その社に国分の放った「影」の者の二つ死体があったのは誰も気がつく事はなかった

その３０　鼓動　（２）

「朝方政景殿の元から出た先発の者に出城が確認されたと思われます」

息を切らせて二の櫓まで走ってきたのはやたろー配下の善治郎だった
「これでやつらに我らが「戦」に備えている事がしれましたな。。」
実乃の返事
善治郎は近習に水を貰うと一気に飲みこみ

「明日に「激突」という事になりますか？」
「そうなるな。。」

実乃は「危機」を感じさせる物言いではあったが
声から緊張は薄れていた
十分に対応できる所まで栃尾城と栃尾の領内が追いついた事による
「余裕」が出来たからだろう
それでも
栃尾の城内はいつもどおり
変わりなく騒がしく忙しなく城人から屋敷仕えの者たちまで走り回っている

「出城」は元々そこにあった関番所の屋形を急遽改装した前線の陣営だ
私はココから先
政景殿の進軍を許すつもりはなかった

ココから開戦する

報告は一刻おき
いや
それより短いぐらいの間で進む

「予想通り政景殿。。寺社に兵糧の供出をかけましたが祈祷中にて
という言葉を鵜呑みに手に入れる事はできなかった模様です」
立ち上がり
櫓から総構えと城下の備えを見ていた実乃は頷きながら言った

「良い心がけだ」

私は少しづつ自分の心にかかっていた靄が晴れ
「戦」という部隊に望む「あの気持ち」に入り始めていた
すでに鎧直垂(よろいひれたれ)に身を包んだ私の唯一の気がかりだった「乱取り」を
防ぐため

領内の兵糧を出来うる限り刈り込み
栃尾城内と栃尾周辺のあらゆる寺社に担ぎ込んでおいた

一粒の米さえ渡したくない

「よほど「守護代」になりたかったとみえる」

詰めた私の表情をよそに実乃が隣に腰を降ろした
黒を基調とした数多の傷をもつ具足をがっちりと着けた実乃は不敵
な笑みを見せた

地図を開き
軍議は常に動く

相手がどこにいるか。。。。それはすでに私の手の中にある

「しかし差し迫ってしまえば兵糧を寺社から奪ったりしませんか？」

私と実乃が顔を合わせていたところに秋山史郎（あきやましろう）が報告に上がってすぐに聞いた
秋山もすでに戦支度に身を固めている

「それはない。。。政景殿の目は「守護代就任」のみに注がれている。。それ故にかつて親父殿がやった失敗を「またも」やれるわけがない」

実乃は私にとってかつての「戦」をしる大切な知識袋だ
寺社に兵糧を預けたとて
強奪される可能性がなかったわけではない

だけど。。。。

浅はかな者
己の欲する物に釣られる

「かつて政景殿の父上はお屋方様（為景）と戦った時にしてはいけない強奪をしました。。「居田神社」を焼き討ちしてしまい結果寺社からの思うような支持がえられず「守護代」になりぞこないましたから。。。今度は絶対にそれはしまいと「誓って」いるハズでし

ょう」

実乃の言葉どおり
領内に入った政景殿率いる「守護代軍」は小さいながらの略奪はあったものの寺社には一切手をださなかった
そして
自分に「律儀」なこの軍勢は兵糧の窮乏を補うためにわざわざ「敵」を自らの腹に入れてしまっていた

笑う
少しだけ

「好ましい。。。。」

ほくそ笑むように
自分の「都合」のためだけに「神仏」に寄進された物には手をださないなどと。。。
まさに「俗物」
それでも「正しい」と思ってココに向かって来ているのだろうか？

知りたい。。。。

私は敵のこの「先」の行軍予定を考えながら思った

「城裏守門の小道街道には敵の影はありませんでした」
安田長秀の出した手の物たちは坂戸からの小道の方面を偵察してい

たがさすがに大所帯の軍勢に城の裏手を走る小道を通るという選択はなかったようだ

「兵も分けずそのまま栃尾に向かってきているという事か。。。。」

私は地図から首をあげ隣においてあった酒を煽った

「栖吉は。。」

空になった杯に酒をつぎ足しながら秋山が答えた

「指示どおり沈黙を守りつつ兵糧とともに影の者たちを政景殿の陣に忍ばせたようです」

少しも領内から兵糧がえられないとなれば
栃尾の蔵を狙って死にものぐるいで飛び込まれる可能性がある。。。。心配を逆手に取った
それを「弛める」ために
少しの「餌」と共に「栖吉衆」を忍ばせた

「中西は動いているのか？」
「問題ありません」

いつの間にこの場に入ったのか
実乃の問いに答えたのは段蔵だった

「抄造（しょうぞう）は栖吉から合流した小荷駄隊と共に「風評」を流しています」

外から帰ったばかりの段蔵も一杯の水を飲み

まとまりつつある計略の頭(かしら)たちに続けた

「栖吉衆はこちらが「攻勢」に出たところで退路を絶つ横槍を入れます。。と。。金津が吠えておりました」

手をひらひらと

たぶん耳元でさらに芯に響くほどの声で。。。新兵衛は意気込みを。。。

手の酒をもう一度あおり段蔵に

「風評とは?」

段蔵は水の杯を下ろすとその場で両手を合わせて見せた

「おトラ様は越後平安の祈願のために全ての穀物を神仏に。。。。。捧げておりますと」

櫓に集まった男たちは声をあげて笑った

私も少し笑った

なるほどと

その先。。。。何に祈願しているかはこの「戦」の出来で決まる

立ち上がり

櫓の窓に向かい歩いた

「夜に。。。。やってくるかな?」

「通常ならその「手」を使うでしょうが今回は「餌」の事を気にして「布告」を絶対にする事でありましょう」

私の後を追い歩を進めた実乃はやはり「大戦」に慣れている

そして
相手の事情にも

「明日は政景殿と話しがしたい。。。」

開口に手をかけ眼下を望み
追うようにかつて三条にのさばった悪漢たちがいた平野を見つめながら

「話し合うおつもりなのですか？」
突然の私の言葉に
実乃は驚いて聞いた

「聞きたいことがある。。。。」

秋山も安田の手の者たちも慎重に顔を見ている

「姉上の良人（つま）である男を見たことがない。。。本心は「何」を狙っているのかをその口から聞きたい。。。」
ココに
栃尾に兄上の名代として軍を率いてきた姉の夫。。。。
自分の耳で知りたかった

「何故」こんな事に「荷担」したかと？
「義」なる理由があるのか？と

私は背を伸ばし首を振った
廻りにいる者たちの不安をかき消すかのように

「戦はする。。。絶対に戻ることのない「大戦」を。。。その上で
ここまで私の心を騒がせた真意を聞きたいのだ」

みなが押し黙った中
腕組みしたままの段蔵が口を開いた

「会見してみましょうか？」
実乃達は目を見張った「どうやって？」と

「影トラ様次第です。。。。腹の奥を見る事が出来ればが「戦」もしやすいと言うものでしょうから」

段蔵の目は「策」を見つけた事で輝いていた
と同時に何か笑っていた

私はどんな策なのかまだ検討もつかなかったが頷いた

「真意を知りたい」

「真意？。。。とは？」
櫓に揃った栃尾の獅子たちの目が見つめる
視線を軍議の中心にあった図に落とす

地図
ココより真っ直ぐに海岸にむかう
振り向き外の景色に果てを見ようとする

その向こうだ

「春日山」の印

目を閉じた
「守護代様の意志。。。。それは何か。。。。だ」
そういうと左手の数珠を回し手を重ねた

政景からの手紙で栖吉を見張るようにと「釘」を刺された宇佐見は
かなり気分を害していた

己の読みでは
絶対に手を繋ぐ事などなかったハズの
「守護代晴景（しゅごだいはるかげ）」と
「長尾宗家の男，政景」
それがあっという間に
お互いの損得勘定で結びついてしまった事

その報酬が「守護代」の座でもはや賭が成立しなくなり
宇佐見の「軍学」がまたも蚊帳の外に押しやられた。。。。

敗北感。。。。

そのうえ
手を結んだ政景の言葉は今や守護代の言葉にもなってしまい。。。
命令に逆らう事さえ出来なくなってしまっていた

はやばやと「影トラ」の側に平伏を打診してしまったかつての盟友
「大熊朝秀（おおくまともひで）」の事もあり守護代側からも大きな「釘」を刺されていた
「よもや宇佐見まで軽はずみな行動はしまいな。。。」

そんな口調が聞こえてくるような晴景の手紙を握りつぶして文台に投げた

「栖吉は春日山からの命令で兵糧の供出を行いそのうえ小荷駄（こにだ）の人足まで取られたそうで。。。」

目の前に報告を持ってきた近習にも
自分の使える殿の機嫌は伝わっていた
上目遣いに恐る恐る現状を語った

「つまらん事だ！」

何もかもが後手に回ってしまった感じで宇佐見は一言だけ怒鳴った

もうどこの勢力がどう動いても自分には「不利益」で「うまみ」のない事にしか感じられなかったのだ
近習に背中を向けて腐った言葉だけをこぼした

「あいわかった。。。と。。。そう言っておけ」と

その３０　鼓動　（３）

春日山に残された綾は一人奔走していた
良人（つま．夫）政景（まさかげ）は血の気にまかせ晴景（はるかげ）手のひらの策に踊ってしまっているとしか思えなかった
どれほどに彼が
自分に向かって笑顔と自信を振りまき
「心配ない」と豪語しても。。。。。

やはり巧みな言葉とその手の中にうまく誘い込まれてしまったとしか思えなかった
春日山の屋敷を繋ぐ渡り。。。
かつてその向こうの一室が自分に与えられた部屋だった
外が「戦」に溢れていた頃を思い出し背筋が震えた
と
同時に
そんな「戦」の日々にあっても書物を重んじ自分にもそうあるべきだと「優しく」教えた晴景の事を思い出した

昔から晴景は知識者であり「賢者」だった
幼少の頃
綾に漢字を教え
良き書物の選択をしてくれたのは晴景だ

その教え方は「心地よい」

頬に少しの秋風を受けながら
ほどけた櫛（髪）を整えながら記憶を辿る

心地良い教え
そして
しらずしらずのうちに知りたかった事や望んでいた事を見透かされ
てしまうほどに

巧みで
丁寧な言葉回しと。。。。美しい目

それが晴景という守護代

父，為景のように「力」が全てではなく
嵐吹き荒れたこの「越後」の多くの難関を「頭」で制してきた人
他の無骨な男たちが「弱腰守護代」などと罵ろうと結局それを上回
る「武」の者はおらず
また「武」に溺れた者では「英知」に反発する事など出来なかった
結局
みな
「愚痴」をこぼしながらもこの「守護代」に従わざる得ないほどに
「知恵」と「知識」で押さえつけられていた

今

それを思い出せば
悔しいばかりだった
何故もっと早く「知恵者」である守護代に相対する事が無謀である
かを夫に知らせられなかったのかと

政景はやはり「知恵」で晴景を上回ることができず。。。。。嫌でも
「操られている」事を感ぜずにはいられなかった

それも「悪い方向」に
だけど
だから
だまっているという状況でもない

夫が悪しきに逸ってしまっているのなら
妻が良き方向を探さねばならない

綾は「戦」を外れた女は黙している。。。そんな大人しい「女」では
はなかった
刻々と時は迫っている
このまま政景が「影トラ」を征伐してしまったら。。。。きっと「
悪い」方向に進んでしまう気がしてならなかった

だから静かに城に留まっている事などできなかった
留守居になってから活発に動いていた
今日も
ついさきほどまでの刻
母，虎御前の説得に当たっていた
もともとこの「戦」を「加速」させてしあの「宴」

戯れ言

まずあの「非礼」を公での無礼を
春日山の主にあやまって貰わなければ始まらない
誰が聞いても「無礼」だった言葉のせいで母は肩身を狭くしてしまって出歩くこともままならないだろうと思っていたがまったくの逆で
虎御前はあの日以来ずっと自分の屋形にこもったままになっていたその静かに「達観」した態度はご機嫌伺いを「良し」とせず「不敵」にせせら笑うようで
黙している事が火に油を注いでいるとも言えた

「母上からも影トラのために「戦」を止めるようお願いしてくださいませ」

それでも
三日とあけず母の元に通い顔色を幾分悪くしている綾に
御前はやはりつまらなそうに答えた

「やっとで「戦」なのに。。何故(なにゆえ)止める必要がある」

寒さがにじり寄って来ている春日山の頂近くにある屋敷で
火鉢に手をかざしながら
まるで我感ぜずという返答

「影トラに。。。もしも「死」などという制裁があってはと思いませぬか?。。。もしもそうなったらどういたしますか!!」

「死」など
考えたくもない結末が来てしまうかも知れない

相手を揺り動かすための
必死の言葉

しかし
そんな必死の言葉にも心にも御前は態度を改めようとはしなかった

むしろ
「戦」を心待ちにしていつになく柔らかな笑みを浮かべているようにも見えた

「戦で物事に解決をつけようなどと。。。。兄上らしくないではありませんか。。。」

母の説得を諦めた訳ではなかったが
部屋を出て
失意のまま渡り廊下を歩いていたところで晴景を見つけた綾はそのまま彼の屋敷に押しかけていた

理性を働かせ
「戦」という「力」を推し進めるのは「知恵者」らしくないのではと聞いてみたが返事はなかった
晴景はココしばらく屋敷の外には出ていなかった
それでも頻繁に報告の使い番が出入りしていた
評定所と屋敷の間を行き来する姿は頻繁に見られていた

綾の考えられた質問に

「戦で解決を見なければならぬ時もあるのだ」
部屋に置かれた大きめの火鉢に目を落とした晴景は静かに答えた

「何故ですか。。。。」
静けさに合わせた声で
あわてずに聞く

「血を分けた親族なれば。。。諸将に示しの着けられる方法が必要なのだよ」

答えはもっともらしい
武家の作法にのっとったように言うが
綾は首をふった
やはり抑えていた心の痛みは喉にのぼってしまっていた

「血を。。。血を分けた者なればこそ「温情」をお示しくださいな!!ましてや影トラは「女子(おなご)」にございましょうに」

「何か」に引っかかったのか
晴景の表情は一瞬で険しくなり
睨むように言う

「女だから許せと?」
「戦を仕事とする者ではありません。。。。担ぎ上げられてしまったのも何かの間違いでございましょうや」

「間違い?」問いただすが手は気持ちに敏感に連動し動いた
「怒り」は
火鉢にむかって手に持っていた鉢を投げつけた
「影トラは戦を仕事としていた。。。御前の望みに従って「戦うこと」を仕事としてきた女に?「女」だから温情が必要と言うのか?」
勢いあまったのか鉢はそのまま桶から転がり
火の粉を大きく散らし綾の打掛近くにまで飛んだ

「女は。。。。浅ましい」

火の粉を払い打掛を引いた綾の姿に
晴景は声を苦々しく尖らせて続けた

「女だから今まで逆らってきた事を許せと?。。。女だから戦はしたがその作法に従って責任を取れと言うのは「酷い」事と?」

苛立ち
物静かで優しい兄という顔はもはやなかった
綾を見る目にははっきりと憎しみが見えた

「女はいつも自分が可哀想と?逃げる事を許されると?」

棘は繰り返し「女」を憎む言葉を告げる

「兄上。。。。」

恐怖する
綾の見た事のない怒りに染まった黒い思案の晴景の顔

「優しさをお示しくだされば。。。。」
「ダメだ」
即答
晴景は空になった手にいつも持っている美しい扇を持った

「虎御前は非礼をわびもしないのに。。。オマエはわしには「温情」をくれなどと。。。。まことに無礼千万だ」
「母上は。。。」

虎御前の事に関してはまったく。。。
返す言葉も見あたらない確かに無礼だとしか
上げていた顔を落とした
肩に入った力もことごとく砕かれていく

「母上は。。。。政景様が先頭に立たれた事を怒っておられるのです」

それでも
綾は自分の心に刃を立てるように語った
「母上のご実家見捨てた「上田」の男にございますから。。。よけいに腹が立ってしまったのです」

これだけば自分口から言いたくなかった事だった
自分が自分の出生の実家である「栖吉」を見殺しにまでしようとした家に嫁いでいる事を思い出さねばならぬ事だから
ふれたくない傷にさわってまでも説得に当たろうとする心に気がつ

いて欲しかったが

「母親か。。。。」

晴景の心を動かす事は。。。。

「母親と言うのは自分の「子」が可愛ければ無礼も非礼もいっしょくた!!なのにその報いを受ける事になれば「酷い」と言い騒ぎ立てる!!!馬鹿が!!!」

さからう気力はなかった
肩から力の抜けてしまった綾は
もはや何も仲裁の言葉を残していなかったが心に残った疑問だけをつぶやくように問うた

「影トラが。。。それほどに憎いのですか?。。。それとも御前が憎いからこのように酷い事を言われるのですか?」

下げた頭
とても晴景の顔を見ながら聞くことはできなかったが
ようようで声だけもれた

晴景の怒りで上がっていた呼吸が静かになった
外の風の音が聞こえる
部屋の中は静かになったまま
綾は顔を上げた

目の前扇で顔を隠した晴景

「出て行け。。。もう。。。いいだろう」

静かに言うと後は何も語らなかった

綾は残念をしたが
それでもまだ全部を諦めてしまう事はできなかった
そのままその足で奥の屋敷に向かった

その３０　鼓動　（４）（前書き）

すいません。。。。。
のっけからすいません
鼓動（３）を投稿する事を忘れて（爆死）いました
一話差し込みしました
鼓動（４）は前回の（３）だったものです。。。。

すいません。。。。
同時進行で数話書いているので話しが前後してしまって申し訳ありません
話しの流れが極端に変だったので今日チェックしたら。。。。発覚しました。。。

ひょっとして疲れているのか？ヒボシ。。。

しかし
終わりも近づいています
後少し頑張っていきますので優しい目で見てやってください。。。

頑張ります！！！

その30　鼓動　（4）

綾は晴景（はるかげ）の妻「麻（あさ）」殿の元に来ていた

「姉様からもご助力頂きたいのです」

城に残された翌日から必死の思いで「母」虎御前を説得したが。。。
ダメ
予想以上に根深い母が持っている「遺恨」はけっして晴景に頭をさ
げないという言葉で断ち切られ
その後
兄，晴景にも交渉は断ち切られで
綾自信の心の方が病んでしまいそうな結果になっていた

だけど「刻」が安らいで日を延ばしてくれるわけではない

昼の使い番の報告では
政景は坂戸で集兵をすませ「栃尾」に向かっている

政景には口がすっぱくなるほどに「影トラ」の事。。酷く扱わぬよ
うにと頼んだから
多分約束は守ってくれるハズだが

さきほどの事
晴景の方はまるで「氷」の対応で
取り憑く島さえみつけられない状況だったのは。。。危険な事だった

いくら政景が「穏便」に事を運んでくれても「守護代」の地位とう
いう「餌」の前で影トラの「死」を晴景が求めれば。。。。それを

避けて通る事はできない
だからこそ「影トラ」の助命嘆願に力添えできるのはもはや守護代
妻の麻しかおらぬと信じての訪問だった

「わたくしでは。。。何の力にもなれません。。。」

萌葱色。。深い緑の打掛にすっぽりと覆われてしまうほどに痩せた
小さな麻は
悲しそうにつぶやくように答えた
その姿に火鉢の前で付き合わせるように座った綾は少なからず驚いた

かつて
晴景の婚儀で見憶えていた麻はもっとふくよかで柔らかな頬を持つ
美しい人だった
なのに
今目の前に座っている麻の姿はまるで生気のない人形のようだ
痩せた手を隠し
頬には窶れが表れていた

「姉様。。。」

隠された手に綾は自分の手を重ねた
骨。。。
それを感じてしまう。。。

「殿（晴景）はわたくしの言葉など耳をお貸しにはなりません。。。
もう。。。幾月も会っておりませんし。。。」

重ねられた手から視線をあげ
綾を見つめた目にはうっすらと涙が浮かんでいた

綾も薄々それには気がついていた
例の事件になってしまった「猿楽」の宴の時に麻の姿がなかった事
話しでは
新春の席にも顔を出していないこと

「どうしてですか。。。。どうなさったのですか？」

麻は首を小さく振って涙を隠した
「わたくしは。。。殿にとって今は「不要」な者なのですから」
「そんな事！！」

今にも泣き崩れてしまいそうな麻の手を綾は自分の方に引き寄せた
細い
あれほどに豊かで「女」というみずみずしさを現していた可憐な花
だった人は今や枯れて地に落ちてしまわんがばかりに
その花を拾わなければと綾は自分の肩につい引き寄せた

綾に抱きとめられた麻は堪えられなかった涙をこぼして言った
「どうしてですか。。。。。」

綾は悲しかった
激しく心を突き刺さす言葉だった「良人（つま）」（夫）に「不要」などと。
。。。そんな事もし政景（まさかげ）に言われてしまったら生きてはいけない
麻の中にあった深い悲しみで言葉を失ってしまった

言葉を失った綾の胸に力無くもたれかかったままの麻は小さな声で

続けた

「猿千代（さるちよ）。。。あの子がいなくなってしまった時に。。。そうなってしまったのです」

猿千代
それは晴景と麻の「待望」の男子の名だった
麻は思い出話を話すようにゆっくり綾の胸の中でその事を話し始めた

「猿君が産まれたときがわたくしにとっての最後の喜びの時にございました」

細くなってしまった手を伸ばし赤子を抱くようなしぐさをする
「待望のご嫡子にございましたのに。。」
綾は涙ぐみながら麻の顔を見た
まだ幼い時に「猿千代」はこの世を去ってしまっていたのだ

「ええっ。。。。男子を成した私に。。。やっと殿からの「優しさ」を頂けると。。。思うておりましたのに」

「やっと。。。。？」

麻の顔は

「どうしてでしょう。。初めてお会いした時から殿の心は何処にあったのか。。わからなかったのです」

深く思い出の闇に。。。。

麻は目を閉じた
婚儀の日から晴景との会話はなかった
それでも初めてあった晴景の姿に心を躍らせた
父，為景のように「武」の気勢を全身で現している猛々しい方だったら。。。どうしようなどと娘心におどおどとしていたのだけど

目の前にあった顔は
優しく美麗な眉と切れ長の目
まるで「源氏物語」に出てくる光様のような顔。。。。
「戦」という世界から遠い「御伽」のような殿様に
踊る気持ちを彩った
盛大な式
守護上杉様に多くの諸将に囲まれた宴
自分が「幸せな姫」であると心から思った時だった

だけど。。。。その時にはまだわからなかった
女である自分の向こうに晴景が「何を」見ていたのか
その目が
婚儀の時。。。見つめていた先。。。

ずっと
ずっと

晴景が悲しそうであった事に
そして婚儀の後に続いたのは「寡黙」な日々だった
その頃まだ健在であった為景様に顔を合わせるたびに言われた事

「早く和子（わこ）（男子）を作れ」

営みは。。。まるでそのための「作業」だった
晴景にどうやって自分を知って貰おうと話しをしてみても。。。
言葉の少ない夫婦だった
だけど
大事されていなかったわけでもなかった
何か事があれば晴景は打掛を新しく作らせたり庭に植樹をし花をみ
せたりとしてくれた

少しの笑顔を見せ
晴景もとまどいながら歩み寄ってくれていた

少しづつ。。。進めばいい
まだ自分に何かたらない所があるならその間に正せば良いと
和子が授かればきっともっと「愛し合える」と。。。。

信じていた

だけど
「待望」であった男子の誕生が。。。。夫婦に亀裂を作ってしまった

「わかりません。。。何故ですか長尾家の待望の男子を成されたの
に何故。。」
話しを聞く綾もすでに泣いていた
まだ
政景との間に子を持たぬ綾には。。。あまりに辛い話しだった

「わたくしが。。。猿君の「母」になってしまったからでありましょう」
「何故。。。」

麻は両手で自分からだを抱いた
唇が震え
枯れていく花の目から涙は止まらなかった

「あの人は「母上」をご存じありません。。。だからいつもそれを探そうと見つめていらっしゃった。。。わたくしの中に「母」を探していらっしゃったのでしょう。。なのに。。。和子を成した私はそのお心に気がつく事ができなくなってしまったのです。。殿をないがしろにしてしまった。。。」

両手で顔を隠した
「寡黙」だった日々
それでも自分を。。いつも見つめていた目線の先にあったのは
自分の知らぬ。。。憶えていない母の姿だったと麻はそれに気がついたと泣いた

「そんな事。。。。」
「そういう事なのです。。。。」

「何故あの方の望む気持ちに気がついてあげられなかったのか。。。未熟でした」
綾は首を振った
「姉様が悪いのではありませんでしょうに」

涙の綾に顔を合わせた麻もやはり首を振った

「いいえわたくしが悪いのです。。。何もかもに気がつくのが遅かったのです」

そういうとあの「愛児」猿千代が亡くなった時の事を話した
流行病ではなかった
ただの風邪をこじらせただけだったのに
子の身体から暖かさは見る間に失われていった

麻は寝ずの看病を続け祈祷を捧げ続けたが
ついにその子の手は力無く滑り落ち命は露と消えてしまった

狂ってしまいそうだった
和子誕生以来
晴景との関係は凍りついていた
だからこそ可愛い我が子の事が全てだった

全てが消えてしまった失望から部屋を出たときに晴景と出会った

「何故!!!何故!祈ってくださらなかったのですか!!!」
行き場の無くなった母の心と
寡黙だった日々への憤りを夫の胸に叩きつけた

「辛かったのです。。。」
目をつむり綾の腕の中でとぎれとぎれにも話しを続ける
「辛いです」
綾はただ頷いた

「でもあの方も辛かったのです。。。。」

殴りつけた胸
色々な疲労でその場に座り込んだ麻に晴景は言った

「すまん。。。わしが代わりに死んでやれば。。。母と子が別れる事もなかったであろうに」

少ない涙を流した。。。。と

綾はもはや何も麻に頼むことは出来なかった
麻は綾に話しが出来て良かったと言った
それほどに思い詰めていた事だったのだろう

同じ女として話しを聞いてくれた事にただ感謝された

「それでもわたくしは晴景様を変わらず慕っております。。。殿の行く道を信じる事がこのおろかな妻のできる唯一の事なのです」

そう言い
細くなってしまった面に笑みを浮かべた姿が。。。痛かった
静かな消えてしまいそうな鼓動の麻は。。。。悲しそうに助力は出来ないと綾を送った

「戦」は今日?明日?。。。。始まってしまう
歩く廊下の途中。。。。

綾の目にもとまらぬ涙

「影トラを嫌うのは。。。御前という母がいるから?」
風が白く立ちこめた雲から少しの雪を運んできていた
手のひらに載り消える白

もはや万策が尽きてしまったように雪はまだ地にとどまれず。。。。
消えて行く

「私も。。。祈りましょう」
綾は回廊の中で一人つぶやき手を重ねた

戦は明日に迫っていた

その30　鼓動　（5）

夜を眠らぬ心達
夕刻，今一度「栃尾」の出方をうかがうように騎馬の使い番が出城
の廻りを偵察し
その足を自陣に向けて走り去った事を見計らったように
陽が寝むりに沈む夜を迎える頃から
「栃尾衆」は活発に活動を開始した

眠らぬ「力」

私は高井楼（たかせいろう）の後ろ乱杭（らんぐい）に幾重にも囲まれ少し丘になった部分に立て
た粗末ながらの屋敷にて
各所の報告を聞いていた

多くの光を灯すことは出来ない
夜陰に動く者たちが「自分たち」だけではないと心得ながら慎重
に動く
屋敷の中も奥まった広間にだけ一つの灯籠が置かれ
私はその上座
真ん中に座っている

風は冷たい
しかし
心の芯に燃える「義」によって身も震えはない

「栖吉衆金津率いる三百と本隊「長尾景信（ながおかげのぶ）」様方三百は榎木峠を越

え所定の場所に待機，決して政景殿の軍勢を坂戸に退かせぬ構えも整ったとの事。。。なお栖吉本城の守りは秋明院様自らがお立ちになっておられております！！」

栖吉からの「影」働きの者が告げた
頬を紅潮させ

「大御台（秋明院）様曰く。。政景と刺し違えても坂戸には返さぬとの事！」

最後の調整に集まり始めた男達の背中を叱咤する御婆様の「意志」に強く責任を感じた
「わかった！！」
私も拳に力を込めて返事する

続く秋山

「予想どおり守護代軍はココから一里と少し（約五キロ）念覚寺あたりに布陣しております」

部屋の中には甲冑姿の男たちが次々と「準備終了」の報告を肝に刻むように聞く
闇に飛ばした者立ちはさらに詳しく報告を実乃が告げた
信濃川のぬかるみを抜けた少ない平野に守護代軍は陣を張った
後は峠を一越えで栃尾に入る

地図の上に指をすべらし駒を突いた

「兵糧はどうしたか？」

「段蔵からの報告にて念覚寺に止めておいた二十表（約千二百キロ）ほどの米は「獲られた」様子です」

眉を少し動かす

「守護代軍を「お迎え」するために「馳走」せよと。。。。守護代軍の中にも「策士」がおりますな」

実乃は状況を少しづつ読み取るように話す

解ること

峠を越えるため

栃尾の城を追い落とすために

「最後」の「気勢」を上げるためにも必要だった。。。。のだろうしかし二十では。。。卑屈に口元だけで笑ってみせ

首を少し揺らして聞いた

「ならば中西は今日最大限に働いておると言う事よな。。。。」

少しづつ

明日の場面が浮かび上がる

実乃も高く上がってしまいそうな声を落とし返事する

「全ての準備整ってございます。。。」

「良い」

忙しくそれでも足音にさえ気遣いしながらも届いた多くの報告はつ

いに終わった
すべて
綿密に決められた動きがココに整った事に私は満足して答えた

禅をほどき
前を望む

私の前にはがっちりと「戦」に望む姿に変わった「栃尾衆」仕官達
と揚北から駆けつけた五十の男たちがいる
立ち上がり
静かに見回す

暗い闇の下一つの灯籠のか細く揺れる炎の中に
凛々しき「武者」たちが整然と座っている
なんと美しい事か
濁りのない目の光りがそれをよく現している

みなこの「義戦」に戦う「鬼」となった

私も鎧直垂（よろいひれたれ）の姿だ

「明日「長尾守護代軍」の旗を掲げた者がやってくる。。。曰く守
護代様の「意志」を持って「軍」を進ませて。。。。ココに来る」

闇の間

低く低く私はゆっくりとした口調で切り出した
控える者たちはみな私を見つめる

「私は知りたい！！」

拳に力を
右側に歩き実乃。。。秋山の前で

「何故。。。有らぬ諫言のみを信じ「栃尾」を「不義」と定めココに兵を使わしたのか？」

振り返り
左側をみて

「私は知りたい！！」

控える男たち
やたろー
その仲間達

そしてジン

「その意に添ったという長尾政景殿の本心を。。。それが守護代様の「望む」ものなのか？」

正面に向き直った
壁の前
屏風に掛けられた艶やかな真っ赤な打掛

「明日。。。それをあきらかにする」

実乃が聞く
「もし。。。あきらかにされたそれが「正しい」と思われたのならば。。。どうなさいますか」

会見の中身によって私の心が揺れ動いてしまう事を恐れているのか？
それはない
心はいつになく冷静である
向き直り
みなを見回した

「政景殿が正しいのであれば。。迷うことなく我らと共に守護代様の「真意」を聞くための戦に参加するハズだ。。。違うか？」
私の心は静かながらに怒っていた
出所のワカラナイ流言を鵜呑みに「収穫」という大切な日々を「戦」に費やそうとするしる兄に

そんな不行き届きな状態にある兄を諫めるでなくただ指示に従って兵を挙げた「姉」の夫に

「政景殿に「義」があるのならば話せばわかる。。。ただの一言でわかる」

「政景殿が不義であれば。。」
「滅する！！！」

まだ私の中に迷いがあると心配する実乃の言葉を斬った
「顔をみれば心がわかる。。。声を濁せば嘘とわかる。。。話しを聞けば「不義」とわかる！！。。。実乃。。。私は何にも臆しては

おらん!!!政景殿の「目指す」中身に「義」があるのかを知るために会見するだけ!!!」

そこまで言うと目の前で手を重ねた
「迷いはない。。。兄に私は必ず弓引く。。。その思いで進む」
大きく手を広げた

「集いし武士(もののふ)達よ!!「越後」のため!!国民(くにたみ)のために!!共に戦おうぞ!!!」
両の手を高く掲げ気持ちを押し上げて重ねた
静まった夜に雄叫びを揚げてしまいそうなほどの勢いの男たちを手で止め続けた

「祈れ!!戻ることのない「大戦」に。。。我らに「勝利」と「加護」をと!!」

「観音菩薩の元。。我らこそが「長尾守護代軍」である事を示してくれよう!!」
激する声はみなの心にしみて姿を隠した

朝日がくる頃。。。。。
その時まで

「トラ。。。」
ただ独り打掛に向かって座していた私に
いつもどうりのジン声がかかった

小屋の粗末な戸を開けたところにジンと猪(いの)が立っていた
猪は実乃と変わらぬ鎧姿になっていた

「朝方までの少しの時でも。。お休みになってくださいませ」

そう言って戸を閉め風を遮った

私は頷きながらも目の前の打掛を見ていた
「秋明院様らしいすばらしい打掛でございますね」
「うん。。。」
猪は言いながら掛け布を私の元に持ってきた
その後ろに続き簡単に組まれた板間にジンもあがった

赤に金糸。。花と蝶。。。地無しの豪華な絹
背に回る「虎」
明日のために急遽取り寄せた打掛は栖吉の景信殿の内儀からの物だったが
御婆様が作らせたばかりの素晴らしい色合いだった

「凄いな。。。目がくらむ。。」
私の後ろに座ったジンが目を細め頭をポンポンと叩いてみせた
「明日。。。着るんだろ?」
「ああ」

私の返事がいまいち乗れていなかった事を即座に感じとったジンは
口に手をあて笑みを隠して
「いやなの?着るの?」
何か気になる聞き方
顔を見合わせて

「似合うかな。。。」

地味な心配

何しろ今まで「女物」という小袖を着たことがない

「策」のために明日初めてこれを着るけど。。。。触れたことのない物だからどう

着て。。どんな風に振る舞って良いかさえわからない状態だった

そんな困った思いで口をへの字に曲げた私を茶化してジンは

「馬子にも衣装っていうじゃん」

「いつ私は馬引きになったんだ」

私の「変な」焦りをジンはしっかり読み取っている

隠してない目もとはもとより隠した口は絶対に笑っている

「何笑ってるんだよ」

殴るそぶりで詰め寄る

睨む私から顔をそらしたジンは手でなんでもないと合図しながら

「似合うだろ。。。。。一応女なんだし」

一応。。。。だと

首がゆれる

「コレ!!陣江殿!!失礼ですぞ!」

少しばかり苛ついた顔した私を見ていた猪がジンの襟を引っ張って

怒った
たしかに失敬な応えだったけど
怒りにはつながらず心が安らいだ
急に猪にこづかれるジンの姿に笑い
まだ「減らず口」が聞けるまだ心が「真っ黒」に染まっていないと
気持ちを確かめた

「いいって。。いいさ！」

笑って見せた

「ジン。。。頼みがある」

十分にほぐれた気持ちで向き直った

「この「戦」で私が。。。もし「真っ黒」に染まって心を見失いそうになったら。。。必ず止めてくれ」

私の言葉に猪は即座に下がり控えた
ジンは無言で頷いた

「だから今度の「戦」では私の馬廻りに加える。。戦にもっとも近い場所だ。。危険な場所だ。。だけどいてくれ」

強くありたい
そう願うのだけど。。その願いで真っ黒に染まり「闇の意識」に飲み込まれたままで良いという戦ではない
特に。。。今回の「戦」は冷静さと最後まで「自分」である事が必

要だ

「私の近くにいてくれ」

「いつだって近くにいる」

ふざけた態度はとっくに消えた

真顔のジンはゆっくりと私の手を取って優しく握った

「決して離れない。。トラの近くにいる事がオレの仕事だろ」

夜明けまで後少し。。。。

今まで早まっていた鼓動はジンの手を通し伝えられた力で落ち着いた

後少し

後少しで。。。。始まる

その３０　鼓動　（６）

「時」は近づいている
私は静かに目をつむったまま支度に入っていた
半刻前
まだ薄暗い夜の峠を「政景軍」は越えた
私には足音までもが明確に聞こえてくるような静けさ

「かもじはどうしましょうか」

鎧姿のまま
私の着付けを整えていた猪が髷を落とし短くなってしまった私の髪
を櫛で整えながら聞いた

「いらないよ。。。すぐに邪魔になってしまうだろうし」
「でも後ろにだけは着けた方が「女」らしくて良うございますよ」

打掛を着る
政景殿を私の「面前」に引き出し直接会話をするための「策」
そのために御婆様に「打掛」を所望し急遽だったが間に合わせた
「女であれば侮ってご自身で影トラ様に近づいて来ましょう」

私の評判は「戦働き」をする女
鎧を纏っていては「戦うこと」を意思表示してしまう事になり話し
合えない。。。「会見」出来ないだろうと段蔵は言い
この「奇策」を採用したのだが

初めて「女装束」を纏う私が。。。。
猪は何が嬉しいのか色々と「余計な物」を着けようとしていた
すぐ横で「かもじ」を持って私の返事を待つ猪に。。。うつむいて
渋々返事した

「じゃあ。。。。邪魔にならない程度で。。。。」
「はい！」

打掛を着る前の最後の小袖に手を通し
「もし。。。。会見が悪い方向に動いたら。。。打掛はダメになっ
てしまうかも。。。」

髪を整えながら少し浮かれた感じの
猪に小声で
「そんな事にならないように「事」が起こったらすぐにでも私が回
収致しますわ」
テキパキと仕事をする手を止めた猪は
「ダメ」と声にこそ出さなかったが目で「汚しても怒りますよ」と。
。。。

「戦」の全面に起つ大仕事なのに。。。と私は少しむくれて見せたが
それでも善処すると告げた

「わかったよ」

すべてが滞りなく整った時
近づくその時のために
祈りのために猪を下がらせた

下がった猪が開けた戸の向こうにざわめきは
這うように静かに
それでも熱く「戦」の時のために走っているのが聞こえた

戸口は閉じられ
それらの音が遮られて
私は
深く目をとじ己の胸の奥に向かって語りかけた

「闇」と話し合うために
今まで
今日まで

「兄と戦う事」で「闇の意識」に飲まれまいとしてきた

それ故か?「彼」は現れなかった
でも
やはり戦う事になった時

きっと。。。
この「戦」の時「彼」はやってくる
私の心にやってくる
ならばまずそれが何なのかも知りたい

私に「戦え」と告げる声はいったい。。。それは「義」なのか
それとも「炎獄」の誘いなのか
「味方なのか?敵なのか?」という事を

「これは正しいのか」

数珠を通した手を重ね
やたろーが弥平に作らせてきた観音菩薩の小さな姿に祈った

「これは正しいのか？」
深く
心の内側に話しかけた

「彼は正しいのか？」
隙間風に身体が震えた
頭に中
闇に浮かぶ炎が答える
閉じた目の裏にに火花が走る

「彼は正しいのか？」

もう一度

「政景殿が？それとも兄上が？」

私は理論的に答えを求めていたいつものように「曖昧」な返事は。。。今は絶対に欲しくなかった
私の中に住まう者よ。。。

「彼らが正義か？」

痛み
答えは的確だった
彼らは正しく義を成していない。。。それが私の「怒り」に繋がっ

ていく
何故
疲弊した国民を助けない
何故
収穫という大事な時期を乱してまで「戦」を望んでいる

何故
私に敵意を向ける？

「オマエは不義か？」

闇は問いかけた
「否(いな)！！」

私は助けたい
私は
私と共に生き祈った者たちを助けたい

不義とは
このバカげた「長尾影トラは守護代の地位を狙って候」という風評
に軽々しく心を躍らせた者たち
許すことはできない事

「許すな！！」

燃え上がった炎は熱い声を響かせた

身体の隅々に稲妻を走らせた
「許すな。。。。。許すな?。。。。。。言うたな。。。」

そうだ
許して良いわけはない
そんなものが横行してしまうほど「惰弱」な治世を許して良いわけがない

確信。。。。少ない時間であっが「彼」に不義はなかった

この「闇」は私の敵ではない
私の中にある「闇の意識」は正しきを知る力になる者だ

「申し上げます!長尾政景殿率いる守護代軍およそ四千後詰めに千。。峠を越え砦前に表れました!!」

背中に使い番の声が
状況を知らせた
身体はふわりと揺れる

「わかった。。。」

落ち着いた口調覚悟は定まっている
使い番に声を返した

砦の中はみなが忙しく走り回り始めていた
朝の薄墨はその幕を引き上げ
闇は山の尾根に消えていった

「戦え！！」
闇は吠える
助けるために

「戦え」
「戦え！！」

響く闇の声に私は声を出して復唱した
全てを痺れさせていく声は続ける

「戦え！！」
そうだ義を守るために！！
「清浄」なる正しき取り戻すために！！

「戦え！！！」
声を荒げる

「あなたならそれができる」

頭の中
深紅の火花は煌々と美しく弾けた

同時に巻き付けていた数珠は切れ輝く瑪瑙（メノウ）は星のごとく散華した

「百八の。。。。。」

「影トラ様！！！」

ゆらりと私に「闇」が溶け込んだのを見越していたかのように
実乃の声が呼ぶ
全ては整った
立ち上がる

すでに猪は近くに控えている
小屋の戸を開けた
眩しく差し込む朝日の下に歩を進める

並ぶ「栃尾衆」。。。
戻らぬ大戦の日々は今始まる

私は大きな声で告げた

「共に戦え！！！私と共に！！！」と

朝靄の山中を越え「守護代軍」はついに栃尾領内先端にできた出城を望む場所に到着していた

「すぐに降伏の使者を送って来る事でしょう」
政景の馬廻りを共にする近習の若者は顎をツンとあげた顔で言った
峠を越える時に細心注意を働かせ
後詰めと本陣を置き歩を進める全軍に緊張を行き渡らせようとしている老臣達の慎重さとは反し
政景の周りは騒がしかった
この「戦」が終われば守護代の周りを固める若衆達の態度はあきらかに浮ついていた
必要以上に主君にさえずりはやし立てている

「あんな見窄らしい砦で何ができましょうや」
緊張のない緩んだ声

「大軍をこのまま突き進ませひと思いに「守護代様」の力を見せられたらよろしいのでは」
煌びやかに光る「戦」を知らぬ鎧

いや
少なくとも元服後「戦」には何度かでた事はあるだろう近習たちだったが
見たことのない大軍を率いた事で誰も彼もが舞い上がってしまっていた
それは
政景もかわらぬ事だった

「堂々と進むのだ!!」
声をあげ指揮する姿に口をすっぱくするほどに注意を受けていた事などすっかり消し飛んでいる

手をふり大きく自分わ見せる

「怖がらせてやる」

息を巻いていた
左右の陣を守り軍団を動かしていく「樋口」と「国分」
しかし道には何も罠はなく静かなものだった
「罠」などない。。。。
何度もの報告
今まで沈黙を守っていた「栃尾」に策があるとは考えられない

誰もが浮き足立つほどの規模での「戦」

この眼前に広がる軍団を見て
すぐにでもあの「戦鬼」の家臣だった本庄実乃が「生意気」な小娘
「影トラ」をつれて
足下にひれ伏す事が望みだ

政景も顎をあげ己の尊厳を締めそうとさらに前に進んだ

昨晩
使い番からの知らせでは突き出しで作られた砦には粗末ながらも四つの「高井楼（たかせいろう）」が確認され栃尾が迫る「守護代軍」に対して「備えている」という見方は十分にあったが

「城人」の姿を多く確認する事もなく
作られた櫓は灌木のように枯れた台座を持った粗末な物である事もわかっていた
それがもともとの「備え」の砦であって

急遽抵抗のために「作られた」物とはあまりにも考えられない粗品だった

どちらにしても政景（まさかげ）には「栃尾」に集められる「兵」がおらず苦肉の策としての
見窄（みすぼ）らしい「張りぼて」の砦に
顎を突き出した口元だけを笑わせて見せた

峠までの行軍陣形で
二翼の二千の部隊。。自分を守る二千で十分に「脅し」は効いているとさえ思っていた

「あれは？」

近習の「勝六（しょうろく）」が指さした砦の頭を目の前にしたとき
冷たい風に
小さく揺れる「本庄」の旗とその両端に「長尾守護代家」の旗を見たときに
少しの警戒と
怒りが揺れた

「やる気か。。。。」

砦を睨みながら拳を強く握り替えした政景は唸るように家臣に言った
報告は受けた時から彼の機嫌は坂を転がるがごとく悪い方に下っていた
見かけ今は笑って見せているが

自分としては
妻の「優しい」心遣いを理解しその妹である影トラに「最大限」の温情を示してやった

「不遜な態度であります!!籾潰してしまいましょう!!」

政景の心を読み取ったかのように勝六が叫んだが
その手を「彦五郎(ひこごろう)」が止めた

しかし
近習の声は政景の怒りに十分な火をつけていた

目の前に挑発的にゆれる「守護代旗」
拳を馬具にぶつけて苛立ちを周りを囲む家臣たちに知らせながら
大きな体に艶やかな錦の具足を纏った政景は後ろに控える老臣に怒鳴った

「射かけろ!!」
大柄な男の甲高い声
それにあわせ慌ただしく同じ言葉を連呼する近習達だが
手をあげすでに「臨戦」を望む主に老臣は馬ごと近づくと声を下げて答えた

「まだです。。。いきなり仕掛けてしまえば名を落とされますぞ。。」
忠告「国分」は静かに滾りを抑えた口調で
ココまで大きく「守護代旗」をふり「次期守護代」を宣伝するようにやってきたのだから
いまさら「勝ち急ぐ」必要など。。。

登り懸かった血の気を抑えた
樋口の言葉を政景は受け入れ
使者を立てようとしたときだった

「殿！！あれに！！」

ざわめきが波のように広がる
若い使い番が示す指の先を政景は見た

目線の先
砦の門は開かれ現れたのは。。。。

赤い打掛に身を包んだ「影トラ」であった

その３０　鼓動　（６）（後書き）

炭化おにぎり（藁）

ちゃ～～後書きからコンニチワヒボシです
ものすごい久しぶりに後書きに登場です（藁）
新春しばらく落ち着いたペースで書いてきましたが今度は年度末という波に溺れそうです

社会人辛い

そんな中ニュースで
「御館の乱」のあった屋敷跡から「炭化したおにぎり」が発見された！！！
というのを見ました

え～～と
上の乱は直接「トラ」には関係ないのですが
間接的には大きく関わった乱で。。。。

というか
跡継ぎ争いの舞台となった場所ですよ！！
そこからおにぎり発見！！！
すごいですね！！びっくり！！

やっぱり最後は屋敷ごともやされてしまったからかおにぎり「炭化」していたなんて。。。。

しかし！！！
しらべた結果このおにぎり君「銀しゃり」だったそうで
当時のお米って「雑穀米」っていうのが定番だったのに
すでに！！！トラの次代にはしっかり「白米」（注，完全な白米は
技術的に手間がかかるから当時の米の主流は玄米。。または胚芽米
に他の五穀がまざった物だったのではと言われている）
を
メインで食べていたって事ですか？

ぬ～～やるなトラ（藁）
やるな米所（越後は後の新潟県）

ところでこまごまと
当時の越後の石高なんかをしらべているのですが
当時はまだ信濃川が。。。。ぐるぐる蛇行しまくっていた（爆）時
期が多く
越後は沼地の多い土地だったようです
だから米だけでの「年貢」計算の上での内政が出来上がっていたと
は思いがたいです

ですが
トラの頃。。一般的に上杉謙信は「戦」上手の内政下手と言われて
いますが
経済政策としていろんな事に力を入れてます
事実
金持ち大名だったトラ
朝廷に何度も貢ぎ物もしているし「青そ」の売買や塩や米などの北
国貿易
そういう自然界の貿易物資に加え「金山」を持つという鉱物資源な

どにも恵まれて
「戦」に必要な「戦費」に困った事はなかったようです

だから
きっちり精米された「銀しゃり」だったのか？（藁）
質素な生活してそうなトラ。。。お米は真っ白だったのか？
知りたい（藁）

そんな事を考えた午後でした

ではまた後書きでお会いしましょ～～～～

その30　鼓動　（7）

「影トラ。。。。か？」

馬上から砦を睨んだまま
政景は横に控えている老臣「国文佐渡守（こくぶんさどのかみ）」に聞いた
白髪の老臣は目を細め
若殿である政景の睨む先に立つ「女」をじっくりと見て答えた

「影トラ殿本人にございます」

実のところ
政景は今まで「影トラ」本人を見たことがなかった
だから虎御前の面影から遠目に見える顔を伺い「確かに」似ているか？という思いはあっが
確信には至れなかった
逆に国文は「黒滝征伐」の時に枇杷島の近くを走り抜けていく軍団の先頭を走る影トラを見ていた

「間違いないな」

政景は決して目を離さぬ態度のまま
強く念を押した

国文は今一度「女」を見て
己に納得したのか頷きながら答えた

「相違有りません」

と「確信」を伝えた
その答えに
政景は睨んでいた目を緩ませた
厳めしい表情
身構えたままの心意気の国文に明るくなった声で答えた

「では話しをしてやろう」

顎を突き出し
言うと陣営から自ら馬を乗り出した
顔からは今まで持ち運んできていた苛立ちがなくなり
憑きものがとれたように「笑み」が浮かんでいた

「さすが若殿。。。。ココにきてもお慈悲を見せられるとは」

勝六(しょうろく)をはじめ近習達もともに前に進んだ
勝ち馬気分を味わいたいという矮小な心がそうさせているのか
みなずいぶんと横柄な歩き方だったが

「お待ち下さい」

政景の馬の手綱を国分が強く引き歩を止めた
「危のうございます」
政景は大きな手でそれを遮った
「心配するな。。。。」

尊大にして心が躍る

当然と言えば「当然」
ゆうゆうと軍団の間を割って馬を進ませる政景は己の勝利と「次期守護代」としての威厳を見せつけるように
胸をはりこの年に新たに作らせた濃紺に紅さす鎧を見せた

「勝利」を確信して
飛び出してしまいそうな自分を抑え
ゆっくりゆっくりと砦に向かった

「笑い」を抑えるために顎を押さえて砦前に立つ赤い打掛姿の女を見て思った

「戦鬼の魂を継いだトラ」
「栃尾の城に住まうトラ」

噂はいろいろとあったが
「戦」を仕事とする者たちの中にあったのだから
この状況も真っ先に理解できたという事だろう。。。
どれほどに男達に持ち上げられて「戦」に勝ちを呼び込んできたとしても

これほどの軍勢を見たことはなかった事だろう

もし戦えば今まで影トラがしてきた「戦」。。。「小競り合い」などというものですまない事は一目瞭然だ
さしもの影トラも五千という大軍団に怖じ気づき。。。
いやいや
本庄実乃。。。。「栖吉」を味方に必死に晴景にたてついたが。。。

無駄な事だったな
勝てないという事をやっと悟ったか

影トラにもそう諭したのだろう
だから鎧もつけず
「ただの女」として打掛姿で自分に跪き「命乞い」をしに来たと

鼻で笑う
主君の笑いに同じように勝六は言う
「しょせん。。。女でしたな。。。つまらぬ戦になってしまいましたな」

そんな勝六達の態度を苦々しく身ながら国分は手綱を放さず

「今しばらくお待ちになり使者をお立てになにるなり。。。影トラ殿をこちらに呼びつけるにりした方が良うございます」
歩を進める馬の上で未だ心配を隠せず「女」に怯えろと言う国分に政景は怒りを感じたが無視した
それでも引き留めようと駆け寄る国分は声を抑えて言った

「あせってはなりません!!影トラ殿は「戦」を良くしてっております。。。だから」

「心配ない!!女ごときを恐れ呼びだてすればそれこそ「威厳」に関わるわ!!」
国分の忠告を断ち切る
自分を「若い」と諫める者が気に入らない
しかし
怒鳴りつけるだけでは若い「気短者」と思われてしまう

少し声を弛め手綱を国分からふりほどいた政景は振り向かず続けた

「確かにこんなつまらぬ終わりになってしまって。。わしも残念だ!!「戦」がしたいという国文。。そちの気持ちもわからんではないがココでお開きだ。。。取り越し苦労は無くなった」

そこまで言うと大きく手をふり全軍に向かって吠えた

「聞け!!全軍!!事は片づいた!!これにてわしは「越後守護代」となる!!」

「あれが「本当」に政景殿なのか?」

砦の門を開けた
丘陵地帯の上に座すこの門から見渡す大軍の中
周りに十人近い近習に守られた姿
紺の中に紅を交えたやけに派手な具足の男がすぐに目に入った

その男の大声は私にもしっかりと聞こえていた
あんな厚顔無恥な発言をこの場でできる者がそうだとは思いたくなかった

「となりにいる白髪のほうが政景なのか?」
「いいえ。。となりは重臣「国文佐渡守(こくぶんさどのかみ)」でありましょう」
いぶかしげな
私に状況を迷わぬよう的確に教える段蔵にもう一度聞いた

「じゃいつ政景殿は越後守護代になったのだ？」

私の横には黒の鎧に身を固めた「ジン」は「さあ」と肩をすくめ
段蔵は軽く返した

「今では？公言してましたから」

二人は顔を見られている恐れがあったので阿吽の「惣面（そうめん）」でがっちりと固めた姿だ
段蔵は
苛立ちで打掛の中で拳を握りしめている私に気がつきすぐに口調を改めて

「そういう早合点する気楽な「男」という事は良くわかったと思いますが。。」

くだらない注意をした

「何で笑っている？」

向かってくる彼の笑みは私の苛立ちに拍車をかけていた
段蔵にもの聞く声は十分に不機嫌だ
「会見」を望んだのは私だが
近づく政景殿の顔にその「価値」は薄らいでいた
薄ら笑いをうかべたまま顎を突き出した不敬虔さかげんは最早目を凝らさなくても見える所に来ていた

落ち着こう

すぐに「勘気」に逸ってはいけない
今日は何度も息を改める事になりそうだ

フウと一息

空を見た
今日は晴れる。。。しかし天高く
澄み渡る「凍えた」青は今にも崩れ落ちそうなほどに不安定だ

きっと「雨」は来る

青い空のうえに朝日が高く登って行く

さあ

「長尾影トラ殿か?。。。ずいぶんとめかし込んだ姿で見違えたぞ。。。もちろん姫様に会うのは初めてだがな」

仰ぎ見ていた顔を下ろした
私を呼んだ男は一軒もないくらいの位置に馬上のまま続けた

「良く聞けわしが「これから」越後を統べる守護代の任につく貴様の「兄」にもあたる長尾政景(ながおまさかげ)だ。。。トラ姫。。頭が高いひかえろ」

揺れる。。。軽々しく軽薄な声の主に視界が揺れる
闇の声の言うとおり
「許すな」と言う声が告げた通りだ「彼は正しいのか」。。。。

それはもう聞くまでもない
正しいわけがない
何を思って自ら「守護代」であるなどと。。。。なんと恥知らずな

張りつめていた気持ちに「魔」が
私は着慣れない打掛のせいでこってしまった肩を扇で叩きながら
つまらなそうに答えた

「いつ守護代に?そんな話しは聞いておりませんが?」

私の返答に馬上で顎を突き出したままに政景殿は顔色を曇らせた
主君の顔色に忠実な犬が吠える
「女!!不敬であるぞ!!義理の妹という温情に預かっている事を
忘れてはならん!!控えよ!!」

具足に傷の一つもない。。。。
阿呆鴉。。。。
はやし立てる駄犬の群れの頭。。。。政景は
見下すように私に言った

「影トラ!!オマエのしでかした不始末を成敗する事で晴景殿より
「守護代」の任を譲り受けたのだ。。。わかったか?」

言いだしの口調こそ荒かったが
なんとか「体裁」を繕いたいのか最後は少し抑えて「無礼」な言葉
を締めた

扇を開き臭ってくるのではないかと思う「無礼」を煽って

馬鹿馬鹿しい。。。。
鼻で返事した
「不始末?不始末とは?」
本当ならこんな問答は今すぐにでも断ち切ってしまいたかったが
彼の「義」の無さが路程した今
私は「戦」に望まなければならない

この尊大で不遜なる男を「無駄」に知る必要もあるのだが
なにより上から見下した態度で話しをされるのには腹が立つ

「馬から下りられよ。。。話しをするのならそれからだ」

扇をたたみ顔をさした
腰を据えて戦わねば。。。
どこまでこの男が「あがく」のかを見てやろう

面前の
政景の顔色はあっという間に一変した
それに乗じてさらに犬たちは吠えた
「早う頭をさげよ!!!」
「女の分際でなんと不遜な!!!殿の情を無為にされるおつもりか?」

躾も悪いな。。。。
私はゆっくりと首を動かした
阿呆どもの甲高い声で頭が痛い

なんだって最初からそんな見下しきった態度がとれるのか?
どうせ私が。。。大軍に恐れをなし「命乞い」をしにきた。。。そ

の程度に思っていた。。。
そんな「女」から
馬から下りろと「叱責」されるなど。。。考えた事もなかったのだろう
鼻息を荒げ
牙を剥きそうな表情で私を睨むが白髪の家臣に宥められる事でやっと気持ちを整えたか？

「オマエは。。。裁かれる身だぞ！！女！！頭を下げろ！！影トラ！！」

怒鳴りつけた声の前
またもつまらなそうに答えた
「何を裁くのですか？ひょっとして打掛を着ている事をか？」

羽織った打掛をフワフワと動かして見せたままピクリともしない私に政景の目は何かを探している？

「オマエは。。。虎御前にそっくりだ！！母も立場をわきまえぬ「戯れ言」を口走りよおったが。。。」
なるほど
母上にも。。。何か叱責されたのか？
少しだが揺れる身体
右に首を傾げてみせる

目を見開き

「我が母上にまで「注意」をされたのにこんな騒ぎを起こしに来たのですか？」

わざと顎あげて高飛車に言って見せた
より研ぎ澄まされて政景をにらみつけて

勢い刀に手をかけそうになった彼に私は身体をズイと近づけた
斬れるわけがない
こんな
大儀も正義もない男に私が斬れるわけなどない

そのまますぐ真ん前で

「そもそも裁かれる理由がない。。何より私は守護代様の言う事に忠実に働いてきたのだからこんな「非礼」を受ける言われもない。。。むしろこのように大挙して「栃尾」のみならず越後に混乱を起こしているあなたにこそ。。。裁きが必要だ！」

開いていた扇を閉じ
そのまま政景の鼻先に向かって指した

「あなたに「義」はない」

背中を向けた
鼓動は心地よく身体の中に鳴り響いた

「お引き取り願おう」

「影トラァ！！！」

「何だ」

あからさまな勘気を起こし唾を吐き散らし
顔を真っ赤に染めた政景に向き直り
あえてもう一度聞き返してやった

「何だ」

今更何も話すこともなかっが。。。
「きっきっ貴様の置かれた立場というもの。。を。。」
「ハァ？」
馬からずり落ちそうなほどに身を乗り出した政景に言った

「さあ「戦」だ。。。。。そうだろう？」
首をユラユラと揺らしながら私は笑っている
目はきっとうっとりとしている
「戦」だ

「正気か？影トラ殿！！」
政景を抑えていた老臣が主よりはいくぶん冷静さをもって私に詰め寄った

私は
きっと嬉しさを表してしまっいるソレは相手にとってどう見えるのだろう
とりあえず
扇で顔を隠した

「政景殿に義は無い。。。。これ以上「越後」を乱す事を私は許さない」
「オマエがその乱れの元！」

見苦しいほどに呂律が回らなくなった政景は
従う老臣は元より近習たちにまで肩を押さえられながらも吠えた

「私は守護代様の命（命令）にしたがって「越後」に平安をもたらすために戦ってきた。。あなたは乱れを呼ぶ最たる元凶だ！！それを私が許す事はない！！そして貴方のこの愚行を許した守護代様にもこの乱れの果てに何を望んでいたかを聞かねばならぬ！！」

晴天の下。。。私は満面の笑みで言った

「さあ。。。「戦」だ。。。さあ。。「死合い」ましょうぞ。。。」

この愚か者を叩きのめすために。。。心は定まった

その３１　護摩　（１）（前書き）

今日は追儺（ついな）の鬼の日でございます！！
ヒボシの家の周りは。。。雪でいっぱい。。。鬼もこないのでは？
と思うのですが
やはり日本人らしく「恵方巻」も食べつつ豆まきもしようと思って
おります～～

みなさまも厄災を払うために大いに食べ豆まきをしてくださいな～
～

その31　護摩　（1）

晴れ晴れしく
言いたいことは全部言えた事で私はすっきりした心持ちで政景（まさかげ）に背を向けて砦にむかおうとした

「たわけ!!!影トラ!!オマエのしようとしている事こそが「乱れ」だ!!こんなバカげた事を横柄に言い切ってしまうような「妹」を想うてわしに懇願した綾に悪いと思わぬのか!!」

大声にしては声は割れ
見苦しいほどの嗄れ具合。。。。
息のあがった焦りが背中にむかってかけられた

私は気が抜けた
危うく蹲きそうになった
こんな所まで来て説得に「姉上」の名前を出されるなどとおもってもいなかった
それに。。。

「虎姫!!我が殿の温情を無になさるとはなんたる恩知らず!!」

政景がつれている近習達の不作法さ加減にも。。。。呆れた
数歩進んだその場でとまって後ろ姿を政景に向けながら考えた
だいたい。。。

「姉上もおかわいそうだ。。。こんな男に嫁がされて。。。どこか良いところでもあるのか?」

つい小声で私は首を傾げながら
それに気がついた段蔵が耳打ちした

「こういう子供じみたところでは？」

なるほど
段蔵の切り替えに私は両手をポンッと打ちそのまま振り返った
そして
彼の顔をじっくりと見てみた
男らしい大きな体に立派な髭。。顔は色黒だけどつくりは雄々しさを全面にもっているし眉毛も太く意志も強そうに見える。。。たしかに見立ては悪くないが。。。

その言動は「子供」のようだ

そんな私の目線と交互するように政景もじっくりと私を見ていたのだろう

「オマエは！！全然綾に似ておらん！！少しは可愛げでもあればこんな粗雑な仕事に就いて「女」を忘れずにすんだことであろう。。。哀れじゃ」

よくわからないが
政景も「何か」を言い切った感で少し落ち着きを取り戻した
例の近習達が小声で何かを吹き込んでいる
こんな見え見えの場で「策謀？」
引きつっていた顔を無理矢理柔らかくすると
軽く咳払いをして

「こんなバカバカしい争いはやめよ!!そもそも晴景殿も人が悪い。。年の頃も熟したおぬしを「嫁」にやらず「戦働き」をさせるなど。。」

何か企みを含んだしゃべり方を始めた
厳めしく尖った目を繕うように額に手を当てて隠す。。。。
ずいぶんとわかりやすい「謀(はかりごと)」。。。なのか?
努力の割りには相変わらず
怒りで真っ赤になった顔色はそのままで口元は無理に
気持ちの悪い口だけの笑みを浮かべて続けた

「わしに従え。。悪いようにはせん。。そうだ良き嫁ぎ先もみつけてやろう」

。。。。。

「嫁?」
私は首を傾げた
傾げたままとなりに立つジンを見た

「嫁ぐのか?」
「オレが?」
目線を向けられたジン「阿形(あぎょう)」の獰猛な惣面(そうめん)の下で目を泳がせ素っ頓狂な事を答えたがすぐに持ち直して

「トラがだろ?」
「私が?」

そりゃそうだ。。。。しかし

つい腕組み
困った顔の私を見ながらジンは答えた
「嫁の修行は積んでないんだろ？」
。。。
そうだそんなものは今まで一度だって学んだ事もない
変な質疑の応酬だったのか怪訝な表情を「吽形（うんぎょう）」の惣面の下にかく
しながらも驚いた目でこちらを見ていた段蔵に聞いた
「私は。。。。姉上には似てないのか？」
姉上。。「綾姉様」の事。。
私はやっぱりあまり憶えていないただ噂は十分に聞いていた
「美しい」と
段蔵は警戒を怠らないよう政景の方に顔を戻しながら
「まぁ。。どちらかと聞かれれば。。綾様よりは御前様（虎御前）
に似ておられます」
。。。
「だったらなんで可愛くないんだ？母上は十分に美しく可愛らしい
お方だ！！失礼ではないか！！」
「この状況でそこが問題ですか？」
私の激した発言に段蔵が溜息混じりで返答した
同じくジンも
「トラ。。ずれてる」と

「とにかく！こんな無駄な事はやめよ！！ココで「戦」になったら今までそなたがしてきたような「小競り合い」ではすまなくなるぞ！！」

政景の不用意な発言で私は「怒りの火」の元に心を戻した
「小競り合い？」
念を押すように聞き返した

「そうだ！今まではそなたが怪我せぬ程度で済んだ「戦」であったであろう。。。本庄や直江に守られて栃尾の衆に祭り上げられた「楽な戦」だ。。。だがわしと事を構えたらそんな「女々しい戦」ではすまんぞ」

「なんだと。。。」

笑う口元の男に
唸るように答えた
顔には怒りの目が宿っているハズだ

キモチワルイ
政景に付く近習の若い男達も声を揃えた

「虎姫様。。。。打掛もよう似合っております。。。「戦ごっこ」など女にとってなんの役にもたちますまい。。我が殿にしたがいなされ！」
有象無象の馬鹿ものどもの真ん中政景は両手をあげて続けた

「戦の中身は男の世界だ今まではオマエのもつ「長尾」という名声を楯にして勝つ事が出来たのであろうが。。いやもちろん本庄殿の助けもあったのは認めようが。。今度はそんな「安直」にはいかな

いぞ。。。「争う」のは無益な事になるだけだ」

大軍団を自慢げに。。。。声高に。。。。
それはいったいオマエたちの何なのだ？
頭に「闇」が去来する
渦巻く闇の主は私に言う
「許すな」。。。。
「許すな」

「許せる訳がない。。。。許さない。。」

長尾の名声？
そんなものがこの「越後」に鳴り響いていて
それを国人衆が恐れていた？
だったら何故争いはやまなかった？

そしてその「名声」に力があるというのなら
何故「長尾政景」が守護代を支え戦ってこなかったのか？
傍観を決め込み続けてきた理由はなんだ？

大きく頭を振って見せた

まったく。。。
なんというバカげた言いようだ
胸の真ん中を手で強く押さえた
熱くこみ上げる想い
私は真っ黒な怒りを自ら纏うことにした

思い返せばわかる
私の「戦」への道程が「安直」だった事など一度だってない

初めて自分の中の恐怖を知った「三条」との「戦」
あの時。。。。「つや」を見た
国の礎となる民，百姓の血を自分たちのおもうままに流してきた者
たちとの対峙。。。

黒滝での「戦」
二度の謀反によってその一族はおろか城下に住まう全ての者達を「
撫で斬り」にせねばならなかった事

夥しい血
「戦勝」にともなった心の痛みと
「勝つこと」の犠牲になってくれた栃尾衆の男たち
傷つい者たちを癒し城を守ってくれた女たち

安くはないこの戦の日々を
この男は「小競り合い」「女々しい」と。。。。。

「罵倒」した

「その言葉そっくり返そう。。。貴方は「戦」を知らない」

ゆっくりと揺れる

これは心を揺らす「怒り」

目の前は暗くなった
政景が私の反論に激怒し吠えているのが見えるがそのくだらない声も「言葉」ももはや耳には入らなかった
まったくくだらない存在に成り下がっていた
大柄でさも「戦」を知ったかのように語る口
端正な雄々しい容姿とは裏腹になんと薄ぺらい男であった事か

「くだらん男だな貴様は。。。実にくだらん。。。」

右手を大きく挙げやつらに背を向けた
政景は相変わらず吠えていたが
私の動きに国分は敏感に反応していた
主の前に楯のように立つ

「影トラ!!後一日考えさせてやる!!だから。。」
笑った
政景のくだらない「交渉」は「命乞い」をしているようにしか聞こえなかった
そんな事は無意味だ

はっきりとわかった事
政景は私を恐れていると。。。。

深く息を吸う

心に新鮮な風を吹き込む
右手を挙げたまま最後の挨拶に振り向き大きな声で
「長尾影トラは容赦はしない!!「今より」存分に戦おうぞ!!!」
と
響き渡る大きな声で高々と宣言した

並ぶ軍勢に波風のように広がるざわめき
全ての目が「恐れ」を宿している事に気がつく
その恐れ。。。。

おいしく頂こう

挙げた右手を力を込めて響かせよう
「戦え!!!」
私の声に呼応して潜み構えた「栃尾衆」が答えた

「応(おう)!!」

その怒声は大きく響く
「戦え!!!」
目の前響き渡った「鬨の声」にも近い雄叫びに驚愕も露わな政景を
あざ笑う

「応!!!」

再び帰る「力強き」男達の声
これが「戦」だ!!「戦」という「炎」を纏う男達の声だ!!!

「戦え！！！」

「応！！！」

満面の笑み。。。。

時は来たり！！今来たり！！！
ついに私は「修羅」となって乱を呼び
この地を乱した「馬鹿者」たちをなぎ倒し。。。。荒れ果てた地に
死に体を築く者となる！！！
赤い打掛が一陣の風に大きくなびく
髪は揺れ逆巻く

「放て！！！」

数百の火矢は蒼天の下，流星のごとく空を舞った

その３１　護摩　（２）（前書き）

全然関係ないですが
今日は竹中半兵衛が稲葉山城の乗っ取りをやらかした日です（藁）
すごい事件だったんでしょうね～～～

その３１　護摩　（２）

長尾政景（ながおまさかげ）は自分の目の前で起こっている事がまったく理解できていなかった

面前での影トラとの対談
姫装束の女に

「くだらない男」

と罵倒された事で頭には烈火のごとく血がのぼり。。。。

そこから押し寄せた「怒り」の感情で呂律（ろれつ）が回らなった事を隠すため
「態度」で自分の怒りを表そうと刀に手を掛けた時だった

「戦え！！！」
という影トラの大号令に続く
津波のような「怒号」で身体はまったく動かなくなってしまった
声の波にはっきり飲まれ
大男の身体は硬直し「戦」という海にただ愕然とする事で精一杯になってしまっていた

逆に影トラは「遊戯」でも始めるかのように満面の笑みを打掛を揺らした姿のまま見せた

蒼天は青く雲のない心

獰猛な牙の「天女」は空を泳ぐ
真っ直ぐに天をつかむほどに
のばされていた右手は白く美しい

まるで「誘い」。。。天への誘い（いざない）の指は

鋭く振り落とされた
突然の雷鳴は響き
雷は落ちた

「放て！！！」

影トラの声は事の成り行きを見守って気抜けしていた全ての者たちの心を裂いた
政景の怒声を凌駕する
甲高い声は彼の後ろに控えた五千の全軍を震撼させた

何かに「飲み込まれた」
政景はもはや意識までもが飲み込まれた状態になっている

清々しいほど澄み渡った青い空に「火」を伴った矢が真っ直ぐな輝線を描いて広がった
流星に
目を見張り
すでに
声は無く

ただ見とれてしまう

が
いきなり政景の身体をは引っ張られた
「老臣」国分が忠告の仲裁をいれる。。。などという生優しいもの
ではなかった
力任せに襟首をひっぱられ馬から下ろされ
身体ごと地面に叩きつけられた
急に身体に走った
痛みで悶絶していたところを

「伏せよ!!殿を守れ!!!」

という
国分の老人とは思えぬような大声で政景の耳は痺れた
それでも「現実」が見えなかった
見えない
見えない事を振り払うように慌てた

「なんだ!!何が!!」
「楯!!!楯!!!」
自分の周り近習(きんじゅう)たちが楯を頭上にかぶせ火矢の防戦をしている
政景の上がった頭をまたも国分が抑え続けて指示した

「彦五郎(ひこごろう)!!!どこにいるか!!」

「ココにおります！！」

父親佐渡守（さどのかみ）に呼びつけられたのは政景とあまり年に差違ない男だった
見をひくく
火矢からの守りに楯をあげたまま走り近づいた
顔には
父親ゆずりの慎重過ぎる眉間の皺。。。まるで若さを否定するかの
ように入っている
その色黒の男は政景を守るように楯を構えながらも父の元にすべり
こんだ

「殿を連れて後退しろ！！ココはわしが守る！！」

我を見失っていた政景はただ「後退」という言葉にだけ噛みついた

「待て！！下がらんぞ！！ココから一歩でも！！」

若さが止まらない
血の気だけが突然噛みつかれた自分に「怒り」を注いで走らせている
だが
それを止めるのが積み重ねた経験で戦う「老臣」の勤め

国分は政景の口を「強く」ふさいだ

「殿が指揮をとるためにさがらんでどうするのですか！！ココでま
ず部隊を立て直すのはわしの役目にございます！！」

諫言を大きく伝えるが
ふさがれた手をはね上げた政景は目をぎらつかせて吠えた
「影トラをひれ伏させてやる！！」

国分は
未だ事態の把握が出来ていない政景の襟首を容赦なく掴んだ

「戦はもう始まってございます!!気を確かに!!冷静になりなされ!!」

首根っこを食い込むほど強く掴まれたことでやっと政景は「戦」が
始まっていた事に周りを見回した
自分が多くの近習に守られている事に
そして
身体はすでに汗だくになって「戦場」という状況に反応していた事
に気がついた
自分を落ち着かせるために少しゆっくりとした動作で
額を拭う
目頭を押さえて

それでも
「声」が聞こえる
未だ砦の前で「指揮」を奮う影トラを睨みながらも我に返った

「下がる!!国分任せたぞ!!」
地べたに落ちて汚した身体を払い矢の雨の中を近習と後方へ走った
その後ろ
急ぎお供しようとした息子を父はつかみ止めた

「殿と共に峠付近まで後退しろ」

先に進んだ政景の後ろ姿を追おうとしていた「彦五郎」は驚いて切り返した
「後方に殿が戻り次第全軍で攻撃にうつるのでは？」
意見が終わる前に父親は息子の頬を音高く殴った

「たわけ！！敵の「挑発」に乗ってはならん！！」
そのまま目を怒らせたまま彦五郎に顔を寄せて続けた

「これほどにわれらを「呼ぶ」理由はあの砦の向こうに「何か」あるからだ！！わかるか？「戦」の潮流は今我らに向かって流れておらん！！」
殴られたまま
まだ目を白黒させている彦五郎の首を掴んで
「復唱しろ！！」
未だ状況の理解に苦しんでいる息子の額に己の額を打ち付けたまるで
頭の中の指示を直接たたき込むかのように

彦五郎は
痛みで顔をしかめながらも返した

「砦の向こうには。。。何かがあるから我らを「挑発」している。。。です！」
「そうだ！！」
息子の返事を確認して砦に向かって指さした

「いいか。。。我らの位置からでは高台にある砦の向こうに「敵」

がどれほどの軍勢をもっいるかさえわからない状況だ。。わしはココに前衛の二隊を残し様子を伺いながら防戦するオマエは殿を峠まで後退させた後「退路」を確保するのだ!!」

「後退後に退路を確保?」
またも疑問を挟んだ息子を父はまたも殴った
「復唱しろ!!」

大事な事を。。。
この混乱状態では息子は指示を忘れてしまうかも知れない
父は息子の身体に刻みつけるように手を挙げた

「父上が二隊を残し防戦。。我らは殿と共に後退その後退路の確保!!」

彦五郎もやっとその教え方を思い出したのか的確な復唱をした
「そうだ!!退路を確保するのは「栖吉」の出方が不明だからだ。これほどに「強気」な影トラ。。。栖吉が黙っているとは思えない。。峠を「敵」に抑えられたら我らの逃げ道がなくなる。。峠に方円の陣を敷くべし!!」
今度は父の言葉の後すぐに彦五郎は復唱した

「栖吉を警戒するために峠にて陣を組みます!!!同時に退路の確保を!!」
「良し!!」

慌てていた息子の目が「いくさ人」の面構えに戻った事をお互いが確認した
国分は掴んでいた息子の肩を放し政景の下がった後を追わせた
姿が見えなくなる前に

顔を砦に向け
己の仕事に意識を戻した

楯を自分で持ち大きな声で二隊に向かって叫んだ

「楯挙げ!!!火矢を防ぎつつ!!落ち着いて陣形を整えよ!!」
先頭に立ち上がった国文にあわてふためいて指示を飛ばし合っていた足軽達が背筋を正した
すぐに足軽頭の「室坂(むろさか)」が横についた

「どうでますか?」

小男の室坂は右頬の傷をさすりながらそれでも国分寄りに楯を並べた状態で指示仰いだ
「火矢がまばらになるまでに隊列を戻す事に専念しろ!!数では絶対我らが勝っているのだ!!そんなに長く矢を飛ばし続けることはできないハズだ!!慌ててはならん!!」

室坂に指示
前衛を揃えだした
やっと軍団は機能し始めたのだ

「たかだか。。これだけの事」

国分は唇を噛んだ
これだけの事に最初で躓いて大騒ぎだった
それでも突然「逃走」する者がでなかったのは国文の姿が前面に残ったおかげとも言い切れた
それほどに危険な混乱の状態だった

あの状態が回避できなかったのなら
砦に「呼び込まれる」までもなく多大な被害を出していたかもしれなかった

大きく息を吹いた国文は
弓の準備をしながら
目の前未だ砦の門も閉めず「火矢」の指示を続ける影トラを睨んだ

「恐ろしいヤツだ「肝」の座り方が半端じゃない」

肝を見比べる事ができるのなら政景など勝負にならないぐらいだと素直に思った
「仕寄りはどうします？」
「準備はしろ。。。だがまずは弓合戦だ。。勝手に前にでるな仕寄る時はわしの指示を待て」

年寄りの割りには歯切れのよい言葉で指示を出す
こんな時に息が上がっていては「恥」

そうだ「戦」は始まったばかりだ
「子守」から解放された国分の目は輝いた

「やってくれる。。。ひさびさに熱うなったわ。。。」
目頭と額を一拭い

出揃った弓たちを見た
「良いか？」

足下に控えた室坂も燃えていた
「揃いました!!いつでも!!」
楯手を前に弓を構えた国分は叫んだ

「全陣構え!!!」

その声に影トラが国分を見た
砦の前とその下の間

影トラは笑う
その笑顔に彼は
「戦はこうでなくてはおもしろくない。。。。」
つがえた矢に己の「意気込み」を吹きかけた

「放て!!!」

老将の怒号
守護代軍反撃の矢が飛び出した

その３１　護摩　（３）

「やるな」

国分の号令で烏合の衆と崩れそうだった守護代軍はなんとか「稼働」
し始めた
あそこで味方を「総崩れ」にしなかった老臣の統率力には素直に感
心した
情けない荒れた声を上げていた足軽大将たちも己の仕事を思い出し
たようだ
見る間に陣形は整えられ
前衛二隊の弓隊はきっちりと出揃った

「素晴らしい」

私は感心して微笑んだ
その目の前に
国分の怒号により起きた男たちの目が
私の姿をぴたりと捉えた矢を猛然と放った

闇を空に。。。。歓喜を誘う「戦」の礼儀だ

恐れなど微塵も無い

舞うように身体を回す
そうだ
かかって来てくれなくては「戦」にならない

そうだ
向かって来てくれなければ「死合えない」

そして
もう一つ残念な事を大きな声で告げたかった
それではせっかくの儀式に無粋過ぎるから。。。。静かに伝えよう
国分の「戦」と「怒り」に輝きを増した目に

「矢は決して私に当たらない」と
優しく笑ってやらなくては

「戦」を慕うておらねば
笑顔でも見せてやらね心も躍るまいて！！

「さがって！！！」

身を翻し大きく開いた両手
「さあ」と
招くように揺れる私の姿を大楯が隠した
「段蔵」と「ジン」が飛び出したのだ

無駄な事
そんな事はしなくても当たりはしない。。。。そう思いながらも
「誘う（いざなう）」という大役をこなせた事に満足し
足を砦に向けた

背中越し
楯に刺さる矢の音
まこと
残念な事。。。。矢は私に届くことなく絶命したか。。。と

「段蔵!!あの白髪は?」

砦の門を閉めさせながら感心を持てた敵の事を尋ねた
「国分佐渡守胤氏(こくぶんさどのかみたねうじ)名門千葉氏に仕えた六党の一つ北総の雄の出。。。
かなりの「戦上手」です」
「戦。。。上手」

閉じられ始めた門に目を向けた
「名門を鼻に掛けぬ素早い判断も持ち合わせているな」

隙間から
一寸
国分の顔は政景と比べるまでもなく「いくさ人」

「強そうだな」
まずは相手を認めなければ始まらない
確認に耐えうる「男」であった
侮ってしまったらその時「戦」は腐ってしまうから

乱杭の間を縫い段々畑のような笠になっている上の屋敷に向かった
心は踊る
進む足を逸らすように
私の後を実乃が走って聞く

「どうしますか?国分はあそからは簡単には動かないことでありま

しょう」
「動くさ」

即答した
「ヤツは名門の出で戦もうまいのだろ。。きっと即座に退路の確保に努めているハズだ」
「はぁ。。。」
解っていること
国分は名門だったが「落ちて」ココ越後までやって来ているという事だ。。。「落ちた」辛さを経験しているという事は。。心に「退路」を必ず設ける
負けた痛み
失う悲しみ。。。その経験が「勝ち」に昇華されるかそれとも慎重過ぎて「負けぬ事」に重きをおくか

国分は間違いなく後者だ
かつての大戦(おおいくさ)で主君を失って「落ちた」者にとって「主君」を失ってしまうような「戦」はあってはならない事なのだろう

だから前衛で防戦し本陣に政景を「あっさり」と退かせた
「負けられない。。。負けたくない」だから
負ける事「逃げ道」を頭においた戦。。。

そんな「心持ち」で私に勝てるわけがない

慎重さをみなぎらせている実乃たちに私はあっけらかんと答えた

「政景が出張ってきたんだ必ず突撃してくるさ。。。子供じみたヤツなんだろ?」

神妙に私の顔を見る実乃と段蔵。。。秋山。。。現八
釘を刺すようにもう一度言った

「必ず向かってくる。。。慎重過ぎる国分に政景のような阿呆を抑
える事などできないさ」

それでもまだ不安な顔の実乃に指を指して
「影トラを信じろ。。。絶対に負けは無い」
これ以上「心配事」の問答は不要
そんな事より
ココより先の策を的確事俊敏に動かしていかねばならない

「やたろーはどうしている！」
集まった各隊の長たち
止めていた足を屋敷に向かわせながら自陣の状況確認をする
「所定の位置にて現在待機。。。一隊は弓合戦の最中です」
「よし」
「秋山。。予定通りに前陣に展開を開始。。。合図を待て！」
「はっ！！」

戸口のところまで駆け足であがりながら
「段蔵！状況を逐一伝えろどんな些末な事も見落とすな！！」

いよいよ心が大きく盛り上がってゆく
勢い私は振り返った
振り返りそこにあった壁に頭をぶつけた

「あっ。。。」

倒れこそしなかった
目の前壁のように突っ立っていたのはジンだった

「何ぼさっとしてるんだ!!「戦」はとうに始まっているんだぞ!!」

すまなそうな顔とはうらはらにあきらかに「動揺」しているジン
怒りをこらえながらその手を引いて屋敷に入った
そのまま

「具足持て!!!」

準備万端「具足」を持ち待っている近習達の中に立った
つれられて部屋に入ったはいいがまだ「動揺」を隠せていないジン。。。

「ジン。。。これが「戦」だ」

まだ私を見る事のできなかった彼に告げた
言わねばならないこと

「ジン。。私の行く道は「修羅」の青き心の道。。。私は鬼となって先頭を走って行く。。私の行き着く先は「等活地獄」だが。。。私は今ココで私の下知で炎獄の戸を開け大いなる護摩を焚く。。。」

覚悟を
私の頭に宿る「黒い者」は地獄の使者だがこの世でそれを具現しろと私に告げる
だからその最後が「悲惨」であったとしてもそれを行わなければならない

覚悟の言葉は「恐ろしい」響きがたくさんあったか。。。。近習と
猪は顔をしかめた

同じ仏門の下にいたジンにはさらに深くに響いたハズだろう
動揺の顔から真面目な顔つきに変わり私を見つめる

そうだ
「戦」は。。。。。「修羅の道」なのだ
だからこそ。。。。

「ジン。。。後衛に下がれココから先の「戦」にオマエは不要。。。
猪たちと後ろを守れ」

やはり
ジン。。。。オマエまで「地獄」に連れては行けない。。。そんな
ものを見てもいけない
オマエには戦って欲しくない
私の心は千切れそうだった。。。「不要」などと。。。。

そこまで言うと顔を下げ具足の装備を続けた

「トラ。。。。」

「下がれと言っている」
何も言わず私の願いを聞いてくれ。。。

「頭でっかち」
ふざけた言葉
私はそれでも自分を保とうと静かに顔を上げた。。。。
前

ジンは阿形の惣面を弛め顔を出し両手を頭の上に大きく円を作って
舌を出して言った

「アタマデッカチ！」

思わず身を乗り出しジンの胸ぐらを掴んだ
「私はふざけて言って。。」
「オレは真剣に言ってるの！」
「なんだと！！」

私の掴んだ手をジンが掴む

「トラ！オマエは「修羅」でも「鬼」でもない！！しいてなんかの
あだ名が欲しいと言うのなら。。。。「嵐」だ」

「あだ名ぁ！」
真面目にしゃべった私の言葉にまったく聞く耳持たぬの態度
そのまま手を放して私を突き放した
顔を。。。きっと真っ赤にしている私に向かってジンはいつも問答
をしていた時のように人差し指を立てて

「トラは祈った者たちのために戦うんだろ？祈りは「御仏」の元に
行く。。。その祈りを実行するために戦うオマエが。。。どうして
「修羅」なんだよ？おかしいだろ？」

そこまで言うとジンは板間に座った
「トラ。。。オマエは「嵐」だ。。。この荒れ果てた田畑と暗闇の
治世がはびこる「越後」に御仏が使わした「嵐」だ」

それだって
私はおもわず殴りかかってしまいそうになったが

「嵐の後は。。。真っ平らな「地」が残る。。。まっさらに生まれ
変わる。。。「越後」が生まれ変わる手伝いをするオマエの仕事を。
。。それを「修羅の道」だなんて。。。言うなよ」

「ジン。。。」

嵐の後は。。。。晴れる
祈った者たちに降り注ぐ日の光

光を導くための「嵐」

「そうですよ。。。。私たちの願いを叶える方を「鬼」だなんて思
わせないでくださいな」
猪は私の肩に「打掛」をかけながら言った
「猪。。。」
周りの近習たちも頷く
「我らは「鬼」に従うわけではありません。。。影トラ様に従って
嵐となりましょう」

張りつめいた思いで私は泣きそうだ

「泣くなよ。。。。」
「泣くか!!」

背を丸めてしまいそうだった自分を起こした

「トラ。。。オレはオマエの近くいる。。。絶対に離れない」
「ああ」

私が返事をするやいなや
戸口まで入って来た使い番は声上げた

「申し上げます!!!守護代軍国分隊の弓。激しさを増すばかり。。。近づいてはきません。。ご指示を!!」

立ち上がった私に猪はもう一度打掛を着せようとした
「猪。。打掛は。。」
ぬごうと手を払おうとしたが

「いいえ艶やかに行って下さい。。。その輝きに我らはついて行きますから!!」

すでに甲冑を纏い鉢巻きをまいた猪
少しの侍女達と
近習たちも

「よし!!!猪たちはこれより後衛に周り私の指示を待て!!」

向き直った

ジンは惣面を着けながら口元を笑わしている

「行くぞ！！！ジン私を守り従え！！」

きつく拳を結び屋敷を出た

私は「嵐」だ。。。。。今よりココに風を呼ぶ者なり！！！

その３１　護摩　（４）

「感じるぞ」

気持ちが改まった私は政景の逸る息吹さえ聞き取れる
それほどに
この喧噪の「戦場」は静かに動いている事がわかった
大騒ぎだった一幕の後を取り仕切った男
砦の向かって左を守る武者「国分佐渡守（こくぶんさどのかみ）」
かれの慎重な鼓動さえ手に取るように
聞こえる

息をひそめ「持久」する心が
冷えた汗が
「負けぬ事に」終始した姿が

屋敷の前で指示を待つ使い番の前にゆっくりと進んだ
「国分は動いているか？」
「砦向かって左に展開しておりますが。。。最初の位置からは動いておりません」
展開はしている前にはでない。。。「戦上手」。。。どんなものか？
手を顎に当てこぼれる笑みを隠しながら

「守護代軍は兵を分けたか？」
「いえっ変わりなく全面に展開しています。。ただ政景殿は中軍に下がりました」

。。。。。

中程。。。。下がった。。。。

私にはもう「最後」の絵図まで見えていた
ユカケの紐を自分で括りながら

「右は？」
陣営右に同じく展開している武将を見て聞いた

「樋口兼村(ひぐちかねむら)殿かと」
なるほど
「古狸」の二匹。。。上田長尾に仕える重臣中の重臣が前衛にいる

心の抑えの効かない政景のためにか
わざわざ。。。出張ったか。。。。
もはや
隠さぬ口元で笑う

「残念だな。。。自慢の若君はまったくもっての盆暗(ぼんくら)だ」

そういうと指揮のために手を挙げた
まるで子供の遊戯に来ていた政景の事を思い出した
目が鋭く尖る
目の前で広がっていたわたしの中の知略の「戦場」が消え
けたたましい喧噪
大騒ぎの「戦」への道が開かれた

こんな騒ぎを起こし「民草」の心を騒がし
理由もわからぬ「降伏」を督促しに来た阿呆。。。それが「次期守護代」になる男だと？
その向こうにいる「兄上」。。。「長尾晴景（ながおはるかげ）」がそれを望んでいる。。。。だと？

首を傾げた
まだ兜を着けぬ私の髪が風に踊る

そう
「怒り」に踊る
どこも許すことの出来ない相手に

「オマエは越後の大不忠者だ。。。決して私は許さない。。。政景」

上げていた手を向かう右翼に下ろした

「風を招こう。。。。大いなる護摩を焚くために」と

守護代軍の優勢で弓合戦が進んでいる中。。国分はやはり慎重になっていた
あからさまな挑発による開戦
数に絶対的に劣る栃尾軍

なのに何故「戦」を呼ぶのか。。。

「影トラ。。。。」

国分が政景に従ってココまでくる間に知った影トラは噂に違わぬ「大物」だったが

そもそもそれほどに脅威と思っていたわけでもなかった
上田長尾はむしろ「影トラ」の存在を軽く見ていた
それよりも今にも「病」で息絶えるのではないかという「晴景」との駆け引きの方が大事だった
死の前に

「次期守護代」の地位を越後国内に明確に「政景」に譲る

と
どう言わせるかが常日頃の議題だった
栃尾に配された「妹」影トラの事など女に戦働きなどと「悪あがき的」に考えていたのだ
ところが
「影トラ」は戦が強かった
今まで傍観を決め込んでいた「長尾一族」の中で近年希に見る「強さ」を発揮して中郡(なかごおり)に蠢いた「三条」を始め多くの離反豪族を瞬く間に平定してしまったのだ

国分はその時から影トラとの「戦」は避けては通れないのでは?と思っていた
いや
それ以上に脅威に思っていた

中郡を難なく平定した影トラと現守護代の晴景が手を組めば絶対に
「戦」と言う道を通らなくては上田長尾に「守護代」の地位は入ら
ないと感じていた

「頭が予感してたとおりになりましたね」

神妙な顔で物思いに耽っていた国分に
隣を守っていた「室坂」が声を掛けた。。。彼も古くから国分に仕
えた武士
主の予感を信じていた
ただ頷く

鋭くなった「戦」への感

それは苦渋の道から産まれた
我々は落人だ
関東に覇を成した「千葉一族」に組みする栄誉ある者だった。。。。
だった

だが守るべき主家を無くし越後まで流れてきた

「栄枯盛衰」

栄えある者は負けたら二度とその栄華に戻る事は出来ない

あの苦しみが

常勝影トラに対する危機感を上田長尾に知らした
「早くに守護代と手を結ぶべきです」
政景を押して春日山に参勤させたのはそういう理由があった
そして事件は起こった

「長尾影トラは守護代の地位を狙って候」

千載一遇
運を引き寄せるのは我らだこんどこそ主家を輝かせねば。。。。とだが。。そこから先が実際の考えほどうまく進んではいなかったもちろん晴景との提携を進めたのは国分の案ではあったが何故かそれを逆手に取られたような具合になってしまっていた

「守護代」の地位を「餌」に晴景に操られるような状態でココへ

政景。。。。次期上田当主は我慢がきかなかった「力」にまかせて「戦」に出てしまったが
それでも大軍勢五千という華々しい戦なれば。。。逆に多くの軍勢を動かしたという事実を誇張して「戦後」はすんなりと守護代になれるか?
ぐらいに思っていたが
後から後から噴出する問題を抱えながら戻れないところまで進んでしまったことを国分は今更ながら後悔していた

何よりもの後悔は
目の前で初めて見た影トラの姿
予想を上回っていた。。。ただの「女」ではなかった。。。政景を
上回る度量をもつ武士

自分たちの矢を見てあの「女」は平然と笑った。。。。。
あの笑みは。。。。危険でしかない

「室坂。。。絶対ココから動くなよ。。。。時は我らに有利なのだ
焦ってはならんぞ！！」

今一度と自分たちを引き締めるために「激」した

「頭。。。。樋口隊が前進してます！」
忠告を発したばかりの国分は驚いて自分の向こう左翼の側を見た
「何してる？」
室坂は一度顔をあげあたりを見回す

「左翼にかかる弓の数が減ってます。。。だから前進したのでは？」

左翼にかかる砦側の弓が弱まっている？
いっこうに弱まる事なく国分たちの陣には矢が降っている
国分は猛攻の中を目を凝らし見回した
たしかに。。。。左翼の側は矢が減っている

「やはり数で押し負けてきたのでは。。」

「たわけ！！」

国分は咄嗟に気がついた
栃尾の弓は押し負けたのではない「退いた」のだ

「あれは「誘いだ」！！すぐに樋口隊を留まらせろ！！！」

室坂の肩を押したが
「無理ですこの矢の雨の中どうやって？」
「なんでもいい！太鼓をならすなり貝をならすなりしてこちらの指示に気ずかせろ！！」

国分は自分の側にだけ勢いを衰えさせずに降り続く矢が自分を釘付けにして指示を届けさせぬためのものと知った
だからか。。老将は勢いよく自分の頭を殴った
影トラが姫装束で政景を近くに寄せたのはなにも顔合わせがしたかったから。。。という事だけでなかったのだ
前線に出すぎてしまった国分隊が退くことができない状態で「戦」に突入。。指揮と指示をとどける事が出来ない位置にでてしまっていた事に気がついたのだ

だが。。。
気がつくのがやはり遅すぎた

鐘と太鼓の音大きく響く

「前陣突撃！！！砦を揉みつぶせ！！！」

それは後衛に下がったハズの政景の声だった
後方で前衛の戦いを見ていた政景にとって国分の指示は絶対だったが
全軍が見回せる位置で「戦」を見てしまった事が気持ちに火を着けてしまった

栃尾の攻撃が国分に集中して左側の守りがおろそかになったように見えたのだ

それが甘い「勝機」に見えてしまったのだ

「いかん！！！」

陣を飛び出し政景の元に走ろうとする国分を室坂が止めた
「ダメです出ては！！」
転がる二人の前にも容赦なく矢は降りる
それでも国分は身体を前に伸ばして叫んだ

「たわけ！！突撃してはならん！！！若殿が罠にかかってしまう！！！」

だが
一度転じた「突撃」は止まらない
樋口隊は弓隊を下げ槍隊が勢いよく走り出した

「行け行け！！！影トラの首に縄を掛けて引っ立てろ！！！後に残る砦の品はすべてくれてやる！！居残る者は皆殺しにしてかまわぁぁん！！！」

前衛の樋口隊に続き集兵してきた農民兵たちが我先にと「手柄」と
「宝」ほしさに堰を切った

「馬鹿なぁ！！」
倒れたまま国分にしがみついた室坂は言った
「こうなったらこちらも突撃するしかありません！！」

「手柄」を先に獲られるのを指をくわえて見ていられないのは足軽
たちだ
すでに国分の陣も浮き足だちそれを止めるすべはなかった
絶句
言葉を失った国分

もはや慎重策は破られてしまった
多少の犠牲に目をつむっても「力」で勝たなくてはならない事態

仰ぎ見る砦の塀
激しかった国分側の弓も弱くなってきていた
あきらかに「誘って」いる

なのに。。。。。

拳を自分の頬に二度三度と打ち付けた。。。。
「やむなし。。。。」

立ち上がった国分は唇を噛みながらも采配を振った

「こちらも突撃する！！！油断無く前進せよ！！」

ついに守護代軍は両翼「突撃」の合図を高くならした

砦の屋敷の前
私はその音をよく聞いていた
すでにこの「戦」は終結に向かって走っていた
「半鐘は鳴りて地は唸る。。。。こい政景」

晴れていた空は顔を曇らせ私の想う終わりを誰よりも理解していたに違いない
「さあオマエ達を清めてやろう!!」

最後の篝火は高く挙げられた

その３１　護摩　（４）（後書き）

上田長尾家臣団

ちゃ～～す後書きからコンニチワ～～ヒボシです

米山合戦導入部にて上田長尾の家臣がちらほら名入りで登場
「国分佐渡守（こくぶんさどのかみ）」が暴力的なのはサド（佐渡）だからですか？
という質問メール（藁）
バンバン息子殴ってましたからでしょうか。。。。（微笑ましい）

えっと違います
言われてみて
おおっ！！っとかって思っちゃいましたが

国分殿は小説内で段蔵が説明していた通りで実在の人物です
関東で栄えある要職にあった「千葉氏」に従属した六党の一党「国分氏」というやつです
かつては鎌倉幕府時代に頼朝に従って平家討伐にも参戦した名家ですが。。。。。
戦国時代には関東は。。。。知ってのごとく「北条（伊勢）」に覇権を奪われその他の名家も力を無くし離散してしまってもはや関東に居場所がなくなってしまっていました

落人となり
上田長尾に仕えていたのです
ちなみに「彦五郎」はこの家の息子の名前には多く何代目彦五郎なのかは不明（藁）

バンバン殴られてましたがあれは「教育的指導（爆死）」だと理解してやってください（藁）

暴力的さ加減ではトラだってジンの事。。。結構殴ってますから（藁）

あれも「愛情表現（爆死）」と。。。。

樋口兼村殿もまた実在の人物です

ご察しのよい方には突っ込まれましたがあれです「樋口与六（ひぐちよろく）」（後の直江兼嗣（なおえかねつぐ））。来年のＮＨＫ大河（天地人）の主人公）の祖父です

上田長尾に古くから仕えていた事はわかっていたのですが。。。。

実際に「戦」の指揮をとるほどの大老家ではなかった。。。のでは。。。と思われます

しかし。。。。

長尾家家臣団というの名前は残っていてもどんな「職」にあったかはあまり記録に残っていないので。。。。まぁちょっと活躍して頂きました（爆）

そのほうがトラにも憶えがいいだろうし（藁）

そんなこんなで筆者混迷もしながら頑張ってます！！！

それではまた後書きでお会いしましょ～～～～

その３１　護摩　（５）

「年寄りどもは慎重すぎてイカン！！」

後衛の陣に戻り彦五郎の「諫言」を無視した政景はむしろ「禁」を破ったことで自分が一つ大きくなったとさえ思っていた
口に出した「蛮勇」に立派な「英断」をくださしたと胸を張った

「退路を確保せねばなりません！！お退き下さい！！」

政景の足下まで伝令として到着し父の「指示」を告げた彦五郎は目の前で下された「突撃」の号令に猛然と反対したが
政景の目には
父の命（命令）に忠実な彼の姿は。。。
その言葉が冷静に自分を冷やそうとしてる事に。。。
まるで「子供扱い」されている気分になり腹立たしさを増した

これまで自分を引き留め続けた「年寄り」たちの事が頭によぎった

「まだ早いのではないか？」

政景は父・房長（ふさなが）は晴景との駆け引きじみた「守護代の座」をめぐる策謀が始まった時からずっと「慎重論」を掲げていた
春日山についてからの息子の状況。。「旗色の悪さ」に何度か出直しさえも進めていたが
政景は絶対に曲がらなかった

「今度は負けない」
父は
為景に「戦」で完膚無きまでに負けたわけではなかった。。。
ただ運気が自分の側に流れて来なくなった事を理由に「戦」を止め
為景の元に下った
口癖は

「時が我らに有利に働く日を待つ」

。。。。。。

「待つ。。。。」
政景は子供心に納得はしなかった
「戦」に勝って
徹底的に勝って
「強い者」こそが「守護代」になる

それを具現したのが「為景」で
まったくの皮肉な事にそれが政景の目標になっていた

「武力」を輝くものに見せた為景をまともに見た事はなかったが
聞くばかりの話の中でもその武威は衰えてはいなかった
だから「弱腰外交」を続ける父達が許せなかったし
その英雄的為景の後を継いだ晴景も。。。。
許せなかった

そして
「影トラ」
女である影トラを前に「退路」を確保して「戦」に望むなど。。。
政景には絶対に許るされない事だった

「力が全てだ！！」
若殿を粘り強く説き伏せようとしていた彦五郎を睨んだ
己の根底にあった言葉で罵倒した

「戦え！！徹底的な勝利を！！軟弱な「策」はいらん！！」
もはや助言などただの「言い訳」にしか聞こえない
なんとか事を納めようとする彦五郎を無視し
軍配を高く挙げて「全軍」に叫んだ

「進め！！ココより先ただ勝つ事のみの「戦」を戦え！決して怯むな！！」

指示は素早く前衛の「樋口隊」に届いた
砦からの矢はあきらかに弱くなっていた
前衛二百の隊が構える弓隊の数に栃尾側はまっく勝てていなかった
最初に飛んだ火矢の威勢はすでに消えかかっている

「槍隊構え！！突撃！！」

左翼最前線で老臣「樋口」は賽を振った

前衛は激流のごとく砦の塀に殺到していった
仕寄りの仕事もそれほど抵抗をうける事がなかった事で政景は確信した

もはや栃尾側に「勝機」はないと

「危険です!!あんなにすんなりと塀を破らせるなど。。」
行軍にあわせ前進していた政景の馬に彦五郎が飛びついた
「離せ。。。」
冷徹な言葉とは裏腹に政景の軍配は彦五郎の頬を叩いた
殴られ兜を飛ばした彦五郎に
唸る声は告げた

「勝てる時に逃げる事を考えるなど!!縁起の悪いヤツはココから去れ!!」
「慎重である事は負ける事とは違います!!」

それでも引き下がらず馬の前に身体を回した彦五郎は父親と政景に殴られ腫れ上がった口元を苦く曲げて続けた

「お聞き入れください!!」
だが手から馬ごと政景は強引に離れた
そして
吐き捨てるように言った

「退路の確保はオマエが「勝手」にやれ!!後の者はみな戦え!!」

そういうとさらに前に歩を進めてしまった

彦五郎は「はいそうですか」などと言えない立場だが見渡せば父の
隊も前進を始めている

「どうされますか？」

国分家に仕えている室坂の部下が心配そうに聞いた
へこたれている時間はない
父が前進したのは間違いなく「樋口隊」の前進に歩調を合わせたか
らであり「望んで」前にでたわけではない

父の指示は変わらない。。。。
切れた唇を手で拭い彦五郎は強く部下たちに激した

「退路の確保に勤めよ！！ワシは殿を守る！！」

忠臣たらん勤めと父の指示を素早く伝えると
槍を持ち政景の元に突っ走って行った

「潮流。。。。」

第一の塀に殺到する「守護代軍」を見ながら私はつぶやいた
緩やかながら湿った風は私の身体を巻き
そのまま下方に向かって降りていく

私の目には展開する前衛の指揮のために間近にまで自身をさらけ出
している政景がよく見えた

威勢が良い。。。。
だが
苛立ちを全面にだしながらの声には「怯え」は残っている
それは「勇ましい」が悲しいほどの脆さを隠すための気勢だ
風に震える声はそういう匂いを感じさせてくれる

そしてそれは
私の感にさわる声だ。。。。弱い者が。。。。
身の程知らずが。。。。
苛立つ

「だまらせよう。。」

もう十分にあの軟弱無骨者と付き合ってやっただろう
笑って付き合ってやったのだ
もういい

顎をあげ見下す

「もう死ね」

丘から向かってくる軍勢に吹き下ろす風に言霊
死ねとオマエ達を激励するよ

私の目線の先軍勢が第一の空堀に梯子をかけ仕寄りをすませ大挙し始めた
もうその場所に「栃尾衆」はいない

それはいかに危険な事がまっているかを告げている「行動」なのだけど。。。

でも

オマエ達は向かってくる

私の思案のままおそらく金で集兵された「ならず者」達は我先に二の壁である乱杭の方に向かう
何に目がくらんだ？
ココに

オマエ達の求める何があったのか？

私は決して動かず砦の前
屋敷の前に「ならず者」たちからよく見える位置に立ち手招いた
と
同時に
手を挙げ実乃に合図を送った
死地に入ってくるものに苛烈なる「花」を

時はキリキリときしみ動き出す

遮二無二ココを目指して駆け上がる「餓鬼」たちの姿に「制裁」はもっとも望ましい褒美と理解できた

「さあ。。。ココへ。。こい」

さらに招く
キリキリと招く

右翼も左翼も同じぐにらいに一の壁を突破してきた

「どこまで引き入れますか？政景を待ちますか？」
伝令の頭として走り回っていた段蔵が私の後ろで報告をした

「政景はこない。。。。ココまでこれない」
振り返ることなく言う
「前衛も両隊が全部入りきる事はないだろう。。。それは疑ってくるからな。。。」

国分。。。
負け続けた男は絶対に全部の隊を前に進ませる事はない
すでに後続の動きに停止がかけられ始めている
十分に探るつもりなのだろう

「段蔵。。。もう良いぞ高井楼（たかせいろう）の元に指示を」
「はっ！」

素早く指示を下す翻す
「祈り」の運命に繋がった栃尾の全ての隊に命（命令）は下された

「護摩。。。」
私より一段前で楯を持つジンの声が。。。。まだかすかな「恐怖」
「戦」と言うものを初めて見る「畏れ」か？

でも私の仕方だ
隠さぬ「戦」への心をココで最後まで見てもらう
全てをココより始める大いなる儀式だ
空を仰ぎ祈る

「大いなる祭礼。。。護摩を焚き調伏(ちょうぶく)を行う」

そう言うとジンよりさらに前に向かって歩き出した

その間にも
みるみる二の杭を駆け抜ける「餓鬼」
自ら終わりに向かって走る者達の目はまったく曇りきっていた
彼らが何者か？
収穫の途中で「金」を得てさらにそれ以上の「何」を得ようとココまでやってきたのか？

そんな者にどんな「宝」が
それらうらぶれた者達の顔をよく眺めた。。。。
死地の先。。。にようこそ。。。
と

だから
安心しろ
安心し。。。。。心して逝け

両手を開き

「調伏！！！」

叫び手を胸の前に音高く合わせた
「捧げよ！！」

雑音を貫く私の声は首尾に着いた栃尾衆の耳に十分に届いた
引き裂く声に「餓鬼」達も何かに気がついたが後の祭り
いや
「祭りの中」ではもう遅い

号令とともに
砦の前方左右に立てられていた高井楼は後続の道をふさぐように倒れた
轟音
高くそびえていた空の櫓は落ちると同時に「炎」を上げ
堀切の近くに積み重ねてあった「藁（わら）」にも同時に火が走った
一の塀を飛び越え殺到していた部隊は一瞬にして落ちた櫓の下に潰され
その上で撒かれた火に一斉に悲鳴を上げた

もう遅い
なだれ込んでいた部隊の半分は後続から切り離された
前を走っていた兵たちも愕然と後ろを見た

「オマエたちは護摩に捧げられし木である。。。煙とともに天に逝け。。そして天の恩寵にあずかるがイイ」

私は笑う
彼らに最大の「宝」を与えられたことに満足して

その祝福を邪魔する「阿鼻叫喚」を止めることも喜びの仕事だ
構える私の前
三の杭前に火矢をつがえた実乃達

「すみやかに燃えよ！！」

英断の手は振り下ろされ
炎を背に逃げ場を失った守護代軍前衛隊に百の矢が放たれた

その３１　護摩　（６）（前書き）

ランキング～～～
なんか。。。よくわからないのですが（藁）
友達が色んなランキングに登録してくれました
（注．ヒボシはパソコン音痴（爆））
怖いです。。。そんな～～しらない間にぃぃ何してるの？って感じですが
そういう事も良き協力と信じがんばっていこうとおもっております！！！

その31　護摩　（6）

苛烈なる火蓋は文字通り
いや
斬って落ちるなどという生やさしいものではなかった

崩落

高井楼(たかせいろう)はたくさんの油樽を乗せたままその重さも手伝って一気に崩れ落ちた
驚愕の出来事は下敷きになった者たちの断末魔と命
先を走りとりあえずの難を逃れた者たちから声を奪った

「空(あ)くことなく天に捧げられよ」

突然の出来事に茫然自失の状態になりながらも
櫓の下敷きになった「仲間」を助けようと走った者たちの背に「火矢」が刺さる
散乱した櫓に仕掛けられていた油に高井楼の足を引きなぎ倒す仕事をこなしたばかりのやたろー達が火束（藁に火をつけたもの）を手早く放り込んだ

たちまち炎の竜は逆巻き
櫓に塗られていた油をつたい蛇のように走り回る
見る間に

枯れ木と藁で積み立てられていた櫓の骸は護摩の火にその身を赤く染めた

後続の部隊と出しゃばって先を走ってしまった「俗物」どもは遮断され逃げ場は前にしかない

だけど

それまで「欲得」に染まっていた目はもう「怯え」しか映していなかった
とてもそこから走って私の所まで来て名乗りを挙げようとする気力はない様子だ
正面
私は屋形の真ん前に立ったまま
火矢に怯えながらも後ろに燃えさかる炎からも身を隠せなくなった者たちを眺め見回した
百はいるな。。。。

手を開き
あえて優しく手招くが
面前には
並ぶ弓隊たち容赦を知らぬ火の刃を構えている

オマエ達がただの「亡者」ならばその「欲」でココまで駆け上がってこればイイ

そそして
その濁った身体と腐れた心を私が一刀の元に斬ってやろう
そうでないのなら

「捧げられよ」
天のためにこの地のために「礎」となって捧げられよ
それは実に望ましい「死」だ
なんと輝かしい「宝」を。。。。。。

うっとりとしたゆるやかな気分の中
自分の心を引き締め「戦」に赴く心を示すために

小姓に控え持たせていた刀を抜いて吠えた

「潔く死ね!!死に踊り天に逝け!!その汚れた身体が炎に焼かれ
煙に変わったのならば「恩寵」も過分に受けられよう!!」

どんな轟音もきっと私の声は引き裂き貫いて聞こえるのであろう
攻防の死に近づく者たちはお互いの顔を見合わせている
ある者は背中に迫る炎の向こうに助けは来ないのか?と
ある者は身構えてはいるが逃げる道を捜し首を忙しく動かしている

愚鈍なる行動
どの者の顔にも「信心」は無い
見捨てられた木々がごとく

「助けてください！！！降参致します！！」

およそ前衛の中でもひときわ目立った具足をつけた男が叫んだ
槍を投げ鉢巻きも投げ捨てると
迫る炎を気にしながら二本指した刀まで投げて土下座した

「わしらもう勝ち目はありません。。。ココで降参致します。。。。」

声に「謀（はかりごと）」
地べたにこすりつけた頭は上目遣いに私の顔色を伺っていた
透けて見えるほどの安い心

おそらくこの男が「集兵」に一仕事した「野武士」なのだろう。。。
金で人手を集めた男はさらに「欲」の火を消すことなくココにやってきて。。。
なのに。。
何に平伏する？

「殺さんでくだっせぇ。。。」
先頭にいたこの男の脱兎な態度に
呼応して
武具を投げ捨てからだを地面に伏す者たち

「ざいご（田舎・里）にけぇたった（帰ったら）おかあと娘がまぁっとりますから。。。ゆるしてくだんせぇ」

年も十分な働き手達は口々に「泣き」始めた

「もうよっぽらでしゃ。。。助けてくだっせぇ」

口ぶりから百姓である事は十分にわかっていたが

だから。。。なんだ？
「戦」に来たのならば「死」はすぐとなりにいる友だ
その死への引く手から逃れたい理由は？
救われたい理由はなんだ？

聞こう

「何に救われたい？」

私は刀を持ったまま首傾げて見せた
炎の下
燃える情景の中では
およそそんな言葉はきこえていない
きっと聞こえるように言ったところで彼ら自身が「何に」頭をさげ
自分たちの身の安堵を願っているか？など。。。。
わかりもしない。。。

やはり哀願は
「戯れ言」

ゆらりゆらりと身を揺らしながら私は火に炙られる者たちを眺めた

「言いわけはきかない」

私の少ない「説法」の間にも火の勢いは増し熱さが感じられるようになってきていた
きっと彼らの焦りは絶頂に達している
だから見苦しい事を言っている事に気がつかない

私は不愉快になった
護摩の火のためにくべられる栄誉を与えたのに
それに逆らい華々しい死を己で迎え入れる事もせず
泣きごとを告げる者たちに

見たくもない汚さだ

目を背け顔をあげ崩れた櫓の向こう
中軍に構え直しているであろう政景の方を見た
炎と煙を畏れ大きく陣営を後退させているのがよく見えた

「にがさんぞ」

そういうと視線を落とした

「慈悲を請うなら天に祈れオマエたちの「欲」という「信心」に祈れ。。。そして救われてみよ」

そこまでいい背を向けた
次の仕事に入らねばならない
「入れますか？（投降を許しますか？）」
段蔵の声に手を振った

「焼け」

簡潔な指示
後は嘆きと悔やみの言葉が波のようにただ聞こえた

目の前は一瞬にして景色を変えた
崩れた櫓の向こうはただ大きく炎が立ち上がり。。。。
悲鳴が聞こえ

静かになった

静けさの中砦の城壁は炎に姿を変えたまま誘うように揺らいでいた

遮断された前衛はみな脱兎のごとく逃げ元の隊列に戻ることなどできない混乱が始まっていた
慎重に前進していた国分の部隊をのぞき
前衛の部隊は例外なく崩れ「樋口隊」はおそらく半分以上の将兵を失っていた
骨のようになった隊列の中に目を見開いて声を無くした「老将」樋口の姿があった

「なんだ!!あれは!!何をしている!!」

部隊の兵卒と同じく急転した状況に飲み込まれていた政景はいななく馬の背で我を取り戻し
同じく呆然の状態の周りに怒鳴り散らした
みな一応に政景に向き直るのだが
状況を伝える「声」を。。。。いや「言葉」を発せられない

わからないのだ
何が自分たちの前で起こってしまったのかが

「退いて下さい！」

誰もが困惑している中を槍を担ぎ楯を前に持った「彦五郎」が飛び込んだ
「ココは私が立て直しをしますその間にも後ろに下がり指揮をまとめてください！！」
彦五郎は他の諸将にくらべたら毅然としていた
父にはっ倒された唇の痛みに「経験」が残っていたからだ

まだまごついたままの小姓を達を殴った
「殿を守って後退せよ！！」

「だまれ！！！わしは退かんぞ！！ココにて陣形を作り直せ！！」

馬を暴れさせたまま政景はわめいた
驚きで声をココにいる兵卒と同じように無くしてしまっていた事も
「恥」であれば
そのうえで逃げるなど受け入れる事のできぬ「恥」だ
拳にこもった熱で己の胸を叩いて大きく告げた

「おそれるなぁぁぁ！！！全軍前進！！！炎を突き破れ！！！」

正気か狂気か？

彦五郎は大きく首を振って否定した

「あり得ません！！！冷静になってください！！」

しかしもはや振り向きもしない

「炎に臆してにげたなどと！！」

政景の顔は全面に渦万炎に照らされて赤くなっているわけではなかった

何もかもが自分の考えを上回った事にあきらかに焦っていた

「誰も行かぬのならわし自らあの炎を。。」

槍を持ち彦五郎を刺すのではというほど頭に血をたぎらせていた政景に

周りはさらに混乱の色を深めていた

「突撃か？後退か？」

緊迫の間割ったのは前衛隊から駆けつけた

「樋口兼村（ひくちかねむら）」だった

兜をまだ腰にくくりつけたまま白髪を振り乱しながら迫る危機を機敏に感じとっていた男は政景の馬の前で告げた

「今ココに留まっても我らに良策は無し。。。打開という意味で「炎」をくぐって前に進むという「策」はあれど。。勝機も無し。。しかしながら「戦」は始まったばかり。。なれば我らがココで退く事で「勝利」を招き入れる事もできましょう」

「なんでだ!!」

いまだ退くことが「敗北」という考えにしか結びつかない政景は怒鳴ったが
老将は冷静だった
若殿の気性にあわせて踊っていた馬の手綱をしっかりと掴むと
老骨が知る「戦」を語るために視線をあげた
谷間から向こう自分たちを囲んでいる森をぐるりと指さして

「残念な事に現状では前には進めません!!百姓どもに「炎」をくぐる気概はありません!無理強いすれば部隊を崩してしまうのがオチなだけ。。。ですが敵もまた「炎」を越えてはやっこないハズ。。しかしだからと言って「影トラ」が「戦」を中断するような者にはみえません。。。必ず仕掛けてくる。。。我らを囲む森から。。」

経験深き老将の言葉に彦五郎も目が覚めた

大軍という威を借り「おそらく」敵は「降伏」するだろうという読みで
軍勢が立ちゆきままならぬ領域に踏み込んだ事もまた「誤り」だったが
女に「戦」などと見くびってしまった事も
そもそも

「栃尾は戦など出来ない」

そう思ってココまで来てしまった事に「過信」があったと
その「過信」に今だに自分たちが引きずられていた事に気がついた
だから
確信を持って逸る政景を引き留められなかった自分の若さに樋口の

言葉で気がつかされた

空前の「戦」は今まで見たことのない方法で始まってしまった
もう今更「これは無い」などと考えるのは甘甘なのだ

「おトラ姫は本当に「戦」に強かったのだ」

彦五郎は噛みしめるように自分の胸を叩きながらこぼした
ココは正真正銘の「戦」の舞台なのだ
舞台から落ちてしまったら「死」しかないのだ

彦五郎は自分頭を音高く殴った
殴って政景の足下に控えて告げた

「我らココで討ち死にしますか?それとも勝つために一度退くか?
どちらかを命じてくだされ!!どちらの指示にも命を惜しまず働いてみせましょう」

覚悟を
ただ闇雲ではなく生きるために

樋口の的確な諫言(かんげん)
彦五郎の覚悟に政景は置かれている立場を少なからず理解した

「退けば勝てるのか?」
「勝つためにココにきたのです。。。どうやってでも勝ちの流れをこちらに向けます」

そういうと樋口は前線に一陣を張るために移動している国分隊を指さした
「殿の後退を信じ国分隊は「殿(しんがり)」の準備に入っております。。炎の壁があるうちに後退を」
彦五郎も指された先を見た
父．佐渡守は大きな声をあげ激しながらもまだ諦めず時をかせぐ準備をしている
若さで力押しの意見はとおらなかったが樋口の言葉添えでかなり冷静さを取り戻した政景に彦五郎は告げた

「退路の確保は出来ております。。。お下知を」

政景はうつむき敗北の苦さに頭を振ったが
すぐに顔をあげ砦を睨みながら答えた

「全軍後退峠まで下がれ」

しかし
守護代軍の後退の判断は遅かった
前衛が備える位置とは別の方向から一斉に矢が飛んだのが彦五郎の目には映っていた
高き法螺の音ともに
それは「容赦」なく降り注いだ

指揮系統の混乱が長引いた守護代軍中軍の兵が凶器の雨になぎ倒された
政景の前を守った樋口の腕にも矢は刺さっていた

「なんたる早さ!!言ってる先から。。。」

片腕に矢を受けてしまった事で二陣の「殿(しんがり)」に覚悟を決めた樋口は
彦五郎の背を押した
「殿を守って後退しろ!!速やかに!!」

滞っていた守護代軍は一丸となって後退を開始した
混迷色濃い「戦」苦渋の選択をした政景は矢の飛ぶ根本を睨んだが
目に映った旗に「怒り」は絶頂となった
それはかつて上田長尾が見放した「同族」栖吉(すよし)のものだった

「おのれ!!栖吉!!!」

悔しさに歯がみすれど。。。
激烈なる後退戦は始まったばかりだった

その３１　護摩　（７）（前書き）

久しぶりに後書きに人物評書きました
「戦」に入ってから慌ただしく人が出入りしているので人物のご確認に役立てば幸いであります！！

その31　護摩　（7）

「信濃川を渡らざるえません」

片腕に二つの矢を受けたため具足をはずし野戦治療という荒療治を
受けながらも
樋口兼村（ひぐちかねむら）は地図の駒を指ではじいた
すでに夕刻も近づく今
砦から後退した守護代軍は念覚寺（ねんがくじ）には戻らなかった

「栖吉（すよし）」は寺から一里南にて陣を展開している

報告が入っていたからだ
後退しながらも周囲の状況を状況に知るために樋口は残った騎馬を
頻繁に走らせていた

「栃尾は十分に「戦」の支度をしておりましたな」

無口で通った男だが
未だ殿（しんがり）から国分佐渡守（こくぶんさどのかみ）が戻らぬ以上は政景との作戦のために苦しく
とも話しせねばならなかった
顔色を悪くした樋口は
治療。。。とはいえただ鏃（やじり）を引き抜き止血の木綿をまいただけの腕
をさすりながら
それでも消して声を震えさせずゆっくりと続けた

「栃尾の構えから見て寺より南に戻る事はできません。。。坂戸との道筋には栖吉が必ず陣を構えておる事でありましょう」
「坂戸と挟み打てばよいではないか？」

後退した守護代軍の陣形が改まったところで床机に疲労とともに重く腰掛けた政景が樋口のはじいた駒を寺に向けて置き直した

「それでは我らが挟み打たれます」

政景の暗い顔の前
樋口は動く右腕で栃尾の駒を守護代軍の駒のケツにぶつけた

「距離から言っても坂戸と挟み打つ前に。。。。栃尾に尻を炙られてしまいます」

政景にもそれはわかっていた事だった
栃尾は奥まった峠の向こうに城を持っているが面前には「陸の道」を持っている
それ故に中郡（なかごおり）での重要な要になっておりひいては「揚北衆」への牽制の場所にもなっていたが
もとの役目は「栃尾城」自体が「栖吉長尾家」の出城という所にあった
そのため
信濃川にそって奥山の峰伝いに守りの領土を持っている事になる

坂戸への帰る道に栖吉は「城」を構えている。。。という非常においしくない状況になっていた

もちろんそんな事はいまさら言われなくてもわかっていた事だ
坂戸からの行軍の道筋にいたからこそ「兵糧」の供出をさせていたのだから。。。。

政景には色んな思いが巡っていたそのせいで頭は下げたままになっていた
若殿の姿に樋口も重い口調で告げた

「枇杷島に早馬を飛ばしております」
「枇杷島に？」

汗にまみれた顔をあげ聞き返した
そもそも上田長尾に。。。政景の家に「軍師」としての知識をひけらかしていたのは宇佐見（うさみ）だった
樋口もその胡散臭さと見えぬ人物像に警戒はしていたが今はそうも言っていられない

「挟撃するならば栃尾勢に我らを追わせた方がようございます。。。」

つまり
湿地帯ギリギリの霧の中を隠れ進み
枇杷島からの後詰めと向かってくる栃尾軍を挟み打つという策だ。。。が

「宇佐見は我らに従うのか？。。。。それに栃尾は追ってくるかもわからんのに」

政景は率直な疑問をあげた
その疑問に樋口は少しずつ自分の頭の中にある「図」を整理するように話した

「宇佐見は未だ守護代にも良い顔をみせぬ不忠義者なれど「仕官」を。。。いや「軍師」になる事をねがっております。。もともと先代の時に関東から被官(ひかん)してきた者です。。地に足の着く職務を約束すれば我らにつきます。。。でなければあんな根無し草を使う者などだれもおりません」

古くから上田長尾宗家に仕えてきた樋口は流れ者であり「関東の上杉」の名で飯を食う宇佐見を見下していたが
利用する方法はないと言い切った

「越後の変革に付き合い「軍師」の座を与えれば従いましょう。。。今この時ほどの好機を宇佐見も見過ごしはしないでありましょう」

政景も宇佐見の事ではあまり良い話しは聞いていなかったが
何故か「軍学」に秀でた者である事だけは知っていた
それに「関東の上杉」は上田長尾の「山内拝領(やまのうちはいりょう)」とも少なからず「縁」はあったため手紙を送ってはいた事を思い出した

「わかったその事は任せよう。。。しかし栃尾が我らを追うという保証はない」

政景の了承に続き献策しようとした樋口は少し躊躇したように
「前に出すための策は。。。。。」
口が重いが。。。。迫る闇の時には行動を起こしたいという考えか

ら「策」をつげた

「まず春日山とつなぎをとる事です」

「なんだと!!」

「春日山」

その言葉に

いまだ疲れから床机を飛ばし立ち上がる事はできなかったが上半身を真っ直ぐに起こして政景は怒鳴った

「この「負け」を晴景殿に知らせたいのか!!」

怒りの政景を樋口もまだ床机から立ち上がる事のできぬまま右手で制止して言った

「「策」にあります。。。この「戦」は守護代様の命（命令）により影トラ様に懸かった嫌疑を晴らすための「仕置き」にございましょう。。。なのに「反抗」されましたなれば春日山に折られる「虎御前（らごぜん）」を質に。。」

「やめろ!!!」

樋口の前

政景は両の手を地図を広げた台に叩きつけた

「負けているから「人質」をよこせと。。。。そう言うことをしろと」

唾を散らしながらも政景は。。。。

「まだ。。。負けておらん!!負けておらんのに。。。そんな事は

出来ん！！」
「しかし」
「だまれ！！「退いて勝つと」言ったではないか！！それがそんな
卑怯な手でしか「勝ち」を得られないとわかっていたなら！！炎な
んぞ恐れず。。」

「負け」
それは政景にはあってはならない事だった
「次期守護代」を約束された自分が「質（人質）」を獲って国をま
とめたなど。。。。
そんな手管ででしか勝利を得られなかったとなれば
嫌悪してきた晴景と同じように「虎御前」を質に栖吉を抑えたのと
何もかわらなくなってしまう

額に流れた汗を払った

目指していた「勝利」は
どんな「戦」に勝つ事
勝って勝ってその戦績によって頂点に
「力」でもってその座についた「戦鬼為景」の再来と言われるほど
の栄誉が。。。
そうだ
奇しくも「影トラ」が使ったような「炎」を纏うような「戦」で「
勝利」を手に入れたい

あの「護摩」が目に焼き付いて離れなかった
思い出しても震えるほどの。。。悔しいが猛々しい「戦」
それがどうしても政景は欲しかった

一度は落ち着けていた
息を荒げ
叩きつけた両の拳をふるわせる若殿の姿に樋口は口を塞いだ

「ではすぐにでも信濃川を渡りましょう」

怒りで硬直してしまった陣幕に手を割って入った男は傷だらけに焦げた肌の匂い

「国分。。。。」

顔を起こした政景と樋口の前に入ってきた国分の姿は最後尾を守った「戦」の凄まじさを十分に語っていた
兜はなく
籠手(こて)も各所がはじき飛ばされたように千切れている
草摺(くさずり)の裾板も右足の方がなくなっていた

「先に申しあげておきます。。。我が部隊は。。。もはや動くことできませぬ」

父の後に続いて入った彦五郎の手には「室坂(むろさか)」の鉢巻きがあった
震える手でそれをたたみながら

「現在の我が軍の総数は三千五百ほどです」

戦目付とともに全軍の数を改めていた彦五郎はこたえた

樋口はただ
国分と顔を合わせて頷いた

「身は軽くなりましたすぐに信濃川を渡りましょう」

総数が減ったことに対する「落胆」を国分ははね除ける強きで続けた
こんな切迫した事態の中で「脱走者」だの「集兵逃れ」などの「処罰」の話しなど言い出してもきりがない
そのうえ
国分も樋口も己の部隊の大半を失ってしまっている
家族のように過ごした直臣であった「室坂」の事を思えば「身軽」などと簡単に言える言葉ではなかったが
悔やんでもはじまらない

むしろその事を気にせず進む事で「勝たねば」ならなかったからこそ強い口調で続けた

「坂戸との連携を取るためにも栖吉を避けねばなりませぬ。。このままココに留まっていれば栃尾からの挟撃にもあいます。。日（翌日）を待たず夜のうちに渡河しましょう。。。渡河して栃尾を誘い込む情報を流しましょう」

「情報を。。。。流す？」
政景はすでに自分では考えが着いていけなくなっている事を「恥」と重いながらも聞き返した

国分は今し方戦ってきた峠の方を見ながら言った
「川を挟んでの対陣のために「後退」しながら近隣の国人衆を集めている。。。。と。。目の前で「後退」してゆく我らをみれば栃尾も川を渡りましょう。。。大部隊になる前に。。必ず追ってきます」

「宇佐見もろとも信濃川にひしめく豪族どもを従わせる。。「次期守護代様」の名において」
政景は反対はしなかった
どちらにしても川を背に陣は張れないし。。。逃げた兵の補充もしなければならない
「反抗者」に対する見せしめの「戦」を声高く宣言して戦う。。。
それは政景には好ましい策にとれた

「戦の乗法」に従った
大きく一息ふくと
この状態の中帰陣してくれた国分の肩を叩いた

「勝つぞ」

介したすべてに命がいきわたった時
彦五郎と共に陣幕に入ってきていた大男が大きく手を挙げて言った

「雲行きから朝方は雨が降るやもしれませんな」

陣幕に揃った「上田長尾」の面々の前にたった柿崎は鼻をならし
外の匂いを嗅いでみせた

「雨がくるのなら尚のこと。。。」

「柿崎殿よ」

急いた彦五郎の言葉を割って政景は末席にて意見した柿崎に声を掛けた

「戦はまだこれからだ。。。。」

「わかっております」

「貴殿にも存分に働いてもらわねばならん」

政景は戦目付である柿崎に「余分な」報告をされたくはなかっただからすごんだ声で「釘」を刺した

「期待しております。。。。ワシも手ぶらで帰るのはイヤにございますから」

柿崎は不敵に笑うと腰に着けた小太刀に手を添えて見せた

「報告は「勝ったとき」にさせて頂きます」

「それだけで十分だ」

柿崎の返答に政景は「未だに」戦が自分の手の中にあるものと安堵していた

この夜守護代軍は全軍にて信濃川を渡った

しかし

翌日政景達の前にあった守護代軍の現状はもっと深刻なものに変わっていた

その31　護摩　（7）（後書き）

「護摩編」人物評

昨日。。。。頑張って色々書いたのに。。。何か触っては逝けない
ボタンを押してしまったらしく
真っ白になってしまい。。。涙にくれたヒボシでした

しかし！！
気を取り直してせっせっと書きました

長尾影トラ

言わずと知れた主人公
兄から懸かった疑いにプラスαの家臣達からの「戦」に出ろコール
でしばらくグレて（藁）ましたが
つやのお願いから「祈る者を助けろ！！」という陣の言葉で目を覚
ます
諸悪の根元は越後にある「争い」を野放しにしている守護代，兄・
晴景と認め
アラシとなってこの地を平定するために現在奮闘中
迫り来る政景達に櫓を崩落させ炎の壁を作るという前代見物の荒技
で守護代軍に先制パンチ！
「容赦のない心」は完全復活で戦の駒を進める

加当陣江（かとうじんえ）

フルネームで書くのが久しぶりすぎて作者さえ忘れそうだったよ（藁）

引きこもりになったトラを「戦」に引っ張り出す事に成功したジンはとりあえずトラの近くについて「お守」兼「護衛」として働く事ができるようになったよ！！

おめでとう！！

しかし目の前で見た初めての戦に「恐怖」しているところもあるが？

トラの苛烈な戦ぶりはジンの目にはどう写っているのか？

この先の二人の関係にどう響いていくのか。。。。難しいところである

芝段蔵（しばだんぞう）

得意の諜報活動と奇策（トラに女装（藁）させるなど）でまんまと守護代軍を砦の真ん前まで引き寄せる事に成功した段蔵

とりあえず面目は立ったね（藁）

「忍仲間」の中西を使いもう一仕事守護代軍に罠を張っている様子だが。。。。

本庄実乃（ほんじょうじつの。。。またはさねより（藁））

ひたすら苦労人の実乃さん。。。。

引きこもりのトラのためにあの手この手と苦労したが

秋明院様に口伝でどやされたり。。。金津に殴られたりと。。。結果はさんざん。。。

ホント苦労人（藁）

この先も苦労は続きそう

高梨政頼（たかなしまさより）

ちょっぴり登場（藁）これからはもっと出てきます
妻は長尾為景の妹でトラにとっては叔母
とりあえずトラの味方

秋明院（しゅうめいいん）

虎御前の母にしてトラのおばあちゃん
一子相伝がごとく女の強い家系になってしまった「栖吉長尾家」に
現在も君臨する女王（藁）
守護代軍を挟み打つために栖吉城にて蜂起！！
彼女のこの行動で
栃尾ＶＳ春日山。。。影トラＶＳ晴景の図式が越後じゅうに広まっ
てしまったのはいうまでもないが
彼女はその事をよろこんでいる。。。血の気の多い困ったおばあち
ゃんだが歳は実様と同じぐらい。。。

長尾政景（ながおまさかげ）

餌としてふられた守護代の地位に本気で食いついてしまった政景
逸る心を抑えられず
収穫期に大軍を率いて栃尾に出陣
当初は影トラが逆らうことがないと軽く見ていたが砦の合戦で「櫓
落とし」をくらい炎の壁に阻まれ後退を余儀なくされる
根っからの熱血漢らしく

人質をとってまでの「勝利」を嫌悪しているようだが。。。。
はっきり言ってそれでは「戦」の素人
また皮肉な事に目指す守護代像はかつての「戦鬼」為景。。。。だ
から姑息な手段での勝利ではなく
戦での絶対の勝利を願っているが。。。。現在はその心意気が裏目
にでまくっている（藁）

上田長尾家臣団

国分佐渡守（こくぶんさどのかみ）
砦の合戦で後退戦の最後尾を守った豪傑
命令は身体にたたき込むが心情か?息子の彦五郎をバンバン殴る（
藁）
自分の反省の時も自分の頭を殴っていたりもする
別にＳａｄｅでもｍａｓｏｃｈｉｓｔでもない（藁）
かなりの体育会系な老将
樋口兼村（ひぐちかねむら）
後の上杉家家臣団の筆頭家老にもなる「直江兼継（なおえかねつぐ）」のおじいちゃん
にあたる人
老体にすでに矢を受けかなり痛々しい状態ながらも「策士」らしい
策を進言するが。。
室坂（むろさか）
国分配下の足軽大将だっがどうやら砦の戦にて討ち死にしたもよう

柿崎景家（かきざきかげいえ）

守護代軍の戦目付として現在政景側に姿あり
しかし。。。。不敵な態度。。。４熊はどちらの味方なのか?

宇佐見定満（うさみさだみつ）

関東の上杉代からの被官の彼の願いは地に足の着いた職務として「軍師」になる事らしいが。。。願いは簡単にはかなわなそうな予感だ

とりあえずこんな感じで書き込んでみました！！
あ～～よかった途中で消えなくて（爆死）

ではまた後書きでお会いしましょ～～～

その32　狐火　（1）

激震が
越後各所に激震という熱い熱を帯びた言葉が発せられたのは
守護代軍の後退によってもたらされた

「これで我らにつくか。。。春日山につくか。。。みな決断せねば
ならなくなりました」

燻る砦前の炎の終わりを見ながら酒を煽る私に実乃がいつも以上に
険しい表情で床机（しょうぎ）に座ったまま「絶滅」という景色を眺めて酒を飲
む私に告げた

「覚悟はできていたのだろ?」

実乃の報告ではなく
肉の燃える悪臭の風が向かう側に私は目を細めて答えた

実乃の問いは愚問にしか聞こえなかったからだ
今更そんな事を注意する。。。今更。。。苛立ちを憶えた
「どちらにつくか?」
飲み干した杯を手の中で回しながら思った

そんなどっちつかずな態度。。。。
日和見
けして己が立って国をまとめていこうとはしない
「戦」も「治世」も

「誰かが。。。。こうしてくれるのを待っていたのだろう」

実乃に向き酒を注がせながら笑って聞いた
「違うのか？「力」でねじ伏せてくれる者を待っていたのだろ？」
「力で。。。。」

困惑の顔をする実乃

私は自分では笑っているつもりなのだけど。。。
いや
きっと眉間に「嫌悪感」をいっぱいにだし笑っていない目で口元だけを緩ませている
そういうバラバラの壊れた表情になっているのだろう

酒を注ぐ彼に

「どっちが強いから。。。。「今日は」こっちにつこう。。。明日はあっちが強そうだから。。。あっちにつこう。。。そんな日々は終わる」

注がれたばかりの酒を一気に飲む

まだ落ちた櫓あたりに火は踊っている
がれきの間
何に掴み出されたかったのか？焼けただれて物言わぬ形になった「手」たちが空に向かって伸びている
守護代軍から切り離された「亡者」たちの目は哀願で満ち泣き叫んでいた

あっちに戻れないから。。。
こっちに入れてくれてとそうやって泣き叫びながらも。。。

天に帰った

骸はそのなごりのように手だけを高く伸ばす
音を無くした死に体。。。。
すすけて焦げた身体から煮立った目がこぼれ落ち
何も映すことの無くなった窪みはそれでも流れる雲を追っている

耳に聞こえるのは
炎が何かを弾けさせる音。。。だけども炎の下には人という物はなかった
あるのは炙られた悪臭を放つ「かたまり」だけだ

しずかにあちらこちらと目を反らさず眺める

オマエたちは。。。私にそうしてもらいたかった。。。。

この悪政続く大地より天に返して欲しかった。。。。

だから私はその願いに。。。。こたえた

「政景。。「守護代軍」はどうなっている?」
実乃の後ろに戻ってきた段蔵の影に私は話しかけた

「信濃川を渡りました。。。」
「渡って。。。どうなった?」

「戦」を知っている者なら川を背負ったまま陣を立てたりはしない
だからといって本拠地である「坂戸城」に戻る道には「栖吉衆」が
陣を構えている
栃尾と栖吉の挟み撃ちに会わぬようにするには。。。川を渡るしか
ない

「残勢力三千。。。。中西の仕事が功を奏しました」

「それは良かった」

守護代軍に兵卒として入り込んでいた中西はずっと「噂」を流して
いた
「長尾影トラは向かってくる者に容赦を示さぬ武人。。。。」
だけど
「歯向かわなければ。。。何もおこらない」と

そしてヤツらは目の前で「惨状」を見た
渡河する前は四千強はいた部隊

櫓の崩落で少なくとも二百が死んでいる
その後の後退戦でさらに百

だから本来なら四千五百は残存兵力としていなくてはならない部隊
なのだが
「噂」であった私の「戦」を目の当たりにした農民や「集兵」の者
達は

「死ぬ仕事はしたくない」

夜の闇と川の音を使って。。。。逃げたのだ

「みごと作戦どおりになりました」
実乃は地図を台の上に開きながら
きっとつまらなそうにしている私に

「どういたしますか。。。このまま逃がしますか?」

鼻で笑って段蔵に聞いた

「後詰めはどうなっている」
陣幕の向こう側
臨戦態勢で控えている段蔵

「中条殿。。準備は整っておるとの事で。。抜かりはありません」
「良し」

立ち上がった
「今夜信濃川を渡る。。。よいな!!」
手をふり指示を他瀬下わたしに実乃は驚いたように食いついた

「しかし。。。未だ守護代軍の方が数にて優勢でございます!危険では?」
「危険など無い」
平然とした顔で

私は濁らぬ言葉で言う
「焼き付いた護摩の火。。。。今更逆らえる者などおらぬだろうて」
「中郡（なかごおり）の各将。。呼応を示す者もおります」
「戦いたいならば黙ってついてこればよい！」

今更
手順を踏んで私と共に戦いたいなどと言う者は。。。あの火の中で
どっちつかづの己を悔やんで天に昇ったものたちと何がちがう。。
「越後」の為に戦う心があるのなら「無言」で我に従えるハズだ

「春日山の状況もわかりません」
「春日山には未だ今回の「戦」の事。。。報告されておりません」
慎重な思案を巡らす実乃の声に段蔵が答えた
「戦目付「柿崎景家」様の報告は直江様にこそ届きますが。。。守
護代様にまでは届きません」

「。。。しかし」

不安は。。誰にだってある
実乃は慎重に事を運びたいと思っているらしい

「実乃。。人は愚かだ。。あれほどの「火」を目の当たりにし己の
浅はかさを知ったしてもその「火」が消えてしまったならば。。。
また同じ愚かさに染まる。。。昨日の今日。。未だ拭えぬ護摩の火
を心に焼き付けた今こそが戦う時なのだ」

いつの間にか
陣幕に集まっていた者たちを前に

「敵に時を与えたりはしない！！今宵川を渡り戦うのみ！！」

戻らぬ戦。。。それだけの事を伝えると私は夕暮れに包まれ始める
砦の戦場を見回した
残った火がまだ燻っている
まだだ
まだ

私の心に燻ったものを払拭するためにも戦わねばならん

指示の後各所に者どもが散っていた
私の後ろには近習とジンが残っていた

「怖くは。。。ないのか？」
控える者たちと同じく低く身を伏したままの状態でジンが私に問うた

「怖い？。。。「戦」がか？」
「戦も。。。目の前で農民を焼き殺す事も。。「畏れ」なくして出来る事なのか？」

「恐れなどない。。。これが私の「戦」だ」

私は振り返らなかった
ジンがどんな顔をしていたかを。。。。知りたくなかった

「言ったことではないわぁ！！」

守護代軍が栃尾の「奇策」にはまり後退したと言う知らせはすぐに
「黒川清実（くろかわきよざね）」の元に届いていた
晴景の父。。。為景の代から守護代家を支えた小男は飯台を蹴り倒
すと「火急」の用向きをしらせた「間者」に聞いた

「負けたのか？」
歯に衣着せぬ率直な言葉
中年の頃を越えすこしばかり恰幅もよくなった黒川は爪を噛みなが
ら上座から睨んでいる

「いえ。。。一時後退したと。。。信濃川を挟みにらみ合いの状態
になる事でありましょう」

物見から「戦」の報（報告）を聞き冷静に吟味した返事だったが黒
川の逸る気持ちを抑える事はできなかった

「だから。。。。負けたんだな！緒戦に？そう聞いているんだ！」
白黒がはっきりしていない「戦」はない
黒川は立ち上がると間者の前に進んだ
当主の接近に
急いで伏せた彼の耳に小声ながらすごんだ声は

「とりあえず。。。退くなんて「戦」はないんだ。。政景は負けた。

。。。そういう事だな？」

己の理解を伝えると
片手に持っていた徳利をそのままあおった

「影トラぁ。。。。」

酒の息を吐き出しながら屋敷の襖を蹴倒した
驚く近習に間者の顔を振り返って確信した黒川は大声で

急に笑った

「カカカカカ。。。たわけ者の政景！！だがそれでよい！！」

そのまま庭先に勢いよく徳利を投げると続けた
黒川は元より晴景寄りの武将だったが
「守護代」の地位を政景にとられる事をよしとはしていなかった
だからこその守護代軍の敗北
ココで大きく功績をあげればおそらく政景と同等の地位は確保できる上に領土の拡大も望める

政景が勝てなかったのは天恵だったのだ

「戦だ！！戦だ！！支度いたせ！！これより守護代軍を助け「栃尾」を！！影トラを挟み打つ！！」

明朝をまたず二つの軍団は慌ただしく動いた
だがそれは二つに留まった事ではなかった。。。情報を手に入れた

「全越後の者」たちにとってついに白黒をはっきりと決めるべく「戦」が始まったのだ

その32　狐火　（2）

黒川清実（くろかわきよざね）が己の欲のために揚北（あがきた）にて兵を挙げる準備に入った頃

守護代軍は信濃川を渡河して以降の「後退」を続けていた
信濃川の河岸には千単位もの軍勢を引き留める平地が無く陣地をとれなかった事が一番の問題点だった

何度もの氾濫を起こしていて川幅が一定ではない
つまりまともな地面が無いという事で広範囲にわたり沼のような「湿地帯」になっている
結果
同じ渡河地を何千もの兵が渡る事ができず
向かう川岸にたどり着くことにさえ難渋し手間どったほどだった

渡河から三日。。前進する事はなくズルズルと後退ばかりを強いられていた政景の苛立ちは絶頂を通り越していたが
陣が張れないのではどうにもならんと言う思いと。。。解消されぬ謎で帳尻を合わせている様子だった

「狐火（きつねび）が来ると農兵たちが騒いでおります」

陣内の様子を見て回ってきた彦五郎が政景に告げた

「狐火か」
「はい。。。信濃川の向こう岸。。我らが渡河した翌日の夜からずっと見える「火」を恐れています」

政景は「何か」わからなかったようで頬杖をついたままかえした
「それで何かあったのか？」
彦五郎は少し口ごもったがこの後に及んで「言い訳」のような報告をしても仕方なしと思い切って言った

「脱走を止めるために少し斬りました。。。」
「やむおえんな」

苦渋の決断をした彦五郎に即返事をしたのは「樋口」だった
若者の決断が「誤り」でない事を認めてやらねばならぬと
となりの床机（しょうぎ）に座していた国分佐渡守（こくぶんさどのかみ）は立ち上がり
政景がまた苛立ちを吐き出す前に「策」を語り出した

「脱走はこれで止まるでしょう。。しかし我らは「米山」の手前までは後退せねばなりません枇杷島勢（びわじませい）が支度を終え合力するための陣地を得るのに時間がかかりますから。。。。」

政景はただ地図だけを睨んでいた
頭では解っている
声を荒げて状況が変わるわけでもない
自分たちの行動が時節を軽んじた早とちりであったことが大きな痛手になっていた

「同じ理由で与板（よいた）の直江（なおえ）が動かないのは幸いです」

一喜一憂

収穫期のこの時期
農民の兵たちは
田畑を残したまま「死」に繋がる仕事はしたくない
そうでなくても今年はそこそこの収穫が見込める
男手はあればあるほど助かるが無ければ畑をダメにしてしまいかねない

だから脱走する

そしてそれはどこの所領でも一緒だ
川を渡った日の昼前には早馬を枇杷島に飛ばしてはいるが。。。。
結局そういう事なのだ
「収穫」が一番の事業で。。今。。「戦」は大切ではないのだ
足並みを揃えて「戦」に望みたかったら枇杷島付近まで後退せざるえない

同じ理由で「与板衆（よいたしゅう）」は動かない。。影トラを支持していたと噂の
高かった「直江」が春日山に詰めている事もあるが「挟み打たれる」という脅威は今はない
ただ
春日山に走るであろう伝令にだけ注意を払ってはいた

一方政景たちが
この状況下でできる事は速やかに枇杷島の「宇佐見」の要求に従って地味な後退戦をする事

。。。。。
しかし

「坂戸からの手は？」

政景はただ状況を確かめるように続けて聞いた

「坂戸からの手は。。。無理にございましょう」

坂戸

自らの所領からの救援は。。。今更あり得ない事になっていた

早い時期に集兵して連れてきた農兵は「千」。。。半分が脱走してしまっていた

「収穫」

やむおえぬ事なのだが

逃げ帰った者たちを再びココに集める事は難しかった

もちろん

なんらかの見せしめ的処罰は免れないが

実質坂戸の収穫を送らせるわけにもいかないし

政景の父が息を吐いて叱りつけ「戦場」に戻そうとしても反感を呼ぶのは目に見えていた

顔をあげ大きく息をついてもう一つ聞いた

「栃尾はどうしている」

「わかりません」

座りなおした政景の疑問に彦五郎が即答した

「渡河から向こう「軍団」が動いている。。。。という感じはないのですが。。。」

「なのに狐火。。。」

政景は己の座った位置から湿地帯の向こう今は遠くなった信濃川の

河岸の方角に目を向けた

夜になると「火」が揺れる
渡河した最初の日の夜にもそれは現れていた
警戒を怠らず「栃尾」の出方をうかがっていた監視の使い番は「追手」ではと青い顔で報告をしたが
火はただ悠然と川にそって何百も揺れるばかりで。。。。迫手はこなかった

翌朝
「枇杷島」から歩調を合わせるためにも「後退」せよという指示が来たときには火は姿を消していた
静かな川の音が聞こえるだけだったが。。。
十分に兵は浮き足立ってしまっていた
その日は朝から「策」のために「後退戦」の陣形をとりながら川から五里（約十八キロ）を退いた
三千を要する軍団としてはかなりの早足であった

が。。。。

その夜にも新たに張られた陣営の前に「火」は揺れた
前日と変わらぬぐらいの位置関係を保ち「火」の列は無言で揺れ朝には消えていった
物見をだそうにも「恐れ」て誰も出ようとしない
それで彦五郎と数名を佐渡守が使わしたが二里（約七キロ）は向こうに光る「火」は彦五郎が近づいた場所にはまったくなかった

それが脱走に拍車をかけていた

いつからそんな「噂」があったのかわからなかったが
守護代軍内部で影トラの「容赦」のない「鬼」という「噂」が大きく聞かれるようになっていた

何かに追われる焦りと「不気味」な火
三日間。。夜に続いた「火」を農兵たちはみな「狐火」と恐れだしていた

離れない「火」
何かが確実に近づいているだが姿は未だ見えない
現在十二里後退。。。枇杷島の領内には入っている「宇佐見」の提案に従いさらに小川をわたり「米山」の前に陣を敷くそこまではなんとしてもこの三千の部隊を保たせなければらないが肝心な「栃尾」が向かってきているという報（報告）は入っていなかった

「狐火だとするならばアレは我らをココまで栃尾の追撃から守ってきていたと思えばよろしゅうございます」

物言わず
不安に頭を悩ましている政景に物事を良い方にと老将の樋口は言った

「迫られているのではないのか？」

だが
「火」が追って来ていると言うことに政景の心の動揺は隠せていな

かった
安心してしまいたくないという思いが反対の意見を言わせる
見てしまった
あの「苛烈」な戦を
護摩の火によって先発した部隊を失った時の事を
百の兵達の「阿鼻叫喚」
崩れた櫓の下で揺れた助けを求める手

「夢」に現れるほどの「狂気」

廻る「悪夢」を抑えるように
額に手をあててもう一度政景は聞いた

「火は。。。栃尾の「策」ではないのか？」

主君の濁った表情に彦五郎は何もかえせなくなったが
父の佐渡守は代わりに

「だとしても次は完全に待ちかまえての「戦」です。。。あれ以上
近寄ってこない「火」を恐れるのは無意味です」

と
強く答えた

「栃尾は。。。追ってくるのか？」
大事な質問
陣幕に揃った一同は誰も答えられなかった

後退はした
追ってくるのは「火」だけ
見えない敵

「このまま。。下がったまま栃尾がこなかったらどうする?。。今一度栃尾のあの砦を攻めに戻れるのか?」

冬の近づく中
冷たい風がながれる陣で政景はびっしりと汗をかいていた
「負けられない」という思いだけが意地になって空回りを続けているもしも
このまま栃尾が攻めてはこない。。。。などという事になれば
緒戦に怖じ気づいて十里以上も逃げた事になってしまう
焦り

「必ず来ます!!」

政景の頭の中に廻っていた悪夢を割って国分が地図のある台を両手でかち割らんばかりに叩いた
戦い続けまだ真新しい生傷を増やしている猛将は睨む目で続けた

「影トラは「待つ」などという事のない将です。。。砦の戦でも「待っていた」のではなく「待ちかまえて」いました。。「戦」をする気でいるのです。。。心を押されてはなりません!!弱気になってはなりません!!」

「待つ事も「戦」耐える心も「戦」にございまするぞ。。。」

国分の怒号に樋口も「経験」を告げた

「わかっておる!!」

老人にどやされ正気を取り戻した政景は悔しそうに答えた

そのまま顔を空に向けた

「雨。。。。。」

夕暮れの近づいた陣所に少ない雨が降り始めていた

国分は息をつき

「今日は「火」が出る事はありますまい」

政景が濡れぬように陣幕の布を開いた彦五郎も空を見渡しながら言った

「雨になれば。。。火も休む事でしょう」

その夜は「冬」を近づける激しい「雨」が続いたが

「火」は現れなかった

翌朝少し勢いを弱めた雨の中「守護代軍」石川を渡った

「米山」を背に広がる台地に陣を構えた

その32　狐火　（3）

信濃川河岸を揺れた「火」のごとく
「争乱」の「火」は揚北に流れるように伝播し姿を現し始めていた

守護代軍後退の報（報告）が届いてから三日後「黒川清実（くろかわきよざね）」は突如
兵を挙げた
欲の皮も伸びきるほどに恰幅（かっぷく）のよくなった相撲取りのような体格で
黒川は声高らかに宣言した

「我らは今より守護代様のためその「意（意志）」に逆らう不遜な
「妹」影トラをが住まう栃尾を成敗する！！」

総勢千
栃尾という山城と相対するには心許ないが
「謀反鎮圧」を大きく掲げれば
これを機に所領を増やしたいと願う他の者も従える事もできるし
すでに複数の国人衆との連携もとれていた

「脅し」という征伐
頭をはっての戦を指揮するには十分すぎる数だったが黒川はさらに
「欲」という収穫を大きく実らせたいと願っていた

己のだぶついた顎を揉みながら目指す「栃尾」の空を見た
暗雲。。。。

「殿。。。長年気苦労を振り払う好機。。。やってまいりましたのお」

若くに代替わりをした黒川にとって守り役ともいえた古参の家臣が
後ろを従いながら
晴れる事のすくなかった主君の仏頂面が緩んでいる事で労をねぎらった

流れる雲。。それが運ぶ雨が長年の心労で干上がった心を潤したのか
小男黒川は機嫌良く大きく答えた

「うまくいけば阿賀野川からこちらにすむ豪族達の一つ頭を抜け上杉の譜代家臣にもなれましょう」
痩せた白髪の老臣も嬉々として告げた
黒川は満面の笑みで周りに頷く姿を見せた
従う家臣たちに笑顔をふりまき
馬までの道を共をする「稚児衣装」の愛姓（あいしょう）の手をさすりながら楽しげに語った

「そうよなぁ。。これでわしが揚北の名士としてなるわ」

長かった道のり
黒川は
守護代である晴景とは揚北の中では一番覚えがいいのは確実だった
それには自信があっただからこそ晴景の側にたって戦う事を決めた

もともと
上杉守護から拝領した土地を律儀に守ってきたのはこの地においてはもはや黒川ぐらいしかいなかった
それでも揚北の者たちと手をとりあってなかったわけでもない
人一倍の苦労の上に
微妙な「橋」の上を行き来していた

進む陣の中
幼い顔の残る小姓に馬を引かせながら「苦労話」を聞かせた

「今日。。。今までのわしの苦労が報われるやもじゃ。。。共に喜んでおくれ」

越後における守護「上杉」の力は長尾の先代「戦鬼為景（いくさおにためかげ）」の時には
完全に骨抜きの状態にされてしまって
名ばかりの最上位各
あらゆる権利を「長尾」は独占した

その中に「領土」の問題もあり
それが未だに「越後」の混乱の一端となって諍いの元となり治世に
暗雲を広げていた

長尾は自分たちの譜代になる家臣に守護の許可無く「領地」を与えた
そうする事で「上杉至上」の国人衆を抑えてきたのだが。。。。

黒川に言わすならそれこそが「不遜」の家臣でった

「危ない橋など渡れるか。。。。」

行軍する軍団の中今までの苦労の道程を歯がみして思い返した
為景の時にはなんとか「貢ぎ物」で難を凌いだ事
そのまま「強い長尾」が続くのなら自分が生きているうちはしかた
なくとも従わねばならなかったが。。。

息子の晴景は守護代の地位に就いた途端「何故か」

「上杉守護」をもちろん名前だけではあったが「監禁」から解き
再び「越後」の頂点に据えたのだ

やはり「将軍」に任官された守護を頭に立てておかねばいつ何時「
謀反人」に仕立て上げられてしまうかわからない。。。
だから晴景の弱さ自分に当たる風当たりへの緩衝として守護を復活
させたと思っていた

それでも微妙だった「力」の綱渡り
だが
越後で上杉の力が弱まったとはいえ結局「関東管領上杉」が今も健
在である事を考えれば
長尾の「分裂」は一気に滅亡に。。。いや「衰退」につながせる事
は必至と見えた

関東に巨大な「力」を未だもっている「管領上杉」に従うのが上策
であり
ともすれば越後における「管領家」の右腕にまで上り詰める事ので
きる好機は廻ってきたのである
黒川の顔はすっかりゆるみきっていた

「殿!!あれを!!」

稚児の細い手を馬のうえから撫でながら「取らぬ狸の皮算用」に浮

かれていた黒川の耳に怒声に近い声が入った
「なんじゃ！！」

少なからず害された気分のまま目の前に走った使い番に
「慌てて事を言うでない。。。気持ちがそがれるわい」
と
まだ見ぬ勝利に酔ったように煙たがったが使い番は困惑の顔のまま
「戦」の中にいるように答えた

「前方！街道沿いに軍団が陣を構えております！！」
「なんじゃと！！」

まだ
自領を出るところまでも進んでいない
年寄りの男たちは使い番を問いつめた

「旗印は？」

「鳥坂衆中条殿のです！」

「中条。。。。。」
さすがに黒川もすぐに顔色が変わった
稚児を自分の馬の後ろに下げると自らも前衛に進み出た
目を細め確かめる
少ない風に揺れる旗は。。。。間違う事なく「中条」のもの

「とっつぁん！！そんな大人数でどこにおでかけだい？」

戸惑いの目。。向かう陣営を睨んでいた黒川にいかにも飄々とした
軽い声がかかった
それはすでに「戦」に赴く装束をしっかりと纏った「中条藤資(なかじょうふじすけ)の姿
だった

茶色の威(おどし)で仕立てられて大鎧
兜こそかぶっていなかったが中条の後ろには街道にそって陣を張っ
た鳥坂の衆もがっちりと「戦」の備えにかたまっている事に黒川は
素っ頓狂な声を上げた

「貴様！！何をしているか！」

中条は黒川の慌てぶりを楽しみながら馬を前に進ませながら顔を。。
。
優男らしく方眉を上げながらせせら笑ったように答えた

「何って。。。そんな物々しいカッコで我が領内に近づかれたので
は。。。ねぇ。。」

脂汗を吹き出した黒川
「貴様。。。。わしと「事」を構えるつもりか？」
悠々と自分に近づく中条
もとより黒川とは所領争いで何度も小競り合いをした者同士ではあ
ったが。。。
街道を通るのに争った事はない

「場合によっちゃ構えんにゃならんでしょうなぁ」

中条は悠然としていた
ただ一騎（もちろん後ろに控えの近習を従えてはいるが）で黒川と会話できるところまで進んできていた
黒川も自分の周りのものに手出しはするなと手で合図をした

「とっつぁん。。。。ココから先は通さんぜ」

とっつぁんと呼ばれた黒川は怒った
「今！！この越後にとって大事が怒っている事がわからんのか！！守護代様をお助けするのが我らの勤めであろう！！」
「守護代様からぁ何も要請はなかったが？」
相手の苛立ちを楽しむ中条は揚げ足をとる
顎髭を撫でながら

「とっつぁん。。。。。越後の大事なんてぇのはとっくの昔に始まってたんだよ」
中条の軽い態度の中に真実が見える

「だからだ。。。その大事を治めるために。。」
「その大事を治めるために「根」のはった尻を持ち上げてきたのか？」

ただ髪を引っ詰めただけの中条
馬を乗り潰しそうな目方（体重）の黒川に笑って言った

「守護代軍は「明日」負ける」

人のざわめきと同じく風が走る
「たっ。。。たわけた事を。。。。」
真顔なのか
いつものにやけた顔なのかどちらにしても中条の顔に「嘘」はなかった
真正面黒川の前に馬を進めてもう一度

「負けるんだよ。。。。守護代軍は。。だから今更ケツを揚げたって意味がねぇ」

悠々とした中条の言葉に
黒川は唾を吐いて返した
「たわけた事を!!たしかに緒戦では負けたらしいが数では未だ守護代軍が上回っておるわ!!この上信濃川を渡って栃尾が戦などに出られるわけがない!!。。。」
勢いそこまでを告げたが
終いになって声を濁らせた

「明日負ける?。。。。どうゆう意味だ」

「とっつぁん。。。さすがに吠えただけじゃおわらなかったか。。。いいところに気がついたな」

黒川とて今まで十分に「戦」とい日常を過ごしてきた男
中条が「何もなく」そんな大それた発言をするなどとは思えなかったのだ
。。。。。

黒川が頭を使っている姿を横目に中条は告げた

「守護代軍は。。。今「米山」の前に陣を構えている。。と言うことは？」

目を見張る。。。。

「栃尾は。。。。空か。。。。」

黒川は愕然とした表情で

「ああっもちろん後詰めで我が家臣と栃尾の城の首尾隊は入ってるがね」

指をあげ風を読む仕草で中条は笑った

「とっつぁん。。。。あんたは何もかもに遅すぎた。。。。」

「中条！！貴様にとっつぁんなどと呼ばれる筋合いはない！！だいたい貴様！！わしとそう変わらぬ歳であろうに！！」

馬から落ちそうな黒川を家臣達は支えてなだめた

「殿。。。そこは問題ではありません」

中条はひらりと馬ごと黒川に背を向けた

「何もかもに遅すぎたんだよ我らは。。。。長くこの地から春日山を脅かしどっちつかずな態度で「運気」を見定めていたなんて言いわけだ。。。。立ち上がった炎はもう消すことの出来ない「大火」と変わったんだよ。。。あきらめな。。。とっつぁん」

歯ぎしり

黒川は自分で自分の歯をへし折ってしまいそうなほどに歯がみして

「だとして。。。貴様、。。。。あの「小娘」に従うつもりなのか？。。。正気とは思えん」

眼前に己の陣を見ながら中条は自分の胸に手を当ててみた
ほのかな暖かさが伝わる
胸の中に
懐紙の中にいるのは。。。。

軽く息を吹いた

「オレは「女」には逆らわないと決めているんでね。。。何の問題でもないよ」

さらりと告げた

この日
長尾政景の本拠地である上田に対し「高梨政頼（たかなしまさより）」が兵を挙げた
守護代軍に大量の人手を取られてしまっていた政景の父「長尾房長（ながおふさなが）」には仰天の出来事だった
またその布告に対して「布告さえも」争うように「栖吉長尾（すよしながお）」から
秋明院（しゅうめいいん）自らが立ち同じく上田に兵を挙げた

栃尾で掲げられた護摩の火は確実に伝播し中郡（なかごおり）から火は越後の各地に走ったのだ

その３２　狐火　（４）

後退戦から四日目の昼「兵糧」の欠乏に困った守護代軍に助け船を出したのは戦目付の「柿崎景家（かきざきかげいえ）」だった

「米山の峠を越えましたら我が領内です。。。ココまで近くに来たのならば兵糧を出す事が道義にございましょう」

今まで憮然と守護代軍の戦いを見守ってきた柿崎に政景自信が口にしそうだった「兵糧」の供出が得られた事に樋口もかなり安心した様子だった
例の「噂」に続く「雨」不可解だった「火」

この上「兵糧」さえも事欠く自体になればいくら「守護代」の名をもった軍隊と言えども兵を留める事はできなかった
飯も出ないのに「脱走」に厳罰だなんて農兵には耐え難い事

「柿崎殿の心遣い。。。。政景生涯忘れぬ事であろう」
「いいえ。。。わしも未だ出番なくば。。手持ちぶさた。。しかしながらそろそろ「本当の戦」に備えたいとも思いますし。。。お気になさらず」

荒ぶる武人として知られる柿崎だったが
今回の戦ではまだ槍を手に構えた事さえなかった
砦の合戦の時は後衛に置いたからだ
柿崎が目付として従軍しているのに「何の」功績も得られなかった。。。。という事になれば当然政景への「評価」は低くならざるえない

「兵糧」の提供によって柿崎に多少の負い目をもつ事になったとしても軍団を維持しなくてはならないし
この後の「戦」でも十分な「仕事場」を作ってやる事が出来た方が己の評価を正すよい機会を得られるというもの

陣幕の中で軍議の最後に「兵糧」の提出を進言した柿崎は颯爽と立ち上がって
「ではまだ雨のあるうちに用意させます」

わずかに苦笑いを見せると足早に自分の城に近習を従えて帰っていった

政景にとっての吉報はこの日に限って続いていた
兵糧の心配がなくなったのはもとより
枇杷島の「宇佐見（うさみ）」からの「策」がもたらされていた

「さすがに宇佐見殿。。。。ただ時を送らせただけではなくしっかりと「策」まで講じてくるとは」
樋口は手紙を改めながら一息ついた

「収穫での出遅れを「挟み撃ち」に活かすとは。。。なかなかの「策士」だ」

後退戦以来沈んだ表情の多かった政景にも「勝利」という現実に己を近づける策がもたらされた事で声に弾みが戻っていた

「それにしても栃尾勢。。。信濃川を渡って来ていたとは。。。」

彦五郎は感心というよりは少し驚いたように言った
宇佐見の手紙には前日栃尾が軍団を持って信濃川を渡河した事が書かれていた
そのまま進軍してくれれば
明後日には本陣である「米山」の守護代軍とかち合わせる事になるまた
軍勢には「栖吉」の隊が加わり数を増やし
推定「千五百」の部隊になっている事が確認されていた

「強気な。。。。」

人数に関しては国分は今ひとつ読みが甘いと思っていたようで着続けの甲冑から襟元をさすりつつ
「数はもう少し多く見た方がよろしゅうございます」

と
慎重論を崩さなかった
だが
政景は「運」がまだ己に向かっていると信じて強く言った

「我らの数は三千。。。ココに来るまでに「試練」を越えてきた兵卒だ！」
拳を台に叩きつけた
「次は負けない！！！絶対に負けん！！！」

大きく気を吐いた

陣幕から向こうに見える空模様は相変わらずの小雨

時よりは
晴れているのに雨は続いていた
奇妙な空の顔にやはり農兵たちは落ち着かない様子である事は彦五郎の報告した
政景はすぐに「兵糧」の調達に滞りがない事を陣内に告げた
決戦は迫っている

少しでも自軍の士気を高めるために

その頃
枇杷島の「宇佐見」は思わぬ窮地に立たされていた
本来なら今時分「守護代軍」との合力のために出陣していなくてはならなかったのだが
放っていた「間者」の出入りが二日前から止まった。。。。
と
同時にまさかの「使者」が城を訪れ身動きのとれぬ状況になっていた

「この手は。。。。宇佐見殿のものではと？「守護代様」が気にしておられます」

質実剛健を身体に表したような男は「与板（よいた）」からやって来ていた
目の前に置かれた紙。。。。

「長尾影トラは守護代の地位を狙って候」

己の流した「風評」ではあったが
自分で書いた物を流すなどという間抜けた事をした覚えはなかった。
。が
目の前に置かれた文書は己の「手」によく似ていた

「枇杷島近辺からが出所と」
「迷惑な！言いがかりにござろう」

太い眉をピクリとも動かさない「直江実綱（なおえさねつな）の使いは
同じく表情を変えず微動だにせず細いながらも刃物のような目線で
脅しの向こうに「策謀」を見ようとしている宇佐見に告げた

「宇佐見殿。。。なれば今時分何故に「戦」の支度をしておられますか？」

使者の来た時に枇杷島城は総構えにいたるまで「戦」の準備を整えた部隊を揃えてしまっていた
今にも出陣しようという軍団の「音」は屋敷の中まで十分に聞こえていた

「守護代様の軍団が」
宇佐見は隠すことのない言い分を口にしようとしたが
見かけと違い
大男の使者は素早く切り返した

「まさか影トラ殿に合力し守護代軍に「戦」を仕掛けるのでは。。。

ありますまいな？」

それは宇佐見の予想していた言葉とは違ったが
だが「謀（はかりごと）」の手中に自分が落ちてしまった事を同時に知る事になった
宇佐見は細い身体を堅くした

「宇佐見殿は。。。。本庄殿（本庄実乃）と「よしみ」をお持ちで。。。わざわざ栃尾の城まで影トラ殿に会いに行かれたと聞き及んでおりますが。。。。」

苦しい息が漏れる
一言一言が「策謀」の重い計り
宇佐見は扇を少しだけ開いた心の平穏を数え息を整えると変わらぬ低い口調で返事した

「それは異な事。。。直江殿は二年近くも影トラ殿のために栃尾に同行しておられたではありませんか？。。これこそ強き「よしみ」を持っておられる方にそのように「疑われる」のは心外ございまするな」

震えを見せぬ意地の問答
「策士」を希望とする宇佐見の心は乱れていた
己の張った「策」。。。。越後に乱を呼び
自分の希望である「軍師」としての職務に有利につける側を探している事を

「逆手に取られて」いた

開いた扇を閉じ使者の返事を待った

「我が主は「守護代様」の命（命令）により影トラ様を「監視」しておりました。。。また我が主は今も春日山に詰めており「守護代様」の御為に働いております。。。そのように言われる事のほうが「遺憾」にございますな」

使者の返答に宇佐見は己の「敗北」を。。。。認めざる得なくなった
顔こそいつものように冷たくすましてはいたが
心にはあの日の敗北が蘇っていた
あのとき。。。敗北の戦の時。。。忠誠を誓った為景に「余分なことは考えるな」と言われた時に。。。。
為景の後ろに控えていた若造。。。。「直江実綱」の謀が。。。。
己を上回った事に怒りに燃えた

だが
これ以上の問答は「美しく」なかった言葉を止めた宇佐見は手元に持った扇を腹に戻すと使者の「とどめ」を待った

それは
思った通りの言葉だった

「城内に準備された「軍団」を動かすことまかりなりません。。。
それが「疑い」を晴らす唯一の作法と思いますが。。。いかがでございましょうか？」

「まことその通り。。。早計に逸る事なくココに留まりましょう」

宇佐見は屈辱に身を伏せた
枇杷島の部隊は守護代軍のために動くことは出来なくなった
そし

この非常事態を政景が。。。。「守護代軍」が知る事はついになかった

「宇佐見は来ないのか」

湿った地を馬に乗った私は段蔵に聞いた
「来ません。。。。正確には身動きがとれません」
雨で目の前を曇らせている道
私は顔あげてその粒を浴びながら

「残念だな。。。この大戦に来られぬとは。。。」

色々な思い。。。。
「策に溺れた策士」。。。情けを覚える事はなかった
たくさんの雲を早足で流す空
時は近づいていた夕方には雨はさらに降り我らの足音を消す
夜陰に紛れただ進めば朝を迎える頃には。。。。。あの政景と相まみえる。。。。

栃尾の全軍の前
私は大きく手を広げて言った

「見ろ！天地は滞りなく己の成すべき事を行っている。。。その行動に迷いも「謀」もない。。我らもまたそのように。。「あるように」戦おうではないか。。。」

空は夕闇を呼ぶ前

これから来る「戦」を予言するかのように
赤く燃え始めていた

その32　狐火　（5）

守護代軍は警戒の態勢をとりながらも「宇佐見」からの情報
「挟み撃ち」にする作戦にのっとって
早くても明後日まではココにはこない「栃尾軍」を待ちかまえるため今まではなかったが「酒」を振る舞っていた

決戦の日取りが決まってしまえば不安はだいぶんと和らぐ

国分も片手に酒の壺を持ちながら
前衛の生き残りたちを励まして回った
国分が関東から連れてきていた自軍兵はもはや二十人にも満たない数だった

「がんばってくれ」

関東時代からの生き残った家臣達の顔にはたくさんの傷があった
新しいもの
古い物

みなが共に生きてくれるための勲章のようだった
苦楽を共にした兵たちに返せる物の少ない国分はせめて酒だけでもとついで回った
そんな
一人一人に酒を振る舞っている国分の陣に「彦五郎」が戻ってきた

「彦五郎殿！」
最初にそれに気がついたのは「室坂（むろさか）」の息子だった

砦の「戦」で父を亡くしたばかりの子「一郎」は室坂の実の子ではなかったがそんな血のつながりばかりでココまでやってこれたわけではなかった
関東の激しい戦いの中
室坂は元より
国分の家族だって無事にココまでこれたものは実の一子「彦五郎」だけだった。。。
妻も他の親族も離散した状態で「越後」まで流れてきていた

家臣の子供
その手代
「戦」の日々をくぐり抜け共にココまでやってきた者たち
そういう者が大きな意味で「一族」だった

一郎は亡くした父の鉢巻きを頭に巻いた姿で彦五郎の元に嬉しそうに走っていった

「先にやっておりました！！どうぞ中に！」
そう言うと彦五郎の持っていた槍を受け取った
一郎にとって彦五郎は「兄」のような存在
「お疲れにございます。。父上」
「若殿の元におらんで良いのか？」

少しこまったように彦五郎は額を&#２５６２０；きながら父に答えた
「他の近習達が集まっております故。。。こちらにお邪魔しました」
「そうか。。。」

「越後」に流れ仕官した「上田長尾家」は国分にはそれなりに良い待遇を与えてくれていた

当主「長尾房長（ながおふさなが）」（政景のお父上）は慎重な「戦」に置いて堪え忍ぶ「心」こそが大切であると国分を優遇していた
その具体的な優遇の一つに「彦五郎」を近習として政景の元に付けた事があった

房長に言わすのならば「越後」において守護代晴景と同じぐらいの武威を持つ家として「上田長尾宗家」はあるのだが
その「虎の威」に乗り「戦」の中身を知らぬ口さがない若造ばかりの中
「彦五郎」は宝のような存在だという

たしかに
争乱うち続いた「越後」
しかし
為景死去以降。。。晴景が治世をついでからは「大きな戦」はなかった
小競り合いの嫌がらせを「戦」と勘違いして「上田家」の威を借り若造どもは増長していた

まるで「戦」を囲碁の棋譜のように語る若造たちの中「彦五郎」は違った

本当の「死」と隣り合わせの現場を走り抜けてきた彦五郎に房長が目をとめたのはもっともな事と言えた

「殿に。。。小突かれたか」

たき火を前に自分の隣に座った息子に国分は杯を渡しながら聞いた

「いいえ。。。。せめて今日は。。心も弾ませていてほしく思い」
渡された杯の濁った酒に雨露を受けながら息子は疲れた声で返事した

国分は彦五郎がココに来た本当の理由がわかっていた
流れ落ちた国分の待遇の上に政景の近習として取り立てられた事

それは「大抜擢」だった

だけど
もともとの政景の近習。。。「勝六（しょうろく）」や「与一郎（よいちろう）」達にとっては面白い話しではなかった
何かにつけて「真面目」な彦五郎はそれまで仲間を引き連れては放蕩をしていた政景を諫めて回った
時にぶつかり。。。時には共にへこたれ

それまでち「次期守護代になる家，上田の嫡男」と名前の勢いで育った政景には新鮮な「仲間」だった
自分に本気で物事をぶつけてくる彦五郎に一目置くようになっていった

しかしそれは昔からの「仲間」にはまったくもって面白い事ではなかった
近習として政景の屋敷に上がった日から彦五郎は「今に至るまで」常に「嫌がらせ」を受けていた

「殿の。。。様子はどうであったか？」
空にした杯を返しながら彦五郎は答えた

「幾分和らいだ様子です。。。ココまでが大変でしたから」
息子の顔にも多くの傷があった
国分はその頬を触った

「ああっ。。。明後日はもっと大変だ。。だがな主君を守っての傷は。。。誉れぞ。。。」
父の優しい手に
「わかっております」
息子は即答した

「また若殿様にハジかれちゃったんすか?」
親子の固まった会話の中に室坂の息子「一郎」が割って入ってきた
すでにほろ酔いの状態で
ひさしぶりのヒマ。。。兄と慕う彦五郎と話しがしたくてしかたない

「違うよ」
足下をふらつかせている一郎を座らせて彦五郎は腰に着けていた壺をだした

「殿からです「国分隊」。。。ごくろうであった。。。労ってくれと渡されました」

それは本陣に用意されていた「柳」（酒）だった
「殿からか?」
「はい。。。わしに。。気を遣ってくださったのでありましょう」

本陣を占める近習たちの間では居心地を悪くしている彦五郎の事を政景も気がついていた
お互いが分かり合い

ぶつかりあっても
もともと仕える者たちをないがしろにしてまでは近くに置けない
政景の心遣いだった

「ありがたい。。。」

本心では「優しい部分」をたくさん持っている若殿に国分も目を細めて感謝した

風と雨は止まることはなかった
夜を過ぎ暗くなった陣営の中を彦五郎は見回りも兼ねて歩いていた
陣を構えた台地から見える石川は信濃川とは比べる事もできない小さな川だった

酔い覚ましのために一郎が水を汲みに走る姿が見えた
「一郎!!足下に気をつけろよ!!戦以外で怪我などしたらつまらんぞ!!」
「大丈夫だよ!兄貴!」

酒を飲んだといっても「泥酔」するわけじゃない
冬の近い野営に体を温めるための必需品だ
一郎もその歳にしては多くの戦場を駆け回ってきた子だ節度はわきまえている

その一郎が桶を投げ捨てて彦五郎のところに走ってきた

「なんだ?お化けでもでたか?」
弟分の異変にふざけて見せた彦五郎だったが一郎は真剣だった

「何か。。。いる」

彦五郎の襟首を引き小声で言う
引かれたまま「些末」な事を聞き逃さぬようにと膝を折り顔近づけて聞いた

「何が見えた?。。。獣か?」
息を整えながら一郎は首を振った
「人。。。だと思う」

「火や!!狐火や!!」
二人が川岸の異変に気がついたとき他の物見たちが騒ぎ出した

「父上に知らせろ。。。何かがいる」

一郎は返事はせず頷くとそのまま国分の陣営に走っていった
彦五郎は他の見張りを槍でこづいて起こして回った
その間も川岸から目を離す事はなかったが。。。。

「狐火。。。」

最初一つ二つと揺れた灯は瞬く間に目の前多数現れた
台地という上から見る火は一本の線を引いたように美しく並んで揺れた

「彦五郎！！」
前衛隊大方の見張りをたたき起こした彦五郎のとなりに国分が並んだ
「近い。。。」

狐火は今まで見た距離ではなかった前は二里は離れて燃えた火が川
岸に並んでいる
「これは？」
父に疑問を投げかけた息子の頬を張った
「本陣を起こせ！！！「敵」だ！！！」
国分の判断は速かった
声を聞いただけで
一郎はまたも何も告げづまっしぐらに本陣に入っていったがまわり
物見は目を凝らしながらも

「宇佐見殿の部隊では？」

などと
とぼけた事を言っている
「父上！！「影トラ」ですか？」
彦五郎の言葉は太鼓に遮られた

未だ朝を迎えられない「闇」に鬼の慟哭が響き渡った
闇の緞帳の退場を叫ぶ気勢が続く
同時に空に「何か」が飛んだ

目の前に地獄の篝火が近づき「戦」という大地が開かれたことに彦
五郎は敏感だったが彼らの予想していた時間ではなかった

「父上。。。」
何度も相手を確かめようとしていた彦五郎は父の目の前で急に崩れた

同時に前衛を守っていた者たちの何人かが闇に倒れた

崩れた息子を抱いて国分は気がついた

「石礫か！！」

彦五郎の顔は真っ赤に染まっていた

無言の炎は揺れ

大地を揺らし朝を待たずに「戦」は怒号をあげた

その32　狐火　（5）（後書き）

なるか「漫画」（藁）

後書きからコンニチワ～～～ヒボシです
東京は櫻が咲いたそうで。。。。なんか凄い

ヒボシも花が咲いたらひっそりこっそり夜桜をビール片手に見に行きたいとおもってます（藁）
ところで
以前「挿絵解禁」という報がなろうに流れていて
ヒボシも「絵師」さんにたのんで書いて頂きたいなどと色々と回ったのですが（爆）
断られた（撃沈）
というのを後書きで書いた気がしますが

なんとなく（果てしなく希望的憶測）
書いてくれそうな人が見つかりました（藁）

絵にしてもらったらもっと世界が広がるかも
もちろん素人同士の口約束みたいなものですから
過大に押し付けたりなんかはできませんが

で
この人時間さえあったら漫画を書いてくれそうで（それこそ希望的大憶測）
そうなったら嬉しいな～～～～プハ～～～

そんなこんな
希望の春を迎えつつ物語も終盤に迫ってきてます
まだまだ問題も山積み
後二山はがんばらないと終わりにもってけないですね

でも
がんばります
がんばって最後まで走っていきますからよろしくお願いします！！

それではまた後書きでお会いしましょ～～～

その３３　私は嵐　（１）

「何だあれは？」

小さな川である石川の河川に「慎重」に兵を配置した私にとって目
の前に現れた「守護代軍」の程度の低さは許し難いものだった

私の目は鷹の目だ
段蔵たちが最前線から様子を調べを持ってくる前にその「ありさま」
に気がついていた
苛立ちで拳を馬具に何度もぶつけた
なんという。。。。
なんという
だらしのない覚悟だ！！

小川を挟んだ向かいの岸に陣取る彼らの「寝息」が聞こえる
小雨の中に焚いた火を囲むように寝ころぶ兵たち
そんな者たちが栃尾をありもしない「大儀」の元に討伐に来ていた
事に
奥歯をキリキリと合わせた。。。声をまだ。。荒げてはいけないと
自分を抑えるだけで体は芯から熱くなった

「栃尾衆」が緊張の弦を「獲物」の前まで引き続けてきた
そういう糸が私の中にも張られている

炎の前哨戦から向こう
やまなかった雨の中を「栃尾軍」は静かに「音」を出すことを堪え

進んできた

「戻らぬ戦」のために

農兵以外に移動のための手が必要だったが
大小荷駄隊に栃尾の農夫達が付き従っていた
「砦の戦」の前には刈り入れの大仕事をこなした者たちが引き続き
その力を忍ぶ我らに貸していた

みなが決死で覚悟でやってきた。。。。

この数で我らを圧倒的上回る軍勢と相対するために
まだ見えない「恐怖」に向かい
耐えてココまで来た

もちろん私は期待に応えるべく「策」を練りつづけ
報（情報）を繰り。。。。
戦うための計算をしてきた

全てを円滑に働かすために私はあの「砦の戦」以来眠ってさえいない
。。。。。

なのにどうだ
目の前に陣を張る「守護代旗」は。。。。。あまりに杜撰
。。。。。

そして小さく見える。。。。。

「これが権威だと?あの旗の下でいっいどんな治世が行えると言う

のだ？」

雨は兜に染みこみ髪は十分に濡れていた
私は額にかかる露を払いながら実乃のに問うた

馬を並べて進んでいた
実乃の「戦」に望む鋭い目にも怒りが宿っていた

「亡き親方様（為景）も「越後」のために眠らぬ「戦」をしてまいりました。。。。その弛まぬご尽力の上に「長尾守護代家」はあったというのに。。。政景は何も知らぬたわけ者です。。。。駄馬にございます！」

吐き出す声
拳に熱は灯り震える

そのとおりだ
背負うべき荷物の重さに腰を降ろし伸びきってしまった「馬」
そんな馬は役には立たない
役立てる方法があるとするならば。。。。
血肉となって「病」を得てしまっている「越後」を癒すことだ

そうだ。。。政景のような役に立たぬ者は「地」にかえさねば。。。
目がそれを嬉しそうに笑う

「河川に沿って「火と石」の支度整いましてございます」

静かな激怒の中

頭の中に渦巻く「闇」に私は酔い始めていた足下
段蔵が配置が終わったことを告げた

「どうしますか?奇襲しますか（夜討ち）？」
「奇襲ぅ？」

揺れる
頭がゆれる

「そんな狡賢い事などせずとも。。。。。起こしてヤレ。。。」
口元に笑み
こんなアホに遅れを取るような事は絶対にない
「起こす？のですか？」

頭を下げたまま「的確」な指示を待つ段蔵に言った

「そうだ「叩き起こして」ヤレ。。。。。火の踊る熱い戦場（いくさば）に挨拶させろ！」

左手
拳で「礫（つぶて）」を投げる仕草を見せた
指示を理解した段蔵は前衛に篝火とともに待機する「やたろー」の所に走っていった
素早い後ろ姿を見て
私の「戦」が滞りなく「美しく」動いている事に満足した

美しい軍団だ。。。。
何も間違ってはいない

手を伸ばし小姓が持つ刀を引き抜いた

「ココは「戦場(いくさば)」だ。。。そして「私は嵐」だ。。この山をなぎ倒し真っ平らにして行こう。。。。」

頭に守護代軍の「ニブイ」緩慢とした動きに「越後」の遅々として進まなかった「安寧」を思い浮かべた
今ならわかる。。。。聞くだけだった亡き父。。。「百の戦をした男。。戦鬼為景」
百も戦わねばならなかった理由が私にはわかる
父上ぐらいだったのだ
「厳しく」世をしめて激しく戦い「嵐」を起こし目を覚まさせる

「戦は間違ってはいない」

自分に言い聞かすように今まで漠然としか見えなかった父の姿がしっかりと私の中にあった事を確信した

逆に
そういう地から浮いてしまいそうな「根拠のない」自信で名前だけを欲しがる政景を許してはいけないと悟った
そういう事流れの末に「地位」だけを子供のおもちゃのように欲しがるなど。。。。愚の骨頂だ
だからこそ。。。それほどに根無しな者ならば「嵐」によってどこかに吹き飛んでいってくれればイイのだ

ゆうゆうと胸の前で刀をかざす私のは
実乃はたまりかねた怒りの感情を爆発させた
「まいりましょう!!」

並ぶ諸将たちも同じだ
真ん前に横たわる無様な軍団を引きちぎり食い尽くそう
「戦」に燃える目を持つ雄々しき獅子たちよ
共に「狂え」

大きく刀を挙げた
私の周り
「篝火」に続く火の束がかざされ
栃尾の全軍に解るよう堂々と前に進む

心も体の静かに揺れる馬を曳くジンの手にも松明
その先にやっと「闇」からきた「修羅」に気がつき騒ぎ出した守護
代軍の兵が見えた

「ココは戦場だ。。。。すでに手遅れだ」

逃げて行く小さな男の背を見ながらさらに高く刀を挙げた

小川の端に投げ捨てられた「桶」の音
開始の音がカラコロと虚しく。。。。
始めよう。。。。。

「鼓を打ち鳴らせ！！！雨に火を！！馬鹿どもを叩き起こせ！！！」

刀を振り下ろした！！
声を響かせた
その声に「栃尾衆」そしてこの「戦」にしたがった将兵たちが唸り
を上げた
「応！！応！！応！！」
響く怒号に続く凶器の雨
そうだもっと吠えろ！！もっと！！
闇の空の下

「嵐」を呼べ！！！

朝の遠い雨の中に飛ぶ「石礫」は次々に寝呆けた政景の前衛隊に当
たって行く
天によって下された「見えぬ罰」に打たれあっさりと倒れる者たち
を指さした

「それこそが天罰覿面！！！義なき者はココに滅びろ！！」

ジンの曳いていた手綱を自分の手に取り戻し
馬を前に走らせた

この「罰」を
この「怒り」を
直接顔の見えるところで政景に食らわしてやらねば腹の虫が治まら
ない！！
やたろーたちの近くまで走らせる

寝る間さえ惜しみ行軍してきた大男たち
今この場でも惜しむ事なく「石」を投げ続けている

守護代軍の前衛は「砦の戦」の時のようにはすでに「対処」できなくなっていた
楯を上げる間もない
それでも
おそらく「国分」の手の者たちか我らの渡河点に備え前衛に固まりをつくろうとし始めている

「やたろー!!!半分の人数を弓隊に切り替えろ!!!渡河点を奪う!!」

栃尾の前衛を仕切るやたろーを動かす
もう後ろを守って戦う事はない
あるのは前に
前に進むことだけだ!!

そして
前を行くことに歯向かう者をなぎ倒す!!!

素早く出揃った弓隊に川岸の一点を刺して

「焼け!!!」

渡河点に向かって火矢は容赦なく向かっていった
また
一方的に降り注ぐ狂気の中

着々く歩を住進める栃尾軍とは逆に守護代軍の川岸に詰めていた大半の前衛は「崩れ」始めていた
川の向こう側でまともに機能している「守護代旗」はない
かろうじて防戦している国分隊が哀れに見える

少し白み始めてきた紫色の空の下右往左往する兵たち
「悲鳴」
と
石礫の激突によって潰される「骨」の音
途切れる終わる「息」がそこかしこに聞こえる

「まだだ。。。。まだ。。」

息が弾む
国分の部隊が律儀に「本陣」が動く時間を稼ぐために前に固まっているのが気に入らない

「突撃だ」

こんなところでとまっていられるか
私は顔と胸の間立てるように刀を構えた
「トラ。。。。」

やっとで私に追いついたジンの顔には「苦痛」が見えていた
だが私は肩をたたいて続けた
私はジンに。。。どんな顔で言ったか?
でも声を掛けた

この戦の価値をこの戦の向こう側までを見ている私の事を信じていて欲しかったから

「この固まった軍団。。。後ろに守るべく価値もないものを隠している。。。これは「越後」の今の状態と一緒だ。。。。これを打ち破る事が「嵐」が。。。「今」必要な事だ!!」

そこまで言うと振り返らず馬をさらに前に進ませた
手を挙げ
後ろに従う「栃尾」全軍に激した

「手を挙げろ!!!声を上げろ!!我らこそが「長尾守護代軍」なり!!!我に従い戦え!!!」

栃尾衆は声を上げ一丸となって川に飛び込んだ

その３３　私は嵐　（２）

守護代軍の対応はまったく後手に回っていた
というか
対応のしようがなかった
今まで「緊迫」し続けた行軍の後やっとで陣を張った米山の裾。。。
。たった一日だ

体を休めた一日の「休息」を味わっただけで
後は暗闇にまっしぐらにたたき落とされた
そこにどんな「策謀」があり
誰が味方で「敵」であったかという見極めがで甘かった

そもそも
信濃川から向こうに所領を持つ
豪族は「遅参」はするが守護代軍に合力するという口約束だけをしていた

しかし

大勢力でのまさかの敗退は各豪族の「ある決定」を決めるための基準にかわり
みなが相対する勢力になった「影トラ」の出方を伺っていた
みな「越後」という国の進退を決する「戦」の動向を見張っていたのだ

だが
見張るなどという悠長な「緩慢」としたゆるみの間を影トラは迷わ

ず斬り進んできた

誰にも考え及ばぬ奇襲だった

本陣の側から向かって左翼に陣を張っていた「樋口兼村（ひぐちかねむら）」はひさしぶりの休息に鎧を脱いでしまっていた

というのも
砦の合戦で老体は左腕付け根近くに矢を二本も受けてしまいココまでの行軍の間は止血程度の処置しかできていなかったからだ
ようやく一息いれ傷つき冷え切った体を解放した矢先だった

慌てて胴を体に巻き付けようと近習の者を呼んだが
呼び出された小男は息も上がりきった状態で告げた

「明後日にしかこないと言う話しではなかったのですか?!」

古くから自分に仕えていた小男は主人に似て無口だったはずだが。。。そんな余裕は消し飛んでいた
愚問を大声で聞く近習の混乱具合は樋口にとって叱るにも値もしない醜態
ただ目で落ち着きを取り戻すように睨んだ
主の視線に乱れてしまっていた自分の状態を恥た近習は押し黙って胴の取り付けを進めたが
肩で息する「波乱」の揺れは隠せなかった

胴を括らせながら樋口は自陣から走った
状況を見極めなくては
雨はやはり止む事はなかった
風も少ないながらに吹いている
もっとも重要な場所は？

雨の「渡河点」

雨が降っていればなおさらその浅瀬を狙って来るそこを「奪われるか」「守れるか」でこの奇襲の成果が決まる
小降りになっているとはいえ必ず「敵」はそこを狙う

樋口の鉢巻きを自分で括りながら暗闇ばかりだった河川敷の向こう
「篝火」の列を見た
まだ朝の訪れない川縁を照らしていたのは「栃尾軍」の道しるべ
並ぶ火の道

遠目には押し合いをしているようにしかみえなかったが
河川に並んだ火に対する場所の兵たちの「悲鳴」で何が起こっているのかはすぐに理解した
樋口は顎を刺すって唸った

「石礫。。。。。見えぬ石だけに。。。。小賢しい」

攻撃は「火矢」ではなく「石」である事を老将はすぐに見抜いた

夜の闇に見えぬ「礫」を防ぐのは無理に近かった
事実
いち早く対抗出来た国分の残った部隊以外の様子は酷いものだった

目を凝らし確認するまでもない
そこかしこに「救い」を求める恥の声が聞こえる
寝入ったまま頭を礫にかち割られ悲鳴に嗚咽
前衛で陣を張っていた者に無事な者を探すことの方がむずかしいぐらいの「泣き声」

夜明け前という夜陰に紛れ脱兎のごとくの者さえいるはずだ

「本陣はどうなっている？」

自分について走りながら胴を締め合わせていた近習に樋口は怒鳴った
付き添っていた一人の若造が答えた

「本陣も突然の事で。。」
「たわけ！！」

老骨は止血していた己の左肩を叩いた
「戦」は。。。。そうだココが「戦場」でそれを。。。迂闊にも「休息の場」としてしまった自分たちを叱咤した
疲労続きだった守護代軍
出陣も急だった。。。。。どこかで「余裕」を持つ時間が必要だったが。。。。

何もかもが裏目に出てしまった
これは。。。。ダメだ

見苦しい戦場から目を背け胴を結び終わった若造に言った

「本陣を米山の峠付近にまで後退させよ!!早馬を飛ばし「柿崎殿」と合力して「栃尾軍」を迎え撃つよう陣を再編するよう伝えろ!!」

怒濤の攻めで今にも「渡河点」を奪おうとしている栃尾勢
それを声高く指示する「影トラ」を見ながら樋口は用心でもう一人の近習も走らせ
自分のさらに後ろに揃い始めた部隊に向かって激した

「樋口隊はこれより国分隊と合流!!渡河点を死守する!!」

樋口のすぐ隣にいる小男の使いの目には苦悩が映っていた
「しかし。。。それでは殿様は」

わかっていた
それがどういう事か

死守
文字通りだ
「国分隊」も「樋口隊」も最初の戦で兵の大半を失っていた
合流したところで二百にも満たない数だろう

いまや
大波の勢いである栃尾軍に真っ正面から当たったら。。。幾刻保つか?

いや
保たせる為だけの戦い
この状態で本陣を退かせる事
自分が前にでる事は「死」を意味していた

樋口は何も言わなかった
ただ長く苦楽を共にした使いの小男の肩を叩いた

「行けません!!殿様を置いてなど。。。行けません!!」
「行くんだ!若殿を守るのだ」

手を置いた肩に力を込める
思いを込める

「負け」は
「負け」こそあってはならないものだった

「行け!!」
顔を歪ませ主を思って涙した男を樋口は押した
身を翻すともう顔を見ようとはしなかった
主の覚悟に使いも心を決めて本陣に向かって走っていった

「樋口隊!!!直ちに攻撃陣形をつくれ!!!渡河点に向けて進軍!!!!」
やるべき事を明確にした老将は迅速に陣を固め自ら先頭に立った
未だ暗闇の戦場に楯を上げ前進を告げた

その声に
別の「隊」の声が混ざった

老将の声を塗りつぶすような雷の怒声。。。続く怒号は進軍に固まった樋口隊の横腹に音を響かせた

「栖吉ィィ!!!突撃ィィ!!!」

前方で展開している男たちの声ではない。。。樋口隊の声でもない

「馬鹿な。。。。」

樋口たちが陣を張っていた河岸からさらに左側の湿地帯からいっせいに火を伴った矢が飛んだ
避けることの出来ない矢の下あっけにとられた男達にあるのは「死」と

怒濤の恐怖

栖吉衆の気合いの「声」は湿り頭を下げた草木を大きく揺らした
歩行の長柄部隊が詰める行軍陣形の中程を火で炙られ横腹をさらに食い破ぶらんという「気勢」

指示もままならない「樋口隊」は瞬く間に崩れた

「樋口ィィ!!!兼村殿はどちらに!!!栖吉長尾家家臣「金津(かなつし)新兵衛(んべえ)」見参!!お相手ェ願う!!!」

もみ合いになった一団の中。。
風になびく雨の下に朱槍をもった色黒の男は馬とともに立っていた

その後ろから怒濤の槍隊が走る
混乱の樋口隊に栖吉衆は容赦なく槍を突き
隊列は朝露に血を滴らせ混ぜた

逃げ出す者たちの間
「止まらぬ戦場」の中
樋口は合力に向かう予定だった場所を振り返ってみた
「渡河点」

攻防を繰り返し「死守」に勤めるわずかな「国分隊」はもはや波に
呑まれてしまいそうだ。。。。。
手を伸ばしてみる

「国分殿。。。。」

見える恐怖と
自らに降る恐怖
もはや樋口隊を「崩壊」から制御する事は不可能だった
己の不甲斐なさ。。。。唇をかみ切るほどに。。。。白い櫛（髪）
が濡れたまま頬に張り付く
少しだけ口を開いた
呼吸とともに。。。国分隊にお辞儀した
喧噪の中胸を押さえ深く頭を下げた

だがそのまま伏してしまう事はなかった

まだ！
まだ「戦」が終わってしまったわけではない
下ろした頭のまま
胸の真ん中を激しく叩く

樋口兼村は自ら槍をとり向かう側をさした
逃げ崩れる者を引き留めて声を上げるなど愚行
そんなものより「獲物」だ

自分の名を大声で呼んだ男を睨んだ

「。。。。。栖吉。。。。。よかろう！！まずはその方から片づけよう」

老将の馬廻りたちも覚悟を決めた
少しでも本陣の立て直しが出来るならどちらの敵を屠っても一緒だ
腕をまくり
少なくなってしまった自分の守りと隊列を組んだ

「我こそは上田長尾家家臣「樋口兼村」なるぞ！！」

見あげる向こう
金津の向こう率いられたる栖吉の本隊が見える
およそ百の歩行武者達が揃えた槍の山は整然と前進を始めた
軍団の真ん前
大きくはためく「栖吉」の旗

馬から下りた黒い男「金津」の顔に積年の殺意
対峙する

「この鰓首。。。。簡単にはとれぬと覚悟しろ。。。。」

まだ見えぬ朝日の中
台地の左翼に展開していた「樋口隊」と「栖吉」は激突した
空が紫に変わる闇の下
加熱する「渡河点」の攻防の元
大きな「戦果」は告げられた

「樋口兼村討ち取ったぁぁ！！！！」

その３３　私は嵐　（３）

白髪の猛将「国分」の肩が力をなくしたのが私の目にも確認が出来た

「良くやった」

目の前「渡河点」を争っていた国分隊の耳に届いた
「樋口兼村（ひぐちかねむら）討ち死に」の報（報告）は守護代軍前衛隊の士気を素早く奪ったのが良くわかった
近づく朝に合わせ少し強くなった風までもが止まってしまったかのように思えた

「本陣」を再編成する時間稼ぎのために己を犠牲に前に出るという
「高潔」な意志をもった国分の兵たちにとっては雷に打たれるがごとくの事だ
押し合っていた楯の兵がその場に何人か膝から崩れた

そうだ
火を並べ踊らせた私たちが囮だ

火を前に私が指揮をすれば必ず国分は私たちにぶつかってくると読んでいた
そして
時間をかせぎ本陣を後退させる
陣営側「右翼」に突き当たるように戦線を開けば当然「左翼」側に残っている部隊が詰めてくる
二段の殿（しんがり）として

だが目の前で起こっている「渡河点」の争奪を見られる位置にあった事で。。。。
左翼の最深部「沼側」の警戒を怠った

黎明の時間
闇に乗じた「石礫」の攻撃は予想以上の相手り危機感を引き出す事に成功したのだ

石川のような小さな川で「渡河点」を探す理由など無い
理由があるとするならば
守護代軍の前衛先衆を引きつけ。。。。どちらでも良かったが「殲滅」させることだけ

実際にどちらでも良かった

国分であろうが樋口であろうが私が彼らに与える処断に区別はなかった
どちらもココで死んでもらう
無能な戦いに従う者に明日など必要あるハズもなし

こんな戦に「懸命」になる有能な指揮官がいる事の報が許し難い
何故
「有能」で「戦上手」とまで言われた者達が病んだ越後を癒す事がではなかったのか？
ココまで行軍してくる間私の頭の中にはその事をずつ考えていた

空は紫に

夜明けを近づける色
台地の向こう側
国分たちとは別の側にて「栖吉衆」は前線最大の功績を高らかに叫び続けた
相手の意志を砕き
相手の心を折るために
並ぶ軍団は足踏みと石突を鳴らし

槍の先高くに掲げられた「樋口」の首を見せた
しはじ留まり今一度の考えに耽った自分の意識を「戦」に戻した

「良し。。。。。栖吉は良い仕事をした。。ココはもう終わりだ」
私は実乃に後ろに並んだ軍団を前に並ばせるよう指示し
同じく渡河点を争っていたやたろーたちも河岸に退かせた
もう
大げさに。。。しかも「遠慮」しながらそこにぶつかる必要はない
この先は小賢しい策など必要としていない
堂々と「義」の戦に進むのみ

「政景（まさかげ）殿本陣米山峠前に後退しました」
「逃がしはしない。。。。。」

私は兜を脱いだ
視界を狭くしたくなかった
顔にかかる髪を手で払い少し遠くに見える丘陵を見あげた

台地の上は私の位置からは見る事はできない場所だがその先がどう
なっているかはすでに理解できていた
風が運ぶ雨は勢いを上げていた

兵を治めた私の前
向かい側の河岸に国分の残った者たちが固まり防戦の陣を作ってい
るのが見えた

「大丈夫。。。オマエたちもすぐに逝ける」

風は追い風
国分の部隊は目の前に栃尾衆
後ろに栖吉衆とすでに逃げ場の無い状態

「降伏を入れますか？」

全軍の状態が整った事を知らせた実乃は私に聞いた
「入れない」
私は国分の部隊を刀の先でさして言った

「国分は降伏などしない。。。。気高い部隊だ」

そこまで言って
今更何に努めても無力な国分の部隊に背を向けた
馬を返し並んだ全軍に顔を向け
少しずつ朝日の白い空が見え始めている
それを背に整然と並ぶ武士達（もののふ）

汗の雨で濡れた顔を見て回った

誰も気後れしていない

「祈れ」

並ぶ者たちの前を歩く
刀を胸の前に備え捧げる姿でもう一度大きな声で

「祈れ！！」

静寂川の音と雨の音。。。そして風の音
胸に拳を打ち付ける
みな構えちまま私と同じように胸に拳を付ける

「これより米山峠を越えるこの「戦」の決着をつけよう」

慄然とした美しき意識纏う軍団よ
共にこの結末に走ろう

馬上にてゆっくりと振り返った
雨雲を伴って堕ちて行く闇の側に
我らは雨と共に来る「朝」を背負って行く

この峠を越えた向こう「春日山」がある
知らねばならない大切な事を。。。。。ケジメをつけて頂こう
全ての意志がまとまり進軍の声を上げようとした

「トラ姫！！覚悟！！！」

静まり祈りを捧げる全軍の前
いつの間にか川を渡った国分の年若い兵の姿
私の真ん前で弓を構えてすばやく放った

矢が私の前に走る
走る？

私は首を傾げた
なんとのろまな「攻撃」か
雨粒さえも止まって見える
ゆっくりと顔に目がけて飛んでくる鏃が雨粒を射通し弾けさせる。。。

でも
そんなものでは私は倒せない

「影トラ様！！」

実乃とジンが前に出ようとするが

そんな必要はない
私は左手で空を切った凶弾の矢を捕らえていた
何事もなかったのように鏃（やじり）を眺めてそれから弓を射た男の顔を見た
真っ直ぐ頭を狙ったのは。。。。なかなかにいい腕だが

だが。。。。
騒ぐ実乃たちの前捕らえた矢を持ったまま

「さわぐな」

急いで私の周りに楯を揃えようとした実乃とやたろーを退かせた
馬の前で呆然としているジンの手からも綱を引き
そのまま前に進む
弓をつがえた男。。。。
年若の男。。。。ああ。。。最初に私たちを見つけた「ガキ」だな

「どうした？もう討たないのか？」

抜いたままの右手の刀を肩に乗せ首を左に傾げて聞いてみた
私の仕草に恐れをなし少年はしりもちをついた

「討てよ。。。。覚悟見せろ」

ガキの顔は恐怖で引きっているのか涙を浮かべ声にならない言葉を吐く
「えっえっ。。。。。化け物。。。。。」

怖じ気づき倒れたまま後ろに下がろうと見苦しく動く

「答えろ！」
私に向かって放たれた矢を手の中でくるりと回し小僧の顔に向けた

「なんために私に弓引いた？」
惰弱なりに気を張らせた小僧は怒鳴った
「知るか！！トラ姫が「悪い」からだろ！！」
「悪い？」

うんざりした
どういう指示がされていたらこんな阿呆な返答ができるのか？
首を揺らし左手に持った矢をへし折り
さらに馬を前に進めた

「小僧。。。。この「戦」に与えられた「意味」も知らずにノコノコと私の前に立ったのか？」
「意味なんかあるか！！「戦」がはじまりゃオレたち殿様に従って戦うだけだ！！」

転げたまま後ろに倒れそうだった体を起こし威勢良く答えたがくだらない返事は私の怒りの火に油を注ぐだけだった

「阿呆が。。。己の中に「戦う意義」を見いだせないのであればそんな「戦」にどんな価値があるか？」

ジリジリと近寄った馬の真下で怯えと「困惑」を顔に表す小僧
それとは別に握ったままの刀を大きく挙げた
「私は戦う。。。。その意味しりその意味を問うために」
そのまま小僧の鼻先に振り下ろした

「このまま死んだ方がいいやもしれんな。。。。」

私の歩に合わせ栃尾衆は前に進む

河川に沿って出揃った軍勢
全ての準備は整った
もはや足下で声も出なくなった小僧には何の用もなかったが最後の
声を掛けた

「オマエが主政景（まさかげ）にとって戦う意味は己の「欲」によって作られた
言い訳でしかない。。それを見破れなかったオマエ達の浅はかさは
許そう。。だが「義」によって戦をする私に弓引いた事は決して許
されない事だ。。。。」

光る雨止まぬ悲しみの空
微かに見える朝日の下に涙はまだ
天の悲しみはまだ
大地に降り注いでいる

大きく両の手を開いて顔にいっぱいの「涙」を受けて叫んだ

「守護代軍に向かいただ戦え！！！首など取らなくて良い！！二度
と刃向かう事のないようにただひたすら屠れ！！」

「槍隊構え！！！」
実乃の声が響く
やたろー達が構える
先発する栖吉
馬廻り緊張を走らせるジン

「これより本陣「長尾政景」を打つ！！！我に従い進め！！！」

その３３　私は嵐　（４）

黎明の時間の攻撃
前衛が刻を稼いでいる間に本陣を米山の峠前まで移す事は出来た守
護代軍ではあったが
中身はガタガタの状態だった
朝日が近づき
周囲が紫色に変わってきた頃見え始めた軍団の顔色はみな一応に焦
燥しきっていた

「影トラだったのか！」

行軍陣形をやっとでほどいたはいいが
陣幕さえまともに張ることの出来ない現状
右往左往する近習達の間。。。。自分でも理解の出来ない事態に政（まさ）
景（かげ）は枯れた声で怒鳴りつけた
だが
共に陣払いをしてついて回っていた近習は一人として守護代軍の現
在置かれている状況を介する者はなく
政景の怒声にただあわてふためいてしまう始末

その政景に
唯一
わかっている事。。。
それは激高した自分に諭し「策」を与えてくれていた二人の「将」
がいなくなってしまった事

「只今馬を飛ばし確認させております」

風の向こう側まくれ上がった幕の外で
雨と泥をかぶった老将が一人叫んだ

生意気な若造ばかり「勝ち戦」と信じ煌びやかで真新しい甲冑を纏った近習たちは自分が連れてきた兵さえまとめられないのに騒ぎだけは一人前だ

まるで機能していないの本陣の中
唯一の年寄りになってしまった政景の爺にあたる「中井外岡（なかいとおかね）」は努めて冷静さを失わぬように返答した
「今しばらくは陣の構えを改める事に徒事しましょう」

戻ってきた爺に
「宇佐見じゃないのか?」
まだ甘い認識。。。へこたれた表情の中「安心」を探そうとする政景

中井はすぐに否定した

「違います!!絶対に」
重く深く
もはや「甘い」見当など告げなかった

「影トラです。。。我らを追って走って来たのです」
「か。。。影トラ?影トラは明後日くる「予定」ではなかったのか?」

床机（しょうぎ）に座った政景は額に手を当てながら考えの浅い答えを返した

中井の心は濁った
事。。。。ココに及んで。。。。あまりに政景の「戦」の認識が甘すぎるという事に

宿老は首を振ると釘を刺すように答えた
「今宵来たのです。。。。国分殿が申していたではありませんか。。影トラは「戦」を待つような者ではないと」
「待て。。。。。だが。。。。。」

まっとうと思える返答する中井自身にも苛立ちがあった
「何故狐火に注意しなかった。。。。」

あれは。。。「警告」
あれは。。。「侵略」

苦みの走る眉間を抑え
政景の後ろあれこれとくだらない献策をする近習を無視して意見を続けた

「最初の朝駆けから半刻（約一時間）。。。。「国分殿」「樋口殿」は戻る事はないでしょう。。今我らが成すべき事は後半刻の間に軍勢を整え迎え撃つ体勢を」
「やめろ！！」

焦りで顔色まで悪くしてしまった政景は頭をふり床机を蹴倒してそれでも態度は弱々しく口を閉ざしたまま立ちつくした
隣に詰めていた「与一郎」が沈黙してしまった政景の代わりに口を挟んだ

「我らは山上に陣を張ったのです。。。ならば上から揉み潰しましょう!!国分殿や樋口殿と挟み撃ちに!!」
「そうだ。。。国分も。。。樋口もまだ共に戦えるハズだ」
与一郎の言葉に政景の迷う目は縋ろうとしていた

「若殿!!!」

「何か」に助けを求めようとしている政景に中井は回りくどい言い方はしなかった
台に扇を叩きつけ目を覚まさせると遠慮なく政景の襟首を捕まえて言った
言葉に「余裕」を持たせず危機を教えた

「我らは。。。。愚かにもココに腰を据えて「戦」の真ん中で休んでしまったのです。。。その上で奇襲された。。国分殿も樋口殿も。。最早生きてはおりません!!」

幼き頃から自分を世話した爺の顔に政景は縋るように答えた
「なんで!!。。。なんでそんな事が言い切れる!!昨日まで共にいた者達だぞ!!そんな事は絶対にない!!何かの間違いだ!!!」
中井に掴みかかった腕は震えていた
宿老は目を見開き両の手で政景の肩を掴んだ

「若殿。。。。目を覚ましなされ!!間違ってしまったのは我々なのです!!影トラは我らを追って「戦の中」を夜を眠らずココまで走って来たのです!!我らを討ち滅ぼしに来たのです!!!」

苦痛に顔を下げる
「彦五郎も。。。。帰らぬのか。。。。。」

事の重大さ。。。。些少な時の間に失ってしまった家臣
あれほどに自信を持って出陣したのに。。。もう後のない状態だ
政景の意識を「戦」に向けるための説教が終わらぬ前
それは息を整える間を与える事なく
「嵐」となって向かってきていた

「来ました！！！」

物見の声には怯えと驚きの色が混じっていた
その後続く伝令達も口々に危機を叫んだ

「正面！！数三百！！旗印は「栖吉」！！その後ろにも軍団が見えます！！」

向きあったまま政景に説教をしていた中井もさすがに驚いた
まだ一刻（二時間）もたっていない。。。。
なのに軍勢を立て直し向かってくるその行動力に。。。機動力に舌を巻いた

「早い。。。なんという早さ。。。」

と
同時にやはり思い出していた
これは。。。。「戦鬼為景（いくさおにためかげ）」の戦い方
相手に息をつかせぬ神速

しかし
ココではすでにそれに感心している場合ではなかった
本陣を的確に指揮できるのは今は中井しかいないのだから
爺は
すぐに行動を取った

自分の中に募った驚きを振り払うように毅然とした声で使い番を呼んだ
そのまま
陣営前に進み集まった使い番たちに残った将への指示を告げた

「弓隊を前面に配置!!!急げ!!配置が終わり射程に入り次第放て!」

驚きの顔。。。
まだ固まったままの政景のまわりには「与一郎」や「勝六(しょうろく)」たちが集まっていたが
事態の急変に対処出来ていなかった
それどころかてんで的はずれな意見を叫ぶ

「数では我らがまだ有利!!ぶつかって来るならば力で押せばよいでしょう!!」

慌ただしく陣営を整えるために指示を飛ばす中井は振り返り
そういう「甘えた」事実に情けなささえ覚えていたのか一度頭を項垂れそうになったが
そんな時間さえ惜しかった
「そんな余裕が何処に。。。。数ばかりの軍勢にどんな価値が。。。」

数は問題ではなかった
もはや気力で負け知略で負け。。。。「勝つこと」は遠い目標だ
下がり懸かった頭を持ち上げると大きな声で上田長尾の各重臣の息子たちを怒鳴りつけた

「くだらん事を話しとらんと!!各々呆けた面(つら)をしまえ!!兜をつけろ!!」

怒濤の戦場に備えもおろそかな者の意見など役にはたたない
自ら槍を持ちさらに各陣営からの報告を持ち帰る使い番達を待ったその後ろ姿に「勝六」が兜の顎紐を括りながら聞いた

「中井殿!!馬を飛ばし「柿崎殿」を。。。」
「既に飛ばしてある!!」

宿老である中井は多くの戦を戦って来ている
国分や樋口が抜けた後
若殿を「守り」戦を教えるのは勤めだ
ココに陣を移したときに「対処」出来うる限りの事はしてあり今更そんな事を弱腰のまま聞く近習を苦々しく見。。。。。ある思いをめぐらしていた

中井

国分より年を経て
樋口よりは少し若い中井。。。数多の戦にてすでに片目を失い若殿のお守り役の任について二十年と少し

その間に「戦鬼」は死に大きな戦はなくなった。。。。。
ほんのつかの間
その間に産まれてしまった政景の「戦」への無知。。。それに並ぶ
同輩の近習たちに「戦の所作」を教えられなかった事を悔やんでいた

それほどに「戦」に疎くなってしまっていた「上田長尾」
なのに

なんと言う事か。。。。
今先代の時と同じように「上田長尾」を駆逐せんとする勢いが迫っ
ていて
その勢いはまさに「戦鬼の血」という皮肉
あの鬼の血をしっかりと受け継いだ「女傑」が目の前まで来ている

槍のケツ石突きを大地に突き立て中井は未だ己の行動を律せられな
い政景を激した

「若殿！！！ココは戦場（いくさば）です！！！」

一方守護代軍の前線は半分も機能していない状態での開戦に
宿老中井の強い決意とは間逆の
手の打ちようのない「堕落」は目に見えていた

たった半刻前にいきなりの強襲を受け

続けて被害を被る事無く「退陣」し米山の前まで行軍してきたのは
よかったが

それゆえに「恐怖」だけが増大し兵が言うことを聞かない
あちらこちらで不穏な言葉が飛び交い

「影トラ」に対する恐れで足軽たちも及び腰になっていたところに
恐れの根元である「軍勢」を目の当たりにしてしまった
雨に輝きを与え始めていた日輪を背負い勢いに乗って走る軍勢に歯
向かうような気力はとっくに失われていた

「逃げろ!!!」

物見の最初の報（報告）に前衛の農兵が叫んだ

「もうダメだ!!! おトラ姫に逆らったら二度とざいご（実家）に
帰る事ぁできねぇ!!」

小波大波
一人が絶望を叫んでしまえば後はもう止まることがない
そうでなくても面前に迫る怒号を纏った「栖吉衆」
集兵で集めた者などまさに脱兎のごとくだった
金で雇った者など死ぬのは損でしかない

「栃尾の時みたいに皆殺しだ!!! 焼き殺されちまう!!」

目の前で起こった鮮烈な恐怖はまだたったの三日前
焼き付いた恐れを今や御する「将」がいない
どんなに足軽たちが声を上げ逃げる足を止めようとしても無駄

まさに無駄だ

見る見る守護代軍の先手衆は崩壊

その崩壊の流れをせき止めたのは「栖吉衆」

最後の戦は始まった
脱走する衆群に激突して行く栖吉衝突の音は鈍く中井にも政景にも
伝わった

そして
その向こう
楯と槍をもった大男たちの一群の真ん中

怒りの化身はいた
緋色の。。。。「血色」の衣を纏いまっしぐらに進む者

政景はおののいて。。。。こぼした

「影トラ。。。。」

その３３　私は嵐　（５）（前書き）

ちょっと残酷な描写があります。。。。

その３３　私は嵐　（５）

海を分かつ勢いで軍団は進んだ
もはや止まる必要などなかった

最初の攻撃でもっとも優秀であった将を失ってしまった守護代軍を
まとめる事など絶対に政景にはできない
私にはわかっている
最初に
あの砦の会見の時にあった政景を思い出す
「戦」を知った口をきき
私たちの戦いをあざ笑い見下した者

あんな者に人を御する事はできない
「戦」に従う心とは。。。戦う集団の「恐れ」という心を御してさ
らに「前に進む」ための勇気を伴うものだ
花見にでも来たような気持ちで栃尾を見下し民心を濁らせた奢りの
代価
その上に自分の良くを実らせようとした事を

私は絶対に許さない

「さあ！！払ってもらおう！！」

石川の開戦で一時止まった私たちを恐れ「米山峠」まで後退した守
護代軍に向かって私は自ら前に進み拳を上げた

「旗挙げろ！！！」

声高き指示に実乃を中心とした栃尾衆がココまで運んできた大きな包みを開いた
それは
今までの軍旗の二回りは大きな「長尾守護代家の旗」

以前
黒滝に最初の仕置きをした時「旗が見えなかった」と反逆者は言ったらしい
背く者は己の「卑しい」欲を隠すためにくだらない言い訳を平気でする
濁った目にはたしかにあの小さな旗は見えなかったのかもしれないならば
大きく
さらに大きく「志」を現し我らが義成る軍団である事を高らかに示してやろうと思っていた

この大き示された「義」の前であのくだらない言い訳がもう一度できると言うのならば
それは完全なる「邪悪」でしかない
もちろん
政景にはそんな根性はないだろうが「強欲」に屈して栃尾を攻めた事は「不義」に代わりもない

兄上のあの一声以来すぐに栃尾の女衆たちに支度させた「大旗」は山より吹き下ろす風で大きくはためく
その雄々しい姿に私は微笑んだ

なんという心強さ
拳を強く握りしめた

私と同じく旗を見つめる頼もしき軍団もきっと同じ気持ちのハズ
それにしても
もはや私たちの目の前から尻を向けて逃げた軍団が「守護代軍」な
ど と名乗っていいわけもない。。。。
そんな軽々しい名であって良いわけがない

義無き軍団は既に崩壊の一途を辿っている
ばらけて行く姿は惨めを通り越し見苦しいばかりだ

そうだ。。。。あれは「政景の軍」
政景の浮かれた心をそのまま映し出した「欲」の軍団
容赦などいらない「悪」なのだ

雨と風
薄く開ける夜の下大きく揺れる旗
私の濡れた髪も緩やかに揺れ頬をうつ

「申し上げます!!!「政景軍」米山峠前に着陣!!しかしながら
軍勢の大半が混乱離脱の様相!!どういたしますか?」

空穂(うつほ)と弓を携え行く先を睨んだ

「我らがすべき事は変わらない」

私の決意
それを矢に乗せて弓につがえ
「越後の国の行く末を踏みにじった政景にあるのは死だけだ!!!」
私の後ろに並ぶ勇士たちに構えた矢のまま決意を告げる
「聞け!!我らこそが「長尾守護代軍」である事を示し愚者たる政景に裁きを下してくれようぞ!!!」
迫る朝日に押される怒号
振り返り米山の尾根を見る
照らし出された山並みの向こう
そうだその先にある春日山
兄上にこの「戦」の真意と始末についてはっきりと答えを聞かなくてはならない
紫の空に矢を放つ
私は。。。。。。兄に弓を引く
「参ります。。。。」
放たれた矢がごとく戻ることなく我らも前に進め!!!
ココに栃尾，栖吉というただの衆目から一つの目的のために立ち上がった軍勢「長尾守護代軍」は気勢挙げた
「応!!!!!」
いち早く先頭をきったのは「栖吉」金津率いる三百の部隊
先に「樋口兼村（ひくちかねむら）」を討ち取った事で十分に弾みはついている

まっしぐらに進む

「やたろー!!私とともに本陣に進め!!」

木楯を構え馬廻り衆「秋山」「安田」共々私の前に立つ「やたろー」

「善治郎」と仲間たち

身構えるジンにやたろーは言った

「ジン。。しっかりついてこいよ!!おトラ様を守って真っ直ぐ進むんだ!!」

励ましに頷きながら私を見る

「トラ。。。。大丈夫か?」

「ジン。。。遅れをとるなよ」

少し不思議な感じだったこれほどに気合いの乗りが入った軍団の中にあってジンの顔には

不安がある

私は優しさを示すつもりで首を少しふって

「大丈夫だ」

緩やかにした声で答えた

でも

ジンはまだ何かを言おうとしていたがさすがに今はそんな悠長に話し込める時じゃない

そんな彼の思いを振り払い後衛に指示を飛ばした

だけど

この時ジンが私に対して危惧していた事は。。。。。

「実乃！！栃尾本隊は峠の上に旗が立つことを確認した時！！その時こそ総攻めの時！！頼むぞ！！」
「お任せを！！」
胸を叩き忠義を刻み込む実乃

全ての指示が終わった
先を行く栖吉。。。。。さあ

さあ
参ろうぞ

「我に従い進め！！！」

男達は拳と槍を挙げた
怒号と気勢を響かせ今，強き「義」の元「長尾守護代軍」は米山峠に向かって走って行く

目の前
すでに
崩壊を止められず藻くずに近い「政景の軍団」が見えた
ぶつかる気力さえ石川に忘れてきたのか「栖吉」の最初の突撃を食らって惨憺たる状態だった
先手で残されていた槍隊はすでに人ではなく「槍」そのものが転がり
武具を残したまま兵などは逃げ出している
背中を串刺しにされ血反吐の海に沈む者を助ける事も出来ず踏み倒

して逃げる愚か者達

その向こう
私の位置からでも
守るべき本陣の姿が丸見えの状態だ

「無様だな。。。。」

手をかざし顔にかかる雨粒を素早く払う
睨む先にある政景に目が尖る
あの顔。。。。

良く見えるさ

何にそんなにおののいている
なんたる情けない顔だ
それが「守護代旗」を掲げた軍団の大将のする顔か

政景とその近習たちが何をやっているかは「ワカラナイ」
みなバラバラに何かを叫び
見苦しい声を上げている
この状態において「大将」の行動が見てワカラナイ事になっているのだからもはや「軍団」が機能していない事は明白だ
唯一白髪の男が枯れんばかりの大声で陣の内外に向かって指示を飛ばしているようだが。。。。

「虚しい事よなぁ。。。」

私は空穂(うつほ)に手を伸ばし矢をとった
そのまま

「栖吉が前衛を引きつけている間を割って本陣を強襲する!!前を守れよ!!やたろー!!」
指示とともに楯を挙げ馬で走る私の前を守り走る男たち

その道の先に静まっていた空の合間を縫った雷鳴が響く
来る朝の向こう
夜は最後の咆哮を挙げ

激戦最後の火花を大地に咲かせた
「美しき」道しるべ
示され道。。。。「戦え」と闇は吠え私は体を奮わしまっしぐらに
本陣に向かう

気合いで体は熱くなる
最早雨も風も私の体の一部だ
これほどに。。。。

「私は嵐だ!!!」

偽りの「義」を振りかざし不埒な安らぎを謳歌するオマエ達の嘘の

衣をはぎ取る
そして
私は「炎」だ
炎国の鬼たちもが恐れるほどの紅蓮の炎をオマエたちに焼き付ける
者!!

勢いよく進む私たちの一軍の前
栖吉の勇士を率いる金津は抜群働きをしていた
先手はもとより中軍に未だ陣をほどいていなかった旗本衆までおも
混乱に陥れ
大きな声で名乗りをあげた
「鬼人」の降臨に逆らえる者などいない
鉄槌たる槍は政景の旗本たちを次々と屠る
頭を砕き
血の雨と吹き出す霧

朝靄に生ぬるい暖かさ
千切られた体からあふれ出た血と臓物。。。寒さ近づく山麓に湯気
の山を築く

恍惚に私の口元は笑う

それは報いと

阿鼻も叫喚も
私に対する「恐れ」は全てが「賛歌」である

オマエたちの安寧と欲望の果てに死を
泣いて
泣いて

泣いて
自分たちのしでかした「欲」の業火に焼かれて死んで行け！！

「私はこの先の道を切り開く者なり！！！」

目の前に迫る本陣前の抵抗はまるで無力だった
私は馬の鞍から少し腰を上げる
矢をつがえ体をしならせる
それに合わせたようにやたろー達も槍を担ぐ

目の前
驚愕の面を情けなくも晒した。。。。。間抜け者に叫んだ

「政景！！！！」

死ねと

その３３　私は嵐　（６）（前書き）

残酷な描写があります。。。。

その３３　私は嵐　（６）

雷鳴がとどろき大地に光が走った時
暗闇を突き破り
朝日を背負った「影トラ」の姿は政景にもはっきりは見えていた

だが
見えるだけ
体は堅くかたまり腕には痺れさえもあり何が出来るという状態ではなかった
ただ
冷えた体に熱い「恐怖」が汗になって流れるだけ

それは
そのままこの軍団「政景軍」の全てをも見事に現していた

本陣を囲んでいた旗本衆の姿は
出陣の時に見た「威風堂々」とした胸を張った煌びやかな部隊ではなかった
水に濡れた紙切れのようにボロボロに崩れていく鎧達。。。。その輝きを飾るのは

「血」

流される赤い熱い血と肉を刻まれ溢れ出した「中身」

本物の
「戦」に対して脆かった上田家臣団は

その弱さを補い合う事などまったく出来なかった
出来ることは共に倒れて行くことだけだ

激突してきた「栖吉」に
諸手をあげて涙を流し悲鳴をあげて敗走して行く
その背中を槍で突かれ
投げられる石で頭を砕かれ
槍と刀の輝きに虹が架かったように見える「血しぶき」は少しずつ
姿をあらわした朝日に照らされ

今までで一番煌びやかな装飾に変わる

紫水晶の粒のように美しく煌めき大地の元に。。。。骸の体を飾る
のみ

政景の目の前
中井が大きな声を
もはや喉から煙りが出るほどにすり切れてしまった声を上げ指示を
しているが
指示は届けども
理解が返ってくる事はなかった

誰もが自分に「助け」がくると思いこむだけで手一杯の状態
指示など
無意味。。。

暗闇の夜こそ終わりを告げつつあるのに
「政景軍」に降りかかった漆黒と「絶望」は振り払うことはできず

けして晴れる事のない闇として覆い被さって来ていた中
震えた己の足をひっぱたいて
政景は自ら床机を蹴倒し立ち上がり槍を持ったが
心はすぐにへし折られた

「政景！！！！」

槍と怒号
男達の戦場という黒い波の間を切り裂く声の主

「影トラ。。。。ァア」

政景の口には震えが走っていた
うまく言葉を発せられないほどに唇は引きつり
喉の潤いは失われていた
上がりきった息がもれ苦しい返事

頭の中はもっと混乱している
まさか「大将」自らが突撃してきて自分の首を獲りに来るなど考えられなかったが
現実はそのまま

怒りの声の主は馬にのり「鬼」を連れて向かってくる

槍を身構えた政景の前
中井が叫ぶ

「殿を守れ！！！与一郎！！勝六！！彦五郎！！」

陣幕の中
連れだってきた若い仲間「近習」たちも政景本人と変わらないぐらい震え上がりながらも槍を身構えた

風が目の前を走る
迫り来る「影トラ」を政景は見つめた
兜をつけず
髪を「炎」のように振り乱した
赤き衣の「鬼神」

煽られて見えた目には「殺意」が
口元は嬉しそうに静かに動いた

「死ね」

覆い被さる錘
政景の体はいきなり押され崩れその上に「何か」が落ちた
体全体を覆うように
倒れ込んだ政景の目の前に槍が落ちている

生暖かいものが首筋をつたう

目の前を追った黒い闇の果て
赤い痛みで息を吹き返す
圧迫された体から

声にならない叫びで自分の近習を呼ぶが聞こえるのは激しい「歩行(かち)武者(むしゃ)」の足音とひたすら続く「怒声」ばかり

帰らぬ返事に諦め
手を伸ばし
痛みの元を確認しようと首を振る
押されたために失っていた感覚を少しずつ取り戻し
手を。。。指を動かしてみながら息を整えた時

「わ。。。若殿。。。政景様。。。」

政景は己の体を覆うように落ちてきた者がやっとわかった
「中井。。。中井!!」

自分の前を守った老将の声は掠れ震えどこかから漏れてしまっている
息はヒュウヒュウと心許なく継がれる

「中井!!」
立ち上がらない家臣の体を起こし
顔を向けた時に。。。。それが何かがわかった

中井の首には「影トラ」の放った矢が刺さって
首。。喉の下を貫き右肩の後ろに鏃(やじり)は肉を裂いて飛び出していた
声はその「血」の穴からも漏れるように聞こえていたのだ

「中井!!」
政景の目には涙が
夢中で矢を引き抜こうとしたが中井はその手を。。。それでも「最

後」の力を使って止めた
止めた手
雨に濡れ泥を掴み守りに徹した手が政景の顔を。。。。叩いて

「若。。。退くのです。。。もはや。。。これまで」

髭に口からあふれ出た「血」が全てが赤く染めた時。。。中井はそこまでやっと言った
そして
風の漏れるような音になっていた声は止まった

「中井!!爺!!!」
息は静かに消え
目に光は無くなった

政景は中井の体を揺さぶりながら抱き起こし周りを見てそれでもなお己を奮わし周りで昏倒する兵たちに叫んだ

「柿崎殿が来るまで!!!まだ負けてはおらん!!!」

だが
誰もその声に心を止めなかった
ただ中井の足下
泥にまみれ背中に矢をいくつも飾ったまま転がっていた使い番が
体を起こすことなく下から政景を仰ぎ見て答えた
息も絶え絶えしかし
「皮肉」を告げるためにか歯を見せて

「柿崎景家（かきざきかいえ）」殿。。。。とうの昔に返り忠（かえりちゅう）いたしております」

膝が崩れ力が奪われた。。。

政景の目の前遙かに先を
走り抜ける「影トラ」
それに続く大きな「守護代旗」が米山の峠を登って行く

その先「真成る主君」の登城を待ち旗と槍を構えた柿崎が見えた
「絶望」が政景の心の奥を砕いた

息を失った中井の肩を押さえたまま政景は叫んだ

「勝六!!!与一郎!!!答えろ!!!」
それは呼ぶというよりは泣き叫ぶという声
見捨てられた子供のように
ただ泣き叫ぶ

めまぐるしく動き消えていった守りの者たちを探した
捜しながら
目の前の惨状を見ながら

何故こんな事になってしまったか？
何故こんな所に来てしまったか？

頭の中には色んな思いと
「晴景」の言葉

「父。。房長」の言葉
「国分」「樋口」の言葉

「影トラ」言葉。。。。。。。

何故。。。。それほどに「大事」な事であったこの「戦」の中身を
知ることが出来なかったのか？

手のひらに広がる
まだ
温かい中井の命。。。。「血」に涙がこぼれた
これは。。。

「貴方に「義」は無い」

「影トラ」の言葉が鮮明に脳裏に響き渡った
「義」無き「守護代軍」は滅びた。。。。
絞り出すように助けを呼んだ

「勝六。。。。与一郎。。。勝六。。。。与一郎。。。答えろ。。。。」

あたりを見回し何度も呼ぶが答えは「血」の溜まりに沈んでいた

「勝六」はすでに首が無くなっていた
切り取られ後の首
木の幹のように残っている
体にはあの大男たちの飛ばした「犬槍」が二つ
腹を抉り肩を変な角度にはね上げ千切れそうに腕をぶら下げていた

「与一郎」は。。。。。顔がわからなくなっていた
顔に槍を受けてその頭蓋は「破裂」していた
体はただ。。。。驚いたまま「恐怖」の最後の時を焼き付け両の手
は「天」を仰いだまま倒れていた
それが「与一郎」とわかったのは。。。。
あの自慢げに着けていた輝く青色の甲冑のおかげだった

政景の近習
それももはや無言の死に体になってしまった
「戦」の仕事に働かない体に。。。。輝く鎧など。。。

政景の手の中
そして見える全てには「死」しかなかった
その目の前を艶やかに飾った兜首である政景を見つけた足軽が殺気
と褒美を見る目で殺到していた

「爺。。。もはやこれまで。。。」

目を閉じた
せめて最後の顔が情けないものでないために

風を切る「槍」の音
迫る乱暴な足音

「御首頂戴(みしるし)！！！」

最後。。。

その声は遠かった
迫っていた足音たちは大地に転ぶ
ぬかるみにニブイ泥の音

覚悟を決め閉じた目を開けた政景の前。。。。雑兵を蹴散らした男
は大きな声で

「遅くなりました！！！殿！！！」

「彦五郎。。。。」

大きな背中
頭に木綿の布を巻き付け血に染まった顔を汗と雨に濡らした彦五郎
は声を上げた

「国分隊！！！樋口隊！！！殿を守れ！！！」
囲みを破って本陣に殺到していた兵をなぎ倒す男たちは
みな傷だらけだったが高い「士気」を纏っていた

国分隊
生き残った樋口の部隊までつれて彦五郎は本陣まで走ってきたのだ

「中井様。。。。ご無念。。。」

振り返った彦五郎は政景に肩を支えられたまま生を終えた中井に向
かって手を合わせ無念の瞳を指で閉じた

「彦五郎。。。。」
「申し訳ありませんでした。。。。遅参。。。まことに」

政景は首を振った
絶望の「戦」の中「義」無き自分は捨てられる者だったところを
あれほどに邪険にしていた彦五郎が助けに来た
その体に数多の傷をおったまま

「彦五郎。。。佐渡守(さどのかみ)は」
「父は。。。。もう」

血がつたう目の中に涙は光った
それを手が拭い振り払って

「殿!!退いて下さい!!ココは我らが防ぎます!!死んでも防いでみせます!!どうか坂戸に」
「彦五郎!!」

立ち上がり防戦という最後の「戦」に己の死に場所を見つけた彦五郎の肩を飛びつくように政景は掴んだ

「もういい!!行くな!!与一郎も。。。勝六も討たれた!!この上。。彦五郎オマエまでいなくなってしまったのなら。。。わしは。。。わしは。。。」

力は肩を掴んだ手にだけ宿っていた
彦五郎に十分に伝わるほど政景の「痛み」そして「後悔」だった
敵をあなどり多大な被害を出し
多くの家臣を「死」に導いてしまった大将の「哀願」を
彦五郎は受け入れた

「わかりました!!ならば今すぐココから退きましょう!!影トラは必ず「追い落とし」に入ります!!下で待ちかまえる栃尾軍の間を縫って「坂戸」に」

政景に掴まれた手を握り替えし涙の彦五郎は吠えた

「必ず!!!必ず!!!坂戸まで殿をお守りします!!!」

彦五郎の熱い返答に頷いた政景は今は手も届かない遠い峰となった
米山の峠に。。。
頂に顔を向けた

燦然と朝日を浴び大きく翻る多数の「長尾守護代旗」
風は強く大旗に「命」を与え
並ぶ数多諸将の旗に共をさせていた

雨は。。。。。終わっていた

「長尾守護代軍」の名に足りる事のなかった政景軍は敗退した

その３３　私は嵐　（６）（後書き）

改訂版。。。。

こんちゃ～～後書きからコンニチワ～～ヒボシです

なんかすごく久しぶりです～～
後１つ書いたら「私は嵐」の章が終わり
新章に入り。。。。
終わりに向かって加速していく事になります

ところで。。。。。
「祠」の章から向こう十話程度を改訂しました
以前は「初陣」「吉報」の章の後すぐに「別れ」に繋がっていたのですが。。。。
それだと「陣江」の存在があまりになく
そんなに存在感がないのに（藁）トラの事でいっぱいいって。。。。
と作者的にも「可哀想」かな。。という事で
間に「祠」の章を先に入れ直しジン君の救済をしました（爆笑）

いやいや
本当
もっと作者の稚拙すぎな進行状態で書きこぼして締まった部分がおおすぎた結果
修正。。。。「改訂」もやむなしという事でなおしました。。。。

ごめんなさい。。。。（涙&陳謝）

さらに一章分を削除しました
長くても意味のない章があったのなら「無駄」なだけなので

そんなドタバタなヒボシですが
これからラストに向かってがんばって遺構と思ってますのでよろしくお願いします！！！

次回は後書きに人物評も書きます～～～～
ひさしぶりに

それではまた後書きでお会いしましょう！！

その３３　私は嵐　（７）（前書き）

終わりませんでした。。。「私は嵐」。。後一話続きます

その３３　私は嵐　（７）

「戦」は終結を見た
米山の峠から見る「元」守護代軍の姿は千切れ飛ぶ紙切れのよに見えた
数では私たちを圧倒的に上回っていた「軍団」だったが
中身は腐ってしまった「古木」。。。

私は私たちを照らす眩しい朝日に目を細め
髪をつたう雨を払った

雨の終わり
今まで心にまで降りていた闇の緞帳は消えた
目を今駆け上がってきた側
石川の向こうに向けた
「追い落とし」に軍団という形を失い散り散りになってゆく「集団」を見ながら

「古木」で思い出した事に一人納得して頷いていた

あれだ
いつか「宇佐見」との禅問答で話したあの「木」と一緒だ
優雅を誇り美しい花を咲かせはするが
根本は腐り
危険を隠す者
近づく者にとって有用ではない「滅び」への道に手招きする「花」

政景（まさかげ）。。。。オマエは滅びの花を咲かせようとした。。「暗愚の君」
だ

先陣の場所に馬廻りたちと共に立ち
翻る大旗「長尾守護代旗」を見あげた
風の中悠々と揺れる姿に張りつめていた気持ちがほんの少し緩んだ
のか
肩を落とした

眠らぬ夜を走り続けた「戦」は終わった。。。。でもまだ。。。
目を閉じて心を整える
手のひらを開き
閉じ
かすかに震えている事。。。。

しかし
体は燃えるように熱い
ただひたすら
熱を発して「戦」を。。。。追い続ける気持ちが
さらに前に体を推し進めようとしているのか。。。。

手を開く。。。。
もう一度閉じ

「大丈夫か」

馬上から下ろしていた右手のひらを閉じようと動かした指に冷たい
指が絡んだ
目を開け下を見る
返り血と雨
泥をかぶったまま顔のまま。。私の顔を，じっと見あげたジンはも
う一度聞いた

「大丈夫か？」

ユカケ（手袋）もつけていないジンの手は少し冷えている感じ

「ジンこそ。。。大丈夫なのか？」

未だ楯を構え
陣内を守る備えのままだ
眉間に「不安」を現している顔に向かって

「これが戦だ。。。。」

一度はうつむきジンの顔を確認してしまったが
見てはいけない。。いや。。。
私の顔を見て欲しくは無かった

上がり続ける息を正しながら
空の方に向いた

「トラ。。。。指が。。体が震えてる」
咄嗟に

ジンに掴まれていた手を引いた
「寒いからだ。。。」

指先に触れる感情
私の溢れ出している「怒り」をジンに見透かされたようで。。。恥ずかしい
それは「震え」じゃない
震えているのではなく
私は「揺れている」。。。。。あらゆる感情をつぎ込んだ「戦」に酔って。。それに気がつかれたくはない

「追い落としを見届けたら。。。柿崎の城に入る。。。体を温めよう。。ジン」

張り上げていた声をしまい
落ち着いた目でジンを見ながら馬を歩かせた
馬を曳きながらジンは
彼自身を落ち着かせているのか少しずつの言葉を返した

「トラ。。。トラのしなきゃならない「仕事」はよくわかっているつもりだ。。だけど無理はするな。。絶対に」

「無理など。。。。してはいない」

かるく首を振って
私は自分に言い聞かすように答えた
「無理」など絶対にしていない。。。むしろ心は「戦」を渇望しているのではないのか？
そう思ってしまうほどに全ての感覚が尖ってきていた
だから

顔は合わせないように周囲をのぞき見るようにした

「とにかく本陣に行こう」

「ですから虎御前様が「危ない」のです」

馬をおり
本陣を構えた丘のうえ
陣幕をくぐる一瞬前に段蔵の声が母の事に触れたのを聞き取った

「母上が危険とは?」

幕をあげ睨む視線で段蔵に問いつめた
まわりのみなも今まで開いていた口を閉ざし声を抑えている

「母上がどうしたのだ?」

鋭くなった私の詰問に段蔵はその場に控えて答えた

「これより「芝段蔵」与板の兵を率い「春日山」に向かいます。。。
影トラ様にはココにて」
「母上が危ないのかと聞いている!!」

飛び込んだ言葉を遮る者の後ろは
何を隠した

睨む私の前，段蔵は

「いやいやいや！！虎姫様（虎御前）は危ないのではありませぬ！！」

緊迫した陣内に
血みどろの甲冑姿の男が白い歯を見せて間に入った
「どういう事だ「金津」！」

この戦で大暴れをした金津は段蔵の横に控えると
「虎姫様自らご出陣なさるのです！！晴景の首を挙げるために！！」
「黙れ！！！」
金津の口元目がけ段蔵は拳を当てた
転がりながらも騒音を続ける金津をやたろーが捕まえる

「母上が出陣。。。。。兄上の首を獲る？。。。。どういう意味だ？」

私は混乱した
この「戦」が始まる時もっとも心配だったのは「母上」の事だった
私が「戦の根元」について兄上に申し立てするために「力」という手で旗をあげれば
春日山にいる母上に危害が及ぶことはわかっていた

が
段蔵の話し
「直江」の手配にて絶対にそのような事にはならぬようにする事を確約していた

なのに

何故

母上が兄上を?何?

「段蔵。。。。。」

口を押さえられた金津に向き

やたろーに手を放すように目で指示した

「どういう事だ」

私の質問に金津はひれ伏して答えた

「この日を待っていたのです!影トラ様という力を得て「戦」に勝った今!!栖吉長尾に対する数々の仕打ち「積年の恨み」を虎姫様(虎御前)御自ら最後の決着を付けられるのでございます!!」

血が騒ぐ「積年の。。。」その言葉が頭の中を大きく揺らした

息を熱く吐いと刀に手を掛けた状態で聞いた

「何がだ!!!母上はいったい何をしようとしているのだ!!!」

怒りのまま金津を打ち据えようと進む足の前に段蔵が走った

「お話いたします!!!心を穏やかにしてくださいませ!!」

手を挙げ懇願する段蔵

「言え。。。何も隠すな」

私の言葉に段蔵は目配せして陣内幕の方まで下がっていたやたろーたちに金津を抑えさせた

「冷静にお聞き下さい。。」
そういうと刀の大小をはずし私の前に伏した
「米山の戦に勝った今や春日山に味方する者はそう多くはおりません。。これより「和議」を申し入れ影トラ様の願いどおりの守護代様（晴景）との話し合いをする事が大事にございます」

私は秋山が持ってきた床机に座った
「和議の話しと母上と。。。どんな関係が？」

質問に段蔵は顔を曇らせた
何にそれほどと窓つているのか
余計に苛立ったがひとまず体の内に抑えたまま聞いた

「答えろ。。。。隠し事など。。。許さんぞ。。。」

「虎御前様は。。。和議を望んでおりませぬ。。。その手で晴景様を討とうとお考えなのです」

時が凍りつく
背筋にも冷たく走る緊張
「何だと。。。。」

曇った表情に必死の弁を乗せ段蔵は続けた

「事は急がねばなりません！！この戦の「勝ち」は明日を待たずに春日山に報告される事でありましょう！！そうなれば城内は大騒ぎになります。。。その時を狙って虎御前様は晴景様を討とうと行動を起こされる可能性が高いのです！！」

揺れる
何で母上は
何で
兄上を
目眩で顔を押さえようとした私の隣にいたジンが
取り繕うように

「でも。。。御前様一人でどうこう出来る事じゃないだろう？」
質問に段蔵は「本当」に隠さず答えた

「虎御前様の侍女達は「忍」の者たちなのです。。。この時を」
「この時を待っておったのじゃ！！積もる恨みの首を御自ら挙げようとされる母上を誉れに！！」
懸命に私に話す声を金津が蹴破って入った

亀裂。。。。。
頭が
割れる
真っ黒に。。。。染まる。。。。

「誉れ。。。だと。。。」
真っ黒だ

この世は未だ。。いやずっと「真っ黒」な闇だ
私は立ち上がり陣幕の中にいる男どもに背を向け歩き出した
「どちらに!!」

答えなど
答えなど
拳を振るい手を挙げて怒鳴った

「諸悪の根元は全て滅せねばならん。。。。」

目眩と頭痛。。。。
心に響く声は言った
「この恨みを晴らせ!!!」

「おまちください!!!どちらに!!」
足下にしがみつくほどの勢いで転がるように伏す段蔵。。。。。

オマエたちは。。。。「身の内」に「悪」がいる事を。。。私に告げなかった。。。。
怒りは満ちて
心に満ちて
峠の向こう
朝日に峰を照らされた山を斬るように指を指した

「春日山を「撫で殺し」にする!!」

愕然とした表情の男たち
何を今更と踵を返した
兄上をその手で仕留めようなどとする母上をどうして許せるか！！！
そこまでの「恨み」を放置し続けた兄上を許す事などできるか！！！
許すことはない。。。政景。。。。「長き恨みを」

「この恨みを晴らせ！！「積年の恨み」をはらせ！！」

闇は何度も私にただ叫ぶ
真っ暗に染まった心真っ赤に燃える「憎悪」

私は馬に向かって走った

その３３　私は嵐　（８）（前書き）

後書きに人物評追加～～～
良かったら見てやってください～～～

ヒボシ

その３３　私は嵐　（８）

混乱が頭の中にあった思いを黒く塗りつぶす
それは「悪」だ
肉の親族で有りながら「計略」を持って首をとるなど。。。。
ただでさえ熱くだっていた体に油を注がれた
唸りながら何度も首を振って「闇」の火に飲み込まれていく
ただ一つ自分の中に残った物は

それは
「悪」の成せる業だ

その言葉だけ
私を留めようとする声を斬り走る
このまま春日山に。。。。。

「おまちくださーい！！」

後ろを追う者たちの声などいっさいが「悪」を隠蔽するための「言い訳」だ
止める足などもたぬ！！
勢いをつけて走る足
振る腕を段蔵が掴んだ
掴んでそのまま私の前に伏した

「直江様を。。。。直江様が春日山におられる事を」
「それがなんだ!!悪は滅する!!春日山こそが「不義成る総本山」
!!許すことなどできん!!」

段蔵に掴まれたままの手をふりほどこうとする間に他の者たちが私
の行く道。。前を塞ぐ
手を刀に滑らす
この道を邪魔だてするものは「悪」を助長する者と断ずる
だけど
段蔵は
そんな火の出るような勢いの私の前で頭を深く伏して懇願した

「春日山でそのような事がおこって終わぬようにこの「戦」の間も
詰めておられた「直江様」を「信じて」くださいませ!!」

「何を信じるんだ!!オマエたちの手の中にある「謀」をか!!」

思わず握った小太刀の手をジンが掴んだ
「落ち着けよ!トラ。。」

その手がさらに私に触れようとしたが触らせなかった
ジンの体を殴り倒し
距離を取った

真っ暗だ。。。。

私の頭の中は真っ黒に。。。
深い闇の淵に落ちていくような感覚の中
周りがどんな事告げようと目の前にあるあの山を見つめた

あれは。。。。
揺れる
あれは。。。。

「現世(うつしよ)だ」

響く声
あの「祠」で見た
御仏達が演じる「地獄」の風景にかさなる

現世は「争い」で溢れている。。。。それも血肉を分けし「兄」に
対して弓を引き
その兄に母が手を下そうとする

「晴景を屠れ」
煌めきの閃光の中闇は私を揺さぶりだした
その中でも
目の前に頭を大地にすりつけた段蔵は語った

「虎御前様を抑えるためにも「和平」を速やかに進ませるためにも
「直江様」が春日山から離れず職務に就いていたことを理解して頂
きたいのです!!」

息を切りきりと挙げたまま熱く吐き出す

「母上を抑えてどうする。。。こんな状態で「和平」など。。。」
「そのような事態にせぬために我ら「与板衆」今より春日山に向かいます！！」

「なんじゃと！！！」
やたろーに抑えられていたハズの「金津新兵衛（かなつしんべえ）」が段蔵を起こし叫んだ
「じゃなにか！！与板は。。。「直江殿」は我らを裏切って春日山での仲裁を買って出た上で。。己だけ「いい顔」を」
「黙れ！！！」
襟首を締め上げられていた段蔵は自分の目の前で唾を飛ばして「裏切り」と直江を罵った「新兵衛」を殴り倒した
転げ飛ぶ金津は，またも秋山たちに抑えられたが
罵倒が留まる事はなかった

「それとも何か！！！直江は。。。自ら守護代にでもなるつもりか！！！」

その口をまたも段蔵が殴った
「黙れ。。。。そんな狭き事言っているのではない！！」

新兵衛は血反吐の口までもふさがれた

立ち上がった段蔵は私に向き直り
今一度座した

「直江様を。。。信じて下さい！！！今！！このまま我らが春日山に進軍してしまえば城内の「混乱」を避ける事は出来ません。。。その混乱に乗じて御前様が行動を起こしてしまったら。。。もう誰も「長尾」を信じる者がいなくなってしまいます。。。お願いです。

。。心を落ち着かせて。。。」
必死の説得をする段蔵の肩を与板衆のために馬を用意してきた「柿崎」が叩き続けた

「まず。。。春日山の内部を止める仕事をする者が必要。。。その上で影トラ様にはココで「芝」をふんでもらわにゃならんのです。。。この「戦」。。耐えねば成らぬ「戦」でもあるのですぞ」

冷静になれば。。。
私の心がこれほどに「闇」に近くなければ。。。
それはわかっていた事だった

この「勝ち」に乗じて春日山に兵を進めてしまえば
私に従うと「今更になって」兵を挙げた者たちが「汚くも」まさに今更の「首級」を挙げようと我先にと春日山を落とそうとしてしまうだけど
私がココで「芝を踏み」陣を構えて「和平」を望んでいる事を示せば。。。。
我先になどと勝手に兵を進める輩を留める事が出来る

だけど。。。
それで母上の暴挙は止まるのか？
いや
そんな「横暴」を行おうとする母は「悪」ではないのか？

そのうえでココまでした先にある「勝利」にどんな意味が。。。。
頭に痛みが走る

声
母上の声
まだ若い。。そんな感じの柔らかさと幼さの残る声が耳の奥に響いた

「栖吉は生きるために忍び戦うのです！！ならばこの身を使わす事
は私の「出陣」でありましょうや！！」

母上は春日山に。。。「出陣」していた。。。。

「おトラの出陣を助けろ！！！」
闇の主
子供の声が私の背中を押す
もう一度心を刺すように

「おトラ助けろ！！！」

そして
霞む心の景色の中
幼き母の前に立つ影が。。。。言う

「おトラの信心がきっと栖吉を救う日がくるよ」

これは「信仰」の定めた「戦」。。。なのか。。。。
私は頭を掻きむしった
涙が。。。

「それは修羅の信心だ！！！それは「悪」だ！！！それは滅びるべきだ！！！」

怒髪の元狂うように体をよじり
絞るように叫んだ

「春日山滅するべし！！！！」

指を今や朝日に照らされ姿を隠すことなく現したあの山に指し示した
その声に狂喜した新兵衛は，抑えていた秋山の手を振り払って飛び出した
「それでこそ「虎姫（虎御前）子息！！憎き晴景の首をはねとばしてやりましょう！！」

何に喜び？
躍り出る色黒に私の心底はわかっていない

「兄上に「死」をと叫ぶのならば。。。。母上にも「死」が必要だ。。。」
私の言葉に笑っていた顔を止めた新兵衛は驚き
目を見開いて私の顔を覗いた
「何をおっしゃっているのですか。。。。母上様は」

おだやかに
新兵衛に告げる

「それは「誉れ」ではない。。。」

尖った青眼の私に恐怖したのか彼は膝をついた
「ではなんのために。。。「栖吉」は。。。」

「栖吉。。。。上田。。。。。どの長尾にも「義」はなかったのだ」

そうだ
正しい者のいない一門がどうして「越後」を導く者になれるのか。。。。
願うように答えを待つ金津に激高した

「己が親族を「謀」にかけねばならぬような一門がどうして「越後」に善を敷くことが出来ようか!!!兄上!母上を滅して私も死ぬ!!」

そういうともはや「言い訳の問答」に返す答えを見ず
刀を抜いた

「まず。。。新兵衛。。。オマエから死んでくれ。。。何。。心配はいらぬ「役目」を果たしたら私もすぐに参るから。。」

私の顔はどうなっている?
私にはもう理解しようもなかった
笑っていない事だけ。。。。
その前
抜かれた刀の前に膝を落とした姿は力無くこぼした

「影トラ様の死など。。望んでおりません。。。」
首を振った
だが「戦」を望む以上は「死」に向かうしかない

「闇」の向こうに。。。。。逝こう

腕を振り上げた

「トラ！！！」
微動だにしない
その声にはもう「未練」はない
だが続けて彼は呼んだ

「虎千代！！！」

闇の向こう。。。。意識が割れた
振りかぶっていた
刀を投げるといつの間にか私の肩に手を掛けていた彼の顔を
「虎千代！！！」
殴った

「私は影トラだ！！！虎千代じゃない！！！」

血しぶき
近い場所
ふれあってしまうほどの位置にあったジンの顔は口元を殴打され苦痛に歪んだまま私に問うた

「影トラ。。。。トラなんだな?。。。。。」

目が眩しい朝日に瞬く
「ジン。。。私は。。。。。」
「トラなんだな!!!」

ジンの血が顔にかかる
見開いた目のまま答えた

「影トラだ。。。。。」

私の返事にジンは頷いた
覚めた視界の中，伏したままの「段蔵」
その後ろ。。。同じく私を見ている「柿崎」
力無く膝を屈した「金津」を支える秋山達

「私は。。。影トラだ。。。。。」

ジンの手は強く私を捕まえたまま言った

「信じろよ!!!オマエを信じてココまで戦ってきた者たちを。。。
。信じろ!!!」

大きく体を揺さぶる
声と
熱い血

押しとどめていた心の。。。悲しみと苦しみが溢れた

「母上が。。。。。兄上が。。。。。」

ジンの。。。真剣な眼差しの中に写る私は。。。泣いていた

「母上が。。。。どうして。。。兄上が。。。いやだ。。。殺し合うなんて。。。そんな事。。。イヤだ。。。」

どうにもできない感情
首を振る私を
ジンの手が頭を。。髪をなでて落ち着かせる

「だから!!信じろって。。このアタマデッカチ!!オレはトラを信じてる。。。同じぐらい「直江様」も信じてる!!!オレの信じる「直江様」をトラも信じろよ!!「オレ」の言うことを信じろ!!!」

溢れた涙の私の額にジンの額が当たる
「信じろよ。。。。みんなが「越後」のために「戦」という仕事をしたり「知恵」を絞って戦ったりしてるんだよ。。。。ココにいるみんな戦ってるんだよ。。オマエ一人だけで抱え込むなよ」

辛かった。。。。心が壊れてしまいそうだった
壊れてしまいそうな心の弱さが「闇」答えを求めていた。。。。
「ジン。。。。。ジン。。。。私は」

「オマエは「影トラ」。。。。俺たちの大将。。。オレはトラが迷っちまいそうな時はいつだって。。。側にいるから。。。だから頑張れ」

ジンに支えられた私の隣，段蔵が伏して言った

「信じて下さい。。。必ず守護代様と「和平」を。。。そして虎御前様をお止めします」

ただ頷いた

「頼む。。。」

私の前

落胆で膝を屈していた金津に柿崎が話しかけていた

「金津新兵衛。。。長尾が滅んでしまったら。。。夢も希望もなくなるだろ。。しっかりせえ」

起こされた金津に私も

「新兵衛。。。私は母上にも兄上にも死んで欲しくないんだ。。わかってくれ。。」

気落ちした背中はただ頷いてくれた

煌めく朝日の中

私は私の起こした「嵐」に心を吹き飛ばされてしまいそうになっていた

支えられたまま

先の山を見た

「大丈夫だ。。。信じろ」

ジンは肩を強く支えて励ましてくれた

私は。。。。

私も「耐える戦」に自分を律した

その３３　私は嵐　（８）（後書き）

人物評

後書きからコンニチワ～～～ヒボシです

結局。。。。
すったもんだで一章ふえてしまった「私は嵐」でしたがなんとか無事に通過しました～～

この章を作成している間に「祠」と「別れ」改訂と「禅問答」を新設全１１章分の書き直しをしていたりでなかなかに大変でしたがこれにてだいぶんと内容も充実してくれた事でしょう。。。（特にジンとか（爆））

そんな「カイビョウヲトラ」も第一部という括りにすれば後少しで終わりです
応援してくださる皆様に感謝～～～嬉しいです～～～

ラストに向かって！！！
人物評！！

長尾影トラ

主人公にして苦行のような「戦」に常に勝利しテンパッテいる女城主様（藁）
１８歳なのに。。。ちょっと可哀想なぐらいだが

そこわそれ。。。
やっぱり「女の子」だもの涙がでちゃうよ～～（あんなに次々に問題噴出じゃあねぇ）
親族同士の「戦」の中身がさらに根の深いものであった事に愕然
黒い意識の声にもばっちり唆され
「春日山」を撫で殺しにする！！！っとかって激高！超テンパリだったが
段蔵の手配り
直江への信頼
最後は
ジンに諭されて大泣きして承諾
現在「米山峠」付近と「柿崎城」に本陣を張り諸将の無用な「乱心」を助長せぬように「芝を踏む」

加当陣江（かとうじんえ）

砦の合戦から向こう。。。。殴られっぱなしのジン。。。
愛する彼女の鉄拳は「愛」か？
痛すぎる「愛情表現」の「猟奇的な彼女（トラ）」にそれでも付き従うジン。。。君。。ええ男やなぁ（爆）
もはや「戦」でテンパッたトラの暴走を止める事ができる唯一の存在にもなりつつある
それは周りの男たちも認めていて「トラ」と呼び捨てている事は暗黙の了解になっている
だが
ジンが本当に心配している「存在」はトラの。。。。中にある何かにもあるようだが？
現在は本陣にてトラのお守りに徒事中。。。がんばれジン！！

芝段蔵

砦の合戦から向こうあらゆる「頭脳戦」を「直江」の指示の元，実践してきた段蔵
旧友「中西」をつかっての「流言」などで
米山合戦で数で勝った「政景軍」を崩壊させるのに一役買う
また
「虎御前」が虎視眈々と「晴景」の首を狙っていたことに最初に気がついたのも彼
お付きの侍女たちが「忍」の者たちで城内の混乱に合わせて行動を起こすであろう事は直江にも報告済み。。。
「御前」を止めるために
現在「与板衆」５０騎をつれ春日山に向かっている

本庄実乃

砦の合戦から向こうは存在がちょっぴり薄いが（藁）
米山合戦では追い落としの最後を討伐する部隊として活躍
本陣にて影トラがテンパッた事は知らない（藁）
現在本陣に合流し後ろから「合力」に集まる諸将に目を輝かせ注意している

金津新兵衛

「栖吉長尾」の斬り込み隊長（注．そういう役職はありません。。ものたとえです（藁））
砦の合戦から向こう実乃に変わって大活躍の黒い人（地黒）

最終戦の米山では積年の恨み積もる「上田長尾」の労将「樋口兼村」を討ち取り「政景軍」の崩壊に王手！！
実は「虎御前」の「晴景抹殺計画」を知っていた人
勢いに乗った「影トラ軍」で春日山を攻める事を進言するがそれがトラをテンパらせ「怒り」をかってしまう
本人に「悪気」はないのだが。。。。（そもそも忍従をしてきた「栖吉」の悲願を具現しようと意気込んでいただけですし）
そんな事をしてしまったら全「長尾家」が崩壊してしまい兼ねない事に気が付けなかった
現在は本陣にて実乃と共に「合力」に集まる諸将に注意をしている

小嶋弥太郎

砦の合戦でも大活躍！！
最終戦の米山でもトラと共に馬廻り衆として「突撃」の活躍を見せたやたろー
木楯を持ち犬槍装備の重歩兵隊といったところか
現在は本陣にて詰めている

柿崎景家

守護代様から「戦目付」として今回の「政景軍」の行軍に参加したが最初から政景に従うつもりはなかった
負け続ける政景軍はそうとう退屈だったのか最終戦の米山にて「帰り忠」する
粗暴な風体とはうらはらに春日山の直江と連絡を取り合い
現在は柿崎城に影トラ軍本陣を置き
無用な「乱心」で春日山に迫ろうとする諸将に目を尖らせている

「上田長尾」
長尾政景

圧倒的な数。。。。その軍団の中身の「士気」を最後まで把握する事ができなかった政景
「戦」は数の勝負であるという「王道」を鵜呑みに戦ってしまったのが彼の最大の敗因だった
「兵糧」に「兵站」
大事な補給の部分を最初から欠如させていた軍団の士気はかなり低くなのに
自分の近習の「意気揚々」さに乗せられ
砦の合戦では先制パンチをくらう
その「戦」。。。。紅蓮の炎をつかった影トラの戦に魅入り「完全な勝利」に執着するも
「戦」の中で休息をとってしまうという「大失態」にて米山合戦に「完敗」
（段蔵。直江の頭脳戦略にて「宇佐見」も敗退。。。この事が政景の元に伝わらなかった事も大失態の一因である）（また「影」の報告が途切れている事に注意を働かせなかったこと。。。最大の敗北原因は「重臣」の意見をないがしろにした事にもある）
後一歩で「討ち死に」というところで「彦五郎」が救出に参上
現在は「坂戸」に敗走した模様

「上田長尾家臣団」
樋口兼村

若すぎる政景の制御のために従軍した老将は米山にて「散華」する
焦燥しきった政景軍を守るため自ら前進するも「金津」率いる「栖吉衆」に真横を突かれ「樋口隊」は崩壊
最後の一線「渡河点防戦」の国分に並び殉ずる事のできなかった己の不甲斐なさに苦しみながら「国分」に一礼しその命を散らした

国分佐渡守

若く本当の「戦」というものを知らない政景のために従軍した知将は米山にて「散華」する
最初の出陣から向こう「兵糧」に「兵站」。。。。。殿(しんがり)を勤め
さらには「戦術」の指導までをこなした「いくさ人」にして知将国分ではあったが
その心意気は彼が生きている中において政景に伝わる事はなかった
渡河点防衛の戦において「老将樋口」討ち死にのダメージを回復する事はできず
そのまま討ち取られた模様
息子に自分の生き様を殴り叩きつけたように「政景」にも教えていれば。。。。その死をくやまれる将であった

国分彦五郎

国分佐渡守唯一の子
関東での敗北から流浪の地での仕官
本物の「戦」を数多経験した若き武者は「政景」の父「房長」に見いだされ近習となり政景軍に従軍していた
逸る政景に従い何度もの「諫言」をするが受け入れられずそれでも彼に従って戦ったが。。。。
米山の合戦では前哨戦にて「石礫」を頭に受け倒れたことが幸いし

最後の最後で政景救出に成功する
現在は「坂戸」に敗走している

与一郎と勝六

政景近習だった二人は本物の戦場を知らず
数で戦う事が全てと信じてしまったつかの間の「平時」に産まれて
しまった者たちだった
二人とも米山にて戦死。。。。

中井外岡

政景の爺
若く血の気の多い政景を一人で制御する事は難しいと「戦」には二
人の「将」をともなって参戦したが
最終的には彼「中井」が米山の本陣を指揮した
しかし戦況を回復する事はもはやできぬ状況になっており
最後は政景を「影トラ」の矢から守って憤死

「栖吉長尾家」
秋明院

虎御前の母上にして未だ権勢を振るう「尼武将」の大御台
高梨と合力し「坂戸」に対して宣戦布告
現在も緊迫の状況が続いている

長尾景信

現在の栖吉長尾家当主
虎御前にとっては義理の兄に当たる「妾腹の兄」
極めて暴力的（薫）な栖吉の女衆（秋明院とか。。虎御前とか。。。）たちの中にあって
冷静にその軍事をサポートしている
現在も緊迫する「坂戸」との関係の中
緊張の糸をしっかりとたもっているのは彼のおかげ

「春日山」
虎御前

古くからの因縁
彼女に言わすのなら「不義の子」である晴景と「実」を屠るチャンス到来
本来なら「栖吉長尾」の決起を食い止めるための「人質」として「春日山」に留め置かれていたハズの虎御前だが
今やその中身を食い破らんとする「刃物」と変わっている
お付きの侍女たちは「忍」の者たち
己の手によって「不義の子」晴景を断罪せん立ち上がろうとしているが。。。。
それが「彼女」の幸せなのか？

実

春日山城下の屋敷に住まう実様にも最後の決断の時せまる
「あなたの子を殺さねば」と言った虎御前

そんな事が起こらぬ事を祈り続けた「母」にこの「戦」の勝敗は大きくのしかかる試練
彼女もまた運命に翻弄されている

上杉定実

実の夫にして「傀儡」とはいえ現越後国「守護」の彼はこの「戦」。。。
そして
絡み合った「過去の因縁」に対してどう立ち向かうか。。。。。
しかしそれを知る事は彼にとっても「苦痛」の始まりではないのか。。。。
運命は過酷だ

長尾晴景

政景を使い「影トラ」の討伐を試みたが失敗に終わった今。。。。
春日山に住まう「兄」晴景はどう動く？
すべての決着は。。。。

ラストに向かっての人物評
これから
絡み合った「過去」と現在の「戦」がぶつかり
隠されていた心の部屋は押しつぶされ溢れ出す
影トラ

晴景
虎御前
実
上杉定実

それを囲む全ての将たち。。。。
「本当」に勝利などあるのだろうか？

最終決戦近づく！！！
これからもがんばってかいていこうと思ってます！！！！

それではまた後書きでお会いしましょ～～～

その３４　牙　（１）

「長尾政景殿！米山峠にて「影トラ」様率いる栃尾勢に大敗！！」

驚愕の報告に晴景の顔色が変わる事はなかった

「そうか」

白い顔
整った目鼻立ちは微動だにしない
変わらないどころか
いつも以上に落ち着いた表情に何かを悟ったような「目」が
覚めた視線で白湯を飲みながら答えた

緩やかなのに見え隠れする深い影
晴景の姿に「直江実綱」間逆の態度を顔に表した
険しくなった視線

その日
事態は急転した

最初の使い番が春日山に入って四半刻（三十分ぐらい）もしないうちに

二の丸にある直江の屋敷には「春日山城」に詰めていた家臣たちが
我先にと波のように駆け込んでいた

それまでの「戦況」が春日山には伝わっていなかった事で
急な「敗北」
目前にまで迫っている「影トラ軍」事「栃尾勢」に驚き
その勢力をめぐる
近隣諸侯の動きも合わせて

越後の。。。。。春日山の現状が「危機」のど真ん中にいる事を確
信したのだ

「直江殿。。。。」

まだ朝餉の時間だったこともあるのか
「髷」を綺麗に結い合わせていない者さえいた
一番早くに居間に目通りしたのは白髪を引っ詰めたままの老中
よほど慌てて来たのか
草鞋もはかず
この冬の迫る土の上をなりふり構わず走ってきていたようだった

「落ち着かれよ」

唯一「柿崎」とつなぎを持っていた直江の元に人が集まってしまう
のは仕方のない事だったが
集まった家臣たちにはこの事態は「青天の霹靂」だった

たった一月（ひとつき）
春日山に「次期守護代の地位」を我が者にせんと乗り込んできた「
政景」が

その地位を「確約」された「仕事」として息巻いて
大手を振って出陣した
「収穫」という大事な時期にありながらもの大軍勢五千を動員した
近年では希ともいえる「数」を要した討伐軍

どう考えても勝算を挙げることのできない「栃尾」が
まさか
「進軍」してくるなど考えもよらなければ
その少数の軍勢に「負ける」など目が覚めても「夢」としか思えない事態だった

「負け。。。。これは。。。事実にありましょうか？」

最初の質問をした白髪は走り疲れてしまったのか顔を真っ赤にしたまま肩を顔ふるわしている
その後ろに次々と並ぶ家臣たちの中
余力のあった若い家臣が
屏風の向こう。。。城に上がるための支度についている
顔の見えない「直江」に「念を押す」ように聞いた

「事実だ。。。。今から守護代様にお会いする。。みな努めて冷静でいてほしい」

明確な返答に「釘」を一つ
滞らない声で騒ぎを助長しないようにと付け足す
家臣たちが騒ぎ立てれば
春日山全体に動揺が走ってしまう

まだ。。。すぐには「あの方」も動きはしないだろうとはいえ。。
「危険」はもはや「身の内」にもあるのだからこそ
「冷静」でなくてはならない
自分の髷を今一度
不作法になっていないか手で確かめ，気持ちを正すように襟を合わせた

屏風の向こうではこの「事態」を正確に把握できない「不安」でざわめきのまま汗を拭う者たち
直江はゆっくりと屏風より姿を現して告げた

「みな，慌てず！静かに。。。お待ち頂きたい」

だが。。。。
城内の重臣一同と家臣たちがこの屋敷に駆け込んでしまった事で。。。
尋常成らざる事態が目の前に着ている事は隠せない

直江は着物の袂を手で押さえた
後は「ココ」に示されたように導く事が直江の仕事
無き御屋方。。。「為景」の意志を

残された時は少ない
早足に屋敷を後にした

「和議の手紙を預かっております」

最初に「政景」の大敗を告げた時と変わらない素っ気ない返答
火桶に手をかざしたまま白湯の杯を下ろした晴景に少しの「動揺」
も見られなかった
「和議。。。。？何のだ？」
「先ほど告げましたように。。。」

「影トラと和睦しろと？何でだ？」

溜息
美麗な眉を少しだけ傾かせ
まるで迫って来ている「事態」を無視するかのように手元の「水丸」
に急須を持たせ薬湯を注がせる

直江は不審に思いながらも続けた
できれば「人払い」もして貰いたかったが「火急」で入った知らせ
を躊躇する事ができず
この部屋に「水丸」がいる事を許さねばならなかった
時は待たない
構えていては手遅れになる

だからこその渾身の「策」を今。。。実行せねばと思いを改め続けた

「政景様は先の「戦」にて「守護代様の命（命令）」により「栃尾」
並びに「影トラ様」を征伐についたと。。。その旨を声高く宣言し
ております。。。それに端を発しての「戦」を収束せねばなりませ
ん！このたびの「戦」は政景殿の独断による動きが大きく，それに
より春日山は「煽り」を受けている身にございます。。。努めて「

戦」は晴景様の意志ではないとおっしゃいくださいませ。。。その言（言葉）をし，影トラ様との和解を進めます」

「ああっ。。。確かに「影トラ」を討伐せよと政景殿に「わし」が命じたな」

柳のように直江の堅い言葉をかわして晴景は微笑んだ
軽く頷きながら
念を押すように
「あの命（命令）はわしが出したものだ。。。間違いない」

「それはわかっております」

直江の額には少しの汗があった
今日の晴景は「違う」
政景を嗾け「討伐」という戦は「決定」であると宣言した爆発的な
「怒り」を携えた鋭さのある態度ではないが。。。

穏やかな笑みの向こう
心の中を読ませない

いや

見えていても口出しをさせない「異常な」柔らかさが直江に緊張の糸をさらに強く張らせた

「なれば。。。すぐにでも「和睦」を。。。」

直江の重い口調と視線を見ない晴景の顔は外の音に向かっていた
それは直江にもすぐにわかった

何かがこの部屋に向かって猛然と走ってきている
回廊の板を叩くように響かせた足音を引き留めようとする「侍女」たちの声
その「悲鳴」にも近い制止を振り切って割った者は
晴景の部屋の襖。。。障子に指を食い込ませて開けた

「。。。。綾姫様。。。。。」

直江は多分「重臣」の誰か。。。。か？
と思っていた
足音の激しさから痺れをきらした「老人」たちかと

しかし
目の前にいたのは
淡い水色
絹の打掛を乱れたままに息を挙げている「綾」

目は驚きに開かれたまま
滑り込むように直江の前に割って入ると怒鳴った

「政景様はどうなったのですか！！！！」

細い指
白い手
柔らかな女の腕。。。なのに信じがたい強い力で，直江は襟首を引っ張られた

「政景様はどうなったの！！！」

唾
涙

普段の「貞淑」な姿からは想像も出来ないほどの狼狽ぶりを隠すことなく「綾」は顔を歪めたまま，直江に詰め寄った

「政景様は。。。ご存命なの？生きて。。。」

直江は襟をを惹かれ胸ぐらを掴んだ手をなだめるように押さえながらそれでも口調はゆっくりと，考えられた答えを返した

「わかりません。。。ただ御首（みしるし）が挙がっておりませぬ故。。。坂戸に落ち延びられたのでは？」

今，直江に必要とされている重要な事は「戦」の趨勢であって政景の安否など，どうでもいいことだっただけにそこを問われる答えを準備してはいなかったが乱れる事なく妥当な答えは伝えられた

「どうか。。。落ち着いてください」

襟を。。。

掴んでいた手は小刻みに震えていた
綾の大きな黒目は涙で溶け出てしまいそうなほどに「悲しみ」と「驚き」に溺れていた
静かに
直江の襟を離す

「どうして。。。。こんな事に。。。。。」

綾は。。。。力無く崩れる体は
目の前
変わらぬ表情で薬湯を飲んでいる晴景に聞いた

「わしが聞きたい。。。何故負けたんだ?あれほどに「兵」まで与えておいたのに」

飲み干した杯を前に下ろし
冷たい目は答えた
冷めた口調は綾の「望む答え」を与えるようには動かない

唇がただ震え
言葉がこぼれ
手で口を塞ごうとしても。。。。心の悲鳴が喉を通り。。。。流れ出る

「兄上の命（命令）に従って。。。。「戦」にでたのですよ。。。なのに。。。」

ふらつく綾の体を侍女達が支えた
「わしの命は。。。。「影トラ」を討伐する事だったハズだ。。。

「負けろ」などと命じてはいない」
冷たすぎる兄の答えに綾は崩れ嗚咽した
それにさえ気にもとまらぬのか

「無様な。。。。敗軍の将は「討ち取られる」のがこの世の習いだ」
追いついてきた「侍女」達も晴景の容赦のない返事に凍りついていた
集まった者たちの「驚き」にも動じない
冷徹の「守護代」は溜息を一つ落とすと告げた

「もし生きながらえているのなら。。。。「恥ずべき事」よな」
最後の釘を晴景は深々と倒れ込んだ綾に背中に刺した

「死んでいて欲しいと願うだろう。。。不名誉を重ねた「夫」など」

「いやっ」

冷たい眼差しの前に一度は崩れた体を大きく震わせて綾は否定した
立ち上がると
涙の目で訴えた

「生きていて欲しい。。。どんな事があっても。。。私のところに
帰って欲しい」

晴景の目は「綾」を見なかった下ろした杯を眺めているだけ
腰の扇に手を添えて

「手紙を書きます！！！坂戸に！！」

そう言うとそのまま礼もせず来た廊下を泣きながら走っていった
そのけたたましい足音にまたも「侍女」達が走って従った

障子は開かれたまま
ただ風
だけが入る静かな部屋にもどった中
晴景が直江に向かって呆れたように

「騒がしい「女」だ。。。まったく」
直江も少しの間にめまぐるしく起こった喧噪に呆けていたが
乱れた襟と胸ぐらを正すと

城内でも「戦」の顛末が知れ渡った事を確信した
綾姫が。。。。「敗北」を知った。。。。という事は当然「虎御前」も。。。。

もはや猶予は無い

咳払い
騒ぎに一段落の合図をし
平に伏して晴景に言った

「どうか「影トラ様」と和睦をそれが「越後」の混乱をいち早く終わらせる「最善」の方法になります」

「直江。。。。。」

さっき。。。綾を問いつめた時のような口調にこの日初めて晴景は「怒り」を乗せて答えた

「影トラとの和睦など。。。。絶対にない」

その３４　牙　（２）

開けられたままの襖
綾姫が矢の勢いで飛び出したままの間
どこかにぽっかりと穴の空いた景色の中に浮かぶ「梅」の木
まわりには木々はなくただ一つだけ
寂しく広い庭に立つ

それは
かつて晴景が奥方「麻」を労って「植樹」したものだが
今は「守護代」晴景の孤独な姿を映しているようにも見えた
緩やかな風，間を静かで冷たく流してゆく

「和睦しない。。。。というのですか？」

直江の
目の前に座っている晴景は外の静けさと同じぐらいに静かだ
どんな威しにも微動だにしない
まるで彼自身が「木」となり移り変わる季節を眺めるように
この「喧噪」を見ている
しかし
やはりただ世の中を達観した「古木」ではない「晴景」

中身に「怒り」を満ちさせている

静かなのに「怒り」に染まる目は隠せていない
だからといって急に自分の表情から冷静さをうしなうような真似は

しない

「怒り」を露わにしなくとも
じわりと滲み出る「苦悩」を面に秘め沈黙を守る晴景にむかい努めて同じ口調で直江は続けた

「それは得策とは言い難いものです」

今までどおり
理詰めで話す
今の二人はどちらも「中身」の感情を面にだす事なく，揺れもしない
動かぬままの間に少しだけ聞こえる「虫の音」

朝日の下に消えていく名残の音の中
晴景はやっと問いに答えた

「得?。。。。誰にとって「得策」なのだ?」

「守護代様。。。。あなたに「得」ひいては「越後」にとって有益である「策」を奉ずるのが家臣であるワシの勤めにございましょう」

直江の
気迫は言葉と「声」そして「目」に強い意志をやどせらせて向かい合う晴景に告げる
が。。しかし
絶対に伝わっているハズの「気合い」に今日の晴景は揺れない
はぐらかすように
薄い唇の
口元を少しだけ笑わせてみせる

「言うてみよ。。。。その策」

余裕？
直江は勘ぐりながらも，迫る時と戦う自分の「策」を奉じた
だいたいの事は先に言ったのと同じだ

このたびの「戦」は「長尾政景（ながおまさかげ）」の「手柄取り」に焦った間違い
守護代である晴景が政景を「嗾けた」のは事実だが
「栃尾」との「戦」を望んでいたわけではなく「疑い」にかかった
「事実確認」のための話し合いにての「調停」を願っていたとする

「影トラ様には「政景様」の行為はまことに遺憾な事であるとおっしゃればよろしいのです」

要は
責任の転嫁であるが
この「戦」の勝敗は上田長尾に言い訳を作らせないほどの大きな失敗になっている
「無謀な戦」で弱り切った「上田長尾」は「程度」守護代が提示する条件をのまざる得ない
その条件は
「春日山」に「参勤」する事。。恒久的な「和睦」の証として
それまで守護代に逆らい「参勤」もしなかった政景は自ら出張って自ら「墓穴」を掘った
都合の良い自分のための「戦」に大敗を喫した

それは隠すことのできない「負け」で
その負けによって周りに「弱み」を見つけられてしまった上田が「

存続」するためには
無条件にでも「春日山」と手を結ぶことしか残っていない
それを「否」と
いまさら言い逆らっても
まわりにいる「諸侯」が納得しない

「上田長尾の処遇」についてはこれでなんとかケリをつける事ができる
というか
さしもの直江をもってしても。。。。

これしか「策」が浮かばなかった

事態は引くに引けないところまできてしまっていたからだ
直江の「謀」の「速度」を上回った「影トラ」対応は，今まで「右往左往」しているだけだった「越後」の諸侯の足並みを強制的に揃わせてしまった
いや
いやおうなく揃わざる得ない激しい「嵐」となって目の前までやってきた
しかし
揃った足並みの「諸侯」が目指しているものが
「影トラ」の求める意志とは一致していないのが大きな問題だった

「打倒守護代」

噂に振り回された「守護代」をこの時に屠ってしまおうと考える輩
がいないとは言い切れないほどの切迫した状況
「敵」が「守護代様」なのでは？と
事態が変換されてしまっているのが現状だ

本来なら
最初から「政景」が「戦」で苦戦する事は見越していたとして
負けても数で勝る「軍勢」に食ってかかる事はなく「持久戦」に入
るだろうと読んでいた
その間延びした「戦い」の合間を縫っての「策」があった
「影トラ」と「政景」の両者を「調停，和睦」させる事。。。

そういう大きな仕事を都合良くこなす
二つの長尾の頭を抑える事のできる者として
誰が「越後」を統べる「守護代」なのかをはっきりさせたかっただ
けなのだが
そんな余裕はなくなっていた

そんな中でも
できうる事をした
「宇佐見」を遠ざけ
「米山」までの争いを手中の駒として。。。。計れるハズだった
だが

あっけなく「政景」は敗れた
それもほんの一時の間に
「守護代」が「越後」のためを思って。。。。

などという良心的な「根回し」は間に合わなくなってしまった

直江は一通りの「策」を目の前で静かに聞く晴景に伝えた

「そんなにうまくいくか？」

「うまく運ぶためにも。。。。「上田長尾」に腹を斬って貰わねば成りません」

「越後」全土を巻き込んだこの「戦」で「詰め腹」を斬る者が必要文字道理の「切腹」ではなく

「大敗」にうちひしがれた心にさらに「臣従」せよ！という楔を打ち込むという詰め腹

「この機会を「良い方向」に使わねばなりません。。。「長尾守護代家」を盤石とするためにも「上田長尾」には責任を取って貰わねばなりません。。。。そう上で「影トラ様」と和睦し晴景様の「権威」を」

「それが優良な策なのか？」

念を押すように「策」を語る「直江」に晴景は言葉を遮って聞いた

「これにて国内が静謐に返るならこの上ない上策とぞんじますが」

「そうか。。。。」

つまらなそうな返事
影のかかった目には高く空を見あげた

「その「策」の中。。。。ワシはどこにいる?」

現実に差し迫っている出来事に終始していた直江には溜息程度に返
された言葉の意味がわからなかった
そのせいか少し驚いた顔になっていたのを晴景は卑屈気に笑いなが
らもう一度問うた

「その「策」にワシは必要なのかと聞いているのだ」
「守護代様があるからこそ調停という手を打つことができるのです」

時を惜しむ直江は二の句を告げぬ早さで言葉をかえしたが
やはり晴景の心が揺れている感じはしなかった
むしろ
一本筋の通ったものを持っているからか
冷静だ

「直江。。。。オマエが守護代であったのなら。。。。」

上座にすわったまま
明け放たれた庭の向こうに目をむけたまま

「それがどんな出生であれ。。。オマエであればみなが納得した事
であろう」
「何を言われますか!!」

寂しげにかげる目はけして直江の顔を見ようとはせず
ただ
空に問いかけるように続けた

それは「昔」の話し。。。。

「あの頃。。。。まだ父上がご存命だった頃。。。オマエも，わしも傍らにて「戦」の日々を送ってきた」

事態を早く取りまとめたいという思いはあったが
直江は逸り始めていた気持ちをぐっと堪えた
相手の話も聞かねば
晴景の「心内」もなだめなければ「策」を成功に導くのは難しいと考えたからだ

「オマエは。。。。父上のお気に入りだったな」
「よくしていただきました」

「戦鬼為景（いくさおにためかげ）」は
古い重臣たちばかりに囲まれて「政」や「戦」に邁進したわけではなかった
古きも新しきも織り交ぜ
あらゆる年齢層の者たちを分け隔て無く
自分に仕えさせた

「戦」だけに重きを置くのであれは「宇佐見」のような男を徴用す

ればよかったのに
それをしなかった
むしろ戦が激しければ激しいほどに「年若」の者たちと共に前に進み
自らが先頭に立って戦う姿を見せ続けた
その傍らに直江を。。。そして晴景を横に置いていた

夕闇の近づく陣
あれは「戦」の中での事だった

「まめだな。。。」

まだ顎に髭ももたなかった晴景は一段落付いた「戦」の合間を縫って「軍学書」を読みあさる直江に言った

「わしは。。。戦う事で「心まで」。。。手一杯だ。。。他の事など考えるなど。。。とてもできない」

初陣以来
晴景は自分にかけられた「ある疑い」を晴らすためなのか？
遮二無二戦っていた
「噂」

「為景の実子ではない」

豪放で知られた為景はそんなくだらない事と言い捨てびくともしなかったが

晴景の心がそれに苛まれていた事は直江には良くわかっていた

夕日に照らされた陣幕の片隅
本陣に居場所をみつけられない「鬼」の息子は直江の横に座った

「親方様（為景）から。。学べと頂いた本ですから」
「そうか。。。」

晴景は直江ほど体格に恵まれた男ではなかったが「戦」での働きぶりはすざましかった
だけど。。。どこか「投げやり」な戦い方で。。。「命」を晒した姿は見ていて痛々しささえ感じられた

元来
性質優しい晴景に「戦」は不似合いだった
その優しい顔が溜息をつき，暮れてゆく空を見ながらこぼした

「オマエが。。。。オマエが父上の「息子」だったのなら。。良かったのになぁ。。。」

直江は。。。簡単に答えられなかった
「戦」のたびに猛るように「前線」に飛び出し若き日の「戦鬼」を演じていく晴景
そうする事でしか「実子」である事を証明できないと思っている姿が。。。。悲しく見えた

「オマエは文武に秀でた男だ。。。父上もその事を好ましく思っておられる。。。いずれ養子にでもなったらどうだ」

「そんな事は考えた事もありません。。。ただ仕えられる事が喜びにございます」

「それはいかんな」

その声は陣幕の後ろからした
酒の壺を持った為景に二人は立ち上がって礼をしようとしたが

「かまわん!!無礼講だ!!」
そういうと自ら二人の目の前に腰を降ろした

「実綱!!ただ仕えるだけなど!!小さな事を言うな!!」
大きなお椀にも近い杯になみなみに酒を注ぎながら「鬼」は言った
話しを聞かれた事で少し肩をすぼめてしまった直江は困ったように酒を貰いながら

「いえ。。「長尾家」に仕えられる事を。。全てを喜びとしております!!」
「かっかっか!!心がけはいいな!!だがもっと!!もっと大きく学べ!!」

豪快な笑い声
今回の戦は。。。。勝てた訳ではなかった
疲弊している陣内にあればこそ為景はいつも「強い姿」を見せ続けていた

「晴景!!」

同じく大きな杯を渡され酒を煽っていた息子をつかまえて
「明日からは「政」を学べ!!そして二人でこの「越後」を支えていけ」

「父上。。。。」
「このたびの「戦」で大方の仕事は片づいた。。。。「戦」ばかりが「守護代」の仕事ではないからの!」
夕日を浴びながら顔の斬られ傷をさすった「鬼」は直江の肩をつよく引いた
そして晴景の肩を掴み寄せた

「オマエ達は。。。ワシの。。「越後」自慢の息子だ!!」

射す夕日の煌めき
赤く黄金の輝きの下「戦鬼」は目を細め
息子を慈しんだ
何度も肩を叩き
心を勇気づけた

「晴景。。。オマエは越後の「真ん中」にいて政を行え!実綱。。。それを支えていけ!!」

それが
為景の願い
晴景の心に残る「父の姿」だった

「あれから。。。。ワシとオマエは各々の「戦」をしてきた。。。。
ワシは「政」に。。オマエは「戦」と「謀」に。。。」

朝の日差しが板間に差し込む
十年。。。。。年を経た二人は向きあって話しをしていた

「至らなかった事は認めよう」

至高。。。そんな「政」が成されているのならこんな「乱世」はあ
りえない
どこまでを「越後」に尽くす事ができるのか
二人ともが「希望」を
手探りで
深い闇の覆ったこの地で探していた

言葉をなくし沈黙する直江に晴景は聞いた

「影トラに「何を」見た?」

真っ直ぐな視線は直江の心を射抜いていた

「希望」

直江は首を振った

「影トラ様は守護代様の「お役に立ちます」。。。。それだけの「力」を見る事はできました」
「謀は巧くなったが。。。嘘は下手だな実綱」

晴景の目は優しかった
微笑む顔で直江を見ながら。。直江の隠した「言葉」を見つけていた
のだ

答えられない
言葉を連ねる事はむもはや無意味
晴景は相手の「心」を手に取るように知る事のできる「守護代」な

「希望を見たであろう」

冷たい風は
細く部屋の中に流れ込み

去来するものは。。。

晴景は腰に差していた扇を持ち顔の前で開いた
直江の答えがどれほど「良心的」であっても
もはや受け入れる事はできなかった
細い指先が扇を一枚ずつ開く

「戦も政も。。。。「中身」は一緒だ。。。。。」

区切りをつける声
そう言うと顔を隠した

「和睦はしない」
はっきりとした意志がはなたれる

「何故ですか！」

艶やかな扇の向こうに隠されていた「怒り」は急に燃える炎がごとく立ち上がった
丁寧で，か細かった声はなりをひそめ
「戦」で発せられる「強い」響きが唸る

「妹の勝利に乗って行う「政」に誰が従うか？」
「勝利ではなく。。。手違い。。。上田に」

「くどい！！」

怒りは，けして顔を見せようとはしないが
十分に伝わる「気」を声にのせ発しながら直江の「願い」を断ち切った

「守護代である自分の吐いた命（命令）をもう一度飲み込み知らぬ存ぜぬなどと。。。そんな恥知らずな「策」の真ん中にワシは立たんぞ」

煌めく扇の向こう

「怒りの炎」は熱く燃えた

「水丸!!!」
それまで黙し晴景の後ろに控えていた彼はすぐに返事した
「はい!!」

そして晴景は続けて己の近習たちを呼んだ

「坊丸!!藤丸!!時輔(ときすけ)!!智徳(ちとく)!!」

呼び出された名の下
近習たちはみな即答する
いつの間に部屋の前に並ぶ彼らの姿に直江は驚いた
すでに纏われている具足姿の「いくさ人」

かつては「衆道」のために置いていると思われていた「美童(びどう)」達だったが
今は
勇ましき「武士(もののふ)」となっていた

「春日山並びに府内の全ての門を閉じよ!!ワシの命（命令）あるまで開ける事はならん!!」

「どうするつもりですか!!」

立ち上がった晴景の足下に直江は顔を上げ
仰ぎ見るように聞いた

扇は顔の前からさらに高くにあげられ

この戦いを高々と宣言した
「戦」に赴く
強い目は輝いて答えた

「春日山にて影トラを迎え撃つ！！」

晴景は敢然と牙を剥いた

その35　心

「待って下さい！！」

号令を発した晴景
背中を向け部屋の奥に戻ろうとする姿の後
発された指令に従い走り出した近習たちの
けたたましい足音に逆らうような大きな声で直江は晴景の足を止めた

「今まで。。。今まで戦を避けて「穏和」なる「政策」でココまで
やってきたではありませんか。。。なのに何故！何故に今回に限っ
て「戦」なのですか！！」

止まった足取りの上，必死の言葉に体は少しだけ揺れた
「穏和なる政策。。。。それで「越後」に平安な日々が訪れたか？」

弱く細った体の晴景だったが今日は。。。言葉にもその体にも熱い
ものがみなぎっている
背中を向けたままでも気迫は感じられるほどに
言葉は静かなままだが。。。。
きっと顔には「鬼」が現れていると感じられた
「希望」の一つも映すことのない漆黒の「覚悟」は尖ったまま直江
にもう一度聞いた
「いつ。。平安になる？」

「これで。。。。今回のこの「事故」を遣ってそうなります」

直江は答えは。。。いつになくたどたどしかった。。
その答えをだしながら自問していたからだ
それは不可解な問いだった
何故に自分にその「問い」をしたのか？
それは
直江の領分ではない「志」であり

「平安なる日々」

それは。。。。
晴景が求めながらも「穏和」という「政策」ではどうしても得ることのできなかった「希望」
返された言葉の「真意」は
晴景自身が自分に問うた言葉だった

「力が必要だったのであろう」

深層にあった思いに口を閉じた直江に晴景は続けた

「故に，今こそ守護代たるワシが「力」を示そう」

直江の目に映る背中
晴景の姿は
あの茜色の夕日の時とかさなる。。。。

その昔。。。。。

己の「存在」という「価値」を捜し
命を投げ出すように戦ってきた「男」の姿

「力は。。。。」

それを示すのは「守護代」である貴方の仕事ではない。。。。。

口からあふれ出そうになった「進言」を腹に抱え込んだ直江

そんな事が。。。どうして「今」言えるものか。。。
体には震えが
ただうつむき。。。今まで戦ってきた日々の事を反芻する姿は
「苦痛」。。。。。晴景はきっと感じていた

自分にも。。。直江にもできなかった「希望」の在処

背中越しに少し緊張を弛めた声

「直江。。。オマエはオマエに「課された」仕事をしろ」

そういうと奥へ。。。今度は止まることなく歩いていった
襖が静かに閉まっていく途中
「始末をつけねばな」とおそらく少しの笑みで語った
隙間が小さくなって行く先。。。まだほんの少しの間の中で
直江は引き留める言葉を探したが。。。。

見つける事はできず
ただ
拳を板間に静かにそれでいて重く打ちつけた

沈痛な想い

直江にも。。。。残っていた「痛み」
為景亡き後
二人で力を合わせて。。。「越後」に尽くしてきた日々
だが
願いは遠くなってしまっていた
そして「志」は，すり切れ

緩慢な「治世」

いや
各々の「痛み」を和らげる「曖昧」な治世しかできなくなっていた
事を思い知らされた
そして
そんなふうに痛みは和らいだ。。。「妥協出来る政」を直江自身が
探していた事に気がつかされた

きつく結んだ直江の目に。。。。光る痛み

晴景は「痛み」を忘れることはなかった。。。。

針のむしろに座りながらも「守護代」という仕事を
その責任を

どうやって自分の手でとるかを考えていたのだ
算盤（そろばん）の上
動かすことも計ることも出来ないものがあるとするならば。。。
どれほどに「利潤」が自分の側にあったとしても
その「富」を受け入れる事ができない想い。。。

それが「人の心」

理想とする想いに反した「政」に対する怒りと
落胆
それでも長く
十年は執政の仕事に関わった直江には。。。それしか「妥協」の
必要な「政」にしか行き着く事ができなかった

そんな曖昧な時の中に輝くように現れた「希望」
それは
親方，為景に約束された「御仏に選ばれし子」

影トラ

まぶしさに
心を

その「戦」に魂を揺さぶられた
「妥協」を必要としなかった。。。あの為景の強さを受け継いだ「当主」の出現
たとえそれが「女」であったとしても
その功績の前に。。。。

やっと
「平安」を手に入れる「力」そして「希望」が。。。

剛の男は頭をかかえた

「何故。。。今」

その希望を汚泥にまみれさせて。。。。「復権」を。。。。

「影トラ」を利用して「越後」を長尾の元に一つにする事
それも晴景の元に国をまとめる事ができる最大の「機会」などと思っていたのか

だが
絵空事ではなく「実施」できる策を奉じるのが家臣の勤め
目の上のたんこぶであった「上田長尾」は影トラによってあっけなく敗れ
今や「守護代」の仲裁なしには立ち直れないところまできている
その宿敵に「汚名」をあずけ
それを「許し」
国を纏め上げることが「容易」なところまでの「策」は

直江の鮮明な頭脳に出来上がっていた

なのに「心」はそれを受け入れなかった
直江自身も。。。。
また
晴景も

「妹の勝利」
因縁深き「血」の戦いは元より
そこには

「守護代」という尊厳がしっかりと残っていた

直江は背を正し天を仰いだ
深く息を吸い
残念を今度は音高く両手で板間に叩きつけた

「何故ですか。。。。どうしてですか」

謁見の間には直江しかいない
静かすぎる屋敷の間に一人

滾る想いは。。。もはや届かなく
ただ沈痛な静けさの中に。。。。沈むのみ

だから後ろに近づく足音は余計に大きく聞こえていた

「直江様！！」
「なんだ！！！」

周りの慌ただしさが酷く勘に障ったのか怒鳴ってしまった
縁側には重臣の一人が息を切らして
普段物静かな直江の激怒に少しばかり驚きながらも
真面目な顔のまま問うた

「春日山並び府内の全ての門を閉じて。。。。影トラ殿と「戦」するとは。。。本当の事か？」

それは
つい先ほど晴景が発した命（命令）
「いや。。。それは得策ではない」
「得策？何を悠長な事を言っておられるか？守護代様の近習たちが全ての門に人を配っておるのだぞ？」

「何だと？！」

白髪に細面の重臣は目を開き
直江を見つめ返して

「そういう指示を聞いていたのではなかったのか？。。。。直江殿？」

直江は自分の手足もとを見直した
晴景と話しをしてからどれほどの時を。。。。一人黙してしまっていたか？
それほどに長く「思案」にくれていたか？
時はどれほど流れた？

いや

思い直して「反省」している場合ではなかった
即座に立ち上がり回廊を足早に「評定の間」に向かった
その背中に白髪の重臣は従いながら聞いた

「我らにも「戦」の支度をせよとの通達ぞ。。。」

命令はすでに春日山の全てに流されてしまっていた

「春日山にて影トラ殿を迎え撃つ。。。。。との事ですが」

評定の間に余った重臣並び家老の全ての者達に困惑が現れていた
普段なら入る事のできない若い家臣も，所狭しと部屋を囲んでいる

「報告では影トラ様は「柿崎城」に本陣を構え，さらに打倒守護代に同意する者たちを集めていると！」
「向こうの数は今や五千とも六千とも。。。そんな者たちをどうやって迎え撃つのですか？」

晴景との謁見からたった半刻（一時間）
すでに春日山の城内には「無責任な」情報まで飛び交い始めていた
とりまとめである直江のいなかった間に広まってしまっていた「不安」

「おちつけ」

まるで自分の騒ぎ立ってしまった心にまで命じるように直江はざわめく家臣達を止めた
乗り出しそうだった老人たちを手で征したが
騒ぎが止まる様子はない
その間を割って年若の家臣が直江に問うた

「お教え頂きたい。。。「戦」になる事は間違いないのか?」

隠せない事
晴景が政景をたきつけて「戦」を起こしてしまった事実は
春日山に詰めていた者ならみな知っている

「戦になる」

隠し事で騒ぎを助長する事はしない
はっきりと断じた答えを直江は返した

その厳しい表情とはっきりと明言された「戦」という言葉に一瞬場は静まったがざわめきに変化してしまう前に直江は続けた

「このままいけば「戦」になる。。。だがそうならないようにしている」

「影トラ様は打倒守護代の旗印としてココまできたのでは!!その先にあるものは「守護代様」の。。」
せっぱ詰まった状態

誰もが熱く上り詰めた思考で「不安」と止める事ができない

「違う！！」

最悪の結果に急ぐものたちの気勢を止める

「断じて違う」

手をかざし気持ちを強く抑える

「しかし。。。春日山の目と鼻の先。。面前に陣を構えておられるのですよ」

最初の質問をした若き家臣の顔に苦悩。。。。

「たとえ「戦」になったとしても「春日山」は落ちん！！越後随一，難攻不落のこの城が落ちることはない！！」

直江の気合いの入った返答に家臣一同のざわめきは静まった

「今は各々守護代様の命に従い。。。。慎重な対応をして頂きたい」

慎重な対応。。。

それは

晴景との謁見で

自分を忘れ

時を過ごしてしまった直江自身への戒めでもあった

「いくさ」の支度に入り

評定の間は直江をおいて一人だけになっていたが

襖の後ろには「中西」が控えていた

「春日山はどうなりましょう？」
今やみなが心配に思っている事
「春日山は。。。。落ちない」
思い詰めた返事
拳を強く握った

「晴景様。。。。。」
血という因縁に縛られて自分を見失って「戦」の道へ踏み切った
そうであるならば
直江にも「止める事」が出来た
だが
「違う」。。。。。
あれは「守護代」としての覚悟だった
そして「尊厳」

「妹の勝利に乗っ取った政」
そんなものに誰が従うか。。。。。
もっともな事だ
だがもはやその尊い覚悟だけでは「戦」を征する事の出来ないところまできていた
何故今。。。戦う？

「春日山が落ちぬのならばその間に，影トラ様との「和睦」を結ぶ事もできましょう」

主の苦悩に何かしらの助けを出したい「中西」は襖の向こうから聞いた
問いかけに直江は首を振った

「春日山は落ちない。。。だが。。。春日山で「守護代様」と「影トラ様」がぶつかってしまったら。。。「越後」は深い混乱の時代に逆戻りだ」

そこまで言って
直江は。。。。目が覚めた

「始末をつける。。。。。？」

この「戦」は長尾の同族の力を著しく衰退させていた
「上田」は収穫期の集兵で「路銀」を遣い
そのうえ長く仕えた名将を二人も失った今
近隣の豪族に攻め込まれれば「坂戸」を守りきれるかも怪しい状態だ

春日山は
もはや考えるまでもない
どんなに兵をかき集めても「五百」が精一杯だ
いくら春日山城が難攻不落の城とはいえ，押し寄せる無数の「反旗」を押しとどめる事などできない

勝者は決まっている

勝者は「影トラ」だ
だが
それはあってはならない事

「戦の後は。。。。どうなる」

直江は誰に言うでもなく考えを進ませるために
言葉にしてみる

影トラはきっと勝つ。。圧倒的な「力」で。。。しかしその後はどうなる
「守護代」の地位は「空位」になってしまう。。。。
何度も頭をこづきながら

「影トラ様に。。。。守護代？」

勝者の長である者がその地位へ。。。

直江はじっとりと静かに汗をかいている

「馬鹿な。。。」
そうだバカげた結論
いったい誰が

「女」に従うか？
「女」を守護代に頂く事など出来ない事だ

なれば答えは出ている
「勝利」の後にくるものは「絶対的な混乱」であり「平安」ではない

「合い噛み続けた「長尾」という血を。。。。。それに始末をつける」

静かに自分言い聞かすように
答え
晴景は「滅び」を。。。。。

負けるための「戦」を計画する者などいない
直江は何度も自分の額を小突いた
そんな危険な考えを自分の中に浮かべてしまった事を信じたくはなかった。。。。

「実綱。。。。。晴景と共に「越後」を頼むぞ」

為景の。。。。。最後の言葉

「親方様（為景）。。。。。その願いは消えてしまいそうです」
頭を抱えた
「もっと大きく学べ！！」

何度も頭の中に為景の声が蘇った。。。。。直江は混乱する頭の中で懸命に「大儀」を探し続けた

しかし

そういう思案の時間が多く残されていたわけではない
時は刻一刻と状況を悪くしていた
それはなにも春日山だけの事ではなかった

向かい合う両軍の「主」の意志とは別に「戦」は止まれぬところえと，さらに歩を進めていた
手の及ばぬ事と嘆いている時間など。。。。まったくなかった

北の屋形にも「戦」の報告は届いていた
静かに顔を伏せた「侍女」たちの向こう。。御仏達に捧げられて「香」の香りの真ん中
揺れる「闇」は口元に笑みを浮かべていた

虎御前

握られた数珠
あがめられる仏の口元にも静かな笑み

「時は来たか？」

運命（さだめ）の輪は周り
願いの時を告げた
揺れる登楼の火

全てが研ぎ澄まされた「殺意」の世界に中で虎御前の声だけが「神

秘」のごとく響く

「よいか」

無言の衆は静かに動く
「侍女」たちの後ろ「影」の者達はそれぞれの「支度」に立ち上がり手際よく消えていった
差し込む風に合わせ揺れる御前は
目の前の御仏に今一度手を強く合わせた

見開かれた目
白く美しい顔に。。。。。赤く引かれた「紅」は

「晴景死すべし」

優しく微笑んで告げた

その３６　運命　（１）

その日の夕餉の刻になって
いまさらのように遅い「報告」は「上杉定実（うえすぎさださね）」の屋敷の元にやってきた

「騒動」は
朝も暗い刻から，「越後」でもひときわ静かな「府内」に不似合いな「人声」が響き渡り
尋常でない数多の「気勢」に
本所に座して「品」の報告を心待ちにしている「実」は目眩を起こした

「長尾政景（ながおまさかげ）殿，米山峠にて栃尾衆率いる「影トラ」殿に大敗」という驚愕の報告

冬の近づける風。。。。
熱く逆上せてしまうような「焦り」を振り切ることはできなくなってきていた
実は額を抑えて考えた

あの「猿楽」の騒ぎによって決まった「討伐」という戦
その「総大将」長尾政景が春日山にて陣ぶれの声を挙げたのは
一月と少しぐらいの時だったハズ
あれから今日までの間
たかだか四十日あるかないかの間に「戦」は始まり。。。終わった

それも「守護代軍敗退」という驚くべき結果で。。。

何故。。。。
実は敗北の理由を探そうと色々な事を思い直すために，目頭を親指と人差し指で挟み考えた
あの「政景」が。。。何故「負けた」？

猿楽で見た政景は晴景よりも立派な体を持ち「無骨」で「力」に優れている姿だったのに。。。。
肩も背中も顔さえも「武」の嗜みをぞんぶんに現していた
なのに

負けた。。。。。？

何故
若輩の「影トラ」に後塵を期するような事になるか。。。

目眩は頭痛に変わってきていた
何処をどうして。。。
あれほどの数の兵を率いて出陣していった
自らを「力の守護代」になるとまで晴景にかまわず豪語していた男は敗れてしまったのか

栃尾衆などいくら数を集めても「千」もいかないはず
長く「定実」の代理を務めた実には
兵の「数」ぐらいなら

どの豪族，国人が多く抑えているかぐらいはわかっていたが
やはり「戦」の中身までを理解する事はできなかった

代わりに思い浮かんだのは。。。

何度目かの溜息
思い浮かんだ「最悪」を振り払った

初めて。。。。晴景の前で泣いて。。。泣いて「討伐」を拒否した時。。。。
自分の中ではこんな結果が見えていたのでは。。。。実は肩を深く落としてしまった
何故あのとき
ただ泣くでなく。。。もっと強く「拒否」し「阻止」する事が出来なかったのか。。。

いや
泣きながらも
それを「否定」したくなかったのだろうと思い返した

もし「討伐」を「上杉」の意志で止めてしまったのならば。。。
その時も「この結果」が自分に突きつけられていたに違いない。。。。

守護代に力無し。。。と

実は床の
板目をただ呆けたように見つめ続けた
屋敷の周りが未だ静まらぬ「喧噪」の中にある

深く息をつき
不安で沈んでしまいそうな
顔をあげ
気を取り直すように
御簾の間から遠くに浮かぶ月を見たが

良い思いに繋がる事はなかった
月に思い出されるのは。。。。「罪」な日々ばかりと。。。。

もう一つ

思い出したくはなかった
あの日の事
たった一月前の夜
あの満天の月を背に

口元の笑いに「狂気」を感じさせた女
「虎御前」は言った

「貴方の「子」の命も頂かねば気が済みませぬわ」

首を振った
何故
そんな恐ろしい事ばかりが自分の頭の中に残ってしまっているのかと
まだ。。。。政景が敗れたと聞いただけなのに。。。
鼓動を早め痛みを繰り返し打ち付ける胸を押さえた

「早く。。。。この事態の真実を伝えて」

頼むように
祈るように
月に向かって伏した

「体を厭いなさい」

身を丸め伏していた実の背中に，優しい声がかけられた
「あなた様。。。」

御簾の後ろに入る襖に手を掛けられる者など「彼」しかいない
心を痛め
顔色を悪くしている妻の肩を「定実」は優しく抱いた

「騒がしい事は。。。もうよくわかっている。。。明日になれば「
何が」起こっているかを知ることもできよう。。。今日は冷える。。

もう休みなさい」

実は首を振った
優しく自分を包む「手」を握って
耐えられない気持ちで
その場に伏した

「申し訳ありませんでした。。。。長くあなた様の「代理」を勤めさせて頂いておきながら。。。このような「不始末」が起こってしまう事を止める事，出来ませんでした。。。」

頭を擦りつけるように自分の前で嘆き
謝る妻に
定実のほうが小さく首を振った

「実。。。いや姫よ。。。ワシが健老であったとしても。。。うまくはいかなかった事であろう。。。そのように顔を隠さないでおくれ。。」

伏せたままの妻の肩に手を置いた
挙げた顔には堪えていた涙が
「どうなってしまうのでしょう」

実の目の前に座った定実は月を見あげながら
「わからぬ。。。」

庭先には。。。あの炎の日を越えてきた「梅」が静かに佇んでいた
定実は視線を落としその梅を見ながら
隣で不安に身を震わせている妻に言った

「わからぬが。。。直にわかる。。。それを「覚悟を持って」知る
ために休まねばなるまいて」

実の肩を引き寄せた
風は冷たく。。。。ただ透き通るように輝く月を美しく揺らしていた
実はその月に。。。。己の「罪」をただそれだけを思い出すばかり
だった

「為景。。。。。」

弱り切ってしまっていた
実を女房達に頼み
寝所に戻った定実は一人

登楼に火を灯すと小さな神棚の前
没落し消えていった「上杉」の名の位牌の前に座り
妻に向けていた
穏和な表情を脱ぎ捨て。。。。その「名」をつぶやいた

「オマエの望んだ「大器」がついにココまで来た。。。。。どおす
る？」

数珠に手を通す
いつになく自分の感覚が尖っている事が。。。。定実の体に。。。。

「怒り」が蘇っている事がわかった

「長尾は。。。。滅びる」

数珠を鳴らす
静かに何度も
手のひらに。。。じっとりとした汗
もう一度
思いを固めるようにつぶやく

「晴景は大器にあらず。。。。鬼の「力」を継いだのやはり「影トラ」だったな。。だがその力も。。きっと多くの「将」たちに「翻弄」されている事であろうな。。」

実とは違い
かつて「戦」の中に生きたことのある定実には「政景」の敗北がこの後の「越後」にどんな事態を及ぼすかを即座に理解していた

「守護代の力は「確実に」弱った」のだ

自らが嗾けた「戦」に負ける
その後にくるものは。。。。。おそらく「落日」だ

目を閉じ
きつく手を合わせ。。。。位牌に伏した
剣の立った額をさすりながら

「為景よ。。。。それは。。。誰の望みかのぉ。。。」

今は「誰が」どんな「望み」でこの「戦」に君臨しているかがわからないが
「長尾」が窮地にある事は絶対だった

だが定実に何か出来ることがあるわけでもない
もはや「囚われの守護」にどんな「力」が残っているのか

「身の内から滅びるか。。。。」

悲しい言葉ではあったが。。。同情しているわけではない事は声よりも顔。。。鋭くなった目が語っている
思い出せば
「上杉守護」をないがしろにした「男」
何度もの反抗の結果「幽閉」という恥辱を賜った事
許せぬ事で一杯だ

定実は近くに置いた急須から白湯を少し口に含んだ
渇く喉
苦しみの日々をまき散らしそうになる言葉を抑えるためか？
老いた自分の体に「火」を注ぎ込むように

「オマエは。。。。。我妻を。。。。」

白湯の杯を投げた
「怒り」という感情が白髪になった自分の頭にしっかりと残ってい

た事を確認したかのように
もう一度深く息を吸った。。。
そして

「晴景は。。。。」

喉にまで登った想いに
きつく目を閉じた

夜は深く暗く
ただ月だけが「あの日」のように高く輝いていた
そんな静けさの日々はこの夜で終わる。。。。

嵐は来てしまったのだから

実の願いを軽く吹き飛ばし
定実の予想した中身が知らされたのは。。。。。翌日の昼であった

府内の総構えに情報を求め走らせていた「品」が下男二人を連れて
戻ってきた
顔には疲労が現れそれ以上に青ざめた様子で
躊躇しながら
御簾の中に座す実と定実に告げた

「戦になります」

一声に返事を無くし呆然としてしまった実の隣にしていた定実が聞き直した

「誰と誰が戦うのだ?」

質問に品はうつむいた
定実にはもうわかっていた
自らの主である実を思って言葉を発せられない品にかわって

「守護代殿と，影トラ殿が戦うのだな」

「残酷」な宣告
夫の口からとはいえ
知らされた「真実」は実の中で思い描かれていた最悪の展開にしっかりと突っ走っていた

「いや。。。」
胸を押さえ
その場で崩れて伏した
「どうして。。。。どうしてこんな事に。。。」
すでに涙の混ざった声に品はなりふり構わず御簾の中に上がり肩を支えた

「政景が負けた今。。。。それを嗾けた守護代殿が無傷ではいられまい。。。」

自分のとなりで泣き崩れた妻を見ながら，定実は品と共に情報を集

めていた下男たちに聞いた

「今。。現在，両陣営はどうなっておるか？」

主の質問に下男たちはゆっくりとそれでも正確に知る限りの事に答えた

「現在「影トラ様」は柿崎城に本陣を構え「反守護代の御旗」として多くの国人衆や豪族を終結させております。。。数は五千とも。。。六千とも。。。」

「対する守護代様の元には。。。私兵と共に「馬廻り衆」集め五百に満たない数にございます。。。」

絶望の色だ

春日山および府内には「越後」の諸豪族ならび国人衆の長たる者たちが集まっているハズだ

なのに

守護代に組みする者の名が挙がらない

「やはり。。。そうなってしまったか。。。。」

前日の政景敗退の報告から定実には結果はわかっていた

だが実は「願っていた」そうならぬ事を

声をあげてむせび泣く妻

「姫よ。。。」

定実の問いに実は顔を上げた

目には溢れ出した涙

目には。。。。。すがる心が見えた
夫を見つめる「助け」を求める目は
それでもきつく自分を律したかのように告げた

「このような。。。。事態になりまして。。。申し開きもありません。。。この上は「上杉」の屋敷をお守ります。。。どのような事があっても何人(なんぴと)にも。。。上杉に刃向ける事のないよう。。。守りきってみせます」

そういうと肩を支えていた品に指示した
「屋敷の全ての門に閂(かんぬき)を打ち。。誰も入らせてはなりません!!上杉を守り「家臣の戦」などに一切関わってはなりません!!」

そこまで言うと
定実の前にもう一度深く頭を伏せた

「許して下さいませ。。。。。私(わたくし)の力至らずの結果を。。。どうか。。どうか。。」

震える。。。。細い肩
年老いてなおの苦難

定実は左手にかけていた数珠を握った
これが「運命(さだめ)」。。。。。
今はただ
涙に打ちひしがれ

声も霞ませてる
妻の肩を優しく撫でる事しか出来なかった

その３６　運命　（２）

眠らぬ刻
眉間の皺は深く消えることのない苦悩のうちに「直江」は朝を迎えていた
前日の「守護代のご裁断」から
春日山の中は上から下までの大騒ぎ

おそらく
みな
「政景（まさかげ）」敗退により，影トラとは「なんらかの形で」和睦が結ばれる。。。
または

何事もなかったかのように「責任は転嫁され」
上田長尾が詰め腹を切り
妹である「影トラ」によって「不心得者」の政景の成敗が「守護代」の意志であったと
議題さえもねじ曲げられた解決を見ると思われていたのだろう

だが事実はそうはいかず
「影トラを春日山にて迎え撃つ」という「戦」への道が開かれてしまっていた

そこからこの刻まで
上は「重臣」の者たちの水掛け論の「大騒ぎ」
それを宥め

下に揃う「春日山の番兵」たちの指示まで全てを直江がとっていた
「和睦」という策を全面に出そうも
春日山の中身が一致していなければ「総崩れ」という最悪の事態は
免れない

自分の冷静さを取り持つため。。。。内側にある焦りを抑えるため
に「酒」こそ煽れども
もはや飯は喉を通らない状態での一日目だった

「段蔵と繋ぎはとれたか？」

襖のうしろに小さな物音に直江は声をかけた
差し込み始めた朝の日差しの中
それでも暗い縁の下から「中西」は答えた

「繋ぎはとれました。。。」

自分の座した下にいる「忍」に向かって直江は周りを気にしながら
小さな声で

「今どこにいる？」
と
段蔵の居場所を尋ねた

「総構えの前に」
「何？」

「書状を預かる事はできましたが」

中西の声に焦りがあった
直江は状況をすぐに理解した

「総構えを閉じられて入城できないのだな？」
「そうです」

返事と共に板間の隙間から「書状」が挙げられた
直江は受け取るとすぐに書を開き目を通した
それは「影トラ」からの「和議」の親書

「直江様」

親書を熟読する直江の下で中西は時間を惜しんで提案した
「手違いを装って総構えの門を開けてみせましょうか？」
「それはダメだ」

手に取った親書を綺麗にたたみ直江は即答すると
額に走る皺を指でなぞりながら
少しからだを前に
板間に近づけて

「今の春日山の状態では「手違い」などという事が起これば即騒ぎになるし，それ一つでみなが「疑心暗鬼」に陥る事だろう。。。。開けてはならん」

直江の言うように
春日山は向かってくる「影トラ軍」に「守護代側」は未だ対応出来ないし，足並みも揃っていない

重臣たちも家臣たちも「不測」の事態に混乱し，良案を模索している状態だ
そんな中で晴景の命（命令）で閉じられた門が「手違い」程度の事で開かれてしまえば
もはや

「守護代の威信」は無かった同然の事とされてしまう

浮き足立つ家臣が「反」の気を起こして内側から崩壊してしまう可能性は高い
そうなってしまえば「流れ」を止める事はできない。。。「長尾」は確実に滅んでしまう道に進む事になる
そうならないように
門は「守護代近習」。。。。晴景のもっとも信頼する家臣達に固められているのだから
なおの事だ

「門を開けるのは。。。今すぐは無理だ」

朝日が少しずつ城の屋敷を照らしだす
小鳥のさえずりが聞こえる中
評議のこの間に「重臣」たちが集まる前に中西を帰すため直江は簡潔に指示を与えた

「引き続き段蔵との繋ぎと，外の様子の報告を。。。本日夜「斎藤朝信」を「光育様」の元に向かわす。。。事を終えたら，夕刻にまたココに」

縁の下の忍は静かに「返事」をした
板を一度小さく叩くと速やかに気配を消した

「御台様には上杉様の屋敷に移られよとの事にございます」

二の丸，北の表屋敷「麻」の元に来たのは鎧直垂（よろいひれたれ）をしっかりと着込んだ「水丸」だった

小鳥たちの声が静かに響く
少し薄暗い朝の到来を眺めながら
晴景の妻「麻」は，か細い事で答えた

「いいえ。。。。ココにて「戦勝」を祈ります。。。」

戦になる
その事は前日の夜に「噂」として自分の侍女から聞いていた
そして
事実がこの朝，晴景の愛姓から知らされた

「殿は。。。。どうしておられますか？」
水丸は麻の質問には答えなかった
かわりにしっかりと顔を見つめながら繰り返した

「上杉様の屋敷に移って下さいませ。。。「戦勝」はそこでも祈れましょう」

麻は食い下がる。。。という程の意地はなかった
細くなった肩から滑り落ちてしまいそうな打掛を手で押さえながら
泡立つ事のない静かな声で
正しい事を言い返した

「守護代の妻である私(わたくし)が上杉様のお屋敷に逃げ，匿われたとあっては他の家臣の手前「恥」となりましょう。。。。」

正論
だが水丸は少しも動揺を見せず
縁側から進んで麻の前に座してから，少し眉をしかめて見せた

「戦の足手まといに成らぬよう。晴景様の言う事を聞くべきです。。。こんな時にだけ役立とうなどと思わず。速やかに指示に従うのが「妻」の勤めにございませんか？」

水丸の冷たい顔は美しかった
美しく「棘(とげ)」を十分に織り交ぜた返答を返した
麻の胸を締め付ける言葉をしっかりと入れて

。。。。。晴景様。。。。。

その言葉には十分な効果があった

麻の顔はすぐに「悲しみ」に歪んだ

小姓あがりの「近習」。。。。。
それに
名前を呼ばせる「夫」。。。。。

返された熱い棘は「麻」の薄く弱った胸をニブイ切っ先で刺し通した
「愛された男」と「愛されない妻」
心の臓が逸る
ニブイが故に鋭利に切れなかった心は
ガタガタに切り裂かれ止まってしまいそうになった

。。。。息が上がる感覚の中。。。。。
もう。。。。。どれほど「夫」を名前で呼んでいない事だろうと，麻は思った
同時に
近習にこれほどの事を言わせてしまう。。。。
言われてしまう程「役に立たない妻」となった自分がいたたまれなかった

「役に立ちませんか。。。。」

改めて自分の立場を思い知らされた麻は水丸の顔を見る事ができなかった
うつむいたまま
喉を締め付ける苦しみの中で聞き返したが

美しい近習は

質問には答えなかった
静まった間の後
肩を落とし顔を下げてしまった麻の前に水丸は二つの手紙を差し出した

「ココに上杉様への書状があります，それと春日山の門を渡る時に使う「手形」もございます速やかに屋敷をお出になって下さいませ」

涙で曇ってしまった目の前
項垂れた顔の先の手紙を麻は見つめた

「夫」直筆の親書
それは良く見た文字。。。。涼しげで。。。綺麗な晴景の字
「戦」から遠く
光源氏のようだった。。。愛する人の字だった
あのとき。。。。
若君を失ってしまったとき。。。。。悲しみの中で戒名を書いた夫。。。。。

思い立ったように細い手を滑らせた
麻は親書を静かに自分の手元に引き寄せると胸に抱いた

涙をこぼしてしまいそうな顔をゆっくりと持ち上げ笑顔を見せた

「私はココから動きません。。。。「戦」の足手まといになるのなら自ら「死にましょう」。。。。それが妻の最後の勤めにございますから」

麻の返答に水丸は驚かなかった
驚く事はしなかったが。。。顔に「嫌味」な笑みもなく「苦痛」の
ような険が額に浮かんでいた
相手の表情を読みながらも
麻は心を強く叱咤して答えた

「ココで生き。。。ココに果てます。。。それこそが「運命(さだめ)」と。。
。信じております」

空は曇り
朝日は雲の間からこぼれるように春日山を照らし出していた
麻の返答を聞いた水丸は。。何も言わず屋敷を後にした

その日
柿崎城に本陣を張った「影トラ軍」は動かなかった
「和睦」の答えを待っているという向きもあったが実情は別にあった

慌ただしく出入りする諸将に目を尖らせていた実乃は職務を「金津」
と交代すると
屋敷の回廊を歩き
奥向きの部屋に向かった

二の丸
柿崎の奥方たちの住む屋敷の中の一室は

こじんまりとした庭を囲んだ場所にあった
その中でも庭木の見晴らしの良い部屋の前に実乃の妻「猪(いの)」が控えていた
実乃は
部屋の前に座る妻に小さな声で尋ねた

「まだお眠りなのか？」
夫の質問に猪は深く頷いた
「今しばらくは。。。。。」

米山の合戦に勝った日
その日の朝から影トラは崩れるように眠りについていた
それは疲労と「穢れ」によるもので「体」の要求に従った休息ではあったが

「心」は別のところを彷徨っていた
人に知れる事なく
影トラの心は「闇」の誘いの中に深く深く沈んでいた

その３６　運命　（３）

長尾政景（ながおまさかげ），米山峠にて大敗
これを打ち破った「長尾影トラ」が春日山の目と鼻の先「柿崎城」
に陣を構える

守護代晴景との間にあった誤解をとくために「和睦」を申し入れる
も，晴景は拒否及び

「影トラ」と相対する事を宣言

この怒濤の出来事があった
その日から二日がたった今
政景の妻「綾」は春日山に留め置かれていた

まさかの夫の敗退
その理由を聞こうと晴景の元に向かったのだが
答えは
こともなげで心無い言葉だった

「負けろと命じた覚えはない」

あんまりな対応に打掛を引き上げ板間に音高く足音を響かせ自室に
戻った
戻りすぐに筆をとったが
そんな事よりも自分が「上田」に戻った方が早いと

お付きの侍女たちに急いで支度をさせたが
その時には「城」を出る事は出来なくなってしまっていた

「守護代様は影トラ様を春日山にて迎え撃つため「親書」や「手形」なしで門を下る事許されませぬ」

戦のために身を固めた門衛たちに追い払われ
身動きのとれぬ状態

綾は眠れぬ日を過ごし
事の発端になった「母」を尋ねるために急ぎ足で渡り廊下を進んでいた

「今更，虎御前様に謝って頂いたとて。。。」

後ろに従う侍女は
何度も綾を引き留めようとしていたが
綾にとって「夫」の安否はわからぬままなど耐えられない。。。その上自分の留め置かれている「春日山」にはいつ進軍してくるか解らぬ「影トラ軍」が目と鼻の先にいる
「戦」を止めなくては春日山から「上田」に戻る事も出来ない
どうやっても心を穏やかになど出来ない

「母上が元々の問題を起こしたとはいえ。。こんな「戦」になる事を望んではいらっしゃらないハズです」

自分に言い聞かせてきた言葉を口に出して侍女に投げた
母，虎御前が宴であんな事を言わねば。。。。

「猿のぶんざいで無い知恵絞って人の挑む者。。猿が故に力頼みで
人に挑む者これを「可笑しい」と言わぬでどう言うのだ？」

打掛を引く手に力が入った
何故あの時
あの日の内に母の「戯れ言」を許して下されとみなの前でひれ伏さ
なかったのか。。。
後悔ばかり
だが
今は
もうそんな後悔の時さえ無駄で
泣いて留まってもいられない状態になっている

政景の安否。。。。いち早く晴景が影トラと和を結んでくれるため
にも虎御前の力が必要だった

「お止まりください」

そんな煮え切った思いで下を向きながらも早足で「虎御前」の住む
奥屋敷に向かっていた綾に
冷たい声と肩に手が掛けられた
勢いよく歩いていたにもかかわらず
その手はしっかり綾の動きを止めていた

「何？」

自分の肩をつかんだ女は綾とはそれほど変わらない体格
単瞼の睨む目
着物から侍女である事はすぐにわかった

「無礼であろう！！」
一瞬で「強く」押しとどめられた事で驚いた綾だったが
まがりなりにも「上田長尾次期当主の妻」である自分に伏すことなく体に触れるなどあってはならない事
声も高く叱りつけた

だが
目の前の女は怯みもせず答えた

「虎御前様は只今「ご祈祷」の最中にございます故。。。無礼を承知でお止めいたしました」
「祈祷？」

綾は少し気持ちが落ち着いた
さしもの母も「戦」が自分たちの前に表れた事には「心を痛めた」そうだろう「愛娘」ともいえる影トラがこの城を攻めるなど恐ろしい事だ
しかし
そんな綾の気持ちを見取ったか侍女は
少し
口元を笑うようにあげて答えた

「影トラ様のため。。。戦勝祈願の祈祷にございます」

「何を！！！」

その態度と言葉は綾の心を怒りで真っ赤にした
いくら母がそれを祈っている事とはいえ
お付きの侍女程度に笑い者にされながら聞かされるなど辛抱の堪らぬものがあった

「どけ！！！この無礼者！！！」

勢い相手を突き飛ばそうとしたが
女は軽く身をかわす
同時に綾が突き倒そうと伸ばした右手首を強く握った
それはほんの少し力を入れた程度のものだったに違いない侍女の顔に「力」を感じないのだから
なのに
綾は右の手首を縄できつく締められたような傷みにその場に崩れてしまった

「あっあっ。。。」
痛みで声が転がる
その姿に綾に付いてきた侍女が怒鳴った

「無礼者！！！上田長尾政景様奥方様になんたる無礼！！」
侍女の激怒に
綾の手を取った女は静かに答えた

「お静かに。。。。後少しで祈祷が終わります。。。ココでお待ちくださいませ」

そう言うと手を離した
まったく動じない姿はそのまま
綾の前にストンと座った

「どうぞココにてお待ちください。。。。ご無礼の罰は虎御前様からお受け致します故，ご容赦を」

動じない笑み
それは綾の「不吉な予感」を増長させていた

「つまらぬ用件だな」

奥屋敷の一室には「香」の匂いが立ち込めていた
いつもより遙かに「濃い」調合と煙の中
先ほど綾に無礼を働いた女と同じ「空気」を纏う侍女たちの中
「魂棚（たまだな）」に向かった虎御前は，顔を見せぬまま綾に答えた

「母上!!!そんな事を言っている場合ではありません!!!「和睦」のための「親書」を母上が認め送られれば「影トラ」も留まれましょう。。きっとこの「戦」も収まります」

必死の綾の懇願につまらなそうに虎御前は線香を吹き前に添えるとクルリと身をかえし綾の顔を見た

「晴景の事など。。。知ったことではないわ」

さめた目
冷ややかな口調
そんな態度を取られても今はだまってなどいられない
心を強く押して綾は続けた

「長尾家の危機にございます。。。確かに母上が兄上。。。いえ晴景様の事。。嫌っておられる事はわかりますが。。。」

言葉が途切れてしまう
どんなに自分を叩いて心を強くしても「氷の母」は解けそうにない。
。

揺れる御前
香の煙の中を静かに睨む目

「晴景様が「戦」に負けたら。。。守護代家はどうなりますか？」

「綾。。。。。」
寡黙な母は目を見開き
いつものように首を右に傾げた

「晴景が死ねば次に守護代になるのは。。。。。「トラ」だ」

綾は首を振って「否定」した

「そんな事を未だに考えていらっしゃるのですか?影トラは「女」です!そんな者に誰が従いましょうか?」
「女?なれば目の前に軍勢を率いて来ているのは誰だ?」

綾は答えられなかった
猿楽の宴の後
母とこの話しをした「女」である影トラを「守護代」にと望む母の希望は「無謀」でしかなかった。。。なのにその「トラ」は夫・政景の大軍勢を打ち破り「数多の将」を率い今。。。。
春日山の目の前に来ている

しかし

「戦に勝つことと「守護代」になる事は別の話です!影トラが「守護代になる事は」
「なる!!!」

断ち切られる声
怒りの目に変わった御前は綾の目の前で立ち上がった

「成るのだ。。。「トラ」こそ亡き親方様(為景)が望まれた「大器」。。。「ただの男」などと比べる事などできようハズもない。。。御仏を守りし将成り」

母の妄執。。。。
綾は意見を続ける事が出来なくなっていた
何故に母はこれほどまでに「トラ」を「戦への道」に進ませる。。。

そして
トラもそれに答えるかのように進む。。。。

「政景も死んだ今。。。オマエも覚悟を決める事だ」
「死んだ?そんな事ありません!!」

沈黙
しかし
さすがに夫を「亡き者」と言われたのでは黙っていられない
うつむきかけた顔を上げたが
虎御前の顔にはさも「当然の事」と言わんばかりの笑みしかない

「オマエを晴景が軟弱だったがために「上田」などにやらねばならなんだ事。。。腸も煮える思いであったが。。。オマエは私の願いどおり孝行な娘であった」

母の話方はいつも「重要」な部分しかない
だから綾も聞き方に注意する

「願い?」

娘の慎重さに比べると御前は表情こそ硬く怖いが
何故かうかれている

「オマエは「子」を成さなかった。。。政景のような「つまらん男」の子種にはいらぬ。。願い通り孕まなかった」
「そんな事を祈祷されていたのですか。。。」

確かに綾は政景との間に「子」を持ってはいなかったが
それが母の祈祷「神仏」への願いによって成されていたという事を
聞いた今。。。荒唐無稽とはいえ否定はできなくなっていた

母は祈ったその結果
進むべくように
「影トラ」もココまで「戦」によって来てしまった

本来ならあり得ないハズの「大将」として

恐れが綾の体を支配し始めていた
思い出せば
母はいつも「祈っていた」。。。父の「戦勝」を
その祈りの元に春日山の周り。。。「残党狩り」を自ら行い剣を真っ赤に染めた人だ
「祈り。。願ってきた」
その加護のせいで自分は子をもてなかった
そして今それを母は実行する。。。政景は母の祈りによって「死んだかもしれない」。。。

「そんな事。。。」

頭の中を廻る目覚めたままの悪夢に
何度も否定の首を振った

「そんな事。。。そんなわけが。。。」

自分の願いの成就を満足したか。。。少し柔らかくなった母の声

「孝行娘だ。。。オマエは」

綾の瞳から涙がこぼれた
何故「神仏」はこれほどまでに「狂気」とも思える母の「味方」なのかと

「いいえ!!私は政景様の子が欲しゅうございました!!!」

声を一段と高く大きく挙げて綾は逆らった
だが
御前は興味のない反抗に返事はしなかった

「政景は死に。。。晴景も死ぬ。。。晴れてオマエは「栖吉」の一族の者として結ばれればよい」

むしろ余裕の回答だった

「いいえ!私は「上田」の女です!必ず「和睦」は成ります。。。こんな酷い事が。。。こんな「願い」が叶ってしまうのでしたら。。。。神仏は「鬼」しかおりません。。。」
綾は必死に泣き声にならぬよう。。精一杯の「反抗」をはっきりとした声で告げた
だが虎御前は動じなかった
うすく
見下した視線で

「我が願いは絶対に叶う。。。。晴景は死ぬ」

御前の言葉に周りを囲んでいた侍女たちが頷いた
綾の侍女は震えていた
綾にも背筋に寒いものが走った

自分に背を向け魂棚に手を合わせる虎御前は。。。はっきりと言った

「いや。。。。晴景は必ず「殺す」。。。。」

渡り廊下まで，最初に綾を止めた侍女が送った
この橋で彼女に「無礼」を働かれた事を咎める気力はなかった

「綾姫様は何もなさらず。。ゆっくりとしていて下されば，万事無事に終わります」

「あなた達は。。。何をするつもりなの?」

顔だけを少し有り返らせた綾は力無く聞いた
聞かなくても。。。。答えはわかっていたが。。。聞いた

「私たちは御前様と共に。。。。「祈り。。願いを叶える」だけにございます。。」

「そんな事が。。。許されるの?」

「これは「運命（さだめ）」にございます」

綾は顔を両手で覆った
涙で月は大きく歪んで見えた
綾は願った

どうしたらこの「戦」は止められるのかと。。。。
どうしたら。。。。愛する政景の元に戻れるのかと。。。。。

2014

その３６　運命　（３）（後書き）

修練。。。試練。。。。修交

ちゃ～～後書きからコンニチワ～～ヒボシです

久しぶりです
最近。。。。本文の進みが滞りがちですが
ヒボシは生きてます
ホント
去年の三月に。。。。何を思い立ったかでこの「カイビョウヲトラ」
を書き始めました
あれから一年を周りさらに夏に向かっています

色々な方に支えられこんなところまでやってきました

楽しみにしてくださる方
無償の愛で応援してくださる方
たまに愛のムチを下さりお叱りをくださり「知識」を助けて下さる方
多くの方に感謝してます

今まで「小説」というものを書いた事は一度もなかった
なかったが故に迷い
いまだに「混迷」しながら多くの章を「改訂．改善」しながら進ん
でおります
やっと

2015

やっと
このあたりに来て
自分の手から生み出したキャラクターというものの動かし方が少し
わかってきたところです
だから
常に申しています通り

相変わらず「改訂．改善と補修」を続けながらの連載ですが
がんばっていこうと想っております。。。。。よろしくお願いします
只今「改訂中の章」は。。。。。「晴と影」
そして
この「北越戦記最終章」が終わったら「武田編」を削除しょうかと
想っております
武田編は。。。。
「越後編」を書くことに行き詰まってしまったヒボシが仮設定の状
態で自分のために書いた章ともいえます
だから

次章の冒頭に持って行きたいと思っております
より良い「作品」へと昇華するために
こちらも頑張って叩き直ししていきたいと思ってます

しかし。。。。。

あきっぽいヒボシが良くココまでやってこられたものですよ～～～
ホント感謝です
みなさまの応援でココまでこられた事に超感謝しつつ
このあたりで！！！

2016

また後書きでお会いしましょ～～～

2017

その３６　運命　（４）

「斎藤朝信（さいとうともぶ）が「直江」の命（命令）を受けて林泉寺に訪れたのは夜
半を十分に回った頃だった
二の丸屋敷から身動きのとれない直江に変わっての推参

本来なら「芝段蔵（しばだんぞう）」という右手ともいえる男がいるのだが
それが今は惣門に足止めをくらったままという状態
守護代説得のために政の相談役ともいえる「天室光育（てんしつこういく）」に登城を促
すための「手形」を渡すため
信頼に足る者を使わすために頭を悩ましていた所を「斎藤」が力を
貸した

「両手が無くとも「足」としてぐらいはお手伝いできましょう」

直江という「要」の必要性を良く理解していた斎藤の判断だった

昼間はひっきりなしの喧噪を作っていた「守護代所属」の武士達は
城の各所に各々で陣を構え
「夜襲」に備えてこそいるが
心中がおだやかでない事は「物見」の落ちつく事なく動く姿だ垂れ
の目にもよくわかっていた

「長尾影トラ，米山峠に陣を構える」

この報（報告）があって二日目。。。。。
「守護代」の討伐令発令の後怒濤の日々の果て
苛烈に突き進んできた軍団が沈黙を守りながらも「春日山」に睨みをきかせている状態は
なかなかに耐え難い沈黙だった

その沈黙の中
春日山に詰めている「直江」をはじめ「慎重論」により事の収集に努める者たちは日夜の間を問わず働いていた

「何故動かぬのでしょう？」

林泉寺内，奥室「天室光育」の部屋には小さな灯りが心許なげにつけられていた
少しの風で消えてしまうのではないか。。。。そう思われる火の姿は。。。
今の春日山の実情を如実にあらわしていた

斎藤の質問に
光育は「希望」とも言える答えを返した

「守護代様との「和睦」をお望みなのでしょう」

柿崎（かきざき）に負けぬ剛の男「斎藤」は
見かけは「為景」にも通じる「鬼の顔」を持つ
体にも惜しむことなく「戦」で働いた証明ともいえる傷は多くみるからに「鬼人」ではあるが

直江は元より多くの重臣たちに，信任されるほどの慎重さも備えた武人だった

深く繁った髭の中にある顎をさすりながら「光育」の返事に斎藤は溜息をついた

「それは今。。。一番遠い希望ですな」

「しかし。。。それが「トラ」。。。いや影トラ様の望みでありましょう」

春日山は困惑していた
そこに詰める大半の者たちが「雲行き」を読めない状態だった
守護代晴景の決断は。。。。
まったくもって
自分自身に「不利」なものだった

春日山は確かに越後随一「難攻不落」を誇る城ではあったが
現在城に詰めている兵員は「千」に届くことはない
かたや
影トラの元に集う者たちの数は無責任な情報を半分差し引いた数だとしても「三千」はいる

「晴景様は。。。。どうしておられましょう?」

深く曇った表情で
春日山の迷いを背負った斎藤に光育は尋ねた

「一昨日の「籠城」宣言をなさってからは「近習」を通してでしか，
我らにはお会いになりません。。。」

現在の春日山の守りの大半は「守護代近習」とその一族の者たちに
よってなされていた
城内二の丸から向こう「守護代」の部屋に近寄る事は「重臣」と言
えども晴景の近習を通さねば話しは出来なくなっていた

「ご登城の手形をお持ちしました。。。こんな時にございます「
直江様」だけでは城内の取りまとめだけで手一杯。。。守護代様に
「諫言」する事のできる方として。。。是非に」

政の相談役でもあった光育
斎藤の胸元から出された「手形」を見ながら
静かに頷いた

「出来うること。。。お手伝い致しましょう」

手形を受け取りながら
苦悩する重臣に聞いた

「影トラ様からの「手紙」がきてはおらぬのでしょうか?」
「いいえ。。。実は親書事態はすでに「直江殿」の手に。。。」

「惣門。。。。ですか」

惣門。。。光育の眉間にも苦悩の皺が浮かんでいた
斎藤はその顔に向かって頷いた

「今回の事については守護代様のご指示が早く「直江様」旗下の者たちの手から書状が渡る前に門を閉じられてしまい」
「どうにもならぬ騒ぎの中で「影トラ様」の書状だけが早々と手元に届いた。。。。という事になれば「春日山の番人（直江）」の身も危うくなる。。。。という事ですな」

「まったく。。。。ご察しの通りにございます」

惣門
それは春日山の総構えのもっとも大きな門の事
「戦」という非常事態に対していつもなら守護代の判断は「直江」との審議によって採決されて発される。。。。。
だが
今回は「影トラ対陣」の報（報告）が届いた時にそれは発された
直江とはなんも問答も相談もなく

守護代自らの命（命令）にて即座に門は閉じられてしまった

直江の方にどんな心算があったのかはわからないが
「影トラ」の元に二年も徒事した直江には「反旗」の嫌疑が少なからずあった
春日山の中身は「緩慢」とした政の中でそれなりに「腐っていた」のだ

この非常の時に「直江」をけ落とし自分ならば「守護代様」に要理

な条件で「講和」をできる。。。
などと，のぼせ上がった者が出ても不思議ではないし
また
逆もあった
晴景を闇討ちにしその「首」を持って「影トラ」に臣従しようとする者の気配。。。。

それらの者を抑えるためにもすぐに手元に「和睦の親書」があるなどとは言えなかったのだ
「和睦」よりもまず内側から崩れてしまいそうな春日山を律する事が最重要な任務になったからだ

「我ら。。。。後手に回った「戦」はあまり経験にない事。。。ましてやこれは「頭の戦」。。。。影トラ様もそれを見越して米山の峠にて動かず。。。そう思っておりますが」

斎藤の願うような理想論に「風」が答えた

「それは違います」
その声に姿はなかった
斎藤は目を尖らせアタリの気配を読んだ
「誰だ。。。。」

声は闇の中から静かに聞こえた

「芝段蔵（しばだんぞう）にございます」

見渡す部屋の中に姿は見えない

灯されていた火は少しだけ揺れその身を躍らせる中から声はする

「惣門の前に待機していたのでは？」
斎藤は見えぬ影にむかって聞いた

「実城には迂闊に近寄る事は出来ませんが。。。。今日はここに斎藤様がいらっしゃったのでご挨拶に参りました」

斎藤の顔は強張った。。。。
こじゃれた問答の声は深く気に触った様子で念を押した

「惣門の守りは守護代様一のお気に入り「水丸」だぞ。。。夜とはいえ危険な事を」

尖り始めている斎藤の声を割って光育が穏やかに段蔵に尋ねた

「影トラ様はどうしておられるか？」
光育の質問に斎藤も下らぬ心配をやめ続いた

「そうだ。。。どうして米山から動かないのだ？」

影のままの段蔵は少し間の後返事した

「ココまでの道程は「強行」でした。。。。お疲れになられ。。。その「体」の事でお休みになられているからです」
「休息を取っておられるのか？。。。。。反旗の者たちを招集しているのではなく？」

動かぬ影トラの陣には「戦の大局」に面してやっと腰を上げた「国人衆」や「豪族」たちが「勝ち」を相伴しようと集まっている

という「噂」が
あの無責任な報告につながっていた

影トラが招集しているのでは?
そのために米山にて足を止め沈黙を守っているのでは?と

「集まっているのは。。。。各々の「都合」による判断で，です。。。ですが陣を動かぬ理由は休息を取られていらっしゃるからに相違はありません」

「それはあまり良い報告ではないな」

斎藤の顔は赤く「怒り」に染まっていた
深く一息つくと
闇の中から会話をしていた段蔵に怒鳴りつけた

「貴様。。。。いったどこにそんな余裕がある!!勝敗が見え始めているこの時に。。。今まで腰をあげなかった者たちが「反旗」を「正義」として掲げ始めているんだぞ!!!影トラ様がどんなつもりで「休息」を取られているのか?それはワシには理解できないが。。。。近くに仕えていたのならば!!この非常の事態がわかろう!!疲れた?だから休んだ?その沈黙が事態を悪化させている事になると何故わからんのか!!」

闇の間に登楼の火は激しく揺れた
答えられない闇に向かって斎藤はもう一度怒鳴った

「直江殿がどれほどの心を砕いてこの春日山を支えておられると。。。それを右腕とも呼ばれる貴様が。。。理解できなかったとはいわさんぞ!!」

声は静まりかえっていた寺の中に響いた
怒りの斎藤に目で光育は沈黙を促した
余裕のない事態。。。。。
どこから崩れてしまっても不思議でない春日山を支える男の苦痛を
斎藤は代弁した

「惣門は。。。。。開きませんか？」
段蔵の声にも苦痛が見えるようになっていたが職務に忠実である事
が他の言葉を発せさせず
実直にただそれだけを聞いた
「今は無理だ」
斎藤の即答

「このままいけば。。。。惣門が開かれるのは「戦」の時だ！」
吐き出される言葉には苛立ちと。。。。苦痛が混ざっていた

「その時はこの「愚僧」が。。。影トラ様の前に立ち。。お止め致
しましょう」
頭を抱えた斎藤に光育は自分の覚悟を告げた

「今はただそれしかお約束できません。。。そのように直江様にお
伝え下さい」

斎藤が帰り本堂の仏間に移った光育は
まだ
返らなかった「影」に聞いた

「トラは。。。。。「穢れ」で体を休めたのですかな?」

段蔵は言いにくかった事実を素直に光育には告げた
「はい。。。おそらく政景様とまみえた時にはそのご様子だったと」

光育は御仏に向かって合わせていた手を下ろした

「戦は。。。。戦どのような様にありましたか?」
段蔵は僧侶である光育が戦況の状況を知りたがっている事に少し驚いたが「何かの」助けになるのならという思いもあり話した
「栃尾城砦の合戦」
「米山峠の合戦」

どれも
あまりに血なまぐさく
「残虐」な「戦」だった
光育は目を閉じただその内容を聞いた

「トラは。。。。どんな様子でしたか?」

祈る手に力がこもっているは闇の中からでも確認出来た

「最初はかなり,お心を乱してはおられましが。。。。「戦」も回数を重ね心も強く成られました。。」

「陣江はどうしておりますか？」
段蔵は光育が愛弟子たちを心配している事と理解した

「陣江も影トラ様を支え間近で働いております」
「そうですか。。。。。」

そこまで聞くと後は沈黙を守った
影である段蔵はその闇の中にまた気配と姿を消し。。。本堂から消えていった

静まった本堂の引き戸を開け光育は空を見た
美しく浮かぶ月

「今となっては。。。。ジン。。。オマエがトラの近くにいる事だけがこの「戦」の行く末を決める「希望」だ。。。。その心でトラの。。。トラ達の心をどうか支えて欲しい」

風は冷たく吹き込み登楼の火を消した
だが
光育の合わせた手の中の「希望」は消えてはいなかったが
それは少しの風で吹き消されてしまうほどに小さな炎に等しかった
だからか
光育の手はきつく結ばれ
祈りの中に「希望」を灯していた
しっかりの手の中に守られて。。。。。

その３６　運命　（５）

「それで僕を拒絶したつもりなの？」

その声は四方からこたせまするように私の頭の中に飛び込んできた
私が今いる場所は「闇」の中
宙に浮かぶような
闇の湖水近くに私はいた
周りには何もなく空は赤く血の色のようで。。。。星もない薄暗い
場所だった

「ココは何処だ。。。。」

私は誰に聞くでもなく周りを見渡しながら遙かな闇に向かって尋ねた
最初に耳に届いた声は。。。。返事をしなかった

目の前の遙か向こう
闇の中にさらに暗く。。黒くそびえる山が見える
どこかで。。。見たことのある山
それに向か一直線の道が現れる

今一度自分の事を思い起こした
冷静に。。。物事を慌てて進めてはいけないと
まず自分状態を確認し直した
身なりは。。間違ってはいない
整った直垂（ひれたれ）姿に脇差しの小太刀。。。。

この姿は間違っていない

だけど正しくない
私はついさっきまで「戦場」にいたはずだ。。。。。何故ココにいる？

指先を何度か動かし「夢」か？「幻」か？感覚を確かめる

ココは戦場じゃない
頭を振り残っているハズの前の出来事を探した
さっきまで。。。。。
私の目の前は。。。。
金津と言い争い

対面に姿を現した春日山に牙を剥こうとしていたハズだ

「何故だよ。。。後少しで春日山だったのに？。。。まったくやっかいだな「女」の体ってのは。。あれさえなければ巧く事が運んだのに。。。」

それは小さな形で私の前
一本の道の前にあらわれた
あの雨の日「神鳴」の時に話しをした小さな影は苛々した口調で私を責めている
「何があった？」
現状を確かめたかった私は影に向かって聞いたが
やはり苛立っているのかそっけない返事をよこした

「倒れた。。。。「血」が出て倒れたんだよ。。。はあ」

「血。。。。」
「女はやっかいだ。。。まったく。。」

最初気が付けなかった「血」の意味が理解できた私は急にはずかし
くなった自分の腰あたりを確認するようにさすった
痛みはない

「ココは私の「夢」の中。。。だな」

少し赤くなった顔を毅然とした態度で隠すようにして私は影に問うた

不思議と
影に対する恐れはなかった
ただ「彼」が私の中に住んでいて
こうやってたまに話しをする存在である事がわかってきたからだ

「夢。。。ねぇ。。。」

影の口元は少しだけ
ぼやけているが見えた
幼そうな口がそれに不似合いな卑屈な笑みを浮かべて私に聞いた

「目を覚ましたら。。すぐに春日山を攻めよう」
「そのつもりはない」

私は「金津」に鬼のような形相で言い争った事をしっかりと思い出
していた

「感情」に揺らされ
あの時は
「春日山滅するべし」と声高く叫んだが
今は遙かに冷静だった

私の「拒否」の即答に
影は歩を進めながらせせら笑って言った

「攻めないと。。。。長尾が滅びるぞ」

私も前に進みながら答えた

「ねい言（媚び，へつらう言葉）には乗らないぞ」

私はこの「影」を自分の心の「もっとも弱い部分」だと思った
だからこそ
「凶手」により物事を解決する方向に自分を導こうとする

時に正しく間違った判断をするこの「ままならぬ心」と対話する事
を大切だと思い始めていた

「僕はオマエの「影」じゃないぞ」

そんな私の心を内を見抜いたかのように「彼」は笑いながら答えた
「どうやら。。。トラ。。。オマエは僕を，オマエの心が作り出し

た「何か」だと思っているようだが。。。。それはまったくの誤りだ」

小さな影の姿はぼんやりとしたままだが
「子供」の姿に間違いはなかった
そんな者が
まるで
いっぱしの「男」のように私に言う

あざ笑うように言う
そのまま
私の前
彼の後ろ
私達を繋ぐ一本道の向こうにそびえる「山」を指した

「春日山と戦しないと。。。晴景はおろか「おトラ」まで失うことになるぞ」

「そんな事にならないように，手を打っている」

そうだ
私は気を失う直前になんとか「親書」を書いた
それを春日山に届けるように「段蔵」に渡している

こんな争いは無益だ
話し合う事で回避できる「争い」だ

私は両の手を腰にあてて
政治的な大人の話に「感情論」を持ち込もうとしている「おそらく」
自分の心である子供に諭すように言った

「戦は終わる。。。もう争いはない」

「わかってないな」

急に影は高笑いをした
赤い舌を伴った口がはっきりと見えた

「トラはまったくわかってない。。。さっきも言ったように僕はオマエの「影」じゃないし。。。オマエの脆弱な心でもない。。。トラの考えはまったく甘い。。。そんな心持ちで「米山の峠」に立ったのか?」

子供の声
少し甲高く
少し気に触る声は。。。。私の事を遙か高みから見下して言った

「トラは「晴景」と話し合うために「米山の峠」に立った?。。。トラ，米山の頂に「長尾守護代旗」を立てたとき。。。トラはこの「戦」の全ての責任を負う者になったんだ。。。。その事に気が付けなかったのか?」

「責任?」

小さな影は私の前で止まり揺れながら言った

「トラ。。。オマエのしでかした「戦」の大きさにまだ気がついて

ないのか?」

そこまで言うと「影」は赤い空を映していた湖水に向かって指をさした

「なんだこれは。。。。。」

そこに写っていたもの
柿崎の城に集まる「軍団」
猛る諸将たち。。。。

「トラ。。。「守護代晴景」と相対するもう一つの頂点に立ったオマエが「戦」を拒めばどうなる?。。。。結果は「長尾滅亡」最悪しか残るまい」
私は影を見た
笑う口だけが続ける

「それにな。。トラが「戦」をしないと言っても。。。。ヤツらは「春日山」を攻めるぞ。。。。弱った守護代にトドメを刺す最大の機会を誰も逃そうとはしない」
「親書が出して。。。」

「晴景は拒否する」

私は影の足下に膝を落とした
湖水に移る男たちの猛る姿と気勢は春日山に向かっている
鬼の拳を高々と挙げ
いまや遅しと怒号を響かせ

「どうして。。。。。」
私の言葉に影は顔をあげ
後ろに見えた巨大な山に向いた

「トラ。。。。オマエが先頭に立って戦わない限り。。。ヤツらの
反の気を抑える事はできない。。オマエは今まで誰もすることので
きなかった「戦」に勝ってココまでやってきた。。。戦うしか道を
切り開く事は絶対にできない」

影はもう一度私のほうに向き直ると
右に大きく首を傾げてみせた

「おトラを見殺しにするつもりか？」
「母上。。。。」

「戦え！！戦うんだ！！そうしなければ弱り切った長尾一族は全て
滅ぶぞ。。。オマエが戦わねばみな「滅びる」のだ！！」

そういうと急に私から離れた
私は急いで手を伸ばし彼を掴まえようとしたが
掴む手は空を触れて空振った

「待て！！！！」

ただ彼は笑う
消え入るような姿のまま笑う
私は混乱していた
何故彼はこんなにも事の運びに詳しいのか？

何故
私に戦えと言い続けるのか
「何でだ！！何故私が戦わなければならないのさ！！！」
叫びに彼は止まった
「戦いたくないのか？」
「当たり前だろ！！！どうして私が戦わなければならないのさ？」
影はとまったまま私の叫びに
「怒り」を露わに答えた
「だったら。。。なんで僕を殺した！！」
伸ばしていた手が止まった
心を刺されるような言葉
「殺した。。。。。君を？私が？」
怒りの声はうまく返事の出来なくなっている私に叩きつけるように
続けた
「トラ。。。。オマエは。。。僕を殺した。。。。殺した！！！」

影の目が靄に隠されたままの表情の向こうで赤く光った
「君は。。。。。誰？」
私にはまったく憶えのない姿の彼
いつ
いつ私はこんな幼子まで手に掛けてしまったのか？

「君は。。。。」

影は靄を突き破って私の顔
真ん前に体を滑り込ませ

初めて顔を見せた「影」

それは。。。。。。
その顔は。。。。。。

「僕こそが「トラ」だ」

私？
私が私を殺した？

闇は弾けた

私は苦しみの叫び声を上げて飛び起きた

目の前は「雨」。。。。？
頭からどっぷりと水をかぶっている?着物をさわり周りを目だけで
睨むように確認した
屋根のある部屋の中で。。。何故に雨?

「も。。。申し訳ありません!!」

私の隣に侍女が手桶を転がしたまま驚いてひれ伏していた
微かな痛み
跳ね起きた時に手桶に頭をぶつけて。。。。水をかぶった?
自分の「冷静」を認識するために慌てず周りを見る
息を整える

「ココは何処だ?」

激しさの混ざった声に侍女は余計に萎縮して額をすりつけるように
伏して謝り答えがでない
苛々しながら他を見回すと
戸口の前に見知った姿
大柄な体ながら落ち着いた動作の女

猪も少なからず顔に驚いた様子があったが
苦笑しながら，侍女に

「さがりなさいな」

と指示をして
私に話しかけた

「急にお体を起こされましたから。。。ぶつかってしまいましたわ」

手ぬぐいを私の髪に乗せると
気まずそうに下がっていく侍女に
「替えの支度をしてきなさい」

努めてなのか?静かに命じた

「猪。。。ココは何処だ!!あれから何日たった?」

怒した私の声に猪は，顔に苦みを浮かべながらも
しっかりとした声で猪は答えてくれた

「ココは柿崎様のお城。奥の間にございまいす。。。おトラ様は「米山の戦」から今日で三日。。。眠っておられました」
「三日。。。。。そんなに。。。。」

たった今。。。。わずかの時間の間で見ていた「夢」はそれほどに長かったのか?
急いで体を起こそうとしたが
腰に鈍痛を感じ立て膝の状態になった
「まだ。。。まだ「穢れ」が終わっておりません。。。馬の鞍が真っ赤になっておりましたのですよ。。。戦が続いた事でお気ずきでなかったようですが。。体を厭うてくださいませ」

私の肩を支える猪に
私はそんな余裕はなかった

夢の中

鬼と化して「春日山」に殺到するための気勢を上げていた者たちは。
。。ココにいるのかを知りたかった

「外はどうなっている！！！「戦」は！！「和睦」の返事は！！」

私の矢継ぎ早な質問に
障子の向こうに座していた男が答えた
「戦の支度は調っております。。。。敵陣の前での長の居眠り。。
影トラ様はすっかり「大物」にございます」
「実乃。。。。」

敵陣という言葉

「守護代様は「和睦」を拒否されました。。。」

立ち上がっていた膝が崩れた
声もでない
ただ夢の中「彼」の言った「正論」が頭の中に蘇る

「我らと一戦交える覚悟にございましょう」

障子越し多数の人の気配を感じた
私は痛みをおして立ち上がった

「夢」は現実と符号していく

猪は慌てて小袖を肩にかけた
鎧の音が整然と並んでゆく気配

兜を手元におろし控えた姿が私には。。。。もう見えていたが

「覚悟」を。。。。。
猪に襖を開くように目で指示した

開かれた戸の向こう
かつてより「長尾」に仕えてきた多くの家紋たちの元にさらに連なる「国人衆」の者。。豪族の者たち

「春日山と最後の一線交える準備は整ってございます」

実乃の言葉以上に「覚悟」の目が私に集まっている事に気がついた
私が戦わなければ。。。。これ程に集まった者たちにどうして「戦」をするなと言える
彼の言葉がこだまする

「オマエが先頭になって「戦」をしなければ。。。最悪の結果しか得られない」

目眩を起こしそうな痛みの中。。。。「夢」から冷めた「悪夢」の前で私は逃げ場を探した
それはまだ陽の昇る事のない黎明の中で始まっていた

その36　運命　（6）

張りつめた私の想いを
そのまま反映する。。。まだ朝日の射さぬ屋敷の一室
板間は冷たく
十分に心を冷やし
頭の中の煮立っていた迷いを凍らしてゆく

広い部屋の中には私とジン
二人だけ
部屋の前，廊下には控える者たち
屋敷外には私の下知を待つ武士達(もののふ)。。。。。

戻ることのない「戦」。。。。。
それは私が栃尾で言った言葉。。。。

私は合わせた手のまま自分の胸を激しく動かす鼓動を感じていた
体を冷やすこの空間にいながらも
何故？
心を燃やすほどに熱く，高く，胸打つ鼓動
外の彼らに聞こえてしまうのでは。。。。そう思うほどの静けさの中
止まらぬ「激動」

目を閉じたまま
顔を上げ下げしてみる
何度も「夢」を思い出してみた

「戦え！！それがオマエの「責務」だ」

闇の中にいた私の顔
同じ顔を持っていた彼の言葉は。。。。正しい
彼は間違っていない
冷静に
自分の内にあった「騒ぎ」を凍らせる事によってじっくりしっかり
と物事を見極められるようになってみれば。。。。
わかる事だ

私は戦わなくてはいけない
そうしなければ
この怒濤の「波」をいつたい誰が止められるのか？

この大きなうねりと
波を起こした私がそこから去ってしまう事など。。。。。絶対に出
来ない事だ
みな
「戦乱」を止める力となれなかった「守護代」を責めている
もし
この重責である守護代に責任というものを「正統な方法」でとらせ
る事が出来る者がいるとするならば。。。。

それが私でなくてはならない事

他の者に「斬られる」ような終わりであってはいけない
「長尾家」のためにも。。。。

目を開ける
私の目の前には
やたろー達がつやにと作った「観音菩薩」があった

静かな目
少し微笑む口元

「これは「静寂」を尊ぶ女神だな。。。。私にはふさわしくない」

本心から思った言葉は
隠したり
遠回しに言う事なくこぼれた

母が信心し深く帰依した仏は
私にも母にも遠い方だ
親子揃って「血なまぐさい」のだから女神に申し訳ないというものだ

この手で責務を果たさねば成らぬとはいえ
血を分けた「兄」に向かうような事は「畜生」の所業だから
申し訳なさか
私は「観音菩薩」を右の棚に移していた

私が祈り帰依するものはまだ見えない。。。。。

小鳥の声が少しずつ耳に届くようになり
障子の向こうも明るくなり始めていた
もう
待つことは出来ない

「ジン。。。。。私は戦うぞ」

閉じていた目を開き
後ろに感じる気配に向かって。。。顔を向けず背中越しに告げた
彼の返事は簡潔で落ち着いている

「わかった」

黎明の時間
目を覚ました私の前にあったのは「怒濤」の軍団の姿だった
夢の中で見た「鬼」ではなく「人」
しかしそれは大いなる力となって
今。。。。私の元に集まっている

「祈れ」

障子を開けた向こうに見えた諸将に
即座に浮かんだ言葉
それだけを告げた

彼らがいったい何に「祈って」この戦に突き進んで来たのか
それはわからない

ただの「私欲」なのか
それとも過去の「怨恨」なのか

色々な「想い」が幾重もの「波紋」を作りそれが波になった
願わくばそれこそが「越後」を思う「波」で合って欲しい
そういう
正しい思いで合って欲しいと信じるために「祈れ」と言った

肩の力を抜き
数珠を回し組んでいた手をほどいた

「私は正々堂々と前を歩き「守護代様」と戦う」

拳に力を
板間を少し叩く

「わかった」

ジンの声は沸々と沸き立ち始めている私の心とは反対に，落ち着いている感じだ
その場で向き直った
目を合わせて

「修羅の道ぞ」

「心配するな。。。。トラが「トラ」である内は何処にだって一緒に行く。。。オマエの進む道を信じる」

安い甲冑
ボロの鉢巻きをしたジンは私の緊張を十分察しながらも
笑った
笑って

「前に向かう事でしか道が開けないのなら。。。「進もう」先頭に立ってその道を行こう」

希望を指し示す言葉をくれた
私は頷いて答えた

「そうだな。。。先頭に立って戦う。。「最善の道」も必ず見つける」

どんな顔をしているのだろう
自分の頬をさする
額をさする
決意を鈍らせる訳にはいかないという思いで立ち上がる

歩を進めジンの真ん前に立ち
その肩に手を置いた
少しだけ
まだ
少しだけ
私の手は震えている。。。。
起こってしまうであろう「最悪」を考えないようにしても。。。浮かび上がってしまう

だけれどココに留まる事も最早できない
私は前に進まなくてはいけない

「運命と戦う。。。。力を」

微かな震えをジンには隠せない
肩に乗せた私の手をジンは強く握った
「共に戦う。。。。トラの力となって」

彼は手は。。。。熱くて大きい
凍えている私の心を温める

「共に。。。。」

抑えていた一筋の涙が落ちる
ジンの頬に落ちる

「どこまでも。。。一緒に行く」

握られた手を握り返す
覚悟は決まった

お互いの顔をすこしだけ見つめ合った
変わらぬ思いで私に付いてきてくれるジン
今はそれが私にとっての大きな支えだった

「開け！！！」

号（号令）せよ！！！

屋敷を出て朝日を浴びながら
整然とこの時を待った全軍の前に私は立った

柿崎の城
二の丸の武者だまりに集まった者達の姿をゆっくりと見回し

「これより！春日山城に向けて進軍する！！我に従い戦え！！！」

割れんばかりの返答
秋晴れになるであろう空を突かんばかりに槍は立てられ
凍えていた風の間は瞬く間に熱い熱を帯びた

「いざゆかん！！！」

大きく手を
指を春日山に指し示した

戻らぬ戦。。。。最後の戦に私は歩を進めた

対陣三日目の朝
春日山には「緊張」と「混迷」の空気が澱んだまま流れ続けていた
それを象徴するように城の周りには霧が多く出て
マナ温かい

秋にしては気持ちの悪い風を運んでいた

動かぬ「影トラ軍」に対して
動かぬまま「開戦」を宣言してしまった「守護代」
混乱しているのに
目の前には確かに「軍団」が迫っているという状態に浮き足だちつつも
居心地のいい座り場所を見つけられない状態の諸将は磁路の中で言ったり来たりを繰り返している「喧噪」だけが聞こえていた

城内は何度もの協議が重ねられ
直江は「口伝え」なれども「晴景」に進言を続ける時が続いていた

そんな事態の中
惣門の前には「与板衆五十」を連れた「芝段蔵（しばだんぞう）」が宿に入ることなく門前にて日を過ごしていた

門衛の「水丸」にどれほど「護衛」として推参した事を説明しても
門は開くことはなかったが
だからといってココを退く訳にもいかずの居座り状態になっていた
秋の中頃を過ぎた夜は肌寒く
「野宿」するには耐え難いものがあったがそうも言ってはいられない

ヒンヤリとした肌を刺す冷気の朝
段蔵の目は眠らず門を見張っていたが
この日の騒ぎは「外」からやってきた

自分たちの後ろに近づく「馬」の激しい足音に段蔵の心に「あってはならない最悪」が浮かんだ

「惣門！！！伝令！！！」

息を切らせた「使い番」は汗を払いながらも大声で門衛を呼んだ

「惣門！！！大事なり！！！」

朝靄が残っている城下の中に大きな声は響き門衛が高台の櫓から顔をだした

「何だ」

「影トラ様！栃尾衆合わせ，栖吉衆，柿崎衆共々進軍を開始！！！春日山に迫っている！！」

「何だと！！」

段蔵の声に水丸の声が上からかさなった

門の上にいる水丸と段蔵は顔を見合わせた

使い番はそんな二人にかまわず報告を続けた

「早ければ明日には府中に到着と思われます！！」

水丸の顔色は青く変わった

段蔵にもそれはわかった

府中は春日山の城下ともいえるほどに近い

本当に目と鼻の先

「水丸殿！！！聞いたか！！早く我らを通し直江様の元に使わされよ！！」

一度は青くなった水丸だったが
間髪入れずに発された段蔵の声に首を横に振った

「こんな事態の中，貴様達を中に入れることなど「よりいっそう」出来ぬ事だ」
「馬鹿な事を！！！」

食いつく段蔵を意に介さず水丸は
足早に門の階段を下りると自ら春日山実城に向かって走っていった

開け月の惣門に鳴り響いた「影トラ軍進軍」の報（報告）は晴景の耳に届いた時にはすでに城の者たち全てが知るところになった
それまで沈黙を守っていた影トラの進軍に春日山の城内は上を下への大騒ぎが
またも津波のようにおこり
手足を揃えられぬ「直江」は身動きのとれない状態に巻き込まれた

そんな城内の一角で「綾姫」もまた進軍の報告に心を痛ませていた

「。。。。。やはり来てしまうのですね」

お付きの侍女たちの顔も曇ったまま
綾も沈んだ表情で「母の予言」が徐々に遂行されていく事に「絶望」を感じていた
母

虎御前の目は既にこれから起こるであろう事を「確信」していた。。。。

綾は沈んだまま
肘掛けに伏して溜息を何度も落とした
騒がしさで目が覚めたが打掛を羽織ろうという気にまでなれなかった

「ココは。。。。逃げ場のない城ですわね」

誰にこぼすでもなくただ下向き。。。幾度目かの溜息
綾の目にはこの数日の間だけでもあわてふためき見苦しい姿を見せていた者たちが思い出されていた
「逃げる」ための算段をする者たちの姿

「何処に。。。。逃げられると言うのよ。。。。みなココで討ち死にね」

母の予言の通りに進めば
春日山は落ちる
難攻不落を誇ったこの城の守りが「影トラ」との和睦の最後の「切り札」になるのではと
やたらその事を誇っていた者たちもいたが。。。。
裏を返せば逃げ場のない堅固な「駕籠」とも考えられた

城があっても影トラに勝てる気はしなかった

そうでなくても「影トラ」は黒滝を城を山ごと燃やした女だ。。。。
堅い壁に囲まれたこの城の中で内側から出ることもかなわぬまま。。
焼き殺される。。。。そんな最後しか綾には思い浮かばなかった

「母上の言う通りになってしまう」

消え入りそうな声で顔を上げることもできなく
しなだれた綾に「脱出」を進め続けていた侍女が言った

「守護代様は姫様の兄上なのに。。。酷い処遇にございます」

気力無く
伏せて顔も上げない綾に侍女は恨みがましく続けた
「姫様は守護代様の身内で妹君なのに，ご自分の妻にだけは逃げろと「手形」をお渡しになられたそうで。。。城内には戦うと決まって逃げることも出来ない女子供もたくさんおりますのに。。」

綾は肘掛けに頭を寄せ顔を見せずに振った

「せんなきことよ。。。それに私は「上田」の女。。。兄上から見たら敗軍の将の妻。。覚悟はできてましてよ。。。。」

とそこまで自分を卑下した堪えをしたところで
飛び起きるように綾は顔をあげた
まるで操りの糸を急に引き上げられたように背を正すなり
恨み言を話した侍女の顔を目を見開いて見つめた

跳ね起きた綾の姿に侍女はかなり驚いた様子で白湯を取ろうとしたが

「手形を。。。。麻様にお渡しになった?」

その手が白湯の急須に届く前に綾はもう一度問いつめるように聞いた

「手形とは。。。城下に出るための手形ですか！！」
「はい。。。城下の「上杉様」の元に身を寄せよとの事ですが。。。」

綾の頭はフル回転で回った
これは与えられた最後の「賭」では

独り言をつぶやくように口に出して指を折り冷静に物事を整理していった
その姿に侍女は困った顔をしていたが
かまうことなく綾は質問した

「それで麻様は上杉様の元に行かれましたの？」
「いいえ。。。それこそ妻の鏡にございます。。あくまで城に残られるとの事で」

そこまで聞いて綾は立ち上がった
「ど。。。どうされましたか？」
今の今まで溜息に埋もれ覇気を無くしていた綾が目を輝かせて侍女を見つめて言った

「脱ぎなさい」
「はい？」
突然の言葉に目を開いたまま固まった侍女にお構いなしに着物の襟を引く綾は叫んだ

「母上が祈り！願いを叶えるために行動するというのならば！！綾も祈りましたのよ！！だから後は行動するだけですわ！！！」

そういうとさらに声を荒げ侍女に命じた

「早く！！脱ぎなさい！！！母上！！私も戦いますわ！！！」

綾の決意の中身を理解出来ない侍女はただ驚くばかりだった

その３６　運命　（７）（前書き）

愛について（藁）
後書きにて～～～～

その３６　運命　（７）

「いいですか！！土岐（ときｊ！誰に呼ばれても返事をしてはなりませんことよ！！奥の部屋でずっと「臥せって」いる事！！わかりましたね！」

部屋の角
屏風で仕切った間から綾は矢継ぎ早な指示を侍女の中
自分と年も近い「土岐」に打掛を預けながら言った

「でも。。。こんな事」

土岐の母である侍女の「初（はつ）」も困惑の顔を隠せないが
綾に指示されるまま髪の結い直しをしていた

「本当に「麻様」のところに行かれるのですか？」
「そうよ！」

さっきまで肘掛けに本当に「病人」のように伏せていた綾だったが
今は違う土気色になり虚ろに下がっていた目は消え失せ
むしろ「興奮」しているかのように顔を赤らめ
目を輝かせている

「早く！！」
テキパキと土岐から受け取った「彼女の着物」を羽織ると先ほどの
注意を
未だ状況を飲み込めず
恐れ多いと「打掛」に袖を通す事も出来ない土岐に，念を押すよう

にした

「私は今から「麻様」の元に侍女のふりをして行きます！！土岐！！あなたは私のふりをして誰にも会わず臥せっているのですよ！！！わかりまして！！」

侍女結いの髪に変わった綾は，初と共に部屋を抜けだし「麻」の元に向かう事を決意したのだった
そもそも
「手形」が無かったせいで「上田」に帰る事のできなかった綾だが今は自分が上田に戻る事ばかりを考えてこんな大それた事をしようとしているわけではなかった
春日山の状況は二日前の静けさから一転していた
朝日とともにやってきた「最後通牒」に城内は一時「沈痛」な闇に飲まれた

「影トラ進軍」

次々と届けられる報（報告）により
事態は収拾のつけようのない大騒ぎと代わり
春日山の番人である「直江実綱（なおえさねつな）」の元には現在残っている「守護代軍」の将達が殺到，「この先」

影トラの向かう先と
守護代「晴景」の最終選択の果てにあるものを
「最良」を選び出すために「押し問答」の真っ最中だ
誰も彼もが泡立ち

城内には侍女や近習，使いの者達が走り回る音がいつもなら静かな二の丸の屋敷の中にも「遠慮無く」響き渡っていた

そしてそれこそ
この誰もが注意を払うことの出来ない「混乱」こそが「母，虎御前」の願っていた「想い」を成就させる「好機」の始まりである事が綾にはすぐにわかった

「母上は願いを叶えるために絶対に動く」

「手形」の話しが出たとき
綾の頭は明晰に動いた
「これが最後の助け。。。。そして「救い」という己の願いを叶えるための好機」であると
虎御前の願い
それは口に出すことも憚られる「恐ろしい願い」

「晴景殺害」

この非常の事態の中
晴景が虎御前の手によって「倒される」ような事がおこれば。。。。
どんな行く末が先にあるのか？

綾は頭を自分で少しだけ小突いた
考えつく「結末」は「恐怖」でしかなかった

慕う「政景（まさかげ）」は安否の解らぬ状態
でも綾は生きていると信じていた

だけどれども
もし母の願い叶い影トラが入城するような事になれば。。。。。影トラは母に従い上田長尾を滅ぼしてしまいかねない

あってはならない結末
しかし
今はその結末が一番近いのだ。。。。
奥の屋敷から動かずとも
身の回りを「忍」で固め
晴景ののど元に一番近い「狂気」となった母

虎の目をもってその願いを祈り続けた御前に対抗する最後の方法があるとするならば

晴景と影トラの「和睦」しかない

そして
それを実現できるのは。。。。。なんとしてでも「晴景」を説き伏せる事が出来る者
それは
「妻」である「麻」だと信じたのだ

「よいですか!!! 参りますわよ!!!」

綾の考えはそこまではかまとまってはいなかったが
とにかく
今は「行動アルのみ」という意気込みが障子を開いた

開いた先
表屋敷に繋がる通路にはいつもの「使い」達はいなかった
おそらく各々の臣従する主の元に寄っているのだろう
「影トラ」との対立を明らかにした「晴景」は城の門を閉ざすために自分の「私兵」ともいえる「近習」達を各所に配してたため
「綾」の見張りに付いていた「坊丸」の姿は見られない

綾は初を前に歩かせた
侍女の着物に着替えたとはいえ
歩き方から身の振り方までを自分に厳しく身につけてきた綾は「優雅」見えてしまうから

しかし
そんな些細な心配は無用なほど
二の丸の邸内は騒がしく

願う想いが綾の「決意」の後押しをするかのようにすんなりと「麻」の部屋まで進めた

「願ったのならば叶えるために「行動」しなくてはいけない」
という想いで

「私(わたくし)は力にはなれません」

綾が最初に侍女として部屋に入った時には「驚いた顔」を見せた麻だったが
すぐに平常心にもどったのか？
それとも
やはり
「諦めて」しまっているのか。。。。。

青白い表情
眉間に少しの悲しみを寄せたままこれから綾が「言う」であろう「希望」に釘を刺すように言った

そんな
形式張った小さな抵抗をする麻にかまうことなく綾は噛みついた

「そんな悠長な事を言っておられる場合ではありませんでしてよ！」

綾は噛みつく勢いで事の経緯を
高く張り上げてしまいがちの声を抑えるため
麻に詰め寄ったまま話した

「そんな。。。。虎御前様が。。。そんな事を。。。。」

言葉静かな抵抗の中に困惑の返事
「そんな事をしてしまわれたら。。。いったい誰が長尾を信じますでしょうや？」
「そういう「殿方」たちの事情はわかりません！！ただ母上の願いは絶対です。。。。だから事が成ったとすればこれこそ「御仏の思し召し」と他の者を説き伏せてしまうやもしれませんのよ！！」

騒ぎに紛れ
麻の部屋まで綾がやってきた時
すでに陽は昼に近づいていた
時は待ってくれない
綾は心の中で「後手」に周り続けてきた自分の交渉を悔やんでいた
だから
言葉も強く続けた

「姉上様（麻）に晴景様を説得して頂きたいのです！！影トラとの和さえ保たれればそんな「恐ろしい事」はおこりません！！！その上で「手形」をお貸しください！影トラの説得は私が致しますから！！是非に急いで。。」
「無理です。。。そんな事」
麻は小さく首を振った
気弱な態度は綾の焦りを苛立ちに変え始めている前で
「前にも申し上げたように「殿（晴景）」は私（わたくし）など「妻」とも思うておられないのです。。。そんな私の言葉をどうして」

「何で！！！だったらどうして兄上は「上杉様」へ身を寄せるようにと「手形」を下さったのですか！！！」

つい体を乗り出し
額をぶつけてしまうのではと思えるほど迫ってしまった綾を初が必死に止めた
気迫に押されはしたが麻の態度はより沈んでいた

「それは。。。私のような「役に立たない者」が「妻」であっては恥になりますから」
「恥とは？！！」

綾の両手は初の手を振り切り
麻の胸ぐらを掴んでいた
その勢いは凄まじく侍女達の目に「殴打」に至るのではと，思えたぐらいだったが

綾はそのまま麻の痩せた胸に自分の顔を
額を擦りつけた

「兄上のご情愛を信じておられませんのですか?」
「いいえ。。。そういう事では。。。ですが私など名ばかりの妻の言葉などで思い留まってなど下さいません。。。信じて頂けません。。。何も出来ません。。。」
綾の真っ直ぐな心に
向きあうのは苦痛だったのか。。。。
麻は顔を背け悲しい笑いを少し浮かべて返事した

「ええっ。。。そのままなれば。。。何も「成されて」おられませんわ」

涙の混ざった綾の棘

痛みの言葉
掴んでいた手を自分の胸に当て
崩れるように麻の前で嗚咽をあげて綾は泣いた
泣いて言った

「信じていなければ「願い」など叶いませんわ。。。」

自分の真ん前で泣く綾に，言葉を探せない麻

「兄上は。。。麻様を愛し。。慕っておられるからこそ。。この「最後」の時に逃げろと「手形」を渡されたのではありませんか。。。そう信じてはおられないのですか?麻様も兄上を慕っておられるからこそ。。。信じておられたからこそ，城に残られたのではないのですか?」

麻は首を振った

胸元には

あの直筆の「手形」。。。。。

あの綺麗で美しい晴景の字が書かれた。。。。「最後の手紙」

でも。。。

「私が信じていても。。。。。」

麻には全ての「過去」を振り払う事は出来なかった

言葉を濁し唇を震わし

「否（否定）」と言おうと

その喉に登りかかっている「否定」を打ち消すように

綾は泣き叫んだ

「貴女様が信じている事が大切なのではないのですか!!」

跳ね起きた綾の顔は「涙」でいっぱいになっていた

そしてそれが

麻の。。。萎れていた顔に温かく弾けた

「私は「政景(まさかげ)様」が好き!!大好き!!心の底から慕っております

のよ!!殿が生きていて私とまた会うてくださる事を信じておりますのよ!!願っておりますのよ!!」

麻はただ驚いた
何を怒鳴られているかわからなくなってだけど
綾は泣きながら震える手を胸元に手つけ麻の体を揺さぶりながら

「政景様が私をどう思っているなどと。。。。そんな事は関係ありませんの!!私が好きなの，あの方が好きなの。。。麻様もそうではないのですか?」

「貴女様が信じ慕っておられるのではないのですか?」

激しく叩きつける心の嵐。。。。
綾は自分の想い慕う心を隠すことなく麻に向かって投げつけた

震える視界
涙は弾け
潤んだ綾の目に痩せた自分顔を映したまま麻は答えた

「ええっ。。。。私も晴景様を愛しております。。。。あの方が好き。。。。」

止める事の出来なかった「想い」は溢れ出し
涙は溢れ出し

少ないながらも「幸せだったとき」が返る
手を繋ぎ
庭に植えた「梅」を見せてくれた晴景。。。。。
少し照れて。。。はにかみながら。。。。
争い事とは遠く。。。。。心根優しい年上の夫は

「少しずつ。。。。。増やしていこう。。。ワシも麻の好きな花を
共に見たいから」

そんな横顔を好きになった
そうだ。。。麻は思い出した
自分が晴景を「好き」になったんだと

自分の胸につけられて綾の手を握り返し

「ええっ私が。。ええっ私こそ晴景様の事。。。晴景様が想うより
ずっと慕っております」

二人は顔を見合わせた
綾も止められぬ涙のまま
互いを抱きしめた

「殿のお心を信じます」

女達は深い絆を結び合わせた
しかし
時は待つ事なく進んでいる
綾は涙の目を拭うと気を取り直し麻に言った

「では。。すぐにでも晴景様の元に」
しかし麻は首を横に振った

「いいえ。。。それは出来ません」
「何故!!!」
やっとの和解を麻が理解していないのか?少し落ち込みそうになりながらも詰め寄る綾に

「これほどまでに大事(おおごと)になってしまった「戦」。。。女の私達の言葉だけでは止める事は出来ません。。。より大きな力で伝えねば。。。殿も。。。影トラ様も止める事は無理です」
「大きな力?」

麻の口調はさっきのような弱々しいものではなかった
上田長尾の姫である綾に比べれば
麻は心を痛めながらも「守護代」の妻を務めた女。。。。
「戦」の行方が「安易」に変わる事が出来なくなっているのをよく見据えていた

困惑の表情の綾の前
胸元から「手形」を出すと告げた

「上杉様にご仲裁に入って頂くのです。。。上杉様の仲裁なれば虎御前様も無謀な事はされますまい」

綾は頷いた
確かに「戦」は止まっても内側の騒ぎに乗じてケチをつけて母が動いてしまったのならば意味がない
ならば

「守護様」に立って頂く。。。
さしもの虎御前も守護に楯突く事は無いと考えられたからだ

握った手のまま二人は頷いた
女たちの決意と共に運命は大きく動き始めた

その３６　運命　（７）（後書き）

「愛」

後書きからコンニチワ～～ヒボシです

なんか
かなり久しぶりの更新になってしまいましたが
今回は。。。。
綾様
麻様
「愛は爆発だぁぁぁぁぁぁ」の章。。。
とかにしようかと迷った（藁）

嘘ですが。。。。

この時代
好きって言葉はあったと想うのですが
「愛してる」という「ＬＯＶＥ」という言葉は無く
「お慕いします」
というのが
最愛の言葉だったそうです

そういう意味では時代考証失格な感じですが
あえて
いや

やっぱり「愛してます」といわせたかったので使いました
閨言葉ってのがどっかの大名家に家訓のようにあったそうですが。。。

夜愛をささやきあってますか～～～～（藁）

ヒボシは尼のような生活送ってますよ（爆死）

そんなこんなで
女達が大活躍のカイビョウヲトラ！！
がんばって走っていきます！！！！

それではまた後書きでお会いしましょ～～～

その３６　運命　（８）

一致団結に事を急ごうとしていた「綾」に冷静さの中に「愛」を取り戻した「麻」は
むしろ慌てずゆっくりとした口調で策を話し始めた

「まず私(わたくし)が昼過ぎに上杉様の元に「下る」事にします」

冷静な口調の麻
「いいえ！私が参りましょう！」
その間さえ惜しくなってしまっているのか
畳から中腰の状態のまま
綾は飛び出してしまいそうな思いをぶつけて言った

自分の言葉を信じ動くことに同意してくれたとはいえ
いままで
弱気でずっと自分の存在を自分で疎んでしまっていた「麻」にそんな大役はこなせないと考えていたからだ
だが
そんな飛び出すほどの綾の動きにも動ぜず
麻は冷静な顔で。。。静かに腰から扇を取り出すと「言葉」が外に漏れてしまうのを防ぐため開き顔を伏せて言った

「いいえ。。。。綾様が城からいなくなってしまったら，それこそ「問題」になってしまいます」
「でも。。。」

逸る心に火を着けている綾に
もっと近くにと麻は目で合図する

先ほど
掴みかかっていた位置まで自ら体を寄せた

「そもそも「手形」を頂いているのは私です。。。私が今から「上杉様」の元に身を寄せたとしても誰にも怪しまれません。。。事を順調に進ませるのでしたら当然の手順です」
それはわかっている
でも自分のいない所で「麻」が上杉様に言い負かされてしまうのではという不安で綾はまたも食ってかかった

「では二人で参りましょう」
「ダメです！」

今まで押していた綾の強気を
麻は手を挙げて「落ち着き」を促すために肩を抱きしめるように続けた

「城から綾様がいなくなってしまったら「守護代様」の権威はどうなります。。。貴女様は「上田長尾」からの。。。今は「人質」の身ともいえる方。。。そんな易々と姿を隠されたら「春日山」の動揺はいかばかりにございましょうや？」

綾はハッと自分が性急になり走り過ぎていた事に気がついた
背を正し
麻の目を見る

さすがに的を射た返答。。。

惣門の閉鎖から向こう
「春日山の番人，直江実綱」直下の侍たちでさえ「守護代」の指示
なくして門をくぐることの出来なくなっている現状の中で
「上田長尾家，政景の妻」である綾が城からすんなりと「逃げでら
れた」などという事になれば
確かに「動揺」を産む事になる

麻の頭は迷いを振り切り明晰に動き始めていた
顔には微塵の迷いもなく
むしろ
美しく律された態度は「守護代の妻」という心構えを実践し，しっ
かりと現していた

逆に綾は今頃になって
自分「策」が穴だらけで「勢い」でココまでやってきてしまった事
に恥ずかしさがこみ上げ
「勢いばかりの言動」で手足を震った姿を思い出して萎縮し肩をす
くめた
そんな姿に
麻はゆっくりと微笑んで

「綾様。。。私の事は心配なさらないで。。。。「恥」も全て。。。
殿の身を思えば「苦」でもありません」

綾は自分が少しは気に掛け心配していたもう一つの事をしっかりと
見透かされて驚いた
「麻様。。。」
恥ずかしさと
沈痛な想い

それは「守護代」の妻たる者が「敵襲」におののき「主（守護代（晴景））」を捨てて自分だけが上杉様の元に「逃げる」という行為にも見られるであろう「策」
だがしかし城を去るというのは事実

「春日山」に残る諸侯の目から見ても「恥」である

夫の元に留まって
共に城にて討ち死にのほうがどれほどに「美しい事」か

「恥」を忍ぶ覚悟を決めてた麻の顔を
綾は見られなかった
持ち込んだ「提案」の安直さにむしろ自分を恥。。。ただ俯くばかりだった
そんな落ち込んでしまった綾の肩を麻は優しく両手で抱いた

「心配なさらないで。。。「恥」と罵られようと晴景様が生きる事の方が。。。私には大切な事なのです。。。それを綾様が気がつかせて下さったのですから。。。綾様もそうでしょう?」
「ええっ。。。」

肩を落とし
涙を落とし
心を震をした綾の思いも一緒だった

この後。。。。
この「戦」の後。。。影トラにしろ晴景にしろ。。。いや「春日山」の総意として「上田」を攻めるなどと言うことになれば

綾は「恥も外聞も捨てて」上田長尾の助命嘆願をするつもりだった
幾筋も涙が頬を流れ下り，畳にこぼれていく
未だ安否のわからない夫。。。。それでも「生きている」と信じる。
。。ただ信じる
政景のためにだったら
どんなに頭を下げてもかまわない。。。。。

そういう綾の想いはしっかりと，麻に伝わっていた

「綾様は城に居てくださらぬば。。。私のためにも」
「はい」

俯いたままの綾の耳元に麻は小声で頼んだ
「いざというとき。。虎御前様を止める事ができるのは綾様だけな
のですから」

思い出したように綾は顔を上げた

「そうでした」

返事に麻の目が念を押しながら「頼む」
そして遠くを見るように顔を上げ
天井の板目を見つめながら話した

「晴景様は「虎御前様」の中にも「母」を見ておられたのでしょう。
。。。だから「人質」などという扱いをなさらなかった。。。その
事が今は「危険なこと」に繋がっている」

冷静になった麻の前で

綾はまたも俯きあやまった

「すみません。。。母上を止めるために「春日山」の者をつかえば「酷い争い」に繋がってしまう。。。そんな事は。。。母上をそんな事の中は。。。」

こんな非常事態の中
「虎御前」の野心を「春日山」の誰に告げれば。。。。母を失いかねない事態は用意に起こり避けられない
いろんな
絡みあった思案に板挟みになり苦しみ抜いた末の
「綾」が見つけた最後の「抜け道」
それが麻を動かす事だった

「すみません。。。女の浅知恵しか浮かばず。。麻様ばかりに重荷を」

頭を畳に擦りつけ「足らぬ知恵の策」をさらに伏してあやまろうとした綾の声を
麻は遮った

「いいえ。。。よくぞ私のところに来てくださいました。。。私の役目果たしてみせましょう」

そこまで言うと
襖の向こうに控えていた侍女たちに命じた
「調度などは一切いりません。。着物を少し空箱を並べて山を下る支度を半刻でしなさい」
主の覚悟に侍女たちは手際よく動き出した

「宮地（みやじ）は私が上杉様の元に参る事を「殿」に告げてきなさい」

名前を呼ばれた老齢の侍女は
もらい泣きしていた涙を拭いながら
意志強く頷くと部屋を出て行った

力強い指示の後
綾を抱き起こし

「綾様。。。。ココから本当の「戦」にございます。。。共にがんばりましょう」

強く手を握り合わせた
そして「運命」を感じ告げた

「この仕事は私にしかできません。。。必ずや上杉様を。。。いいえ「あの方」を動かしてみせますわ」

綾は稚拙ながらも絞り出された自分の「策」の行く末が「麻」に繋がれたことにただ感謝した

昼を待たず
「守護代奥方「麻」」の春日山からの下山の報（報告）は城内を廻った
だが
「守護代」からの「手形」が発行されている事もあり

予想されるほどの騒ぎはなく
それでも「闇」の中では「誹謗中傷」の言葉が蠢く中での下山が行われた

二の丸の屋敷を自らの足で歩き「大手門」に向かい歩く「麻」の姿に送る者はほとんどなかった

むしろ
城に残される諸将の「妻女」達の冷たい視線があるだけだった
守護代の妻。。。。。
この春日山の主の「女」は迫る「影トラ軍」に恐れを成し
不仲だった夫との手切れも兼ねて「逃げ出した」

そういうたぐいの言葉が
小さいながらも中傷となって麻の耳には届いていたが
誰にも
お付きの侍女の
誰にも顔色を変えさせる事なく「大手門」をくぐっていった

少ない侍女達を先に歩かせながら
麻は二の丸の向こうに見える「高井楼（たかせいろう）」に人影を見た

「晴景様。。。。。」

確信していた
自分の出て行く姿をきっと夫は見ていると

山を下ると通達した時にも夫からの「言葉」はなかった
でも

それが今，置かれた立場で出来る夫の最大限の「愛情」だと信じていた

「必ずや貴方様の命を救いましょうや。。。。私が貴方を慕っている事。。。見せてさし上げます」

手渡された直筆の「手形」を懐に。。。
堪忍するように自分の胸に手を置き
強く願いながら真っ直ぐに山を下っていった

「。。。。。それでいい」

高井楼の上
遠く米粒のように見えた「妻」の姿に晴景は誰に言うでもなくこぼした
側に控えた水丸は眉間に皺を寄せたまま尋ねた

「守護代の妻ともあろう方が。。。なんとも見苦しい事であります」

水丸の激した言葉に薄ら笑いを浮かべた晴景は
下りの梯子に向かいながら言った

「つまらぬ女だった。。。足を引っ張られる前に城を出てくれた助かったな」
「。。。はい」

歯牙にも掛けていないという晴景の答えに
水丸は少し戸惑ったように聞いた

「共に死ねとおっしゃれば良かったのです」
「死ぬのか？こんな「戦」で」

水丸は自分がとんでもないことを聞いてしまった事に即座に顔を伏せた

「申し訳ありません！！死ぬなどと。。。「戦」は我らに勝機ありです！！」

慌てた水丸の方に晴景は手を置いて言った

「そうだ。。。。こんな「戦」で死んだら損だ」
「はぁ。。」

降りる側の景色を今一度ゆっくりと見回した晴景は日差しに向かって言った

「共に死ねなどと。。。そんな酷い事が言えるものか。。。。」

秋の日差しは高くとも
刻限は夕闇の時を足早に連れてこようとする
ほんのつかの間の出来事だった

その３６　運命　（９）

「麻」が上杉定実（うえすぎさだざね）の屋敷の正門を通されたのは，夕暮れも近づく刻だった
春日山を下った時間から一刻半を門の前で待たされ続けた
忙しく動く番兵や使いの者たちの「好奇」の目にさらされ
激しく舞う砂埃の中でも麻は黙して上杉邸の門が開かれる事を待ち続けた

夕刻近く
何度も出入りをしていた「物見」と思われる痩せた男が
渋い表情の上「不満」を顔に表したまま麻を呼んだ

「守護代様の奥方。。。。どうぞお通り下さい」

棘のある言葉
通りに面した屋敷の前
少ない侍女を連れた麻に対する「嫌味」である「守護代の妻」とはっきりと呼び立てて
門を通らせた

くぐった門内には
何人かの物見が
外と変わらぬ忙しさで行き来をしており
麻の目の前を「無礼」を知った上で走り回っていた
誰も挨拶もしない

「上杉様も。。。「戦」の行く末を見極めようとしておられるので

しょうか？」

屋敷の中の激しい往来に，宮地が麻に耳打ちした
騒がれるばかりで相手にもされていない麻を気遣って口を開いたのだが
良い言葉が浮かばなかったのであろう

麻はただ頷き
無用な口を挟まないよう注意した

「まだ。。。門をくぐっただけです」

だが
注意しながらも周りをしっかりと観察し
越後守護，上杉定実が「戦」に無関心でない事を理解した

この屋敷の「主」である「守護」が「戦」という事態に対して「機敏に」動いている事を肌で十分に感じた

周到な守護の態度に
暗い息を一つ落とす麻

春日山から下った「総構え」の町はそこかしこと兵が走り回るため砂埃にまみれ
久しぶりに二の丸の屋敷以外の「外」に出た麻の呼吸を苦しくさせていた
細かく澱み吹く砂の風が
麻の細くなってしまった体を。。。
息を蝕み「使命」の重さに倒れろと何度も誘っているようにも思えた

そんな自分の内にある弱気を振り払うように
目を曇らすために刺さった砂を拭う
使命を。。。。
はっきりとした態度で
「綾」から受け取った想いを。。。。。やっとココまで持ってきた
想いを告げねばと
身なりを正した

「こちらえ」

門内に通された後「待合いの部屋」に入ることも許されず
ずっと中庭に立たされていた麻に，女房装束をまとい，顔の片方に
「面布」を着けた女が呼んだ
額に「怒」を隠さず剣を立てた女は
来る「客」に対しての不遜をわざと見せて
ぶっきらぼうに手で指し示すと，屋敷の廊下を歩き広間に案内した

「やっとでございますね」

部屋に通された麻に付き添った侍女の「宮地（みやじ）」が砂埃をかぶり
すっかり色をくすませてしまっていた麻の着物を静かに叩き（はたき）ながら
待たされ続けた「不満」を注意を受けてはいたが「不憫な主」に代わり愚痴った

「私達は重大な「お知らせ」に参ったと申しておるのに。。。それ

に守護代様の奥方に酷い扱いです」

その言葉に広間の中程を仕切る御簾の前に座った女房の目は鋭く尖った

麻は口を慎むようにと自分の口元を抑え宮地の気持ちをたしなめて言った

「静かに。。。。そんな事は今「大切な事」ではありません。。」

もちろん麻にも待たされた時間に不満ではあったが

入り口を通ったところで「目的」が達成されたわけではない。。。

ココの広間に付いた事で「使命」が果たされたわけでもない。。。

「これからです。。。まだこれからが大切なのです」

麻の忍従の言葉に宮地は自分の発言を恥てすぐ後ろに下がった

秋の小涼しい風が通る部屋

京の都で仕立てられた「御簾」がかけられた奥にはまだ誰もいない様子だった

こじんまりした庭園に鈴虫の声が響き

前庭にあった忙しさは音をひそめる

静かな空間

ただ時間が過ぎる中，涼しいはずのその場で麻はじっとりとした汗を額に浮かべながら黙して待った

「守護様のおなりです」

それは
夕の空の終わりが見え始めた頃だった
薄められた墨のような闇がやって来た頃

御簾の後ろに「実（みのり）」は座した
座してすぐに忌々しげに言った

「よくもまた。。。恥じる事なくココにやって来たものにございますな」

麻は実の入室に頭を下げたままだった
上げて良いと言われる事もなく
いきなり「嫌味」を食らわされた

「会うつもりはありませんでしたが。。。。」

いつになく「怒り」を露わに語る「上杉守護代行」の実の前
麻のただ伏している姿は「火に油」でしかなかった

「面を上げよ！！」

普段なら自分から誰彼と話しかける事のない実だったが
今は自分を律する事ができなかった
沈黙を守りながらも顔を見せた「晴景」の嫁。。。。

春日山から一人。。。。。夫を置いて逃げてきた女
御簾で分けられお互いの姿が見えない状態とはいえ。。。。
実の苛立ちは十分に外にまで音として感じられた

開き。。。また閉じられる扇の音で。。。。

顔を上げた後も何も言わない麻に「話せ」と言えないまま実は荒げた声で聞いた

「家臣の戦に巻き込まれ迷惑を被っている「上杉」に，自分だけ助かろうと逃げてきた女が何用か！！」

どこかで区切りをつけて相手の用向きを聞かねばならないのに。。。。

罵声が止まらない

「恥知らずにも程がある！！！いやしくも春日山の主の「妻」であるなら。。。。夫と共に死ぬと何故言わなんだか！！」

実の甲高い大声は屋敷の広間に響き渡った

だが

御簾の前に並ぶ女房はそれを止めようともしない

むしろ麻を。。。己が主が言う言葉のままに蔑んだ目で睨んでいた

「共に死ね事が最良では無かったからでございます」

麻は初めて口を開いた

小さな声で

実に比べればまだ遙かに年若いハズの麻の顔はあまりに弱々しく。。。そして若さを失っている

それでも

苦心の胸中に語ろうとする声を女房が遮った

「それで自分だけ逃げてきたというのか！！！こんな不躾な妻を持って守護代様も不憫というものよ！！」

女房という立場。。。。守護代の妻と比べるまでもない侍従の者の非礼
主の心中を察した「品（しな）」は扇を打ち据えて御簾の中
怒りに震える実に言った

「こんな無礼な妻。。。この上杉に置くことなどあってはならないと思います！！私が追い出してさし上げます！！」

そういうと失われそうになっていた「優雅さ」を取り戻し扇で顔を隠して言った
「早う。。。ココから立ち去れ！上杉に迷惑を持ち込むでない」

「待ってください」

食い下がるにも，か細い麻の声に今度は実が告げた

「助かりたいのならば「林泉寺（りんせんじ）」に行けば良い。。。我が女房「品」が申すように上杉に迷惑を持ち込むでない。。。そこで存分に救われよ」

上杉守護のあまりの仕打ちに
麻の侍女，宮地は体を奮わし悔しさを現し
伏したままの目から涙がこぼれしていた

沈黙が刺さる広間の中

冷たい風が走る

「おっしゃりたい事は，それだけにございますか？」

静まった場に細いながらもはっきりとした口調が「反抗」を告げた
麻の声は相変わらず細い
なのに揺るがない「想い」に押され毅然としている

「無礼な。。。」

扇で顔を隠していた品はそれを震わせながら主に変わって怒鳴った

「早う出て行け！！」

「いいえ出て行きません。。。。助けて頂かねばなりませんから」
「浅ましい。。。。」
麻の毅然とした態度での返答に実は唸った

「己が救われたいために恥も知らぬと言うか！！そうまでして助かりたいのか？」

「はい！！助けてくださいませ！！我が夫。。。「長尾晴景」を救うためにご お力をお貸しくださいませ！！」

その言葉に目の前にいた品は目を丸くした
御簾の中の実も「晴景」の名に怒りが止まった
だが
次に沈黙は続かず
麻は今まで消えてしまいそうに細かった声を張り上げて懇願した

「この戦で夫が亡き者に成らぬ為にも。。。。どうか。。どうか。。。上杉様のお力添えを頂きたいのです」

「それを言うためにココに。。。」
驚く品の答えに
罵倒を我慢し続けてきた宮地が辛抱堪らず涙ながらに割って入った

「春日山は今，全ての門を閉ざし誰も出入りする事の出来ぬ状態です!唯一この「手形」が上杉様の元まで来る方法でございました!。。。。我が姫は。。。春日山から下るときも。。。不躾な妻と罵られ。。。長尾の恥さらしと罵られ。。。そんな心ない言葉を受けながらも。。守護代様の事を第一に想ってココに参ったのでございます」

「宮地。。。」

自分より大きな涙声の宮地を片手で麻は制した
だが宮地の感極まった想いは止まらない

「殿様（晴景）を思うて。。。ココまで恥を忍んでやってきた我が姫に「守護様」とはいえ。。あまりにございます。。。。酷うございます」

「宮地。。。」

麻は心優しい侍女，宮地が自分を想って飛び出てしまった事を理解しつつも
彼女の手をにぎり
「心静かに」と抑えた

麻の態度は最初から「忍ぶ想い」を保ち冷静であった事に実は気がついた

「そのために山を下りられたのか?」
実の声のほうが震えた
夫を想い「恥」さえも厭わずココにきた麻を責め続けた事が。。。。
急に「浅ましい」く思えた

「麻殿。。。」

心を正しこの才女が持って来た「願い」を聞かねばと
実も己の心を改めた時

さっきまで静かだった庭が騒がしくなった
足音も高く走る者は広間に容赦なく滑り込んできた
「見苦しい!!」

品は自分たちの騒がしさを棚に上げて，顔を出した下男に怒鳴りつけたが彼は必死の形相で一礼すると告げた

「申し上げます!!!只今府中より北東，前数里の場所に。。。「

篝火」が」
「篝火？」

広間に集まっている女達は各々聞き返した

「篝火がどうしましたか？」
「一線に並び揺れております！！。。。。。その数「千以上」。。。」

「それは何じゃ？」
誰よりも実はわかっていた
だが聞いた
そうでない事を願って
だが下男の顔色は悪く。。。。答えは決まっていた
それは。。。ついに目に見える所までやってきたのだ

「影トラ様率いる「軍勢」と思われます」

持っていた扇が実の手からこぼれ落ちた
震える指先は「恐怖」に痺れそれを支える力を失った
それでも
痛む胸を押さえ

「門を。。。固めなさい。。。努めて「上杉」は家臣の「戦」に関わる事はないと。。。」

「守護様！！！」
呆然としながらもやっとで指示を出す実に

驚くほど大きな声で麻が言った

「お願いです!!もはや躊躇している時間はありません!!どうかお力をお貸しください!!」

騒ぎの大きくなる屋敷の中
喧噪に負けぬ声がよけいに実を焦らせていた

「麻殿。。。。今の上杉には幕府の威光の下。。戦わぬ事ぐらいしか出来ません。。。力など私には」
御簾の中，落とした「扇」に視線を向けたまま
力無き自分達を守る事に専念する事を。。。

「いいえ守護様。。。貴女様でなくては晴景様を止める事は出来ません!!私は。。。貴女様が「どなたか」存じた上で。。お頼みしているのですから!!」

乗り出した麻の真剣な顔に
実は御簾の中であったのにかかわらず。。。慌てて扇を拾い顔を隠した

「何を言って。。。」

「守護代様の兵が総構えに弓隊を並び始めました!!」

二人の女の対峙を割るように矢継ぎ早な知らせが入る
「ええい!!やかましい!!守護代奥方様!!今日はもう退かれよ!!」

麻の危険な発言に品は，報告を重視してなんとか退出させようと叫

んだが
迫る危機に麻は黙らなかった

「今こそ!!!「情愛」をお示しください!!それによってこの「戦」をご仲裁へとお導き下さい!!」
「黙れ!!」

品はもはやこの場で「そのようなこと」をぶちまけられてはと，立ち上がり力で麻を追い出そうとした

その時

「騒がしい。。。。報告が聞こえぬ」

声の主は実の後ろいた

「貴方様。。。。」

実の背筋は一瞬で凍った
恐る恐る振り返る
そこには夫，「上杉定実」が立っていた

定実は，実の横に座ると静かに。。。。太く抑揚の聞いた声で

「暫時報告を持って参れ」

命じた
下男は一礼するとけたたましく廊下を走っていった

「すみませぬ。。。このような時間に騒ぎを。。。お体に障ってはいけません。。。どうぞ」

焦燥した実は声を震わしながら定実の手を引こうとしたが
定実はその手をしっかりと握り自分の膝の上に置くと言った

「さあ。。。。話しを聞こうではないか」

その目は深く
黒く
威厳に満ちたものであり
見る物に「畏れ」をいだかせる強さがあった

実は「皮肉な運命」を深く感じ。。ただ黙した

その３６　運命　（１０）

夕暮れを過ぎた刻に
それはやって来てしまった

「影トラ様の軍勢と。。。。」

最初の報告で，並ぶ「篝火」と聞いただけで，実には「影トラ」がついに目の前にやって来て締まったことは理解できたが。。。。覚悟は定まっていなかった

御簾の向こう側では
麻が必死に「ご仲裁を」という声を張り上げ
その「心」を知るに当たって

恐ろしい言葉を告げるに至り「品」が声を荒げて黙らせようとした

その時

夫の声は静かに。。。重く響いた

「話しを聞こう。。。。守護代奥方，麻殿。。」

急な「守護」上杉定実の登場に御簾に縋ろうと体を前に寄せていた麻は，すぐさま元の位置に戻り頭を伏せた

区切られた御簾の向こう
この屋敷の主の声に焦りは無く冷静な問い

「麻殿。。。。「仲裁」を願ってココまで来られたそうだが。。。
それは「晴景殿」の頼みなのか？」

定実の質問に，麻は頭をふせたまま答えた

「いいえ。。。違います」
先ほどの騒ぎで声を張り上げてしまったせいか。。。さらに細く掠れるような麻の声と息に
定実は耳を傾けながら
「面(おもて)を上げられなさい」

労る言葉に麻は静かに顔を上げた
少し乱れた櫛(くし)を掻き上げられぬ姿に，目前にまで来てしまった者に対する「焦り」が見える
だが
定実はそういう見える「焦り」に左右される事なく質問をした

「では。。。誰の頼みで「上杉」に仲裁を申し出に参られましたかの？」

麻は軽く首を横に振る
「誰の頼みでもありません。。。強いて申し上げるのならば。。。
私(わたくし)の想いのために。。。ご仲裁をお頼みに参りました」
「想い。。。。？」

定実のとなりに座る「実(みのり)」はただ黙して麻の言葉に体を堅く緊張さ

せたまま
落ち着き無く聞き入った

「想い。。。。とは？」

一つ一つの言葉を慎重に吟味するように。。。定実は問う
その対応に怒りはなく
本当に「事」の真実を知ろうとする真摯な姿を御簾越しとはいえ感じる事ができたのか
麻の張りつめていた表情が少し緩み
返された質問に。。。。。
頬を赤らめた

「私の夫。。。。晴景様に対する想いで。。。。ご仲裁を願ってココまでやって参りました」
「晴景殿に対する想い。。。。」

定実の声は。。。柔らかく優しかった
相手を十分に安心させる
ゆっくりと返される返事が，話を続けることを許す

「想い。。。。聞かせていただきたい」

驚く返事
定実は「女」の言葉に耳を傾ける
この非常の時に考えられないことだが

審議をするように
御簾の向こう「想い」を語れといわれ，戸惑いを見せる麻を促した

「想いを。。。それを聞かせてもらいたい」

定実の言葉に麻は急いで頭を伏せた
溢れ出て止まらなくなった涙を隠す。。。。。そういう理由もあったが
思っていた以上に「温和」で。。。。「女」の自分の言葉を真摯に聞こうとする守護の態度に感動して

そしてその心遣いに
留めていた「想い」は堰を切って溢れた
床すれすれの顔の前。。。。。涙の降り注ぎ小さな泉を作り始めている
化粧を洗い流してしまう熱い水に，顔を伏せたまま

問われるまま
麻は一生懸命に語りだした

「このような場所で私の事を話すなど。。。無礼あたるやもしれませんが。。。いいえ，しかしそれが本心でございますからお聞き下さい。。私は。。。。不出来な妻でございました。。。夫の心の内をわかろうとせず。。自分ばかりが疎まれていると思って今日まで過ごしてまいりました。。。」

板の間に降る。。。流れ出る幾粒も「痛み」だった涙
今まで
蟠り続けた「過去」を洗い落とす。。。

「私は身勝手な不満を募らせながら今まで暮らして参りましたが。。。。この未曾有の危機の時に。。。晴景様が変わらず私を想うてくださっていたことに気がついたのです」

もはや下を向きながら。。。。この手に託された「愛」を安く話せない
涙のままの顔をあげた
さっきまでの悲壮さはなかった
思いの丈を話す麻は「嬉しさ」を現し
いつもなら澱んだ涙で自分の膝だけを見つめていた瞳は「愛」に潤い輝きながら

「ですからこの「手形」は，あの方を救う。。私に託された「願い」なのです」

そこまでを話きってやっと涙を拭った

「私は晴景様を慕っております。。この想いで私はココにやって参りました。。今。。殿は一人，下がるに下がれないお立場にあり。。。。そしてきっと「死ぬことを」望んでおられます。。。どうかそのような事にならぬ為にも。。。お力をお貸し下さいませ」

麻は肩を震わしている
御簾を隔てた
実の体も奮え。。。

「どうしてそのような事がわかる。。。何故晴。。いえ守護代殿が死ぬなどと。。大げさな」

実の動揺に膝の上に寄せていた手を少し。。。握りかえした定実は
目で静かにするよう告げ
麻に聞いた

「ではこのたびの「戦」の仲裁を頼みに来たのは麻殿個人の願い基づいている。。。そういう事と理解してよろしいか？」

「守護様！！」

用件は終わり話しを断ち切られそうになると思ったのか麻は必死な声で

「守護様！！確かに私個人の想いに従ってココにやって参りましたが「戦」を止めたいという願いも本心にございます。。。「長尾家」のためにも。。もちろんの事にございます。。。その上でのこの願い。。果てにて私にどのような処遇を与えられたとしてもかまいません。。こんな戦。。「身内」で争うなど無意味です。。手をつなぎ合えば「越後」を乱す事なく解決できる事と信じております。。。だからこんな事で「晴景様」を失いたくないのです！！どうか。。お聞き入れ下さいませ。。。そしてこの不躾な申し出のどんな処罰も私に下さいませ」

食い下がる麻の意見は「チグハグ」になり始めていたが
返される定実の声は変わらなかった

「守護代奥方，麻殿。。。用件はわかった」

「お願いです。。。。晴景様は守護様のことを。。。「代理様（実）

」の事を「親」とも思っておられます。。。守護様のご仲裁であれば心を解かれ。。。」
「親？」

瞬間
定実の声は少し尖った
それはこの場所に集まっている「女達」全てに感じられたのか
水を打ったかのように静かになった

「親か。。。。。。。」
深い息
それをかき消す使い番の下男
「申し上げます！！只今。。。」
「いや。。。。しばし待て」

慌ただしく軒先に駆け込んだ男に定実は重い声で止めた
「使いの者。。呼ぶまで下がっておれ」

軒先の男は礼をしてすぐにその場を離れた
「侍女も下がってくれ」

声を固くした定実の指示に麻は「宮地」を下がらせ
実も「品（しな）」を下がらせた

実の体は小刻みに震えていた

隣に座っている夫の顔が厳しくなったことに。。。。心の奥底にある想い
逃げ場がない想いに

「姫よ。。。。。そなたはどうしたい？」

夫の膝の上。。握られていた手に力が入り
顔を背け反対に背を丸めていた実の体を定実は振り向かせた

御簾の向こうに控えて座る麻は自分の事と間違えそうになったが
定実が己の妻に話していることはすぐにわかった
逆に実は恐れおののいた。。。。
麻の話を聞くことで心はすくみ上がっていた

「晴景様は死ぬことを望んでいる」と。。。。それを黙って受け入れねばならぬ事になった自分の不甲斐なさ。。。。
キリキリと締め上げられる。。。。「彼」への想いを。。。。見透かされたのではと

「鈴姫（すずひめ）よ。。。。そなたは。。。。どうしたい？」

よもや人前でかつての名を呼ばれるなどとも思いもよらぬ夫の問い
「何も変わりません貴方様に従い。。。家臣の戦になど関わらず。。上杉を守るのみです」

心で募らせている思いとは別のものと戦い続け
からだを小さく震わせ続ける妻の声に定実は悲しそうな目で言った
「上杉に守るものはあるのか？」
「守ります！！貴方様を」
力強い返事とは裏腹に。。。。瞳はみるみる潤み曇ってゆく実

胸元まで引き寄せられたところから夫の顔を見つめていた頭は力無く，垂れた

「それが勤めにございます。。。貴方様の妻としての。。勤めにございます」
「そうやって。。。今までワシに使えてきたのか？」

悲しい。。夫の問い

「何故にそのような事をお聞きになりますか」

「叶わぬ想いを抱いたままワシの元に。。。。今日までいたか？。。。そう聞いているのだ」

顔を横に。。。。小さく振った
涙はやはり堪える事ができず
実は泣いた
泣いて
夫の胸元に向かって答えた

「そのような事。。。。考えた事もございません。。。私は「上杉」のためにココに嫁したのに子も産まず。。長尾との架け橋も作る事の出来なかった者です。。。。なれば「願いは一つ」。。。。こんな

私を愛し慕って下さった。。貴方様だけが全て。。。。。貴方様に。。。。」

言葉が細く消えて行く
苦しみが喉を締め上げ
本当の「願い」を懸命に封じ込める

「貴方様だけが。。。。」
実は崩れ
夫の腕の中に落ちた
定実は顔をあげ
御簾の向こうの麻を見据えながら言った

「上杉の家には，最早何も守るものなどない」

張りつめた会話の前
麻は沈黙を守った
定実は手の中の震える花，実を強く抱きしめて言った

「上杉家のために出来る事はは何なくとも。。そなたを「親」とも
慕ってくれる「子」を救う仕事は出来るであろう」
実は驚いた
声はなくただ見あげた

定実の顔は。。。。。
あのときと同じだった

「そなたを愛している。。。そなたと共に過ごせる日々があるのならそれを「価値」ともいえましょうや」

自分の価値を
生きている意味を見失ったあの日

ただ雨の音の続いた日々の最後
実を必要だと迎えに来た夫の言葉

定実はそう言ってくれた
そして
今
夫は。。。。。またも心を壊してしまいそうな妻の願い
自分からはとても叶えられない。。。言うことの出来ない願いの言葉を与えた

「そなたを「母親」というのなら。。。わしは「父親」。。。子を見捨てる事などできぬ」

実の涙は定実の着物をゆっくりと濡らしていった
細い指先が必死に着物の襟を掴み
何度も
「貴方様。。。貴方様。。。。」
何度も。。。。。

定実は実の髪をなでながら深く息をついた

「必要以上に。。。運命（さだめ）と事を背負う事などない。。。ワシも。。。そなたも。。。これからも共に生きるために。。。共に出来る事をしよう」

時は深い夜を迎えつつあった

その37　女　（1）

登城のための支度を調えるため評定の間から奥の部屋に移った「定実」に「実（みのり）」は黙って付き従った

月の無い空は，先の見えぬ闇の天井となって広がり
秋の冷たい香りは風と一緒に部屋の中に届けられた
小さな灯りの元
薄暗い部屋で着物を替える音だけが響く

実と定実

二人の他には「品」が共をし
定実の身支度を手伝っていた

静かな間。。。。
言葉の無い部屋の中で実はただ頭を下げ押し黙っていた
堪えていた想い。。。。
自分では叶える事の出来なかった願いは
今
夫の助けを得て
なんとか果たされようとしているが。。。。

黙して身を整える夫に。。。。尋ねる事はできなかった

「何故。。。。そして「あの事」を夫は知っていたのか?と」

それを聞いて良いのかさえ未だに戸惑っていた
伏したまま指が
床をかるくこする。。。。
落ち着いていられないのに，慌ただしい姿も見せられない身である

おそらく
夫は自分の「不義」を知っていた。。。。
知っていたが。。。。何故今まで黙っていたのか？

いたたまれない想い
それとも「言葉のあや」なのか？
「親」という麻の言葉に心を。。。。一瞬尖らせた夫の姿
「怒り」を。。。。

実の肩は震えていた
わからない事。。。知られていた事。。。
色々な出来事がいっぺんに自分の胸にかかっていた気がかりを押し流し
ぽっかりと穴の空いたように。。。先の見えない空洞のようになってしまっていた

頭を小さくふる
少ない涙が目の下を濡らす

だけれどもと。。。
そのまま
またも流されるままに「救われて」いいのか？
「あの日の不義」を黙ったまま

そんな「大罪」を謝ることなく
差し伸べられた救いに。。。。甘んじて良いのかと
己の心と自問するものの
「罪」を棚上げしたままで自分の願いだけがかなうなどと。。。。

「申し訳ございません。。。でした」

実は垂れた稲穂のようにしなっていた体を深く伏せた
伏せたまま押し殺していた喉をやっとで開けた掠れた声で続けた

「私は。。。貴方様に対して「不義密通」を働きました!!今更そのような事を言ってどうなるわけでもありませんが。。。ですがどうか。。事を成す「対価」として私を成敗して下さいませ」

「代理様!!」

感極まった実の言葉は震え
支離滅裂にも近い
焦燥しきった様で頭を伏せたまま「覚悟」を告げた

ただで助けられては。。。。自分ばかりが救われてはいけないという後悔の念

その動揺は品にも伝わり身支度の手を止め，実と定実の間に入り話しを濁そうと

「代理様は。。。今まで。。。越後を守らんとする職務でお疲れで

ございます。。なにとぞ」

そこまで言うと体を回し
実の方を抱き
「しっかりなさってください。。。お疲れなのですよね」

実の前にある品の顔にも苦痛が見えた
目には涙さえ浮かんでいる
実と想いを同じくして「宿命」を背負ってやってきた品には主の心
内が痛いほどわかっている
だからそんな「悲壮」な顔を。。。。まるで罪を裁かれて。。。「
死」を迎えて「命」を賭して願いに返る物を支払うような行為をみ
る事は辛く
定実に見せる事も辛い
顔の見えぬよう。。抱き寄せ。。。手に力を込めて「言ってはいけ
ない」と首を振る

「ダメです。。。そんな事をおっしゃっては」

主を失えない，支え合ってきた二人
あの日。。。。
火の海になった上杉の屋敷を手を取り合って落ち延びた時から
全ての苦楽を共にしてきた姫が未だに「苦悩」の中にいる事が辛い

定実に気がつかれぬように
小さく首を振り，注意を促す
しかし
実はもう黙っている事ができなかった

「私を罰し，お斬りくださいませ」

「代理様！！」

「待て」

自分の罪を吐き出し罰せられようと願う「実」
主の痛いほどの想いを知って，なおも諌めようとする「品」
二人の前
定実は手を差し伸べてもう言った

「姫よ。。。そなたの愛し慕う者は「為景（ためかげ）」だったのか？」

品の胸元に顔を埋めながらも実は答えた
「いいえ。。私が想うのは。。。「晴景（はるかげ）」の事。。。ただそれだけで。。。」
お互いを抱きしめ合う二人

「ならば。。それで良いではないか」

そのまま軽く息をつくと，顎下に白色に変わったヒゲをさすりながら続けた
夫の姿を不安な表情で見上げる実に

「とはいえ。。。ここまでそなたの心を窮させた想い。。。ワシの心根も語らねば落ち着く事。。。できまいな」

そういうと
定実は実の目の前に座った

闇を深くした夜の中
部屋を灯す小さな火の前にある定実の顔に怒りはなく。。何か照れくさそうに続けた

「そなたが懸念している「その事」を知ったのは。。。そなたが正式にわしの元に戻って来てくれた時には。。。知っておった」

実は呆然とした
つまり
定実が「新守護」となり，別族の長尾より抜きに出ようとした為景の要請に従い「妻」をそう

「鈴姫を帰して欲しい」

という定実の意向に従い「覚悟」を決めて上杉に戻った時には。。。知っていたという事
呆然としたまま「否定」しようと首を動かす実に

「今でこそ「軒猿（のきざる）」（忍）は長尾の。。それも「直江」の配下で仕事をしておるが，元々は上杉に仕える者たちであったからの。。。すぐに報告としてあった」

「では何故にその時に。。。お斬りになりませんでしたか」
震えが止まらず
自分では体を支えていられない実は品にしがみついたまま聞いた
定実はすこし困った顔をして息をついた

「不義の妻に対する怒りがあったハズでありましょうに！」

実の心に引っかかっていた物
そういう全てのものを知ってから「死」を迎えたいという気持ちで
言い寄った

「怒りはあった」

穏やかな顔ながら定実は，はっきりと答えたが
実を睨むような事はせず
少し遠い目で
「怒りは。。。確かにあった。。。だから何度も為景に挑んだ。。
わしも男。。己の誇りに賭けて。。上杉という家の全てを使い尽く
してしまう程に戦った」

実は思い出した
「新守護」を頂いた長尾家は最初は共に手を取り合い「越後」での
自治確立のために戦ったが
その後は定実を顧みる事はしなかった
次々と権利を剥奪されて行く中
定実は「乱」を起こし何度となく為景に向かって戦った
長い戦いの日々
春日山に追いつめられ「幽閉」され。。。。

実は悲しくなった
夫にそんな想いを背負わせたまま自分を連れ添っていた事に
「罪深い一族にございます。。。だからこそ私を斬って許しを頂き
たいのです。。。」

守護を追いつめた長尾家
胸を押さえながらの返事に

「姫よ。。。最後まで話しを聞きなさい」
遠くなっていた視線を実に向けて定実は続けた
「わしは何度も戦ったがついに為景に勝てる事はなく。。。かの男はそのままこの世を去ってしまった。。。その後「晴景」が，わしを守護の座に形だけではあったが戻したの」
「はい」
話しを聞くようにと夫は，実の手を優しく握った
「戦う力を無くし。。兵を亡くしながらも，わしは唯一欲しいものがあった。。。覚えておるか？」
定実の言葉に実の体を硬くした
それはわかっていた
だが夫の話の真意に近づくために堪えて答えた
「子にございます」
「そうじゃ。。。ワシは何の力も無くなってしまったとはいえ「名家上杉」を継ぐ子は。。。どうしても欲しかった」
それは為景が死んでまもなくの事だった
戦に敗れ，力の大半を無くした
お飾りの守護は「新守護代，晴景」に伊達から養子を迎えたいという旨を申し入れた
「そなたは。。。わしに側女(そばめ)を娶れと言うたな」

「はい」
実は目を伏せた
産まず女(うまずめ)ではなかった
「晴景」を授かる事ができたのに。。。運命の皮肉か，ついに定実との間に「上杉」の名を守る子を成すことの出来なかった後ろめたさと申し訳なさで涙がこぼれた
そんな妻の悲しみで小さくなった背に手を回し定実は言った

「晴景殿も同じ事を言うた」

「晴景が？」

驚き夫の顔を見つめる実に定実は頷いた
「どの名家からでも良い。。。側女をおとりになられればと。。。な」
そういうと
強く実の体を引き寄せた

「そしてな。。。そなたと同じ「想い」をわしに言うたよ。。。。そなたは養子を取ることに良い顔をしてはくれなかったの」
いたたまれなくなった
眉をしかめ小さく頷いた
自分で産むこともできないのに養子を取ることに反対したなどと
「すいません。。。私が間違っておりました」
「これ。。。話しを最後まで聞きなさい」
止められない涙で，ただあやまり続ける妻に定実の声は優しかった

「そなたは。。こう言ったの。。。「母親から引き離される子を思えば不憫でありましょうに」と」
「はい。。。。」
それは実の想いであった
あの日
産まれたばかりの。。。。まだ泣くしかできなかった赤子の「晴景」を抱くことも叶わなかった己の。。。切なる望み
母子が引き離される事など。。。他人事であっても。。。千切られる想いだったからこそ
自分以外の「女」を娶ってくれた方が心が痛まないと
零した言葉

「晴景殿もな。。。「子を奪われる母を思えば不憫でありましょうに」。。。そう答えた」

実は崩れた
涙はただ流れ
声をあげて泣いた
夫の手の中に
その体を定実は強く支えた

「その時にわしの中にあった蟠りは無くなった。。。。そなたの愛した子は，そなたの心を良く受け継いでおった。。。それは美しい事だと思ったのだ」

「晴景。。。晴景。。。」

どうしてそういう思いの丈が伝わったのか
それは理解できなかった
ただ
晴景が自分と同じ思いを持っていたことに涙が出た
引き離された痛みを晴景が心に。。。。持っていた事に泣いた

「そうだ。。そなたと晴景殿は。。。まことに親子。。その心はどこまでも良く似ておる。。。為景ではなく。。子を想い心を砕いたそなたを責める言葉などわしはもたん」
「でも私は。。。」

「もう良い。。。。それで良いのだ」
実の後ろ，品も泣いていた
胸に泣き崩れた実の髪を撫でながら

「だからワシとの暮らしを償いなどと思わんでくれ。。わしもまたそんな風には思いたくないのだ」
「貴方様。。。。」

見つめる夫の顔は優しく微笑んだ
微笑み何度も頷いた

「それにな，わしの願いが一つも叶わぬ理由など。。。とうの昔にわかっていた事じゃ」
不思議な言葉に実は首を傾げた
その姿を愛おしそうに見ながら定実は言った

「わしは「天女」を手に入れた男だ！それ以上のものなどこの世にはない。。。願いが叶わぬのも当然というものよ！」

実は涙の中で
恥ずかしげに答えた

「もう櫛（かみ）も白く代わった女に。。。そのような言葉。。。もったいのうございますわ」
夫は満面の笑みで
その櫛（髪）に触れながら優しく言った

「何も変わらんよ。。。姫よ。。そなたは変わらず美しい」
髪をすく手に
夫の手に自分の頬を当てた
「私はなんと果報者な女にございましょう」

細い妻の指に夫の。。。戦の世界を越えてきた苦心の指が絡む

「鈴姫よこの仕事が終わったら。。。久しぶりに舞っておくれ。。
それがわしへの最高の馳走じゃ」
「はい」

彷徨い続けた心を休ませる宿り木はいつも近くにいた事に実は。。。
。
やはり泣いて
そしてやっと笑った

その37　女（2）

定実と実の心がほぐれた事を見計らったかのように，部屋外に控えていた従者が声をかけた

「申し上げます。。。先刻より「天室光育（てんしつこういく）」様がおみえになっておられます。。。今しばらくお待ち頂きますか？」

奥の部屋にこもってどのくらいの時がたっていたのか
定実は実の肩を抱いたまま返事した

「いや，すぐに会おう」

主の返事に従者は短い了承の返答をしてその場に控えた

緩くやれる登楼の下
己の「罪」を許された事で先ほどまでは力無く崩れていた実だったが
夫から与えられた優しさも手伝い
倒れかかった心は起き背筋も正しく戻し
心静かに聞いた

「光育様がココに？」
「そうじゃ」

定実は支度の調った自分の着物の襟を正し
立ち上がりながら

「実はの。。。直江から「仲裁」を願う繋ぎがあったのじゃ」

「直江？」

実は前年の祝賀の時の事を思い出した

怒りを露わに「影トラ」は晴景に「黒滝攻め」の合否を迫った

あの時，事の次第を見守り「あやうく」守護代の失態に繋がりそうだった場を治めた男

「長尾家」に古くから仕える「直江家」現党首の実綱（さねつな）

一本筋の通った「男ぶり」も名高き，守護代晴景がもっとも信頼している家臣が。。。。

まだ始まってもいない「戦」を目の前に「仲裁」を願って使者をよこしていた事に少しの「怒り」が立ち上った

「直江は最初から「影トラ」に組していましたわ！。。。まだ戦も始まらぬ内から晴景に「負け」を認めて「和睦」せよとすすめるなど。。。そのうえ上杉に仲裁を。。。」

妻の怒りが，子を想う心から出ている事を理解しつつも定実は実の肩に手を置きながら

優しく。。。事を解くように言った

「それは違う。。。今。。この春日山は「直江」が詰めている事で「瓦解」せずになんとか保たれている。。」

怒りの心とは裏腹に未だ「危機的状況」の中に春日山がある事を思い出した実は眉をしかめた

「後手に回りすぎた「守護代殿」を守る兵は五百もいない。。しかし相対し迎えるべく者は「影トラ殿」率いる三千を越える軍団だ」

「しかしココは難攻不落と言われし春日山」
定実は首を振った

「難攻不落。。。そう言われた城でわしは「為景(ためかげ)」に負けた。。それに城を守る兵たち全てが高い「志」を保てるわけではない。。。向かってくるのは「無敗の将率いる大軍団」。。。恐れに打ち勝つ事は到底無理じゃ。。。中身から壊れてしまっては元も子もない」
実は頭を下げてしまった
「そんな。。。」

定実はやはり「戦」の世界を生きた事のある男
よくわかっていた
政景(まさかげ)を使い「栃尾」を攻めた
だが「力の失墜」を象徴するように
おごり高ぶった政景の出鼻は打ち砕かれ。。。そのまま引きずられるように「大敗北」を喫した

綻びは大きく「亀裂」となった

取りも直さず「守護代の力に陰り有り」という結果が残り
今まで，まとまる事のなかった「国人衆」「豪族」「地侍」達がこぞとばかりの「反旗」を翻す機会を与えてしまっていた

そこまで聞けばさすがの実にも「周り」が見える
それ故の恐怖で体はまたも前に崩れそうになった
定実は
立ち上がったまま，身を震わせ始めている妻を諭した

「この戦。。。この勢いをもった軍団に。。そのまま立ち向かってしまったら晴景殿の負けは必定。だからこそ「和睦」が必要なのじゃ。。。。身動き叶わぬ直江が苦しみながら出した結論はけっして晴景殿を見限って出された答えにあらず。最善を模索した「手」なのだ。」

「戦は止められるのでありましょうか？」

戦が止まること。。。。
それだけが「息子」の救いである事を理解した実は
懇願するように聞いた

「止めねばならぬ。。。その為に光育を呼び立てていたのじゃ」

そういうと奥の部屋の襖を開いた

「光育は「譜代家臣斎藤」から「参内願い」を貰っている。。。それで実城（本丸屋敷）に入る事が出来る」

振り返り妻の顔を見つめながら定実は強く頷いてみせた

「ワシと光育で晴景殿を諫めてみせよう。。。だから心配するでない」

そう言うと評議の間に「戦」をしていた頃のような強い足取りで進んでいった

「本当に。。。酷い事を言ってしまいました」

定実が光育との協議に入った後
実は「麻(あさ)」移され控えの間を訪れていた
仕立ての良い「御簾」に覆われた部屋の中，疲れを顔に出していた
麻を労るように
白湯を用意させた実は続けた

「多くの非礼ゆるされよ」

心からの詫びをした
自らの手で注いだ白湯を手渡し
朝は深く伏せた頭を上げ快くその杯を頂くと

「いいえ。。。晴景様のために力になれたのならば。。私の事などさしたる事でもありません」

細い声で安堵の笑みと共に答えた
実は麻を近くで見て
その身が細く弱々しいものである事が気になっていた。。。
晴景の祝言の時。。。。彼女の顔は見ていたがその時の印象とはだいぶん違っていたからだ
もっとふっくらした感じの
若い女のもつ瑞々しさが見あたらない
自分より遙かに年若い女であるのに。。。。どこか萎れてしまったような肌に

だが言葉にだして容姿の変貌について聞こうとはしなかった
きっと「女」がもつ苦しみがそうしてしまった事に。。。そうして
しまった事に気が付けたからだ

そんな細くなってしまった身で
春日山を下るときに浴びせられた「非難」と「冷笑」を耐えてきた
事に。。。むしろ頭の下がる想いで一杯になった

「何故。。。私が「母親」とわかりましたか?」

積もった想いの中から実は思い切って聞いた
最初
評議の部屋に通した時に必死で「仲裁」を願った麻の口から漏れた
言葉
知りたかった事
だから
今は御簾を隔てず彼女の真ん前に出て聞いた

実の問いに麻は困った顔をしたが
線の細いからだから
これまた小さな声で答えた

「やはり。。。そうなのでしたか。。。」

顔には少しの驚きと
安堵の息
「では本当はしらなかったのですか?」

実も，今更声を荒げたりはしなかったが

自分から聞いたのに肩透かしをくらったようで目を丸くした
そんな顔の実に
麻は首を振って

「いいえ。。。でも多分そうだと思っていました。。。晴景様がそう言われたのですから」

「晴景が？」

驚きの回答だった

「祝言の時。。。晴景様は。。。御簾の向こうでしたが代理様（実）をずっと見ておいででした。。。それで私。。聞いたのです」

実はただ黙して続けて話すよう頷いて

「もし。。母と呼べる人がいるとするなら。。。それは代理様のような方と思いたいと。。。私その言葉を覚えてました。。。だから信じてココまでやってこられました」

咄嗟に麻の手を握った
声はでなかった
ただ
涙がこぼれた
震える手を麻も握り替えし

「でも。。それは本当の事でした。。お顔を見ればすぐにわかりました。。。晴景様のお顔はは。。代理様によく似ておられて」

「私に似ている？」

涙声の実に
実の苦労もきっと麻には通じたのだろう
労るように

「ホントに。。。よく似ておられます」

聞きたかった言葉
あの日
晴景が産まれたとき。。。。誰でもよかった
出来れば「上杉」の子として。。。産まれ出でて「祝福」を告げてと
言って欲しかった言葉

「お母上によく似ている」と。。。。

「ありがとう。。。ホントに。。。救われました」
涙で顔を上げられない実の後ろに控えていた品ももちろん泣いていたが
感動の間を割るように口を挟んだ

「麻様。。。数々の非礼お詫び申し上げます。。。ですが今ひとたびの無礼をお許し下さい」

品の声に「怒り」はなかった
ほんの少しだけ解かれた重荷は実と一緒に背負ってきたものだったのだから。。。当然
同じ想いの涙もこぼれる
でも
これは言っておかねば成らぬ事。。。主である実もわかっていた
泣きながらも品が語るのを許した

「代理様と晴景様が親子である事は，今後，誰にも言わぬようココだけの事とお忘れ頂きたいのです」

実の手は弱々しく
それでもしっかりと麻の手を握りながらただ涙の目で頷いた

「どのようなご事情がお二人の間にあったのかは存じませんが，私
この事，他に口にする事はございません。。その「ご情愛」を信じ
縋ったのですから。。伏してお約束いたします。。ただ」

麻は実の手を離しその場に伏せた
「私も。。。代理様を「母」と慕う事を許して頂きたいのです」

「許します」
伏せた麻の背中を実は抱いた
「晴景様のお心を最後にしか汲むことができなかった愚かな妻です
が。。。ホントによろしいので」
「許します!!許します!!」
顔をあげ，お互いを見合わす二人

実は

「貴女がココに。。。晴景の命を助ける糸を繋いでくれたのですよ。
。。愚かな妻などと」
大きく首を振り
「貴女があの子の妻でよかった。。人に言うことは出来ぬが「母」
と思うてくれるなら。。。なお嬉しい」
麻の手をもう一度握る

涙の麻は実の胸に顔を埋めて
「うれしゅうございます。。。母上様」

二人は強く抱きしめ合った

控えの間，品も揃って女達が強い絆に喜びの涙を見せていた頃
春日山には異変が起こり始めていた

それは実たちが画策する「和睦」という願いとは相対する希望に「絆」を強めた「女達」だった
夜は深く闇の空と
黒き幕を下ろし星々さえ塗りつぶす時

影トラの率いる軍勢の篝火はまだ遠くではあったが
それでも春日山から「横一線」に見えたその時に，強い牙をもつ女の唇は動いた

「良いか」

魂棚に向かい一心の祈りを続けた「虎御前（とらごぜん）」は静かに口元を笑わせながら言った
その姿は美しく着飾られ
青に金糸の打掛
自身の直ぐ横には「朱色」の柄を持つ「刀」

「時は来た。。。。今，来た。。。御仏の願うままに，我が手足となりて「事」を成就させるのだ。。。願いを叶えようぞ」

目をつむり共に祈り続けてきた「侍女達」は静かに立ち上がり
音もなく闇に溶けて行くように消えていった
御前の周りには数名の侍女が残り各々の「袖の下」に牙を携えた

「月は。。。。見えるか？」
空など見もしない目は輝きながら聞いた

「いいえ。。。月など今宵は見えもしません」
忠実な御前の侍女は即座に。。。落ち着いた声で答える

「道しるべとなる「篝火」がこの地に向かっております。。。御前様の祈りは必ず叶います」

答えられた内容は喜ばしいものだった
虎御前は笑い
そして立ち上がって，部屋の襖は開かれた
漆黒の闇
這うように地に広がる「トラ」の篝火

縁側に立ち手を大きく広げると虎御前はいつものように揺れて吠えた

「来たれり篝火。。。我が願いは叶い「晴景」は死ぬ。。。。全ては我が願いの元に。。。」

そう言うと首を右に傾げて
高潮した頬のまま，美しく赤く引かれた紅のままに

「我が愛し夫（いとしひと）「為景様」。。。。。御笑覧あれ」

最後の朝まで。。。。。後，少し

その37　女　（3）

評定の間に伏したままの墨染めに御簾を上げた上座から定実は声を掛けた

「よう来てくれた」

質素な木綿の着物に身を包む大柄な「坊主」
主の「戦」に置いては「献策」を立て
治世の時に移れば「市井」のありようなどをつぶさに上申する
御仏への勤めを国民（くにたみ）に施す者としての仕事に徒事し続けてきた男「天室光育（てんしつこういく）」はすでに眉も白くなってはいたが
衰えることのない鋭さと輝きをもつ目で，久しぶりの「戦」を前にして生気を蘇らせた定実の前に顔を上げた

「蟠り（わだかまり）は。。。解けましたか」

開口一番に出た言葉に定実は苦笑いした
「何もかも。。。よく見通しておるの」

「不躾な事でした。。。しかしそれが私に課せられた仕事でもありました故。。。お許し下さい」

老齢の二人はお互いの顔を見合わせて苦笑した
天室光育
無き親方「為景」の父「能景（よしかげ）」が作りし長尾家菩提寺の現長

表向きは
だが
長く続いた越後の戦乱に中できれい事だけでやってこれた訳ではなかった
林泉寺に入る前からの市井に向けた「諜報活動」と「情報操作」
一刻も早く「為景（ためかげ）」の治世の元「越後」が統一される事を望みに知恵を絞った「戦い」があった
しかし
国民の思う国造りのために行われてきたとしても。。。。やはり闇の部分

相対する者の「闇」を知る必要もある
そう言う意味では腹を探り合った二人

そして
定実も上杉のための「闇」の者たち，間者として「軒猿」を使っていた
支配者だった

そんな二人がなんの「間」も入れずに面と向かい合うのは。。。少しばかり気恥ずかしい想い。。。そして流れた時間と。。人というものが真実を知る事を，面と向かって知る事を「恐れている」生き物である事を感ぜずにはいられなかったのか。。。。
遠慮の入った言葉をかわし合ったが
今回はすでに時が無い事も手伝い
お互いが。。。言葉を探し探り合う事なく，自分の言わんとしている事を口に出した

「そちが来ても。。。ワシは動かぬつもりであった」

定実は「当初」の本心を素直に告げた
権力をあれこれと剥奪された守護に
いまさら「仲裁」という大仕事を頼み込む守護代の一派に思うこと
など腹立たしい事でしかない

光育を見ながら額に扇を当て
「頭に苛立ちがあった」という仕草
コツコツと頭を叩いて見せた

自分たちの都合の為だけに「幕府」からの任命を受けている「守護」
を利用しようとするなど
「無礼」であり
現状の立場で考えれば「守護代」に顎で使われたと言われる「笑い
者」の役でしかない

だから
どれほどに守護代の信任が厚く「戦」を。。。。この未曾有の「長
尾」同士の戦を止めるための使者として
光育が伏して頼んでも，話すつもりさえなかったのだが

「戦」の中身を大きく替えたのは「女達」だった
ただ
ぶつかり合う戦いなら
「利益」や「利害」を求める男たちの戦いならば

「どうとでもなってしまえ」

そして勝った者がまた「守護」をいいよう「囲う」のだろう
卑屈な思いに沈んでいたが
そういうものを度外視した「絆」で目が覚めた
「愛する者」。。。。「慕う者」にこんな戦で死んで欲しくないと
願う気持ちが細い糸として紡がれ
自分の元に運ばれ，強い願いとして伝わった時

それにより
愛した「妻」の本心に触れる事が出来たときに，蟠りは壊され心模
様は変わった

立ち上がり
縁側近くに歩を進ませた定実は秋の風を受けながら
柔らかな態度で告げた

「今は御坊(ごぼう)が来てくれてよかったと思っておる」
背中を向けたままではあったが
落ち着いた対応のまま光育の参上に礼を述べた

「ありがたき言葉にございます」
「守護として出来る事をいたそう」

多くを語らなくとも力添えを約束出来るほど余裕のある定実に光育
は会釈するとさっそく「策」を話した

「明日の朝，寅の刻には実城へ参内したいと思うております」

それはギリギリの時間だが
定実も賛成した

今や夜の警戒であちらこちらと兵らが走り回り「危機」で心を高ぶらせている者たちの間を縫っての登城はあやうい行動だ
ならば朝早く
引くに引けない守護代に最後の機会であると「和睦」を促した方が得策であると光育は続けた

「わしとそちで諫められるか?」

定実は噛み合い事態を悪化の一途に辿らせた「晴景」の強硬な態度を気にしていた
「まだ。。。両陣営とも向きあっているだけです。。。。まずは「兄らしく」刃を治めて頂くためにも。。守護様の力添えは強い味方となりましょう」

光育の深い思慮。。。。
孤独な城主である晴景の味方が「守護」であるとするならば
最終的には心も従いやすいというものという意見に
定実も同意した

「きっと。。。晴景殿も。。。眠らぬ夜を過ごしている事だろうの。。。。」

用意された白湯に少し口を付けた光育の前で，定実は春日山の頂に向かって目を向けた
「影トラ」米山峠柿崎城にて陣立て。。。。
あの報告から一夜として眠らぬ城には多くの篝火が焚かれ

風のざわめきがごとく
城詰めの男達の声。。。足音。。。武具の擦れる緊張が流れ続けていた

そして
それは今日さらに大きなさざ波としてあちらこちらを走った
夜半から目の前に現れた「篝火」に
全ての緊迫は大きな山となって迫りつつあった

「光育よ。。このような事態となった今だからこそ。。。隠すことなく聞きたい事がある」

杯を片手に見えぬ星を探していた定実は立ったまま光育の側を見た
戦に望む覚悟を持つ目が戻る
柔らかだった守護の態度はきつく尖った

「影トラ殿。。。。あれはいったい「何者」だ?」

「何者。。。とは?」

光育の表情は一瞬で曇った
答えあぐねるような質問に。。。。いや探られたくない何かにか眉間に太く皺を寄せた

「光育。。。影トラ殿が誕生した頃にはワシの元に「忍」はおらず。。ただ噂に聞くばかりの者だが。。。。。どれも「突拍子もない」噂ばかりでな。。何が，かの者「真実の姿」なのかが見えぬのだ。。

。。。見えぬまま「和睦」を成す事は出来るのか。。不安でな」
探るような定実の言葉に光育は目を伏せたまま答えた
「ご心配には及びません。影トラ様は文武に優れた御仁にございます。。。守護様のご仲裁には必ず従いましょう」
「文武。。。。」
定実は光育の目の前に腰を降ろすと
顔を近づけ声を小さくして耳打ちするように聞いた
「おかしな事よな。。。。影トラ殿は「女」であろう?何故に文はともかく武に優れる必要があったのか?」
「影トラ」という人物への確信
中身を知ろうとする定実の問いに光育は顔をしかめた
その姿に定実はもう一度立ち上がって
「あれはなんだ?「ただの女」ではあるまい」
多くの噂があった誕生前。。。。為景は虎御前の腹に宿ったその子を
「御仏に選ばれた子」と称した
なのに
誕生と同時にその言葉は聞かなくなった
当初は産まれたのが「女」であった事への意気消沈というものかと,
「家督」の相続「家名繁栄」という意味では

自分と同じように「子種に恵まれぬもの」と為景をほくそ笑んだ定実だったが
すぐに他の噂が使いから知らされた

「鬼の子」「狂い童」
喜ばしくもない「名称」が次々と挙がる
産まれてから向こう見られる「奇行」の数々
とても「女子」を表すのにふさわしいとは思えない。。。。。むしろまるで
春日山に住まう全ての者が「恐れている」ような，あだ名だったハズだ」

「光育。。。そなたはあの雨の日。。。影トラ殿を林泉寺に迎えた。。。「女子」であるかの者を寺へ迎えたな。。。「異常な出来事」

長尾家の菩提寺である
女人を禁じているわけではないとはいえ，寺に住まわすなどという事は「異常」ともいえた
定実の話しを頭を伏したまま聞く光育

「異常は続いているとワシは感じている。。。「女」である影トラ殿に数多の将が付き従い春日山を追い落とす「力」とまでになった。。。それがあの「篝火」でもあるとも見える」

定実は噂と。。。それに添うべく正確な情報を入れるために常に屋敷に「物売り」を出入りさせていた

だからこそ
「負けぬ戦」を続ける「将」に対する「脅威」をしっかりと感じ取っていた

「女の所業とは思えない。。。。文はもとより「武」に長ける者になる女は。。いる。。いくらでも，だがそれは「個」としての存在として見る事はできても。。。。軍団を率いるほどの「力」には成り得ない」

女城主という存在があったとしても
女将というものが成功を収める事はない「板額御前」ごとく
武勇に優れても「人」の上に武で座る事が出来ぬのが女の宿でもある

「影トラ殿。。。実は「男」なのか？でなければ「越後」の強者（つわもの）たちをあれほどに容易に従わせる事は出来まいて？」

腕を組み，月の無い闇の庭を見渡す定実

「影トラ殿が何であるかが解らねば「和睦」は難しいとワシは考えておる」

この「戦」は「和睦」というもっとも難しい
「戦わない」解決を必要としている
なればこそ相手が「正体のわからない者」というわけにはいかない
という定実の言葉は正しかった
促された問いに答える光育

「影トラ様は。。。トラは。。確かに「ただの女」ではありません」

「では。。。。噂通り「心」に鬼を持つ者なのか？」
「いいえ違います」
光育は顔をあげると定実の立つ縁側の方を見つめた

「御仏に選ばれしお方にございます」

定実は驚いた
「御前の言葉ではないか」
影トラ出生前から。。。為景の後妻である「鬼嫁お虎（虎御前）」が言い続けた言葉は「狂信」とも思える繰り言だったからだ

「私は。。。影トラ様を寺に預かりお育てした身にございますれば。誰よりもお側に仕え，誰よりも言葉をかわし。。そのお心を見て参りました。。あの方は御仏に選ばれたお方と。。。。信じております」

光育の口からもたらされた答えが，虎御前の言葉と同じである事以上に。。。「信じている」という強い信念を見せられた定実は

「そうで。。。あるか」

そう答えるのが精一杯
後はただ静かな時間が残った
空は深い闇に。。。。月を溺れさせ

今，波は

「申し上げます！！」

二人の男が沈黙の間に入ってどのくらいの刻が廻ったのか
静寂を打ち破り縁側に立つ定実の前に使いの下男が伏した
「何事」

息を切らした下男は伏せ，肩を震わせながら

「春日山に火が上がっております！！」
「何！！」

下男の言葉に定実と光育は声を合わせた
即座に
定実は屋敷の廊下を急ぎ足で周り春日山の見える場所に向かい
光育もさらにその後を追った

上げた顔の向こうに見える城の中
本丸，二の丸より下の三の丸馬櫓あたりに確かに火が見える
明らかに屋敷と櫓が燃えている規模だ

「どうなっている」

目を見張る二人の男の後ろに駆けつけた実（みのり）その後ろの麻（あさ）は火を見な
がらその場に崩れて

「虎御前様。。。。。」

実は自分の後ろ。。力無く伏せてしまった麻を支えながらも
未だ城には宿敵ともいえる「女」がいたことを思い出した
「虎御前！」

「これは御前の仕掛けたものと？」
定実は燃える櫓を睨む妻に聞いたが実はわからないと首を振る
その後ろで
細い声が途切れながらも苦しみを

「虎御前様は晴景様を。。。。ああっ。。。。私。。。。もう」
声を詰まらせながら火を見つめる麻

「麻殿！！御前は何をしようとしている！！」
定実は麻の細い肩を揺さぶった
「麻殿！！」

「虎御前様は晴景様を。。。この「戦」の騒ぎに乗じて亡き者にしようと」
麻の背中を支えた実は吠えた

「そんな事！！！絶対にさせぬ！！今より登城して虎御前を成敗してくれましょう！！」

女達が息巻く中，定実は冷静さを失わなかった
品共々血の気を登らせた実に光育が告げた

「それは出来ませぬ」
「何故!!最早虎御前の謀反は我らの知るところに」
声も高く抗う妻の肩を押さえ今度は定実が答えた

「今。。。両陣営がすでに向きあってしまったこの状態の中で「虎御前」が討たれる。。。そんな事になれば「影トラ殿」を止める術が無くなってしまう」
「どうして!!」

「この夜の事を誰がどうやって影トラ殿に告げる?我ら上杉だけが知っていたとてどうにもならぬ事」

実は思い出した
いかに自分たちが力無き者であった事かを
麻と共に隣に崩れた
「では。。。どうすればよいのですか。。。。どうすれば。。。あの子を助けられるのですか。。。」
二人を支えながら
春日山に赤く燃え上がった火を見ながら定実は光育を呼んだ

「一刻の猶予もないが。。。我らに出来ることをまとめねばならぬ!!」

月の見えぬ空は大きな波乱の波を起こした
夜は眠らずの「戦」を起こしたのだ

その３８　月と星　（１）

上杉の屋形の中は
春日山の頂近くで起こっている「火災」の騒ぎに準ずるかのように
慌ただしくなった
定実は手際よく下男たちに指示をだし
春日山の状況を細かに調べるよう放った後，妻の実，麻，それに光
育を連れ奥の間に戻った

「御前（虎御前）が動いているのは。。。。確かなのだな？」

もはや上座も下座もなく円座に座った妻と麻の顔を交互に実ながら
定実は聞いた
さきほど目眩をおこし，回廊で崩れてしまった麻は自分の，のど元
を苦しそうに抑えたまま返事した

「はい。。。ですが城の方では「綾様」が虎御前様をお止めすると。
。何か別の事では」
力ない言葉は縋る木を探すように震える
その答えを定実は「断じた」

「いや。。。御前と考えねばならん」

目覚めた定実は「戦」の感をしっかりと取り戻していた
何か別の事であって欲しいと。。。。甘い考えを持ってしまったら
この火急の事態を見過ごしてしまうからだ
実際に事は容赦なく「加速」している
どこにも「余白」は無いのだ。。。。止まってしまった流されてし

まう状態

「なれば今すぐにでも登城いたしましょう！！」

秋の風の中に焦げた城の匂いが吹き込む
その匂いに心を泡立たせた
実はいても立ってもいられない，立てたままの片膝は小刻みに揺れ
浮き上がり出しているが
頃の中には「恐れ」がいっぱいに。。。溢れ出しそうで
震えている
その膝を定実が押さえつつ

「いや。。。今すぐには御前も動くまい」
「殿！！」

焦りに口を挟もうとした実の前
指を立て「冷静」を取り戻すように定実は指示した

「この時間に「火」を掛けたと言うことは。。。」

定実の隣に座し
先手を討ってきた「虎御前」を誰よりもよく知る光育は答えつつ，
額を抑え己の能に残っている「戦い」の手順を探し出す
「虎御前は。。。武人」
彼女を思い出せば浮かぶ者は「刃物」というほどに強き意志の御仁
何度もの対面をしている
相対する女をただの「女人（にょしょう）」をと軽んじる事なく考えた

これは「将と将」の策謀戦
妥協無き意志の元に。。。。。すでに始まってしまった「戦」なのだと
慌てる周りに反し思考の闇に沈み
「戦」の糸をたぐる
同じように定実も押し黙り目をつむっている

女二人が手を握りあいお互いを「恐れ」から支え。。焦りを隠せず震える状況の中
男たちは冷静に「事」の中身を一つずつ探り出していた

「事を起こすのは。。。「明け方」にありましょう」

指折り物事の展開を考えていた光育は，定実の顔を見た
考えられた答えに目を伏せたまま定実も頷き
深い息を吐き出しながら光育に問うた

「この火は。。。。影トラ殿にも見えたであろうからな」

「どういう事にございましょうか？」

何もわからないまま。。。
そんな不安を抱えたままではいられない
実は男たちの会話の間に入った
涙を浮かべた目で自分を見つめる妻を，諭し労るように肩を抱いて

「報告でな，影トラ殿は明日には府内に到着すると言っておったであろう。。。何事もなくとも明日にはココに来る影トラ殿の目に，この火が見えたのならば，最早止まることは出来ぬ。。「必ず」戦闘の陣形を持ってココに詰めて来る」
実は今ひとつわからないと首を傾げた

「つまり。。。絶対の「対陣」を決定するための「策」だったのだ」

夫の説明をうまく理解出来ない実はただ悲しくて顔を下げた
その姿に光育が代わって答えた

「代理様。。。春日山で「何かが起こっている」。。。この火が見えることで影トラ様は元より多くの諸将が我らと同じように「心を騒がせている」。。。わかりましょうや，彼らの心にもまた「明日が終わりの戦い」である事を決定ずけるための火を虎御前様は打ち上げたのです」
「そうなれば。。。どうなるのですか？」

春日山に登った「火」によって警戒色を強めた影トラ軍が「戦」の終着を自分たちの手でとろうと前に出てくる事はわかったがそれが何に繋がっているのか。。。
未だ実達にはわからなかった

肩を抱く夫は妻の顔を見つめながら話を引き継いだ

「つまりじゃな。。止まらず春日山の真ん前まで軍団が来てしまえば，春日山も総構えから外堀に守りの兵を配さねばならなくなる。。。そうなればおのずと「実城（本丸）」の守りは薄くななろう。。。御前はその期を狙っている。。。そういう事じゃ」

本丸の守り。。。。晴景の近くが手薄になるという言葉に顔を上げた
光育は話しを砕いて聞かせ続けた

火という狼煙は
目の前まで来てしまっている両陣営に「和睦」を持たせぬために働
くかも知れない事
「不審火」に春日山の動揺は隠せない
当然，さらなる防備に動く
夜を徹しての
一方。。。。目の見える所までやってきた影トラ軍も火を見て動く
春日山に「異変有り」と読んで
しかも「不審火」であるなら必ず攻撃陣形でくる
そんな陣営を見れば春日山の陣も「迎え撃つ形」を取らなくては成
らない
総構えから向こう
全面に立って

だが
数は圧倒的に不利な春日山
全面に相対する軍団に向かう人数を配するために動き出せば。。。。
。当然「隙」ができる
大将晴景の周りは。。。。。

その時を虎御前が狙っているのでは
恐ろしい結論

「どうしたら。。。。」

導き出された展開にあまりにも残酷。。。実は力を失い夫の手から
崩れた
その背を支えていた麻も同じく体を伏せてしまった

だが
力を失った背中を夫は叱咤し腕を引き上げて

「姫よ!!我らはさらに鋭く「刻」を縫うように戦わねばならん!
!こんなところで伏せて良いのか?」

心を叩く言葉
それでも「絶望」を先に感じてしまった実に力が戻らない

「晴景を見捨てるか?!!」

定実は意志強くさらに実の体を引っ張り上げた
華奢な妻の体は大きく震えたまま
涙を零して答えた
「いやです。。。。助けを。。。。。」
小さく首を振る妻に定実は顔をしっかりと見据えて

「ならば我らの出来ること。。。役割を迅速に決めねばなるまいて
!!」

「出来るのですか？」

「我らが晴景殿を。。。しいては「越後」を救う最後の一手」
夫の強い言葉に頷く
時を惜しむよう光育が「策」を広げた

「私たちの「戦」は「止める事」これに尽きます。。。。難しい「戦」ですが。。。今は我らにも勝機が見えます」
光育は小さいながらも春日山全域を映した地図を広げながら

「火が立ち上がった事で城方は「混乱」と「疑心暗鬼」に満ちております。。事。。城内は皆「誰が火をかけたか？」という恐れを持っています。。。この中を我らのように「身分確かな者」が意志強く進めば。。。みな我らに「希望」を見ましょう」

光育の指が図を指さした
実城
総構えの前
そして二の丸

「止める方達。。。。一人は「晴景様」，一人は「影トラ様」，そして「虎御前様」です。。。この内の一人でも止める事ができなければ。。。。我らの負け。。。「越後」の敗北となります」

晴景の説得
影トラの説得

そして虎御前を暴挙から離し制御する事

「影トラ様の説得は。。。。。守護様にしかできませぬ」
「わかっておる」

光育の指示に定実は，大きく頷いた
実は驚いた
晴景の説得を夫がしてくれるものと思っていたからだ
その驚き開かれた目に光育が答えた

「影トラ様の後ろには「打倒守護代」という思いを一丸とした諸将たちが控えています。。。これらの者たちを納得させるには「守護様ご本人」が「和睦」の使者として赴くしかないのです。。。。それに今の「総構えの門」を開ける事が出来る方がいるとするならば。。。やはり守護様。。。「上杉様」しかいらっしゃいません」

実以上に定実が深く息をつく
「力無き守護じゃ。。。門を開けるのは難しいやもしれぬが。。。この命をかけてやってみせよう」

綿密な計画
手を回しての下ごしらえなど出来ないほどに急を要する戦い
「魂」でぶつかって行くしかない

「命」を賭けて

「私が門をお開けします！！」
「命を賭ける」という悲壮な言葉を口にしてまでの覚悟を示した定実の前

実同様にへたり込んでいた麻が跳ね起きて続けた

「私は。。。「手形」を持っております！それで門は必ず開きます！！」

「手形？」

「そうです元々私達は上杉様の元についてから。。。。その後に府内の外にある尼寺に向かう予定でしたので。。。。外に出るための「手形」を持っているのです」

麻の言葉に定実の目は輝き立ち上がった

「心強い。。。でわ，ワシがそれを預かり門に向かおう」

「いいえ！！私も一緒にまいります！！」

麻は強く意見した

「この手形は晴景様が私に書いて下さった物です。。。私がおらねば門を守る「水丸」に話しが通りません」

気弱な姿ながらも，己の夫を想う心で気丈に立ち上がった麻に定実も良しと唸った

「麻殿。。。。。糸は紡がれましたな」

「はい」

細く。。すり切れそうだった希望の糸が確かに繋がり始めていた

「では虎御前様は。。。。愚僧がお止めいたしましょう」

光育もまた

「武人」である虎御前と対峙する心を告げた

幾度も

幾度も虎御前を「窘める（たしなめる）」機会を得ながらも出来なかった光育
だが今ならば強い絆を繋ぐ「力」として「命」も賭けられた
「幸いにも「参内願い」を頂いております。。。。城には問題なく入れます」

「待って下さいませ。。。。それでは晴景は誰が止めるのですか？」
各々が立ち上がり行動に入ろうとする中。。。。まだ立つこともままならない実は聞いた

「姫よ。。。そなたが止めるのじゃ」

定実の言葉に実は大きく首を振った

「無理です。。。。いいえ無駄にございます。。。私の言葉などあの子に届く訳がありません。。。どうか。。。貴方様が」
懇願する実に定実は近づくと目の前に座った

「いいや。。。。そなたの言葉でなくては止められない」
「無理です！！」
首を振り
目を伏せる
実の中にはあの時の事が蘇っていた
この「戦」が始まってしまった時の事

「討伐は決定であります」

戦いの始まりを伝えられた日
悲しげな目で
「母を知らぬ」と告げた我が子
あの時。。。。

とめられなかった。。。。
言えなかった「母として」息子の行く道が良い道でない事を示して
あげることが出来なかった
言えなかった

「いいえ。。。出来ません。。。今更，私の言葉など。。。どうして通じましょうか。。。」

涙の顔を両手で押さえた
その手を定実が引きはがし額を打ち付けんばかりに顔を近づけると
力強く問うた

「聞こえぬか？弥六郎の声が？」

「弥六郎」。。。。。。

御簾越しに。。。。毎年
謹賀の祝。。。
夏の祭礼
秋の祭り

祈祷に

多くの季節を「あの子」の成長を見つめるためだけに登城した
為景の後ろに座し
触れることも出来ない場所にいた「弥六郎」に一度だけ。。。。都
から届けられた「唐菓子」を手渡した

御簾の前に少しおどおどした様子で座り
小さな手を滑り込ませてきた時

初めて。。。。。
我が子に触れた

「よい子ですね」

堪えきれない想いで
名乗る事の出来ない中で精一杯の言葉をかけた

「「越後」の母上様。。。そう思うてよろしいですか?」

幼い弥六郎はそういうと微笑んで見せた
「温かい匂いがするので。。。つい。。。そう言うてしまったこと
お許し下さい」

あの日の夜
涙が枯れるほどに泣いた事を思いだした
弥六郎。。。。晴景は。。。きっと知っていた

自分が母である事を。。。。

「ああっ。。。。。聞こえます。。。あの子の声が。。。。。」

止まらぬ涙
夫の温かい手が触れる。。実の涙の頬を支えて

「そなたが受け止めるのじゃ」

定実の隣に麻も並び実の手を取った

「母上様。。。。お頼みします。。。晴景様を助けて下さいませ」
麻の手は震えていた
どんなに自分を叩き。。。。恐怖を押し込んでいるのか。。。
細かった希望に縋ってココまで来た「娘」は母の手をしっかりと握った

「私だけでゆけるのでしょうか？」

実城（本城）に一人で行く事は守りのない状態
虎御前に返り討ちにされる可能性だって否定できない
足は進めどもと。。。。。

そんな不安を打ち消す声が
庭から発された

「我らがおります！！！」

そこには
「品」を中心に彼女の一族が整然と伏していた

「我らが必ずや守護代様の元に代理様を送り届けます！！」
一族郎党みな鉢巻きをし「戦」に赴く支度を調えた姿
「品」もまた面布をとり「傷」を見せたまま

「この傷に。。。亡き母と共に，我が一族の全てを持って「代理様」を守ります」

力強き共達の前，定実は妻を支えながら

「品はそなたの「忠臣」。。。。もはや何も迷う事はなかろう」

みなが揃っていた
夜の中
眠らぬ力となり全ての糸は紡がれた

後は「希望」を引き上げるだけ

夫を見あげ実は願うように
祈るように告げた
迷う心を今一度律すために

「私の声は。。。。。届きましょうか？」

「届く。。。必ず届く。。。姫よ。。そなたの想いを，心を，その全てを持ってゆけ」

定実は実の手をとり立ち上がらせた
満面の笑みで優しく

「早う。。あの子を抱きしめてやれ」

そういうと妻を強く抱きしめた
「そして全ての事が終わったら。。。舞を馳走しておくれ」
「はい。。。」

「さあ!!各々参ろうぞ!!!時が我らに有利であるうちに!!」

虎御前とは反対の「力」
守る戦いに絆を強めた「定実」「実」「麻」「光育」
今
水面下の「戦い」は佳境に加速を始めていた

「何故。。。。燃えている?」

私の前には
戦の篝火が軍団に行き渡った事を報告する者たちが伏していたが
そんな報告よりも聞かねばならぬ事だった

「何故?春日山が燃えている?」

柿崎の城を出て半日
前線に絶つ私の後ろ「攻撃陣形」のまま今も微速な行軍を続ける
目の前に見える「炎」

私は無用に苛立ちを表さず
ただ拳だけを強く握り
秋山に聞いた

「わかりません。。。ですが早馬をだして」

泡立つ心を自分で口に出した問いを
膝に振り下ろして止めた

「何も。。。調べなくて良い」

正面。。。。
月の無い空の下
煙が闇に新しい「黒色」を与えている空を睨みながら
自分心を抑えるのと同じ事を軍団に聞かせた

「誰も動くな。。。。明日になれば府内は真ん前だ。。。。攻撃陣形を崩すことなくただ我に従い進め。。。その時に自ずと答えはでる」

自分を律しながら
私は覚悟を決めていた
もし

春日山で「母上」が良からぬ行動をとってしまったならば
その時は私は死をもって報いる事
もし
「兄上」が「母上」に良からぬ行動をとってしまったのなら
「長尾」を。。。春日山を滅ぼすという覚悟を

私「長尾影トラ」の名の下に「乱」の根元を絶つ事を
見えぬ月に誓った

その３８　月と星　（２）

夜の頂点である時を過ぎた時刻の中にあった
深い闇の中
月は。。。。「何かを」隠す為なのか輝きを決して見せようとはしなかった
そんな静寂が支配の色を濃くする刻（とき）にありながらも
上杉の邸内は誰一人として眠らず「主」の出陣のために慌ただしく活動していた

いつもなら，名ばかりで囚われの身になっている守護の屋敷で「喧噪」を伴う動きがなどあれば

「これ謀反」ではと

すぐに「守護代」からの手入れでもありそうなものだが
最早そんな「多少の音」など誰も気にもとめなかった

「影トラ軍」が春日山から見える所まで来た事により，城内の騒がしさはそれを大きく上回り
これこそ
「虎御前」のもくろみ通り
春日山に大きな「隙」を作った

夜を休まぬ「声」はそこかしこに響き
実の心も波のように揺らいでいた

城道とはいえ
暗い山道を輿に乗るのは危険と判断し
馬に乗り登城する事になったため
侍従の者たち「品」の一族達は慌ただしく支度に走っている

その中
一刻前には闇の空に向けて燃えあがっていた炎のある場所
消し止められ少なくなった火の手の向こうにある「実城（本丸屋敷）」を実は見つめていた

先ほどまでは。。。轟音の中に屋敷の崩れ落ちる音も聞こえていた
火に炙られきしみ崩れ落ちる音は。。。不気味で心の底に響く程
に「恐怖」を煽った
そのせいか？
色々な思いが。。。頭の中を目間ぐるしく駆け回り
同じように崩れ
そして
現実に。。。。

この難局を打破するために自分たちの過去と「因縁」も巡り
一度は心身共に崩れ
目を回しそうな
心を折って屈してしまいそうな状況から。。。

一縷の光明に。。。。

でも
それが本当に「救いになるのか」というのには。。。。
山の向こうに行く暗く険しい道程のように。。。。実には遠く感じ

られてならなかった
それは
一同の決意
一人ではないという強い絆の中にあっても
ふるえの止まらぬ手が物語っていた

「姫よ」

怯えて小さくなっていた背中に，定実は馬上から声をかけた
振り返った妻に市女笠(いちめがさ)を渡しながら

「われらも。。。大切であった「想い」を一つ捨てて前に進む。。。。
晴景殿もまた。。。「捨てねばならぬ物」がある。。。わかるな」

手渡された笠をかぶり顎紐を結びながら実は頷いた

「良い。。。そんな事はきっと晴景殿の方がわかっている事だからの。。。」

「それで治まりましょうか？」
不安は何度
同じ事を念を押すように聞く

「それは最後の結論じゃが。。。大丈夫，必ずそなたの願いは叶う」

そう言うと屋敷の表門に馬を向けた
門前には既に「麻(あさ)」が支度を調え待っていた
ココに来たときには色々な誹謗に押しつぶされてしまいそうなほど，

か細かった麻は。。。
体こそ細くなっていたが心には硬へし折ることの出来ない強さを宿していた
それは
実の目から見ても逞しく愛する者のために「戦う事」に目を向けている

「麻殿も戦ってココに来た。。。そなたも戦ってあの子の元に行け」

「はい」
進む支度の中
一人「不安」に身を任せて良いわけがない
ましてや
愛するわが子の「命」が掛かっている。。。「守る戦い」
決意を宿した目でもう一度夫に頷いて見せた

「では先に行く。。。ワシが出た後。。。。。頼むぞ」

「お任せ下さい」
実の隣に控えた「品」は力強く返事く答えた

時はまだ。。。暗い夜の盛り
風の中に燃えた木の匂い
山裾の屋敷の中に流れ込んでいる

「よく抑えられものだ」

表門を出たところ
付きそう光育(こういく)に定実は，燻る炎が未だ見え隠れする春日山に目を向けたまま

「直江殿が春日山に詰めていた事が救いにございました」
「しかしこの火でその手も届かぬところが出来てしまっている。。。。」

目前に迫った「影トラ軍」に対処の戦術も確立していないこの城がいつ。。。中身から壊れてしまっても不思議ではない中での「火事」それでも，騒ぎが起これども「暴動」にならずにいられるのは。。。まさに「直江」の手腕が働いているからと言えた
だが
同時に「火事」からの崩壊を留めるために使った人手により
春日山に巣くう「凶刃」には手が回らなくなってきていた

「城内の隙は大きくなりました」

光育の顔は曇った

「だがな，おかげで我らも動く事が出来る」

そう言うと定実は光育の近くに体を曲げて顔を近づけた
「光育。。。「影トラ殿」は御仏に選ばれし者。。。と，そちは言うたな」
不意の守護の問いに
返事はない
ただ言葉に頷く

「御仏は。。。「どちらの見地で」この「戦」を見るであろうか？
そこに慈悲はあるのであろか？」

光育は答えられなかった
定実は馬の歩を進めるため手綱を曳き，体を元の位置に正しながら
続けた

「今考えても詮無きことか。。。「影トラ殿」だけがココに向かっ
て来ているわけではないのだから。。。全てを満たす答えを出さね
ば成らぬわけだ」

「虎御前様の事はお任せ下さい」
重い声
覚悟とは違う思案を含んだ光育の返事

「そうよな。。。門が開けども，晴景殿が止まらねばどうにもなら
ん。。。。光育。。。御前は元より。。。姫の事も頼むぞ」

そういうと
馬の足よりも先に前に進み歩いて行く「麻」の元に駆けていった

総構えの正面に位置する門
春日山城の城下のもっとも大きな門の周りは
実城山腹に挙がった「炎」の沈下を見守りながらも騒がしく雑兵た

ちが行き来していた
その中
心を泡立たせながらも，課された責務に忠実に働いていた「水丸」
の元に落ち着きのない兵が報告を持って上がってきた

「水丸様。。。」

火事から向こう情報を集めつつも
惣門の警備維持に専念していた水丸の前。。。困った表情で男は止
まってしまった
美男で名高い主の顔に「焦り」が浮かび上がり
いつになく険しい目になってはいたが
こぼれた髪の姿は「女」を思い浮かべるほどに美しかったからだ

そんな目を丸くしたままの男に
水丸は枯れた声で報告しろと促した

「なんだ?」

切れ長の目が睨む
雑兵は思い出したように答えた

「門前に。。。「守護様」が，いらしてまして。。。」

水丸は顔に懸かった髪を掻き上げながら聞いた
「守護様?上杉様か?」
「へえ」

あいかわらず呆けた返答をする男を押しのけ水丸は門の下を見た

「火事騒ぎ」で騒がしかった門の前は確かに静かになっていた
みな一応に伏し守護の登場に驚いている様子は異常にも感じられた
「前方の見張りを怠るな」
律したように指示を飛ばすと
水丸は細い梯子を駆け下り

目の前馬上の人物をじっくりと見た

代理様（実）ではない。。。。
越後守護である上杉定実を見るのは誰もが久しぶりの事である
あまりに久しい人物なので訳のわからぬ輩が最初は突っかかってしまったようだったが
何人かに押さえ込まれたようだ
馬の隣には「守護代妻「麻」」の姿も見えた事もあり
多くの雑兵は伏せて動けなくなっていた

「失礼致します。越後様であられますか?」

門前馬上に顔も隠さぬままの白髪の老人に
水丸は立ったまま頭を下げて聞いた
篝火の下に映し出されただけではも来や「懐かしい人」になっている守護を思い出す事が出来なかったからだ

「うむ「越後」である。。。。久しいの，晴景殿近習。。「水丸」」

落ち着いた返答
威厳のある声
その昔まだ「小姓」だった頃に聞いた声と変わりない事に，水丸は
相手が正真正銘の「守護」である事を確信しながらも毅然とした態
度を崩さず聞いた

「このような時に。。。何用にありましょうか？」
「うむ。。守護代殿の頼みでな。。この「麻殿」をココより出た向
こうの寺にお届けしようと思うてな」

水丸は視線を廻らす
守護の馬の隣。。旅装束に着替えた「麻」とお付きの侍女たち

「申し訳ありませんが。。。。門を開けることはできません」
「いいえ。。開けて頂きます」

控えて断りを入れた水丸の言葉が終わらぬ内に
彼の視線に目を合わせた麻は答えた

「私（わたくし）。。。守護代妻，麻は夫より「手形」を頂いております。。。
ですから」
「いいえ。。。今はもう通行を許してはおりません」

水丸の苛立ちは麻の
それでも振り絞った勇気の声を絶った

「今。。。春日山がどのうな状態にあるか？わかっておられると思
いますが？あまりに無知ではありませんか？」

勢い棘の言葉は飛び出し
そのまま
麻に向かって暴言を吐いた
それで下がって暮れるのなら
この「非常」の事態を早く収拾できる。。。そのぐらいに思って

ところが
麻は前にでた
怯むことなく
自分より頭一つ以上身の丈の高い男。。。水丸の真ん前に立ち

「開けて下さい。。。。私のために。。。あの方をお救いするために」
「できません」

水丸は最早目上の「女人（にょしょう）である麻に頭を下げようともしなかった
それどころか話しの腰をへし折ったまま手下達に手で「持ち場に戻れ」と合図をしながら
細い肩を強く押した

「上杉様の屋敷に戻ってください。。。いったい何をしようとしているのですか？これ以上「殿」に迷惑をおかけなさるのか？」
冷たい声に目は見下すように
麻は押されてその場に崩れるように伏した

「戦はもう始まっております」
「まだ止められます」

守護と話しをつけようと前に出た水丸の足を麻が引き

そのまま伏して懇願した

「同じあの方を「慕うた」貴方にならわかるハズです。。。こんな「戦」であの方を失いたくないのです。。。生きてほしいのです」

水丸の目は彷徨った
一瞬「麻」が何を頼んでいるのかがわからなかったが
「救い」を「あの方」にという真実に

麻の言葉に。。。顔を見返す事が出来なくなっていた
だが
「戦を止める?そんな事できるハズが。。。。」
「出来ます!!守護様が和睦の使者となって下さるのです」

二人のやりとりを黙して見つめる定実に気がついた水丸は手を大きくふって「否定」した
「そんな事を殿は。。。晴景様は必要とはしておられません!!我らは共に戦い。。。共に」

「共に死ねれば。。貴方の愛は満たされるのですか?」

刺さる言葉
水丸は具足の真ん中を手で押さえた
何かに射抜かれたように心の蔵は痛んだ
「わたしは。。。武士(もののふ)で。。。」

吐き出す息の間を苦しげにこぼれる言葉

「例えそうだとして。。共に死ぬことが貴方の愛ならば。。。共にでなくとも「生きて下さること」を願うのが私の愛なのです」

「そんな事は。。。」
高まった感情で勢いよく引かれた足をふりほどいた水丸の前に麻は
「手形」を差し出した
「殿と共に死ねるのならば。。。」
ならばの続きが。。。でない
本当の心が言わせない
言えるわけもない

強きな態度とは別に
水丸の美しい顔には苦悶が浮かんでいた

「生きて下さい貴方も。。。共に生きて欲しいのです。。。孤独なあの方に末永く仕えて欲しいのです。。。そのために私の全てを差し出しますから。。。。どうか門を開けて下さいませ」

震える麻の手から。。。。水丸の元に手形は繋がれた
受け取らざる得なかった

その手紙を開かなければ水丸は顔を隠すことが出来なかった
書状を開き
目を通す

水丸は黙して，手形に目を通して
そして
空を見上げて
あがってしまった呼吸を整えると。。。掠れた声で

「いったい何ができますか?」

「願いを伝えに行くことが出来る」
声なく伏したままの麻に代わり定実が答えた

「それでどうなりますか?」
水丸の声は確かに微かだか湿って揺れて

「わからぬ。。。だが「戦」を止める事を望んでいる」
「そんな事ができましょうか?」

「出来ます」

細い。。。
弱い。。。

声

願う手は重ねられたまま
空を見上げたままの水丸に向かいながら

「守護様も。。。代理様も。。。光育様も。。。みな，生きてくださる事を望んで「戦って」おります。。。貴方も共に。。。力を貸してください」

「共に。。。。。」

麻の前に。。。。雨が一粒

「開門」

水丸の手が惣門の前に並ぶ雑兵達に向かってあげられた

「越後様（定実）がお出に成られるのに門を開けないなど無礼であろう」

「しゅ。。。守護代様の命（命令）は?」

報告を持って，水丸に付いて回っていた男は驚いて聞き返したが水丸は毅然としたまま告げた

「越後様は守護代様の頼みよってココを出られる。。。。問題無い「開門」せよ」

指示に手際よく大きな音を立てて門は開かれ始めた

三日間

このまま二度と内側から開かれる事がないであろうと思われた門は
大きな音と共に道を開いた

「では。。。。行って参ろう」

開く門の姿に「麻」は泣き崩れいた
侍女たちに支えながら
ついに麻は「綾」との約束を果たした
外に。。。。この危機を打開する和睦という「策」を出した
その主である
定実は水丸に「麻」を守るようにと頼むと，まだ暗い街道に目を向けた
その時

「守護様」

開かれた門の前
整然と並ぶ男達

「与板衆，芝段蔵。以下五十騎。。。。そのまま実城に向かえ」

三日の間を門の前で控え続けた男達に，水丸は悪びれる事なく指示した
段蔵の顔は
かなり卑屈に笑っていたが，今は水丸に食ってかかる時間も惜しい
第一の手である「付け火」が行われてしまった後に控えている手を
彼は知っているのだから
素早く馬に乗り手綱を曳いくと

守護，定実に挨拶も早々に駆けだしていった
すれ違う「与板衆」を見ながら定実は
己も時と戦っている事を思いだし馬を進めた
見渡す限りの暗闇の道
定実は少し笑った

「なんとも。。。光を探す道筋は，いと暗きものよな」

自らの従者も何もかもを「実」と「光育」に付けてしまっていた
それでもたいした数でもない
「何。。。真っ直ぐ進めば必ず「影トラ殿」の前に出る事だろう」

そんな気持ちで馬の手綱に力を込めようと見れば
共綱を曳く者の姿が。。。いつのまにいたのか見えた
「お供をさせて頂きます」
聞く前に男は答えた

「誰だ？」
名無しのまま連れて歩く訳にもいかない
見るに
男は背中も逞しい「武士」と思われる
定実は問うた

男は沈黙を守っていたが小足で進む馬と共に併走しながら答えた

「かつては上杉様に仕えておりました。。。。「中西」にございます」
かつて。。。。

まだ力を持っていた上杉が揃えていた「影働き」の者たち「軒猿（のきざる）」
の中にあった懐かしい名前
今は手に無い力
「戦」に負け続け「養う事の出来なくなった者達」
彼らは主を「長尾」に替え
今は「直江」の下に統括されていた

「直江様の命により与力として守護様をお守りいたします」

積もる思いもあったが定実は何も触れなかった

「心強い。。。。わしをあの篝火まで無事に届けよ」
それだけを命じた

深い闇の道
希望の一糸は春日山より放たれた
足早に進む馬の背から春日山に振り返った定実は独り願った

「姫よ。。。。後は頼んだぞ」

その３８　月と星　（３）

定実と麻が総構えの門で，水丸と対峙していた頃

実は品の一族に守られながら登城の道を進んでいた
一行は「天室光育（てんしつこういく）」の弟子の二人を加え，馬の早駆けにあわせての
強行軍であったが
道筋は城道でありながらも「急な坂」
各所に篝火が立てられ足下を見失う事はなくとも。。。。「難攻不
落」を唄う大きな坂道は
共をする全ての者の息を上げていた

だが当座考えていたほどの「人的」障害は無くなり
難関は自然の要害だけとなっていた

「登城願い」を持つ光育と
今や瀕死の春日山のありように，不安を隠せない衛視達は
上杉守護の威光の前に逆らうことはなく

「御仲裁である」という言葉に「戦」が止まるのではという淡い希
望に縋り

各門衛達は二の句もなく門を開けていった
逐一門前での「問答」がなくなった事で一行の足取りは速かった

「代理様（実）のお声は必ず届きます。。。あせる事なく対処なさ
る事です」

馬に乗る実のとなりを
早駆けに合わせてとても「老人」とは思えぬ膂力で進む光育が，市女笠の中，眉間に不安を募らせていた上杉「代理（実）」に話しかけた

「その事は。。。もう覚悟ができております。。。この命に替えても止めてみせます」

墨染めの着物の下，光育の衰えを知らぬとも思える体は力強く
実の横に付きながら
覚悟を確かめたと頷いた

「虎御前様の事もご心配なさらず。。。愚僧も命を賭けてお止めいたします故に」

「お願い致します」

夜はまだ深く
丑を回ったばかりの頃の道
実城（本丸屋敷）を目指す一行の前にはまだ大きな坂道が控えていた
暗闇続く石畳
馬でも足を痛めそうな道にさしかかり，実達は坂の上までを歩く事にした
馬を降り手綱を曳き
それでも逸る心の力で早足で
吹き下ろす風という苦難に立ち向かいながら

二の丸の門前まで上がった時

「見えまする。。。」

門衛に「登城願い」を見せに走った光育の弟子達の後ろ
少ない休息を取り
息を整えるために空を眺めていた実に
走る疲れを見せぬようにしていた品が
吹き出した汗を拭いながら，闇夜の裾野に広がる「篝火」を指して
言った

「影トラの火」

暗闇の海原を這うように「鬼火」は確実に近づいていた

「光育様」

共に隣で息をついていた光育に実は遠い目をしながら
迫る火を見つめながら聞いた

「我らの力で晴景と御前が止まったとして。。。。影トラは止まるのでしょうか?」

自らの着物の袖で顔を拭っていた光育も，闇に揺れる灯を実ながら
答えた

「そのために「越後様（定実）」が向かわれたのです」

光育の答えは「お定まり」の回答に聞こえた

だからか
市女笠を上げ顔を露わにした実は
「ココまでやってきた」思いのような弾みで光育の前に座り聞いた

「晴景や御前には「一つの顔」しかみられないのに。。。。影トラには何か底知れぬ二つの顔があうるように思えるのです。。。ですから影トラだけは。。。止められぬような気が強いならぬのです」

それは抽象的で
ぼやけた印象を述べたに過ぎなかったが
光育の眉間には深い剣を素早く作った
だが
夜の闇にそれはうまく隠されれ，実の目には入らず

「大丈夫です。。。。戦に赴く緊張が顔色を変える事はあったとしても。。「心」まで変わってしまう事はありません」

光育は問答はせず
ただ目の前の困難に向かう事に意識を向けさせた
答えたくはない
今答えてはいけないという意志が働いていたか，顔を強張らせてしまった事を隠した

二人が少しの質疑をしている間に
二の門も速やかに開城され
休息を取った一行は足早に進み出した

進むことに集中しているかのように「答え」を濁らせた光育を見ながら

実の心の中には。。。。あの時の事が
何故か急を要しているこの時に蘇っていた

向かってくる者

決して背かぬ視線で前にくる者

それが「影トラ」であると思えば思うほどに。。。。蘇る記憶

謹賀の祝で会った時の影トラは「黒滝」の仕置きの件で晴景と揉めた
あの時に見た顔は。。。。その「力」は
十分に実を驚かせるものであり

今，蘇る不安の一つにもなっていた

怯まぬ己の「義」に「怒り」を相乗させたまま突き進んできた姿は
尋常な者とは思えなかった
険の立った揺れる「怒り」
「悪」を滅ぼすために，根こそぎそれを葬る事を良しと「喜ぶ」者

父である為景がもっていた「戦」に向かう「力」とは違う「力」

言えば「母，虎御前」の持つ「怒り」にも似ているが。。。。そう
いう安直なものとも言い切れない「闇」を持っていた

「何か」に突き動かされた「怒り」は
「直江」や「柿崎」の仲裁で「我に返ったよう」にもとに戻ったよ

うにも見えていた。。。。。

晴景が罵るように吐き出した言葉

「戦好き」という言もあながち間違ってはおらず
本当に「戦」に取り憑かれているのか?とさえ思えたのだ
それこそ。。。色々と噂のあった「童」。。。。「鬼」にと。。。。。

なのに
雪かきをしていた時の
偶然開けてしまった戸の前にあった顔は。。。。あまりに無邪気で
年に見合った笑顔
女の持つ柔らかさも十分に備えた顔で

声もまた柔らかなものに「変わって」いた

だからなのか
まるで一人の人なのに「別の人」のように見えた

「本城の門!!見えました!!」

馬上でふさぎ込んでいた実の姿に
不安を蹴飛ばす喝をいれるような大きな声で品が叫んだ
実城の門は黒く大きな構えの中に「狂気」を潜ませている
守りは堅そうだが
中身に刃を潜ませている状態だ

二の門から共に走ってきていた衛視たちが本城の門を守る者達の元
に走っていった

門はきっとすぐにでも開かれる事だろう
「虎御前」が動く前に事に片を付けなくては成らない
目前にせまった「対峙」に
実の「疑問」の中に彷徨っていた意識は「影トラ」から離れ

晴景を止める事に戻った

「みな心して入城せよ。。。。我らの勤めは「止めること」無用な「戦」を止めることである」

「止めましょう!!!必ず!!」

主の覚悟に品一族は強く頷いた
一行は開けられた門の向こうに走っていった

「二つの顔。。。。。」

一行に付き従い
遅れ無き早さで走りながら光育は，実から発された言葉を小声で復唱していた

春日山を取り巻く状況は一刻を争うものとなっている今。。。。
無用な心配を増やさぬために実の質疑には答えなかったが。。。。
守護の妻「実」が。。たった一度「影トラ」と会見しただけで「感じた」印象というものには

身に覚えがあったからだ

「トラは。。。「あの時」のようになっているのでありましょうか？」

師の顔に映される「懐疑」に敏感に反応したのは宗門の弟子「彦一（ひこいち）」であった

面長で良く焼けた黒い顔

長身で体躯に優れた彼もかつて「虎御前」の下そうとした斬首から救われた一人だった

十分に事を気遣った声は小さく光育に耳打ちした

「もしそうならば。。。止められるのでしょうか？」

弟子の声は小さかったがそれでも注意を促し，口に指を当て「沈黙」と諭すと光育は答えた

「どんな事であっても我らは「止める事」に終始せねばならぬ。。。。その事は越後様にお任せしたのだから。。我らは我らの仕事をせねば成らぬ」

沈黙を守れ

その指示を良く理解しながらも彦一は返事した

「越後様は「あの時」の事。。。。ご存じなのでありましょうか？」

自ら沈黙を模範した光育は声なく首を振った

「では」

光育はもう一度指を口に当て
声を高めてしまいそうだった彦一を諭しながら答えた

「それを知らせたら何か別の解決法を出すことが出来たわけではあるまい。。。今は。。。今のトラを信じねばならん」

師の答えに彦一は苦渋ながらも沈黙を守った

光育は走りながらも「あの時」の事を少しだけ思いだしてみていたもしもの「解決法」があるかもしれない
不安を少しでも一掃させる何かがあるかもしれないと

だが
それは思い起こすにも「恐ろしい」事だった

為景の死の日。。。。。

それは蘇った「狂気」だった

「今は。。。今を生きているトラを信じよう。。何かの時には。。。ジンも共にいよう」

解決のなかった一つの「問題」を抱えたまま光育は己を律するように言うと
同じようにあの日の「闇」を思いだしていた彦一の肩を叩いた

「まず，目前にある事に望もう」
光育達は実たちの後に遅れることなく従い屋敷に向かっていった
何度も。。。。手を握り返す
馬の背に寄りかかって眠るような事はなかった
城が近づけば。。。。近づくほどに私の心は激しく波立ち始めていた
「ジン。。。。。」
私は行軍の先頭に立っていた
誰も
何人も私の前を歩かせるような事はしなかった
これは
私し「長尾影トラ」の「戦」なのだ
私が「戻らぬと決めた戦」なのだから
真ん前にたって「戦」の口火を切るのは私でなくてはならない
その行軍の中
私の馬の手綱を曳いていたジンに声を掛けた
「前に。。。。。こんな事はなかったか?」

私の問いにジンは少し考えて返事した

「前って?前の「戦」の事か?」

「違う!」

私の質問に間を持ったジンが何かを隠しているように感じた

春日山は。。。だんだん近づき

大きな影が目の前に。。。。

「私は前に春日山での「戦」を見ている気がする」

「城攻めは山に向かって行く事から始まる。。よく似ているからだろ」

今度は間髪入れずにジンは答えた

「ジン。。。。何か違うんだ」

私の目は虚ろになり始めていた

「ジン。。。私は春日山にいたときの事をあまり覚えていない。。。ハズなんだ」

ただ

ひたすら山を睨みながら

私は初めて「曖昧」である自分幼少の事についてジンに話し始めた

「トラ。。。。今,そんな事を思い出す必要なんてない」

ジンの声はすでに遠くに聞こえていた

「何で!!!何で私は!!!」

「私はココにおります」

頭が揺らいだ
苛立ちで隠し事を持っていそうなジンを叱咤しようとした瞬間
目の前が暗くなった
「私はココに？」

頭の中に響いた声は。。。。まぎれもなく。。。私の声だった

「オマエは。。。。」

次第に闇に消されていく目の前の景色と，入れ替わる情景
そこは
どこかで見たことのある部屋の中
多くの影の真ん中に

「私？」

そこには「飯縄権現（いいづなごんげん）」の兜をつけた私が。。。。幼い私が座っている
「何だ」
頭を振り
抑える
「黒滝」の時にも「鬼の悪夢」は見えた
それは眠ることのない時に現れた

今もまた私は眠っていないのに。。。。。「黒い意識」の中に入

っている
手に触れる事が出来そうなほどに
実際に目の前に部屋の襖を感じられるほどに近い。。。。「夢」なのか？

目を覚まそうと頬を張ってみるが。。。。。

「私はこの国を守る者なのです」

いよいよ鮮明になった幼い私の顔は。。。。「血」を帯びていた
そのまま口元を笑わし続ける

「修羅の国の者も従えましょう」

ざわめき
小さな私の前には何者「男」の姿が見える
みな一応に「具足」を身につけている

私は声を出して幼い己に声をかけるが
彼らには私は見えもしないのか
誰一人振り向きもしない

小さな私は誰かに話しかけている

相手はワカラナイ
キリキリとただ頭が痛む
画面は揺れ
目の見える幼い私の居場所が歪んで行く中。。。。

見覚えのある手が。。。。
幼子の私の肩を抱く

「為景様の後を継ぐのは。。。。。虎千代なり」

その手は。。。。
前に進もうとする私の体の中に大きく「鐘の音」が響き
読経が聞こえる
耳が壊れてしまいそうな音に膝が崩れた

苦しむ私の姿を見る
虎千代は。。。。笑った

「我こそが」

何!!!!
何!!!!
音が溢れ私の耳を塞いで行く
彼はただ笑い遠く離れて行く

波のように見えた影は。。。。。幾重にも並ぶ「僧」に変わり
経が続く
白木でつくられた「棺」
私は間を縫って前に進んで行く

見てはイケナイ。。。。見てはイケナイと思いながらも前に前に
その棺には。。。。。

闇は裂け終わり
呆然とする私の前には春日の山と
ジンがいた

「トラ？」

「ジン。。。。。」

汗より何よりも
またも一瞬だった「悪夢」の中で私は「何か」を見てしまった
そんな私の呆けた顔にジンが話しかけているのが小うるさく聞こえた
「どうした？。。。。体が辛いのか？」
心配している顔の向こうに。。。。。
今まで隠していたものが私には見えた。。。きっと。。。。

ジンは知っていんだ。。。
きっと知っていたんだと

私の心は怒りに揺れ始め
自らの意志で「黒い意識」を呼ぼうとし始めていた
「トラ！」

覗き込むジンの顔を拳ではね上げた

「私が。。。父上を殺した？」

その３８　月と星　（４）

吹き下ろす風に心も体も揺れる
慣れた馬上に居ながらにして「世」は周り
夜の闇とは違う漆黒の中に灯った「赤い記憶」に
私は汗を。。。。

浮かび上がった視界の中
幼かった私は，小さいながらの手，足に，胴にしっかりと具足を付けていた
覚えている
栃尾に行くときに持たせて下さったあの鎧は。。。母上が作って下さった「飯縄権現」の前立てを頂いた色々威

あの具足は。。。。栃尾の戦の時に。。。。初めて付けた。。。。
ハズだったのに。。。。

よく
思い出す
割れそうに響いたあの音の中で見た「夢」はいったい何かと
目を細め
幼子の私はどうしていた？

「血」

艶やかなる具足はさらに派手な「色」を帯びていた

そうだ。。。「血」だ

座した目の前にも。。。。「血」のたまり

流されたばかりの気配を
匂いを
「味」を感じさせるほどの「鮮血の溜まり」

立ち上り揺れる湯気。。。。。
魂出でる
最後の熱を吐き出した「血」の靄の向こう
私は。。。。。笑っていた?

何かを語って

声は私には聞き取る事はできず
波のように響き続ける読経の向こう側に見えた白い棺の中にあった
顔を見た瞬間に
闇は綺麗に刀で切り裂かれるように開けた。。。

後は
歩き続けてきた「夜」の真ん中に。。。残されて
「何が。。。。。」

私は。。。私が語ろうとした言葉を探して四方を見回した
そこに。。。

もう「夢」の続きがないと解っていても。。。。
そうしなければと

「春日山。。。。」
「夜」が目の前に広がった時
見回した平野の先にあるのは「黒き城」だった
今まで漠然と見続けてきた「進むべき山」の向こう側にある城は大きく不気味に見えた

「父上だった?。。。」

自分に問いただした
息は少し上がっている
もう一度山を見つめた

大きな姿。。。。
城を支える山々の尾根
それは大きな父の肩
どうして。。。。倒れてしまったのか?
どうして父上が死んでしまったのか?
私は。。。。やっぱり覚えていなかった
なのに
「悪夢」は鮮明に事の次第を映してくれた

白い棺の中にいたのは

頭を抑えた
読経の真ん中に眠っていた人は

硬そうな髭も櫛（髪）も真っ白で
でもただの老いた武人という顔ではなかった
「戦」を駆け抜けた数多の傷
治世に尽力した数多の皺

この人は。。。。
きっと。。。いや絶対

「父上」

わかった
でも
何度も頭を振った
記憶を転がし色々な角度で見直したいのもあるが
そうじゃない

「私が父上を。。。。」

あの闇の中にあった「鮮血の溜まり」。。。。。あれはきっと。。。
そうなんだ。。。。

「トラ！！！」

恐れとふるえで行軍を止めてしまった私の膝をジンが揺さぶった
闇が消えて最初に見えたジンの姿
顔を私は殴り倒していた
ふいに叩かれた顎を抑えながら
ジンは血を飛ばして大きな声で

「トラ！！しっかりしろ！！」

何を覗き込んでいる
私の動揺を抑えようとするジンの目が。。。。何かを探しているように見えた

「ジン。。。。。聞きたい事がある」

行軍の真ん前を歩く私が「何かに」同様しているなどと知られたくない。。。
その気持ちが
心を少し落ち着けた
目の前「心配」という顔の中に「何か」を隠しているジンに問うた

「父上が亡くなった日。。。私は何をしていた？」

闇の世の下
進軍する軍団との距離は大きく離れていた
ジンと私。。。。ただ二人だけ

「父上。。？親方様（為景）が亡くなられた日の事か」
「そうだ」

月のない空の下
ジンの顔を凝視した

「トラは葬儀のために春日山に戻っただろ」

口元
目元の動きに「何か」を探そうとする私

「春日山に。。。。。戻った？」

覚えていない
そんな記憶はない
私はずっと。。。ずっと。。。元服するまで春日山に戻った事など
ない。。。
だけど。。。
じゃあ父上が亡くなった前後の事を覚えているか？と言えば何もない

なんで。。。。途切れている？

「あれは。。。。私？」
「あれは「僕」だ！！」

頭の内側を殴打するような痛みと共に「あの声」が響いた
闇ではない
この夜の下に彼の声が私を呼ぶ

「戦え！！！」

割れんばかりの声が。。。。体全体に響き
私は悲鳴を上げた

「夢を見て下さい」

母の声。。。。

頭を抑えながら思いだした「元服」で城に戻った日に母は。。。。

そう言った

「夢を見ろ」と

これなのか

この「真実」を思い出せと言う事だったのか？

父を殺した事を。。。

「トラ！！」

目眩で馬からおちそうになった私をジンが支えていた

「私が父上を殺したんだな。。。。」

「違う！！！」

ジンは私を馬から引きずり下ろした

引っ張られるまま降りた私はそのまま大地にへたり込んだ

「本当の事を言え！！！何を隠している！！」

「何も隠してない。。。。というか。。。あの日の事はオレにもわからないんだよ」

ジンは私の肩を掴まえて続けた

「オレにもわからないんだよ。。。。」
私は必死だった
この「夢」というものの中身がわからなければ。。。。。
気が狂ってしまいそうだった

激高
高まった自分の心に
ジンが答えてくれない事に

「あああああ」

肩を支えていたジンを殴りつけた
声が何度もこだまする
この頭をかち割らんばかりの「邪」の心は声高く私に言う
何度も

「戦え」
それは。。。。御仏の声ではなかったのか!!!

「戦え」

それは私の心に巣くう「欲」だったのか!!

無邪気な子供の姿のままでいるのは
無知の欲であるのか!!

何度もジンを殴りつけた

「言え!!私はあの日何をした!!私は父上を」
「違う!!!」
「何が違うか!!!」

天を仰ぎ
こぼれる涙のまま
泣き叫んだ

「争いにまみれた私の「心(しん)」は無邪気なままに人の死を望む!!「邪気」だっんだろ!!だから今もまた「兄」を殺そうと」

「違う!!!」
ジンの手が私の頬を張った
それは
たいして力の入っていない蚊を打つようなものだったが
私の目にはジンの涙が。。。。

「違う。。。絶対に。。。オマエが親方様を討つような事，絶対にない」

ジン。。。。。

「心はそれを隠せない。。。。繰り返し私に言う」

はね除けられた手をもう一度強い力で私の肩を掴み

「あんなヤツに心を揺らされるな!!!」

誰に?

「オマエは長尾影トラ!!他の何者でもないだろう!!見知らぬ「心」に揺らされるな!!」

私の中の「誰」だと?

「影トラ様!!!」

進軍の前線を歩く私が止まった事に気がついた「実乃(じつの)」が異変を感じたか走り寄ってくるのが見えた

我に返った
そうだ今はまだ進軍の真ん中にあった
私は掴まれていた手を解こうとしたがジンはそのまま私を山に。。。
。春日山に向けて怒鳴った

「あそこに答えがある!!!今は進むしかないだろ!!違うか?」

目の前に近づいていた春日の山
ココで逃げる事も
迷う事も

今更できるわけない

「答え。。。か」

そうだ

ココまできたのならば

己の目で耳でそれを知る事ができるハズだ

自らで歩くことを恐れるからこそ。。。。声に怯えた

「影トラ様!!!如何なされましたかぁ!!」

実乃の声はすぐ近くにまできていた

ジンはその場に控えた

「どうなさいましたか?」

私はゆっくりと立ち上がり春日山を睨みながら答えた

「何もない。。。。。月が見えてきたな」

身を正しゆっくりと

実乃に顔を見せぬように

分厚い雲と雨の残した闇の中にあった大地にうっすらと顔を出した

月を指さしてみせた

「陣江。。。。」

私に近づいた実乃は
足下に顔を腫らし血を吐いたまま座り込んでいるジンの顔に驚いた
「どうなって。。」
「申し訳ありません!!」

答える気のない私の後ろでジンは言い訳を始めた
「行軍中でありますのに。。。その手水（便所）に出たいとオレが
言うたので。。。当然の事ながら。。。お叱りをうけたしょぞんに
ございます。。。。はい。。」

私の方とジンの顔を交互に見ながら実乃こは困惑している様子だった
私は怒りを抑えながらも
熱くなったままの声で告げた

「下がらせよ。。。ココよりは一人で前を行く」

心との戦い
色々なものに押しつぶされそうな私は自分の胸を叩きながら誓った
同時に
ジンが何かを隠している事が棘となり。。。。許せなかった

「陣江。。。影トラ様に何があった?」

ジンはトラから引き離され実乃の陣に留め置かれた
血反吐で赤く染まっていた顔に実乃から手ぬぐいを投げ渡されて聞

かれた

「何かあったのであろう？」
「わかりません」
ジンは口元に溜まった血を吐き出しながら小さく答えた
行軍する軍団の中
多くの音で声は紛れるのに実乃は顔を近づけて聞き返した

「高ぶっておられるのか？」
「わかりません」

繰り返し
頭を下げながら
そんな陣江の襟を掴まえて実乃は少し怒って聞いた

「大事な時ぞ。。。わからぬでは困る」
「じゃあ。。。。まずオレに教えてください！！」

実乃に引っ張り上げられたジンは泣いていた
泣きながら実乃に問い続けた

「親方様が。。。。お亡くなりになられた日に。。。いったい何があったんですか？」

涙の目を尖らせたジンの質問に
おもわず実乃が掴まえていた襟を離してしまった

怯む実乃をジンは逃がさなかった

「実乃様!!何かあったんですね」
実乃の反応にジンは敏感に動き今度は逆に詰め寄った
実際
ジンはあの日の事を。。。いやあの日の後の春日山でトラに何があったかを知らなかった

「親方様が亡くなった時。。。。越後は。。。春日山は葬儀に「具足」を纏わねばならぬような日が続きました。。。オレも寺でその様子だけは見ています!!」

親方。。。。為景が死んだ日
春日山は騒然としていた
最後の戦に負けて以来，調子を悪くした為景は二度立ち上がる事はできなかった
その頃，越後には不穏な空気が流れていたが
寺に入った「トラ」は外を見ようとはしなかった
「父」の事「母」の事「兄」の事
どんなに噂が流れてもあえて耳を塞いでいたかのようだったが
使者が「親方逝去」の知らせを持ってきたときには。。。。

「春日山から葬儀に参列をという使者が来たときから。。。。戻ってくるまでの間に「何が」あったんですか?。。。。。ホントはトラが親方様を」
「陣江。。。。声を静かに!!」
実乃は離れてしまった体を近づけて陣江の口を塞いだ

「馬鹿な事を申すな」
そう窘めながらも
目には焦りがあった

「あの日。。。。実乃様は春日山におられましたハズ」
「陣江。。。影トラ様はその事で何かオマエに言うたか？」

ジンの質問をなぎ倒し実乃が質問を返した

「だから。。。わからないから苦しんで。。。。自分が親方様を殺し」
危険な言葉に実乃は素早く陣江の口をまた塞いだ
塞いだまま首をふり
静かに答えた

「そんな事があれば。。。これほどに諸侯が付き従うものか。。。」

わかりやすい回答だった
陣は自分がトラの事で焦り動転していた事に少し落ち着きを取り戻した
そんな大胆な出来事があれば。。。。
確かにと頭を抑えた

「でもトラはその事で。。。」
「影トラ様がその事で悩んでいるのか？」
「多分。。。だからあの日の事をオレに教えてください」

もう一度，実乃の襟に掴みかかってしまっていた手に実乃は言葉なく「離せ」と叩いた

「オマエが知ってどうする？」
一度は焦りを顔に出してしまった実乃だったが
今ココで「優先」されるべき事をよく知っていた

「オレがそんな事はなかったと話しを」
実乃の目は止まらぬ軍団の士気を維持するためにも「黙れ」と睨む

「実乃様。。。。。トラは「あの日の事がわからずに」苦しんで。。。」
「今。。。。ココでそれを知っても何もかわらん。。。。変わってもらっては我らが困るだけ」
「そんな。。。。親方様の事が誤りならば何も」

「黙るんだ陣江。。。。オマエは影トラ様と話しをしたのなら知っているハズだ。。何故詰まらぬ事を蒸し返す」
「それは。。。」

ジンは我に返った
実乃は何かを知っている「あの日」の何かを
だけど影トラの「何か」を知らない
それは

言ってはイケナイ事。。。。。

ジンは崩れた苦しみで一杯になっていた
トラの近くにいて苦しみを分かつ

いや
できれば「戦」という苦しみからトラを解き放したい
なのに行き場を無くした「嗚咽」が漏れた

大地に手を叩きつけ
行軍というさなかどこにも響かす事の出来ない「いっぱいの想い」を

「自分たちのためだけにトラに苦みに。。。何もできないなんて。。。」
「陣江。。。」

「止めればよかった。。。柿崎様の城に。。。いれば。。。」
いままで
ココまでの道程の間トラはずっと苦しんでいた
「進む」と決めた己の道であったとしても「合い噛む肉親」との戦いに
何歩も進んでも血を吐くように苦しんで

「陣江!!」

男泣きになっていたジンの首を実乃は掴まえた

「オレは。。なのにオレは「進めと」。。。春日山に答えがあると。。。」

本当はそんな事は言いたくなかった
むしろ
春日山になど向かわず「和睦」を待てば良かったと思っていたジンにとって

柿崎の城からの進軍は。。。。
トラの首を締め続ける。。。。真綿の鎖だった

不器用で
まだ「逆らう」という仕方さえわからないジンはうつ伏せそうになっていたが
その首を腕でつかんだまま実乃は言った

「思うさま。。。ワシを恨め。。。それで今は許せ」

そんな言葉ではどうにもならない苦しみがジンの中でいっぱいになっていたが
今はただ
実乃の前で。。。。声を殺して泣くことしかできなかった

その38　月と星　（5）

実城（本丸屋敷）周辺は。。。。気持ちの悪いぐらいの静けさの中にあった
「火災」の報告が入った後
邸内は一通り「改め」が行われたため夜分深い時間にもかかわらず
「綾」は起きていた

それは
覚悟

この一連の騒ぎを起こしている張本人を知る綾の覚悟が時を待っていたからだ

「参りますわ」

邸内の人手はすっかり出払っており
角部屋にいた監視役の「坊丸」の姿も見えなくなっていたのは先ほど年若の侍女「土岐（ときぎ）」に確認させていた

「本当に行くのですか？」

静まりかえってしまった屋敷の様子は異様だった
だから
いくら熟年になり
数多の困難に対する所作が出来ている侍女とはいえ「恐怖」を感ぜずにはいられなかったのか

土岐の母。。。共に上田から付き従った「初（はつ）」は思いとどまるようにと何度目かの問いをしたが
綾の心は決まっていた

「私がやらなければ。。。誰が出来るというのですか？」

綾には「覚悟」と「責任」があった
「ご仲裁」のためにただならぬ恥辱をうけながらも，城を降り自らの勤めと「上杉守護」の元に向かった

「麻」に対する。。。。。「責任」

小さく襖を開けた
一度に開けてしまうには。。。寒すぎる
切るような風が舞っていた

深く息を吸い
心細さ増す闇の向こうに鎮座する「母，虎御前」との対峙に気持ちを引き締めさせていた
綾は目を凝らし回廊の向こうを見つめた
この奥屋敷。。。北の間に母は二十年近く
父を亡くしてから住んでいる

そこにどんな想いを募らせ
どんな「怒り」を実らせていたのか。。。。
襖にかけた手が震える
綾の体は心意気とは別に。。。。震えていた

父を亡くしてから。。。母はいったい何を思って。。。。

「戦い続けていた母」

綾は目を閉じた
自分が「上田長尾」に輿入れする事が決まった時の事を思い出した
無口な母の顔には「怒り」で溢れていた
あのころ
まだ「少女」だった綾は「春日山」を離れたくないと泣いて晴景を
責めた
苦渋の守護代は「決定」を覆すことはなく
苦悩に満ちた顔だけをみせて部屋に戻っていった後

母はズイとそれを渡した
綾の帯に掛けられた「小太刀」
それは
言葉の少ない母が
「敵の元になど行きたくない」とただ駄々をこね泣いた自分の頬を
張り差し出した物

「女もまた。。。戦わねば。。。。この乱れた世を生きてはいけぬ」

生きろと差し出された言葉は
今こそ綾の心に深く刺さっていた事を示していた
戦い続けた母に
皮肉とも言える「反抗」で「戦う」

「母上は。。。。正しくありませんわ」
決意を小太刀に，添えられた手で伝える

今ひとつ襖を開けながら
歩を進めた綾は春日の山
その頂から遠い空に顔を上げてみた
空は。。。。

まだ星も見えぬ闇の元
霞のように揺れる月の影

身動きとれぬ「人質」であった母の「謀」はただひたすら
深く
深い闇の作る水の下に流され続けていた
そして
それは未だ
夜を照らし続ける月の元に晒されてはいない

訪れる朝に。。。。
それはどんな形として現れるのだろうかと

「参ります。。。。」

せめてもの警戒のために侍女の装束に身を改めた綾は

まだ見えぬ「謀」の闇に足を進めた
その時

「共に参ります」
初は襖を開けながら立ち上がった
綾は首を横に振った

「いいえ。。。良いのですココにいなさい。。これは「栖吉の。。長尾の家」の問題。。。「上田」から来たオマエ達には。。。」
「だからこそ。。。お供いたします」

綾は母の事をよく知っていた
もし
引き留めが「勘気」に触れればその場で斬られる可能性だってある

母はそれほどに「祈り」
それほどに「願って」きたのだから

「生きて帰れないかもしれないのでよ。。上田から来たオマエたちを巻き込むわけには参りません事よ」

強気に引き離すように言うものの
綾の手は小刻みに。。。震えていた
その細い指先を。。。手を初はそっと握った

「何をおっしゃいますか。。。上田長尾家長尾政景様が奥方。。。綾姫様を一人で「戦」に向かわせたとあっては。。。上田の大殿様（長尾房長（政景の父親））に顔向け出来ませぬ」
「そんな事はもうよいの事ですのよ。。。。政景様だって。。。今

は」

自分で言葉に出して終いながらも綾は寂しさに胸を締め付けられ俯いた
愛した夫は。。。。今どうなっているか
生きていて欲しい
そう願いながらも。。。。願う心に訪れる揺れを律する事のできない自分を情けなく思って

そんな綾の着物の襟を正しながら
初は微笑んで答えた

「上田に。。。。若殿様（政景）の元に私が必ずお届けする。。。
それが「初」の勤めにございます。。。そう信じてくださいませ」

綾の元
初も「戦」に赴く覚悟を決めていた
後ろに立つ娘の土岐も共に
まだ「夫」を持たぬ土岐は。。。。幼いながらの顔に涙さえ浮かべながらも
綾の打掛を運んだ

「寒くなってまいりましたから。。。「打掛」を。。。。堂々と参りましょう」

上田の女たちもまた。。。覚悟に絆を固め前に進み出した

実城本丸屋敷には誰一人という姿は見えず
ただ
風の音だけが回廊の間を走り抜け
冷えた音を小さく響かせ泣いていた

本城より右手におりる「対馬谷」の端
倉近くからの「不審火」はココからよく見えた
だから
多くの人手が割かれ火を消す作業に移っていた

誰もいない評定の間に「晴景（はるかげ）」は一人
鎧直垂（よろいひれたれ）に亡き父の陣羽織を着け座っていた

数珠に手を通し祈るように床机に座る姿には
「病んだ守護代」の姿は微塵もなかった
むしろ
神々しささえ伺える
整った眉
閉じられたままの切れ長の目
やせた面立ちではあったがそれ故に研ぎ澄まされた男らしさ

「父上の「希望」。。。。。そうでありましたね」

静かに唇は動き
評定の間の上座に置かれた「為景（ためかげ）」の位牌に向かい晴景は話しかけた

かつて。。。。
山のように大きな男だった父が座した場所に
対面に座る晴景は「会話」を続けた

「大変申し訳なく思っております」

悔恨
「越後」に対して尽くすという
父からの使命を果たせなかったこと

「わかっていながらも。。。。自分を律する事はできませんでした」

右手に握られているのは。。。凶刃ではなかった
晴景の手にあるのは艶やかなる
祖扇（あこめおうぎ）

望まれなかった「生」
長尾の家を継ぐにふさわしいのかという資質を疑われ続けた少年は
一心に父親の姿を追った
だが

人の心というものに伴って
同じく「越後」という地に。。。。何度も裏切られ続けた
それでも
自分を支え共に戦った者たちのためにもと

だが
いつしか心は疲れ。。。。怒りと苛立ちと。。。。自らわ律して「和」を重んじる事はできなくなってしまった

「至りませんでした」

至らなかったのは。。。。
晴景の明晰な頭脳にはかつての執政の道程がしっかりと刻まれていた
逃げることなく
それでも「争いという血の道」ではなく
できうる限りの「和」を求めた

だが
乱れきったこの世に。。。。

「力。。。。」

直江は。。。。影トラの持つ光の中に「希望」と
それを推し進める「力」を見た
未だ「戦」という絶対の力が必要で
「血」を流す覚悟が必要で

ただ動かず床机に座したままも
何度も己の眉間をさすった

「戦う事から逃げた」
それは逃げたくて逃げてしまったわけではなかった
晴景の生い立ちを疑い
「力添え」を拒みただ「結果」だけを望んだ諸侯。。。国人衆。。
豪族。。。地侍
孤立無援の守護代
父のツケまでもを背負い戦ってきた
「直江」を「斎藤」を使い

削られる心と体を。。。。惜しむことなく捧げたハズだった
なのに
「戦う事」ができなかった守護代
己の周りに「希望」を推し進める「力」を得ることの出来なかった
守護代

声を大にして。。。。
「何故共に戦わぬと」。。。。。。

晴景は首を。。。少し振った
詮無きこと。。。。

「何者であろうと。。。この首を獲りに来る者を恨みはしません」

今
時は移ろい
「希望」を手に入れた諸侯たちがこの春日の山に詰め寄ってきている

「影トラ。。。。。」

晴景は「あの日」の事もよく覚えていた
「戦鬼為景死去」に「守護代」の地位を継いだばかりの晴景の元に
あったのは「脅威」ばかりだった
春日山という堅固な守りの中にあって
目に見える場所にまで「威し」を掛けてきた「親族衆」

三条長尾の俊景(としかげ)ら
春日山近くに巣くう魔物の親族達の中「具足」に身を包み
父上の葬儀の中に敵がこようものならば「鬼」となって戦う覚悟だ
ったが
あの日
届かなかった警戒の手の下に起こった事件の中で

久しぶりに見た「妹」影トラ

あの時には影トラを一目見たときに

きっと。。。いつかこの「獰猛なトラ」によって自分が追い落とさ
れる日がくるだろうと予感した
返り血をあびたままの「清浄なる目」
何故斬らなかったのかと自問してみる
晴景は斬らなかった
見るも恐ろしい光景の中にいた影トラを

「父上。。。私こそ。。。影トラに，希望見ていたのだと思うのです」

扇を開き位牌から顔を隠しながら晴景は。。。穏やかに微笑んだ
本心だった
「力」に希望。。。。
血の池に佇む「狂気」の中に晴景は小さいながらも輝く「希望」を
誰よりも早く見いだしていた

だから
「戦」に向かわせた
虎御前の「元服」という言を聞き入れ
「力」を。。。。解きはなった

希望は大きく羽を伸ばし
「戦」の大地に舞い降りた
瞬く間の「炎」に何することなく「敵」はなぎ倒されていき
かつて晴景を脅かした「三条」を壊滅に追いやり
時を読むことの出来なかった，たわけ者の「上田長尾の政景」まで
おも打ち破った

後一歩で「越後」は一つになる

そこまで「龍」は駆け上ろうとしている

晴景は床机から立ち上がるとヒラリと舞った

「今宵は私が舞いましょう」

穏やかな笑みと共に
長身の体は軽やかに舞った
「最後の仕事」への手向けと，横一線にフワリと浮いた扇は美しく舞う
滑らかな線を描く
軽やかな舞

晴景は
評定の間の襖を静かに開きクルリと体を回した
眼前
春日山城下。。。。府内に迫る「トラの篝火」

海原に孤独に浮かぶ城に迫る。。。。。波のように揺れる
その時
冷たい風の中に。。。。
鼻に届く。。。良く知った香のかおり

晴景は理解していた
誰が最初にココに来るかを

「やはり。。。。。貴女が来ましたか」

回廊の端に現れた影は揺れながら
月の見えぬ夜の下に
鋭き凶刃の光の中で微笑みながら答えた

「今こそ願いは叶う時なり」

いつもの冷たい声
なのに燃えるように熱い牙を宿す狂気は少ない星明かりの下に顔を
見せた

「虎御前」

その38　月と星　（6）

春日山の内部に巣くった「刃（やいば）」となった女はユラリと回廊の影から
姿を現した
前を歩く侍女二人
その女たちより少しばかり身丈の高い彼女は
いつものように揺れながら声なく口を笑わせていた

影は一群をなして静かに近づいてくる
真ん中を歩く主を守るように
少なくとも六人の侍女を従えている
万全の状態で抜かりなく謀を進めた。。。。その結集が今目の前に
ある事に虎御前は笑っていた
長きにわたった
「祈り」と「願い」を成就させるべく。。

静かに手を挙げ前の二人をのけると
一人晴景の前に進み
いつになく明るく陽気な口調で聞いた

「逃げぬとは。。。。重畳（ちょうじょう）」

声は女のものだが
語りは「武士」のする言葉

「逃げることなどありません。。。目の前にある「戦」から守護代
であるワシが逃げるなど」

虎御前は笑っている
そんな形式張った「謙遜」などもはや笑い話にしか聞こえないのだろう
左後ろを歩く侍女の手には。。。
朱色の柄をもつ刀が用意されている
「戦鬼」であった父の時代。。。。春日山周辺の野武士を狩って歩いた「牙」だ

「荒々しき鬼の妻」は満足そうに続けた
月は薄い靄の中から少しずつ事の成り行きを見守るように顔を出し始めている

「そうよな。。。逃げるなど言語道断。。。。守護代たる者「最後」の責務を果たさずして死ぬことなど。。。。」

最後の。。。「責（責任）」
それは
とりもなおさず「首」を求めているという事

星明かり
少しの光に見開かれた目は遠慮なく輝いていた

「首など。。。。さし上げましょう。。。ただし少しばかり聞きたい事がありますが。。。よろしいか?」

晴景の態度は落ち着いていた
間を伸ばし「何か」を待っているという感じではなかったし

それこそ
後顧の憂いなどないよう虎御前は屋敷の周りを固めているから余裕の顔で顎を上げた

言葉はないが
それを了解と理解した晴景は聞いた

「ワシ亡き後の守護代は。。。。「影トラ」ですか?」

「そうだ」

簡潔な返事
それ故に迷う事なく信じてきたとも言いきれた
答えはわかっていたが念を押しただけの晴景は卑屈な笑みのまま質問を続けた

「その「願い」はいつから。。。。」
「あの子が生まれし時から」

下らぬ質疑を断ち切るように
虎御前の返事は早かった
揺れる体と右に傾げたままの顔は睨みつつけたままだが
晴景は退かなかった

「何故?影トラなのですか?」

「何故？」

いつもなら弱腰
いや
自分と問答する事から逃げてきたハズの晴景の質問に
それでも
そんな態度さえも恐れぬ御前は口の右端を上げて笑いながら答えた

「影トラこそが。。「栖吉」の。。いや親方様（為景）の正しき血であるからだ。。。わかっていたハズであろう？」

狂気の目は晴景の中にある「血」さえ見抜いていた
だが
その目の威しにも晴景は動じなかった
これが最後の時であるのならば。。。。聞き逃して後悔する事のほうがよほどに残念な事だから
絶対的優位の虎御前の前
死の前の問答に晴景は研ぎ澄まされていた

「影トラは。。。。産まれたとき「禍々しい塊」といわれた者。。。。違いますか？」

虎御前の笑みは止まった
質問を止めた晴景の目が己の中の何かを見ようとしている事に気がついたから
そして質問の内容はいままで。。。。長く「禁忌」とされてきた事だった

微妙な虎御前の揺れを晴景は見逃さなかった

「人食いの鬼。。。。。」

「たわけた事を。。。。。」

白い息を。。。。静かに吐き出しながらも牙は怒りに震えながら答える
緊迫する間をついに月が照らし出す

顔を月の柔らかな光の下に現した二人は
柔らかな世界とは別の。。。。まさに「武」の者の持つ間の中にいた
一線で命を絶つ間合いの中
晴景の問いは止まらなかった
自分を追い落とす者が「鬼」か「仏」なのか。。。。。それを知ろうと狂気の糸をたぐりよせる

「産褥の床に。。。。千切れた赤子の手足が転がっていたと」

まるで
古来のおとぎ話の中にある「鬼」の伝承のような言葉がならぶ中
虎御前の顔は見る間に「鬼」と変わるが
けして泡立つ事なく質問に答えた

「神を「器」に修めるには人一人では足りぬ事。。。。ただそれだけの事よ」

「影トラは。。。。二人いた?」

最後の一線が喉を裂く前に
怯まず質疑を続けた晴景を虎御前は笑い飛ばした

「凡庸なり晴景。。。。それが「ただの男」の限界だ!!」
そういうと左手を軽く振った
合図に敏感に左に控えた侍女が。。。。赤い刀を差し出した

「もう良かろう」

体を返し刀の柄に指を滑らせた虎御前
晴景はそれでも聞こうとした

「影トラとは?鬼か?仏か?」
「力だ。。。。御仏を守し力なり」

見向きもせず断ずる
さすがの晴景もあきらめた
質疑の半分もかなわなかったが「力」は確実に虎御前の元にある事
だけで良しと思うほかない
小さく息を吹く
死ぬ覚悟はとうに出来ていた

だがそこにけたたましい足音が割って入った

「おやめ下さい！！！」

声は荒い息とともに回廊を慌ただしく走ると
虎御前と晴景の間に飛び込んだ

「綾。。。。。」

打掛の前もひらいたままの綾は緊迫した二人の顔を交互に見ながら
大声で

「双方。。。。ココでお引きくださいませ」

晴景を背に
母，虎御前を睨むとさらに続けた
「母上の仕方は間違っております。。。そのような仕方で「影トラ」を守護代になど。。。誰も従いません！！」
虎御前の顔は晴景と問答していた時以上に鋭くなった

「たわけもの。。。。。」

唸るような声が響く
侍女の一人が慌てて綾が走ってきた回廊に目を向ける
「萩（はぎ）は。。。」

「はっ。。萩には我が侍女二人の相手をして頂いております」

上がりきった息を整えながらも
泡立つ事なく母と対峙しようとする綾は皮肉を込めて返事した
回廊の向こうには虎御前の侍女である萩が見張りに付いていたが「綾」の登場と二人の侍女に羽交い締めにされて今も格闘していたが

それはココから見えなかった

「母上。。。。このような恐ろしい事はおやめ下さいませ」
片手をあげ
もう片方の手で晴景に。。背を向けたまま

「兄上も。。。今更争って何になりますか」

決死の綾の前
虎御前の顔は怒りに満ちていた
「。。。。「道理」のわからぬ馬鹿娘が。。。。」

刀の柄に手を掛けていた虎御前の眉は吊り上がり月の明かりに照らされていた
軋むように歯に力が入った顔に
やはり「綾」は娘，恐れる事なく「仲裁」を続けた

「話し合いましょう。。。。「戦」は止められます」
「止まるものか」
怒(ど)を含む虎御前の声に
綾は真っ向逆らった

「止まります！！」

大きく逆らった
だが
確信。。。そんなものはなかった
実際に「麻」が上杉守護に話しをつけられたかもわからない中ですでに事は急転し始めている

どんな事をしても止めほうが「大事」であるという心が綾を突き動かした
一歩前へ

「麻様が上杉守護様にお頼みしてこの「戦」のご仲裁に向かっておられます。。。。「戦」は。。。。「影トラ」は必ず止まります」

妻，麻の名に晴景は驚きをこぼした
「麻が。。。。」
もれた声に綾は晴景に振り向いて言った

「麻様は。。。。兄上様に生きて欲しくて。。春日山を降りられたのです。。「上杉様」が必ずこの「戦」を止めてくださ。。。」

言葉は途切れ綾は崩れた
綾の首筋には手刀が音もなく振り下ろされていた
目の前に星が走り
急な緞帳が引き下ろされる中
切れ切れの声が呼ぶ

「母上。。。。」

綾の背にはピタリと虎御前の侍女がついていた
「申し訳ありませんでした」
「楓（かえで）。。。萩は？」

少し大柄で
虎御前と身丈も同じぐらいだが細くはないしっかりとした体躯。。。
だが冷徹な瞳は信心する主に忠実に細く残酷な光をみせている

楓と呼ばれた侍女は綾の気を奪い崩れさせた後，虎御前の前に控えて

「侍女二人も打ち据えておきました」

その動きは鋭く俊敏だった

晴景にはこの「女」が「忍」である事がすぐにわかった

「たわけた娘が。。。。。戯言を」

「殺したのか？」

綾の騒ぎに苛立ったままの虎御前の前に立つ楓に晴景は聞いた

「殺しはせん。。。たわけでもあれど。。娘でもあるし。。。」

無口な侍女の向こう

今日のために話しつづける御前

「今日の血は。。。。晴景。。。オマエだけで十分だ」

これほどの騒ぎの中でも揺るがぬ「願い」にそって動く虎御前

「さあ。。。終わろう。。首を頂こう」

満月の下

狂気の主と晴景は回廊の真ん中で向きあった

足しようの騒ぎはあったが虎御前の変わらぬ顔はうっとりとした目

つきのまま今度こそと手を刀に伸ばした

「控えよ。。。。虎御前!!」

それは市女笠をかぶったまま対屋の渡りから声を響かせた
そして
その声を虎御前は良く知っていた

「。。。。。。」

沈黙の中
晴景をかわし虎御前の前に表れたのは「実(みのり)」上杉守護代理だった

「なんの騒ぎか解りませんが。。。。。控えなさい」

実の声は震えていた
それは
急ぎココに走ったからではなかった。。。。

宿命の相手

実の後ろには光育も控えていた

本来なら虎御前の引き留めのために前にでるハズだった光育
しかし
綾の大声で事態が危険な方向へ加速している事に実の足は真っ先に
走った
走り

宿敵である女の前にたってしまっていた

対峙してみて
初めてその狂気に満ちた目に。。。。震えたのだ
。。。」

「春日山が大事の時。。。。。何があったかは「知りませんが」。。

今までの「怒り」を越えた色に染まる御前の瞳
揺れていた体はピタリと止まり
周りに従う侍女たちは小袖の中に手を隠した
晴景は慌てた

「上杉様!!」

しかし実は動かない
ましてや目を反らしたりもしない。。。。
反らしてしまえば次に見えるのは「闇」かもしれない
「武人」の間合いに入ったまま
お互いうごかないなかで。。。。。告げた

「無礼あろう。。。いかな非常な時といえ私の前に立ち続けるわ。。
。。無礼なり」

実は今初めて「命」を賭けていた
己の魂を失っても晴景を守るという決意の元に
微動だにしない意志が大きな声で怒鳴った

「控えよ！！！虎御前！！！」

一陣の冬を誘う風の下
虎御前はふらりと揺れた
揺れたままクルリと実に向かって背を向けたまま
一人として上杉に控えぬ侍女たちに小声で命じた

「もう良い。。。みな殺してしまえ」

怒りは冷徹に殺害を命じた

その３８　月と星　（７）

白亜の月は丸く輝く
中庭に照らし出された風景は静かで何もかもが美しい
だが
その中で真っ赤に燃えた「敵意」は本心の牙を向いたまま「鬼」にも似た顔に変わっていた

虎御前の怒りは静かだが
青白く燃える霊元の炎にも近い，研ぎ澄まされた怒りだ
自らの眉間を細い指先が触れる
覚悟の怒りはそこに集まっているからだ
長く御仏に向かい祈った。。。。
成就される事があたりまえの事

だからこそ儀式的な意味合いもあったが。。。。「余分な血」を欲してはいなかった
欲しいのは一つ

血を伴った

「晴景の首」

ただ，それだけをだったのに
これほどまでに自分歯向かってくるものがいる事など。。。。。予想外だったのだろう
落ち着くことなく
何度も首を揺らす御前の仕草を背中の姿で見ている実にでも苛立ちはわかる

冷静さを
考えをまとめるためか
いつもの癖である首を右に傾げると，小声で何かを指示した

緊張に震えた月から
冷たい風が中で
微かに聞こえたのは。。。。「殺してしまえ」

だが
実は驚きはしなかった
彼女が絶対に相手を許さない女(ひと)だという事を
身をもって知っていたから

かつても
己に躊躇なく刀を抜き
「斬りたいのです」
言いはなったあの姿を覚えている

それは今も変わらない
その証拠に彼女につく侍女達は誰一人として実に。。。。「上杉」
威光に頭を下げていない
使える者たちにまでいきわたっている「怒り」という「行為」

とまらない二人の「因縁」は淡い光の下に。。。。表されている

「楓」と呼ばれた侍女は，守りとして共に来た者の中の「長」のよ

うだ
虎御前と同じぐらいの身の丈。。。けれども「武」を身につけている動きの，所作は大振りな体とは不似合いなほど
主の意志にだけ敏感に「繊細」に動いた
御前の「怒り」の心をよく反映した残忍な細い目で守りに入っていた侍女たちに目配せした

「滅殺」の合図
直結する怒りは
守りの侍女たちの動きを変えた
風さえふくことを戸惑うほどに張りつめた間に
侍女たちの手は着物の袖に秘めた「凶刃」を携える

「祈りは成就されるものにございます」

「楓」は正面の「上杉代理（実）」に微笑んだ
柔らかな声
だがけして頭を下げぬという「不遜」の意志を伝える

「私も祈りを叶えに来たのですから。。。。。その気持ちはわかります」
危険な集団である事は重々承知の中
実は晴景を守って前にたった位置から
さらに虎御前の側に歩を進めた

「運命」から逃げぬ心を晒し
前に進む

震えてはいなかった
「命」をかける覚悟に
同じく「命」をかけて「影トラ」の元に使者へと向かった夫を
その事を
ココで命を失うことになっても。。。。退かぬ位置にいる事を誓っていた

かつて
力無く手放してしまった我が子を
もう手放さない

きつく尖らせた目は市女笠の中で
背中を向けたままの宿敵に言う

「虎御前。。。。。長尾を思う気持ちでココまでいらっしゃった事。。。よくわかりますが。。。ココは退いては頂けないものか？」

覚悟の定まった者の会話は心にしっかりと通じる
片口で笑った「楓」もまた
実の覚悟で緊張を高めた中

揺れる怒りは今一度体の向きを実に向かわせた

「いいや退かぬ」

お互いを結ぶ「糸」
流れた月日
けして「和」に成ることのない宿命

静かに睨む大きな瞳と
笠の内側で燃える瞳

虎御前もまた足を前に進めた
逃げるような
背を見せるような
生半可な覚悟ではないからだ

「私の命で退いてはくれぬか？」

もっと覚悟を。。。
もっと
前に出た虎御前に会わすように
実はさらに危険である間合いに足を進めながら

「虎御前。。。。どうしも貴女にとって必要な「血」であるのならば。。。私が払おう。。。今日は逃げぬ」

実の後ろ「品」達も身構える
光育もまた飛び出す用意をする

真上に登った月の下

覚悟の二人は引き返さぬ「円」の中で
間合いの中で
後一歩の時が今，過ぎる

「美しい」

馬一頭に従者として「中西」を連れた上杉定実はやっと登った月の
光で
春日山の方を見た

警戒のためにつけられた篝火により
城が眠れぬ恐れの中にいる事がよくわかった
だが
その火が揺れる姿はどこか幻想的で
危険を面前に向かえている城というよりは月の下に初めて姿を現し
た幻のようにも見えたのだ

「姫は実城についた頃かな」

二人だけの行軍
与力程度が口をきけるような身分ではなかったが
中西は主の心中を察して答えた

「大丈夫でありしょう。。。城には直江様もおられます」
「うむ」

今まで真っ暗な一本道だったが
月が出たおかげでだいぶんと心が安らいだ。。。。
それで定実は聞いた

「今日。。。色々との「影トラ殿」の事を聞いた。。。光育にの。。。中西会うた（おうた）事があるか？」
「いいえ，ワシはお会いした事ございません」

粗末な着物
壁の耳
障子の耳
そして市井の耳と腹の口という闇の仕事を請け負う「中西」ではあったが礼儀は正しかった

「では。。。。「戦」は見たか？。。。。いや見たであろう。。。それを教えてくれぬか？」

府内にあった上杉の屋形は小高い丘の上にある
そこからは「影トラの火」は見えたが
今，平地のココでは見えない
見えない火を探す目を細めながら聞く

「恐れてはおらぬ」

中西は頭巾に隠した顔を伏せて沈黙を守っていた
まだ「影トラ軍」までは長い
「影トラ」の戦を話していいのかを迷っていた

「それを聞いたからとて逃げはしない。。。ワシは退かぬ」

自分が恐れを持っているのではと思った定実は中西に念を押した
「そのような事。。。思うておりません」
返事は忠義を現していたが
実際には苛烈なる戦に対して定実が「恐れ」を持ってしまうのでは。。。という不安があった
その心を見抜かれた言葉に
主の心を「安い方に」読んだと中西は気まずくなりながらも
答えた

「影トラ様の「戦」は。。。。早き火のような「戦」にございます」
「火となな」

「はい。。。「戦」という事に入るのに隙のない方。。。そう見受けました」
「ほう」

定実は髭をさすった
「それは。。。。為景の「戦」に似ているか?」
「親方様。。。。それは」

「似ておらぬか?」

中西は答えあぐねた
そんな風にくらべた事はなかった「戦」に勝ちへの道を与える仕事が中西の仕事であり領域だ
勝つことが大切ではあるが「将」の見地で考えれば
「影トラ」の「戦」は。。。。為景のものとは。。。何かか違った

気がした
だが
考えとしてまとめられない

「似ていますが。。。。」
「似ておらぬのだな。。。。」

黎明の冷たい風が山から吹き下ろす
「解りかねます。。。。ですが「勝つ」という事においては強い方でございます」
「どのように勝つ？」

「長尾に反した者を決して許さぬという揺るがぬ心をお持ちです」
「揺るがぬ心」

中西は元主の問いに正直に答えた
今までの「戦」
栃尾の合戦
米山の合戦
それ以前の「戦」を

「鬼人の戦」

簡潔な中西の説明の果てに定実は小さく零した
あまりに苛烈な戦いに少なからず驚ろき
天を仰いだ
定実は目の前に迫ってきている「脅威」の戦を初めて知った

為景は破壊の向こうに平安の秩序を持つ越後。。。「政権」を築くという先見があった

事実，そのように「戦」を進めるが故に「人」の心と多く戦い続けた
そうだ
人は生きていくが故に戦う。。。いや競う
だから「戦」はただ相手を下すための手段とはならない
ただ「強い」というだけでは誰も従わない
そこに
先見を持ち
それを行使する言論と力を伴わねば

それはただの「戦好き」であり

「統治者」とはほど遠い。。。。「破壊者」だ

だが
定実は光育言葉を思いだした

「御仏に選ばれし方」

御仏の世から「何を」選べば。。。「影トラ」になるのか
白い息を吐き
首をおろし
「中西。。。「影トラ殿」は戦の時どんな顔をしている？」

「ワシは。。」
「会うた（おうた）事はない。。。。だが見たことはあろう」

影である中西が面と向かって「主」に会う事がなくても
影としてみ「見る」事は出来る
それも「影」の勤めであるから

「笑っている。。。ようにも見受けられます」

中西は隠さず答えた
笑う?
定実は返事に定実は苦笑いした

「為景もよう笑ったではないか?」

中西は手綱を曳く姿で決して無礼に当たらぬよう定実の顔を見る事はないが
何度か首を傾げて

「確かに親方様も「戦」にさいして,よう笑われましたが。。。。影トラ様の笑いは。。。何か違うのです」
「違う?」
「はい。。。声は出さず。。。静かに」

「静かに。。。か」

「静かに口元だけで」

定実は手綱を突いて合図した
「ようわかった。。。」と

道筋は朝を向かえるために一段と寒い風を吹かせ始めていた
中西にわかった。。。と
答えたが

わかった事は「鬼人」なのか「鬼神」なのかという局の結論だけだった

「やはり会うしかないな。。。。鬼なのか?仏なのか?」
そういうと
もう一度春日山を見た

「姫よ。。。ワシも命を賭けねばならぬようじゃ」

そういうと脇差しに置いた手に力を込め
まだ暗い闇の道を進んだ

その３８　月と星　（７）（後書き）

新作。。。。。

ちゃ～～すコンニチワ～～ヒボシです

なんかめっちゃ久しぶりの後書きですが。。。。なかなか進行の遅い展開ですいません
この章とかはいずれ
もっとコンパクトにしてしまいそうですねぇ
突かれた日々が続いた９月があけたので
そういう作業ともどもがんばっていこうと思ってます！！！

そんなヒボシ。。。。
ホントはカイビョウヲトラが終わるまてせは新作は書かないと。。。。
決めていたのに。。
つい。。。。
つい。。。。
新しい作品書いちゃいました（爆死）

忙しい忙しいって言っておきながらすいません
でも
こういうのってインスピレーションだし
刺激をうけた時にしか
ストーリーがうかばないじゃないですか！！！

それを受けたんです！！！
ジャンル戦記で！！！

新作
「艦魂物語，魂の軌跡～こんごう～」です！！
この作品の注目点は「艦魂」という船に宿る魂というものです
魂と人との物語
ですが
現代風です！！！
艦魂という存在を使った先生達の中にヒボシも参戦！！！
周りが若い先生ばっかでちょっと恥ずかしい中年ヒボシですが
がんばっていこうと思いますのでよろしかったらそちらも応援して
くださいませ！！！

報告でした

それではまた後書きでお会いしましょ～～～

その３８　月と星　（８）

「しんえん来たり」

乱の瞳は光を宿したまま体をヒラリと返す
虎御前の手は早かった
左にて刀を携えていた侍女の方に向くなり柄に手を掛けた

風の隙間をピタリと合わせるように
無駄のない動きと共に
舞うように衣は波打つ

時はゆるりと周り

実は目を閉じた
これ宿命
これこそ宿命と

那由他（なゆた）の時をへてもきっと交わらぬ二人の業。。。遙かな想いと願い
それを叶えるために

御前は断ち切るために
実は終わらせるために

「南無三」

手を前で祈りの形に合わせた実の首に
届くべき斬激は

長い一瞬をへても振ることはなかった

代わりに瞼のウラにあった月の光は消え。。。。闇が覆っている事
に気がついた
静かに開けた目の前にあったのは

実は自分の前の影
顔に驚いた

「晴景。。。。。」

実を覆うように前に立った姿
目を閉じ
実の体の全てを守る両の腕
止まった時の中でそれが「凶刃」から自分を守るためになされれた
事と気がつく

「いや。。。。やぁ。。。。。」

実の目は呆然とした
守る。。。。
絶対に「我が子」を守る。。。。

その心でココに走ってきたのに
何がために
何がこの命を奪うか？

最後の祈りは「怨念強き」虎御前に勝利を与え
自らの前で。。。。。この子の死まで見なくてはならない。。。。。

「晴か。。。。弥六郎！！！」

首に手を回し揺さぶる
「いやぁぁぁぁ！！！何故私の命を。。。。おとりなりませんか！！！何故！！この子の命を！！。。。。お願いこの子の代わりに。。。私を殺して。。。。。」

「そのような事。。。お言いにならないで下さい」

それは
目を閉じていた晴景の声だった
きつく結んだ瞳の奥に光る涙を隠したまま
「貴女がワシの前から消えてしまうなど。。。。そんな事は。。。。」

「あっ。。。。ぁぁ弥六郎。。。。」
しがみつく実の前
晴景は母の体を支えてしっかりと立った

「弥六郎。。。。」

実は立ち上がった晴景の後ろにもう一つの影がある事に気がついた
その男の手は
柄を握った御前の手を抑えている
同じように全ての侍女たちの周りに「侍」達が詰めている
何が起こっているのかを理解出来ない実の前

虎御前の前を遮った男が声を挙げる

「虎御前様!!長尾守護代家を想い，守護代様お諫めのための「自刃」相成りません!!」

ざわつく侍女たちの口から
男の名前が漏れ聞こえる

「芝段蔵（しばだんぞう）。。。。」

忍びの女たちにとってその名は脅威か
みな体の動きを硬くする

長尾家筆頭家老「直江」に使える「軒猿」の中においてその名を知らぬ者はいない

凍り付いた場の中，段蔵は周りに睨みを効かせながら続けた

「虎御前様「自刃」と成りますれば。。。「影トラ様」もまた果てられるご覚悟にてココは思いとどまってくださいませ」

段蔵の手に抑えられた柄頭はピクリとも動かない
その上鍛えあげられた男である段蔵には一部の隙もない

周りを囲む「与板衆五十騎」の男達もまた「侍」であり「忍」だ
虎御前の目は段蔵の胸の位置を睨んだまま動かない
標的のあった場所に視線を残したまま。。。揺らぐことがない
ただ
静かな呼吸が聞こえる

「虎御前様。。。。。どうか。。。平に」

御前の隣に配している「楓」は段蔵の脇に小太刀を向けたまま固まっている
額をすべる汗の中
少しの笑みと
小さな声で

「ご下知を」と

彼女たちの覚悟は決まっている
このまま戦っても討ち取れるのは「段蔵」だけかも知れない
それでも彼女は御前の願いに殉ずる事を示したのだ

対峙するお互いの間に決死の息の音だけが聞こえる

「もは。。。。よいわ」

ため込んでいた息を深く吐き出すと虎御前は睨み続けた相手から顔をそらした
そのまま背を反らせて月に顔をあげ

手を刀から離した後
無造作に手を左右に振り
気が抜けたようにその場に座った

それを合図に侍女たちもまた凶刃を袖に戻し座った
共に顔を下げ「抵抗」はなかった

静寂の「戦」は終わった

侍女たちの警戒を緩めず段蔵だけはそのまま後ろに控えた
「御前様の深きご配慮。。。。「影トラ様」にも伝わりましょう」と
残念とも無念とも，どちらにもとれぬ顔のまま御前は沈黙した
ただ
遠くなってしまった獲物だけを見つめ続けた
間を割った段蔵に代わり光育が進み
御前の真ん前に座ると言った

「御仏に殺生を願われたわけではありますまいて」

御前は鋭い目の中に何も写さず首を傾げて見せた
最早返事はなかった

「戦を止めに参りました」

評定の場に移った実は息を整えた静かな声で晴景に告げた
部屋には二人しかいなかった

晴景の配下「近習」はみな彼の命令により出払っていた
その事が晴景の「死」への覚悟を如実に現してもいた
「品」だけ襖の横。。。廊下に守りとして残り
後の者は大きく部屋を取り巻くように守りについていた

下座にある晴景は首を振った

「もう覚悟を決めている事です。。。。この首がなければ「乱」は収まりませぬ」
「いいえ。。。「戦」は止まります。。先ほども申したように。。」
言葉を遮るように晴景は手をあげた

「どうか。。。屋敷にお戻り下さい。。。後の事はワシに任せてください。。決して上杉様に累が及ぶ事無きよう致します故」

「いいえ。。。帰りません。。。。「死」しても帰りません」
「代理様！！」

実は立ち上がった
もう何も自分を止めておける鎖など無かった
どうしても。。。今まで越えられなかった
幼い頃から

いつも「御簾」に。。。。たった一枚の御簾という区切りの向こう
でしか会うことのできなかった息子に

今
自分の足でそれを越えんが為に
御座を立ち放った

「赤心に区切りなどありません」

歩を進めるたびに己を縛り付けていた物を捨てた

笠を捨て
顔を現し

今日までの日々
己の心まで区切っていた御簾をついに越えた

「これ以上の「戦」。。。私が許しません」

月明かりに照らされた。。。。母の顔には涙が
晴景の顔は

「貴方が死ぬのならば。。。。私も共に参ります」

目の前
それは憶えのある「扇」
美しい指
整った眉

悲しみの目
歪む視界の中で問うた
「何故。。。ですか。。。。」
蘇る思い出の中，晴景は声をつまらせながら頭を下げた
男の肩は震えている
その肩を実は覆うように抱いた
「同じ想いを。。。貴方に同じ想いをさせてきた私を許して欲しいからです」
抑え続けていた二人
「長尾」のため「上杉」のために
自らの生きる意味を捨ててしまっていた「実」
堪えていた感情
「長尾為景の直流」という名のための戦い
誰にも頼れぬ守護代
孤独に苛まれ押しつぶされていた「心」の主。。。。「晴景」
晴景はそのまま伏した
伏して声を殺して涙した
実も泣いた
「母はココにおります。。。ただただ貴方を抱きしめたくて。。。ココまでやって参りました」
長く言うことのできなかった愛を。。。言葉を

遠かった苦難の日々は吹き飛ばされた
廊下に座した品も泣いていた

「お頼みします。。。死ぬなどと言わないで。。。」
何度も晴景の背中をさすり
叩いた

それは四十年をへた母子の抱擁だった
触れる事のできなかった
我が子の痩せた肩を何度もさする
この肩で背負ってきたものを。。。共に受け止めるために

「母も共に戦ってあげます。。。だから「戦」を止めましょう」

「わかりました。。。。」

下げた頭の下
見せれぬ涙のまま晴景は全てを母に託した
小さな声で初めてそう呼んで

「母上に。。。すべての事お頼みいたします」

春日山の二つの命は散る事なく止められた
それが御仏の示した「解決への糸」

女達がつなげた「糸」だった
紡がれた「救い」は。。。。。。最後の「戦」に繋がれた

「影トラ」の前に

その３８　月と星　（９）

春日山城，評定所には数少なくとはいえ
一応に鎧直垂（よろいひれたれ）に身を包んだ諸将が集められていた

丑三を越え
朝はもう一息のところにきている
ココに残った将達は覚悟を決めた者ばかりだった
「晴景」という守護代に最後まで従った者たちは「主」の決断を待っていた

正面に座る直江は静かに伏せ
他の者達は「ついに来てしまった」最後の「戦」への声を待っている

朝が近づくに連れて冷え込んだ間に
冷たい風と一緒に「晴景」は入った
誰もが伏せた評定の場に。。。。。

「良うしてくれた。。。。各々」

伏せられた諸将の頭（かしら）にむかいかけられた声は。。。。以外な程に柔らかだった
みな
困惑のまま伏している
あの混乱の三日
信じられないほどに尖った「声」で「戦」を辞さぬと叫んだ。。。

あの声とは違いすぎていた
そんな周りの困惑を察したように晴景は続けた

「面を上げよ。。。忠臣達」

「守護代様。。。。。」

顔を上げた者たちの中
一人，二人と驚き零してしまった言葉の前
晴景は普段の着物姿のまま鎮座していた

「戦はしない。。。。和睦を致す」

思い詰めていた家臣達の前どこまでも晴景の声は静かだ
顔から険がとれ
だが
目の前に迫った「妹」を脅威と不抜けたわけでもない
落ち着きのある
かつてこの「越後」を父から「任されたとき」のように静かな中に
「信念」を持ち

「越後」に尽くすことを誓うと宣じた
あの時に似ていた

他の諸将には「落ち着きを取り戻した」。。。。
そういう風にしかみえなくとも。。。。
直江には全てが理解できた

「戦」は。。。。「戦」こそが今や父との約束を違える道に進んではまう「過ち」である事を。。。晴景は理解したのだ

「直江。。。オマエ使者として使わす」

そういうと「和睦」の内訳を簡単に話した

「上杉守護」による仲裁
「これは，一つ長尾を分断しいたずらに「越後」に戦火を起こすことまかり成らず」
と

誰もが
安堵の息と
理性的な和睦である事に納得し張りつめていた肩を落とした
この三日の日々は何日。。。いや何年にも匹敵する「緊張という戦い」だったからだ
落とした肩と
疲れた顔に少しのゆるみを晴景はゆっくりと見回した

「みな良うしてくれた。。。ココに残りし忠臣達の事はワシの「責」をもって良しとす」

そういうと
親書を前に出した

「これにて和睦致す」

直江は深く頭を下げた
これは決別
共に「越後」にな尽くす。。。そう近い
共に戦ってきた二人の最後の時に
涙を堪えた目をあげて告げた

「晴景様。。。我が主君。。。最後まで越後に尽くされたこと。。。
まことに。。」

声がつまる
そんな直江の肩を晴景が叩く

「これよりもまた。。。さらに。。。オマエに託す」
「はっ。。。。」

直江は胸に抱いた親書に晴景最後の「命」を預かった

広漠とした草野に寂しく。。。細く続く道
海からの風と，山からの風が混じり合い深まる秋の中にあって「気
味の悪い暖かさ」に変わった風で定実は夜を眠らぬ者たちが「この
日」に跋扈している事を確信する

語らぬ風と
語る風
その中を
無言のまま。。。。心に渦巻く不安を思って進む

春日山の総構えをこえてまっすぐ進む道は，海に向かっている
港に近づくこの道
普段の早暁であるなら人の姿が見えてもいい頃だが
今日は。。。。

いや
柿崎に「恐怖」が現れた時から誰一人として通った者はなかったのだろう
少しの足跡も見えないだけで。。。
忘れ去られたように寂しい道程に変わっている

定実は少しを吐く
やはり寒いのか白く曇る
手を摺り合わせながら
後少し歩けば目指していた者たちを望む事のできる場所を見つめる

それは
この道を介さず
多く軍団を横一文字に向かってくる「脅威」

その頭とは

空前の「戦」を指揮する「鬼神」？または「鬼人」。。。。

「春日山はどうなったことかな？」

潮の風を頬に受けながら
少しばかり解れた白髪の向こう。。。。後の春日山に目を向けて問うた

今まで
いや
為景に負け
「戦」から遠ざかって以来，離れたことのなかった山をみながら中西に尋ねた

「ことが解決しているのであれば。。。。直江様が「和睦の書」を持って走ってこられるハズですが。。。。」

中西の回答は段取りを告げる
手はずは整っていると

答えはそれだけで十分だった
定実がココまで歩いた時間が解決の時間だったのだから
春日山の中身で何があったとしても
今やこの距離を縮める術はない。。。。。

あるのは向かってくる結果と
それに対する答えだけだ。。。。。

「姫が，無事であれば良い。。。。。それだけを願う」

「無事にありましょう。。。総門を出た時に「与板衆」とすれ違いました。。。あれなる者達は「忍」にございます。。。必ず「代理様」を助け良き結果を持って参りましょう」

中西はおよそ忍らしからぬ事をしゃべった自分に
薄汚れた着物の下で苦笑いを浮かべた
徹底した現実主義者である自分が。。。。。「一縷の希望」を語るのは。。。少なからず恥ずかしかったからだ

だが。。。。

「希望」がなければ。。。。。

今日。。。。
この希望がつながらなければ「春日山」は滅びる
すり切れそうな「糸」をつなげてきた「女達」の希望
それを強く寄り合わせる「男達」の手の中。。。。

最後の仕上げに繋がる道を行く

「ワシは。。。。信じております何も心配などしておりません」

中西は
直江に対する「忠誠心」を己のおかれた現実
そして迎える「真実」と位置づけ
元主に強い口調で続けた

「必ず「和」はなされます。。。守護様のお力を持って「乱」も終わります」

向かってくる風は勢いを増していた
まだ。。。生暖かい潮の香りに微かな「火」の匂いが混じる

「近いな。。。。」

定実は心配で見つめていた春日山から
正面に顔を戻した
「音」が聞こえる。。。。。

多数の足が大地を踏みならす「音」
中西は馬を止めた
まだ目の前にいなくとも大軍の「音」は聞こえてきている
もう
遠くない

「しばしココに。。。。見て参ります」
「いや」

主の身を案じて偵察に出ようとした中西を定実は止めた

「このまま。。。。このまま行こう」
「しかし。。。まだ春日山からは。。。。」

定実は笑った出来るだけ柔らかく

「どうしても会わねば成らぬ。。。。隠れて出方を伺うなど。。。。無意味であろう」

心にはもう一つの希望がある
だから駆け引きはせず。。。推し量り定実は思っていた
もし
「春日山の説得」が失敗しているのなら。。。それは「実」の死であるかもしれないし
あるいは「晴景」の死なのかもしれない
ならば
戻れる所などもはやない，己の「命」を惜しむ事もなくなったという事になる

だが
それでも「乱」を止めるとするのならば

「乱」の根本であったとも言える「本人」に隠れる事なく会うこと

「影トラ」

これが為景を越える「器」なのか？
それともただの「鬼」なのか
それを命をとしてもこの目で見なくてはならないという使命

「越後」という国の行く末を見届ける義務

そして
出会った者の「意志」の向こうに何があるかを知ること

その向こうに。。。。あるいはの「希望」かを

「中西。。。。このままワシを「影トラ殿」の前へ」

そういうと腰に差していた刀を大小ともはずした
「オマエに預ける」
困惑

中西は首をふり
その場に控えた

「できません。。。そのような事はワシの一存で出来る事ではありません」
手渡そうとされる刀に手が出せない

「いや。。。オマエには最後まで付き合って貰うぞ。。。。覚悟いたせ」
目に宿る心はきつく中西を見据え震える手に刀を渡した

「さあ。。。参るぞ」

黎明の刻
見渡すどの陣営にも篝火は煌々と輝いている

生暖かい風に手を伸ばし指を何度も動かし絡めてみる
この感覚は。。。

「申し上げます!!これよれ台地をこえれば春日山までは目と鼻の先に!!」
「哨戒はいらない。。。そのまま進め」

私の前
春日山の姿は十分に見える場所に入っていた
真っ黒に染まっていた空は
月の顔に合わせ紫にかわり。。。。。いずれ青色に変わる。。。。
ほんの少しの間の時間が近づいている
闇が去り空は。。。

急ぎ足で流れる雲たちの間に。。。。今日はいったい。。。

曇る視界の中

必ず晴れるであろう空
なのに
私の心は間逆に進んでいる
闇から「闇」へ
渦巻いているのは怒りと。。。。。失望

何故。。。。兄上はココまできた私に何も答えてくださらぬ。。。。
何故。。。。母上は同族の血を欲する事をよしとする
何故。。。。私は。。。私の中に「鬼」を持つ

そんなものを産みだし続けた「長尾」という一族に対する「怒り」

私は兜を取った
髪を揺らしゆっくりと馬の歩を進ませる
片手でもっていた兜を投げ落とし
願った

斥候てもいるのならば。。。この眉間を矢で射るがいいと
もはや「とどまらぬ戦」はココまでやってきたのだあとは「御仏」
の意志を知りそれを見いだす事だけだ。。。。

風が髪を揺らす
沈んだ目が一点を見つめて。。。。何かがいる事に気がつく

「誰だ。。。。」

私は馬をさらに前に進めた

「それが私の運命を告げに来る」。。。。。。そうだと直感して

その３８　月と星　（１０）

滑りを含む熱の風の向こうに姿を現した「影トラ軍」
広がる原野に横一文字整然と配備された篝火に定実は唸った

「すばらしい」

行軍がココまで行き届いた列を成しているのは
指揮者の並々ならぬ「力」を現している
それを一目見た事で気が付けた事に驚きと。。。。素直な感想をもらした
風は冷たい朝が近づくほんの少し前の這うような寒さの中で
軍団の足音は大地を叩き
熱く揺れている

定実は額に手をあてた
憶えのある威容
かつて
春日山に自らが立てこもり「為景」と戦った
あの日の明け方
目が覚めた時には総構えから山裾に至るまで整然と並んだ「鬼の軍団」がいた

あの時と同じだ
冷たい中にある風さえもが軍団の指揮の中にある
走る大地の鼓動さえも鬼の手の中にある

同じ景色
自分の記憶を確かめるように額から鼻柱までをゆっくりと撫でてみた

「まさに為景の軍である」

多くの長柄を前に圧巻の行軍をする軍団
これがこのまま春日山にぶつかれば。。。。あるいわ
など
すでに結果も見えたもの

耐えられる訳がない
ココまで「戦」という熱を封じ込めた軍団
それが発露された時に起こる「力」の前に春日山が赤く燃えるのが
目に見える

この軍団はそれほどに盛況であり
風の動きにも
雨の動きにも
けして歩幅を変えることなく突き進むであろう

勝てるわけがない
落胆を越えた諦め
定実は目を細めて迫る軍団を見つめた

「ココでお待ちください。。。ワシが繋ぎをつけましょう」

小高い丘にたった定実の従者として付き添った中西は慌てた様子で

言った
手綱から手を離し主の前に座して

「このまま行くのはよろしくありません」

覇気強気軍団は目の前に見える「障害」に容赦はしない
中西はそれを肌で感じていた，故の忠告にもにた進言だった
だが
遠くを見つめていた定実の態度は変わらなかった

「いや。。。。このまま行こう」
「しかし」

馬の
手綱を自らの手で引き，制止の手を出す中西に告げた

「中西。。。既に影トラ殿の目にワシは映っておるであろう」

主の顔を直接見るなど身分違いである中西だっが
この時は定実の顔を。。。。少しだけ見た
定実の目は真っ直ぐを見つめている

真っ直ぐ。。。。。

平野の
行軍の真ん中を行く者を
一頭の馬に髪をなびかせた「鬼神」

「あれにみえるが影トラ殿であろう」
少しだけ首を伏し中西に聞いた
「おそらく。。。。」
ただの一騎で進む将の姿
それに向かい定実はゆっくり前に出た
「止まれ」
哨戒はするなと言っても横一面に並んだ軍団が注意を怠る訳にはいかない
私の目線の前
遙か向こうに現れた「影」に
馬廻りの伝令が現れた
空が薄墨の幕を上げ始め，代わりに紫の敷布が現れた時だ
秋山史郎の兜には秋穂の露がびっしりとついていた
それほどにこの行軍は「慎重」なもので合ったことわ現している
「影トラ様！前方に」

私の馬の前に座し進言する言葉を避けた
心はもうきまっている
「止まれ！」

誰の意見にも揺るがぬ意気でココにきた。。。今更「慎重論」など
聞く耳など持てない
ついに「兄」のまたは春日山の。。。。何らかの意志がココまでや
ってきた事に手を挙げた

「全軍止まれ！！」

私は怒りに満ちた顔をしているに違いない
見下ろす秋山に命じた

「速やかに軍団を止めよ！」

言葉少なく自分の意志を目に宿らせて命じた
秋山は良く私の心を理解していた
「はっ！」
すぐさま馬を駆ると，私の後ろに構えていた馬廻り達が各軍団に向
け走って行く

鳴り響いていた足音
大地を打ち叩き進んできた者達の音は少しずつとまり
平野を埋めていた鳴り物の掠れる音も静まる中
今一度，私の元に戻った秋山が聞いた

「前方の者！ワシが見て参りましょう！」
だが
私は許さなかった

「良い。。。。アレは私に用があるのだ」

直感
アレこそが私の「運命（さだめ）」
これより先の道を示す者。。。。。
私の言葉に抵抗の顔色を見せた秋山に重ねて告げた

「誰も前に出るに！！」

そういうと馬を走らせた
今こそ私の前に置かれた「運命」と向かい合おうではないか。。。。
少しの高揚感とともに私は前へ
前へ向かった

定実の前
軍団の周りに馬廻りの者たちが速やかに動作を起こして行く

「止まれ！！」
「止まれ！！」

伝令達の怒声に原野を踏みならしてきた部隊は動きを止めて行く
揺れる笹の穂達が風を止めるがごとく
小高い丘から見える図としてこれもまた「驚愕」のものだった

五千の兵たちは座ることはなく
「構え」の状態のまま見る間に行軍を止めた

「美しい。。。。」

馬さえ恐れを成し首を震わした「音」が鳴りやむ中を進む
ただ感心の言葉を漏らしながら
定実は進む

「中西。。。。もうココまでで良い。。。主の元に戻れ」

ココまでの道程を徒もした「忍」に定実は優しく微笑んだ
「しかし。。。。」
「もう良い。。。。後はワシが影トラ殿と会うだけだ」

優しい声と顔
うらはらに覚悟を語る言葉に中西は戸惑った
影トラは苛烈な人物だ。。。。今更「守護」が出張ったところでそれを「許すか？」という不安

そんな不安を今，吐露しても事は戻らぬ所まで来ている事に
春日山の方角をかえりみた

。。。。。

「守護様！！暫しお待ち下さい！！！」

かまわず前に進む定実の手から手綱を奪うと中西は控えて続けた

「間に合いました。。。。。」

取られた手綱と中西の視線を定実は追う
目わ細め煙る秋の霧と，紫に変わる空の下
草を割り馬の蹄の音が高く響いてきた
今まで歩いてきた道に。。。。影が揺れる

「直江か？」

中西は緊張に張りつめていた己の胸から深い息を吹き出した
らしくない緊張を纏ったと，自分に対して苦笑いを浮かべながらも
元主に対しても義理を通せたことに
心に少しのゆとりを持って

「直江様です。。。。間に合いました。。。春日山は守られました」

走る影
直江はあっという間に定実の横に馬を着けた

「間に合いました。。。」

すぐさま馬を下りた直江は「守護上杉」に伏して挨拶をした
「守護代長尾晴景様は守護上杉様によるご仲裁に伏して従います。。。。どうぞ！！」
手に握られた「和睦」の書
休むことなく走り続けてきた男の背中には湯気が立ち上っていた

「直江。。。。良うした」

この夜
長い一夜を
長尾の多くの者達が戦った

最初はすり切れてしまう程に「切なく」「儚い」糸は女達の手によって紡ぎ出され
今最後の「希望」に託された
各々の希望と紙一重の「野心」を刹那に交わしココまでやってきた

意気を切らしたまま深く伏せた直江に定実は礼も込めてもう一度言った

「まこと大儀であった」

そういうと一番に気に掛けていた事を聞いた

「直江。。。我が姫はどうなった？」

吹き出す汗の顔のまま直江は守護に対して落ち着いた声で

「代理様にありまして。。。守護代様をお救い下さいました。。。
まことにありがたきこと」
「そうか。。。」

定実はやっと振り返った
長い道のり何度も「妻」の安否を気遣った
紫色に変わった空の下に少ない篝火と共に見える春日山
その上
さらに上を

あけの明星の光を受け，白く輝く月と星

「ようやっと。。。月は星に会えたか。。。。良かった」

妻，実が想いを成就させた事に安堵した
同時
涙がこぼれた

日陰者。。。。そんな守護ではあったが
天女舞う夜の世界を照らす者
我が月である妻が見失ってしまった「星」を探す事が出来たことを
心から祝福した
と
同時に迷いが吹っ切れた

「ではワシも最後の仕事に参ろう」

行く道を定めた守護の顔は厳しいものではなかった
最後
これを成さねば紡がれた糸は無駄になってしまう

前を進む定実に直江も従った
目の前に制止した軍団
その前を悠々と進み出る影トラに向かい歩を進めた

その３９　喜平次（前書き）

すいません～～
新作の一章が終わるまで掛かりきりでこちらを進める事が出来ませんでした
「カイビョウヲトラ」は長い作品ですから
さらに良い物にしあげられるよう試行錯誤しております
がんばりますのでこれからもよろしくお願いします～～
ヒボシ

その３９　喜平次

向かい合う
そういうのには乏し手人影と大軍勢の軍団の間
二つの影が歩み寄り始めた
地表を這う
足音に叩かれた熱の風と
山から下りた，冷たい風の交わる先に。。。

方や。。。越後では最早知らぬ者のおらぬ将となった女「影トラ」

方や。。。「越後様」と呼ばれる守護，上杉定実

暗闇の寄るが終わり
少しずつ開ける幕の向こうに二人の顔が見え始めた
お互い
名前こそ知った者であったが
向かい合うのは初めての事

定実は乱れたほつれ髪を直し
影トラは真っ直ぐを見据えたまま進む

少ない風の中，髪を揺らし微動だにしない影トラの姿には畏怖を覚えながら
定実はつぶやいた

「鬼か？人か？」

未知なる存在
「猛将」一本であれは今までも対峙した事はある
だが
目の前。。。今ココに姿を現そうとしている者は「女」である
確かに顔は女なのだ
開け始めた夜の月の下に
白い肌に。。。鋭い中にありながらも美麗を感じさせる瞳

だからこそ「畏れ」が伝播したかもしれない
美しいが故の恐怖。。。。

この世に。。。。これほどの軍勢の前をあるく「女」は「夜叉」か。
。「女神」か？

一方
停止した「影トラ軍」の中
前線に馬を並べていた物たちの中，本庄実乃は直江の姿と。。。。
その前を歩く「貴人」の姿を確認していた

「越後様。。。。」

実乃は直江の選択
春日山の「賭け」に目をつむった
最早ココまで来てしまった「騒ぎ」を収拾できる者がいるとするなら
ば
名ばかりとはいえ朝廷。。。。幕府より信任された長である「守護」

しかあり得ないが
直江を背後に歩かせ前に向かってくる「その人」の姿はあまりに久しぶりだ

誰もが知っていながら
姿に畏敬はなく。。。
名ばかりの主となった者に。。。。この大役はこなせるのかと?

そういう思いで眉間の皺をさすったが
ココで争い
よもや影トラの母「虎御前」が死すなどという事になれば。。。

苛烈な自分の主は自らの手で首を切ってしまう
そう考えてしまうほどココまでの戦いで意識を精錬させた影トラの姿

「誰も不作法に動くでない」

厳しい指示を馬廻りに伝え
前を行く「影トラ」の後ろに駆けると，素直に相手の「名」を伝えた

「馬上の方。。。上杉守護様にあらせられます」

影トラの目はゆっくりと反らすことなく相手を見つめながら答えた
「そうか。。。」

口調は先刻より幾分落ち着いた感じだが
すごみ。。。
というか

纏っている「畏れ」は今まで以上のものだった
それは実乃とともに数歩後に付き従う馬廻りの者たちにも十分伝わるほどだった

二人の間は確実につまり
お互いのも確認できる位置に馬の足をとめた

「控えなされ!!上杉守護様!!越後様にあられますぞ!!」

守護の手前に走ったのは「直江」だった
かつて
自分に「戦」とその中身を教示した男が。。。今，春日山の使者として目の前に座る姿を影トラがどう見ているのか?
馬廻りより遠く
守りの兵としてつく「ジン」は目を離すことが出来なかった

今の
トラの心を見ることができない。。。。
ジンは恐れながらも良い結果だけを願い続けた

向上の元
トラはすぐに馬から下りた
唇は静かに笑い。。。。言う
「来たれ。。。我が運命(さだめ)」

そういうと目の前にそのまま座り伏した

「長尾影トラにございます！！」

定実は馬上から見渡した
台地の上
影トラは座したがその向こうに居並ぶ原野を埋めた軍勢
乱れぬ視線に大きく息を吹いた

「長尾「喜平次」景虎（ながおきへいじかげとら）。。面あげい！！」

静まりかえった両陣営の中に走った名前に実乃に，直江。。。並ぶ
諸氏達は固まった
誰も動けない
ジンは「何が」起こったのかがわからない
というか兵卒達にはコレが「何を意味しているか」がわからない

定実の前に使者として座した直江は思わず主に振り返ってしまった

「越後様。。。」

定実の顔は厳しい表情のまま直江に反論を許さない
愕然とする諸氏の前
顔を上げたトラは平然と聞いた

「それが運命（さだめ）にございますか？」

私は伏したまま
目を閉じたまま
私の前にたった「越後様」に聞き返した

直江や実乃の驚いた声が耳に入る

私は下げた頭の中で少しだけ笑っていた
これが運命。。。。
確かにと。。。。

「そうじゃ。。。そなたの後ろに並ぶもの達のためにも。。。そうであるべきじゃ」

ゆっくりと顔を上げた
この「運命」を私に告げにきた方を見るために
月明かりの下で射越の時間で見た守護様の顔は。。老齢の白い髪を蓄えた方
これほど殺伐とした中にあって
落ち着きのある「優しい瞳」をしているように見えた

怖さは微塵もない
だが
私を見据える視線に覚悟を見る事が出来た

そして私にも覚悟は出来ていた
「喜平次」と告げた
そこまで言うのだ
この「戦」の主である私を認めた上での「責務」を与えて下さった
と感じた

そこまでの事を私もしてきたのだから
これは正しき裁定であると目が覚めた
私は高くゆっくりと顔をさらに上にあげた
直江は真っ直ぐ守護様の顔と私の顔を見ていた

「喜平次」。。。。その名は「長尾を継ぐ男子」に有るべき名
今その名がただの「影トラ」だった私に付与された
その意味は

「家督相続者の証」

「貴殿は今日より「長尾晴景」殿の養子となり。。。この地を治める守護代を継ぐ者となった」
「はっ」

私はココに来る間に
どんな裁きが下っても受け入れるつもりでいた
この重き長い道を示す答えが出たことを。。。。

受け入れると

守護様は直江に書状を渡し「読め」と告げた
月明かりと明星の目覚めを彷徨う時の中

兄，長尾晴景の親書が読み上げられた
周りにどんなざわめきが起こったとしても。。。。。

それこそが
驚くほどの「運命」なり

「長尾景虎（ながおかげとら（影トラ））を我が子とし守護代と任ず」

直江の雄々しき声の後
上杉守護定実様も声高く諸氏に命じた

「守護代殿の意向をふまえ，諸氏共々この命（命令）に従う事がそなたらの忠義である！！」

並ぶ全軍に通達された命に
風がとまる
少しの沈黙の後

全ての旗が高く掲げられた

私は立ち上がり
私の後に従った者達を見回した

「命は下った!!今日より「長尾景虎」がこの越後の守護代である!!みな心せよ!!」

胸打つ鼓動に鳴り物の音が同期する
万感の声援と
鬨の声の中

私は守護代となった

それを「運命」と受け入れた

その４０　開城　（１）

鳴り物を鳴らし歓喜の声を挙げる全軍の前私は春日山に向かった
地を進み続けた黒い軍団を朝日が照らし始め
厳めしい顔であった者達の警戒を解いた

争乱の中にあったこの数ヶ月の間の日々は
白い空に消えて行く
並ぶ者達すべてから殺伐とした諍いの心が闇の向こうに消えて行く
のがわかった

大きな一つの区切りがつけられたことで私の心を騒がせてきた
全ての幻惑的な思いを抑える事ができた
父の事
母の事

兄の事

私は嵐となりてこの地に渦巻いていた「黒き想いの」砂塵を舞上げ
色々な思案により引き起こされた「争い」を摘み取る力を持ちそれ
らを打ち破った

私。。。。
髪が揺れる
朝日が少しずつ目を細めさせる
向かう側
日に照らされ始めた山を見て思った

女である私がよもや「守護代」の地位に昇るなど誰も考え及ばなかった事だったに違いないが
それが
この争いの唯一打開への道であった事を「上杉様」が示してくださったと思うほかない

「これで。。。良かったのか？」

私は自分の左手，数珠をきつく巻き付けていた手を胸に当てた
逸勢続けていた胸の痛みは止まっている
私の中の私が。。。。この結論を「許した」せいなのかもしれない
横に馬を並べる「直江」の顔を見た

「これで。。。。良かったと思っているか？」

だされた結論の前
驚愕の顔の後，沈黙を守り続けた「兄」の直臣である彼に，私は聞いた

ふいの私の質問に直江は顔を上げたまま固まっていたが。。目を落ろすと
馬の背に目線を落としたまま暫しの沈黙をした
彼が思い描いていた「長尾」の作る「越後」の来るべき明日とは違ったのかもしれない
だが

今は，こうなったままに進むことしか出来ない事も彼には解っていたようだ

「これが解決の方法であったと。。。今は信じます」

その顔には
いつものように苦悶に浮かぶ眉間の皺はなく
どこか遠くを見据えたような視線

「そうか。。。。。」

私も彼の見る遠い先を見た。。。。。これより私は「春日山」に入るのだ
かつて父がこの山に「長尾家」を襲った一難から一族を守るために
こもり戦った城であり
後に
上杉様が父に反し戦った城

そして
私が兄と出会い
母と出会い
「越後」の争乱を引き起こしココに治めた場所へ

並ぶ諸将達とともに軍団は華やかな中に整然と前に進む
この景色を今。。。。。兄はどんな顔で見ているのだろう？

「トラ。。。。」

声
張りつめていた心に
懐かしく響く声
私の隣に付いた者「ジン」

慌ててそれわ止めようと走る馬廻りの手を私がとめた

「トラ。。。。大丈夫か？」

馬上から私はゆっくり頷いた
「泣いてる。。。。」
馬の横，手綱に手を伸ばしたジンは私に言った
私は泣いてはいない
目に溜まる涙だけ

「眩しかったんだ」

思い出を振り払うように進もうとする足もとにジンは何も言わず近づいた
「眩しい。。。。」
私の言葉を反芻する

「近くにいてくれ」

縛られていた怒りの枷から解かれた私はジンを呼んだ
「近くにいるよ。。。ずっと。。。。」

手綱を掴んでいた手が私に近づく
強張っていた自分の手をゆっくりと開けて。。。閉じる
痺れていた感覚を思い出すように。。。そのままジンの元に手を下ろした
共に。。。。

私の無言
支えであるジンはその手を握り替えしてくれた

一方，春日山城内は先刻入った早馬で「和睦」が成されたことをみなが知る所に至った

緊迫の続いた城内の様子は一度に雪が溶けるように消え失せ
城壁の至るところで立ち続けていた兵達が座り込んだ
三日前始まった脅威の進軍は「上杉守護」の仲裁によって「越後」に混乱を呼ぶことなく収束したのだ

惣門にいた「水丸」は昇る朝日に照らし出された実城を目を細めながら見つめていた
張りつめていた刻の中では
後ろわ振り返る事は出来なかった
手にしていた弓を落とし
「長尾晴景」が和睦の条件として「隠居」と「守護代の地位」を譲渡した事に少なからず残念な気持ちを残したが

それでも。。。。
今まで共に歩，知恵と知識を惜しみなく与えてくれた主の最後の命（命令）に敬意を払った
「越後」を大乱と狂わすことを良しとせず。。。。

「晴景様。。。。私は最後まで貴方様にお仕えします。。。これからも」

握りしめていた手の力を緩め
春日山の主を降りた「慕うべく方」に新たな誓いを立てた

「長尾影トラ様。。。ご仲裁を受け入れ「戦」は止まりました。。。。」

実城，二の丸屋敷の一室
母，虎御前の侍女「楓」に打たれ，気を失った綾姫は布団の中にて
「和睦」が成ったという報告を聞いたのは
朝が白く周りに光りを与え始めた時。。。。
銀色の結晶が少ないながらも初めて舞い降りた時だった

ぼんやりとした表情のまま目は潤み
「祈りが叶った」事をやっと実感したのは

屋敷の外に響き始めた，兵士たちの明るい声でだった

細い糸。。。。

女達の願いは繋げられ。。。。。叶たことに涙が頬を滑り降りた

「無策」と罵られるような策だった
それでも最後の希望に縋って走った
麻を送り出した後も，母にも負けぬ祈りを捧げてきた
いてもたってもいられない心で侍女の「土岐」と「初」で母を止めるために現場に飛び込んだ

ただの一日の中で綾は自分の生きる刻の全てを使ってしまったぐらいに疲れていた

それでもそれが正解であった事で心は幾分か和らいだ

「出来ることをしましたわ」

祈りを成就させるために
そしてもう一度，夫，政景と出会うために。。。。

「良うございました。。良う頑張られました」
「初」は自分の守りし姫が誇らしかった
夫への思いで走ったが結果的には「長尾」を救うための糸口となり
「越後」を乱から救った事に

歳のせいか

涙もろくなった「初」の目からは降るように涙がこぼれている
その姿に
綾は頷きながら

「よかったわ。。。。ホントに。。。良かった」

背中を打たれた痛みで立ち上がれない綾の隣，「土岐」とその母である侍女「初」は最愛の姫が成した奇跡に共に涙した
三人は手とりあって笑い。。。泣いた

その頃
総構えより城内奥に位置した上杉守護の屋敷にも「守護代様，長尾影トラ様と和睦」の報（報告）が伝えられた
屋敷に詰めていた使用人達の顔から険がとれ
へたり込む侍女たちに女房達の中，男たちの喜びと安堵の笑いが響いていた

「良うございましたな。。。姫様」

惣門開ら向こう
眠る事なく
魂棚に向かい祈りを捧げていた麻の背中に侍女の「宮地」は達成された願いに頬を拭いながらの報告をした

緊迫の一日を徹して，愛する夫のために全てを賭けた「麻」の顔に

は疲労の色が濃くあらわれていたが
振り向いた微笑みは美しく輝いた

「晴景様。。。。。私の心。。。届きましたでありましょうか？」

切迫したあの日々の中
蔑ろにされ続けた守護代妻が最後に信じたのは己の「想い」だった

自分の殻に閉じこもった心を「無策」とはいえ「命」を繋ぐ道へと
飛び込んできた「綾」に打ち破られてやっと気がついた。。。。想い

誰よりも晴景を慕っていた事

「きっと。。。届きましたでありましょう」

宮地は疲れた主の肩に打掛をかけ
二人とも見つめ合った。。。。。

「そう。。。届いたのならば。。。。良いのです」

収まった騒ぎの中
麻は静かに涙した
悲しみの色ばかりで流されていた涙ではなく。。。。喜び故に流さ
れる涙は差し込む朝日に照らされてきらりと輝いた

風雪を呼ぶ風の中
空は果てしなく遠く透き通った青に満たされた
「越後」を破滅に至らそうとした「争い」はココに終わりを告げ
春日山城はその門を大きく開いた

その４０　開城　（２）

山に近づくほどの煌めく雪風の中「長尾景虎」は進んだ
大きく開け放たれた春日山の城門から向こうだれもが頭を垂れ「畏敬の念」の中で彼女の行軍を見守っていた
これより「越後守護代」となる女の姿は
誰の目にも異形であったが
街道に伏した少しのモノ達がチラリと仰ぎ見た顔は「美し」かった

天より降りた
鬼神。。。。そういうにふさわしい
美麗な顔。。。。鋭いながらも長い睫毛を持つ瞳。。。。風に揺れる豊かな黒髪

それは家臣一同が考えた事のない当主の姿でありながら
これより「天下」に名をとどろかす事になる国主の姿だった

「すぐには行かない。。。。しばし上杉様に片寄せさせて頂く」

馬上ゆっくりと前に進む影トラは隣をあるく侍従に小さく伝えた
目の前により大きくなる実城に誰よりも早く登りたかったがその心を旨を抱くようにして堪えた
心はすぐにでも「母」と「兄」の元に向かいたかったハズだが
それでは今日。。。
ココに至るために道を開いて下さった「上杉守護」を蔑ろにする事になってしまう

「兄上からのお呼びが有り次第，登城する」

横に馬を歩かせる「直江実綱」に書状を改めると手渡した
見上げる春日の頂は白く曇っていた
白銀を運ぶ風の下
影トラの髪は緩くこぼれ揺らめいた

「戦」こそ避ける事はできたが
これから「越後国」の権威譲渡と。。。。「守護代」就任をどのように現すかが諸侯達の手前に示される儀式だった

前衛の軍団は総門をくぐったところで行軍を止めた
冷たい風
手を
指を滑らして絡める

「疲れた。。。。」

戦を避けた喜びとは別に
影トラの体には疲れが走り始めていた
それでも道を埋める春日山の住人達から総構えに配されていた兵達の手前。。。自分の疲労を揺れてでも見せる事はしなかったが。。。

股肱の臣である直江は理解していた
手渡された親書を持つと深く頭を下げ

「二刻後を目処に会見を致すよう必ず決めて参ります」
二刻（約四時間）あれば少しは体を休める事が出来る
家臣の計らいに素直に応じた

「頼む」

それだけを下知すると上杉守護宅に陣を立てた

その頃，虎御前は半ば幽閉の身となっていた
とはいえ
北の屋敷にこもったまま動こうとしない御前の周りに直江が与板から呼びつけた精鋭を並べただけの状態で
軟禁やら
牢獄やらという物騒な世界とは遠い状態の中にあった

風雪の舞う渡り廊下を
静かな足取りで白湯と飯の支度を調えてきた侍女は文台に向かい，
姿勢正しく写経を続ける主の耳に
終局を見た「乱」の報告をした

「影トラ様は守護代様からの使者を受け入れ和睦を受け入れられたようです」

守護代晴景と影トラの和睦の報告がやっと御前の耳に届いた瞬間だった
侍女の言葉にも目もくれず
硯に向かい静かに写経をする姿から「怒り」は見受けられなかった
静かな風を取り入れる小さな窓の下で
鋭く尖った目は

結果には微塵の興味もなさそうにつぶやいた

「運命（さだめ）を先延ばしにしても，来るモノか逃れる術などない。。。。
トラは真正面でそれと戦うと決めただけの事であろう」

運命と闘う者

今はまだ虎御前が示そうとするものが何かを見切ることは誰にもできなかった
だが
それは確実に向かってきている事だけは
誰の耳にも届いた

陣取りをした影トラが少しの眠りに入った頃

上杉に片寄せをしていた「麻」は長尾景虎の徒事者達に会っていた

京の都を習った書院の間には冷たい風と少しの花。。。雪が舞い降りて
一難を終わらせたばかりの麻の心にまだ冷たい影がある事を感じさせた

「守護代様のご処遇を。。。。影トラ様はどうお考えなのでしょうか？」

単刀直入な言葉は
疲れで少しひび割れた唇を小さく開けて聞いた
越後国主を退くと決めた夫の。。。これからの処遇は消して明るいモノでない事が「麻」の向かうべき次の戦いとなっていた

越後国の全土わ巻き込む事になったであろう
「戦」は避けられた
だが
明確な責任の問題はまだ誰にも課されていない。。。。。

それではココまで進軍してきた諸侯が納得するかは難しい問題だった

キレイに纏められた浅黄色の小袖の下
強く拳を握った麻は
自分が夫の全面に立って。。。。「最悪」と考えられる事態から楯となる覚悟で
影トラ軍，前陣を率いた将「本庄実乃」に聞いた

胴巻きをといた姿だが鎧直垂は付けたまま
「戦」の延長にいる武将達の真ん中に座した実乃は，面前に座る麻
の疲労の濃い顔を見つめた
まさか。。。
ココで守護代の奥方と会う事になるとは思わなかった
逃がされたのか？
逃げたのか？

麻がココにいるという意味を知ったのはその後の事だったが
今はわからず
奥方の要求に対しては言葉を濁した

「まだ。。我らには何も決められませぬ」
「苛烈なる処遇でない事だけを望んでおります」

約束できない事に対して麻はただアタマをさげるだけだった
最早，夫は越後の守護代ではなくなってしまったのだ。。。
なれば
どんな立場にされてしまったのかさえわからないのだから。。。不
安だけが閃光して
心に負担を掛けていることは確かだった
命だけはと。。。願う妻に諸侯はかける言葉を見失っていた

「ワシの処遇の事か？」

風雪と共に

沈痛な間を割って入った声
それに一同は驚いた

まだ一刻の時しか過ぎていない実城から下山してきた主「晴景」の姿に
板間に介した者達は驚きすぐさまひれ伏した

驚きは麻も一緒
まさかこれ程早くに夫と出会えるとは思っていなかったからだ

上座に向かう夫の顔を。。。。麻は。。何年も見ていなかったかのように追った
日の差す時間に夫と顔を合わせる事が出来たのは確かに何年かぶりの事だった

「苦労をかけた」

着座と共に妻の顔に向けて労をねぎらう言葉

「上杉様へ和睦の仲介を成してくれたこと。。。。礼を言う」

他に家臣達が並ぶ中で晴景は戸惑うことのない言葉で妻に礼を尽くした
その言葉に家臣達
実乃もまた少しの驚きを見せた

驚きの理由はそれだけでもなかった
どこか安らいだ表情の晴景は
自分にどんな処遇が与えられても受け入れる準備の出来た男になっ

ていた
不安のない柔らかな滑舌が告げる

「室（妻）にはこの「戦」を機に宿下がりを出してあった。。。」
「殿。。。。」

自分の身に降りかかるであろう事態を想定している晴景は最後まで
妻を守りたいという優しさを口に出した
室とはすでに籍はないというもの
繋がりをもっていれば

断罪に書される可能性があるからだ
だが離縁されているのなら
そのような非道に落ちる事は免れる
子も成さなかった正室を責める事は誰にもできない

「影トラ「殿」に会おう」

静かな覚悟に麻は首を振った
「最後まで」
その言葉を晴景は遮った

「もう。。。。十分にしてくれた。。。。勘気して離縁を申しつけた事をもったいなく思うほどだ」

晴景の目はどこまでも優しい眼差しのまま
自分の最後に付き合う事はないと妻を諭す

「ワシのためにそうしてくれ」
「イヤです。。。」

二人の間には静かな時間が流れる
否定を口にした麻を晴景は叱らなかった

「最後と言われるのならば。。。最後までご一緒させてくださいませ」
「わしで良いのか？」

お互い心に決めた人であった事を確認する言葉の前
並んだ武将達は誰も何も言わなかった

「貴方様でなくては。。。」
麻の細い指。。。その伏した手に自分の手を重ねた晴景は

「わしもそなたでなくてはならぬ。。。」

一陣の風の後
その声は部屋に割って入った

「長尾「喜平次」景虎」にございます」と

その４０　開城　（３）（前書き）

久しぶりすぎです
なるべく充実した内容を構築するために
長い文体を作ってきましたが，それでは先に進まなくなってしまうので
次回からは１章がさらに少し短くなるかもしれません。。。。

もう書かないのですか？と心配してくださった方
すいません
やめてしまう事は絶対にありません！！！
頑張ります！！！

それでわ

その４０　開城　（３）

晴景がこの部屋に入った時と同じように。。。
少ない風とともに舞い降りる雪と共に影トラは名乗りをあげたまま
静かに歩を進めた

上座に座る晴景にとって，しばらくぶりに相まみえた「妹」は
どの武将よりも雄々しく

そして美々しく映っていた

女であるが故にきつく結んだはずの眼もとを飾る長いまつげが
美しさに拍車をかけていた
姿も
鎧直垂ではなく上に立つ者としてふさわしい着物
あでやかさと落ち着きを兼ねた着物は「ただの男」に君なす事はで
きない神々しささえ醸し出していた
「女」でありながらも。。。。当主となった姿
今までのわだかまりは
こまかな伝統を吹き飛ばす今の。。。。この乱世に必要な強さを持
って生まれた者の持つ「覚悟」を晴景は感じていた

それは名前に現れている
影トラは
迷いのない声で自分の名を「長尾「喜平次」景虎」と言った

次代を継ぐ者として
女である以上に「長尾家」の直流として改められた名

それにともなった姿に今更不安を感じる事はなかった
全てを手の上で踊らせ
全てを制覇した者として認めざる得なかったから
ここまでの動乱であった戦を治めた者。。。。。迎え入れる

晴景は美々しき姿に眼を細め。。。。。父の影を思い出していた
父は
為景は粗暴と言われる容姿を持っていたが，心大きな男だった
治世を行うために手抜きを一切せず
非難という嵐を大きな両の手で受け止めながら越後を支えた

今度は。。。。
乱世という嵐に真っ向立ち向かう者として彼女は来たと確信していた
険しかった瞳をゆるめ良さ優しい言葉で妹を迎え入れた

「ひさしい」

上座である自分の前に座った者，今や全越後羨望まの若武者である
妹に晴景の声は明るかった
額に現れていた険はすでになく
憑きものがとれたように優しい顔のまま影トラの姿をよく見つめて
席を立った

「前へ。。。貴様が守護代である」（この時代の貴様（きさま）は謙譲語です）

そういうと静かに
自分の室（奥方）が控えた前に座った

開かれた上座
影トラの目は。。。。。

己に義はあったのか？
眠ると言い部屋にこもっていた時，トラは自問自答をしていた
避けられぬ戦い
守る者
助けを求める者を救え。。。。それは御仏の心に寄り添う事である
だが。。。。
守護代になる事を望んだわけではなかった
できればこのまま「戦」が収束に向かって
みなが一致した心で「越後」をもり立てていければ最善の結末と思ってはいたが

上杉定実が自分の前に現れたときにその願いは絶たれた

抗った分の運命（さだめ）を受け入れる「責任」
力を示した者が負うべき道に自分は突き進んでしまったと理解した

その後の少しの時間に禅を組み
かつて見た「女神」を思い出した

絢爛たる容姿とは別に黒き意志を背負った姿。。。。。

「アレは。。。。私だったのだ」

あの洞窟で見た女神が自分の行くべき道を示した姿だったと確信した

「刀八毘沙門天（とばつびしゃもんてん）」

御楯を持ち
民草を守護する者。。。。。それが御仏の意志と今は信じるほかない

眠らない瞳は確信を得て。。。
今ここに兄との対面を果たした

声は震える事なく告げた。。。。自分が次を継ぐ者である事を
それを兄は受け入れ上座から家臣の位置に降りた

ゆっくり歩を進める。。。
もどることのない戦の果てに自分の選んだ道を自分の手の中に入れるように
そのまま敷布美しい上座にトラは座った

「各（おのおの）」こたびは苦労であった。。。。これにて我が越後国守護代となった事を皆に告げよ」

震える事のない唇に
兄は感心の笑みを浮かべ自分の治世が終わったことに。。肩の荷が降りた事に頷いた

だが実乃をはじめとする諸将はそれだけを解決と末事はできなかった
それだけではこの騒ぎの結末にはならないからだ
不安色めきに最初に言葉を発したのは晴景であった

「ワシは「戦」の責任をとらねばならぬ。。。」

悲愴
夫の覚悟は揺るぎなかった
言葉の先の覚悟に，麻は眼をつむった
この後にどんな処遇が下されても決して離れずその「死」に添い従うつもりであったからこそ
この調停の間で見苦しく命を乞うようなまねはしなかった
ただ小袖の中の小さな手を，震える手を強く自分でにぎった

「兄上には隠居して頂きます」

静まった間の中で影トラの声は優しかった

「我は正式に兄上の元，養子として入った者である。しかしながら戦ということの大事を鑑みるに兄上をこのまま城に置くことはできませぬ。。。。六百貫の扶持にて蟄居して頂くつもりでありますが。。。。よろしゅうございますか？」

周りをかこんだ将達の顔に困惑
あまりにも寛大な処分
だが

あまりに理にかなった裁可でもあった

先の守護代は「戦」を起こした張本人ではあるが，影トラが次代を継ぐに当たった「父」なった。。。このことにより「死」を処断する事は難しくなっていた

新たに国を統べる者となった守護代の最初の仕事が「父殺し」というのもまた望まれないものである事はよくわかる話でもあったし

「上杉様に。。。。よろしゅう，一本とられましたな」

並ぶ諸将の中，実乃は自分のとなり眉間にしわをよせたまま，眼を閉じた直江に聞いた

直江が晴景の命を守らんがために色々策を巡らしていた事はわかっていたが

この策は美しかった

「上杉様の機転にございます。。。」

実乃にせつかれた言葉に

少しの涙を宿した直江は事が良い方向にへと終わりに向かった事に心の中で喜んだ

「影トラ。。。貴様それで良いのか」

自分の前に座った妹の裁可は誰の目にも寛大なもの

それが良いことなのか？と晴景は聞いた

影トラの目は緩やかに遠くを見つめると

「兄上様にありましては。。。長くこの越後に尽くされました。考えるまでもありません。どうぞ，この先をゆるりと過ごしてくださいませ」

二つの血

正邪など，どこにはかるものがあったか

晴景は自分の後ろ
袖に顔を隠して泣く麻を見て

「室もつれて行く事もゆるしてくれるか」

涙に濡れた袖に手を合わせた

「これがいないとわしの余生を看取ってくれる者がいなくなってしまうのでな」
濡れた頬のまま麻は夫の思わぬ言葉に顔を上げた
「貴方様。。。。」

影トラは静かに頷いた

「どうぞ。。。母上と共にゆるりとお過ごしくださいませ」

養子に入った以上はトラにとって麻はもう一人の母になったとも言えた
全てを許した顔で影トラは周りに詰めた男たちに告げた

「これにて前守護代殿は隠居される，今日より我，長尾影トラが越後国守護代としてみなと共に働く者となる!!よいか!!」

洗浄を駆け巡った諸将達の中にも
少しの優しさ
誰も晴景の処遇を責める者はいなかった

この日「長尾影トラ」は正式に越後国守護代に就任した。。。後少しで年は代わる十一月の事
民事共に公式に国内に発布されるのは一月後の雪の舞う十二月の事であり
その間に前守護代晴景は少しの近習と妻である麻をつれて蟄居の身となった土地へ移っていった

そして
この影トラの守護代就任が新たな戦いの日々の幕開けとなって行くのであった

その４１　中信濃　（１）（前書き）

ここから新たな戦いが始まって行きます
まずは武田の皆様からご登場！！！

その４１　中信濃　（１）

越後にて代替わりが行われた頃
関東は動乱の鼓動の大きさを増し始めていた
「武田」「今川」「北条（後北条）」の三つの「戦国大名」によって旧弊した大名家や諸侯家，豪族などが次々となぎ倒される嵐は、最早誰にも止められないところまで来ていた
そしてそれはどの大名にもも守護台にも他所の雨という話しではなくなっていた
まっこうきっての下克上時代、誰が敵であっても不思議でない時代は、今新たな嵐を起こすための力を蓄え始めていた

「越後国守護代長尾家にて、代替わりがありました」

甲斐国躑躅ヶ崎の御館を正面、馬宿の先をあるくと曲輪が平行に作られた土豪がある。
矢を避けるためにワザとずらしで作った軒塀と、それに並ぶ林を抜けると道は急に広くなる
甲府、甲州の府
都を模したながらも、戦いを常とする武士の館躑躅ヶ崎の御館を御所と見立て、奥中央から真っ直ぐに繋がる道の左右には過信の置屋が並んでいる。
板葺きの屋根ではあるが、古書である躑躅ヶ崎の御館を平に囲む形に「人は石垣」という言葉の形を見る事ができる
この王道の館群を避けて一歩下がった形になる小道をはいる内輪の外堀にあたる
この土手を右手に歩いていった場所に真新しい造営がされた屋敷が建つ
屋敷といって表どおりの家臣団のものに比べれば小さな箱に過ぎな

いが、躑躅ヶ先の御館に通りを面し、隠れ道でマジかの木戸をくぐる事のできる位置にある事に大きな意味があった
このいえの主が甲斐国主にとって重責を担う者で、そのためにいつでも躑躅ヶ崎の御館との繋がりが必要とされているという証

薄暗い板間
すきま風に揺れる灯籠の火の下
顔の半分を梵字の書かれた面布で覆った嗄れの老人は，あごに走った傷跡をなでながら枯れた笹竹ような指を揺らして
自分から姿の見えぬ位置にて報告を送った間者に聞いた

「長尾政景（ながおまさかげ）」が力で後を継いだか。。。。たわけ者よな」

酒焼けでかすれた声は細い火の下で漢書に。。。片眼だけに宿る知謀を揺らしながら
口元をゆるませた
老人は歳を上回る活発な知識を頭の中に巡らし
諸侯の動きをつぶさに見て回っている

越後国での当主争いも一つ。。。関心のある部分だったが
それは純粋な戦略としてではなかった

なんとも酔狂な家督争いをお遊びを見るような視線で見ていたからだ

「申し上げます。長尾守護代家を継いだのは本家の政景ではありません」
「何。。。。」

自分の予想を裏切った返答に老人は顔を起こした
考えられる名前を探す眼は忙しく，自分の脳を探るように動く

「上杉が誰ぞ迎え入れた。。。イヤ違うな。。。まさか。。。」

頭に浮かんだ人物……
影になって光る牙が勘助の脳裏に鋭利な刃物の火花を散らした
北の国のおかしな家督争い、どうしても「利」を得られるハズのない人物が浮かぶ

「まさかとは思うが、本当に家督を継いだのか?為景(ためかげ)殿の庶子が?」

片目のない顔、残った目を大きく開いて軽く自分の頭を叩くと

「長尾影トラが継いだと?そういう事か?」

嗄れた事ではあるが、仄かな熱が踊る。
自分の予想が裏切られる事さえも勘助には楽しい軍略の記譜でしかない
そんな余裕の志向をひっぱたく結果に歯抜けの口は笑う
彼の中にある継承権の順位にはなかった人物
だが、もっともどう猛だった人物
移り変わる力の綱引きはずっと聞きおよんでいた

「まさかの当主だな、しかし……おもしろい」

嗄れた老人は自分の予想に反した人選のなされた越後国の事をよく知っていた

「為景殿の妻、虎御前殿……神仏の器が産みし「魂」気にはなる」
「内偵は続けますか?」

老人の独り言とは別に任務の遂行に重きをおく間者の言葉に小さな
革袋を投げた
金物と石は鈍い重みのある音は板間に響かせて転がり
闇の先で姿を消した

「持って行け、それを使って信濃に乱を作れ」

老人の後ろ床の間の台座の中に直に書かれた文字
孫子の言葉を背に歯抜けの顔は笑った

「越後はどうせ長くはもたんだろう、「女」に国は治められぬから
物のついでに見る程度でよい」
「では信濃に「罠」を張ります」

かすれた声で小さく笑う主は念を押したよう闇に告げた

「そのように行え」
間者の気配の消えた闇に老人はため息を落とした

「楽しき事よな……しかし今は、長尾など相手にはしておれぬ。戦
は村上が先手ではあるが、さてどうしたものか?このまま戦うのは
望ましくない」

「長尾影トラとはいかなる人物か?」

躑躅ヶ崎の御館
甲斐国の国府である中央に位置する屋敷は平城に近い

とりあえずもの堀を二重に張り
どちらかと言えば領府のような作りになっている

その本屋敷から正面に造られた評定場に武田を代表する武将達があつまり
正面には若干顔色を悪くした甲斐国国主「武田晴信」が座して，末席に座した老人に尋ねた

「ただの若輩者です」

老人事，山本勘助は抑揚のない声で

「今，気にかけるような事ではありません」
姿勢を正して黙した

「ならば村上攻めは決定で良いな」

晴信の答えに家臣一同は顔色を悪くし皆俯いた
当主交代劇から七年の月日が流れていたが，甲斐国が富める国になる事はなかった
治世に置いては水場の治水工事や地税の改訂など多くの事業を手にした晴信ではあったが
それらの事業をあざ笑うかのように天災は毎年，多かれ少なかれ続いていた

その上で「戦」を止める事もできなかった
戦いの滑車は一度回してしまえば容易に富める事がでないものである事を今，この時期になって武田の渦中も身をもって知る事になっていた

「村上を冬に攻めるのは得策ではありません」
勘助は静かに念を押したが，それに変わる方法を晴信が受け入れる用意はなかった

冬の戦の「目的」は略奪である
だが
冬の戦は厳しいものである事が前提である

当主晴信の「民」を豊かにの心は，色々なものに裏切られ続けすり切れそうになっていた
何度もの調略で戦わずしてほぼ城攻めを制してきた武田だったがそれ故に「生ぬるい」者という見方をされ，許した領主に裏を掻かれる事も多く

純真なる武田家の当主の心を痛めさせていた
そして怒りは勘助の助言を聞くことなく，逸る手柄に急いだ若手武将達の口車に乗って笠原を攻め

苛烈な処分を下す

「時には鬼のように人を殺めねば，言う事を聞かぬ」

多くの将兵を撃ち殺し
所領にすむ女子供を売り飛ばし
笠原の正室を家臣に払い下げた

「人」を売りさばくなど日常的にあった景色とはいえ
値高くつけられた女房を買い戻せず泣く夫や子供

その前で首を惹かれて買われていく妻の姿
甲斐の市場には人々の泣き声が響き館にも聞こえる日がつづいた程

こんな痛みを人は簡単に忘れない
やられた恨みに燃える者達がくすぶっている

堂々巡りな争いは泥沼一直線とわかっていても・・・
今までのぬるいやり方では押さえられなかったもの達や
裏切りを繰り返す者達を甲斐の当主は許すことができなくなっていた

中信濃に与えた痛みをさらに大きな痛みとしてたたきつける
懲りぬ連中が蓄積し息を浮き返した時、その息の根を刈り取ってやると
晴信はそう考えていた

何度も顔の前に扇を行き来させる
家臣の顔色
目の動きに異論をさがすように

「冬の戦いに中信濃の連中は慣れております。。。。不利を踏むことはありません」

苛立ちに眉間添わせた扇子を突止めた当主に意見したのは「馬場美濃守」
今この場にはかつての守り役である板垣はいなかった
勝利を確信出来ない調略の戦の「価値」を見いだせなくなった主をいさめようとした結果か。。
諏訪守として甲斐から遠ざけられていたが

板垣がそこに座ることで甲斐から用意に当主が出ないようにしているという向きも強く
諏訪にて要石として勤めているという働きの方が大きかった

しかし
それ故に実質当主に対して諫言を述べられる者はいないにも等しい
馬場の意見に聞かぬ耳のまま
己に今まで策を講じ続けた老人を睨む

「勘助・・・「北の大禍」は村上じゃ、これを討って速く甲斐を豊かにせねばならぬ」

末席に座した勘助は見えぬ側の口をゆがませる・・・
あれは当主を立たせるために少しばかり色をつけた「予言」だった・・・ハズ
なのに今重くのしかかっている

七年の戦いの根拠として
北に見える厄災の目を摘まねば，甲斐に災厄が訪れる

つまりこれを討たぬがために甲斐には天災が続いていると晴信は焦っていたのだ
事実
戦えど戦えど
甲斐は豊かにはならなかった二年に一度はきまってやってくる局所的な飢饉に甲斐国は蓄えを持つことが難しい状態になっていた
周辺国への小競り合いで乱取りを行いそれによって潤いを取り戻すという方法は、近場の国との亀裂につながるため
出征は出来ない・・・

とはいえ
国内をいくら平穏に耕しても背かれ続けるのでは軍費ばかりがかさみ救いがない
この悪夢の巡る年々の中
「人の器」たる当初は民を思って心を鬼している

だが
戦という獰猛かつ妖的(あやかし)な生き物が「人」の悩みや生活を顧みてくれる事はない、それに準じ武功に備えをくれる事などめったにないという事を忘れ始めていた

それは一部家臣達にもやむなしという重いとして低い霧のように漂っていた

扇を開く
沈黙の家臣達に晴信は低く響く声で通達した

「来る月十日。。。。出陣いたす」

避けて通れたハズの戦をを突いた武田
しかし北の大禍が村上程度のものでなかった事をしるのには後三年の月日が必要であり
突き進むことで取り返しの付かない相手を呼び込むことになるなどおもいもしなかった。このときは

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6578b/

カイビョウヲトラ

2011年11月15日01時09分発行